

喫茶ステラ —異邦人と蝶の残滓—

コクーン√

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

喫茶ステラと死神の蝶終了記念のテンションで初投稿です。

原作知識を持った主人公があちらの世界で目を覚ます所から始まります。全裸で。

知識のせいで勘違いされます。主にミカドさん達に……。

オリジナルの設定あり、あとキャラに違和感を感じるかもしれません。

シナリオは明月葉那√・四季ナツメ√を中心に進めて行きますが、他のキャラとの絡みも可能なら入れていく予定です。

今後、他作品ともクロスオーバーしようかと妄想しております。

※ネタバレを含むので、原作未の方はお気をつけください。

一応、最後は物語のハッピーエンドを目指していきます。

稚拙な文章を可能な限り一話から随時修正していきます。突然文章の見た目が変わるとは思います。温かい目でスルーをお願いします。

本編の物語までは一旦完了致しました。

続編作成意志有り。

# 目次

Prologue 1	1
第1話：ある日。森の中で。全裸に。	7
第2話：彼の疑惑	13
第3話：提案	19
第4話：聖地巡礼？	26
第5話：真実とすり替え	33
第6話：勘違いと昼食	39
第7話：占い	45
第8話：第1回占い教室@明月菜那編	49
第9話：二人目との邂逅	57
第10話：憧れと夢の中	63
第11話：一時の逢引	68
第12話：来客	77
第13話：記憶の残滓―大家―	87
第14話：買い物へ	93
第15話：負傷の手当て	101
第16話：裏路地で目に映ったもの	109
第17話：隙と油断	117
第18話：傷の責	129
第19話：後悔	136
第20話：仕返し	142
第21話：不可思議への貸し	151
第22話：式部流珈琲の教え。	164
第23話：過去話	172

第24話：引越し	183
第25話：購入	191
第26話：少女と手品	197
第27話：潜入。一星大学。	206
第28話：枝分かれる可能性の数	217
第29話：一度目の世界で	229
閑話：その名は……。○○・タイラー？	242
第30話：始まりの日	247
第31話：保留	261
第32話：決断の理由	273
第33話：広がる謎	288
第34話：選ばれたのはオムライス	298
第35話：プロフィール ー明月 葉那視点ー	309
第36話：プロフィール ー澤田 達也視点ー	321
第37話：失態と三人目	335
第38話：名誉挽回の試み	350
第39話：眩しさ	363
第40話：四人目と覚悟、そして採寸	376
第41話：この苦行をどうにかしなければ……。前半戦	387
第42話：この苦行をどうにかしなければ……。後半戦	397
第43話：死神の仕事： 思い出の品 壺	408
第44話：死神の仕事： 思い出の品 式	418
第45話：新ユニフォーム	433
第46話：覗く者	444
第47話：パンケーキと五人目	456

第48話：約束の日	471
第49話：マドレーヌ	483
第50話：いざ、開店！……と、目が回るような忙しさ	492
第51話：お誘い	504
第52話：再会の少女	518
第53話：白の刺客？	528
第54話：家族	539
第55話：神様降臨	550
第56話：虫喰の瞳	560
第57話：依頼と報酬	574
第58話：お招き	585
第59話：パイ・ルアク……？	596
第60話：報告……。	613
第61話：定期テスト準備	626
第62話：食	638
第63話：罪	652
第64話：対峙	663
第65話：目覚め	675
第66話：美味なる物	687
第67話：影響	708
第68話：恋のお悩み	718
第69話：恋のお悩み相談室……？	728
第70話：癒しの場	740
第71話：告白	757
第72話：クリスマスの願い	772

第73話：バタフライエフェクト	785
第74話：元に戻すために	801
第75話：心残り	816
第76話：もう一度……。	833
第77話：再び始める物語	849
新訳 第30話：始まりの日	869
新訳 第31話：Inception	881
新訳 第32話：記憶の残滓―四季ナツメ―	892
新訳 第33話：記憶の残滓―澤田達也―	908
新訳 第34話：Realize	926
新訳 第35話：Irresistible Love	937
新訳 第36話：Pre-established harmony	946
y	
新訳 第37話：Solution Clues	958
新訳 第38話：過去を旅する者へ	967
新訳 第39話：胡蝶の夢	979
新訳 第40話：郷愁別離	993
新訳 Prologue	1007
新訳 第41話：幸福と降伏	1026
新訳 第42話：○○ニウム？	1042
新訳 第43話：レジューム	1064
新訳 第44話：幸せのプロムナード	1074
新訳 第45話：Epilogue	1083
閑話： 語られる黒歴史は……	1094

# Prologue

「――」  
何か、声が聞こえる。

「――ツ―」

誰かが呼んでいる……。

どこか聞きなれた声のような気もするが、久しぶりに聞くような懐かしい声にも思える。

……起きよう。

その声の正体が気になり意識を目覚めようと目を開こうとした。

「……ん、んんっう」

少し肌を感じるに寒さで眠りから覚める。

……寝る前にエアコンの温度調節をミスしたなあ。

部屋の中なのに辺りからは虫の鳴き声がよく聞こえる。住んでいる場所は確かに田舎だがおかしいと思いつつ、と眠たい目を擦る。

それに、なんか背中がちくちくと違和感するし……。

とても快適とは思えない気持ちを抱きつつ目を開ける。

「……んっ……へっ!?!」

開いた目に入ったのは、草木と視界の端を飛び回る一頭の蝶だった。

「えっ?ちよい、は?」

周囲を見渡すが景色は変わらず、あるのはやはり草木と蝶だけだった。

た。

……待て。落ち着こう。まずは昨日の寝る前までの記憶を思い出せ！……確か昨日は仕事から帰ってきてから風呂と飯を済ませて、いつもの男面子で通話しつつゲームをしていた……。

日付が変わった頃に通話を切つて明日の書類をまとめていたが、途中に集中力が切れてきたから明日に回そうと寝床に入ったはず……！

起きたばかりの碌に回っていない頭を使い記憶を掘り起こしていたが、最後の記憶は部屋で寝たところで終わっている。

……いや、そもそも起きたらなぜこんな場所にいるんだ……？誘拐でもされたのか……っ?!いやそれだとこんな場所に適当に捨てないだろうし、生きているわけ……。

最後の記憶と現状を繋げようと思えるが、全く思い当たるわけもなく思考だけがぐるぐると回っていた。

まずここどこだよ!?周囲とか草木しかないし、夜だから暗くて位置がわかるわけが——ん？

再度周囲を見渡すがやはりあるのは草木ばかり。

しかし、その中で青く光り飛び回る蝶がいることに気が付いた。

蝶が青く光っている……？そんな科の虫なんて存在していたのか？というかさつきよりも数が増えていないか？

飛んでいる蝶に意識を向けると、さつきまで一頭しか居なかったはずの蝶が数頭に増えていた。

……近くに群れでも居るのか？それにしてもなんとも幻想的な蝶だな。昔やったゲームで似たのを見た気がする……。

確かあれは、主人公たちが乗った飛行機が消失して異世界行くやつ。確か剣の街の……なんだったか。あとはPCでやったゲームに出ているのと似ている感じがする。実在するこの蝶を参考にしていたりするのだろうか？

などと考えていると、一頭の蝶が近づいてきた。手を少し前に出すと指先に蝶が止まる。その様子をまじまじと見る。

「近くで見れば見るほどおかしいな。発光しているようにしか見え



ん」

不思議に思っていると、青い光がうつすらと自分の体を照らし、あ  
ることに気付く。

「えっ、全裸……？」

照らされた自分の体を確認すると、着ていたはずの寝巻はなく、生  
まれたままの状態だった。

「うえ!?なんで服着てないんだ……!確かに少し肌寒いし座ってい  
る部分はちくちくしていたが!?ここ捨てられる際に衣服だけ剥ぎ  
取って全裸で放置……?頭おかしすぎるだろ……」

その場で立ち上がり、全裸であることに騒いでいると、周囲の蝶が  
居なくなっていることに気づく。

「……騒いだからどこかへいったのか?」

珍しい蝶を逃した事に少し残念な気持ちになりつつも、まだいない  
かと周囲に意識を向ける。すると、茂みの奥からこちらに向かって何  
かが高速で近づいてくる音と気配がした。

——つ!?野生動物か……?

聞こえてくる足音的には、小型の動物ではなく最低でも犬などの中  
型以上はあるだろうと予想し、すぐ真後ろの木に体を隠して逃げる準  
備をする。

……この速度なら走って逃げれそうだが……逃げるにしても何が  
迫って来ているのか確認だけしておきたい。どうか熊とか鬮じゃあ  
りませんように……!

森の中で出会いたくない生き物1位を考え、鬮ってそもそも北海道  
にしか生息していないんだっけ?などと、どうでもいい事を考えてい  
る内に足音はすぐそこまで来ていた。

姿勢を少し下げ、いつでも後ろに走りだせる体勢になると、遂に茂  
みから足音の原因が出てきた。

……来たっ!

その正体を確認しようとしたが、明かりも碌にない森のせいではつ  
きりとは見えないが、周囲の木と比べると高さは2メートルはなく人  
の様に見える。

人影と思われるそれは、その場に立ち止まり、辺りを見渡している。

「――」

はつきりとは聞こえないが誰かと話し合っているようだ。人影は一つかと思っていたが……二人いたのか。

隠れるように木に背を向け、このまま様子を見るか……逃走すべきかを考える。

この場所にピンポイントで来ているとすれば……俺を探しに来た？となる。と誘拐犯になるわけだが……それなら俺が居ないことにもつと騒いでもおかしくないが……もう暫く様子を見てみようか、それとも……。

人影を観察していると、先ほど俺が眠っていた場所に向かっている。そこには、さつきまで居なかった青く光る蝶が飛んでいた。

どうしたんだ？もしかして蝶を見ているのか……？

青く光る蝶のおかげでうっすらと人影が映し出される。

あれは……マントを羽織っているのか？それと、腰まで伸びる髪……に見える。立っているのは女性か？

もし、今の姿で見つかれば事案待ったなしのでは……？などと緊張感の無いことを頭で考えていると、女性が手に何か棒状のを持ち、それを高速で振るった。

「――なっ!!?」

振るったそれを見ると、棒の先端に三日月状の鋭利な刃物が付いており、その先端の刃物に切り裂かれた蝶は光が消えるように霧散していった。

あれはもしかして鎌なのか!?なんてサイズだよ……!身長と同じ位あるだろ!?

想定外の出来事に遭遇し、驚愕のあまり口から声が漏れ出てしまった。

「っ!?!そこに誰かいるのか!」

やらかした……と後悔した時には既に遅かった。

「人の気配だが……これは――」

「そこにどなたかいるのですか？こんな場所に……？」

……どうする？逃げるか？だが、少なくとも俺をこんな場所に誘拐した奴ではなさそうだが……いや、もつとやばいパターンかもしれない。

「人であるのは確かだ。敵意はないが……こちらに警戒しているようだ」

「すみません。どうしてここに居られたのかお聞きしたいのですが……怪しいものではありませんから」

あんなデカイ鎌振り回す奴が怪しくないわけないだろうっ！と心の中で突っ込みを入れるが現状は変わらない。

向こうがこつちを害する様には感じないが、お話って……俺は今全裸だぞ!?おまわりさん行きだわっ！……だが、このまま隠れていても意味はないし……。

「居るのはわかっている。姿を見せてくれないか？」

仕方ないが……腹を括ろう。暗闇だし見えないだろう。見られたら土下座でもなんでもして謝ろう。

覚悟を決め、返事をする。

「わかった。姿を見せるから何もしないでくれ」

そう伝え、近くの葉っぱを1枚ちぎる。

気休めだが、これを装備しておけば下は見られることはない……信じたい。

茂みから姿を出し、相手の近くで止まる。

「男性の方でしたか……。一体どうしてこんな場所に……？」

女性の方はそう言い、自分の顔の前に何も点いていないランタンのような物をかざした。すると、それは青く光り出し、中には先ほどまで飛んでいた蝶が見えた。

「……っ!？」

青い光が女性の顔を映し出しその顔を確認すると、さっきの事態よりも更に衝撃が走った。

「あきづき……かん……なっ」

そこに映ったのは、PCで何度も繰り返したゲームのメインヒロイ

んと、同じ顔の人が立っていた――。

## 第1話：ある日。森の中で。全裸に。

「ミカドさん。確かに蝶はこの先に飛んで行ったのですか？」  
木々の間を歩きながら、隣を歩いているミカドさんに確認する。

「ああ、こちらに向かって行ったのは間違い無いはずだ」  
「このような場所に蝶が居るとは思えないのですが……。離れの家でもあるのでしょうか？でも、それにしても道の舗装とかは無く歩  
きづらいですね……」

地面から生えている草を踏みながら前に進む。まともな道では無  
いたため歩きづらく、暗闇だから気を抜くとバランスと崩し転んでしま  
いそうだった。

「元々の目的のために田舎まで来たとはいえ、まさか別の蝶を見か  
けることになるとはな……」

「そうですねえ……。お仕事が捗ってありがたいのですが、こんな人  
が居ない場所となると嫌な予感がするのは私だけでしょうか……。」  
ミカドさんの言葉に返事しつつ周りを見渡す。草木が覆い茂り、悪  
路に違いない。むしろ人間の生活圏から離れて行っている。そんな  
場所に居るのは動物位しか思いつかない。

「出会うとしても熊さんは勘弁してほしいものですが……」

「その心配は無いだろう。此処の猫たちは熊などの危険な動物は見  
たことはないと言っていたからな。それに宿泊先の女将さんの夫も  
この辺りには居ないと話していたであろう？」

「それもそうですね。万が一遭遇したらミカドさんが対話して何と  
かしてくれませんか？」

「馬鹿を言うな。出来るわけないだろう」

「そうですか？猫さんとは可能なので他の動物も何とかありません  
か？」

冗談交じりでミカドさんに聞いてみる。

「我は猫だぞ？熊科の生き物と会話が出来るわけないであろう。人  
科の人間が他の生き物と出来ないのと同じだ。私をなんだと思っ

いるのだ。全く……」

「ふふ。ごめんなさい、冗談です」

呆れながらため息を吐くミカドさんに、思わず笑みが出してしまった。

お互い無言になりながらも暫く歩いていると、前方から何か音が聞こえてきた。

「ミカドさん、何か聞こえませんか？」

「ああ、蝶が飛んで行ったのはこの先になるが……もしかすると人が居るのかもしれないな」

「こんな場所で蝶が人に集まるなんて、あまり良い状態では無いことは確かですし……急ぎましようっ」

「ああ。悪い傾向であることは間違いないであろうからな」

人気の無い場所に居るなど、まともな状態なわけがないですし、もしかすると……と嫌な考えが浮かぶ。焦りを感じつつ木々の間を走り抜ける。

少し進むと草木は減り、開けた場所にたどり着く。そこには数頭の蝶が飛んでいた。

「どうやら蝶が飛んで行ったのはこの辺りの様だな」

「そのようですね。それにしてもどうしてこのような場所に……」

「原因はわからぬが、居ることは確かであろう。もしかするとこの場所で自殺か殺されたなどの可能性も考えられる。それでもこの場を離れずに居るのは疑問ではあるが……一先ずは回収を済ませよう」

「了解です。この場を離れてしまう前に済ませてしましましょう」

蝶が飛んでいる場所に近づき、死神の鎌を構える。

……どなたの魂かご存じありませんが、回収させていただきますね。次は幸せな人生に巡り会えますように……。

何度目になるか分からない願いを心の中で想いつつ、鎌で蝶を回収する。

とりあえずはこれで一安心ですが、原因が気になる所ではありませんね……。

「っ!?そこに誰がいるのか!」

蝶が居た原因を考えようとした時、ミカドさんが前方に向かって呼び掛けた。

「人の気配だが……これは――」

「そこにどなたか居るのですか?こんな場所に……?」

人が居るなら、もしかしてこの場所に飛んでいた蝶に関して何か関係があるのでしようか……?」

「人であるのは確かだ。敵意はないが……こちらに警戒しているよ  
うだ」

「すみません。どうしてここに居られたのかお聞きしたいのですが  
……怪しいものではありませんから」

なるべく警戒されないように落ち着いて呼びかけますが、こちらの  
呼びかけには答えてくれません。

「居るのはわかっていて。姿を見せてくれないか?」

再度ミカドさんが呼び掛けますが、姿を見せる気配はありません。

……仕方ありません。此方から向かいましょう。

そう考え近づこうとした時、向こうから返事が返ってくる。

「わかった。姿を見せるから何もしないでくれ」

返って来たその声は、少し低く女性ではなく男性の声だった。前方  
の木から姿を現した人影はゆっくりとこちらに近づき、少し前で立ち  
止まる。

「男性の方ですが……。一体どうしてこんな場所に……?」

身長的にも確かに男性の方だと思われまますね。ですが、少し姿勢を  
低くして近づくのはなぜでしょうか……?」

不思議に思いつつも、腰に下げている蝶を回収するランプを視線と  
同じ位置まで持ち上げる。ランプからは蝶の光で少しだけ周囲に明  
るさを放つ。

「――っ!」

すると男性はこちらを見て驚愕し、口を開く。

「――」

驚愕の表情のまま何かを声に出していたが、言葉の内容までは聞き

取る事が出来なかった。

「突然すみません。どうしてこのような場所で……何をされていたのですか?」

疑問を投げかけて近づこうとすると――。

「待てっ! 止まれ!」

後ろからミカドさんの鋭い声が飛ぶ。その声に驚いて振り返ると、人型の姿になったミカドさんが私より前に出る。

「色々と気になることが多いが……。まず、なぜ貴様は裸の状態に葉っぱで股間を隠している……?」

ミカドさんの問いかけに、はい?と思考が止まる。

「ま、待ってくれっ! 警察に連絡する前に俺の話を聞いてくれ! 変質者ではないし原住民とかでもない!!」

男性は声を荒げ、片手を前に突き出して焦った様子でいる。反対の手は股の間で何かを抑えている様に見える。

「――ッ!?!」

先ほどのミカドさんの質問を思い出し、咄嗟に顔を逸らす。

人気の無いこんな森で裸で歩いていた……!? どんな変態プレイなんでしょうか!? 露出狂なのでしょう……! いえでも、全裸になることで解放感を味わいたいのかもかもしれません。もしかすると、普段の生活でのストレスを解消する為に訪れたのかもしれないです……! 世の中にはそういった特殊な性癖をお持ちになる人も居るとは知っていますが……、いざ目の前にすると……ドン引きといえますかっ、理解が追いつきません!

「ほう……。では、どのような事情があつて、全裸で森の中で居たのだ?」

ミカドさんが最もな疑問を投げかける。

「俺もわからなくて戸惑っている所なんだ! 自分の部屋で寝ていたかと思えば、次に起きたらここ居たんだ! しかも全裸でっ! そんな中状況が飲み込めない時に何かに向かって来たから隠れて様子を見ていたんだ! 嘘じゃないっ!」

「もしかして……その寝ていた場所というのは、その後ろ……あ



の位置で合っているだろうか？」

「え？……あ、ああ、その辺りで間違えない。さつきそちらの女性が鎌で蝶を回収していた位置で寝ていたはずだ」

「やはり……。では、発生の原因は考えている通りと言うことか……」

「あの、ミカドさん？話が見えないのですが……この男性の方と蝶が関係しているということでしょうか？あと、あなたは先ほどの蝶が見えている……で間違いでしょうか？」

「あの青い蝶のことなら見えているで間違い無いです」

私が別の事を考えている内に、なんだか話が進んでしまっているようです……こちらの男性はここに飛んでいた蝶に関係していて、どうやら見えている様ですね……。

それに、先ほどの蝶を回収する時を見ていたのでしたら、警戒して隠れるのも納得ですね。こんな人の居ない森の中で見知らぬ人が鎌を振り回していたら私だって警戒しますし……。

目の前の男性が警戒するのも仕方ないと苦笑した。依然に裸なのは謎ではあるが……。

「まだ聞きたい事はあるが……取り合えず場所を移そう。そうだな……我々が泊まっている宿で話したいのだが……どうだ？」

「わ、わかった。正直全然状況を把握出来ないけど、場所を移動するのは賛成したい。……が、これで人が居る場所には……」

「そうであったな。体を何かで隠さないと。葉那、そのマントをそやつに貸してやってくれ」

「わ、わたしのをですかっ!？」

「そうだ。他に身を隠せる物はなからう？それともあれか？この男に全裸で宿まで向かわせる気か？」

そ、それはそうです……！裸の男性にマント貸すとか……。な、なんかマニアックなプレイをさせているみたいで……！

ちらっと男性に視線を向けると、申し訳なさそうな雰囲気ではは……と苦笑いをしていた。

……でも、貸さないとこの方は困ってしまいますよね……？

首元で止めているリボン状の結びを外し、男性に差し出す。

「いい、良いのか？貸していただいても……」

「はい。お話しする前に警察に連れて行かれてもらっても困りますし……。気にしないで下さい」

「すまない。それじゃ……。お言葉に甘えて使わしていただくことにする……。ありがとう」

申し訳なさそうにマントを受け取って感謝を言う彼を見ると、悪い人では無さそうな印象を受けた。

「それでは向かうとするか。私が案内するから付いて来てくれ」

彼にそう伝え、先頭を歩いて行くミカドさんの後に彼も続く。私も後ろを追いかけ彼の横に並び歩く。

「寒くないですか？もう暫く我慢してくださいね？」

「いや、使わしてもらっているだけでも十分だ。贅沢は言わないさ……」

「あ、と言っても貸すだけですからね？如何わしい事には使わないで下さいよっ。」

「変なことに使うかつ！ただ貸してもらっただけだからっ！」

おおっと？思ったより鋭い反応が返ってきましたね。面白そうな人です。

こちらの冗談にツッコミで返してきた彼を見てにひひと笑いつつ、彼より少し前を歩き一緒に宿を目指した。

## 第2話：彼の疑惑

無事何事も起きずに宿の部屋に辿り着き、中へ案内する。彼は終始周りに人が居ないか挙動不審な行動をしていたが、部屋に入ると同時に安心して胸を撫で下ろしていた。

こんな状態では当然ですよ。なんせ裸マントで歩いてる所を見つかれば社会的に死んでしまわれます。……あれ？それに付き添う私達も終わりになるのでは？

自分達の状況を想像し、実は飛び火していた可能性を考えつつも部屋の鍵を閉める。

「ここまで来たのなら変な心配の必要は無くなった。早速本題に入りたいところだが……、その恰好では落ち着けまい。部屋に支給されている浴衣に着替えてくるといい。……いや、一度体を流した方が良さそうだ。体に土などが付いたままでは気持ち悪いであろう？」

彼の状態を見て、ミカドさんがお風呂に入ることを勧める。

「ありがたいのだが……良いのか？宿泊者では無い俺が使ってしまったら……」

「構わん。どうせ我々は使う必要が無いものだから。宿の女将には後で話しておく」

「この浴衣はフリーサイズでしたので、男性の方でも大丈夫だと思います。ゆっくりしてきてください」

「……すまない。何度も好意に甘えてしまいが、入りながら頭を整理してくる」

「いえいえ、お気になさらず」

彼はそう言い、バスルームへと入って行った。恐らく今でも頭の中は訳が分からない状況なのでしょう。

「さて……、あやつが風呂の間に色々と話しておく事がある」

ミカドさん声に体を向けると、いつもの閣下の状態に変わり、話し始めた。

「まずは葉那、彼の顔に見覚えはあるか？どこかで知り合ったり、蝶

の事で関わったりなどは……」

「あの人ですか……？いえ、見覚えはありませんね……。お仕事で関わったりは……無いはずですよ？そもそも親しい人間関係を作っていないませんし」

「そうか……。私も記憶に無いから不思議なのだ」

「不思議……？何が不思議なのでしょう……？」

そもそも、彼の名前すら知らない………と言いますか、聞きそびれていましたね。お風呂から上がったからお互いに自己紹介をしておきましょう。そうしないとややこしい事になりそうですし。

「そっちは聞こえていなかったかもしれないが、先ほどの森で葉那の顔を見た時に、葉那の名前を言っていたからな。知り合いなのかと思っただのだ」

「私の名前を、ですか……？」

「そうだ。聞き間違えでは無いのなら、『明月葉那』とはつきりと口にしていた」

うーん、確かに彼は最初に驚いた顔をして何か言っていましたね。聞こえなかったのですが、私の名前を呼んでいたのですね……。でも、どうして私の名前を知っているのでしょうか？初対面のはずですし………過去に会ったことが？うーん、やはりピンと来ないですね……。もしかして、ナツメさんのお知り合いなのでしょう……？」

「ナツメさんのお知り合いという可能性は……？」

「確かにその可能性もあるかもしれん。だが、四季ナツメはあまり人との友好関係を持って無かったはず。親族などとも考えたが、我々の事は話しては無いはずだ。無論顔を見られる機会も無い」

「確かにそれもそうですね……。では一体何処で知ったのでしょうか？」

「気になるところだが、後で本人に聞けば済む話だろう……。そちらは一先ずは置いておく。それよりも、気づいてると思うが奴の体………」

「はい。それは私も気になっていました」

「恐らくだが、お前と同じように肉体に縛られていない存在に近い。

蝶の魂で作り上げられた身体の……はずだ。確証は無いが、あの場所には元々奴の魂の一部が居て、それに蝶が呼び寄せられていたのだろう。何故蝶が奴の魂に呼び寄せられていたかは不明だが、何か強い未練があつた事でそれに蝶が取り込まれた可能性がある……と考えている」

「それはつまり、蝶を吸収して生まれたという事なのですか……？」

「ああ、裸で寝ていたのもそれが原因であろう。生まれた状態なのだから服など着ているわけがない。だがこれまでに、その様な事が起きた話は聞いたことが無い。これらについては詳しく調べる必要があるようだな」

これからの事を考え、悩むように眉を顰める。

「取り敢えず……奴が風呂を出てきたら状況の説明を私の方から話しておく。場合によってはこちら側に引きずり込んでしまえば良からう」

「個室で怪しい二人組に死神のお仕事の勧誘だなんて……変な宗教に捕まったとか思われませんか？なんせ内容が、人の魂を神の元に還す役目。とかなんですよ？」

「そののどがおかしいと言うのだ。どこも間違つた事は無いであらう？」

「無いからこそ、なんですが……」

私の冗談交じりの疑問に対して、まじめな顔で返答するミカドさんの顔を見て苦笑いが自然と出る。

その後、ミカドさんと暫く話していると、風呂場の扉を開ける音が聞こえ、浴衣に着替えた彼が出てきた。

二人から風呂を勧められ、大人しく体を洗い流す。

さつきまでは裸マントで気が気じゃなかったが……、少し落ち着けそうだし頭の中を整理しよう。いやしたい……！

シャワーを頭から浴びつつ、これまでの流れを思い浮かべていく。  
……やっぱり、さつきの女性は明月菜那で間違いなさそうに思えるが……。それか、コスプレのレベルが超絶高いなりきりロールプレイヤーのどつちかだが……森で蝶を回収している所を見ているし、本物なのか……？となると、横で歩いていた執事姿は閣下になるのか？確かケット・シーで公爵家の……。

そう言っただけで思い浮かぶのは金の王冠に赤のマントを着けた猫の姿だった。

もし……本物だと仮定すると、此処はゲームと同じ世界ってことになるのか？異世界転移？ラノベ的な展開……？それとも実は俺が知らなかっただけで現実に存在していた……？いや流石にそれは無いか。ゲームのキャラが全く同じ見た目で居るとか、前者の方が信憑性まだあるわ……。

夢ってわけでも無いし、本当ならどうしてゲームと同じ世界に居るのか分からないが……一旦そこは受け入れておこう。閣下は何か分かっていたみたいだし、話を聞いてから考えよう。

仮に、ゲームの世界なら……今はどの時点だろうか？原作が始まってから喫茶ステラの仕事で遠出の仕事とかしてなさそうだったし……原作の時期の前後とかかな？……でも、外で全裸なのにそこまで寒くなかったし、虫の鳴き声していたから原作より少し前か、一年後以降になるかもしれない。まてよ……？まず、ここは俺の知っている日本で当たっているのか？同じ日本でも並行世界みたいな感じの世界とか……。別の世界なら元々住んでた場所や交友関係とかどうなっているのか気になる……。

考えれば考えるほど気になることが出てくるが、それに対しての答えに結局辿り着けずにつきりしないもやもや感が残ってしまう。

「……出るか」

考えても仕方ないと結論付けシャワーを止める。扉を開け、置いてあるバスタオルで体を拭き、宿泊用の浴衣を着る。

部屋には二人が居る……。こつちからしたら知っているけど、向こうからしたら初対面なんだよなあ……。馬鹿真面目に話しても頭おかしい人だと思われそうだし、変な事言わないように一応気を付けた方が良くもしれないな。

ドアの前に立つと、謎の緊張を感じる。一度深呼吸してから風呂場を出ていく。

部屋に戻ると、そこには椅子に座った明月葉那と床に二足で立っている閣下が居た。その姿に一瞬驚いてしまう。

……知ってはいたけど、実際にこんな格好の猫を見るとびっくりしてしまふな……。現実味が無さ過ぎて受け入れるのを拒否してしまひそうだ……。

「どうだ？水浴びをして少しは落ち着けたか？」

うわあ……。本当に喋った……。猫がこんなに流暢で話しかけてくるとか正直不気味というか、気持ち悪さを感じるぞ……。

「む？どうした、変なものを見た様な顔をして」

「ミカドさんがその姿で話しかけるからですよ。誰だって急に猫が話しかけてきたらそうなりますって」

「そうだったな、では」

そう言うと、次の瞬間には何時もの執事に戻っていた。

「貴様にはこつちの姿なら見せているからな。この状態で話しておこう」

「あ、ああ……。そつちの方が助かる。非現実的なのを見て思考が変になりそうだ……」

執事の姿をした閣下が、綺麗な姿勢でこちらを向く。

「では、話の前に軽く自己紹介を済ませておこう。我輩はミカド。此方の姿では御帝 貴紀と名乗っている。人の魂を正しく案内する為に死神の仕事をしているその娘のサポートをしている程度の認識で構わん」

閣下からの自己紹介を受け、視線を椅子に座っている明月葉那へと移す。

「次は私の番ですね。私は明月葉那と言います。先ほどミカドさんが仰っていた通り、死神のお仕事をしています。内容としては……そうですね、森で見たように彷徨える蝶を回収したり、回収した蝶を正しく神の元へ導くことを主にしています」

……まじかよ。名前も設定も全く同じだな……。声や話し方まで同じとなると……同一人物として認めるしかないよなあ？流石にこれは……。

顎に指を当て、うーん……と唸っていると、二人からの視線に気づく。

「ああ、ごめん。そっちにだけさせて、こっちがまだだった。ええつと、私の名前は澤田達也と言います。歳は今年で27、仕事は……普通の会社で一般社員としてサラリーマンをしています。先ほども話しましたが、家で就寝後起きたら森の中で何故か裸で寝ていて……自分でも言っている意味がわからないのですが、本当にそういう記憶しなくて困っている所です」

なんか……自己紹介って緊張してしまう……っ！喋り方も変になつてくるし……超恥ずかしい。

「澤田達也さんですね。よろしくお願いします」

「はい。よろしくお願いします……」

……よろしくって、何に對してのよろしくなんだ？今後の俺に對してか？何をよろしくさせるつもりなんだ？

「お互いの自己紹介も済んだな。ではまず……澤田達也。貴様に今起こっている現象を先に説明しておこう。我輩の推測にはなるがな」

「あ、はい。よろしくお願いします」

こうして、よく分からない空気の中、閣下からの説明が始まるのであった……。



### 第3話：提案

「今のこの体は生まれ変わっていて、蝶の魂によって作られた肉体……?」

閣下から説明を受け、想定外の出来事に聞き返してしまう。

「そうだ。貴様の今の肉体は人間に近いが、それは蝶の集まりによつて形成されている。そこに居る葉那と似たような存在と思われる。死神では無いがな」

閣下の言葉に更に疑問が生まれる。

……今の俺が生まれ変わっているのなら、昨日寝た俺の体はどうなったんだ……? 流れで言うなら死んだから生まれ変わったって事になるが、家で寝ていたのに死にましたっ!……とか何があつたらさうなるんだよ……。過労死とかガス栓の閉め忘れとかでぼっくり? んんんん! わからんっ!」

「やっぱり、今の話を聞いて信じられませんか?」

頭を抱えていると、明月葉那が心配そうな目を俺に向けて聞いてくる。

「ああ、いえ。嘘を言っているとは思いません。ミカドさんや明月さんの顔を見れば真剣そうに話しているので、本当の事を仰つていとは理解できます。ただ、どのようにして死んだのか……とか、何を未練に思い死んだのか……、とか考え込んでしまっただけです」

「そこは吾輩達にもわからん。何か覚えていないのか? 生前にやり遂げたい事とか将来の計画があつたりなど、寝る前に考えていたことは」

「やり遂げたい事ですか……。うーん、これと言って思い当たらないですね。正直将来とかもあまり考えてはなかつたので……。今の友人と楽しく遊べれば良いかなくらいとしか……」

「寝る前に考えていた事は……。確か、直前まで会社の書類を触っていたので、多分ですが……。『家でまで仕事をしなきゃならないとかマジ有り得ない。あくあ、会社が明日には火事とか隕石落ちて潰れてく

れないかなあ……』とかそんな感じだと思えます。あまり楽しくはなかつたので……」

「取り敢えず、働いてる場所への憎しみとお疲れのご様子……という事は伝わりましたが……」

「……そうだな。恐らく、その様な状態であつたから魂が零れ落ちて彷徨つたのかもしれないな。周囲の蝶は貴様のその未練に引き寄せられたのだろう」

「未練ですか……。すみません、直ぐには思いつかないので、少し考えてみます」

未練など言われ考えてみるが……やはりパツとは出てくることは無く、思い当たることも無い。

「そうだな。暫くは頭の整理が必要だろう。時間も遅い事だし、疲れているであろう？今日は寝てしつかり体を休めておくといい」

「そうですねえ。そろそろ寝ないとお肌に影響が出てしまいますし、そうしましょうか？」

「肌を気にするなど、貴様には関係ない事であろう……」

「ミカドさん……こういうのは気持ちが大変なんですよ？気持ちが」

二人が楽しそうに話してるのを見て、猫にケアの共感を求めるはどうなんだ……？と感じつつも言葉に従って寝る準備を始めていった。

……………寝れんっ！

目を開け、ベッドから体を起こす。

あんな事があって寝れるわけがないだろっ！今日の事とか閣下からの話とか、頭の中で巡り巡りまくりで眠りを妨げてるわ！

眠ろうとしても睡魔は来ず、どうしても今日の事を考えるため目はずっと冴えていた。

……はあ、喉乾いたな。冷蔵庫に水でもあったかな……？

ベッドからのそのそと出て、ガチャリと冷蔵庫を開ける。中にはペットボトルのミネラルウォーターが二本あり、その内の一本の蓋を開けて飲む。

今の身体は……蝶で作られているとは言っていたが、普通に水は飲めるし、人間の体にしか思えないんだよな……。

手を開いたり閉じたりをして感覚を確かめるが、特に違和感は無かった。

冷蔵庫を閉め、テーブルにペットボトルを置いて自分も椅子に座る。

これからどうしようか……？生まれ変わっているなら知り合いや家族に会うのはアウトになるのか？でも、どうなっているのか気になるし……。やっぱり、まずは同じ世界かどうかを確認する必要があるな……。住んでた部屋とか職場に行けば分かるか？……あっ、そういうえば今日の日付聞くの忘れてたな。明日朝にでも聞いておこう。

もし……仮に別世界であって、部屋とか何も無かったらどうしよう……。財布や携帯無いし身分証明とかも出来ない……。あれ？これ割とやばい状況では……？

「まじかあ……、どうやって生きていこう……」

衝撃の事実直面し、小声で絶望していると――。

「どうかしましたか……？」

後ろからごそごそと音が聞こえたのでそちらを見ると、眠そうに眼を擦りながらも体を起こしている明月葉那が居た。

「ああ、すみません。起こしてしまいましたか？」

「いえ……。勝手に起きただけです……。」

彼女はそう言い、ベットからのそのそと出る。

「すみません、冷蔵庫に何か飲み物はありましたか？喉が渴いてしまつて……」

「水がもう一本ありますので、ちよつと待つて下さい」

彼女にそう伝え、冷蔵庫から残りの一本を取り出して渡す。

「ありがとうございます」

蓋を開けて水を飲むと、心配したような目でこちらを見た。

「やはり、眠れませんでしたか……？」

「……まあ、そうですね。今日の事とかこれからの事を考えるとどうしても目が冴えてしまいます」

「それは仕方ないですよね……。今日だけで色んな事を聞かされていますし」

「そちらは何となく整理して、受け入れる事は出来そうなのですが……」

「問題は、これからですか……。？澤田さんは明日からの今後、どうされるおつもりですか？」

「そうですね……。つとすみません、その前に一つ確認しておきたいのですが……。今日つて何月何日ですか？」

「今日ですが？今日は9月1日……。いえ、日付は変わっているので9月2日になりますね」

「9月の頭ですか……。ありがとうございます」

つてことは、原作の月の頭になるつてことなのか？いや西暦まで同じとは限らないし、前後の可能性を考えないと……。同じなら……。今は喫茶オーブンに向けて四季ナツメと協力しているタイミングの……。はず。多分。

「……。澤田さん？」

「ああ、すみません。少し考え事をしていました。今後の事でしたね？現状考えているのは……。自分の立ち位置を確認したくて、友人や家族、職場を確認しておきたいと考えているのですが……」

「おられるのですが？」

「分かりません。ですが……、連絡を取ろうにも携帯はありませんし、動こうにもお金が無いので、何もできない状況になっている……と、先ほど気づいてしまって……はは」

せめてスマホだけでもあれば別だったのにな。転生したならこう……、初心者セットみたいにお金と服はあっても良かっただろ……。

「あ、服などの事ならご心配なく。ミカドさんにお願ひしていますから。流石に男性の服なので私にはわかりませんが……、朝にはミカドさんに用意してもらえますよ？お金に関しては……、こちらもミカドさんがなんとかしてくれます。相談してみましよう」

「なんか……何から何まで申し訳ないです」

「いえいえ、流石に右も左も分からない無一文の人をそのままにしては置けませんから」

ベツトに腰を掛けている彼女は、そう言つて優しく微笑んだ。

……今の笑顔の状態でベツトに腰を掛けているこのシーン、ゲームだったら一枚絵のCGになつてもおかしくないな……。てかありそう。

話とは関係の無い事を考えていると、手に持っていたペットボトルの水を一口飲み、真面目な顔をした。

「……澤田さんに一つ、ご提案があるのですが……聞いてもらえますんか？」

「提案……ですか？」

「はい。……私達の死神の仕事を、手伝う……という内容になるのですが」

「死神の手伝いを……手伝う？」

「はい」

「蝶を捕まえたり、鎌で回収を出来る気がしないのですが……？」

「いえ、それは私のお仕事なのでお気になさらず。正確には、とあるお店をオープンさせようとしているのですが、そこで一緒に働いて欲しいのです」

「まだ、オープンをしていないお店……」

「喫茶店なのですが、今は私とミカドさんあと一人女性の方がいて

……その女性の夢が喫茶店を開く事にして、私達はその夢のお手伝いをしてる最中なのですが、ちよつと躓いてしまして……」

「……そのお店をオープンする為に、協力する……人手が欲しいと言うわけですか？」

「そうですね。あと、今の澤田さんの生まれ変わった経緯や、お体の謎がはつきりと分かっていないこともありますし、なるべく目の届く範囲に居た方が対処も出来ますから」

喫茶店をまだオープンしていないのか……。今の話を聞く限り、後一人は四季ナツメで間違い無さそうだ。となると？原作の月頭つてことになるのか。

……今の俺は頼れる人も居ないし、近くに居た方が無難なんだろうなあ……。それに必要とされているなら少しでも今の恩を返して行きたいという気持ちもある。オープンするためには高嶺昂晴が居れば大丈夫だから役に立てるかは分からないけど……。原作知識があるから多少なりに助けになれる可能性はある。

「如何でしょうか……。直ぐに決められないのでしたら、返事は後日とかでも大丈夫です。実際にお店に行った後とかでも……」

「いえ。その話、受けさせてほしいです。お役に立てるか分かりませんが……。協力させて下さい」

「本当ですか？無理させたりしていませんか？」

「ご心配なく。確かに現状、行動を一緒にする以外の選択肢はありませんが、働き口を紹介して頂いているのは純粋に助かります。後は協力する事で少しでも恩を返せたらと……」

「気にしなくても大丈夫なのですが……。でも、ありがとうございます」

「ですが、働くにあたっての身分や戸籍はどうなっているのかさっぱりです……。なにせ生まれ変わっているのです……」

「それもそうですね。此方もまとめてミカドさんに相談しましょうか」

「ミカドさんに負担を掛けている気がしますが……。あれ？本人は居ないのでですか？」

本人を探して部屋を見渡すが、閣下の姿は見当たらなかった。

「ミカドさんなら今は情報を集めるとか言って出ていかれました。猫の集会にでも参加されているのかもしれない」

猫の集会って……、そんなファンシーな場に出ているのかあの公爵……。

「明日からの方針も決まった事ですし、朝に備えて今日はもう寝ましょうか」

「そうですね。すみません、起こした挙句話に付き合わせてしまいました」

「いえいえ、私が勝手に起きただけですからお気になさらず」

「それでは、おやすみなさい」

「はい。おやすみなさいです」

そう言っつて、お互いにベットのの中に入りなおす。気持ちが悪く落ちて着いたことなど寝ることが出来そうだと思ひ、目を閉じる。

……あれ？冷静に考えてみれば……今の状況って、明月葉那と同じ部屋で寝ているってことになるのか……？

精神的に落ち着いたことで、今まで考えて無かった事を考える余裕が出てきてしまった。

ゲームの画面越しでは何度も見たが、こう……リアルで見ると変な感じがあるな……。いや、超絶美人なんだがな？……。というか顔面偏差値高すぎではないだろうか……。？ステラのヒロイン全員可愛いのは違うないし……。こんな美人と同じ部屋で寝てるとか……。あ、なんかテンション上がってきたかも……。

今度は別の事で目が冴え始め、結局朝まで起きる羽目になってしまった。

## 第4話：聖地巡礼？

結局、朝まで起きてしまった……。

いや、普通寝れないでしょ!?こんな美少女と同じ部屋でなんてよ

……!

……ん？彼女は少女で当たっているのか……？確か100年は生きているんだよな？……あ、でも死神だし肉体は衰えないとかあるんだったら少女なのか？18歳と960ヶ月以上とかなのかつ!?それならまあ……美少女だな。うんうん。

寝ていないので若干変なテンションである。

そもそも、明月葉那は高嶺昂晴を幸せになつてほしいという願いがあつたわけだし……、原作に登場しない俺はイレギュラー的な存在になつてしまつているはず。さつきは一緒に働くと聞いたが、出来るなら居ない方が良いのかもしれない……。この世界は高嶺昂晴が主人公の場所だし、俺も自分の場所に帰れるなら帰つた方が良いかもしれん。取りあえずそれまではお世話になるしかないかなあ……。

ふと現実に戻り、冷静に考えてしまう。

寝てないからマイナスな思考に陥りやすくなつてるな……。……はあ、シャワーでも借りて少しでもすつきりしておこう。こんなのだとまた心配させてしまいそうだし……。

そう考え、脱衣所に向かった。



ふう……、シャワーのおかげで多少はましにはなったな。

ハンドタオルで頭を拭きつつ脱衣所から出ると、既に起きていた明月葉那と閣下が居た。

「澤田さん。おはようございます」

俺がシャワーから出て来たのを見て、挨拶をする。

「昨日はよく眠れたか？色々と話してしまっていたが……」

「おはようございます。昨夜は……まあ、おかげさまで、何とか……」

はい。すみません。変な事考えていて一睡もしていませんでしたっ！

「あ、すみませんがシャワーお借りしていました」

「いえ、気にしなくて大丈夫ですよ。私もこの後入ろうと考えているので少し待たせてしまうことになりましたが、その間にミカドさんと例の件でお話をしておいってください」

「わかりました。こっちの事は気にせず、ゆっくりしてきてください」

そう言い、彼女は脱衣所に入っていった。

「それで、先ほど明月さんが仰っていた話なのですが……」

「それについては葉那から軽く聞いている。今後の行動方針とそれらに必要なものであろうか？」

「聞いていたのですね。現状の私は身体一つしかないので生きていく術がなくて……」

「衣服の心配は無用だ、先ほど店で買ってきたからな。服のセンスについては吾輩はわからんから店員にマネキン一式を選んで貰った。後で着替えておくといい」

「金銭についても問題ない。吾輩が出そう……正確にはケット・シー王国からの支援になるがな。貴様の事は詳しく調べる必要がある。蝶関連にあたるから援助も可能だ。働くにあたっての戸籍については……、まあ我輩が何とかしておく。多少の時間は貰うことにはなるだろうが」

「ほんと、何から何までありがとうございます。物凄く助かります」

「何、気にするな。こちらとしても今回のケースは初めてでな。近くに置いた方が対処が容易との判断からだ。だから蝶関連の事で協力してもらおう事なるかもしれん」

「それについては出来る限りは手伝います。お役に立てるかは分かりませんが……」

「そう構えるな。当面は店の事や自分のことに集中しておくといい。それよりも他に聞きたいことはあるか？可能な限り答えるぞ？」

「聞きたい事ですか……。個人的な質問にはなるのですが……」

閣下からの問いかけに、ケット・シーはゲームの様に魔法が使えるのか、猫との集会など関係の無い事を幾つか聞いていると、脱衣所のドアの開く音がした。

「すみません。お待たせしました」

謝りながら出てきた明月菜那は、昨日の死神礼装ではなく外出用の服を着ていた。

「待つてはいませんよ。ミカドさんとの会話が弾んでいた所です」

「そうですか？それなら良かったです」

「菜那も出てきたことだ。貴様も着替えてこい。準備が出来たら宿を出るとしよう」

「では、自分も着替えてきますね。少々お待ちを……」

二人にそう告げて再び脱衣所に入り、購入してもらった服に着替え宿を出た。

困みに着れるなら何でも良いかと思っていたが、服のセンスは悪くなかった。店員さんに感謝しておこう。

宿から出て交通機関を使って喫茶店近くの駅に辿り着き、辺りを見

渡す。

原作でも思ったが、やっぱり見覚えのある駅だな……。仕事とかでたまに来たことはあったが……。

「澤田さん、そんなにキョロキョロしていると田舎者だと思われるてしまいますよ?。」

周りを見すぎたのだろう。苦笑いしながら注意をしてきた。

「ああ、すみません。見覚えのある場所だったので……つい」

「そうなのですか? そうなると澤田さんが生まれ変わる前と後で、そこまで時間が経っていないのかもしれないかもしれませんね」

「そうだと嬉しいのですが……」

話している内に駅から出て、横断歩道を渡った直後にあることにと気づき、後ろを振り返る。

この場所……。確か原作の高嶺昂晴と四季ナツメが一回目の世界で交通事故に遭う交差点……。今月末に起きてから物語が進行していくんだよな……。仕方ないとは言え、知っている側としてはあまりいい気分ではないなあ……。

「澤田さん? どうかされましたか?」

複雑な気分になっていると、横から心配したような声を掛けられる。

「あ、いえ。何でもないです。すみません、急に立ち止まってしまつて……」

「それは良いのですが……。大丈夫ですか? なんだか落ち込んでいられる様に見えましたが……?。」

「落ち込んでいませんよ? ですがご心配させました。……それより早くお店に向かいますし。ミカドさんも待つてくれていますし」

「……わかりました。でも何か悩みなどがあつたら相談してくださいね? そういった事も死神のお仕事の内ですから」

「ありがとうございます。その時は遠慮なく相談します」  
振り返るのを止め、喫茶ステラに向かって歩き出す。

そんなに分かりやすく顔に出ていたのか? 変な心配を掛けさせてしまった……。でも、これから起こる事を考えるとどうしてもなあ。

気を付けておかないと思いつつ、彼女の後に続いた。

「ここが、喫茶ステラ……」

駅から5分ほど歩き、大通りから1本裏通りに入ると目的の建物に着いた。

そこには背景で見慣れた風景があり、見上げると”CAFÉ ST ELLA”と書かれている黒い看板が目に入る。

看板、店の外見と色。入口横のベンチ……。全部記憶の中と全く同じ風景。

「どうした。早く入らないのか？。店の周りを見ているようだが……」

「ああ、すみません。今入ります」

閣下の後に続き店の中に入ろうと扉を開ける。チャリンと音が鳴り、店内へと進む。

店の中は木造が多いが、特有の匂いはあまりしなかった。

思ったより木造のあの匂いはしないのだな。結構年月経っている店だしそういうものなのか？匂い消しのアイテムでもあるのだろうか……？

「この喫茶店が昨夜に話していた、オープン前のお店になります。澤田さんが働いていたただく職場になるかもしれない場所にもなります」

「落ち着ける場所にも着いたことだ。貴様が働く前に改めて、死神の役目とこの店をオープンさせようとしている経緯について話しておいた方が良好だろう。長くなるからな、適当に席に座ると良い」

「わかりました。確認も含めてお願いします」

「それでは、私は飲み物を入れてきますね。カウンターの席に座っててください」

席に座り、飲み物が届いた所で閣下から死神業界の問題、蝶を集めるためにお店を開こうとしている内容を聞くことになった。

まあ、予想通りと言うか、知っている内容ではあった。

「と、ここまでが今の現状だ」

閣下の言葉で説明を一区切りし、飲み物に口をつける。

聞いた内容は、原作の高嶺昂晴に説明した時と大して違いは無さそうだな。

「現代では蝶が多く発生してしまっていて、効率よく回収を行うためにここを拠点としてお店を開店することを目指している。お店を開きお客を沢山呼ぶことで蝶も集まりやすくなる。お店が明るい雰囲気なら尚良しって感じでしょうか？」

「そうですね。大体その認識で間違っていないです。その為にまずはオープンさせる為に準備を進めている段階になります」

「そこで澤田さん。今の話を聞かれて改めて確認しますが、一緒にこの喫茶をオープンさせる為に協力して欲しいのですが、どうでしょうか……？」

夜に了承の返事はしたつもりだが、今の話で心変わりするのを心配してなのか再度確認をしてきた。

「私の返事は変わりませんよ。どうぞここで働かせてください。寧ろこちら側からお願いしたいくらいです」

こつちを気遣って確認してくるとは律儀だな……。別に今更やっぱやめた。とかするつもりは無いんだけどなあ。サクツと契約書とか書ければ安心できるけど、ハンコも身分証明も無いし……。

どうしたもんかと考え、正式では無いが契約時の合意を表すために右手を差し出す。

「……こちらの手は？」

俺の差し出した右手を不思議そうに見つめながら聞いてくる。

「今は契約書にサインは書きませんが、お互いの合意をしたという事で取り敢えず握手だけでも考えたのですが……」

「ああ、そう言う事ですね。それではこちらこそよろしく願います」

そう言つて彼女は握手をし返してきた。

死神と契約かあ……ネタでもあったが、『卍解！』とかリンゴが好きとか聞いてみたい欲に駆られるなあ……。あとめつちや手が柔らかいなおい。女の人手つて感じです、はい。

「さて、無事に澤田達也からの了承も取れたな。これから宜しく頼む」

「いえ、ミカドさんもこれから宜しく願います」

「うむ。それで話は変わるのだが、貴様に幾つか聞きたいことがある」

宜しくの挨拶を済ませ、閣下から話が飛んできた。その声は真面目な雰囲気をしている。

「私に聞きたい事です……？答えられる範囲なら良いですが……」

真面目な雰囲気をしてどうしたんだ……？この身体に関しての事なのか？そんな直ぐにはわからんみたいなこと言つてたし別の事か。まあ、原作知識あるしこの身体はある程度予想は付くけど……。

「澤田達也。貴様、我輩たちに隠し事をしていてあるだろうか？」

閣下から飛んできた予想外の質問にその顔を見たが、そこにはどこか確信を得ている目でこちらを見ていた。

## 第5話：真実とすり替え

「隠しごとですか……?」

「そうだ。森で出会ってからこれまでに不可解な点が幾つかある。貴様の言う通りなら知るはずのないことを知っているのだからな」

「不可解な点でしようか?ええつと……何かありましたか?」

閣下からの返事に、内心焦りが出てくる。

会話中に何か変な事漏らしてしまっていたのか……?確かに向こうは俺を知らないのにこっちは知っている風に話していたのがあったかもしれない……。意識してなかったから憶えてないが……。

「では、一つ一つ説明していこう」

閣下の言葉に無言で頷く。

「まずは森での時だ。朧那には聞こえてなかったが、顔を見た時に『明月朧那』と呼んでいたであろう?しかし、朧那は初対面と言っておろ、貴様も自己紹介をしていた。この時点で少なくとも朧那の顔をそちらは知っていたが、こちらは過去に貴様と会った記憶など無い」

初対面からやらかしていたのかよ……と、手で顔を覆いたい気持ちになる。

「二つ目は、宿で我輩が猫から人の姿を見せた時もあまり驚きや困惑が見られなかった事だな。今まで見てきた中で、少なくとも猫が人に変わったらもつと大きな反応が返って来たはずだ。だが貴様は、一瞬驚きはしたものの直ぐに納得した表情を浮かべていた。まるでそれを以前にも見たことがあるかのような反応だった」

あー……、普通そんなのに遭遇したらもつとリアクション取るよねえー。高嶺昂晴も本当か実際触ってたりしていたし……。

思わず天を仰ぎたくなる。

「最後だが、貴様は我輩達を知っていないとするなら無論、死神の仕事、そしてその内容を知っているわけがない……が、森で朧那が蝶を死神の鎌で切ったのを目撃し、それを回収していると認識していたな?」

「慌てており咄嗟に口に出していたのかもしれないが、普通あの場面を目撃したのなら、鎌で蝶を回収する発想には行きつくとは思えん。鎌で蝶を切った……もしくは殺したと言うのが普通であろう」

「これらを踏まえると、貴様は我輩や栞那の事、死神の仕事を知っている事になる。少なくとも蝶を回収することを知っているのだから、蝶が何なのかを当然知っているのであろう？」

あーこれは……、言い逃れ出来なさそうな感じだな。だが……実は18禁ゲームのキャラとして知っているとか言えるわけないし、何か良い言い訳は無いものか……。

特に名案などは思い浮かばず、静かに目を閉じて天を仰ぐ。このまま変に嘘をついて不審がられるよりも、ある程度真実を話して誤魔化す方が無難だと判断し、二人を見る。

閣下からは警戒心が見えるが、明月栞那からは心配そうな顔でこちらを見ている。

「……ミカドさんに言われた通り、そちらの事情をある程度知識として知っています」

こちらの告白に、明月栞那は驚きの表情をしていた。

「まず、黙っていた事を謝罪させてください」

二人に頭を下げる。そして頭を上げずにそのまま言葉を続けた。

「私もいきなり生まれ変わったなどと頭の中を整理することを優先して話す切っ掛けを作れていませんでした」

「では、それを話す気ではあるという事だな？」

「はい。此方が話せる事を話して行きたいと思えます」

真剣な顔をして二人の目を見返す。

「まずですが、私は二人がどういった存在か知っていました。そしてこのお店が誰の夢で開こうと動いているかも知っていましたが、それが本当かどうかの確認をするために説明を聞いていました」

まずは当たり障り無い様に既に聞いている事を話す。だけど、本番は此処から話す内容だ。

「この喫茶店は、二人の観察対象の四季ナツメさんの夢の為にお店を開こうとしている筈ですよね……？まだ準備段階ですが」



「……葉那。四季ナツメの事は既に話したりは？」

「いえ……、私からはナツメさんの名前は出してはいません。お店を開こうとしている女性が居るとしか……」

二人が顔を見合わせる。明月葉那の方は少し困惑した顔をしていた。

「彼女の魂が弱っており、少し危うい状態にある……そこも知っております」

「魂の状態も知っているのか……」

閣下は変わらずこちらに警戒心を出したままだ。無理もないだろうな、急に知るはずがない内情を話されたら誰でもそうなる筈だ。

「はい。ただ二人に出会ったのは偶然で私も本当に驚いています。何故あの森で生まれ変わったのかも分かっています……」

「まあ、あの場面を見れば偶然なのはわかりますが……。寧ろ必然とか言われたら恐ろしいのですが……」

明月葉那が苦笑いをしてこっちを見る。確かにあれを計算でやるのは色々無理がある。主に俺の羞恥心的な意味で。

「頼れる人が居らず、お二人に付いて行きました。そちらの現状が私が知っている内容と同じだったので何かお力になれる事があるかもしれないと思い、喫茶店の仕事を受けた面もあります。勿論、受けた恩を返したいという気持ちが強いのは本当です。そこは嘘偽り無いです」

「それと喫茶店についてなのですが、私の叔父……養父になるのですが、喫茶店を持っていて、そちらのお手伝いをしていたのである程度はお役に立てるとも考えていました」

これについては本当だが、理由としては今取って付けた内容だ。幾つか理由を並べ、閣下を見る。

「嘘を言っている様に見えるいな。真実を話している前提で聞き入れよう。だが……」

途中で言葉が途切れるが、聞きたい事はおおよそ想像が付いていた。というよりかはどこかで必ず聞かれる質問がある。

「澤田達也。貴様はこれらの事を何処で知ったのだ……？」

——来た。

やはりその質問が出てくる。当然だろう、落ち着いて返事をしよう。誤魔化すならここだろう。

「やっぱり……、それが気になりますよね……？」

困った顔で閣下を見る。

「当然であろう」

「知っている理由なのですが、申し訳ありませんがそちらを詳しく話すことは出来ません。二人に話せない理由が主に二つあります」

一瞬、何かを言おうとした閣下が理由があると聞き、口を閉じる。

「二つ目なのですが、話すと私の尊厳や命に係わります。最悪死ぬ（社会的に）可能性があります」

理由が18禁ゲームとか社会的に死ぬから嘘では無い……、と思いたい。いや死ぬ。

「二つ目ですが、こちらは理由を話すと……とある人物の人生に大きな影響を与える恐れがあるので話せません。お二人が……、特に明月さんにはとても重要な人です」

「私に、ですが……？一体誰なのでしょう……？」

急に自分の名前が出て困った表情をしていた。

本命はこちらだ。高嶺昂晴の話は二人しか知らない。これから話す内容は二人に警戒心を持たせるかもしれないが、真実を話していると信頼を得れるチャンスでもあるはず。

「その人物ですが、確か今は一星大学に通っている男性……」

高嶺昂晴です」

「高嶺さん……っ!？」

明月栞那から驚愕の表情と声が出る。閣下も少なからず驚きが見える。

「今お二人が思い浮かんだ彼で……間違い無いです」

「どうして高嶺さんが話せない理由に関わっているのですか!？」

「……、すみません。その理由は今は話すことが出来ません」

明月栞那が声を大きくして問い詰めてくるが、黙秘権を使う。

「……それは、最初に言った澤田さんの命に係わる事だからなので

しょうか」

「いえ、先ほども言った様に、こちらについては私の命と言うより高嶺さんの命に係わる事です。明月さんが願う幸せになる為の人生を歩めなくなる可能性が大きいです。」

「その言葉は……っ」

明月葉那が俺の言葉で声を詰まらせる。

何度も高嶺昂晴に願った言葉のはずだ。大事な人の人生を狂わせかねない話なら気になるが安易に聞き出せなくなると思いたい。

「貴様……、そこまで知っているのか」

「すみません、少し内容を話し過ぎました。あまり詳しくは話せてはいませんがこの二つが主な理由になります。ですが可能な限り二人からの質問には答えますし、協力する事は確約します」

最後に二人に協力する意思があると示し淹れてもらった飲み物に口を付ける。これである程度は納得してくれるはず……。きつと、多分……。

「……わかりました。澤田さんから話すまでは聞かないで欲しいとのことですね。納得は出来ませんが取りあえずは飲み込みます……」

明月葉那は納得は出来ていないが、一先ずは受け入れてくれそうだ。問題は……。

閣下の方を見ると目が合う。聞き出したい事が沢山あるが此方が答えれないと分かり、質問する内容を考えている様に見える。

「……色々貴様からは聞くことは山ほどある。命に係わるなど本当かどうかすら分からん。だが話していない事を知っているとなれば嘘や適当などを言っている訳でも無いはずだ。答えられんと言うなら一旦保留にしておこう」

閣下はしぶしぶ諦めた様にため息を付きながら受け入れた。

「無理なお願いを聞き入れていただきありがとうございます。私の方からも話しても大丈夫と判断できたことは直ぐに二人と共有します」

「澤田さんの可能な範囲で大丈夫ですので無理はしないで下さい。勿論知りたいとは思いますが……」

この状況でもこっちの心配をしてくるなんて……！いや普通ならもつと可能な限り問い詰めるかと思ったが、人が出来すぎている……。流石はメインヒロイン。

感極まっている所に空腹を知らせる音が鳴る。さっきまで緊張していたが、解けたことで気が緩んでしまったようだ。

「そういうえば、何も食べていませんでしたね……。お昼も近いですし何か作りましょうか？」

明月葉那が苦笑いしながら提案をしてきた。此方としては場の空気を変えるためにありがたいが物凄く恥ずかしい思いだよ……。

「そうだな。一旦昼でも食べて頭を整理しよう」  
閣下も賛成の様だ。

「すみません、その前にお手洗いを貸して頂いても大丈夫ですか？」

「ああ。場所はそこを曲がって直ぐにあるから行ってくるよ」と良い

閣下から場所を聞いて席を立ち二人から離れる。今聞いた内容の話し合いをしたはずだ。自分が居ては出来ないだろうからトイレで少し時間を潰して居よう。

そう考えトイレのドアを開け、中に入った。

## 第6話：勘違いと昼食

彼がトイレに入ったことを確認し、ミカドさんがこちらを向く。

「奴はトイレに入ったな？」

「そうですね、こちらに気を使って……の様に見えましたけど」

「奴なりの気遣いだろう。我輩達としては好都合だ。葉那、お前から見てあやつはどう見えた、率直で構わん」

「そうですねえ……、悪い人では無いと思います。先ほどのお話も私達を騙そうと嘘を付いている様には見えませんでしたし……ミカドさんから見て澤田さんはどう見えたのでしょうか？」

「……これは憶測、いや妄想の類に近いかもしれないが……。奴は未来を見通す力、未来視や予知などに近いものを持っている可能性があるのかもしれないと考えていた」

「ミカドさん……。それは流石に飛躍し過ぎた考えかと思いますが……？まだ人の考えや記憶を知ることが出来ると言われた方が……ってこちらも現実的ではありませんが」

「分かっている。あくまで可能性がある……のかもしれない程度に過ぎん。だが吾輩達しか知るはずの無い情報を奴はどこで知りえたのか想像つかん」

苦笑いをしている私にミカドさんは難しい顔をしてる。確かに死神の事はまだ私たち以外にも同じような人と出会っていたらまだしも、高嶺さんの事は私達以外には知らないはずですし……、もつと言えば彼が私に向けて言ったあの言葉。あれはミカドさんでも分からないはずです……。

「……で考えても仕方ないな。奴から直接話すのを待つことにしよう。無論こちらでも調べておく」

「分かりました。ミカドさんに負担を掛けることになってしまいませんがよろしく願います」

暫くお互いに考えていたがこれと言って無く、一旦先送りをすることにした。

「気にするな。栞那は引き続きあやつの世話を頼む。なるべく目を離さぬようにな」

「はい。差し当たってはお昼の用意でもしましょうか。お腹を空かしていましたからね」

ミカドさんからの頼みに了承し、ご飯の支度のため厨房に向かい何か無いかと漁る。

「何が食べたいとかリクエストとかあったりするのでしょうか？とは言ってもパスタ位しか直ぐに作れるのはありませんが……。ご飯はお米を研ぐ所からですし……。一応卵もありますね。うーん。今回はパスタを適当に二種類作ることにしましょう」

無難なかつ手頃な味にしておけば大丈夫だと考え、食材と調味料に手を伸ばした。

「さて、そろそろ出ても大丈夫かな」

フロアから微かに聞こえていた二人の声が止み、厨房から音が聞こえてきたのを確認してトイレを流す。

これ以上長居すると便秘と勘違いされる可能性があるかもしれない。いや、向こうも何となく感じている可能性が高いし……。それなら大丈夫か。

ドアを開けフロアに戻り席を見る。

席には閣下だけが座っている。明月栞那は昼の支度をしてくれているのだろう。

そう考え席に座り、こちらを見ている閣下に話かける。

「明月さんは厨房にですか？という事は話し合いは纏まった感じでしょうか」

「情報が何も無いのだ纏まるわけがない。現状は様子見にすることにした。貴様の監視は栞那に頼んでいる」

首を振り、呆れ顔で閣下が返事をする。

監視つて……、いや、まあ間違いではないのかもしれないけど……。此方も話せる内容を考えておかないと。場合によっては物語がスムーズになるなら多少先の話をしていた方が良い事もあるだろうし。「今話せる事は本当に無いのか。栞那が居るから話せない事などはどうだ？」

こちらが何か無いか考えていると、閣下から催促が来る。

うーん、現時点は原作より前だしなあ……。始まってからならこつちも色々助言できるけど直ぐには思いつかないし、今はいいか……。「すみません……。ただ確かにミカドさんにしか話せない事も多く出てくるかと思しますので、その時は協力をお願いしたいです」

「それは、栞那に話すと何か不都合が出るという認識で良いのか？」  
「はい。明月さんも高嶺さんと深く関わる可能性が出た場合にそうなると思います。そうなった時はミカドさんに頼らせてください」  
「分かった。その時は頼ると良い。それからもう一つ確認しておきたいことがある」

閣下から良い返事を貰えたがまだ話は終わらなかった。厨房からは何かをフライパンで焼く音が聞こえていた。

「貴様が我輩達の事を知っていてそれについて話せない事情は分かった。此方は一旦保留にし、納得しておこう。だが知っている理由については聞かされていない。それも同じ理由なのか？」

乗り切ったかと思ったがそんなはずは無かった。どうやら社会的に殺したがつているご様子だ。

あー……。誤魔化しきれませんでしたか。どうしよ、同じ理由つてしらを切っておこうかな。取りあえずはそう言つて納得してもらおうか……。なんかごめんなさい。

「話せないなら、吾輩なりに少し推測を試みたが……。いや、変な話だからな。気持ち半分で聞いてくれ」

こちらが罪悪感を感じながら返事をしようとすると、閣下から続け

てくる。

しかし、知っている理由の推測か……。流石に正解には辿り着くことは無いけど、一応聞いておこうかな。

「貴様は我輩や朧那、更に高嶺昂晴の事を知っていた。高嶺昂晴に至ってはこれから起こりえる事。つまり先の未来での可能性を示唆していた。そこで考えたのだが……。もしや貴様は、未来が視える力を持つているのではないのか……。？」とな。もしくはそれに近い力を所持してはいないか？」

閣下からの発言に驚きを隠せず目を見開いてしまった。『……。何言っているのだろうか？この人』と頭の中で思う。

「その顔はもしかや本当に持っているのか……。？」その様な奇跡を……」

今度は閣下が驚いている。いや驚くのはこっちの方だろう。

え、ええ……。？未来予知とかそう来るか……。でも確かにそう思うのも分からなくはないけど……。いや、待てよ。これはありなのかもしれない。

閣下の見当外れの予測に驚く中——閃く。そういう力を持っている事にしていた方が向こうも納得しやすいのではないか……。？と。人は自分の予想や考えが通るとそれを真実と思い込む。現に閣下もこつちが驚いてるのを見透かされたと勘違いして、事実だと思い始めている。人じゃなくて猫だけだ。

……。あり。これはありだ。その方向で行こう。よくあるライトノベル系で出てくる原作知識を持っている人が預言者的な立ち位置で振る舞うロールで行こう。未来予知では無いから少し修正はしておく必要があるけど。

今後の立ち位置を考えつつ、閣下にそれっぽいことを言えば、向こうで勝手に落とし込むだろうと決め、返事をする。

「それについては……。すみません、私の口からは是とは言えません。ですので……。ミカドさんの想像にお任せします」

なるべく申し訳なさそうに下を向く。そして顔を上げ、閣下の顔を見る。



「……ミカドさんが仰った事とは関係ないのですが私、趣味が占いで特に人の運勢や悩みを聞くのが得意でして……。いえ、何でもありません。すみません、急に自分の趣味を語り始めて……。気にしないで下さい」

これが最大限の譲歩とアピールをしておく。後はそつちで察してください。と空気を醸し出しておく事も忘れずに。

さあ……。これでどうだつ？

「……。そうか。我輩の妄想だ、気にしないでくれ。貴様の趣味などは吾輩では疎くてな……。そのあたりは葉那の方が詳しいだろう。戻ってきたら趣味について話すと良い」

こちらの発言の意図を汲み取ってくれたのだろうか。明言は出来ないけどヒントは出す。これで今後聞かれる可能性は減ると思う。明月葉那に話すのは情報を共有しておきたいのだろう。

……。勝ったな？これは勝ちだよなつ？

「分かりました。女性の方がその手は興味持ちますもんね。明月さんは食いつきそうです」

主に高嶺昂晴の事で食いつきそうだ。あつちには占いが趣味で占い師もどきをしているとか説明しておこう。後で閣下が補足してくれるだろう。

閣下と話し込んでいる内に、厨房からいい匂いがしてくる。もうすぐ完成するのだろうと予想が付く。

「私は何か手伝えることが無いか聞いてきますね。完成品を運ぶ程度の事かなさそうですけど……」

閣下にそう伝え、席を立ち厨房に向かった。

厨房に入ると先ほどより濃い匂いがする。空腹には犯罪的な匂いだ。

「おや、澤田さん。どうかされたのですか？」

フライパンの上で麺とソースを混ぜながらこちらを向く。

「いい匂いがこちらまでできて……、待ちきれず何か手伝えることは無いかと思ったのですが」

恥ずかしそうな顔をしながら確認をする。

「ありがとうございます。それじゃあお皿の用意をしていただいても大丈夫ですか？こちらはもう出来上がりますので」

「了解です。食器はこちらの棚で大丈夫ですか？」

「はい。そちらから二人分をお願いします」

食器の在り処を聞き、平たい皿を2枚取り出して並べる。

「それではそちらに移しますね」

そう言つてトングで皿にパスタを乗せていく、最後に渦を作るように乗せ完了。これは旨そう、いや旨いだろ。見栄えも綺麗だし……。

「これは凄く美味しいパスタですね……」

「まだ食べてないのに感想早いですって……」

「匂いで分かりますよ。美味しさの主張が激しいので」

「なんですかそれは……。それじゃあ食べたら感想お願いしますね」

「大役ですね。グルレポ出来る自信は無いですが、任せてください」  
こちらのボケに苦笑いしつつも対応をしてくれた。食べなくても分かる。旨い奴やん……。

軽くコミュニケーションをした後、皿を持ち上げて閣下が座っている席へ向かい昼食を取った。

因みにパスタは文句なしで旨かった。

## 第7話：占い

昼食が終わり、淹れてもらったコーヒーで一息ついていると、閣下が明月葉那に話しかける。

「葉那、どうやら先ほどのこやつ予想は吾輩が勝ちの様だ」

「先ほどのと言えば……え？、ミカドさんの妄想と言っていたことですか？」

「ああ、それについては本人から聞いてくれ。何やら占いが得意らしくてな」

「占い？と不思議そうな顔をしてこちらを向く。」

「明月さんが準備をして下さっていた時にミカドさんと話して……。私占いが割と得意でして、先の運勢を占ったり悩みを聞くのが好きなのですよ」

「占いですか……。それはまた何とも凄いご趣味を。それとミカドさんが仰っていた事とどの様な関係が……？……ん？あ、あれ？そう言う事なのですか？ミカドさん」

明月葉那は何かを察したような様子を見せたが、答えが合っているか分からず閣下を見ている。そこに閣下は何か耳打ちをする。次第に謎が解けていくように納得の表情を見せていく。

「……なるほど。それでご趣味という事なのですね。分かりましたこちら事情があるという事で納得しておきますね。ただ……」

恐らくさつきまでの会話を掻い摘んで説明したのだろう。だが明月葉那から困った顔でこちらに何かを言おうとする。

「占い師で片付けようとするのはどうなんでしょうか……？なんだが此方以上に胡散臭く思えてしまいますね……」

占い師では胡散臭いらしい。死神の仕事より嘘とは失礼な。まだ現実にあるような職業だが死神とか漫画ですか？と馬鹿にされるレベルだぞ。中二病並みだ。

「それに、ずっと気になっていたのですが……澤田さん私達に気を使って変に丁寧な話し方をされていたので……、それも相まってどち

らかという詐欺師かと」

困り顔から今度は少し窺わしい目をこちらに向けてくる。まあ違和感ありますよね。所々自分でも間違っているとは分かっています。たとも。頑張つて直して行かないと。

「なので無理して話すのではなくて、いつも通りの話し方で大丈夫ですよ?」

——そう来るか。

予想外の発言に明月葉那の顔を見るが、笑顔でこっちを見ていた。うん。超可愛いと思います。あ、いや違う。違わないけどそうじゃない。

どう警戒心を解いて距離を縮めようかと思っていたが、まさかこちら側から詰めてくるとは思わなかった。有難く提案を受け入れておこう。

「あはは……、すみません。実はあまり慣れていなくて……お言葉に甘えても大丈夫でしょうか?」

「私は大丈夫ですよ?ミカドさんも良いですよ?」

「ああ、構わん。好きにすると良い。最低限の礼儀をすれば吾輩からは特にならない」

二人からの了承も取れたことだし。なるべく普通に。同じ目線からの会話を心がけよう。

「ありがとう……ありがとうございます。今後はそうしていくから何か失礼があったら気にせず言っただけ欲しい。直していくから」

これで多少は胡散臭く無くなった……のか?

「はい。これから一緒に働いていく仲ですからね。それで、話は戻しますが澤田さんのご趣味なのですが……、よく人を占ったりするのですか?」

こちらに気を遣った言い方で質問をしてくる。

「そうだなあ……、する時としない時の落差が結構あって……、占う人に依存してしまうから何とも言えないかなあ?ピンキリだと思う」

「そうなのですね。例えば私とミカドさんを占って欲しいと言われたらどうでしょうか?」

「そこは実際にしてみないと何とも言えないかなあ。予想だけどもミカドさんよりは明月さんの方が多く占えるかと思う」

「何かしら条件が合ったりしたりはするのでしょうか？占える人の最低限のライン的なのは……？」

「あると言えはある。人によつて占える範囲が決まっている感じと  
いうのか。詳しくは企業秘密という事で……黙秘権で頼みます」

正確には高嶺昂晴を中心としたヒロインのと原作までの知識だが、あまり詳しく話すのは良くないかと思い、ここまでと線を引く。

「分かりました。ありがとうございます。……良ければなのですが、私を占ってもらえたりは可能ですか……？」

申し訳ないような探りを入れているような表情を向けて聞いてくる。明月葉那からしたら俺があまり詮索して欲しくない部分の見極めをしているから心情的に罪悪感を感じているのかもしれない。内容にもよるがここは受けても大丈夫だろう。

「明月さんをですか？全然大丈夫ですよ？とは言っても大した事ではないと思うから期待しないでくれ」

「それで構いませんので……お願いします」  
「それじゃあ……」

席を立ち、明月葉那の正面に座る。少し心配というか不安げな雰囲気  
気が顔から見て取れる。

「そんなに緊張しなくて大丈夫。あくまで趣味で占うだけだから。明月さんの人生を決める相談でも何でもないから気軽に欲しい」

「あはは……そうですね。あくまでご趣味ですよね……。これは建前としては必要なのでしょうか……？」

最後にボソツと言ったが聞こえないふりをしとこう。建前は大事。  
これ重要。

「本来は、一対一で話すためミカドさんには席を外して頂くが、今回は明月さんが良ければ一緒に大丈夫です。プライベートやデリケートな部分話す可能性もあるから他の人なら一人だけが望ましいけど……」

明月葉那を見るが、大丈夫という事で頷き返してくる。閣下を見る

がこちらも頷く。まあ100年近くも共にしていれば多少は問題ないのだろう。信頼している証でもある。

「今回は明月さんの悩みなどを聞いてアドバイスの出来れば……と考えている」

「いつもはどの様な進め方なのですか？」

「そうだなあ……。始めに相手の紹介を聞いて、軽く趣味とか好きなことを聞いたり最近あった身近な出来事とか聞いたりして話を広げていく感じかな。会話が馴染んで来たら少しずつ本題に入っていく流れが多いと思う」

これは今考えた適当な手順だ。占いなんてやった事無いから本職がどうしているかとか分からないから当たり障りの無いように言う。

「なんだかお見合いみたいなのやり取りをしていくのですね……。いえ、相手の事を知ろうとするならそうなることは当然なのですが……」

「言われてみればなんだかお見合いみたいなのに聞こえてくるな……。でも今回はそれは必要ないかと思うから省いて本題に入ろうかと思う」

「急に互いのキャッチボールを飛び越えて結婚の話ですか……。これはまた破談しそうな進め方ですね？」

一旦お見合いから頭を切り替えようか？そりゃ相手の事もよく知らずに結婚なんてまず無理な話だろう。信用もくそもないからな……。って今はそれは置いておこう。

「まあ、今回は結婚のお見合いじゃないから大丈夫大丈夫。では始めに行きましょうか」

「はい。よろしくお願いしますね」

こうして占いの様なのが始まるが、勿論占いなどやったことは無い……。が、それっぽい事を匂わせておこう。多少ヒントを散りばめて置けば後々回収できるだろう。

## 第8話：第1回占い教室@明月葉那編

「それじゃあ明月さん、何かお悩みとかあれば相談に乗りますよ？お力になれる範囲になりますけど……」

手を広げ、歓迎の意を示す。

「そうですね……。では私が悩んでいることを言っていけますのでアドバイス出来ることはお答えしてください」

「お気遣いどうも……」

こうも気を使われると少し恥ずかしいというか気まずくなるな……。命に紐づけたのは軽率だったかもしれない。

「私が気になっている事なのですが、澤田さんもご存じの人になります……。高嶺さんの今後の人生がどうなっていくか、なのですが……」

ああ、やっぱり高嶺昂晴絡みかあ……。いやそれ以外ないよな。知ってた。

「自分の事じゃなくて大丈夫なのか？先に聞くことが高嶺昂晴で……」

「はい。自分の事はある程度分かっていますから。それより大事なことなので相談をしています」

目を閉じ、納得している様な声で答える。

分かっている、ねえ……。そんな訳ないと思うけどな。まさか自分が喫茶店を開き、死神として初めての試みをして、大切な人の人生に影響を及ぼす位近い関係を持つなんて夢にも思っていないだろうな。しかもそれが今月の終わりにだなんて。

とは言ってもべらべらと喋るわけにはいかない。それを話すのは原作の直前にしておこう。それまでは軽く話し、後はお店のメニューや内装に軽く口を出しておこう。経験者の意見だから多少は聞いてくれるだろう。

「了解。彼の今後だけど、うーん。そうだな……。まず生活を安定かつ、継続出来る様にしていかないと……」

「現状、何か問題があるという事ですかっ？」

「いや、切羽詰まっている訳ではないから落ち着いてくれ。直ぐにとかじゃない。正確には家賃と生活費かなあ……？」

「家賃ですか？確かに高嶺さんは一人暮らしですが確か和史さんがお支払いをしているはずでは……？」

明月葉那が不思議そうに聞いてくる。想像以上に向こうの生活を把握しているんだな。でも残念。

「まあ、確かに父親が納めることになっている筈だな。それがきちんと振り込まれていれば……の話だけど」

そう。確か今月で4ヶ月目に突入するはずだ。

「え……。まさか、それって和史さんが滞納しているって事じゃ……」

そうそのまさかなのですよ。まあ高嶺昂晴本人も月末に幼馴染から聞かされて判明することだけだ。

「そう言う事ごと。けどこっちは催促されることは無いと思うから安心して良いかと思う。問題は生活費を稼ぐ宛てを見つけないといけない事かな？」

「ああ、それですね。確か前はコンビニのアルバイトをされていましたが辞められたのですよね」

「そうそう、店長が中々ダメな人でさ、ちゃんと連絡して休もうとしたら代わりを連れてこいとか言う人でさ。アルバイト生に社会人の責任を語ったりしたり……」

辞めた事情までは知らなかったのか、驚きと少し引いたような顔をしている。

「更にレジの金額が合わない和高嶺昂晴のせいにして来て、その分の補填を強制してこようとする人とかなんとか。何ともまあブラックバイトブラックバイト」

呆れるように頷きながら辞めた理由を話す。改めて考えると辞めて正解だったな、そのコンビニ。

「そんなバイト先が存在するのですね……。高嶺さんは辞めて正解でしたね。それに高嶺さんがレジのお金を盗むなんてするわけ無い



じやないですか。店長の人は見る目が無い人ですね」

少し怒りが籠っている声で店長を貶していく。大切な人がそんな扱いされれば誰でもそうなる。寧ろ少ない方だろう、性格の良さが滲みでているなあ……。

「まあまあ、辞めた店の事よりこれからが大事だから」

「そうですね。今後の生活のために今は次のバイト先を探しているという事ですか？」

「そんな感じだと思う。中々見つかってない様子だけれども……」

「幾つかのバイトを経験されていますし、直ぐに見つかりそうなものですが……」

「ま、それも心配はしなくて大丈夫そうかなあ。次のバイト先は安定すると思うよ？」

「そうなのですか？それは良かったです。……因みにどの様な仕事に？」

「あー……、キッチンに立っている感じかな？……厨房？飲食系のバイトだと思うけど……」

喫茶店とは言わずにポジションだけ伝える。間違えでは無いしこれで良いだろう。

「また居酒屋とかでしょうか……？でも安定していただけるなら一安心出来そうです」

安堵の表情をして息を漏らす。そこまで心配だったのかと驚くが彼女にとってそれほどの存在なのだろう。自分の命を削る位の……。

「直近は大丈夫そうなのは分かりました、ありがとうございます」

こちらに頭を下げて感謝を伝えてくる。いや、大した情報では無いと思うけど……。それにまだ聞きたい事があるはず、今のはその前準備に過ぎない。本当に気になるのはその先の……幸せを今回は掴み取れるかどうかだろう。

「別に大した事じゃないしな、これはあくまで占いに過ぎないから過度な期待と感謝はしないでくれ。それに、まだ聞きたい事があるのでは？」

顔を上げた明月葉那が少し目を見開く。恐らく今から聞こうとし

ていたのだろうか。

「はい……高嶺さんは、幸せになれるのでしょうか……？」

出会ってから一番の心配そうな、不安一杯の声で問いかけてくる。ああ、そんな顔されたら即答したくなる……。けど、それを証明するのは高嶺昂晴本人だ。此処で、はいと答えて大丈夫だと気を緩ませるわけにはいかない。原作にもバイトを断り死ぬエンドと、どのルートにも入らないノーマルエンドがあったはず。それは避けなければ……。個人的には明月栞那エンドが望ましいけど、そこは主人公の選択次第だろう。

「すまない、そこについては正直何とも言えない。様々な可能性があり、どうなるかは彼の頑張り次第になる。だから確証は出来ない」

「そうなのですか……。高嶺さん次第……」

不安を拭い切れない表情をしている。

ああもう。此処で元気付けないと男が廃りそうだ。ある程度安心させておかないと今後に影響しそうだしな！

「けれど、そこは不安にならなくて大丈夫だと思う……。今回は成人するまで過ごせているから前の様な結末には至らない、それに何より彼は頑張り屋だ。目標のためなら努力は惜しまない人だ。それは明月さんがよく知っているだろう？ 明月さんが望んでいる未来は彼自身が掴み取れるはずだ。こんな占いを聞かなくても分かっている結果だ」

不安げな顔をしている明月栞那の目を見てしつかりと伝える。寧ろ貴女が信じなくてどうする？ 何度もそう言ってきたのに……次こそはと。

「そうですね……。そうでした。高嶺さんなら大丈夫ですよ。なんせ諦めずに今回まで来ていますから。今回こそは幸せになつてくれます」

「その意気その意気。自分もその手伝いをしていく予定だからサポートは任せてくれ。ビバ・高嶺昂晴ライフプランと行こうじゃないか」

「何ですかその計画は……。ビバってヨーロッパ辺りの言葉の気が

しますが……」

細かい事は良いんだよ……。こういうのはノリと勢いが大事。空気を一変してくれるからな。それによく知っているなそんな事。詳しいのは車種だけだと思っていたが……。

「と、こんな感じで良かったか？結論は高嶺昂晴の頑張り次第って事だからこちらとしてはやれることは微々たる物だから」

「その通りですね、ありがとうございます。想像以上に悩みが解消した様な気がします。でも大丈夫なのですか……？澤田さんとしては……」

「そこは気にしないでくれ。ちゃんと自分の方で言える事とそうじゃないことは分けているつもりだから。ただ……、占いに過度に頼ったり、期待を寄せたりはしないで欲しい。勝手に期待して裏切られたなどの文句で問い詰めて来ることも。もしその様な空気を察した時点で二度としないと先に言わせてもらう。これは俺からのお願いだ」

少し思い詰めた表情と強い思いを込めた声で言う。

よくある作品だと、偉い人らが占いに頼り切り墮落する結末がほとんどだ。流石に二人がそうなるわけ無いがここは念のため、俺のせいで高嶺昂晴の人生が狂うとか目も当てられないしな。

「分かりました。それについては大丈夫です。澤田さん一人に頼り切るつもりはありませんから。ですよね？ミカドさん」

「ああ、あくまで相談程度に留めておこう。それだけに頼る人生など末路は見えているからな」

閣下はどうやら分かっているらしい。明月葉那も問題は無さそう。まあ心配はしていないけど、こう言っておく意味はある。ミカドさん辺りは勝手に行きついてくれそうだな、今の言い方だと。

「ありがとう。二人なら心配ないとは思いますが、俺の心の安寧の念のために確認しただけだから気にしないでくれ」

こうして人生初の人生相談もどきの時間は過ぎていくのであった。

「ちよつとお手洗いで席を外すから」

占いという名目（建前）の質問が終わり、しばらくするとそう言つて彼はトイレに向かった。

さつきと今と席を外すタイミングが随分と間の良い時に言つてくる。ここまで露骨だと私達が情報を整理する為に態々トイレと言つてることに流石に気づいてしまう。

それにしても先ほどの占い……。私が思っていた以上に彼は高嶺さんの事を知っていた。それもかなり細かい事まで……。まるでそれを見ていたかの様に……。

「ミカドさん……。どうやらミカドさんが言っていたことは本当の様ですね」

「そうだな。我輩も改めて確信に至った。奴は未来視の奇跡を持っているのだろう。奴自身は言つてなかつたが、恐らく未来だけではなく過去の出来事も見る事が可能のはずだ」

……。そう。占いと。先の事がわかると言っていたが、澤田さんは過去の出来事も話していた。『今回は前の様な結末には至らない』……。この言い方は以前の高嶺さんの魂の終わりがどの様だったかを知っている話しぶりでした。ミカドさんもそこで気づいたと思われ  
ます。

「彼は、私以上に高嶺さんの事を……。そして私の事を分かっています。じやなきやあのような台詞は……」

高嶺さんの幸せを願っていた。何度も繰り返し生まれ直して、そして次こそはと諦めずに生きようとする高嶺さんの魂を見守つて来た。そんな彼が努力の一つ二つ出来ないわけが無い。私の最初に言った

言葉を信じてここまで来た彼を私が信じなくてどうするのですか。

澤田さんに言われて気づきました。彼は私が高嶺さんを信じれると、大丈夫だと知っているから強く伝えていた。

心の中にあつた不安が減った気がします。澤田さんはもしかすると私が不安に思っていることを知っていたのかもしれない。

ここまで来ると、少し怖いですね……。

自然と苦笑いが出てしまいます。

「これ程の事が出来るとしたら……私が命に関わると言うのも理解できる。知られれば権力者が放っておくわけ無いからな。もしかすると、我輩達は奴にかなり無茶をさせているのかもしれないな」

確かにあののような奇跡を持っていることを知られたら世界中から引つ張りだこ所じゃ無くなります。彼の表情からはそうは思えなかつたのですが……。もしかすると本当に？

「分かっているとは思いますが、奇跡を頼り過ぎないように。奴は我輩達が過去の二の舞にならないと信じて話したはずだ」

「過去の二の舞ですか？」

勿論頼り切りになるつもりはありませんが、澤田さんは過去に同じことがあつたのでしょうか。

「澤田達也は恐らく、過去にこの奇跡が露見した事があつたのだろう。そして命を狙われたことがあるはずだ。今思えば、森で出会つた時に奴は此方に気づかれないように気配を殺していたが……。あまりにも上手すぎる。少なくとも一般人レベルとは思えん」

「それに宿でも気になつたが、体がやたら引き締まつていた。ある程度計算して鍛えないとあのような筋肉の付き方にはならないはずだ。推測するに……常に命を狙われていたのだ。逃走などの時の気配の消し方、接敵した時にそれを払えるように鍛えていたのだろう。生前奴はその様な日々を送っていた可能性がある」

ミカドさんの言葉に絶句してしまふ。

そう言われれば確かに思い当たる節があり、納得できる部分もある。もしも、その様な人生を送っていたのなら自分以外の人を信用出来なくなつてしまいます。そんな奇跡があるとしたら、人は欲に駆ら

れ、求めてしまう。

「それでも我輩達に話したのは文字通り、現時点でこの世界に頼れるのが居なかったからだろう。どこのタイミングかは分からぬが、我輩と栞那の事を視たはずだ。本来なら言うつもりは無かったのかもしれないな……命を狙われる可能性があるのだから」

「私達を、信用してくれたのでしょうか……？」

「多少はそれもあるだろう。だが、自分の利用価値を出すことによつて切り捨てられないようにしたのかもしれない。なにせ家族や知り合いが居るか分かっておらん状態だ。これは吾輩の憶測だがな」

「それはなんだか……澤田さんに物凄く申し訳ない事をしてしまったようですね……。頼れる人達から疑いの目を向けられてしまって、仕方なく話したことになります」

私は彼から高嶺さんの事を少しでも聞き出したいと思っていた事に今更ながら後悔する。

「起こしてしまった事は後戻りは出来ん。我輩も反省している。奴の秘密を無理に聞き出したのだ。その分可能な限り力になるしかあるまい」

「そう……ですね。彼の心配や不安を、今度はこっちが少しでも無くせるように頑張ります」

死神の仕事関係なく占いのお礼として返して行けるようにと、気持ちを入れなおした。

## 第9話：二人目との邂逅

トイレから戻ると、話し合いは無事終わっている二人がこちらを見る雰囲気が変わっていた。

「おや？今の話し合いで変な方向に行ってしまったのか……？多分、ミカドさんが大幅に勘違いしたかもしれないな。しかも重たい方面に……。」

「想定より暗い過去を持つている事になってしまった様だが、それはそれで良しとしておくことにした。突っ込まない。ここはスルー。」

「さて、我輩は少し出かけてくるとする。貴様の手続きやらで行かねばならぬのでな」

「そうだ。ミカドさんはこれから役所に行くのか？」

「先にコンビニからになるはずだ」

「じゃあ、自分の情報渡しておくから参考にして欲しい」

「明月葉那から紙とペンを借りて情報を書いていく。これで丸裸だな……。仕方ないけど。」

「あと、これは時間があるときに探して欲しいのだけど……。」

「そう言つて可能な限り知り合いの名前、住んでいた場所を書き、最後の両親の名前を書く。」

「これは……？貴様の知り合いや家族か？」

「そう。知っている中で書いてみた。存在してるのか生きているのか分からないから気の向いた時で大丈夫だから。あ、明月さんも見ていてくれ、何か情報があったら教えて欲しい」

「……わかった。これは我輩の方で調べておこう。知り合いの者にも頼む可能性があるが見せても良いか？」

「全然大丈夫。自由に使って欲しい。分かったら御の字位で居るか」

「そうだな、あまり期待せず待っていると良い。では行ってくる。夜までには戻る予定だ」

「閣下が店から出るのを二人で見送る。閣下……必ず見つけて見せ

る的な顔で出ていなくても……。可能性ゼロに近いのに。少し呆れた様子で入口を見ていると隣から声を掛けられる。

「澤田さんの両親は、どの様なお仕事をされていたのですか？」

「親？ああ、確か母親は病院に勤めていたはず。聞いた話だと医学部行つて医師免許取つたとか言つてたし。父親の方は専業主夫だったと思う」

「お母さんの方がバリバリに働いておられたのですね」

「そうだったみたいだな。けど父親の方もちよくちよく家を空けてどこかに出かけていたらしい。その間知り合いの叔父さんのお店に預けられていた感じかな」

「その方は、先ほど話されていた喫茶店を経営されている……？」

「そうそう、その人は母親の方と幼馴染？的な関係で昔からの交流だったみたい。お店での寝泊まりとかは小さい頃はわくわくしたもんだな。外泊するみたいないな気分で」

あの頃はお店に行くのは楽しみだったな……。小さな冒険みたいで。気付けばトラウマで行きたくない場所へと変わってしまったが……。

「あ、というか今日からの寝る場所どうしようか……。ミカドさんから何か聞いていたりとか？」

「ああ。そのことです。安心してください、ちゃんとミカドさんからお金を頂いていますから。住むところが決まるまで宿とかを取るよにと」

「それはマジでありがとうございます、最悪店で住み着かせて頂く覚悟だった」

それは本当に良かった。これからの季節で寝るのは少し堪えるかな。

「場所は澤田さんの自由に決めていただいて大丈夫です。とはいってもあまりお高い場所は難しいですが……」

苦笑いを浮かべてこちらを見る。いやいや、高級ホテルに泊まる気など無いから。店から近くて長期滞在プランが望ましい、一から二週間程度の。



「そんな場所は流石に……。駅から近くで長く泊まれる場所を探したいのだけど……。検索するためのスマホが……」

そう、現代における文明機器を持っていないのだ。勿論隣にいる機械音痴の死神さんも。

「お店を探して巡る訳にもいきませんもんね。そうだ、ミカドさんが使われているパソコンでどうにか出来そうですか？」

そうだった、確か閣下が帳簿の集計で使っていたのがあったな。ナイス。

二人で休憩室に向かいパソコンの電源を入れる。

「今更なのだが、勝手に使って大丈夫なのか？」

「はい。大丈夫かと……。ミカドさんには後で私からお話しておきますので」

それなら安心と、画面の操作を続けネットで駅近の宿泊プランを探していく。

「澤田さんはパソコン……。？の操作も出来るのですね……」

そんなに驚かれても……。現代じゃ割と必須になってきているやつだぞ。死神には必要ないかもしれないが。

「慣れれば誰でも簡単に操作出来るようになるから、そんなに難しい事ではないぞ？それこそ機械音痴の明月さんでもな」

「あ、あはは……。そう言ったものは疎くて……。全てミカドさんに任せっきりなんですよね」

「まあ、急いでする事でも無いしな。その内スマホやパソコンに触れる機会があつた時にでも誰かから教われれば良いし」

今自分が教える事でも無い。これは高嶺昂晴や他のヒロインとの親睦を深める為にとっておいた方が良いやつだ。

そう判断し、丁度いい宿泊施設を探すのであった。

「さて、今の時点で出来る手続きはこれくらいか……」  
コンビニや役所を巡り、必要な手続きを進めた。

後は申請次第、後日まで時間が出来ることだ奴の頼みの方を進めるとしよう。

そう思い渡された紙を見る。血族の名前と知り合いの情報が書かれている。知り合いと言っていたが住所、電話番号、名前、年齢、血液型、職場など細かく書かれていた。

知り合い程度の人間をここまで分かるものだろうか……。奴の奇跡の力かもしれないが。

知っている人物は居るか一つ一つ見たが思い当たる節は無い。最後まで読み進めているとおかしい事に気づく。

「これは、澤田の苗字……。奴の両親に当たるのだろう。だがしかし……」

そう、両親となれば知り合いなどより知っていることが多い。のはずだが、紙に書かれていた情報は名前と年齢のみだった。逆に不自然だ。

「両親には奇跡が適用外だったのか？ いや、それでもこれだけなのはあまりにも少なすぎる……」

様々な予測が出てきたが、ここで考えても仕方ないと決め、記載されている情報から調べていくことにした。

「ここが今日から泊まる場所か」

あれから泊まる場所を探して良い塩梅の場所を見つけた。店と駅から丁度いい距離にあった。その分値段は少し高めだが……。明月さんからは了承も出たから問題ないだろう。

「写真でも見たが、内装は悪くないな、ベット、冷蔵庫、クローゼットあり。風呂とトイレが一緒なのは仕方ないな。台所は無いから飯はコンビニか外食か……」

一応さつき当分のお金は渡された、宿代・食費・生活用品などに使ってくれと。

「うーん、足りなくなったら言ってくれとは言ってはいたが、出来る限りの節約は心がけよう。飯は多少削っても少しの間だから問題は無いし、日用品もアメニティで事足りるからな……。服とかは必要か。洗濯の為にコインランドリー行かないといけないしな」

流石にこの一着を着続ける訳にはいかないし何パターンかは揃えておこう。生活感を保つために必要経費としておかないと。それは後日買い出しに行くことに決めた。

「さてと、今日だけで色々あったが、悪い方向には進んでないと思う……。向こうの信頼もある程度は獲得できたと思うし……。ちよつと過剰に心配された様な気はするが……」

そう……。宿が決まった後、明月菜那は念のためと入口の前まで同行し店の名前を確認して戻っていった。何かあった時の為にちやんと泊まる場所の確認をしたかったのもあったかもしれないが……。

「ミカドさんが斜め上に行ったんだろなあ……。追々訂正出来たらしていこう。今はいいや」

デジタル時計を見ると到着してから30分近く経っていた。そういえば一息ついたらまた店に来て欲しいとか言ってたな。

「何かまだ話すことがあったのか？少し疲れているからゆつくりして行きたい所だが……」

もう暫くしたら出ようと決め少し休む。

また明日からの行動を考えつつ、結局出たのは更に30分後だった。

部屋から出て、店に着く。少し日が傾き始め時刻は夕方になっていた。

さて、明月菜那は居るとして閣下は戻ってきているのか？調査の方は片手間程度で良いのだけれども……あの様子では力入れて探そうだよな……。

どうしたものかと考えつつドアを開ける。中からは話し声が聞こえてきた。片方は明月菜那。そしてもう片方に視線を送る。

その瞬間から衝撃が全身を駆け巡った。黒髪ロングに紫色の髪飾り、恐らくバラか何かがモチーフだろう。隣には赤のコートと思われるのが椅子に掛けられている。間違いない……彼女だ。

「澤田さん、戻られたのですね」

明月菜那から声を掛けられ、声を掛けられた俺を確認する為にこちらを向く。目が合った。黄色の瞳、右目の目元にはほくろ。そしてピアス。記憶の中、画面の向こう側と変わらずの人がそこに座っていた。明月菜那で分かっていたつもりだったがそれでも驚きを隠しきれなかった。

「あ、こんばんは。彼が明月さんが話していた人？」

「はい。詳しくはこれから話すことになりましたが」

呆然としてしまう。そこに居たのは原作二人目のヒロイン。

——四季ナツメだったのだから。

## 第10話：憧れと夢の中

現在俺は、四季ナツメとお互いの自己紹介をするために向かい合っている。

俺の正面に四季ナツメ。隣には明月葉那の構図だ。

「それでは、お互いに自己紹介をしておきましょうか。先にナツメさんからお願いしますね？」

「どうやら進行役は隣の人がしてくれそうだ。有難い、二人だけだと無言が続きそうだし……。」

「私から？ええつと、私は四季ナツメ。このお店をオープンさせようとして色々模索中で、明月さんや閣下に協力して貰っている所なのけど……、こう言ってるけど、ちゃんと通じているで良いのよね？」

「はい。澤田さんにはある程度説明していますから問題ないですよ」

大丈夫、という意思を示すために頷いておく。

「では、次は澤田さんからお願いしますね」

「了解。とその前に明月さんは俺の事を何処まで話している？」

「名前と、お店に協力して頂ける事、死神の事ですかね？澤田さん自身の事はまだ話してないので……」

「分かったありがとう。じゃあ自己紹介するけど……俺の名前は澤田達也。明月さん達とは昨日知り合ったばかりなんだ。まあ死神関連で関わる事になったんだが、どうやら俺に起きている事象は初めてのケースみたいで、調査するなら近くに置いていた方が良いつてことになった。お店については俺自身が過去に実際喫茶店で働いていたこともあり協力できると思って申し受けた感じになる。これから宜しくお願いします」

軽く経緯を話し一礼をする。

「その……澤田さん？くん？なんて呼んだら大丈夫？」

「どっちでも大丈夫。好きな方で」

何なら蔑んだ目で犬呼ばわりでも快く受け入れよう。

「じゃあ澤田君で」

「承知。此方も四季君で良いかな？」

「そこは普通、さんとかじゃないかなあ……？まあそっちの方が呼びやすいなら大丈夫だけど」

冗談です。女王様とお呼びします。

「それで、澤田君は明月さん達の話聞いて理解というか、納得は出来たの……？」

此方が脳内一人ボケをしていると、四季ナツメから疑問が飛んでくる。ああ……まあ普通は一日でこうもすんなりと受け入れている様に見えるのが不思議に見えるのか。

「理解するのに時間が掛かった……というか、未だに整理し切れてはいないけど大丈夫かな。自分の身に起きたら嫌でも納得してしまいますから……」

「澤田君には何が起きたの？」

「その……、なんていうか不思議な体験を……」

困った顔をして明月葉那の方を見る。こういった事情は本職から話した方が良いだろう。俺が細かく話すと変に思われる可能性がある。

「それについては私から説明しますね。澤田さんの身に起きている事なのですが、経緯を話しますと……まず昨日、私とミカドさんがお仕事で訪れた場所で彼に出会いました——」

「——全裸で」

真面目な顔をして説明を始めたかと思いきや、いきなり爆弾を投下して来た。揶揄う様な顔でこちらの反応を見ている。

「まあいいー！最後の情報は必要だったのかっ!?見ろ！四季さんが啞然としているだろ！」

「いえいえ、必要ですよ？なぜ澤田さんが全裸で森の中に居たのか……。なぜ腰に葉っぱ一枚だけで私達の前に出てきたのか……。その原因の為には外せません」

相変わらず面白がって理由を並べる。四季ナツメの方を見ると、ドン引きして軽蔑した表情でこちらを見ていた。

そんな顔で見ないでくれ……。いやありがとうございます。もっと蔑んでください……。いやいや誤解なんですよ。

頭の中で謎の葛藤を繰り広げていると、説明を続けていく。

「まあこれについては調査中の部分もあるのですが、恐らくは澤田さんは生まれ変わった可能性が高いという閣下からの見解です」

「え……。？それって、転生的な意味合いの？」

「そうなりますね。何故森の中で生まれ直したまでかは不明ですが、裸だったのは仕方ありません。なんせ生まれたばかりだったのですから……。服などが付いてくるはずが無いです」

フオロー入れるのがもう遅いだろうが……。

四季ナツメの中での俺の印象は、全裸で葉っぱ一枚男で固定されそうだ。底辺も底辺だ……。悪くないかも？

「そこで明月さん達と出会って、拾ったって事で良いのかしら？」

「ざっくり言ってしまうとそんな感じですね。そして今に至る訳です」

いや、適當過ぎでしょ。四季さんもなんか納得しているし。あんまり勘ぐられないのは此方としても助かるけどさあ……。

「何となく、経緯は分かった。死神関連でここで働く事になったのなら……。これからよろしく」

「ああ……。よろしく頼みます」

なんだか疲れた気がするの……。は気のせいでは無い。俺の奇跡の話を出さないのはこっちの要領に任せるという表しだろう。その内話しておかないといけないな。タイミングを探っておこう。

こうして想定外の出会いと自己紹介は事なきを得た。いや大事故だったが……。

あれから少し雑談をしていると、四季ナツメが帰るとなりその日は解散となった。近くのコンビニで晩飯を買い、部屋に戻る。

「いやあ、この時期のコンビニの肉まんは犯罪的だな……」

封を開け、一口食べる……旨い。次にマスタードを掛けて食べる。

「これがまた犯罪的旨さなんだよなあ。至高の一品」

夕食を食べ終え、今日の事を改めて振り返る。

……今日はもう終わりだと思っていたが、まさか四季ナツメと出くわすとは……。明月菜那はこれの為に再度店に呼んだのか。嵌められた気分だが……。まあいい。今後関わって行くことになるからそれ込みで考えていかないと……。

色々考えることは多いが、疲れであまり頭が回らなくなってきた。ご飯を食べたことで睡魔も出てきたのだろう。

それにしても、改めて思うと明月菜那も四季ナツメも変わらず超絶美少女だったな……。他のヒロインも変わらざとなれば、それらと交友関係を持つていく高嶺昂晴はギルティというわけになるな。主人公だから仕方ないけど……。

くだらない事を考えている内に眠気が襲ってくる。欲望に抗えずベットに寝転がる。

四季ナツメかあ……。まさか出会う事になるなんて……。彼女の紅茶を飲んでみたい。今でもある程度は美味しいだろう。自分の目標の人としての腕を味わえる機会が訪れるとか最高過ぎる……。

自身が叔父の喫茶店で働く動機になったのは、原作の四季ナツメが推しとなり彼女の紅茶を入れるのを見て、同じように入れたいと思いつ行動を起こしたのだ。言わば憧れの人物という事になる。

駄目だ、眠すぎる……。風呂に入りたいが明日の朝にしよう……。もう無理。

睡魔との戦いに負け、最後の力を振り絞り……。リモコンで電気を消した。

また、明日から頑張ろう。高嶺昂晴がハッピーエンドを迎えられるように……。

そう考え……。遂に瞼を閉じ、寝ることにした。

目を閉じるその直前、視界の端に青い光が見えた様な気がしたが……。眠気でそれを気にすることは無かった。



「ん、んん……。あれ？ここは……。？」

目を覚ますと、そこに見えたのは部屋の光景では無かった。

「まてまて、また変な事に巻き込まれたのか……。？」

視界に広がるのは薄暗くもうつつすらと青く照らされている風景だ。よく見ると照らされているのは自分が居る場所だけで、他は暗い空間が広がっている。

ええ……。ここ何処だよ……。今度は森じゃなくて謎の場所に来たのか？けど……。なんだ此処は。

「あ、やつと起きたのね。全く……。昨日から寝てないから全然会えないかと思えば、今度はぐーすかと寝て……。待たされるこっちの身を考えて欲しいものね」

背後から突如声がして咄嗟に振り返る。

「そこまで驚いて警戒しなくても……。そんな反応されると結構傷付くわね……。？」

だ、誰だこの女性は……。？心配がしなかったというか、いきなりそこに出てきたの様な……。？」

今までに無い経験から、つい警戒心を出しまくってしまった。

「貴方は誰でしょうか……。？それに、ここは一体……。？」

分からない事だらけだが、目の前の彼女は自分よりこの状況を知っている様に見える。

「ここ？うーん……。なんて言えば伝わるのかしら。夢の中？人の記憶の断片と言うのかしら？」

謎の彼女は青く照らされている空間の中、この場所には似ても似つかない机……。学校でよく見かけるであろう教室机に腰を掛けながら、そう答えた。

## 第11話：一時の逢引

「ここ？うーん。なんて言えば伝わるのかしら。夢の中？人の記憶の断片と言うのかしら。」

目の前の彼女は俺の問いかけにそう答えた。

「夢の中…。此処が…？」

「そんな感じかしら、分かりやすく表現するとだけどね。」

辺りを見るが夢の中と言われても信じる事が出来そうにない。意識ははっきりとしている。体の感覚もある。夢の中特有の自分の体の制御が上手くいかないなんてことも無い。

「正確には違うと思うけどね。私も未だに全貌を把握出来ている訳じゃないから。勉強中よ。今はそうねえ…。貴方が寝ている間に夢の中にお邪魔して場を貸して貰っている様なものね。」

「此処は俺の夢の中という事でしようか…？」

こんな景色は現実で見た覚えは無い。記憶の整理とよく言うが見る景色は寧ろ新しい。

(目の前に居るこの人が誰だか知らないが…、この場を支配…、把握しているように見える。なるべく反感を買わないように穏便に話そう。)

「ま、今はそのような認識で大丈夫よ。これから追々知っていく事になるでしょうし。」

「これから追々…？」

こんな摩訶不思議体験が何度もあつてたまるかと頭の中で愚痴る。既にキヤパは溢れかえっている。

「そうね。今回は私が把握できている所を一緒におさらいしていきます。貴方がよくやるゲームのチュートリアル。物語序盤の説明回と考えてくれていいわ。」

こういつて彼女は机から降り、こちらに背を向けて歩き出す。

「付いて来て、実際に体験しながらの方が分かりやすいと思うから。」

(付いて来てって…、どこに行く気なんだ道なんて無いし地面が見えるのはこの場しか…。)

付いていける道すらないのと思い、言い返そうとすると彼女の歩く先に徐々に道が形成されていく。バラけたパズルが組み合わさるように道が出来ていく。

「ほら。ぼーっとしないで、早く来なさい?」

「あ、ああ。ちよつと待ってくれ。今行く。」

もう頭が追いつきそうにないが今は従った方が賢明だろう。後ろを付いていくが自分たちが歩いている道以外は何も見えず暗闇だ少し足を踏み外すと奈落に落ちていきそうな感覚に陥る。

(下は見ずに真っ直ぐ前を見た方が良さそうだ…。)

少し歩いていると気持ち的にも多少余裕が出来てくる。周囲を改めて確認すると、暗闇だと思っていた空間には無数の光の点があった。

(星空…みたいに見えるが、こんなに綺麗に見える場所なんて見たことないな…。相変わらず明るいのは周辺だけだけど、…。)

ふと、後ろを振り返った時、先ほどまで歩いて来ていた道がなくなっていた。最初から無かったかのように。

「どうしたのって…。ああ、道が無くなっていることに驚いているの?」

俺が驚いている事に気づいたのか、こちらを向く。

「夢の中って曖昧じゃない?それを維持するのって大変なのよね…。ほら実際に夢でも記憶を保つの大変なの。それだったら必要無くなったら消せば良いかと思つたのよ。」

その大変さは分からないが、感覚は何となく理解できる。

「じゃあ落ち着いてきたことだしそろそろ始めましょうか。」

どうやら俺が落ち着けるまで散歩をしていたらしい。有難い気遣いだこと。

「貴方が居るこの空間は人の記憶…。その断片を集めて読み解くための場所…。言うのかしら。簡単に言う与他人の思い出を覗き見することが可能な場所ね。」

最後の説明で非常に分かりやすかったが、まるで変態扱いだ。

「人の記憶を見る…。思考盗聴…。」

「間違っではないのだけれども…。今回は私の記憶で代用しておくわね。体験した方が理解しやすいから。」

すると彼女は振り返り、左側を向く。少しすると奥に青い光が集まり、次第に大きくなっていく。

「あれは…?」

「うーん。最初だから少し時間が掛かるわね。もう少し効率的に出来るようにしておくわ。」

暫くすると何かが見えてくる…。そこに見えるのは赤ん坊…? 誰かが上から見下ろしている景色だった。

「あら、いつ見ても可愛いわね…。」

隣でそう反応するという事は…、

(え? 貴方のお子さん? いやどう見ても高校生位にしか見えないのですが…。)

「も、もしかしてなのですか…。この子は貴方の?」

「そうよ。とっても可愛いでしょう?。あの頃は行動全てが愛おしかったわね…。まあ今でも可愛いけど。」

景色の赤ん坊を見ている彼女はとても優しい顔をしていた。心の底から愛おしく、愛していると伝わってくる。

「見たところ学生に見えるのですが…。随分と若い内に産んだのですね。」

「え? ああ…。この容姿? 違うわよ。これは身体が一番元気な状態。全盛期の時の姿をしているだけ。実際に生んだのはもつと後よ。」

「そうだったのですか…納得しました。」

頭の中の疑問が解消されると今度は反対側に景色が見えてきた。

「今度は…、何かを勉強している所…?」

次に見えてきたのは必死に参考書などを読み書きしている場面だった。

「これは、恐らく私が高校受験の合格の為に頑張った時ね。これと決めて思い浮かべた訳では無いのだけれども…、どうやら記憶の中で感情とかが強く出た時の表れやすいみたいね。」

「こんなに必死になっている所を見られるのは嫌ね。次に行きましよう。」

そう言っつて景色は消え、次が現れる。

(今度は…、ん？暗いな。夜なのか…？誰かの部屋みたいだが。ベットには誰かが寝ているようだな。気づかれないように近づいているのかこの様子だと。)

目線は次第にベットに近づき、遂にベットに乗る。寝ている人はまだ起きていないようだ。目線の主は寝顔を暫く見つめ、徐々にその距離を詰めていき…。

すると突然景色が消えた。隣を見ると頬を赤らめ少し気まずそうな表情で顔を逸らしていた。

(察するに今のは…。夜這いなのだろう。寝込みを襲うとはこの人中々…。)

「ま…まあ、大体こんな感じかしら。理解できたかしら？」

さっきの事を流そうと話を進めようとしているので突っ込まないでおく。藪蛇を突きたくない。

「何となく分かってきました。その人物の特定の記憶。特に思い出深い出来事を見る事が出来る…感じでしょうか。」

「そうね。まだ序の口だとは思いますが今分かるのはこれ位でしょうね。」

目の前の人もまだ把握しきれなくて顎に指を当てながら考えていた。

暫くすると後ろの景色に光が射し始める。

「あら、もう目覚めるのね。丁度いい事だし今回はここまでとしましよう。」

そう言っつて彼女はこっちを向く。

「何かと気になることがあるでしょうけど、それは次回にしてそろそろ終わりとしておきましょう？」

「また次がある。で良いのでしょうか？」

「恐らくね。貴方がこの世界をちゃんと謳歌しようとするならば、  
だけど。」

次第に光が強まり。目が開けられなくなっていく。

「それじゃあ、また会いましょう。次も楽しみに待っているわ。」

彼女の声を最後に世界が光に覆われた。

アラームの音に目を覚まし時計を見ると、10時を指していた。

「やべ、寝過ぎした。いや別に待ち合わせとかしてないけど、こんな時間まで寝てしまうとか…やっぱり昨日は疲れていたのか。」

よくよく考えると昨日まで寝ていなかったのが当然でもあった。

「今日は朝からお店に明月さんと四季さんが居るって言ってたし、  
早めに合流しておかないとな。今日メニューについて話し合いたいとかなんとか。」

まだ少しぼんやりとしている頭で昨日話していた内容を思い出す。

「その前に昨夜入れなかった風呂に入って、さっぱりしていくか…。」

備え付けのバスタオルを手に取り、浴槽へと向かうのであった。

店に到着し、ドアを開ける。店内には既に明月葉那と四季ナツメがおり、何か話し合っている様だ。

(恐らく昨日言っていたメニューについての相談なんだろうな。)

「おはようございます。すみません寝坊して遅くなってしまいました。  
た。」

「澤田さん。おはようございます。全然大丈夫ですよ、寧ろ何事も

無くて安心しました。」

「おはよう。昼前になっても来ないから明月さんが心配し始めてたから丁度良かった。それにしても大層な重役出勤。まあ時間の指定はしていなかったのけれど。」

（いや、自分でも驚いていますよ。まさか朝に起ききれないなんて…普段ならありえないのに、やっぱり疲れていたのかね？）

昨日まで異常事態の連続だった。流石に疲れも溜まっていただろうと判断した。夢の事はさっぱり忘れていた。

「はは…、その分頑張つて役に立ってみせますよつと。今日は店のメニュー案についてで当たってる？」

「今ナツメさんと話していた所なんです。ドリンクの案を幾つか出し合っていました。」

机に置いてある紙に目を通す。紅茶の種類が幾つか書かれており、他にもパスタ、サンドイッチ、ご飯もの。更に下にはデザート類も書かれていた

だが…、喫茶店というのにコーヒー類は全く無い。これはもしかと思ひ、聞いてみる。

「お二人方…、喫茶店なのにコーヒーがメニュー欄に無いのは…。」  
そんなわけが無いのは分かっている。察するに飲めないからどれが良いのかよくわからず後回しにしているのだろ。

「なるほど、飲めない、もしくは美味しさが分からないから書いていないだけなのか。」

俺がそう言うのと四季ナツメは目を逸らし、明月葉那は恥ずかしそうに笑っていた。

「お恥ずかしいながら…。飲むこと自体は大丈夫なんですけど味の良し悪しの判断ができなくて…。澤田さんは…？」

期待した目をこちらに向けてくる。ああ、俺が飲めるなら味の評価を頼みたいのか。飲めないことも無いが…。

（あれ？これは確か、原作で高嶺昂晴が頼まれることでは無かったっけ？）

考えてみると原作で働く決断をした日にコーヒーが飲めるかの話

が出ていた。

（俺が飲めるかどうか位でどうこうなるとは思えないしな…。手伝うと言った手前だしこゝは協力しておかないと）

「得意ほどではないけど…。味の判別位なら出来るぞ？これでも店で働いてたからな。」

「本当ですかっ！良かったです。それならコーヒーの方もある程度纏まりそうですね。」

「因みにどれにするかとかは決まっていたりするのかわ？」

紙には紅茶は、ダーズリン、アールグレイ、アッサムと書いているがコーヒーは何も書かれていない。

「それが…。なにが良いかすら分からなくて…。ナツメさんとどうしようかと悩んでいたところなんです。」

そこで救世主が来たとなる。逆にタイミングが良かったようだ。

「澤田君がコーヒー飲めるならメニュー決めをお願いしたいのけど、頼める？」

「期待させない程度には頑張ってみるから任せてくれ。」

「何、その中途半端な返事。」

「失敗した時の保険だ、気にしないでくれ。それと一応二人にも可能な限り飲めるように努力して欲しい。店員が味が判らないでは話にならないと思うから。」

自分だけ飲めても意味が無いため二人も巻き込む形にする。

（と言っても明月菜那はいずれ飲めるようになるが、四季ナツメはなあ…。子供舌だから苦い物無理だし。そこも可愛い所だから許す。）

「コーヒーについては承った。紅茶については四季さんに任せておくよ。明月さんは出来ればこっちのサポートをして欲しい。」

「了解。味見とかして欲しい時はお願ひするからよろしく。」

「私の方も大丈夫です。それで澤田さん、サポートと言っても具体的に何をするのでしょうか？」

「そうだな…。まずはどのコーヒーに選ぶか決めないといけないけど俺も正直わかっていない。だから複数買って飲み比べとかしてみ



たいのだが？」

「確かに…、産出や物によって違いがありそうですもんね。試してみるのはありだと思います。」

「近くにそれ専門店がないか調べてみたいのだけど…。」

期待を込めた目で四季ナツメを見る。何を隠そう、この場には検索ツールが使える機器を所持しているのは一人だけなのだ。

「え？、私に調べろって事？」

「残念ながら…、その通り。自分も明月さんも検索する手段を持っていないという衝撃の事実がありました。」

「この現代社会でどうやって生きてきたんだが…。」

呆れながらも携帯を取り出し検索をし始めた。

「明月さんはともかく俺は所持しているのは無理があるぞ？なんせ、推定年齢3日目だからな！スマホはおろか金や服すら無かった始末だった。」

「死神には今まで必要とを感じる時がありませんでしたから…。」

「はいはい。分かったから。あ、近くにあるみたい、といっても数駅隣の場所にだけ。」

横から検索結果に出ている店を見る。そうやら大型ショッピングモール内にあるらしい。

（原作で何度か出ていた近くの場所には無さそうだな。少し時間はかかるが行ってみるか。）

「まあ、そこまで遠い場所でも無いし、明日辺りに行ってみようかと思いが…？」

二人はどう？と聞くように視線を向ける。

「ごめんだけど、パスで。明日は朝から大学の講義があるから。」

「それでは私がお供いたします。サポート役なので。」

「おっけい。四季さんは大学が終わって時間があつたら顔出しに来てくれ。飲み比べしてみるから。」

「分かった。飲めるか分からないけど…。」

「いやいや、無理に頑張ろうとしなくて良いから…。最悪横で見ているだけでも十分だからな？」

申し訳なさそうに言う四季ナツメにフオローを入れつつ、明日の予定と買う物について話すのであった。

う(あ、予備の服も明日コーヒーが終わった後についてに買っておこう)

## 第12話：来客

「……ん？……あー、朝か…、起きるか。」

カーテン越しの太陽の日差しに目を覚まし軽く体をほぐす。今日は寝坊せずに自力で起きた様だ。

「ってまだ約束の時間には余裕ありまくりだな、と言っても二度寝は危険だし…。」

時間を潰そうにもすることが無いから暇になってしまう。

「取りあえず、シャワー浴びてから考えるか。」

寝ぼけた頭を覚醒させる為に風呂場へと向かった。

(さて、朝飯の為に部屋を出たが…。)

結局することが無くコンビニで朝ご飯を求め、手軽なものを買べながら自然と足は店に向かっていた。すれ違う人は大体が出勤に向かっている人であろう。その中で歩いている自分に謎の優越感を感じていた。

(お勤めご苦労様です。私はこれから女の子と買い物の予定をしているんですよ…。ま、それも仕事の一環なんですけどね。)

(駄目だ。暇すぎて詰まらない事を考えてる。これなら店でメニューについて考えた方が有意義だ。よし、店に向かおう。)

店に向かうと入り口前で閣下と遭遇した。

「おはようございます、閣下はこれからどこかへ？」

「む？澤田達也か。これから用事で少し出かけることになったのである。帰るのは夕方頃になると思う。そっちは葉那との件か？それにしては待ち合わせの時間より随分と早いようだが…。」

「暇を持て余していたから、早めに来てメニューについてももう少し詰めておこうかと。店で待たせてもらっても大丈夫？」

「ああ、既にかけて入るからな。好きに使うと良い。メニューの件は決まり次第こちらに連絡を頼む。仕入れやら価格を調査せねばならんからな。それ以外は任せておく。」

「了解。恐らく今日はお試しで飲む予定だからからすぐ決まる訳では無いと思う。」

「わかった。それでは吾輩はそろそろ行ってくる。」

「お気をつけてな。」

閣下を見送り、店に入る。中には既に明月榊那が居た。

「澤田さん、おはようございます。どうかされましたか？昨日決めた時間にはまだ余裕はありますが。」

「おはようさん。いや暇だったからな、店で待ちながらメニューについて色々試しておこうかと思つてね。」

「それはそれは…、仕事熱心な事で。部屋でゆっくりしていても大丈夫でしたのに。私の方もミカドさんを見送つて時間が空いたことですし準備してきましようか？」

「なんか急かしたみたいですまないな。席でゆっくりさせてもらうから急がなくて大丈夫だから。あと紅茶とかコーヒーを練習がてら使かつてみたいんだけど…？」

「コーヒーの方は多くはありませんが、紅茶の方は確か今はナツメさんが持つてきてた紅茶の余りならまだあつたと思いますからそれを使いましょうか。」

「ポットとかの道具は勝手に使つても大丈夫？」

「はい。大丈夫ですよ。一応一通り物は揃つている筈です。」

「了解。場所さえ教えて貰えれば後はこつちで適当に入れとく。」  
明月榊那から場所を聞き、飲むために必要な道具を出していく。

(ええと、ポットとカップ…今回は砂糖やミルクは要らないとして、茶葉は…あつた。計量のスプーンもちゃんとそれ用の奴なのだな。)

以前にも店をやつていたという事もあり道具自体はそれなりに充実していた。

「茶葉は…、多分ダージリンか？これは…。結構量余っているな。」

缶の蓋を開け中身を確認する。こんだけあれば多少使つても大丈夫だろう。

「朝から優雅な時間でも満喫しましょうかね。」

独り言を呟きながらヤカンに水を入れ準備を進めて行く。

暫くしてからお湯が沸いたのを確認し、ポットに移す。

「あ、ポット温めて無かったわ。……まあ今回は練習なんでノーカ  
ンにしておこう。」

重要な工程を省く、割と適当であった。

なるべく茶葉が動く様に高さを取り、勢いを付けて入れる。冷めな  
いように待ち時間はティーコースを被せ放置。

「最近のカバーは見た目にも気を使ってニット製のオシヤレなのを  
使っているらしいがこののは普通だな。」

特にデザインは無く、シンプルに丸い型のもだった。今の店の雰  
囲気には合ってはいる。あくまで今の雰囲気だが。

時間が空いたためティーポットから意識を外すと、席に座りこちら  
の様子を面白そうに見ている人が居た。いやさつきから視界にはち  
らちらとは入っていたが。

「明月さん……、なにか楽しい事でもあったのか？こつちを見ている  
だけの様だが。」

「いえ、手慣れていると感じただけです。後は人が淹れている所を  
見ているのは飽きませんから。」

「そつなく出来るように練習はしたからなこれでも。」

懐かしいあの日々……紅茶を教わりに叔父の店に行つたはずなのに  
結局始められたのは半年過ぎた頃だった。

(やめておこう。トラウマを思い出す必要は無い。)

「どうされたのですか……。急に死んだ目をしていましたけど……。」

「気にしないでくれ、思い出で振り返っていただけだから。それよ  
り明月さんも飲む？と言つても適当だから味が変かもしれないがと  
思うけど。」

「いいんですか？それと気になったのですが、味が変わるのは、その  
……蒸す？時間で変化するのでしょうか？」

「多少はね。今淹れた茶葉は大きめの奴だったから蒸らす時間は少  
し長くなると思う。小さい茶葉だったら4〜5分程度で紅茶になる  
と思うけどな。」

大体そんなもんだと思う。個々の差もあるだろうけど。

「個人的に長く置いた方が濃いような気がしているけど実際には言うほど強くなってないらしいし、それなら茶葉を変えた方が早いと思う。」

今回はダーズリンだしクセもそんなに無く飲みやすいだろう。

「紅茶にも沢山種類がありましたし、選ぶのが大変そうですね。」

その心配はしなくて大丈夫だろう。紅茶はダーズリン、アールグレイ、アッサム。この3つは原作でも出ていた。これらを選んでおけば問題は無いと思う。

(アイスティーとミルクティーに向いてるのもあることだし有名な3つを言っておけば外れはしない。)

「よく聞く有名な奴を3つ位選んでおけば大丈夫だと思うが。」

「澤田さん的にはどれが良いですか?」

「ダーズリン。アールグレイ。アッサム。この3つが取りあえず候補だと考えている。」

「……因みなのですが、それは経験から来る判断ですか?それとも……」

変な勘繰りをして来る。

「今回はどっちもと言っておくよ。さっき言った3つは王道だし外れないからな。」

そうこう話している内に時間が経ち、ポットに被せていた布を取り、カップにストレーナーを置き余計な茶葉が入らないように注いでいく。2つ目のを淹れ終えて自分のを味見する。

「うーん。まあ悪くは無いのかな? 及第点だと思う。」

味は大丈夫と判断してもう一つを差し出す。

「お待たせ致しましたお嬢様。ダーズリンのストレートでございます。お熱いのでお気を付けてください。」

音を立てないように丁寧に置き、それっぽい接客対応をする。

「ありがとうございます。って、急にどうしたんですか執事の真似をされて。」

「いや、どうせ提供するならそれらしい振る舞いした方が雰囲気味

わかるかと思つてな。」

「私にそれを求められても難しいのですが…。」

「大丈夫。客にそんな対応を求めることはない。好きに飲んでくれ。」

「それじゃあ頂きますね。」

一言断りを入れ紅茶を飲む。少し驚いた顔をしたから口には合つたらしい。

「どう？まずくは無いは思うけど。」

「いえ、全然美味しいですよ。少し驚きました。」

「あ…、でも必要な工程を少し省いてしまっているから味というか紅茶としての楽しみは落ちていると思う。」

「そうなのですか…？このままでも十分と思うのですが。」

「個人的に楽しむなら俺はこのままでも良いけど、客に出す奴はなあ…。完璧にしておかないとな。」

しっかりとしていないのだからか少し罪悪感を感じる。

「今回は練習がてらだからこれで妥協してくれ。その内改めて淹れるから。」

「分かりました。楽しみにしておきましたね。」

次の約束を取り、少しの間、紅茶の香りの中雑談を続けた。

カップが空になったのを頃合いに明月菜那はそろそろ準備をする  
と席を立ち片付けをしようとするが、こっちでしておくと言いつロア  
から追い出した。

「さつとと、来るまでに片付けでもしておくか。」

飲み終えたカップを厨房まで持っていこうとした時に入口のドア  
が開き、チャリンと音が鳴る。

(ん？四季ナツメが来たのか？でも講義はまだあるはずだが。)

不思議に思い、入口に向かう。そこに立っていたのは高齢の女性

だった。

「あら？ナツメちゃんが居ると思ったのけれど…、あなたは新しく来た人かしら？」

（この人は…、なるほどね。大家さんか。しかし今のタイミングでも店を見に来るとは…。）

確か原作では高嶺昂晴が来た次の日と、店の許可を判断してもらった10月の2回だけだったはず。それより以前の情報は無かった。

（恐らく四季ナツメの様子を見に来たのだと思うけど生憎今は大学なんだよなあ。）

明月葉那は準備中で呼び出すわけにもいかないので対応をする。

「初めまして、今月頭からこのお店を開くために協力する事になりました、澤田達也と言います。お探しは四季さんですか？」

「そうねえ、けど、この様子だとお店には居ないようね。」

「今は確か大学で講義中ですのでまだしばらくは戻られないかと…。」

「そうなのね。なら仕方ないわね。様子を見に来ただけでもまた今度にしようかしら。」

（やっぱり様子を見に来たのか。それにしても折角来たのにもう帰るのか。念のため確認しておきたい事もあるし一杯位飲んで行ってもらおう。）

原作では店を開こうとする四季ナツメを心配し何度も足を運んでいたはず。学生にこの商売は難しいと思ひ諦めさせようとしていたが…。

「折角来られたので紅茶でも入れましょうか？自分で良ければですが。」

「あら？いいの？…そうねえ折角だし一杯だけご馳走になろうかしら。」

そうやって大家さんは席に着く。

（さて、ここからは接待だ。聞きたい事もあるし真面目に行こう。）

「紅茶は何か希望はありますか？おすすめはダーズリンになりますか。」



さつきまで飲んでいた茶葉だから問題はない。因みに他のだと探す所から始まるため、おすすめをしておく。

「特に希望はないからそれを頂こうかしら。」

「分かりました。少々お待ちを、直ぐに淹れてきます。」

大家さんから離れ紅茶を入れる準備をする。先ほどは適當だった  
が今回は人に出す用だ。手抜きせずに真面目に進めて行く。

(まさか大家さんに淹れるとはなあ…。てかさつきからこつちを見ている、居心地悪いぞ。)

何かチェックでもしているのかこちらの工程をじつと見ていた。

「お待たせしました。ダージリンのストレートです。お熱いので気を付けてください。」

居心地悪い中、ミスなく淹れ終え紅茶を持っていく。

「ありがとう。それじゃあ、いただくわね。」

そういつて紅茶を口にする。さつきの明月葉那には無かった緊張感が少し出ていた。

「あら？美味しいわね。この紅茶。」

「ありがとうございます。それなりに練習をしてきているのですが、お口に合い安心しました。」

「以前にもどこかのお店で働いていたのかしら？」

「そうですね。叔父が経営していた店で働かせていただいています。」

「だから慣れていたのね。」

更に一口紅茶を口にする。沈黙が訪れる。こつちから仕掛けるべきだろう。

「少しお聞きしたい事があるのですが、良いですか？」

「あら、もしかしてナツメちゃんの事かしら。」

「そうですね。大家さんとしてはやはりお店は諦めて欲しいと考えていますか？」

「そうなのよね…。正直大学に専念して欲しいと考えているわね。」

「まあ、そうですね。売れる儲かるか分からない水商売ですし、まだ大学の方が安定して大家さんも安心できますしね。」

「貴方は、お店を開く事に賛成ではないのかしら？」

不思議そうにこちらに聞いてくる。今の会話だと俺も大家さんに近い考えと思っただのだろう。けど、店をオープンするのは絶対だ。賛成も反対も無い。

「今の状態なら反対ですね。このままだと失敗すると予想しています。」

「それなら、貴方からも説得して貰えないかしら？お店を開くのは難しいって。」

それは違う。あくまで今のままならだ。

「すみません。私としてはこのお店を開くつもりで動こうとしているので説得は出来ません。」

「どういふことかしら？失敗するのに開こうとするの？」

「それは今のままの状態でお店を開こうとしたらですよ。それなら、開店が可能となるように変われば良いのですから。」

「貴方はそれが可能だというのかしら？お店を開こうとするのは簡単ではないのよ？」

「分かっています。今からお店を開く為には必要なものが足りない過ぎています。けど四季さんは貴方に味で合格が出ると勘違いしてしまっています。そこからまずは正していけないと思っています。勿論味は大事ですが、問題はそこでは無いと。」

「このお店に必要なことが貴方はわかるというのかしら？」

「そうですね。これから何が必要で何を留意しなければならぬか。既にオープンするまでの計画は一応私の頭の中で作っています。」

「なので大家さんに頼みごとがあります。」

「…何かしら？」

「四季さんはこのお店を開きたいと思っています。私もそれには賛成です。このようなお願いは失礼なのですが、様子を見る期間を10月まで待って欲しいです。」

「それは10月までにはお店を開けるからという事なの？」

「はい。自信があります。とは言いつても大家さんも信用は出来な

いと思えますから、何度か確認していただくことになると思えますが。」

「それは今までと変わらないから問題は無いわ。」

「ありがとうございます。恐らく本格的に動き出すのが今月末、9月29日からになるはずですよ。そこから必要なものを揃えてお店が開けると判断出来たら、大家さんを招待します。その時に承認の可否を出して頂ければ…と考えています。」

「貴方はこの店をどう変えようと考えているのかしら？」

「まだ確定では無いのですが、まずは人を増やします。それからお店の雰囲気も変えたいと考えています。今の流行や時代に合ったお店を出して行かないと思っっていますから。」

「それに合わせてメニューも色々工夫していきます。狙う層や年代を決めて話題として広がるように。」

「それはナツメちゃんには話しているの？」

「いえ、まだこの話はしていません。彼女がご両親のこのお店を大事にしたくて変化を好んでいないのは承知しています。けどこのままでは駄目だと考えていますので…、彼女はなんとか説得して見せます。」

好き勝手言っているが、全部原作知識の内容だ。四季ナツメも変わっていく店にこのままでは駄目だと気づき、決意する。これから起こると分かっているからこそその言葉だ。

「貴方のその自信は以前にも働いていたからこそ来るものなのかしら？」

「多少はそれもありますが、私自身このお店に可能性を感じているんです。本気で開きたいと思う位には。それと…、四季さんの想いを、夢を叶えてやりたいという気持ちがありますので。」

ほとんど後者が理由だろう。この店は彼女の夢そのものなのだから。

「そう…取りあえずは分かったわ。まだ時間はあるし、元々ナツメちゃんともそう約束していたもの。これから様子を見に来るわ。」

「ありがとうございます。その時はまた紅茶を淹れますので是非来

てください。」

そう言うのと大家さんは紅茶を飲み切り、席を立った。

「それじゃあそろそろ帰るとするわ。紅茶、ご馳走様。」

「いえいえ、お気をつけてください。」

チャリンとなりドアが閉まる。

(やはり大家さんは心配をしているだけの様だ。余計なことをしたのかもしれない。まあ、どの道することは変わらないのだけど。)

そう決め、席に戻り紅茶を片付けようとする。……が、その前に。

「盗み聞きとは感心しないな明月さん。様子見しないで出てきてくれても良かったんじゃないか？」

大家さんと話していた途中から察していた気配にそう問いかけた。

### 第13話：記憶の残滓―大家―

「盗み聞きとは感心しないな明月さん。様子見しないで出てきてくられても良かったんじゃないか？」

そう問いかけると奥から苦笑いを浮かべながら明月葉那が出てきた。

「あらら、バレていましたか。」

「一瞬姿を出して引つ込んだのを見たからな。」

「すみません、何らや真剣なお話をさせている様でしたので、タイミングを伺っていました。」

まあ、こちらの話を聞かためと言いだと思いが、聞かれても大きな問題にはならないと思う。聞かれてもあくまで頭の中で考えている予定と言えば済む話だからな。

「それなら仕方ない。確かに人が話している時は入りにくいよな。」特に追及はせずに片付けの続きをする。ポットを持ち上げた時自身が半分ほどまだ残っていた。

勿体ないと思い、新しいカップに淹れて飲む。

（やはり先ほど淹れた紅茶よりおいしく感じる。適当にすると味はしつかり出ないな。）

自分で味を確認し、片付けを再開しようとした時、視界に一頭の蝶が飛んできた。

「明月さん、この蝶は…。」

「はい。恐らくは大家さんののだと思われます。ちよつと待つてください。今回収しますので。」

明月葉那が回収しようとしている横で飛んでいる蝶がこちらに近づいてくる。いつ見ても幻想的な色と見た目だと思い、何気なく手を蝶へと持つて行った。

「あつ、澤田さん。それは。」

明月葉那が何かを言おうとしたが、その前に指が蝶に触れた。

「……え？ここは……？」

気が付くと見知らぬ空間に立っていた。先までステラの店内に居たはずなのに、今は夜の様に暗い場所にいた。正確に言えば薄らと月明かりが照らしている様な明るさはある。

「俺は確か蝶を触って……。」

訳が分からずに周囲を見ると少し先に一か所だけ明るく照らされている場所があった。そこには高校生ほどの少女が机に座っており、誰かと話している様に見える。

（彼女は一体……。それに誰と話しているんだ？）

不思議に思いそこへ近づくと、お互いの距離が近づくと向こうもこちらに気づいたのか、顔を向け少し驚いた表情をした。

「あら？もう来たの？想定より随分と早く記憶に触れたのね。」

「どうやら向こうはこっちの事を知っている様な話し方だった。

「私の事を知っている様に見えますが、貴方は一体誰なのでしょう……？」

「覚えていないの？まあ仕方ないけどね。夢の中の出来事だったし、起きたら大半は忘れてしまう事だもの。」

「以前にも会っているのですか？それに夢……？」

「そうよ、確か一昨日から昨日の朝までの夢の中でね。思い出してこない？ここで私の記憶と一緒にみたのだけでも。ほらチュートリアルのなのを。」

目の前の少女に言われ頭の中に何か引っかかった。

（そう言われれば、ここと似たような夢を見たような。）

そう思った瞬間、紐が解けるように次から次へと記憶が蘇ってくる。確かに以前にも会っている。

「その顔はちゃんと思いい出せたようね。面倒な手間が省けて安心したわ。」

「しっかりと思いい出したよ。気になったのだが、さつきまで誰と話していたんだ？誰か居る様には見えないのだけど……。」

「それはね、彼と話していたの。」  
そう言つて、右肩に乗っていた蝶を指す。

「青い蝶、誰かの記憶とかなのか？」

「違うわ、ここに居るのは私の大切な人の魂ね。暇だったからお喋りしていたの。」

「大切な人の魂が……。」

「そう、愛しい人の……ね。」

そう言つて彼女は優しく蝶に触れる。蝶もそれに答えたのか羽を動かした。しかし、魂になつていてという事は死んでいる事を意味する。

「つて、私の事は今は置いときましょう。今回は触れた記憶について解説していきましようか。」

彼女が手を前に出すと、奥で光が集まり、以前の様に何かが見えてくる。

「これは、高齢のおばあちゃんかしら？……なるほどね、お店の大家さんだったの。」

そこには今より少し若い大家さんが何やらお店で話し合つてるのが見える。次第に景色が切り替わり、今度はまた別の人と話している様に見えた。

「恐らく、このお店を貸し出したのでしょね。それが上手くないかなくて閉店。また別の人に貸し出している感じかしら。」

何度か似た景色が続く、次第に大家さんから諦めの念が出ている様に感じた。最後は四季ナツメと話し込んでいる場面だったが、その時は既に諦めかけており、期待を持っていなかった。

すると光は弱まり、散つて行った。どうやら見えるのはここまでの様だ。

「大体把握できたわ。この人はもう期待をせずに諦めてしまつているのね。何度も失敗を見ているから。だから今回も駄目だと思つていると。」

「確かにそうだな……。大家さんは四季ナツメに断念して欲しいのだろう。けど、主人との思い出のこの店を何とか形として残したい。そ

んな葛藤があるはず。」

「そうね…。けど、あなたはお店を開くつもりなんでしよう？今後このお店で働く人達の為に。」

「それは勿論。このお店を開かないと始まりにすら立てない。止めるつもりはない。」

というよりか俺が何もしなくても店は開くだろう、これは個人的な意見になる。

「なら、特にいう事は無いかしら。頑張つて青春を取り戻せることを期待しているわ。」

それをするのは高嶺昂晴であつて彼では無い。

(というより何となく分かつてはいたけど…この人、恐らくはある程度俺の記憶を読む、もしくは共有しているのだろう。)

今のやり取りで疑問に思われたいのを見て確信に近いのを得た。

「今回はこんなもんかしら。触れた記憶もほんの一部だったし、大したものは見れないわ。」

「それじゃあ、またここで会いましょう？女の子とのデート。楽しんでらっしゃい。」

こちらを揶揄う様な顔で手を振ってくる。既に彼女の後ろには光が射しこんでいた。

(デートでは無い。仕事の一環でただ買い物をするだけだ。)

声には出さずに反論をしていると、光は強まり、現実に戻ろうとしていた。

「澤田さん！大丈夫ですか!?!」

気が付く目の前に明月葉那の顔があり、肩を揺らされていた。

「ああ、明月さん？どうしたんだ？切羽詰まった顔をして。」

「どうしたも無いですよ。蝶に触れたかと思えば、急に固まってしまつて…。」

どうやら先ほどまでの間、ぼーっと立ってしまったってらしい。

(今回はちゃんと内容を覚えているな。夢の中だと言っていたが



…。寝てないからなのか？前回と今回の違いは…。思い当たるなら  
そうなのだが。」

「澤田さん？ちゃんと聞こえていますか？大丈夫ですか？」

「あ、すみません、考え事をしていました。」

「こちらが謝ると、安堵したようにため息を出した。」

「因みに、どの位の時間固まっていたんだ？」

「え？ええっと…。大体10秒無い程度でしょうか？それより体に  
異常や違和感などはありませんか？」

「ん？いや、至って健康だが？」

「本当ですか？先ほど澤田さんが蝶に触れたら吸われるように消え  
たので、恐らくは澤田さんの魂に取り込まれる形になったと思われま  
すが…。その場合に蝶の影響を受けてしまいますので心配している  
のですが…。」

（ああ、なるほど。それでそんなに慌てていたのか。確かに大家さ  
んの蝶は良くない影響を及ぼす可能性があったもんな。けど…。特  
に感情の変化は感じないな。取り込んだ所を見ていないが本当か？）  
何気なく蝶が出ないかなと手をかざすと、手のひらから先ほどみた  
蝶と同じのが出てきた。

「うお。なんか出た。え、この蝶。」

「これは…。先ほどの蝶の様ですが…。今のは意図的にでしょうか  
…？」

「何となく出てこないかと考えたら出てきたな…。多分意識的に出  
来ると思う。何度か試す必要はあるけど。」

「そうなのですか…。つと、ちよつと待っててください先に蝶を回  
収しますので。」

飛んでいる蝶に鎌を振るう。

一薙ぎで蝶は消えていった。回収したのだろう。するとこちらを  
振り返り、今度は目を覗き込むように見てくる。

（恐らく虫喰の瞳かどうか疑っているのだろう。）

少なくともそれはあり得ない。俺は手で触れ、手から出てきた。  
あれはあくまで目で見ることで捕えることが出来る能力。

「残念ながら、虫喰の瞳では無いからな？俺のは手から出ている様に見えたぞ。」

「えっ？、……よく分かりましたね。今思っていたことが。」

そんなに熱烈に目を見られれば何となく察せれる。それにその能力を持つているのは俺では無い。

「俺の目を覗き込んでたからな。蝶を回収しているからそれを持つているのを疑っているかと思っただけ、正解みたいだな。」

「確かに澤田さんのは虫喰の瞳では無いようですね…。それと、そんな事まで知っていたのですね。」

「偶々その能力を持つている人を知っていただけだ。詳しくは企業秘密になるけど。」

「出ましたね、企業秘密。便利な言葉ですね、それ。…というか持っている人が知人に居るのですね…。」

「それより片付けて買い物に向かわないか？このことは後でミカドさんにも相談すればいいと思う。」

「なんですかそのあからさまな話題替えは…。でも…そうですね。考えても仕方ないですし、今はコーヒーを買いに行きましょうか。」

疑いの目を向けられまくったが強引に話を終わらせた。

（そう勘ぐらなくても遠くない内に出会うことになるけどな。その人物に。）

紅茶を片付け、目的地へ行く電車に乗るため、2人は駅へ向かった。

## 第14話：買い物へ

電車に乗り、数駅隣にある目的の店まで辿り着いた。中に入り、今回試す為のコーヒーを選んでいく。

「コーヒーと言つても色んな種類があるんですね。聞いたことがあるものから無いものまで。澤田さんはどれが良いとありますか？」

「そうだな…、飲んだ事がある奴なら、キリマンジャロ、ブラジル、ブルーマウンテンとかになる。正直どれが良いのか分からん。」

「確かにそれらはお店でよく見かけますね。ブルーマウンテンは高い豆と聞いているですが。」

「らしいな。他のコーヒー豆の良いところを集めた物らしくコーヒーの王様とか呼ばれている位だ。」

値段を見るとやはり他より少し高めになっている。

「此処に置いてある物の他にも種類はあるのでしょうか…？」

「知らないだけで細かく分けるとあると思うが…。他にはジャコウネコから採れる奴とか？」

「あ、聞いたことがあります。確か…コピ・ルアクでしたっけ？糞から消化されないままの豆で作るコーヒーですよね。」

「そうそう。希少性が高いから世界一とか言われているけど…、流石に置いてはいないようだな。」

動物の糞から採れる豆を洗浄し殻を剥き、それをコーヒーとして作る。現代ではあまり思いつかないが、先人はそれを思いつく辺り、今ほど裕福では無い暮らしの中で何とかコーヒーを飲もうと試行錯誤したのが伝わってくる。

「困みになのだが、名前がジャコウネコとか言っているが、ネコ科では無いらしい。」

「ええ…、名前にあるのに違うのですか？」

「詳しくは分からないが、独立した科とか？イタチに似ているからイタチコーヒーとか呼ばれることもあるらしい。」

ジャコウネコ科とかそんな感じだろう。多分。恐らく。知らんけど。

「そうなんです、ネコ科とばかり…。」

(ネコ科と言えば、閣下はネコ科に当たるのか? いや、妖精とか精霊的な存在なのかもしれない。現実にあるものさしでは測れる存在では無いのだろう。)

「どれを買ってみましょうか…。此方でも選んでみますので澤田さんの方でも幾つか選んで貰えないでしょうか?」

「了解。と言っても大体決めているからそんなに時間はかからないと思う。」

「もう既に…。因みにどれを選ばれたのですか?」

「アメリカン、キリマンジャロ。ブルーマウンテン…は今回は見送ろうかな。味を比べるのには良いのかも入れないが」

「では、私はそれら以外からですね…澤田さんが幾つか選ばれているのでこちらは一つ位にしておきましょうか。」

商品名と説明と睨み合いしながら横にスライドしていく。暫くすると決心したようにこちらを向く。

「決めました。このグアテマラというのにします。」

(確か果物的な香りがするとか書かれていた物だったか? 他とは違う味がしそうだし良いセンスだな…。)

「それじゃあ、今回はこの3つを買うにするか。別のが気になったらまた買いに来るとしよう。」

「そうですね、それじゃ店員さん呼びましょうか。」

取りあえずは目的のグッズの入手は達成することが出来た。

店から出たが、思ったより時間が空いてしまっている。まだ昼が過ぎた辺りだ。

「思っていたより早く購入し終えたな。この後の予定とかあったりする?」

「いえ、特に無いですよ? 澤田さんはあるのですか?」

「実は洋服を買いたくてな。今はこの1着しか着てないし流石にそのままとは行かないからな。折角ショッピングモールに来たことだし、ついでに買いたいのだが…?」

「分かりました。では澤田さんの洋服選びにお付き合いさせていた

だきます。まあ、アドバイス出来るか分かりませんが…。」

「率直な意見を貰えればそれで助かるので頼みます。そうだな…。時間も良い感じだしお昼を食べてから行動再開としようか。」

「ですね。まずは腹ごしらえ。としましようか。」

案内板から店を選び、昼食を取った後、メンズ用服を見ていく。

「見に来たのは良いが…。正直マネキン買いで良いんじゃないかと思っっているのですが、解説の明月さん。そのところ、どう思われますか？」

「そうですね…。一式なので恐らくちゃんとした人が選んでいるはずです。最低限のファッションセンスは保証されると思われれます。ですが知っている人から見るとマネキンのを買っていると一目で見抜かれてしまうリスクがあるかと…。そこは本人が気にするか次第になるかと思えます。」

雑な振りに、思っていた以上のコメントが返って来た。

「素晴らしいコメントありがとうございます。因みに私は気にしない派なので余裕ですね。それでは幾つか店員さんのおすすめを買って行こうかと思えます。以上実況の澤田と。」

手でマイクを持つジエスチャーをし、明月葉那の口元に持っついていく。

「解説の明月葉那でした…。って、何をさせているのですかっ。恥ずかしいですよこれ！」

笑顔で正面に手を振るが素に戻る。どうやら恥ずかしいが勢いでやったようだ。

（最後までノリに付き合ってくれるとか神ですか貴方は。いや、死神だけ。）

店員から幾つかおすすめを買っていく。これから寒くなっていく事もあり買う物が多い。

「澤田さん、澤田さん。これからの冬、マフラーがおすすめてですよ？」

「マフラー？そういえばこの中には無かったな。」

「必需品ですよ。マフラーは。この機会に買っておきましょう。」

謎のマフラー押しのだが、確かにいい機会だと思うので買うことにした。

「色はどれがお好みですか？それか服に合う物を選びましょう。」

「服に合うか分からないからな。今回は色で選ぶことにするよ。」

幾つかの中から首に巻いてもなるべく肌に違和感を感じないものにした。色は青色だ。

「さてと、買いたいものは買ったし、そろそろ行きましょうか。服の買い物まで付き合っつて貰って助かった。」

「いえいえ、これも死神のお仕事の一つですから。気にしないで下さい。」

随分と仕事の範囲が広いようだ。その内過労死してしまいそうだな。多少荷物が増えてしまったので、ここまですと切り上げて帰ることにした。

電車を降り改札を出て、ステラへと向かう。

「澤田さん、先にお洋服の荷物を部屋に置いて来てはどうでしょうか？邪魔になりませんか？」

「それもそうか。すまんが一度こっちの部屋に寄っても大丈夫か？」

「それ位大丈夫ですよ。大した時間もかからないですし。」

寄り道の許可を得て、部屋に向かおうとするが、少し離れた場所に蝶が飛んでいるのに気づく。

「明月さん。向こうに蝶が飛んでいます。」

小声で耳打ちすると、彼女もそれに気づく。

「本当ですね。どこからか迷い込んだのでしょうか？すみません、取りあえず回収だけでもさせてください。」

蝶に近づき、鎌で回収をしていた。他に居ないかと周囲を見ると、離れた場所に一人の男性が俯きながら座っていた。その周囲に蝶が集まる様に飛んでいた。

（多分あの人に集まっているのだろう。となると、だいぶ落ち込ん

でいる事になるな。」

男性の周りには数頭の蝶が飛んでいた。隣を見ると明月葉那もそれを確認していた後、こちらを見る。

「どうやらあの人に惹かれている様ですね。」

「その様子だな。どうする？声を掛けてみるのか？」

「そうですね…、一度話を聞いてみようかと思えます。」

男性に話しかけようと近づく彼女の後に続く。男性は俯きながら何か呟いているようだ。

（怨嗟がすごいな。何があったんだ…、それにしてもあの男…。）

男性は上から羽織っているパーカーのポケットに両手を入れていく。よく見ると右手には何かを握っている様に見える。

（まさか…いやでも今のご時世そういう事件は幾らでも起きるし、警戒はしておこう。杞憂に終わると良いけど。）

恐らく杞憂に終わらないと分かりながらも、そう思えずには居られなかった。その場に荷物を置き、話しかけようとしている明月葉那に近づく。

（問題はいつ爆発するかだよなあ…。会話することで衝動が収まるのなら万々歳なんだけど。）

そう考えている間に男性に声を掛けていた。

「こんにちは。俯かれていますのですが、どこか体調でも悪いのでしょうか？」

特に警戒した様子を見せずに男性に近づいている。手を伸ばせば届いてしまう距離だ。

（その距離はちよつとまずいな。話し相手を変えよう。これは流石に確定だな。）

「明月さん、少し待ってください。」

「澤田さん？…どうされたのですか？そんなに怖い顔をされて…。」

俺の顔を見て何かあったのかと振り返る。こっちを見ている為、正面には無警戒だった。

すると男性は顔を上げ、何か覚悟を決めた様に立ち上がる。右手には異様な程、力が入っているのが分かる。

——来るなこれは。

危険と判断し、咄嗟に明月菜那の腕をこちら側に引き寄せ、強引に体を間に割り込ませる。いきなりの事で彼女は驚きの声を上げていた。

位置を入れ替えたと同時に男性が右手を出し、勢いそのまま振り切った。

それと同時に右の二の腕辺りに鋭い何かで線を引かれた様な感覚が走る。目の前の男性を見ると右手にはナイフが握られていた。

「フウウツ！ハア…ハア…！」

極度の緊張からか息が荒く、目を限界まで開き、こちらを凝視している。

（あの大きさは果物ナイフ辺りか…？いやペティナイフ位の大きさに見える。）

「……え？、澤田さん？その方が持っているのは…。」

状況が上手く把握出来ずに啞然としているが今はそれ所では無くなっている。

「はは、あははは！。やってやるっ。俺の不幸を味合わせさせてやるからな！……くそっ！」

いきなり笑い出し方と思えば、周囲をキョロキョロを見始め、どこかに走り去って行った。

（衝動的に起こしたのは良いが、目撃者が多いこんな時間は流石にまずいと判断したのか…？）

まだ多くの人々が活動している時間だ。周りの人の何事かこちらを見ており、何人かは携帯を取り出していた。

「明月さん、怪我とかは大丈夫？。」

「ええ、私は澤田さんが咄嗟に引いて貰えたので特には。」

「それなら良かった。取りあえずここを離れよう。注目を集めすぎている。」

「警察などに連絡した方が良いのでは…？」

「それなら周りの人達がしてくれるだろう。それに俺たちは連絡する手段が無い。」



置いていた荷物を持ち上げ、この場から離れるように歩き出す。腕に力を入れた際、先ほど感じた二の腕からじわじわと痛みが広がってくる。

（これは100%切られているな…。ああくそ痛くなってきた。けど確認するのは後にしよう。今は離れるのが先決だ。）

明月葉那が後から付いて来ているのを確認し、急いでその場を離れていった。

駅から離れ裏路地に入り、周りに人が居ないことを確認して腕の様子を見る。

（あーあ、やっぱりかあ。バツサリ系か？結構血が出てるわこれ。）  
何か服に広がる感触で想像は出来ていたが、いざ目にすると思つた以上に血が出ていた。

「澤田さん？どちらへ行かれるのですか、そっちは宿泊している場所では…つてどうしたのですかっ！」

隣まで追いつきこちらを向く。腕の血の跡に気づいたのか大声を上げた。

「どうやら、さっき切られていたらしいな。今になって痛みが出てきた。」

「え、ええっと、取りあえず病院に…、救急車でしようか！」

怪我を見たからか急にあたふたし始めた。パニックになっているのか謎の動きをしている。

「ストップ。ちよつと落ち着いてくれ。」

「これが落ちついてられますかっ。」

凄惨な剣幕でこちらを向く。

「取り敢えず、血を止めたいから手伝ってくれ。」

「あ、分かりました。まずは止血が大事ですよねっ！」

先ほど買った服の中から肌着を取り出し上から被せ、腕の部分で圧迫するように巻いて縛る。最後にマフラーをなるべく脇の根本近くできつく縛る。

(割と適当だがこの瞬間は大丈夫だろう。とは言っても安心は出来ない。どこかで処置をしないと。)

「取り敢えずはこれで大丈夫。ありがとう。」

「い、いえ、大した事していません…。それより早く病院へ行きましょう!」

「いや、すまんが病院では無くお店に向かおう。恐らくミカドさんが居るはずだ。」

「え? どうしてお店に?」

「病院に行くと何があつたか聞かれる可能性が高い。明らかに切られた後の傷だからな。直前に起きた駅の事と結びつくと思う。そうすると事情聴取の為警察が入ってくる、こっちは被害者だしな。そうなる物凄く面倒な事になる。なるべく避けたい。」

「し、しかし…。」

「大丈夫。もし必要になったらその時に改めて行こう。」

納得いかない彼女の話が無理やり終わらせ、なるべく人の目に付かないよう店に向かって歩き出した。

## 第15話：負傷の手当て

人目につかずに何とか店まで辿り着く事が出来た。隣で明月葉那がずっと心配そうに声を掛けてきたが、その慌てぶりが逆に心配になっっていた。

「澤田さんっ、着きました。今ミカドさん呼びますから！」

まるで重症患者に呼び掛けるような言い方と共に、店の扉を開けた。

「ミカドさん！戻られていますかっ。」

「うわっ、って明月さん？驚かせないでよ…。え、どうしたの？そんなに大声出して。」

どうやらフロアには四季ナツメが居たようだ。大学から帰って来たのだろう。そしてなぜか、メイド服を着ていた。

「ナツメさん、ミカドさんは見ていませんか？」

「閣下…？、閣下なら奥の部屋に居ると思うけど…？って、澤田君、どうしたのその腕…怪我しているの？」

きよとんとした顔でこちらに問いかけてくる。俺の右腕の奇抜なファツションに気づいたらしい。物凄く痛いです。

「いや、実は服屋の店員さんから今流行の着方を聞いて真似てみたんだけど…、似合ってる？」

「馬鹿な事言っている場合ですかっ、確か奥に救急箱があつたと思うので、少し待っててください。」

俺を席に着かせて、奥へと消えていった。一応傷口は抑えているし、高い位置にあるから少しずつ血は収まって来ている気がする。気のせいかもしれないが。

「え？ほんとに怪我してるじゃないっ。大丈夫なの？」

「軽く切り傷があるだけだから。そこまで重症じゃない、想像以上に血が出ていて驚いているけどな。」

「なんか随分と落ち着いているのだけど…、痛いんじゃないの？」

「そりゃ、めっちゃくちや痛いぞ？今でも痩せ我慢しているぐらいだからな。でも自分以上に慌てている人を見るとなんか冷静になってくるというか。」

抑えている場所を見るが少し服に血が滲んできている。そろそろ別のものに変えないといけない。

「澤田さん！ミカドさんが居ましたので奥の部屋に行きましょう。」  
良いタイミングで明月葉那が戻って来た。閣下は居たらしい。

「了解、ミカドさんなら安心できそうだな。サポートキャラだし手当ても出来そうないメージ。」

「澤田君…、そのケット・シーはゲームの方だから…。」

何言っているんだこいつ、と言わんばかりの顔を向けながらも後ろを付いてくる。多少は怪我が心配らしい。

（失礼な。この閣下も超サポートだぞ？自分の尻尾の毛を犠牲にお守り作る位だしな。）

閣下の尻尾が円形脱毛症になっているのを想像しながら、奥の部屋に向かった。

奥の部屋で閣下に事情を軽く説明しながら手当てを受けていると、経緯を話している内に処置は完了してしまった。

「ほれ。これで取り敢えずは大丈夫だろう。暫くはあまり動かさずに安静にしている。それから包帯が滲んで来たらまた交換すると良いだろう。」

「ありがとう。その時はまた連絡するから出来れば手を貸して欲しいかな。」

「……で、なにがあったのだ。詳しく話せ。ナイフで切られたとは聞いているが。」

「あー…、そうだな…。今日の帰りに駅で蝶が集まっている人を見かけてさ。」

横目で明月葉那を見るが、申し訳なさそうな顔をしていた。多分自分を庇って出来た傷だからだろう。

「まあ、放っておくわけにはいかないから明月さんに話しかけてみよう」と提案して近づいたんだよ。」

「そこで、明月さんが声を掛けていている時に異常を感じて俺が話し相手を代わろうとしたら、急にポケットからナイフを出して切り付けて来た。咄嗟にこちら側に引つ張ったからなんとか無事で済んだ。つて所だ。」

「無事って…、澤田君肩を切られたんでしょ？」

「庇わなければ明月さんがもつと酷い怪我をしていた可能性があったからな。それに比べると軽い手当てで済んだ傷は無事になるな。」

あの軌道はそのままであったら顔あたりを大きく切っていたはずだ。衝動的とは言え、かなりの殺意が籠っている様に見えた。

「で、病院に行くわけにも行かないからここにミカドさんを頼つて来たというわけ。」

「状況は理解できた。確かに今のお前は病院などに行くとは色々と面倒だからな。それは必要になればいく事にしよう。それまでは吾輩が診てやろう」

「え、病院に行けないの？何その事情って…？」  
隣から疑問が飛んでくる。スルーしたいが一応軽くは説明しておく。

「いやほら、最近生まれ直したって事は戸籍や身分証明が無いからさ。全額負担は嫌だし、事件に巻き込まれたとなると警察とかに確認される可能性があるから避けたいんだよね。」

最悪病院までは何とかなるけど警察は流石に無理。自分を証明するものが何一つ無い。

「今日はもう大人しくしていると良い。何か体調が崩れたりしたら連絡を頼む。」

そういうと閣下は部屋を出ていった。先ほどから何も話さない明月葉那に気を使ったんだろう。

「あー。と、言うわけだから、命に別状も無いし、後は怪我の回復を待つだけだ。そんなに落ち込まないでくれると助かるのだから…？」

落ち込んでいる彼女に心配は無いというが、表情は良くならず。

「澤田さん…本当にすみませんでした…。私が不用意に声を掛けてしまい怪我をさせてしまいました。」

こちらを向き頭を下げる。やっぱり自分せいだと思っていたのだろう。今回は完全に事故に巻き込まれた形だ。

「いや、あれは俺が先に提案していたからな。それに明月さんに代わろうと声を掛けたのが引き金になったはず。だから寧ろ怖い思いをさせたんじゃないかと反省している所だ。」

「それに男が何かしてきそうなのは薄々感づいていたからな。もつと早めに止めるべきだったと思う。」

これはこっちの落ち度だ。最初から俺が話すべきだったのかもしれない。

「い、いえ。私は大丈夫でした。でもやっぱり、もつと警戒しておくべきだったのかと思います…。」

「今回は運の悪い事故だったという事で。五体満足で命もある。だから自分を責めないで欲しい。助けたこっちが気を遣ってしまうからな。出来ればいつも通りで頼む。」

「…：分かりました。澤田さんがそう仰るなら…。」

「それにしても今日服を買いに行って正解だったな。もし買って無かったら止血の手間が面倒だった。それに明月さんがマフラーを勧めてくれたおかげで簡単に応急処置が出来た。確かにこれはおすすめをするだけの事はあるな。」

「私はそういう使用目的で勧めた訳では無いのですが…。」

「けど、明月さんが勧めてくれたからな。まさか…、あの時のおすすめはこの時の為に!?!って奴だな。」

「いやいや、澤田さんじゃありませんからね?」

多少声に元気が戻ってきたようだ。さっきまで部屋にあった暗い雰囲気も無くなっていた。

「それにしても、よく澤田君はその人が危ないって気づけたのね。そんなに様子がおかしかったの?」

「まあ…：、そうだな。蝶が集まっていたこともあるし、俯きながら何か呪いみたいに呟いていたしな。何よりもパーカーのポケットの

中の右手に何かを握っている感じだった。これはもうやばい奴確定ってわけだ。」

その時の状況を説明していると、横から明月葉那が小声で話しかけてくる。

「澤田さん…もしかして、何か視えていたのですか？」

「え、……いや。特にそんなのは無かったけど。うん。」

一瞬何の事か忘れていたが、俺が未来視で見たのかと聞いてきたのだろう。残念。不正解。

「今の間、何か怪しかったのですが…。分かりました。澤田さんがそう仰るのなら。」

思い出すまでの間が怪しく思ったらしいが、ここは訂正を入れずにスルーしておく。

「どうしたの？二人とも、小声で話して。」

「い、いえ。澤田さんの怪我の様子を伺っていただけなので。特に何も無いですよ。」

「ふーん。そう。」

(これ、怪しまれていないか?)

若干こちらを見る目が疑っている目をしている。

「というか、折角服を買ったのにまた買い直さないといけないな。取りあえず服は他のもあるから大丈夫だけど。マフラーは次の機会に買っておくか。他に冬に向けて必要ながあれば2人に教えてほしいのだが…。」

聞かれると面倒なので無理やり他の話題を提供する。

帰ることになるまで話を続けていたが、四季ナツメからの疑いの目は無くならなかった。

因みに、四季ナツメからのおすすめは炬燵だった。今は無理だから部屋が取れたら買うことになってしまった。

時間も過ぎ、外が暗くなって来た頃に今日は解散しよう提案した。四季ナツメが着替えるという事で俺はフロアにて待つことに

なった。

(今日は早めに解散しておこう。人通りが多い時に帰った方が安全だろう。それに…)。

恐らくだが、犯行はこれで終わるとは思えない。暫くは身を潜めるかもしれないが、そう遠くない内に及ぶ筈だ。時間が経てば経つほど犯人へ足が付く可能性は高くなる。

(近々、必ず再犯するだろう。一度目は何とか凌げたが次も一緒に居るとは限らない…。可能ならばその前に見つけて何とかしておきたいし、犯人は明月葉那に顔を見られている。)

顔を知られたと逆恨みで襲ってくるかもしれない。それを許すわけにはいかない。原作までの平穩を乱さない為にも裏でひっそりと片付ける必要がある。

「なんて顔をしているのだ、貴様は。怒る気持ちも分かるが抑えろ。」

これからの事を考えていると、隣から閣下が呆れた声ではなしかけてくる。どうやら変な顔になっていたらしい。

「お疲れ様、店には居なかつたみたいだけど、もしかして犯人を捜していたとか?。」

「その通りだ。とは言ってもこれといって話は得られなかつたがな。」

「それは良かった。情報が無いのならまだ犯行には及んではいないからな。」

「そういう風に捉えることも出来るな。だが足取りが分からん以上捕まえることも出来ん。」

「近い内にまた犯行に及ぶと思う、それまでは複数人で帰った方が良さそうだな。」

「その方が賢明だろう。お前は四季ナツメと帰るが良い。」

「俺が送られる側になりそうだけだな。」

出来れば向こうを送りたい所だが、怪我人にさせる訳にも行かないと言ってくるだろう。

(まあ流石に今日の内からしてくるとは思えないから大丈夫か。)



取りあえずは大丈夫だと判断し、今朝の件を思い出す。

「そう言えば、ミカドさんに相談というか話しておきたい事がある。」

「どうした。貴様の奇跡の関係か？」

「遠からず？今朝店に大家さんが来たのだが、その際に大家さんから零れ出た蝶に触れ…。」

「すみません。お待たせしましたー。」

「ごめん。私の着替えに時間が掛かって…。」

話を始めると奥から着替えを終えた二人が出てきた。

「…、この話はまた後で、明月さんも知っているからこの後聞いて欲しい。」

「分かった。今日のところは終わりとおこう。」

「それじゃあ、準備も出来た事だし帰るか。今日は物騒だし四季さんを送っていく。」

駄目と言われるのは目に見えていたが、先に言う事でもしかしたら…と低い可能性に賭ける。

「澤田さんは怪我人ですから、今日は送られる側です。」

「そんな人に送られたりしたら、なんか申し訳ないしね…。」

「ですよねー。」

「まあ…。そうなるよな。今回はお言葉に甘えようかな。」

「ごねるよりさっさと決めた方が良いでしょう。」

「話は済んだか？それなら早めに帰ると良い、遅くならない内にな。」

「了解、それじゃ四季さん。行きましようか。」

「澤田さん。」

帰ろうと歩き出すと後ろから声を掛けられる。

「明月さん？どうかしたのか。」

真剣な顔でこっちを見ている。大方、今日の事で改めて謝るつもりなのだろう。

「今日は本当に、ありがとうございました。」

頭を下げてこちらに感謝を告げる。

「……てつきり謝ってくるにかと思っていた。」

「謝つても澤田さんに気を遣わせてしまいますので、それにまだお礼を言えてませんでした…。」

「そんなの気にしなくても大丈夫だが…、感謝は受け取っておくよ。今度また買いい物にでも付き合つて欲しい。」

「その位で良いのなら幾らでも。それでは気を付けて帰ってください。」

「なるべく何事も起きないように帰るつもりだから。じゃあ、また明日。」

明月葉那と閣下に見送られながら、ステラを出た。外は暗くなつて来ているが大通りはまだ人の動きはある。直下の問題は…。

（四季ナツメと二人で帰るのだが、何を話そう…。無言は気まずいからなあ…。）

隣を歩く黒髪美少女との距離を、どう測ろうかが悩みだった。

## 第16話：裏路地で目に映ったもの

「それじゃあ、帰ろうか」

「そうね。でも私澤田君の家分らないから、先導してくれる？」

四季ナツメにそう言われ、そういえば近くに部屋を借りているとは言ったが、場所の話とかまではしていなかったと気づく。分からなければ送れないもんな。

「了解、ではホテルに向かいますか。」

「は？ホテル…？」

歩き出そうとすると、急に声のトーンが下がった返事が返ってくる。

「…どうしてホテルに？」

「え？そりや今から向かう場所だから？」

「どうして私が澤田君とホテルに向かわなきやいけないのか理解出来ないんだけど…。」

理解できない顔のご様子。何かすれ違いが起きてしまっている気がする。

(これはもしかや、俺が今から如何わしい場所に連れ込もうとしていると勘違いしてるパターンか。)

誤解を解こうと考えたが、この状況を楽しむのも一興と思い、そのまま続ける。

「別におかしいとは思わないのだが…？そうだ、四季さん少し休憩していいかない？飲み物ぐらいいは出すよ？」

「するかっ！私は澤田君を送るために同行しているのだけど？そんな事なら帰っていい？」

「だから部屋まで送ってくれるんだろ？送ってもらっているから礼ぐらいしたかったのだが…迷惑だったか？」

「だからそこでホテルに連れ込もうとする考えが理解できないって言っているのだけど？」

声のトーンが下がるに合わせてこつちを軽蔑するような目で見てくる。癖になりそう。

「連れ込もうとか人聞き悪いなあ…。寧ろ送ると言ったのはそつちなのに。」

「そんなこと一言も……。あれ？。……澤田君ってどこに部屋を借りているの？」

「どうやら、自分が間違っていることに気づき始めてしまった。もう少し続けたかったがネタバレにしよう。」

「言って無かったか？少し歩いた場所のホテルで長期宿泊してるんだよ。ミカドさんが部屋を借りるまでのその場しのぎで。」

「え、そうなの？ああ、だから……。そういうこと。納得。」

俺の言葉でホテルに宿泊しているのだと理解できたのだろう。ここからがお楽しみタイムとなる。

「さつきから会話がおかしかつたが、一体何と勘違いしていたんだ？」

知らんふりをしながら問いかける。

「……別に勘違いとかしてない。」

恥ずかしいのか、声が小さくなり顔を逸らす。だが、追撃を止めるつもりは毛頭無い。

「いやいや、勘違いしているようにしか見えなかったなあ。ホテルに連れ込むとかなんとか？」

「……っ！、ってか今の言い方、分かっててそのまま続けたでしょ？」

自分の勘違いを指摘された彼女は、こちらがわざととしている事に気づいたのか反撃をしてくる。

「なんのことだかさっぱりですな。俺はただ目的地を告げ、送って貰ったお礼にお茶位出そうかと思っただけなんだけどもなあ…。勝手に勘違いをしてみましたご様子で。」

「うわあ。うぎ。きもっ。性格わるっ。」

こつちがにやにやしながら見ていると、拗ねた顔で罵倒のオンパレードで返してくる。ご褒美かな。

(いい反応で最高です。やった甲斐があったよ全く。定期的にくれませんかね。お気に入りボイスとかにしておきたい。)

末期症状である。

「そつちが勝手に勘違いをしただけなのではないのかと思うのだけどな…。」

「うるさい。ほら、さっさと行く。怪我人なんだから早く安静にしておかないと。」

都合が悪くなり話を逸らされた。まあ満足したしいいか。話も弾んだしな。

四季ナツメに催促されながら、宿に向かった。

「ん？あれは。」

少し歩き始め、駅が見えて来た辺りで少し離れた場所で青い光が飛んでいる様に見えた。

「澤田君？どうかしたの。」

「今、蝶が飛んでたように見えたんだが…。」

気になりその場所に近づく。蝶はゆらゆらと大通りから裏路地に入っていく。

「四季さん、すまないが追ってもいいか？」

これ以上は帰路から外れるため念のため確認を取る。

「私は別に大丈夫だけど、明月さん呼びに戻る？」

「いや、取りあえず追いついてから考える。ちよつと気になることもあるしな。」

さっきのは駅の近くで飛んでいた蝶だ、夕方に引き寄せられたのなら近くに居るのかもしれないと考え蝶に追いつく。

「飛んでいるのは、一頭だけか。」

目の前でひらりと飛んでいる蝶に触れようとする。予測通りならこの蝶から何かしら情報が得られるはず。

「当たっていると良いんだけどな。」

そう思いながら、蝶に触れる。すると蝶が吸い込まれるように消え、感情が流れてくる。

「…っ、なるほどな、そんな感じなのか。」

唐突にくる情報に驚くが、予想の範疇だった。

(原作での高嶺昂晴が他人から蝶の影響を受けたのと似ているのか？それにしても思ったより影響少ないな。)

原作の出来事と若干違う事に違和感を覚えていたが、全く一緒というわけではないと結論付け、考えるのをやめた。

「今澤田君が触れたら、蝶が消えたように見えたのだけど…何をしたの？」

考えるのをやめて、顔を上げると隣から疑問を投げかけられた。どうやら俺が終わるのを待っていたらしい。

「蝶を捕獲？的な事をしただけ。明月さんが蝶を回収出来るように近い事が出来るらしい。俺も詳しくは分かってはいないけど。だから今の蝶で試してみたって感じ。」

「だから、蝶を追おうとしたんだ。納得した。」

「すまん、じゃあ戻るか。」

目的が済み、駅方面に戻ろうとする。この先は今行かない方が良いだろう。

(行くとしたら、一人になってからだな。相手は凶器持ちだし、こつちも何か準備していかないと…。部屋から良い感じの持ち出すか。)

この後の事を考えている内に泊まっている場所に着く。

「つと、一応ここが今借りている場所、店からも近いし結構便利なんだよな。」

「ここね、了解。じゃあ私はここまでにして帰る事にする。」

「わざわざ送ってくれてすまん。四季さんの家はこつち方向だったりする？」

今さっき来た道方面を指さす。

「ううん、私は逆、こつち側。」

来た道とは反対を指さした。一先ずは安心できる。

「それは良かった。わざわざ来た道を引き返すことになったら申し訳なかったからな。」

「別に気にしなくて結構。澤田君はこの後は部屋で大人しくしているつもり？」

「流石に今日は大人しくしているつもり。心配されたくないから

な。」

「…そう。分かった。それじゃ、また明日」

「また明日な、夜道は気を付けて帰ってくれ。」

こちらに背を向けた彼女にひらひらと手を振る。歩いて行った先の曲がり角を曲がった事を確認し部屋に入り、今日買った物を片付ける。

「さつてと、準備していきますか。」

ポケットに小銭を幾つかと、備え付けのハンドタオルを念のため2つ入れ、再び部屋を出た。

「見つかると良いんだけどな…。」

さっきの蝶が居た場所からそう遠くない範囲に犯人、もしくは蝶が飛んでいる可能性があるはず。それを辿れば辿り着くと思う。

「それにしても夜は少し肌寒いな…。」

少し冷たい風が肌に当たる。傷口に沁みるような気がする。

駅を過ぎ、回収した蝶が入って行った裏路地前まで辿り着き、奥へと進む。

回収地点まで来た時に後ろから人の気配が近づく。

(駅辺りから何となく視線を感じていたが…。こうも堂々と後を付けてくるとは。はあ…。)

こちらが立ち止まっていると数メートル後ろで人が立ち止まり、声を掛けてくる。

「澤田君。…どこに行こうとしているの？」

振り向くまでも無く分かる、声の正体はさつきまで一緒に歩いていた人物だったのだから。

「予想通りなら…。きっと部屋から出てくるはず。」

駅方面で澤田君が泊まっている店への道が見える位置で彼が来るのを隠れて待っていた。

(帰り道、途中から彼の様子が変だった気がする。ずっと何かを考えている様に見えた。)

送り途中で見かけた蝶を追って裏路地まで行き、彼はそこで蝶を回収すると何かを納得したかのような顔をし、少し考え込んでいた。

(時期的に考えると、あの蝶は今日駅で事件を起こした犯人の蝶だと思う。)

(推測だけど、そこで何かを得たんだと思う。私と解散した後にもまたその場所に向かうはず。わざわざ私の家の方角を聞いたのはその為なんだろう。)

怪我を負わされたのにわざわざ関わりに行こうとするのは理解が出来ないが、危ない目にあうのなら止めなければならぬ。

暫くすると彼の姿が見えた。

(やっぱり。またさっきの場所に向かおうとしている。)

自分の推測が当たっていた。彼は特に迷うわけでもなく真つすぐに来た道に戻っていた。その後ろを気づかれないように距離を置き、後を追う。

前を歩いている彼が道を曲がって行った。先ほど入った裏路地だ、これはもう確定だった。

曲がり角を曲がると路地の先で彼が立っていた。見るからに蝶を回収した場所だと思う。

後に追いつき、声を掛ける。

「澤田君。…どこに行こうとしているの?」

声を掛けると、ゆっくりとこちらに振り返る。後を付けられていたのに驚いている様には見えなかった。

「あれ?四季さん。どうしてこんな場所に?もしかしてさっきの蝶が気になったとかか?」

「途中から澤田君の様子がおかしい様な気がして後を追って来たんだけど…。そっちこそ、なにしてたの?」

「いやー、コンビニか薬局で包帯とか買っておこうかと思って探していたんだけど、蝶の事が気になって。ちよつと様子を見に来ただけ。特に何も無かったから戻ろうとしていた所だ。」



「コンビニとかなら来るまでの道にあったと思うけど？薬局も駅内に。」

「まじか。見逃していたのか。恥ずかしいなそれ。」

白々しい返答をしてくる。歩いている最中何かを探している様には見えなかった。

「本当に？探している様には見えなかったけど。本当は蝶の事が目的だったんじゃないの？」

そう聞くと彼が静かにこちらを見る。いつもとなんか違う雰囲気がある。人気の無い夜の裏路地だからか、違和感を感じる。

「一体…、何をしようとしているの…？」

躊躇いながらも問いかける。

「四季さん。」

「何？」

「今日は危ないから、大人しく回れ右をして帰ってくれと助かる。」

「そっちは帰らないの？危険というわりには何かを探しに来た様子だけど…。」

「直ぐに帰るさ。四季さんを見送った後にな。」

「全然そうには見えないのだから聞いているの。」

二人の間に沈黙が訪れる。

「…：はああ。これはこつちが言うまで帰ってくれそうにないかあ…。」

こつちが理由を聞くまで引き下がらないのを察したのか、彼から盛大なため息が出た。観念したような困った顔をして私を見る。

「確かに、四季さんが思っている通り、今日の犯人の手掛かりを探しにここに来た。さっきの蝶からこの先に向かった事が分かったからな。四季さんが居ると危険だと思って引き返したのに。なんで付いてきたのかなあ。」

ガクツと頭を下げ、更にため息を吐く。

「私はただ、また変なのに巻き込まれないか心配してるだけ。そこまでのため息吐かれるのは…なんか心外。」

「いや、言いたい事はわかるよ？怪我を負わされた側なのに、また自分から危険な目に会いに行こうしている人が居たらそりゃ心配して止めようとするよな。」

「どうやら、こちらの心配を分かっているのに行動をしているらしい。」

「分かっているのなら戻った方が良いんじゃないの？」

「いやー、残念ながらその提案は飲めないな。これをそのまま放置は出来ない。」

「警察に任せられた方が良いと思うのだけど？」

「最初はそれも考えたんだけどな。またいつ犯行に及ぶか分からない上に場所の特定が出来てない。もしかすると被害が出るかもしれない。」

「けど、今なら蝶を辿れば犯人に辿り着く可能性が高い。早い内に解決できるならそっちの方が良いだろう？」

「仮に特定出来たとしても、相手は凶器を持っているって聞いたけど？危険すぎるでしょ。」

「相手は唐突にナイフで切り付けてくるような人だ。襲い掛かって来るかもしれない。」

「それについては、まあ何とかする。対処位なら出来ると思う。」

「相手が凶器を所持し、危険と言っているのにそれが大した障害では無いかの様に話している。それが私には不気味に映る。」

「だから四季さん。改めて言うのだけど、付いてくると危ないからさ……。」

「……大人しく、帰ってくれないか。」

冷たく、そう私に言い放った。

## 第17話：隙と油断

「……大人しく帰ってくれないか。」

その言葉聞いた瞬間、反射的に体が強張った。静かに告げた筈なのに、突き放そうとしてくる感覚と怒りが言葉に籠っていた。彼の顔を見ると目を細め、冷たくこつちをじつと見ている。

(なに……これ……)

怖い。

今の彼を見ていると、頭の中でそう考えてしまう程に雰囲気が変わっていた。

「心配してくれた事は正直嬉しい。たかが数日しか知り合っていない人の為に後を追いかけて来て止めてくれようとしてくれる。俺が危ない目に会わないように……。だけど、まず自分の身を第一に考えて欲しい。俺はともかく、四季さんに何かあつたら今後が大変だからな。」

「だから今日は何もせず家に帰って欲しい。そんなに心配しなくても大丈夫。何も起きないから。明日は明月さんも含めて3人で買ってきたコーヒーの飲み比べする予定だしな。まあ四季さんは飲めないかもしれないけど。」

彼は冷たい表情から、今度は何かを見守るような優しい目をして安心させるように語り掛けてくる。

「でも……」

「ここで引き返してくれると、こつちとしては物凄く助かる。けど、付いて来てしまうと俺に凄く迷惑が掛かってしまう。としたらどうする？四季さんの嫌う人に迷惑やワガママをすることになるかもしれない。付いてくるという自分の意思を通そうとする。それで人を振り回すことになりかねないとしたら？」

彼にそう言われ、心の中が痛む。過去の記憶が蘇り無意識に後ずさる。

(私が付いてく事で迷惑が掛かってしまう……?)

小さい頃の様に自分の事でこれ以上、人を振り回すのはもうしたく

はないと思っていた。既に彼にはお店の事に巻き込んでしまっているのだから。けど、それより気になった事がある。

(どうして彼は、私がそう思っている事を知っているのだろう…。) 彼と顔を合わせ会話をしたのはたった数回程度なのに。確かに閣下や明月さんには迷惑を掛けても構わないと思っていた。けれど彼は普通の人間なのだから二人とは違うと。会話や顔などに出した憶えは無い。

(目の前に居るこの人は、一体何者なのだろう…。) そう考えてしまう。

最初は普通の男性に見えた。明月さんを庇い怪我を負った時の話を聞いた際は、人を良く観察していて咄嗟に行動が出来る人ぐらいの印象だった。

けれど今はよくわからない…。こっちは何も知らないのに向こうは知っている。そんな不気味さを感じて彼を見る。

「あー、中々強情だなあ…。四季さんって意外と負けず嫌いとか反骨精神だったりしたのかな…。こう言ったら引き下がってくれと思っただけだな…。」

何か小さく呟くが聞き取れなかった。頭を掻き、困った顔でこっちを見る。

「そんなに猶予がある訳じゃないし…。はああああ…。仕方ないか…。」

彼から長い溜息が出る。

「確認するけど、犯人を追う俺に四季さんは付いて行きたいって事で良いのかな？ 因みにこっちは引き返すって選択肢はするつもりは無い。」

こちらが見ている内に彼の中で結論がついた様で、確認として私に問いかけてくる。

「放っておくと危険な事をするのでしよう…。?」

「するかどうかは向こう次第だからなあ…。こっちとしては穏便に終わって欲しいと願ってる。」

「それなら一人より二人の方が良いんじゃないの?」

「普通はそうかもしれないな…。ってそろそろ行かないとどうなるか分からなくなるし…。付いてくるなら一緒に行こうか。」

「ここまで来たら付いていく以外の選択肢は無いと思うのだけど…。」

彼の隣まで追いつき、恐怖を隠すように強がって見せる。

「それと、四季さんに付いてくるにあたっての条件があるのだが…。」

「何かあるの?」

「まず俺の手が届く範囲に居るようにしてほしい。あと仮に犯人を見つけても俺より前には出ない。どう?守れそう?」

「私は小さい子供か。」

「はは、確かにそう聞こえるな。念のためという事で。最後に、もし俺に何かあった時、例えば刺されたり行動が出来ないと分かった時は構わずに逃げるように。」

「え…。」

驚いて彼を見るが、至って真剣な顔だった。ふざけて言っている様には見えない。

「それは…。澤田君を見捨てて逃げろって言っている?」

「そうなるな。逃げた後はステラに行つてミカドさんと明月さんを頼ると良い。二人なら何とかしてくれるはず。って、あくまでその場面になった時はだからな?最悪の想定だからそんな顔をしないで欲しいのだけど…?」

心配をするように慌てて言ってくる。私が不安な顔をしていたのを察したのだろう。

「ま、そうならないようにするから。それじゃ、行きますか。」

彼の後を私も続く。歩いていると少し先に青い光が浮いている。恐らく蝶なのだろう。澤田君の方を見ると彼は蝶に近づき、捕まえるように手で蝶を握る。捕まった蝶は手の中に消えていった。

「…やっぱりこの方角で当たってるのか。」

「この先に犯人は居るって事?」

「今の所はな。追いつくまでに移動したり犯行に移る可能性がある

からなるべく急ごうか。」

少し歩くと、また先に蝶が見えた。同じように捕まえる。

「……多分、この道の先に居ると思う。四季さん。最終確認だけど、今から帰るって選択は？ここから先はセーブも引き返すことも出来なくなってしまうが。」

少し冗談っぽくこちらを向く。確かに危険に巻き込まれないならここが分岐地点なのだろう。けれど返事は変わらない。

「答えはノーって事で。」

「…はあ。はいはい、了解です。」

呆れながらも頷いて先に進もうとする彼からは緊張感や恐怖心が感じられない。強がっているのだろうか。それとも…。

警戒しながら静かに歩いて行くと、彼から無言で止まれとジェスチャーがあつた。

「あの30m位先で右手の地面に座っている人が見える？あれが今日の犯人。」

小声で耳打ちをしてくる。確かに地面に人が座っているのが分かるが、薄暗く、人相まではつきりと見えない。

「人が座っているとしか分からないんだけど…間違いないの？」

「100%。見てたら分かるよ。蝶が寄ってくるはずだから。」

彼に言われ観察していると、座っている人の周囲にどこからか蝶が集まって来た。

「だろ？。しかも駅で見た時より数増えてるし…。」

「どうするの？警察呼ぶ？」

「ちよつと、話掛けてこようかと思う。」

「いくら何でもそれは危険すぎるでしょ。」

「俺だけなら大丈夫。ちよつと付いて来てくれ。」

そう言い、来た道を引き返すと途中にあつた自動販売機で水を買っている。

「え、何？水でも差し入れるの？」

「いやいや、これは濡らす用。」

彼は購入した水の蓋を開け、ポケットから取り出したタオルを濡ら

していく。

「これを何に使うの…?」

「護身用?座っている人の顔でも拭いてやろうかなと。」

意味不明な行動を見てみると、また来た道を引き返し犯人に近づく。

「今から話をするから、四季さんは少し離れて見てて欲しい。もし何かあったらさつき最後に言った事は必ず守る様に。」

私に強く念を押し、この先に座っている犯人であろう人に彼は近づいて行った。

(はああ…。結局付いて来て貰うことになったなあ…。、はあ…。) 心の中で何度目かのため息を吐く。

(彼女のトラウマを刺激すれば嫌がって帰ると思ってたけど甘かったのかね。)

小さいころから引きずっている過去のトラウマを言えば、怖気づくと考えての言葉だった。実際一度は目には動揺した様子が見えたと、後ずさりもしていた。決まったと判断したが…。なぜかその後表情が変わってしまった。

(うーん。原作前の四季ナツメはそんなに強い意志を持っていたか?諦め精神だと思っていたのだけどなあ…。語られてないだけで実際は違うとかあったりするパターンか?)

自分の中の想像とは合わず、頭の中で自問していたが答えは出ず。(過ぎたことは仕方ないか。今は彼女に被害が及ばないようにする事と、なるべく穏便に事を済ませるようする事。この2つだけに集中しよう。)

犯人の魔の手が及ばないように距離を置いてもらうのが良いがあまり離れすぎると何かあった時に間に合わなくなる。なので適度な位置にいてもらう。

(あとはあまり疑問に思われない方法での防衛…。素手では無く道具を使えば誤魔化しは出来るだろう。)

ポケットにタオルと、小銭がある事を再確認し歩き出す。

3度目の蝶を捕まえ、犯人の場所が分かった所で再度確認をしたが綺麗に断られた。

少し歩くと右手にうづくまる様に座る人が見える。よく見るとパーカーを着ておりポケットに手を入れていた。

(あれか…。)

無言で後ろに止まるように指示を送り、状況を説明する。

「人が座っているとしか分からないんだけど…間違いないの?」

彼女は何か人が居る位にしか判断できないらしく疑いの目を向けてくる。だが間違い無く駅に居た人だ。

少し待って見ていると周囲に蝶が寄って来たことが確認できた。それも駅で見た時より多く。

(穏便には済みそうに無いし…備えておこうか。)

来た道を引き返し、途中で見た販売機から水を買う。中身でハンドタオルを濡らし、右手に持つ。隣で四季ナツメが何をしているのか分からず聞いてきたが、適当な返事しておく。

(さてと、これ以上変な事が起きる前に処理しておかないと…。)

濡れたハンドタオルを軽く絞り水を出す。良い感じになったのを確認してから座っている犯人に話掛ける。

「やあ、そこで座っているお兄さん。どうかしたのか?」

声を掛けるが直ぐに返事が無い。

「……、ああ?俺の事か?」

少し待って居ると生気を感じない掠れた声で返事が返ってくる。

「他に座っている人が居ないからな。あんたって事になる。なんか疲れている様に見えたんでな。心配して声を掛けさせて貰った。」

「…どっか行ってくれ。別に何でもない。」

「いやいや、それも行かない事情があつてさ。」

「そっちの事情とか俺には関係ないだろ。さっさと行ってくれ。」

顔を上げずに返事をしてくる。なるべくひっそりとして居たいのだろうけど、今からこの人は俺の事を無視することが出来なくなる。

後ろを軽くみると四季ナツメが少し不安そうにこつちを見ている。



大丈夫と意思を伝える。

「何言っているんだ？これはあんたにも関わる事だぞ？」

「ああ？俺に？」

こっちの発言に不思議に思い顔を上げて俺を見る。…が、顔を見てもピンと来ていない様子だ。

「誰だあんたは…。」

「おいおい…。もう頭から消えたのか？凶器で切った相手ぐらい覚えていた方が良くないじゃないか？顔を見られているって事だぞ。」

すると目の前の男は目を見開く。

「お前…。まさか駅での…。」

「思い出してくれたか？そう、この肩をあんたに切られた被害者って訳。」

左手でトントンと傷口を指さす。

「なんで俺がここに居ることを…。」

「そんなのは今どうでもいい事だと思っただけど？」

「なんだ、俺を捕まえに来たのか…？」

「まあそうなるのかな…。大人しく自首してくれた方が嬉しいんだけど。」

そうなるとは端から考えては無いが、一応聞いておく。

「ハハッ。わざわざ捕まえに来たのか…。阿保だなお前…。」

「傷害起こす人に言われたくないのだけど…。」

どう考えても阿保はそっちだろう。

「二人で俺を捕まえに来たのか…。ってそこにも居るのか。」

「彼女は付添人。来るなって行っても付いてきただけ。」

「今度は別の女と居るとか…。モテモテだなおい。」

他人から見るとそう見えるらしい。

「それで。大人しくポケットのナイフを捨てて交番に行くことをお勧めするけど？」

「俺が大人しく、従うと思っているのか…？」

「そうなってくれることを願っている所だけでも…無理みたいだなあ。」

先ほどから目の前に居る男の声に力が籠ってきている。交渉は決裂になりそうだ。

「当たり前だろ。捕まってたまるかよ…。顔を見られている奴が目の前に居るんだ…。その女にも見られたな。殺すしかない。」

はつきりと殺害予告をし、ポケットからナイフを取り出し勢いよく立ち上がる。

「全部…ぜんぶっ。殺してやるよ。お前らにも俺の苦しみを味味合わせてやるっ！」

ナイフを構え、息を荒くしながら叫ぶ。後ろからは四季ナツメが悲鳴をあげ、俺の名前を呼ぶが無視する。

「いや、殺したらあんたの苦しみ味合わせること出来ないだろ…。極度の興奮で知能低下したのか？」

わざとこちらに矛先が向くように挑発する。

「馬鹿にしてんのかっ！」

「おお、こわっ。声デカすぎるだろ。」

怯える態度を取り、2、3歩後ろに下がり距離を取る。左手をポケットに入れ小銭を握る。

「逃げんじゃねえ！お前は絶対殺す！」

両手でナイフを握り直しこちらに向ける。刃先は震えていた。

「いや、やめてください、あつ、その警察の方！待ってください。」

今にも襲い掛かってきそうな男の後ろに視線を送り叫ぶ。目の前の男は警察が居ると思い後ろを向く。勿論誰も居ない。

「誰も居ないじゃねえかよ…。」

こちらから視線を外し安堵した様子でこっちに振り返ったと同時にポケットに入っていた小銭を全力で投げつけた。

「つまらねえ嘘を…っつ!!いだっ。」

油断したところに顔に痛みが走り顔を手で覆う。完全にこちらを見ていないと判断した隙で右手に持っていたハンドタオルを手加減なしで男の顔目掛けて振り抜いた。

肩にかなりの痛みを感じたが無視する。

(また血が出るだろうなあ…。)

裏路地に破裂音の様な音が響く。後ろの四季ナツメからまた悲鳴が上がっていた。

男は顔を抑えながら地面にうずくまる。即座にナイフを持っている手を足で踏みつける。

「つがぁー」

訳も分からずに腕に痛みが来たことで反射的に手を放す。反対の足でナイフを抑え、拾われないように後ろに蹴る。

(取りあえず後はこの男が抵抗出来ないようにするだけだな。)

この後の事を考えようとしていると後ろから悲鳴が上がった。何事かを見ると四季ナツメが滑って来たナイフに驚いていた。

「あ、ごめん四季さん。驚かせてしまった。」

「あ…いや、大丈夫。変な声出てごめん。」

「いや、そんな事ないか」

気にしていないと返そうとすると、うずくまっている男が雄たけびの様な大声を出した。咄嗟に顔を向けたと同時に手を押さえつけていた足に男の手が振り下ろされた。

殴られるような衝撃と、足に何かが刺さるような感触がした。

「踏んでんじゃねえ！どけっ！」

男が手を離し、足を見ると持っていたナイフより小さいナイフ。小型の7つ道具に付いている折り畳みナイフが刺さっていた。

手から足をどけ、男の鼻を踵で蹴り一歩下がる。刺された足を確認すると骨と骨の間に刺さっており、靴のお陰か貫通とまでは行かず途中で止まっていた。

「澤田君っ!？」

後ろから何されたかまでは分かってはいないが、心配をするように名前を呼ぶ。返事をしたいが今はそれどころではない。

男を見ると、鼻を抑えながら地面に伏せていた。多分折れたと思われる。

刺された右足を地面につけ感覚を確認する。滅茶苦茶痛いけど今の所は我慢は出来そう。

男に近づくとうめき声と憎しみが籠った声を出していた。

「やりやがった…、殺す、殺す。もう許さねえ…っ！」

(そろそろ人が来そうだし足を早く診せないといけない。時間をかけられないな。)

大通りからは少し外れているが、それでも人通りはあるし、大きな音や声が聞こえたら見に来るし通報だつてするだろう。

(穩便とか四季ナツメに見られたくないとか言っている場合じゃないな。)

未だに伏せている男の前に立ち、左足で後頭部を踏みつける。

男から痛がる悲鳴が聞こえるがそれを無視し何度か踏みつける。

地面のアスファルトをバウンドし、顔と隙間が出来た所を再度踏み抜く。何度か繰り返すと男から頭を庇いながら懇願している様言葉に言葉を繰り返している。多分謝つたり許してくれとかだろう。

言葉を無視して繰り返していると、次第に声が小さくなり抵抗もなくなつた。

足をどけて男の髪をつかんで顔を上げるとまだ意識は残っており、こちらを見ていた。

「……あ…。も…。……して…。」

呻き声を出し、怖がるように俺の目を見ている。

「これからお前は警察に捕まる。その際、ここで起きたことを話すな。返り討ちにあつたとか適当な事を証言しておくように。理解したか?」

相変わらずうめき声をあげているが此方の言葉には反応を示している様子。

「間違つても今日の俺ら3人の話を出さないように。分かったら反応して欲しいのだが?」

なるべく静かに淡々と声を掛ける。男から小さく了承の返事が返つてきた事を確認し髪を離す。

最後に側頭部に蹴りを入れ、気絶したことを確認する。

(今度は大丈夫だな。もう無視しても良いだろう。)

さっきの様な事にはならないと判断し男から離れ、四季ナツメの方を向く。彼女は俺の方を怯えたように見ていたが、足の方を見て目を

見開く。

「……え、澤田君？これってナイフじゃ…。」

「いや、これは…、最新を取り入れた靴のアクセサリーなんだけど…。どう？似合っている？」

心配させないように、肩の時と同じように聞く。

「それってさつき足を殴られた時に刺されたの!?それより大丈夫なのっ！」

「今の所はまだ大丈夫。めちやくちや痛いけどな。」

「急いで病院に行かないと…！えっと、先に救急車をつ。」

今日の明月葉那と全く同じことを言いながら慌てている。なんか面白い。

「待て待て、まずは落ち着け。」

「落ち着ける状況じゃないでしょ!?ナイフが刺さっているの!」  
もしかしてここまでがテンプレなのかもしれないと思う。

「慌てるのも分かるがまずは場所を変えたい。そろそろ人が来ると思う。」

周囲には点々と店や、家らしき建物もある。何かと見に来る人も居るかもしれない。

「えっと…、移動したら良いの?ここじゃまずい…?」

「今を誰かに見られるとまずいからな…。ごめんだけど軽く肩を貸して頂けると…助かるのですが。歩きにくくて。」

「変な遠慮しなくて良いからっ。早く捕まって。」

四季ナツメの肩を借りながら来た道に戻る。右肩を掴んで貰っているが、肩の傷が地味に痛む。

「ここら辺なら人も居なさそうかな…。」

来た道の途中で更に細道に曲がり、コンクリートの段差に腰を下ろす。

「ここで一旦良いの?それで、足の怪我はっ！」

「軽くナイフが刺さっているだけで、骨は避けてるし貫通もしていない。血がこれ以上出ないようにしないと。」

沁み込むようにじわじわと出ている。多分動脈からでは無いのだ

ろう。

「こういう時、どうしたら良いの？取りあえずナイフを抜いた方が  
良いの…？」

「あー、いや逆に血が出てしまうから一旦抜かない方が良い。栓に  
なっているからな。」

「心臓より高い位置に置けば良いって聞いたことあるけど…。」

「まあそれは正解だな。今は傷口を直接触れないから間接的に抑え  
る位しか出来ないかな。」

ポケットから余ったハンドタオルを取り出し足首に巻きつける。  
ついでに気休めに靴紐を絞め直す。これで少しは抑えられると良いが。

「今可能なのはこれ位だろう。ごめんだけどまた肩貸してくれない  
か？」

「どこに行くの…？」

「夕方言った様に病院には行けないからな。手間掛かさせるがステ  
ラに引き返したい。」

「閣下に対処して貰うって事？大丈夫なの？」

「大丈夫。直ぐにどうこうなる怪我じゃないからな。めちやくちや  
痛いけど。」

「…：分かった。じゃあ急いでお店に戻らないと。」

(急いでって…、こっちは怪我人なんだからお手柔らかに頼むぞ  
…。)

怪我の痛みを表に出さないように我慢しつつ、またステラに引き返  
した。

## 第18話：傷の責

今回は四季ナツメとステラに戻って来た。

(半日の間にまさか2度も来ることになるとはな…。)

「ちよつと待つてて、閣下達呼んでくるからっ。」

フロアの席に座らされ、慌てるように奥へ消えていった。恐らく二人が間借りしている部屋に向かったのだろう。

(この足…、どうしようか。靴の中に血が溜まってはいないけど。抜くの嫌だな…。)

この後の事を考えげんなりしていると、奥から走ってこっちに向かってくる音が聞こえて来た。

「澤田さんっ！また怪我をされたのですか!?今度は大怪我だつて。」

「おお、声でかつ。大怪我は大げさな言い方だけど、ちよつとままずいかな…?」

右足を少し持ち上げ見せる。

「え、これってナイフが刺さっていますよね?どう見ても大怪我なのでは…?」

驚愕の表情で固まっている。やっぱりそうなるよね。

「これのどこが大げさなのですかつ。早く手当てをしないと…!」

「お前は少し落ち着け。」

目の前で慌てている明月葉那の後ろから救急箱を持った閣下が出てきた。その後ろには四季ナツメがおり、バケツを持っている。

「ミカドさん。流石に2度目は対応が早いな。」

「四季ナツメが何やら慌ててきたと思えば血の匂いが付いていたのだな。大方予想は付く。が、まさか追加で怪我をしてくるとは思っては無かつたがな…。」

救急箱を開けながらチクチクと嫌味を飛ばしてくる。痛いのは怪我だけでは足りないらしい。

「これはまた…。急いで処置する必要があるようだな。」

「二応軽く応急処置みたいのはしているだけだから。」

「分かつた。他が汚れないようにバケツに足を入れておくと良い。」

足を怪我したと聞いていたがナイフが刺さってるなど想定外にも程があるぞ。」

「こっちも肩に続き足にも流行が来るとは俺も想定外だった。ファッションには無頓着なつもりだったんだけどな。」

「くだらない事を言っている場合か。……栞那と四季ナツメは奥の部屋で待ってるの良い。あまり目に映したくない事をするのでな。」

「ミカドさん。私は大丈夫です。」

「今の四季ナツメを一人にしておくつもりか？奥で落ち着かせてやれ。」

横目で見ると四季ナツメが青ざめながら俺の足を見ていた。状況が多少落ち着いた事で怪我の具合がより分かったのだろう。確かにこれ以上見せるのは良くないな。

「そうそう、これ以上痛いのを見せたくないし。そろそろやせ我慢するのも限界なんだよね。男のプライドとして情けない所見せたくないから出来れば奥で待ってて欲しい。」

「……分かりました。私達は奥で待っていますね。ナツメさん。行きましょう。」

「え？あ…、うん。分かった…。」

されるがまま連れて行かれた四季ナツメを見届け、閣下を見る。

「それじゃあミカドさん…、一思いにやってくれ。」

「我慢出来るのか？途中で止めることは出来ないぞ。」

「ああ、やってくれ。いや、声出ないように何か布とか噛ませて頂けると助かる…。」

「全く…。ほれ、このタオルを噛んでると良い。」

「ありがとう。」

小型のタオルを閣下から受け取り、口に啞え、噛む。

「では、始めるぞ。」

ナイフに手を掛けた閣下に、覚悟決めて頷く。

長い長い痛みとの我慢比べが始まろうとしていた。



「…これで取り敢えずは一安心だろう。」

閣下から完了の言葉が出た。正直痛すぎて体を搔きむしりたかった気分だ。ようやく終わったようだ。

（二度と味わいたくないな…。ナイフを抜く感覚とか人生で一度だけで十分だこんなの。）

変な汗を拭きながらバケツを見る。中には血で染まった靴と靴下が漬けられていた。処分どうしよう。

「暫くは動かないようにしておけ。肩も極力動かさないように。また傷口が開くからな。」

絶対安静を告げた閣下は、バケツを持って席を外す。

（あ、後処理までしてくれるのか。本当に助かる。）

後で何かお礼をしないといけないと考えていると、奥の部屋から二人が出てきた。

「お二人さん。どう？四季さんは落ち着いた？」

「ええ…。少しは。それより怪我の方は…。」

「ミカドさんに手当して貰ったから一先ずは大丈夫。まあ、暫くは安静にするのと、履物が履けなくなった位かな。」

踵を地面に下ろす。振動で痛みはあるが、歩こうと思えば歩けなくは無い。怪我を治すなら安静にするのが無難だろう。

「取り敢えずは大丈夫なのでね…。はああ、良かったです…。」

明月栞那から安堵のため息が出る。気が気じゃなかった様子。

「あの、澤田さん。一体何があったのですか…？」

「まあ色々？軽く説明すると今日駅に居た犯人を追って行ったら怪我を負った感じになるかな。」

「え、それって駅に居たあの人ですか？」

「そう、その人。撃破には成功したんだけど、反撃されたのがこれ。」  
左指で足を指す。

「どうしてそんな危険な事を…。」

「こっちにも色々事情があつてさ。出来る今の内に片付けておきたかった。詳しくは企業秘密って事じゃ駄目か？」

説明する気力が起きない為、奇跡関連で行動したと杭を打つ。

「……、なんだか全部それではぐらかしてしまいそうですね。もやもやします。」

明月葉那も察したのか四季ナツメをチラ見し、聞くのを止める。うん、俺も便利な言葉だと思う。

「澤田君が怪我をしたのは…、私が声を上げてしまったからなの…。」

すると、横から説明が始まってしまった。

「四季さん、ストップ。あれは四季さんが悪いわけではない。」

「で、でもっ、私の方を見たから…！そのせいで足を…。」

「違う。あれは目を離れた俺が悪い。大丈夫だと油断して四季さんの方を見てしまったからな。」

「私が悲鳴を上げなければ見ることも無かった…。」

「いやいや、普通ナイフが自分の所に滑って来たら誰でも驚くから。だから仕方なかった。それを言ったら後ろに蹴った俺の責任でもあるからな？」

「あの…、お二人で盛り上がっているのですが…、状況が全く見えなくて。」

言い合いをしていると横から申し訳なさそうに明月葉那が手を挙げる。

「犯人を澤田君が取り押さえたんだけど…、その際持っていたナイフを犯人から遠ざける為に蹴ったの。それが私の場所に来て思わず声を上げちゃって…。心配してこっちを見た隙に足を刺されたの…。」

「なるほど…、それでどっちの責任か言い合っていたのですね。」

「犯人と対峙しているのに油断した俺が悪い。完全に仕留めたか確認もせず隙を見せた。そこを犯人に衝かれた。声を上げた四季さんの安全を確認する判断をしたのも俺。だから気にしなくて良い。」

「気にする…私が居たことで澤田君が怪我を負ってしまったんだから…。」

「何をさつきから騒いでおるのだ？」

埒が明かないなと思いついて始めた時、奥からミカドさんが戻ってきて

た。どうやら片付けが終わったらしい。

「いや、怪我の責任の所在を話し合っただけだ。」

「まあ…。お互いに平行線に行きそうな気がするのですが…。」  
苦笑いしながら明月葉那がそう言ってくる。確かに同感。

「今日はもう遅い。話し合いは明日にしておけ。どうせこのままだと決着はつかないのであろう?」

話し合いが終わりそうに無い事を察したのか、閣下から解散の提案が出る。

「そうだな。時間も遅いし今日は解散としようか。念のため明月さんは四季さんを送って貰っても良いか?」

「分かりました。確かにお互い少し時間を置いて落ち着いた方が良いかもしれませんね。」

「という事で、四季さん。今日は解散という事で。今日は帰って気持ちを落ち付かせてほしい。」

「…：わかった。今日はそうする。」

しよんぼりと落ち込んでいるが、自分以外が解散ムードの為それを受け入れた様だ。

「それでは私はナツメさんを送り届けてきますね。」

「おう、夜道に変な人に声掛けられても付いていくなよー。」

「子供じゃありませんししませんよそんな事…。」

「あ…：。澤田君…。」

「ん?四季さんもまた明日。気を付けて帰ってくれよな。って俺が言えた事ではないかもしれないけど。」

「あ…：。うん、また明日…。」

何か言おうとしていたが、無理やり送り出す。明月葉那に連れられ店を出ていった。店に残ったのは俺と閣下だけだった。

「…さて、話を聞かせてもらおうか。四季ナツメの事は葉那に任せとくと良い。」

「そうする。って言っても大した話じゃないけどな。」

閣下に今日店から出た後の流れをざっくり話した。途中で何か言いたげではあったが話の最後まで口には出さなかった。

「経緯は理解した。全く貴様は…。捕まえに行ったのに怪我をして帰って来るとは…。しかも犯人から目を離した隙を突かれたとはな。」

「まあ確かに四季さんが付いて来たことで怪我をしたとも言えなくは無いが、大丈夫だと判断したのも俺だからな。それで怪我を負ったのならその責任は俺にある。向こうは納得してくれ無さそうだけ…。」

「当たり前であろう。四季ナツメから見れば自分が無理やり付いて来た挙句足手まといになったと思っっている筈だ。自分を優先したせいで刺されたのだとな。」

「その認識が間違っっていると思うのだけどなあ…。そこは価値観の違いによる物か。明日そこも含めて話し合ってみるさ。」

「平行線にならんようにするのだな。それより貴様、その男の蝶に触れたのに影響はないのか？」

「ん？ああ。感情を左右されたりとかは何とも。情報が急に來て驚いた位だな。魂の方は…。よくわからないが何か変わってたりする？」

「いや、説明の最中に見たがこれと言って変化は見られなかった。」

「そうなのか、大丈夫なら良かった。」

「普通なら多少影響が及ぶ筈なのだが…。絶望や憎しみの感情などは特に魂に影響を及ぼしやすい。耐えられるとは思えないのだが…。」

「でも実際変わっていないのだから？」

「そうなのだ。だから不思議に思っている。揺らぎの一つすら見当たらないとは…。何か心当たりなどは無いのか？」

「心当たりか…。いや特に思い当たらないな。っていうなら蝶から流れ込んできた感情？が言う程伝わって来なかったっていうのか。あんなに殺意があった割にはしよぼかった印象を受けたな。」

「今朝の大家の時はどうだったのだ。」

「大家さんの時は、悲しみや失望感があったな。その時は特に違和

感は無かったな。多分ダイレクトに来ていたと思う。」

「その二回で何か違いがあるかもしれない。何か分かったら小さなことでも良いから言うといい。お前については未だに謎だらけだからな。」

「了解。何か分かったらその時改めて連絡する。それと出来ればで良いんだが頼みごとがある。」

「どうかしたのか？」

「明月さんが戻って来たらでいいんだけど、犯人が居た現場を後で確認してきて欲しい。男がどうなったかと、もしかしたら未だに蝶が彷徨って居るかもしれない。」

「場所の詳細を聞こう。紙を持ってくるからそれに駅からのルートと蝶を回収した場所も書いてくれ。」

閣下から紙を受け取り、出来るだけ道のりを細かく書き終え明月葉那の帰りを待った。

## 第19話：後悔

お店から出て明月さんと家までの道を辿る。お互い無言のまましばらく歩く。今日起きた事と彼に対しての罪悪感が頭の中でずっと繰り返していた。

（澤田君は気にするなと言っていたけど…。彼一人だったなら、多分難なく捕まえていたんだと思う。）

思い返す度に考えてしまう。彼は最初から犯人が襲い掛かって来ることを予想していた様に見えた。暗くてしつかりとは見えていなかったが、犯人を倒すまでの行動がスムーズだった。

（後ろに気をおかせた隙に顔にポケットからお金を投げたんだと思う…。その直後に買った水で濡らしたタオルで顔を叩いた。倒れた後直ぐにナイフを犯人から遠ざける…。予めすることを決めてないとあんな素早くは動けないと思う。）

犯人と対峙している時も緊張感や恐怖心などは見られなかった。煽っている場面もあった。

（ただ…。）

ナイフで刺された後、その辺りからが予定とは違ったのだろう。私が声を上げたせいで足を刺された。その後、犯人の頭を踏み抵抗出来なくなるまでそれを続けた。

刺された事に対してではなくて、あくまで抵抗しなくなるまで淡々と踏みつけている様に見えた。実際、動かなくなった頭を掴んで様子を確認していた。そこに怒りなどは無かった。

（普通痛がったり、刺されたことに怒ったりするものじゃないのかな…。）

犯人を気絶させた後も特に変わった様子も無くこちらの安否を確認してきた。その変わりの無い事に怖く感じてしまった。

（ただ、私に心配されたくない為だったはずなのに…。）

私が怖がっていた顔を見て心配させたくなかったのか、痛いのを顔に出さず冗談まで言ってきた。ナイフが刺さって痛くないはず

が無い。彼はそれを必死に我慢していたのだろう。

その後お店で閣下が手当してくれたおかげで何とか済んだ。その間私は、それをただ待つことしか出来なかった。

(私のせいで怪我を負わせてしまったのに…。)

何度考えても自分が悪いと考える。彼はそれは油断した自分が悪いと言ってはいたが気を遣ったのだろう。

(やっぱり私は…。)

もう何度目か分からない。自分のせいで人に迷惑を掛けてしまった。そう思うだけで自分の存在がどれだけ要らなく、ちっぽけな物だと再認識してしまう。

「…ナツメさん。大丈夫ですか？ずっと暗い顔をされていますよ。」  
私はずっと暗い表情を浮かべていたからか、明月さんが声を掛けてくる。

「…今日の事をずっと考えていたの。わたしのせいで怪我をさせてしまった事を…。」

「それについてもっと詳しくお話聞かせて頂けますか？軽くは聞いていたのですが…。」

「…そう、ね。ちゃんと話しておく。」

私は今日の出来事を明月さんに話し始めた。

「なるほど、その男の人を気絶させた後お店まで戻ってきたと…。」

「そう、後は明月さんも知っている事になる…。」

「ナツメさんが彼に後ろめたい気持ちになっっている事は分かりました。私も今日澤田さんに怪我を負わせてしまったのでとても分かります。」

「どっちも彼のせいでは無い怪我なのよね…。」

「そうですね…、けど澤田さんはそれを認めようとは思いません。あくまで自分が決めた事。行動を起こしたのも自分なのだ。私達のせいで怪我を負っていないと…。」

「どう見ても、違うと思う…。」

「私もそう思います。私を庇ったが為に受けた傷。ナツメさんの方

を見た為に受けた傷。どう考えても澤田さんが悪いとは思えません。けど彼はそれに怒ったり責めたりはして来ないのですよね…。」

「いつそ怒鳴られた方が良い…。私達に気を遣わせている分余計罪悪感を感じる…。」

「まあ…。彼の場合は本気で自分の責任と考えているかも入れませんが…。」

明月さんが困った様に笑う。

「あの…明月さん、聞きたい事があるんだけど…。」

「どうかされましたか？」

「彼って、一体何者なの？」

こちらの問いかけに明月さんは真面目な顔をする。もしかすると聞いてはいけなかったことなのかもしれない。

「何か思う事でもありましたか？」

「思うところは…色々ある。おかしいと思う事も。澤田君とは関わったばかりなのに不思議に思う事が多すぎる気がして…。」

「ナツメさんから見て、彼はどう見えたのですか。」

「最初はなんだか普通の人だなとしか、蝶の関係で来たから多少事情が私みたいにあるのかと思っていたからあまり気にはしていませんでした。」

自己紹介の時、明月さんに確認をしていたから何か言えないことがあるのだろうか位には。

「話していても特に普通だったし無害そうな人で良かったとかそんな程度。けど今日…。」

今日の裏路地での彼を思い出す。

「彼を追うために裏路地まで後を付けたんだけど、声を掛けた時驚いている様子が無かったの。最初からバレていたのかなと今では思う。」

「その後、私が一緒に行こうとすると彼は静かに帰ってくれと言ってきた。その時なんていうか…。彼に対して凄く…怖いと感じてしまった。」

「他にも凶器を持っている人を相手にするのに怖がっている感じは



無くていつも通りだった。実際難なく刃物持った相手を倒していたし…。それに…。」

私が…。私のトラウマを、さも知っているかのように言ってきた。それについてはなぜ知っているのか分からない。

「それに…？」

「その…、彼は私を引き離すように私のトラウマ…に感じている事を言ってきたの。明月さんや閣下にも話してないのに…。」

「まるで心の中を覗かれた様に感じてしまった…、という事でしょうか。」

「多分…そう。どこかで感づかれたのかもしれないけどね…、彼、人を良く観察してみたいだし。」

そんなところだろうと考える。明月さんを見ると何かを考えるように目を閉じていた。

「明月さんは彼の事を私より知っている様に見えたから聞いていたのだけど…、もしかして話せないような事を聞いた？」

「ナツメさんは…、澤田さんから直接何か聞きましたか？」

「え？、特に何も…。借りている部屋位？後は自己紹介の内容程度だけ…。」

（そう聞くと彼の事は何も聞いていない。生まれ変わったとは言っていないけどその前の話とか…確か喫茶店で働いていたぐらい？。）

「実は澤田さんにも色々話せない事情があります。これについては本人が話せるタイミングで話したいと仰っていたので私やミカドさんも詳しく聞けてないです。」

どうやら二人にも話していない事情があるらしい。

「私が知っているのは、澤田さんは今に生まれ変わる前の人生では、あまり恵まれた環境では無く、命を落とす可能性が常に隣り合わせな状況を生きたのだと思います。これはミカドさんの予想ですけど…。」

「え…？命の危険が？」

「はい。恐らくは…。ナツメさんが今日見たのはその様な環境で培った姿だと思われれます。」

頭の整理が追いつかない。確かに一般の人じゃないのなら納得は出来る。でもそんな環境に身を置く事なんて日本では考えられない。

「軍人や紛争地域に居たとか…?」

「それは分かりませんが、多分その様な職に就いては無いかと…。住んでいた場所も日本と言っておられましたし…。」

現代の日本でそんな事はあり得るのだろうか疑問に思う。常に命の危険に晒される事になるとは思えない。

(でも実際に目の当たりにした事は事実…。普通に過ごしていてあんな事が身につけるとは到底思えない。)

知りたがって聞いたはずなのに更に謎が深まった気がした。

(彼は本当何者なのだろう…。)

考えれば考えるほど違和感が出てくる。

「ナツメさん。」

「…何?」

「澤田さんの事が分からず不思議に思う事は仕方ありません。私だつて未だに何者なのか気になります。けど…。それに対して不気味そうに見たり、恐れたりはしないで下さい。澤田さんが何者であろうが、私達を助けてくれた人には変わりないのですから…。」

明月さんが諭すように優しく言うてくる。

「…:分かつてる。恩人である事には変わりないのだし…。」

「そうですね。それに彼は…。思ったより周りを気にする臆病な人ですから…:にひ。」

「そうは見えないのだけど…。」

「まあまあ、それは追々知っていきますから。今は帰って休ませよう。澤田さんとは明日改めて話し合いますでしょうか。」

「…:そうね。今日は大人しく休むことにする。」

頭の整理は出来たが、新たな謎が出てくる。今日は考えるのを止めて休むことにした。

明月さんと別れ、お風呂に入りベットに入る。分かっていたが寝

ようとしても眠れない。

(帰ってからお風呂の時も同じことを考えていたし…、やっぱり眠れない…。)

澤田君に迷惑を掛けた。わたしのせいで足に怪我を負わせてしまった。彼は暫くの間普段の生活に支障をきたしてしまっだろう。

(あの時私が引き返していれば…。)

何度も後悔をするのは同じ事、あの時そうしていたのなら彼は一人で怪我を負わずに終わっていたのではないかと。

(明日、澤田君に謝ろう。そしてなるべく関わるのをやめてしまおう。私に関わる事でまた誰かに迷惑が掛かってしまうなら…。)

今までの様に人と距離を置いて、望まない毎日を過ごして行こう。そう決めた。彼の事はもう巻き込んでしまっているけど、これ以上しないようにしていこうと。

そう心に決め、眠ろうとしたが、結局頭の中に同じことが繰り返され、眠れたのは随分と後の事だった。

## 第20話：仕返し

暫く閣下と話していると、裏口の扉から明月葉那が戻り、入れ違いで閣下が出ていった。

「おかえり。四季さんは無事家まで辿り着いた？」

「はい。部屋に入る時までしつかりと。」

「それは良かった。それと帰り道での様子はどうだった？」

「まあ、とても落ち込んでいました。」

「だよー…。悪くないって言っても素直に聞いて貰え無さそうだしな。」

「そうだと思います。私だって駅でのはまだそう思っていますから…。」

「さてさて、それを蒸し返さないで欲しい。問題が増えるから。あれはさつき話したので終わりになっているから。流石に二人にそんな反応されたら困るぞ。」

「分かっています、ただ私の中では割り切れてないだけです…。」

「変に恩義を感じないでくれ。多少の感謝位で十分。何かあった時に手を貸してくれる程度の気持ちで良いから。な？」

「はい。何か困った事があれば言ってください。勿論お返しとは関係なくても手伝いますので。」

「四季さんの事は明日話し合って何とかするとして、今問題なのはこの足でどう帰ろうか…という事なのだが。」

「歩くのは駄目ですもんね…。となると此処で泊ることになるのですが…。」

「タクシー呼ぶじや駄目なのか。それなら一人でも帰れると思うのだが。」

「それも考えたのですが、怪我されている状態で一人にするのは危険だと思うので…。帰った日は良いのですがその後が大変なので。」

「確かに。飯とかあるし此処に来るたびに毎度タクシー使うのも金使ってしまうな。」

「はい。なので多少回復するまではここに居られた方がお世話などもしやすいかと…。」

「世話って言っても包帯の付け替え程度だけだな。」

「他にも細かい事はしますよ。任せてください。」

若干やる気に満ちている様に見えるのは気のせいでは無いのだろう。

「歩くのが難しい分甘えることにするよ、よろしく頼む。」

その方がそつちも罪悪感を感じずに居られる事だしな。

「じゃあ、取り敢えずは二人が間借りしている部屋まで行っても良いか？階段は出来れば補助してくれると助かる。」

「分かりました。それじゃ案内しますね。」

明月葉那に連れられ店の奥に行く。歩く分には問題はあまりなさそうだが痛みは流石にある。階段は一步一步上がる事で何とかなかった。

「此処が私とミカドさんが間借りしているお部屋です。と言っても特に何も無いのですけれど。」

「へえーこんな感じなんだな。秘密基地みたいでテンション上がる。」

屋根裏部屋みたいで少し圧迫感が出ている。そこがまた良い。

「子供とかそういう場所好きですよ。隠れ家みたいな感じが。」

「そうそう自分達だけの遊び場とかそんな感じ。」

改めて見渡す。多少狭いが人一人程度なら十分すぎるだろう。

ベットは一つしかないのは仕方ない。床にでも寝かさせてもらおう。

「あの…、そんなに観察されると何だか恥ずかしいのですが…。」

「ああ、ごめん。見過ぎてた。ミカドさんもここで寝ているのだよな?。」

「そうですね。ミカドさんもここで寝泊りしています。まあ、私に合わせてですけど。」

ああ、確かに一人だったらもつと快適な場所があるのかなんとか言ってたな。猫にとつてのだけだ。

「なので、残念ですが澤田さんと二人きりではありませんよ?。」

隣を見ると揶揄うような顔でこちらを見ている。これはこっちの反応を楽しもうとしているのだろう。

「どうかしましたか？こちらを見て。もしかして…何か期待していましたか？」

（うーむ。このまま揶揄われるのはなんか癪だし、逆に俺からも仕掛けるか。）

にやにやしながら俺の返事を待っている明月菜那を見て、こちらも挑発的な笑みを作る。

「そうだな…、けど今はミカドさんは居ないから実質二人きりって事になるのだけど？」

「おや、そういわれると確かにそうですね。もはやそれを狙って此処にきたのですか？計画的ですね。澤田さんは。」

「さあ…。計画的だったかどうかは今から証明される事だしな。」

「証明だなんて、一体どんないやらしい事を計画されていたのか。」

「いやらしいかどうかは実際に味わってから判断すると良い。」

「怪しい笑みを作り一步距離を詰める。」

「実際にって、え…澤田さん？」

「こちらが距離を詰めたことに驚き一步下がる。更に一步距離をゆつくり詰める。」

「あ、あの、無言で距離を詰められると怖いのですが…、って聞いていますか？。」

「あ、あの、無言で距離を詰めてこないでください、きやあつ！」

「だからつ、無言で距離を詰めてこないでください、きやあつ！」

「べべべ、ベツトツ。もう後が…！」

後ろを見たがもう下がれる場所が無く、あわあわしている。なんか

うける。

「あああ、あのっ！確かにお世話をするとは言いましたが、そういった下の世話までするとかの意味では無くてですね……！」

もはや早口で何をいつているのか聞き取りづらくなっているが、それでもゆっくりと距離を詰めていく。

「単純に身のまわりのお世話をするって意味で言っただけですの……!!」

目を閉じて顔を逸らしながら、両手をぶんぶんを振っている。

(これ以上は流石にアウトだし、この位にしておこう。全く。押しに弱いのに喧嘩吹っ掛けてくるから……)

「さて、明月さんもベットに到着した事だし、寝るとしますか。早めに休んだ方が怪我も治りそうだしな。」

スツと体を離して背を向ける。

「え……、澤田さん……？」

「ん？どうかしたのか？もう寝るの难道ろ？」

とぼけるように問いかける。

「冗談だったのですか……？てつきり本気の顔に見えたので……。」

「いやー明月さんの冗談に付き合っただけだけど……、お気に召さなかったか？」

ぼかんとした顔でこちらを見てくる。うむ、満足。

「はあああああ……、冗談だったのですか。安心しましたよ……。」

心の底から安堵のため息をしている。本気なわけがないだろうが。

「急にいやらしい笑みで詰め寄って来るから焦りましたよ……。逃げようにもベットで逃げ場無くなりましたし……。」

「お世話になってる恩人にそんなことする訳ないだろう。ちよつとしたジョークだ。」

「タチが悪すぎますよ……全く。抵抗しようにも怪我人ですし……。はあああ。」

更にこちらに罪悪感を感じている手前、強く出ることも出来なかったことだろう。

「そんな事する人に見えたのか？」

「そりや、澤田さんだつて男ですし？、女性と二人きりになったらそんな欲が出てもおかしくありません。怪我を盾に迫つて来たらこちらは文句言えませんし…。」

「俺がくそ野郎判定されたのは良く分かった。」

「ああつ、いえ、あくまで仮定ですから。そんな人では無いと分かっていますから…。」

「大丈夫。手を出すことはないから安心してくれ。」

「そういわれると何だか女として負けた気がします…。」

俺にどうしろと。それに手を出したらもはやNTRになってしまうだろうが。正確にはまだだが…。高嶺昂晴と結ばれる可能性があるヒロインに手を出すとか完全にギルティになる。

「明月さんに魅力が無いと言っている意味ではないから。寧ろ魅力があり過ぎてやばいから。魅力お化けだから。」

「分かっています。安心できるように言つてくださってる事は。でも、その適当な返事は如何な物かと…。」

「違う違う、本当の事。ありすぎて簡潔に言つただけ。語つたら朝までコースになってしまうからそれを避けているだけ。」

「ほんとですかあ？その場しのぎに聞こえるのですが。」

「何なら語つてあげようか？その代わり、明月さんが悶えながら止めてくださいと言つても止まらなくなるけど。」

「……、やっぱり止めておきます。澤田さんには色々知られてい  
る様な気がして勝て無さそうなので。」

(そりや当然勝てる訳なからう。こちらら未来の出来事も把握済みだからな。原作知識最強。)

「いやいや、俺が分かっている事なんて微々たる物だから。流石に個人情報とかプライバシーの細かい所までの把握は厳しいし。」

「どうだか。先ほども私達が間借りしている場所が階段を上がらないと行けない場所だつて知っていましたし？話した憶えは無いと思うのですが…？」

こちらをジト目で見てくる。そういえば話していなかった様な気



もする。

「…それは、この建物の構造から予想を立てたのですよ？一階は喫茶店だから住むとなるなら二階になるだろうと…。」

「私達がここに部屋を間借りしている事を知っている事については、どの様な弁解を？」

「ああ、うん。そこは簡単。俺や四季さんが帰るのに二人とも毎回店に残っていたからな。今日だって店の奥から出てきてたし、この建物のどこかに寝泊りしているんだろうなって予想は付く。」

「もしかしたら戸締りをしていただけかもしれないよ？」

「それなら皆でして店を出るだろ？四季さんが戸締りせず放置していくわけ無いし。それにミカドさんや明月さんや明月さんと呼びに行くとき、向かう先に迷いが無かったからな。」

弁解する必要は果たしてあるのか微妙な所だが、何となく誤魔化しておきたい気分だった。

「なんだか予め用意していた模範解答みたいな言い訳ですね、想定済みでしたか？」

「聞かれたくないことについては用意しているぐらいかな。そんなに引き出しがある訳ではないぞ？」

「そういう事におきます…。それと、今日みたいな怪我を負ってしまうやり方はあまりしないでいただけると…。」

「そうだな。そこは自分でも反省している。さっきのでも四季さんを確実に家に帰しておけば良かったと今更ながらな。変に付いて来られるより横に置いた方が安全だと考えてしまった。そのせいで怖い目に会わせてしまったからな。」

話していると、今家で一人だが大丈夫だろうかと心配になってくる。思い出して眠れなくなったりとかなければ良いのだが…。

「いえ、私が言いたいのはそこでは無くて…。澤田さんご自身の事を言いたいです。」

「ん？ああ。結果的に怪我を負ってしまったからな。」

「怪我についてもですが、…。私が言いたい事分かりますか？」

試すような目でこちらを見てくる。この流れで言いたい事は大概

決まっているかと思うのだが…。

「まあ…、今の会話の流れからして俺が危険な目に会う事で心配する人が居るって話だろうとは思っているが…?」

「確かにそれもあります。澤田さんからすれば大丈夫だと分かっているとは思いますが、知らない身からすると不安に思います。」

「他にもあるのか。」

「はい。危険な事に自ら進んで行こうとするその考え方を聞いていると…とても心配です。」

「自ら進んでいるつもりは無かったが…。」

「澤田さんは…未来がわかってしまう分、先回りをしようとする考えが染みついていているかと思われます。何か危険があるのなら自分で片付けてしまえば他に影響が出ないだろうと…。」

聞いていると何やらよく分からない事を語り始めた。

「奇跡の事を広めたくないから内密に事を進めておきたいお気持ち は理解出来ます。けれど…、今回の様な事があれば一言相談して欲しかったです。」

申し訳なさそうに目を伏せて言ってくる。いや、そんな神妙な面持ちで言われても…。

（そんなつもりは無かったのだが…。そもそも今回は未来視で見て事前に対処しようとかでは無かったし…。）

どうやら明月葉那から見るとそういう風に見えたらしい。

「私は勿論。ミカドさんだって何か澤田さんの助けになれないかと思っっています。なので可能な限り協力させて欲しいです。でも無理強いはしませんから、澤田さんが良ければいいので…。」

どうやら、今回の一人で犯人を捕まえるのを相談もせずに向かった事が…。というこころらしい。

（確かに偶然見つけた所はあるが、二人に相談するのもありだったのか?けど、9月28日を迎えていない段階で何かに巻き込まれるのは避けないといけない。）

「分かった。今回は偶然って所も強いが、もし今回の様な事があれば2人に連絡をすることにしておく。心配を掛けさせたくないから

な。」

考えた結果これが出る譲歩だろう。連絡はするが一緒に行動するわけでは無い。

「ありがとうございます。無理はしないで下さいね？澤田さんの身に何かあった時、私達は勿論。澤田さんのご家族にも心配させてしまいますから…。」

このお店の人達に心配をさせてしまうならなるべく気を付けた方が良さそう。しかし、家族と来たか。

「家族ねえ…。存在していれば良いのだけどな。」

思わず小声で呟いてしまう。この世界に居ない事は分かり切っている。それに知人なども誰一人いないと…。数日過ごしただけで分かってしまう。

「え…、それはどういう意味でしょうか？」

小声で言ったが、しっかり聞こえていたらしい。目の前なので当然でもあるが。

「いや、何でもない。それより、そろそろ寝ないか？時間もそこそこ遅いし。」

「…：…そうですね。今日はもう寝ましようか。ちよつと待ってってください。今寢床を敷きますから。」

無理には聞こうとはせずに会話を終える判断をしてくれた様だ。その辺りの気遣いは流石だと思う。

「俺も手伝おう。何か必要だったりする？」

「あ、すみません、それではそちら側の両角を持って引っ張って下さい。広げますので。」

「了解。」

寝る場所を用意し、布団に入る。

「私は着替えてきますので先に寝て貰っても大丈夫ですよ。」

「睡魔が来たら身を委ねる事にするよ。」

「分かりました。それでは行ってきます。」

そう言っただけで彼女は寝巻を持ち降りて行った。

布団から起き上がり、今日の事を考えながらぼーっとしていると明

月葉那が寝巻に着替えて戻って来た。

「お待ちせしました。それじゃ電気消しますね。」

「おっけい。消しても大丈夫。」

電気が消えるが、カーテンから多少は光が入ってきている。

「それでは澤田さん。おやすみなさい。」

「おやすみ。しっかりと寝てくれ。」

「横になってませんが、澤田さんは眠らないのですか？」

横にならず座っている俺が寝ないのか気になったのだろうか、聞いてくる。

「眠たくなったら寝るから先に寝てて構わないぞ。」

「寝ている私に何かするつもりですか？」

「しないしない。寝込みを襲うつもりなど無いからな。」

「ほんとですかー？ 無防備な姿についてムラッと来てしまったりは……？」

「分かった分かった。俺も寝るから。」

こちらが寝るまで話しかけてきそうな気がしたので先に折れる事にし、横になり目を閉じる。

「それでは、今度こそおやすみなさい。」

「ああ、また朝に。」

就寝の言葉を告げ、寝ることにする。

眠れないと思っていたが、暫く目を閉じている内に睡魔がやって来たので、それに身を委ねることにした。

## 第21話：不可思議への貸し

「……ん？……うん？」

寝ていると、何かが階段を上がってくる音で目が覚める。

(誰か来たのか……って閣下以外ありえんか。足音も変だしな。)

人にしては重さの無い音が聞こえてくるので閣下が帰って来たのだと判断する。

「ん？起きていたのか？いや、どうやら起こしてしまった様だな。」  
猫モードの閣下が階段から姿を現した。

「いや、勝手に起きてしまっただけだから気にしないでくれ。」

「そうか。しかし、音を立てないように気を遣ったつもりだったが……、今ので起きたのか。」

「身に染みてしまっているからなあ……。これはミカドさんが悪いわけじゃないから。」

「……なるほどな。それなら仕方ない。どうする？もう一度寝なおすか？」

「今って何時ぐらい？」

外はまだ暗いが車などが走っている気配はするから日の出前辺りと思われる。

「今は6時半前ぐらいだな。もう少して日が上がるだろう。」

「それなら起きてようかな。足の様子も見ておきたいし。」

刺された足を見ると、包帯は薄らと血が滲んでいた。痛みはあるが昨日よりは引いている気がする。多分。

「それなら昨日話していた犯人についての報告をしておこう。」

「こっちは良いけどミカドさんは大丈夫？徹夜だったりしないのか？」

「その心配は必要ない。別の場所ですっかり睡眠は取って来たからな。」

なるほど。朝帰りって事かこれは。

「なるほど。じゃあ聞くことにする。」

「まず、貴様が言っていた犯人だが、無事警察の方へ連行された様だ。現場には警察が二人ほどこしか居なかったからな。話していた内容を聞く限りでは喧嘩か何かを起こしたのではないかと言っていたな。」

これでまずは一安心出来るな。後はこつちまで辿り着かないことを祈っておこう。

「それは良かった。二人に良い報告が出来そうだな。」

「次は、蝶だが、道中で2頭程捕まえたが現場には見当たらなかった。既に散っていたのだろう。」

「それは残念。でも道中で見つけられたなら結果オーライか。それが目的の蝶かもしれないけど。」

「そうだな。そこに関しては仕方があるまい。」

「報告ありがとう。何か他に気になった事とかあったりするか？」

「今の所はそんな所だ。そっちは何かあるか？」

「うーん、特に。今日は四季さんと話して何とか説得を試みるのと、その後コーヒーの飲み比べをする位だな。」

「分かった。何かあったらまた言うといい。吾輩はまた出掛けてくる。」

「もしかして、報告する為に戻って来た感じか。なんか申し訳ない。」

「気にするな。早めに連絡しておいた方が良いと判断したまでだ。」  
そう言うのと閣下はまた階段を下っていった。

「さて、包帯でも替えておこうか。」

足の交換は可能だが、肩の方は明月菜那が起きたらその時にでも頼もう。

「さてと、交換していくか…。」

部屋の隅に置いてある救急箱に手を伸ばし、包帯を取り出した。

足の包帯を交換し終え、外を見ると太陽が出ており、カーテンから日が少し差し込んでいた。

「もう朝が来たのか…。ていうか腹減ったな…。何か食いたいが、

今この状態で出掛けようとするのと絶対怒られるだろうしな…。仕方ない。明月さんが起きたら調達をお願いしよう。」

後ろを見るとまだ起きておらず、リズムの良い寝息をしていた。

「うむ、健康的な寝方だな。といっても死神に健康状態の有無はあるのか？体とは縛られていない存在だったか。上位存在から維持する為の力は貰っているから飯や睡眠も必要は無いが…、それらを行わないと気分的に良くないとかだったか？体調を崩すんだっけ。」

更に言えば体などが汚れたりとかもしないらしい。閣下が抜け毛などの代謝をしないのだから死神も似たようなシステム構造なんだろうな。超便利。

「あれ？って事は…。その存在に近い体の俺はどうなるんだ？」

体は少なくとも人間そのものでは無いだろう。が、死神というわけでもない。腹も減れば、喉も乾く。人としての代謝はあるはず。

「考えてみると、昨日風呂に入っていないが、特に不快感を感じない…。」

中途半端に似た感じになっているのだろう。

（人として生まれ変わったと思っていたが、人としての定義から少しズレている可能性があるのかも？。）

「その辺りも追々分かって来るだろう。今は生きている事に感謝しておこう。」

「んっ…。んんっ…。あれ、澤田さん？起きていたのですか。」

「おはよう。もしかして起こしてしまった感じか。」

「おはようございます。まあ…、寝ている横で何か独り言が聞こえていたので。それでだと思えます。」

「それは申し訳ない。」

「いえいえ、もう起きる時間ですし丁度良かったです。それより何か考え事でも？」

「そうだな…。人としての定義について考えていた…のかもしれない。」「

「朝から大分哲学的な事をお考えの様で…。」

（哲学的なのか…？まあ、考えていないからどうでも良いか。）

「明月さんは起きる？時間的には良い感じだとは思うけど。」

「起きますよ。澤田さんが起きられているのに私だけ寝ている訳にはいきませんから。」

そんな事気にしなくてもいいのと思うが、こっちとしても助かる。

「足と肩のお怪我の様子はどうでしょうか？」

「まともになっている気がする。多分。足の方の包帯は交換出来たけど、肩の方は一人じゃ難しいから後で手伝って欲しい。」

「分かりました。少し待っていて下さい。身支度を整えて来ますので。」

「了解。それまで待つておく。」

朝の身支度が完了し、戻って来た明月葉那に包帯の交換を手伝って貰い、次いでに朝食と昼食分の買い出しを頼んだ。

「何か食べたい物とかありますか？パンやおにぎりなどでしょうか？」

「そうだな。朝はおにぎり系で頼む。味は適当で別種類で大丈夫。後、インスタントの味噌汁系も頼みます。昼用は適当な弁当で。明月さんが美味しそうと思ったので。」

「あまり詳しくは無いのですが…。分かりました。変なのを買ってきてでも文句言わないで下さいね？」

「大丈夫。変なの買ってきても逆に好感度上がるだけだから。」

「何ですかその変な上がり方は…。それでは行ってきましたね？」

「了解。すまんが宜しく頼みます。あ。ごめん明月さん、追加でカップのアイスを3つ程頼んでも良いか？」

「アイスですか？デザートに食べるのですか？」

「いや、コーヒー飲むときのお供にでもしておこうかなと。3つともバニラ味でお願いします。」

「分かりました。朝はおにぎりを幾つかとお味噌汁。お昼は弁当。後はカップタイプのバニラ味のアイスを3つですな？」



「ご注文に間違いは無いです。」

「畏まりました。少々お待ちください。今買ってきますので。」

こちらに一礼をして階段を下りていく。なんか客と店員みたいなノリになってしまった。向こうも途中からそのつもりに見えた。

「それまでのんびりしておくか…。」

特にすることが無いため、暇を持て余すことになりそうだ。

どうしようか考えて椅子に座っていると、階段から人が上がってくる音がする。しかも二人分。

（二人は明月葉那として…。もう一人は四季ナツメとかか？朝早くから来ているって事は…。）

恐らく昨日の事で朝から来た感じなのだろう。偶然そこで明月葉那に出くわした事になる。

そう考えていると、階段から二人の姿が出て来た。

「随分と注文を届けるのが早いと思ったが、どうやら違ったみたいだな。」

「外でナツメさんと会ったので戻ってきました。澤田さんとお話をされたそうに見えたので。」

「おはよう四季さん。随分と早い時間から来たみたいだな。」

「おはよう…。気になって仕方なかったから早めに来たんだけど

…。澤田君は昨日はここに泊まったの？」

「念のため安静にしておこうと思ってな。明月さんをお願いして寝泊りさせてもらっているよ。」

「そうなんだ。だからこの時間にでもここに居たのね。納得。」

「そんな感じ。お腹空いたからさつき明月さんにご飯の調達を頼んだ所だな。」

「はい。そうなりますね。」

四季ナツメが何か言いたそうな顔をちよくちよく見せている。多分話すタイミングを伺っているのだろう。

「それじゃあ明月さん。引き続きお願い。」

二人きりの方が良いと考え、この場を離れるように目線を送る。

「了解です。買ったらまた戻ってきますね。」

こちらの意図を読み取ったか、会話を続けず階段を下りて行った。後で感謝しておこう。

「それで、朝早くから来たのは怪我が気になったからで良いのか？」  
それもあるだろうが、昨日途中で話し終えた続きもあるのだろう。恐らく夜の間ずっと考えていたはず。少し隈が見えるし、目の充血が確認できる。そのせいであまり眠れなかった様だ。

話す前に座って貰おうとしたが椅子が無い。仕方なく明月さんのベットに座るように促す。

「うん…。どうかな？平気…では無いよね。」

「まあ多少は痛みはあるけど、別に命に関わるレベルの怪我でも無いしな。その内治るから大丈夫。」

「その…、昨日はごめんなさい。私が付いて行ったばかりに澤田君に怪我を負わせてしまったから…。」

「今日はその謝罪を含めて様子を見に来たのか。」

「そうなる…かな。迷惑を掛けたから、そのことで謝りたかった。」  
「分かった。四季さんの謝罪を受け入れるよ。それじゃあこの話はこれで終わりって事にしようか。」

「え…？そんなあっさり…？」

「俺は別に気にしていない。けど四季さんは謝りたい。それなら俺がその謝罪を受け入れたら終わりではないのか？」

「それはそうだけど…。もっと怒ったりしないの…？怪我を負わせた原因が目の前に居るのに。」

「怒って欲しかったのか？もしかして四季さんって意外と寂しがり屋だったりするの…？」

「そういう意味じゃない。…そうじゃないけど、怒って貰った方が気が楽になると思う。」

（なるほどね…。少しでも自分の中にある罪悪感を吐き出したい感じか。こっちが何も言わないから逆に溜め込んでしまったんだろう。それを怒られることで清算しておきたいと）

「やはり、Mの素質があったのか…。喜んでくれるのなら怒るのもやぶさかではないが…。」

「だから違うっ。そんなに私を陥れたいのっ？」

「照れなくて良いんだぞ？人は誰しも言えない秘密の一つや二つ。三つや四つ。いや、五つや六つ…。」

「いや、秘密多すぎない？それ。」

「ミステリアスはモテる秘訣と聞いたので沢山抱えてみたんだが…？」

「数が多ければ良いって話でも無いと思うけど…。」

「じゃあ、重たくて巨大な秘密を一つ抱えることにしておく。」

「澤田君は確かに変な秘密を抱えてそうだけど…。」

「適当にふざけて話していたら、こちらの話題にすり替わろうとしていた。」

「変な秘密とは失礼だな。人並だぞ。」

「例えば…？どうしたら裏路地で起きた様な事が出来るのか気になるのだけど…？」

「やっぱり気になる？」

「…気になる。聞いていいのか疑問だけど。」

「…そうだな、まあ話せないこともないし…。コーヒー飲むときにも話すとするよ。」

「半分冗談で聞いたつもりだったけど…いいの？本当に。」

「ああ。その内話そうか考えていたし、いい機会として2人には話しておく。」

（二人がいつまでもこちらに不信感を抱いてしまうくらいならちやちやと話してしまった方が楽だろう。知られた所でこの世界じゃ大した影響なさそうだしな。）

「分かった。それじゃ楽しみにしておくから。」

「了解。俺もコーヒーを飲んだ四季さんがどんな顔をするか楽しみにしておくよ。」

「嫌な楽しみ方…。どうせ飲めないのはわかってますよ。」

少し拗ねた顔をして顔を逸らす。うん。7兆点。

「その為にも今は少しでも寝てた方が良いぞ。あんまし寝れてないだろ？」

「まあ：確かに寝れていなかったかも…。やっぱり気づくかな。」  
「隈も出来ていて、目も充血しているからな。明らかに寝不足に見えるわ。」

「うわあ…：そんなにか…。恥ずかしい。」  
顔を伏せ、必死に前髪で目元を隠そうとしている。が、隠しきれない。

「今日は大学の講義とかは平気？」

「ん？…ああ。今日は大丈夫。コーヒーの件で元々来る予定だったから。」

「じゃあ大丈夫か。ほれ、そのベットで少し寝た方が良い。少し寝ただけでも変わるからな。」

「え、でもここ、明月さんのベットじゃ…。」

「まあ大丈夫だろ。事後報告しておくから。それとも俺が寝ていたその床の方が良いか？」

「結局寝る事には変わり無いんだ…。」

そりや強制ですよ。

(折角の綺麗な顔が隈出来たままだとな。いや、これはこれで良きかもしれない。)

「拒否権は無いな。四季さんの為でもあるからな。」

「と言っても寝れる気はしないのだけどね。」

「横になるだけでも疲労は取れるから、横になって目を閉じていれば次第に眠くなってくる。さあさあ。寝たまえ。」

椅子から立ち、寝るように催促する。

「ちよ、ちよつと、なんでそんな強気なのっ？」

「寝不足はマイナスしかないからな。コーヒーはどうせ昼からだろうし。今の内寝てくれ。」

こちらが強気で行くと、下がる様にベットに入っていく。なんやかんやで彼女も眠いのは同意なんだろう。此方が無理やり寝かすという形を作ればいいだけ。

「あー、服にしわが付くかもしれないのに…。いつか、もう。」  
諦めたように横になる。観念したようだ。

「お言葉に甘えて少し横になっていようかな…。確かに眠たかったし。」

「そうそう、甘えておくが良い。なんなら手を握って、子守り歌でも歌ってやろうか?」

「それはいらなかな。逆に眠れ無さそう。」

それは一体どういう意味なんだ。おら。

「恥ずかしがらなくても結構だぞ?寝れない時にしてもらおうと安心するとよく聞く。」

「どこ情報だか…。」

横になり目を閉じているが、声で呆れている様子がよくわかる。

「いや、割と真面目に言っていたのだが…。ほれ、今ならタダで握り放題。」

ベットの前の地面に腰を下ろし、手を差し出す。

「え、冗談じゃなかったの…?」

「冗談でこんな恥ずかしい行為が出来ると思うか?いいから、ほら。」

「えっ、なんで勝手に手を握っているの?」

「安心しないか?」

「ええ…。そんなのする訳ないと思うのだけど…。」

「そうか…。小さい頃とか親にされたりしたら安心しなかったか?もしかして俺だけだったのか。」

「それは…分かるかも。寝る時とかにして貰ったりしてたなあ…。」

何?それをしてる訳?」

「そうなるな。四季さんが少しでも安心して寝れるかと考え抜いた策だったのだが…。」

「そんな事言って、実は女の子の手を握りたかっただけじゃないの?」

「それは確かにあるな。10割程。」

「全てじゃないの。何それ。邪な気持ちしかないの?」

「男が可愛い女の子に接触する時は、大抵邪なワンチャン狙いだから。大学でもよく被害に遭ったりするだろ?」

「確かに多いかな…。こっちはその気じゃないのに誘ってばっかり来る人とか。」

「そんなもんよ男は。だから俺の邪な欲望を叶えると思ってどうぞこのままでお願ひします。」

「そんな風には見えないけど？でも、そういうのならそのままにしていあげる…。」

「心が広い事で。」

話している内に少しずつ、声のトーンが下がってる。徐々に眠くなってきたのだろうか。そろそろ話しておきたい事を言い始めるとする。

「四季さん。」

「んー？何？」

「昨日の夜は一人で居て怖かったとか感じたりした？あんなことがあった後だし。」

「あー、まあ多少はあったかな…。でも狙われたわけでも無かったからそこまですりも無いかな？澤田君に対しての罪悪感の方が強かったからかも。」

「どうやら罪悪感のお陰でトラウマにはなっていないらしい。」

「それなら安心した。トラウマになったりしないか心配だったからな。」

「トラウマ物はそっちじゃない？足に刺さったのだから。」  
目を開けてこっちを見てきたが、閉じるように促す。

「…：トラウマには刺激不足だったかもな。既に強烈なのが住み着いている事だし。」

「あれ以上とかどんなのだが…。」

「それもコーヒーの時に話そうか。」

「分かった。楽しみにしておく。…でも。」

何か言いたそうに、少し黙る。

「怪我をした事に関しては私が悪いのは事実。だから何かしらの形で償いたい。」

再度目を開けてこちらを見てくる。

(意思是固いみたいだなあ…はああ。)

「分かったよ。それじゃあ貸し一つって事にしようか？」

「貸しにしておくって事？」

「そうそう、俺が何か頼み事したときに可能な限り手伝って欲しい。四季さんにしか頼めない事もあるだろうし。」

「それなら…少しは納得できるかも。」  
「少しかよ。」

「そんな大層な事をお願いするつもりは無いから気軽に受けてくれ。」

「分かった。返せるようにする。」

「そういうと静かに目を閉じる。納得は出来たらしい。」

「了解したという事は、少なくとも貸しが返せるまでは今の関係が続くという事だな。」

「そうなる…かな。うん。」

「それは良かった。四季さんの事だから罪悪感を感じて人と距離を置きかねないと思っていたのだけど…杞憂だったかな。」

「…正直、置くつもりだった。」

「やっぱりか。人に迷惑かけたからとか自分みたいな人間がとかそんな感じなのだろう。」

「四季さん。一度ちゃんと確認しておくが、この程度で俺に迷惑を掛けてしまったとか考えて距離を置こうとか無しだからな？」

「でも実際迷惑じゃなかった？」

「まあな。否定はしない。けど別にそれで四季さんの事を嫌いになるとかそんな事無いから安心して良いぞ。」

「そっちが良くても私が気にする…。」

「気にする必要は無い。迷惑を掛けてしまう。我儘を言ってしまうなどと気にする必要は無いという意味もあるけどな。俺に対しては特に。」

「澤田君に対して特について…？ どういう意味なの？」

「そうだなあ。ある意味明月さんやミカドさんより迷惑を掛けても構わない相手って事になるのだけだ。」

あの二人は少なくともこの世界の人だしな。別世界の人ならもつと迷惑など掛けても関係無い存在になるのではないだろうか。

「え…、それって…。」

驚きながら俺を見る。さっきこつちが言った台詞が引つかかるのだろう。自分が夢を望む為の言い訳に使った言葉なのだから。

「四季さんが思い浮かんだので当たっていると思う。死神やケツト・シーよりも更に不可思議な存在と思ってくれて構わない。だから四季さんが望む、我儘と言うその夢を叶える為に俺が勝手に協力しているだけ。四季さんが負う責任は何一つ無いって事だ。」

「あの二人よりも不可思議な人とか…。本当に何者なの？」

「それは追々話していく。今重要なのは四季さんの事。纏めるとだな…。俺になら迷惑でも我儘でも気にせず頼って貰っても構わないって事だ。遠慮や俺を気にする必要は一切ない。四季さんが望むことがあるなら言ってくれ。それに全力で叶える為に協力は惜しまない。っていう意思がある事を言いたかっただけ。」

こちらから多少強引に踏み込まないといつまでも前に進もうとしないだろう。必要なのは四季ナツメ自身の心の変化だが。

「私なんか望むことなんて…、そんな事をして良い人間でもないのに。」

「自分をちっぽけな存在だからと決めてそこで諦めてしまおうとせずに、まずは口に出して欲しい。俺じゃなくても他の二人でも良い。直ぐにそうしろとは言わない。少しずつで大丈夫、出来たらようやくスタートラインに立てるからな。」

「…：…そんなの…出来ない。」

「今はな。大事なのは今後どうするかだが、…：取りあえず今は寝て少しでも寝不足を直そうか。長らく話してすまん。」

「私から話しかけた事だから…：気にしないで。」

「お詫びに子守り歌うたうからさ。ジャンルはどれが良い？」

「子守り歌にジャンルとか無いと思うのだけど…：ていうかいらないから。」

「それは残念。最近ロックバージョン覚えたから披露したかったの



に。」

「寝かせる気があるの…？その歌は。」

「さあ？。じゃあ代わりに寝るまで適当に雑談でもしておくか。」

「あー、そっちの方がまだましかなあ…。」

子守歌：V e r . R o c kよりは雑談がお望みらしい。

では眠たくなるように思い出話でもしておこうか。

## 第22話：式部流珈琲の教え。

その後少しの間話している内に次第に返事が無くなり、寝息が聞こえて来た。どうやら寝たらしい。

（やっぱり眠かったのかね…。昼まで数時間あるし、ましにはなるだろう。）

目の前で静かに寝息を立てている。目元には薄らと隈があり、昨日の夜が眠れなかった事を物語っていた。

「さてと…。後は明月さんが戻ってくるまで待機かな。」

起こさないように小声で一人言を呟く。よくよく考えてみると今の状況を明月葉那が見たらネタにされそうだ。

「ま、いつか。その時はまた仕返しておこう。…腹減ったな。まだ時間掛かりそうなのか？」

お願いしてからそこそこ時間が経っている。コンビニの位置はそう遠くはないと思っていたのだが、買う物に迷っているのかもしれない。

「取り敢えず今はこの手の感触でも味わっておこうか。」

我ながら変態染みているが役得だと思っておくことにした。

「ただいま戻りましたー。」

階段の上がる音と共に明月葉那が顔を見せる。

「ご飯買ってきましたよーって、澤田さん？」

声を出しながら来る明月葉那に人差し指を立て静かにする様にお願ひする。

「…なるほど。寝ていられたのですね。分かりました。」

俺の意図に気づき小声で話しかけてくる。

「少し前に漸く寝たからな。昼ぐらいまで寝かせておいてほしい。済まないがベットを使わせて貰っている。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。確かにナツメさんあまり眠れていな

かったみたいでしたね。」

「どうやら彼女も気づいてたらしい。まあわかりやすかったか、あれは。」

「それよりも。どうしたのですか？その握っている手は？」

「やにやしながらかごつちを見てくる。速攻すぎる。」

「何してる様に見える？明月さん視点では。」

「完全に事案かと。寝ている女性の手を無理矢理握り、あまつさえ感触を楽しんでいるだなんて……！見損ないましたよ？澤田さん。」

「あながち間違つてない事を言っている。エスパーかな。」

「そうごとくしておこう……。それよりご飯を食べたい。お腹すいて死にそうだ。」

「そうでした。ナツメさんは寝ていますから後で大丈夫ですね。あ、アイスの方は既に冷凍庫の中に入れてますので。」

「サンキュ。ここで食べるのはアレだし、下に移動しようか。」

「良いのですか？手の感触を楽しまなくても。」

「握るのは寝るまでの約束だったからな。もう大丈夫だと思う。」  
手を離そうとするが、何か勿体ないような気がして離すのを躊躇う。

「いや、仕方ない。朝食を優先せねば。だから仕方がないんだこれは。天秤に掛けるとしたら食欲に勝るものは無い。抗えぬ運命なんだこれはっ！」

「その割には物凄く名残惜しそうに見えるのですが？」

「呆れた顔でこちらを見てくる。しょうがないじゃないか。男の子だから。」

「起きないようにゆっくりと手を離し、朝食は向かった。」

朝食を食べ終え一息ついていると、明月葉那が袋の中から本らしき物を取り出した。

「ん？それは？」

「コーヒーについての本です。コンビニに置いてあったので勉強に」

と買いました。凄いですねコンビニって。色んな物が置いてありました。」

感心しているように話している事からあまり行く機会なかったのかもしれない。

「二通り揃っているからな。その分少し値段は上がるけど。便利さには勝てないよなー。」

「なんだか利用し続けるとスーパーまで行くのが億劫になってしまいうそです。」

「実は更の上にネット通販と言うものがあつてだな…。いや、これはやめておこう。」

「そういうのはわたしには難しそうです…。」

「いや。そう言った意味ではない。明月さんとかハマリそうだなって思つてさ。あれは癖になるとヤバいから話すのをやめただけ。」

「そんなに取り扱うのに危険な物が…いや、やはり私には厳しそうです。」

「そうでもないけどな…慣れればボタンをポチッ。で簡単に買えてしまう悪魔のシステムさ。」

「え、それってどうやって買いたい物を手に入れるのですか?」

「サイトの一覧から買いたい商品を選んで購入。配達してくれるから住所などの必要な情報を記入すると。お金は現金ではなくてネット上の決済がある。それらが完了すると、後は届くまで待っているだけで大丈夫。これの恐ろしい所は部屋などから一歩も動かずに買いたい物が買えてしまうという便利さを追求しまくったこのシステムだと思う。」

ざっと流れを説明しておく。

「今はそんな事も出来てしまうのですね…、墮落した生活を送ってしまわれませんか?」

「だな。人と接触することなく買い物が出て来る。スマホが出来た事で何時でも何処でも可能になったって訳だ。」

「そういった利便性の弊害が蝶の原因になってしまう事もありそうですね…。」

「可能性はあるだろうな。昔より今の方が蝶の出現は多くなってそうだしな。時代の変化によるものかもしれないけど。」

ネット社会になった事で直接顔を見合わせる必要が無く接点が増えるのは便利だとは思うけど。他には経済や若い世代の一人当たりの年収が少ない事での生活の豊かさが減ったとか。

「様々な要因が絡み合い、それが最近になって表に出て来た感じのかもしれないね。」

「かもしれないな。」

原因は一つでは無いだろうな。小さな事が沢山あるのだろう。

「死神としては仕事が捗る感じか。」

「そうですねえ。と言っても少ない方が良い事ではあるのは間違いないのですが。」

そりゃそっか。

「この店を開く事で少しでもいい方向進むことを祈っておこう。」

「その為にも美味しいコーヒーを入れる為に頑張らしましょう。」

「だな。四季さんが起きるまで勉強しておくか。」

「澤田さんは知っているのではないのですか？」

「一応知っているぞ？とは言っても口伝でだけだな。」

「何ですかそれ…。一子相伝とかなのですか澤田さんの淹れ方は。」

「誰でも知っている淹れ方だから心配しなくて大丈夫。直ぐに覚えられますぞ。」

「教えて頂いても大丈夫ですか？」

「了解。今は口頭だけで実践は後でしょうか。」

「分かりました。宜しくおねがいます。」

では、式部業優流美味しいコーヒーの淹れ方でも伝授しましょうか。

暫くコーヒーの話をしていると奥から足音が聞こえて来た。

(これは、四季ナツメが降りて来たのかな?)

「ナツメさんが起きてこられたのでしょうか？」

「だと思っ。それ以外無いと思っし。」

明月葉那も足音に気が付き、奥を向く。足音が近づき奥から起きた四季ナツメが姿を見せた。

「あ…、二人ともおはよう。」

「おはようございます。と言ってももうすぐお昼ですが。」

「おはよう。良く寝れたかい？」

「うん。頭がすつきりしたような気がする。少なくとも寝る前よりはましになった。」

「それは良かった。お腹とか空いてたりする？明月さんが食べ物を買ってきているらしいが。」

「空いてるかも…、あ、それと明月さん。ごめん、勝手にベット使ってた。」

「いえ、大丈夫ですよ。澤田さんから話は聞いているのでお気になさらず。」

「澤田君も、その…ありがとう。」

少し照れながらもちゃんと礼を告げてくる。最高です。

「四季さんの役に立てたなら光栄ですとも。それよりお昼にでもしようか。」

「そうですね。準備しましょうか。澤田さんも食べられますか？」

「どうせならお供しようかな。」

一人で食べるよりか誰かと食べた方が美味しく感じるしな。

昼を食べ終え、コーヒーを飲む話になり準備を始める。

「そう言え、豆って何を買ったの？聞きそびれたままだった。」

「今回は澤田さんがアメリカン、キリマンジャロ。私からこの、グアテマラという豆を3つを購入しました。」

「無難な奴とちよつと変わった奴を買っただ感じかな。今回はこいつらを試すことにした。」

「それじゃあ早速試して行きましようか。」

「俺は見ておくから明月さんに淹れて貰おうかな。」

「いきなり本番ですかっ!?!。出来る自信が無いのですが…。」  
困った顔でこちらを見てくる。

「大丈夫大丈夫。教えながら進めて行くから。それに最初だから失敗しても気にしないで良いよ。」

「それなら…分かりました。精一杯やらせていただきます。」

「すまんが宜しく。」

コーヒー淹れると肩が痛むので淹れるのをしたくなかったので頼むことにする。

(肩とか上げる動作とかぎこちなくなりそうだし…。それでまた変な気を遣われるのは勘弁したい。)

「それじゃあ私の方はカップの準備しておく。」

「ありがとうございます。すみませんが、お願いします。」

俺も言いたいが、歩き回るのもっと駄目だな。なんだか自分だけ働いていない奴に思えてくる。

「澤田君は動かなくて良いから。じつとしてて。」

こちらが何かしようか考えていると先に釘を刺された。

「あー…それじゃあ大人しく明月さんに教えるだけにしておこうかな。」

(普通にやるのはつまらないし…。何かしようかな。)

そう考え、椅子に深く座り直し、足を組み見下したように顔を上げる。

「さてと…、では早速淹れて…貰おうかな?」

なるべく偉そうに声出す。

「え…、澤田さん?どうしたのですか、急に。」

「口答えせずに手を動かしたまえ。コーヒーを淹れるのではないのか?」

「ええー…、何なのですかこの人は…。」

こっちの態度に呆れたが、準備を進めて行く。四季ナツメも何事かどこっちを見ている。

「そっちの君も手を止めず動かしたまえ。もたもたしていると日が

暮れるぞ?」

「え、何?急に…。何キャラなの…。」

「口を動かす前に手を動かした方が良いのではないか?作業が遅れるぞ。コーヒーマスターのカップは3つだぞ?忘れるではない。」

「私も飲むって事だよね…。?」

「当然。慣れるまでとは行かないが少しでも口につけてみてはどうかね?」

「だからなんなのよその喋り方は…はあ。分かった。努力してみる。」

横を見ると明月葉那がフィルターにコーヒーマスターを淹れていた。

「あ、明月さん。入れたらなるべく平らになるように軽くならしておいてほしい。」

「分かりました。こう…でしょうか?」

カップを軽く揺らし、平らになっている事を確認する。

「そうそう。上手。君。センスあるねえ…。もしかしてこの業界長かつたりするかい?」

「ある訳無いじゃないですか…。今度は何ですか…。それにこの程度で褒められても。」

此方は褒めて伸ばす方針なので。

「さっきから何?何がしたいの?そのキャラは。」

「いや、何となく?ノリでそういう気分になっただけ。」

「何それ。意味が分からない。」

四季ナツメが飲むカップを並べ終え、こつちを見るがこちらの返事に呆れ、諦めた様に隣の席に戻った。

「澤田さん。淹れ方はこんな感じで大丈夫でしょうか?」

名前を呼ばれ見ると、淹れたコーヒーマスターにお湯を淹れていた。

「そうそう。そんな感じ。全体にかける感じでゆっくりとで良いから。」

ポットに数滴コーヒーマスターが落ちて来たことを確認し、止めさせる。

「後はこれを数回に分けて淹れて行こうか。」

「確かその時はフィルターにお湯が掛からないように。でしたか。」



？」

「そう。中心にお湯をかけ、少しずつ円を広げる感じで。」

「掛けてしまうと変な味が出るのかな？やっぱり。」

「そこはわからん。理由までは調べた事は無いな。そういう手順としか認識してなかった。」

「ふーん。そうなんだ。」

そう言うのとスマホを取り出し調べだした。

「へー。フィルターの匂いや味が取れるんだって。」

「コーヒー以外の匂いが付くなら無いの方が良いのか。付ける派も居るのか。」

フィルターに掛けることをリンスと言うらしい。

「淹れ切りました。後は待つだけですよね？」

「お疲れ様。後は落ちるのを待とうか。」

「分かりました。それまで暇になってしまいますね。」

「だな。少し暇が出来るな。」

四季ナツメを見たがまだスマホを弄っていた。

「ん？ああ。それなら澤田君の話でもしてみるのはどう？コーヒーの時に話す約束でしょ？」

「澤田さんのお話ですか…？」

「ああ。そういえば言ってたな。秘密を話す約束だったな。」

「え、…それって。大丈夫なのですか？」

明月葉那が心配そうにこちらを見る。

「大丈夫。明月さんも気になっているだろう？いい機会だし少し話しておくよ。と言ってもそんな大層な話ではないけどな。」

「澤田さんがそういうなら…。」

「そうだな…。どの時点から話そうか…。」

何処まで遡って話せば良いか考え、過去話を始めようとした。

## 第23話：過去話

「そうだな…。折角だし最初辺りから話しておこうか？」

確認のため二人を見る。

「私は、澤田さんにお任せします。」

「そうね。私が気になっていいる部分を話して貰えるなら後は任せ  
る。」

「おっけい。所々暗かったり、重い内容が挟まるかもしれないけど  
気にせず聞いてくれ。」

二人が頷くのを確認し、話始める。

「まずは俺の小さな時からだな。普通の一般家庭的な暮らしを俺と  
両親二人でしてただけけど、俺が小学生上がる頃に3人でドライブ  
…、とまでは行かないけどお出掛けのな事をしてたんだと思う。ん  
で、交通事故に遭ったらしい。当時の俺は気づいたらベツトの上で何  
が起きたか理解出来ないまままで起きると隣に叔父…、前に話してた喫  
茶店の人ね。その人が俺が起きたのを見て安堵した顔をしていた。  
今でも鮮明に覚えるほどにな。」

当時を思い出して苦笑いが出る。超近かった。

二人を見ると何となく察している明月さんと目が合った。

「ご両親は…、ご無事でしたか…？」

「いや、残念ながら二人とも駄目だったよ。母親の方は一度は意識  
を戻したが、直ぐに失ってそのまま…。父親の方は即死だったらし  
い。」

他人事の様子に語る。実際そのシーンは聞かされただけだし実感は  
あまり湧かなかった。

驚きの声と、落ち込む様に顔逸らす反応を見せる。

「続けるぞ？ 両親を亡くした俺は親族に引き取られるかと思えば、  
父親の方は両親が小さい頃に施設に預けたつきりで家族としての縁  
は無かったそうだ。母親の方はまさかの引き取り拒否をしたと叔父

が言っていた。その結果、叔父が俺を引き取ることになったんだ。」  
一段落し、コーヒーを見る。良い感じに溜まって来ていた。

「続ける前に、明月さん。コーヒーがそろそろ淹れても大丈夫だから。飲みながら話を続けようか。」

「あ、はい。分かりました。今淹れますね。」

ポットを3人分のコップに綺麗に分けながら淹れていく。

「お待たせしました。最初はアメリカンで淹れてみました。」

俺と四季ナツメの前にコーヒーを置く。隣を見ると若干顔が引いてる。そこまでか。

「四季さん…。大丈夫か？やっぱり飲むの止めておこうか？無理しなくて良いんだぞ？」

少し煽りを混ぜつつ聞いていく。

「これ位…。何ともない。必要な事だから。」

覚悟を決める様にコーヒーを見つめるが、一向に飲む気配が無いので仕方なく先に飲むことにする。

「先に頂くことにしようか…。」

口を付ける。うん。苦い。でもいい匂いがする。コーヒーのこの匂いは好きだが味はそこまでだ。

「どう…でしようか？」

「問題なく飲めるし美味しいよ？いや、苦いのは確かだけど。他のと試してみないと何とも言えないかな。」

「そうですね。飲み終えたら次に行きましようか。」

「そうだな。それまでは話の続きでもしておくよ。」

横を見ると先ほどから一ミリも動いていない四季ナツメが居た。

(これは長くなりそうだな…。置いておこう。)

見なかつた事にして話続きを始める。

「引き取られた後は叔父が借りたマンションに住むことになった。一応叔父と二人だが、帰る時間は遅かつたし、帰らない日も多くあったな。作り置きとかお金を渡されてたから不自由は無かつたけどな。」

その頃は親が居ない事はよく理解出来ずにただ環境に慣れるのに

精一杯だった気がする。もしかしたら本能的に受け入れることを拒んでいたのかもしれない。

「その後は普通に学校に通ってたよ。高校を卒業後は大学に行く意味が見つからなかったから就職コースを選んだな。地元から少し距離のある工場が初めての職場だった。」

懐かしいと思いつつ昔を思い出す。初めて給料明細を見た時は嬉しかった。

「意外と普通の生活をしてたのね。」

「そりゃな。学生時代なんてそうそう変な事は起きないし。」  
そう。学生時代はな。起きるのはゲームの中だけ。

「初めはそこそこ順調に働けていたんだが、二年目に突入した辺りに急に上の人に呼び出されてな。不思議に思いながらも行くと、唐突にクビ宣告されたよ。」

二人を見ると、「え？」と驚いていた。

「分かる。俺も実際声に出してしまったからな。理解できなかったな正直。思い当たる節もなかった、急に会社都合でやめて欲しいと言われたよ。」

あの時は俺も同じ顔をしていたよ。凄く分かる。

「その後はそのまま手続きが進められて終わり。無職になりましたとき。」

チャンチャン。ってな。

「その後何とか再就職を果たせたんだけど、そこもまたクビとかやめてくれて上から通達があつてな…。」

乾いた笑いが出てくる。当時は笑えなかったけど。

「今度はどれだけ続いたのですか…?」

明月葉那が不思議そうに聞いてくる。

「確か…半年とちよつとだったかな?」

正確にはもうちよつと続いた気がするが誤差の範囲だろう。

「それって単純に澤田君が無能だったって説は無いの?」

横を見ると、明らかにコーヒーの量が減ってない四季ナツメが不審な目でこちらを見ていた。失礼な奴だな全く。

「その可能性が無い。とは言えないけどなあ…。俺が無能だったかなと思っていた時期も確かにあった。」

後ほど違うって知ったけどそれまでは中々やさぐれた気がする。

「それから就職した時もあったが、合わなかったりして辞めて、一時的にバイトとかで凌いだりして何とか働いては居たんだけどな。結局それも辞めて暫く働かないニートの時期があったんだよ。」

「その頃は働く意欲も無くて、まあ…、多少人と距離を置いていたりもしていたな。ひねくれ者になってただけなんだけど。」

俺が駄目なのか、仕事が合わなかったのか。もしくは社会に適合出来ない部類なのか。変に考えて働きたくなっていたな、あの時期は。

「そんなこんなで引きこもりに近い時期が続いて、話すのもネットの中の人達。そこには似た人達が多く居たから不思議と安心感があった。駄目なパターンだったが。そこで暇な時間をどう過ごしているかの話になっておすすめของเกมやら漫画やらの話になって色々手を出していたりして日々を過ごしていたよ。」

その時に出会ったのがエロゲなんだけどな。

「ある一つのジャンルのゲームを勧められて試してみたら見事にドハマりしちゃってさ。寝る間も惜しんでしていたよ。」

その中の一つが喫茶ステラと死神の蝶だったわけだが。

「まあ…。ノベルゲーム…みたいな物？だったんだが、そのストーリーに魅せられてさ。というか自分と似た気持ちや境遇だったからもあったからか、影響を強く受けたんだよ。」

「その中で紅茶を淹れるシーンがあって、それを見て自分も同じように紅茶を淹れてみたいと考えるようになってどうにかできないかと思いついたのが。」

「喫茶店を開いている叔父に頼み込まれたのですか？」

「その通り。叔父なら紅茶の淹れ方を教えてくれると思い、店まで押し掛けたよ。当時は働いても居なかったし出来ればバイトでも雇って欲しいとお願いした。」

「へえ…、そこで澤田君は紅茶を学んだのね。」

「いや、違う。学んでない。」

「え？習いに行つたんじゃないの？」

「まあ続きを聞いてくれ。」

そうすれば分かるから。

「俺は叔父にこう頼んだんだ。『紅茶の淹れ方を教えて欲しい！、俺も淹れられるようになりたいんだ。可能ならここで働かせて欲しい』とな。」

「う、うん。」

「叔父は驚き、少し悩んだ結果、了承してくれたよ。教えるから指定の日時にこの場所に来てくれとメモを渡されてその時は帰つたんだが。店で教えてくれないのかと思つたけど俺が店に居たら迷惑掛かるかと納得して当日まで自分で調べれる範囲で紅茶の事を勉強したんだよね。」

「そして、指定された日時に目的の場所まで向かつたんだけど、そこには一軒家と家の前には車が止められていた。あれ？ここで教わるのか？と不思議に思つたが取りあえず玄関のベルを鳴らしたよ。」

「そしたら、中からは明らかに一般人じゃない筋肉質の男が出て来てきてさ。確認したがどうやら叔父の知り合いだった。安心して中に入つたら待っていて欲しいと飲み物を出されたよ。」

「ソファに座りながらただ待つのも暇だし取りあえず飲み物を飲んで待っていると、急に睡魔に襲われてさ。人様の家なのにと思つたが抗えず寝てしまった。」

「それって、睡眠薬とかが入つてたつて事？」

「流石四季さん。その通り。実はその飲み物には睡眠薬が入つていたらしい。まあ、知つたのは後でなんだけどね。」

「次に目を覚ますと車の中で、運転席には先ほどの男と助手席にはまた違う男が乗つていたよ。慌てながらも問いかけると、どうやら叔父の指示である場所に向かつているとかなんとか言つてて、よく分からないまま到着するのを黙って待つことになった。」

「暫くすると車が止まり、下ろされると、辺り一面森。俺は山の中に連れて行かれていた。その時思つたよ。『これ山に埋められるんじゃない』

ないか?』と。警戒しながら車から降りてくる人を見てみると。森の中から叔父が出て来てき。知っている人がいると安堵して話しかけると、ありえない事が口から出て来たんだよ。」

二人をみる。既に何が起きているのか、起きようとしているのか良くわからない顔をしていた。

「内容は、これからお前を鍛える為に暫くの間訓練を積んでもらうと。この先の森で生き延びてもらおうとかそんな感じ。何言っているんだこの人はと思ったね。その時の俺の顔はさぞかし間抜けな顔をしていたと思う。」

「その後車に乗っていた男に何かを話して後は任せると言って去って行ったよ。残った俺は男らに連れられ森の中に入って行った。奥には小さな家が一つあるだけで他は自然のみだった。」

「その日から訓練という名の拷問というか、地獄が始まったよ。こころはあまり思い出したくないから割愛する。」

考えたくも無い。あんな苦痛の日々とか。自然と顔が歪んでしまっそうだ。

「心中お察しします…今の澤田さんの顔が全てを物語っていますね…。」

なんとも言えない顔でこつちを氣遣ってくる。

「ああ。一つ言えるのは、俺が思っていたより、世の中食えることが出来る植物や生き物は沢山いるって事かな。はは…。」

乾いた笑いしか出てこない。でもカエルは意外と旨かった。

「死んだ目をしている…。」

「まあそんなこんなで何とか森から出ることは出来たんだ。俺は生き残れたんだ。家に帰ることが出来るんだとみっともなく泣いた。コンクリートの街並みを見て、地獄を乗り切ったと実感できた。家に帰ると氣絶するように寝て、次起きたのは確か、16時間後とかだったかな。」

「その頃には結構体力も付いてたけど一番は常に周囲を警戒する事が身についたと思う。森には毒持った生き物とか菌とか持っている奴いたし、何より熊が出る可能性もあった。そんな場所でずっと生活

してたら勝手に身についた感じだ。」

「この時点で一般人から離れてる気が…。というか澤田君は紅茶を習いに行つたのじゃ…。」

「ほんとにな。それで、起きたら叔父からの書置きがあつて、店に来いとの内容だったから向かつたんだよ。文句を言うつもりでもあつたしな。怒りが湧き出て来た。」

「店に着き、叔父に問い詰めると、お前の希望通りの事をしたままでと意味わからないことを言っていた。誰が紅茶を習いたいと言つたら、サバイバルに連れて行く阿保がいるんだと思つたよ。すると叔父が、『漸く基礎が終わつたか。次は本格的に始めて行こうか。』と口に出したんだ。」

「頭の中が真っ白になつたよ。今までの準備段階で本番はこれからみたいない方だつたからな。聞いてみると、『今までの体力が無い俺を鍛えるためであり、教えるのはここからだ』と」

「そこから今後は叔父に連れられてなんか地下の部屋に連れて行かれると、色んなトレーニング器具や、道具があつた。漫画とかでしか見た事無い光景だつたよ」

「それからまた地獄が始まつた。色んな技術や技を教え込まれたよ…。頭と体がどうにかなるかと思つた。生き残る事だけを考え日々を凌いでいた。その中でどうやら俺にはセンスや才能が無いらしく、結局教えられたのは相手の不意や意識外からの攻撃とか道具を使う戦闘スタイルみたいなのだった。要するに不意打ちや暗殺的な正々堂々と戦わないやり方って感じだな。その過程で人をよく観察したり意識する事も覚えていったかな?」

「そんな日々が続いて、叔父から及第点を貰つた所でもう一度問い詰めたんだ。どうして紅茶の淹れ方では無く、こんな良く分からないことを教えたんだと。」

「すると叔父から、『貴様が分かつていなかったから言うが、俺の店では紅茶の淹れ方を教わるという意味は、この業界で仕事をしたいから何か無いか?』として使われる。』ってさ。隠語みたいな物らしい。知るかよつてなつたわ。」



「そこから詳しく聞いたが、叔父はどうやら裏の世界とまでは言わないが、あまり表に出せない事件とか案件を調査したり処理する仕事をしていたらしい。中には偉いさんや、政府関係の人からも来ることがあるとか。急に意味の分からない世界に引き込まれた気がした。一番分からなかったのが、知らぬ間に自分もそちら側に足を突っ込んでいる事だった。」

「と、まあざっくり言うところな感じで意味の分からない世界に引きずり込まれた感じかな？割と適当な説明だから抜けている部分もあると思うけど…。」

話が一段落してコーヒーを飲む。うん。苦い。二人を見ると苦笑いをした様な微妙な顔をしていた。

「何か聞きたい事があれば可能な範囲で教えるけど何かある？」

「結局紅茶はどうなったの…？」

「自力で覚えた。店で一応働いていたが、基本的にはウェイターが多かったかな？お店の人から暇なときに教わったりして何とか物には出来たと思う。」

「因みに、その話は全部本当なの…？」

「証明は出来ないけどな。本当です。と言う他ない。」

「ちよつと…というかかなり信じられない。作り話って言われた方が納得できる。明月さんは今のを聞いてどう思ったの？」

「私ですか？そうですね…。正直信じられませんが、逆にありえなさ過ぎて本当の事なのかと思ってしまっそうです。」

まあ聞いてて普通は信じられないよな。紅茶習いに行ったら裏の世界に引き込まれたとか。どこの漫画だよと思う。

「信じるかは二人に任せるよ。暇つぶし程度に話しただけだしな。」

「やっぱ作り話？適当な話を作って誤魔化したとか？」

「それじゃあ、実は俺は小さい頃から命を狙われるような存在で、そのせいで親族はおらず生き残るために仕方なく身に着けた技術。とかだったらっ？」

「なにそれ。なんで命を狙われるような設定になっているの？」

「それはほら、超常現的な力？超能力的なのを持っていたり？」

「へー。澤田君は一体どんな凄い力を持っているのかな？」

馬鹿にするような呆れ顔でこちらを見てくる。隣の明月葉那は心配そうにこつちを見ている。

「そうだな…。未来とか過去を見るのが出来たりとか？政府の間や権力者が放っておかないだろ？」

明月葉那が驚愕の顔で俺を見ている。

「そんな凄い能力を持っているから命を狙われていると…。へたくそな作り話。それで？そんな凄い力を持っている澤田君はどんな事が出来るのかな？」

からかう様に俺を見ている。だったら占い師としても力（原作知識）を見せてやろう。

「そりゃあとんでもない事が出来るさ。例えばそうだな…。四季さんの好き嫌いを当てたりとか？」

「物凄く地味な事に使おうとしているのは分かった…。じゃあ当ててみてくれる？」

「ピーマンとかだろ？」

俺が嫌いなものを当てると少し驚いた顔をする。

「これは凶星だったか。コーヒーとか苦い物が苦手だしな。子供舌か？んん？」

「うるさい…。苦い物が苦手で悪かったわね…。」

恥ずかしそうに拗ねる。因みに未だにコーヒーの量は減っている様には見えない。冷ましているのかと思ってしまう。

「苦手なものは誰にでもある。気にしなくていい。でも、そのコーヒーはせめて一口は飲むように。折角明月さんが淹れてくれたのに…。かわいそうだな。明月さん。飲みたく無いそうだぞ？この人は。きつとこのままひっそりと流し台に捨てる気だ。」

「そんな事するわけないでしょう！？そんなに私を陥れたいの？」

「そうですね。ナツメさんがそんな事する訳無いじゃないですか。ナツメさんはきつと私の淹れたコーヒーを飲んでくれます。私はそんな変な心配はしていませんからね？安心してください。」

「明月さん…。地味に追い詰めようとしなくてくれる…？」

「はて、一体何のことやら…。」

「話を戻すが、結局俺が何を良いっても本当かどうか証明できないから信じるかはそっちに任せるってことを言いたかった。」

「分かりました。私の方は特に言いたい事はありません。澤田さんから言うまでは此方からは問い詰めたりはしません。」

「サンキュ。話せるときはまた言うよ。」

「はい。また気が向いたら占いでもしてください。」

「気が向いたらな。して欲しくなったら言ってくれ。」

「え？占い？なんの事？」

四季ナツメが不思議そうに聞いてくる。そえば話して無かったな。

「そえば四季さんには話してなかったな。」

「そうだったのですか。すみません。言っちゃって。」

俺が話してなかったのに勝手に話したことを謝ってくる。

「いやいや、気にしないでくれ。どうせその内話すことだったからな。」

「何？二人だけで話してて何の話？」

「いや、大したことは無いぞ？俺の趣味が占いでいいだけ。そんでついでに明月さんを試しに占ったって話。」

「え、澤田君の趣味が占い？そうなの？へー。変わった趣味。男の子でもそういうの興味持つんだ。」

「まあな。興味があつたら試しに占ったりしようか？運勢とか悩み事とか得意だぞ。」

「うーん。別にいいかな。そこまで気になる事ないし。」

「あ、はい。気が向いたらで良いので。」

「ん、気が向いたらね。なる保証は無いけど。」

「了解。んじゃあ、話も終わった事で今度は別の豆を試してみようか？」

「分かりました。今のはアメリカンでしたので次はキリマンジャロにしましょうか。」

そう言って新しく珈琲の準備を始めた。隣を見ると未だに減っていないカップと睨み合いをしていた。

(まだ飲んでいなかっただのか…。大丈夫か?)

「四季さん。やっぱり飲むの止めとく?それか砂糖とかミルク入れるとかするか?」

「この状態で飲まないとい味がわからないんじゃないの?意味がなくなると思うんだけど。」

いや、飲め無さそうだから苦肉の策を出しているのだが…。

そう言っつて覚悟を決めたか恐る恐る口を付け飲む。直後、体が硬直した。ゆっくりとカップと離してテーブルに置く。

「どう…だった?」

「こんな苦い物…。どうして美味しいと思えるのか、理解が出来ない…。」

今にも死にそうな小声でそう言った。やっぱりダメか。

「これが特別苦いというわけでは無いのだが…。他のも試してみるか?」

聞いては見たが彼女は静かに首を横に振った。

「おっけい。合わなかつたという事で。」

「珈琲って全部こんなものなの…?」

「どうだろうな。色んな場所で飲んでみるしかないんじゃないか?コンビニとかどうだ?大衆向けだし飲みやすくなっているかもしれないし?もし無理なら砂糖とミルクで誤魔化せば飲めるだろうから何とかなりそうではあるが…。」

「機会があつたら…:そうしてみる。」

口に苦みが残っているからだろう。声がか細い。

「無理しない程度でな。」

そうして四季ナツメは飲み比べから脱落した。その後は残った二人で飲んでみたが、苦いという感想が大抵で、多少味の違いが感じる程度だった。

## 第24話：引つ越し

珈琲の飲み比べをした日から二週間が経とうとしていた。その後は特に何も起きず、怪我の養生に努めた。ベットでぐうだらしたり、明月葉那や四季ナツメがたまにやってきては世話をしてくれた位だ。後は、寝た後にあの変な空間で例の女性と会って雑談とか蝶の話をしたとか。

「もうこんな時間か。」

この日俺は閣下に店に呼ばれていた。恐らく前に話していた部屋や調査の話だろう。

「とうとう、この部屋ともお別れになるのか。」

借りている部屋という事もあり、なるべく綺麗にしては居たが何となく名残惜しく思える。愛着が湧いたとは言えないが。

「さてと、そろそろ行くか。」

準備をして部屋を出る。少し肌寒くなってきている中、店に向かった。

店の中に入ると中には閣下と明月葉那が席に座っており、机には紙が幾つか並べられていた。

「澤田さん。おはようございます。」

「おはようさん。すまない遅くなった。」

「何、気にするな。呼んだのはこちら側なのだからな。」

こちらを見てそう言ってくる閣下が席に座るように催促してくるので正面に座る。

「今日呼んだのはやっぱりその事?」

机にある書類を見ながら問いかける。

「ああ。前に話していた貴様が借りる部屋の事と戸籍の話だ。」

目の前に差し出された紙を手に取り目を通す。

「部屋は意外と店から近いのだな。」

部屋の場所を見たが、店から徒歩五分程度の近場だった。良く見つけたなと思う。

「貴様にとつても都合の良い立地であろう?。」

「確かに。部屋も十分な広さあるし、値段は…場所の割には安く思えるな。良い所見つけてくれて助かる。」

「たまたまタイミングが良かったからな。初期費用は既にこちらで支払い済みだ。」

「マジでそれは本当に助かります。自分のお金を一銭も無いからさ。」

金銭面でお世話になりっぱなしだなマジで。

「それと、これは部屋で必要なものを揃えるのに使うが良い。」

そうやって閣下は封筒を出してきた。手に取り中身を見ると結構な額が入っていた。

「ミカドさん…。流石にこれは。」

「気にするな。と言いたいところだが、ケット・シーの国からのだからな。これも蝶関連。死神としての費用として落としている。だから吾輩達の仕事の手伝いをしてもらう事になる。」

「それは元々手伝うつもりだったが…。」

「それなりの理由を付けねばならないからな。」

経費として落とす為の理由付けだったのか。此方としては大助かりだ。

「だからこれは貴様で使うように。余ったら家賃にでも当てると良い。」

「いや…本当に良いのか?。」

心配になり隣の明月葉那を見る。

「はい。ミカドさんもこう言っている事ですし、今回は甘えるのが良いかと思えます。」

「…分かった。有難く受けとる。家具や家電に充てる事にするよ。」

「そうしておけ。」

「じゃあ次は…、戸籍の奴か。」

もう一つの方の紙に目を通す。

「これは…ミカドさんが親になるのか。という事は…。」  
名前のページを見ていく。

「明月さんと戸籍上姉弟になるのか？これは。」

戸籍上家族となるのなら、そういうことなんでしょうか

「色々面倒だったのな。そういつた形を取った。」

「まあ。此方としては何でも大丈夫なのだが。」

「宜しくお願いしますね。」

明月栞那がこちらにお辞儀をしてくる。

「それはこっちのセリフだな。宜しく頼む。お姉ちゃんって呼んだほうが良いか？それとも栞那姉とか？」

冗談っぽく提案してみる。

「なんだか…そういう風に呼ばれた事無いので違和感ありますね…。というか私が姉なのですね。」

「違ったか？生きている長さで言えばそっちが上になると思うが。」

「それもそうですね。それじゃあ私は澤田さんではなく、達也と呼びましょうか？」

からかってくるようにこちらを見てくる。

「呼ばれると確かに違和感あるな。それに急にお互い名前呼び始めると四季さんに変な勘違いをさせそうだな。」

「恋人同士とかと勘違いされそうですよね。これだと。」

「ああ。戸籍上の話だしな。特に変える必要は無いだろう。」

よく考えてみると、仮に高嶺昂晴が明月栞那のルートに入った場合…。義理の兄弟になるのか。それはありなんだろうか。

「澤田さん？どうされましたか？」

「いや、何でもない。少し考えごとをしていただけ。」

「ほんとはですか？血の繋がっていない義理の姉弟の禁断の関係とか変な事考えてたりしていませんか？」

「その場合俺はミカドさんに娘さんを下さいって事になるのだが…。」

「こんな頭の中ピンク色の娘なら好きだけ貰っていくがいい。」

明月栞那の冗談に閣下が呆れた反応をする。

「だってよ。明月さん。」

「ミカドさんっ!?!それはひどすぎでは無いですか!」

「お前が下らん事を言うからであろう。」

「ちよつとした可愛いジヨークじゃないですか…。」

冷たい返事をされたことに少し拗ねている。

「取り敢えずこの二つの紙は俺の方で持つておけばいいのか？」

「ああ。そつちの方は貴様で持つておくと良い。あと、これは部屋のカギだ。」

机の上に部屋のカギを置いてくる。

「二応今日からでも大丈夫だ。荷物などを運んで住むことも可能だ。」

「了解。荷物は着替え程度だし早速向かってみるよ。」

「その辺りは自由にすると良い。」

「今回もだけど、助かった。ありがとう。」

「感謝は受け取つておこう。それでは吾輩は用があるのでな。席を外させてもらう。」

そう言つて閣下は席を立った。

「引つ越すなら葉那に手伝つて貰うと良い。今日は暇だからな。」

「はい。お任せ下さい。澤田さんは怪我がまだ治っていないので代わりに私が動きます。」

「宜しく頼む。歩く程度なら多少大丈夫だけど、力入れるのはまだちよつとな。」

「それでは、早速行きましょうか。」

「了解。お供頼みます。」

二人で席を立ち、店から出る。店から出ると明月葉那が立ち止まりこつちをみる。

「住む場所とは把握されていますか？」

「ああ。さつき渡された紙の中にマップ図があつたからな。一応場所は覚えてる。」

「それなら大丈夫そうですね。部屋は一人でしたら十分な広さはありましたし問題なく済むことが出来そうですね。」

「十分すぎる広さだな。一人暮らしでは少し持て余してしまひそうだ。」



「二人では寂しいから女性の方とか連れ込みますか？」  
また急にネタを振ってくる。暇だし乗っておく。

「そうだな。独りは寂しいしな。かといって知り合いは居ない。見知らぬ人を連れ込むわけには行かないしな。此処は明月さんに協力してもらおうしかないか？」

こちらも冗談みたいに隣を見る。

「おやおや。これはまた随分大胆なお誘いですね。でもそうしたら近親相姦になってしまいますよ？これはもしや：澤田さんはそっちのご趣味がおありで？」

「さてな。部屋に行けば分かることだろう。なあ？葉那お姉ちゃん？」

「というかその設定はまだ続いていたのか。」

「これでは引つ越しのお手伝いに行けなくなってしまいますね…：にひ。」

「そういわず俺を助けると思ってたさ。いや、何もしないから。引つ越しのお手伝いしてもらおうだけだから。その後休憩がてらちよつとお茶でもするだけから。ほんと。」

最後に縋るような顔を作り、情けなさそうな声を出す。

「さて。どうしましょうかねえ。」

「お店の前で…、何をやっているの？」

茶番をしていると四季ナツメが姿を現した。

「四季さん。おはよ。」

「おはようございます。」

「おはよう二人とも。で、店の前でなんで明月さんに縋っているの…？それに明月さんの事をお姉ちゃんとか呼んでいたけど？」

意味の分からない表情でこちらを見る。

「た、ただ冗談を言い合っていただけですから。変なプレイとかではないですからっ。」

「そうそう。茶番をしていただけだから気にしないでくれ。」

「どうだか。ヒモ男が女性に縋っている様にしか見えなかったけど。」

「なるほど。そういうのもありだな。てか事実じゃん。それ。」

「確かにそうですね…。実際にはミカドさんにですが。」

「変な納得しなくて良いから。お店に変な噂がたったらどうするつもり？」

「それはすまん。店の前でするのは止めとく。」

「すみません。悪ふざけが過ぎました。」

「それで？二人はどこかに出掛けるの？」

「はい。澤田さんの部屋が決まったので今泊まっている場所から引越そうかと。」

「そうなんだ。今日からもう住めるの？」

「まあな。それで明月さんに付き添いを頼んでいる所だ。」

「それなら私も付いて行こうかな。」

「お店に用があつたのじゃないのか？」

「ううん。二人が居るかと思つてきただけ。どうせなら澤田君の引越しても手伝う事にする。」

「と言つても大した荷物は無いのだけだな。」

「でも、引越後に何か必要になるかもしれないしね。」

「ま、付いて来てくれるならこちらとしても助かるけど。」

「それじゃあ、ナツメさんも一緒に行きましょうか」

「うん。そうする。」

四季ナツメも同行することになり、三人で泊まっていた部屋から荷物を回収し、新しい部屋に向かう。

「ていうか、本当に荷物全然なかつたことに驚いているんだけど。」  
部屋に向かう途中で四季ナツメが呆れながら呟く。

「本当ですよね…。どうやってこれまでやりくりしてきたのでしょうか。」

「どうせ引越すからな。最小限で済ませただけ。つと、そこを右だな。」

マップを見ながら道を曲がると目的の建物が見えて来た。外観は普通だった。古くも無いが新しい建物というわけでもない。資料では築15年ほどらしい。

「此処か。取りあえず部屋まで向かうか。」  
エントランスを抜けてエレベーターに乗る。確か場所は6階だったな。

「入口にセキュリティもあるし。安全そうな場所ね。しかもお店からも近い。」

「綺麗な見た目だし。当たりっばいよなここ。」

外見はペールオレンジと白色が主だが、中に入ると黒色の大理石が床に敷かれていた。なんだかお高い場所に思えるのが不思議。

6階に到着し、借りている部屋に着く。玄関のカギを開け、中に入る。

「此処がこれから住む場所か。」

中に入ると、一本の通路で奥には部屋があるよくあるタイプだった。入って右手にはキッチンがあり、その横には洗面台があった。左手には洗濯機を設置できるスペースと隣にトイレ、お風呂場と並んでいた。

「へー、ここが澤田君が借りる部屋なのね。結構良いんじゃない?」  
「だよな。部屋も十分な広さあるし、トイレと風呂が別々なのが有難い。」

「それ分かる。ユニットバスはちよつと嫌かなって思う。」

「そういう物なのですか?そのタイプが普通だと思っっているのですが…。」

「今の人は別々じゃないと候補から除外するくらいには重要になっっていると思うぞ。」

一通り見てから奥の部屋に向かう。ドアを開け、部屋を見渡す。

(広さは大体7帖位か。)

部屋の奥にガラス窓があり、外はバルコニーになっていた。一応クローゼットも付いている。

「これは後でミカドさんに感謝しておかないとな。想像より良い場所だった。」

「二人暮らしには十分だと思う。近くにコンビニやスーパーもあるみたいだし。」

「ここなら澤田さんが安心して暮らせそうですね。何かあれば近くですし直ぐ対応できそうです。」

何かあって、何が起きるんだよ……。まあ、未だに怪我人だしそうもなるか。

「さて、俺の部屋も確認した事だしこれからどうする？」

「澤田君はどうするつもり？」

「あーそうだな。取りあえず日用品でも買いに行こうかな？少しずつ揃えて行こうかと思っっているけど。」

「折角ですし、ショッピングモールまで行きましょうか？」

「いや、それは流石に申し訳ないのだが。」

「変な遠慮しない。怪我人なんだから重たい物とか持てないでしょ？」

「そんなに重い物を買うつもりは無いぞ？」

「それでもいざ行ってみると買うかもいれないし……。」

確かにいざ店に行くと思いたくなることもあるな。

「ナツメさんもそう言っている事です。早速行きましょう。」

俺の意思とは関係なく買い物いく事が決定し、ショッピングモールに向かう事にした。

## 第25話：購入

ショッピングモールに着き、必要な日用品を買い漁る。

「取り敢えず、今日はこれ位で大丈夫じゃないか?。」

軽くて済ませるつもりだったが、予想より多くの物を買う事になっていた。

「えっと、他に必要な物はあつたりしますでしょうか?。」

「大丈夫じゃない?後はその都度買えばいいわけだし。」

二人が先導しながら話合っている。後ろで見えていたが、次から次へと迷いなく突っ込んでいた。籠の中は割と満杯だ。なお、籠持ちを拳手したが、あっけなく断られた。

「次はそうですね…。お皿などの食器類も買っておきましょうか。」

「食器の方はまだ大丈夫なのは…。」

これ以上物が増えるのか…。

「いつか必要になるのなら今の内に買っておきましょう。この際ですし。」

「そしたら調理器具とかも必要になりそうですね。」

「そうですね。色々見てみましょうか。」

店に入り、調理器具コーナーを見ていく。

「へー、キッチン器具セットか…。纏めて売っているのは便利だな。」

揃えるのが面倒だと思っていたが、必要な物が大体揃っている。値段は約3000円ほど

「こういった奴で大丈夫か?。」

手に取り、籠に入れようと持っていく。

「そうですね。一通りそろっていますので問題ないかと。」

合格を頂けたらしい。ただしよく見ると包丁は別売りみたいだ。

「他には…箸やカラトリーとかか。」

洗い物が面倒だから割りばしとかでも良いかもしれないが、一応買っておこう。もしかしたら料理などをする機会があるかもしれない

い。

「最近では全部まとめて置いてあるので揃えるのが楽で良いですね。」

「便利だけど、使わない物とかもあるけどね…。」

「後は食器ですね。澤田さん、どういったのが揃えたいとか希望つてありますか？」

「特には無いが…。平皿と茶碗が幾つかあれば事は足りるか…。ああ、あとは飲み物飲むコップが幾つかあれば。」

「了解です。食器コーナーに行きましようか。」

2人の後続く様に、食器などのコーナーに向かった。量についてはこの際スルーすることにした。

買った物の数が多くなり、今日の所は一旦切り上げ、部屋に戻る事になった。

「それにしても…。想定よりだいぶ大量の荷物になったな…。」

必要な物を買っていく内に他にも買う物が思いつき、どんどん荷物が増えていった。

「結局澤田さんにも持つてもらおう事になってしまいました…。すみません。」

「いや、そこは全然平気だから気にしないでくれ。むしろ手伝って貰っているこっちが申し訳ない感じだ。」

今日だけでこんなに揃えるとは思っていなかったから驚きではあるが…。手間が省けたと思えば感謝はあれど非難する気はない。

「目的の物を探している内にどんどん目について買っちゃたしね…。」

隣の四季ナツメも手に持っている袋を見ながら、若干後悔している様に声を出す。

「ぶっちゃけこんなに揃える気は無かったから、必要な物を分かっている二人が居てくれて助かった。」

「いえ、本当ならまだ買う物はあったのですが…。今日の所は持てなさそうだったので止めておきました。」

「確かに……。でも残りは後日に買えば大丈夫だと思うから心配は無  
いんじゃない？」

「ですね。まあ、そもそも澤田さんの場合は元が全くない状態から  
のスタートなので特殊でもありますが……。」

「でも、こういう時の買い物ってなんだか楽しくない？と言っても  
人の買い物なんだけどね……。」

「それ分かります。新しい物を買ったりするのが、なんだか購入意  
欲が満たされると言いますか。沢山買い物をした事で人としての欲  
を満たしていると言いますか……。」

「そこまで大層な事じゃないと思うのだけど……。」

そんな話を居ている内にマンションに着き、部屋に入る。買ってき  
た荷物を部屋に置き、それぞれの置き場に分別して行く。

「澤田さん。此方の物とかはこの辺りで大丈夫でしょうか？」

「ん？ああ。とりあえず適当にそれっぽいや場所に置いててくれ。細  
かくは後でしておくから。」

「分かりました。」

「食器はどうする？一度洗っておいた方が良くないかね？」

「そうだな、洗っておきたいから全部流し台に放り込んで欲しい。  
い。」

「ん。了解。」

一通り終え、次にカーテンや寝る場所などの家具を出していく。

「随分と部屋っぽくなって来たな。」

物があるだけで大分見違えるようだ。

「と言っても、家電とかは全然だけどね……。」

「そこは後でも大丈夫。これで必要な生活基準は満たしているし。」

「そうですね。因みに何をかうかはもう決められているのですか  
？」

「必要な奴だけ買うつもり。テレビとトースターとかは今は無くて  
も問題ないから先送りするつもりだが。」

「澤田君ってテレビとか見ない派？」

「だな。家にあつたのはPC用のモニター位。必要なら調べれば情

報は手に入る時代だしな。番組とかもY o u p i p eの方が面白いの多いしなあ。」

「それ分かる。私も家にテレビはあるけどあまり使ってないなあ…。大抵スマホで解決出来るしね。」

「……。」

横を見ると、こちらの話についていけない人が一人居た。

「明月さんも、そういうのは動画で済ませてしまう派？」

「いえ、私はその、すまほ？を持っていないので…。と言ってもテレビを見る訳でもないのですが…。」

「え、まだ持っていないの？今の時代持って無いと不便だと思うのだけど…。」

「死神として生きていくだけでしたら特に必要は無かったの。」

「まあ確かにそうだな。連絡取る必要の相手が居ないなら役目が無いしな。」

「そうですね。それと操作とかがよくわからないので少し躊躇ってしまっています。触って壊してしまいそうで…。」

「田舎のおばあちゃんか…。」

呆れた顔で四季ナツメが呟く。あながち間違っていない。生きてきた年数を考えればそうなるだろうな。

「例えば澤田君はスマホとかもまだ持って無いの？」

「まあな。一応買っておいの方が良いのかもしれない。」

「といっても他の買い物を済ませた後で余ったら…の話だが。」

「でも、買うのは最後にしておく。あくまでお金に余りがあつたらだな。」

「それもそっか。明月さんは買おうとは思わないの？」

「今の所は予定は無いですね。生活には困ってはいませんので…。」

そうしてくれるとこちらも助かる。その機会は後ほどのイベントになる可能性があるからな。

「家電はどうする？直接お店まで買いに行く？」

「あー、どうしようか。可能ならネットで適当に揃えたいが。」

「スマホ無いし私ので購入だけでもしておく？」



「そうしてもらえると助かる。」

「了解。じゃあ必要な注文して貰える？」

「おっけい。終わったら今度はコンビニで支払いだな。」

「余ったらスマホね。此処まで来たら最後まで付き合っただけあげる。」

「さんきゅ。じゃあちよつとお借りします。」

必要な家電を注文し、コンビニで支払いを済ませる。後ろで明月葉那がずっと『へえ〜』とか『こんなことも出来るのですか〜。』と呟いていた。

残りの残金はまだ余裕はある。生活費や支払いを考えてもまだ大丈夫そうと判断しスマホを買う事に決めた。

「澤田君はどれを買うか決めている？」

携帯ショップで棚に並んでいるのを見てみると横から声を掛けられる。因みに明月葉那は『超簡単！誰でもスマホが簡単に使える！』と書いている場所の携帯を恐る恐る触っていた。

「そうだな…。一世代古い奴にしようかな大して性能に差は無さそうだし。あとは写真とか綺麗に取れば尚良し。」

棚に置いてある iPhone を手に取る。幅は少しあるが指で画面全体が触れるので問題は無さそう。機種も一つ前の物だった。

「あ、それ。少し前に話題になっていた奴。写真とかが綺麗に取れる奴らしいよ。へー。もう最新型が出てたんだ…。」

隣で俺が持っているのより最新型を手に取り、確かめるように回転させている。少し前と言われてもこの世界に居なかつたからさっぱりだ。

「じゃあこれにしておこうかな。カメラのレンズが二つも付いてるし良く撮れそうだしな。」

「iPhone 11 かあ…。私もなんだか買い替えたくなくて来たなあ…。」

「最新があるとなつて欲しくなってしまうよな。」

「ほんとそれ。最新が性能が一番良いと思っただけだからだと思っただけ…。」

それに関しては仕方ない。新しい物が優れているのは基本だから

な。日頃使う物となれば尚更最新を持ちたくなってしまおう。

「じゃあこれ買う事にするよ。後でカメラ性能確認してみよう。」

「あ、それ私も気になる。」

買う物が決まり店員に声を掛ける。横目で明月葉那を見たが、なにやら別の店員さんに話しかけられているが全力で断っている様に見える。購入を勧められているのだろう。知らんけど。

スマホを無事購入でき、店を出る。設定を行いアプリをインストールしておく。SNSとLIMEとかは必要になりそうだし。

「時間も良い感じだしどこかで夕食でも済ませる？」

「んー。私は良いかな。家に食材余らせているし。それを処分しないと…。」

「明月さんは？」

「私も大丈夫です。お気になさらず。」

食事の誘いをしてみたが見事に二人から振られてしまった。

「そりゃ残念。今日のお礼をしようとしたがまた別の日に改めるとしよう。」

少し雑談した後、解散することになった。

因みに手に入れたスマホの連絡先第一号には四季ナツメの名が書かれていた。

## 第26話：少女と手品

シヨップピングモールにあるベンチに座り一息を付く。

「さてと…。必要なのは揃ったか」

前の引越してから数日が経ち、世間では休日がやって来ている。その証拠にシヨップピングモールでは平日より人が多くみられた。最近のステラの方は変わらず飲み物の淹れ方などメニューに関する事で話し合っていたが、これと言ってやることがまだ無いため、暇を持て余しているのが正直なところだった。明月葉那に何度か聞かれたが、動くのは高嶺昂晴が来てからということもあり特に無いと返事をしておいた。暇すぎたのか道を走行していく乗り物の車種を覚え始めていた…。

「問題は無事に高嶺昂晴が働くかだよな…。選択肢間違えたら即終わりだし…。」

ステラで働かないかと明月葉那から誘われるがそこで働くと言わなければ始まる事すらない。当日は何としてでも説得をしなければならぬ。

「何か働きたくなるような要素があれば良いのだが。」

ベンチに背を倒し考えていると、隣に女の子が座って来た。周囲に他に座る場所が無いいため仕方ない。手には飲み物とソフトクリームと思われるものを持っている。

（見てて危なっかしいな…。その内どちらか片方が犠牲になりそうだ。）

ベンチに座り美味しそうにアイスを食べているが、ベンチに置いてある飲み物への注意が疎かに見える。此方に被害が出る前に立ち去ろうと席を立ち背を向けると、後ろから驚いた様な声と何かをこぼした音がした。嫌な予感がして振り返ると見事に地面に飲み物をぶちまけ、それと止めようとして今度は手に持っていたアイスの中身を零し、手にはコーンだけの状態になっていた。零れた中身と手にあるコーンを交互に見ている。現実を受け入れられないご様子だ。

ようやく現実を受け入れ始めると、今度を顔を歪ませ涙を浮かべ始めた。直感が働く。これはまずい。充電中だと。直ぐに爆発してしまうと。見捨てて帰る訳にも行かず、泣かれる前に声を掛ける事にした。

「嬢ちゃん大丈夫か？盛大に落としているが…。」

泣きそうな顔でこちらを見つめてくる。どう見ても大丈夫じゃない。防波堤がいつ決壊してもおかしくない顔をしている。

「アイスが…。ママに買ってもらったアイスとジュースが…。うっ…。」

爆発するかと思えば、声を堪える様に泣き始めた。盛大に泣き出すかと構えていた手前違った事に安堵したが、またいつそうなるかわからない為迅速な対応が必要と考え、袋の中から買い物中に貰ったポケットティッシュを出し、落とした残骸を素早く処理し、向き合う。

「取り敢えずは落ちてしまった物は処理はしたが…、その、大丈夫か…?」

少女の顔を見るが、目から涙が零れていた。声を出して泣いては無いが落としてしまった事に対しての悔しさが顔に現れている。

「あー…、そのなんだ。代わりと言っては何だがこれ…食べるか？」  
袋の中から菓子を取り出す。チョコレートアソートの奴。色々種類があるから大丈夫だとは思う。少女の前に差し出すが要らないと首を振る。何故かと問いかけると。

「知らない人から…っ、受け取ってはいけないって…ママがつ、言っただから…。」

なるほど。教育が行き届いているな。確かにその通りだ。正しい。「俺の名前は澤田達也って言うんだ。君の名前は？」

「…深山結菜って…いいいます。」

泣いたからか、ちよくちよくしゃっくりをしている。横隔膜が悪さをしている様だ。

「なるほど、結菜ちゃんって名前か。宜しく。これでお互い知らない人じゃなくなったな。」

知り合いになった事を示し、再度菓子を差し出す。

「もらってもいいのですか？お兄さんの食べ物じゃないですか？」

「いやいや、気にしないでくれ。美味しいと思って買ったから是非誰かに美味しいか確認したくてな。結菜ちゃんが良ければ食べてみて欲しい。」

封を開け、中身を差し出す。すると一度こちらを見て来たので、大丈夫と頷く。少し遠慮しながらもチョコを1つ取り食べる。

「味とか濃くは無いか？美味しいと良いんだけど。」

「このチョコレート、とってもおいしいですつ。すごくおいしいです！」

先ほどまでの泣き顔から一転、驚いた様に声をあげ、笑顔になる。チョコ1つでここまでなるのか…。小さい子は単純で可愛いな、おい。

「気に入って貰って安心した。もつと食べるかい？」

「たべたいですつ。でも大丈夫ですか？」

「うむ。好きなだけ食べると良い。数はまだまだあるからな。」

チョコを少女の横に置き、それを挟むように俺も横に座り、チョコを1つ食べる。うん。美味しい。次はもうちよい含有率が高い奴でも良いかもしれない。隣を見ると、美味しそうにチョコを口に運んでいた。

「結菜ちゃんはどうしてここにいるんだい？」

「ママが買う物があって、結菜はそれがおわるまでここでまっ待っているの。」

母親が終わるまで待機中という事か。なるほどね、それでアイスとか持っていたのか。いまや残骸だが。

「ママはどれ位で戻ってくるとか分かる？」

「んー。すぐもどるから大人しく待っていて欲しいって言っていました。」

正確な時間は分からずということ。まあ小さい子を長時間放置はしないから精々30分も無いだろう。此処まで来たのなら母親が戻るまで付き合うか。物騒な事が起きないように。端から見れば俺がそれにあたるかもしれないが。

「そうなのかー。じゃあここで時間つぶししているって事になるのか。」

「はい！そーです。」

元気良い返事だ。すっかり元気を取り戻したご様子。

「じゃあママが帰ってくるまで一緒に時間でも潰すか。」

「？。お兄さんもママを、待っているのですか？」

「ん？いや、俺は待っていないぞ？結菜ちゃんが暇しないように付き添っているだけ。」

「どうやって暇をなくすのですか？」

「そうだな…。何かしようか…。手品でもしようか？簡単な奴。」

そんなに出来るわけでもないが子供相手なら適当でも通じるだろう。

「手品!?、みてみたいです！お願いします！」

「うお、まさかここまで食いついてくるとは…。了解。それじゃあ幾つか披露させていただきます。」

「よろしくお願いします！」

今出来るコインで良いかと考え、財布から500円球を取り出す。

「このコインと手を見ていてくれ。今からこのコインが手から消えてこつち側の手に移動するから。」

よく見えるように500円玉を見える。怪しい所が無いのを確認したのか大きく頷いた。

ベンチに手を置き、手の甲に反対の手で大振りで何度か当てる。

「一、二、三、で手を貫通してコインが無くなるから。いくぞ？」

手を少し遅めに大振りで頭横まで上げ、一、二、の時に500円玉を耳に掛け、三を素早く振り下ろす。

「三っ！。ほら、手からコインが無くなった。どこに行ったと思う？」

手を広げ、無くなったことを見せる。

「こつちの手…こつちの手の下にありますっ。」

ベンチに置いている手を指さして来る。

「正解は…、ってあれ、こつちの手にも無いぞ？どこに行っちゃった？」

「たんだ？」

両手を広げて、コインを持って無い事を示す。

「こつちにも無いですつ。それじゃ……、あ、後ろに投げた！」

中々力業な回答をしてくる。室内ならともかくこんな場所ではないぞ。

「でも後ろにも無いしなあ……。どこに行ったか分からないから、さつきと同じようにしてコインを戻すことにしようか。」

「出来るのですか？」

「多分出来るよ？やってみる？」

「戻してくださいっ！」

元気よく返事が返ってくる。遣り甲斐がある。

「じゃあやってみようか。」

耳に掛けている500円玉を手の平の肉で挟み、向こうから分からないように運び手をベンチに付け、準備完了。

「それでは行くぞ？一、二、三っ！」

手を大振りに振り反対の手の甲に当て、念押しにぐりぐりと手の平を押し当てる。

「よっし、これで行けたと思うけど……、見てみる？」

「見せてくださいっ。」

返事を聞き、ゆっくりとベンチの手を持ち上げる。勿論ベンチには先ほどの500円玉が置いてある。

「戻ってるっ！本当に戻ってます。どうやって戻ったのですか？」

「そうだな……。実は、魔法を使ってこれを無くしたり、出したりをしていたんだ。凄いだろ？」

「まほう？お兄さんは今まほうを使って500円を動かしたのですか？」

「そぞ。他にもこんなことが出来るぞ？」

手に500円を乗せ、反対の手を20cmほど離して上に持つてくる。上の手で指を鳴らしてから下の手の親指の力で500円を上へ飛ばしキャッチする。仕組みが分からなければ重力を無視している様に見えるだろう。

「凄いですっ！コインが上に飛んでいます。」

両手の間に仕掛けが無いか何度も手を動かして確かめているが単純な力技の技術だから見つかる訳もない。

「いやいや、コインの重さが無くなってさ、勝手に動くんだよね。」指の間を行き来させつつ手の平を移動させる。さっきの技と相まって不思議に見えるだろう。

「すごいっ！すごいです！へびさんみたいに、によるによると動いています！」

によるによるって。

「少しは信じて貰えたかな？と言っても大した事は出来ないけどね。」

「もつと見たいですっ！みせてください。」

「もつと見たいのか？」

「駄目ですか…？」

沈んだ声でこちらを見上げる。いや、そんな悲しそうな目で見上げてくれ。そう言われたらやる以外の選択肢無いような物だ。

「仕方ないな…。あまり人に見られたくないが、特別だぞ？」

「はいっ！お願いしますっ。」

少女からアンコールを受け、飽きが来ないように出していくネタを考えていった。

手品をある程度披露すると満足したのか、今は近くの自販機で買ったアップルティーのペットボトルを2本買い、一緒に飲んでいる。因みに手品の500円は犠牲になった。

「あ、ママッ！」

突然声を上げ、手を大きく前方に振る。前を見ると母親と思われる女性が近寄ってくる。娘を迎えると此方を見て来たので取りあえず会釈をする。ベンチの様子を見て様子を見ていたのを察したのか申し訳なさそうに声を掛けて来た。返事を返しこれまでの経緯を軽く説明する。

「すみません…。娘が迷惑を掛けてしまったようで…。」



「いえいえ、流石に放っておくわけにも行かなかったので…」

「その、頂いた食べ物は何ら位になるのでしょうか…?」

「いえっ。結構です。大した物ではないので、娘さんが美味しそうに食べられていたのでこちらとしても元気が出てくれて良かったです。」

両手を前に出し、大丈夫と意思を示す。それに、あれで泣き止むなら安いもんだ。

「はいっ。とてもおいしかったです。ありがとうございます。」

「いえいえ、どういたしましてー。」

視線を下げ、なるべく柔らかい声を意識し、返事をする。勿論笑顔で。

「それに娘のわがままに付き合っていたいて…。」

「手品を披露する機会を得れてこちらも助かりました。リアクションが良くて、ついついこちらも気分が乗ってしまいました。なのでお気になさらず。喜んで貰えただけで十分ですのでお代とかは結構です。」

やんわりと、しかし要らない意思ははっきりと声に出す。後は向こうが折れるまで繰り返すだけ。

「それより、お時間とか大丈夫ですか?そろそろ良い時間ですし、家事などあつたりするのでは?」

「…:…そうですね。そろそろ家に戻らないといけません。」

「でしたら、お早めに。今回の事は大丈夫です。」

「…:すみません。娘を見て頂き本当にありがとうございます。」

こちらが折れないのを察したのかお礼を告げる。

「いえいえ。こちらこそ楽しい時間を過ごさせていただきました。」

「それでは…。」

此方に礼をして、娘と手を繋ぎ、モールから出て行くこうとする。見送っていると深山結菜がこつちを振り返るので、手を振る。

「今日はありがとうございました。魔法使いのお兄ちゃん。」

大きく手を振りながら感謝を告げてくる。苦笑いが出るが、我慢して手を振り続けた。

「魔法使いって…、いや、俺が言ったけどさ。」

二人が去った後、独り言を呟く。

「それにしても…偶然だったが、まさかあの子と出くわすとは…。」  
深山結菜。名前を聞いた時驚いたがどうやら本物。というか本人だったようだ。本当なら出会うのはもつと後、10月のステラオープン後の父親の誕生日イベントの時にお店に来るのが初対面になるはずだったが。

「いや、逆にありかもしれないな。先に接点を持つことで有利に進めるかもしれない。」

先ほど考えていた高嶺昂晴の事で思い付く。初対面で働いてくれとか死神など言われても警戒心を持つ可能性が高いのなら、事前に知り合って居れば、働きやすくなるのではないかと。

「知り合いが居れば多少は安心できるし…。やってみる価値はあるかもしれない。」

問題はどこで接点を持つかが…。

「あるのなら大学ぐらいか…。」

大学内に入る必要が出てくるし、最悪講義の部屋まで行く必要が出てくる。外でいきなり声を掛けたり、偶然を装うのは厳しいから大学が無難だろう。

「そうなると頼れる人は…、一人しか居ないな…。」

頭の中で思い付いた人物に連絡をするため、スマホを開く。どうか連絡出来る人間が一人しか居なかった。

「聞き入れてくれるか…。駄目だったら貸しの話を出して強引に進めるとしよう。」

頭の中で高嶺昂晴と知り合うための計画を立てつつ、コール先の人物が認めてくれるような計画を立てないといけないと考えると、少し面倒く感じてしまった。

「もしもし。どうしたの？急に電話を掛けて来て。」

そうこう考えている内に、受話器越しに不思議そうな声が返って来た。

「あ、もしもし四季さん。急にごめん。ちよつと頼みたい事があった。」

て…。」

「これからの為に必要な事だと割り切り、返事をした。」

## 第27話：潜入。一星大学。

四季ナツメに電話をかけた日から次の平日、俺は大学に来ていた。何を隠そう一星大学だ。平日の朝っぱらから大学来ている。目的の人物を見逃さないようになるべく早めに到着していた。大学には行ったことないから分からないが、俺の服装に違和感はないはず…。

「四季さんから預かったこれを渡すために案内してもらおう必要があるが…。見逃さないように気を付けておかないとな。」

目の前を行き来していく人を確認していく。見ていくのは男性だ。女性はスルーする。更に耳にかかる程度の髪に色は確か茶色だったか。黒のパーカーには赤のTシャツの服装。だが現実では他のも着ている事もあるため気にかけておく。

「今日は確か語学だったか？その講義で高嶺昂晴が一緒だったはず。そこで認識される程度でもしておこう。」

右手に小さな手さげバックを持ち、反対の手でスマホを操作している。ネットで適当に記事を流しつつ通る人に意識を向ける。暫く見ていると、目の前を一人の男性が通る。茶色のコートには青色のニットだろう。髪色は茶色。今通ったのが多分高嶺昂晴だと思われる。ガン見をせず顔と恰好を記憶しておく。

（彼が原作主人公か…。でも目的の人物ではないしな。そろそろ来てもおかしくないと思うのだが…。）

顔を上げ大学とは逆の道を見る。暫くすると奥から記憶の姿と一致する男性が見える。

（来た。恐らく彼が探している人だろう。）

スマホから顔を離し、人を探すように辺りを見渡す。誰かに声を掛けたさそうな雰囲気を出す。彼が目の前を通ろうとした時に申し訳なさそうに声を掛ける。

「あの、すみません。少し良いですか？」

「ん？え、俺ですか？」

急に声を掛けられたことに驚きつつも顔をこちらに向ける。

「はい、ここの一星の生徒さんでしょうか？」

「そうっすけど…。どうかしたんですか？」

こちらの質問に不思議そうに返してくる。

「実は、こちらに通っている知り合いに忘れ物を渡したくて…。けど場所が分からずどうしようか悩んでいて、三学年の人なのですが。」

「あ、そうなんですか？自分も同じ学年なのでもしかしたら知っている人かもしれないっすけど、名前はなんて言うんですか？」

まあ同じ学年でしょうな。狙って声を掛けたのだから。

「女性の方で、四季ナツメって名前の人なのですがご存じですか？」

「えっ、あの孤高の…ああいえっ、知っていますよ。その人。」

「本当ですかっ。彼女の場所まで行きたいのですが…。」

「…：俺で良ければ案内しましょうか？居場所わかるので。」

「もしよければお願いしても大丈夫ですか？」

「了解です。付いて来てください。こちらですよ。」

彼からの了承を得て案内役をお願いする。第一段階目は何とかクリアできた。

「お願いします。あ、私、澤田達也と言います。」

「澤田さんっすね。俺は汐山宏人って言います。」

「汐山さんですね。宜しくお願いします。」

彼、汐山宏人の横に並び、礼をする。

「それにしても大学って初めて入りましたが、敷地が広いですね。どこがどこだか全然分からなかったです。」

「澤田さんは高校までなんですか？」

「そうですね、卒業後は就職をしたので機会は無かったのは当然なのですが。」

「やっぱり、就職活動は大変だったんですかね？」

何か聞きたそうな声を出しながら質問をしてくる。そろそろ就活の事も考えて行かないといけない時期がやってくるのだろう。

「参考になるかは分かりませんが、始めてしまえば意外と何とかなるもんでしたよ。就職活動の事を何も知らずに後回しにしているとツケが後で来るので少しでもいいので早めに動いた方がおすすめで

す。まあ大変なのは大変でした。自分は最初は一発で内定を貰えたのですが、そうじゃない場合は精神に中々来るので…。」

「やっぱりそんな感じなんですね…。」

「どうせいつかはやらなければいけないので後回しにしなければ大丈夫ですよ。」

参考になるか分からない事を話していると隣に食堂らしき施設が見えた。

「あそここの建物は…?」

「ああ、あれっすか。あそこは食堂ですね。昼の時とかに使っています。」

「おお、食堂…。なんだか憧れがありますね。何か定食とか食べてみたいです。」

「今はまだ営業していないので駄目っすね。来るならお昼ごろが良いですよ。」

「え、外部の人が来ても良いのですか?」

「大丈夫じゃないですかね。たまに、明らかに大学の人がいないと思われる人も食べに来ているので問題ないと思いますよ?」

「そうなんですね。機会があれば訪れようかと思えます。」

「日替わりの定食とかおススメです。飽きない程度には品を変えてきますから。」

「焼き魚定食とか食べてみたいですな。絶対美味しいですよね?」

「あ、それは美味しいです。定期的に食べたくなるんですよ、あれ。」

食堂の会話で少しの間盛り上がっていると目的の階に着いたのか、話が変わる。

「ここを少し行けば目的地に着きますよ。」

「意外とすぐでしたね。ありがとうございます。」

「いえ、自分も行くついでなので気にしないで下さい。……それより聞きたい事があって…。」

「私で答えられるのなら聞きますよ?」

先ほどとは変わり少し遠慮がち、というか探るように聞いてくる。これは、多分：四季ナツメの事だろうと簡単に想像できる。

「澤田さんは四季さんと知り合いなんですか？ 大学ではあまりそういった交友関係を見ないので気になって。」

「ああ、四季さんとのですか？……そうですね、現段階では協力関係的な立場でしょうか？」

「協力関係：？なんかこう恋人：とか親しい関係とかでは無くてですか？」

「親しい：、どうなんでしょう。私も知り合ったのが今月の頭辺りなので付き合いが長いわけでは無いのです。まあ親しく出来るに越した事は無いのですが。」

今の関係と問われれば何がぴったりなのだろうか。仕事仲間はまだ先の事だし、友人や友達もピンと来ない。店を開くために協力しているがまだ合っている気がする。

「汐山さんが想像している様な関係では無い事は確かですね。」

「そうなんですね：、四季さんモテるんだけど付き合い合っているとかの話を聞いたことないので既に居たからかと思ってました。」

「ああー、そんな所に自分みたいのが出てくるとそれは気になりますよね。納得しました。」

「なんか変な探り入れてすみません。：つと着きました。ここです。」

彼が立ち止まり、部屋への入口を開け、招く。中に入ると疎らだが席の間隔を空け10人程度人が居た。見渡すと、四季ナツメがこつちの存在に気づく。が、目を合わさずに一旦スルーする。視線を流していくと、少し後方に高嶺昂晴を見つけた。どうやら本当に同じ講義だったらしい。

「四季さんならあつちの席に居ますよ？」

見つけられていないと思われたのか、隣から声を掛けられる。

「ありがとうございます。見つかりました。それじゃあ渡してきますね。」

一言断りを入れ、四季ナツメの席まで向かう。向こうもこつちが向

かつて来ているからか、こちらを向く。

「おはよう四季さん。これ、渡し物。」

「おはよう。それで、したかった事は出来たの?」

少し小声でこちらに問いかけてくる。周囲の人が、急に見知らぬ男が四季ナツメに話しかけているからか、意識が分かりやすくこちらに向いている。

「ああ。四季さんのお陰で大体達成できたと思う。後はこっちで何とかなると思う。」

「そ。なら良かった。それで?結局何をしようとしていたの?詳しくは聞かなかったけど。」

「それは後で話しておくよ。ここだと聞き耳立てられてたりしたら面倒だし、人を待たせているしな。」

入口を見ると汐山宏人がこつちを見ていた。会話内容が気になるらしい。

「分かった。それじゃあまた後で。」

「お礼に中身追加しておいたから後で楽しんでくれ。」

「中身?何か入れたの?」

「お菓子を少しな。それじゃあ。今回は助かった。ありがとう。」

礼を告げ、入口に戻る。視界の隅に高嶺昂晴がこちらを気にして視線を向けている事もしつかりと確認済みだ。これで次のコンタクト時に多少は興味持たれるだろう。

「用事は済んだんですか?」

「はい。汐山さんのお陰で達成することが出来ました。ありがとうございます。ごぎいいます。」

「自分は案内しただけなので大した事はしてないっすよ。元の場所まで帰れそうですか?自分も時間がそろそろでして…。」

「時間無い中、ありがとうございます。大変助かりました。いつかお礼させてください。」

「ほんと大したことでは無いので気にしないで良いですよ。それじゃあ気を付けて戻って下さい。」

「はい。それでは。」



手を振りながら彼を見送る。部屋の中に視線を移すが、数人がこちらを気にしている程度で高嶺昂晴や四季ナツメは机に目を向けていた。

「一先ずは、大学から出るか。」

来た道に戻りながら、原作までのこの数日間の予定を考える。そろそろ閣下や明月葉那に話をして問題はないだろう。それに合わせて高嶺昂晴がステラで働く様に動いて貰えないか相談する必要がある。

ポケットからスマホを出し、時間を確認したが、時間はまだ朝を少し過ぎた辺り。昼にもう一度大学に戻る必要もあるし、その事も考慮して動くでしょう。

「取りあえずお店に行って二人に話をしてみようか。多分起きていると思うし。」

午前中はステラで相談し昼に大学で昼食を取る体でもう一度接触してみることにして午後は：9／28の事を考えておこうまだ出来ることがあるかもしれない。

そうと決まると早速店に向かった。

入口の扉を開けカランカランと金属音が鳴る。フロアにはどうやら居ない様だ。まあ特に待ち合わせをしていた訳でもないし当たり前だろうな。寝泊りしている場所に居ると思い、奥の通路に向かう。すると階段を下りてくる音が聞こえて来た。

「あ、澤田さんでしたか。おはようございます。どうされたのですか？朝早くから。今日何か予定ありましたっけ？」

「明月さんおはよう。いや特に無いはず。相談があつて急ですまないが押し掛けた感じになる。」

「そうでしたか。私は今日は特に予定は無いので大丈夫です。」

「ミカドさんは？」

「今は上に居ますよ？ミカドさんに相談でしたか？」

「いや、二人にだな。少し真面目なお話をしたくて、上の部屋にお邪魔しても大丈夫？」

「了解です。では上がりましょうか。」

俺が話したい事が何となく分かったのかすんなりと了承が出た。階段を上がると既に閣下が待っていた。下の会話が聞こえていたのだろう。

「澤田達也か。どうしたのだ急に話したい事があるなど。」

「色々二人に話しておきたい事と、相談事があつて急だけど店まで来た感じになるかな。この後時間って大丈夫だったりする？」

「吾輩の方も平気だ。重要な話なら時間位作れるしな。」

「ありがとう。取りあえず話したいことが2つ程あつて…、一つ目だけど、ミカドさんに言っておきたい事が。」

「私にか？どうした。」

「以前にミカドさんに俺の知り合いを探して欲しいとお願いしたと思うのだけど、どう？進捗は。恐らく誰一人あれから見つかつて無いと思うのだけど。」

「そうだな。貴様の言う通りこの一ヶ月近く探したが職場どころか名前すら見つかつていない。」

「やっぱりそうか。分かつてはいたが改めて人から言われると実感が湧く。」

「だよな…。その探すお願いだけど、今後はしなくて大丈夫になった。というか意味が無くなったが正しいかな。探しても見つかる事ないし。」

「それは一体どういう意味だ。」

俺の発言が気になったのか言葉の意味を問いかけてくる。

「俺の方でもスマホを持ってから色々調べてみた。結論から言うとこの世界には知り合い、家族は存在しないという結論に至つたって訳。だから探す意味が無いって事。」

「え……それって、」

明月葉那の方から驚いた声が出る。

「あー、その説明をこれからする。正直二人に信じてもらえるか分からない。けどこの一ヶ月近く過ぎて自分の中では納得出来る事になるから二人には話しておきたいと思つた。何かあつた時頼

れる人達には。」

2人を見ると、こちらが話すのを待つ姿勢を見せてくれた。

「ええっと…、まずだけど。俺の事だけど、今生きているこの世界じゃなくて、違う世界。平行世界って言うのが正しいか分からないが、こことは違う世界から死んで、この世界に産まれなおした。って説が濃厚ですって話をしておく。」

「え？別の世界…？」

やっぱりそんな反応するよな。分かる。

「そう。俺が生きていた時の日本と、今生きているこの日本で知っている建造物や建物が多くあったから時間や時代にズレは無い。そこは間違いないと思う。あっても一年以内とかそんなレベル。」

「それなら家族や知り合いが見つかるかもと思っていたが…、これが全く情報の一つも出なかった。何一つ。何か一つは出るだろうと調べたが、探れば探るほど最初から存在していないとしか考えられないように思えた。そこで、別の事を調べてみた。近年起きた事件や記事、ネットなど騒ぎになった出来事。けどどれも一致しなかった。」

「そこで貴様はここが違う世界では無いのかと考えたのか？」

「そうなる。調べていく中である事に気が付いた。というか正直気が回っていなかった感じだったんだが。この世界と俺が生きていた世界で大きく違う歴史が。」

「あったのでしょうか…？」

「あった。世界的にも大きな影響を与え、人の生活を変えた出来事。俺が生きていた世界では、ある年の始めにとあるウイルスの感染があつてな。そのウイルスが世界中で感染者を作っていた。その後か少なくとも日本では、皆マスクをして外出を極力控え、感染しない様に動いていたんだ。感染力の高いウイルスだったからな。町中を見ると人誰もがマスクをしている光景だった。けどこの世界ではそれが見当たらない。そんな話すら出ていない。」

「世界中で蔓延していたという事でしょうか…？」

「そうだな…。もしこの世界でもなっていたら絶対耳に入る。その位毎日報道があつたレベル。もはや日常の一部として気にしていた

程な。」

「その様なウイルスがあるなど、俄かに信じられんが…。」

「そうか？過去に日本では無いが世界を見れば似たような事態になったのはあるけどな。とまあ、そんな大きな違いがあればそう考えってしまうって事。それに俺が居た世界では、ケット・シーや死神とか居なかったしなー。まずそこからおかしいと気が付くべきだったか。」

後半は少しふざけた声で話す。なんか少し暗い雰囲気になって来たし。

「…ってのが一つ目。正直この一つ目は割とどうでも良い事だと思ってる。別の世界だとしても生きている事には変わりないし大した影響は無いからな。大事なのは二つ目なんだよね。」

「今の話がどうでも良いって…、すごく大事な話だと思うのですが…。」

「考えてもどうにもならないしな。それよりこれからどうするかを考えたい。そこで二つ目は明月さんが気にしていた事。これからの事、高嶺さんについての話をしていこうかと思う。」

「やっつとですか…、正直話してくれないかと思っていました。何度聞いてもはぐらかされていたので。」

「それについてはほんとすみません、色々事情があつてき。けど今からは話していく。聞きたい事とかあつたら遠慮なく聞いて欲しい。俺も知っている事を今から話すつもりだからな。」

「まずだけど、今から数日後とある縁があつて、高嶺さんがこの店にやってくることになる。結果としてバイトとして働く事になったりする未来がある。」

「え、高嶺さんがこのお店にですか?!それに澤田さん…、急にそんなに話して良いんですか?」

「二人なら大丈夫。それにこの世界なら俺を知っている人居ないし。現段階は安全と思ってる。」

「なるほどな。以前の世界とは違って、この世界では狙われていないという事か…。確かに少なくとも現段階では安全とも言えるな。」

閣下の中で納得出来た様だ。前でもそんな事は無いのだが、話を合  
わせておこう。

「そうそう。だから気にしないでくれ。」

「……分かりました。澤田さんの判断にお任せしますね。」

「了解。でだ、俺が知っている未来では高嶺さんがこのお店で働く  
か、働かないかの二択の未来がある。このどちらかを選ぶかによつて  
先の出来事が大きく変わる。働けばより良い人生を掴める可能性が  
広がる訳だが、逆だと……、そうでもない。だからこのお店で働いて  
欲しい。そこで明月さんに高嶺さんがこの店に来たら説得をして欲  
しい。一緒に働きましょう。とな。」

「わ、私ですかっ?」

「ああ。明月さん程の可愛い人なら簡単に頷いてくれそうだしな。  
人の下心に漬け込む様な行為になるけど。」

それでも高嶺昂晴が死ぬ事になるよりかはましだろう。

「出来るか分かりませんが、頑張ってみます……。」

「普通に誘えば良い事だし重く受け止めなくてくれ。取りあえずは  
それ位になる。その後は高嶺さんが働いてから話すことにするよ。  
彼が居ないと始まらない事だしな。」

一旦話を一段落つける。

「今日朝から動いていたのは今回の事関連だったのか?」

「そんな感じ。少しでも働いて貰えるように、先にコンタクトでも  
取ればと軽く期待しているだけ。大した事はしていないから気に  
しないでくれ。」

朝から俺が動いていた事が気になっていたらしいが今ので繋がっ  
たのだろう。

「高嶺さんがこのお店に……つて、まだオープンすらしてないのにで  
すか?」

「ああ。俺みたいに手伝う所からだな。」

「生活費がまともに得れていないのに……、なんだかこちらの都合で  
……申し訳ないです。」

「そこは大丈夫。彼が働くのは彼の為にもなる事だから、仕方なく。」

いやいやで働く事にはならないから安心してくれ。」

「それなら良いのですが…、未だに大家さんから合格を頂いておりませんし。」

「それも何とかなるから。というか何とかする事になるから。大丈夫大丈夫。」

「澤田さんにはお店がオープンしている未来が見えているってことでしょうか？」

「そこは皆の頑張り次第としか言えないなあ…。」

「そこは安心させて下さいよ…。」

俺の頼りない返事に苦笑いをしている。

「未来を知っているからと言っても安心は出来ないからな。少しの行動。変わろうとする一歩。それだけでその後の人生が、全く違う道を進む。結局大事なのは当人の行動や気持ちって事になる。明月さんなら分かると思うけど？…これまでの経験上。」

「確かに…、そうですね。澤田さんの言う通りです。些細なキツカケ…。それだけで結果が変わる…。その通りでした。」

「だから高嶺さんが幸せの人生に勇気のある一歩を踏み出せるように俺たちが支援してあげよう。という事だ。」

「それようとしている事は色仕掛けでは無いでしょうか？」

「結果が大事だから。お店で働くという決心をしてくれたという結果が。過程は…、まあ濁す方向で…。うん。」

大丈夫。明月さんの説得で駄目なら、俺も仕掛けるつもりだから。している内容は変わらないが効果はあると思う。男ならな。

## 第28話：枝分かれる可能性の数

「それじゃあ、そろそろ俺は大学の方に行くとするよ。」

時間も昼前になり、雑談も切り上げ席を立つ。その際に閣下に視線を流す。話したい事があるという意味を込めて。閣下を目が合い意図が伝わったか頷く。

「また行かれるのですか？」

「ああ。大学で昼食を取ろうと思っただけ。他にも何かと済ませてこようかと。」

「大学ですか…、私行った事無いのでどの様な所か気になります。外部の人が行っても大丈夫なのですか？」

「俺も気になったのだけど、意外と平気らしい。だから焼き魚定食でも食べに行くことにした。」

「これまた美味しそうな食事を…。私も行ってみたいものです。これまで行く機会が無かったのです。」

「明月さんも？…あー、是非。と言いたい所だけど今回は遠慮願いたい。すまないが。」

「何か不都合があるのですか？」

「そうなるな…。今回、人を探す目的で行くものとなるべく目立ちたくない。後、目的の人が明月さんの事を知らないから一緒に行くと…。」という感じで、すまんが今回は見送って欲しい。」

急な誘いではあるが今回はお断りしておく。付いて来られると色々和不都合が出てくるし、大学になら高嶺昂晴と行く機会があるだろうしその時で頼む。

「そうなのですか。分かりました。今回は大人しくしています。」

「折角言ってくれたのに申し訳ない。」

「いえ、私が急に言い出した事なので気にしないで下さい。それでは行ってらっしゃいませ。」

「吾輩も近くまで用事があるから途中まで付いて行こう。」

「そうなのか？じゃあ途中まで行くか。」

そう言うと閣下は人の姿になる。

「じゃ、またな明月さん。相談とかあったらまた来るよ。そつちも話したい事とかあったら俺の部屋にでも来てくれ。」

「分かりました。その時はお願いしますね。」

閣下と二人で店を出る。少し歩くと閣下から声を掛けて来た。

「それで？何か話しておきたい事があるようだが…。」

「突然すまない。明月さんには言わない方が良いかと思つてさ。」

「なるほど、その類の話か。どの様な内容なのだ。」

「ミカドさん。力で催眠術とか使えたりしないか？」

「は…？催眠術？」

当然の質問に変な顔をしていた。

「そう。もしくは思考誘導的なもの。人の考えとかを誘導するようなおまじないとかさ。」

「貴様はいきなり何を言つておるのだ…。そんな馬鹿な話をするために…：もしかして、先ほどの高嶺昂晴の事か？」

「ご名答。高嶺が少しでも店で働く可能性を上げたくてさ。何かいい手は持つて無いかあつて。」

「残念だが無いな。それになぜそこまで拘るのだ。」

「働かないを高嶺が選ぶと、彼が死ぬからな。」

「死ぬ…？断るのと奴が死ぬのにどんな関係があると言うんだ。」

「まあざっくり話すと、彼がステラに働く理由が自身の魂の事が関連している。ステラで働く事でその問題が解消されて行くのだけど、働かないとそうは行かない。」

「あやつ魂が大きくなつている事が問題なのか？」

「そんな所かな。そこでミカドさんの上の方々が放つておくわけにも行かないからあつてなく…：つて感じかな？恐らくだけど。真相は分からないからここは俺の推測になる。」

「確かに初めての事だが、そこまで大きな問題では無いとは思うのだが…、何か理由があつたのかもしれないという事か…。」

「そこは考えても仕方ない。結局神のみぞ知るだしな。問題は、高嶺が死なない様に立ち回りたいって事。明月さんに死ぬから頑張つ



て説得してくれ!とか言えないだろう?」

「それは確かにそうだな。変な気を背負う事になるだろう。」

「そうそう。だからさつきは避けた。一応こっちでも策はあるけど他にも手は作っておきたくて念のために聞いた感じ。」

「すまん。吾輩では力になれん。」

「いやいや、それが分かっただけでもよしとしておく。今後何かあったら宜しく頼む。」

「ああ、遠慮なく言うがいい。……所で気になったのだが、一つ良いか?」

「ん?どうかした?」

閣下から質問が出る。今の会話で気になった事でもあるのだろうか。

「店の時にお前は高嶺昂晴が働くかどうか二択あると言っていたな。」

「ああ、簡単に言うとお死ぬか死なないか的な選択肢になってはいる奴だけ。」

「もし、奴が働くを選んだ場合、今後どのような事が待っているのだ?今回みたいなきがまだあったりするのか?」

閣下の質問は最もだな。何度も死ぬようなことがあつては堪らないしな。

「大丈夫。命の危機は今回だけ…、ああいや、死なないけど危険なのはあると言えばある。そうなるかどうかは高嶺の選択次第だけだ…。」

幼馴染ルートだけ結構命の危機に面していた気が…。まあ死なないからセーフかもしれない。

「全ては高嶺昂晴の行動次第という事か…。どの位違う人生を進んでしまうのだ?」

「なんていうか、一本の道からどんどん枝別れしていくイメージ?俺が知っているだけなら6本。いや、さつきのを入れて7本の別れ道があるのは知っている。」

「7つもあるのか…。因みにどの程度先まで正確に知れるのだ…」

？」

「それは道によってバラバラだな。確実に知っているのは多分今年の12月頃頭か中頃までそれ以降は場合による。」

「意外と短いのだな。いや、知っている時点で凄い事に違いは無いのだが。」

「世の中万能な力って無いよな。正直期待はしないでくれると助かる。未来とか簡単に変わるしき。」

「そうだな。高嶺昂晴でもこれ程大きく差が出るのだから。」

いや、それは高嶺昂晴だからだな。主人公だし。選択肢で好感度変わるし。良い奴だし。羨ましいし。

「そんな感じかな。聞きたかったのはそのことだけ？」

「ああ、他は今の所大丈夫だ。助かる。」

「それはお互い様って事で。」

本当に聞きたかったのもあるだろうが、俺がちゃんと話すかどうかの確認もあったのだろうか。

「では話も済んだ事だし、吾輩は戻る事にしよう。」

「了解、また進捗があったら連絡しに行く。」

閣下と別れ、一人で大学に向かう。時間的にはもうすぐ昼頃だ。汐山宏人から聞いた時間に丁度着くだろう。恐らく今日食堂を利用するだろうし運よく会えることを祈ろう。可能なら高嶺昂晴も一緒の場面に遭遇しておきたい。お礼を口実として席を共に出来れば文句なし。後は適当に会話の中にヒントを散らばせておけば店であった時にそれが繋がると思う。

「よく友人と食べているとは言っていたし、今日も利用しそうな話し方だった。問題はその友人が高嶺かどうかだが…、可能性は高いと信じていたい。」

失敗しても大丈夫だが、成功はさせておきたいと考えつつ、大学に向かった。

大学に着き、食堂に向かう。道中何度かすれ違う学生にあったが、特に不審な目は向けられなかった。出口に向かっている様に見える

ことから、これから帰る所なのだろうか。

「さてと、取り合えず入口に着きはしたが…。」

中を見るが目的の人物は見当たらない。見た所女性の利用が多いような気がする。

「ん？気のせいかな？」

見渡している途中、知っている人が何人か見えた気がした。

「あれは…。」

最初に目に付いたのは席に座り向かい合って雑談している女性二人組だった。紫色の髪と、ピンク色の髪をしている。何か楽しそうに雑談に花を咲かしている様子だ。他には窓際で何か本を読んでいる人と、紫の手さげを肩に掛けて歩いている人。どちらも藍色の髪だ。

「いや、今はそれはどうでも良いか。目的が先だしな。」

気にする事では無いと意識を切り替える。再度居ないか見渡すが、見つからない。来るまでここで待つか、それとも一度出直し少し時間を空けてくるか。

「此処でじっとするのは変だし、一度出直すか。」

一度出直すことに決め、食堂を出る為に背を向ける。出て行こうとすると、向こう側から知っている顔が来ているのが見えた。

「あれ？もしかして澤田さんじゃないですか。どうしてここに？」

向こうもこちらに気づき、声を掛けてくる。探していた人物汐山宏人だ。その横には高嶺昂晴も同行している。一緒に昼食を取るつもりなのだろう。

「あ、汐山さん。今朝ぶりですね。実は朝話していた食堂を早速行ってみようかと思いました。」

お互い近くまで来て、隣の高嶺昂晴と目が合ったので小さく礼をしておく。

「早速ですか。でも引き返している様見えましたか…。」

「恥ずかしながら、来たのは良いのですがよくわからず…、どうしようかと悩み一旦出直そうかとしていました。」

「恥ずかしそうにして頬を掻き、目を逸らす。」

「あー、確かに初めては抵抗ありますよね。」

「そうなんですよね…、こういった場所初めてだったので少し。」  
困った様子を醸し出す。出来ればこちらから誘って欲しい所だが…、無さそうならこつちから誘うしか無さそう。

「それじゃあ、一緒にどうですか？澤田さんが良ければですが。」

——来た。早速誘いに乗る事にしよう。

「え、良いんですか？私としては助かりますが、その、お連れの方は…。」

「大丈夫だよな昂晴？俺澤田さんにまだ聞きたい事とかあるからさ。」

「大丈夫だが…、何なら俺が席を外そうか？」

「いえっ！それは無しでお願いします。可能なら一緒にお願いします。」

気を遣って外れてくれようとするが、寧ろそつちが本来の目的なのだから席を共にしない選択肢はありえない。

「それに良ければ、昼食を私からご馳走させていただきます。汐山さんは今朝のお礼として。そちらの方は今回のお詫びとして。」

食堂の中で三人でトレイを持ち、空いている席に座る。二人はお互い隣に座り俺が対面に座る形になった。

「いい匂いですね…。これだけで満足してしまいそう。」

「席が空いててラッキーでしたね。…それにしても、ほんとに良いんですか？俺たちの分までお金を出して貰いましたが。」

「いえいえ、気にしないで下さい。これはお礼ですし、私の罪悪感を少しでも減らす為にした好意みたいなものですので、二人が変な気を遣わないで大丈夫です。」

隣に座っている高嶺昂晴も若干遠慮が見える。まあ彼は何もしてないのにご飯奢って貰った感じに思えるのだろう。

「それより早く食べましょう。折角の定食ですし、温かい内に味わいたいです。」

箸を取り、始めに手を付ける。これで二人も食べ始めやすくなるだろう。

暫く、三人とも昼食を食べ、少し進んだ所で、話を切り出す。

「そういえば、汐山さんから何か聞きたい事があるとか何とか？」

「そうでした。実は今朝、澤田さんが四季さんに荷物を渡した事が少し話題になっていて、道案内した自分が何か知って居ないかと根ほり葉ほり聞かれたんですよ。」

「朝のあれは宏人が案内していたのか。」

「おう。そういえば昴晴も同じ講義取ってたか。」

「そうそう。確かにあれは少し気にはなっていたけど、プライベートな事をズカズカと聞くのは良くないだろ。」

朝のあれは高嶺昴晴も気になっていたらしい。わざわざ赴いた甲斐があった。

「いえいえ、そんな個人的な事では無いので大丈夫です。と言っても本人が居ないところでプライベートの事は流石に避けますが。」

「だってさ。澤田さんはこう言っているのだし少し位聞きたいと思うのだけど…？」

「まあ、本人がそういうなら…。」

「ていうか、昴晴は気にならないのか？あの孤高の撃墜王の名を持つ四季ナツメだぞ？男なら気になるだろっ。」

「無いと言えば嘘になるけど…、こう。なんていうか失礼というか、申し訳ない気持ちがあるからな…。」

「人が出来ていることで…。それで。澤田さん。一体何があつたら四季さんと知り合いになれたのですか？どういった経緯で？」

「そうですね…。詳細は省きますが、私がお世話になっている恩人たちが居て、その人が四季さんのお手伝いをされていまして私も是非とお願ひしたんですよ。そこで四季さんとは知り合いました。」

「澤田さんの恩人の方が四季さんと知り合いだったって事ですか？」

「はい。喫茶店を開こうとして今その準備段階をしている所になります。と言っても人も物もまだまだ足りていませんが。」

「へえー、四季さんが喫茶店を…なんか意外。」

「喫茶店の話はオフレコでお願いします。開いてすらいないので

…、それに急に話題になると迷惑掛かってしまいますので。」

「あ、分かりました。ここだけの話にしておきます。それにしてもあの四季さんが喫茶店をか……。優雅に飲んでいる所なら想像出来るけど。」

「そうですか？彼女がウエイトレス姿で紅茶を淹れた姿は結構様になりますよ？」

「確かにそれは似合いそうですね……。というか澤田さん、まるで見た様な言い方だったんですが……。まさか既に？」

「……これもオフレコでお願いしますね？」

「マジですか!?あの四季ナツメのウエイトレス姿を……!」

「宏人っ、声が大きくなってきてる。落ち着けて。」

四季ナツメのウエイトレス姿でテンションが上がって来た汐山宏人を注意しよとすると隣から先に喝が入った。

「ああ、そうだ。すみません。ヒートアップし過ぎました。」

「気持ちに分かるので大丈夫ですよ。男なら昂ります。まあ本人の耳に入らない様には気を付けてください。」

「澤田さんもそう言う事思っうんですね。落ち着いているので言う人じゃないと思ってたんですが。」

「自分だっつて男ですから。そういっつた思考や感情を持つのは当然じゃないですか。なるべく表には出さない様になっていますが。」

「なんだかどんどん目的から離れて話になってきている。いや、割とこう言っつた会話も好きだが。」

「まあそんなんで今は設備とか人が足りていない状況なのですよ。」

「バイトの求人しているんですか？昂晴、お前確かバイト探してな

かっつたか？」

「ああ。一応まだ探しているけど。募集されているのですか？」

「募集していますよ？正式に出しては無いですが、内容としてはお店を開く準備段階からの採用で上手くいけばそのままオープンングスタッフ的な流れになるとはおもいます。」

一応募集に関しては四季ナツメから許可は得ている。見つけたら一旦話を持ち帰って相談する流れになっているが。

「昂晴っ！是非ともそこで働いてくれ。そして店を開けるようにしてくれ！俺は……、四季さんのウエイトレス姿を拝みたいっつー！」

握りこぶしを作り、全力で高嶺昂晴に想いを託している。

「いやまで、まだ働くは分からないし……。理由が不純すぎるだろ。」  
「そうですね。応募されるのなら一度今の話を持ち帰って相談してみますよ？通ったら面談とか少しされるかもしれないかもしれませんが。どうされます？。」

「あー、そうですね。お願いしても良いですか？丁度無いか探していたので。」

「了解です。結果が分かったらすぐに連絡しますね。あ、その為にLINEとか交換しておきませんか？便利ですし。」

「そうですね。結果がすぐ分かるのはありがたいです。」

スマホを出し、お互いIDを交換し合う。

「汐山さんもうですか？ついでに交換しておきましょう。」

「いいっすよ。交換しましょう。分かったら俺にも教えて下さい。」

高嶺昂晴に続き、汐山宏人ともIDを交換していく。

「ありがとうございます。高嶺さんには決まり次第連絡しますが、決定では無いので念のためバイト探しは止めないで下さいね。」

決まった様なもんだが、一応ありきたりな言葉を投げかける。高嶺昂晴から、分かったと頷きが返ってくる。

「それでは、箸も止まっていますし食事の続きしましょうか。冷めてしまいますし。」

適当に話を切り上げ、三人とも食事を再開した。

その後昼食を終え、帰る旨を伝え二人とは別れる。

「やれることもないし、帰るか。」

出来ることはやったとは思っているが、本当にこれで良くなるのか分からない以上どうしようもない。寧ろ予定していたより上の結果が得られた方なので満足しておくべきだろう。

「後は9/28を待つだけか……。」

考えていたことが無意識に口から零れる。物語が始まるためには

仕方ないとは分かっているが、二人を一度見捨てるような事をしていく気がしている。割り切った方が早いのだが。

家へ戻る。のではなく通り過ぎ駅前まで足が向かっていた。特に意味はないのだが何となく最後に来ておきたかった。

目的の場所に着き、横断歩道を見る。今は赤信号だ。少しすると信号が青に変わる。それと同時に止まっていた人達が歩き出し交差ししていく。その中を進まずにただ見ている。

「最近これをよく考えてしまっているなあ…。」

高嶺昂晴が死ななくても物語として進行は可能では無いのか。奇跡など起こさずとも死神という不可思議な存在と関係を持つことが出来るのではないかと。世界をやり直さなくても幸せを掴み取れるんじゃないのかと。

考えていたが思いつくことは無かった。もしかすると変な考えが固定してしまっているのかもしれないが、彼が一度世界をやり直すのは最低条件と結論付けた。

「澤田くん？」

不意に後ろから声をかけられて振り返る。

「四季さんか。偶然だなこんな所で。」

出来れば今会いたくない人ナンバーワンと出くわす。運が悪すぎる。

「信号も渡らず立っている人が居るかと思ってみれば…まさか知り合いとは思わなかった。どうかしたの？」

「いや、特にどうもしていない。四季さんこそ何か用事が？」

彼女の右手には大きめの紙袋の様なものを持っていた。見た感じ服か何かが入っているのだろう。

「ああ、これ？お店のウエイトレス服。ちゃんとサイズ合わせないといけないから。お店を開こうとしているやる気を少しでも大家さんに見せておこうかなって気持ちも多少あるけどね。」

困った様な顔で苦笑いをしている。

「なるほど。それでここまで出向いてきたわけか。」

「そゆこと。効果無いとは思っただけど…。」



どうしたら許可が出るのか分からず、若干迷走気味になってきている気がしている様だ。

「あの人も自分なりの合格ラインがあつて言っているだけだからな。四季さんに嫌がらせをしたくて許可をだしていかないわけじゃない。」

「そこはちゃんと分かつてる。だからこそ何をしたら良いのか最近困っているの。」

信号が変わり、前を向き横断歩道を渡ろうとする。その後ろ姿を見て横に並ぶように歩き出す。

「それについては俺もそろそろ真面目に取り組んで行くとするよ。」

「今日の事もその一環?」

「そうそう。その一環。前に話していた新しく人を雇おうか言つてた件、一応一人候補見つけたぞ?男性で以前に色々な場所でアルバイト経験があるから即戦力にもなるはず。何なら俺より使えるかもしれない。」

「自分で言うのはどうなの?それ。」

呆れ顔でこちらを見てくる。

「役に立つ事間違いない。向こうも希望していたから一旦四季さんに相談するって事で止めているが。」

「へー。よくそんなに早く見つけたね。知り合いとか?」

「いや、一応四季さんと同じ大学の人だな。どちらかというとな四季さんの方が知り合ってる可能性が高いが……、四季さんは無さそうだな。」

「それって……、どういう意味?」

「待て待て、友達が居ないとかそういう意味ではない。四季さん異性とか特定の誰かと行動を一緒にしている場を想像出来なくてさ。基本ソロで居るイメージ?」

「別に、いつも一人で居る訳じゃ……、いや、そうかも……。」

なるほど。自覚はあるらしい。心のどこかで一人で居ることを望んでいるのだろう。

「確か、朝の講義で一緒の人だぞ?部屋を見渡した時に見た記憶が

ある。」

「そうなの？と言っても同じ講義の人とか覚えてないから意味ないかな。」

「どうする？見て決めたいなら面談とか段取りしておくけど。話した感じでは特に問題は無さそう。無害で真面目な人だと思うし。」

「でも同じ大学の人があ。でも贅沢は言えないしね。ちよつと考えておく。」

「了解。保留で一旦止めておく。向こうには別のバイト探しを止めない様に言っておいたから多少は問題無いと思う。」

「そうなの？それなら急がなくても大丈夫かな。」

予想していた返事だった。開店出来るか分からない店に他人。それに同じ大学の人の採用するのは躊躇いがあるのだろう。巻き込みたくない気持ちも勿論あるはず。まあ残念だがその人は強制的に参加させる事になるがな。

「焦って決めても意味無いしな。じっくり考えていてくれ。」

「ありがとう。そうする。」

「それじゃあ話したい事も終えたし、俺は戻る事にするよ。何かあったらまた連絡を飛ばすから。」

「了解。それじゃまた。」

手を振り、四季ナツメを見送る。長い事話していると変な罪悪感が湧きそうだ。早めに切り上げておいた方が正解だろう。

姿が見えなくなったのを確認し、来た道に戻る。やはり話していた感じだと大した心変わりは無さそうだ。そんなに簡単には人は変わらないって事なのだろう。彼女の場合はそれが根深いだけかもしれないが。何かしらアクションを起こす必要があるのかもしれない。

動くとしても高嶺昂晴がCAFESTERAに参加してからにしておくと考え、家に帰る事にした。

## 第29話：一度目の世界で

窓からの日差しで目が覚める。スマホを確認するが、どうやらアラームをセットしている時間より少し早く起きてしまったようだ。

「二度寝には時間足りないし、寝ても夢の中であいつと会うだけだしな……。起きるか。」

少し前から寝るとちよくちよく夢の中で謎の少女が出てくる。聞いても正体を明かしてくれなかったのでそう呼んでいる。夢の中では彼女とその日にあった事や、最近の出来事を報告したり、映像ベースで確認したりする。個人的には自分の生活を見られている様で恥ずかしいが、彼女は飽きずに楽しそうに見ている。夢の中でしか出られないから少しでも娯楽要素が欲しいのだろう。

「今が昼だから……。今日の昼過ぎから夕方辺りか……。」

今日が原作初日の9/28。遂に来てしまった。今日から高嶺昂晴の物語が始まる。

空腹の為食事を済ませ、本棚の端に閉まっている一冊のノートを取り出す。『喫茶ステラと死神の蝶』と書かれたタイトルのノートだ。覚えている内に可能な限り原作のフローチャートを書き込んだ一品だ。選択肢時の台詞からチャプター内で繰り広げられた会話内容など、様々だ。本棚の隙間に挟んでるため意図的に探さない限り見つけられないはず。

「取り敢えずはお店を開くまでの期間を無事乗り切る事が最初の課題になるのか。」

オープンまでに準備する物、足りていない設備、人。やる事は沢山ある。それをこなしていくためには高嶺昂晴の存在が必要不可欠。オープン後も暫くは気を抜けないはずだ。慣れて来た頃には11月になっておりどのヒロインと関係が深まっているか注意しておかないといけない。明日から12月までは高嶺昂晴の様子を確認しつつ、仕事をしていく事になる。流星に1人では無理なので明月葉那や閣下。必要なら四季ナツメにも協力を仰ぐと考えていた方が良いだろ

う。

「まあ……。なんとかなるだろう……。可能なら火打谷愛衣の事もなんとかしておきたいが……。望みすぎかもしれないな。」

高嶺昂晴が明月葉那を選べば一番やりやすくなるのだが……。彼女を救えるのは主人公ただ一人だから。その場合。四季ナツメをどうにか希望や夢が持てるようにしなければならぬ。今の内からでも働きかけてはいるが、駅前で感じた様にまだ足りてはいなかった。

「大事……なのは、今日の勧誘を成功させること……。だな。ふああ……。ねむ。」

腹が満たされ気を抜いたからか急に睡魔が来た。起きることも出来なくは無いが、時間はまだ余裕がある事だし少し横になっていようと体を倒した。先ほどより大きなあくびをして目を閉じていると次第に意識が落ちていく。

遠のく意識と増していく睡魔に抗わず、身を委ねることにした。

「……んん、あ？……寝落ちしてしまっていたのか。」

目を空けると辺りが暗くなっており、自分が寝ていた事に気が付く。一瞬夜かと思いい体を起こすが、見覚えのある場所であったが為落ち着く。

「なるほど。寝てしまったからか、ここに来たのか。」

いつもは一日の終わりの睡眠で来ることが多いが、休息の睡眠で来てしまったらしい。周囲を見ると、近くに光が照らされている場所があり、テーブルがあり向かうように席が2つあった。片方は空席、もう片方には夢の住人が既に座っている。こちらの存在に気づくと相席を求めるように手招きをしている。

「おはよう。で良いのか分からないが、今回はティータイム的な演出なのか？」

テーブルの横まで近づくと、紅茶とスコーンやケーキなどが乗せられているスタンドがある。

「おはようで良いんじゃないかしら。今回は貴方が働く場所をイメージしてみたんだけど美味しそうに見えない？。前回貴方が買っ

て食べたチョコレートも中々美味しかったけどね。」

この空間はあくまで俺の夢の中という事で、俺の記憶にあるものならある程度再現出来るらしい。味などは俺が感じた味覚ベースの結果が出るそうだ。

「ああ。あれか。丁度良い位の甘さで飽きない奴だった。確かに美味しかったな。」

紅茶に口を付けている彼女の前の席に座り、話しかける。

「それで？急にここに来たのだけど、もしかして何か緊急なのがあつたりするとか？」

「いいえ、特にそういつたのは無いわね。単純に貴方が寝ていたからお茶でもどうかと思つて誘つただけよ？」

特に用は無かつたらしい。こちらも時間は大丈夫の為、茶会に付き合う。

「とうとう今日という日が来た。という所かしら？意気込みはどう？」

「意気込みと言われてもなあ…。頑張るとしか言えないかな？」

「彼らのこれから起こりえる先が見えるというのに随分とやる気が無い返事ね。心情は穏やかじゃないと思うのだけど。」

隠せないと分かっていたが、せめて口だけでも本心を隠してみたが意味は無かつた。

「そりゃ、これから起きる事を考えたら落ち着いている方がおかしいだろ？二人を見捨てようとしてるんだからな。」

「でも仕方ない事つて割り切つたんじゃないの？必要なんでしょ？彼が一度死ぬことは。」

「そうだが…。いや、考えて駄目だと決めた事だし今更どうこう言うのは止めるか。そうだな、高嶺昂晴が今日交通事故で死ぬのは物語として必要不可欠。この物語が始まるため仕方ない展開つて事だな。それがあつたが為に、幸せになるためのこれからの謳歌していく。明月菜那。四季ナツメ。墨染希。火打谷愛衣。汐山涼音。彼女らの誰を選ぶかは分からないが…。」

「幸せな未来を掴み取れる様にサポートして行くつて事よね？」

「そんな感じだな。役に立てるか分からないけど。」

「……ふーん。そう。」

「……?何か問題でもあるのか。」

急に目線を下げ、意味ありげな声を出す。

「別に。その割にはあまり歩み寄っている様には見えないと思っただけ。」

「いや、そんな事だろ。確かに直近はあまり会っていない事の方が多いけど。それに明日からは嫌でもほぼ毎日顔合わせる事になるからな?。」

「私が言いたいのはそのような物理的な話じゃないわ。精神的な事を言ってるのよ?。」

「俺の……?。」

「気づいていないのか蓋をしているだけなのか分からないけど。貴方は彼らや彼女らをどこかまだゲームや物語の登場人物として見ているのよねえ。話す時は苗字とかでちゃんと読んでいる。けど自分の中ではいつもフルネームよね?。」

「まあ……。確かにそうだな。」

「そういった小さな所に壁を作ってるんじゃないの?自分が違う世界の人でこの世界の人では無いとか、彼らの物語に余計に割り込んでしまっているとか考えたりもしているしね。」

「それに関しては実際にその通りとしか言えないし、事実だろ?。」

「その考えがいけないと思うのだけど……。そこは今後一緒に過ごしていく内に払拭されることに期待かしら。貴方も彼らもこの世界で生きていく事には変わりないのだから。」

「どうやら勝手に結論付けてしまったらしい。」

「それと、気になっていただけの……彼、今日の交通事故で一度死ぬのよね?。」

話の流れからして彼とは高嶺昂晴の事だろう。

「そうだな。さっき言った通り。」

「その時に彼女、ええと四季ナツメさん?も巻き込まれて一度死んでしまうのよね?二度目の世界では一度目の死ぬ際に死への肯定が

あつたが為に魂が零れ落ちてしまつて危うくなる。で良いかしら?」  
「当たっている。魂が弱り切つている為、結構危険な状態になつてしまう。色々諦めてしまつているからな……。彼女は。」

「貴方の記憶では、彼が四季ナツメさんを好きになる事で彼女に生きる活力…、一緒に生きていきたいと思えるような希望を見せてくれる。そんな感じで良い?」

目の前の彼女の質問に肯定をして頷く。

「もし彼が彼女を選ばず他の女性を選んだ場合は…、特にこれと言つて何かが起きていくわけじゃないのね。」

「そこは…仕方ないかと。個別のシナリオに入らない限りヒロインの事はあまり描かれなからな。逆に言えば高嶺昂晴が四季ナツメと結ばれる物語にならなければ倒れたりはしないかもしれない。」

「なるほどね…。これは他の人達にも言える事なのかしら。つまり彼が四季ナツメさんを選ばなければ魂が衰弱しているが為に倒れてしまう。というイベント?が起きる必要は無い訳ね。」

「シナリオの大事な場面だしな。それがあつた事で自分の気持ちを否定せず高嶺の告白を受け入れるという一大イベントになる。」

「で、貴方は彼が結ばれるならあの子…死神の子が良いと思つているのよね?」

「…ああ。彼女…、明月葉那と結ばれるのが一番良いかと考えている。他と違つて彼女を救えるのは高嶺しかいないからな…。」

「それはそうね…。過去に戻るなんて超常現象を起こす…、貴方には到底無理そうね。」

「そりゃな。あいつの魂だからこそ出来た事だし。」

「それなら、四季ナツメさんが今日の事故で死ぬ必要性ってあるのかしら?」

彼女からの唐突な質問が出てくる。

「何言つて…そりゃ必要に…。いや、待てよ。」

どうして当たり前前の事を聞いてくるのだろうと思つたが、よく考えてみる。確かに高嶺昂晴と結ばれないのなら魂が衰弱している話も倒れる場面も起きない。他では店を開けたことで少しずつだが夢を

追いかけているという前向きな気持ちを持つことが出来ている筈。あくまで高嶺昂晴と結ばれる為に必要な要素の一つだとしたのなら…。

「なんとなく気づいたかしら？別に彼女が死んで魂が弱まる事は要らないかと思っただけけど…。彼と結ばれないのならば。」

「そうかもしれないが…。それは物語に影響を与えてしまわないかの心配が残ってしまう。」

「そこは問題ないんじゃない？既に貴方が居る事自体が影響も問題もありまくりでしょ。」

少し呆れ気味で返してくる。全く持つてその通りとしか言えない。

「じゃあ、四季さんを助けるのは大丈夫なのか…？」

「貴方が助ける事で多少なり原作？との違いが出て来るかもしれないけど…。そこは貴方が何とかしたら良いんじゃない？それも含めて彼女の助けになるつもりなんですよ？」

「ああ…。既に相違点を生んでいる可能性があるし。と言っても四季さんに限らず全員の事を可能な限り見るつもりだ。」

「なら助けても大丈夫じゃない？」

「俺が助けても良いのか？」

「私に聞かないですよ。そこは貴方の気持ちが一番だから好きにしてください。」

「じゃあ助ける。それで四季ナツメが少しでも良い傾向になつてくれるのなら喜んで助ける。」

「そう。それじゃあ行つてらっしゃい。まだ時間はあると思うわ。」

「ああ。場所はそんなに離れていないし大丈夫だと思う。」

そうと決まると、席を立つ。

「やっぱり待ちなさい。」

「ん？どうしたんだ。まだ何か。」

「折角お茶会って名目なのに一口も飲まないのはどうなのかしら？」

「…あ、ああ。それもそうだな。」

「こっちは少しでも早く起きたいのだが覚めるかどうかは向こう次



第の事もあり下手に逆らわれない方が良いだろう。テーブルにある紅茶を口にする。どこか懐かしい様な味の気がした。恐らく叔父が淹れていた味に近い。俺の記憶から再現したのだろう。

「紅茶だけで良いの？色々用意したのだけど…？」

「紅茶だけでも十分。感謝する。久し振りに懐かしい味が飲めた気がする。」

「残念。でも味が判るようで安心したわ。」

そう言つて彼女は紅茶に口を付け飲む。すると周囲の景色が少しずつ明るみを帯びていく。そろそろ終わりの合図が来たという事だ。

「貴方がこの世界では幸せな人生を歩めるように…：：：応援しているわ。頑張つて。」

「そこは保証は出来ないが…、高嶺昂晴の事が無事終わつたら考えてみるさ。」

中途半端な返事をする。周りが光で包まれていく中、少し困った様な表情で、相変わらずね。と口を動かしているのを確認したのを最後に夢の世界は終わりを告げた。

目を覚ます。数秒間頭が働かなかつたが夢の事を思い出すと直ぐに覚醒した。急いで体を起こし外を見る。まだ日は上つているから少なくとも夕方では無い事は確かだ。スマホでも確認はしたがまだ猶予はあるはず。事故が起こる正確な時間帯が分からない為、悠長にはしてられないが。

「急ごう。駅前なら時間は掛からない。」

ベツトから起き、着替える。念のためスマホを持ち家を出る。エレベーターのボタンを押すが少しの待ち時間が長く感じた。建物から出るや駅まで走る。この世界に来て初めて本気で走った気がする。まだ完全に治りきつてはいない足から痛みを感じるがそれどころではない。

大通りに出て駅方面に向かう。この時間帯でも車と人は思ったより多く居た。

「恐らくこの場所のはずっ。」

目的の場所であろう交差点に辿り着き周囲を見る。が、目的の二人は見当たらない。まだその時では無いのだろうと考え息を整える。問題は四季ナツメがどこ側から向かってくるか…。高嶺昂晴は恐らく大学側からだとは思うが、彼女は確かウエイトレス服を取りに行く日。行く途中なのかその帰りなのか…。

信号が何度かわ変わるが一向に姿は見えないそもそもいつになるかわかっていない。直ぐなのか一時間後なのか…それまで気を抜けない状態になる。

「事故はまだ起きていない…。これからなら救う事は可能。高嶺は駄目だが巻き込まれただけの四季さんだけなら大丈夫だ。」

自分に大丈夫だと言い聞かせている内に、ふと夢の中の事を思い出す。

「なるほど…。さつきみたいに呼び方を分けているのが…か。」

あまり意識はしていなかったが無意識に分けている所を見るとやっぱり自分の中で壁を作っていたのだろう。

「これから変えるように意識していくか…。」

焦っていた気持ちが少し落ち着き余裕が出てくる。

「……ていうか電話すれば一発だろ。馬鹿か。」

普通に考えれば分かる事なのに。なんなら家から出る時点でしていれば良かったと後悔しながら電話を掛ける。何回目かのコール後電話に出た。

「もしもし？澤田君？どうしたの。また急に電話をして来て…。」

「四季さんっ。今どこにいる？もしかして外か？」

「え？外だけど？前に話したウエイトレス服あるでしょ？。今日受け取りだからそれを取りに行こうとしているのだけど…。何かあったの？そんな焦って。」

「今どこにいるっ。駅の近くとか？」

電話越しに車が通る音や人の声が聞こえる。

「今？駅の近くを歩いているけど…？」

まずいと感じ、辺りを見渡すが姿は見えない。もうすぐそこに来て

いるという事は時間が無い。再度スマホに意識を向ける。

「今その場から動かないで欲しい。もし横断歩道が近いならその場をすぐに離れてくれ。」

「え、それってどういう事…？急に言われても困るけど…あ、もしかして反対側に居るの澤田君？」

電話越しからの声にまさかと思い、顔を上げる。と同時に周囲の人達が動き出す。信号を見ると青に変わっている。反対側を見ると赤いコートを着た女性がこっちに手をひらひらと振りながら横断歩道を渡って歩き出した。スマホから、『やっぱり当たってた。』と声が聞こえたが、それを無視し全力で走り出す。近くで悲鳴が上がると同時に何かが激しくぶつかるような音が鳴り響く。視界の隅で2台の車が衝突したのが見えた。

(…間に合ってくれっ！)

四季ナツメまで後少し…。彼女は走ってくる俺に驚いたが、衝突音を聞くと視線をそっちに向けていた。

ぶつかり合った車は停止せず1台がこちらに向かってくる。このままだと完全に轢かれる未来が待っている。

「四季さんっ！」

周囲の人を手で退かし彼女を庇うように抱き、飛び込む。直ぐ傍から悲鳴が上がったが気にしてられない。彼女が地面と頭が当たらない様に反対側の手を後頭部に添え自分の方から落ちる様に肩を出す。真後ろで車が通りすぎた風切り音が聞こえた。と同時に何かとぶつかる音がした。金属では無く、それよりか柔らかい何かに…。

地面とぶつかり肩に痛みが走ったが、そんな事より安否の確認を急いだ。

「無事かっ!？」

「え、あ、うん。無事だけど…？」

何が起きたかちゃんと把握は出来てはいないが車に轢かれずに済んだ事は理解は出来た様だ。

「良かった…。間に合って安心した。」

「う、うん。もう轢かれたと思ってたから…。」

何とか間に合ったと安堵する。これで四季ナツメの死は回避出来たと思つて良いだろう。

そう考えた瞬間、悲鳴が上がる。悲鳴とは別に何かが大きな音を上げ、こちらに向かつてきた。反射的にこちらに顔を向けると車が真っ直ぐこちらに向かつて来ていた。車の側面に何かとぶつかった様な跡が見えた。

(ーは?)

一瞬完全に思考が停止した。何故まだ車がこちらに向かつてくるのか理解できなかった。既に事故は起こった後だというのに。

(まずいつ!)

二人とも地面に座り込んだままで今から避けるのは不可能だと判断し、彼女を庇うように抱きしめ、車に背を向ける。

直後背中に体験した事の無い衝撃を受けた。上下の間隔が狂い、何度か体を固い面にぶつかっている感覚を感じた。

体が衝撃を受けなくなって状況を把握する為に目を開ける。が体が上手く動かせなかった。頭から足先まで自分の体では無いような感覚に襲われる。だが轢かれたことだけは認識することが出来た。

上手く動かせない体を何とか起こし、目だけを動かして周りを見る。辺りから聞こえてくる声や音が物凄く遠く感じる。

「四季……さ……んは……?」

声を出したつもりだが口からは出ず、喉でノイズみたいな音が出た。視界もぼやけよく見えない。自分の体を見ると、あちこちから大量に血が出ており体の一部は普段とは違う方向を向いていた。以前怪我したナイフでの傷が可愛く見える。

顔を上げると少し先に自分の血とは違った赤い色をしたコートが見える。が、その人物は地面に伏せていた。

動かない体を無理やり這いずりながら近づく。不思議と痛みは感じなかったが、自分の体の中か何か漏れ出ている感覚がしている気がする。

倒れている人物の傍まで来た。よく見るとコートとは別の赤が自分と同じ様に体から大量に出ている。覚束無い頭が理解を拒む。知

りたくないと思いつながら倒れている人の髪を掬い、顔を確認した。

「四季………さん………」

髪は乱れ、傷を負い、血があちこちから出ているが、見間違いない。倒れていたのは四季ナツメだった。

「四季さん……？」

掠れた声を出すけど返事は来ず、目は意思も感情も持っておらず、どこかを見ている様で何も写してはいなかった。

彼女の状態を確認しようとしたが脳がそれを否定する。もう分かっていた。よく確認せずとも助からない状態である事は理解できた。

「……彼女は、もう死んでいる。」

それを頭が理解すると激しい吐き気と眩暈の様な感覚が襲ってくる。助ける事が出来なかったと……。

なぜ2回目の事故が起きたのか、俺だけ生きているのか頭の中がぐちゃぐちゃになる。

視界の隅で青く光る何かが映り、それを見る。よく見ると沢山の蝶が居た。それらは近くの一ヶ所に集まる様に飛んでいる。あれは恐らく高嶺昂晴に集まっているのだろうと分かった。となるとこの世界はもうすぐ改変されるのだろう。原作通りに。

半ば諦めた様な気持ちが出ながらも彼女の手を握る。お互いの傷や血でおかしく感じたが、あの日、お店の二階のベットで寝る際に握った手だった。

そう思うと後悔が押し寄せる。あの日宣言した事を思い出ししまった。

次第に意識が薄れていく。体の感覚も良く分からないが、この世界が終わる最後まではせめて手だけは握っていようと力を入れるが上手く行かない。

(ごめん四季さん……。だが……)

消えていく意識の中で確かな誓いを決める。

「………今度は必ず。」

「………必ず君を幸せにして見せる。」

—————他の誰かでは無く俺が。

君を————必ず救って見せる。

たとえ世界が書き換えられたとしても、この誓いだけは忘れない様にと強く心に想ったのを最後に、意識はそこで途切れた。

その瞬間、世界は白く包まれた。

広がるのは暗くも薄らと青く照らされている風景。その中で他とは違い、光に照らされている場所がある。そこには一人の女性がテーブルに座り、紅茶を飲んでいた。

「どうやら…、駄目だったみたいね…。」

紅茶を置き、寂しそうな表情で呟く。

「でも…、収穫もあったと、そう思う事にしておきましょう。ね？」  
反応を求める様に、肩に乗っている青い蝶に話しかける。蝶はそれに答える様に羽を動かす。

「そうね…、彼には二度も同じ事を体験させてしまった事は反省しているわ…。けど、今回で彼は強く想ったと思う。怪我の功名とは言いたくないけどね。」

「確かにそうかもしれない。けど、人の魂は思ったより強い物よ？

心の奥底から願った誓いや想いはたとえ世界がやり直されてもどこかに残ると思うわ。きつとあの子のも、次に迎える今日でも消えることなく活かされる筈。そう思う事にしましょう。」

私達にはそれ位の事しか出来ないのだから…。と、肩に乗っている蝶にそう返事をし、静かに紅茶を飲んだ。

閑話：その名は…。○○・タイラー？

閣下と別れた後俺は大学に着き、食堂に向かう。道中何度かすれ違  
う学生にあつたが、特に不審な目は向けられなかった。出口に向かっ  
ている様に見えることから、これから帰る所なのだろうか。

「さてと、取り合えず入口に着きはしたが…。」

中を見るが目的の人物は見当たらない。見た所女性の利用が多い  
ような気がする。

「ん？気のせいか…？」

見渡している途中、見覚えのある人が何人か見えた気がした。

「あれは…。」

最初に目に付いたのは席に座り向かい合って雑談している女性二  
人組だった。紫色の髪と、ピンク色の髪をしている。何か楽しそうに  
雑談に花を咲かしている様子だ。他には窓際で何か本を読んでいる  
人と、紫の手さげを肩に掛けて歩いている人。どちらも藍色の髪だ。  
その中でも席に座り雑談をしていると思われる二人組に目が行っ  
た。正確にはピンク色の髪の女性に…。

(彼女は…確か…。)

脳裏にとある言葉が思いつく。

『三司あやせ平野』。

ふと、そう思い浮かんでしまった。前作のセンターヒロインである  
少女のネットで付けられたあだ名。

「三司…あやせ平野…？」

無意識に頭に思い浮かんだ言葉を小さく吐き出してしまった。そ  
の声は食堂の雑踏に消えてしまう程の微かな音。

その瞬間。さっきまで楽しそうに雑談をしていた少女がノータイ  
ムで顔をグリンツとこちらに向けた。目が合う。笑顔は消え、無表情  
で俺を見た。すると、目に暗い闇が宿る。濁った様な目で。言葉を発  
した犯人を認識したようだ。

ノークロス。



そう確かに口を動かした。頭がその言葉を受け入れた時、本能が働く。即座に食堂から背を向け全速力で走る。この場を直ぐに離れなければという直感を信じて…。

「……あやせ?どうかしたの…?」

「ううん。ちよつと用事が出来たから…、席を外すね?」

「ええ、どうしたの急につ。それに顔がなんか怖いけど…。」

食堂から出て、校門までの距離を止まることなく駆け抜ける。完全に治りきっていない足に痛みが走るが気にしている場合では無かった。

(まずいっ!これは非常にまずいっ!!)

先ほど見たあの目、あれは完全に殺す目をしていた。俺が口から出した事をしっかりと認識していた。体から嫌な汗が出てくる。逃げなければ……!捕まったらお終いに違いないっ。

校門を出て、右に曲がる。まずは視界に捉えられない様に距離を置くことが大事だと判断する。校門から少し離れると背後から何かが吹き飛ぶような爆音が鳴り響く。その音が振動となり背中を叩く。

驚きながらも背後を見ると、先ほどまで居た大学の校門が破壊され、瓦礫が周囲に散っていた。まるでそこに何か巨大なエネルギーが着弾したかのように見える。

(ま…、まさか…!?)

嫌な予感を感じながら、目を凝らす。よく見ると着弾地点の中心に人が立っていた。いや。正確に表すのならば立っていない。足を地面に付けておらず宙に浮いていた。

(まさか…、まさかまさかっつ!!)

その人物は食堂で目が合ったピンク色の髪をした少女だった。目立つ色なので見間違いない。

爆音の正体は、静かに周囲を見渡しこちらを向く。視線の先に居る

俺を見つける。死んだ目を見開き、小さく口を動かした。

「……みい……つけた。」

体中の鳥肌が立つ。本能が警鐘を鳴らす。捕まれば殺されると。先度背を向け、全力で逃げる。この世界に来て初めての加減無しでの全速を出す。

背後から何かが破裂する様な炸裂音が鳴る。気になり顔を後ろに向けると、宙を浮いたままこちらに真つすぐ飛んできている。何かの加速を得たか、道路を走る車とは比べ物にならない程の速度だった。ありえない加速度。このまま直線で逃げれば逃げ切れないと判断し、裏道に入る。可能な限り角を曲がったり、塀のある場所を通る。そう遠くない距離から風が吹き荒れるような音が聞こえる。その音から距離を離すように気配と音を消し、その場を離れる。

更に裏路地を進み、一息つく。音は聞こえない。距離は稼げたはず。

(なんなんだよあれは……!?彼女の能力って確か引力と斥力の操作じゃなかったのかっ!?)

先ほど見た感じだとそれだけでは説明がつかない現象だった。多分あれは風を……、大気を操っている様に見えた。

(もしかして……、伊勢琴里のアストラル……!?)

それが事実ならこの世界ではメモリー繊維が完成している事になる。いや彼女が目を覚ましているのだ。全然あり得る事だろう。

(そんなことは後で良い。今は生き残る事が……)

脳に嫌な予感が走る。咄嗟にその場を飛び退き、離れる。するとさつきまで居た場所が陥没した。見えない何かで押し潰されるように地面が下がる。

(もう居場所を特定されたのかっ!?)

早すぎる。まだ距離は離れている筈。頭の中で原因を探していると、再度脳裏に嫌な予感が走る。

即座にその場を離れようと飛んだが、間に合わず、体が地面に叩きつけられる。

「があっ……!」

肺から空気が漏れる。どうやらさつきとは違いかなり広範囲で放ってきていた。

(くっ……。体が……。)

逃げようと体を起こすが、起き上がれず再び地面に伏せる。そうしている内に頭上から声がする。

「お姉ちゃんのこの能力……。すっごく便利なのよね……。」

顔を確認出来ずとも主が誰か即座に理解させられた。

「例えば……。周囲に張り巡らせる事で音や動きを感知出来るし、逆にこちらの音を周囲に聞こえない様に調整出来たりも……。」

さつきまでの謎が解けた。道理で接近に気づけず、こちらの位置がバレた訳だ。

「覚悟は……。勿論出来ているんでしょ……?」

絶対零度の声が耳に届く。体に掛かる重さが次第に増していく。

「み……。三司……。さん。」

「どこの誰か知らないけど、吐いた言葉は消えないから……。許さない……。コロス……。ブツコロス。」

その後、口からは殺意と怨嗟が吐き出され続ける。

体からミシミシと聞こえてはいけけない音が聞こえてくる。息が出ず、臓器が次第に潰れていく様な感覚に支配される。

酸素が脳に回らず、意識が遠のいていく。視界が暗くなり、体の感覚も朧げになっていく。

(もしも……。俺にも、高嶺昂晴と同じように奇跡が起こせるのならっ。)

……。どうか目の前の彼女に、偽物では無く本物の……。

薄れていく意識の中、自分で何を願ったかも分からないまま、意識は途切れた。

途切れる直前、視界のどこかに青い何かが飛んでいたような……。気がした。

閣下と別れた後俺は大学に着き、食堂に向かう。道中何度かすれ違う学生にあつたが、特に不審な目は向けられなかった。出口に向かつている様に見えることから、これから帰る所なのだろうか。

「さてと、取り合えず入口に着きはしたが…。」

中を見るが目的の人物は見当たらない。見た所女性の利用が多いような気がする。

「ん？気のせいか…？」

見渡している途中、見覚えのある人が何人か見えた気がした。

「あれは…。」

最初に目に付いたのは席に座り向かい合って雑談している女性二人組だった。紫色の髪と、ピンク色の髪をしている。何か楽しそうに雑談に花を咲かしている様子だ。他には窓際で何か本を読んでいる人と、紫の手さげを肩に掛けて歩いている人。どちらも藍色の髪だ。

「いや…、今はそれはどうでも良いか。目的が先だしな。」

気にする事では無いと意識を切り替える。そうしなければならぬいと無意識の内に判断していた。気にははいけない。口に出しては良くないと。まるで過去の教訓の様に…。

### 第30話：始まりの日

窓からの日差しで目が覚める。スマホを確認するが、どうやらアラームをセットしている時間より少し早く起きてしまった様だ。

「二度寝には時間足りないし、寝ても夢の中であいつと会うだけだしな……。起きるか。」

少し前から寝るとちよくちよく夢の中で謎の少女が出てくる。聞いても正体を明かしてくれなかつたのでそう呼んでいる。夢の中では彼女とその日にあった事や、最近の出来事を報告したり、映像ベースで確認したりする。個人的には自分の生活を見られている様で恥ずかしいが、彼女は飽きずに楽しそうに見ている。夢の中でしか出られないから少しでも娯楽要素が欲しいのだろう。

「今が昼だから…。今日の昼過ぎから夕方辺りか…。」

今日が原作初日の9/28。遂に来てしまった。今日から高嶺昂晴の物語が始まる。

空腹の為食事を済ませ、本棚の端に閉まっている一冊のノートを取り出す。『喫茶ステラと死神の蝶』と書かれたタイトルのノートだ。覚えている内に可能な限り原作のフローチャートを書き込んだ一品だ。選択肢時の台詞からチャプター内で繰り広げられた会話内容など、様々だ。本棚の隙間に挟んでるため意図的に探さない限り見つけられないはず。

「取り敢えずはお店を開くまでの期間を無事乗り切る事が最初の課題になるのか。」

オープンまでに準備する物、足りていない設備、人。やる事は沢山ある。それをこなしていくためには高嶺昂晴の存在が必要不可欠。オープン後も暫くは気を抜けないはずだ。慣れて来た頃には11月になっておりのヒロインと関係が深まっているか注意しておかないといけない。明日から12月までは高嶺昂晴の様子を確認しつつ、仕事をしていく事になる。流石に1人では無理なので明月葉那や閣下。必要なら四季ナツメにも協力を仰ぐと考えていた方が良いだろう。

「まあ……。なんとかなるだろう……。可能なら火打谷愛衣の事もなんとかしておきたいが……。望みすぎかもしれないな。」

高嶺昂晴が明月栞那を選べば一番やりやすくなるのだが……。彼女を救えるのは主人公ただ一人だから。その場合、四季ナツメをどうか希望や夢が持てるようにしなければならぬ。今の内からでも働きかけてはいるが、駅前で感じた様にまだ足りてはいなかった。

「大事……。なのは、今日の勧誘を成功させること……。だな。ふああ……。ねむ。」

腹が満たされ気を抜いたからか急に睡魔が来た。起きることも出来なくは無いが、時間はまだ余裕がある事だし少し横になっていようと体を倒した。先ほどより大きなあくびをして目を閉じていると次第に意識が落ちていく。

「……つと、危ない。また寝落ちしてしまう所だった……。」

寝ぼけかけた頭を横に振る。

「……ん？…また…寝落ち？」

ふと疑問に思う。またと自分で言っていた。何故また、と言ってしまったのだろうか。寝落ちしてもまだ一度目の筈だが……。

不思議に思っている内に、ある可能性が浮かぶ。

(まさか……。既に二度目の9/28を迎えているのか……?)

寝ぼけていた為勘違いをして言った可能性もあるが、今言うのは夕イミングが良すぎる。

「念のため、一度確認を取った方が良いかもしれないな。」

もしそうだとしたら、既に一度目は終わり、原作が始まっている事になる。早めに明月さんとミカドさんに聞いておかなければ。

寢床から体を起こし、お店に向かう為に支度を始めた。

店に着き、扉を開く。運よくフロアに二人が居た。何やら話し合っているようだが、十中八九奇跡の事だろう。

「え？…澤田さん？…どうしてお店に……？何か用事でもありましたか？」

俺の顔を見て明月さんが驚く。一度目には無かった展開で不思議

に思っているのもあるんだと思うが。

「澤田達也か。貴様がこのタイムミングで来るといふ事は何かあったのか？」

「二人に聞きたい。というか確認したいなもんだが……。今日は何度目の9/28になる？」

「っ！澤田さん……もしかして覚えておられるのですか？」

「その反応って事は、……そうか既に一度目の9/28は過ぎていたんだな。それと、残念ながら俺は一度目の記憶はどうやら持ち越してはいないみたいだな。」

この世界の住人では無いのと死神もどきみたいな生命体だからワ  
ンチャンあるかと思っただが……、どうやら無かったらしい。無くても分  
かるから関係ないかもしれないが。

「貴様の想像通り、今日は二度目の9/28……という事になるな。」

「じゃあ、高嶺は既に奇跡を使ったんだな……。」

「その口ぶりからすると、やはりこうなる事を知っていたな？なぜ黙っていた。」

怒気の含んだ声がミカドさんから出る。

「止められたくなかったから……って言ったら納得して貰えるか？」

「それはつまり、高嶺昂晴が事故で死に、奇跡で今日をやり直すのを吾輩達が止める恐れがあったと言っているのか？」

「もしかしたら……位の可能性だったけど、何かの拍子で事故が起きなくなる要因をなるべく作りたくなかった。今回の……条件に必要不可欠だった。」

「澤田達也。自分の言っている事が分かっているのか？今回の事故で死んだのは高嶺昂晴だけでは無いんだぞ？」

「知っている。……四季さんもだろ？最悪な事に事故のせいで魂の一部が零れてしまって更に危うい状態になってしまった事も全部知っている。そうなると知っていて……見捨てた。」

覚悟していたつもりだったが人から改めて指摘されるとかなりくる。が、否定できない事実でもある。

「貴様がそうした理由はなんだ？救えたかもしれない魂だったのだ

ぞ。」

「……高嶺昂晴が、幸せを目指す為に必要になる鍵の1つだからだ。」

「それは一体どういう意味なのですか…？ナツメさんの魂が零れ落ちてしまった事と関係があるのですか？」

「すまないが、詳しくはまだ話せない。あくまで可能性の1つとしてになるのだが…。」

「貴様が以前に話していた別の道の話か。」

「以前大学に行く前の話を思い出した様だ。」

「ああ。もしそうなった時に必ず必要になってくる。だから無くす訳には行かないと判断した。」

「仮にだが、もし必要にならなかった時はどうするのだ？四季ナツメの魂の一部が零れ落ちた意味が無いとなったたら彼女はどうなる。」

「ミカドさんは何となく予想が付いたのだろう。高嶺が四季さんを救う事になる未来があることを。しかし、その可能性も十分にあり得る。寧ろそうなる可能性が高いかもしれない。」

「ミカドさんの言葉を聞き、覚悟を決める。息を吸い腹部に力を込める。ミカドさんを正面から見る。」

「その時は――俺が何とかする。」

「貴様がか？」

「ああ。結果がどうなれ彼女の事は救いたいとは考えていた。もし四季さんに何かあれば俺が責任持って解決に当たる。」

「可能なのか？、それは。」

「最後は本人の気持ち次第になってしまうが、夢を望みたいと。生きていきたいと思えるように導く……とまでは言わないが、サポートする。」

見捨てた事に対する罪滅ぼしにもならないけどな。

「取り敢えず四季さんのは直ぐにどうこうなるものじゃないから一旦置いておこう。それより急ぎの問題があるからな…。」

「ああ、高嶺昂晴の件だな。」

ミカドさんの声のトーンが下がる。



「今回の…時間を巻き戻してしまつた事についてですよね…。」

「そうだ。魂が大きくなつていたのは分かつていたが…、奇跡を起こせる程になつてしまふとはな…。。吾輩にとつても完全に予想外だつた。」

「その、高嶺さんはどうなつてしまふのでしようか…？」

明月さんが不安な顔で問いかける。ミカドさんから出る答えは決まっている。

「起こしてしまつた以上どうしようも無いが、その様な奇跡を起こす人間など放つておく訳には出来ん。奴の魂を刈り取らねばならん。」

「その場合、高嶺さんは…あの子はどうなつてしまふのですか？」

「残念だが、転生の機会は失われ、次が訪れることは無い。」

「じゃあ、魂は満たされることはないままじゃないですか。」

「そう言う事になるな…。」

「それは…そんなの…、寂しすぎますよ…。。。」

「あの子は…幸せを望んであんなに頑張つていて、私が最初の言葉を信じて、幸せになろうとこんなにも頑張つてくれたかもしれないに…。。。」

「葉那、お前の言いたい事は分かる。だが、このまま奇跡を放置しておく訳にもいかん。それは理解出来るだろうか？」

「それは…そうですね…。。。何か、何か他に方法は無いんでしょうか？」

「……………」

ミカドさんが目を閉じ、静かに息を吐く。

「……………」

何も言わないミカドさんを見て察したのだろう。悲しそうに目を伏せる。

「……………残念だが、他に方法は無い。と、吾輩なら答えるだろうな。だが、澤田達也。貴様は違うのだろうか？」

目を開け、どこか確信を持った顔でこちらを見る。

「いつ言ってくるかと待つておつたが、静観しているからな。今ま

での貴様の会話から今回の件は解決出来る事なのであろう？」

ちよつと待て。このタイミングでこつちに振るのか。そりや出来るが、今からそれを明月さんが言うシーンなのに。

「あー、まあな。一応救う手立てなら分かるが……。うん。」

「あるのですねっ。高嶺さんが助かる方法が……。！」

「ある。と言つても恐らく明月さんが思いついている事と同じやり方になるが……。」

「葉那と同じ……？」

「じゃあ、俺の口から説明させてもらうが……。まず高嶺の魂だが、何度も満たされない人生を繰り返し、次第に強力な魂へとなってしまった事で奇跡を起こせる程になっている。奇跡を起こしてしまう原因は、これまで同様に幸せになれずに人生を終えてしまうからだ。このままだとまた同じことが起きてしまうかもしれない。」

「それなら高嶺が、『人生をやり直したい！』って思う事が無い位の幸せを送れることが出来れば問題はなし。けど、ミカドさんとしてはそんな魂を傍観しておく訳にも行かないから刈らなければいけない。ここまでは大丈夫？」

「ああ。大丈夫だ。」

「そこで、高嶺昂晴の魂の一部だけを刈り、力を小さくすれば奇跡は起こせないように出来るって話になるのだけど……。」

「だが、それでは奴の体もつまみ。魂を刈る行為での影響は決して小さくない。魂を失えば体へのショックが起こる。」

「そうだな。普通にやるなら高嶺の魂が持ち堪えられずに、そのまま死ぬ可能性が高い。そこでだ。」

「彼の魂が危機を乗り越えられるまでの間を他の魂で補えば良い。一時的なショックだから乗り越える事さえ出来れば後は問題ない。そうだろうか？ 明月さん。」

答え合わせの様に彼女を見る。驚きながらも何度も頷いている。

「もしや貴様……。高嶺昂晴の魂を自分で補うつもりか？」

「いや、残念ながら……。それをするのは――俺じゃない。」

「貴様では無いと言うなら……。」

ミカドさんが明月さんを見る。そうすると、彼女は決心した顔つきで口を開く。

「その役目、私が担います。担わせて下さい。」

「その言葉の意味、理解して言っているのか…?」

「はい。勿論理解して言っていますよ?それを踏まえての言葉です。」

「それは明月菜那という存在が維持できなくなる意味を示すのだぞ?それでも良いのか?」

「残念ですがミカドさん。高嶺さんの魂を私が補っても、私が消える事はありません。」

「どうしてそれが言えるのだ。」

「だって、そうなるなら澤田さんが止めるはずです。ですよ?澤田さん。」

今度は明月さんの方から答え合わせの様にこちらを見てくる。

「ああ。それについては大丈夫だと俺が約束しよう。更に言えば高嶺昂晴の魂が問題なく安定する所までお墨付きだ。」

「このことですよ、ミカドさん?」

明月さんからの言葉にミカドさんは目を閉じ、諦めた様な表情をした。

「はあ……。やはり今回の件は貴様の中で解決可能な事だったのだな。全く。」

「それではミカドさんっ……!。」

「待て、了承したわけではない。此方で勝手に進める訳にはいかなからな。この件については一度掛け合ってみよう。」

「ありがとうございますっ!よろしくお願いします。」

若干逸れた気がするが……。無事丸く収まった様だ。

(……。というか、ミカドさんが俺に言ってくるという事は、明月さんの様に魂を分け与える事が出来る可能性が出て来たなこれ。)

恐らく出来ても使う機会は無いであろうが、試してみたい気持ちもある……。が、自分が消えるのは嫌なのでやめておく事にした。

話がまとまり、何度か確認をした後ミカドさんが席を外し出て行っ

た。

「それじゃあ、ミカドさんからGOサインが出ることを祈って、明月さんは刈り取る時のシユミレーションでもしておこうか。」

成功するとは思うが、言葉だけ大丈夫と言って安心させるより自分で体を動かした方が安心感が湧くだろうし。

「え、練習ですか……？練習出来る事では無いかと……ああ、澤田さんで試せばよろしいのですか？」

不思議そうにこつちを見たが、何か納得したように恐ろしい事をする。

「待て待て、落ち着け俺じゃない。あくまで仮でだ。素振りの様な感じでだ。」

「え〜、でもそれじゃあ、ちゃんと出来るか私……少し不安です。」

「だからと言って俺に試し切りを試みようとするんじゃない。無事出来るって俺がさっき言っただろ？」

「しかし、澤田さんの予知が完全とは言えませんし……何より澤田さんを信じすぎるのはよろしく無いとご自分で仰っていたではないですか。」

「確かに言ったが、今それを適応させなくて良いから。おいまて、どこからともなく鎌を出すな。ちらちらとこちらを見ながら俺の目の前で素振りを始めるんじゃない。」

「こうしろって言ったのは澤田さんですよ？言葉がちぐはぐですね……にひひ。」

嬉しそうな顔をしながら鎌を仕舞う。というか消した。どうやら、高嶺を助けられるのが嬉しいのと……ちゃんとそれが出来るかの不安があるのだろう。それを少しでも安らげる為の笑顔。今の一連のおふざけも効果があったと良いのだが。

(てか明月さん。多分、さっきの鎌で俺が斬られたら……蝶で構成されている俺は蝶みたいに斬られた身体ごと消し飛ぶと思うのだが……)

試す勇氣も無いが、後でミカドさん確認しておこうと記憶の片隅に置いた。

「ココアが身に染みるなあ……。」

あの話から時間が経ち、今俺は店入り口横のベンチに座り、一人飲み物を飲んでいた。

「後は3人が帰って来るのを待つだけだしな……。早く戻ってきてくれ。」

ミカドさんと明月さんは高嶺を回収しに出かけた。あれは端から見れば銃刀法違反での殺人未遂の上、拉致となる。役満でおまわりさん案件だ。大丈夫なのだろうか。

（ていうか死神に人権とか法とか効果あるのか？ いやでも、二人とも一応戸籍持っていたし人か……。）

心底どうでも良い事を考えながら、通路に並べられている黄色のタイル。誘導点字ブロックをただ見つめていた。つまり暇だった。

外で待機しているのには一応理由がある。店の中で待ってて3人と会った時、不都合が起きる可能性がある。その為外で時間を過ごしていた。

「これならいっそ……。店から離れて四季さんを迎えに行った方が良かったかもしれん。でもなあ……。一応俺が居るのかどうかの確認くらいはしておきたいよな。多分居なそうだけど。」

暇のあまり、一人言が口から出てくる。後どれくらいで来るのだろうか。外は暗くなっているからもうすぐだとは思うのだが……。

そう思った矢先、通路の奥から人影が見えてくる。

（足音は2つ……か。）

こちらに向かって来ている人を確認し、ベンチから立つ。なるべく自然体で歩きながら3人に近づく。

（もし……俺の推測通りなら……。）

徐々に距離が近づき、お互いの顔が認識可能な距離になった時、すれ違う相手に向けお辞儀をした。すると一番俺の近くを歩いていた女性がそれに気づき、お辞儀を返してきた。特に会話は発生せずそのまま過ぎ去っていく。

足音が離れるまで歩いてから後ろを見ると、丁度店の中に入って行く所だった。扉の上には『CAFÉ STELLA』と書かれた看板がある。

少しの間店を見たあと、またさつきまでいたベンチに戻り座る。頭を下げ、長い溜息が出た。

(いやあ…。やっぱりそうだったかあ……。はああ…。)

先程すれ違ったのは間違いない、高嶺、明月さん、ミカドさんの3人だった。それは間違いない。が、俺を認識したにも関わらずまるで知らない人かのように挨拶を返してきた。

(つて事はつまり……。)

今すれ違った3人は今の時間ではなく未来の…。確か大晦日までの記憶を持っているはず。その時点で俺を認識していない事になる。

(となると、今回が最初になるという事なのか?)

店の中に居る3人の時間軸には存在せず、今回の世界でが初めて生まれ変わっている……。?

(もしかしてこの世界は一直線では無くて、本当に別に分けられたりしているのかもしれない…。)

俺が居たり居なかったりする世界があつて、たまたまこの世界には存在していた。なんてこともあり得るのかもしれない。確認しようが無いため考えても仕方ない事だが。

「やはり店の中で待ち構えておかなくて正解だったな。誰だこいつ状態になつて感動の場面が台無しになつてしまうところだった。」

まだ中では話し合いが続いているのだろう。終わりのタイミングは四季さんが店に来た時になる。その時にはこの時間の3人に戻っている筈だ。

「澤田君？えつと…なにしてるの？一人でお店の外で座って…。」  
店の中での内容を脳内で振り返りながら感動やら虚無感やら嬉しさやら寂しさよく分からない感情になっていたら唐突に声を掛けられた。

「お、…ああ、四季さんか。漸く来てくれたか。」

「私を待ってたの？何か用事があったら連絡してくれれば良いのに。」

「あー、いやいや。勝手に待つて居ただけだから気にしないでくれ。目安としてただけ。」

「目安…？意味がわからないんだけど。」

「まあまあ、細かい事は気にせず、取り敢えず店に入ろう。」

ベンチから立ち上がり、扉を開け中に入る。フロアではミカドさんと明月さんが不思議そうな顔をして話し合っていた。

「こんばんは。」

中に入ると四季さんから2人へ挨拶を掛ける。

「あつ、ナツメさん。服の方はどうですか？」

「二応ちゃんと仕上げてもらった。着替えてみるから、念のためおかしくないか確認してもらえろ？」

「はい。分かりました。待つています。」

会話を終え、四季さんは奥へと消えていく。ロッカーで着替えて来るのだろう。

(例の事件がその時起こるのだが……どんまい。あと高嶺は羨まけしからん奴だ。)

進んでいく四季さんの背中に合掌をしておく。どうか高嶺を撲殺しませんようにと。

「澤田さん？何をされているのですか…？」

一人で馬鹿していると後ろから明月さんが怪しんだ様に声を掛けてくる。

「いや、何でもない。気にしないでくれ。」

「もしかして……ナツメさんの着替えを覗くつもりでは…？」

「H A H A H A。俺はそんな事しないから安心してくれたまえ。」  
あくまで俺はしない。俺はな。

「そのエセ外国人みたいな笑い方で誤魔化そうとしている様にしか見えませんが…。」

「そんな事より高嶺はどうしたんだ？回収しに行ったんじゃないのか？もしかして刈った後放置してきたのか？」

「ああっ、そういえば。お店まで運んできたような気もするのですが…。何故か記憶が曖昧で、。」

「もしや…。遂にボケの症状が見えてきてしまったのか？そろそろ出て来てもおかしくない年代だしなあ…。」

「誰がおばあちゃんですかっ！女性に対して失礼ですよ！その言い方は！…それに、死神に年齢とか関係ありませんからっ。衰える事などありません。」

冗談だったが、割とマジ切れされてしまった。

「じゃあ記憶がその部分だけ綺麗に抜け落ちている事になるな。」

「そう言う事になってしまいますが…：うーん。」

「まあ店で休んで貰っているならその内目を覚ますだろ。それと明月さん。いつも身に着けているマントはどうしたんだ？無いように見えるが。」

「そういえば…、あれ、どこに置いてきてしまったのでしょうか。」

「寝かせている高嶺に布団代わりに被せて置いたとか？」

「なのでしようか…：記憶には無いのですが…、ちよっと探してきますね。」

「了解。行ってらっしゃい。」

明月さんもマントを探しに奥に消えていく。次来るのは3人でだろう。

「さてと、それじゃあミカドさん。邪魔にならない様に端の席で待っておこうか。」

「急に話出したかと思えば、なぜ端に行かねばならないのだ。」

「この後、明月さんが戻ってきたら高嶺と四季さんと一緒に来て状況の説明を行うんだけどさ、その時にミカドさんが居たら話どころ



じやなくなるかなと…。あと一旦猫の状態になっていた方が良さかも。明月さんが説明した後ミカドさんの話をした方がスムーズに事が運べると思う。」

「なるほど、一理あるな…。物事には順序が大事だからな。」

「そうそう。死神の話は半信半疑だけど、ケット・シーを見れば流石に信じてくれるし。」

「であれば、暫くの間ここで待つことにしよう。」

「その時が来たら合図送るから、会話に参加しに行ってほしい。」

「承知した。」

今頃高嶺は記憶を差し出すか、いつそ首ごと差し出すかの選択に迫られているだろうと思いつつ、しばし待つことにした。

暫くすると、奥から3人が出てくる。お互いに自己紹介を終え、明月さんが本題に入る。俺やミカドさんが参加してこない事を察してかそのまま進めて行く。高嶺の状況、死神、魂、蝶。説明が進み、高嶺の状況が未だ解決していない事を伝えた時点で、ミカドさんに合図を送る。

「ミカドさん。」

「分かった。では行ってくる。」

「はいよ。いつてら。」

ひらひらと手を振りながら見送る。てか俺はどのタイミングで出たら良いのだろうか。このままオブジェクトとなっておこうか？

出ていく機会を探っていく内に、何やらミカドさんの鳴き声が木霊する。何が起きているか察した。俺もモフってみたい。

聞き耳を立てると、どうやら高嶺に未練とか無いのかとミカドさんが問いかけている。あ、これはもしや…来るのか？あの大事件が。

少しすると、大きめの声で語尾にウェイと付いた男の声が店に響く。『俺も今日から陽キャになるウェイ！』と……。

店が静寂に包まれる中、口元を抑え、声が漏れるのを必死に抑える。反動に体が震える。堪えきれず鼻や喉から音が漏れ出る。

(いやいや！むり！これを我慢しろって言うのが無理なんだよつ！。リアルで聞くと更にひどいっ。声が付くだけでこんなの間抜けに聞こえるのか!?)

笑うのを必死に耐える中、店中に明月さんの爆笑の音が響き渡る。分かる。凄く分かるよそれ。

一通り笑い終え、落ち着いたのち、ミカドさんと明月さんが納得をした声を出し、明月さんが高嶺に問いかける。

『我々の、死神の仕事を手伝ってもらえませんか？』

『このカフェで一緒に働いて欲しいんです』と……。

### 第31話：保留

(……はっ!?)

明月さんの台詞の後に、オープニングを脳内再生していたら時間が過ぎてしまっていた。

(危ない危ない。)

危うくこのまま出番なしで過ぎてしまうところだった。再度会話を耳を傾けると、ミカドさんが高嶺に奇跡を起こしてしまった事での弊害について説明していた。

(確か、今日は取り敢えず保留にして返事は明日に回すんだよね…。)

「どうでしょうか。私たちに協力してもらえませんか？」

そう問いかけた明月さんに対して高嶺は時間が欲しいと返事を返していた。が、明月さんは少し食い下がりが味にお願いをしてみている。

「葉那。そう急かすことは無い。取り敢えず保留としているのだからこやつにもじっくり考える時間が必要であろう。」

「……分かりました。すみません変に急かしてしまって。」

「………ところで、貴様はいつになったらこちらに出てくるのだ？」

澤田達也。」

俺が一向に出てこない事が限界だったのか、強制的に呼び出しを受けた。此方としては完全にタイミングを逃していたから助け舟で助かる。

「いや、なんか話が一段落するの待ってたらどんどん機会を逃してしまつて…。」

席を立ち、皆の輪の中に参加する。

「など言っている割にはさつきは何やら笑いを必死に堪えている様に聞こえたが…?楽しんでいただけでは無いのか。」

「それは否定しない。あれを笑うなつて無理があるだろ。語尾ウエイするとか実際見た事無かつたからな。」

ミカドさんと軽いやり取りをして、女性陣二人を見てから隣に居る

高嶺を見て苦笑する。

「前回の食堂以来……で良いのか？こんばんわ。高嶺昂晴さん。」  
挨拶をすると俺の事を思い出したのか驚いた顔でこつちを見る。

「あ…、確か食堂で宏人と三人で食事した時の……澤田さんでしたよね。」

「そうそう、その時の人ですよ？あの時はどうもです。まさかこんな所で再会するとは思わなかったけど……。」

驚いた感じの雰囲気を出しながら話すと『何を白々しい……』と言わんばかりの表情でミカドさんがこつちを見ている……が、無視を決める。

「もしかして、澤田さんも四季さんみたいに死神関係で……？」

「澤田さんの場合はナツメさんとはまた別です。彼のは高嶺さんと同じように特殊なケースになります。」

「と言っても、そつちみたいの世界をやり直すみたいないカレている力は持っていないからな？分類的には……俺は一応人間で良いのか……？」

ミカドさんを見ると更に呆れた顔をしていた。『お前が言うか……』  
とでも言いたそうだ。

「……未だにはつきりとはしてはいないが、人間よりになるだろう。恐らくな。」

「とまあ、色々事情があるって事で。ここでは助けて貰った恩を返す為と、四季さんの手伝的な感じで協力している。こんな感じの自己紹介で良いかな。」

「大丈夫なんじゃない？知らないけど。」  
四季さんから適当な返事が返ってくる。

「お互いの自己紹介も終わった事だ、今日はもう帰ると良い。明日大学が終わり次第また店にくると良い。返事はその時で構わん。」

「分かった。一晩考えてみるよ。」

「他の2人も今日は解散としよう。今日は色々あったからな。」

「おっけ、今日は大人しく解散しておくか。」

「了解。それじゃあ私は帰ろうかな。」

「すまんが四季ナツメは残ってくれ、少し話しておきたい事があるのでな。時間は大丈夫か？」

「私に？別に大丈夫だけど…。」

「何やら四季さんと話すことがあるらしい。恐らく魂の件だと思うが…。」

「じゃあ三人とも、また明日。」

明月さん達に別れを告げ、高嶺と一緒に店を出る。

「さてと…。高嶺さんは家どっち？送っていくよ。」

「え？いえ、大丈夫ですよ。わざわざ悪いですし。」

「遠慮しなくて大丈夫。また今日みたいな変な事が起きないか念の為に同行するつてのと、ちよつと今日聞いた話の感想を聞いておきたいなど思ってます。」

「そういうことですか…：分かりました。家はこっち方面です。」  
残念なことに指された方面は家とは逆側だった。別に気にしないけど。

少し歩いた後、今日の事を聞いてみる。

「今日の明月さんの話聞いてどう思った？」

どう切り出そうか少し考えたが、遠回りするのも面倒なので率直に聞いてみる。

「…：正直未だに信じ切れてないです。デジャブや夢では無いことは分かったんですが、内容が内容なだけ荒唐無稽過ぎて、頭の整理が追いついていないというか…。」

まだ整理が出来ておらず、困ったような声でゆっくりと話す。

「確かに死神やケット・シーとか急に言われても困るしなあ…。」

「澤田さんの場合はどうだったのですか？自分と似たようなケースなんですよね？」

「ええつと、色々説明するのが大変なので詳しくは明月さんに聞いて欲しいのだけど…、自分の場合は、一度死んで、生まれ変わったって感じですかね。生まれ変わる際に本当なら赤ん坊としてまた最初からになるのが普通なんだけど、どうしてか今のこの身体の状態で生まれ変わってしまったらしい。今までに無いケースだから、要監視

中つて所。」

「え、生まれ変わった？ 転生…とか、そんな感じなんですか？」

「そんな感じ、最近流行っている転生物を体験したって訳になる。この身体も人間ではなくて、蝶…：さつきみた青い蝶で作られているらしい。」

「え…？ さつきのあの蝶ですか？ 澤田さんの体を…。」

「すまない。更に混乱させてしまう情報を与えてしまって…、そこは気にしないで一先ずは自分に起きた現状を受け入れるのが先だな。何か気になった事とか知りたい事があれば遠慮なく聞いてきて欲しい。連絡先は前に交換したのがあるはずだから。」

「分かりました。すみませんがその時はお願いします。」

「気にしないで大丈夫。戸惑っている気持ちは嫌な程理解できるし、こちらとしても出来れば俺以外の男仲間が欲しいと思っていたから。」

似た境遇の同性が居るだけでも気持ち的に楽になるだろうしな。

「あ、俺の家此方なので…：もう大丈夫です。」

暫く話している内にどうやら到着してしまった様だ。

「ではここまでという事に。」

「今日はありがとうございました。明日までじっくり考えておこうかと思えます。」

「了解。また明日お店で待つてる。」

こちらに一礼し高嶺は建物に向かって行く。此方も背を向けようとして足を止める。振り返り中に入って行こうとする背中に声を掛ける。

「最後に一つだけ、言っておきたい事が…：。」

声を掛けられたことに気づき、此方を見る。

「あのお店は確かに普通の条件のバイトとは違う。まだ開けてすらないし本当を言えば躓いている状態にある。オープニングスタッフと言えば聞こえは良いが恐らく働けば相応の労働が発生する。」

「そんなお店で働く事が自分には出来るのか？ 荷が重いのではない

のか？そんな理由で躊躇してしまうのなら尻込みしないでくれ。」

「確かに不安な所はあるかもしれないが、そこはお店のみんなでお互いに乗り切れるから自分自身の事は第一に考えてほしい。今はあくまで執行猶予中であり許された訳ではない。いつ何が起きるかミカドさんでも予想は付かない、そうならない為にも明月さんとミカドさんはその手助けをしたいと本気で思っている。勿論俺も。だから迷惑を掛けてしまおうとかそんな事気にしないでくれ。寧ろ頼ってほしい位だ。」

高嶺の目を見て堂々と告げる。誠意を見せるためにもここで目を逸らしては男が廃る。

「……ありがとうございます。どうしようかまだ迷っていますが、前向きに考えてみようかと思えます。」

「明日の返事を楽しみにしておくよ。じゃあ今度こそまた明日。」手を振る俺に軽く頭を下げ、今度こそ建物の中に消えていった。

高嶺の家を知るといふ目的も達成できた。他に用も無い、大人しく来た道に戻る事にした。

「どうしようか。念のために一旦お店に戻ろうか……？もしかしたら何か聞きたい事があるのかもしれない。」

道中ついでに顔でも覗かせようかと思いつながら、帰路に付くことにした。

カラン。と音を立て扉が閉まる。今しがたナツメさんがお店を出て行った音だった。お店の中にミカドさんと二人のみになる。

「ナツメさん、大丈夫でしょうか……。気を落としてなければ良いのですが。」

「死んだことと世界がやり直された事に関しては驚いていたが……、魂の一部が零れ落ちた事に関してはそこまで動揺は見られなかった様に見えたな。」

ミカドさんの言う通り。前者に関しては驚いたり何度か質問はあ

りましたが……、後者に関しては話を聞いていく内に納得している様に見えました。

「蝶々が零れ落ちた理由を何となく察している……という事でしょうか？」

「恐らくな。生きることに前向きではないのは自分がよく理解出来ているのだろう。」

そう言つてミカドさんは腰に掛けているランタンを見る。見るからに元気は無く弱々しい動きです。蝶の元気が無いって事は……つまりそういうことなのでしょう。

「ナツメさん……。」

不安になり、つい名前が口から零れる。

「心配するな。そうならない為に吾輩達が居るのであろう。それに……こちらには強力な助っ人が居るからな。」

心配させない様に不敵な笑みでこちらを見る。

「ふふ、そうですね。あまり頼り過ぎない様に私も頑張る事にします。」

「だが……澤田達也。奴には大きな重荷を背負わせてしまう事になつてしまつたな。」

「はい、高嶺さんの件もそうなのですが、ナツメさんの件……此方の方が澤田さんは重く受け止めている様に見えます。」

「奴は、知つてて見捨てた、そう言つていたな。自分の罪と言わんばかりの顔であつたが。」

あの時の澤田さんは何か覚悟を決めた様な目をしていました。あの目は一体何に対する覚悟だったのでしようか？一度目の世界で死んでしまつたナツメさんに対する罪……は言い過ぎですが責任を負う覚悟？それともこれから先の未来でナツメさんに起こりえる何かに対しての……？

「あやつに問い詰めたのはやりすぎだったかもしれないな……知つていてそれを見逃したのは、それなりの理由があつた事は少し考えれば分かる事だつた。事態の大きさに冷静では無かつた、反省せねば。」

「せめて、一言相談が欲しかったです。理由を話せば私達だつて納



得は……出来たか保証はしませんが、一人で背負い込むなんて。」  
「考え抜いて出した奴なりの答えだったのだろう。可能性を少しでも無くすために……な。」

「澤田さんは、平気なのでしょいか。ご自分の事だけでも大変なのに、私達の事まで……。」

彼の言った事が正しければ、私たちとは異なる世界。同じ日本でもそれは見た目だけで家族はおろか知人などもおらず、この世界でたった一人の存在って事になります。蝶で出来た体に転生し、言葉通り身体一つで生きていく事になってしまい不安で一杯だったはず。此方の事情で行動を共にし、結果的に澤田さんはまともな生活を手に入れる事は出来ましたが……。果たしてそれは彼にとって正しい事だったのでしょうか。前の世界で散々嫌な目に合った原因の力を使わせてしまってますし……。澤田さんは大丈夫だとは言っておりましたが、あれは私達に気を遣った言葉だとしたら……。

「私たちは……澤田さんを巻き込んで良かったのでしょいか……？」

死神などと関係を持たず、奇跡などとは無縁な生活を本当は望まれているのではないか？ その様な考えが頭に思い浮かぶ。

「今更言ってもしょうがない。もう巻き込んでしまったのだからな。それに、協力は奴が望んだ事だ。少なくともあやつは後悔はしておるまい。」

「だと良いのですが……。」

「寧ろ自ら積極的に関わろうとしている様に吾輩は見えるがな。」

「確かにそうですが……それは必要だからとか？ 先読み出来るのですから今の内に手を打つ必要が出て来たとかありそうですが。正直、澤田さん若干一歩引いている様な感じがしますし……何となくですけど。」

「吾輩はそうは思えなかったが……まだ親しく無いからではないのか？」

「二ヶ月も知り合って距離置かれていたらなんだか悲しくなってくるのですがそれは……。」

「それもそうだな。つまりはわざとそうしているという事になるのか。」

「私の気のせいかもしれませんが…落差がある時が多くて掴めきれないと言いますか……。」

このことについては前々から感じていた。壁を作っている…とまでは行かないが距離を空けていると感じる時もあれば、お構いなしにぐいぐい来るときや謎のノリやボケをなどの悪ふざけをしてくる。単に人との接し方のコントロールが上手くないのかと考えたがそれも違うように思える。

「もしかすると、吾輩達に悟られない様にする為にわざと振る舞っているのかもしれないな。いや、その様に接するのも必要な事なのか…?」

「ミカドさん?」

「いや、何でもない。今考えても仕方ない事だな。結局吾輩達に出ることは特に変わるまい。今後も奴を注意深く見ておく事だ。これからは高嶺昴晴も追加されるがな。」

「……分かりました。高嶺さんについては返事は一旦保留をなっています。」

「そう心配するな。この瞬間決まる事では無い。少なくとも明日の返事までは平気であろう。何かあるのなら澤田達也が放っておくまい。」

「そうですね。その本人は高嶺さんと帰りましたが、何か要件があつたのでしょうか。」

「高嶺昴晴が働くために動いているとみて良いだろう。吾輩の予想が正しければ……また店に戻ってくるはずだ。」

「帰り道の道中ですし可能性はありそうですね。」

高嶺さんの家とお店の道のりを考えてそろそろ来てもおかしくは無いと思うのですが…。

「……と噂をしてたら来たようだな。」

ミカドさんの言葉と同時にお店の扉が開き、カランと音を立てる。このタイミングで来る人は1人しか居ません。澤田さんは店の中を

見渡してからこちらを見る。

「想像通り、2人だけかー。その様子だと俺の話でもしていた？」

「貴様が高嶺昂晴を送っていった事を少しな。」

「ちゃんと無事送り届けたから大丈夫。まだ現状を把握しきれていないから困惑気味ではあったけど。」

「それなら返事を明日まで待つて正解だったようだな。」

「俺と違って向こうは知識ゼロから聞かされたから頭が追いつかないだろうし正解だと思う。明日には答えを出すつて返事は貰えているし。」

「一緒に働いていただけるのでしょうか…？」

今日聞いた感じですとあまり前向きではありませんでした。明日には良い返事がもらえる様には思えません…。

「そこは明月さんの色仕掛けに期待するしかないかな？」

「期待が重すぎますよ…。澤田さんの方でも何かしていただけののでしょうか？」

「俺の方はあくまで最終手段という事で。あまり使いたくないと個人的に思っているからさ。」

澤田さんは少し嫌な顔をし目を逸らす。一体どのような事をしようと考えておられるのでしょうか。

「一体貴様は何をしようとしているのだ？」

私気がなった事をミカドさんの口から出る。

「すまないが、話したくない。」

「それほどの事なのか。」

「ああ…。話すと色々とまずいから…。主に俺の…。とか…。いかないし。」

最後の方はあまり聞き取れませんが、よほどの事なのだと表情から察せれる。これ以上は追及しない方が良いでしょうか。

「…。分かった。無理に聞くことは止めておこう。」

何やら納得したようにミカドさんは返事をする。私には聞こえませんでした。ミカドさんは聞こえたのでしょうか。

「助かる…。それと理由については謝ることしか出来ない。」

「何、気にするな。結局吾輩らでどうにか出来ればそれを使わずに済むのであろう?」

「そうなる。その為にさつき見送ったり、事前に大学に行ったりしたからな。」

あの日、澤田さんが大学に行っていたのは高嶺さんと事前に知り合う為でしたか。ナツメさん関連かと考えてしまいましたが…。

「なら無理に話さなくても良い。それに頼ることなく終えれば良いのだからな。」

ミカドさんはそう言ってこの話を打ち切る。確かに私だけで解決出来ればそれが最善ですが、念を入れていた方が良いと思うのですが…。

その後、明日の予定や、今日の事を少し話してから澤田さんは帰って行きました。

「ミカドさん、先ほどの澤田さんが話せないと仰っていた手段、あれ聞かなくても良かったのですか?」

気になったままでしたのでミカドさんに問いかけてみる。

「ああ、話したくは無さそうだったしな。それに…独り言のつもりであったかもしれないが、聞き捨てられん台詞があったのでな。」

「聞き捨てられない台詞…ですか?」

恐らく私が聞き取れなかった部分の事を言っているのでしょう。

「色々話すとまずいから。そう言った後、小さく『主に俺の命とか危機になるし、明月さんや四季さんに知られるわけにいかないし』と言っていた。」

「え…それって。」

「前にも似た事を言っていたからな。どうしても教えられない部分なのかもしれない。」

確かに以前、私たちや死神の事を知っている理由を聞いた際にも同じことを言っていた気がします…。澤田さんの命の危機に接してしますかもしれないレベルの事をする必要が出てくる…という事になるのでしょうか。私やナツメさんに知られると心配されて止められるかもしれない為話すのを躊躇っている。

「一体どんな事をするつもりで…。」

「それに関しては予想は付かないが、奴は以前高嶺昂晴を勧誘する手段として吾輩に催眠術…洗脳紛いの方法で取り込めないかと相談してきた事があった位だ、あやつにとって催眠程度で済ませたいと思える手段なのかもしれない。」

「洗脳…ですか…?」

「勿論吾輩にその様な力は無いから断ったがな。」

人の精神を支配してしまう力を、その程度として扱うとなれば…、澤田さんの手段はそれより少なくとも上を行く方法となる訳で…、人として扱って良い力の範囲を大きく超えてしまう事になります。いえ、そもそも人間である以上、奇跡などを使えるのはおかしいのですが。

「その様な力を使わず訳にも行かないからな。吾輩達で解決可能ならそれに越したことは無い。」

「そうですね…。なるべく澤田さんに負担を背負わせたくないですし、私の方で何とか出来るように頑張ってみます。」

とは言ったが、最悪高嶺さんに色仕掛け的な事をする必要が出てくるわけで…その様な経験はありませんし上手くいく気がしません…。

「……………うーむ。」

高嶺さんが喜びそうなことですか…。男性ですし…。や、や、やっぱりっ、むっ、むねとか押し当てたりでしょうか!?大胆に腕を組んで上目遣いとかして…?それから…それから、耳元で甘く囁いたりしてお願いを…?で、出来るのでしょうか?私に…。いえ、やる必要が出てくるかもしれませんし…。覚悟はしておきませんと…。

「……………っ！我ながら…なんて破廉恥な事を…………。」

「ん?…どうしたのだ?」

もしそれでも彼が領いてくれない場合は…昨日ナツメさんが仰っていたような…お、お筆をつ！おろして、差し上げることも必要に!?!なるかもしれないのでしょうか…。しかしっ！高嶺さんは急にその様な事を言われても怖気づいてしまうと…。それはつまり急

じゃなければ大丈夫だという事であり……。望まれるかもしれない可能性がなきにしもあらず……的なー

「……筆おろし……ですか。」

「おい。」

「死神として必要なら、致し方ないとして割り切つて……。私がつ！」

「おい葉那。」

「やっぱり無理ですっ!!そんなのエロティックすぎますよお！」

「貴様は大声で何をいつているのだっ!静かにせんか。」

「す、すみません……。少し明日の事を考えていると……。うう……。」

駄目です、私には荷が重すぎます。明日澤田さんに他に方法が無い  
か相談しなければ……!」

顔が熱くなつてしまい、手で熱を逃がすように頬に当てる。

「急に叫び出したかと思えば……。大方くだらない事でも考えていたのだろう。」

「くだらなくありませんよ……。こっちは真剣に考えています……。はああ。」

呆れた様な表情でこちらを見て来るが、本人は至つて真面目なのだ。

「今日は明日に備えてもう寝るぞ。いつまでもお前の妄想に付き合つてられんからな。」

「……分かりましたあ。と言つても寝れる気がしませんが……。」

明日の事を考えるととても眠れる気はしないが、横になるだけでも  
ましだろうと思ひ部屋に向かう。考えない様にしようとするほど考  
えてしまい、眠れるのはいつになるか分からず、ため息を吐きつつ階  
段を上つて行くのであった。

### 第32話：決断の理由

店に着き、いつもの様に入口から入ろうとすると店の前に人が店の上、看板を見つめていた。

「あれ、高嶺さん？どうしたのですか、看板を見上げて。」

こちらが声を掛けると存在に気づいたのか一瞬驚きながらも返事をすする。

「あ、澤田さん：いえ、昨日は暗い時に来ていたので明るい時はまた印象が違って見えたので：。」

「あゝ、なるほど。確かに昼夜では雰囲気変わって見えたりするし、日が無いだけでも感じ取る印象って違うのはわかります。」

話しながら店の取っ手に手を掛け開く。勿論カギは掛かっていなかった。俺の後に続くように入り、「失礼します」と一言断りを入れていた。

中に入ると四季さんが目に入る。普段着では無くお店のウエイトレス姿でのお出迎えた。謎の優越感を感じてしまう。

「お疲れさん。只今参上しました。」

「うん？澤田君と：高嶺君？ああ、どうも。」

こちらに気づき軽く挨拶を交わす。隣の高嶺を見ると、四季さんのウエイトレス姿を見ながら「：：：へー：：：」などと関心の声をあげていた。

「：：：ん？なに、どうしたの？」

「高嶺さんは四季さんのウエイトレス姿が似合い過ぎてて感心しているんだ。勘弁してやってくれ。」

「この服？それはどうも、ありがとう。」

着ている服を少し指で摘みながら感謝を返すが、何とも微妙な顔をしている。

「因みに俺も大絶賛と言っておこう。マッチし過ぎて加算じゃなくて乗算になってしまう位だ。」

「意味わかんないけど。」

さつきより微妙……というよりか呆れた顔になってしまった。

「ま、澤田君の事は放つて置くとして、高嶺君……で良い？」

「ん？ああ。何でもいいよ、好きに呼んでくれ。」

「なら……覗き魔？」

「高嶺さん……既に前科持ちだったとは、しかも被害者は四季さんときたかつ。」

「いや、違う。変に誤解を招く風評被害のあだ名は止めてくれます？」

「風評被害？事実だと思うのだけど？」

「つて言うか昨日の事はお互いに忘れるつて話じゃなかったか？」

「……うっ、ぐむ……。」

どうやら自ら墓穴を掘り返したらしい、揚げ足を取られたとも言える。可愛い。

「そりゃ、確かに私から忘れろと言っただけど……、開き直られると、それはそれでなんかすっごい腹が立つな。どうせ本当は覚えているくせに……。」

「それはまあ……はい。覚えています。」

「因みに……どのぐらい覚えている？」

「割と鮮明に焼き付いています。」

「まさか、昨日ので変な事とかしていないでしょうね。」

「おおっと、それは見逃せないな。高嶺さんがまさか昨日の四季さんの下着姿を想像して夜に如何わしい事をしていたとかけしからん。昨日起きた事で眠れない夜を過ごしていたかと思えば別の理由で眠れなかったとは……。」

「えっ、い、いや、そんな事は考えていない。」

「本当か？あの魅力的な淡い紫色の下着を一瞬たりとも脳裏に横切らなかつたつて誓えるか？男として。」

「……。」

そう聞くと高嶺は口を開こうとしたが、口を閉じ無言になる。正直者め。

「澤田君……その話題で持ち上がらないでくれる？わざわざ詳しく聞



かないでほしいんだけど。」

恥ずかしそうにしながらも少しきつめの口調で言ってくる。萌えポイントがお高い事で。

「……………ていうか、どうしてそれを澤田君が知っているの…?」  
あつ…、と思つた瞬間、四季さんがもの凄い速度で高嶺を睨みつける。

「い、いやっ!話していない!昨日の出来事は澤田さんにはなして  
いないからっ。」

突然睨まれたこともあり高嶺は慌てて返事をする。

「……………本当?」

「ああっ!命をかけても良い。話していないって誓う。」

まずい。つい調子に乗って発言してしまつたが、非常にまずい。場の温度が下がった気がする。

「……………そう。じゃあ、それを何処で知つたのかしら…?」

ゆっくりを落ち着いた声だが絶対零度と感じれる様な言葉と共にこちらを向く。同時に顔を合わせない様に逸らす。

「おい。」

ある意味聞きなれたドスの効いた声が入る。顔を見ていないが彼女がどんな表情をしているか容易に想像できる。更に言えば……………俺が殺されることぐらいだ。

二人に背を向け、即座にその場の離脱を試みる。まだ死ぬわけには……………いや四季さんに殺されるならそれはそれで……………あり?

「あつ、逃げるなっ!」

後ろから叫ぶ声が聞こえるが無視し、奥へと逃走する。逃げた所で問題は解決しないが今は取りあえずこの危機から逃げねば。

奥の通路に入り、更に進もうとすると奥から明月さんと人間姿のミカドさんが居た。どうやら話し声が聞こえて出て来たらしい。

「わっ。澤田さん!?!どうされたのですか、通路で走られて……………」

「ああっ、明月さんっ!助けてくれっ。ドジを踏んでしまい俺の命がやばいんだ!」

「っ!澤田さんの!?!一体何があつたんですか!」

こちらの慌て具合でただ事ではないと感じ取ってか真剣な顔で聞き返してくる。後ろのミカドさんも厳しい顔になっていた。

「時間が無いっ。取りあえず隠れる場所をー」

「ねえ…。どこに…。隠れるつもり？」

「ひいっー」

背後から死刑宣告にも等しい声が聞こえ思わず背を正す。ゆつくりと振り返るとそこには見惚れてしまう様な笑みの四季さんが立っていた。

即座に明月さんの背後に隠れる。

「あばばばば。」

「さ、澤田さんっ!? それとナツメさん、どうかされたのですか？」

「ええ、明月さんの後ろに隠れている彼に少し用があつて…。出来れば引き渡してほしいのだけど。」

「俺は何も用は無いっ。何も知らないし見てもいない! 誤解なんだっ。」

「へー、誤解ねえ……。それで通ると思つているの？」

「あばばばばっ。」

「ちよつと状況が分からないのですが……。澤田さんが何かナツメさんに失礼を働いた様ですね。慌てていたから何事かと思ひましたよ。」

「全く、いらん心配をしてみました。」

「何があつたのですか? 一体。」

「昨日、更衣室のロッカーで高嶺君に下着を…見られたでしょ? 明月さんは知つていると思うけど、なぜかそれを知つていないはずの澤田君が知つていたから問い詰めているだけ。」

「ああ、昨日の件ですか。確かに3人しか知らない事ですね。あ、勿論私は話していませんよ。」

「それは大丈夫。明月さんが知らないはずの事だから。直接見られたのは高嶺君だけ…。けど、彼は話してないってさつき言つていたから。」

「なるほど…。それは確かに不思議ですね。知る方法が無いのを知つ

ているのはおかしいですね…唯一可能性があるとするれば高嶺さんが嘘の発言をしたになります…澤田さん、答えは如何ほどに？」

納得から、からかう様な顔でこちらを見る。ちくしようつ。逃げ場はないのか!?

藁にもすがるような気持ちでミカドさんを見る。頼むつ。最後の希望なんだ!何とかしてくれ!

「……はあ…。四季ナツメよ、一旦その話は後にしないか?今は高嶺昂晴の事を先に進めておきたいのでな。」

呆れてため息を出しながらも、ミカドさんは救いの手を差し伸べてくれた……!神よ……いや、ケツト・シーよ……!!

「閣下……?」

「この場では無く、後でちゃんとした場を設けてから聞くと良い。無論、こやつが逃げられない状況でな。」

なん……だと、まさかの延命されただけだ?!

ミカドさんを見ると、『自分で何とかしろ。場は設けた』と言っているかの様な目をしていた。こんちくしょうつ!より事態は悪化の一歩じゃねーか!

「……分かった。今は閣下の顔を立って保留にしておく。」

「すまん、感謝する。では高嶺昂晴の所に向かおうか。」

ミカドさんと明月さんが歩き出すと、四季さんは道を譲り、端に立つ。隠れるように横を無事に――

「逃げたら……、ただじゃおかないから。」

――通り過ぎることは出来なかった。

「ア、ハイ。」

小さく、だが確実に俺に聞こえる様に呟かれたその声に対して、ただ虚しく返事をする事しか出来なかった。

「高嶺さんつ、よく来てくれました。」

「よく来たな。高嶺昂晴」

フロアで待っていた高嶺はミカドさんを見ると不思議そうな顔を

する。そういえばまだこの顔を見てなかったな。

「……誰だ？初対面の相手にいきなり……。」

「吾輩を馬鹿にしているのか？それとも、昨日の事をもう忘れたのか？人の体を散々弄んでおきながら……お前という奴は……。」

知らない顔をされたミカドさんは呆れた様子で返事を返す。

「はあっ!?!おまつ、何をいきなり!?!」

「高嶺君って……そっち系の人だったの？意外……。」

「まさか高嶺さん、童貞では無くて……処女を捧げるのが未練だった……とか？」

「四季さんだけでは無く、こんなダンディな人にまで……幾ら未練の為とは言え欲望に忠実過ぎるのでは……？もしかして次は俺の番か？」

二人に続きボケを言う。乗るしかないよなこの流れは。

「そんなのこれっぽっちも考えた事無いから。」

「冗談ですよ、大丈夫です。ちゃんと分かっていますから。高嶺さんは攻め専門ですよね？」

「立役かよ……。俺がネコになるパターンじゃねーか。」

「役割の話をしてるんじゃないからな！」

「なんだ……そっか、違うんだ……残念。」

「え、なんで四季さんは残念そうなの？」

「ウソ、冗談。」

「悪ふざけをしてみただけです。そんなに慌てないで大丈夫ですよ、そちらの方はミカドさんですから」

状況がカオスになって来たところに明月さんがネタバレをする。

「その姿で会うのは初めてだから分からないだろうけどね。」

「え、あのケット・シーのか？その男が？昨日の？」

「あれとかそれとか無礼な呼び方をするな、全く。」

そういうってミカドさんは閣下モードになる。それを見て高嶺は驚きながらも疑問を投げかけている。

「というかお前もこの店で働くのか？」

「そうだ。因みに人間としての名は御帝貴紀だ、忘れずにな。」

「随分煌びやかな名前だな……。てか大丈夫なのか？猫が飲食店で働くとか。衛生面に問題ありまくりだろ。客に出した食べ物に毛でも入っていたら苦情出るぞ。」

「浅はかな……。ケット・シーは抜け毛などしないっ！」

「お前は昔のアイドルかつ！」

「高嶺さん、信じられないかもしれませんが本当の事ですよ？」

「そうね、私の服にも猫の毛が付いたことないしね。」

大丈夫かと心配する高嶺に二人が返事をする。神から授かった力って便利だな……。衛生面完備とか。まあ、客に猫の姿で見られなければ不快には思われたいし大丈夫だろう。

あれ？確かSNSで上げていたような……。「賢い猫だから厨房とかには入って来ないですよ」って……。炎上して無さそうだったし大丈夫だろ、うん。

「いや、それより昨日の件を話したい。」

「……。分かりました。お返事、聞かせてもらえますか？」

考えごとをしていると、大事な場面になっていた。返事をしようとしている高嶺に、明月さんが真剣な表情で待っていた。

「……………俺はー」

返事を言おうとしたが、何か迷った様子で目を逸らす。

「正直迷っている…。始めは断ろうかと思っていたんだ、そんな荒唐無稽な話なんて到底信じれないから。けど、自分に置かれている状況とか色々考えてみたら……。そうは言っていられないのかもしれない。いつか思ってしまうようになって来てさ。」

これは際どいぞ、なんとか今は受け入れようとしているが……。明月さんは……。って何か覚悟を決めた顔で深呼吸をしているが何を……。あ、昨日言っていた色仕掛けをしようとしているのか？よく見れば少し顔が赤いし恥ずかしそうな顔をしているし……。

ふと、こちらをみた明月さんを目が合う。俺を見て若干困った様子で笑う。そして再度高嶺を見て一歩前に踏み出し……。たのを静止するように手を横に出しストップを掛ける。彼女から『……。どうして止めるのですか？』と疑問の目を向けられるが、それに対して目を閉

じ、首を横に振る。半分冗談のつもりだったがまさか本気で行くとうとするとは……そういつたの本当は苦手だったはず……。それほど高嶺を救いたいという事か。

彼女の本気を感じ、俺が行くことにした。目の前で男女のぎこちなイイチャつきとか拷問でしかないからな。

明月さんを止め、高嶺の前に出る。

「迷う気持ちはよくわかるよ……、本などの作り話でしか見たことない事を急に言われても信じる事は出来ないよな。」

「そう……だな。未だに変な事に巻き込まれたんじゃないかと疑っている。」

「うんうん、現実味が無いし、損な事を手伝わされる可能性とかありそうでもないな。お店の開店の手伝いとか。」

「さ、さわださんっ!?!」

後ろから驚くような声が出ているがそれに反応せずに話を続ける。

「そんな高嶺さんにお得な話をしよう。判断材料が少ないから返事に迷ってしまうからな。という事で、ミカドさん。奥のロッカーが置いてある休憩室をちよつと借りていい?」

「それは構わんが、何を話すつもりだ?」

「秘密。男と男の内緒話ってやつだ。少しだけ待ってて欲しい。終わったら戻ってくるからさ。」

高嶺を奥の部屋に向かうように手招きし、通路に向かう。不安な顔をしている明月さんを不思議そうにこつちを見ている四季さんが目に入る。ミカドさんはいうと、複雑そうな表情をしていたが、大丈夫と頷くと諦めてくれた。

「この部屋だな。」

ドアを開き、中に入る。置かれているパイプ椅子に向かい合うように適当に座る。

「さてと、早速話していきましようか。」

「わざわざ個室にまで……あの三人には聞かせれない内容なのか……?」

椅子に座った高嶺は不思議そうに部屋を見渡しながら小さく呟い

ている。

「まず、高嶺さんが是非とも働きたいと思えるような話をしようじゃないか。」

手を大きく広げ、高らかに宣言する。こういうのは勢いが大事なのだ。

「この店、CカAフエFスEテ SテTラEラLラLラAで働くことで何が高嶺さんのプラスになるかというところ……。」

「はい……。」

手を前に出し、人差し指を開く

「まず、可愛い女の子と一緒に働ける。」

「……え？」

「考えてもみてくれ、今この店には君の大学で有名なあの孤高の墜王、四季ナツメが居る。彼女と同じ店：同じ空間を共に過ごすチャンスが到来だ。四季さんだけではない。もう一人の金髪の女性、死神のこと明月葉那。彼女とも一緒だ。しかも明月さんは高嶺さんの現状を一番に心配している。常に君の事を気に掛けていると言って過言ではない。そんな女性達と同じ店で働けば必然と会話をする機会も増える。友好を築けるわけだ。」

「同じ職場で働いていれば仕事終わりにどこかに食べに行くかもしれない。オシヤレなバーに飲みに行くかもしれない。夜だし家まで送る事になるかもしれない…、その流れで家で少しお茶をするかもしれない。他愛もない会話から一緒に買い物に出かける機会があるかもしれない。二人で遊園地などの娯楽施設に遊びに行くかもしれない……。」

「そんな夢の可能性が出てくる。」

「は…はあ。」

「2つ目は、働くことで明月さんやミカドさんが高嶺さんを守りやすくなる。」

「えっと、昨日言っていた魂の件がまだ解決していないって話……？」

「そう、現状はまだ何ともないがこのまま放置されることはまずな

い。今後挽回しないと何かしら問題が起こる事は間違いない。ミカドさんの目が届く範囲で行動した方が安心だと思う。何かあれば必ず明月さんが助けてくれるしな。勿論俺も助力する。」

「それは確かにそうだよなあ……。」

「ついでにバイト探しも解決できるし美味しい条件だとは思う。家からは徒歩圏内、一緒に働く人と人間関係によるトラブルが起きる確率は低い。」

「そして、最後に3つ目。」

「可愛い女性と同じ屋根の下で働くという事はつまり……、ハプニングは付き物、という事だ。」

「ハプニング……?」

ピンと来ていない様子で聞き返してくる。

「そうだ。言ってしまうえば、昨日の様な事故がまた起きてしまうかもしれない。」

俺の言葉が何を指しているのかを理解したのか、目を見開く。

「つまり……きのう、起きたあのような事が……?」

昨日の四季さんの下着姿を思い出したのか、発生現場辺りに目を向けていた。

「ああ。また起きる可能性はあるだろう。しかし、働くという選択をしなければその可能性はゼロだ。たとえ低くても1と0には絶対的な差がある。さっき話した可能性も勿論ゼロだ。」

その差を知ったのか少し悩む様子を見せた後、決心した顔でこちらを見る。

「やる。ここで働く。あ、いや。一緒に働かせて下さい。」

「ようこそ、CAFÉ STELLAへ。私たちは君を歓迎しよう。」

手を前に差し出し、お互いに握手を交わす。気のせいかな、力が籠っている気がする。

「追加で言えば、今後も働いてくれる人を募集していくつもりだ。フロアの人を必要としているから女性を募集する可能性が高い。なにが言いたいかな……分かるかな?」



「ああ。1をより大きい方へ引き上げる……そう言うことだろ？」

「更にもし高嶺さんが気になる人……意中の女性が出来たのなら全力でサポートしよう。職場で同性は俺しかないからな。」

「ありえるかわからないが……。」

「前向きに考えて行こう。これは高嶺さんの未練……願いを解決していく事に繋がっていくから。」

「宣言は出来ないが、頑張ることにする。」

「今はそれで良いと思う。その時が来たらで……。さてと、話は済んだ事だしフロアに戻ろうか？三人が待っているしな。」

部屋から出てフロアに戻ると、何やら三人がこちらを見ていた。特に明月さんは不安げに俺を見ている。結果が気になるのだろう。

「お話はもう大丈夫なのですか……？」

「ああ、高嶺さんもここで一緒に働く事になった。安心してくれ。」

「本当ですかっ!?!ありがとうございますっ。」

「高嶺さん、これからよろしくお願いしますねっ。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

二人はお互いに向き合いお辞儀を交わす。

「これからよろしく。」

「これから宜しく頼む。」

四季さんとミカドさんも続くように返事をする。

「よかった……引き受けてもらえて、ホツとしました。これで一安心です。」

「それにしてもどうして引き受ける事にしたの？奥で澤田君と何か話していたけど。」

高嶺が決心したことが疑問に思う四季さんから当然の様に質問が飛んでくる。

「い、いや、よく考えてみれば俺の命に関わる事だしさ。話を聞いている内にお店の条件も悪くないと思って。」

高嶺よ。声が上擦っているぞ、冷静になれ。

「そうそう、店は生活圏内から徒歩の範囲。人間関係とか面倒な事に悩む心配も無さそう。そして何より……。」

「何より?」

「四季さんや明月さんの様な可愛い女性と同じ職場で働けるっ!それだけで働く価値あり!……というわけだ。」

「いや、何がというわけなの?馬鹿なの?」

「澤田さん……。」

最後に力説すると二人から呆れてや衰れな物を見る視線が飛んでくる。ごちそうさまです。

「というのは冗談で、普通に現状の説明をしただけ。命に関わる事なら普通に協力するだろ?」

「ほんとうですかあ?昨日みたいなハプニングをまた期待していたりしていませんか?」

「まさか。命に関わる事なのにそんな事に余計な思考を割いている暇など……。」

同意を求めつもりで横に居る高嶺を見る。その顔は何やら考えている様子だが……。駄目だ。エロい事を考えている顔に見えてしまう。

「高嶺さん……何かエロい事を考えてませんか?」

「いやいや、考えていないから。何を根拠に……全く。」

「どうですかね、何やら下心ありありな顔をしていましたからね。顔に出ていましたよ?」

「な、適当な事を言わないでもらえるかなっ、キミ。」

明月さんからの言葉に高嶺は慌てた様子で顔に手を当てた。おいおい、その行動だけでバレた様なもんだぞ。

「今の動揺だけで十分な証拠ですね。エロい事、考えていましたね。にひひ。」

考えていた事がバレた高嶺だが、何とか逃げようと屁理屈を言うが明月さんが「屁理屈はモテない」をいう一撃であっけなく撃沈していた。

「おい。」

三人の会話を見ていると後ろからミカドさんに声を掛けられる。

「ん?どうかしたのか?」

「少し良いか？」

小声で話しかけてくる辺り、他に聞かれたくない様だ。三人から少し離れて会話を再開する。

「何か聞きたい事？」

「まあな。先ほど貴様が高嶺昂晴と奥の部屋で話していたそうだが、何をしたんだ？」

「何をしたって…、普通に会話…：…というか説明をしたただけだが？」  
さつきも言ったがどうやらミカドさんは腑に落ちなかったご様子だ。

「具体的にはどんな内容なのだ？」

「あー、それは企業秘密って事で。あまり他の人に聞かせる内容でも無いしな。でも…：…しいて言うなら。」

「言うなら？」

「人間の純粋な本能を掻き立てた…：…って事かな？ただそれだけ。」  
お店でヒロインとエロハプニングがワンチャン来いっ！みたいな会話してたとかを言う訳にもいかないのでそれっぽい事をそれっぽい雰囲気です。さあ！これで納得してくれ！

「詳しく話すつもりはないようだな。」

「それについてはすまないと謝る事しか出来ない。個人のプライバシーにも関わるからご勘弁。」

「分かった。だが一つだけ言っておく。」

前置きをしてからこちらを見る。流れから言いたい事は何となく想像できる。

「危険な事はしないようにな。もし何かするのなら吾輩だけでも良い、一言話してからすることだ。」

「大丈夫、重々承知しているから。その時は遠慮なく頼らせてもらうから。」

そんな危ない事する気も機会も無いが、取りあえずきちんと返事はしておこう。保険として。

俺の言葉に満足したのか、うむ。と言って三人の場所に戻っている。そちらに耳を向けると、コーヒーが飲める飲めないの話をしてい

た。聞いているとどうやら四季さんは大学のコンビニでコーヒーを買ったが飲めなかったらしい。挑戦する精神は尊敬できる。＋1万点。だが砂糖入れすぎとは思う。――100点

「そもそもコーヒーは苦い物ばかり。苦い物は毒なのに……毒を飲むなんておかしいと思わない?」

出た。伝家の宝刀『子供の屁理屈』である。もしかすると良薬という可能性もあるのでは無いのだろうか……いや無いか。

「そういう屁理屈って子供がよく言っているよな。」

「……」

高嶺の会心の一撃に恥ずかしそうに目を逸らしながら拗ねる。

「貴族ならコーヒーの嗜みくらいあったりしないのか?」

「水とミルク以外好まん。私は猫ぞ?」

猫にコーヒーを飲ませようだなんて愛護団体から訴えられるぞ。

「それじゃあ直ぐに準備しますね。」

そう言っただけで明月さんはカウンターの中に入り、コーヒー準備を進める。高嶺に関してはもう大丈夫だろう。それより今日は例の人の来客日だ。

「澤田君。」

今日のこの後の展開を考えていると後ろから四季さんに呼ばれる。

「ん?何か用?」

「そうね。とつても大事な用事。私が言いたい事わかる?」

あ。これはあれですね、さっきの続きというわけですね。

「あ……、今は高嶺のコーヒーが先ではないのでしょうか?」

「そっちは明月さんに任せているから大丈夫、それより澤田君と話して……聞き出しておきたい。」

優しく笑顔で言っているが纏っている空気が真逆にしか見えない。

「い、いや、残念ながらそんな時間は作れそうに無いかな?今から四季さん俺に構っている暇無くなりそうだしさ。」

「大丈夫。時間はたっぷりあるから。」

俺が今度は逃げ出さない様に肩を掴んでくる。肩に伝わる痛みから怒りの度合いがよく分かってしまう。

「無いっ。俺に構っている時間が消えるから！その話はまた後でっ。」

「何を意味の分からない言い訳を言ってー」  
すると、四季さんの言葉を遮るように店の入り口が開く。店内にカランとベルの音が響く。

「お邪魔させてもらいますね。」

入って来たのは前に一度来たことがある高齢の女性、大家さんだ。その姿を見た四季さんはすぐさま肩から手を離し、向き直る。真剣な表情となり、張り詰めた雰囲気となる。

「いらっしやいませ。」

先程までの姿とは打って変わって本物のメイドの様に頭を下げて挨拶をしている。あのオプシヨン、幾らでしてくれるのだろうか……。

「どうも、ナツメちゃん。さっそくだけど、ブレンドコーヒーを淹れてもらえるかしら？」

「畏まりました。少々お待ち下さい。」

注文を聞き、コーヒーを淹れ始める。大家さんを見ると、向こうもこっちを見ていたらしく目が合った。軽くお辞儀をし合うと、四季さんの方へ視線を移した。

(さて、大家さんのおかげで難を逃れたが……、これからの流れを考えておかないとな。)

店に漂う張り詰めた雰囲気に対し気まずさを感じ、それから逃れるために考えごとをしているふりをしながら時間が過ぎるのを待った。

### 第33話：広がる謎

「少しだけ待ってて欲しい。」私達にそう告げると、高嶺さんと一緒に奥の部屋に入って行ってしまわれました。

「ミ、ミカドさん……っ!」

「そう慌てるな、奴は話をするだけだと言っておる。」

「ですが、わざわざ説明するのに二人になる必要は……。」

「何か高嶺昂晴についての事で吾輩達にあまり聞かれたくない事なのかもしれない。」

「……………」

「そんなに奴が信用出来んか?」

「いえ、そういうわけでは……。澤田さんの事ですから上手く収めてくれるとは思いますが、その手段が気になると言いますか…澤田さん、たまに手段を選ばないみたいなこと言っておりましたから。」

「……それについては吾輩も多少は気になる所だな。」

「ミカドさん……………」

どうにか状況を知ることが出来ないかとの期待を込めてミカドさんを見る。

「全く……仕方ないな。……今回だけだぞ?」

「っ!ミカドさんっ!」

「吾輩が盗み聞きの様な真似をすることになるとはな……。」

ため息を吐きながら先ほど二人が向かった方へ耳を向けた。聞き取ろうとしているのか時折耳がピクピクと動く。なんだか可愛らしく見えてしまう。

「どうでしょうか……?」

「待て、何か話しているのは何となく聞こえるが……内容までは何とも言えん。」

更に聞き取るためか目を閉じ意識を集中し始めた。

「ねえ、2人は何をしているの? 閣下はなんだか集中している様に見えるけど……………」

「私達の行動を不思議に思ったのか、ナツメさんが小声で声を掛けてくる。」

「すみません、今奥の部屋の会話をどうにか聞けないかと……。」

「え？盗み聞きを？わざわざどうして……。」

「いえ、少し気になる事がありまして……。」

「お前ら、少し静かにいていてくれ。会話が聞こえないであろう。」

「あ、すみませんでした。」

再度ミカドさんは目を閉じて耳を動かす。ここから距離はあるのだが、聞き取れるのでしょうか……？

「断片的にしか聞き取れんから内容までは分からぬが、何とか聞こえはする。話している感じだと普通に勧誘している雰囲気に関こえるな。」

「上手くいっていますか？」

「もう少し近づいてみよう。お前たちはここで待っていてくれ、奴に気づかれる可能性があるのな。」

ミカドさんは少しずつ距離を詰めながら奥へと行き、立ち止まる。しかし直ぐに踵を返し戻ってくる。

「残念だが、もう話し合いは終わっている様だ。もうじき部屋を出てくるだろう。」

どうやら、聞こえた時点で話し合いが完了してしまっていたようです。どの様に説得をされたのでしょうか……？終わるまでが早すぎる気もするのですが……。

考えている内に、扉の閉まる音が聞こえ、2人が奥から出てこられました。高嶺さんの顔には先ほどまでの迷いは見られず納得したような表情に見えます。

「お話はもう大丈夫なのですか……？」

「ああ、高嶺さんもここで一緒に働く事になった。安心してくれ。」

「本当ですかっ!?!ありがとうございますっ。」

「高嶺さん、これからよろしくお願いしますねっ。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

今後一緒に働く事になり、お互いに挨拶とお辞儀を交わしていく。

それに続けてナツメさんとミカドさんもよろしくと挨拶を交わす。

「よかった……引き受けてもらえて、ホッとしました。これで一安心です。」

澤田さんの謎の速さによる説得に驚きはありつつも、無事に一段落したことに安心と喜びが込み上げてくる。

「それにしてもどうして引き受ける事にしたの？奥で澤田君と何か話していたけど。」

ナツメさんがズバツと聞く。私とは違って気にせず聞きに行ける立ち位置が有難く思えます。

「いや、よく考えてみれば俺の命に関わる事だしさ。話を聞いている内にお店の条件も悪くないと思って。」

聞かれる事を想定していなかったのか、若干声の上擦っていますね……。言いたくない事なのでしょうか？

そうすると、澤田さんの方からフォローが入ってきました。

「そうそう、店は生活圏内から徒歩の範囲。人間関係とか面倒な事に悩む心配も無さそう。そして何より……。」

「何より？」

「四季さんや明月さんの様な可愛い女性と同じ職場で働けるっ！それだけで働く価値あり……というわけだ。」

「いや、何がというわけなの？馬鹿なの？」

真面目な理由かと聞いていたら、唐突に澤田さんが脈絡のない発言をし始める。隣に居るナツメさんは哀れな物を見ている様な表情で返事をする。

「澤田さん……。」

思わず、呆れた声を出してしまう。恐らくこれも澤田さんの悪ふざけでしょう。たまにこういった冗談を挟んできますが……、ただ単純にノリでふざけただけなのか、はたまた本当の事から逸らす為の言い訳なのか……、当の本人はなにやら満足気ですし。まあ、悪い気はしませんよ……。少しだけですがつ。

「というのは冗談で、普通に現状の説明をただけ。命に関わる事なら普通に協力するだろ？」



「ほんとうですかあ〜？昨日みたいなハプニングをまた期待していたりしていませんか？」

つつい癖で揶揄う様に澤田さんを見る。流石にそんなことは無いとは思いますが、本当の事を話されていない気がしますので会話を引っ張ってみましょう。

「まさか。命に関わる事なのにそんな事に余計な思考を割いている暇など……。」

同意を求める様に高嶺さんを見る澤田さんにつられて一緒に高嶺さんを見ますが、どう見てもエロい事を考えている顔に見えます。分かりやすい人ですね。

「高嶺さん……何かエロい事を考えてませんか？」

「いやいや、考えていないから。何を根拠に……全く。」

「どうですかね、何やら下心ありありな顔をしていましたからね。顔に出っていましたよ？」

「な、適当な事を言わないでもらえるかなっ、キミ。」

追及していると慌てた様子で顔を当て始める。今の動揺で答えている様な物ですが……。ていうか本当に昨日の事を思い出していたのですね。

「今の動揺だけで十分な証拠ですね。エロい事、考えていましたね〜。にひひ。」

まあ？高嶺さんも男の人ですしそういう事を考える事はおかしい事ではありませんし、それに未練を解消するための一歩でもありますから。それにしても……本当に分かりやすい人ですね。澤田さんも見習ってほしい位です。

「いや、考えていないっ。明月さんが言うエロい事を考えていた訳では無くて……、そ、そうっ！思い出してただけだ！だからこれはあくまで回想であって、決して妄想では無い。」

「そういう屁理屈を言っていると、女の子のモテませんよ？」

「えっ？マジで……？」

屁理屈はモテないと聞くや驚愕の表情をする。本当なのかとナツメさんへと首を向ける。

「確かに。今のはちよつとウザいかも。」

「ウ、ウザい……。胸に突き刺さる……。今後気を付けます。」  
ナツメさんからの真実に何やらショックを受けているご様子ですが、今後の教訓になったようです。まあ…対価が大きい気もしますが。

三人で話していると、ミカドさんが澤田さんを呼び、輪から離れていく。恐らく先ほどの高嶺さんとの会話についてだとは思われますが…。

高嶺さんとナツメさんと話しながら、少し離れた二人に意識を向けるが、内容までは聞き取れず断念する。

後でミカドさんから聞くことにしましょう。恐らく澤田さんはあまり語らないとは思いますが…。

それと、先ほどの私が出ようとした時止めたあの行動。昨日は任せるとか頑張つて欲しいとの発言をされていたのに、いざその時になれば私を止めて自ら説得の役を買って出る…。どうしてでしょうか？  
初めからそうするつもりだった？私が高嶺さんを本気で勧誘するか見たかった…？直前で止めた事です。それとも元々の予定が狂つて澤田さんが出ざる負えなかった…？未来が見れる澤田さんの事で少し幾つかの可能性があったのでしょうか。その中で高嶺さんが働く未来を掴み取る為の最善として自ら…？

高嶺さんとナツメさんと話しながらも、澤田さんの行動について考える。

私と変わってから最初に高嶺さんの気持ちを代弁するかのように否定的な事言っていました…。しかし実際に高嶺さんも同じ事を考えていた訳で……。その後判断材料が少ないから返事に迷っていると言つて二人で部屋に入られました。澤田さんは男と男の内緒話と仰っていましたね…。多分適当な理由作りでしょう。中でのやり取りは恐らく私が相談した時の様に高嶺さんの現状に対しても考えや気持ちを的確に突き、それらに対して真摯に答えられたのでしょうか。自分以上に自分の事を理解している様に感じれば高嶺さんも多少は納得してしまうはずです。

彼は私達の過去から未来が見える。それならある程度は予想は出来るとは思いますが、ここまでの確に言い当てることは可能なのでしょうか？私の時にもそうでしたが、まるで本人の気持ちや考えを代弁しているかの様なあの言葉……。過去や未来が見える奇跡だけでは不可能の様な気がしますが……。これはまだ彼が私達に秘密としている事が関係している……。？他にも彼は、蝶々に触れることでその蝶の記憶や感情を読み取る事が出来る。が、これは本人も知らなかった力と仰っていましたし、恐らくは偶然触れた事で発覚した事なのでしょう。そう考えると現段階で三種類程の奇跡を使用可能となります。過去見と未来見、何かしらの方法で対象の考えなどを読み取る力、触れた蝶々から感情を読み取る力……。いえ、もしかすると2番目と3番目は同じ力かもしれないね……。対象を人か蝶か選べるだけかも……。

高嶺さんが持っている奇跡は世界に干渉を及ぼしてしまう程の危険な力です。例外的ではありますが強大な魂を持ってしまい世界を改変してしまつた。今はそれが問題となり生き延びるか、もしくは死ぬかの瀬戸際です。今は何とか良い方向に向かっているとは思われますが……。

神様は基本的に人間が奇跡を持つ事を良しとはしません。しかもそれが大きな力であればすぐに神様が干渉してくる可能性が高いでしょう。それなのにどうして澤田さんには何も起きないのでしょうか……。よくよく考えてみますと、澤田さんの未来見も充分世界に干渉している事になると思うのですが……。自分の思うがままに人の未来をコントロール出来るのでしたら放つて置くとは考えられません。高嶺さんと澤田さんの違い……。うーん。年数……。熟練度とかでしょうか？いえ、これは関係無いですね。

今考えても纏まらず、後でミカドさんに相談することに決め、2人の会話に意識を戻す。内容は高嶺さんがコーヒーを飲むかどうかになつていた。

「まあ、それほど頻度は高くないが飲むことはあるぞ？大学の食堂とかでたまにだけだな。」

「それなら大丈夫かな？実は、コーヒーを飲める人が澤田君以外居なくて……。」

「二人は飲めないのか？」

「私は飲めるのですが…苦いとしか思えないんです。あ、淹れ方自体は問題無いはずですよ。ちゃんと練習しましたから。一応、澤田さんは大丈夫だと思うって言ってくたさるのですが……。」

澤田さんですし適当な回答とは思いませんが、本当に大丈夫なのか若干の不安はあります。自分が淹れた物を提供するのですから…なるべく確実なものにしておきたい気持ちがあります。

「それで、他の人でも大丈夫かの確認が欲しい感じ？」

「そうなりますね、お店に出す可能性があるので多くの人の口に合った物を出したいので…。」

「因みに四季さんは？」

「私もコーヒーはちよつとね……。頑張れば…何とか飲めなくはないのだけど……。」

「あー。例えば四季さんは砂糖とミルクたっぷり入れないと飲めない人だった。」

「………なんで、それを知っているの…？」

「いや、大学のコンビニで四季さんがコーヒーを買ったところを偶々見かけたから。一口飲んだ後は大量に入れていたはず。アレってブラックの味の確認をしようとしていたんだな。」

「……ああ、そういうこと。勧められたから試してみたんだけど、残念ながら全然違いが分からなかった……。」

確かに以前、ここでコーヒーの飲み比べした時に澤田さんが勧めていましたね……。コンビニだと違うかもしれないとのことでしたが、結局分からずじまいでしたか。

隣から足音がしたので見ると、ミカドさんと澤田さんがこちらに戻って来ていた。どうやら話は終わったご様子。

「そもそもコーヒーは苦い物ばかり。苦い物は毒なのに……毒を飲むなんておかしいと思わない？」

「そういう屁理屈って子供がよく言っているよな。」

「……………」

「貴族ならコーヒーの嗜みくらいあつたりしないのか？」

「水とミルク以外好まん。私は猫ぞ？」

今は人の姿をしているから勘違いしてもしようがないですが、ミカドさんは飲まないでしょう。……そろそろ高嶺さんが飲む用の準備をしましょうか。

「それじゃあ直ぐに準備しますね。」

そう言つて私がカウンターの中に入ると、高嶺さんが席に座る。いつも通りに、問題が無いようにゆつくりと準備を進めて行く。

沸いたお湯を注ぐと、一気に芳醇な香りが広がります。今回もいつもに近い感じなので問題は無いと思いますが…。

「良い香りだな……………」

「ありがとうございます。この香りがするとコーヒーを淹れているって感じがしますね。」

「確かに。……そういえば、明月さんはメイド服を着ないのか？」  
ナツメさんをチラツツと見て問いかけてくる。

「おやおや、高嶺さんは私のメイド服もご所望でしたか。」

「いや、そういう事じゃない。」

「見たくないのですか？」

「そりゃ、見られるなら見たくはある。」

「につひつひ、だと思いました。」

こちらの問いかけに素直に答える。

「もしかしたら可能性はあるかもしれませんが？元々私はキッチンを担当する予定ですが、フロアになるかもしれませんから。」

キッチンを担当すると思つていましたが、前に澤田さんからフロア寄りの仕事内容を習いましたので、もしかすると…澤田さんの予想図では私をキッチンでは無くフロア担当にしようとしている可能性が高いです。正式にはまだ決まつてないので確約は出来ませんが…。

「そうなのか。明月さんなら似合うだろうし楽しみにしておく。」

「そんなに褒めてもらつても出せるのはコーヒーぐらいですよ…？」

高嶺さんからの急な誉め言葉に何でも無いように返しますが……、そんなこと言われると恥ずかしいです。ま、まあ嬉しいのは嬉しいのですが……。うう……少し顔が赤くなっている気がします。

「はい、どうぞ。」

そんな会話をしている内に淹れ終え、高嶺さんの前に置く。その後ろではナツメさんが笑顔で澤田さんに詰め寄っていた。恐らくはさっきの続きだと思われませんが……。澤田さんが構っている時間がないうらや言いつを繰り返しているみたいですね。それにしても、もう少しまともな言いつがあると思うのですが。

「何を意味の分からない言いつを言ってるー」

ナツメさんが更に問い詰めようとすると、ベルの音と一緒にお店の扉が開く。

「お邪魔させてもらいますね。」

落ち着いた声で入って来たのは、このお店の大家さんでした。

その声を聞いたナツメさんは、即座に大家さんへと振り返り緊張した表情を見せます。

「いらっしやいませ。」

先程とは違い、真剣な様子で接客を始める。なんとなくお店に張り詰めたような空気が出る。

「どうも、ナツメちゃん。さつそくだけど、ブレンドコーヒーを淹れてもらえるかしら？」

「畏まりました。少々お待ち下さい。」

大家さんからの注文を聞くと、カウンターへ入りコーヒーを淹れ始めた。高嶺さんを見ると、何が起きているのか分かっていないが、空気を読んで静観をしている。カウンター内では先ほどの私と同じようにナツメさんが黙々とコーヒーを淹れている。

何となく澤田さんの方へ視線を向けると、大家さんと目が合ったのかお互いにお辞儀をし合っていた。その後大家さんは再びナツメさんに視線を戻し、動きをただ眺めています。一方で澤田さんはこの空気の中、何やら真剣表情で考え事をしています。ナツメさんや大家さんを見ている訳でもなく……。虚空へ視線を向けています。一体何を

見ているのでしょうか……？

少しすると今度は顎に指を当て、更に考え込むような仕草を見せま  
す。時折視線を上に向けたりとして何かを思い出そうとしているご  
様子。ん？何かを思い出そうと……？

もしかして、何か奇跡の力を使っている？もしくは、それらを思い  
出そうとしている……？

すると、今度は顎に指を当てて、目を閉じ始める。何か集中しよう  
としている様にも見えませんが……。もしかして本当に奇跡の力を？  
……いえ、まだ決まったわけではありません。ただ記憶を思い出そう  
としているだけかもしれないし、決めつけは軽率ですね。

暫くすると目を開け、真っ直ぐにナツメさんと大家さんを見る。そ  
の様子を見た澤田さんは小さく口を動かしました。一体なんと言っ  
たのでしょうか？多分二言位でしたが……。状況的にナツメさんの事  
については予想できませんが。

「それじゃあ、また様子を見に来るから。」

「はい。お待ちしております。」

そうこう考えている内に大家さんが帰ろうとする。ナツメさんがそ  
れを見送り入口の扉が閉まる。

今回も許可はいただけなかった結果で終わってしまったと考えている  
と、先ほど大家さんが居た場所から一頭の蝶が飛んできた。

### 第34話：選ばれたのはオムライス

気まずい空気から現実逃避をしていると、コーヒを飲み終えた大家さんが店を出て行った。話し掛ける雰囲気でも無かった為、考えごととしている振りなどをしていたのだが、その間、なぜか分からんが明月さんがめっちゃこっちを見ていた。俺……なにかしたっけ？と途中から考えてみたが全く身に覚えが無い。

多分……大家さんが来ることを黙っていたからだろうか？来るのが分かっていたなら先に連絡しろや。てめえ、おい。とか？まあ若干眉間にしわが寄っていたからマイナス方向な事なのだろうとは思うが。

睨まれた原因を考えていると店の中に蝶が飛んでいた。状況的に大家さんから出たと思われる。

「葉那。」

「はい。」

明月さんから振るわれた鎌で蝶は溶けていくように消えていった。相変わらず振る速度が頭おかしいと思うのは俺だけだろうか。あのサイズを目にも止まらぬ速さで振り抜き、しかも綺麗に蝶の中心を捉えて切っている。自動照準オートエイムでも付いているのか？チートかよ。

「それで……今の人は誰だったんだ？聞ける空気じゃなかったけど。」

事情をまだ聞いていない高嶺から当然の疑問が出てくる。

「今の人はこのお店の大家さん。ここをオープンさせる為にはまずあの人の許可が必要になるの。」

「それで接客をしていたのか。」

「そう言う事。大家さんが納得してもらえたらその許可が下りる約束なんだけど……。」

「さっき見た感じだとかなり難しそうな雰囲気だったな。」

「もう何度も足を運んでもらってるんだけどね……。未だに満足してもらえない。」



「因みにさつき言っていた月末って言うのは……。」

「一時的に借りていられる期間のこと。本来だったら夏までの約束だったんだけど、10月末まで延ばしてもらっている。」

「けどまだ許可は下りていない、ということか。」

「残念ながら、そういうこと。」

「ごめん、私、奥で休憩してきてもいい?」

「あ、はい。分かりました。」

「了解、おつかれ。後は適当に進めておくからゆっくりしておいてくれ。」

「ありがとう。それじゃあ、よろしく。」

一言断りを入れてから四季さんは奥へと消えていった。若干落ち込んでいるな……あの様子は。仕方ないけど。

「ナツメさん、大丈夫でしょうか。落ち込んでいるご様子でしたが……。」

「まあ、大丈夫だ。少ししたら元通りになるはず。」

「そうだと良いのですが……。今回も満足していただけなかったの  
で。」

「それは味の問題では無いのだろうか。前回の俺の時の紅茶は美味しいと驚いてくれていたしな。」

「別に何も意地悪で許可を出さないわけでは無いのだよな?」

「寧ろ逆で四季さんを心配であるがゆえに出していないと思う。大家さんも過去にそういった経験があるからこそ、学生の四季さんには厳しいと考えている感じだな。」

「味以外か……。メニューとか?」

「それも含めて色々だろうなあ……。以前は何を食べてもらったんだっけ?」

分かり切った答えだが、流れるにここは明月さんに聞くべきだと思  
い話を振る。

「そうですね……以前は私が作ったオムライスを食べてもらいましたよ?」

「あと四季ナツメが淹れた紅茶もな。」

「二応、どっちも味の確認をしておきたいのだけど……、因みに、お前は何をする予定なんだ？」

名前の出ていないミカドさんが何が出来るのか気になるらしい。

「ドリンクの対応だな。コーヒーと紅茶の淹れ方くらいは覚えたぞ？」

「そ、そうか……。」

猫の姿でどうやって作業をするのか不思議で仕方ないのだろう。分かるぞ、それ。

「高嶺さん。ミカドさんはこの姿でお店に居るだけで十分なんだよ。」

「ん？どういうこと？」

「今のこのお店の雰囲気というかイメージは純喫茶。内装とかもそれに寄せていると思う。そこにミカドさんみたいな、ザ・執事っ！って人が居たら雰囲気作りとしては最高だと思う。しかもモノクルまでしているしき。マダム達に絶賛されること間違いなしだ。」

「マスコットか何かなのか……。」

実際に猫だし、そりゃマスコットよ。

「それで、どうします？」

明月さんが紅茶かオムライスかできいてくる。さて、ここは確か選択肢が出て来た場面だな。

「四季さんは今休憩中だし、取りあえずは明月さんのオムライスで良いのでは？紅茶は食後で……とかでどうだろうか。」

どの道、どっちも味わう事になるのだが、先に選んだ方のイベントが発生したはず。

「確かにそうかも。じゃあ取りあえずオムライスの味の確認をさせて欲しい。」

「分かりました。任せてください。」

若干嬉しそうな声で返事をする。

「ミカドさん。ちよつと試作品を作ってきますね？」

「ああ。分かった。」

「さっそくキッチンの方へ移動しましょうか。あ、澤田さんはどう

されますか?」

「俺はいいかな。待望のオムライスを二人で楽しんでくれ。」

この後まで一緒に居ると色々考えてしまうからな。口から砂糖を吐きそうになると同時に、目から塩分が出てくる羽目になりそうだ。

「つ。……ありがとうございます。それでは高嶺さん、キッチンへ行きましょうか。」

手を振りながら厨房へ消えていく二人を見送る。すると横に居たミカドさんから声を掛けられる。

「それで? 貴様は今から何をするつもりだ?」

「そうだなあ……こっちはもう大丈夫そうだし、四季さんの様子でも見てこようかな。いらん心配かもしれないけど。」

「多少は落ち込んでいるだろう。励ましてくるといい。」

「いや、正直、行くと例の件で捕まりそうだから怖いんだよな……、さつきは運よく大家さんが来て難を逃れたけどさ。今行くと逃げられないじゃん? 個室だし。」

「貴様の場合は自業自得だ。大人しく制裁を受けてこい。」

「だよな……、はあ。俺も落ち込んできたわ。」

「安心しろ。骨は拾ってやる。」

「いや、死んでるだろそれ。意味ないじゃん。」

ここで時間を潰すのもありだが……、面倒ごととは早めに片を付けるに限る。全部俺が悪いのだけれど。最悪、最終兵器を使って有耶無耶にしておこう。

「そんじゃ、行ってくる。何かあったら呼んでくれ。」

厨房から聞こえる包丁の音を背に、奥の部屋へと歩を進めて行った。

―完―

という風に場転して1日が終われば気が楽なのだが現実は無情だった。

「入るけど大丈夫か?」

部屋の前に立ち、念のために扉をノックする。問題ないと分かって

いるが万が一があるかもしれないしな。

「澤田君？うん。大丈夫だけど。」

中に居る四季さんから許可が出たのでドアを開き中に入る。

「どうしたの？」

「いや、四季さんの様子が気になったから見に来ただけ。落ち込んでないかと思つてさ。」

見た感じだとやはりそこまで落ち込んでない様子だ。多少ダメージは受けているのは分かるが。

「ご心配どうも。でも平気。それより向こうは大丈夫なの？」

「向こうは明月さんに任せて来たから大丈夫。今はオムライスの試食するつて事で二人仲良く厨房に居る。」

「そ。問題無いならいいけど。」

「紅茶も試したいとか言つてたから後で食後の紅茶を淹れてやつてくれ。」

「私の？それはいいけど……。」

「いいけど？」

何か引つかかる事でもあるのか？

「いや、澤田君は淹れないのになつて。」

「ん？ああ、俺？残念ながら……、それは無いな。」

「え、どうして？」

「男が淹れるより女の子が淹れる紅茶の方が高嶺も美味しく感じるだろ？」

「いや、さも、当たり前前みたいな顔されても困るんだけど……。」

常識的な事を話したつもりだが、どうやら理解は得れない様子。

「女の子にオムライスを作ってもらう。しかもそれにはケチャップでLOVEの文字。おまけにハート付きだ。更にはそれを直接食べさせてくれる。俗に言う“あーん”という奴だ。男なら誰しもが一度は憧れる展開。そんな幸せ一杯の時に食後の紅茶を男が淹れたとなると……、これまでの気持ちが冷めるに違いない……。」

「は？そんなメイド喫茶みたいなことするわけないでしょう？幸せなのは頭の中だけにしてくれる？」

少し怒りながらも呆れの方が勝っている声で否定をしてくる。

「明月さんなら思うと思うのだが？」

「……………。確かになんか想像出来る……………かも？」

「ま、この店はそんな店を目指して無いから意味ないんだけどな。」

「そもそも、今のは澤田君の妄想でしょ？恋人でもないのにしな  
と思うけど。」

「どうかな。答え合わせは戻って確認すると良い。」

「なんでそんなに自信ありげなの…………。」

正解する自信しかないからな。

「何はともあれ、平気なら良かった。」

「ありがと。もう少ししたら私も戻るから。」

退出の催促をされた気がしたが…………残念ながらまだやる事がある  
からな。

「……………？どうしたの。」

部屋から出ない俺に不思議に思ったのか、声を掛けてくる。

「いや、さっきは有耶無耶になってしまったが、話がまだ終わって無  
かったからな…………。」

「へー。何も言わずに出ていくかと思ったのだけど、話を付ける気  
はあるのね。」

「逃げ切れるとは思って無い。また問い詰められたら終わりだし  
な。」

「それじゃあ、さっきの続きだけど。どうして澤田君は昨日の事を  
知っているの？やっぱり高嶺君が話した？」

「いや、それはない。ちゃんと高嶺は昨日の事を話して無いと言  
い切る。」

「なら、どうして？」

「あー、それは…………。」

「…………あまり蒸し返したくはないけど、昨日この部屋に居たのは高  
嶺君だけだし、その時、明月さんと澤田君はフロアに居た筈だけど？」

「まあ、確かにそうだな。その辺りに明月さんが高嶺に被せていた  
マントを探し始めたと思う。」

「…………まさか、盗撮？」

「いやまて、それは無い。んなことしていない。」

「でもそのくらいしかありえないと思うのだけど？盗撮魔さん？」

質問に答えない俺に新たな称号が付いてしまったようだ。でもなあ……。真剣に話すのが馬鹿らしいというか、前に軽く話した時はスルーだったし……。信じてくれるとは思えないな。

「反論が無いって事はそう言う事なの？」

「反論っていうか……。はあ……。分かった、正直に話す。」

これ以上、誤魔化して今後変に疑われたくは無い。四季さんからの信頼はなるべく保っておきたい。既に無いかもしれんが。

椅子に座っている四季さんの斜め前に座る。

「正直に話す。一応これから話すことは全部真実。本当の事になるのだが……。」

「だが？」

「無茶苦茶な事を言うって自覚があるから信じてもえない気がしてさ……。」

「まずは話を聞かないと始まらないでしょ。私が信じるかどうかはそれから。」

そりやそうだがな。

「おっけい。じゃあ話していくぞっ。」

正直騙す様で気が引けるが……。嘘では無いからな。

「まずは…、昨日この部屋で何が起きていたか知っている。奇跡を起こした高嶺の魂を明月さんが削った後、高嶺はここで意識を失っていて、運悪くそこで着替えていた四季さんの着替えの最中に起きてしまった……。という流れであることが。」

話してく内に四季さんの表情がどんどん険しくなっている。が、一応最後まで聞こうと口は出さなしてくれるらしい。いつ爆発するか分からないので恐怖しかない。

「これだけは言っておきたいが、俺もその場に居たとか覗いて居たとかではない。勿論、盗撮とかの犯罪行為も。」

「じゃあどうやって知ったんだ？って部分に対しても回答なんだが

……。」

前を向き、四季さんの目を真っ直ぐに見る。俺は真剣だぞ！と意志を込めて見つめる。

「実は、だな。俺は特定の人物の未来を見ることが出来るんだ……。」

「……………は？」

真剣な顔で答えると、こいつ何言ってるんだ？と顔にありありと出ていた。うん。やっぱりそうだよな。

「はあ。真面目に聞いた私が馬鹿だった。ふざけないで正直に答えてくれる？」

「ま、まてっ、本気だ。嘘では無い。誤魔化そうとか、ふざけて冗談を言ってるわけじゃない。」

「何を言い出すかと思っただら……いい訳ならもつとましな事を言ってる貰える？それとも……現実味が無さ過ぎて逆に信じてもらう作戦？」

「違う違うっ。そんなつもり無い。」

「じゃあ澤田君が未来を見れるとかふざけた事がほんとの証拠は？」

「やっぱり証拠を求めるよな……。予想通りだけど。」

「四季さんが納得できる証拠を示せば良いのか？」

「そうね。出来ればの話だけど。」

それなら簡単ではあるが……、今直ぐなら……、フロアに居る二人の経過でも話せば多少は証拠としてなるのか？

「分かった。それじゃあさっそくだけど……、今から言うぞ？」

「ええ、どうぞ。」

「今、フロアでは明月さんが作ったオムライスを高嶺が食べている。正確には明月さんに食べさせてもらっているけど。」

「それは澤田君の頭の中の話なんじゃないの？」

「残念ながら違う。さっき言ったのは実は先に起こる事を言っただけだ。」

「なに、それじゃあ、今頃向こうでは澤田君が言っただけに明月

さんがオムライスにLOVEって書いてそれを高嶺君に食べさせているって言いたいのか？」

「そうだな。詳細を言うなら……、最初は自分で食べていたが、“LOVE”とか“あーん”が流行っているのかとか明月さんが言い始めて試しにしてみようって流れだな。高嶺がケチャップの文字を伸ばして食べる派じゃないのなら残ってると思うが。」

「それじゃ、今言った事がほんとかどうか……さっそく確かめにいきましょうか。」

真実かどうか確かめる為に四季さんが席を立つ。

「了解。」

時間的に大丈夫だとは思うが……、タイミング悪かったら嫌だな。

四季さんの後に続き、席を立ち部屋を出る。

フロアに出ると良い匂いがする。席を見ると、丁度明月さんが高嶺に食べさせているところだった。ナイスタイミング。完璧だよ全く。

「……………」

四季さんはその様子を呆れ顔で見ている。

「……………食べているところをガン見されると恥ずかしいんだが。」

「明月さんに食べさせてもらっている、の間違いじゃなくて?」

「ナ、ナツメさん?!?いつからそこに……………!?!」

新婚プレイを見られている事に気づき、驚愕の表情でこつちを見る。

「二人が新婚ごっこで“あーん”をしていたあたりから?」

「そんなプレイを楽しんでいた訳では……ないんですけど。私はただ、オムライスの味を高嶺さんに確認してもらっていただけで……………」

「味見に“あーん”は必要ないと思うけど。」

「うぐっ、それは……、そうかも、しれませんが。」

正論を返され、明月さんは言葉に詰まる。その様子を見てから四季さんはオムライスに視線を落とす。

「これも明月さんが書いたのか?」

四季さんが視線を向ける先にはケチャップで“LOVE”と書かれていた。きちんとハートのおまけつきである。よく見ると“O”



の部分もハートマークだ。

「うっ……は、はい。その通り……です。私が、書きました。」  
自白するように、言葉を絞り出し答えている。

「………仕込み済み？事前に話し合っていたとか。」

「今の明月さんのリアクションが物語っているだろ？仕込みじゃない。」

「……？何の話ですか？」

明月さんは話分からず、不思議そうにこちらを見ている。

「ねえ、明月さん。今から言う事が当たっているか、確認して欲しいのだけどいい？」

「ええっと、何をでしょうか……？」

「明月さんはオムライスを作り、それにケチャップで“LOVE”と書いた。更にメイド喫茶で流行っているとかの確認で試しに高嶺君に“あーん”をした。」

「ど、どどしてそれを……っ!？」

話を聞いていく内に、再度驚愕している。何かに気づいたのか、ハツとなり俺を見てくる。

「さ、澤田さん。まさか……!？」

「すまん。詳しくは後で説明する。四季さんに納得して貰うための試しに使った。」

「わ、分かりました。後で詳細を聞かせてください……。」

自分がしていた事を改めて人に指摘をされたからか、恥ずかしそうに目を逸らす。

「これで多少は納得出来るそうか？」

「うーん、明月さんの表情を見る感じでは確かに仕込みとかでは無さそうに見えるけど……。」

少しは信憑性が出てきたが、まだまだ納得は出来ない様だ。

「まあ、一度だけで信じて言うのは無理があるからな。今後も何度か試してみてください。信じるかの判断はそのときにでも。」

「………、そうね。これから何度か試させてもらうことにしようかな。自称占い師さん。」

「また変な称号が出て来たな。」

「でも占いが趣味なんですよ？お似合いだとおもっただけど？」  
「そういえばそんな設定で話していたな。それでか。」

「否定はしない。犯罪者よりかはましだな。」

何とか執行猶予付きで生き延びる事が出来そうだ。極刑を避けられた事を後で祝おう。

「それじゃあ四季さん、紅茶を淹れてもらっても良いか？オムライスの食後に飲んでもらう事にしよう。」

「……………分かった。準備する。」

お前は淹れねえのかよ？と一瞬こっちを見たが、黙って準備に取り掛かってくれた。いやね？他の人にも四季さんのを味見してもらった事で味がどうなのか確認にもなるし、自信にも繋がるぞ？

高嶺が言う答えは分かっているが、実際に言われるのは大事な事だ  
と思うし、実際に美味しいから。

高嶺さんにオムライスを食べて頂いた後、ナツメさんの紅茶の方も味の確認を終え、お開きとなりました。

「お疲れさん。今日は何とか無事に乗り切る事が出来たな。」

高嶺さんとナツメさんを見送ってから澤田さんが労いの声を掛けてきます。

「澤田さんの方もお疲れさまです。今日はありがとうございます。」

「大したことはしてないけどな。ま、忙しくなるのはこれからだから明日からもよろしく頼む。」

高嶺さんの説得やナツメさんを元気づけたりと、それなりの事をしていたと思うのですが…。本人からしたら大したことが無い部類になるのでしょうか。

「それで、貴様はまだ帰らんのか？」

「ちよつとな、ようやく高嶺が参加したから明日以降の事を話しておきたい。」

「そうか、すまんが吾輩は用事で席を外すから要件は葉那に話しておいてくれ。後で詳細は聞いておく。」

「用事？」

ミカドさんはどうやら用事でお出掛けをされるそうですね。

「昨日からに続き、色んなことが起きたからな。一度その報告をしてくる。」

なるほどです。確かに今日だけでも高嶺さんの事で報告が必要そうですね。澤田さんも「あく。なるほど、了解。」と納得されている様です。

「ついでに貴様の事も話しておくことにしよう。前に一度報告はしていたが、それから特に何も連絡が来ていないのでな…。」

既に報告はされていたのですか…。それで特に澤田さんの身に何も起きていないという事は高嶺さんの様に監視中でしょうか？

「高嶺さんの奇跡の件もそうですが、澤田さんの奇跡も相当だと思

うのですが…。」

「吾輩もそう考えているのだが…。判断を下すのは吾輩では無いからな。」

「……………」

「澤田さん？どうかされたのですか？」

澤田さんを見ると何だか気まずそうに苦笑いをしていました。

「あー、いや。何でもない。」

「何でもない様には見えないのですが……………」

「ほんとに何でもない。ただ、ミカドさんには苦勞を掛けているなと改めて思ったら罪惡感がひしひしとな……………」

どうやら自分の事でミカドさんに負担を掛けていることに罪惡感を感じてしまっている様です。

「何を今更な事を。それに吾輩達も貴様には苦勞させてしまっているからな。お互いさまというやつだ。」

「そうですねよ、なので、変に気を遣わないで下さいね。同じ職場で働く仲間ですし。」

「二人の優しさに涙が出てきそうだ。今後も色々相談や頼る事になりそうだが、改めてよろしく。」

頼る事になるのはこっちになると思うのですが…………。とは口には出さず。肯定の返事をする。

「それでは吾輩はそろそろ行ってくる。」

「はい、行ってらっしゃいませ。」

「夜道には気を付けてな。」  
ありきたりな言葉なのに、澤田さんが言うとなんだが気にしてしまいそうです。

「そんなじゃ、さつそく話しますか。」

「そうですね。あ、何か飲まれますか？良かったら淹れますよ。」

そう聞くと、澤田さんは少し悩んでから「コーヒーをお願い。」と言います。

「澤田さん、今日の高嶺さんの説得の件、ありがとうございます。おかげで無事高嶺さんがここで働いてくれます。」

コーヒーの準備をしながら、今日の事で改めて感謝を伝える。

「ほんと、大した働きでは無いんだけどな。でも感謝はありがたく受け取っておくよ。」

「澤田さんにとって大した事では無くても私にとっては一大事でしたから。」

「色仕掛けしなくて済んだしな。」

「それは言わないで下さい……。」

今思い出しただけでも恥ずかしくなってきました。まあ、結局しなかったですが。

「あ、それよりも、高嶺へのオムライスはどうだった？愛情をこれでもかと詰め込んでいた様に見えたが。」

「ちゃんと美味しいと言っていた良かったですよ？」

今回食べて貰ったオムライスは無事美味しいと言っていただけでした。これまで練習した甲斐がありましたね。まさか、また作る日が来るとは思ってもいませんでしたが……。

「そうか……。頑張つて練習した甲斐があつたな。おめでとさん。」  
澤田さんから出た声に、コーヒーの準備をしている私の手が一瞬止まってしまい、そちらを向く。彼を見ると、とても柔らかい表情で優しくこつちを見ていました。

「明月さんにとつては思い出深い料理だしな、また食べさせれる機会があつて……。こちらとしても良かったと思う。」

「やっぱり……。ご存じでしたか。」

厨房でわざわざ「待望の」と言われた時から何となく予想は出来ていましたか……。

「まあな。過去を覗くような真似をしている事はすまんと思つているが……。」

「そちらについては多少なり思うところもありますが……。今更言つても仕方ありませんから。」

そこで、ふと考える。もしかすると……今回、高嶺さんにオムライスを再び食べさせる機会を作つて下さったのでしょうか。思い返してみれば、オムライスの話が出るきっかけは澤田さんの一言でしたし

……。

「もしかして、わざわざ私に為に機会を作って下さったのですか……?」

気になってしまい、澤田さんに問いかける。

「まあ……どのみち、食べてもらう事にはなっていたと思うけどな。」

「ありがとうございます。おかげでリベンジが叶いました。」

感謝の言葉と一緒にカップに淹れたコーヒーを差し出す。

「ありがと。さつそく頂くとしよう。」

一口、コーヒーを口に付け、今度は何かを懐かしむような目で澤田さんは笑みを浮かべていますが……。

「いつかはオムライスだけでは無く、このコーヒーも同じ物になる日が来ると良いな……。」

カップを置き、小さくでしたが私には聞こえる声でそう言いました。その顔はやはり何かを思い出し、懐かしむ目に見えます。恐らくは……。

「そうですね。お店が無事に開けば、その様な機会が来るかもしれないですね……。」

私がそう答えると、それもそうだな。と返事が返ってくる。

「と、思い出話はここら辺にしないと、明日からの話をしようか。ちよつと真面目な話も混じる事になる。」

「分かりました。」

澤田さんが少し真面目な声になり、こちらも感傷的な気持ちから切り替える。

「明日なんだが、高嶺と一緒に高嶺の父親がこの店にやってくる。」

「え?高嶺さんのですか!」

「ああ、父親は絵描きをしていてな。一緒に店のインテリアとかを決めたりするアドバイザー?俺も内容までは詳しく知らないが……みたいな事をしているらしい。今日高嶺がお店の事で相談したことで明日、店に来る。」

「大丈夫なんでしょうか……。」

「いや、大丈夫じゃないな。結果は明日直接本人の口から聞いて欲

しい。」

「今から出来ることはありませんか？」

「寧ろ何もしなくて良いと思う。結構駄目出し食らうが…参考になるしそれをバネに出来るから。」

「何もしない方が良いのでしょうか？澤田さんからは焦った様子は見られませんし。これはあえて何もしなかった…:と違って良さそうですね。知っていたのなら今までで何か行動を起こしているでしょう。」

「因みにこのことを他の人には…:？」

「いや、まだ話していない。明日四季さんには高嶺の父親が来るとだけ話そうかと思っっている。それから…:。」

澤田さんは言葉を区切り、何やら三枚の紙を出してきます。

「これらは…:？」

見ていると、誰かの履歴書?の様に見えますが。

「俺の手書きで悪いが、これからこのお店で働いてもらう人達の簡単なプロフィール的な物だ。」

「…:…:えっ?」

驚きの余り、変な声が出ました。今…:これからこのお店で働いてもらう人たちの…:??

テーブルに置いてある紙に目を通す。そこには簡易的だが、基本的な情報が書かれていた。

「まず、最初にこの墨染すみぞめ希のぞみって子なんだが、書いてある通り高嶺の年下の幼馴染だ。家事も高嶺の朝食を毎日作る位スキルも高い。」

「明るくて素直な性格ですか…:, ご実家は神社なのですね。」

「だな。間違いなく戦力になる。基本的にフロアになると思うが、万が一キッチンが戦力不足になってもそちらをカバーできる一級品の人材。」

目を通していくと下の方には上とは別に備考欄があります。

「あの、この下の方に書かれている備考欄とは…:？」

「ああ、こっちはちよつと個人的な情報が含まれている事だから別で書いている。あまり人に話す事では無かったり、秘密にしたい事と

かを書いてある。無闇に地雷を踏まない為の情報だな。」

内容を見てみると、

- ・神社の手伝いをしている為シフトの調整要。
- ・甘いものが好きな為、店のデザートメニューへの貢献有。
- ・カロリー0理論の提唱者。

……何でしょうか？3番目の内容は？

更に読み進めて行くとある項目に目が止まる。

「……澤田さん、これは本当なのでしょうか？」

「ああ、それか？本当だ。マジもんの靈感持ちだ。」

私が指さす先には……

・靈感持ち。蝶を見ることは出来ないが、察知することが出来る。

近くに居ると寒気として感じる。

と書かれています。

「それと、この下の「??」と書いているのは……？」

「それはトップシークレットって感じだな。話すことは出来ないが、とある問題があつて、もしかしたらそういう未来が来るかもしれないので一応枠だけを書いている。」

「今は話す事は出来ない……という事でしようか？」

「すまんが、そうなる。必要になったら話すからそれまでは無視し

てくれていい。」

「……分かりました。」

元々話す気が無かったが、情報として一応私達に知らせておきたいという事なのでしょう。これは多少は信用していただいているのか、私やミカドさんの力が必要な事なのか……。

「次は二枚目のこの子、ひうちだに火打谷 めい愛衣つて子なのだが……。」

先程と同じように書いてある紙を見ていく。どうやら一枚目の希さんと同じ年の子みたいです。しかも元々同じ中学で友達と……活発的な性格でとにかく笑顔が明るい子みたいです。

「この子は笑顔がとても眩しい子で、場を明るくしてくれるムードメーカー的存在だな。」

「とつても可愛らしい人みたいです。」



澤田さんの言葉を聞きながら下を見ていくと、

・元水泳部。

・褐色で片目を髪で隠しているという属性盛り

・可愛い物好き。※本人はそれを隠している。

・意外とかなりのむつつりスケベ。

・???

色々ツツコミどころがあるのですが……、それよりも。

「あの……この子も<sup>???</sup>」と書いているのですが……？」

「そうだな……。その子も場合結構難しい問題でもあるのだが……。これについては俺の方で様子は見ておこうかと思う。何か問題が起これば、頼らせてもらう事になるが、その時は宜しく頼む。」

そう言ってくるという事は蝶がらみの話である事は間違いなさそうです。

「最後に3枚目の女性、<sup>しおやま</sup> 汐山 <sup>すずね</sup> 涼音って人だ。この人はお店の主

戦力となる人だな。」

・パティシエ。『<sup>パ</sup>ティ<sup>ス</sup>serie<sup>ス</sup>・<sup>ス</sup>ourian』というお店で働いていた為、スウィーツ類に精通。が、今は辞めている。

・高嶺と同じマンションに住んでおり、高嶺と同じ大学に通っている友人、汐山宏人の姉。直接的な接点は無し。

・現在店を辞めているが、それが原因でかなり落ち込んでいる。※蝶関連の為明月さんとミカドさんに相談要。

こちらの女性はお菓子作りで即戦力になる方の様ですね。過去にお店で働いていた経験が……。こちらは澤田さんが調べてくれたのでしょうか。それと3番目の項目は……。

「澤田さん、この女性は。」

「現時点ではまだ大丈夫のはず。何もしなくても明後日には高嶺が訪ねに行くことになるけど、念のために明日辺りにでも一度様子を見てみようかと思う。」

「今ほどのくらいの症状で……？」

「他から見て、かなり落ち込んでいて気力があまり無い……。位に見えていたと思う。でも反応も受け答えもちゃんと出来るから今の所

は最悪にはなつてはいないから安心してくれ。」

お店で働くことになるという事は立ち直つて問題は解決可能ということなのでしょう。明後日には高嶺さんが接触するとのことですし、どこかのタイミシングで蝶を回収する必要があるみたいですね……。

「これが取りあえずの話だが、まずはミカドさんに女性3人分の書類とかロッカーなどの場所の準備をお願いしたい。四季さんに何か聞かれたら俺が言つていたと言つてくれ。」

「そういえば…今日ナツメさんにも話をされたのですか？」

「したんだけど当然信じてはいなかったからな、要監視中になったわけ。」

「なるほど、それでオムライスの事を当てていたのですね。」

流れる的に、澤田さんが私と高嶺さんの状況を言い、それをナツメさんが確認されていたのでしょうか。

「そういうこと、それはこれから何とかしていく。目下は高嶺父に色々指摘されるから、それについて改善してく事になる。」

澤田さんはそう言うのと、空いた紙にお店のメニューを書き込んでいく。

「色々あるが、先にしていくのはアルバイトの募集と、お店のメニューの改善だな。」

口で話されながら、流れる様に書いていく。

「澤田さん、結構速筆なのですね。」

「ん？そうか？」

「口に出しながら同じぐらいの速度で書かれていますから、かなり早いと思いますが……。」

「あまり気にしてなかったが……まあ、そうする必要があったというか、自然と身に付いた感じだな。」

書く手を止め、どこか遠い目をしている。これは……。

「すみません。もしかしてじゃなくて、嫌な記憶を思い出させてしまったようで……。」

「ああ、いや、気にしないでくれ。ただ昔を思い出して懐かしんでい

ただけだから。」

そうしてまた紙へ視線を向け、書いていく。

前に、頭の回転が速い人は書く速度も速いと聞いたことがあります。澤田さんもその部類なのでしょうか？確かに彼の奇跡なら当然頭の回転は速いのでしょうか。幾つもある未来から最善を手に入れる為にはどの様に人を動かし、どの様に先の事を話すのが正解かを考えなければいけません。日頃、私達と話している最中でも常にそれらを頭に入れながら過ごしているのでしょうか……。それなら頭の回転が速いなど当然かもしれません。

澤田さんは前世……前の世界に居た時からその様な人生を歩んできたのでしょうか。今回の件で、机に置かれた三枚の情報から、明日に起こる事、それに対して改善すべき点、その案を止まる様子なく話している。この世界からでは無く、過去に多くの経験があったからこそこの賜物に違いありません。逆に言えばそれだけの思い出したくもない……悲惨な人生だったとも言えるのですが。

「『そうする必要があった』と言ったのは当然なのでしょう。様々な人からの悪意、権力者などから逃げる日々に休まれる時間は無かったです。ましてや字を書いている暇なんて。『ただ昔を思い出して懐かしんでいただけ』とはおっしゃっていました……それは私を氣遣った言葉だったのか、それとも慣れ過ぎて感覚が麻痺してしまったのか……。」

「と、まあ、今の所はこんなもんか。いきなりメニューが多くなって大変だが、少しずつ作れるのを増やしていきたいと考えている。デザートについては、俺はそこまで詳しくは無いから……プロフェツシヨナルが来てから詰めていきたいと思う、が……明月さん、今の話聞いてた？」

「えっ、あつ！すみません、聞いていませんでした！」

考え事をしていて、澤田さんの言葉を右から左へと聞き流してしまっていました。

「見間違いじゃなければ、何か思い悩んでいた様に見えたけど、気になる事でもあった？」

「ああ、いえ、考え事をしていただけですので大丈夫です。」  
「……了解。」

私が話さないのを察したのか、深く追求せず視線を戻したようです。

「じゃあ、最後に明日の流れを話して終わりとするか。」

「ええっと……まず明日高嶺父が来るのだが……午前中の、そんなに早くない時間帯の筈。詳しい時間までは分からないけど、朝食を摂った後で、店に来た時に四季さんが高嶺におはようと言っていたからそこまで遅い時間では無いとは……思う。多分。」

紙に書きながら逆の手をこめかみに当て、何かを思い出すような、記憶を探っているように話していく。

「んで、店に着くと、メニューの味の確認をするために幾つか頼むのだけど、コーヒー、サンドイッチを各種類とオムライス……？後は食後に紅茶を……これはアールグレイだな。」

「あ、念のために確認なんだが、胃薬って置いている？結構な量食べるから……胃が、な？」

「多分ですが、置いてあったと思いますよ？」

一応飲食店という事もあり、置いてあったはずです。確かに和史さんの年齢を考えると……仕方ないですね。

「その後にさつき言った様に色々指摘を食らうから……、それらの改善を皆で話し合おうってのが明日の流れになるはず。」

明日の予定を確認し終えたからかこめかみから指を離し、顔を上げる。

改めて、澤田さんの奇跡を目のあたりにすると……、その恐ろしさがよくわかります。正確な時間などの情報が分からないと言っても、観測した未来の行動や言葉からおおよそが推測可能。聞いている限りでは会話なども詳しく見れている様ですね……。誰がどんな会話をしているかを分かるだけでも相当凄い事なのですが……。

「今言えるのはこのくらいか。俺の方は高嶺父が味の確認している間に、この女性の蝶の様子を確認しに行こうと思う。」

「先ほど話していた方ですね、分かりました。でも、無闇に蝶に触ら

ない様にして下さいね?」

落ち込んでいたりなどのマイナスな感情が強ければ強いほど、蝶は多く集まってきます。それに感化するように負の感情も大きくなり、更には他の人にまで影響を与えてしまいます。

「そこはちゃんと理解しているつもり。多分集まっている数も多いと思うからな。」

「この前みたいに興味本位で触っては駄目ですからね? 幾ら澤田さんでも何かしら影響は受けてしまう可能性があります。」

「確かに、自己嫌悪とか感じたくないから極力触らない様にしておく。…………他なら楽なだけだなあ。」

最後に小さく呟くと、残っていたコーヒーを飲み干し、席を立つ。負の感情に楽とか無いと思うのですが…………。

「それじゃあ、そろそろお暇しようかな。コーヒーごちそうさま、美味しかった。」

「お粗末様です。もう帰られますか?」

「そうするよ、そろそろミカドさんが帰って来てもおかしくないし、お邪魔になるかと思うから。」

「あの、こちらの紙は一旦私の方で預かってもいいですか…………?」

「ん? ああ、了解。ミカドさんに説明する時にあると分かりやすいし持って行って大丈夫。ただ、他の人には見られない様に気を付けて欲しい。」

「はい。重々承知しています。」

「ならおっけい。」

店から出ようとする澤田さんを入口まで見送る。お店の扉を開き外に出ると、丁度ミカドさんが帰ってくるの姿が見えました。

「澤田達也か、話し合いは終わったのか?」

「おかげさまで、問題なく終わったよ。詳しい話は明月さんから聞いてくれ。」

「…………分かった。後で聞いておこう。」

「それじゃあ、お疲れさん。また明日。」

「はい、お疲れさまでした。ゆっくり休んで下さい。」

「うむ、ご苦労であった。また明日もよろしく頼む。」

別れを告げ、澤田さんは家へと帰っていく。その姿が見えなくなった所で、ミカドさんから声を掛けられる。

「栞那、話がある。」

「……どういった内容でしょうか？」

ミカドさんから発せられる雰囲気から察するに明るい話じゃないさそうですね。

「澤田達也の件でだ。詳しくは部屋で話す。」

「分かりました。」

——澤田さんの件

ミカドさんが出掛けられた用事は上への報告です。つまり……澤田さんの事で何かあったということなのでしょう。しかも良くない方向での。

無言で部屋に向かうミカドさんの表情は厳しく、話される内容の陰しさを物語っています。

願わくば……彼に不幸が訪れませんかように。

これから起こるであろう災難に、そう思わずにはいらなかった。

第36話：プロフィール ―澤田 達也視点―

高嶺と明月さんの新婚ごつこを確認した後、四季さんの紅茶も確認を終えた所で、丁度良い時間という事もあり今日は解散となった。

「お疲れさん。今日は何とか無事に乗り切る事が出来たな。」

二人を見送り、隣に立っている明月さんを労う。

「澤田さんの方もお疲れさまです。今日はありがとうございます。」

「大したことはしてないけどな。ま、忙しくなるのはこれからだから明日からもよろしく頼む。」

俺の返事にあまり納得出来ない顔をしているが……、そんな大層な事してないしなあ。今日俺がしたのつて……四季さんを怒らせたのと、高嶺を下心満載の勧誘とかぐらいか？……碌な働きしていないなこれは。いや、四季さんの怒ったのを見れたのはプラスか？

「それで、貴様はまだ帰らんのか？」

「ちよつとな、ようやく高嶺が参加したから明日以降の事を話しておきたい。」

残念ながらまだやる事があるんだよな……。明日から動き出すことだし、せめて明日の話だけでもしておきたい。

「そうか、すまんが吾輩は用事で席を外すから要件は葉那に話しておいてくれ。後で詳細は聞いておく。」

「用事？」

今から外に出掛けるのか。あれか？猫の集会的な奴か？

「昨日からに続き、色んなことが起きたからな。一度その報告をしてくる。」

あ、そつちか。確かに高嶺の事で色々進展あったし、一度報告は必要か。

「あゝ。なるほど、了解。」

「ついでに貴様の事も話しておくことにしよう。前に一度報告はしていたが、それから特に何も連絡が来ていないのでな……。」

俺の……？出生というか生まれ直した事についての報告か。いや、

でもミカドさん……多分俺が未来視を持っているのかも報告したのか？それなら連絡は一生来ないと思いますよ？そんな力持って無いから。上も困惑していると思うぞ。

「高嶺さんの奇跡の件もそうですが、澤田さんの奇跡も相当だと思うのですが……」

「吾輩もそう考えているのだが……。判断を下すのは吾輩では無いからな。」

深刻そうな空気で二人は話していく。が、判断も何も無いもんは罰せれないからな……。というか俺は高嶺と同等の危険度か。まあ、確かに本当にそんな奇跡があれば危険視するだろうな。……それにしても。

「澤田さん？どうかされたのですか？」

俺が苦笑いをしていたからか、明月さんが不思議そうな顔でこっちを見てくる。

「あー、いや。何でもない。」

「何でもない様には見えないのですが……。」

「ほんとに何でもない。ただ、ミカドさんには苦労を掛けているなと改めて思ったら罪悪感がひしひしとな……。」

ありもしない力に振り回されているミカドさんに対して最悪感を感じてしまうが、原作知識の出所がバレる訳には行かない為話すことは出来ない。

「何を今更な事を。それに吾輩達も貴様には苦労させてしまっているからな。お互いさまというやつだ。」

「そうですね、なので、変に気を遣わないで下さいね。同じ職場で働く仲間ですし。」

此方を気遣う様に言う二人を見ると、フツ。っと少し呆れながらもどこか満足そうなミカドさんと、安心させるように微笑みかけてくる明月さんが目に入る。

「二人の優しさに涙が出てきそうだな。今後も色々相談や頼る事になりそうだが、改めてよろしく。」

話せないの1点張りにも関わらずこのように言ってくれる事に感



謝をしつつ、今後役に立つことでそれらを返してくと改めて決意する。……すまない、エロゲの事だけは話す訳には行かないんだ……許せ。

「それでは吾輩はそろそろ行ってくる。」

「はい、行ってらっしゃいませ。」

「夜道には気を付けてな。」

ミカドさんが出ていく事となり見送る。夜道を気を付けろとか言ったが、猫には無関係な言葉かもしれなかったな。

「そんじゃ、さっそく話しますか。」

扉を閉め、思考を切り替える。

「そうですね。あ、何か飲まれますか？良かったら淹れますよ。」

それはありがたい。何を飲むか……。ここはやはりコーヒーだろうか。

「コーヒーをお願いします。」

明月さんは俺の返事を聞くと、カウンターに入りコーヒーの準備を進めて行く。

「澤田さん、今日の高嶺さんの説得の件、ありがとうございます。おかげで無事高嶺さんがここで働いてくれます。」

準備をしながらこちらを向き、今日の事で礼を言ってくる。

「ほんと、大した働きでは無いんだけどな。でも感謝はありがたく受け取っておくよ。」

いや、ほんと。でも感謝は受け取っておく。

「澤田さんにとって大した事では無くても私にとっては一大事でしたから。」

「色仕掛けしなくて済んだしな。」

「それは、言わないで下さい……。」

俺の言葉に手が止まり、恥ずかしそうにつぶやく。どうやら思い出ただけでも恥ずかしいとおもってしまう事をしようと考えていたらしい。流石エロい人だな。

「あ、それよりも、高嶺へのオムライスはどうだった？愛情をこれでもかと詰め込んでいた様に見えたが。」

ケチャップでオムライスの上にまで溢れ出ていたが……。

「ちゃんと美味しいと言っていた良かったですよ？」

「そうか……。頑張って練習した甲斐があったな。おめでとさん。」  
あの時、三度目の生まれ直しをしたときに初めて作ったオムライス。碌に掃除はされずに汚れた部屋の中でただ一人残された子供。母親の友達などと適当な嘘を付いてまでもその子に何かしてあげたかったのだろう。その時に食べたいと言われたのがオムライスだった。

まあ、初めての事もあり、感想としては美味しくないの一言だったわけだが……。次は美味しく作ると反省し、また作ってあげると約束した。

しかし、その子は再び蝶へと還ってしまい、約束は果たされずのままだった。それが今回で果たすことが出来た。幸せを求め続ける満たされない渴望と、それを諦めずに次こそはと案内し続けた二人の頑張りがあったからこそ実った奇跡なのだろう。あー、思い出すだけで泣けてくるわ。

「明月さんにとつては思い出深い料理だしな、また食べさせれる機会があつて……。こちらとしても良かったと思う。」

ただ場のセッティングをただけなんだけどな。でも、彼女のルートを見た人から見ればまず外せないイベントだと思う。

「やっぱり……。こ存じでしたか。」

何かを納得した声で返事をしてくる。流石に露骨過ぎて気が付くか。

「まあな。過去を覗くような真似をしている事はすまんと思ってるが……。」

「そちらについては多少なり思うところもありますが……。今更言つても仕方ありませんから。」

それについては、なるべく割り切ってくれるらしい。ほんと出来た人だよな……。普通自分の過去や感情を見られるのは嫌悪感持たれても仕方ないと思つているのだが？ いや、既に手遅れな俺が言うのはお門違いだけどさ。

「もしかして、わざわざ私に為に機会を作って下さったのですか……。」

「まあ……どのみち、食べてもらう事にはなっていたと思うけどな。」  
「わざわざ言う程でもないけどな。」

「ありがとうございます。おかげでリベンジが叶いました。」  
感謝されるほどのことでも……あるのか明月さんにとっては。けど俺の手柄みたいにするのは若干気が引けるな。だが感謝は受け取っておく。

明月さんから感謝の言葉に続き、カップを前に置かれる。淹れたばかりのコーヒーをさっそくいただく。

……オムライスもそうだが、このコーヒーもいつかはオムライスと同じぐらいの大事な位置になるんだよな。確か……キリマンジャロだったか？ちよつと高い豆ではあったが、デート前か何かの時に高嶺に淹れた物の……はず。それが将来は毎朝淹れてあげるような関係になって……部屋を満たすその匂いすらも幸せを感じる一部に……。

「いつかはオムライスだけでは無く、このコーヒーも同じ物になる日が来ると良いな……。」

カップをテーブルに置くと、自然と口からこぼれた。どうやら心の声が漏れてしまったようだ。

「そうですね。お店が無事に開けば、そのような機会が来るかもしれないですね……。」

「それもそうだな。」

明月さんの言葉に相槌を返す。その通りだ。まずは店を無事に開かなければ意味が無い、幸せの未来はそれからだ。しんみりした気持ちはこちらまでにしよう。

「と、思い出話はここら辺にしといて、明日からの話をしようか。ちよつと真面目な話も混じる事になる。」

「分かりました。」

俺が真面目な話をし始めたのを感じ取り、明月さんも切り替える。

「明日なんだが、高嶺と一緒に高嶺の父親がこの店にやってくる。」

「え？高嶺さんのですか!？」

ああ…そりや唐突に言われたらそうなるよな。

「ああ、父親は絵描きをしていてな。一緒に店のインテリアとかを決めたりするアドバイザー？俺も内容までは詳しく知らないが…：…みたいな事をしているらしい。今日高嶺がお店の事で相談したことで明日、店に来る。」

「大丈夫なのでしょうか…。」

「いや、大丈夫じゃないな。結果は明日直接本人の口から聞いて欲しい。」

「今から出来ることはありませんか？」

「寧ろ何もしなくて良いと思う。結構駄目出し食らうが…：参考になるしそれをバネに出来るから。」

変に付け焼き刃でやつても大した効果は無さそうだし、マイナス要素は今日明日でどうにか出来る部分は少ない。

「因みにこのことを他の人には…：？」

「いや、まだ話していない。明日四季さんには高嶺の父親が来るとだけ話そうかと思っている。それから…：。」

分かりやすく説明できるように、予め紙に書いておいた各ヒロインのプロフィールを3枚出す。

「これらは…：？」

「俺の手書きで悪いが、これからこのお店で働いてもらう人達の簡単なプロフィール的な物だ。」

「…：…えっ?？」

明月さんから驚いた声が出る。うん。そうなるよね、正しい反応だと思う。取りあえず一枚一枚説明していこう。

「まず、最初にこの墨染 希って子なんだが、書いてある通り高嶺の年下の幼馴染だ。家事も高嶺の朝食を毎日作る位スキルも高い。」

清纯派幼馴染。昔からの家族付き合いでよくお世話になっておりご両親公認。毎朝ご飯作りに行っているとか俺にもそんな幼馴染が…：以下略。

「明るくて素直な性格ですか…：、ご実家は神社なのですね。」

「だな。間違いなく戦力になる。基本的にフロアになると思うが、万が一キッチンが戦力不足になってもそちらをカバーできる一級品の人材。」

性格も明るく素直でノリも良く、要領も……あれ、良かったつけ？ 踊り覚えるのは結構……まあいつか。

「あの、この下の方に書かれている備考欄とは……？」

「ああ、こっちはちよつと個人的な情報が含まれている事だから別で書いている。あまり人に話す事では無かったり、秘密にしたい事とかを書いてある。無闇に地雷を踏まない為の情報だな。」

がつつり個人情報です。ほんとの個人的な情報です。知っているのがおかしレベルで。

突っ込まれるかと思っただが、思いのほか紙の方へ意識を向けていた。

「…澤田さん、これは本当なのででしょうか？」

明月さんが指差す先を見ると、墨染さんが靈感持ちと書いている欄を指していた。

「ああ、それか？ 本当だ。マジもんの靈感持ちだ。」

神社の一人娘で靈感持ちとか由緒正しき血統って感じがするよな……。

「それと、この下の『??』と書いているのは……？」

「おや、やはりそこは見逃さないか。」

「『?』はトップシークレットって感じだな。話すことは出来ないが、とある問題があつて、もしかしたらそういう未来が来るかもしれないので一応枠だけを書いている。」

要素として出てくるのは個別に入ってからだし今は必要ないだろう。もしくは……、舞の人が来れないなどの異常事態が起きた時とか？

「今は話す事は出来ない……という事でしょうか？」

「すまんが、そうなる。必要になったら話すからそれまでは無視してくれていい。」

「……分かりました。」

こちらが話さないと分かったからか、無理に深堀はせずに引き下がってくれたようだ。……さて、一人目はこの辺にして次に行こう。

「次は2枚目のこの子、火打谷 愛衣って子なのだが……、この子は笑顔がとても眩しい子で、場を明るくしてくれるムードメーカー的存在だな。」

後輩キャラで、元水泳部という理由で褐色系。目のせいで片目を隠しているという若干中二病気味要素。雰囲気的にサブつとしているかと思えば、結構繊細で撃たれ弱い。しかも可愛い物好きでそれをバレンに様に隠しているという……っ！まあ、高嶺にあっさりバレるのだけ。主人公補正で強制イベントだな。うん。女子校だったからか、エロい事に興味津々で自分からその話題を出しておきながら恥ずかしくて撃沈する……けどやはり興味津々という属性を盛りに盛ったヒロインです。最高。

「とつても可愛らしい人みたいですね。」

色々考えたが、その一言で十分だな。うむ。

さつきと同じように欄を見ていく。

「あの……この子も『?!?』と書いているのですが……?？」

「そうだな……。その子の場合結構難しい問題でもあるのだが……、これについては俺の方で様子を見ておこうかと思う。何か問題が起ければ、頼らせてもらう事になるが、その時は宜しく頼む。」

これも個別ルートで詳しく出てくるが……何かの拍子で表面化する可能性もあるから気にかけておこう。

「最後に3枚目の女性、汐山 涼音って人だ。この人はお店の主力となる人だな。」

原作ではサブヒロイン扱いで個別も短く、物語の根源などには関りを持たない。まあ、この人の場合、落ち込んでいる今が一番の難所だし共通では持ち直しているから仕方ないんだが……。が、メインに引けを取らないくらいのキャラだと思っている。サブなのが惜しいくらい……。もつとこう、個別が長くても良かったんじゃないだろうか？高嶺を励ますシーンとか年上という立ち位置からの助言。あれには

心打たれた。姿はあれだけど、しっかりと自分の信念を持った大人の女性だと認識するくらいには凄かったと思う。最高。

「澤田さん、この女性は。」

「現時点ではまだ大丈夫のはず。何もしなくても明後日には高嶺が訪ねに行くことになるけど、念のために明日辺りにでも一度様子を見てみようかと思う。」

3つめの項目は死神として見過ごせないのだろう。まだ大丈夫とは思うが、何があるか分からないしな。一応確認だけはしておこう。

「今はどのくらいの症状で……？」

「他から見て、かなり落ち込んでいて気力があまり無い……位に見えていたと思う。でも反応も受け答えもちゃんと出来るから今の所は最悪にはなっていないから安心してくれ。」

「これが取りあえずの話だが、まずはミカドさんに女性3人分の書類とかロッカーなどの場所の準備をお願いしたい。四季さんに何か聞かれたら俺が言っていたと言ってくれ。」

これも四季さんが信用してもらったための行動とか言っておけば何とか丸め込めるだろう。

「そういえば……今日ナツメさんにも話をされたのですか？」

「したんだけど当然信じてはいなかったからな、要監視中になったわけ。」

あれだけで信用するとか思っていないから良いけど……。

「なるほど、それでオムライスの事を当てていたのですね。」

「そういうこと、それはこれから何とかしていく。目下は高嶺父に色々指摘されるから、それについて改善してく事になる。」

「色々あるが、先にしていくのはアルバイトの募集と、お店のメニューの改善だな。」

頭で考えている内容を口に出しながら書いていく。この二つは直ぐに取り掛かる事になるはず。

「澤田さん、結構速筆なのですな。」

「ん？そうか？」

俺が紙に書いている速さが気になるらしい。

「口に出しながら同じぐらいの速度で書かれていますから、かなり早いと思いますが…。」

「あまり気にしてなかったが……まあ、そうする必要があったというか、自然と身に付いた感じだな。」

任務……というか仕事ではすることが多く、その報告も多数あった。しかも電子では危険という事で手書きで出す必要があった。それを必死に書いている最中に次のが転がり込んでくる……とかも当たり前にあつたなあ……。慣れればそれなりに時間は作れたが、最初は腱鞘炎になるんじゃないかと不安になったもんだ。

「すみません。もしかしてじゃなくて、嫌な記憶を思い出させてしまったようで……。」

「ああ、いや、気にしないでくれ。ただ昔を思い出して懐かしんでいただけだから。」

どうやら、嫌な記憶を思い出していると思われた様だ。いや、そうと言われればその通りなんだが。

止まった手を再び動かし、追加していくメニューの案を思い出せる限り書いていく。

#### 紅茶

- ・ダーズリン
- ・アールグレイ
- ・アツサム
- ・コーヒー
- ・ブレンド
- ・アメリカン
- ・モカ
- ・キリマンジャロ
- ・グアテマラ
- ・コロンビア
- 一品
- ・オムライス（半熟）
- ・オムレツ風カルボナーラ



- ・BLTサンド
- ・卵サンド
- ・カプレーゼ風
- デザート
- ・チーズケーキ
- ・ザツハトルテ
- ・イチゴのタルト

うーむ。パスタ系はもう少しあつた気が……、燻製版は個別ルートでの料理だったよな。紅茶とコーヒーのバランス悪いしこっちは後で数を調整しよう。

デザートに関してはもつと種類とかあつたな、季節ごととかクリスマス限定とか……、これに関しては涼音さんが来てからにしておう。

「と、まあ、今の所はこんなもんか。いきなりメニューが多くなって大変だが、少しずつ作れるのを増やしていきたいと考えている。デザートについては、俺はそこまで詳しくは無いから……プロフェツシヨナルが来てから詰めていきたいと思う、が……明月さん、今の話聞いてた？」

視線は紙に向け、一見俺の話の話を聞いている様に見えるが……これは考え事でここに心あらず状態に思われる。

「え？、あつすみません、聞いていませんでした！」

やはり聞いていなかった様だ。

「見間違いじゃなければ、何か思い悩んでいた様に見えたけど、気になる事でもあつた？」

「ああ、いえ、考え事をしていただけですので大丈夫です。」

こちらの質問に考え事をしていただけ、と返してきたが、見る感じ話す気は無いのだろう。

「……了解。」

ここは無理に聞かず、スルーしておこう。話したくなれば向こうから話してくれるはず。

「じゃあ、最後に明日の流れを話して終わりとするか。」

明日の流れをなるべく細かく思い出しながら紙に書いていく。

「ええっと……まず明日高嶺父が来るのだが……午前中の、そんなに早くない時間帯の筈。詳しい時間までは分からないけど、朝食を摂った後で、店に来た時に四季さんが高嶺におはようと言っていたからそこまで遅い時間では無いとは……思う。多分。」

確か朝飯は食べていたはず。高嶺を目覚めのキツスで起こしに行っていたし……。

「んで、店に着くと、メニューの味の確認をするために幾つか頼むのだけど、コーヒー、サンドイッチを各種類とオムライス……？後は食後に紅茶を……これはアールグレイだな。」

サンドイッチはそれぞれで、オムライスも食べていたと思う。食後にアールグレイは覚えている。四季さんが淹れたものだしな。そうば……。

「あ、念のために確認なんだが、胃薬って置いている？結構な量食べてるから……胃が、な？」

「多分ですが、置いてあったと思いますよ？」

歳という事もあり食べ過ぎで胃もたれしてしまい、ミカドさんが胃薬を持っていくシーンもあったな。問題は無さそうだが。

「その後にさつき言った様に色々指摘を食らうから……、それらの改善を皆で話し合おうってのが明日の流れになるはず。」

その後に、インスタ映えやらSNSやら話を広げていくはず。明月さんは付いていけてなかったけど……。そこが可愛いポイントでもあるか。＼それな。そーしやるねっとわーくさーびすな。＼とか最高だと思う。……っと、今は明日の話だな。

「今言えるのはこのくらいか。俺の方は高嶺父が味の確認している間に、この女性の蝶の様子を確認しに行こうと思う。」

「先ほど話していた方ですね、分かりました。でも、無闇に蝶に触らない様にして下さいね？」

明日の事で明月さんから先に釘を刺される。

「そこはちゃんと理解しているつもり。多分集まっている数も多い

と思うからな。」

「この前みたいに興味本位で触っては駄目ですからね？ 幾ら澤田さんでも何かしら影響は受けてしまう可能性があります。」

前科持ちだからか、念を押してくる。

「確かに、自己嫌悪とか感じたくないから極力触らない様にしておく。…………他なら楽なんだけどなあ。」

絶対触らないとは言わない。明日触る予定なので、あくまで極力と言っておく。

でもまあ…………、確かに自己嫌悪は嫌だな。他の恨みや妬みとかの怒りなら楽だけど、自分も陥った事があるのはなるべく共感したくはないな。

嫌な記憶を思い出したため、残っていたコーヒーを一気飲み干して席を立つ。

「それじゃあ、そろそろお暇しようかな。コーヒーごちそうさま、美味しかった。」

「お粗末様です。もう帰られますか？」

「そうするよ、そろそろミカドさんが帰って来てもおかしくないし、お邪魔になるかと思うから。」

それに帰ってからやりたい事もあるしな。早めに寝て色々話しておきたいし。

「あの、こちらの紙は一旦私の方で預かっても良いですか…………？」

話す内容を考えていると、明月さんからプロフィールの紙が欲しいと言われる。

「ん？ ああ、了解。ミカドさんに説明する時にあると分かりやすいし持って行って大丈夫。ただ、他の人には見られない様に気を付けて欲しい。」

もし見られたらいい訳が利かないからな…………本人とかには以ての外。

「はい。重々承知しています。」

「ならおっけい。」

ま、彼女なら大丈夫だろう。多分。最悪、最後の一枚を見られなけ

れば良いだろう。

紙を明月さんに預け、店を出る。すると、向こうからミカドさんがこつちに向かってくるのが見えた。

「澤田達也か、話し合いは終わったのか？」

「おかげさまで、問題なく終わったよ。詳しい話は明月さんから聞いてくれ。」

「……分かった。後で聞いておこう。」

若干表情が硬く見える。発する声も少し沈んでいる様に聞こえるが……あまり良い報告では無かったみたいだな。

「それじゃあ、お疲れさん。また明日。」

この後二人で情報のすり合わせがあるのだろうと考え、早めに切り上げようとし、帰ると告げる。

「はい、お疲れさまでした。ゆっくり休んで下さい。」

「うむ、ご苦労であった。また明日もよろしく頼む。」

二人からの言葉を聞き、部屋へ帰る。シャワーを浴び、夕食を済ませる。今日は高嶺に謎の対抗心を出してオムライスにした、お供は御前の紅茶だ。時間帯はすっかり午後だけど。

「さてと……。」

寝る為にベットに入り、手を翳す。すると、手から1頭の蝶が出てくる。

「明日の為に話し合いたいから、今日はよろしく頼む。」

あの薄暗い世界へ行ける様に事前に話しかけておく。蝶はそれに反応したのか、俺の肩部分に留まり溶ける様に消えていった。多分これで大丈夫だろう。

明日の事で手助けが必要になる可能性を考慮しておいた方が良いでしょう。

夢の中のせいで明日に疲れが出ない様にと瞼を閉じ、早めに寝るのであった。

### 第37話：失態と三人目

「それでミカドさん……話というのは？」

「その前に、そちらの報告を聞いてからでも良いか？」

「私の方からですか？良いですけど……。」

「すまん、少し情報を頭で整理しておきたい。聞きながらこちら  
も話す内容をまとめる。」

「……分かりました、ですが余計に混乱しなければ良いのですが  
……あはは。」

「奴め、今回は一体どんな話を出してきたのだ。」

目の前に居る栞那は、話しづらい顔で苦笑いをしている。

「では、順を追って説明していきます。」

すると、先ほどから持っていた紙をこちらに差し出してきて説明を  
始めた。

「これは全部、あやつが言っていた事で間違い無いのだな？」

「はい、私が説明した内容を同じように澤田さんから聞きましたの  
で間違い無いですね。」

「そうか……、これらが全て真実ならば、奴の奇跡は未来の細かい部  
分まで視ることが可能となるな。しかし……ここまでとは。」

「そうなります。」

栞那から聞かされた内容は明日の出来事と今後、この店でアルバイト  
トとして働く人員の数からその人物の情報。更に吾輩や栞那に関係  
する蝶関連の情報。

「色々とツツコミ所が多いが……。」

下の欄には、「カロリー0理論の提唱者」、褐色で片目を髪で隠  
しているという属性盛り、「意外とかなりのむつつりスケベ」など  
とふざけているとしか思えん事も書かれていた。

なんなのだ？カロリー0理論の提唱者とは？どんな理論だ。それ  
と褐色や片目を隠しているからなんだと言うんだ。ただ髪が長いだ

けであろう。全く。

「しかし、無視できない部分もわざわざ書いておるな。詳細は伏せているようだが。」

「ですねぇ…。今は無視していてくれとは仰っていましたが……。」  
「今考えても仕方のない事だな。それより優先なのはこの蝶の影響を受けていると思われる三枚目の女性だな。」

「そちらは、明日澤田さんが念のために様子を見に行かれるそうです。何もしなくても確か……明後日には高嶺さんが動くみたいですよ。」

「落ち込んでいる程度で済んでいるのならすぐにどうこうなる話でも無いか。」

「楽観視はできませんが今の所は。……私の方からはこのぐらいでしょうか。」

目の前の栞那は持っている紙を見ながら、漏れが無いか確認をしている。

栞那からの話が本当なら……いや、紙に奴自身が書いている以上真実なのは間違い無いのであろう。あれほど事細かく知る事が可能でありながら期待しないでくれとかいつていたのか……確かに本人次第ではあるが、ここまで知っているのなら誘導も容易であろう。それを少なくとも今年まで……。奴自身は万能では無いと言っておったな……謙虚での発言か、何かしらの制限が実際にあるのか。理由を話せないのも、ある意味制限と考えればこれらは何か関係があるのか……？

「それで、ミカドさんからはどの様な話を……？」

「ああ、そうであったな。」

一旦考察を止め、話に戻る。

「今回報告をしてきた内容なのだが、話した通り、高嶺昂晴の事、澤田達也について再度報告になる。」

「前者については、一先ずは様子見と言う結果だ。近くで吾輩やお前が監視しつつ導いていけば恐らく問題は無いだろう。」

「本当ですかっ！良かったあ……。ありがとうございます。」

心の底から安堵をしている。その位心配だったのだろう。

「問題は後者だ。いや、問題というか……吾輩が納得しきれないだけなのだが。」

「澤田さん事ですよね。」

「ああ、取りあえずあつた事を話していく。」

「高嶺昂晴の報告を終え、澤田達也の報告を行った。内容としては、奴が持っている奇跡の事だ、更に言えば、持っている可能性が高いであろう蝶から記憶などを読むことが出来る奇跡の事も報告しておく。吾輩から見ると危険な人物では無いと考えれるが、人間が持つにはあまりにも大きな力だ。奴に対して何かしら行動を取られるのかと。」

「それで……その、お返事は？」

「それがだな……返って来た返答は、”手を出すことは出来ない”だったのだ……。」

「え……？手を出せない？出さないのではなくてですか。」

「ああ。吾輩も聞き直したが、返って来たのは同じく手を出せないだった。」

「それって、一体どういう事なのでしょう？」

「吾輩もそれが謎なのだ。神であるお方が一人間に手出しが出来ないなどありえない。」

一度目の返事の時あまりにも理解が出来ず思わず聞き直してしまった。『奇跡を放置せず回収など何かしらされるのでしょうか？』と。

しかし二度目の返事も変わらず”手を出すことは出来ない。”とだけだった。

更に幾つか似たような質問を投げかけては見たが、返って来た回答は”手を出せる許可が出ていない。” “奴は管轄外に近い存在、扱うには手順を踏む必要がある”などと、どれも澤田達也に対して手出しは出来ないという内容であった。

「結局、どうなったのですか？」

「結果的に、高嶺昂晴と同じく様子見という事になった。奴の奇跡に関しては、気になる所があるという事で自ら調べてみると仰ってい

た。」

「神様自らですかっ?!?」

「普通なら考えられない事だ。だが、調べている間は吾輩の方で見  
ていてくれ。という事だ。」

「ええ……、あの、少し状況が飲み込めないと言いますか……。」

「吾輩も同じだ。正直信じられん。神でさえ手を出すには許可が必  
要など……。」

「高嶺さんと違って何か事情があるのでしようか?」

「かもしれないな。それが何かまでは分からぬが。」

「そうですね……、澤田さん自身まだ話されていない事が多くある  
と思います。勿論私達の事を考えての事なのでしょう。もしかする  
と、澤田さんがどうしても話せない秘密と何か関係があるのかもしれ  
ないですね。」

「奴の秘密と、神が手を下すのに許可が必要な事、か……。」

「今のを聞くと、まるで澤田さんが、神様でさえ手を出すには何かの  
許可を得る必要があるほどの存在……って事になりますね。」

自分で発言しておくながら、呆れた笑いを浮かべている。

「何を馬鹿な……、奴の奇跡を考えれば細心の注意が必要という事  
は当然だ。神一人で決められるものではなく、他の神と話し合うとかで  
は無いか?」

「それも似たようなことだと思うのですが……。でも澤田さんの奇  
跡は大変強力です。正直高嶺さんの様に魂が強い訳でもないのにど  
うして使えるのか、何かしら他の人とは違う存在などと言われても納  
得しそうですね……。」

「実際、この世界の人間では無いからな。そういった意味では唯一  
無二と言えるが……。」

奴が持っている奇跡は前の世界から所持していると聞いている。  
前の世界の神がどの様な存在かは分からぬが、神自ら手を下しはせず  
に放置をしていたのだろうか?今葉那が言った言葉を含めて考える  
とするなら……、奇跡を持つことが容認されていた?

「今のお前の言葉を考慮するのなら、もしかすると……前の世界で



は、奇跡を持つことを容認されていたのかもしれない。」

「それは神様に持つことを許されていた……という事でしょうか？」

「あくまで可能性の話だ。」

「まあ、可能性はあるかもしれませんが……でも、そのせいで澤田さんはあのような過去を持ち、この世界に来てしまう原因になったかもしれないと考えると、良い事とは素直に思えないですね……。」

神より指令や命令の為に力を授かる事は基本的に非常に名誉な事になる。この現世を任されたと考えてもいい。もし、吾輩らと同じ場合ならば……。いや、それなら何故転生する時点で回収されなかったのだ？前の世界での役目があったのなら、死んだ時点でその力は神の元に還るのが普通だ。

「……………」

もしも仮に……回収されていない理由があるのならどうだ。奴がすべき役目が前の世界だけでは無く、吾輩らが居るこの世界でもすべき役目がある？これが当たりと仮定すれば、これまでの辻褄が合う部分が幾つか出てくる。

なぜ奴は、あの日、あの場所で転生をした？吾輩らが死神の仕事で赴いたあの地で。タイミングがあまりにも出来すぎているのではないだろうか？まるで引き寄せられているかの様に……導かれた？

それと、奴が視えると言った未来の範囲は聞いた限りではかなり限定的だった。この店に関わる人物を中心に視えている口ぶりだ。前の世界では様々な物を視て来てたが、この世界では今の所、高嶺昂晴を始めに、栞那や四季ナツメ……そして今日の前にある紙に書かれている人物。全てこの店に関わる人物だ。もしかすると話せない秘密はこのことが関係している……？

いやさて、奴は確か最初この店で話した時、あの森に何故居たのか分からないと言っていたはず、この言葉が本当ならこの世界に転生した事自体は奴にとって想定外か？そうなる则秘密とは無関係？しかし、ここまで都合が良すぎるのは何かしらの関係があるのは間違い無いはず。しかし、それが何かまでは……。

「あ、あのー、ミカドさん？」

「ああ、すまん、考え込んでいた。」

「結論は出ましたか？」

「いや、残念だが、謎が深まったただけだ。」

「結局、いつも通りという事ですね……。」

「だな、一歩答えに近づいたかと思えば、更に離れている事に気づいたような感覚だ。」

「澤田さんから言うまで聞かないと言った手前、無理に聞き出したくは無いですし……。」

「現状我らに出来るのは、変化を見逃さない様に見ておくことぐらいであろう。」

「することは変わらないという事ですね。分かりました。」

「そろそろ、時間も遅いから寝るとしよう。奴の事を話し合っていたら堂々巡りになるだけだしな。」

「そうですねえ、もう寝ましようか。」

――翌日。

「ねえ、澤田君、本当に高嶺君のお父さんが来るの？」

「まあまあ、期待して待っててくれ午前中には来るはずだ。」

「いや、朝来て唐突に言われたから戸惑っているんだけど？」

今日は朝から早めに店に行き、明月さんと高嶺父に出すメニューの下ごしらえ……というか準備をしていた。暫くすると四季さんも店に来て挨拶を交わしたのち、高嶺父が今日店に来ることを伝えた。最初は驚きながら疑っていたが、時間が経つにつれて少し緊張感が見られる。明月さんが料理の準備をしている事からも信憑性が出てきたのだろう。

「ただ、注文された料理を出すだけだから大丈夫。細かいのは明月さんをお願いしてるからさ。」

「その間、澤田君はどこかへ出かけると?」

「それに関してはずまん、早めに済ましておきたい用事なんだ。終わり次第さつさと帰ってくるつもりではある。」

「いやまあ、外せないのなら仕方ないんだけどね。その為に明月さんに色々指示してくれてたわけだし……。」

「ただ、〃任せた!〃と言つて面倒ごとを避けた様に聞こえたから……、小言の1つも言いたくなる。」

少し困つたような、拗ねたような顔で文句を言ってくる。恐らく心細いとかもあるかもしれないが……。

「最初は言わずにいいようかと思つたんだけど、それは流石に悪い事した気がしたから気を遣つたつもりだったんだが……。でも最悪俺の方は後でも大丈夫だし居た方が良いのか?」

「うーん、そこまで必要は無いかな?やる事は決まっているし、わざわざ用事をずらしてもらう程でもないかな。」

あ、必要なしですか。それは失礼。まあいらぬ程度には明月さんには話しているからなつ。そりゃいらぬいな!ありがとうござい  
ます!

「あ、はい。それならそろそろ行ってくる。」

「もう行く?」

「さつさと行つて、さつさと帰って来るよ。」

「分かった、気を付けて。」

「まかせ。」

「明月さん、俺はそろそろ行つてこようかと思うから、後は宜しく頼む。」

「りようかいです。お気をつけてくださいね?」

厨房にいる明月さんに一言掛けて店を出る。

まだ九月の終わりだが何となく寒くなってきたような気がする。

「給料入ったら、新しく服買わないとな……。」

今度は無駄にしない様に気を付けないといけないが、ミカドさんから貰つたお金も何かしらの恩として返しておきたい。要らないとは言つていたので現金としてではなく現物とかを考えておこう。

今後の事を考えつつ目的地に向かってしていると、前方から顔見知りが見えてくるのが見える。

「あれ、澤田さん？」

近づくと、高嶺とその父と一緒に歩いていた。

「奇遇だな、こんな場所で。」

奇遇とか言ったが、お互い目的地が入れ替わるだけなので道中に出会うのは普通である。ただ時間帯が読めなかっただけで。

「昂晴、知り合いか？」

「初めまして、澤田達也と申します。高嶺さんが働くことになった喫茶店で、共に働かせてもらっている者です。」

「なるほど、わざわざご丁寧に。昂晴の父、高嶺和史です。」

お互いに挨拶を交わす。

「お店には既に他の人が居るので、今から来店されても大丈夫ですよ？大したおもてなしは出来ませんが歓迎します。」

店の方へ流れる様に手の平を向け、催促する。

「澤田さんはこれからどちらに？」

「早めに片づけておきたい用事が出来たからちよつとな。直ぐに店には戻れると思う。一応、明月さんと四季さんから許可は貰っているから。」

「なるほど。」

外出の理由に納得し、そのまま父親を連れて再び店の方へと向かって行く。その姿を、少しの間見送ってからマンション方面へ歩き出す。

「店の方は何とかなるだろう。てか、本来なら居ないしな。」

居た事で変な事が起きないかの方が逆に不安だ。

目的の建物に着き、辺りを見る。一階辺りには蝶は見えないが、見上げるとある階層の一角から蝶が飛んでいるのが見える。目視で確認できるだけで二頭ほど。

「うわあ、居るなあれは。外であれば中はどうな感じなんだ。」

嫌な気分になりながらも目的の階まで上がる。廊下に出ると、丁度玄関から蝶が出ているのが確認できた。

「……分かりやすくてありがたい事だな。」

蝶が出て来た部屋の前まで来る。下の道路から確認した場所と一致する。間違いなくこの部屋からだ。つまりこの扉の先には汐山涼音さんが居るといふ事になる。

玄関ドア横の壁にもたれ掛かる。

取りあえずは……中の状況だけでも確認しておくか。

「嫌な役目かもしれないが、頼んだ。」

胸の高さ位で手の平を開くと一頭の蝶が出てくる。毎度おなじみ夢の中で出会うあの少女？の蝶だ。前は分からなかったが、自らの意思で外に出れるらしい。初めて俺が寝た夜とかには実際に出ていたとか何とか、寝ていたから知らないが。

目の前の蝶はひらりと俺の前で回り、扉の奥へと消えていった。暫くすると、同じように扉から出てくる。

「行けたか？」

無事終わったかの確認のすると、先ほどの様にひらりと回り肩へと止まる。肩を見ると数度羽を動かしたのち、溶けるように消えていった。

「現実では意思疎通は出来ないが……戻って来たのならまだ問題は無かったという事で良いんだろう。」

何かしら問題があったのなら、違うアクションを取ってきたはずだ。危機的状況なら緊急事態として中に無理やり入る事も考えていたが、杞憂で済みそうだ。

「んじゃ、早々に去るか。」

このままだと不審者と疑われてしまう可能性が出てくるため、なるべく人目に付かない様に店へと戻る。店が見えて来た時、丁度中から高嶺の父親が出て来た。どうやら間に合わなかったらしい。

「もうお帰りですか？」

「君は、先ほどあった昴晴の……。」

「はい、澤田達也です。どうでしたか？お店の方は。」

「料理は美味しかったよ。特に紅茶とオムライスはまた食べたいと思う位だった。」

確かどちらも70点だったな。コーヒーは50点だったわけ？他はそれ以下のはず。

「ありがとうございます。けど、あくまで料理は、ですよ？」

「その口ぶりだと、君は気づいていたのか？」

「大体はですかね。今のお店の雰囲気では人を集めるのは難しいかもしれない……ぐらいですが。同じ意見だったみたいですね。」

「さっき店の中の子らには話したから、詳しくは中で聞いて貰えると助かるのだが……。」

「いえいえ、わざわざもう一度言いづらい事を言う必要はありませんから、大丈夫です。」

「多分、中で丁度話し合っていると思う。」

「分かりました。本日は此方の頼みを聞き入れてもらいありがとうございます。ご丁寧に。」

「いえ、ただ息子の頼みを聞いてやった、親としては当然の事ですよ。」

「また、ご来店してください。今度は、見違えるように変わったこのお店と……成長した息子さんのお姿をお見せしましょう。」

自信たっぷりな台詞に驚いた様な表情でこちらを見る。

「ほほう……、それはまた日本に居る間に楽しみが増えた。期待してしまってもいいのかい？」

「必ず上手くいかせてみせると、お約束しましょう。」

宣戦布告の様な言葉と、大胆不敵な笑みで返事をする。此方の顔を確認したのか向こうも楽しむような顔をしていた。

「それじゃあ、また来ることにするよ。……ますます楽しみになってきたなあ……。」

後ろに振り返り、帰ろうとする高嶺父からワクワクしている様な言葉が漏れた。その姿を見送りお店へ入ろうと扉を掴む。

楽しみにしていてください。この店の生まれかわった姿と、見違えた息子の姿を。

貴方たち二人の親子関係はここから再び……始まるのだから。その手助けをしていく事を決意し、店の扉を開ける。

——さあ、まずはここから。ようやく店が動き始めるのだ。

「それな。そーしやるねつとわーくサービスな。なるほどなあ。」  
そんな決意を共に中に入ると、第一声に聞こえたのが明月さんの、明らかに知らない事を言っている様にしか聞こえない発言だった。やっぱり……駄目かもしれない。

その後、メニューについての話し合いと、今後は人も増やさないといけないという方向で話はまとまった。どちらとも昨夜明月さんには話していたことだったのでさりげなく誘導する程度で済んだ。

「そろそろ日も暮れてきたことだし、今日はお開きにしないか？」  
話し合いも一段落したので皆に提案する。

「あー、もうこんな時間か……そうね、そろそろ帰りましょうか。」  
「明日も引き続きにはなるけど、問題は人員だな。皆は働いてくれる。知らない合いとか居る？」

取りあえず見渡ししながら聞いてみるが……、ていうか聞く人選おかしいかもしれないこれ。

親しい友人が居ない四季さん、死神という立場上作れるはずもなく点々としてきた明月さん、高嶺は大学に男連中が居たからワンチャンあるかも？ぐらいだ。

「あー、それについてなんだが、もしかしたら心当たりが一人居る。」  
女性陣二人から返事が無い事に、若干気まずそうな高嶺が手を挙げ

る。  
「俺の幼馴染に一人もしかしたら……くらいの淡い期待レベルなんだが。」

「高嶺君って幼馴染いるんだ……。」  
「父親同士が昔からの友人らしくてな、小さい頃からよくお世話になっっている。」

「じゃあ、一応声とか掛けてみる？無理にとは言わないからさ。」

「元々、料理に慣れている人とかの話題の時に思い浮かんでいたからこの後会うつもりだった。」

「好都合だな。すまないけどよろしく頼みます。」

「期待はしないで欲しいけど、分かった。」

「それじゃあ早く解散としますか。お疲れさん。」

一足先に帰る高嶺を見送る。

「それじゃあ、わたしは着替えてくるから。」

そうやって四季さんは奥へと消えていく。

「澤田さん、今日確認しに行った方はどうでしたか？」

人が居なくなったのを見計らい声を掛けてくる。気になってはいたのだろう。

「一応部屋の位置まで確認してきた。蝶が幾つか漏れ出る程度ではあった。本人はまだ問題は無いと思う、少なくとも生きているのは間違いない。」

「そうですね……。それなら安心しました。」

「明日、高嶺が部屋を訪れてから本人は家族が居る実家に一時帰る事になる。その後に回収に向かって欲しい。」

「明日ですね、分かりました。」

「タイミング的には、明日夕方辺りに渡した紙の二枚目の子がこの店に来る。」

「え？明日ですか？」

「そう、今日作ったこのアルバイト募集の紙を見て、明日訪ねてくる予定だ。」

テーブルに置かれたアルバイト募集の紙を持ち上げる。

「対応は三人でしておくからその間に行つてきて欲しい。」

「ええっと、取りあえずは明日ですね？分かりましたっ。」

「いきなりで申し訳ない、詳しくはまた明日話させてほしい。少なくとも午前中は二人は大学だから時間は作れる。」

「あ、そうなのですね。それなら大丈夫そうです。」

「後は……」

他に重要な事はあったかと、考えていると奥の部屋から足音が聞こ



えてくる。

「あれ、澤田君はまだ帰ってなかったの？」

「ポスターを少しチェックしていた。」

手に持ったポスターをひらひらと見せる。

「どこがおかしい所とかあった？」

「いや、完璧。これなら明日には速攻で人が集まる事間違いない。よしだな。うんうん。」

「何を言ってるやら……、そんなに早く来るわけないでしょ？でも、問題無いのならよかった。」

「後は俺が掲示しておくから、先に帰っても良いぞ？もう暗くなつて来たしな。」

「そう？それじゃお願いしようかな。」

「また明日、気を付けてな。」

「お疲れさまでした。また明日です。」

「二人もおつかれさま。あまり遅くならない様に。」

帰りの挨拶を告げ、店を出ていく。

「それじゃあ、俺もさっさと店を閉めて帰ろうかな。」

「あれ、お帰りになるのですか？」

「ポスターを貼ったら、帰るよ。」

「そうなのですが、てつきりこれから明日の事を話されるのかとばかり……。」

「そうしたいのだけど、店が閉まっていないと色々不都合だから。」

「あ、もしかして先ほど言っていた子ですか？」

「そうそれ、明日来ることになっているから店を開けているとまずいかなーっと。」

「分かりました。それなら明日にしておきましょうか。」

二人してせつせと戸締りをし終える。

普通に考えて四季さんにもしてもらえばよかったか？いやでもこの後の行動を考えると、一緒に店から帰らないと変だしなあ。

「それじゃあ、また明日。」

「はい、また明日。」

鍵を閉め、店を出る。入口に募集の紙を貼り、帰宅……はせずに張り紙が見える店の角で気配を殺し、張り込みもどきを行う。

明日のこの店に来るためには、今日、アルバイト募集の紙を見てもらう必要がある。そのイベントが無ければ、明日来ることは無い。少なくともそれを確認しておいた方が安心できる。俺の心が。

明月さんにあそこまで話して、いざ明日になっても来ませんでした、では情けないというか物語が崩れてしまうからな。端から見れば不審者だが、気にしない。

時間が経ち、少し飽き始めた時、店前へ人の気配がしてきた。声までは聞こえないが、何かぼそぼそと言っている様な音は聞き取れる。ようやく目的の人物が来たのかと頭を上げると、目の前を青い蝶が横切る。

蝶か……、こんな時に出て来るとはな。

タイミング悪く蝶が出てきたことに運が無いなと思いつつも回収しようと近寄り、素早く手を振る。触れた蝶は消えるように霧散していった。

後で明月さんに渡さないとな。と考えて横を見ると、そこには驚愕の顔をした人物と目が合う。

やらかしてしまった。と、その瞬間気づいたがもう手遅れだった。そのリアクションをするからに、回収をばっちり見られてしまったている。

普通の人なら虫か何かを追い払った程度で済むが、目の前に居る少女は違う。はつきりとは無いがその姿を捉えることが出来る。

「……………いまの……」

驚きの声が正面の少女から零れ出る。

明月さんに後で謝らないといけないな……。自分が想定外の出会いをしてしまったのだから。

高校生の服であろう。暗くてはつきりとは見えないが薄い紫色であろうショートヘア、右側の髪はヘアピンで上げられており、その逆は目が隠れるほど前に下ろしている。身長的には多分明月さんや四季さんより少し低く見える。

驚いたまま固まっている少女、失態により予期せぬ出会いを果たしてしまった。

原作四人目のヒロイン——火打谷愛衣がそこに立っていた。

### 第38話：名誉挽回の試み

やらかしてしまつたあああああああ！

と今すぐにも泣き叫びたいところだが、まずはこの場面无事に乗り越えなければならぬ。

前に居る彼女は未だに驚いたまままでこちらを見ている。あまりにも突然の事で脳の処理が追いついていない可能性がある。それならまだ混乱している内に畳みかければ乗り切れるか？

前提として蝶が見えていなかったとして話さなければならぬ。そうなるか……夜だし虫が飛んでいた……で誤魔化しきれぬのか？ さつき自分で否定してしまつた事だぞ？

……いや、さてよ。目の前の彼女は蝶……本人にとってはもやもやと言つていたな。それが見えることを隠しているし隠したいはずだ。普通の人には見えないものだからな。此方は虫が飛んでいたのだからと云つたら向こうもそれで納得するのでは？こちらがそう言っているのに強引に違ふとは言えないだろう。おかしな人だと思われてしまうのを恐れて問い詰めようとはしないはず。案外気弱だしな。それに：割とアホな子だ。

あれ？何とかなりそうな気がしてきた。うん、行けると信じて演技しなければ。不審に思われることが無いように……。

「ええと……、こんばんは？どうかされたのですか、もしかして驚かせてしまいましたか？」

「あ、いえつ、その……今、何をしたのかと思つて……。」

「ああ、すみません、虫が飛んでいて……、少し邪魔だったので手で思いつきり払つてしまいました。そのせいで驚かせてしまったのなら申し訳ない。」

なるべく腰は低めに、申し訳なさそうに謝罪を入れる。

「ああつ、いえつ、大丈夫です。……確かに驚いてしまいましたけど。」

こちらが謝ると、両手を出し、首をぶんぶんと振つて否定してくる。

「驚いてしまわれても仕方ないです。こんな薄暗い夜道ですし……。」

「こつちこそ変な目を向けてなんか……すいませんでした。」

こちらに謝りながら、背を向けて帰っていく。彼女の姿が完全に見えなくなったのを確認してから盛大にため息が出る。

「はあああ……緊張した……てか、これ大丈夫なんだろうか。変な第一印象を与えてしまった気が……。」

どのみち、明日のは顔を合わせる事にはなるが、不審な目で見られたのは間違いない。後で何とか修正出来れば良いんだけど。

「………帰ろ。」

明月さんには明日の朝に報告しよう。いや、報告するのが怖いとかでは無くて、もう夜も遅いし、夜更かしは女性の天敵だしな。そういう事にしよう。

誰に対してか分からない言い訳をして、家に帰った。

「という事なんだ、申し訳ない。」

次の日の午前中、店に行き出迎えてくれた明月さんに昨夜の出来事を早速報告した。

「なるほど、仰る事は分かりました。」

俺の報告の最中も口を挟まず、黙々と聞いていたのだが終わった後も特に文句などは出てこなかった。

「そもそも私にはどう違ったなど分かりようがありませんので……、昨日澤田さんが先に出会ってしまった事でどの様な影響が出てくるのですか？」

「いや、正直それは分からない。問題無いようには努力するが、間違はなく第一印象は変な目で見られたとは思う。」

「不審には思われたかもしれないのは確かですが……。」  
俺の言葉にあまり腑に落ちないような表情をしている。

「第一印象って結構大事だと思うんだよ、それって結構後々まで引きずる場合多いからさ。」

もし今日店に来た時に俺が居たせいで働くのやっぱり止めますとか言われたりしたら……死にたくなるなこれは。

「まあ、確かにそうですね……、私も澤田さんの第一印象は私のマントを巻いた全裸の人……いえ、葉っぱ一枚が先でしたね?にひ。」

「それについては勘弁して欲しい、全裸よりはましだと考えた結果だったんだ。」

「でも、それは最初だけですよ?今はそのような印象は持っていないし、私もミカドさんも助けられていますから、感謝しています。ナツメさんはどうか分かりませんが……。」

「四季さんはどうだろうな……、時々疑いの目を向けてくる時があるんだけどな。これは自業自得か。」

「あはは……それは否定できませんね。……つまりですね、私やミカドさんが澤田さんと知り合ってからまだ一月程度です、この短い期間でも印象というのは大きく変わります。先ほどの子も一緒に働けばきつと悪い印象は払拭できます。澤田さんをこの一ヶ月だけです、見て来た私が保証しましょう。」

目の前の明月さんは、諭すように、それでかつ自信ありげに言い切る。

なるほどなあ……。高嶺が感じたのはこんな感覚だったのだろうか?若干違うかもしれないが。こういう一面を見るとやはり長年生きていた貫禄というのがあるのだと実感する。……昨日のSNSを知ったかぶりしていた人と同一人物とは思えないな。いや、そのギャップが最高なんだが。

「あー、その、まさか慰めの言葉を貰えるとは思わなかったから……、ありがとうで良いのか?」

「どういたしまして。もしかして怒られるとか思っていたんですか?」

「小言の一つ位は覚悟していたんだが。」

「まさか、そのくらいで怒ったりしませんよ?わざとではありませんし。」

それはわざとしたわけではないが……、寛容な人で助かる。

「それに、お礼はきちんと言った方が良いでしょう？感謝をしつかりと相手に伝えることは大事ですから。」

「いや、なんていうか、あんまり言われた事が無かった類の言葉だったから反応に困ってしまった。」

「え？感謝を示しただけなのですが……、もしかして、あまりされたこと無かったのですか？」

「ああ、いや、感謝くらい流石にされたことはある。では無くても、明月さんの言い方に……なんていうか、包容力というか、安心させるような気持ちが籠っていた様に感じたから。」

「……………澤田さんはそれが初めてでしたので、反応に困ったと？」

「あー、初めてというのは違うが……………いや、実際に目の当たりにしたのはこれが初めてか？」

画面の向こう越しでは幾らでも見たが、自分に向けられるという点では初めてである事は間違い無いな。

「っ、……………そうですか。」

なんだが、俺の言葉にどう返したら良いのか迷っている様に見える。どうやら共感を得れなかったご様子。

「俺の話は置いといて、本題にもどろうか。」

流石に話題が続かなくなって来たので話を切り替える。

「と言っても明月さんにしてもらいたい事は蝶の回収くらいなんだけどな。」

「アルバイト希望の方が来られたのと入れ違いでしたね。」

「そうそう、渡した紙の二枚目の子だな。その次の日には高嶺が幼馴染の子を連れてくるはずだ。」

「こんなにも早く希望者が集まるのですね。」

「まあな、だからミカドさんに色々準備をお願いしておきたかった。急に増えたら大変だと思う。」

ゲームの展開上ヒロインが序盤で集まるのは仕方ない。だからこそこの速さで希望者が出てくるのだし……………。

「やる事は沢山あるがなるべく混乱しない様の一つ一つ片付けられるようにしていくからすまんが協力して欲しい。」

先に先にと片付けておくのなら、四季さんにユニフォームの件を話すのもしておいた方が良さし、マニュアル作成とかもしておかないといけない。

「任せて下さい。ですので、一人で無理はしない様にして下さいね。」

無理はしなくても物語は進むからなあ……。意味があるか分からないが、少しでも楽に出来るように頑張るか。

明月さんと話した後、夕方まで時間があつたので奥の部屋を借りて接客などのマニュアルを作り始めた。

「今時ネットで形作れるのだから楽なもんだな……。」

基本的な接客の仕方や、来店時から店を出ていくまでの対応、緊急時の対応など、他に足り無さそうなのはネットで漁り追加していく。

「大体だが……。こんなもんか？」

形から整えるのは重要。上を目指すなら、他にも覚えたり意識した方が良い点は幾らでもあるが慣れてからでも大丈夫だろう。まずは一定のレベルまで育つのと、全員が統一出来る事、その為のマニュアル。

「進捗はどうだ？」

扉が開く音に振り返ると、ミカドさんが入ってくる。

「丁度良かった、今しがた形は作った。まだ変更や修正は必要かどうか取りあえずはこんなもんかと思う。」

出来上がった紙をミカドさんに渡す。

「思ったよりしつかりと出来上がっているのだな……。これはお前が？」

「足りてなかった部分はネットから拾った。」

「私からはいう事は特に無いな。後で他の者たちにも聞いておくといい。」

「了解、あと、開くに当たって仕入れの発注やら納品、保健所とかやる事沢山あるが……。そこらへんは任せても大丈夫？と言っても特に出来る事ないけど。」



「心配せずともその辺りは任せておけ、吾輩が出た方がスムーズに事が進められるからな。」

「ですよー、大学生の四季さんとかが出ると何かと不安に思われそう。」

「分かった。そのかわり表の部分を頑張らせてもらう。」

「うむ、任せた。高嶺昂晴にも、目先の問題に集中出来るようにサポートしてやってくれ。」

「高嶺に何かあったのか？」

「確か今日はマンションで、涼音さんの状況を確認して……、お店に戻ってきたはず。」

「知っているかとは思いますが、奴と同じマンションに住んでいる者の事です。」

「あー、自分が引き寄せて影響を受けてしまったのでは？と気にしてしまった件か。」

「吾輩の方から否定はしておいたがな。気にして身動きが取れなくなってしまうっては元も子もない。」

「逆にその蝶に影響受ける可能性があるから気を付けないといけないのにな……。」

「そうだな、それは高嶺昂晴だけに限らずだがな。」

「ミカドさんから釘を刺すような視線を向けられる。」

「ちゃんと分かっている。明月さんにも言われたから気を付けている。」

「なら良いが……。」

「というか、俺が奥で作業している間に表では着々とイベントが進んでいたのか……、いや立ち会う必要とか皆無なんだが……。」

「つてなると……後は四季さんが来てからか。」

「ん？何がだ。」

「今日新しくアルバイト希望の子が来る話。」

「ああ、栞那から聞いている。確か、火打谷愛衣だったか？」

「そう、その子。特に問題は無いから採用したいと考えているんだけど。」

「貴様がそういうなら特に無い、それにウエイトレスの事は四季ナツメらに任せた方がやりやすいだろう。」

「ありがとう。じゃあそれまで適当に作業しておく。」

「パソコンを使うか？私も作っておきたいのがあるので使いたいのだが。」

「いや、大丈夫。調べ物が主だし。」

ミカドさんに席を譲り、お互いしたい事をしていく。暫くの間部屋にはキーボードの音が響く。

「あ、閣下に澤田君。おはよう。」

扉の開く音と共に今度は四季さんが入ってくる。

「ん？ああ、おはよう。」

「四季ナツメか、おはよう。」

挨拶を交わし、四季さんが着替えるので席を立ち部屋を出て、フロアに向かう。ミカドさんは用事があるという事でそのまま出かけて行った。表には高嶺と明月さんの二人が居た。どうやら四季さんが着替えて来るのを待っているらしい。

「そういえば、昨日話していた幼馴染の子はどうなった？」

「あの後会いに行つて色々相談してみたんだが、パンケーキなどのお菓子作りは難しそうだ。けどアルバイトに関しては働いてみたいつて言っていた。」

「そうなのか、でもバイト希望してくれるのは物凄く助かるな。相手が良ければ面接とかしてみるのも手かもな。」

「今度聞いてみる。それと、本格的な人探していて友人の姉に条件が合う人が居ただけど……。」

駄目だったのが少し言いづらそうなのでこちらから切り出す。

「仕事を辞めた関係で落ち込んでそれどころじゃないから駄目だったらしいな、ミカドさんからさつき聞いた。」

「ああ…、結構落ち込んで、とても話せる感じに見えなかったからまだ言つてすらいない。」

「正解だと思うぞ、仕事辞めて病んでるのにその原因の話とか誰だって嫌だしな。今は様子見て少して回復してもらった方が良い。」

俺でも同じ立場なら聞きたくもない話だし。

「だから取りあえずは昨日の続きを話した方が良いかと思う。」

「それで四季さんを待っている感じか、了解。」

「ごめん、お待たせ。」

待とうと思つたが、もう戻つて来た。思つたより簡単に着れる物なんだろうか？前側は確かボタン式だったか。

「いや、全然待つて無い。むしろ早くてビックリしたぐらいだ。」

「待たせないように急いだから。」

急いで戻つて来た四季さんと入れ替わるように、また奥の部屋に戻ろうとする。

「あれ、澤田さんは一緒にされないのでですか？」

「すまん、奥でしておきたい事があるから少しの間離れる。何かあつたら呼んでほしい。」

そそくさと奥へと引つ込む。このまま参加していたら昨日会つた例の少女が来てしまうからな。俺が居る事で変な印象を持たれたくないのだよ……。顔合わせるのは面接終わった後にしたい。それから逃げられないからな。

表では今から店をどう変えるかの話し合いが行われるはず。メニュー数を増やして選択の楽しみやそれを共有できる楽しさで客を呼ぶとか何とか。ぼっちがどうかとも話していたなそういえば。基本的に1人で行動する四季さん、死神として人付き合いが無かつた明月さん、高嶺もボツチとか言っていたが……。あれ？普通に男友達居たよな？飲みにとか行っていたし、講義の席でコントみたいなノリも繰り広げていたし……。ぼっちって言うの嘘なのではないのか？でも自分ではぼっちと認識していた訳で、実は友達では……。いやこれ以上は考えるのは止めておこう。

因みに言えば俺もぼっちに入るであろうか？この世界では知り合いはおろか血縁関係すら居ない。もはやぼっちではなくて天涯孤獨って言うべきか……。

くだらない事を考えながらパソコンを開く。作ったマニュアルの他にも在庫の管理などの必要になる可能性がある。確か帳簿など

の金銭類はミカドさんがやってたな……。開店に向けての広告はチラシと現物配布してたからまだ要らないな。ホームページとかも作らないとな。SNSもやってたよな……。? オープニングムービーで流れていたし……。あと、この店って専用の固定電話ってあったか? クリスマスに予約注文してたし契約はしていたはず、そこら辺もまとめて相談しておくか。

必要そうな件をメモに書いていく。相談が必要そうな事は誰に対して聞くかで一応分けておく。後で見やすいからな。

他には……。まだ先だけど店を改装する時に設置した家電類とかだな。何があったか原作で書かれていたっけ? なんか最後にシーリングファンを付けていたのは覚えてるが……。思い出せ、あの二つの背景のビフォーアフターを……。

「まずは……。奥にソファがあったよな? それから客席を区切るやつ……。」

名前はなんていうか知らないが席4つで一区切りみたいな感覚だった。壁の絵は高嶺父の譲りもんだとして……。分かるのはこんなもんか。後は席一杯の客のイメージしか思い浮かばんな。んで、奥の席には前作のヒロイン二人組が居たな……。あくまで背景としてなのか実はこの世界でもお目にかかれるのか。でもこの世界では前作にあったアストラル能力なんて摩訶不思議は見た事も聞いた事も無い。いや死神とかケツト・シー、神様とかいう存在も充分に摩訶不思議か。

本題から脱線し始めた辺りで扉が開く。

「澤田君、ちよつと来てほしいのだけど……。つて、今大丈夫?」

「ん? 全然大丈夫だが、どうした? まさかバイト募集の子でも来たのか?」

「そのまさか。少し前に来て軽く面接を終えた所。私や高嶺君は雇っても良いかなと思ってているけど一応聞いておこうかなって。」

そのまさかであった。もう来たのか、という事は明月さんは蝶の回収に向かったという事だな。『特技:ピッキング』が火を噴くな。通報しました。

「じゃあ採用という事で問題無しだな。」

「え、いいの？特にそつちの意見とかも聞かなくて。」

「俺は端から採用で行く気だったからな。」

「取り敢えず人数が欲しかったとか？」

「いやいや同じ職場で働く以上人柄を重視しますとも。その方が働きやすいだろう？」

「なら尚更会わないといけないじゃない。それとも私や高嶺君の判断に任せた？」

「……火打谷愛衣。」

「……え？」

「今アルバイト募集に来ている子の名前。合ってるか？」

「え、あ、うん。合ってるけど……もしかして知り合いの子？」

「いやいやまさか。俺みたいな人間にあんな明るくて笑顔が眩しすぎる子が知り合いに居る訳ないだろう？そもそもこの世界に生まれてからの知り合いは今の所このお店に居るメンバーぐらいだしな。」

後は汐山弟と……あのベンチでアイスをぶちまけて泣いていたから手品を見せた少女ぐらいだろう。

「いやそれ、自分で言うのはどうかと思うのだけど……。」  
事実だしな。

「昨日表に張った募集の紙を見て来た。アルバイト経験は無いけど学生だから休日も都合付くし、やる気もある。お店のムードメーカーになりそうだし雇わない理由が無いな。」

「いや、なんでそれを知っているの？盗み聞き？……ちよつとキモイ。」

キモイ頂きました！ありがとうございます。励みになります。

「してないしてない。ずっとここで座ってたぞ？」

「じゃあなんで知っているの？何、前に言っていた占いの話？」

「そう、四季さんの信頼を勝ち取るために言ってみただが……？」

「今それが出て来るんだ……。それで？今度はどんな未来が見えるの？自称占い師さん。」

「そうだな……。さつき言っていた火打谷さんが来てから一通りの

会話なら何となく？」

「へえ……。じゃあ私が今から聞く事に答えてもらえる？」

「分かる範囲なら。」

少し楽しそうな顔を見せた四季さんの期待に添えられるようにプレイ時の記憶を総動員する。言っておくが……。負ける気はしない。

「じゃあ早速、面接に来た火打谷さんは私を見て第一声になんて言ったでしょうか？」

「確か、綺麗なメイドって感動していたはず。どう？」

店に入るや否や本物みたいなメイドが出迎えたこと感動を覚えていたはず。

「え？あ、当たっている……。正解……。」

こちらの答えに驚いている様子。これはあれか？仮に火打谷さんとの会話を盗み聞きしたとしても、途中から聞いているのだと踏んで一番最初のやり取りは聞けてないとか考えての質問だったのか？

「それなら良かった。」

「えっと、次。えーと……。」

第一問目から目論見が外れたからか、慌てて取り繕っている。多分頭の中混乱状態かもしれない……。それかそもそも二問目を想定してなかったか。

「えっと、そうね……。さっき、澤田君は火打谷さんの事を学生って言うていたけど、どこの学校までか答えられる？」

質問が思いついたのか、挑発するような顔でこちらに聞いてくる。その顔最高です。

ていうかこれ、引つ掛けだろ。確か学校じゃなくて学院だったはず。咄嗟に思いついたかのように見せかけてエグイ質問を出してくる。

「確か……。糸を巻くの巻に、機械の機で、まきはた巻機まきはた女学院のはず。2年だったな。」

わざわざ学院を強めに協調させる。学年は墨染希と同じ年だったな。クラスと出席番号まで言っていた気がするが……。A組だった

ような……。

「ちつ……、引つ掛からなかったか。」

「中々間違えそうな質問を直ぐに思いつく辺り……、過去に間違った経験が？」

「……………」

俺の質問に恥ずかしそうに目を逸らす。適当に言っただつてもりだったが、どうやら的中だった様子で。

「いや…適当に言っただが、なんかごめん。」

「…………うるさい。じゃあつ、これは答えられる？」

羞恥心を払うように睨むような表情で次の質問を出す。

「火打谷さんの得意料理。」

「得意料理？」

「そう、高嶺君が聞いたんだけど、火打谷さんは何が得意と言ったか。」

え、彼女得意料理とかあったのか!? どう見ても出来ない系じゃん。料理実習でも危ないからと包丁すら握らせてもらえなかったじゃん。……カップ麺とか? いや料理じゃねえな。あったか? 燻製の動画見ている記憶しかねえわ。

「どう? 流石に答えられない?」

「いや、答えられないと言われればそうなんだが……、得意料理だよな? 火打谷さん、料理苦手とか言っただけか? キッチンは駄目だからフロア担当とかになると思うんだけど……? まあ、紅茶やコーヒーの知識も無いから一から教える必要があるけどなあ……。うーむ。」

そのためにマニュアルを作らないとなあ……。これが終わったら四季さんにも確認してもらって手直しが必要かどうか確かめないと。

「すまん、四季さ……」

マニュアル確認を聞く前に、答えが分からないと回答するために顔を上げると、驚いた様な、それで若干悔しそうな顔が目に入る。

「あ、あの? 結局分からなかったのだが……? 何が得意料理だった?」

「あ…、いや、それが…無いの。」

「え、無い？」

「うん。彼女、料理苦手だから得意料理とか無い。だから…澤田君の正解。」

うわあ…、更に引つ掛けをしてきたのかこの人は。道理で分からないわけだよ全く。キャラ的にあれで料理得意ですか言われた日には…それはそれで最高ですがっ！ご飯を作ってくれる後輩キャラ！…いや、幼馴染と被るから駄目だな。ポジションの喰い合いは良くない。ただでさえ褐色肌に水泳の水着跡あり、ムードメーカー的明るい後輩で、可愛い好きからのむつつりスケベで若干アホな子とかいう盛りすぎでは？と一度は考える程性癖特盛セツトなのに…料理上手まで獲得とか戦争が起きるな。

「なるほど、一度引つ掛けをすれば二回目の警戒心は少なくなつたところにわざとか…狡猾だなあ。目論見が外れた訳だが。」

「……………」

俺の言葉に恥ずかしそうにどんどん顔を伏せていく。なんか変にハマってしまいそうだな、これ。

「まあ、試してくれと言つたのは俺だしな。非難する気は無いから安心してくれ。煽りはするけどな。」

「うっわ…、性格わる。」

俺の揶揄う様な声に反応して顔を上げ、ウザそうな表情をしているがまだ顔を赤いままで。ごちそうさまです。

今すぐスマホで写真を撮りたいなど考えていると、再び部屋のドアが開く。

「随分遅いけど、何かあった…ってどうかしたのか？二人して向き合って。」

一向に帰って来ない四季さんを不思議に思つたのか、高嶺が確認しに来たことよって今回のゲームは幕を閉じた。



### 第39話：眩しさ

「初めまして、澤田達也です。」

「は、初めまして、火打谷愛衣って言います。」

その後、高嶺に連れられてフロアまで出てきた。席には火打谷さんが既に座っており、俺の事を見るや驚いた表情をしていた。どうやら昨日で完璧に顔を記憶されてしまったらしい。もしかしたら夜で顔までは分からなかった事を期待したが崩れ去った。

が、こっちは覚えていないという体で行くことにした。

「話は四季さんから大体聞いている。オープン出来るように頑張るつもり、これから宜しく。」

「あ、はいっ。こちらこそよろしくお願いします。」

「彼はさつきまで居た明月さんって人が連れて来た人なの。」

俺の自己紹介に四季さんが補足を入れてくれる。

「そうだな、明月さんに色々世話になってるからその恩を返したいって事で協力している。純粋に四季さんの手助けをしたいって気持ちも勿論あるけど。一応過去に喫茶店とかでのバイト経験はあるから多少は力になれると思う。」

「明月さん……さつき私と入れ違いで出ていかれた人ですね？」

「そうそう、金髪の美人さんだな。今日は戻って来るのは遅くなる可能性が高いから明日改めて紹介しておこう。」

「了解です。ええっと、達也先輩で大丈夫ですか？」

「好きに呼んで大丈夫、火打谷さん……で良いのか？」

「はい、何なら愛衣でも大丈夫ですよ？言い辛いと思うので。」

「愛衣か、確かに二文字で楽だけど……。」

下の名前で呼ぶのは抵抗感あるんだよなあ……。微妙に呼ぶ時に気を遣ってしまう。

「折角だけど、火打谷さんって呼ぶことにする。」

「わかりました。」

俺が来るまでで何処まで話を進めているのかを確認するために隣

の二人を見ると、驚いた様な……意外そうな顔をしていた。

「ん？どうしたんだ、2人揃ってその顔は。」

「いや、澤田君は名前呼んでももらなかったと思っ……。」

「言い慣れているのか？そういう知り合いが居たりするのか……？」

特に驚いている高嶺の顔を見て察した……というか思い出したが正しい。例えば名前で呼んだ時、高嶺はどもっていたな。

「まあ、多少は意識する、というか気を遣ってしまうが……そこまで抵抗は無いな。」

何なら呼び慣れているしな……勿論、画面越しで。

「それは火打谷さんだからか？四季さんでも一緒なのか？」

「え、私？」

後輩だから抵抗低いってのもあるが……てか四季さんも年下だし変わらんか。原作目線だからか、なぜか同じ歳と認識してしまう自分が居る。

「二緒だと思うが……なんなら明月さんもいける。流石にミカドさんは無理だけど。」

「参考までに、一回……呼んでみてくれないか？」

「え？名前をか？」

高嶺からのまさかのお願いに思わず聞き返す。

「ああ。」

何が彼を駆り立てるのか……。何か今後のコミュニケーションで役に立つ可能性があるのなら、喜んでやるが。

「そのくらいなら……。」

横に居る四季さんを見る。少し呆れた感じの表情をしている、急に付き合わされたのだから当然かもしれない。

「ナ……。」

普通に呼ぼうとした瞬間、一つの名前が脳裏をよぎり、考えるより先にその名前を口に出す。

「……チュメ」

あ、しまった。急いで口にしたせいで間違ってしまった。

「はい？」

「すまん、間違ってしまった。正しくは……ナヒユメだ。」

「いや、何が正しいのか理解できないんだけど。」

「ナヒユメ。」

「わざと……う？それとも噛んだのを慌てて隠した……様には見えな  
いからわざとか。」

どんだん声のトーンが下がり、ふざけて言っていると分かった時には俺に向ける視線のランクも下がっていた。いや、我々の業界ではご褒美だからランクは上がっているな。

「申し訳ない。どうやら俺も緊張して噛んでしまった様だ。高嶺の事を言えないな、ははは。」

「どう見てもわざとでしょうがっ！」

いや、自動翻訳されてしまうのだ。文句なら大事な場面で噛んだ高嶺に言ってくれ。

「あはは、さっきも言いましたが楽しそうな職場ですね。」

「つ……う、またいらぬ恥をかいてしまった。……覚えてろ。」

俺たちのやり取りを面白そうに見ていた火打谷さんに恥ずかしそうに顔を逸らす四季さん……と思ったが、ボソツと不吉な事を俺に向けて言ってくる。……聞かなかった事にしよう。

「そ、それよりっ、火打谷さんとはどこまで話したんだ？面接は終わったみたいだが？」

「えっと、面接が終わってから、お店の雰囲気聞いてみた……だっけ？」

俺の質問に思い出すように四季さんが答える。……つてなると火打谷さんも交えて、店の雰囲気を変えるために必要な話し合いか。

「そうですね、ちよつと来るのに遠慮してしまいますって答えましたけど……何か参考にされるのですか？」

「この店見ての通りまだオープン出来ていないんだよ。準備段階だから色々と変えないといけない部分もある。その参考に聞いた感じだな。」

一応募集の紙にもオープニングスタッフとは書いている。

「だから、火打谷さんの意見は凄く参考になった。やはり店の雰囲気を変えないとかあ……。」

「やっぱりかあ、そうなると火打谷さんの明るさは必ず必要になると思う。……まだオープン出来るって確定はしていないんだけどね。」

俺の言葉に四季さんが賛同する。

「えっと、それってつまり……雇ってもらえるって事ですか？」

「うん、そのつもり。オープンさせられない可能性も……無い訳では無いのだけど……、それでも良ければ是非協力して欲しい。」

「ほんとですかっ、やったー！ありがとうございますー！」

採用されたことに大げさと思えるほど喜んでる。店の雰囲気と違うから受かるか不安だったかかもしれない。

「火打谷さんを活かすとしたらフロアになると思う。ま、それ以外は厨房しかないから選択肢は無いけど。」

「いえっ、全然ヘーキです。あ、もし何か手伝える事とかあれば遠慮なくどしどし言ってくださいね。」

「ありがとう。」

「あっ、じゃあ早速。」

一段落着いた所で高嶺から話が出る。確か四季さんが笑顔を上手く出来ないシーンだったな。

「親しみやすい、または明るい店にするためにはどうしたらいいと思う？参考までにだから気軽に答えて構わないから。」

「うーん……そう、ですね……正直、ナツメ先輩って美人で素敵で大人っぽくてすごく憧れます。」

わかる。

「え、そ、そう……？ありがとう……？」

「でも、なんていうか、美人過ぎて緊張してしまうと言いますか、レベルが高いので専門店かと思っちゃってしまいました。私的にはそこに圧を感じましたかねー？」

「……原因は私なんだ……。」

「あっ、いえ、そんなつもりで言ったわけではないんですよっ。」

何を言う！そこが良いんだろうが。あの美人の笑顔が良いんだよ。いや、明るい笑顔もそれはそれで見たいが……。

「四季さん。」

「ん？何？」

「落ち込む必要は無い、だが、それがいい……ってやつだから。」

「また意味の分からない事を……。それに、変わらないといけないのは確かでしょ。」

それはそうだ。

「試しに『いらっしやいませ』って言ってみてくれないか？」

四季さんの笑顔がどんなのか確認したい高嶺から提案が出る。良いぞ、もっとやれ。

「……………、いらっしやいませ。」

こちらに100点満点。いや120点の笑顔を向けてくる。

「……………なるほど、確かに美人だな。」

「どうやら、理解者が一人増えた様だ。」

「からかつてる？」

「いや、本当に。けど、笑顔はもっと明るい方が良いんじゃないかな？」

「もしかして、笑えてない？」

「笑顔なのは確かなんだけど……、大人の、美人の笑顔って言うのかな？」

「そう、それですつ、それ。」

「100点のはなまるを差し上げます。」

「ふざけてないで真面目に言つて。」

四季さんから叱咤が来る。此方は超が付くほど真面目なんだが。

「そうだな……試しに火打谷さんがやってみてくれないか？」

「私ですか？分かりました。……………いらっしやいませー！」

そこには眩しすぎる笑顔があった。

「みたいな？改めて言うと思ったより恥ずかしいですね、これ。……………えつと、ちゃんと出来てます？」

「文句ない完璧な笑顔だった。」

眩しい。眩しすぎる。これは直視できない笑顔だ。何故か後ろめたい気持ちになる。

「なるほど……納得した。」

「だから四季さんはもつとスマイルを意識した方が良いのかも……って、どうかしたのか？」

「達也先輩？どうしたんですか？手で目を覆って。」

「いや……火打谷さんの笑顔が眩しすぎて……目がやられた。俺には刺激が強すぎたかもしれない。」

「はいはい、わかったわかった。」

「という事で、四季さんも火打谷さんみたいな笑顔を意識してみたら良いと思う。」

「スマイル……。」

「……。」

目を閉じて無言になる。多分火打谷さんのを思い出しているんだろうな。

「……い、いらつしやいませ。」

「……。」

「……。」

「……これはこれで。」

そこには無理やり作ろうと頑張ったが、どうみても引きつっている様には見えない表情があった。

「えっと、どうだった？」

「めちやくちや引きつってる。」

「そんなつもりじゃないんだけど……。」

これに関しては高嶺に同意だな。

「もつと柔らかく、口角を上げて、にっこりと。」

「いらつしやいませ……。」

うん、さほど変化は無さそう。

「あー、えっと、笑顔だとは思いますが……。」

「言わなくていい。自分でも出来ていないの分かるから……。笑わなきゃって意識すると逆に難しくくて。」

「これは俺のキッチンと同じく、要練習だな。」

「……………」

恥ずかしそうに顔を逸らす。

「火打谷さん、もう一回さっきのやってみてくれないか？」

高嶺と四季さんが話している横で火打谷さんをお願いをしてみる。

「もう一回ですか？まあ良いですけど。」

「……………いらっしやいませー！」

「ぐはっ！」

至近距離でまともに受けたため反射的に顔を逸らしてしまう。

「そんな反応されるとちよっぴり傷付くといえますか……………けどなんかまたしてみたい気持ちもあると言いますか……………」

「その笑顔には後光が射してるよ……………」

あと効果音も追加で。

「えっと、褒められているんですかね、これって。」

「大丈夫、100点の笑顔って褒めてるつもりだから。」

「そこまで言われるとなんだか照れますね……………、ありがとうございます………」

礼を言うのはこっちの方です。

「何をしているの……………」

今の一連のやり取りを見ていた四季さんが困惑したような声で問いかける。正しくは俺に向けて言っているのだろうけどさ。

面接を終え、今後の話を進めていく内に日が暮れており、今日は解散することになった。

「それでは、お先に失礼しますっ。」

また明日来て欲しいと伝え、火打谷さんを見送る。

「さてと、それじゃ戸締りして私達も帰ろうかな。」

帰る為に三人で戸締りをしていく。

「あー、四季さん、今日ちよっと店に残って良いか？もう少しやりた  
い事がある。」

店の戸締りを進める四季さんに声を掛ける。

「え、大丈夫だけど…何をするの？」

「これからここで働く人が増えるからその準備を少々。」

「何か手伝った方が良いか？」

「んー…いや、大したことじゃないから大丈夫。」

「了解。」

「それなら私も残ろうかな。」

俺が残る事に対して四季さんも残ると言い出す。

「いや、気を遣わなくて良いからな？一人で進めれるやつだし。」

「ううん、澤田君に聞きたい事があるから残るだけ。」

俺に聞きたい事？心当たりしかないんだけど……。

「それなら俺も残った方が……」

「それは駄目だ。高嶺は今日は帰った方が良い。」

高嶺の申し出にはつきりと断りを入れる。

「いや、2人が残るのに俺だけ帰るのは……」

「そういった気を遣わなくて大丈夫。だから今日は帰る事をお勧めする。また明日からその分頑張つて欲しい。」

「……そこまで言うなら分かった。今日は帰る事にするよ。」

「ああ、今日はお疲れさん。また明日。」

「おつかれさま、また明日ね高嶺君。」

火打谷さんに続き、高嶺を見送る。

「で、聞きたい事って？」

扉が閉まり、店が静寂になったことを確認してから隣の人物に問いかける。

「幾つかあるんだけど……そのまえに、さっきのあれ、あそこまで拒絶するような言い方しなくてよかったんじゃない？」

「別にそういう意図は無かったが……店に残られると困るからな。」

「どういう意味？」

「高嶺はこれから別件があるからな。」

「高嶺君、何か用事があったの？もしかして気を遣わせた？」

「あー、それは大丈夫。用事が出来るのは……これからだから。」

「これから……？」



俺の言葉を不思議に思っている四季さんを横目に店の外を見てみると、高嶺と明月さんが丁度出くわしていた。お互いに少し話し合うと、明月さんがこちらを見てくる。それに対して頷き返すと頭を下げてから高嶺と一緒に裏に回って行った。

「そう言う事。」

「いや、どういふことなの。明月さんが戻って来て高嶺君と何か話してたみたいだけど……。」

「今から明月さんは、二階の間借りしている部屋で蝶を神の元へ還す作業をする……それを一緒にどうですか?と高嶺を誘った感じだな。いわばデートのお誘いだな。」

「澤田君、今の会話聞こえていたの?」

「いや、全く。」

「また適当な事を……」

「会話は聞こえない。でも、分かる。どんな事を話したのか、この後何をするのかを。」

「……もしかして、また占い?」

四季さんが懐疑的な視線をこちらに向けてくる。

「かもしれないな。それよりも、四季さんが聞きたい事って?」

「え?あー、今の澤田君の占いと関係するんだけど……。」

「するんだけど?」

「今日、奥の部屋で火打谷さんを採用するかの話をしたでしょ?一応今の所は澤田君が言っていた事が当たっているなあって思っている……。」

何か言いにくそうに話し始める。

「今の所は当たっていると思ってくれるのか。」

「まあ、一応……?完全に信じている訳じゃないけど、ほら。高嶺君みたいな例があるんだからもしかしたら澤田君も……位だけど。」

「少しずつだけど、確実に信頼は得れていると思って良いのかもしれない。慢心はせずにしていくが。」

「それで?聞きたい事がありそうだが……。」

「うん、その……もし澤田君が言っている事がほんとで、未来が見れ

るなら……なんだけど、高嶺君以外には他に誰が見れるのかなと……。」

「四季さんの……このお店がどうなるか知りたい……で当たっているか？」

「……分かりやすかった？」

申し訳なきような顔を見れば、何を聞きたいのか大体予想が付く。今ようやく動き出して新しい人も増え、何をすべきかが見えて来たところだ。その反面、本当に今している事が店をオープンすることに繋がっているのか？実はすべきことは他にあるんじゃないか？……と不安が残りながらも進めて行かなくてはいけない。知れる可能性があるのなら聞きたいのだろう、少しでも心の中にあるしこりを無くすために。

「もし俺がここで『問題ない。確実に開けるから安心して良い』って言ったら憂いなくやっていけるか？」

「あー、そう言われると無くなる訳じゃないかな……？気が楽にはなるけど。」

「明月さんやミカドさんには既に話してるけど、未来なんて簡単に変わる。それこそ、これから四季さんがどう行動するかで、幾らでも違う未来がある。望む未来を掴むことが出来る。」

「それって、私の頑張り次第って事？」

「簡単に言えばな。勿論一人だけじゃない、今は高嶺も参加して、今日は火打谷さんも来てくれた。これからは人は増える事になる。その全員で協力する必要がある。」

「そうすれば、お店はオープン出来るの？」

「可能性が一番高い……とだけ言っておく。」

まあ、それ以外知らないんだけどな。

「無論、俺もそこには含まれるぞ？出来る事なら何でも手伝おう。」

「今の調子で頑張って行けば良いのか……。うん、ありがとう。」

「どういたしまして。まずは高嶺からの宿題で、明るい笑顔を作る所からだな。」

「私なりに頑張ってるつもりなんだけど……なんか意識しちゃうと

上手くできなくて……いい、いらっしやいませー……。」

こちらを向き、頑張つて作ったであろう笑顔を向けてくる。相変わらず引きつってるだけにしか見えないが。

「うーん、駄目だな。100点。」

「駄目って言うておいて100点つて……、何点満点中?」

「そりゃ、100点満点中だが。」

「判定ザル過ぎでしょうが……、うーん。」

自分の頬を指で上げながらどうにか作れない物かと悩んでいる。

「いらっしやいませ。」

「まだ甘いかなー?120点。」

「いや、上限超えてどうするの……。」

「さつきよりは良くなったからな、点数上げないと失礼になる。」

「一応さつきよりましにはなったのか……。」

また自分の頬を触りながら、うんうんと悩んでいる。和むというか、微笑ましい物を見ている気持ちだが、本人にとっては深刻な問題かもしれないな。自分のせいでお店を開くのに支障をきたしてしまふのだから。

「取り敢えず、こう……形だけでも無理やり作ってみて……って何笑ってるの?」

「いや、茶化すつもりは無いが、頑張つて変わろうとしている四季さんを見て、こう……嬉しい?気持ちがあつてさ。」

「なに、悪い?私が変わろうとするのが。」

「だから茶化す気は無い。良い事尽くめだ、お店を開くためには、今の時代に合わせて変わる必要がある。その為に自分も変わらなければならぬ。頭でわかっていてもそれを行動に移すことは結構勇気がいる事だからな。素直に凄いと改めて思っただけ。」

自分の思い描いていた夢とは違う形で店を開かなければならない。それを理解してしまった時四季さんは何を思ったんだろうか。それでもあきらめずに開こうと頑張る姿は……眩しく映ってしまう。

「そう……ありがとう。」

少し照れながらもお礼を言ってくる。その恥ずかしそうに顔を逸

らす仕草、完敗です。マーベラス。

「そんな頑張っている四季さんに速報だ。」

この世界最速の情報だな。なんせ明日の出来事だから。

「ん？なに。」

「明日、高嶺からこのお店で使うウエイトレス服を一新しないかと提案がある。」

「え、ほんとなの？」

「まあ、ほんとかどうかは明日に分かる。そうになると、現時点で四季さんが着ているウエイトレス服では無くて、新しいデザインの服を使つていく事になる。」

「つまり……、私が着ているのじゃ、これからのお店には合わない……という事？」

「合わないって訳では無いが、より良くしていく感じだ。」

「その話を明日高嶺君が持つてくるってことかあ……。」

「それまでに考えてた方が良い。個人的には変えていくのに賛成だ、四季さんには辛い選択を強いるが。」

「……分かった、明日まで考えてみる。」

「……他には？何か確認しておきたいとか、気になった事とか。」

「あー、今は取りあえずさっきのでいいかな、一番聞きたい事は聞けまし。」

「そうか、それじゃあ四季さんも帰るか。」

「何か手伝えることはある？」

「いや、大丈夫。これくらいはこつちでやっておく。その分明日も色々あるから、そこを任せるので頑張ってくれ。」

「了解、それじゃお言葉に甘えて帰ることにする。」

「おっけ、お疲れ。ゆっくり休んでくれ。」

「澤田君も、お疲れ様。」

二人に続き、最後の四季さんを見送り終えてからパソコンがある部屋へ入る。

「大体、一時間から一時間半くらいか。」

電源を付け、椅子に座りながら残りの作業と時間を照らし合わせ

た。

## 第40話：四人目と覚悟、そして採寸

「それでは、高嶺さんまた明日です。」

「ああ、また明日。」

蝶々を見送り終え、高嶺さんと明日から早速オムライスを作る練習をしていく事になりました。

「私も、頑張らないとですね……。」

きっと高嶺さんなら失敗をしても諦めずに何度も練習を重ね上手になって行くのでしょう。それなら私も足を引っ張らない様にフロア……ウエイトレスの仕事頑張らないといけませんね。お互いに保証してしまつた事ですし。

『出来るさ、明月さんなら。俺が保証する。』

『明月さんが可愛いのも、笑顔が魅力的なのも、全部本心だ。だから大丈夫だつて。』

「うう……あんなこと言われたら頑張るしかないですよ……。」

あんな卑怯な返しをされたら先に言った私が弱音を吐くわけにはいきませんし。

「頑張るのは……お互いに、ですね。」

少し熱くなつてしまつた顔に手で扇ぎながら、お店の戸締り確認をする。

「……おや？まだ奥の部屋が電気付いていますね。」

消し忘れかと思い、部屋のドアを開ける。

「澤田さん？まだ残られていたのですか？」

中を見ると、ミカドさんがいつも使っている……パソコン？を何やら操作している様です。

「お、明月さんか、お疲れ様。無事高嶺と一緒に見送り終わつた？」  
機械に顔を向けたままこちらに対して返事をする。

「はい、無事終わりましたよ？」

「それは良かった。高嶺も明日から慌ただしい日々突入だなあ……。ごめん、ちよつと待ってくれ。」

カタカタと音が部屋に鳴り響き、最後にボタンを押すと一仕事を終えた様でこちらを向く。

「もしかして、お邪魔してしまいましたか？」

「いやいや、丁度一区切り付いたから気にしないでくれ。そういえば、蝶の方も大丈夫だった？」

「はい、そちらも滞りなく、無事全て捕まえることが出来ました。」

「これで取り敢えずは大丈夫そうだな……、後はパンケーキまで待つのみか？」

「パンケーキ？」

私の返事に安心してから、考えるように呟く声が聞き取れたが、澤田さんから出た言葉との繋がりが見えなかった為、つい聞き返した。

「ああ、すまん。こちらの話だからスルーしてくれ、また後で話すよ。」

「どうやら、今日蝶を回収した女性の方……、確か汐山涼音さんでしたか、あの方関連の事みたいですね。パティシエをしていたとお話でしたし……。」

「まだ先の出来事……という事ですね？」

「……察しが良くて、凄く助かります。」

「流石に何となく察しますよ、澤田さんがその様におっしゃられた時は大抵話してくれませんか……。」

「あー……、それについては申し訳ない……。」

「ああっ、いえー！別に嫌味などじゃないですからっ、勘違いしないで下さい。まあ……小言の一つや二つ言いたくなる時もありますけど……。」

「でもっ、澤田さんも考えてそうしているのは理解していますから、気にしないで下さい。こっちは大丈夫ですから。」

私の言葉に申し訳なさそうに苦笑いをして目を逸らす。やっぱり話せない事に罪悪感を感じているのでしょう。

そんな澤田さんを見て、以前から気になっていた事を問いかける。

「澤田さん……、一つお聞きしたいのですが。」

「ん？どうかした？」

こちらが急に真面目な雰囲気をしたのを感じ取ったのか、不思議そうに私を見る。

「澤田さんは、今を楽しめていますか？」

「楽しい……？えっと、それはどういう意図での言葉？」

「私の思い違いなら良いのですが……。」

「澤田さんは今、これからこのお店で起こるであろう出来事が分かる……という事で間違い無いですよね？」

「……ああ、あくまで俺が視える範囲とかなり限定的だけど、一応。」  
「聞いている感じではそれがかなりの精度で視えていると思われま  
す。人の会話、動き……実際にどの様にかは分かりませんが……。」

「しかもそれらはその都度澤田さんが好きなタイミングで確認する  
ことが可能……で合っていますか？」

「まあ……そういう感じで思って貰って……構わない……ぞ？」

澤田さんの反応を見た感じ、正確には違うが外れでもない……と  
言ったところででしょうか。

「この先に起こる未来も現時点から観測することがいつでも……出  
来てしまう、つまり、言ってしまうえば澤田さん一人だけ答えを……  
知ってしまっています。」

「まあ、ほんとに言ってしまうえげげけど、そうなるな。」

「例えるなら、漫画や小説などの物語の結末、答え合わせを読む前か  
ら知ってることになっている訳です。」

「だな……、ああ、なるほどな。」

目の前の彼は、私が何を言おうとしているのか察した様に納得した  
声を出す。

「明月さんが言いたいののは、未来を知っている事で人生がつまらな  
い物になっていないか心配と言うわけか。」

「……はい。」

「それでさっきの質問という事か……。はは、なるほど。」

「逆に質問してすまんが、明月さんには俺が楽しく無さそうに見え  
たりしたのか？」

「え？……いえ、そう言うわけでは……。」



「ちやんと言っておくけど、俺は今が楽しい、最高のだ。」  
不敵な笑みでこちらを見る。

「明月さん、四季さん、墨染さん、火打谷さん、涼音さん、高嶺にミカドさんの皆と、このお店で一緒に働けることが何よりも楽しい嬉しい。そしてみんなでこれからお店を開き、忙しくもあるけど楽しく、皆が笑って働いてる姿を見たいと思ってる。勿論、その先の結末もだけど……。」

「明月さんが言う通り、俺が話してきた内容は何度も見て来た。10回20回くらいは軽く……まあ、はい。」

「それほど繰り返し……必要だった、と言うわけですか。」

「あ、えっと……必要……そう言われると……あー。」

「澤田さん？」

「そう、必要だったつ、俺には必要でした。なのでその位見てもおかしくない、うんうん。」

「どうかされたのですか？」

「慌てている様に見えますが……。」

「何も問題は無い。だからこの話は終わりにしよう。」

「え、あ、はい。」

急に話を切り上げようとしていますが……何かあったのでしょうか。まあ、気になった点は一応聞けましたが……うーん。

「それよりっ、これからの話をしよう、建設的なお話をだな？」

「……りようかいです。分かりました。」

澤田さんが話されないのなら無理に聞き出す訳にも行きませんし、ここは従っておきましょうか。

その後、愛衣さんの時と同じ様に話し合い、夜も遅くなったという事で解散となりました。

「初めまして！墨染希です。白瀧学園の2年生です。こういう接客サービスのアルバイトは未経験ですが、一生懸命頑張ります。よろしくお願いします。」

高嶺が墨染さんを連れて来たので、いざ面接となり自己紹介が始まる。はきはきと気持ちいい声と笑顔で挨拶をする。

「採用。」

「ですね。」

「早っ!？」

四季さんと明月さんの即決に驚きを隠せない火打谷さんのツッコミが入る。

「火打谷さんの時も結構即決だったと思うけどな。」

「まあ……その場で面接、その場で採用でしたしね。」

「あの、ありがたいですけど良いのですか……? 本当にそこまで即決で……。しかも、マスターさんの意見を聞かないで……。」

困った様に墨染さんはミカドさんに視線を送る。

「マスターとは私の事か?」

「マスターじゃないんですか? てっきり一番偉い人かと……。」

「いや、私が一番偉いぞ、合っている。」

その偉いは貴族だから偉いとかの質問では無いんだけどな……。ミカドさんを責任者にしていた方が都合が良いのは間違っていないけどな。

その後、明月さんから始まり、俺含めて全員と自己紹介を交わす。

「やったね! 希ちゃんと一緒に働けるなんて嬉しいよ。」

「私も嬉しい。頑張ろうね!」

同級生という事もあり仲良くきやつきやつと嬉しそうにしている。

こういうのを見ると歳の差と言うか……年代を感じてしまうなあ。

「さて、面接も済んだ事だし、これから忙しくなるな。」

「そうですね……、新しい人の為に研修などした方が良いのですかね?」

「二応接客とかのマニュアルは昨日で形は作ったから問題は無いとして……、他に何か追加要素あったりする?」

明月さんと話しながら、周囲に話を振る。

「そういえば、昴晴君。ユニフォームの話はしなくて良いの?」

「あ、そうだった。」

「ユニフォーム……?」

高嶺の発言に四季さんが一瞬こちらを見る。

「今四季さんが着ているのじゃなくてデザインを変えて、新しいユニフォームを作ったらどうかって、親父からの提案があったんだ。」

「澤田さん、これが昨日言っていた……。」

明月さんが小声でこちらに耳打ちで話しかけてくる。

「ああ、新ユニフォームだな。」

「残念ながら、まだオープン出来るか分からない。気が早いかもしれないけど話だけはしておこうかなってさ。」

四季さんの疑問に高嶺の説明が続く。

「それは……。」

悩むような仕草をしながら再びこちらに視線を送ってくる。それに対して、ふっ。っと笑みで返す。安心して一歩踏み出すと良きさ。

「むう……。分かった、お願いします。」

「良いのか?」

「うん。大家さんが認めてくれないのは、私の覚悟が足りないからなのかもしれない。」

「覚悟……?」

「お店をオープンさせる覚悟。昔のお店を再現しようとしているだけじゃ……。いつまで経っても認めてもらえないかもしれない。」

「だから、決めた。」

「ちゃんとお店を営業させられるようにする。店内を明るくして、ユニフォームも変えて、メニューも決めて、仕入れる所も決めて話を通して……。」

「そういう、営業していくのに必要なことを。まだ許可が出てないから、今はある程度のところまで止めていたけど、そういうのもちゃんと詰める。」

腹を括った様で、覚悟を決めた目で高嶺に宣言する。背水の陣で大家さんに無理やり許可を貰える位の気持ちで行こうって事だな。流石です。

「強引にオープンさせるのは流石にまずいだろ。」

「うるさい、揚げ足を取るな。それぐらいの気持ちでいい。」

「私も良いと思いますよ。いえ、むしろ、私もナツメさんに負けないような気持で頑張ります。」

「昂晴君昂晴君、どうしてナツメさんが覚悟を決めるの？マスターは御帝さんでしょ？」

「え？あー……それは……。」

事情の知らない墨染さんが不思議に思い高嶺に聞いているが、正直に答えるには行かないので何とか誤魔化そうとしている。

「……これで満足？」

二人のやり取りを見ていると、四季さんが隣に来て少し不服そうにつぶやく。

「お疲れさん。遂に、後に引けなくなったな？」

「昨日澤田君から聞いて、一人で色々考えた結果だから。こんなに沢山の人を巻き込んだら流石に覚悟を決めるしかないかなって……。」

「うじうじとしている訳にはいかなかった訳か。」

「うるさいな……。」

「これから様々な変化で慌ただしい日々を送ると思うが、必要な事があれば何でも言ってくれ。四季さんの頼みなら喜んで引き受けよう。」

「ありがと、こき使うから澤田君も覚悟しててね？」

「俺が覚悟しなきゃいけないのはそっちかあ……。」

冗談を交わし、四季さんは高嶺達の輪に戻る。何とか今の所は順調……と思つて良いのかもしれない。俺のミスがあつたが、今の所火打谷さんからのアプローチが無いのでそのまま忘れてくれると助かるが……。

「これで吾輩の方も準備を進めて良いのだろうか？」

「ミカドさんか……。すまないけど頼みます。」

「何、そちらの方は貴様らに任せるのでな、こちらは吾輩の方がスムーズに進む。」

「仕入れや、店のリフォームに必要な物資とか沢山あるがほんとに

問題無いのか？」

確かにミカドさんの方が楽に進められるが……負担が多すぎると思う。

「余計な事は気にせんでいい。吾輩に任せて自らの事に集中しておけ。」

「承知、じゃあお願いする。」

「ああ、任せておけ。」

ミカドさんとの確認を終え、皆の方へ戻ろうとする。

「あー……それなら、身長体重、あとスリーサイズなんかも教えて欲しい。」

戻った瞬間、高嶺からの爆弾発言で場の空気が凍る。

「……………は？」

四季さんからの冷たい眼差しと“何を言っているんだこいつ”の意味が込められた一言が放たれる。

あー、これはあれか、新ユニフォームの件か。唐突に言い出すから変態発言になったあれか。

「なるほどお……、確かに希さんのサイズは、中々お目にかかれるサイズじゃありません。同じ女でも気になります。」

高嶺の発言に乗っかる様に明月さんから台詞が出る。この疑問、私も同意です。

「確かに希ちゃん、昔から成長早かったけど……ちよつと見ない間に拍車が掛かったよね。」

「え？そ、そう……？いや、そんな凝視されると困るんだけど……。確かに女性陣の中では一番であろう。昔からとはそこ詳しく……。よく考えたら、俺にとっては九月からしかこの世界を知らないけど、皆には当然だけど昔からがあったんだよな。」

「そんなドストレートにセクハラだなんて……高嶺さん、思ったより大胆なんですな、にひひ。」

「この店を手伝って欲しければ、貴様のスリーサイズを教えるのだー！的脅し……鬼畜先輩だ。」

「サイテー。」

「ちよつと待てっ！勘違いしているっていうか、てか希はわかつて言っているだろ！ユニフォームを作るためには採寸が必要なだけだ。」

「あー……そつちですか。」

高嶺の言い訳に火打谷さんが納得した声を出す。

「そう。だから、このお店のため。あくまでこのお店の為だから。」

「言い訳みたいで胡散臭い……。」

「でも採寸が必要なのは納得しました。それじゃあ、善は急げって事。パーツと測つちやいましょう！」

「メジャーってお店にも置いてありますか？」

「えっと、メジャーは無かったような……。」

「心配いらない。俺が準備している。ほらここに。」

女性陣の言葉に返すよう机にメジャーを自信あり気に置く。通常なら、気が利くと褒められる場面なんだけどなあ……。

「準備万端過ぎてキモい。」

高嶺の発言に更に四季さんからのご褒美が飛んでくる。あのポジション……奪えばよかったかもしれない……。

「気を利かせただけなのに、そこまで言わなくても……。まあいや、とにかく測ろうか。」

諦めずお茶目を見せるが、女性陣から呆れた返事しか返って来なかった。仕方ない、助け舟を出そう。

「高嶺。」

高嶺の横に立ち、優しく微笑む。

「え、はい？」

「俺のスリーサイズなら……測っても良いぞ？」  
「……………」

今度は女性陣だけでは無く、高嶺も無言になる。

「俺も新しいユニフォームが楽しみだからな。採寸が必要だよな？」

俺の発言に、火打谷さんと墨染さんが困った表情でこちらを見ている。明月さんは何か面白い物を見つけたような顔をしている。四季

さんに至っては、またか。と呆れた目でこつちを見ている。

「澤田さん、残念ながら……新しいユニフォームは女性用なので、澤田さんは測る必要が無いのですよ。」

「女性用か、何かそれが問題なのか？着れば良いだけの事だろ？」

「いや、何言ってるの？問題しかないでしょ。」

「しかし、巷では女装をされる男性……所謂男の娘と言うのもありますし、この際お店に取り入れるのも……。」

「しない。するわけ無いでしょ。」

俺と明月さんの発言に呆れながら机のメジャーを取っておくに向かおうとする。

「それと、2人とも、分かっているとと思うけど……。」

俺と高嶺を睨みながら、殺害アイテムを準備しようとする。

「そんなに脅さなくても流石に覗かないから、な？高嶺、撲殺は勘弁だもんな。」

「流石に犯罪は起こしたくないから覗かない、なので鈍器を準備するのはだけは勘弁して下さい。」

「ん。」

俺たちの返事に軽く頷き、皆と一緒に休憩室に向かった。

「さてと……。」

「え、まさか早速覗きに!？」

「いやっ！行かないから、料理の練習でもするだけだから！」

「なんだ……、てつきり女性陣の下着の色当て選手権でもするのかと……。」

「誰がするのですか……そんな選手権。」

誰がって？俺ですが何か？まあ、負けない自信がありますが。

「そういうえば、仕入れの事に関しても話を進めるって……大丈夫なんでしょうか？何かツテでも？」

「ああ、そっちに關しても既にミカドさんに手配を進めてもらってるから心配しなくて平気。必要な物は決めてミカドさんに出さないといけないけど、外部とのやり取りは基本任せるって事で決まった。」

「ツテがあるってことですか？」

「そんな感じだろうな、猫だし情報網広そうだし大丈夫大丈夫。懸念点で言えば、パンケーキの件だな。それに関してはどうしようかとかあったりする?」

「一応、それに関しては考えている事が……。」

「了解、基本その件は任せるけど何か協力が必要なら遠慮せず言ってくれ。念のために候補の店も探してはおく。」

「ありがとうございます。」

「いやいや、これから同じ店で働く仲だし気を遣わないでくれ、これからお互いに頑張つて行かないといけないしな。」

「そうですね、それじゃ早速料理の練習をします。」

「おっけい、味見役ならいつでも空いてるからな。」

料理の練習をしに行くため高嶺は厨房へ向かい、それを見送る。

これからしばらくは高嶺のオムライスの練習の為に毎日同じメニューを食わされる日々が続くかもしれない。特に親父さんと墨染さんが……。

「これ、必要無くなったな……。」

一人になり、ポケットから小さいメジャーを取り出す。

万が一と考えて持っていたが、結局高嶺がちゃんと用意していたので日の目にあう事は無くなってしまった。

「いつか使う場面が……って無いか。」

手に出したメジャーを再びポケットに仕舞う。これに関しては仕方がない。

その後は、高嶺が練習として作った二つのオムライスと試作品のパスタが出来上がった辺りで、女性陣の採寸も終わり試食会となった。

試食を終え、最後は四季さんの掛け声とみんなの“おー!”の締めで解散となった。



#### 第41話：この苦行をどうにかしなれば…。前半戦

あれから高嶺のオムライスの練習の日々が続いた。家で作っては高嶺父と墨染さんに食べさせ、お店で作っては自分で食べたり他の人が味見をしていた……が、流石に毎日食べるのは飽きたらしく進んで食べようとする人は居なくなつた。最初は『タダ飯だあー！』って嬉しそうに言っていた火打谷さんでさえ、オムライスを見るや顔を歪ましていた。明月さんはタイミングが合えば進んで食べてくれるが、味見役はほとんど俺一人となつているのが現状だ。

「高嶺さんや。」

「どうかしましたか？もしかして変でしたか？」

「いや、味や見た目は日が経つごとに上手くなつているから問題は無い。」

「それじゃあ、他に一体……？」

「君も薄々感じていないか？毎度同じ味は食べ飽きたつて……。」

「……………」

「その無言は肯定と取るからな。いや、別に作る事自体は良いのよ、けど毎回毎回同じ味なのは流石にどうにかしないといけないと思うわけです。他の子たちなんて厨房からオムライスを作る音が聞こえたら若干避けてるからな？気づいてるよね？」

「まあ、最近澤田さん以外味見してくれなくなつたとは感じてました。」

「気づいてるなら何とかしないといけないでしょう……。俺はまだ耐えられるから良いが……。他の人にも食べてもらわないと意見が偏るぞ。」

とは言つてるが、この拷問に近い苦行の犠牲者を俺以外にも拡散したい。

「そこで俺は考えたのだよ。」

座つてる椅子から立ち上がり、ビシツと高嶺を指さす。

「味変をしよう！とね……。」

「味を変えるのですか？」

「正確にはオムライス＋何かで食べればいいのでは？と考えている。」

オムライスだけでは苦痛なので他と組み合わせることで違う味も楽しめるといふ事だ。

「例えば、王道ならカレーとか、デミグラスソースとか、今使ってるソースを変えるだけで色々試せるからな。もしかしたら、美味しい組み合わせとか出来て新しいメニューに追加出来るかもしれない。」

「まあ、確かに他の味を試すのはアリかもしれないですね……俺も流石に飽きていましたし。」

「高嶺のオムライス練習の主軸は変わらないから問題は無いと思う。さっそく皆で一品出し合ったりしてみないか？倦怠期とか飽きを感じさせない為にもこういった楽しい事をした方が良く俺は思うぞ。」

単純に今のオムライス祭りをどうにかしたいだけである。

「そうですね……皆に聞いてみましょうか。」

高嶺の了承は得れた事だし、女性陣にも話を通しに行こうではないか！

「ワタシは賛成ですっ！正直なところ飽きちゃってしまいましたし……。」

「私も澤田さんの意見に賛成です。こういった変化を取り入れるのは大事ですから。」

「そうね、私もオムライスだけっていうのは流石に……最近澤田君に任せっきりだったしね。」

「私も賛成ですよ、毎朝昴晴君の食べていますが、たまには違う味もたべたいですし。」

皆から了承を無事得ることが出来た。やっぱり皆飽きていたんだと改めて実感した。

「じゃあ、それぞれ合いそうなやつを考えてくれ。王道でも良いし、

自分が食べてみたい物でも良い。ただし、明らかにウケを狙ったゲテモノは控えるように、全部食べ切る前提で考えてくれ。」

「これって一つでは無くて複数とかも良いんですか?」

それぞれ考え始めた中、火打谷さんから質問が来る。

「流石に沢山は厳しいが……ソース系は二種類までなら何とか行けそうか? 調味料ならそこそこ大丈夫だと思っただけ……。」

後は高嶺がその分オムライスを作るだけだしな。頑張れ。

「了解ですっ!」

俺の返事を聞き、墨染さんとどれにしようかと楽しそうに話し始めた。

「澤田君は何にしようかとか考えてたりする?」

「俺は……、いや、その時まで言わない方が良いのか?」

「被ったりしたら嫌でしょ?」

「その時は集計した時に被りがあるって言うさ。因みに四季さんは何かあったり?」

「まだ決まっては無いかな?」

「外れない物を一つとチャレンジな物を一つとか?」

いつぞやのチキチキたこ焼きパーティーの時は変わり種と、合いそうなやつを入れていたし……。中でもハズレの激辛を二度も引き当ててたな。

「そうしてみたいけど、パツと思いつかないなあ……。」

思いつかないのか、スマホを取り出し検索をし始めた。俺も一つ位考えておかないとな。

暫く時間を設け、みんなからの意見を集めた。必要な物は明日俺が買い出しに行くとして、今日はいつも通り各々練習をして解散となった。

次の日、学生組がまだ来ない時間帯に買い物を済ませ、お店に戻る。調味料もあるが、作る必要があるソース類もある。極力本人で作る事になっている。厨房にはオムライスと関係あるのか良く分からない物が既に置かれている……気にしたら負けなのでスルーしよう。多

分明月さんが用意したものだと思われる。

「さて……。」

現在の時刻は夕方前、そろそろ四季さん辺りが来てもおかしくない。作れるソースだけでも先に作っておこう。

「ていうか、ほんとなんだこれ。」

明月さんののだと思われる謎の瓶、中身は薄い茶色……きつね色と言うのか？パツと見たら油が入っている様には見えませんが……。

「二体これをどう使う気なんだろうか……。」

正体が気になるが、なんだか嫌な予感がする。流石に食べられないのを入れるとは思えないし、食べる時が楽しみのような怖いような……。

「では、これより、オムライスの食べ比べを始めたいと思います。」  
全員が集まり、準備が出来たので開催を宣言する。

「いえーい！ひゅーひゅー。」

ノリ良く火打谷さんがドンドンパフパフと盛り上げてくれる。

「では、栄えある一番手をした人はー？」

周りを見わたりながら希望者が居るか確認する。

「えっと、私、一番目に行きたい。」

「おおっと、四季さん自ら希望か！最初は評価の基準ともなる大事な一品です。もしや自信があたりで？」

「わざわざハードル上げなくてももらえる？残念だけどそんなんじゃないから。多分私のは割とスタンダードだと思うから最初にしようと思っただけ。」

俺の煽りに困ったような表情で答える。王道だから一番手を取ったってことか。なるへそ。

「了解しました。ではっ、早速準備の方をお願いします。」

オムライス……と言うか卵自体は既に高嶺に焼いて貰っている。後はそれに掛けるなり乗せるなりしたら大体完成となる。

四季さんが一旦厨房に入る。少しすると中からトレイを持って高

嶺と一緒に戻ってくる。

「お待たせしました、私が選んだのは……これ、デミグラスソース。」  
皆が座っている机にオムライスが置かれる。いつも作っているのより小さめのサイズで作られている。今から複数食べると思えば当然か。

「デミグラスっ！王道なのが来ましたね！」

最初に反応したのは火打谷さん、続く様に他も反応を示していく。  
「なるほど、ナツメさんが一番手を取ったのはこれが理由だったのですね。」

「定番ですもんね、絶対に美味しい奴ですよ。」

「二番手に恥じないメニューだな。じゃあ、早速いただいでいくとしましょう。」

各々、小皿に取り分けてから食べていく。うん、普通に美味しいな。恐らく缶に入っているやつを使ってると思うが、万人受けだし味の差も出ないだろうな。メニューに入ってもハズレはしないだろうな。

「旨い、一番手に外れないのを持ってきたのは良い判断だと思う。」  
「私が食べたかったっても多少はあるけど……、うん。美味しい。」

一番手は四季さんのデミグラスソースのオムライス。ソースが強  
いからご飯は白米が良いのかも？とか組み合わせで盛り上がった所  
で終了。

「では続いては二番手を希望される人はー？」

さつきと同じ様に立候補が居るか確認を取る。

「あ、それなら私が二番手貰っても良いですか、早めに消化しておき  
たくて……。」

二番手を火打谷さんが挙手する……が、不穏なワードがあったが  
……。

「それはあれか？不味いかもしれないってことか？」

「もしかしたら……合わない人は合わなさそうだなって思いまし  
て、自分も食べるのは初めてなんですけどね。」

好みが分かれるタイプか……、一体何が来るんだ。

「それじゃあ用意してきますね！ 昴晴先輩、お願いしますっ。」

高嶺を連れて厨房へ入って行く。四季さんと同じように暫くすると中からトレイを持った火打谷さんが出て来た。

「お待たせしましたー、今回私が考えた一品が、こちらです！」

ドン！と机に置かれたオムライスに注目する。見た目は白いソースが掛かっている。ホワイトソースか？ 若干俺のと被ったな……。

「愛衣ちゃん、これは……？」

「これはねっ、……ヨーグルトを掛けたオムライスです。」

「ヨーグルト……ですか？ あの発酵乳の？」

「はい、そのヨーグルトです。」

「あの、火打谷さん？ オムライスに……だよな？」

「そう……ですね、ヨーグルトソースオムライスって感じです。」

食べた事が無いからか、怪しい目でオムライスを見ている。奇抜なアイデアとしてはポイント高いと思うが……。個人的には味が気になるため最初に小皿に取り分け試食する。

「……意外と悪くないか？ いや、酸味がちよつときついかも。」

思っていたよりさっぱりした味だと思う。口当たりは悪くないし、他にも色々混ぜて作ればワンチャンある？

「澤田さん？ どうですか……？」

「んー……まずいとは言い切れないが、もう少し何かと合わせれば食べれるかも？」

俺が食べているのを見て他の人も食べ始める。思ってたより外れには無いようだが、渋い顔をしている。

「うげえ……そこまで美味しくは無いですね、これ。」

提供者の火打谷さんは二口程食べてスプーンを置く。

「何か付け加えてみる？ 何かあったかな……。」

四季さんが冷蔵庫から何か無いかと漁り始める。

「愛衣ちゃん、因みにどうしてこれにしようと思ったの？」

「なんか前にどこかの国で、ヨーグルトソースを使う料理があるってテレビで見た事があった……記憶に残ってたから……あはは。」

多分、トルコ料理の事だとは思いますが……、なんか水餃子みたいのにかけて食べる伝統料理があった様な……。

「ケチャップとかと混ぜてみるか？運良ければオーロラソースみたいなが出来上がるかもしれない……。」

「ケチャップは確かにあるけど……大丈夫なの？」

四季さんが冷蔵庫からケチャップを取り出し、不安そうに机に置く。

「火打谷さん、好きな分配で調合してくれ。」

置かれたケチャップを火打谷さんの方へ押す。

「ええっ?!私ですか?」

「まあ、今回は愛衣さんの料理ですが……。」

「オーロラソースはケチャップとマヨネーズを1：1で混ぜるのが多いけど……愛衣ちゃん大丈夫?」

「1：1だね、任せて……。」

ヨーグルトソースの上にケチャップを乗せ、かき混ぜていく。完成したそれは色合いだけ見れば悪くない。

「それでは、はいっ達也先輩、行っちゃってください!」

「俺が毒見役か?」

「最初にケチャップを、と言ったのは澤田君だもんねえ……?」

「くっ、それもそうだな……。」

スプーンで少し掬い、口元まで持っていく。……ええい!ままよ!

意を決し口へと入れる。

「……。」

「達也先輩?どうでしょうか?」

「まあ……その、改善の余地ありに一票かな?」

美味しくは無い。酸味は健全だが、頑張れば癖のあるソースと言えるレベルにはなりそう……な気がする。

「なるほど、美味しくは無かったと?」

「ノーコメントで。」

そんなこんなで二番目が終わる。因みにみんなにも味見しても

らったが、美味しいの言葉は無かった。

「さてと、気を取り直して三番目の希望者は？」

「希ちゃん！私の仇を取ってっ！」

「私っ!?まあ良いけど……。」

「希ちゃんなら美味しいのを選んでるってわかるから！この口の中に残る悪夢を取り払ってほしい！」

「自分の悪夢って……、もう、分かった。じゃあ私が次行きますね。」

「了解。どうかこの災禍を祓ってくれ。」

高嶺と一緒に厨房へと消えてく。

「愛衣さんのはアイディアとしては悪くは無いと思うのですが……。」

「そうね……、奇抜と言うのか、私には思いつかなかったから良いアイディアだったと思う。」

「そうですね……？失敗だと思っただのですが、その、ありがとうございます。」

「俺も、普通とは違う物が出て来たからそういった考えは今後も役に立つと思う。」

「そんなに褒められると、なんだか照れますね……あはは。」

思ったより評価が高かったからか、恥ずかしそうに頬を掻く。「にやはは」と笑っているが、多分文字の表記としては「あはは」となっていると思う。俺、詳しいんだっ、こういうの。

「それにしても、ヨーグルトソースって変わったものでしたが、日本の料理なんですか？」

「確か……、トルコ料理だったと思う。ケバブとかによく付いてるって聞いたような……。」

不思議そうに思う明月さんに四季さんが答える。トルコと言えば、エルトゥールル号遭難事件が有名だと思う。1800年代後半に確か和歌山辺りで起きた奴だが……、この世界にも歴史として起きたのかどうか……。自慢気にうんちくを語りたい気持ちもあるが、存在し



ないとなった時のリスクが高いため口を閉じておこう。

「あ、聞いたことありますよ、ドネルケバブでしたっけ？あの回る大きなお肉ですよね。」

「その肉を使ったパンとかに使われるのかなんとか……？」

本場ではヨーグルトソースらしいが、日本ではもっぱらマヨネーズだと思う。ケチャップでは無くてマヨネーズを入れるのが正解だったのか？

「他とは違う物を使うのは注目を集める点では良いですし、愛衣さんのそういうチャレンジする気持ちは見習わないと……。」

「そこまで考えていないのでそう言われると何だか……あ、次のが来ましたよっ。」

後ろを向くとトレイを持った墨染さんが来たが、後ろの高嶺もトレイを持っている。品数は二つなのだろうか。

「お待たせしましたー、二つあったので少し時間が掛かってしまいました。」

机にトレイが置かれる。内容を見ると、片方はミートソースと思われる……がひき肉と野菜がそこそこ入っている。

もう一つは……、キノコの餡かけ？トロツと透明なタレが掛かっていた。

「私からは、こちらがミートソースです。ボリユーム感出すためにお肉とお野菜を少し足してみました。それでこっちは、キノコの和風ソースです。と言っても餡かけなんですけど。」

「これは美味しそうですね……。」

「流石希ちゃん！間違いなく美味しいですよこれ！」

「まだ食べてないから美味しいかどうかかわかんないと思うんだけど……。」

「ううん、これは食べなくても美味しいってわかる。高嶺君から料理が得意って聞いてたけど自分で工夫したの？これ。」

「工夫と言いますか、少し追加して手を加えたただけなので特別な事は特に……。」

「希が作ったのは美味しいからな。俺が保証する。」

「そこで高嶺さんが得意げになるのはどうかと思うのですが……。」  
ほぼ毎日食べている高嶺からの太鼓判である。厨房で見えていたから味の予想が付いてるのかもしれないな。

「それじゃあ早速いただきまーす。」

火打谷さんが、我先にとスプーンを取り小皿に取って食べ始める。

「んんっ！うまいっ！美味しいよ希ちゃんっ！」

「そう？ありがとね。」

「ミートソースの方は思ったよりボリュームあつて満足感ありますねっ。」

「餡かけの方も温かくて美味しい……これからの季節にピッタリかも。」

みんなからの評価は高い様子。それをみて食べ始める。

「この餡かけ、とろみが最高だな、味も濃すぎず薄すぎずで丁度良いな。温かいから尚更美味しく感じる。」

これは冬に出したら一定数売れそうだな……。続いてもう一つは……。

「こっちも美味しいな、追加で粉チーズとか掛けても良いな。」

「あ、それ良いですね！。ありがとうございます。」

火打谷さんから賛同を受ける。

「ミートソースですし、パスタとかにもそのまま使えそうですね。」

「お店のメニューとかにも使えそう。」

「待て、今は増やさずに現時点のをマスターしよう。」

四季さんの発言に高嶺が待ったをかける。

「分かってる。今はこれ以上増やすつもりはないから心配しないで、今後の話だから。」

「そうか、それなら安心した。」

高嶺の心配も杞憂に終わり、無事に三番目が終了した。前回のヨーグルトソースは無事払拭出来た様だ。

第42話：この苦行をどうにかしなければ…。後半戦

墨染さんののが終わり、残るは俺と明月さんとなった。

「どうする？先に行きたいとかあったりは……？」

「最後は気が重いので……、先に行っても良いですか？」

「全然どうぞ。じゃあ四番手は明月さんってことで、準備の方をお願い。」

「畏まりました。少々おまちを……。」

厨房へと入って行く。多分例の未確認成分らしき奴を使うと思うのだが……何だろうかあれは。

少し待つと、明月さんが厨房から出てくる。

「お待たせいたしました。」

明月さんの言葉と共にトレイが置かれる。

「明月さん、これは……？」

見た目は透明な茶色に近い色だ。さっきの餡かけに近いソースなのか？

「私からはこちら、やさいにん……えつと、やさいあぶら……少し待って下さい。」

名称が言えず謎の入れ物を取り出す。なんだか嫌な予感がするのは俺だけか？

「えつと、ヤサイニンニクアブラマシマシソースを使ったオムライスになります！」

「え、……え？明月さん？やさい……何？」

四季さんが、頭が追いつかず聞き返す。

「えつと……ヤサイニンニクアブラマシマシオムライスです。」

「野菜……。」

「にんにく……。」

「油……。」

「マシマシ……？」

火打谷さん、墨染さん、高嶺、四季さんと俺以外が続くように台詞

を紡ぐ。ああ、それが……。その油でしたか。

「ええつと、明月さん？それはどういうやつなの？」

「すみません、私も詳しくは分からなくて……。ミカドさんから頂いたものなんです。」

困った表情で明月さんが話始める。

「なにやらその道に通ずる人から譲り受けた一品らしいですが、ミカドさんには食べれないので私が代わりに頂くことに……。使う場面が見当たらず保管してしまいましたが、今回ので試しに使ってみようかと思ひまして。」

「よくそんなわけのわからないのを使えたもんね……。」

「ハマる人には中毒みたいにハマるそうで……。すみません、好奇心が抑えきれませんでした。」

確かにハマる人にはどこまでもハマリそうではあるが……。この中だと火打谷さん辺りは好きそうだな。

「取り敢えず、食べてみないか？」

「そうね、どんな味かまだ分からないから判断するのは早いし……。」

こっちはどんなのか分かるが、実際に食べた事が無いので内心ワクワクしている。

一口……と掛かった油と思われる液体をオムライスと共に食べる。

「これは……!!」

食べてみて驚く。この液体……美味しい!?

「美味しい……。美味しいのだがこれは……。」

俺的には美味しいと思うのだが……。少し女性陣には重いような気がする。

「これは確かに美味しいかもしれないけど……。」

「ちよつと、濃いような気がしますね。」

四季さんと墨染さんは思った通りガッツリ系の為、一口で満足したようだ。

「確かに濃いですけど、私はこの味好きですよ?」

火打谷さんは割とイケる派の様だ。そういえばこの子ラーメンも

ガッツリ系が好きだったか？

「何かで薄めればいけなくも無いですが……。」「  
提供者の明月さんも少しくどく感じている様子。」

「これ単体だと、オムライス向けでは無さそうですね、でも可能性はありそうです。他の食べ物に使えるかもしれないですね。」

「そうだな。例えばヤサイダブルニンニクアブラマシマシバーガーとかにな……。城門ツバサとかいう人が美味しく食べてくれるさ、きつと……。」

「何故だか不思議と遠い目をしてしまう。まあ、伝統って大事だね。こうして引き継がれて行くのだろう、知らんけど。」

「澤田君？どうしたの？なんだか遠い目をしているけど……。」

「いや、何でもないさ。」

「フツと笑い、目を伏せた。」

「さて、明月さんが終わったので最後を飾る事なった俺は早速準備に入ろうとする。」

「もしかしたら、失敗して時間が掛かるかもしれないから暫く待って欲しい。」

「みんなにそう告げ、高嶺と一緒に厨房へと行く。」

「高嶺、すまんが、挑戦してみたいやり方があるから自分で作っても良いか？」

「え？はい、俺は全然大丈夫ですが……。正直作りすぎて、少し休みたいと思っただけなので助かります。」

「それなら好都合。高嶺も席で待っていてくれ、完成次第運ぶからさ。」

「高嶺を厨房から追い出し、火を付けフライパンを置く。」

「さつとと、久々だが一発で上手く出来るか……。」

「三回まではリトライしよう決め、卵を取り出した。」

「お待たせしました。」

「澤田さん遅かったですね、大丈夫でしたか？」

「ああ、二回失敗したから作り直したのと、失敗作の再利用に時間が

掛かってさ。」

「あれ？澤田君って一応料理出来るんじゃないかなかったつけ？失敗するほど難しいとは思えないんだけど……？」

不思議そうに俺を見る四季さんだが、次第にキョトンとした顔から怪しむような顔に変わっていく。

「まさか……、変なのを作ろうとしてたとか？」

「ははは、まさか、そんなわけ無かろう。四季さんは疑いぶかいなあ……全く。」

「うっわ、怪しい。超絶怪しい……。」

「俺が作ったのはこちらです。」

完成した品を机に置く。

「これって……。」

「普通のオムライスでしょうか……？何もかかつてはいませんが。」

「まだ、完成系では無いんだ、これをこうやってだな……。」

包丁を取り出し、真ん中に切れ目を入れる。

「あ、先輩っこれって……！」

俺がしようとしている事に気づき声上がる。

「わあ……！中から白いのが出てきました。」

「なにか、ドロツとしているけど……何かしらこれ。」

何だろう……別におかしい事を言っている訳では無いが、何故かエロく聞こえてしまうのは俺だけだろうか？

「中から白いドロツとしたものが……うーむ。」

明月さんは何やらエロい事を考えている顔をしていた。良かった、俺だけでは無くて。

「中から、白いのが……。」

「高嶺さん、今、エロい事でも考えましたか？」

「急になんだ!?全く考えて無かったぞ！」

「ほんとですか？女の子が白くてドロツとしたものが出てきて……なんて言ったもんですから卑猥な事をご想像されているのかと……。」

「いや、ほんとに考えてないからっ！むしろ明月さんの方が考えて

いたんだろ?」

「いえいえ、私はその様な事は一切考えていませんよ?にひひ。いや、あれはエロい事を考えていた顔だった。間違いない。

「二応中に入ってるのはクリームシチュー的な奴だ。温かいし不味くは無いと思う。」

各自取り分け食べていく。

「シチューですね!これはオムライスと食べるのも美味しいですが、これ単体でも全然イケますね。」

「そうね、墨染さんのと同じく、これからの季節にあると良いかも……。」

「お好みで更に粉チーズとか胡椒とかしてくれ。」

個人的にはシチューにチーズとか入れて作るのが好みではある。

「これ、ルーだけでは無くて具材も入れるの悪くないと思います。」

「確かに。それなら、オムライスの上から普通にシチューを入れるだけが楽そうだな。」

今回は見た目が映えるのでそつちを優先したが、手間を取らない方が良いかもしれない。

親しみ深い物だったため、評価は悪くない。まあ、外れないのを選んでわけだが。

「そうだ、余った方で適当に作った奴もあるから、そつちも持つてくる。」

厨房に戻り、もう一品を取ってくる。

「こつちは余ったのに色々思い付いた奴を組み合わせしてみた。オムライスアソート……的なの?」

皿の上に小さく分けた卵焼きにそれぞれ違う調味料や具材を使って適当に作った。

「内容は……、色々だ。食べてみればわかる。」

「おお!それは楽しみですですね!」

それぞれが皿にある卵焼きを見比べる。ククク…。さてと、誰が当たるか楽しみだな。

「澤田君、何か企んでいる様な顔をしている気がするんだけど、気の

せい?」

「何を根拠に……出したやつはまともな食べ物だったろ?」

「そうね……、ちゃんとしたものが出て来てるし、私の思い違いみたいだし……疑った事は謝る。」

「別に謝る必要はこれっぽっちも無いぞ? まだ被害は出てないしな。」

「え、どういう事?」

「さっきのを正確に言う……まだまともな食べ物しか引いていないだな。」

「ねえ、それってどういう意味……」

四季さんが俺に問い詰めようとした時、高嶺が口を押えて唸り声を上げ始める。どうやら当たったのは高嶺の様だな。

「……っ!!くくくみずっ!!」

高嶺が枯れた声を聞き、明月さんがあわててコップ渡す。

「……っぶは!死ぬかと思った……。」

「澤田君……まさかだと思うけど……。」

俺に注目が向いたのを確認し、机に小さな瓶を置く。

「実は……高嶺が食べたのにこのソースを入れたんだ、お試しで。」

「デスソース……。それ、凄く辛いやつじゃないですか?」

「ああ、ほんとオムライスのソースに使ってみたりしようかと考えていたんだが、魔が差してな……。ほんの出来心だったんだ。」

「困みに、入ってるのは一つだけですか……?」

「今回は一つだけにした。」

俺の言葉を聞き、女性陣は安心する。今も辛そうにしている高嶺は幼馴染に甲斐甲斐しく世話をされている。

「へえー……そんなに辛かったんですね、昂晴先輩。」

「これは……後の食べ物味が味しくなりそうだ……。」

高嶺の反応を見て、火打谷さんが使いたそうに興味深々である。

「私も、少し使ってみて良いですか?」

「ああ、どうぞどうぞ。」

「愛衣ちゃん、大丈夫? 結構辛そうだけど。」



「多分へーきへーき。」

問題無いと言い、瓶を開け、振り始める。

「あれ？意外と出てこないもんなんですかね？」

振っても出てこない事に不思議に思った火打谷さんは少し強めに振り始める。

「あれえ、出ないですね。」

多少振っても出ないので、強めにブンブンと振る。

「あ、火打谷さん、そんなに振ると……。」

キャップが取れて中身が、と言おうとしたが時既に遅かった。下に振った瞬間、蓋が取れ、中に入っていたソースが全部皿へとぶち撒かれた。

「あつ……。」

その惨状を見て、火打谷さんの思考が数秒止まる。

「愛衣ちゃん……。」

その姿を墨染さんが悲しそうに見つめる。

「これは……。」

「やつちやいましたね……愛衣さん。」

四季さんと明月さんからも同情の声が上がる。

「あ、ああ……、ソースを……その。」

「大丈夫、火打谷さん、全部澤田君が責任もって食べてくれるから。」

「えええ……、俺がか？」

「そうですね、澤田さんが提供者がですし、ここは責任をもって頂かないと……。」

四季さんに続き、明月さんまで追い打ちをかける。あの辛いのを……全部か？

皿を見ると、ケチャップだと現実逃避したいくらいには満遍なくかかっている無事な部分が少ない位だ

くそつ、二人の意図は何となくわかる。ここで俺が責任を取れば、笑いとして終わらせることが出来て火打谷さんに食べさせることなく終わる。持ってきた俺が悪い事にすれば多少は責任を感じなくなるかもしれない……。俺に対して申し訳なく感じるが、適当に誤魔化

せば良い事だし……。

だが！あれを食べれば、今日は死ぬことに追加で、明日はトイレから一步も出られなくなることが確定してしまうっ！しかし、その悲劇を火打谷さんに背負わずなど以ての外だ！……仕方ない、ここは男を見せる時かもしれないな。

「確かに……、二人の言う通り、俺が持ってきたせいだし、責任もつて処分しよう。」

「ええっ!?それは流石に達也先輩に悪いですよ。」

俺が食べると言った事に火打谷さんが驚きながらも否定する。俺の責任と言った二人も何だか驚いた顔をしている。

「いや、良いんだ火打谷さん。ロシアンをしたいと言う浅はかな気持ち招いた結果がこれなんだ、俺は大人しくその罰を受け入れることにする。」

火打谷さんからひったくる様に皿を奪い取り、スプーンを手にする。見るからに赤である、黒が混ざった赤である。この先に見える未来を俺は容易に想像できる……絶望だ。希望があるとするならば……女子高生の食べかけを食べる……。実質間接キスでは無いかと、その位である。

周囲を見るとこれから死に行く人を見守る様にこつちを見ている。フツ……最後に飾るには悪くない。

「では、皆の衆……とくと見よ、この澤田達也の最後の雄姿を……なっ!!!」

目の前の赤い物体をスプーン一杯に掬い、口に運んだ。

「澤田さんっ!!」

恐らく明月さんの声だったと思う。何か悲痛を感じさせる声だった……。

その日、人類は知った。人は漫画の様に口から火を噴き出せることを……。

―完―

「それじゃあ、お疲れさまでしたー!」

その後、食べ終えた食器などを片付けた頃には丁度いい時間という事もあり、解散することとなった。

「それじゃ、明月さん、最後の戸締りお願い。」

「はい、任せました。ナツメさんもお疲れ様です。」

「うん、お疲れ様、また明日。そこで沈んでいる人の事は任せた。」  
皆に続き、最後に四季さんが店を出ていく。

「澤田さん……その、大丈夫でしょうか?」

「たしよりは……ましになったかな?」

まだ唇と口の中はひりひりと痛いのが、耐えられない程でもない。

「それなら良かったです。お水か何か飲まれますか?」

「いや、今は大丈夫、帰りに牛乳でも買って帰る事にするよ。」

「分かりました。むしろ大変なのは明日かもしれないですね……。」

「そうだな、もし明日俺が来なかったら、その時は察してくれ。」

「それはもう……ご愁傷様ですとしか言えませんね。」

「まあ、死なないから良しとしよう。……そういえば明月さん、気になっただが良かったか?」

「どうかされましたか?」

「先日、明月さんに頼まれて手伝った時の、あのばあさんは結局どうなっただ?」

「あの方ですね……大丈夫です、問題ありません。お二人とも一緒に還りましたよ。」

「そうか、無事、還れたんだな。」

今の話は、少し前に明月さんに頼まれた蝶関連で、一件解決したことがあり、その後の結末を確認していなかった為聞いていた。

「はい、なのでもう心配される必要はありません。」

「ありがとな、お願いを聞いてくれて。」

「いえ、大したことではありませんから。少し蝶々を還すタイミングが遅れる程度で支障はありませんでしたし。」

「そっか、それなら良かった。」

「私的にはそれより、蝶に触れた澤田さんの方が心配です。何か変化とか大丈夫ですか？」

「特に変わりないから平気だと思う。」

「確かに見ていた感じですよと特に魂が干渉を受けた気配はありませんし……うーん。」

「やっぱり、変なのか？」

「変……。そうですね、前にも少し話したと思いますが、他人の蝶、感情などに触れれば何かしらの影響を受けてしまうのが普通です。恐らく、強い魂を持つ高嶺さんとして例外ではありません。」

確かに原作では明月さんルートで影響を受けていたなあ……。乗り切れていたが、ダメージを受けていたのは確かだった、それがあつたから明月さんのを分け与えたわけだし。

「俺が高嶺より強いと言う可能性は？」

「それはあり得ません。ミカドさんに何回か確認してもらっていましたが、特出した魂では無いのは確実です。」

だからこそ、影響を受けない俺が異質となる訳か……。原因があるとなれば、何となく予想は付いている。俺の中にあるあの蝶が関係していると思う。他に理由が見当たらない。

「そう考えると、より不思議に思えるな。」

「そうなんですよ、だからいつ不調が出るか分からないので心配です。澤田さん、ほんとに無闇に記憶を読むのは控えてくださいね？」

「すまん、あの時は時間が無かったから手っ取り早いのがこれだったから……。」

「それを言われると、何も言い返せませんね……。」

「という事で、この話は終わりとしよう。過ぎた事は仕方ないからな……。俺も早くこの口の中をどうにかしたい。」

「……全く、あなたと言う人は……。分かりました、それじゃあ帰りましょうか。」

「おうとも、それじゃあ、明月さんまた明日。」

「はい、今日もお疲れさまでした。」

明月さんと別れ、帰り道を一人で歩く。あのばあさんは無事に最愛

の人と一緒に還る事が出来た様で安心した。最後まで一応明月さんが看取つたらしく、気休めではあるが一人では無かった。

多分明月さんはこれまでも同じ様に多くの人を見送って来たのだろう。老いる事の無い身体を持つてしまいがゆえに、死神と言う役目があるが為に……。本人はこれからもういった人生を送ると思っている筈だ。こうやって一緒にお店を開くと言う今までに無かった同じ時間を共有する経験。皆と楽しそうに笑っている反面、どこかで思い返しては寂しく思ってしまう時があるのかもしれない。自分は死神だと……。

だから彼女を救いたいと思う。人間として、一人の女性として最愛の人を見つけ、共に過ごし、思い出を作っていく。そんな当たり前が二人に訪れるように……と考えてしまう。

ならば頑張らなくてはいけない。店を開き、無事ハッピーエンドを迎えられるように、気合を入れなければ。

気合を入れようと息を吸ったが、辛い物を食べたせいか、お腹がおかしく感じる為やめる。明日は死んだなこれ。

帰りに牛乳を買い、ついでに家から出なくて済むように買い溜めをした。備えあれば憂いなし。

そして、無事腹を壊し、次の日はトイレに籠った。

## 第43話：死神の仕事： 思い出の品 壺

店をオープンさせる為に、練習する日々が始まった。高嶺は主にメニューで作る料理の練習、今はオムライスを練習している様だ。そのほかの女性陣は接客の練習やトラブル時の対応などを練習したり俺が以前に作ったマニュアルを改善しながらこの店に沿った物を作っている。

俺はと言うと、主に厨房で高嶺と一緒に作っていたが、一応フロアの事も出来るようにと練習に付き合ったりと固定せず日ごとに変えたりしている。多分厨房が主になったりすると思う。原作ではいつも涼音さんが悲鳴を上げながらしていたイメージがあるからな。

今日は何をしようかと考えていると、明月さんから声がかかる。

「すみません、澤田さん。今、お時間良いですか？」

「大丈夫だけど……どこか人が居ない場所が良いか？」

こちらに近寄り、周囲を気にしながら小声で話しかけてくる。あまり聞かれたくない内容なのだろう。

「そうですね……、私が間借りしているお部屋でも大丈夫ですか？」

「了解、じゃあそっちに行こうか。」

明月さんと少し席を外すと四季さんに一言断りを入れてから部屋へ上がっていく。

「さてと、それで、どういう内容の話で……？」

「そうですね……最初からご説明した方が良いと思うので一から話すことにします。」

何だか長くなりそうだったので、近くにある椅子に腰を下ろす。

「内容としては蝶関連になります。少し前からなのですが、ここからそう遠くない病院に入院されている方から蝶が飛んでいるのを確認していて……お知り合い程度にはなったのですが、中々原因の悩みを聞き出すことが出来ていなくて……。」

珍しいな、明月さんならなんやかんやで相手の懐に入り込みそうなんだが……。相当頑固な奴とか？と言うか……。

「病院に居るってことは何か病気に？しかも、それなりに入院が続くやつなのか？」

「あ、いえ、病気……では無いですね、その方はもう高齢の方で……。」

寿命ってことか。そうなる、そこまで猶予は残されていないのか。

「明月さん、後どれくらいなんだ……？」

あまりはつきりと聞きたくない事だが……。

「ミカドさんが言うには、あと5日が限度と……。」

「時間が無いってことか……。」

大体状況は理解出来た。このままだと未練を残したまま死ぬ。そうなる、蝶が現世に残ってしまう可能性もある、回収してしまえばそれまでなんだろうが……恐らく悔いを残さないような人生を最後に送って欲しいと明月さんは考えているのだろう。本当は時間をかけて少しずつ聞いて行きたかったが時間がもうないと知ってしまったんだろう。

「状況は分かった。そこで俺で何か出来ないかと聞いて来たと言うわけか……。」

「話が早くて助かります。あまり澤田さんに頼るべきでは無いと分かっているのですが……。」

「いや、俺にも何か出来るかもしれないから。相談くらいならいつでも大丈夫だ、変な遠慮は無しで。」

それにしても、俺たちが店の準備をしている裏で、死神の仕事もしていたとは……、全く気が付かなかった。

「ありがとうございます。」

「それで、俺にして欲しい事は？」

「相談して何か切っ掛けが出来たりしないかと考えていたくらいでしたが。」

「その入院している人？の情報を聞いても良いか？あと、可能なら直接会って話してみたい。」

「分かりました、と言っても個人的な事までは流石に言えませんが

……。」「  
「基本的な事で良いよ、出来れば性格とか人柄とかまでは知りたいかな。」

「此処が、その女性が入院している病院か。」

あの後、明月さんから入院している人の話を聞いた。性別は女性、歳までは分からないが、老衰で逝きそうって事はそういうことだろう。家族関係は夫が数年前に先に他界している。これは病気でだろうだ、他は血縁関係が居るがあまり関りを持ってないらしい。お見舞いにたまに来る程度とのことだが……いつ死ぬか分からない状態でそれって事はあまり友好ではない。まあ、ほとんど孤独に近いって事だ。

「問題は性格なんだよなあ……。」

横に居る明月さんは、中々手強い方でした……とか言っていたが、面倒な性格に違いない。どうやって知り合っただ……。

「それでは澤田さん、最初は私から話してから、澤田さんを紹介したいと思います。」

「了解、聞き出す方法は俺に任せて大丈夫か？」

「はい。あ、でも、失礼の無いようにお願いしますよ？」

「それは大丈夫。」

部屋に着き、中を確認して明月さんが入る。壁にあるネームプレートには『辻 久子』と書かれている。多分“ひさこ”と読むと思う。

「こんにちは。今日もお邪魔しますね。」

室内からは明月さんの明るい声が響く、警戒心を感じない言い方は長年の賜物か。

「あんだ、また来たのね……こんな年寄りに会いに来て、暇なのかい？」

病室から少し掠れた声が聞こえてくる。

「近くまで来たので、また来ちゃいました。辻さん、体調はどうですか？」

「いつもと変わらずだよ。今日もしぶとく生きながらえているさ。」



「それは良かったです。今日はですね、一緒に居た男性の人も部屋の外に居るのですが、紹介しても良いですか？」

「なんだい、今日は男を連れていたのかい。」

「私が今オープンさせようとしているお店のスタッフの方ですよ。私に付き合っつて貰いました。」

明月さんが俺の話を出したタイミングで中に入る。

「澤田さん、此方の方が先ほど話した辻さんです。」

「初めまして、澤田達也と言います。明月さんとはお店で一緒に働く仲です。」

「そうかいそうかい、と言っても私に紹介しても直ぐに意味無くなるかもしれないけどね。」

どうせすぐに死ぬから、知り合っても意味は無いぞ？と言う意味だろうな。

ベットの周囲には今の所蝶は見当たらない。明月さんが回収したからだろう、後は、ちよくちよく会いに来ているおかげかもしれないな。

「それで？そんな男前をわざわざ私に紹介した意味はなんだい？もしかして自慢かい？」

「い、いえっ！その様な意図はありません。」

さてと、どう切り出そうか……。見た感じ多少癖がありそうな性格だが、聞いていた程難ありの性格には見えないけど、明月さんが言うには悩みを聞こうとする口を閉じてしまうとか何とか……。。

明月さんで聞き出せないなら俺に対した事は出来ないと思う。時間を使えば突破出来そうではあるが、今回は時間が無いため少し強引な手段を取る事になりそうだ。

「実はさつき、明月さんから相談を受けまして……。」

「相談？その子からかい？」

「ええ……、最近、知り合った高齢の方が、何やら悩み事を抱えているそうなんです、それをどうにか解決したいと……。」

「え、澤田さん？」

いきなり本題をぶっこんできた事に明月さんが驚いている。

「はあ……またその話かい。」

以前にも聞かれたからだろう、少しうんざりした声とため息を吐く。

「話すことは無いって前に言わなかったかい？それで今回はその男を連れて来たってわけ。」

ばあさんの非難する視線に、明月さんが申し訳なさそうに目を伏せる。

「彼女は悪くないです。確かに話は聞きましたが、手伝ってとまでは言われていませんので。今回は私が勝手に口を出している事になります。」

「余計なお世話だよ、何度も言うけど、話すことは何もない。分かったら帰ってくれ。」

顔を背け、しっしっ手を払う。

「聞かせて頂けませんか？何を悩んで、後悔しているのかを。」

「だから、何も無いって言ってるだろうが……。」

「亡くなった旦那の事ですか？」

俺の言葉に、反応するように動きが止まる。どうやらビンゴのようだ。

「数年前に亡くなったそうですね……、もしかして、貴方が悩んでいるのは、その方が関連しているのですか？」

「ちよ、ちよっと!?澤田さん!」

追い詰めるように話を続ける俺の腕を後ろに引っ張る。

「おっと、今話してる途中だが……。」

「駄目ですよ、いきなり過ぎます!」

「すまん、わざとしている。」

「尚更悪いですよっ!こんなやり方では関係が悪化してしまします。」

「やりたい事があってさ、ごめんだけど……一回俺に任せてもらっても良いか?」

「何か、方法があるってことですか？」

「一応、手っ取り早いと思う方法が……。」

「……………分かりました、一度だけですよ?」

「ありがとうございます。」

明月さんの許可を貰い、腕を離してもらおう。すまん、駄目だったらもう次は無いと思う……………修復不可能と言う意味で。

話を続ける為に振り返ると、此方を鬼の形相で睨んでくる。

「あんた、そのことを何処で知ったんだい? その子にも話していないはずだけど。」

「まあまあ、私がどこで知ったかはこの際どうでもいいじゃありませんか。それですが……………関連するとなるなら、亡くなられた夫に対して何か思っている部分があるという事になりますね。」

「帰っておくれ。」

「と、なると……………やはり自分を残して逝ったことに対してか、もしくは夫に対して自分が罪悪感をなどを感じている何かが……………?」

「やかましいっ!! さっさと帰えれと言っておるだろ!」

病室内に、怒りの籠った声が響く。幸いこの部屋は他に誰も居ない。

「さ、さわださん……………」

もうやめましょう。と言いたげな明月さんを手を制止し、話を続ける。もう少しだけ。多分、もう少しで……………。

「残念ながら、貴方が話してくれるまで帰るつもりはありません。」

一歩、ベットに近づき、圧を掛ける。これ……………死にかけの年寄りにすることじゃないな……………。

「今の反応を見た感じだと、どうやら……………貴方自身が亡くなられた夫に、罪悪感をお持ちの様ですね?」

凶星だったからか、目に明らかな動揺が見て取れる。

「何を想っているのですか? 数年経ち、未だに消えない後悔が……………」

「うるさい! 話しても意味は無い! おまえに何が分かる!?! 分かっている様な口ぶりで近寄ってくるな! 帰れと言っているだろ!」

「そうやって喚いても、解決はしませんよ? 身動きも取れずに、後悔しながら余生をそのベットの上で終えるのですか?」

言葉が効いたのか、喋るのをやめる。これは……やりすぎたか？  
少し言い過ぎたかもしれないと反省しようとする、目の前のばあさんから一頭の蝶が飛び出る。

「あ……。」

後ろで明月さんが気づき、声を上げる。

「……来た！これを待っていた。」

目的の蝶が出て来たのを確認し、すぐさま回収しようと手を伸ばす。

「さわださんっ!?!」

俺のしようとしていることに気づき、止めようとするが、それより先に蝶に触れる。

「……………」

「澤田さん！澤田さん！大丈夫ですか!?!」

明月さんが慌てる様に肩を揺さぶってくる。ああ…待ってくれ。脳が震えるるるるr。

「ストップ、問題ない。ちよつと情報の整理に時間が掛かっただけだから。」

「蝶に触れるのは駄目と言ったではないですか！しかも、今回はわざとですよね!?!」

「そのことは後でちゃんと聞くので、今はこつちを優先させて下さいな。」

「……………後でお説教ですからね?」

「……………はい。覚悟しておきます。」

明月さんから冷たい眼差しで告げられる。初めて見たかもしれない、い、ここまで怒ってるのは……………。

怖いため急いで明月さんに背を向け、ばあさんと再度向き合う。

「辻……………清一さんか……………」

「……………どうして……………その名前を……………」

亡くなられた夫の名前を出したことに対して、信じられない目で見らる。

「なるほどな、そう言う事だったか……………」

大体把握出来た。やはりさつき言った通り、旦那の方に申し訳ないと感じていたみたいだな、特に思い残しているのが……。

「ばあさん。あんたが色々後悔しているようだが……我が家にある金庫の中身が知りたいのか？」

「な……っ！なんでそれをつ!!？」

「どうしてそれを知っているか……？不思議に思うよな。」

「誰も知る訳がない！なんであんたがそれを……！」

「でも、残念ながら理由を話せなくてな。それよりか、もっと大事な話をしよう。」

「家にある金庫……旦那の金庫だが、ばあさんが入院するまで開けることが出来ないままになってしまっている。それが心残りなんだけど……。俺がそれを開けてこようか？」

「な、何を言い出すかと思えば……！急に何なんだいあんたは。」

「俺がその心残りと自己嫌悪を解決しようか？という話なんだが……。」

「あんたがどこでその話を知ったか知らないけどね！赤の他人のあんたに開けられるわけがないっ、私が開けられなかったんだよ！」

「うんうん、知ってる。だから、俺が開けて……中に何が入っているか確認しておこうかと思うのだけど……。ああ、中身はちゃんと持つてくるからさ。」

「ふざけたことを……！それが出来たら苦労していないよ。……やるものならやってみたらいい。」

「よし、許可は下りた事だし、早速解錠しに行こうか？」

後ろでやり取りを見守っている明月さんに声を掛ける。

「え、あ……分かりました。」

「後で、出来ませんでした。と言いに来るのを楽しみにしておくとするさー！」

部屋を出ようとすると後ろからばあさんの罵声が飛んでくる。それに対して適当に手を振りながら出ていく。

「さて、今からなんだけど……。」

部屋を出て、エレベーターの乗った辺りで得た情報を話す。

「澤田さん。」

話そうとしたが、明月さんからにじみ出るオーラに口を閉じる。

「終わった後に、何があるか……忘れていませんよね？」

「……はい。」

明らかに、『ブチ切れていますよ?』と笑顔でこちらを見てくる。

「取り敢えず、お外に出ましようか?」

死刑宣告に等しい台詞に、俺の代わりに扉の開く音が答えた。

「全く……反省してください。」

「はい……猛省しまくりやがっています……。」

あの後、明月さんからの説教が始まった。ばあさんとの会話から始まり、蝶を出すまで追い詰めた事、更に出てしまった蝶に触った事、しかもそれらを狙って行った事。全部ゲロツた……いや、正確には自白させられた。

「確かに! 澤田さんのおかげで事は進みました。それに関しては感謝しています。ですが、やり方があれでは酷過ぎではありませんか? もう少し何とかならなかったのですか?」

「あ……えつと、そうですね……はい。」

「もつと! ハキハキと仰って下さい!」

「あれが一番最速だと判断いたしましたっ!」

「まあ……澤田さんに任せてしまった私にも落ち度があったわけですし……。」

「いや、明月さんは悪くないと思う。あれは俺が勝手にしたことだから。」

「いえ、分かっているんです。さつきみたいに澤田さんが蝶々から直接情報を掴むのが一番早いって事くらい……。」

でも、使わせたくないんだろう? 使ってほしいって言いたくないもんな。

「明月さん。」

「はい……?」

「今回は、俺が勝手にそれが早いと考えて起こした行動だからな？  
明月さんをお願いされてしたわけではない。それで起きた結果は俺  
の責任になる。」

「そして、それに対して気を遣われてしまう始末……。」「  
あるえー？更に落ち込んでしまったぞ、逆効果だったか。」

「澤田さんが仰っている事は理解しています。自分の責任だから私  
が気にすることは無いと言いたいんですよね？蝶の事ですし、私が言  
えない事くらい把握出来ている事ですし……。だから自ら動いたと。」「  
どうやらバレバレのご様子で……。なにそれ俺めっちゃ恥ずかし  
い奴じゃん。」

「あ、そうだな……。うん。」

「澤田さんに相談した時点でこうなる事を予想できなかつた私も反  
省すべきですね……。」「

「い、いや！何もそこまで明月さんが背負い込まなくても……。いあ、  
そうだつ！早くばあさんの家に行かないか？やるべきことがあるか  
らさっ？」

このままだとよくないと思い、話を変える。

「……そうですね。いつまでもこうしてはいただけません。気持ちを  
切り替えます。」

「じゃあ、家まで案内するよ。」

「場所も知っておられるのですか？」

「まあな、徒歩で行ける距離だから安心してくれ。」

「分かりました。それじゃあ、エスコートの方をお願いしますね。」

「お任せを、お嬢様。」

無事説教が終わり、目的の家へ向かう事となった。

## 第44話：死神の仕事： 思い出の品 弐

「此処が……辻さんの住んでおられる家ですか。」

目的の家に着き、玄関前に立つ。

「二軒家なんですね。」

「そこそこ年数は経っているけどな。」

玄関を開けようと手を掛けて動かすが、鍵が掛かっているようではない。

「鍵が掛かっている様ですね。どうしましょう？私が開けましょうか？」

さも当然の様にピッキングで開けようかと聞いてくる。

「いや、ちよつと待ってくれ、確か……この辺りに。」

近くにある郵便ポストの裏に手を入れる。

「お、あつたあつた。」

裏に隠してあつた鍵を取り出す。

「それはもしかして……。」

「そ、玄関のカギだな。」

鍵口に差し込み回す。解除される手ごたえを感じたので玄関を開ける。

「さて、入ろうか？」

「なんで隠してあつた場所を知っていたのか……と聞くのは愚問ですね。」

そりゃ、読み取った記憶からに決まっているじゃないですか。

中に入ると、換気がされていかなかったからなのか空気が重く感じた。

「暫く誰もいませんでしたし、少し埃っぽいですね……。」

「仕方ないさ、もう誰も居ないんだからな。」

階段を上がり、旦那が寝ていたと思われる部屋へと入る。

「お邪魔します。つとあれか。」

「失礼します……。」



「明月さん、これがさつき話していた金庫……になるな。」

「これが……ですか。中に何が入っているのでしょうか？」

「それは流石に分からなかったな、旦那が個人的に使っていた物みたいだし、本人しか分からないみたい。」

「澤田さんは、これを開けられるのですか？」

「このタイプだと、時間を掛ければ何とかかな。因みに明月さんは？」

「ダイヤル式はちよつと専門外ですね……あはは。」

「専門とかあんのかよ。鍵式はお得意つか？」

「大体三つくらいのはね……穴を組み合わせれば開くはず……。」  
少しダイヤルを触り確認する。

「どうでしょうか？ 行けそうですか？」

「正直気が進まないなあ……100万近い通りを合わせる事になるかもしれないと考えると……。」

集中力と手の感覚が持つか分からない為、別の方法を探る。

「なので、別路線で行こうかと思えます。」

「他の方法で、ですか？」

「ああ、この家を散策したいと思うっ！」

振り返り、手を横に薙ぎポーズを決める。

「散策ですか……？ 人様の家ですよ？」

「大丈夫、どこに何があるか大体把握出来るし、我が家みたいなもんだ。」

「いえ、そういう事では無くて……そもそも知っているならなぜ散策されるのですか？」

「それは……探索してのお楽しみって事で。」

家中の全部屋を確認したいからさつきと動き出そう。

「お楽しみって……待って下さいっ、私も一緒に行きますから。」  
こうして明月さんと共に探索を始めた。

「ここが、リビングになります。ここで食事を摂っていた。」

「キッチンなども一緒に、広いですね。」

次に行こう。

「ここが洋室になります。ソファーに座ってゆったりしてたりしていた。」

「フロアリングですね。窓からの日差しが気持ちよさそうです。さて、次だ。」

「こっちは浴室だな。風呂とトイレは別々だ。」

「二軒家ですもんね。マンションなどは違って別々が一般的ですね。」

次。

「二階に上がって……、ここは和室だな。よくお茶とか飲むんでいた部屋でもある。」

「良いですね、和室。掛け軸とかもあるので雰囲気があります。」

次だな。

「あの……、澤田さん？」

「待ってくれ、次で最後の部屋なんだ。……つと、ここが最後、入院しているばあさんの部屋だ。一応夫婦別で寝ていたな。」

部屋を見渡すが目的の人が見当たらない。人と呼んでいいのかは微妙だが……。

「最初のおじいさんの部屋の隣ですね。それで澤田さん？家の中を探索した目的って……？」

「んー。ちよつと探し物みたいのをしていたんだが、見当たらなかったな……。居ると思っていただけがなあ……。」

ここで最後という事はこの家には居ないって事になるのか……。仕方ないが、面倒な手段の方を取るかあ……。

「すまない、最初の部屋に戻ろう。探し物は見つからなかったみたいだし。」

「分かりました。戻ったら話してくださいね？」

諦めて、最初の部屋に戻る。

「……あ……。」

最初の部屋に戻ると、金庫の上に蝶が止まっていた。

「蝶ですね……。あれってもしかして？」

「此処に居たのか……。もしかして入れ違いになったのか？」

目的の人物を見つけた事に安堵する。と言うか戻って来たら居るって、なんだかダンジョンとかで部屋を全て探索したら解除されるギミックみたいだな。

「もしかして先ほど仰っていたのは……?」

「その通り。旦那さんの方の蝶を探していたんだ。」

「なるほど、それで家の中を探していたのですね。納得出来ました。」

「説明の手間が省けて助かる。」

さて、それじゃ蝶がどこか行く前に済ませるとしよう。

「待って下さい。」

蝶に近づこうと前に出ると、明月さんから、待てが入る。

「……………なにか?」

「これから、何をされよう?」

「……………」

これは……………気づかれた感じか? まあ病室での前科があれば分かるか。

「澤田さん。駄目ですよ。」

「な、何が駄目なのか俺にはよくわからないなあ……………。主語が抜けてるぞ?」

「辻さんのだけではなく、その方の記憶を読まれるおつもりですよね? 今から蝶に触れようと……………」

「いやー、珍しい蝶が居たから近くで観察したくてさ? 光ってる青い蝶なんて早々に見ないし……………」

「何を仰っているんですか。言い訳ならもつとまともなを用意してください。」

はい、すみません。

「やっぱり、触っては駄目か?」

「危険すぎます。今日だけで既に一人触れています、こんな短時間に別々の記憶や感情を取り込んだら澤田さんの魂への負担がどうなるか……………」

「分からないと……………」

「はい。最悪澤田さんの記憶や感情が二人に引つ張られてしまます。」

それは怖いな。中身が爺や婆になるってことか。

「……………それなら止めておくか。明月さんにそんな顔させてまでする事でもないし…………。手間だけ地道に開けるほうにしておくよ。」  
なので、そんな心配そうな顔は止めてください。罪悪感半端ないんですわ。

「……………本当ですね？油断した隙に触るとか無しですよ？」

「ほんとほんと。なんならその蝶を明月さんに回収してもらっても良い。」

「そうですね…………、念のため先に回収だけでも…………あれ？」

「ん？どうした…………って居ないな。」

後ろを覗いた明月さんにつられ振り返ると、先ほどまで止まっていた蝶が見当たらない。

「どこか飛んで行かれたのでしょうか？見逃したとは思えないのですが…………。」

「まあ、居ない方が好都合だし、さっさと始めるか。時間に余裕があるわけじゃないしな。」

「そうですね、それじゃあ澤田さん、よろしくお願いします。」

「まかせな。と言ってもどんだけ掛かるか分からんから気長に待つつもりで。30分かもしれないし、数時間かもしれないからな。」

「大丈夫です。待つのに慣れていますから、ご心配なく。」

「もう少しで開けれそうだ…………。」

あれから大体一時間近く経った。最終関門まで何とか来れた。後は時間の問題、やり続ければその内解除出来る。

「凄いですね…………小さな感触の違いを感じ取るのも勿論ですが、それを長時間維持するなんて…………集中力持たないですよ。」

「そこは気合と…………慣れと、後は意地だな…………いつかは開かれるってわかっているから何とかなっている…………感じだな。」

「なるほど、根性って奴ですね。」

「そんな感じだ……おつ、いけた！解錠出来たぞ？」

「本当ですかっ、想像していたより随分早いですね。」

「俺にかかればこんなもんよ。さてと、それじゃあ早速開けるぞ？」  
後ろを振り返り、明月さんに確認をする。

「はい。開けちゃってください。」

取っ手を掴み、開ける。

「中身は、紙……」

手紙の様なものが積まれている。と言おうとした瞬間中から蝶が飛び出してきた。

「え……」

後ろの明月さんも予想外だったか、驚くような声が出る。

全く予想していなかった場所から蝶が出て来たので咄嗟に避けることが出来ず、そのまま俺の胸元に触れる。

「あつ……」

(……どうか、よろしく頼む。)

頭の中に様々な風景と思い出、感情が流れて来たと思ったら、脳内にはつきりと、そう聞こえた。

「これは……」

蝶が触れた胸元を手で触りながら、記憶を読み解く。

「澤田さんっ！大丈夫ですか？何か体の方へ異常とかは!？」

「いや、問題無さそう。」

「本当ですか!?!心配させない様に嘘を発言されたり、誤魔化していたりしてませんかよね？」

「ああ、現時点で特に変化は感じられないな。」

なんか信用が無いのかめっちゃ疑われているな……

「よかったあ……安心しました。ところで、今の蝶は……?？」

「さつき居なくなった蝶だった。まさか金庫の中から出て来るとは……」

なんで金庫に?と一瞬思ったが、その理由は考えるまでも無かった。

「それと、明月さん。」

「はい、どうかしましたか?」

「今のは、わざとでは無いので……説教は無しでお願いしたいのですが……。」

「分かっていきます。さっきのは不可抗力で事くらい、事故みたいなものですから。」

良かった……。またあの説教をされるかと……。いや、ありだったかもしれない?滅多に見られなかった姿だし。いやでも心配させたくないし自らは止めておこう。

「結果としてじいさんの方も得てしまったが……。中身は手紙や書類……言ってしまうえば夫婦の想い出の産物って感じだな。」

「それをこの中に……?」

「恥ずかしかったから見られたくない為に金庫に……防犯も兼ねているのか?」

相手はばあさんに対してなのか?そこまでして見られなくなかったのか……?

「二先ず、目的は達成したが……。」

「病院へ戻りますか?」

「そうしようか。……それともう一つ済ましておきたい事が……。」

「まだ何かありましたか?」

「ちよつとな。」

金庫から離れ近くの机の引き出しを漁る。

「さ、澤田さん?」

唐突に物色し始めた俺に驚く。

「お、あつたあつた。」

中から小さい箱を取り出す。

「それは……?」

「結婚指輪だそうだ。渡して欲しいと。」

どうやら二人にとって、思い入れがあるらしいが……。

「それじゃあ、急いで戻りますか。」

「ばあさん、入るぞ。」

病室に入ると、此方に気づいたか凄い形相で睨んできた。

「なにもそこまで睨まなくても……。」

「顔も見たくもなかったからね。」

「そうか。本題に早速入るけど……。」

「なんじゃ？言い訳でもするのか。」

「二階のじいさんの部屋にあった金庫の中身をまずは渡そう。」

ベットに備え付けのテーブルに中身を置く。

「これが……？」

「あんたの旦那さんが大事に閉まっていた物だ。確認すれば分かる。」

目の前のばあさんは、机に置かれた紙をひたたく様に取って中身を確認する。

「……これは、確かに……。」

一つ読み、また一つと置かれている紙を読んでいく。

「……確かにこれは、あの人との物で間違いない。という事はあんたは……？」

「金庫の中身を開けたって事だな。少しは信じてもらえた様で。」

続いて、部屋から回収した箱を置く。

「これはじいさんから頼まれた品だ。ばあさんに渡してくれと。」

「……渡してくれと頼まれた？」

机に置かれた箱を取る。

「ゆ……指輪……。あの人との……。」

それを見つめながら、大事そうに撫でている。

「どうやら、大事な物みたいだな。」

じいさんから貰った記憶は断片的ではあったが、何となく予想は出来る。

と、考えていると目の前のばあさんが泣き始める。

「え……、あ、あきづきさんっ！」

どう対処して良いか分からず、後ろに居る明月さんに助けを求め  
る。

「あらら、澤田さんってば、女性の方を泣かせてしまいましたね？」

「いや、これは俺のせいでは無いと思うのだが……。」

「どうでしょうか？ 要因を作ったのは澤田さんと思うのですが、  
でも、任せて下さい。こういうのには慣れていきますから。」

「どういう事になるだろうか……？ 人が泣く場面によく立ち会っ  
て……。死神してるとよくあるのか？ 闇が深そう。」

それからしばらくばあさんが泣き止むのを待ち、会話が可能と考え  
再度話しかける。

「もう……大丈夫ですか？」

「気を遣う様に恐る恐る聞く。」

「情けない所を見られたね……。」

「全然変じやありませんよ？ それほどまで大事な物だったのですか  
ら。」

明月さんからのフォローが入る。

「明月さん、取り敢えず頼まれたことは終わったと思うんだけど、こ  
れで大丈夫だったか？」

「辻さんの悩みが解決という点では完了だとは思いますが。ありがと  
うございます。」

「任務完了で一安心である。」

「なあ……あんだ。」

「ん？ 俺か？」

明月さんと話していると、ばあさんから声を掛けられた。

「なんで……どうしてこれを持ってくることが出来たんだ？」

「……………」

まあ当然の疑問だよな。

「明月さんの方を見ると”どうしましょうか？”とこっちを見る。

「説明しても？」



「そうですね……大丈夫だと思いますが、澤田さんから説明してきますか?」

「じゃあ、そうする。」

俺の適当な返事に困った様に肩を竦める。

「答えたくないって言ったら理解してもらえたりは可能だった?」

「出来るわけないだろう。最初の時も何故金庫の事やあの人の事を知っていたのかも説明が欲しい。」

うわあ……、折れなさそうだなこれは……。適当にはぐらかした方が良いけど、最後までいいは誠意を見せた方が良いのか?確か……余命は残り5日程度だったよな?

それなら広まる心配も無いと考える。最後にこのばあさんの驚いた顔を見るのも悪くないし。

「説明かあ、そうだな……。それじゃあ最初に、ばあさんの余命が残り5日程度って言ったら信じられるか?」

「残りが……?医者から聞いたのかい?」

「いや、医者が赤の他人に個人情報教えないからそこからじゃない。」

「それじゃあ一体どこから……。」

「実はな、ここにいる明月さんは死神なんだ。」

「はあ?その子が死神い?」

「これから納得できる説明をしていく。」

「つまり、後悔があるとあの世に行けないからそれらを解消しにきたってことなのかい?」

「まとめるとそんな感じだな。」

「その子は死神だから余命が分かると……?」

「まあ、そんなところだ。」

正確には違うがそのままにしておく。

「なるほどの、だから近づいて来たわけなのか。」

「騙すような真似をしてしまい、申し訳ありません。」

「ああいや、仕事だったのだろう？それなら仕方ないとは理解は出来るのじゃが……。」

「それなら、明月さん。」

明月さんの方を向き、死神の鎌のジエスチャーを見せる。

「そうですね、見てもらった方が早いですね。辻さん、私の右手を見ててくださいいね?」

右手を横に出し、次の瞬間には身体程の大きな鎌が手に握られていた。

「これが、死神の鎌です。」

ベットに居るばあさんを見ると、目を大きく広げ驚いている。そうなるよな、分かる。

「いま……、一瞬でその大きな鎌が……本当なんじゃな。」

「はい、この鎌も本物です。と言っても体などを傷つけることは出来ませんが。」

一通り見せ、右手に持っている鎌を消す。

「はは……なるほどねえ、既にお迎えが来ていたって訳か。それなら余命が無いのも納得出来るよ。」

現状を受け入れたのか、呆れた様に笑っている。

「くつくつくつ、お前さんらが来たのはその魂がこの世に彷徨わないう様にするため、私がお前さんらと彷徨ってしまいかねないから解決する為にか……。」

「問題は解決出来たと思ってるが、他に思い残している事とかあったりは?この際、最後まで付き合おうが……。」

「いや、もう残すことは無いよ。これらを持ってきてもらっただけでも充分。そして人生の最後に死神に出会えるとはねえ……。」

「なあ……、明月さんじゃったか?」

「はい、何でしょうか?」

「死んだら、その後はどうなる?」

「魂は神の元に送られ、次の新しい生が始まります。なので何も怖がることはありません……また次が始まるだけです、ご安心を。」

「そうかい……また次が……。」

ばあさんは何処か遠くを見つめる様に窓から外を見上げる。

「もしかしたら生まれ変わった先でまたじいさんに会えるかもな。お互い他人になってるとは思うけど。」

「ふふ……、そうじゃな。また一から始めるのも悪くないかもしれん。」

何処か憑き物が落ちたような穏やかな表情で微笑んでいた。

「それじゃあ、そろそろ退散するよ。」

用事も終わり、することも無いので帰ることにする。

「感謝するよ、ありがとねえ。」

「いえ、お礼だなんて……したくてただけなのでお気になさらず。それでは澤田さん、帰りましょうか。」

明月さんと共に部屋を出ようとする。

「結局、あなたの事は話さないのかい？」

ばあさんのベットの前を横切ろうとした時、問いかけられる。

「そのまま誤魔化されて欲しかったんだけどな……。」

「そうしても良かったのだけれど……、その子の事は話したがあなたの事は一切出なかったから気になってね。」

ばあさんを見ると、どこか挑発的な目でこちらを見つめてくる。

「明月さん。」

「私は部屋の外で待っておきますね？」

俺が何を言おうか察して、外に出ようとする。いや、外に出て欲しかったわけじゃなかったんだが……。話しても良いか確認したかったんだけど。

「あんたはどこで家の事、金庫の事、そしてあの人の事を知りえたんだい？最初はそんな素振りは無かったと思っていたんだが。」

「そのことか……まあ、この際話しておくか。残り短い……。あの世のじいさんとの着にしてくれ。」

「そうだな、なんで知っているか……。俺は特定の条件で相手の記憶などを読むことが出来る……と言ったら信じられるか？」

「何かしらの条件で……、あの子が死神の様にあんたもそういつたのかい？」

「少なくとも死神では無いな。ばあさんをわざと逆なでするように煽ったのはそれが必要だったからという事になる。」

「その条件を満たすためにかい？」

「そうなる……、怒らせるようなことを言ったのは謝罪する。」

「過ぎた事はもういい。結果的にそれに成功し、記憶を読めたからこうなっているのじゃからな。」

結果良ければって奴だな。

「摩訶不思議な存在が二人も居たとはねえ……。」

まだまだいるけどな。

「あの子は死神……、それならあんたは何者なんだい？」

不思議そうにこちらを見る。

「さあな、何者が聞きたいのは俺の方だよ……。」

自分が何者で何のためにこの世界に転生したのか……それは未だに分からない。ミカドさんが言う神に聞けばわかるのかも知れない。元の世界でプレイした世界にわざわざ行く……。何か意味があるのなら良いが……もしかしたら神の悪戯でした。とかの可能性もワンチャンあるかもな。

「なんだい、自分でもわかってないのかい。」

「そうかもしれない……、それをこれから見つけるのか、この世界では何者でもないのか……。」

元々存在しない人間だしな。意味とか無いのかもしれない。それはなんだか……虚しくなってくるな。

「それじゃ、帰るとするよ。元気で……はおかしいな、さよなら？」

「最後に締まらない返事だね、これで最後になるとは思うけど……それじゃあね。」

別れの挨拶を済まし、部屋を出る。

「お話は終わりましたか？」

「ああ、別れの挨拶程度は。」

病院を出る。日が沈みかけており、もう夜と呼んで良い位の時間に

なっている。

「澤田さん。」

横を並びながら歩いている明月さんから話掛けられ返事をする。すると、明月さんは立ち止まる。

「貴方は澤田達也さんです。同じお店で働き、一緒にお店をオープンさせようと協力して下さいます。蝶の事、高嶺さんやナツメさんの事でも私やミカドさんは助けられています。」

突然何を言い出したかを見ると、真剣な眼差しでこちらを見る。

「いつもお店の事や、私達の事を考え行動をしている事も知っています。面白そうなことがあるれば動いたり、何かあれば自分一人で勝手に解決しようとしたり……。皆さんの事を知っておられるからそれをネタに揶揄って反撃を受けたり……。」

揶揄っているのは大抵四季さんだな。ほかは明月さん……たまに高嶺だろう。

「私は澤田さんがどういったお人なのか知っています。私だけじゃありません。他お店の方達も短い付き合いですが、澤田さんを知っています。」

ええつと、つまり……俺がばあさんと話していた会話は全部丸聞こえだったというわけか。なるほどな、部屋から出た意味ないじゃん。

「えええ……。」

「あの……澤田さん？そこでドン引きされるのは予想外なのですが……。」

「あ、いや、ちよつとな。つまり明月さんが言いたい事をまとめると？」

「澤田さんは澤田さんでありますのでって言いたかったのですが……何故か引かれてしまい、ちよつと傷付きました……。」

「あーいや、それに関しては申し訳ない。真面目な話の途中だったのに。明月さんが言いたい事は理解した。」

「それなら良いのですが……。」

納得がいかない様子でこちらを見てくる。俺があんなことを言ったから安心させる為にわざわざ言ってきたのだろう。ほんと出来た

人だよな……何年も生きていればそうもなるのか？

「そうだ、お店までの道中にケーキ屋があるんだが、寄って行かないか？さつき傷つけてしまったお詫びに。」

「ケーキですか？」

「うむ、今日通った時に見かけたけどまだ開いているとは思う。」

「私へのお詫びについて、半分冗談みたいなもんですが……？」

「じゃあ、無事に今日の事が終えれた事の祝いとして。」

「それなら寧ろ私の方が澤田さんへお礼するべきなのでは？」

「………お店の為に味を知る必要があるとか？」

「あらら、私がついでになってしまいましたね。」

「ま、理由とかどうでも良いか。」

「考えるの放棄して、適当になりましたね……。」

頑張った後なので甘いもんが食べたい。そんなので良いだろう。

「どうせなら皆の分も買っていくか、食べれないのがある人ついでにたっけ？」

「どうでしょうか……？特に聞いたことはありませんが。」

「バラバラに買えば大丈夫か。」

「ですね、別々のを買えば何かしら食べれるとは思いますが。」

「そんなじゃ、店が閉まる前に向かうか。」

「了解です、お供させていただきます。」

一先ず、明月さんからの依頼は無事完遂出来た。

ケーキを買い店に戻り、皆に渡したが、二人で出掛けた事をやたら火打谷さんから聞かれた。今回の事情を知っている四季さんはそれを面白そうに煽ってきたのを訂正しては火打谷さんからの質問と面倒なループが暫く続いたが、デートなどと勘違いされては色々困るので、そこら辺ははつきりと言っておいた。

## 第45話：新ユニフォーム

「これが！新しいユニフォーム！凄く可愛いですっ！かわゆすぎる！！」

今日、高嶺からお店の新しいユニフォームが完成したと連絡が来たので皆で確認する事となった。原作ではさくつとその日が来たが、現実だとようやく……って感じの感想である。

「それじゃあ、早速着て確認しましょう」

「そうですね、サイズの確認も必要になりますし」

「火打谷さんと墨染さんも、試着しに行きましょう」

四季さん先導の元、女性陣が試着しに行く。

「なあ、高嶺さん。」

「ん？どうかしましたか」

「気になったんだが、一つ良いか？」

俺からの問いかけに不思議そうにこちらを見る。

「あの新ユニフォームって……誰がデザインしたとか分かるか？」

「え？あれですか？俺も詳しくは無いのですが、親父が知り合いに頼んでらしいですよ？デザインは元々あったのを流用しているとか何とか？」

「なるほどな。あの服装をどこかに出そうとか考えていた方がおられたのか……」

原作で見た限りでは結構攻めたイメージだったが……実際に見るとなるとまたインパクトが違うのだろうな。いや、めっちゃ良いと思うよ？可愛いし、エプロンの端にお店のロゴマークがあるの地味にオシャレだし……。慣れるまで目のやり場に困らないか心配ではあるが。………実に楽しみである。

「まあ……確かに下の方、短そうでしたよね」

「だったな、四季さん辺りが恥ずかしがりそうだと思う」

「あー、なりそうですね」

「何はともあれ……役得、眼福とはこれを言うのだろうな……」

「まだ実際に見ていないのに気が早すぎじゃあ……？気持ちは理解できますが」

男だもん。これから来る楽園を待ち遠しくてたまらないのだ。

「困みになのだが……、俺の分のお店の服とかは……？」

「あー、特に頼んでいませんでした。フロアをする可能性もありますしね……ミカドさんと同じ格好とかどうですか？」

「あの執事をかあ……。難易度高いなあれは」

まだするとは決まっていらないし、その時に考えるか。

「今日は着替えたらその後どうするとかあつたりするか？」

「いえ、取り敢えずお披露目出来れば位でしたが、何か予定とかが？」

「いや、折角着替えたのだから、実践方式で接客とかしませんか？とか火打谷さんから提案が来そうだなって思ってたさ」

「あー……なるほど、確かにアリですね。折角新しくしたのでその姿で実際に作業してみるのも良いかもしれないです」

「やってみてわかる部分が出るかもしれないしな」  
ほどなく、着替えを終えたみんなが戻って来た。

「ちよつと派手と言うか……普段使いするには辛いけど……、お店のユニフォームだからこれぐらい可愛い方が、むしろ良いよね」

何処か恥ずかしいが、自分の中で納得させようとしている墨染さんが目に入った。

「希ちゃんは大丈夫だよつ、むしろ私なんか可愛すぎて不釣り合いな気が……するよ、アンバランス過ぎて……」

恥ずかしいからか、落ち着きがなく目が泳いでいる火打谷さんが後続く。

「えー、愛衣ちゃんこそ大丈夫だよ……。私なんて、採寸してから体重がちよつと……ほんのちよつと変わっちゃって……」

「そうかな？全然そんな風には見えないけど？」

「見えないところがやばいのです……」

そう呟く言葉には謎の重みがあった。

「そうなの？どれどれ……」



墨染さんの発言が気になったからであろう、火打谷さんが墨染さんに抱き着く。お、始まりました。花園です。

今度は仕返しにと墨染さんが火打谷さんに抱き着く。まさかの反撃に驚いた火打谷さんからは驚きの悲鳴が上がる。ああ……。幾ら払えば録画の許可は下りるのだろうか？

お互いがお互いを攻め、じゃれ合う。なんて素晴らしい光景であろうか……。可愛い衣装を着た可愛い少女達がきやつきやつうふふと……。可愛いじゃれ合いを……。

その光景を高嶺と静かに眺める。

「なーに無言になってんすかあ？」

それに水を差す様に明月さんがこちらに声をかける。

「あらあらまあまあ……。お二人は随分と卑猥な目をしちやつて。エロいことを考えてたでしょ？」

「この状況でエロいことを考えない方が男として問題だろう。」

その問いかけに高嶺が堂々と答える。よくやった！二階級特進だ。

「そんな堂々と……。いやでも一理ありますね」

一理どころの話ではない。百理だ。

「そこで納得しないでくれない？」

明月さんに呆れるように四季さんが参加してくる。

「それと、高嶺君だけじゃなくて、澤田君にも言っていると思うのだけれど？我、関せず。みたいな態度で向こうを見るな」

これで四人が揃い、新ユニフォームが集まった。

「うおお……」

「澤田君？どうかしたの？」

「新しいユニフォームを着た皆の破壊力がやばくて……。驚愕していただけ」

「あー……。これだよな？短すぎない？ガッツリ足が出ちやつてるんだけど……。？」

いやー！それが良いんです。最高なんです。更に言えばそれを気にして恥じらう四季さんを見るのが最高なんです！異論は認めない。

「それくらい出しても平気ですよ。ナツメさんの足は綺麗ですから。むしろバンバン出して行っちゃいましょう!」

「バンバン出すのは嫌だなあ……、今でも恥ずかしいのに……」  
「恥ずかしそうにもじもじとして、スカートの端を伸ばしている。口から血が出そう……。」

「ワタシだけ前の服を着るって言うのは……」

「それは認められないな」

きつぱりと断る。

「だよねえ……。言い出したのは私なんだから」

「特定の日とかにするのはアリだけだな」

「そうですね。たまにはそういう日があっても良いかもしれませんけどね。今のも十分魅力的ですよ」

うんうんそうだ。そうなのである。

「現に男性陣のお二人の視線は釘付けですからね」

「ツツ!」

明月さんの発言に見られているのを意識したのか、こつちを睨んでくる。なんで俺だけ……。

「四季さん……」

「な、なに?」

「足も最高だけど、その恥じらっている表情も同じ位良いと思います」

「ツツ!」

「冗談冗談。勿論服装も似合ってるし、これからのお店に合うイメージだと思う。だから自信を持って良いと俺は思う」

「え、あ……そ、そう?そりゃ……どうも」

素直に褒められたのが予想外だったのか、一瞬固まり、理解してから目を逸らす。マーベラス。

「恥ずかしそうにしている四季さんを見ながら、高嶺を見ると明月さんを頑張って褒めていた。ナイス。」

「先輩先輩、折角新しいユニフォームを着た事ですし、接客のシミュレーションとかどうでしょうか?」

火打谷さんの発言を聞いた高嶺がこつちを見る。

「本当に言って来ましたね……」

「予想通りだったな」

「先輩も、料理の練習ばかりでそつちは確認出来ていないと思うんですよ」

「確かにそうだな。俺は別に構わないし、やろうか」

あれ？待てよ、ここって選択肢だったよな？確か新ユニフォーム着た日にあつたような……、ここは四季さん無いかいつ。つてなつたのが印象残つていた気がする。

「はいはい！最初私がします」

火打谷さんが、高嶺の返事に我先にと挙手をする。

「その次希ちゃんね！」

「私？」

「そうそう、順番でして行く？それで、先輩がお客さん役です」

「俺か？了解」

どうなるか様子見をしていたが、特に1人とはならず全員順番でしていく事となつた。もしかして記憶違いか……？

「それじゃあ、私は希さんの次ですね」

「つてなると、私が最後か」

火打谷さん↓墨染さん↓明月さん↓四季さん。の順で実際に接客をすることとなる。

「……あれ、俺は？」

最後つて、俺の接客は……今は良いとして、客二人体制で行くか？

「澤田さんもお客役に回って貰いましょうか？」

「それなら、二組に分かれましょう！お客1、に対して接客2、的な感じで」

火打谷さんの提案で二組に分かれる事となる。女性陣でグーとパーでじゃんけんを始める。

「私は澤田君の方が……」

「達也先輩つ、よろしくお願いします！」

結果、此方には四季さんと火打谷さん。高嶺の方には明月さんと墨

染さんとなる。向こう側は楽だろうな……。

「そんじゃ早速始めるか。先に火打谷さんから行くか？」

「了解です！と言っても接客は初めてなので大目におねがいますね」

「そこは分かっているから心配しなくて良いぞ」

「ではでは先輩、来店するところからお願います！」

流れを一通りこなす為に一度外に出て再度お店に入り直す。

「いらっしやいませ！お一人様ですか？」

火打谷さんの確認に無言で頷く。

「カウンターでもよろしいでしょうか？」

続けて同じく頷く。

「ありがとうございます。では、こちらの席へどうぞ」

俺が適当に席に着くと、メニュー表を持ってくる。

「こちらがメニュー表となります。お決まりになりましたら、お呼びください」

「あ、そのまま注文良いっすか？」

「はい、ご注文をお伺いします」

「ええと、紅茶で……これをお願いします」

注文の品を名前で呼ばず、指で差す。

「ストレートティーがお一つですね？畏まりました。他にご注文はございますでしょうか？」

また無言で首を振る。

「畏まりました。少々お待ち下さい」

こちらに一礼して席から距離を置く。

「って感じなんですけど、どうっすかね？ちゃんと出来てましたか？」

「いや、特に問題なくこなせていたと思うよ？俺がわざと反応悪い客したけど卒なくこなしたし」

「あ、やっぱりわざとでしたかー。少し反応しづらくて困りましたよ」

「それでも嫌な顔せず笑顔でやり切ったから良かったと思う。世の

中理不尽な客なんて幾らでも居るからさ……」

「あはは……、確かにいますよね、そういう横暴な人」

実際に対応するのを想像し、二人で遠い目をした。

「火打谷さんは特に問題なしでおっけいだったから、次、四季さん行こうか」

「わ、わかった……」

未だに慣れていないのか顔を少し赤くしたまま始めようとする。

火打谷さんの時と同じようにお店から出ようとしたが、その前に一っだけ伝えておこう。結果が変わるとは思えないが……。

「四季さん」

「な、なに……?」

「恥ずかしいかもしれないけど、笑顔大事にな?リラックスリラックス」

「わ、わかってる」

わかってはいるが、出来るとは言っていない。

「えがお……えがお……」

自分の頬をマッサージしている四季さんを横目にお店から出る。よく考えれば、美少女二人に接客して……後でお幾らか聞いておかないとな。

くだらない事を考えながら、扉を開け中に入る。

「い、いらっしやいませ〜」

明らかに引きつった笑顔を浮かべている四季さんを見て無言で扉を閉める。

どうやら世界は変わらなかった様だ……。いや、もしかしたもう一回中に入れば違う結果かもしれない。よし、入ろう。

「いらっしやいませ〜……」

扉を閉める。

駄目だ。同じ世界線みたいだ。変動は起きなかったらしい……。あと一回、最後にもう一回だけ……希望はまだあるかもしれない……。あ行くぞー!

「いっ、いらっしやいませー!」

無言で扉をしめ

「ストップ！達也先輩っ、次！次行きましよう？」

扉を閉めようとしたところに火打谷さんからの声が入る。まだ樂しめそうなのに……。

仕方なく中に入る。

「おお、お一人様でしょうか？」

「はい、一人です」

「カウンター席でもよろしいでしょうか？」

「全然大丈夫です」

「ありがとうございます。では、こちらにどうぞ……」

四季さんに案内され、席に座る。因みに今の所笑顔はずっと引きつっている。その様子を高嶺達も見ている。

「こちらが、メニュー表になります。お決まりになりましたら、お呼びください」

緊張からだろうが、動きが硬いし声もおかしい。

「よし……ここまでにしよう！これ以上は見られない」

接客以前の問題だったので終わりを告げる。

「ナツメ先輩……その……笑顔が……」

「いわないで……分かってる。全然笑えていない事は……」

「接客の態度は問題ないんですけど……」

「ナツメさん、練習してても、中々上手く笑えないんですよね、残念ながら」

「まさか笑顔が引きつったままだったとは……」

女性陣は未だにさっきの有様なのを知っていた様だ。

「ちっ、違うんだってば。今はウェイトレスのユニフォームを初めて着たからっ！スカート短めだし、生足むき出しだし、こんな格好で接客するなんて初めてだから！」

「その分緊張しちゃってついつい笑顔が引きつっただけで……」

「今のままでは四季さんだけ特殊なサービスを追加する羽目になっ  
てしまいそうだな……」

「……ッ！」

俺の言葉に反応して、恥ずかしそうにこちらを睨んでる。残念だが、それは褒美にしかならんぞ？ 四季さん。

「練習はこのまま続けるとして、俺も料理の方も練習しないと。それと店内の改造も——そうだ」

何かを思い出したかのように高嶺が声を上げる。

「四季さん、前に少し話したインテリアの件なんだけど、親父から幾つか飾ってもいいって許可貰ったよ。」

「ええっ!? それはありがたいけど……高嶺君のお父さんのつて事は、れっきとした商品だよな?」

「先輩のお父さん……プロの画家が描いた絵……それってやっぱり、お高いんでしょう?」

「いえいえ、何枚飾っても無料となっております」

「ええ!? 本当ですか!」

「費用は一切かかりません。こんなチャンスは滅多にありません。さあ、今すぐお電話を」

「……どこの通販?」

高嶺と火打谷さんのコントに困った顔で四季さんがツツコミを入れている。

「でも無料なのは本当だ。親父も、このお店で保管するって考えだから。埃被って眠っている内の何枚かを、展示しながら保管するだけ。了承は取れているから心配はいらない」

「……わかった。それじゃあ、甘えさせてもらう」

「了解、近い内持ってくるから、内装を変えるのはその後にしよう。それまでは引き続き練習を続けるってことで」

「そうだな、四季さんはまずその笑顔を何とかしておかないと先に進めないな……火打谷さん、手伝って貰えるか?」

「私ですか? 全然オツケーですよ」

「火打谷さん、よろしくお願いします」

「いやいや、そんなに頭下げられても困りますよ。それにわたしだけじゃなくて達也先輩もですからっ」

四季さんに畏まられて戸惑った火打谷さんがこちらに意識を向け

させる。

「俺か?……まあ、出来る事あるか分からんが、四季さんの接客が受けれるっていうならいつでも歓迎だしな」

「ごめんだけど、二人ともよろしくね。出来る限り早く慣れるようにするから」

と言っても、暫くはあの引きつった笑顔が拝めそうだな……。

方針が決まったことで皆のやる気が出ているのが見てても分かる。大家さんと呼ぶまでにしなければならぬ事は腐るほどあるが、いい方向に向かってるのは間違いないさそうだ。まずは高嶺の親父さんからの絵が届くまでに内装の準備を進めておかないとな。

記憶の中にある改装後お店の風景を思い出しながら店内を見てみると、四季さんがこちらを見ているのに気づく。

「ん?どうかした?」

「いや、なんだか楽しそうに店内を見てるから気になって……?」

「大した事でも無いぞ?今のお店がこれから変わっていくのを想像していただけだ。それと、皆もやるべきところが分かって来てやる気も出てきているし、確実にいい方向に向かっていている事がわかったから安心したって部分もあるかもしれないが」

「四季さん的には今のが変わっていくのに多少は抵抗があるかもしれないけどな」

お店を開くためにはこちらの方が良いのは理解出来ているが、自分が思い描いている喫茶店からは離れている場所に向かっていている事には少し不満……というか心残りがあってもおかしくないしな。

「抵抗……とまでは行かないけど、少し心残りみたいのはある……かな?」

「前の雰囲気やウエイトレス服とか?」

「うん。そうなんだと思う。……けど、今のに文句があるってわけじゃない、私のじゃお店は開けなかったことはよくわかったし、今の時代に合わせて言うのは大事なんだと改めて理解したから」

これはおもった以上に未練あるっぽいな……。いや、あるのは知っていたが。



「別に四季さんが考えていた純喫茶が再現不可能って訳では無いぞ？」

「そうなの？」

「確かに今目指しているのは明るいイメージのだから四季さんのとは方向性が違うってのは確かにある。けど、だからと言ってどっちも出来ないってことじゃない。やろうと思えばどっちも可能だ」

「でも、このウエイトレス服とは合わないんじゃない？雰囲気も違うし一人だけ浮いちやうでしょ？」

「さつき明月さんも言っていたけど、特定の日だけ前のウエイトレス服を着る日を作ったりすればいい。一週間に一日だけ、それも午後限定で純喫茶風のサービスをするとかな。それだったら逆に特別感出ている感じじゃないか？」

「……確かに……そういう手もあるのか……。」

これは原作で実際に高嶺が試した手である。俺が思いついた案では無いが使わせてもらおう事とする。

「と言っても、オープンすら出来ていないから夢物語だけだな。いざ開いても暫くはそんな暇無さそうだし」

「そうね。まずはお店を開く事を考えないと……でもありがと」

「いや、あくまで店を開いたらって話だから感謝されても……頭の片隅にでも留めといてくれ」

自分の夢がまだ潰えてないってわかっただけでも今後のモチベーションが変わるしな。これでやる気を出して貰えるなら安いもんだと思う。

「その為に、まずは笑顔を何とかしないな？」

「それが一番問題なのよね……。」

先は長いけど、大丈夫。ちゃんと出来るようになるから……。それまでは楽しませてもらおうけど。

## 第46話：覗く者

少し肌寒く感じる中、まだ人通りがまばらな時間帯にお店へとやってくる。

目的は内装を変えるための作業の準備である。昨日、高嶺から飾つても大丈夫な絵を貰ったとの連絡が来たので今日は皆で店内の改造をしようとなった。道具や必要な物は予めミカドさんと少しずつ集めていたから問題はないはずだ。

「店内のテーブルや椅子を退かして、まずは席の改装を……」

今日の流れを立てながらお店の中へと入り、道具を取るついでに荷物を置きに行く。

「あれ？澤田君？どうしたのこんな早くに……」

部屋に入ると、何故か四季さんが居た。こんな早い時間から？

「いや、それはこっちのセリフでもあるんだが……、四季さんこそなぜ？」

「昨日お店に忘れ物をちよつとね、そっちはどうして……あ、もしかして今日のこと？」

「そうなるな、今日ので先に準備だけでもしておこうかと思ってさ」

「そうなんだ、連絡してくれても良かったのに。1人でするつもりだったの？」

「簡単な奴だけをするつもりだからわざわざ呼ぶ必要はないかなと……」

「ふーん。それで、何をしていくつもりだったの？」

疑うような視線をこちらに向けているが、どうやら手伝う気満々のご様子。

「……大学の方は平気なのか？」

「平気。元々今日は休むつもりだったから」

それは大丈夫なのか？単位とか色々。いや、大学行った事無いから俺には分からないけどさ。

「四季さんがそういうなら……まあ気にしないでおこう」

荷物を置き、必要な道具を持って二人でフロアに向かう。

「二応昨日に軽く話したけど上にシーリングファンを付けることになる。結構な重さで疲れると思うから持つのは俺の方ですよ」

お店の高さ的に延長線は要らないから直接タイプを今回は購入した。多分原作も似た感じのを使ってたはず。

「まずは椅子や机を移動させた方が良い？」

「んー、そうするか。上のファンは人が来てからになるから今は配置換えしたりソファを置くとかで充分だと思う」

「ん。了解、それじゃあ、早速始めましょう」

今は二人だけなので机や椅子などの移動だけにしておく。上は後からでもどうにかなるだろう。

「お二人とも、もう作業始められていたんですね」

「明月さん、おはよう」

「おはようございます。何やら表で音が鳴っていたので、もしかしてと思い確認しに来たのですが、案の定でした」

「どうやら、移動の際の音が聞こえていたらしい。」

「私は忘れ物を取りに来た流れなんだけどね」

「なるほど、裏切り者は澤田さんでしたか」

「四季さんが居なければ軽い準備だけに留めようかと思っていた。裏切ってはいない。」

「ほんとですかあ？またお一人で進めようとか考えてませんでしたか？」

「……流石に重労働は危険だから避けるつもりではあった」

先程の四季さんもそうだったがあまり信用が低いような気がしてきた。今までの行いのツケが目に見えてきた気がする。

「それなら私も手伝います。お二人だけにさせる訳にはいきませんし」

一人で進めるつもりが、気が付けば三人と増えていた。文殊の知恵が出来そうだ。

「さあ、澤田さん。さくつと終わらせてしましましょう」

「了解。他のメンツの仕事が無くすつもりで行くか」

「無くすつもりって、女の子二人にどれだけ働かせるつもりなの……っ。」

「そこは、澤田さんの頑張り所ですねえ……」

期待と揶揄いの目でこちらを見てくる。まあ、成り行きとは言え発端は俺だし、それなりに働かせてもらいますよ。

「これで……完成だな」

最後のシーリングファンを取り付け終え、終了の報せを皆に伝える。

「終わったー……」

「愛衣ちゃんお疲れ」

「希ちゃんもお疲れっ」

「やっぱりこれを頭上に持ち上げ続けるのは疲労が凄いな」

覚悟はしていたが流石に1人ではきつかったので高嶺と一緒に持ち上げていた。

「流石に今日はマジ疲れましたー」

クタクタなのかテーブルに火打谷さんが突っ伏している。

「こうして完成したお店を目の当たりにすると、やっぱり明るい方が居心地がいいですね。」

明月さんの言葉につられ店内を見渡す。テーブルごとに過ごしやすい様に仕切りを設け、ゆっくりと過ごせるようにソファの席も用意した。空調がしっかりと行き渡る様に天井にもシーリングファンを設置した。見た目もおしゃれなだけあって女性受けを狙えるだろう。背景としての変化は見た事はあったが、実際にその場に立ち会うと、その違いは驚く程明るくなったと感じれた。

「明るさもそうだけど、日が射してなかったせいとか少し肌寒い感じはあったかも」

「そうだな。私もはっきりとその違いを感じ取れる」

皆も同じ感想の様で生まれ変わった店内を嬉しそうに見渡していた。

「そろそろ、大家を呼んでも良いのではないか？」  
店が完成したことでミカドさんからの提案が出る。

「そうは言っても、正直まだ不安があるんだけど……」  
案を聞いて四季さんが不安げな表情を浮かべる。その様子を見て  
いると、ミカドさんがこちらに視線を向けていた。何となく聞きたい  
事が分かったのでそれに対して首を横に振っておく。

「そうか。だが期限の10月は目の前だ。完璧を求める気持ちは分  
かるが、どこかで区切りを付けるようにな」

俺の返事を見て、あまり深く言わずに四季さんと話す。一応解決出  
来ていない問題もあるし、その話を出すか。

「ミカドさんの言いたい事も分かるが、パンケーキの問題をまずは  
解決しない事には大家さんと呼ぶことは難しいと思う」

それに関しては高嶺に一任していたので答えを聞くためにそちら  
を見る。

「そうだな。準備が必要にはなるけど……そろそろ良いかもしれな  
いな」

「高嶺さんに何か案があるという事でしょうか？」

「ああ、大家さんに来てもらう前に、この店に呼びたい人がいるん  
だ」

今の言葉を聞いて、不思議そうに見返す組と何かを察して俺を見る  
組に分かれる。

「とはいえずぐに呼べるわけじゃない。一応向こうの都合もあるか  
らそれを聞かないといけない。そこは決まり次第皆に連絡するから  
安心してくれ」

店の改装が済んだことで次のパンケーキ作戦に進んだと見て良い  
だろう。……となると、今日はひとまず練習の続きか。

パンケーキに関しては後日となり、新しくなった内装での最初の練  
習をすることになった。……確か、ここは選択肢があったはず。

少ししてから店内を見ると、皆が各々上達したい作業を練習してい  
る。フロアでは墨染さんと明月さんが接客の応答をしているのが目  
に入る。取りあえず高嶺の行動を見ておかないとな。

さつき厨房に入って行くのを見たので中に入る。厨房では卵焼きを完成させ、丁度ご飯の上に乗せようとしていた。

「今日もオムライスの練習に精が出ているな」

「最近練習の甲斐があって味や見た目に問題は無いと思える位にはなつて来たと思いますよ。あくまで自分の中ではですが……」

こちらに気づき返事をする高嶺は少し疲れて眠たそうな顔をしていた。最近ずっと頑張っているからだろう。

「味見役は必要か？」

「いえ、これは自分で食べようかと思えます」

「了解。人が必要なら遠慮なく呼んでくれ」

「ありがとうございます。その時は頼みます」

厨房でオムライスの練習をしている高嶺を確認し終え、厨房を後にする。

「……次は」

後は高嶺が疲れて裏に眠りに行くのを見て明月さんに言えば大丈夫のはず。フロアに戻るとさつきまでのメンツに火打谷さんも加わっていた。と。いう事は四季さんが1人ってことになるのか……。記憶を掘り起こし、今四季さんが休憩室で何をしているのか思ひ出す。

「これは……行くしかないな」

鏡に向かって笑顔練習している四季さんを生で見たい。この欲望は誰にも止められない。

期待を胸に抱きながら、気配と足音を消して静かに忍び寄る。これはあくまで休憩に行こうとしただけだから。そう決して邪な目的を持つている訳では……。

自分に謎の言い訳を聞かせながら少しだけ開いたドアの前に立つ。深呼吸を行う。この先に何が待っているか考え、落ち着かせる。

よし。覗くぞ。

静かな休憩室の中からは「いらっしやいませ」と声が聞こえる。これは確定演出だ。中の様子を見る。

「いらっしやいませ」

「……うーん」

「いらっしやいませ」

「……!??!」

そこに居たのは自分の頬を上にあげながら鏡に向かって笑顔の練習をしている四季さんが……!

覚悟していたが想定を上回る光景に脳が考えるのを止める。……これは。

「やっぱり上手く笑えない……なーんか、?くさくなるんだよね。なんでだろう?」

「口角が自然に上がっていないのかな?確か、口角を自然に上げられる言葉が……ウイスキー、いらっしやいませー」

口の動きで自然に口角を上げてから「いらっしやいませ」と言う四季さんを見て、こっちの口角が勝手に上がる。大成功だな。

「む……」

頑張っている甲斐もあってか、前の時よりは引きつっていない笑顔ではある。本人は全然納得がいていないご様子だが。

「いらっしやいませっ♪」

「ん……やっぱりダメかなあ」

駄目じゃない。全然可愛いと思います。でも言わせて貰えるならいつもの美人な笑顔の方が好みです!いや、こっちもすつごく良いですよほんと。でも四季さんの容姿とキャラ的には難しいと思う。さつきみみたいな表情は火打谷さんとかが一番輝く。

「いらっしやいませ」

何とか良い笑顔を作ろうと何度も鏡に向かって練習する四季さん。それをいつまでも見ていたい気持ちがある。心の中心を埋め尽くす。バレない様にしなければ。

「うーん……」

その時、鏡から意識が逸れる気配を察してドア前から隠れる。一息つくために練習を止めたのだろう。

少ししてまた中から練習する声が聞こえたので再度中を覗く。

「いらっしやいませ」

「……………」

鏡に向かい練習を再開したのを確認し、引き続き観察を続ける。

「火打谷さんのは感覚的な説明でよくわからなかったし……。えつと、確か楽しい事をおもいだすんだっけ……………」

「楽しい思い出、楽しい思い出……。どうしよう、思い当たる思い出がないかも……………」

寂しそうに一人呟く四季さんを見て心が痛む。哀愁漂うなあ……………」

「取り敢えず無理やり作ってそれを覚えれば……………」

楽しい思い出か……。四季さんに言える程俺にも無いのかもしれないな、地獄の様な思いでなら沢山話せるけど、楽しい思い出かあ。前世では最後辺りは仕事してゲームしての繰り返しだったな。楽しかったが思い出して笑顔になるかと言えばそれはまた別で……。それよりはさっきの四季さんの練習光景の方が、よっぽど……………」

一人で思い出してみたが大した思い出は無かったと結論付けて四季さんの方へ意識を戻した。

「……………」

「……………」

あ、やばっ。今日が合った。

「はうあっつ!? なっ、なんでっ! いつ、からっ、見てっ!？」

俺に見られていたのを知り取り乱す四季さん。慌てる顔も大変素晴らしいです。はい。

「……………」

ここは、何事も無かったかのような振る舞いが求められる場面だろう。

「お邪魔致しました」

さりげなくドアを静かに閉め、背中を向ける。

「さっつと、フロアに戻りましようかね」

バレてしまったのはしようがない。ひとまず見たい物が見れたので大満足だ。

しかし、背後で閉じられていたはずのドアが音を立てて開き、その隙間から物凄い勢いで手が伸びてくる。



「待ちなさい。どこに行くつもり？」

その手は俺の肩を放さまいとがっちり掴む。

「いや、ちよつとフロアにやり残した事を思い出してさー」

肩を掴んでいる手に力がこもる。いだだだ。結構痛いぞこれ。指が肉に食い込んでる。女の子が出せる範囲じゃない！

「記憶おいてけ、ねえ！見たな。見たでしょ。ねえ見たんでしよう、キミ」

「誰か助けてくれっ、妖怪に襲われる！記憶を持ってかれる……！」

「誰が妖怪かつ！いいから、逃げるな。こつちに来い」

引きずり込まれるように部屋の中へ入る。

「……ぐむむむ……」

引きずり込まれた先では、恥ずかしそうに顔を赤らめこちらを睨む妖怪、記憶おいてけ”が居た。

「四季さんは俺を部屋に連れ込んで、どんな乱暴を働くつもりなんだ？」

「そうねえ……、澤田君がさっきの事を忘れるくらいには乱暴しよるかしらっ？」

顎に指を当てながらこちらを蔑む。

「死にたくないのをご勘弁してください」

取りあえず謝罪として土下座をする。

「……いつから見たの？」

「……ウイスキーの少し前からです」

「つまり、私が練習をしたのを暫く覗いて居たってことよね？」

「おっしゃる通りでございます。四季さんがしているのを見て魔が差しました」

「何か弁解することはある？」

「……四季さんの笑顔が可愛かったなあ……と」

「……は？」

「すみません。猛省しやがりまくっています」

「そうはみえないんだけど？」

「本当です。お詫びと言っては何ですが、四季さんが悩んでいる笑

顔の事で助言やお手伝いをさせてください」

「……澤田君が？」

「はい。私澤田がです。一人で笑顔の練習をしていたという事は火打谷さんの説明では上手く行かなかったという事だと思ふ。他の人の意見も聞いてみてはどうだろうか。」

「確かにそれはそうだけど。澤田君は分かるって言うの？」

「多少は。可能な限り助力させて頂きます」

俺と四季さんの間に沈黙が訪れる。

「……はあ、分かった。それじゃあお願いしようかな」

「寛大な処置、感謝いたします」

「大丈夫、別に許したわけじゃないから」

許されてはいなかった様子。

取りあえずこの場合は許されたので土下座を止め席に座る。

「それで、何かアドバイスとあったりする？」

「そうだなあ、頑張つて笑顔の形を覚えようとしていたけどあれは火打谷さんの笑顔を真似てたとか？」

「多少は参考しているかな？でも感覚的な説明でやっぱり分かんなくて取りあえず無理やり作れば覚えるかなって思っただけ」

「でも納得できる笑顔は出来上がらなかつたと……」

「そう。なんか不自然な笑顔になるの。なんでだろ……？」

それは四季さんが美人だからだろう。

「そりゃあ四季さんが火打谷さんの笑顔をしようとしても無理……とまでは言わないけど難しいと思ふ」

「やっぱり無理かなあ……」

「いきなりした事のない笑顔を覚えようでは今からじゃ時間が足りないと思ふ。火打谷さんの笑顔をマスターするとしたら期限の10月が終わってしまうからな」

「……それは……」

「それよりは火打谷さんみたいな明るい笑顔では無くて、四季さんの中での自然な笑顔を見せる方が一番良いと思ふ」

「それだと……お店の雰囲気と合わない笑顔をすることになるで

しよ?」

「そんなことは全くない。四季さんの笑顔も他の皆に負けなくらい魅力的な物だと俺が保証する」

「……適当な事言つて誤魔化そうとしてない?」

「俺の言動に信頼が無いってことは良くわかってるが、これは本心だつてことを強く言いたい」

お店で見た事がある笑顔はそれはそれは素晴らしい物だった。あれを接客時にも出来るのならファンクラブが設立されてもおかしくない。いやする。

「お店とかで笑つた時の笑顔が出来れば間違いなくお店の雰囲気合わないなんてことは無い」

「笑つた時……楽しいと思えた時の笑顔……ね」

「過去を思い返すのが難しいならこれから先の事を考えるとかでも良いと思う。お店を開いて、店内に客が沢山来て皆が笑顔でいる店内の光景でも想像してみたらどう? イマジネーションだ」

「なるほど、そ、想像……を……想像」

目を閉じて頭の中で未来の事を思い浮かべる。

「……いらっしやいませ」

浮かべた笑顔はさつきまでとは違い、一番自然な笑顔だった。

「どう? 不自然じゃなかった?」

「完璧。自然な言い笑顔だった。200点」

「……一応聞くけど、何点満点中?」

「勿論100点満点中だ」

「だから判定ザル過ぎでしょうが……」

呆れるような表情をしているが、若干嬉しさと恥ずかしさが見える。

「今のを出来る様になれば問題無いはず」

「そっか……なら、この調子で頑張ってみるか」

そう言つて再び鏡の前に座る。だが、視線は鏡では無くこちらに向いている。

「……? どうかした? 練習を続けるのでは……?」

「わざわざ言わなきゃ分からない?」

「冗談です。今すぐ出て行きます。扉もしつかりと閉めて行くので。はい」

「よろしく」

流石にここまでかと考え、ドアを開け外に出ようとする。

「えっと、澤田君」

すると背後から呼び止められ振り返る。

「その……ありがとう」

照れながらお礼を言う四季さんに無言で親指を立ててドアを閉める。

「……がはっ!!」

扉前から離れその場に崩れ落ちる。

い、今のは破壊力やばすぎでしょうが……!怒った時の蔑んだり睨むのも最高だが、こういう時に見せる表情……!!正直そります。ええ、はい。鼓動が早まります。

今の光景を脳に焼け付けよう。美化もせず、風化もせず、1ビット足りとも違わない光景を……。

暫くの間膝を付き、落ち着いたことで立ち上がる。まだやるべきことは残っている。

フロアに戻ると、厨房にはオムライスを食べている高嶺と恐らく盛り付けの練習をしている火打谷さんが居た。あれはクリーム盛り付けだろうか?

「あ、澤田さん丁度いい所に」

この様子を見てみると、フロアから明月さんに呼ばれる。

「何用ですかい?」

「接客の練習を希さんとしていますが、それに付き合っ貰えないかと」

「了解。何をすればいい?」

「取りあえず、お客の方でお願いします」

「おっけい。それじゃ、墨染さん。よろしく」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

フロアで練習しながら、厨房に居る高嶺の様子に意識を割いておく。暫くすると、奥の部屋から四季さんが戻る。それを見て火打谷さんが紅茶の淹れ方を教わりに行く。

「後で明月さんにもコーヒーの淹れ方を聞きに来ると思うぞ」

「私は大丈夫ですよ、と言っても自分もまだまだですけどね」

俺も店に出せれる様に安定させとかないな……。後で四季さんに聞いておこう。

練習を続け、時間が経つと厨房から高嶺が出てくるのを確認する。しかも少し眠たそうな表情だ。

休憩室に行ったのを見て、明月さんと墨染さんに声を掛ける。

「もう少しやったら一区切りにしようか」

「了解です」

「分かりました。それじゃ私も愛衣ちゃんと一緒にコーヒーの淹れ方教わろうかな……。」

最後の練習を流し終えた所で明月さんと呼ぶ。

「どうかされましたか？」

「最近、高嶺が少し疲れている様に見えていてな」

「確かにそうですね。最近頑張っていますし」

「さつき眠たそうな顔して休憩室に入ったから大丈夫かどうか様子を見に行つてほしくてさ」

「私ですか？」

「ああ。一応高嶺担当の死神だろ？対象の健康状態の把握は大切だと思います」

「それもそうですね。分かりました。少し高嶺さんの様子を見てきます」

「居眠りとかしてたら起こさないで介抱でもしていてくれー」

手を振りながら明月さんを見送る。これで高嶺が膝枕確定だな、頑張ってるしその分美味しい思いをしても問題ないだろ。俺も美味しい思い出来たし。

## 第47話：パンケーキと五人目

「今日の紅茶は……どうでしょう？」

緊張しながらも丁寧に入れた火打谷さんの紅茶を四季さんが飲む。

「うん。ちゃんと淹れられている思う」

「そうですね。はあ、よかったあ……」

無事合格をもらい、胸に手をあてて安堵のため息を吐く。

「お疲れ様、愛衣ちゃん」

「ようやくちゃんと淹れられるようになったよ」

「特訓に付き合ってくれて、ありがとうね」

「ううん、わたしも練習が必要だったから」

「えー……アタシをおいてけぼりにして、あっさりマスターしてた気がしたけどね」

「そんなことないと思うけど……」

「2人とも、ちゃんと淹れられてると思いますよ」

四季さんだけではなく、明月さんからお墨付きである。

「コーヒーは……正直、味がわからないんですけど」

「大丈夫、ちゃんと美味しく淹れられてるよ」

味がわからないと言う明月さんに代わって、高峰がフォローを入れる。

「ほんとはですか？よかったです。それもこれも、先輩方のご指導のおかげです。ありがとうございます」

「こちらこそ、頑張ってくれてありがとう」

火打谷さんの紅茶を飲み、満足している四季さんからもお礼が飛ぶ。

「あはは」

「それで昴晴君。今日ってお客さんが来るんだよね？」

「高嶺君の友達だっけ？」

「正確には友達とそのお姉さんな。一応知り合いではあるけど、ちゃんとしたお客さんだ」

「プレオープンというか……実践練習として本番のつもりで接客してほしい」

「うん、分かってる」

高嶺に任せていたパンケーキの件を少し前に相談を受け、その成果を今日実施することに決めた。

内容として、沈んでいる人間に起き上がってもらおう……もう一度熱を取り戻させようという内容である。まあ、これは原作と同じ内容だな。

特に変更する必要もなさそうなのでそのままでき事になった。一応明月さんと四季さんには軽く説明はしておいた。

大丈夫だとは思いますが、失敗しそうになった時のセカンドプランを考へてはいるが……まあ必要になることは無さそうだな。いや、フラグとかじゃなくて……。

「それで……その人たちは、いつ頃来るの？もしかして、いつ来るかもわからない実戦形式？」

「いや、連絡があつたから、そろそろ来ると思うんだが……」  
確認しようと高嶺がスマホの画面を覗く。

その時、店の中を一頭の蝶が入り込んで来る。

「あれって……」

飛んでいる姿を四季さんが見つける。となると、もう来るか。身なりを確認し、姿勢を直す。

「四季さん、お客が来るぞ」

蝶を目で追っている四季さんに声をかける。

「あつ……うん」

意識をこちらに戻したと同時に、店の入り口が開き、ベルの音が店内に響く。

「いらつしやいませ」

それを聞いて全員が一斉に声を出す。

「うわっ、なんだここ……店員のレベル高けえ……本当に四季さんまで居るし!？」

入って来た人の第一声が汐山弟の驚愕の言葉だった。

「……ほんとにオープン前まで行ったんだな」

「ワタシの名前を知ってるってことは……大学の人？」

「顔すら覚えてくれてない!?!……いやまあ、親しいわけではないけど」

「俺と同じ学科だよ。もしかして、知られない方が良かったか？」

「本音で言えば嫌だけど……お店を開けばこういったことにもなるし、ワガママ言ってられないでしょ。あ、でも、面白半分で広めるのは止めて欲しいかな。冷やかして来られるのは困るから」

「そんなガキっぽいことはしないって」

「なに?知り合い?こんなところに連れて来て……なんなの?」

不思議そうに、しかし若干不機嫌そうな声を出して質問をしている人物。そう、彼女が汐山涼音しおやま すずねさんであられる。

紫色のパーカーに白黒のボーダーの……リボン?で良いのかな?ピンクのロングヘアが身長身長の半分くらいまで伸びている。まあ、元の身長が……いや、これは止めておこう。

「前に言ってただろ?今度オープンさせる店の客になってほしいって、頼まれたってさ」

「だから、どうして私が付き合わなきゃいけないの?」

不満がありげな態度で弟に文句を言う。その様子を見ると、背後から声をかけられる。

「澤田さん、あの人が……」

「ああ、パンケーキの人だ」

「なるほど……わかりました」

納得したように頷いて、二人に近づく。

「いらっしやいませ。2名様でしょうか?」

「あつ、はい。2名です。よろしくお願いします」

「はい。ではこちらのテーブルにどうぞ」

「ほら、姉貴もコーヒーの一杯ぐらいは付き合えよ。ここまで来たんだから」

「まあ、いいけどね」

弟の説得に何とか応じる。それを見て明月さんが二人をテーブル



に案内する。

そうして近づいた瞬間、涼音さんの周囲を漂っていた蝶が、全て切られ、消える。

……相変わらずめちやくちやな速度である。鎌の反射が一瞬見えただか？ぐらいの速さ。

「いらっしやいませ。こちら、メニューです」

席に着いた二人に墨染さんがメニュー表を渡す。完成品でないが、印刷した物なので形にはなっているはず。

フロアの接客は墨染と火打谷さんに任せて、男は厨房に引っ込む。

「ここまでは順調だけど、料理、大丈夫そうか？何か手伝えることは……？」

「いえ、後は俺の方で作りますので、任せて下さい」

「了解、パンケーキも任せるけど……何かあれば遠慮なく言ってくれ」

「はい」

既に下準備も終わっているし、あとは作るだけである。半熟オムライスとカルボナーラだ、そこまで手間はかからないしな。

「高嶺君、大丈夫？」

厨房でその様子を見てみると、フロアから四季さんがやって来た。

「パンケーキのことか？」

「うん。パンケーキの味見したことないんだけど……作れるってことで良いの？」

「ああ、準備は終わらせているしな」

「そう、分かった。そっちは任せるね？ワタシはドリンクの準備をしてくる」

「ああ、お願い」

フロアに戻った四季さんと入れ替わるように、今度は明月さんが入って来る。

「何か手伝いましょうか？」

「いや、このくらい一人でやるよ。今から手伝ってもらってたら、この先が心配だしな」

「そうですか、わかりました」

「二応、俺も居るからなんかあれば手伝うよ」

今のところ、何もせずに突っ立っているだけだけどなっ！

「わかりました。では、私の方はフロアに戻っていますね」

「ああ。よろしく頼む」

料理に集中しながら、高嶺が返事をする。フロアの戻ろうとする明月さんがこちらに視線を送って来たので、『よろしく』と手を上げる。それを見て頷き、厨房を出て行く。

「……俺も一度フロアに出てくるよ。汐山さんの方にも挨拶しておきたいから」

「了解です、こっちは大丈夫です」

許可をもらってフロアに戻る。見渡すと、ドリンクを入れている四季さんと、それを注意深く見ている火打谷さん、メニューのことを聞かれていると思われる墨染さんと明月さんが目に入った。

「何か手伝えることはあったりする？」

紅茶を淹れている四季さんに声をかける。

「ん？いや特には……。しいて言うならコーヒーを淹れてほしい

……かな？」

「おっけ、むしろ好都合」

「そう？」

不思議そうにこっちを見た四季さんを横目に、コーヒーの準備を進める。

「達也先輩、こっちも見学して良いですか？」

むこうは待ち時間のため、暇となった火打谷さんがこちらに寄ってくる。

「別に大丈夫だが……何なら淹れてみるか？」

「いやあ、それは流石にまだ早いかなくて思いました……。合格はもらえましたが、自信が……」

「なるほど、お試しと言っても相手は大事なお客だもんな」

「そうですそうです、自分が淹れたせいで美味しくないって思われたりしたら……」

「いやいや、卑下し過ぎだ。火打谷さんのも充分美味しいって」

「そうですか？でも、未だ手順を考えながらなんですよね……動きがぎこちなくて」

「それに関しては慣れとしか言えないな。何度も練習して覚えるとしか……ま、これからだな」

「ですよねー……、アタシも早くかつこよく淹れたいです。優雅にこう……」

「なるほど、それは確かに分かるな」

「あつ、分かりますっ？」

「そりゃ勿論、コーヒーや紅茶を丁寧に淹れている姿って憧れるよな。執事とかウェイトレスを見てると」

「それですそれです。と言つてもあたしにとつてはナツメ先輩や達也先輩、栞那さんもそつち側なんですけどね」

「ん？そうか？」

「はい！なので参考にさせてください」

「こんなので良ければご自由に」

隣で見学をしている火打谷さんの視線を受けつつ、コーヒーを淹れる。

まあ、実際に働いていたからそれなりには出来るし、そうなるように指導は受けたが……改めて言われるのは悪い気がしないな。うん、超嬉しい。可愛い後輩にそう言われるとやる気が出ちゃうね！

四季さんと提供するタイミングを合わせてテーブルへ運ぶ。

「お待たせしました。お飲み物の、コーヒーと紅茶です」

コーヒーを涼音さんの前に、紅茶を汐山弟の前に置く。

「お久しぶりっすね。澤田さん」

「お久しぶりです。学校以来です」

「何、この人とも知り合い？」

「まあな、厨房に居る俺の友達がここで働くキツカケになった人」

「初めまして。澤田 達也と言います。今日は私たちのお店に足を運んでいただき、ありがとうございます」

「私は別に……この子の付き添いで来ただけなので」

「しっかし、前に聞いただけでしたけど、もういつでもお店開けそうですね」

「そのつもりで準備を進めていますからね。今日はそのお試しとしてお二人をご招待させてもらいました」

「あんなに可愛いウエイトレスの子たち……どうやって集めたのですか？」

「……企業秘密です。たまたま縁に恵まれただけですよ。……それではごゆっくり、お過ごしください」

一歩下がり、一礼をしてその場を去る。

「どう？どこかダメな所とかあった？」

トレイを戻しながら「こちらを見ていた四季さんに聞いてみる。

「え？……ううん。特にそうは思わなかったけど……？」

「そっか、なら良かった」

「ただ……」

「ただ？」

「思ったより様になっていて変な違和感というか……なんかむかつく」

「そりゃ元々経験があるからな。それなりには出来るさ」

「それもそっか」

少し拗ねたような表情から納得の表情に早変わり。

「……料理ももうすぐ出てくるし、あとはパンケーキだな」

「ワタシは詳しく聞いていなかったけど、任せても良いのよね？」

「ああ、高嶺の方で上手くやってくれるよ。それで駄目なら……」

フオローは入れるつもり」

「そ、何か手伝えることがあったら遠慮なく言って」

「了解」

「紅茶もティーバックとは全然違うな……美味しい」

「コーヒーも美味しい」

汐山兄妹が、注文の料理を食べ終え、最後のパンケーキを待ちなが

らゆったりと過ごしている。

「そろそろかなー」

厨房から僅かに香ってくる匂いから、パンケーキが仕上がったであろうと察する。

「火打谷さん、パンケーキがそろそろ出来るから、準備しておいてもらってもいいか?」

「えっ、はい、わかるのですか?」

「大体は」

「はへえ、凄いですね。ではちよつと行ってきます」

「あいよ、よろしくお願い」

厨房に入ってしまった火打谷さんが出てくるのを見て、交代で中に入る。

「お疲れ様。料理、まあまあの評判だったぞ。ちゃんと美味しいって褒めてた」

「ほんとですか。良かったです」

「それにしても……中々な完成度のパンケーキだったな……?」

すれ違いざまにチラツと見たが……うん、お店で出すのには見栄えが……ってそれが狙いでもあるのだが。

「まあ、今の自分の実力じゃこんなもんですしね」

「プロとして見逃せないなああれは……絶対何か言ってくるぞ?」

「二応、それが狙いでもあるので……うまく行けばいいのですが」

「大丈夫、あれはこだわりが強ければ強い人程文句を言いたくなる一品だ」

「あのく昴晴先輩?今いいですか……?」

高嶺と話していると、火打谷さんが厨房に戻ってくる。

「ああ、どうした?」

「なんか、お客様がお呼びなんですけど……」

それを聞いて高嶺と顔を合わせる。

「わかった、今行くよ」

「高級な料亭みたいですよ。このパンケーキを造ったのは誰だあ!」

「それは確実に説教されるパターンだけどな」

「あつ、そっか」

「取り敢えず、行ってくるよ」

「健闘を祈っておくよ」

「問題はこれからですけどね」

手を振りながら高嶺を見送る。

「……さて、パンケーキの準備をしておこうかな」

作り終えた器具や道具を念入りに綺麗にして、所定の位置へと戻す。

「あとはクリームと……」

「澤田君」

「ん？フロアで何かあったのか？」

少し困った顔をした四季さんが入ってくる。

「高嶺君が出したパンケーキが駄目って言われていたから……大丈夫、でいいのよね？」

「ああ、今のところは。この後、素人とは比べ物にならない程の美味しいパンケーキが出てくるから、味わうと良い。プロの腕を体験出来るいい機会だぞ」

「……なんだか、ワクワクしてない？」

「しているとも。これからのことを考えれば当然な……ふふふ」

「うわあ、笑い始めた……ちよつときもい」

失敬な、だが、それが良い。もう少し蔑んで言ってもらえるとこちらとしても……あと見下しも追加で。

「出来たよ。ほら、食べてみなさい、無知なる弟よ」

その後、涼音さんを連れてぞろぞろと厨房に入って来たので、脇へ退散し、パンケーキを作る様を後ろから見ている。

「そんじやまあ……いただきます。はむ……んん」

出来上がったパンケーキを勧められるがままに一口食べる。

「……確かにちがうもんなんだな。ふわふわしててちゃんと甘くて

……昂晴が焼いたやつは素人くさいってのかな、硬くて焦げの苦みがあつたのがハッキリわかる」

「もしかして姉貴って……本当にプロだったのか？」

「アンタ、姉を一体どんな目で見てたわけ？」

「実際に働いている姿なんてみたことなかったし。家で作る事もなかったじゃねーか」

そう言いながらも美味しい美味しいと食べる。

「あのー……アタシも一口、食べさせてもらっていいですか？」  
美味しそうに食べるのを見て、火打谷さんが恐る恐る尋ねる。

「はいよ。俺は違いが分かっただけでも十分満足した。甘いのもそんなに好きじゃないしな」

「やったつ！ありがとうございます」

「昂晴、お前も食べておくべきじゃねえの？」

「そうだな、一口もらうよ」

それにくるように、皆が食べてみたいと言い出す。……俺の分とか余ってるかな？

「澤田君は？」

「俺の分、余っているのか……？」

「二応ね、折角だし食べたら？」

「では、遠慮なく……いただきますね？」

「あ、うん……どうぞ」

少し寂しそうな表情を浮かべながらも許可をいただく。

「んっ。すごい、これ、美味しいです！」

「ふわふわしてる、おいひー！んー！」

墨染さんと火打谷さんが美味しそうに笑いながら食べる。

「自分で焼くのは違う……丁寧に焼くだけでも、違いって出るものなんだ……」

「生地は高嶺さんと同じのを使っているのに……こんなに違うのなんて、凄いですね」

四季さんと明月さんも驚くような表情を浮かべる。

じゃあ、俺も食べよう。

さつき見たパンケーキは見栄えから違うし、匂いも段違い。フォークを軽く刺してみたが、生地弾力がもやばい。これは旨いものだ、絶対にそうだと確認が持てる。

「……いただきます」

一口、食べる。………：………：美味しい、こんなに美味しい物なのか。前の店で食べてたものも中々だったが、それより断然こっちの方が美味しい。………しかもこれは涼音さんが実際に作った物では？こんなに幸せを享受して良いのだろうか………？

「神よ……っ！」

取りあえず、実在すると思われる神に膝を付け祈りを捧げておく。

「うわっ、達也先輩が美味しさのあまり壊れた!？」

「………」

美味しい美味しいと絶賛するみんなを涼音さんが怪しんだ目で見ている。

「……もしかして、アンタが仕組んだの？」

「は？何のことだよ？いやいや、睨むなよ。本当に何も知らないんだって！」

第一に連れて来た弟を疑う。

「というか、姉貴のパンケーキが美味しいって喜んでるのに………何怒ってるんだよ」

「だって、なんか……べた褒めだから。あれとか大袈裟過ぎでしょ」  
天に祈りを捧げている俺を指す。周りも苦笑いをして見ていた。

「それだけの味だったってことだろ？正直、俺も美味しいと思ったぞ」

「アレは、アンタの友達の手作り方法がなっちゃいないのが原因」

「何を疑ってるのか知らんけど、俺だって頼まれてこの店に来ただけだ。もし何か仕込んでるのなら、全部昂晴の仕業だ。俺じゃない」

「全ては………キミが仕組んだこと？」

仕込み役の高嶺に視線が向けられる。

「仕組んだとかそんな大層な話ではなくて………今の俺は、真面目に



作ってあの出来だったんですよ」

ようやく話の場に持っていく事が出来た。頑張ってくれ！俺はパンケーキを堪能させてもらうぞっ！

キャピキャピとパンケーキを囲む女子陣。……この中に入れと申すか……くう。

どうしようかと考えていると、俺の存在に気づいた人が居た。

「なに？澤田君もおかわり？」

おおっ……女神よ！

「このわたくしにも、どうかお慈悲を……！」

片膝を付き、皿を差し出す。

「いや、そんなにしなくてもちゃんと分けるから……はい、そうぞ」

「感謝……！圧倒的感謝っ！」

貰ったパンケーキにクリームを付けて食べる。

「……美味しい。生きてて良かった」

次は何も付けずにそのままを味わう。……これだけでも美味しい。もう美味いって感想しか出てないくらいには脳が満たされている。

「……この世の幸せがここにあったのか……」

「いや、さつきからなに一人で言ってるの？頭おかしくなった？」

俺の独り言を聞いて、困った顔でこちらを見る。

「実際に食べることが出来た感動が漏れ出ているだけだから、気にしないでくれ」

「隣でブツブツ話されたら気になるでしょうが……」

「それもそうだな。これは失礼、あまりの美味しきにな」

「そういえば、澤田君、甘い物好きだしね」

「まあな……って話したっけ？」

「時々、お店にチョコとか持ち込んでるでしょ？それ見てればすぐわかる」

「あー……確かに。差し入れとかかにして置いてたりもしてるし簡単か」

四季さんと雑談をしながら高嶺の会話を耳に入れてく。どうやら綺麗に話しは纏まり、涼音さんは無事一緒に働いてくれるようになった

た。

「では、涼音さん。これからよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

みんなとも挨拶を済ませます。

「そうと決まれば、サボってた分のブランクを埋めないと……材料、確認させてもらっていい?」

そう言っただけで冷蔵庫の中身を確認し始めた。

よし、これで最後の1人も無事働いてくれることになったな。安心安心。

まあ、本格的に忙しくなるのはここからではあるけど……今はメンバーが無事揃ったことに喜んでおこう。

「それじゃあ、お先に失礼します。お疲れ様です」

「お疲れさまでした」

日も落ち、外が暗くなってきたので、皆が各々帰りの支度を始め店を後にする。

「あれ、澤田君はまだ帰って無かったの?」

女性陣の着替えの最後に四季さんが出て来た。

「着替えるタイミングを逃したからダラアつとしているだけじゃない」

「あ、そういうこと。もう空いたし大丈夫」

「おっけー、そんじやお疲れさん。また明日から気合入れて頑張ってください」

「そんなだらけきつた格好で言われてもなあ……はいはい、また明日」

腕を上げてヒラヒラと手を振った俺に呆れながらも帰っていく。

「そんじや俺も帰ろうかね」

席を立ち、奥のロッカーへと向かう。

「……ん?」

入ろうとすると、中から人の気配を感じた。可能性なら明月さんく

らいか。

ドアノブを回す前に一応ノックをする。

「明月さんか？今入って大丈夫か？」

「え？はい。大丈夫ですよ」

許しを得たので中に入る。そこには椅子に座って誰かを待っている雰囲気を出す明月さんが居た。

「……もしかして、俺を待ってた？」

「ですね。澤田さんにお話があつて待つてました」

わざわざみんなが帰ったタイミングを見計らつたとなれば……。

「……もしかして、俺、告白されるのか……？」

「ええっ？どうされたのですか！急に……」

「いや、二人きりのタイミングを見計らつての話と言えば……なあ？」

「何が、なあ？ですか……。そもそも、分かつてて言ってますよね？それ」

「まあ……ちよつとしたジョークです。それで？涼音さんの事とか？」

「はい。以前澤田さんから受け取った紙に書かれていた皆さんが、無事一緒に働くことになったので一度話の場を設けようかなと」

「ちようど一段落したタイミングだし、いい機会か」

明月さんに勧められ席に座る。

「んー……と言つても、後は皆でオープンの為に頑張つて……大家さんに認めてもらつて……さあオープン！つてだけだしなあ」

「なんともまあ大雑把な回答を……」

いや、すまん。そこは俺も詳細は分からないんだ。知っているとなれば涼音さんの海兵隊式の調教だし……。

「そうだなあ、しいて言うなら……大家さんに来て貰う日程を決める……くらいか？」

「特に大きな出来事はないと……？」

「だな。涼音さんはもう大丈夫。今後は生き生きと厨房で叱咤の聲が飛び交うだろうから安心してくれ」

「そうですね、それは楽しみですね」

「怒られるのは高嶺と……あとは俺かなあ……？」

明日からの罵声の嵐を想像しながら、気合を入れないといけないと思うのであった。

## 第48話：約束の日

涼音さんが参加し、ようやく本格的に店の体制が整った。

既にミカドさんと明月さんにはどのようなようにして行くかは事前にやり取りはしていたが、最後の1人が加わったことでみんなにも共有した。

キッチンには涼音さんと俺が常駐し、高嶺にも入ってもらおう。フロアとキッチンの忙しさを見て俺がフロアのサポートに入る事もあるが、そっちは明月さんを始め、四季さん、墨染さん、火打谷さんの4人で調整して回していく。休みやシフト次第ってこともあるが……。

ミカドさんには裏方の仕事を。仕入れや帳簿、経理系をお願いすることになった。一応人が居なければドリンク位なら問題無いとは言っている。

メニューも一気に増やした。

以前に明月さんには渡したメニューに追加でパスタ系が二種類、オムライスも一種類、そしてデザート部門にパフェとパンケーキ。工程と味の統一には少し手間がかかったが、問題無いレベルまでは仕上げた。

後は涼音さんが作るケーキなどのテイクアウト制度。正直殆どを涼音さんに任せてしまっている。それでは今後が駄目だと分かっているので、頼み込んで教えてもらってはいる。……分かってはいたが、滅茶苦茶大変だった。

パン屋よりはマシとはよく聞くが、朝は7時前には店に来る必要がある。これは別に良いが、問題は作る方だ。手順を完璧にこなす為には覚えること慣れる要素が多い。感覚的な部分もあり、合格がまだもらえていない。

「なんだその腰の使い方は！もつと力を入れろっ！ジジイの方がまだ気合入ってるぞっ！」

「イエッサーッ！」

後ろから飛び交う罵声に、俺と高嶺が大声で返事をする。

「うむ、声だけは一丁前だな」

涼音さんの罵声と、調理器具と食材が混ざる音が厨房内に鳴り響く。最初は他の皆が何事かと様子を見に来ていたが、すぐに慣れ今では楽しそうに見ている始末。

「終わりましたっ！確認をお願いします！」

「ほう、随分と早いではないか……。まさか手を抜いたわけはないな？」

「いえ、全力で挑ませて頂きましたっ！」

「やるではないか。前職の成果か？」

「そうであります」

ピシッと敬礼をする。

「貴様もこいつを見習えっ！いつまでもたついている！日が暮れるぞっ！」

「サー！イエツサー！」

「よーし、では、貴様には次をして貰おう」

「了解であります！」

その後、涼音さんからのしごきを楽しみながら、昼休憩へと入る。

「ふう、若い男を一方的に罵るのも良いもんだね」

休憩室で肩を回しながら満足気に言う。

「言い方はあれでも、教え方とかが上手いので文句が言えないところは何とも……」

ぐったりとした声で机に突っ伏す高嶺。

「なんだ、根性が無いねえ。その子は普通にしてんのに」

「いや、元々の鍛え方が違いますので比べるのは酷ですよ」

「前も喫茶店だったんだよね？どんなかんじだったの？」

「そうですね。ぶっちゃけ涼音さんのが可愛いって思える位には激やばでしたね。クソブラックでした」

「つまり……こき使っても問題無いつてこと？」

「直ぐにそれが思いつく辺り、やっぱり良い性格してますね……」

「褒めても優しくする気はないから」

「望むところですよ」

「ほほう、言ったな？どこまで耐えられるか楽しみだ」  
お互いにニヤリと笑って挑発する。

「煽り合うのは良いですが、それって俺は無関係ですよね……？」

「戯け、あんたも強制に決まってるだろうが」

「一人だけ楽できると思ったら大間違いだぞ」

「ええ……」

絶望した様な声を出して再度顔を突っ伏す。

「……ほれ、俺のチョコレート分けるから元気出せ。美味しいぞ」

高嶺の顔の横に一個置く。

「姉御も、おひとつ、どうっすか？」

「誰が姉御じゃ。ありがと、一つもらうよ」

涼音さんからの教育も大事だが、同時に料理とフロアでの接客とドリンクなどの対応もして行かなければいけない。

8・2くらいでキッチンが主ではあるが、何とかかなりそうではある。後は……タイミングと時間が空けば、ミカドさんの仕事も聞いている。まあ、こちらは聞くだけで手は出さないんだけど。

忙しいが、その分充実している様な気もする。今までがゆっくりし過ぎだったのかもしれないが……。

とか考えている内に、大家さんを招くと決めた約束の10月18日になっていた。

「はあ……ドキドキする……」

そろそろ大家さんが来る時間が近づき、四季さんが胸に手を当てて深呼吸をしていた。今日は朝から若干ぎこちなくソワソワしっぱなしであった。何度か『大丈夫かな……？』など聞かれたので、取りあえず『いや……どうだろうなあ？』と返しておいた。それを聞いて更にソワソワしている姿を楽しみながら今日を過ごしたが、流星に可哀そうかと思つて一個だけアドバイスを教えた。

「ナツメさん、そんなに強張った顔をしてはダメですよ。ちやんと笑顔で出迎えしないと」

「ヘーキですよ。ちゃんと練習だっただけなんですから。自信を持って、笑顔で頑張りましょう」

今日のありさまを見ていた明月さんと火打谷さんが励ます。

「……笑顔で、笑顔で……っ、はい、よろこんでー!!」

あかん、緊張のあまり四季さんがおかしくなっちゃった。

「それは居酒屋のノリです」

「今更ジタバタしても仕方あるまい。やるだけやったのなら結果を待つしかないだろう」

「それはそうだけど……」

「澤田さん澤田さん」

落ち着きのない四季さんを眺めていると、横から明月さんにコソコソと話しかけられる。

「実際のところ、澤田さん的にはどうでしょう?」

「俺的に……?というか、ここまで来ているのが答えみたいなものだけどなあ……」

無事、今日まで来ているのだ。ここで大家さんがノーというとは思えない。

「……それもそうですね。すみません、ナツメさんが心配されていたので……何かあったのかと」

「ああ、それはソワソワしている四季さんを見て楽しんでいただけだから気にしないでくれ」

「……………」

無言になった明月さんを見ると、『マジかよこいつ……』みたいな絶句した顔で俺を見ていた。

と、同時に、入口のドアが開き、ベルの音が響く。

「いらっしやいませ」

大家さんが入って来たのに合わせて、一斉に挨拶をする。

「……………」

それを見て、驚いた表情を浮かべて立ち止まる。一発目の印象はまずまずの様子。

「随分と、お店の雰囲気が変わったのね」



「お待ちしてました」

「ナツメちゃんも随分と変わった」

「あのっ、これは、その……っ」

「似合ってると思うわ。やっぱり若い子はいいわね……ふふ。案内してくれる？」

四季さんの姿を見て嬉しそうに微笑む。

「あっ、失礼しました。こちらのテーブルへどうぞ」

席まで案内し、そこへメニューを持った火打谷さんが現れる。

「いらっしやいませ。メニューをどうぞ！」

「ありがとうございます……あら、メニューも増えたのね。ケーキまで……」

「じゃあ、そうね。チーズケーキと、こっちのコーヒーをもらえる？」

「畏まりました。少々、お待ち下さい」

注文を受け取り、厨房へと向かう火打谷さん。それを見ていると、四季さんがこっちを見ていた。……アドバイスは役に立ったのかね？

待ち時間の間、大家さんと目が合ったので、取りあえずお辞儀を返しておいた。

「お待ちせいたしました。チーズケーキとコーヒーです」

大して時間はかからない内に、注文が運ばれる。

「それでは、ごゆっくりお過ごし下さい」

「ありがとうございます」

優しく微笑み、チーズケーキを一口食べて、ゆつくりとコーヒーを飲む。

「……ふう……」

「このケーキ、美味しいわね。どこかのお店？」

「いえ、このお店の中で作っています」

「そう……ウイトレスにも新しい人が増えて、今すぐにもお店をオープンさせられそうならいいね……」

「はい。そのつもりで準備しましたから」

「ずっと、お父さんやお母さんの真似をする事だけを考えていまし

た。でも、それではダメだと教わって、考えました。どうすれば、お客様に来てもらえるかって……」

「ワタシ一人だけじゃなく、周りのみんなに助けてもらいながら考えて……今のお店にしました」

「……そう……」

頷きながら俺をチラリと見て、また視線を戻す。

「ケーキは美味しい。コーヒーにも文句はない。流行る理由は沢山あるのに、お客様が絶対来るとは言えない。それが水商売なのよ？」

「わかってます。それでもワタシは、このままじゃ諦められませんから」

真つ直ぐに大家さんを見て、はつきりと口にする。

「仕入れの方はどうなってるの？1日の客数や、客単価の設定。それから、売り上げの目標は？」

「そつちも計算してます。なんとか無理のない範囲に出来たと思います」

「……そつちに関しては今よりもう少し高めに出ると思うけど、まあ後でいいか。」

「……」

無言で目を閉じる。

「……あー、もうダメだって言おうと思ったのに。大学に専念しなさいって言うつもりだったのよ」

観念したように、降伏宣言を口にする。

「じゃあっ!？」

「ここまでされて拒否したら、私がイジワルしてるみたいじゃない……分かった。認めます。この店はナツメちゃんに任せます」

大家さんからの勝利条件を聞き出すことに成功した。

「ありがとうございますっ!」

それを聞いて、四季さんが勢いよく頭を下げる。

「ナツメちゃんにほだされちゃった。ここまでされて、やっぱりダメとは言えないじゃない。それじゃあ意地の悪いおばあちゃんみた

いだもの……」

「そんなこと全然思っていないません。ワタシのことを思ってくれてっというのはわかってました。……むしろ、申し訳ないと思ってます」「だったら、今からでも撤回してくれていいのよ?」

「それは出来ません」

四季さんが嬉しそうに、ゆっくりと首を振る。

「このお店の為に……いえ、ワタシのワガママの為にみんなに沢山協力してもらって、ここまで出来ました」

「あつ、でも、責任を感じてるとかそういうことではなくて……その、なんというか……、このお店は、もうワタシだけのワガママじゃないんです。だから、前とは違う意味で、諦められません」

「嬉しそうですね」

四季さんと大家さんのやり取りを眺めていると、明月さんから声をかけられる。

「そうか?」

「はい、口元が特に。それに、随分と優しい目で見られていたものですから」

「そうだな。ようやくスタートラインに立ったって実感が湧いたかも」

「それだけですかあ?」

椰揄う様な目でこちらを見てくる。

「後は、四季さんの変化に……かな?」

「おや、意外と素直ですね。はぐらかすかと思いましたが」

「失礼な。俺はいつでも素直だぞ?」

「素直な人は、人の不安そうな様子を見て、楽しまないとはいいますが……?」

「……………」

「無言は肯定と受け取りますよ」

「おっと、そろそろ大家さんがお帰りの様だ。送って差し上げないと」

「逃げましたね」

後ろからの視線を受けながら、帰ろうと席を立った大家さんに声をかける。

「すぐそこまでお見送りますよ、マダム」

「あら、そう？それじゃあ、お言葉に甘えちゃおうかしら」

俺の出した腕に掴まりながら外へ向かう。店から出ると、中から火打谷さんの喜ぶ声が聞こえた。

「嬉しそうねえ」

「今日の為に、みんな頑張って来ましたから」

「そう、お店もだけど、ナツメちゃんも随分と変わっていて驚いちゃったわ」

多分、変わったというのを見た目だけじゃなくて中身のことだろう。

「結局、あなたが言っていた通りになったわね」

「そうなるように、本気で取り組みましたので……有言実行をすれば、多少は信用は生まれると考えていたので」

「そうね。ほんとに全部成し遂げちゃうだもの。任せても安心かもって考えちゃうわ」

「それが狙いでしたので」

「まんまと策に乗せられちゃったのね」

少し歩くと、俺の腕から手を離して立ち止まる。

「ここまででいいわ。あなたも早く喜びを共有したいでしょ？いつまでも老人の相手は可哀そうなもの」

「問題無いですよ。後でしっかりと分かち合うので」

「……お店のこと、よろしく頼むわね。ナツメちゃんにも言ったけど、何か困ったことがあれば、いつでも頼ってね」

「お任せ下さい。それと、いつでも大丈夫ですので、お好きな時にまた来てください。今度は美味しい紅茶をごちそうしますのです」

「ふふ、ありがとね。楽しみが一つできちゃったわ。それじゃあ、また来るわ」

「はい。今日はありがとうございました」

手を振って帰ってく大家さんに頭を下げて見送る。

「……よし」

無事、許可も貰えた。これまでの頑張りが成功した。

店に戻り、中に入ると、何やらみんな話し合いをしていた。

「あ、達也先輩！おかえりなさいです」

「ただいま、何か話し合い中？」

「お店をオープンさせる前にどうやって告知しようかと話し合いをしているところですよ」

「なるほど、広告をどうするか相談中か」

「あ、澤田君。大家さん大丈夫だった？」

「また来るって。楽しみが一つ増えたって嬉しそうだったぞ」

「そう、よかった」

その後は涼音さんからの提案を採用し、SNSの方でも情報の拡散を進めることになった。

「うーむ、善し悪しが分からん」

夜になり、チラシ作りを女性陣に任せていたが、俺たちからも意見があれば明日までお願いと言われ、渡された紙を見ていた。

「どうしたの？そんなに悩んだ顔して」

「いや、意見と言われても良く分からんからさ」

帰りの支度を終えた四季さんが声をかけてくる。

「主に火打谷さんと墨染さんが決めてたから、ワタシも同じなんだけどね……」

「まあ、今時つて感じで良いかと思う……位しか感想が言えないな」

「特に修正とかは無さそう？」

「俺からは特に。これで良いんじゃないかな」

「そう……、じゃあ大丈夫かな。高嶺君は？」

「今日も感覚を覚えたいから、そっちの着替えが終わるまで厨房に居るよ」

「そうなんだ」

何かに納得した様な声を呟く。

「そういえば、今日のアドバイスは役に立った？」

「ああ、あれ？アドバイスって程でも無かったと思うけどなあ」

「何が来るか分かってれば多少は気が楽になるかなって思ったんだが？」

「まあ確かに、気休めにはなったの……かな？」

「大家さんをあまり待たせるのも良くなかったし、言い塩梅だったと思ってる」

「そっちにとつては、ワタシへの証明にもなったしね」

「さあ、どうだろうな。事前に大家さんと注文する物を決めていたかもしれないぞ」

「自分で疑わせて何がしたいの……」

「そりゃ！四季さんにそう言った目で見てもらいたいのです!!」

「ま、無事オープン許可が貰えたし、気は抜けないけど一安心だな」

「うん、まだまだお店を開くに向けて、やることが沢山あるけど」

「やることは決まってるから簡単簡単。それらをこなせば無事カフェステラ開店だ」

「気軽に言うなあ……。こっちは大丈夫か心配なのに」

「今までに比べたら軽いもんじやないか？」

「それは……そうかも？」

「何か気になることや相談があれば遠慮なく言ってくれ。いくらでも協力するよ」

「うん、わかった。……それと、ありがとう」

「ん？」

今、小声で感謝を言われた気がしたので四季さんを見る。

「……なに？」

「いやあ、人にありがとつていう時はちゃんと伝えた方が良くと私は思うわけですよあ？んん？」

「……うっぎ。……ありがとう」

「んん？何に対してのありがとなのかな？言葉は正確に伝えないと」

「はあ、言わなければ良かったかも……」

「ため息吐かれると流石の俺でもダメージが入るのだが……?」

「自業自得でしょ。茶化したそっちが悪い」

「ごもつともで」

仕方ないっ！目を逸らして照れながらも言う四季さんが可愛いんだもの！これを見て揶揄わないという選択肢があるだろうか……? いいや、ないっ！

「さつき、明月さんから聞いた。澤田君がお店を開くために色々してくれてたって」

「……余計なことを口走ったみたいだな。何か聞いたりした?」

「大家さんに取り合ってたとか、閣下と仕入れとかの話し合いをしてたとか……色々?」

「へえー」

「頑張ってるのに、それを特に口に出さないから困ってるって文句言ってたくらいかな?」

「いやあ、言う程の事でもないと思うぞ。頑張ってるのはみんなも同じだし、確かに表面化しにくいのはあるかもしれないけど、好きでしているだけだし」

「うん、それは分かっている。だからちゃんとお礼と、労っておこうかなって。……お疲れ様」

「……四季さんに言われるだけで、今まで以上に頑張れる気がしてきたわ」

「だから茶化すなっ」

ほんとのことなんだけどなあ……。

「四季さんもお疲れ様。今後もよろしく」

「ええ、こちらこそ」

話し込んでいると、残りの女性陣も出て来た。

「お疲れ様です」

「お待たせしました。奥、空きましたよ」

「了解、そんじゃお疲れ〜」

「お先に失礼しまーすっ」

「四季さんも、また明日」

「また明日」

ぞろぞろと出て行く女性陣を見送る。

「さつとと、厨房で頑張っている人に声をかけましょうか」  
席を立ち、厨房に居る高嶺の方へ向かった。



## 第49話：マドレーヌ

「ふあく……朝かあ……」

カーテンから差し込む光に起こされ、体を起こす。

「これからは毎日この時間に起きなくてはな……」

今までとは違い、お店での仕込みや準備がある。幸いなことに、家と店の距離が近いので苦ではない。

「さてと、行くか」

朝食を済ませ、支度を整える。最後に部屋の中を好き勝手に飛んでいる蝶に声をかける。

「そろそろ、出るぞ〜」

俺の声に反応して、肩に止まる。そのまま風景に溶けるように姿を消す。

ここ最近はずいぶん忙しかったから夢で会って無かったが、その代わりと言わんばかりに勝手に部屋を飛び回ったり、俺の朝食を眺めるようにテーブルに止まったりしている。特に害はないので気にせず放置している。

「……お、涼音さんから連絡来てるな」

『起きてるかー?』とメッセージが来ていたので、『ちょうど家から出た所です』と返事を返しておいた。

店に着き、裏口の鍵を開けて中に入る。二人はまだ来ていない様だ。

「おはようございます、澤田さん」

休憩室に入ると、中に明月さんが居た。

「うい、おはようございます。既に起きていたんだな」

「初日ですから、私も気になってしまっただけ」

「初日……確かに。とは言っても、マドレーヌを作ってチラシを配布する日だけだね」

「楽しみですね。涼音さんが作られるのですよね?」

「ああ、実際美味しいから楽しみにして良いと思う。割と好評だし

な

「さらっと先の事を話されても……まだ作ってすらいらないのに」

「あの芳ばしいバターの風味と、程よい甘みが口の中一杯に広がる……実物が楽しみだ……」

「それはそれは……。今日はそれらを配る、で良いのでしょうか？」

「だな。涼音さんから話があったように、作ってチラシと一緒に宣伝だ。涼音さんと高嶺は近隣住宅のポストへチラシを配りに。他4人は駅前でチラシとマドレーヌ配布だな」

「了解です。……あれ、澤田さんはどうされるのですか？」

「あー……俺か」

「そういえば特に考えてなかったな。」

「んー……そうだなあ。駅前の配布にでも付いて行こうかなあ？いや、男が居たら女性陣の華に汚点が出るな……」

「汚点って……」

「いいや、色とりどりのウェイトレス姿の女性が4人っ！世の男どもは確実に見る。可愛らしいデザインという事もあり、女も見るだろう。甘い物で釣れるしな。そこに俺が居たらどう思う……？折角の美を台無しにしてしまう……！という事で、離れて一人で配るよ」

「何もそこまで気にされなくても……」

「すまん。これは俺個人の問題なのだ。これだけは譲れない」

「……とか言って、遠くから私たちの姿を楽しもうとか考えていますんか？」

「……勘の良いガキは嫌いだよ」

「やっぱり凶星でしたか」

「いや、割と本音ではー」

「おはようございます」

明月さんと雑談をしていると、高嶺が入って来た。

「高嶺さん。おはようございます」

「中から話し声が聞こえると思ったら、明月さんが居たのか。朝早いんだな……ってそうか、ここを間借りしてるんだっけか」

「高嶺さんもキツチンもお仕事を？」

「ああ。澤田さんと同じだな」

「なるほど、お店のお仕事でしたら、私も手伝いましょうか?」

「ん? いや、キッチンはおうちの担当だからな。どうしてもって時はお願いするけど、今日は大丈夫かな」

「……分かりました」

「その分、俺に出来ないことを、後で明月さんにはやってもらうことになるだろうしな」

「私に……ですか?」

「出来上がったチラシとマドレーヌを他のみんなと一緒に配って欲しいんだ」

「なるほどなるほど。それ位でしたら、喜んで引き受けます」

「ああ、よろしく」

「それじゃあ、そちらはお任せします。何かあれば、いつでも呼んで下さいね」

そう言って、部屋を出て行く。……じゃあ着替えるか。

「そういえば、涼音さんは?」

「キッチンの確認があるから、先に着替えて来いとのことですよ」

「じゃあ、さっさと着替えて交代しないとな」

「ですね」

遅くなるわけにも行かないので、サクツと着替えましょうか。

「それじゃあ、チラシと一緒にこのマドレーヌも配ろう」

チラシと一緒に、包装を終えたマドレーヌを並べる。

「味見させてもらったけど美味しかったよ」

「ああ、天にも昇るような絶品だった……!」

「あんたはいちいちリアクションが大げさなんだよ」

作ったマドレーヌの一つを食べさせてもらったが、めっちゃクソ美味かった。感動の余り涼音さんに膝を付いて手を合わせたら頭を引っ叩かれた。

「それじゃあ、配りに行きますか」

「え？そのまま行くんですか？勿体無くありませんか？」

配りにいこうとする四季さんに火打谷さんが不思議そうに聞く。

「でも、その為に作ってくれたんだから」

「いえいえ、そっちではなくて、お店の宣伝をするのでしたら、相應の服装があるんじゃないか。つてことですよ」

「ああ。確かにそうかも。普通にチラシを配るよりも分かりやすくなるかも」

「え？それって……」

何かに察した四季さんが驚きの声を上げた。

「この恰好で表に出ろとっ!？」

その後、火打谷さん達に連れられ、奥から戻って来た皆は、お店のウエイトレス姿を着ていた。

「ナツメさん、どの道その服で接客する事になるんですから」

「それはわかるけど、わかつてはいるんだけど……やっぱリスカート短くない？」

最初の頃と同じ様な反応を示す。

「ヘーキですつてば。むしろ、そうやってモジモジしている方が、エロさが増し増しな気がします」

ふむ、火打谷さん、キミとは美味しい酒が飲めそうだな。今度良い店に連れてってあげようではないか。

「コスプレと思われそうで嫌だなー……」

「その分目立つことで、お客さんが来てくれるかもしれないですよ？」

「やる。文句言つても仕方ないから、やるけど」

観念したように覚悟を決める。

「その意気その意気」

「それじゃあ、俺は近隣住宅にポスティング」

「私たちは駅前でチラシとマドレーヌの配布ですね」

「ああ、そっちは頼む」

「了解です」

「あ、私もポスティングの方に回るよ」

「行かないんですか？渡して、食べてくれた人の反応をその場で確

認したりとか……」

「確かにそれも気になるけど……今回は止めとくよ」

「そうですね、ポスティングも高嶺さん1人だと大変でしょうし、良いと思いますよ」

「そうだな。それで行こう。ポスティングは涼音さんと高嶺に任せよう」

「それじゃあ、行きましょう」

四季さんの開始の合図に全員で『おー!』と声を合わせた。

「私たちの方も頑張らないといけませんね」

「ですね、目指せ配布完了ですっ」

「駅前で……この恰好で駅前を……」

「喜んでもらえるといいですね」

俺の前を歩く女性陣が各々の反応を示す。

「それにしても、どうして涼音さんはこっちに来なかったんですかね?」

「昂晴君の方が大変だったからじゃない?」

「そうなのかなー?」

「以前働いていたお店が近くにるので、気を遣われたのではないでしょう?」

「あー……それなら納得です。確かに気まずいですねそれは」

「なので、私たちが頑張りますよ」

「任せて下さいっ、バンバン告知していきますので!」

駅に着き、早速活動を始める。涼音さんが作ってくれたマドレーヌはそこそこある。これを全部捌かないと帰れそうにはないな。

「じゃあ、俺は少し離れて宣伝しておくから、そっちはお願い」

「え、達也先輩は一緒にこっちでしないのですか?」

「バラけた方がその分広げれるからな。そんじやっ!」

全体の一割から二割無い位の量を持ってその場を離れる。……さてと。

一応女性陣が視界に入る距離で良いとして……配ろうか。ある程度受け取ってくれそうな人を見分けておかないとな。

駅前を行き交う人を観察しながら、周囲に告知しつつ、取りあえず若い女性を中心に声をかけて渡してみる。

これでも、顔はイケてる方だと……思いたい。前世でも言う程悪くは無かったし……見た目の価値観は変わらないはずっ！

なるべく警戒心を抱かせない様に声をかけ、チラシを見せて視覚情報を与え、今度は食いもんで興味を惹かせる。ついでにSNSもやっていると最後に添えて渡す。うむ、最初の内はこれで行こう。

前を通ろうとする人に配ること一時間、周辺でチラホラと興味を持ち始めてこつちを見ている人が出来始めた。

そちらに近づき、チラシとマドレーヌを渡して行く。中にはその場で食べ始める人も居たので、しっかりと包装紙を回収していく。

「……この調子ならあと一、二時間で終わりそうだな」

想定より早いペースで消費が出来ている。これなら無事涼音さんに報告出来そうだな。

安心しながら周囲を見ると、少し離れた場所から女性陣の方を指差して盛り上がっている男たちが居た。

見た感じ、『おまえ、声をかけて来いよ』的なノリである。やっぱり居るんだな。まあ、したくなる気持ちは完全に同意だけだな。

原作ではそんなことは起きていないので多分大丈夫だとは思いますが……、配っておくか。

離れた4人組の男子に近づいて、チラシとマドレーヌを渡す。いきなり声をかけて来た俺に驚きながらも、お礼を言ってお受け取ってく。

4対4で丁度人数が合うとか話していたのだろうか……？『お前誰が良い？』みたいな会話をしていたのかもしれない。知らんけど。

その後も配っていると、駅前から信号を渡った地点で、高嶺が女性と話している場面を見かける。

……あれは確か、涼音さんが以前に働いていたお店の社員さんだったか？

嬉しそうに話している女性の手には、例のマドレーヌとチラシがあった。

チラシ配りの日から何日か経ち、その日はSNSの発信をもつと出来ないかと話し合っていた。

その中には、たまにはお店だけの内容だけでは無く、息抜きの要素も入れておいた方が親近感が湧くと提案が出た。

「断る」

その夜、早速ミカドさんをお願いしてみるが、案の定初手は断られた。

「前にも言っただろう、吾輩は貴族だ。人間に愛想を振りまくつもりは無い」

「猫の姿で接客してほしいってわけじゃない。あくまで写真を撮るだけだから……ね？」

「……………」

四季さんの提案に渋い顔で無言を通す。

「カリカリになっても？」

そこで、悪魔の条件を出して来る。

「いちいちカリカリを持ち出すな！卑怯だぞっ！せめて、ふりかけだけは何か……っ！」

ふりかけは死守したいボーダーなのだろうか？

「写真一枚につき、ふりかけ一つまみ」

「ひとつまみ……っ?!強欲にも程がある!動物愛護団体に訴えるぞ!貴様あ!」

「ワタシが言うのもなんだけど……そこに貴族の誇りはあるの?」

ミカドさんにとってはそこは譲れない何かなのだろう。カリカリは飽きるらしいし。

「コホン。落ち着いて下さい、閣下」

見かねた明月さんが声をかける。俺と高嶺はそれを見守る。

「閣下は勘違いをされています」

「何が勘違いだっ！騙されんぞ」

「いいえ、勘違いです。愛想を振りまいたり、媚び諂う必要なんてありません。そんなことは、普通の猫がすることです」

「求められているのは、写真だけで人を魅了する気品です。それは貴族である閣下にしか持ち得ないものです」

「貴族である我輩にしか……?」

「貴族としての気品、そしてその優雅な振る舞いで見た人を従えるのです」

「従える……」

「閣下なら容易いはずです。なにせ貴族、公爵ですからね」

「我輩……貴族……」

「まあ、それでも難しいと仰るならば……無理強いは出来ません。諦めるしかないでしょうね……できないのであれば」

ものすつごく単純な煽りだが、ミカドさんには効く。

「ハンツ、バカを言うな。その程度、私にかかれば容易な事だ」

「では、写真の件……お願い出来ますか?」

「仕方あるまい。そこいらの猫にはない、格の違いをみせつけてくれる。それに、カリカリだけというのも嫌だしな……」

「ありがとうございます……フツ」

言質を取った明月さんが勝ち誇った顔で笑う。これはチョロい。

善は急げ。ミカドさんの気が変わらない内に早速撮影会を始める。

「あーいいですねー、そのポーズいいですねー。凄くいいですねー」

「切れてる、断然切れてる。ナイスバルク。仕上がってる」

「いいですねーいいですねー、あー、お腹丸出しにしているところも可愛いですね」

「ナイスシックスパック。腹斜筋が威嚇してる」

「フンツ。次はこの角度など……どうだっ?」

乗せられたミカドさんもノリノリである。

「振り返り気味に目線もらえますか?あーそんな感じで。流し目が素敵ですよー」

「いよっ、ケット・シー界のレオニダス」



言葉が通じるミカドという事もあり、望み通りの写真が撮れる。やりたいたい放題である。

撮影会も終わり、満足気に写真の選別をしている四季さんに声をかける。

「すまんが、この後時間あつたりする？」

「ん？別に大丈夫だけど……？」

「お店をオープンする時にあたって、一つ相談が……」

第50話：いざ、開店！……と、目が回るような忙しさ

「えっと……行列は、まだ出来てませんね」

開店間近になり明月さんが入口を確認してくる。

「いくら何でもそれは期待し過ぎだって」

「そうですか？涼音さんのマドレーヌなら、そういったこともあるかとおもったんですけどね」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、わざわざ開店前から並ぶ人はいないでしょ。数量限定商品があるわけでもないし……そういうのは、お店が慣れてからがいいかも」

涼音さんが、少し困った表情をしながら四季さんを見る。

「それで、ほんとはよかったの？冷蔵庫の中身……当初の予定よりかなり多く作っちゃったけどさ……」

「はい、大丈夫です。急にお願ひしてすみません……」

「いや、私は良いんだけどさ、だけど、余っちゃうことを考えると勿体ないなって思っちゃうわけ」

「多分ですが、心配する必要はないと思います……恐らくですが」

「ん？どういうこと？」

「涼音さんのケーキなら、予想以上に売れると考えているので大丈夫ってことですよ」

言い辛そうな四季さんに助け舟を出す。

「そう言ってくれるのは悪い気はしないけど、初日だよ？どんだけお客さんが来るかも分からないのに……」

「ふふふ、結果を期待してください。首が回らないくらいに来ますよ。きっと……」

「はいはい。まあ、もう作っているし今更言っても仕方ないけどね」「ですね」

涼音さんと話し終え、四季さんを見ると、『本当に大丈夫？』と不安

そんな顔でこちらを見ていた。

「大丈夫だって。もし売れ残ったら全部買い取っても良いからさ」

「そうは言っても……ううん、わかった。信じてみるって言っちゃったしね」

「その信用を裏切らない様にするよ」

「うん、期待してる」

以前、ミカドさんの撮影会をした日、四季さんに相談をしていた。

「初日に出すケーキの量を、増やす……？」

俺からの提案に不思議そうな表情を浮かべる。

「ああ、今想定している数より増やしたいんだ」

「えっと、それはどうして？」

「俺の見立てでは、初日に店に来るお客は俺たちが想定しているよりかなり多く来店することになるからだ」

「どうしてそう思うの？」

「……俺のサイドエフェクトが、そう言ってる」

顔に手を当てて、決め顔で言う。

「……はあ？」

「あ、嘘です。ごめんなさい、真面目に話します」

きつめの視線を頂けたが、今は真面目に話さなければ……。

「はあ……それで？その根拠はなに」

「実はだな、涼音さんが以前働いていたお店があるんだが知ってるか？」

「うん、前に聞いたことあったけど」

「実はそこのお店の偉い人、涼音さんと喧嘩……ではないな。まあ、辞めるキツカケみたいになった人が居るんだが、その人のおかげで俺たちが想像している以上に店のことが広まることになる」

「涼音さんの……？確か結構人気のお店じゃなかったっけ？」

「だな。雑誌とかにも載った事あるし、結構有名のはずだ」

「そんな人がどうしてお店を？」

「ほんとかは知らないけど、『ウチで育ったヤツが人気無いところちまで侮られる』……だったか？そんな感じのことを言ってたはず。その話が広がって気になった人が押し寄せて来る、みたいな流れだな」  
「でも、いくら人気店の人が言ったとしても、本当に来るかどうかなんてわからないし……リスク高くない？」

「いや、来るぞ。このままだとケーキが売れ切れて、買えなくてガツカリして帰っててく人が出てくるし、厨房の高嶺と涼音さんがてんやわんやになるぞ？」

「自信满满過ぎでしょ……って、もしかして澤田君……」  
何かにハッと気づいた様にこちらを見る。

「前に言ってた未来が見れるって話……？」

「そうそう、それだ」

「と、いう事は……当日は今よりもっと沢山人が来るってことなの？」

「ああ、俺が分かる範囲ではケーキが売り切れで提供できなくなってたってぐらいだが」

「だから数を増やそうと……因みにだけど、澤田君の予想だとどんくらい来そうなの？」

「あー……すまん、正確な数とかは分からないけど、ミカドさんの手が借りたくなるくらいには切羽詰まった感じだったな。パンクする一歩手前？」

「そんなにかあ……確かにそれくらい来るとなれば足りなくなるかも」

「だろ？涼音さんには申し訳ないけど、調整し直したい」

「なんて説明する気？」

「調べた感じもつと客が来そうだから数を増やしたいって話せば納得してくれないかな？」

「どうだろ……私より涼音さんの方が歴は長いし」

「それなら俺からも……ついでにミカドさんにもお願いしておくよ。それなら涼音さんとしては聞くしかないし」

「それは……そうかも。一応閣下がマスターってことだし……で

も、ほんとに大丈夫なの？」

「大丈夫。って俺が言っても、あまり信用はないと思うけどな」

「ああいや、別にそう言うわけじゃ……これまでも何回か実際に当ててたわけだし、嘘じゃないってのは理解してる」

「それじゃあ、信頼度を上げる為に更に追加で。最初の来店者は……高嶺の父親だ」

「お店を開いた一人目が高嶺君のお父さん？」

「そうだな。内容は、オムライスと食後にチーズケーキを注文するはずだ」

「そこまで言い切るんだ……」

「これが正解だったら多少は安心できるかと思っただけさ」

「……うん、分かった。今回は澤田君の提案を聞くことにする」

「お、マジか。安全をとって無しにされてもおかしくないかなって思ってたけど」

「最初はそうしようかと思っただけだね……でも、今まで色々して来てくれてたわけだし、賭けても……いいかなって」

若干困った様な表情で苦笑いをしている。

「けどやっぱり、不安要素が高いと……？」

「そりゃね。本当かどうか私には分からないから心配になる。それでも……」

「澤田君を、信じて……良いのよね？」

それでも真っ直ぐと、こちらを見て聞いてくる。

「……任せてくれ。四季さんの期待を裏切らないとだけ言っておくよ」

「期待してる。それじゃあ、練り直そっか。意見貰っても良い？」

「参考になるか分からないが、喜んで」

「早速雲行きが怪しくなるなあ……」

と、まあそんな感じで上手いこと涼音さんを説得し、初日から量を増やして今に至るって感じだな。こき使われたが……それは言いだしっぺだしご愛敬ってやつだ。

「そろそろ、10時ではないか？」

「それでは、外の看板をオープンにしますね」

「あ、待って、ワタシが行く。今日はワタシがしたいから」

「りようかいです。ではお願いしますね」

最初の大事な日ということで、四季さんが名乗り出て入口へ向かった。

「お客様、いらつしやいました」

看板を反した四季さんが店の中へ戻ると、それに続くように最初の一人目が来店する。

「いらつしやいませ」

それを店内にいる全員で迎える。

「なるほど。随分と明るくなつたな。店も人も……。よう、来たぞ」  
嬉しそうに高嶺に手を上げる高嶺父。

「いらつしやいませ。こちらの席へどうぞ」

「ああ」

席まで案内し、高嶺と涼音さんは厨房へと戻っていく。

「ご注文をお伺いします」

それに代わって、明月さんが注文を聞く。

「そうだな……。この半熟卵のオムライスを一つとコーヒーを。それと、食後にこっちのチーズケーキを一ついいかな」

「半熟卵のオムライスとコーヒーをおひとつ、それから食後にチーズケーキをおひとつですね。他にご注文はよろしいでしょうか？」

「ええ、大丈夫です」

「畏まりました。それでは、少々お待ちください」

明月さんとの会話を聞きながら、準備を進める。コーヒーか……。厨房には二つしか言って無かったが、そりやそうか。ドリンクはこっちに言うから内容に無くて当然か。

「何か手伝う？」

「いいや、コーヒーつだし問題ない……。が、カップの用意をお願いしても？」

「わかった、それと、澤田君が言ってた注文内容と同じみたいね」

「コーヒーは見逃してたけどなあ……普通に考えれば飲み物があるってくらい思いつくべきだった」

「あ、たしかに……けど、オムライスとチーズケーキは正解でしょ？」

「まあな、完璧じゃなかったけど」

「それだけでも充分に凄いなと思うのだけど……？」

「四季さんが納得してくれるなら……ま、いっか。ほい、コーヒー」

「ん、了解」

さてと、一応厨房の中も覗いておこうかな。

厨房に入ると、高嶺が真剣な表情を浮かべてオムライスを作っていた。

「かなり気合入っていますね」

「大事な最初のお客さん、しかも自分の父親となれば気合も入るもんでしょ」

「それもそうですね」

その様子を涼音さんと一緒に見ながら、念のためピーク時に向けて準備を進めて行く。

完成したオムライスを涼音さんの確認を得て運ばれていく。

「手ごたえはありますか？」

「問題は無いと思います。これまで沢山練習してきましたから」

「でもやっぱり本番は緊張したと」

「ですね。ですがちゃんとしたのを作れてたって自信はありますよ」

「それなら大丈夫か」

見た感じ、肩に余計な力が入っている様子も見えないし、問題はなさそうだ。

「そろそろケーキの方も出せるくらいかな？」

オムライスが運ばれてから10分くらいが過ぎた。

「少し様子を見てきますよ」

「ちよつとお願い」

厨房から出て、作業をするついでにテーブルの様子を窺う……うむ、まだ食べている途中だな。

厨房に戻り涼音さんへ報告をする。

「まだですね。あと5分くらいはかかりそうですよ」

「了解、それくらいに用意しておこうかな」

その後、チーズケーキも運ばれ、全部を美味しそうに食べて終えた高嶺父は無事帰って行ったのでそれを見送る。

「次のお客さんは……来ていないみたい」

「最初はな。昼前になればそれなりに来るぞ」

「ほんと?」

「ああ、そして昼が過ぎると更に客が増える。そりゃ忙しいくらいにはな」

「問題は昼過ぎてからかあ……」

「昼を過ぎれば墨染さんと火打谷さんも来るし、フロアは問題無いと思うから俺は厨房に入るよ」

「了解、お願いね」

「二応他のみんなにもそう伝えておく」

他のみんなに伝えた後、少しの間暇な時間が出来たが、昼前になった辺りに新たな客が来たので着替えて厨房の方へ入る。

「今からこちらに入ります。どんどんこき使ってください」

「お、来たね。それじゃあ、オムライスの方お願いしても良い?」

「分かりました」

注文の伝票を確認しながら作業を進めて行く。

「オーダー入ります、パンケーキとカルボナーラひとつです」

「了解。昴晴はそれが終わったらカルボナーラの方お願い。達也はそのままオムライスを作って行って。パンケーキは私の方で進めるから」

「了解です」

「4番テーブルのオムライス2つ上がったっ!」

「ありがとうございます。運びますね」

「ほい、こっちは食後のタルトね。これは6番テーブルの人のやつ」



「了解です」

伝票を見ながら注文の品を作っていく。

「こっちのカルボナーラは出来上がりますが、そっちはどうですか？」

「もうちよいかかりそう。先にそっちだけ運んじやつて」

「分かりました」

「あとは、食後のケーキだけだな」

昼時という事もあり、ご飯系を頼む人が多い。食後にデザートもセットでの注文だ。

「涼音さん、デザート系はまだまだ余裕ありますよね？」

「え？そりゃあんだけ作ればね。この調子だとかなりあまりそうだけど……」

「それは大丈夫です。午後からご飯より甘い物を求めて来る人が増えますから」

「どうだろうねえ、そうだと良いんだけど……」

暇は無いけど、そこまで忙しくはない。そんな感じで昼が過ぎて、墨染さんと火打谷さんもシフトで入ってきた。

「すみませんっ、いちごのタルトって、まだありますか？あとショートケーキも！」

「どっちも冷蔵庫の中！もう出していい頃合い」

「はい！3番と4番テーブルのパンケーキ」

「おっけ！俺の方で渡して来る！墨染さんはケーキ系をお願い！」  
高嶺が作ったパンケーキをフロアの火打谷さんに渡す。

「これ、3番と4番のパンケーキ。不安なら一応伝票もあるから見てくれ」

「はい、ありがとうございます」

厨房に戻る前に店内を見渡すが、ほとんどが女性客である。カウンター席にコーヒーを飲んでいる男性客も居るが……。

厨房に戻ると、注文の伝票が1つ増えていた。

「これもパンケーキだな。高嶺、そっちはどうだ？」

「今パスタで時間がかかります！」

「わかった！パンケーキはこっちで全部作るから、タイミングあったら食後のデザート用の意も頼む！」

「オーダー入ります、パンケーキ2皿。あとセットのブラウニーつてまだありますか？」

「まだある！けどあと少しで無くなりそうっ」

「分かりました！」

「追加のパンケーキも俺の方で作りますんで、涼音さんはデザート系を引き続きお願いします！」

「了解っ、ミスしない様に！」

「任せてください！」

フライパンへ材料を流して焼いていく。一つを作って、追加の2つをコンロ2つ使って同時に仕上げる。

「はいっ！こっちパンケーキの2っ！」

「澤田さん！片方もらいますよっ？」

「ああ、ありがとう！フライパンは適当に置いていてくれ」

「ごめんだけど、どっちか皿洗いお願いできるっ!？」

「俺が入ります！丁度パンケーキ終わったので！」

「デザートとかの皿から優先でお願い！」

「了解です！」

忙しいとは思っていたけど……これは予想以上だな！

「だはーっ、づーがーれーたー……」

ようやく全ての客を捌き切り、本日の営業が終わったとなった瞬間、涼音さんから盛大なため息が出る。

「お疲れ様です」

取りあえず俺と高嶺で涼音さんを労う。

「2人もおつかれ。なんとか持ちこたえたね」

「ケーキのほうはどうでしたか？」

「ん？ああ、大体売り切れているよ。ただショートケーキのほうはまだ残ってるけどね」

「そうですか……それは良かったです」

「いやー、そっちの話を聞いてて正解だったよ。まさかあんなにお客さんが来るなんて……」

「ショートケーキは残っちゃいましたけどね」

「これに関しては仕方ないよ。追加で作り続けていたし」

「俺と澤田さんはパンケーキとか他にもしていましたけど、そっちはほとんどひたすらケーキ作りでしたもんね」

「2人が頑張ったおかげでこっちに集中出来たってのもデカイね。助かったよ」

「あとは明日に向けての片付けですね」

「お疲れ様でした」

3人で話していると、四季さんが厨房へ入ってくる。それに続くようにフロア組の皆も来た。どうやらそっちも終わった様だ。

「ほんとお疲れ様。なんとか乗り切れたね」

「そうですね、なんとか乗り切る事が出来ましたねー」

「本当になんとか、って感じでした。もうちよつとでパンクしちゃうそうでした……」

「アタシもです……疲れましたけど、楽しかったです」

「澤田君、因みにだけどケーキのほうは……？」

「ありがたいことに殆ど売り切れているよ。ショートケーキが少し残ったくらいだ」

「そう……良かった」

それを聞いて安心するように胸をなでおろす。

「そういえばミカドさんは？」

「閣下？今日の集計をするって言って奥に行っただけど？」

「了解」

「閣下に何か用？」

「用というか、少しお願いをしに行こうかなって」

厨房を離れ、奥の部屋に入る。

「む、どうかしたのか？」

パソコンに向かいながら今日の売り上げの帳簿していた。

「お疲れさま、無事今日を乗り切れたよ」

「そうだな。貴様が言っていた通りの忙しさだったな。我輩まで呼び出されるとは」

「それについては物凄く助かった。ありがとう」

「なに、気にするな。それで、何か用か？」

「お願いがあつてさ、今日作ったデザートケーキがまだ少し余つていて、可能なら皆に食べさせたいんだけど……どうかな？」

「なるほどな……正直、あまりこういったことは良くないのだが……まあ、今日くらいは良いだろ。最初の日くらいは許可しよう」

「ありがとう。もし問題があるなら俺の給料からでも引いておいてほしい」

「この程度何も問題はないから安心しろ」

「それじゃあ、ありがたく頂く」

厨房に戻ると、皆で今日1日の忙しさの話でワイワイと盛り上がっていた。

「涼音さん、ケーキってあとのくらい残ってますか？」

「ん？ちよつと待つてね……あと4つだね」

「さつきミカドさんをお願いして、残りのケーキは皆で食べて良いつて許可貰ったので皆で分けてください」

「本当ですかっ!？」

俺の言葉を聞いて、火打谷さんが目を輝かせながら聞いてくる。

「ああ、しつかりと了承済みだ」

「やったっー!!」

「私はパスで。他の皆で食べて」

自分のだからか、涼音さんが真っ先に辞退をする。

「俺も大丈夫かな。5人で話し合ってくれ」

それに続くように俺も譲る。

「えっと、ケーキは残り4つなんですよね?……ジャンケンで決めますか……?」

「それでしたら、私はいいので皆さんで食べて下さい」  
残り一人の決め方を考えていると明月さんが自ら辞退する。

「いや、それなら俺が今回は遠慮しておくよ」

それを止めようと、今度は高嶺が自ら辞退を言い出す。

「いえ、高嶺さんは食べて下さい」

「いや、この場で俺だけ男一人って言うのは……」

「澤田君は食べないの？」

二人の譲り合いを眺めていると、四季さんが話しかけてくる。

「ん？ああいよいよ、今回は」

「甘い物好きって言っていたのに意外……、遠慮せずにジャンケンしたら？」

「うーん、涼音さんのならいつでも食べようと思えば食べれるし、若いもんに譲るよ」

「若いもんで……」

「今日は皆頑張ったし、少しでも労っておきたいんだよ。明日からまだ忙しい日々だしさ。それに、涼音さんが折角作ってくれたものを廃棄するのはどうしても気が引ける」

「それはそうかもしれないけど……」

「分かってる。やってく以上そう言ったことは必ず起きるし、ある程度受け入れないといけない。が……今日くらいは良いだろ」

「……そうね、それについては賛成する」

「んじゃ、ケーキを食べ終わったら片付けして帰るか」

因みにだが、高嶺昂晴VS明月菜那の勝負は、明月さんの勝利で高嶺が食べることになった。

## 第51話：お誘い

「はひい、ようやく落ち着きましたあ……」

「お疲れさん」

昨日に続き、休日の日曜という事もあり同じ位の客が来店した。日曜だからか夕方が近づくとそれなりに客数が減り、なんとか落ち着いてきた。

「は、い……本当に疲れましたあ。ゲロ吐きそう……」

「やめとけ、厨房で吐いたら涼音さんに殺されるぞ」

「冗談ですって、あ、先輩と涼音さんもお疲れ様です」

「お疲れ。フロアの方はどう？」

「二応、落ち着きました。今日もケーキは売れましたよ。売り切れているのもありますが……まだ残ってるのもありますし、ナツメ先輩から補充は必要無いだろうって」

「全部揃ってないのは申し訳ないけど……しようがないかあ。今からしても遅いだろうし……」

「取り敢えず、一区切りついたのでアタシは休憩に入らせてもらいますねー」

「はいよ、いってら〜」

休憩に向かう火打谷さんを手を振って見送る。

「というか、私たちも休憩を取った方がいいね」

「確かにそうですね、落ち着いていますし」

「順番はどうする？私はどっちでもいいよ？二人に任せる」

「うーん、俺はまだ余裕あるし、高嶺から先に行ってきて良いぞ」

「そうですね？自分も大丈夫ですが……」

「ついでに涼音さんも一緒にどうですか？今程度なら俺一人でも回せますし」

「そう？それならお言葉に甘えようかな」

「それだと、澤田さんに負担が……」

「余裕余裕、その分後半が二人体制で心おきなく休憩出来るからさ」

「ほら昂晴、こう言ってるんだ。早く行くよ」

「分かりました。暫くお願いします」

「あ、それと、何かあつたら遠慮せずにすぐに呼ぶこと。いいね？」  
「了解です。ヤバそうと感じたら直ぐにヘルプ出します」

「よろしい。じゃあ、お願いね」

火打谷さんに続き、二人も送り出す。今くらいの時間ならそこまで大丈夫だろう。

フロアの様子をチラ見する。今いるのは男性客が一人と、女性客が二人か……四季さんが丁度注文を聞いてるな。

店内の音楽でしつかりと声は聞こえないが、確認時の口の動きから見てパンケーキを二人分と見た。

こちらに来る前にパンケーキの用意をし始める。仮に違ってもパンケーキは直ぐ出るので無駄にはならないし大丈夫。

「オーダーお願いします。パンケーキを2皿」

「了解、今作ってる」

注文内容が確定したのでコンロ2つに生地を流し込む。

「あれ、澤田君だけ？残りの二人は？」

「忙しくないし、休憩に入ってもらってるよ」

「そうなんだ……てか既にパンケーキ用意してたんだ。もしかして、ここまで声聞こえてた？」

「いいや、流石にここまで声は届かないな。店内の音楽あるし」

「それじゃあ……」

「俺のサイドエフェクトがそう言っている……！」

生地が焼けるのを待つ隙を見てドヤ顔で決めポーズをする。

「……………」

それを見て、『まーたなんかやってんな、こいつ……』と呆れた目で見つちを見ていた。

「うーん、ウケが良くないみたいで……」

「作ってる最中に急にそんな事されたら、誰だってそうなる」

呆れつつ、更にクソでかため息まで吐いてくる始末。

「安心しろ。パンケーキは完璧に仕上げているからな」

そろそろ出来上がるので、皿を出して盛り付けの準備をしておく。  
「ほいっと、膨らみ色合い共に問題無し。それじゃあ、このパンケーキ  
お願い」

「はいはい、あんまりふざけない様にね」

「善処します」

適当な返事に『綺麗に出来ているのがなんかムカつくなあ……』と  
呟いてフロアに戻って行った。それなりに練習して仕上げたからな。  
当然よ。

そんなこんなで2日目も無事営業を終え、後片付けをして順番に着  
替える。

「それじゃあ、また明日〜」

「明日は講義があるんで来れるのは夕方過ぎになりそうです」

「大丈夫、俺も涼音さんもいるし、平日だから問題と思う」

「お願いします。それじゃあ失礼します」

高嶺を見送るって、店内には俺一人……というわけではなく、さっ  
きから帰らずに立っている四季さんが居た。

「その様子だと、俺に御用だったり……?」

「うん、澤田君に用がある」

なんだろう、お店の事か、それとも何か心配事でもあるのか?

「このあと暇?」

「特に予定は無いけど?」

「良かった。行きたい所があるんだけど、付き合ってくれない?」

ここでは話せない事なのか?となるとお店のことでは無くて個人  
的な……?」

「勿論、四季さんの誘いなら喜んでお供させていただきますとも」  
どのみち、内容がどうあれ協力するつもりなので答えは変わらな  
い。

「そ。じゃあ行こっか」

「おっけー」



店を出て駅方面へと歩き出す。

「因みに、向かう先はどちらへ？」

「んー、駅の反対側？5分もかからないから安心して」

「なるほど、着いてからのお楽しみってことか……」

という事は、適当にどこかのお店に入るのだろう。流石に自分の家に招くとは思えないし……。ここで『俺の家はどう？』とか言うのはどうだろうか？夕方のように冷たい目で見られるのでは……？

「そういうえば、明日から平日はワタシと高嶺君は講義で遅れるけど、お店は大丈夫そう？」

「ん？……ああ、平日だし問題無いはず。その分朝に少し余裕持つてケーキ類は作っておくつもりだし、ミカドさんも居るから何とかなるはず」

「ワタシもなるべく早く入れるようにするから、ごめんだけどよろしく」

「四季さんは安心してこっちは任せてくれ。もしヤバそうなら別途相談ってことで」

「ん、分かった。あ、そろそろ着くはず」

駅を越えて信号を渡り少し歩いた場所にそのお店はあった。

「……このお店って」

「それじゃ、乾杯しよっか」

「……ああ」

四季さんに連れられ入ったのは、オシャレな雰囲気のあるバー……つまり、例のお店だった。

それぞれ注文し、届いた飲み物を持つ。

「働きづめになるであろう、ブラックバイトの明るい未来に乾杯」

「ブラックなのに明るいとは……、コーヒーより苦くないことを祈っているよ。乾杯」

お互いに小さくグラスを当てて、中身を一気に飲み干す。

「んっ……はあ……」

一気に飲んだ四季さんが、ほうっ……と息を吐く。横目で見ていたが、飲み終えた唇から吐息まで全てが色っぽい。最高である。

「……これはお酒が進みそうだなあ」

「澤田君は結構飲めるの？」

「それなりに……？それなりには耐性があるから多少飲んだくらいでは大丈夫……のはず」

「なに、その間は……？」

「いや、あくまで前の身体ではって話。今は違うかどうか分からないんだよな」

「あ、そっか。違う体って言うってたね」

「こそ、だからこの身体がどの程度か把握出来てない。四季さんは……どう？」

分かり切っている答えだが、一応話の流れとして聞いておく。

「んー、どうだろう？多分強くないかな。むしろ弱いと思う。カクテルでもアルコールが濃いのは苦手だから」

「なら一気に飲むのは控えた方が良いのでは……？」

「大丈夫。それに、今日はそうしたい気分なの。あ、バレンシアお願いします」

折角の忠告を無視して次を注文する。

「自分も……ブラックルシアンをお願いします」

手持ち無沙汰になったので、周囲を見渡すが、店内には俺たちの他に一人しか居なかった。

「なに？なにか気になる事でもある？」

「いや、店の内装を見た」

「澤田君はこういった場所にはあまり来ない？」

「自分で進んでは来ないなあ……前の仕事とか付き合いで立ち寄ることはあったが」

「なーんだ、道理であまり緊張してないと思った」

「それなりに緊張はしてるぞ？表に出して無いだけだ」

「そう？そうには見えないけど」

いや、マジで緊張してますとも!?!?どういった意図でこの店に来たのか!とか、お酒を飲んでる四季さんが超セクシー!!とかさ!色々耐えてる俺を褒めてほしいですっ!

「まあ、予備知識があったからな……少しは隠せる」

「あー……もしかして澤田君の?」

濁す様に言いかける。多分、未来視とかそう言いたいんだろう。

「ご想像にお任せします」

「なにそれ?カッコつけてるつもり?」

ジト目でこちらを見てくる。もつと下さい。

「お待たせしました」

バーテンダーから注文の品がテーブルに置かれる。

「それじゃあ、四季さん。改めて乾杯」

「乾杯……って、何に?」

「そりゃ、ブラックバイトの明るい未来に決まってる。このルシアンみたいになっ!」

「あーはいはい、全然うまくもなんともないから」

俺の渾身のネタに呆れながら手を振る。そしてそのまま自分の飲み物を口に付ける。

「……この為折角頼んだが、無駄に終わったみたいだ。」

「ふう……」

美味しそうに飲む姿を見て、半分やけくそにあおる。

「おお、良い飲みっぷり」

「……あまり口に合わないな。」

「すみません、マティーニを1つ」

次は四季さんに合わせてこつちも果実系を行こうかと思っていたが、口直しに少し辛めのが欲しくなる。

「マティーニかあ、それ辛い?」

「さっきのが想像より甘かったからな」

「なあに?かっこつけてるのお?」

「男はいつだって女の前では虚勢を張る生き物だ」

四季さんが若干いつもより口調が柔らかくなってきた。

「なにそれ、だっさー……ふふ」

「四季さんは飲んだことあるのか？」

「前に一度ね。ほら、カクテルと言えばよく聞くじゃない？それで試しに飲んでみたの」

「確かに良く聞くな。それで結果は惨敗だったと？」

「そこまでじゃないけど……ワタシには合わなかったなって」

「ま、自分に合うのを飲むのが一番だよな」

少し拗ねた顔をした四季さんを見てみると、飲み物が運ばれる。

「……ふう、潤うわあ」

「なにそれ、ちよつと言ってみたい」

「一度は言ってみたい台詞だよな。強いやつとか飲んだ時にさ」

「そうそれ」

「まあ、別に今のはそこまで強くは無いけどな」

「それでも多少は憧れない？」

「分かる。あとは、伝説の『あちらのお客様からです』だよな」

「それめっちゃわかるっ。一度は見てみたい」

「……実は一回、したことがあるぞ」

「ええっ!?マジ？」

「ああ、仕事関係で一度だけだな。その場の勢いもあったが……」

「それで、どうだったのっ？」

「どうと言われると……話のキツカケづくりとしてナンパ紛いをしたのを後悔した感じだな」

「へえー……意外。澤田君ってそういうことするんだ……」

「いや、仕方なくだからな？する必要があったからだ！仕事でだっ」

「ナンパしなきゃいけないくなる仕事ってどんな仕事だか……」

「一応弁解しておくが、如何わしい仕事では無いからな？」

まあ、怪しい仕事ではあったが……。

「どうだか……。どうしよう、急に身の危険を感じて来たかも……」

「安心してくれ、例えそうであってもここで四季さんへ積み上げて

来た信頼を壊すつもりはない」

「分かってる」

目の前の飲み物を一口飲み、本題を切り出す。

「……それで、今日はわざわざどうしてここに誘ったんだ？」

「別に大した理由はない。さっきも言ったけど、お店が順調に行っているから。その感謝について思っただけ」

「……単純にお礼をか？」

「そうだけど、なに？ワタシがそうしたらおかしい？」

「あ、いや、全然つ。てつきり何か相談事かと思つてたからさ」

「心配ありがと。でも大丈夫。今の所良い走り出しだし、澤田君のアドバイスのおかげで初日も上手く乗り切れた」

「それは良かった」

「何その反応？これでも一応感謝してるんだけど……？」

「そういうわけじゃない。ただ、大したことじゃないから少し驚いただけだ」

「大したことじゃないって……まあ、澤田君からしたらそうかもしれないけど……」

「でもお礼は受け取っておく。どういたしまして」

「うん、よろしい」

恥ずかしさを紛らわす為か、手に持っている飲み物を一気のおおる。

「ふう……すみません、パイナップルを使ったカクテル、お願いします」

「前にも話したかもしれないけど、澤田君はお店の為に色々動き回ってくれているのは知っているつもり。それと明月さんや閣下の仕事だつて手伝っているんでしょ？」

「まあ、暇があればなるべくな」

と言つても蝶の回収を手伝つたり、ちよくちよく進捗を話し合つたりだ。前ほど高頻度でこれからの事は話してはいない。

「ちゃんと休めてる？ワタシが言うのもアレだけどね」

「それについては大丈夫だ。それに、今の身体になってから前より丈夫な感じがする」

「へえ、そうなんだ。例えば？」

「多分だけど、病気とかになりにくいと思う。あとは睡眠時間を減らしても多少は平気ってところだな」

「いいなあ便利そう……ってあまりこういうのは良くないか、ごめん」

「俺もそう思ってるから大丈夫。それに明月さんやミカドさんにはかなり助けてもらったからな。多少無理してでも恩は返しておきたい」

「お待たせしました」

さつき頼んだ四季さんのカクテルが届く。

「ワタシはそこら辺詳しく聞いていなかったけどそんなに？」

「考えてみてくれ。戸籍や住む家、ましてや服も無くてどこぞと知れない世界に体一つで飛ばされたんだぞ？それが四季さんと席を並んで美味しくカクテルを飲める生活が出来てるってなれば……」

「うわあ……確かにそれは大きな恩だなあ」

「だろ？俺なりに手伝える事とか助言を言って助けてるつもりだけど、正直全然足りてない」

「向こうはそうは思って無さそうだけどなあ……」

「そうか？」

「ええ、ワタシが聞いている感じだと、向こうも澤田君に恩を感じているっぽい？多分だけど」

「2人とも人間が出来ているからなあ……いや片方は猫か」

「そこは困った時はお互いさまってやつ？ってこれも私が言えた事じゃなかった……」

「どうしてだ？」

「ほら、ワタシって皆に助けられてばかりじゃない？それでようやく……までこれだ訳だし……」

「別に嫌って訳じゃないからな？皆自分の意思で四季さんと働いている」

「大丈夫、そこはちゃんと分かっているって」

「それなら、今度は四季さんが助けてあげれば良いだけだな。ほら、困った時お互い様だろ？」

「……そうね、そうする」

「んじゃ、気を取り直して、乾杯」

「乾杯」

小さく、お互いのグラスがぶつかると音が響いた。

「……………」

「ねえ、澤田君……」

「……どうした？」

「終電……なくなっちゃったね」

「そうだね。四季さんの頭も終了のお知らせみたいだな」

「それ、どういう意味いー？馬鹿にしてるの？」

「いや、安心してくれ。終電にはまだ30分以上余裕がある」

「知ってるー」

揶揄うように笑い始める。今ぐらいが丁度ふわふわしてて気持ち良いのだろう。

「そもそも、四季さんの家は電車使わないだろ？」

「えー、どうして知ってるの？ストーカー？おまわりさーん」

「やめろっ、前に話した事があるだろ!？」

「それも知ってるー。変な期待するのかなーって思って……」

「期待、した……？」

挑発するような表情でこちらを煽る。少し赤くなった頬と、油断している雰囲気は何とも言えない……!!クソがつ！くっそ可愛いしエロいぞツ！くあwせdrftgyふじこーp。

「安心してくれ。四季さんが一緒にこういった場に来た時点で淡い期待をしているからな！」

「なにそれ、キモッ、帰ろっかなあ？」

「ストレートな感想どうも……」

「ウツソー。落ち込んだ？ねえ、落ち込んだ？」

「大分仕上がって来たな……」

いつもよりかなりハイなテンションである。

「そうかな？　そうかも。気持ちいいくらいふわふわしてる。ふっ」

「それは何より。明日には残さない程度に留めような？」

「大丈夫、明日に残ったりもしないから。心配しないでいいわよ。一度言ってみただけ」

「さっきの続きか」

「そうかも。ついつい言っちゃった」

まあ、こちらとしては得しかないのでごちそうさまです！　なんだがな。

「……ねえ」

「ん？　どうした？」

「……今日は、帰りたくないかも……」

身体をこちらに寄せ、口を耳元に近づけてそう呟く。

「……四季さん、安心してくれ。今日の四季さんの為に二人きりで夜景を眺められる最上階のホテルを用意しているんだ。是非ともそこに行こう。そして、窓から見下ろす夜景を見てこう呟こう……『この綺麗な夜景より、キミの方が世界一綺麗だよ』って！」

「なにそれえ、趣味悪すぎない？　鳥肌がたつ……」

自分の腕をさすりながら白けた目で俺を見ってくる。それにしても、今の囁きはやばすぎだろ……っ！　咄嗟にキモイ決め台詞で乗り切ったが……。俺の理性を破壊する気か。

「明日も講義だろ？　今日はもう帰ろう」

「……帰りたく、ないなあ……？」

「わかったわかった。お店でも俺の部屋でも自由に使ってくれ。すみません、お会計をお願いします。それと、彼女を冷却したのでお水も」

「別にいらないわよー、水なんてえー……」

子供みたいにごねる四季さんに水を飲み、会計を済まして店を出る。

「夜風が気持ちいいー……」

酔っている体には最高な気温だろう。



「送っていくよ。家の方向どこら辺？」

「平気、大丈夫だから」

「いや、心配だろ」

「親切装って女の部屋に上がり込むつもり？おまわりさーんっ」

「やめろっ外では洒落にならないから！」

「ふふ、冗談冗談」

いつもより楽しそうに笑う。とても良い事なのは間違いないのだが……気が気じゃないぞこちらは。

「でも、本当に一人で帰れるから」

「いや、送らせてほしい。前みたいなのがあつたら嫌だからな」

「その言い方すっごく卑怯……、それを言われたら何も言い返せないでしょ」

そりゃあ、分かってて言ったからな。

「……分かった。それじゃあお願いします」

「お任せあれ」

少し足取りが不安定な四季さんを見ながら、住宅内を歩いて行く。

「ワタシの家、ここだから」

四季さんが立ち止まり、目の前の建物を指差す。

「了解、ゆつくりと休んで明日に備えてくれ」

「適当な理由付けて部屋に上がろうとかしないの？」

「少なくとも本人の了承を得ずに上がるつもりは無いな」

「そう？でもあれでしょ、男の人って部屋に上がったたらその気になつて襲つて来るんでしょ？」

「……否定は、出来ないかもなあ。部屋に上げてる時点でそれなりに受け入れられているって考えるからワンチャンイケる……!?!とか思ってもおかしくないしな」

「澤田君も？」

「ふふ、それは上がってからのお楽しみだな。なんなら、今から試してみようか……?」

「きゃー襲われるうー、おまわりさーん」

「だからそれは禁じ手だろ！俺に勝ち目無いからな？それ使われる

と」

「ふふふ、それじゃ、また明日ね」

「ああ、お休み」

「おやすみ」

手を振りながら四季さんが建物に入って行くのを確認してその場を後にする。

「……………」

少し歩き、盛大にため息を吐く。

「かはあああああー………何とか耐えれたなあ」

唐突に誘われたから何かと思えば……まさかお礼の為に誘ったとは……。

「事前に知っていなければヤバかったな……いや、それでもやばかったが……！」

いつもはこつちが揶揄う事が多いが、今日は四季さんが冗談を言つて揶揄つて来ていた。それも子供の様な笑顔を浮かべて笑うように……。

「くそっ！スマホで録画でもするべきだった……!!せめて録音か写真だけでも撮っておけば……!!」

現状に満足してあの場を楽しむことしか考えてなかった。何たる失態……！

「いや、まだチャンスはあるはずだ。それに、お楽しみは今日だけじゃなくて明日も続くはず……ふふふ、ふはは」

時間も遅い夜道を、不気味な笑うを浮かべながら歩いて行く。

「……………」

妙な気配を感じて後ろを振り返る。

「……………気の、せいか……？」

一瞬、誰かに見られてた気がしたが……。

「つて、そりゃこんな時間に笑ってるやつがいたら気味悪く思うか」さて、明日からも楽しい日々の始まりだ。次は……高嶺のケアと、父親の誕生日ケーキを求めてやってくる少女、深山結菜のイベントだろう。楽しむのも良いが、気を引き締めていかないとな。

日付が変わろうとしている誰もいない夜道を、いつもより軽快に帰って行った。

次の日、案の定こちらと顔合わせない四季さんを揶揄ったが、記憶を消せとパイプ椅子を握り出した時は流石に肝が冷えた。

## 第52話：再会の少女

「それじゃあ、お疲れ様」

「お疲れ様です」

今日も無事1日を終え、順番に着替えてから解散していく。

火打谷さん、墨染さん、涼音さんがお店から出て行く。続けるように出て来た明月さんに視線を送る。

「大丈夫です。任せて下さい」

「ああ、すまんがお願いするよ」

「いえ、私も気になっていたので、丁度良い機会です」

そう言つて高嶺を連れて二階へ上がっていく。

これで、高嶺のケアの方は問題無いだろう。一応念の為に結果だけは聞いておこうかな。

時間を潰すためにスマホで調べ物をしていると、奥から四季さんが出て来た。

「おつかれさん」

「おつかれーって、まだ帰って無かったの?」

「ちよつと用事があつてな」

「もしかして、さっきの二人に関係すること?」

そう聞いてくるってことは、すれ違つたか話を聞いたのかな。

「そんな感じだ」

「何かあつたの?」

「いいや、特に何も起きてないぞ」

「それならどうして」

「そうだなあ……これは高嶺のプライベートにも関わるから詳しくは言えないけど、ちよつとしたケア、世間話みたいなもんだから心配しなくて大丈夫。既に明月さんをお願いしているしな」

「高嶺君の、ケア……?」

うーん、やっぱり引き下がらないかあ。

「……このお店の人気って、ぶつちやけ涼音さんの腕による人気が

大部分だろ?」

「それは、確かにそうね」

「それに対して高嶺が俺にも何か出来ないかって相談しているだけだから。普通なら問題ないんだけど、高嶺の場合は少しの揺らぎが命にどう影響を及ぼすか分からないからな……。ほんとに念の為つてやつ」

「あ、そっか。そういうえば高嶺君、今危うい状況だった……」

「そそ、だからミカドさん達に注意深く見てもらってる段階。今の調子なら問題無さそうだけどな」

「それで、澤田君は話が終わるのを待ってるってわけか」

「ご名答、なんで気にせず先に帰って大丈夫」

「分かった、それじゃ先にあがるね」

「おうとも、また明日〜」

「また明日」

四季さんがお店を出たのを確認してスマホに目を通す。内容は、こら近辺で何か事件や問題が起きていないか。という内容。

「……特に成果は無さそうだなあ」

暫く調べたが、それらしい気になる記事は無かった。明日にでもミカドさんに聞いてみるか。

スマホをから目を離すと、奥から明月さんが出てくる。

「無事そっちは終わった感じ?」

「はい。何かを掴んだ……って程ではありませんが、取りあえずの納得は得られました」

「それは良かった。ま、明日には死に物狂いで働くと思うし、暫くは大丈夫だろう」

「え、それはどういう意味で……」

「明日のお楽しみだな。つと、明月さんに話しておきたいのは別にあるんだが、この後大丈夫?」

「はい、勿論です」

「と、いう事で、もしその条件に一致する人が来ていたら俺に連絡をしてほしい。まあ、遅かれ早かれ気づくとは思うけど」

「分かりました。その時は連絡します」

澤田さんの話を終え、見送る。

「眼鏡をかけて、スーツ姿の人……そして、コーヒーは飲むがケーキには一切口を付けずに残してしまう……ですね」

教えていただいた特徴を口に出して覚える。

お店が無事オープンし、忙しいからかあまりこういつた場を設けなくなってきたと思っていました。今日の朝に澤田さんから相談あると言われました。

一つは高嶺さんのこと。こちらに関しては私の方でも気になっていたので今日くらいにでもお話する機会を作ろうかと考えていました。澤田さんの方も私への確認の意味が強かったみたいですね。

それからもう一つは、先ほど話に出て来た、蝶が集まってきてしまっている男性……。どうやら悩みがあるみたいですが、その内容まではその時にお話すると言われたので詳しくは聞けていません。

最近、涼音さんも生き生きと働いていますし、ナツメさんも以前より笑顔が増えています。ちよくちよく澤田さんに呆れるような視線を送る場面に遭遇しますが……これも彼がわざとそうしているみたいですし、ご愛敬ってやつですね。

そんな中わざわざお話をされたのですから、お店に関わる事なのは間違い無いでしょう。それから、あの口ぶりから見ると……それが高嶺さんの自信にも繋がる何かがある。と見ても良いかもしれません。そうでないなら同じタイミングで話されるとは思えません……。

「ですが……」

澤田さんの話していた内容だと、高嶺さんの落ち込んでいる理由が、涼音さんだけと言っておりましたが……。

「その要因の一つに澤田さんもおられるんですよえ……」

高嶺さん曰く、確かに涼音さんのケーキが好評でお客さんが来てい

ると言っておられましたが、同時に同じキッチンで働く澤田さんの活躍っぷりにも影響を受けておりました。

「そう言った抜けもある様ですね」

以前に自分の未来は見えないとか何とか仰っておりましたし、恐らく今回の事も見逃していたのかもしれないかもしれません。まあ、彼の場合自分の活躍をそこまで高く見ていないのかもしれない……。

「その分、私が高嶺さんにしつかりと寄り添えば良いだけですね」  
ナツメさんの方は澤田さんにお任せして、私の方は高嶺さんに集中する。勿論、ナツメさんの方にも目は光らせておきますけど……。

「さてと、それでは私も明日に備えましょうか」

その次の日は物凄い勢いで高嶺が働いていた。

「死ぬのは嫌だ死ぬのは嫌だ死ぬのは嫌だ……!」

うん、これは思ったより効果あり過ぎたのかもしれない。

その様子を気を付けながら見ていると、視界の端に青い蝶が飛んでいるのに気づく。

「ん？ 昴晴、どうかした？」

「え、いえ、別に」

高嶺もその存在に気づいて俺をチラ見する。

「後ろ通ります」

蝶の様子を見ていると、明月さんがデザートに乗った皿を運んできた。

「ん？ 葉那さん、その皿のケーキって……」

「これは、お客さんが残してお帰りになっちゃいました……」

「オーダーミス？」

「いえ、では無いはずですよ。クレームがあつたわけでもありませんから」

「そういうの、へこむなあ……はあ……」

それを聞いて涼音さんがかなり落ち込む。

「でも、美味しくないとか、そういうことではないと思うんです。一

口もたべてませんから、あのお客さん」

「一口もっ？」

「はい、食べようとはしていたのですが、実際に口に運ぶことは無くて……何だか悩んでいる様でした」

「皆が皆、評価してくれるわけじゃないってのは理解してるつもりだけど……それでもやっぱり……何だかなあ……」

「ごめん、ちよつと先に休憩行つてきてもいい？」

明らかに落ち込んでいる涼音さんをどうぞどうぞと送り出す。

「さて……と、明月さん、そのお皿は例の人の？」

「はい、澤田さんが仰っていた方ですね」

「なるほどな、だからさつき見た蝶は……」

「ちよつと、待つてほしい。さつきの蝶は……俺じゃないのか？」

「高嶺さんとは違いますね。先ほどまでおられた、このケーキを食べなかったお客さんが呼んだと思われれます。一応フロアの方は回収していたのですが、こっちにもいたんですね」

「そうなのか……ごめん話を折つて」

「いえいえ、気にしないで下さい」

「取り敢えず、ミカドさんにも報告お願い。それと、暫くは様子見かな」

「分かりました。いきなり首を突つ込むわけにも行きませんし……」

取り敢えずは私の方でも見ておきます」

「それで、よろしく」

「了解です」

「大丈夫なのか？そのまま放置しちゃまずいんじゃない？」

「大丈夫です、今の所はまだ初期段階ですし、まだー」

「すみません、オーダー入ります」

「つと、今は目の前の注文に集中しないと。それじゃさういうことで」

「分かりました。では私もフロアに戻りますね」

その後、その日は特に問題無く終わった。

そして、次の日も例のお父さんは店へ訪れた……が、結局デザート



は一口もつけずにコーヒーだけを飲んで帰って行った。

「一体何が不満なのさっ、こんなにも美味しいじゃん！」

今回のイチゴのタルトは店でも人気のメニユーだ、それを食べなかつたという結果に涼音さんが激怒している。

「澤田さん、大丈夫でしょうか……？」

「あー……まあ、一応。それに、そろそろ救世主がやってくるからさ」

「救世主……？」

俺の言葉に不思議そうに聞き返す明月さんの後ろから、困った様子の四季さんが入ってくる。

「あの、涼音さん。少し良いですか？お客さんが、ちよつと……」

「なに？クレーム？」

「いえ、そうじゃなくて……とにかくフロアをお願いします」

「んん？」

歯切れの悪い言葉に不思議に思いながらも四季さんの後に続いて厨房を後にする。

「おお、遂に来たか」

あの反応からして間違いないだろう。

「澤田さん、もしかして……？」

「ああ、救世主のご登場だ」

涼音さんの様子を見るために一旦フロアに顔を出す。

「ふわふわしているケーキ。パパが、すきな……ありませんか？」

そこには、五歳くらいであろう少女が困った様子で継るように話しかけていた。

「何とかありませんか？涼音さん」

「って言われてもだね……参ったなこりゃ」

その様子を見てみると、俺の存在に気づいたのか、顔に驚きと笑みを浮かべて指を指す。

「あ、まほうつかいのおにいちゃんっ!!」

「まほうつかいの……」

「おにいちゃん……？」

不安の中知っている人間を見つけたからか、足に抱き着いて来た。  
「なに、達也、知り合いの子?」

「以前にシヨツピングモールで一度遊んだことがあります」  
取りあえず頭を撫でておく。

「それでどうして魔法使いつて……おまわりさんに連絡しておく?」

「事案ですね」

「待て待て待て、違う、ちょっと手品してあげただけっ、なあ? そうだよな結菜ちゃん?」

「はい! 沢山チョコレートもらって、魔法も見せてもらいました。すごかったですっ」

「なるほど、それで魔法使いか」

「それで、今日はどうしてここに?」

これ以上変な方向に行きたくない為本題に入る。

「えっと、パパが好きなケーキをかいたくて……」

「ふむふむ、パパ想いの良い子だ。そのケーキはここにはある?」

「ないです」

「なるほどなるほど、パパの好きなケーキってどんなのだったか覚えてるかな?」

「白っぽくて……でもショートケーキより白くないです」

「となると、生クリームじゃないのか」

結菜ちゃんの話聞きながら涼音さんが正体を考察していく。

「他には、ママとかパパから何かお話聞いてたりは?」

「ママが言ってた! チーズが入ってるって!」

「涼音さん、何か分かりますか?」

「それだけじゃ……お店に無いやつで……あっ、ちょっと待ってて。スマホ持ってくるから」

予定通り、思いついた涼音さんが急いでスマホを取りに行く。

「分かりますか……?」

「偉いな、結菜ちゃんの名推理でさっきのおねえちゃんが見つかったぞ。これでパパが好きなケーキが手に入りそうだ」

「ありがとうございますっ！」

満面の笑みを浮かべていたので取りあえず頭を撫でておく。

「達也先輩って小さい子の相手慣れているんですね」

「そうか？」

「ね、意外過ぎて驚いた……」

火打谷さんの隣で、四季さんが信じられない物を見たような顔でこつちを見ていた。

「ごめんっ、これ、どう？こんな感じのケーキで合ってる？」

「うん！これ！このケーキがほしいです」

「アタシも知ってる。中のチーズケーキが二層になってるやつですよね」

「そうそう、うーん……ゴメンね。ここには売って無いの」  
それを聞いて絶望するような表情を浮かべる。

「結菜ちゃん、そのケーキは今日欲しいの？」

「パパの誕生日にプレゼントしたいですっ！」

「それっていつかな？」

「つぎの月曜です」

「となると……あまり時間はないけど、何とかなるかなあ……？」

「涼音さん、行けそうですね？」

「お客さんに渡す商品だし、練習をね、しておきたんだよ」

「それなら俺と高嶺で多少はカバーしますんで、予約受付ってことでやりませんか？」

「するととなると、そうなるかな……？大きくなっちゃうけど、大丈夫かな？」

「はい！おっきいケーキ、大好きですっ！」

「そんじゃあ、連絡先とか詳しく聞きましょうか」

一段落着いたと思ったら、結菜ちゃんのお腹が盛大になる。

「……おなか、すいたあ……」

救いの女神を求めるような顔でこつちを見て来たので、四季さんと高嶺に視線を送る。

「あーはいはい。わかってる。ワタシだって鬼じゃないって」

四季さんの許可をもらい、高嶺が結菜ちゃんと視線を合わせる。

「半熟と薄焼き、どっちのオムライスが好きかな？」

よし、これで予定通りだな！

足にしがみ付いている結菜ちゃんを剥がして席に座らせる。

「それじゃ、俺は厨房の方に戻るから、あとはこっちのおねえちゃんとお話進めてね？」

「はい！わかりましたっ、ありがとうございます！」

「お礼まで言えるとはすごいな」

最後にもう一度頭を撫でて立つ。

「すみません、それじゃあこの子をお願いします。俺は一応厨房の方へ戻っておきます」

「わかった。お願いね」

この後は涼音さんや他のみんなに任せて問題無いだろう。

厨房に戻り、オムライスを完成させた高嶺に直接席まで運搬を依頼しておく。その間位は俺一人で何とかしてみせよう……！

中華料理の映画みたいに気合を入れてみると、心配をしたのか四季さんが顔を覗かせる。

「……何か御用で」

「いや、何今のポーズ……？」

「いや、ちよーと気合を入れようかと……な？」

「それであんな変なポーズをとるのっ？」

「たまにはそういう気分があるんだ。それで、何用？」

「そういう気分で……まあいいや。大したことじゃないけど、あの子と知り合いだったんだなって思っただけ」

「9月くらいに買い物しにショッピングモールに行った時に偶然な、衝撃的出会いだったぞ」

「なにそれ、気になる」

「俺が座って居たベンチの横に座っててき、両手にソフトクリームと飲み物を持っていてき、それが超危なっかしいわけよ」

「あー……それはワタシも思う」

「ヤバそうと思って席を立って離れようとしたら後ろで嫌あな声と

音がして振り返ると、案の定飲み物を零しててき、それを止めようと動いてアイスも落として残ったのはコーンだけ……」

「あちゃー……」

「すると、顔を歪ませて涙を浮かべ始めたわけ！俺にはすぐに分かったよ。『あ、これ充電してんな』って……今すぐにも爆発しそうな危険な状態だった。そんなの見たら放っておく訳にも行かないから、何とかあやして片付けをして代わりにチョコをあげて、母親と合流まで手品して遊んだって感じ」

「それはそれは、盛大な出会いで……」

「あれだな、四季さんに大学に侵入したいってお願いした日だな」

「あー……あの日か。そんな事もあったなあ」

「とまあ、馴れ初めはこんな感じだな」

「馴れ初めって……でも納得した。それならあんだだけ懐くのも無理ないか……」

「知らない店で知らない人だらけの中知ってる人を見つけたんだ。継りたくもなる」

「……何だか妙に説得力のある言い方」

「既に俺が経験しているからな」

「あー……たしかに」

四季さんと話していると、入口の扉が開いたベルの音が聞こえる。

「おっと、新規だな。おしゃべりはここまでとしよう」

「面白い話も聞けたし、ワタシも戻らないと」

客が来たことで四季さんもフロアに戻っていく。

無事深山結菜ちゃんがケーキを求めて三千里してきてくれたわけだし。後は誕生日まで何とか乗り切れれば、10月は乗り切れそうかな。

入って来た注文を作りながら、そう考えていた。

## 第53話：白の刺客？

「さて、既に皆は帰ったな」

その日の営業を終え、静まり返った店内に俺と明月さんとミカドさんの三人が集まっていた。

「それで、相談とはなんだ？珍しくそっちから来たのだ。大事な話なのだろう？」

「あー、いや、大事なのかはまだ分かっていないからそっちの話を先に終わらせて問題ない」

「ふむ？そうか？では、こちらから先に片付けようか」

ミカドさんの隣に座ってる明月さんが話し始める。

「澤田さんが話されていた蝶が集まっている例の男性ですが、キッチンで話された通り、かなり自分を追い込んでいるみたいですね」

「そうだな、医者で真面目で普段しない様なミスをしてしまったかなり自己嫌悪に陥っているはず、好物の甘い物も喉を通らなくて蝶が寄ってくるくらいには……」

「今のところは大事にはならなさそうですが、次も同じことが起きれば更に悪化するかもしれない……という事でしようか？」

「いや、それは大丈夫。二人には順を追って説明しておくよ」

「既に知っている、と見て良いのだな？」

「ちゃんと解決までな」

「まず、あの医者の人……深山先生だが四季さんが言っていた美和総合病院の人だ。以前明月さんと一緒に行ったところだな」

「なるほど、あそこですね……あれ、深山？」

「気づいたか、その通り、実はケーキを買いに来た結菜ちゃんのお父さんだ」

「つまりあの子が誕生日って言っている人は……」

「そう、お父さんの深山先生だ。最近パパが元気ないから大好きなケーキを食べてもらって元気になってほしいんだとき。泣けて来るだろ？」

「ほんと、良い子ですね」

「だから、ケーキ作りは外せないんだよなあ。まあ、涼音さんに負担はかかるけどその分他の作業を俺と高嶺に持って来れば大丈夫だし」

「それで、その問題が解決すれば高嶺昂晴にどう繋がるの？」

「結菜ちゃんが食べているオムライスって高嶺が直々に作ってあげているだろ？それを美味しい美味しいって嬉しそうに食べている姿を見れば、自信も付くだろう」

「そう言う事でしたか、だから澤田さんは高嶺さんをお願いしたのですね」

「うむ、今回の誕生日ケーキ大作戦で、高嶺と深山先生の自信を取り戻すことが出来るはずだ」

「なるほどな、だから貴様もいつも以上に動き回っているということだな」

「ああ、深山先生が自分の仕事にもう一度向き合えるようになるのは無くてはならない出来事だからな」

「と、言いますと……？」

「あく……これに関しては不確定要素なんで今は伏せておくよ。余計なことになるかもしれないから」

「分かりました」

深山先生がこのまま放置されれば、四季さんがかもしも倒れてしまった時に助からない……とか変な可能性が出てくるかもしれない。流石に他の医師も居るから大丈夫だとは思いますが……。

「と、まあこれに関しては以上かな。後は勝手に進行していただくだし」

「了解した。では次にそちらの話を聞こう」

「ああ、お願いするよ」

気持ちを切り替えて、二人を見る。

「時にミカドさん、最近俺の周辺を監視？をしていたりするか？」

「我輩がか？いや、そう言った事はしてないが……」

明月さんも見るが無言で首を振る。

「なるほど、二人は特に関与してない……」

「何かあったのですか？」

「いや、ここ最近、誰かに尾行されている気がしてな」

「澤田さんが……!？」

「あくまで俺の経験で……なんだが、視線というか意識を向けられている感じだな」

「どこかで貴様の存在に気が付いた人間が居るということか？」

「ん？ああ、どうだろうな。あくまで観察し続けているような気がする。夜道に一人で歩いたり、隙を見せても仕掛けてくる様子は無かったし」

「貴様を捕えるのが目的ではない……？」

「どうだろ、毎回同じ奴から向けられている気がするが……もしかしたら俺の勘違いって可能性も捨てきれないが……」

「だが、確信はあるのだろうか？」

「まあ、そうだな。前の世界でも何度か味わったことあるし、間違いはないかなあつと」

「それで、我輩たちに協力して欲しいことがあるのか？」

「いや、いまのところは。一応何かあった時の為に情報の共有をしておきたかっただけ。下手に二人に動かれると警戒されるし」

「因みにだが、どこでそう感じるのだ？」

「家から店までの道とか、あとたまにフロアに出た時にも感じるな。

気づいてない振りしてそのままにしているけど」

「となると、既に部屋まで特定されているという事か……」

「お一人にならない方が良いのでは……？」

「明月さんの言い分は最もだが、他を巻き込む訳にも行かないし、それに、俺は相手をこのまま放置しておくつもりはないぞ？」

「何か策があるのか？」

「策とまでは行かないが……まずは向こう側の姿も確認しておきたい。もしかしたら二人にも頼ることになるかもしれないから、その時はすまないけどよろしく頼みます」

「謝る必要はない。遠慮せず言うが良い」

「そうですね、澤田さんの身に何かあってからでは遅いです」



「……いや、ほんとありがと、変な事を持ち込んで来て」

「ですから、気にしないで下さい。いつも助けてもらっているのでお互い様ですよ」

「この件に関しては無関係と放置は出来んからな」

「ありがとう」

ようやくお店が無事にオープンし、順調に行っている最中に変な事件を店に持ち込みたくないが……今回は頼らせてもらいます。

「……………」

二人と話を終え、店を出た後、いつも通りの道を歩く。

……今日も見てるな。

どこからかまでは分からないが、俺へと向けられている視線があるのは確か。殺意とか憎しみでは無くただただ監視に徹している様にも見える。

前に四季さんや高嶺と途中まで帰った時は俺だけに注がれていたから標的が俺なのは間違いない。それだけが安心である。

「……………はあ」

正直気が休まらない。ほぼ毎日こんな視線を浴びらされていれば精神がすり減っていくだろう。その間に穏便に終わらせたい。

「やってみるかあ……………」

効果あるかは分からないが、俺の動きを監視したいのなら、その行動の詳細まで知っておくと考えるのが普通だろう。

いつもとは違って途中でコンビニに寄り道をする。袋の中身が見えない様にと隠しながら路地裏を歩く。

……………来てるな。

道の街灯が照らされている道端で怪しげに袋を漁り、そのまま袋ごと放棄する。そして何事も無いかの様に立ち去りつつスマホを起動して、道端が移るように設置してその場を去る。

暫く適当にぶらついていると、俺を見ている気配が一時的に無くなった。

これは、引つかかったかな？

それから数分歩いて先ほどの道へ戻る。街灯の場所を通りながら目を向けると、袋が無くなっていた。

そのままスマホを回収し、急いで部屋へ戻る。

鍵を閉め、カーテンを閉め切り部屋に誰も居ないことを確認してから動画を再生する。

「良かった、ちゃんと映せてるな」

ピントは若干合っていないが、例の場所が街灯の光にしつかりと映されていた。

「さてさて、どこのどいつがしてくれてんのやら」

少しの間、誰も居ない夜道が流れていたが、暗闇で動く影が見えた。

その影は素早く街灯下へ移動すると、そのまま袋取って中身を漁り始める。

中身を確認したかと思うと、そのまま袋ごとどこかへ消えて行った。

「まるで獣みたいな動きだな……」

跳躍し、コンクリートの塀へ、家の屋根へと飛び移りそのまま見えなくなる。

今度はズームしてスローでゆっくりと確認していく。

「……はっ…まさか……」

その姿は、少女と呼べるくらいの立ち姿で、白い装束の様な恰好をしていた。

「いや、いやいやいや……」

頭の中にとある人物が思い浮かぶ。まさか、んな馬鹿な……。

急いでネットで調べるが、当然ヒットしない。

「待て待て、思い出せ……他にもワードはあったはずだ」  
思い出せる範囲で検索を続ける。

「……真日羽市……水薙学園……、『Robin』……」

あり得ないことに、検索結果に出て来た。

「……はは、マジかよ。これは流石に想定外というか……」

スマホの持つ力が抜け、笑う。

「という事は、俺は神様に監視されているというわけか……」

「おはよー」

「ああ、四季さんか、おはようさん」

「え、どうしたの？その顔……隈が酷いけど……？」

「いや、ちよつと色々調べ物をしてたら眠れなくてな」

「大丈夫？明月さん達に言っつて今日は休んだ方が良いんじゃない？」

「いや、そこは問題無い。むしろミカドたちに用があるからさ」

「そう……？あまり無理しないでね」

「ああ、お気遣いありがとな」

「………」

『ほんとにこいつ大丈夫か……？』と言いたげな表情で奥の部屋へと消えてく。

「さて、取りあえずは今日の仕事を終えてからだな」

気合を入れて立ち上がる。寝て無いから少しダルさはあるが支障は無いだろう。

あれからひたすら思い付いた考えを調べまくった。検索内容に引つかからなかったものもあれば、写真付きで出て来たものもあった。それらを俺の記憶と照らし合わせると……もはや言い訳が出来ないレベルだった。

「澤田さん……本当に大丈夫ですか？今日はお休みされた方が……」

「少し色々調べていたら朝になってき、単純に寝てないだけだから大丈夫」

「昨日の今日でそうなっていると、やっぱりこちらとしては心配なのですが……」

「あー……じゃあ、きつそうなら連絡するよ」

「言いましたね？約束ですよ？変な遠慮して我慢なさらないで下さいね？」

「了解。あと、今日も終わった後にミカドさん含めて話がしたいから残ってもらえると助かる」

「分かりました。ミカドさんには私の方から伝えておきますね」

「ああ、お願い……」

今の所監視の目は無さそうではある。問題はミカドさん達がこれに参与していないという点だが……これに関しては調べてもらうのが早いのもかもしれないな。

「では聞こう。何があったのだ？」

「昨日と同じ様に三人で密談を始める。」

「ああ、まあ色々とな……」

「昨日と今日でかなり疲労したように見えるが……何をしたんだ？」

「いや、昨日言ってた俺を監視している存在が居るって言っただけろ？その正体を掴んだんだ」

「それは本当かつ!? たった一日で辿り着くとは……流石だな」

「まあ、問題はその相手の正体なだけどなあ……」

「もしかして、知っている人物なのか？」

「まあ……一応、一方的に知っていると言えば……そうなるのかあ？」

「一方的に……、もしかして、また澤田さんの奇跡関連なのでしようか」

「おおー、察しが良いね明月さん」

「以前、私たちにも似たようなことをおっしゃっていましたから」

「そうだったな。とまあ、俺の予想が間違っただけなら相手の素性や、誰がそうさせているか……くらいは何となく掴めた。ただ、確証を得る為に夜通しで色々調べていたから寝不足になっていただけ」

「……ふむ、それを我輩らに相談したという事は、何か案があるのだろうか？」

「ああ、ミカドさんとや明月さんと同じ管轄とは違うような気もす

るけど、ある人物……神様について調べて欲しいんだ」

「なあ……!?神についてだと!」

「勿論、可能ならで良い。そつちに不利益が及ぶなら辞めてもらっても構わないし、無理のない範囲でだ」

「……取りあえず、話を聞こう」

「ありがとう。そうだなあ。分類として俺が知っている範囲だと土地神だと思うんだが、知っているか?」

「ああ、古くからその地を守っている神だな。確かに我輩らとは管轄が違う」

「現在も同じかはわからないが……真日羽市という地名一帯を治めていた……はず。多分」

「どうした、やけに歯切れが悪いではないか」

「これに関しては少し古い情報かもしれない……今は違うかもしれないんだ」

「なるほど、承知した」

「それで、その神……って神様の名前を気軽に言うけど問題とかあったりする?」

「いや、軽々と発言するのは避けておいた方が良さだろう」

「やっぱりそう?じゃあ、やめておこうかな。代わりになんだが、その神様の部下……みたいな存在を見せておくよ」

スマホを取り出し、昨日撮影した動画を二人にも見せる。

「という感じで、この子が俺を監視していた存在だな」

「見た目は少女に見えるが……動きはまるで動物の様な俊敏性だな」

「この子が、澤田さんを狙っていた犯人……」

「ああ。まあ、正体を知れたからある程度安心は出来たし、すぐにごうごうする感じでは無さそうだな」

動画を止め、スマホをしまう。

「彼女の名前は……、あー……合っているか分からないが、多分……」

竜胆 ルリ。キツネの少女だ……」

「……分かった。こちらでも探ってみよう」

「すまないけど、よろしく頼む」

「なに、一日でここまで調べ上げたのだ。それに、神ともなれば我輩の方が都合が良いだろう」

「ですね、ミカドさんは定期連絡していますし」

「この件に関してはこちらで受け持つことにしよう。貴様は引き続き店の事を頼んだ」

「また何か進捗があつたら連絡するよ」

「わかった。今日はもう帰ってしっかり寝ておけ。明日に響くからな」

「そうしておくよ」

席を立てて帰る準備をする。

「そんじゃあ、二人ともまた明日」

「ああ、またな」

「ゆつくりと休んでくださいね」

二人に見送られながらも店を後にする。

「……はああー……」

俺を監視しているってことは、高嶺と同じ感じで奇跡についてなのだろう……。

「冤罪をかけられている気分だなあ……」

となると、ミカドさんの更に上の神か、はたまた別の神からの差し金か……。あのナルシストで性格歪んでる上司じゃないと良いんだけどなあ……。

因みにだが、今の時点でも視線は感じる。前と違う点は向こうの素性を知っているから気がかなりましなくらいか。

「あとは、ミカドさんの連絡待ちだな」

下手にこつちから動いて刺激したくはない。腕を噛まれるとかたまったもんじゃなからな。

「では、我輩は出掛ける用意をする」

「はい、お願いします」

「全く、今度は何事かと思えば……まさかこっち側にも関わってくるとはな」

「もうビックリし過ぎて逆に冷静になりますね……」

「これに関しては奴の判断が正しいが……ふむ」

「どうかされましたか？」

「いや、あやつがこの店に関わる人物だけでは無く、違う人間らの事も知っているのだと思っつてな」

「言われてみればそうですね、澤田さんは高嶺さんに関わる未来が見えるって仰っていましたし」

「それも伏せていたのか、想定外だったのか……」

「恐らく、後者では無いでしょうか？かなり熱心に調べていたようですし」

「やはりそう思うか？」

「はい。澤田さんにとっても想定外の出来事だったから寝不足になるまで情報を集められていたかと……」

「ふむ。問題はどうかやってその情報を集めたか……気になる所ではあるが」

「確か、古い情報って言ってましたよね？」

「そうだったな。とあると……今より過去に干渉していた……？」

「昔となると、澤田さんが居た前の世界ってことでしようか？」

「いやしかし……それだと以前の世界にもその存在が居たという事になってしまおうな」

「あ、そうですね。ですがそれですと……」

「うーむ。以前にも、高嶺昂晴の様な存在が居たのかもしれないな」と、言いますと？」

「高嶺昂晴や四季ナツメのように、あやつが導こうとした存在がいたかもしれない……と考えたのだが、それがさっきの話との繋がりが見えん。それに、奴は一方的に知っていると言ったしな」

「あくまで奇跡の力で観測をされていた……？」

「わからん。だが、これでまた一步秘密に近づけるのかもしれないな」

「藪を突かない様にしてくださいよ……?」  
「そこら辺は心得ている。では行ってくる」  
「はい、お気を付けて」



## 第54話：家族

俺を監視していた正体が判明してから何日か経ち、今日は遂に深山先生の誕生日イベントの日になった。

あれからミカドさんが色々調べてくれてはいるらしいが、大胆に聞くわけにも行かないらしく進捗はそんなに無かった。

「そろそろ結菜ちゃんのお父さんが来るのよね？」

カウンターの掃除をしている俺に、カウンター越しで飲み物の用意をしている四季さんが訪ねてくる。

「ああ。準備は完璧だし、キッチンには火打谷さんと涼音さんが居る。後は待つのみだな」

「喜んでくれると良いけど……」

「勿論喜んでくれるだろ。愛娘から誕生日を祝ってもらえるんだぞ？しかも自分が落ち込んでいる時に。泣きすぎてケーキの味が判らなくなるかもな」

「……もしかして、澤田君にはそれが分かってるの？」  
意味深な視線をこちらに向けてくる。

「はは、そのくらいちょっと考えれば簡単に辿り着く答えだろ？」

「……それもそうね」

俺の返事を聞いて、自分の発言に苦笑いをする。

「それじゃあ、俺は最後に今日一番のヒーローに挨拶をしてくるよ」

「はいはい、いつてらっしやい」

カウンターを離れ、厨房へ入る。中には今か今かと待ち遠しそうにソワソワしている結菜ちゃんが居た。

「お父さん、もうすぐ来るってさ。準備は大丈夫そうか？」

視線を合わせて話しかける。

「はい！大丈夫ですっ」

「プレゼントも持ってる？」

「ここに入れていますー！」

「よし、なら問題ないな。今日はお父さんの一生に残る大事な日に

なるからな。お父さんに元気になってもらう為にしっかりと気持ち  
を伝えてな？」

「うん！沢山元気になってもらうのっ」

「その意気だな」

「そんなじゃ、後はよろしくお願いします」

立ち上がり、火打谷さんと涼音さんに声をかける。

「はい、お任せくださいっ」

「折角頑張って作ったしね、最高の一日にしてやるよ」

二人も嬉しそうに笑う。その時、店の入り口がベルが鳴る。

フロアを覗き、主役が来たことを確認して厨房の三人に合図を送っ  
てフロアに戻る。

「約束？なんのことだ？」

「いいからいいから」

当の本人は何も知らされていない為、終始困惑していた。

「ハッピーバースデー、トゥーユー。ハッピーバースデー、トゥーユー。

ハッピーバースデー、ディア、パパ。ハッピーバースデー、トゥーユー」

「お誕生日おめでとうパパ」

そこへ、両手に今日一生懸命に作ったケーキを持って現れる。

「これは……一体……？」

「パパの大好きなケーキ！ユイナもおてつだいの！すごいで  
しょー！」

「結葉が、このケーキを……？」

「この子ったら、アナタの為に色んなケーキ屋さんを探し回った  
のよ？でも、見つけることが出来なくて、それを、このお店の方が特  
別に引き受けて下さったの」

「そう、だったのか……」

「パパ、元気なかつたから、このケーキ食べて元気だして！」

キラキラとして目でテーブルに置かれたケーキを指す。

「あつ、ああ……だが……」

「食べないの？もしかして、病気……？」

「そう、かも……しれない。折角作ってくれたのに、本当にごめんな

？」

「ううん。ケーキはまた作ればいいから！あとね、パパのことはユイナが治してあげるからね？ユイナはお医者さんになるの。だからパパのことはユイナが治してあげる！」

「結菜が、医者に……？」

「うん！ユイナ、パパみたいなお医者さんになるの！」

「医者って……なんで……？それにパパみたいになって……」

「パパはすごいもん！旅行の時もすごいカッコよかった！ユイナも、みんなにありがとうって言われる、すぐてカッコいいお医者さんになる！」

小さな子供の、現実を知らない夢だという人もいるかもしれない……が、親にとつてこれ以上に救われることはないだろう。それに……これから一人、父親の病気を治すしな。

「はいこれ！プレゼント！」

「これは、ネクタイかな？」

「これからお仕事、がんばってください！」

「……あ、ありがとう……本当に、ありがとう、結菜……。そうか、結菜は医者になりたいのか」

「なるよー！」

「そっか……。そうだな。それなら結菜の目標になるような医者になれるよう頑張らないと」

「パパはもう、ユイナのモクヒョウだよ！」

不安そうな父親に、自信満々の笑顔で答える。

「そうか……。ありがとう、結菜」

今にも泣きだしそうな表情でお礼を言う。

「そうだ！ケーキ、食べていいかな？」

「病気はもういいの？」

「ああ、すっかり良くなった。結菜のおかげで治った。結菜はきつとすごい医者になれる。いや、もしかしたら、パパよりも凄い医者かもしれないな」

「えへへー」

「それじゃあ、いただきます……」

「どーお？」

「美味しいに決まってるだろ。結菜が作ってくれたケーキなんだから……」

「よかったあ、どんどん食べてねっ！」

「美味しい……本当に、美味しいよ……」

泣きながらも、愛娘が作ったケーキを美味しくそうに食べる。それを見て母親と結菜ちゃんが嬉しそうに笑う。

「随分と、嬉しそうに見てるのね……」

それをカウンター側で見ていると、横から声をかけられる。

「そういう四季さんこそ、いつもより表情筋が柔らかいんじゃないか？」

「余計なお世話」

いつもなら文句を言ってくるのに、今日は言い返さずに微笑んでいる。

「結菜ちゃん、喜んでもらえて良かった……」

「ああ、そうだな。いつまでも見ていたいくらいに最高のシーンだと思うよ」

「澤田君にも、そう言った感性が残っていたんだ」

「失敬な。けど、俺でもそう思える程良い物を見させてもらったよ」

「良い物って……どこから目線で……って澤田君？大丈夫……？」

「ん？何がだ……？」

「いや、ほら……泣いてるから……」

言い辛そうにこちらを見る。

「は？泣いてる……？」

突然何を言い出すかと思っただけ自分の顔を触る。

「……マジだ」

そこには、涙で濡れたと思われる指があった。

「え、なんで……？確かに感動したが、そこまでじゃ……」

ちよ、ちよつと待て、マジで俺泣いてるぞ？頬がしつかりと濡れてるじゃん!？」

「あ、いや、別におかしいとか、ダサイとかそんなことないからっ」  
「え、ええ〜……なんでだ……?」

それよりも、これ以上醜態をさらす訳にはいかないっ!

「すまんっ、ちよつと奥に下がってくる……!」

「え、あ、うん……」

四季さんの返事を待たずそのまま奥の休憩室へ入り、椅子に座る。

「何故だ?泣く程心が揺さぶられたか……?いや、なんかおかしいな……」

目と頬を拭きながら、さっきの出来事を冷静に考える。

「俺の感情が勝手に動いたみたいな……無意識に泣いていたのか……?自分で気づかないとか……」

それはそれは滅茶苦茶恥ずかしいんだけどなっ!どんな顔してフロアに戻れば良いんだよ!四季さんに思いつきり顔みられたじゃねーか!!

『あ、いや、別におかしいとか、ダサイとかそんなことないからっ』  
取り繕うように咄嗟に言っていたが……。

「うわぁ……最悪だ」

穴があつたら入りたいとはこのことだろう。

自分の醜態にため息を吐いていると、体から蝶が飛び出てくる。

「つと、お店で出てこないで欲しいのだが……?見つかったら斬られるぞ?」

俺の忠告を無視してテーブルの上に止まる。

「なんでわざわざ……」

このタイミングで出て来たのなら何か俺に伝える事でもあんのか……?夜でも良いと思うのだが……。

「……いやまてよ。まさか、さっき俺が泣いたのって……お前のせいか?」

何となく思い付いた可能性を提示する。すると、正解と言わんばかりに羽を動かす。

「まじか……、道理で知らん間に泣いてたわけだよ。納得……」  
恐らくだが、そっち側に感情が表に出て来たんだろう。

「……はあ、まあ……言い訳は今日の夜にでも聞くから、取りあえず引っ込んでくれないか？誰かに見られたら不味いしな」

戻るように、クイクイと指を動かす。

「……っ!?!急げ!誰か来てる……!」

フロアから誰かがこつちに向かって来ている気配を感じ、すぐに戻るように手を伸ばす。

蝶が戻るのと同時に、部屋の扉が開いた。

「すまんっ、ちよつと奥に下がってくる……!」

「え、あ、うん……」

逃げるように奥へ引っ込んでいく澤田君を、驚きながらも生返事で見送る。

……今、確かに泣いていた。別にそのことを茶化すつもりは無いけど……。

「……………」

私が泣いているところを指摘すると、彼はその時初めて自分が泣いているところに気が付いた様に見えた。しかも、どうして自分が泣いているのか分からず困惑している様にも……。

「澤田さん、どうかされたのですか……?奥へ行っちゃいましたけど」

「明月さん……」

「ナツメさん?……もしかして、何かあったのですか?」  
なんて答えようか困る。

「えっと、澤田君が……その、泣いていた」

「澤田さんがですか……?」

「……うん、それで、見られなくなさそうに奥に……」

「ははあん、なるほどお。結菜ちゃんの感動のシーンを見て感動したんですね……可愛いところもあるじゃないですか」

「うん、多分そうだと思う……けど」

「けど……?」

「彼、何だか、自分がどうして泣いているのか理解していないみたいに驚いていたから……ちよつと不思議に思った」

「泣いてるのが……ですか?」

「うん。私が泣いてるのを指摘したら、自分の顔を触って凄く驚いてた」

「……なるほどです」

「澤田君って小さい頃にご両親を亡くしているから……それでなのかなって」

「それは……あるかもしれないですね。無意識に自分と比べた可能性も充分にあり得ますし」

「そうなんだ……それもそうだよね」

前に聞いてたけど、この世界で澤田君にとっての家族や知り合いはいないし、元々居た世界でも小さい頃に両親を亡くして生きて来ている。普段の彼からは想像出来ないけど、もしかすると、本当は心の中で溜め込んでいたのかもしれない……。

私たちに心配かけまいと、明るく振る舞っていつもはおちやらけているけど……本当は不安だったのかもしれない。ううん、普通に考えればそうに決まってる。

「……少し、様子を見てくる」

「……、分かりました。お任せしますね」

「うん」

カウンターを出て、奥へ向かう。

……謎の怒りが込み上げてくる。

普段はワタシに色々と聞いてくるくせに、自分の悩みとかは話さないとか……。まるで役に立たないと言われていたみたいでムカつく。休憩室に着き、そのままドアを開ける。

「……っ!?!」

中を見ると、謎の体勢で手を突きだしている澤田君が居た。

……それに、今の。

見間違いないかなければ、さっきの一瞬、手の中に蝶が消えて行くように見えた。

……つまりは、そう言うことだ。  
先程の推測に確信を得たワタシは、部屋のドアを閉めて、明らかに挙動不審の彼と向き合った。

……これは一体、どういう場面だ？

ノックもせずにそのまま乗り込んできたかと思えば、明らかに機嫌の悪い四季さんが俺を睨んでいた。

「あ〜……どうかしたのか？そんな目付きしていると、折角柔らかくなった表情筋が硬くなるぞ……？」

いつもの様に冗談を言ってみたが、更に怖い顔になった。

ええー……なんでえ？ガチギレじゃん。冗談言ってる場合じゃないだろこれ。何があつたんだ……？

「えっと、四季さん？まじでどうしたんだ？何か相談でも……？」  
恐る恐る聞いてみると、そのまま歩き出し、椅子に座る。

「澤田君も座って」

「あ、はい」

有無を言わせない迫力に、そのまま従う。

「……………」

「……………」

お互いに向き合うが、無言が続く。

……ええっと、ここは、俺から聞くべき……かな？

「……それで、何か相談ごとか？」

「ワタシじゃない」

「え？」

「ワタシじゃなくて、澤田君こそ、何か悩みや相談事ないの……？」  
これは、恫喝？脅迫？自白しろって雰囲気だよな？相談事とか優しい言い方じゃないよな!？」

「まてまてまてっ、話が見えない！一から説明してくれ」

「……さつき、泣いてたでしょ？」

「あ、ああ……お見苦しい所をお見せしました……」



くそ！直接言われると更に死にたくなるだろうが……!!

「どうして泣いてたの……?」

「え、ええ……それは、なんというかあ」

「話して」

拒否権は無いと申すか……!

「それは……個人的な感じでありまして……」

「ワタシじゃ話せない?」

「いや、そういうわけじゃ」

「澤田君が明月さんと閣下と色々と裏でコソコソしているのは知っている。その内容が話せない事も理解しているつもり。けど、ワタシに協力するって言った。それならその逆もあつたらいけない?」

「それは……そうかもしれないが……」

「確かに、ワタシじゃ2人みたいに役に立てるとは思ってない。それでも、借りた恩ぐらい返させてほしい」

さつきまで怒った顔をしていたが、今度は困った様な表情を浮かべていた。

「あ……なるほど、四季さんが言いたい事は理解した」

「ほんとうに?」

「ア、ハイ……。ホントウデス」

「それじゃ聞かせて。さつきはどうして泣いてたの?何か悩んでることがあるんでしょ」

「正直、今のところ自分でも分かってない。ほんと無意識というか……勝手に出てたんだ」

嘘は言っていない。嘘は言っていないからなっ!

「多分だが……あまりそういったことに触れあわなかったからだと思う。ほら、前に話したけど、小さい時にどっちも死んでるからさ?」

「うん、ちゃんと覚えてる」

「たぶん、眩しく思えたんじゃないのかなって自己分析している途中」

「そっか……」

「いや、心配してもらおうほど大した内容じゃないからさ!それに、学

生の時には受け入れていたしっ」

「……澤田君の学生の時って、どんな感じに過ごしていたの？」

「へ？どうしたんだ、急に……」

「別に。ただ興味本位で聞いてみただけ」

「どうって……普通にモブみたいにひっそりと……？」

「叔父さんに迷惑かけない様に静かに暮らして来たんでしょ？」

「そうだな。忙しそうだし、可能な限り迷惑かけない様に気を遣ってたな。ご飯は作ってくれてたし、お金も充分にもらってたしな」

「やっぱり……なんか想像出来る」

「ん？そうか？」

「育ててもらってる人にワガママ言えない。迷惑を掛けたくないって自ら周囲と距離を置いたんじゃない？」

「……そうだな、その通りだ。よくわかったな」

「……ワタシにも共感できるところが多いから知ってる。」

「ワタシもね、澤田君と似たような感じに過ごして来たんだ。小さい頃は体が弱くて、よく入退院を繰り返してたの」

当然、四季さんからの過去話が始まる。

「あまり友達とも遊べないで、すっかり話についていけなくなつて……でも、親に迷惑かけていたから自分のワガママは言えないでしょ？」

「……ああ、その気持ち、物凄く理解できる」

「そう言うと思った」

「どうして急にその話を……？」

「ん？特に。……ただ似たような境遇かなって気になっただけ」

「そうか」

「そう、それだけ。共感したかっただけかも」

「……そうだな。知っているに決まってる。なんせ、俺も四季さんの過去に凄く共感を覚えたからな。画面越しだったけど。」

「共感……ねえ」

「澤田君はこの世界でたった一人じゃない？前に居た世界の知り合

いや家族の繋がりはないでしょ？それなら、共感とか出来たら安心できかなーって思っただけ。まあ、ワタシが勝手に思っただけだけだね」

恥ずかしそうに、苦笑いをしながら話を終わらせる。

「……………」

「なに？その顔……。どうせワタシのキャラじゃないくらい分かってますよー」

「あ、いや、違う。なんて言うか、予想外だったから……………」

「そのの何が違うの……………」

「そういう意味じゃない。でも、うん、お礼は言っておくよ」

「素直じゃないなあ……。それに、人に感謝を言う時は、ちゃんと伝えた方が良くないじゃなかったっけ？」

「…………そうだったな。ありがとう。励ましてくれて」

「どういたしました。少しはマシになった？」

「かなり？まさか四季さんに励まされる日が来るとは思っていなかったけど」

「はあ？それ、どういう意味？」

「あまり人と深く関わろうとするタイプじゃないからさ」

「そりゃあ、そうかもしれないけど……………」

「でも、わざわざ部屋まで来てくれたのは助かった」

「…………そりゃ、どうも」

…………照れ隠しでツンツンしているのも最高にキュートだと思います。

## 第55話：神様降臨

「いやー無事成功して良かったですねー！」  
「ねー、結菜ちゃん達嬉しそうだったね！」  
誕生日会も無事終わり、皆で店内の片付けをして交代で帰る支度を始める。

「お二人さん、こっちは終わったよー」

「了解です。そんじや行くか」

「ですね」

女性陣が終わったので高嶺と一緒に部屋へ入る。

「いやー、ケーキ作りまでは大変だったけど、その分得たものはあったな」

「そうですね、喜んでもらえてよかったです」  
着替えながら今日の事を話し合う。

「……ん？」

ふと、視界に長方形に立てられた段ボールが目に入る。

「何なんでしょう、誰かが頼んだのでしょうか」

「かもなあ。こんなデカいの何に使うんだろうな」

二人で不思議そうに見ながら着替えを再開すると、唐突に立っている段ボールが倒れた。

「うわっ!?!びっくりした……」

大きな音をたてて倒れた段ボールを見て驚いている。

元に戻そうと近寄ると、段ボールが誰の手も借りずに勝手に一人で立ち上がる。

「……はっ！」

お互いに顔を合わせる。

「澤田さん……今、触りました？」

「いや……んなわけないけど……?」

もう一度段ボールを見る。よく見ると、段ボールの側面に『生物』と赤いシールが貼られていた。

……これって。

「澤田さん？」

「……いや、ちょっと心当たりがあった」

「マジですか……？開けます？」

「いや、それは後にしておくよ。それより、着替えなくて良いのか？  
明月さんに何か呼ばれてなかったっけ？」

「あ、そうでした」

「いそいそと着替え、早々に出て行く。」

「これは……まさか……なあ」

俺も着替えを済ませ、段ボールの正面に立つ。

明月さんは今高嶺と話している途中だし、ミカドさんは……って、  
関わって無かったって言ってたか。

「……うーむ」

考えても埒が明かないので取りあえず、段ボールのガムテープに手  
をかける。

「……ええい、ままよー」

勢いよくテープを剥がし、その場を飛び退く。

警戒していると、中から一人の人物が出てくる。

「まさか、またもこれを使う羽目になるとはのう……」

手に持った扇子で肩を叩きながら疲れた顔をして出てくる。神社  
などで見る巫女服の様な服装に豪華で煌びやかな装飾品と意匠が描  
かれていた。

「はて、妾を出してくれたのはうぬか？感謝する」

こちらを見ていたのは、土地神の時と同じ見た目で現れた、卯花之  
佐久夜姫であった。

「……ま、まさかの事態だな……これは」

間違いであってほしかった。ミカドさんに調べてもらっていたは  
ずだが、まさかご本人が直接乗り込んで来るとは……。

「そこで呆けておるお主よ、一つ確認しても良いか？」

「あ、ああ……なんなりとどうぞ」

「ここは、喫茶店で間違いないか？」

「そうだな、喫茶店だ。カフェステラって名前の……」

「そうか、では問題無く来れたと言うわけか」

満足そうに腕を組み、うんうんと頷いている。

「という事は、貴様が澤田達也で間違い無いのだな？」

「っ!?……ああ、ああ。それで当たっているが……?」

これはあ……、本物だなあ。神の力か……?

「何やらここそこそここちらを嗅ぎ回っている様じゃが……まあ、それについてはこちらが先にしたとこじゃ、許そう」

……ミカドさんの件もバレーテラ、という事は、俺を監視させていた正体は目の前にいる神で間違いなさそうだな。

「……それで、どの様なご用件で……?あと、出来ればお名前を……」

「おっと、忘れていた。妾は卯花之佐久夜姫。簡単に言えば神じやな。お主に用があつてきた」

「神……様」

「ふむ、この感じも懐かしいのう。よかろう、その証拠を見せる」

「え、ちよ、待って」

神の力つて……!嫌な予感しかなんだが!?

俺の制止を無視して、目を閉じて両手を勢いよく合わせる。

「くっ……!」

すると、手の隙間から眩い光が広がる。

「よし、こんなもんじゃろ」

納得するように俺の後ろを見る。つられるように振り返ると、そこにはパイプ椅子が自立ロボのように形を変えて直立していた。

「……」

「どうじゃ、これで信じる気になったか？」

「……いや、最初に見せるのがこれって、神様としてどうなの……?」

カッシャン、カッシャンと左右に動き回る。これ、元に戻んのか?

「何を言うか、妾の傑作じゃぞ」

「あー……うん、凄いの凄いなんだけど」

生徒会室で作った物よりか進化しているのはしている。股間のバースト砲は健全だがな。

「ふむ、今時の若者にはウケないとみた」

「どうだろうなあ……ロボ好きには刺さると思うんだけど……」

「そうか？ならもう少し工夫が必要じゃな」

……なんの話をしているのだろうか？

「何事だっ!？」

謎の会話をしていると、切羽詰まった様子のミカドさんが乱入してくる。

「あ、ミカドさん」

「突然とてつもない力を感じたが……っ!？」

俺を一度見て、後ろの神様を見て目を見開く。

「あなた様は……!？」

「うむ、妾は卯花之佐久夜姫。急な来訪じゃが、許せ」

「いえ……っ、ですが、どういった要件でわざわざ地上へ……?」

「そこらも含めてきちんと説明をしておこうか」

ミカドさんの姿勢を見れば、目の前の神の地位が高いってことが良く分かる。

……それより、はやくこのうるさいロボを元に戻して欲しいんだけど……?」

「ええと、つまり……上役の神から別の仕事を押し付けられた……で良いのか?」

「その認識で問題ない。全く、何が『そろそろ、別の事も知っていた方がいいんじゃないの?』だ。面倒ごとを投げて来ただけじゃろうが……」

不機嫌そうにしながら、明月さんの淹れたコーヒーを飲む。

「む、中々美味いではないか。葉那、お主が淹れたのか?」

「は、はいっ、お口に合って何よりです！」

「そう畏まらんくてよい。こやつみたいに力を抜くがいい」

「澤田さんが抜きすぎな気がします……善処いたします」

「聞きたい事があるんだが……いいか？」

「ん？よかろう。なんなりと申し出るがいい」

「俺に竜胆ルリを使つて監視させた理由を聞いておきたい」

「ほう、やはり気づいておったか」

「そつちが簡単に引つかかってくれたからな。お礼として袋ごと献上したけど」

「なるほど、ルリがうみやい棒を沢山持ち帰ってきてたのはそういうことだったのか」

「喜んでもらえと思ったからな」

「簡単じゃ、お主の人柄や生き方を見ていた」

「なんのために……？」

「わざわざとぼける必要はない。話は聞いておる。お主の力のためにじゃ」

ミカドさんと明月さんと見るが首を振られる。……教えてはないうのだが。

「その二人じゃない、いわば他の神からだ。報告しておつたのだろうか？それを聞いたまでじゃ」

「……なるほど」

そういえば、ミカドさんの上にも神が居たな。横繋がりみたいなものだろうか。

「状況は大体把握出来た。それで、これからどうするんだ？」

「そうなの……。久々にここの暮らしを満喫するのも手じゃな」

「地上にまた住むのか？」

「じゃな。色々と気になることもあるからの。当然、お主の経過を見つつになるが」

「まあ、お好きにどうぞ」

「色々と聞いておきたい事もあるが……まあよい。それについては明日以降にしておく」



「了解。こつちも朝が早いんでそつちの方が助かる」

卯花之佐久夜姫とのファーストコンタクトを終え、お店に静寂が戻る。……というか今日どこで寝泊まりするんだろう。あの神様は……。

「はああああー……何事も無く終わりましたねえ」

明月さんから盛大なため息が出る。

「うむ、荒波を立てることなく終えれたな」

「終始二人とも無言だったしな」

「堂々と話されてる澤田さんがおかしいんですよっ!？」

「本来なら易々とおりてくることは無いはずだ……。全く、貴様の口の利き方には何度肝を冷やされたか」

「2人にとってはそんなもんか」

「逆に澤田さんは何も思わないんですか……?」

「いや……思った通りというか、想像以上に想定内というか……」  
最初は警戒こそしていたが、話していくたびに頭の中の人物像と一致していった。

「正直、気が気じゃありませんでしたよ……」

「急に店内で膨大な力を感じたと思えば……」

「それについてはすまん。まさか、懲りずにまた段ボールで来るとはなあ……。あ、パイプ椅子って元に戻ってるか見ないとな」

「よりにもよって心配するのはそれか……」

明月さんとミカドさんが呆れた様子でこちらを見る。

「確認だが、貴様が気にしていた存在で間違い無いのだな?」

「ああ、ミカドさんをお願いしていた相手で問題無い。ま、向こうからやって来ちゃったけどな」

「向こうの響蹙を買ったかと思っただが……。違ったようでも心底安心した……」

「とまあ、何とかなつたし、取りあえず今日は解散しようか。続きはまた明日ということぞ!」

「……そうだな。そうしよう」

次の日、いつも通り働いていると、厨房に四季さんが入ってくる。

「澤田君、ちよつといい?」

「ん?どした?」

「お客さんで、澤田君を呼んでくれって言っている人が居るんだけど……」

「俺を?ご指名?」

「ええ、呼べば分かるって……」

「……それって、髪が長くて、昔っぽい口調の女の人だったりする?」

「え、うん。そうだけど、知り合い?」

「あく……まあ、一応。分かった。対応するよ」

「ごめんだけど、お願い」

「すみません、少し外して大丈夫ですか?」

同じ厨房の涼音さんと高嶺に一声かける。

「べつにいいよ。とりわけ忙しいって程じゃないし。いつてきたら?」

「すぐ戻りますんで」

厨房を出てフロアを見渡す。……居た。

向かう途中に、明らかに緊張したミカドさんと目が合う。『くれぐれも粗相のない様に……!』と目で言ってきたので苦笑いで返す。

「お待たせ」

四人用の机に一人で座っている姫様の正面に座る。

「お、来よったか」

メニューを広げながらこちらを見る。昨日とは違い、周囲に馴染めるような服装をしていた。

「それで、何用でしょうか?今は忙しくないけど、出来ればあまり持ち場から離れたくないんだが……」

「わかっておる。その為にわざわざ空いている時間帯に来たから

の

「お気遣いどーも」

「ここのお店のオススメを食べたくてな、ちと教えてはくれんか？」

「おススメを……？」

「どれも美味しそうでな、どうせなら一番を食べておこうかと思っ  
たんだが」

「なるほど、そうだなあ……売れ行きのイチゴのタルトとかど  
うだ？女性人気ナンバーワンだぞ」

「イチゴのタルト……向こうの二人が食べているやつか？」

「ああ、あれだな。他には……コーヒーかもおススメだな。あ、あと  
パンケーキだな。あれは外せない」

「ふむ……じゃが、全部は食べ切れんが……」

「別に今日じゃなくて明日でも良いのでは？」

「それもそうじゃな。因みに、お主はどれが得意だ？」

「俺？んー……強いて言えば紅茶が一番練度高いかなあ？」

「そうか、ではこのオールグレイと、パンケーキを頼む」

「コーヒーじゃなくて良いのか？」

「昨日飲んだからな。今日は別のにしておく」

「俺が淹れるのを楽しもうって考えか……」

「喜べ。妾が評価してやる」

「精々頑張るよ……。じゃあ、紅茶とパンケーキだな。少々お待ち  
ください」

「うむ、楽しみに待っておる」

席を立ち、伝票に注文を書いて、厨房へ届ける。

「すみません、パンケーキ一つお願いします」

「りようかいって、なんであんだが？」

「ちよつと知り合いの偉いさんが来てたので、パンケーキと紅茶を  
……」

「なるほどねー、分かった。とびっきりのを用意してやんよ」

「お願いします」

フロアに戻り、紅茶を淹れる準備をする。

「澤田達也……！貴様、大丈夫だろうな!？」

「問題無いって、普通にお店のおススメを聞かただけだから」

「そうか……、なら良い」

安心しながら持ち場に戻っていく。

「ねえ、澤田君」

ミカドさんの次は四季さんがやってくる。

「なに?」

「えっと、何かあったの? なんだが、閣下と明月さんがピリピリしてるんだけど……」

「あー、二人の業界の偉いさんが来てるからな。ほら、さつき俺を指名してた女の人」

「ああ、あの綺麗な人。……え? 本気?」

「本気も本気。だからミカドさんがソワソワしているだろ?」

「確かに……。それならどうして澤田君が対応してるの?」

「さあ? 気に入ってくれたんじゃない?」

紅茶を淹れ終え、運ぶ。

「お客様、お待たせしました。こちら、アールグレイでございます」

「うむ、ご苦労。ではさっそく……」

カップを手に取り、一口飲む。

「……美味しいな」

「お口に合って安心したよ。大したことじゃないけどな」

「謙遜する必要はない。それなりに腕を磨いたのじゃろ?」

「そりゃあそれなりには。……Robinのとどっちが上かな?」

「……わざわざ言ってくるという事は、眞一郎のことも知っておるのじゃな?」

「どうせ神には既に筒抜けだしな。隠しても意味は無い」

「そうか。……ま、向こうのにはまだまだ及ばんな」

「流石に熟練相手には勝てんか」

「当たり前じゃ。磨き上げて来た年数が違う」

「向こうの人達は元気そうか?」

「問題無かろう。たまに見ておるが、元気じゃったぞ」

「それはそれは何よりで」

「貴様は……どこまで知っておる？」

「大雑把に、ある程度は」

「今すぐにもでも問いたい所だが……それはあとにしよう」

「だな。……とところで、気になったんだが、昨日はどこで寝泊まりしたんだ？」

「ん？普通にホテルに泊まったが？」

「そ、そうか……」

普通に金とか服は持ってきたのか……？あまり深く突っ込まない方が吉だなこれは。

「……………」

紅茶を淹れ、それを席へ運んでいく澤田君を見る。

相手は……閣下達の偉い人って言うってたけど、二人の様子を見た限り嘘じやなさそう。

その相手に親しげに話しているけど、元々知り合いだったのだろうか……？わざわざ本人を指名するくらいだし親しい関係なのだろう。

「いつの間に、親しくなったんだろう……？」

## 第56話：虫喰の瞳

涼音さんが作ったパンケーキを運び終え、ようやく戻れるかと思つたが、厨房に戻ると……。

『偉いさんなんですよ？こっちはまだ二人で余裕があるから、そつちを対応してもらつて平気。何かあつたら呼ぶから』  
と言われ、追い出されてしまった。

「どうして俺が……」

対応ならミカドさんでも良いんじゃないか？神相手に接待なんてごめんだぞ。

席に座つて美味しそうにパンケーキを食べている卯ノ花姫を見る。俺の視線に気が付くと、『うむ、美味いぞ。グッドじゃ』と言いたげにご満悦であつた。

「ま、その内帰るし問題はー」

一旦気にするのは止めようとする、店に一人新規のお客が入つて来た。

「……………」

それを見て、近くに居た火打谷さんが対応をし、席へ案内していく。見た目は……高嶺や四季さんと同じくらいか少し上ぐらいの男。

だが、その男の周囲には蝶が集まつていた。

明月さんとミカドさんを見ると、二人もそれに気づき、頷いていた。案内した火打谷さんは、特に気が付いていない様に見えたが……、たまたま左目に映らなかつたのだろうか？

一応注意をしながら仕事を続けていると、その男の席の近くに座つている卯ノ花姫がメニューを見ながら何を頼もうかと考えている。

……今日は紅茶とパンケーキだけじゃなかつたのか？

呼ばれるのも面倒なので、先に近づいて声をかける。

「今日は紅茶とパンケーキじゃなかつたのか？」

「別に追加で食べようなど考えておらん。何かルリへお土産を買つて帰ろうかと考えておる」

「なるほど、これは失礼」

「オススメはどれがよいとかあるか？」

「おススメか……ショートケーキとかは？無難だし万人が好むと思うが」

「ほんとに無難じやのう。まあ分かった、もう少し考えておく」

「了解、決まったら呼んでくれ」

引き続きメニューを見ている神様を置いて、持ち場に戻る。

……ん？ドリンクの注文が来るな。

火打谷さんが先ほど座った男から注文を受けているのを聞き、前準備だけ進めておく。

「すみません、ドリンクの方お願いして良いですか？」

「おっけー、伝票もらうわ」

伝票を受け取り内容を見るが、どうやら飲み物だけのようだ。休憩に来ているだろうか。

飲み物を淹れ終わり、席まで運ぼうと振り返ると、目的の席には誰も座っていないかった。

ん？トイレか？

そう思つて席へ近づくと、さっきの男が席を離れ、卯ノ花姫の正面に座つて居た。

「何を頼むか困つてるのなら、俺と一緒にこれ食べようぜ？」

……こいつ、自殺志願者か？蝶が集まつてるくらいだしあり得るな。いや、冗談だが。

後ろを振り返り、ミカドさんを見ると驚愕の表情で固まっていた。当の卯ノ花さんも面倒くさそうにあしらっている……が、男はめげずに話しかける。

「貴様、失せろと言っているのが分からんか？」

「はあ？人が折角親切に聞いてんのに、その態度はねえだろっ」

「それが迷惑以外何物でも無いとなぜ分からん……」

男の言葉に対してため息を吐く。それを見て男の顔に怒りが見える。

これは、一応止めに入った方が良いのか？けど、仮にも神だし余計

な手出しは不要かもしれないが……。

飲み物が入ったトレイを持って見ていると、その輪に火打谷さんが割り込んできた。

「あ、あの、お客様。店内でお静かにしていただけると……」

「俺は別にうるさくしてねえよ。ただお話しているだけだ」

「妾は別に望んでおらん。こやつが勝手に話しかけて来ただけじゃ」

「お相手の方も、こう仰っていますし、お席へ戻ってはどうぞでしょうか……？」

……そろそろ火打谷さんが可哀そうだし、取りあえず止めないと。トレイを適当にカウンターへ置く。

「じゃあ、その代わりよ、店員のアンタが俺の話し相手になってくれるのか？俺は別にそれでも構わないけどよ」

「え、あ、いえ……そう言ったのは……」

「別に良いだろう？」

「お主、用があつたのは妾では無かつたのか？」

「うっせえな、お前は黙ってる」

自分に気を向けようと話かけた卯ノ花を無視して、火打谷さんに手を伸ばし、腕を掴む。

「あ、あのっ……！……あ……」

「お客様、店内ではお静かに願います」

火打谷さんの腕を掴んでいる男の腕を掴む。

「はあ？誰だよあんた」

「ここのお店の者ですよ」

男の腕を親指で押し、火打谷さんの腕から離す。

「いッ！いてえなっ。放せ！」

痛みから逃れようと腕を振るが、逃さない様に更に力を入れる。

「火打谷さん、こっちは任せて良いから下がって」

「え、けど……」

「放せってっ、客に暴力振るうのか！」

「お客様、店内ではお静かに……これは、最後通告です」



言葉を選びながら、強めに言う。横を見ると面白そうに俺を見ている神様が居た。

……こいつ、楽しんでやがるな？

「お客様、何かございましたか？」

目の前の客を叩きだそうかと考えていると、ミカドさんが間に入る。

「っ!?!、何でもねえよ。くそがっ」

自分より年齢が上の人間が来たのを見て、一瞬驚きながらも席を立つ。

「こんなクソみたいな店、二度と来るかよ」

逃げ台詞を吐き捨てたのを見て、手を離す。

「そうですか、お帰りはあちらでございませす」

「ッ！」

そのまま入口まで偉そうに歩いて行くのを何かやらかさないかと後ろから付いていく。そのまま店を出て行くところまで確認して、店内へ振り返り頭を下げる。

「お騒がせして、大変申し訳ございません」

その様子を見て、店内が再び普段のように戻る。

「ごめん、助かった」

こちらに戻って来たミカドさんにお礼を言う。

「気にするな。当然のことをしたまでだ。それに、あのまま放っておいたら貴様が何をしでかしたか分からなかったからな」

「ミカドよ。見事じゃ、感謝する」

「い、いえ……あの程度」

「何もせず楽しんでいたくせに……助け船出しても良かったんじゃないか？」

「貴様っ!?!無礼だぞ……!」

「よい。そうだな……お主が止めに来たのでな。どうなるか見ておったのじゃ」

「さようでございませすか」

「っ、それよりも……。」

「大丈夫か？火打谷さん」

「あ……えっと、はい。大丈夫、です」

「怖かっただろ？助けが遅れて申し訳ない」

「い、いえっ、そんなことは……」

「ちよつと早いけど、先に休憩取って来ていいから。少し落ち着こう。墨染さん、お願い」

「分かりました。行こ？愛衣ちゃん」

「いえ！わざわざそこまで……」

「いいからいいから」

半ば強制的に奥へ送り出す。

「つて、勝手に1人減らしたけど、大丈夫だよな？」

「今は忙しくないし平気。最悪、澤田君に手伝って貰うから」

「おっけい、それなら問題無いな」

無事、四季さんからの許可も得たので仕事に戻ろうとすると。

「あの、澤田さん」

「ん？どうした？」

「蝶の件で、後でお話が……、あと愛衣さんの事でも……」

「……了解。終わった後でまた話そう」

「分かりました」

……まあ、流石に気づくか。こればかりはしようがない。

本日の営業が終わり、片付けを済ませる。

「皆さん、今日もお疲れ様でした」

「お疲れ様」

「お疲れ様です……」

皆がお互いに労っている中、火打谷さんは未だに少し元気のなかつた。

それに気づいた女性陣が慰めながらも休憩室へ入って行く。

「澤田さん、今大丈夫ですか？」

「ああ、さっきの件だよな？」

レジ閉めの作業をしているミカドさんも、こちらに意識を向ける。「はい。単刀直入に聞きますが、愛衣さん……見えてますよね？」何が、と言わない辺り確信があるんだろう。

「そうだな。あの子の場合は特殊だけど、見えてるよ」

「特殊……もしかして、以前プロフィールで伏せられていたのとか関係が？」

「ご明察通り。彼女の左目には、虫喰の瞳が宿ってる」

「え……っ!? 愛衣さんにですか？」

「そうだな。使いこなせていなくて不完全な状態で、だけど……」

「不完全な状態で……」

「本人には蝶が白っぽいもやとして見えるみたいだな。昔、色々あつて見ない様に片目を髪で隠しているんだが……」

「なるほどです。それはまた……困った能力ですね」

「かなり役に立つと思うが……まあ、そこら辺はこの後、本人も交えて話そう」

「そうですね。私も着替えてきます」

「了解。……例えば、卯ノ花さんはいつ帰ったんだ？」

「あの後、お土産のケーキを買われて帰られましたよ？」

「そうなのか……まあいいか」

てつきり昨日の続きかと思つたが……いや、結果的にありがたいんだけど。

その後、出て来た火打谷さん呼び止め、三人で再度部屋へと戻り、説明をした。

最初は何事かとビクビクしていたが、話が進んでいく内に困惑と驚きが変わっていった。

「えっと……あの、つまりは、栞那さん達はその蝶を回収するのがお仕事、というわけですか？」

「はい、現世に彷徨う蝶を神の元へ導くのが役目ですね」

「ミカドさんも、それを……」

「その通りだ」

「達也先輩は、そのお手伝いを……」

「そう言った認識で大丈夫。まあ、少し特殊な事情もあるけどな」

「そう、ですか……」

「急に意味不明な話をされて困惑するのも無理は無いと思う」

「あ、いえ、確かに色々混乱していますが……ちよつと安心しました」

「自分の謎の力の正体が判明したのが？」

「です、ね。昔から人と違ったのがあって……どうしてなんだろうってずっと不思議に思ってたんです……」

「それが、同じ様な人達と会えて、一人じゃないんだなって」

「そうだな。しかも、蝶が見えるのはここにいる三人だけじゃないぞ？」

「え？他にもいるんですかっ？」

「ああ、高嶺や、四季さんも見えるぞ」

「え、ええっ!?!マジですか!」

「ああ、マジだ」

「ええ……、近くに滅茶苦茶沢山いたのか……」

「そりゃあ、それ関係で始めたお店だしな。」

「つて、ことは、希ちゃんや涼音さんも……?」

「残念ながら二人は見えないな」

「そうですか……」

「因みに、火打谷さんのその目の現状も割と説明出来るけど、聞く? それとも目を改めるか?」

「いえ、聞きたいです。聞かせて下さい」

「了解。さつきも言ったけど、その左目に宿っているのは虫喰いの瞳、蝶を回収して一時的に目の中に閉じ込めることが出来る。火打谷さんがそのモヤを見ていると消えるのはそういうこと」

「はい、アタシの目に閉じ込めているんですよね。その、実感はありませんが……」

「そうそう、んで、本来の力なら吸収も出来れば、それらを解き放つ

「ことも可能なんだけど……今の火打谷さんには出来ないはず」

「試したことはありませんが……やってみて良いですか？」

「どぞどぞ」

「ええと……んー、うーん……」

眉間に皺を寄せ、目に力を入れてうんうんと唸る。

「……だつ、駄目でしたあ……！」

「まあ、こればかりは仕方ない」

「そうですね、もし放たれた蝶が人に触れると、その人へ影響を及ぼしてしまうかもしれませんし」

「え、なにそれっ!?こわっ！」

「怖がらせるような言い方になるけど、使い方次第では人を元気にさせたり、逆に無くさせたり出来てしまう力だ」

「安心してください。解き放ち方がわからない愛衣さんには関係のない話です」

「そ、そうですか……」

「それでだ、ここからが本題になる」

「は、はい……」

「その力を、正しく使いたいと思わないか……?」

「澤田さん、何だか悪役みたいな言い方ですが……」

「いや、人生で一度は言ってみたい台詞じゃんっ! 『力がほしいか……?』的な!」

「まあ、言いたい事は理解できますが……」

「と、それは置いといて、火打谷さんは今まで自分の力に振り回されてきたと思う。どうして自分だけ他人と違うのだろう?とか、気味悪いとか思われないうちに今まで必死に隠して来ただろ?こんな力無ければ良かったって……」

「だけど、生きている限りその力は一生自分につきまとう。どんなに嫌だと願ってもな。まあ、ある種の呪いと言っても良い」

「それならその力を正しく使って、自分の物にしたくはないか?振り回されるのではなく、自分の一部にしてしまうんだ。どうだ?」

「澤田さん……」

「ま、大事なものは本人の意思だ。こればかりはどうにも出来ないしな」

「そうだな。愛衣よ、意見を聞かせてくれんか？」

「あー……、その、達也先輩の言う通り、小さい頃からずっと考えていました。なんでこんな力があるんだろう……。どうして他の人とは違うんだろうって」

「正直、まだ完全に理解は出来ていませんけど……。でも、私のこの力を、正しく使えるのなら、手伝いたいです。もう振り回されるばかりは嫌です。もし、何か役目があつて私に宿ったのならそれを果たしたいです」

「……って、ちよつと大げさな言い方ですけど、あはは」

「いいや、大げさではない。我輩たちと瞳の所持者が出会つたのも、運命であろう。そうだろうか？」

「ああ、運命だな。ようこそ、火打谷愛衣よ。我らは君を歓迎する」  
「だからいつまで悪役を続けるのですか……。全く」

良いじゃんかよ。場の空気も和らぐじゃん。

「火打谷さんが仲間に加わつた所で、俺から一つ試した事があるんだが……。いいか？」

「ほう、なんだ？」

「上手く行けば、火打谷さんの中に格納されている蝶を引っ張りだせると思う」

「それはまことか!？」

「多分な。これなら火打谷さんに負担を掛けずに楽に回収が出来るはずだ」

「勿論、リスクは無いのだろうか？」

「当然。取り合えず試してみるよ」

「えつと、アタシはどうすれば？」

「リラックスしてて良いよ。全部こつちでやるから」

「は、はい……」

実験する前に、感覚を確認する為に一度自分の手のひらから蝶を適当に出す。

「え、先輩の身体からモヤが……」  
よし、この感覚だな。

蝶を戻して、その手のひらを火打谷さんに向ける。

「……うーん」

「どうでしょうか？」

「いや、ちよつと難航中……」

感覚は合ってると思うのだが……。

「難しそうか？」

「いや、ごめんだけど。直接体に触れても良いか？」

「へっ!? は、はい……だ、大丈夫です……」

「澤田さん、実験と偽ってセクハラは駄目ですよ……?」

「いや、違うから! 別にべたべたと触らないっ! なんなら指先だけでも良いから!」

「それはそれはえっちいい気もしますねえ……にひひ」

「あ、あの……自分は大丈夫なので」

「すまん、じゃあ失礼するぞ」

「は、はい……」

緊張と羞恥心で顔を赤らめている火打谷さんの……瞼の上に手を被せる。

「う、うう……」

すまん、耐えてくれ。こっちまで恥ずかしくなってくるから。

意識を集中させ、自分の身体の時と同じ要領で蝶を引っ張りだす。

「……あつ」

明月さんの驚く声がしたと思うと、俺の手が青く光る。

「……このまま」

感覚を維持しながら瞼から手を離す。

「お、おお……」

すると、俺の手に引っ張られるように蝶が出てくる。

「おっと、一旦止めよう」

取り出すのを中断すると、途中で取り残された蝶が宙を舞う。

「明月さん、頼む」

「はい」

飛んでいる蝶を、そのまま鎌で回収する。

「成功したな」

「そうですね……愛衣さんは体調に変化などはありますか？」

「い、いえ、特におかしくは……いつも通りです」

「これで、愛衣が無理に解き放たなくとも回収が可能となったわけだ」

「澤田さんの方は大丈夫ですか？」

「ああ、特に変化はないな」

「そうだと思っていたが、やはり影響を受けておらん」

「おかげさまで」

「え、え？どういうことですか？」

「先ほども言った様に、瞳の中の蝶を人に放てば、その者の体調を崩したり不幸にさせることも出来る。だが、原因は分かっていないが、こやつはその影響を受け付けないのだ」

「えっ!?それじゃあ、危ないことだったの!?!」

「本来ならな。しかし、こやつが問題無いと言ったのだ。大事にならないとは思っていた」

「火打谷さんからしたら変な光景に見えたかもな」

「確かにそうですね。なんだか生命エネルギーを吸われている様でした」

「ああ、HPドレインみたいに見えたのか」

「そうそう、それですつ。ああつ、吸われてくうく……!みたいな?」

「はは、白いモヤだもんな」

「それにしても、達也先輩凄いつすね!先輩も私みたいに能力持っているんですか?」

「ふっふっふ、色々あるのさ……ふっ」

「なにその強キャラ感……困みにいく、どんな力なんすかあ?」

「そうだな、複数持ちだ」

「複数っ!?チートじゃないですか!」



「澤田さんの場合は色々で特殊で、私たちも未だに調べている最中なんです」

「ふ、すまないね。別格なのだよ……私は」

「いや、何キヤラなんですか……それは。それでそれでっ、どういったのですか？」

「俺だけ言わないのもフェアじゃないしな。別に良いぞ」

「澤田さんっ!？」

俺の発言に、明月さんとミカドさんが驚く。

「いやいや、大丈夫だから」

「あ、あのく、もしかして、聞いちゃまずいやつでしたか？地雷踏みました？」

「大丈夫大丈夫。勿体ぶる気も無いしな」

「あ、よかったあ……やらかしたかとヒヤヒヤしましたよ」

「俺にある力なんだが、そうだなあ……火打谷さんにさっきしたみたいに蝶を割と好き勝手に弄れるのと……その蝶の感情や記憶を覗き見ることが出来る……感じかな？」

「……蝶の、ですか？」

「そうそう。蝶は人の魂みたいなもんだからな。感情があれば記憶を持つてる蝶だっている。それを視ることが出来る」

「ほへえく……よくわかんないですけど、すごいっすねえ」

「二応補足しておくが、通常の人間には不可能だからな？蝶の感情に触れれば、その感情に自分も引っ張られる。嫌な感情なら自分も嫌な気持ちにな。記憶など更に危険な行為だ」

「ど、どうなるんですか？」

「相手の記憶を自分の魂に入れるのだ。いわば追体験をしてるに近い。当然、その時に感じた記憶も重なる。最悪感情と記憶が混ざるとこもある」

「えっ!?!やばくないですか!それっ!」

「こやつはそれを既に何度もしているが、それでも魂に一切の変化が見えん」

「魂の記憶って……その、死んだ人のもって、ことですよ？」

「そうなるな」

「ひい、やばすぎじゃないですか!？」

「だからそう言っておる」

「まあまあ、俺のことより、今は火打谷さんのことだろ？」

「む、そうだったな」

「取りあえず、機会があれば火打谷さんに蝶を回収するのを手伝って貰う。これで良いか？」

「そうですね。愛衣さんなら、相手と話さずとも取り除くことが可能ですし……」

「そうだな。前回の結菜の父の様な客にも有効だろう」

「結菜ちゃんのお父さん……？」

「仕事でミスして落ち込んでたろ？あれで蝶が寄って来てたんだ」

「あー、なるほどです。そういうことでしたか」

「詳しくは明日以降にでも話そう。今日はもう遅い。二人共帰った方が良いだろう」

「そうですね。相談は後日にしましょう」

「了解。そんじやあ今日は帰るか。遅いし送ってくよ」

「ありがとうございます。それじゃあ、ミカドさん、栞那さん、また明日です！」

「お疲れ様でした」

「気を付けて帰るがよい」

「2人は店を出たみたいだな」

「ですね。それにしても、色々と驚きましたね……」

「愛衣の瞳もそうだが、澤田達也の力の応用もな」

「まさか、直接蝶を取り出すだなんて、滅茶苦茶にもほどがありますよ」

「奴に関しては今更驚いても仕方あるまい。こちらとしては瞳の所持者が仲間になっただけでもプラスだ」

「それはそうですね……」

「それにしても、少し意外だったな。愛衣が力を使うのを反対するかと思っていたが？」

「そりゃ反対でしたよ？愛衣さんへ危険が伴いますし……表沙汰になる可能性も考えました。ですが、澤田さんが大丈夫と仰っていましたし、あんな卑怯な言い方されたら、止めるに止めれないじゃないですか……」

「愛衣の境遇と、あやつ境遇を重ねたか？」

「はい。他とは違う力を持っている。その心境を澤田さんは知っているはず。彼もまた同じ人生を生きて来ています。そんな彼が、同じ境遇の愛衣さんへ手を差し伸べたのですから……」

「ふむ、奴の事だ、愛衣の力の事も把握した上での行動なのだろう。今日の事が良い切っ掛けと見た筈だ」

「そうですね。となると……」

「ん？どうした？」

「いえ、今回の事で愛衣さんの事を知りましたが、似た様に伏せられたのが希さんにもあったので……」

「もしかすると、同じようなものを抱えているのかもしれないな」

「かもしれないね……」

## 第57話：依頼と報酬

「さてと、じゃあ俺たちもさっさと帰りますか。方向こっちだっけ？」

「はい！よろしくお願いしますっ」

ミカドさん達と話を終え、すっかり元の調子に戻ったのを見て安心する。これなら明日には引きずらないだろう。

「いやーそれにしてもほんとに驚きました！まさか身近にこんなにもいるなんて」

「分かっているとは思うけど、むやみやたらに話題として出さない様になっ？どこで誰が聞いているのか分からないから、確実に大丈夫な時だけだぞ？」

「了解です！変な人って思われちゃいますもんね」

「その通り」

「あの、今更ですが、一つ聞いても良いですか？」

「ん？どうした？」

「達也先輩が私と最初に会ったこの道あるじゃないですか。ここ。あの日ってやっぱり蝶々を捕えていたんですか？」

「あー、あれか。そうだな。当時はやらかしたとめちやくちや焦ったわ」

「あはは、確かにそうですね。私もビツクリしましたもん」

「絶対変な人間って思われたし、次の日には顔合わせるしでさ」

「あれは私も予想外でした。けど、あれ以来そう言った素振りが無かったので気のせいなのかなーって思っていました」

「見せない様にしてたからな。回収は全部明月さんに任せていたし」

「なるほど、そう言ったカラクリでしたか……」

「そんな感じだ」

9月を思い出しながら、寒くなったなと思いついて歩いていると、正面に人影が見え始める。

「……………」

道の真ん中に立ち、明らかに通せん坊の構えである。

「？」

隣の火打谷さんも不審に思い始め、首を傾げる。

近づくにつれ、その人物の周辺に青く光る蝶が複数飛んでいるのが見える。

「先輩……、あれって……」

「ああ……」

ただ事ではないと感じ、火打谷さんが足を止める。

「よお、ようやく店から出て来やがったな……待ちくたびれたぜ」

夜道の街灯が背後からその男を照らす。影ではつきりとは見えな  
いが、服装と声からして卯ノ花姫に絡んでいた男と思われるが……。

「な、なんか……数、増えてませんか……？」

店で見た時より、明らかに蝶の数が増えていた。

「引き寄せられたか、自分が引つ張られたか……」

何はともあれ、これから厄介ごとが起きるのは明らかである。

「……火打谷さん、店に戻ってミカドさんたちを呼んできてもらえ  
るか？」

隣に居る火打谷さんに小声で伝える。

「え、先輩は……？」

「用があるのはどうやら俺みたいだしな。店での恨みか何かだろ  
う。時間を稼ぐから急いで戻ってほしい。頼めるか？」

「おいおい、なにこそこそとはなしてんだ……？」

「それじゃ、頼んだ」

「っ……わかりました！」

注意をこつちに向ける為に一步前に出て、話しかける。

「こんな時間にナンパか何かか？男女二人に声をかけるだなんて度  
胸がある男だなあ？」

俺が声を出したと同時に、後ろで走り去っていく音が聞こえる。

「そのお相手には逃げられたようだが……？情けねえな。ハハハッ  
！」

「か弱い女の子なんですね。お店の時みたい怖がらせるのは、男として許せないんだよ。まあ、フラれたからと言って強引に手を出す貴方とは違うんですよ。はっはっはっ」

「……っ、てめえ……!」

「お、凶星か。その様子を見る限り、度量も狭いと見た。フラれて当然とも言えるか……これは失礼」

「……殺す」

うーん。一般人が込める言葉の重さじゃないなこれは。本気で殺すつもりか？

「おーおー、怖い怖い。おまわりさんでも呼ぼうかな?」

「殺す……っ、しねえええ!!」

凶器でも出して来るのかと身構えていたが、素手を振りかぶってそのまま走ってくる。

「マジか……」

以前、四季さんと居た時の人の方がまだ殺意あつたのではないだろうか……?動きも一般人だし。

「はッ!」

こちらと距離を詰め、俺が殴れると思つた瞬間に逆に身体を前に出す。

「ッ!?!」

自分で殴ろうとしていた位置からズレた事で一瞬動きを鈍らせる。その隙を逃がさない様に相手の髪の毛を掴んでそのまま顔面に膝蹴りをお見舞いする。

「がっ!?!」

掴んだ髪を思い切り上に持ち上げ、今度は腹に前蹴りを入れる。つま先の先端をみぞうちにしっかりと。

「ぐうふう!?!……っ!ああ……!!」

衝撃でそのまま後ろに倒れ、お腹を押さえながらもがき苦しみ始める。

「……ほんと、折角良い感じで進んでいるのに、お前みたいやつが一番めんどくさい……」

「がつ、あが……っ！」

「しかも、中途半端に追い払うと、逆恨みで誰かを狙う……狙われたのが俺で本当に安心したよ」

「て、てめえ……のっ……のっ！」

喋れるくらいに余裕が出て来たので、拳を握り、小指側を下にしてそのまま顔面に打ち付ける。

「っほ！」

「……二度とそう思えない様にしないとな」

立ち上がり、今日火打谷さんに試した事を思い出す。

「負の感情ね」

拳を開き、掌に蝶を出す。追加で可能な限りのマイナスな感情を表に出す。

「……これで、いけるのか？」

手の平から複数の蝶がふわりと飛び出る。

「試すのにはもってこいかもしれないな」

試しに、蝶の1頭を地面で苦しんでいる男に向けて放つ。

真つ直ぐと飛んでいく蝶を見ていると、男に触れる寸前で白く輝く何かによってかき消される。

「やめておけ、このど阿呆が」

その方向を見ると、巫女の恰好で扇子をこちらに向けている卯花之佐久夜姫が居た。

「すまんが、勝手に止めさせて貰った。このままじゃと、そこに居る

男がかわいそうじゃからのう」

「……つまりは、効果があるということなんだな？」

「そうじゃな。お主……分かっていて行うつもりだったろ」

「まあな。こういうった輩は、加減をすると幾らでも突っかかってくるからな。経験のあるあんたになら分かると思うが？」

「……じゃな。そちらの言い分も理解できる。だが、それをお主がする必要はない」

「……どうする気だ？」

「なに、妾の力で記憶を消すのじゃ。ついでに店には近づかない様

に暗示……おまじないもかけておこう」

暗示って……。

「……それで店の安全は保たれるのか？」

「保証しよう。神である妾がな」

「……分かった。それなら任せるよ」

そっちが力で何とかしてくれるのなら、俺より確実だろう。

「そうか。……お主の怒りはもつともじゃ。じゃが、安易にそういう手段を使うでない」

「必要に駆られない限りは使わないから安心してくれ」

「いや、なんの保障にもー」

「先輩っ！」

地面で苦しんでいる男に注意を向けながら話していると、お店からミカドさんと明月さんを連れて火打谷さんが戻って来た。

「無事ですか、ってうおっ?!人が倒れてるう!!」

俺の目の前に転がってる男を見て盛大に驚く。

「無事か……?!これは……っ!」

俺の奥に居る卯ノ花姫を見て、態度を変える。

「そう畏まらんで良い。普通にせよ」

「は、はあ……。それで、この状況は……?」

「なに、こやつが暴漢者を倒してくれたからの。後始末を妾が引き受けようとしていただけじゃ」

「貴方様がせずともこちらで……」

「よい、妾もたまには仕事をせんと上に怒られるらかの」

おどおどとしているミカドさんに揶揄うように笑いかける。

「そう言われるのでしたら……わかりました」

「達也と、愛衣じゃったか?ぬしらはこのまま帰ると良い。あとはこちらで片付けておく」

「……分かった。あとはよろしく頼んだ」

「妾に任せておれ。結果は明日にでも知らせよう」

「そんじゃあ、火打谷さん。帰ろうか」

「え、あ……はい。分かりました……」



場の状況が一切飲み込めていないが、俺に連れられるまま帰る。暫く歩くと、一度後ろを振り返って話かけてくる。

「あのく、いまいち状況が飲み込めなかったのですが……どうなっただんですか？」

「んー……端的に説明すると、俺がさっきの男をボコボコにして、あの豪華な巫女服を着た女性に後の処理を頼んだ？的な感じ」

「ほうほう……って色々ツツコミどころ満載なのですが……？というか、あの女の人誰ですか？」

「……俺やミカドさん達の知り合い？ほら、お店であの男に絡まれていた人」

「……、あー！あの綺麗な人ですか！思い出しましたっ」

「そうそう、その人」

「え、どうして巫女服を……？」

「そりゃ、正装だから？ほら、墨染さんも巫女服着るじゃん？それと似たような感じだよ」

「ん？んく……？つまりは、そう言ったお仕事の人ってこと？」

「そうだな。その認識で大丈夫」

「どうしてその人がこんな時間に……？」

「……火打谷さん」

「はい？」

「人には、誰しとも言えない秘密があるんだ。無闇に突っ込まず、時にはスルーするのも大人として重要なんだ……」

「え、どういう意味ですか？」

「いずれ分かる時が来るよ……」

「えく……」

俺の言い訳に理解不能と声を上げる。

「それよりも、家はこの方向で当たってるのか？」

「え、はいっ！大丈夫です。このまま真っ直ぐでお願いします」

「了解」

「……あの、達也先輩」

「どうした？」

「その、ありがとうございます」

「それは、さっきのことに対してか？」

「はい。アタシを危ないからとお店へ行かせたので……」

「まあ、俺一人ならあの程度特に問題無かったからな。万が一火打谷さんが狙われた時が厄介だったし」

「あはは、だから残られたんですね」

「そゆこと。よくあるだろ？ 護衛対象が居た方が難易度上がるってさ」

「確かに、ゲームとかでは良くありますね……」

「だから火打谷さんが、『見捨てた』とか『危険を一人に押し付けた』とか気にする事じゃない。俺は相手を足止めする。その間にそっちは助けを呼ぶ。役割分担だ。お店での仕事と同じ。オーケー？」

「……わかりました。改めて、ありがとうございます」

「おうとも、何事も無くて安心したよ」

「思いつきり起きてましたけどね……あはは」

「あの程度、日常のちよつとしたスパイスさ……フツ」

カツコつけるように前髪を払う動作をする。

「なんすかそれ、まるで機関のエンジンみたいすね」

「表は喫茶店の店員。しかし、その裏の顔は……!? という感じで売って行くか」

「いいっすね！ それっ。街の掃除屋……みたいな感じで！」

「勿論夜は、煙草を啜えて街を歩いてるだろ？」

「そうですそうです」

実際にそんな感じではあったんだがな。タバコは吸わんけど。

そのまま話を盛り上げつつ、今度は何事も無く火打谷さんを家まで送り届け、帰路に着く。

「……………」

見られてるな。多分例のあの子だろう。

直接家には帰らず、コンビニに寄ってうみやい棒を何種類か買う。

そのまま人気の無い裏路地に向かい、適当な段差に腰を下ろす。

「……見ているのは分かっているから、出て来てくれないか？」

誰に対するわけでもなく、周囲に声を響かせる。

「……………」

しかし、こちらを見ているだけで出てこない。

「……竜胆ルリ、俺を監視しているのは分かってる。姿を現してくれ」

……………しかし、姿を現さない。

「……やっぱり餌を出さないと駄目かあ」

コンビニで買ったうみやい棒を袋から取り出す。

「これをやる。頼みがある」

うみやい棒を手に持って掲げた瞬間、一瞬で俺の手から消え去る。

「うおっ!?!はっや……………」

頭上を白い何かが横切った位しか認識が出来なかった。

「……話を聞こう……………んぐんぐ」

背後から声が聞こえる。振り返らずにそのまま会話を続ける。

「……さっきの男だが、あんたの神様が後処理をすると云っているが、その後の経過を確認しておきたい。それを頼みたい」

「……断る。もぐもぐ」

「……そちらの条件を聞こう。俺の頼みを聞いてくれるための報酬は何がほしい……………」

「……もつと、うみやい棒を寄越せ」

「分かった。この中身全部差し出そう」

手に持っている袋を上に掲げる。

「……………」

「……成功した暁には、同じ量を買おうと誓おう」

「……………」

「分かったっ！毎日、今日と同じ数をその日の終わりに捧げようじゃないか！これでどうだ？」

「……分かった。頼みを聞いてやる」

返事を貰えた瞬間、またも俺の手から袋ごと消える。

「……これは、今日の分。もらってく」

「ああ、好きにしてくれ」

背後から気配が消えたのを確認して、ため息を吐く。

「うみやい棒なら釣れるとは思っていたが……思ったより引き出されたなあ」

と言っても1日1000円ちよつとだ。俺が少しだけ我慢すれば余裕である。

「まあ、破格の依頼には違いないな」

1000円程度で対象の監視を依頼してくれるんだ。お得過ぎるだろう。

「……帰るか」

良く分からない謎の疲れを感じて、そのまま帰宅した。

次の日、今日は定休日という事もあり、朝に起きたのは良いが特にすることも無くダラダラ過ごしていた。

ガコン。

ポスト入れに何か入る音がして起きる。

「チラシか何かか？」

そう言ったのは入口のポストに来るはずなので覚えがない。

蓋を開けて中身を取り出すと、1枚の紙が入っていた。

「ん……？」

どうやら手紙？の様だ。

『きさまの言っていた人間は姫様が無事解放された。問題無し』

と書かれた紙であった。

「これは……あれか。一応報告書的なものか」

更に下を読むと、

『今日の報酬を忘れるな』

「……まあ、契約は契約だよな」

特に用事も無いが、供物は忘れないようにと着替えて部屋を出る。

「昼前だし、ついでに何か食べて行くか……」

コンビニでうみやい棒だけ買って帰るのも味気ない。折角外に出るのだから何か用事を作らねば損だ。

そう考えながらコンビニへ向かう。

「んー……なに味が良いとかあったつけ……？」

コンビニに着き、駄菓子コーナーを漁る。

「コンポタと、めんたい、たこ焼きも入れておくか。それとチーズ味」

同じ味だと飽きられるかもしれないので、何種類かカゴに入れる。

「あと、おまけに黒い稲妻も入れておこう。チョコだし食べてくれるだろう」

「あ、これもあるのか……」

手に取ったのはソースカツのお菓子。

「おお、これ懐かしいー」

更にラムネのお菓子を取る。

「……親戚の子供にお菓子を買ってる気分だな、完全に」

気づくと、手に持ったカゴには予定より多くのお菓子を入れてしまっていた。

「……まあ、いいだろう」

自分の分にもと、言い訳をしながら気になった奴をカゴに入れて行く。ふふ、あとで家で祭りでも開催しようではないか。なんなら報酬と言って招待してやっても良いかもしれないな。

少しテンションが上がりながら、お菓子を漁る。

「え、澤田君……？何してるの？」

「……ん？」

顔を上げると、驚いた表情でこちらを見ている四季さんと目が合った。

「いやー、まさか休日の日にまで四季さんと会えるとは、これは女神に感謝しないといけないな」

「はいはい、ありがとう。それで、そんなに駄菓子を買って何をする気なの？」

「まるで俺が駄菓子を使って何か起こすみたいない方に聞こえる

んだが……？」

「違うの？それだと澤田君が駄菓子コーナーでニヤニヤしながら漁っていたキモイ人ってなるんだけど……」

「冗談ですっ！します！目論見まくっています！暗躍します！」

「というのは冗談だけど。結菜ちゃんにでもあげるの？」

「いや、これはあれだ。とある依頼への正当な報酬としてだな……」

「依頼……？てか、報酬が駄菓子で……」

「四季さんが呆れるのも無理は無い。だが本当だ。うみやい棒10本で手を打った」

「もしかして、何かのおままごとの的なやつ？」

「割とガチ目の依頼です。蝶関連です」

「たった100円そこらで受けてくれるんだ……」

「好物だからな。一応色を付けて他にも買ってみたが」

「誰の？」

「誰のって……あーそうか、四季さんにはまだ詳しく話していませんかったな」

「ん？どういうこと」

「昨日お店に来ていた女の人覚えてるか？ミカドさん達の偉いさん」

「え、うん。昨日対応してた人でしょ？……え、あの人か？」

「違う違う。その部下的な奴がだ。少し気になる事があって頼んだんだ」

「へえー。確かにそこら辺私は聞いてなかったなあ」

「これからも店に足を運ぶと思うし、一応聞いておくか？」

「そうする。何かあった時に困るし」

「となると……お店が良いか？いや、定休日だったな」

「そうね……丁度お昼だし、どっかで食べながらにでもする？」

「お、いいねっ！……と言いたいところだが、あまり人が周りにいる環境で話せる内容じゃないんだよなあ……これが」

「それもそっか……。じゃあ、澤田君の部屋はどう？」

「それならあんし……ん？俺の部屋……？」

## 第58話：お招き

「お邪魔します」

「どうぞどうぞ、何も無い所ですが」

あの後、俺の部屋で話すことに決まり、どうせならコンビニで適当に買ってワイワイするになった。

「まさか家に人を招く日が来るとはな……」

「初日だってワタシと明月さんが来てたでしょ？」

「それは引越しとしてだからな」

テーブルにコンビニの袋を置く。

「あ、冷蔵庫とかに入れるやつ勝手に入れてもいい？」

「好きに使って大丈夫だぞ」

「ありがとう」

冷やしたいものを取りあえず冷凍庫にぶち込む。

「それにしても……最初からそこまで変わってないね。あ、ベッドとテーブルは増えた？」

「そんなくらいかな？あとは細かいのを少々って感じだ」

「ふーん……それに意外と綺麗にしてるんだ」

「一応な。掃除や整理してる時は考え事とかがしやすいから」

「そうなんだ」

「そうそう。んじや、先に飯でも食うか」

「だね」

お互いを買った昼食を食べ始める。

ピンポン

「……ん？」

「お客さん？」

「いや、全く気配がしないんだが……」

「気配で……」

ピンポン

「ちよっと、見てくる……」

扉越しに人の気配が無いが……誰だ？

ドアののぞき穴から外を見ると、そこには耳の生えた少女が立っていた。

「あ、なるほどね……」

その正体に安堵しながら玄関を開ける。

「今日の報酬か？」

「貰いに来た」

「了解、ちよつと待ってな」

部屋に戻り、駄菓子の入った袋ごと持つてく。

「ほい、これ。うみやい棒以外にも色々入れてみたから、気に入ってもらえると助かる」

「色々……？」

袋を開け、中身を覗く。

「……おお……、今後も期待してる」

目をキラキラさせながら中を覗き、満足気に頷きそのままどこかへ消えて行く。

「……取りあえずは喜んでもらったのかな？」

相手の予想より良い報酬を出したのだ。こちらの印象はプラスに働いたと見て良いだろう。

玄関を閉め、部屋に戻る。

「今の子が、澤田君が言ってた依頼の人？」

「ああ、優秀なハンターさんだ」

「なんか、コスプレしていなかった……？それに、耳も……」

「まあ、それについても話すよ」

「まさかだと思うけど……あれを着させている、とかじゃないよね？」

「酷い風評被害を、今感じた……」

「男の人って、コスプレとか好きなんですよ？高嶺君もそうだし。それなら澤田君も同じなのかなって……」

「そうだな、コスプレ好きなのは認めよう……だが、流石にあんな小さな子にまでさせる程腐ってはいないんだが」



「あ、やっぱり好きなんだ」

「好き……というか一種の憧れ？みたいなものだな。うんうん」

「なんか、おっさん臭い……」

「男は何時になつても変わらないってことの証明だな」

「いや、そんなことをカツコつけられても」

昼食を食べ終え、そのまま四季さんへ事情を説明する。

「えつと……一通り聞きはしたけど……え、神様？あの人が？」

「ああ、一応全部本当だぞ？」

「だから閣下や明月さんが緊張していたんだ……それなら辻褃も合うか」

「納得出来たか？」

「全然。急に神様が来たとか言われても、はいそうですか。って納得出来ると思う？」

「ま、普通はそうだよな」

「むしろ、冷静に受け入れられているそつちがおかしいでしょ」

「まあ、俺の場合は普通じゃないし……」

「……知ってたってこと？」

「まあな、何となく予想は出来てたし、相手の素性は把握出来てたからなあ」

「そんな人がお店に来てたなんて……あれ？昨日絡まれてたよね？」

他の人に？」

「絡まれてたな。そのせいでミカドさんとかすつごい顔してたぞ。傑作だ」

「自分がいるお店で偉い人がそんな目に遭ったら、そうもなるか……」

「まあ、絡みたくなくなるほどの美人だったんだろ」

「確かに、ザ・大和撫子！みたいに綺麗な人だったよね。口調もそうだし……」

「中々良い性格してるけどな」

「そうは見えなかったけど……」

「いいや、あいつは自分が絡まれても排除できるだけの力を持っておきながら俺が止めに来たのを面白そうに見てるような奴だ」

「ああ……それはそれは」

「と、そういえば、一応四季さんにも先に言っておくことがあった」「ん？なに」

「昨日、神様に絡んできた男居ただろ？蝶が集まっていた」

「うん、さっきの話の人よね」

「ああ。そいつなんだが、昨日皆が帰った後に……火打谷さんに用があつてお店で用事を終わらせて家まで送ったんだが、その帰りに待ち伏せされてたわ」

「えつ、大丈夫だったの？」

「大丈夫大丈夫。逆恨みとかなんかで襲い掛かってきたからボコボコにしてミカドさん達に引き渡しておいた」

「火打谷さんも無事だったのよね？」

「そりやな。大丈夫だとは思うけど、明日から念のため様子を見てほしい。トラウマ……とまでは行かなくても多少は怖かったと思うし」

「うん、分かった。それにしても……澤田君ってよく巻き込まれるよね？」

「今回で3件目か？」

「そう。あの時の怪我はもう平気……で良いのよね？」

「当然、もう完治してるに決まってる」

「よかった」

話が一段落付き、少し無言の間が訪れる。

「なんか飲むか？お菓子とかもあるし、他に聞きたい事とかあれば今の内だけど」

「あー、それじゃお茶取ってもらえる？」

「了解。……アルコールもあるけど？飲むかい？」

「今はいい。後で飲むから置いといて」

「うい」

コップにお茶を淹れて戻る。

「ほい」

「ありがとう」

「一応最近の出来事としてはそんな感じだな」

「……他にも聞いていい？」

「なんなりと、答えられる範囲であれば」

「こう聞くのが当たってるのか分からないけど……澤田君の目的って何？」

「これはまた抽象的な質問が来たな。どういう意図でその質問を？」

「ちよつと不思議に思ってた。お店を開く前はワタシや明月さんに協力してるのは、勿論恩返しで手伝ったりもしてるとは思うんだけど、お店を開く事が目標なのかなって……」

「ほうほう」

「けど、最近思うのが、最初からお店を開くのは……その、前提条件？みたいなもので、もつと別の何かがあるのかなって……」

「四季さんから見れば、そう思える？」

「うん、と言っても勝手な推測なんだけどね」

「いや、是非とも全部聞いておきたい」

「そう？えつと、前に明月さんから高峰君を救う為に色々動いてるってポロつと聞いたことがあって、その、高嶺君の幸せ？望みって……ほら、卒業する事でしょ？」

何を……とは聞かない方が良いか。今でも恥ずかしそうな顔してるし。

「その最終的に行き着く先って恋人とか作って……ってなると思う。それがお店を開くこととどう関わるのかなって気になって」

「ふむふむ」

「最初に思いついたのが、お店からカップルを誕生させることなのかな？って思った。けど、澤田君ってそう言った動きしてない様に見えるし……」

「まあ、基本的に真面目に働いてるだけだしな」

「閣下や明月さんと色々してるからそれらが関係してるとか？昨日も火打谷さん含めて話し合ってたみたいだし」

「……………」

「どう、かな？的外れだった？」

「んー、四季さんは、それを知ってどうするの？知って納得するだけ？」

「納得もする。けど…………以前にも言ったけど、澤田君に恩を返したって思ってもいる」

「俺への恩返しねえ…………気にしなくていいんだけど」

「ワタシが気にする。だから何か出来ることないかって色々考えてたの」

「それでか…………、俺へのならウエイトレス姿で、『おかえりなさいませ、ご主人様』ってしてもらえればそれだけで十分なんだが…………」

「真面目に言ってるの、ふざけないで」

「ア、ハイ…………俺も真面目なんだけど…………」

「それに、澤田君ってたまに妙に人と距離を置くときがあるから」

「ん？そうか」

「たまにね。こう、壁を作ってるって言うのかな？違和感を感じる時がある」

「誰だって必要な時は距離を置くとは思うけど…………？四季さんもしてたと思うし」

「そうね、確かにしてた…………だから何となくわかるのかも」

「それが今ではこうやってお店の同僚の家でお喋りだもんな。著しい成長に涙が…………うう…………」

「いや、どこ目線…………って、わざと話を逸らしてない？」

「……………」

「目を逸らすな。こつちを見る」

「…………因みに、黙秘権を使ったらどうする」

「…………それを言われたら、大人しく諦める」

少し、寂しそうに目を伏せる。あああもう、んな顔するのは卑怯だぞ！四季ナツメツ！

「……分かった。四季さんにも話しておくよ」

「え、いいの？半分無理と思つてたけど……」

「じゃあ、やめとく」

「話して。男に二言は無いでしょ？」

「お、おう……」

グイグイ来るなあ……、ちよつと予想外。もう少し人と距離を置くと思つてたんだが……？

「まあ……その、なんだ。ミカドさんと明月さんと四季さんの3人は既に知っているとは思うけど、俺は……未来、を視ることが出来る。これは前にも言つたとは思うけど」

自分で未来が見えるって言うの毎回くそはずかしいんだが!?しかも本当はエロゲの知識とか……！

「うん、それは聞いている」

「見えはするけど、それはかなり限定的だし、漫画やゲームで出てくる様な万能な力じゃない」

「うん」

「これも前に言つたが、未来とか幾らでも変えられる。未来を知つたせいで本来の道筋を変えて別の行動を取つた結果、望んだ未来とは違つた結末に……なんてことも充分にあり得る事なんだ」

「本音を言えば、俺が知つてる未来と既にズレている事も起きてるし、多分俺が起こしてることもあると思う」

「澤田君が……？」

「ああ、だからなるべく多干渉はせずに……とも考えてたりもしてる。逆に必要なら積極的に動いてたりもな」

「だから、距離を置いたり？」

「そうそう。可能な限り、荒波を立てずに事を進めて行きたい。だから昨日みたいな男は物凄く迷惑極まりない存在なんですよ」

そのせいで火打谷さんの事も露見したし……つて、これは遅かれ早かれバレたかもしれないけど。

「そうなんだ……」

「ぶつちやけ、この場で四季さんにそうやって事情を話しているこ

と自体もどう影響するのかって所。良い方面に転がるか、はたまた逆か」

「今の感じ良い方向と思いたいが……。」

「もしかして、ヤバいことした……?」

「いや、それは大丈夫だと思う。前にも言ったが手伝いたいつて言ってくれたのは感謝してるし嬉しいのは本音。けど、俺が話した事で悪い方向に動いたら……? って思ってしまうだけ」

「それは、分からないの?」

「残念ながら。明月さん達はこれをチート級に感じてるかもしれないけど、俺からしたらそんなことないし毎日大丈夫か心配なくらいだ」

「……………」

「正直、一昨日来た神様だつてイレギュラーだし、そのせいでどうなるかって心配でもある。お店への影響を含めて」

「まあ、簡単に纏めると、お店の安泰を維持する為に危険分子は全力で排除しますつて方針だ。昨日のみたいなやつは特に」

「つてのが、俺の考えなんだけど……満足できた?」

「……………」

「そりゃよかった。話した甲斐があったつてもんだな」

「……………」

「……………」

「そこは流れてスルー出来るかと思ったんだが……、まあいいか。」

「わかった。四季さんの覚悟はしかと受け取った。……因みに、これは他言無用で聞けば引き返せないことになるけど……それでも良いか?」

「そのくらいヤバい話なの……?」

「ああ、ここから先はセーブも引き返すことも出来なくなりますが、それでも?」

「……………」

俺の言葉を聞いて、目を見開く。以前裏路地で聞いた言葉を同じのはず。

「……うん。それでも知りたい。聞かせてくれる?」

うーん、強い意志の籠った目も素敵だなあ。最高です。ま、これなら大丈夫かな。

「……わかった。それじゃあ、ここからは共犯ってことで」

「え、犯罪をするの……?」

「いやいや、比喻だから。同じ秘密を共有する仲ってこと。因みに、明月さん達にも話して無いから本当に他言はしないように」

「わ、わかった」

「明月さんたちにも話している範囲では、高嶺を幸せにする。これは、高嶺の魂の安定を意味していて、人の幸せ……恋をして、それを実らせて、好きな人と共に生き、幸せな家庭を作っていく……そんな人としても幸せ謳歌する必要がある。だから四季さんが言っていた様に恋人を作るって路線はあながち的外れでもないんだ」

「そうなんだ、ということは……明月さんらに話していない事が?」

「そう、高嶺だけでは、明月さんにも幸せになってほしいと考えている」

「明月さんにも?」

「うむ、俺としては高嶺と明月さんが共に幸せになってくれると万々歳って感じだ」

「つまりは……二人をくつつけようってこと?」

「端的に言えばそうなるな」

「なんか……想像していたより拍子抜けなんだけど」

「聞くだけだと、余計なお世話をしようとしているだけだしな」

「でも、澤田君にとっては重要なこと……なんでしょ?」

「ああ、物凄くな。超絶重要なことだ」

「どうするつもりなの? なにか手伝えることとかある?」

「そうだな、四季さんには高嶺の動向を見守ってほしいかな?」

「高嶺君の……?」

「こそ、高嶺が何をしたとか、どんな行動を起こしたとか気にしても  
らえると助かる」

「そんなことでもいいの?」

「勿論、俺もあつちこつちと氣に出来るだけの余裕があるかわからないし、見逃すかもしれないから、手伝って貰えると助かる」

「ん、りようかい。氣にかけておく」

「よろしく」

これで四季さんは高嶺のこれからの行動に注視するはず。新しいメニューを作ったり、お店の為にと頑張る姿を見て自分も……、となってくれると助かるのだが……。

「実際のところ、澤田君にはどんな感じに未来が見えてるの？いつまでとか？」

「ん？それは秘密だ。こればかりは企業秘密とさせてもらおう」

「宝くじの結果が見れたりは？」

「無いな。残念ながらよくある儲け話とかはできなからな？」

「なーんだ。つまんない」

「それが出来たら今頃俺は金持ちだろうな……」

「何が出来るの？」

「……人の覗き見？」

「言い方……それだとただの犯罪者でしょ。おまわりさーん！」

「ふっふっふ、この部屋には二人しかいないぞ……？」

「うわあ、安っぽい役者だな……」

失礼な。

「それで、何が出来るの？」

「視れる相手がどんな行動を取ったかとかそんなレベル」

「へえ、そのまんまね」

「例えば、ある日高嶺が帰ろうとした時に、俺と一緒に帰る場合と、四季さんと一緒に帰る場合の未来があつて、そのどっちを選んだか把握できるとか」

「ふむふむ」

「勿論、どっちを選ぶのが大して結果は変わらない場合もあるが、その選択で今後の未来が大きく変わる場合があるかもしれない」

「それをいつも見定めてるってこと？」

「言ってしまうえばそうなるな」



「……なんか、物凄く疲れそう。毎日気を張ってるわけでしょ？」

「慣れれば余裕よ」

「そんなもん？」

「そんなもん」

〜後日〜

「オムライスの方上がりましたー」

「おっけー。昂晴、チーズケーキの方お願い」

「了解です！」

「ジュー」

「し、四季さん？オムライスだけど……？どうかしたのか」

「ううん、何でもない。貰ってくね」

「……………」

「昂晴、あんたナツメさんに何かした？」

「いや、全く心当たりが無くて……今日の講義の時も何回か同じよ

うな事があって……………」

「……ソレハタイヘンダナア」

「自覚がないだけなんじゃないの？」

「俺、何かしたんですかね……………」

「高嶺、俺が後でやんわりと聞いておくよ」

「ほんとですか？ありがとうございます」

「お、おう……なんかすまん……………」

## 第59話：パイ・ルアク……？

「おはようございまーす」

「澤田さん、おはようございます」

「明月さんか、そういえば、一昨日の件は無事に終わった？」

あの後には全部丸投げで帰ってしまったので、一応結果本人たちから聞いておきたい。

「はい、滞りなく。男性の方も蝶を回収して今は落ち着いているそうです」

「そうなのか、それならひとまずは大丈夫そうだな」

「澤田さんもありがとうございます」

「いや、大したことでは……それより、神様の方はどうなった？」

「どうでしょうか……男性の人に力を使われた後はお帰りになりましたが……」

「……ま、いつか。必要なら向こうから絡んで来るだろ」

「神様相手にそんなてきとうな……」

「大丈夫大丈夫。あと、火打谷さんの件だけど、今日くらいにでも練習をしておこうかと思う」

「了解です。何か手伝える事などありますか？」

「んー……大丈夫かな？強いて言うなら……」

「言うなら……？」

「その内墨染さんからコーヒー淹れるのを代わって欲しいってお願いが来るかもしれないから、代わって欲しい……とかくらいかな？」

「……？何かあるのですか？」

「お客さんに『コーヒーの味を俺が試してやろう』的な人が居て、淹れるのをちよっと嫌がつててさ」

「ああ、なるほど。そのことですな」

「正確なタイミングはちよっと分からないから予め言っとくよ」

「わかりました。ありがとうございます」

「まあ、言っても言わなくても明月さんなら代わるし卒なく終わら

せるから大丈夫なんだけどさ」

「けど、心構えが出来ますし私としてもありがたいです」

「なら良かった」

「うーむ……」

客からの注文が止み、時間が出来た時に高嶺が何やら考えごとをしていた。

「どうしたの昂晴、何か悩み事？」

「このお店の新しいメニューをちよつと考えてて……」

「どうしたの、急に。今のメニューに何か問題ある？」

「いえ、そういうことじゃないですよ」

「高嶺的にはお客さんの足を途切れさせない様に何かしたいってことでしょう。だよな？」

「はい。飽きさせない様にしたいなって思ってた……勿論頻繁に変えるとかではなくて、いつか必要になった時の為に備えておきたいって側面もあります……」

「へー。偉い偉い。心構えはしておくに越したことはないよ」

「でも、何も思いつかなくて」

「そりゃそうだ、簡単に思い浮かぶなら誰も苦労はしないって」

「お二人は何かアドバイスとかありませんか？」

「そう言われても……んー……オリジナリティを求め過ぎないとか？」

「あー……それありますね」

「達也が働いてたところとかどうだったの？何かアドバイスある？」

「自分の所ですか……。自分が立案とか特にしてませんでしたが……そうですね。そこまで難しく考える必要は無いのかと思います」「と、言う……？」

「既存のメニューを組み合わせたたり、使ってる素材をちよつと変えたりとか、少し手間をかけて別のメニューを生み出す。そんな程度で

も新しいのって生まれるもんかなって……」

「なるほど……確かにそれならコストも手間もかからないね」

「そう言った路線で考えるのもありかと思う」

「なるほど……確かに直ぐに展開しやすいですしアリですね。ありがとうございます」

「何かのヒントになれば幸いです」

「とまあ、今は取りあえずきちんと美味しい物を作る。ってところに集中しないとね。まずを足元を固めない」と

「ですね」

「よしっと、パンケーキ焼けたよー!」

「運びまーす」

涼音さんの声にフロアから明月さんが秒で来た。

「うし、これで最後のオーダーだね」

「ですね。フロアの方も落ち着いているみたいですよ」

「そうですね。今のところは問題ないですよ」

「葉那さーん」

「はい?どうされましたか?」

「前に話してたそれっぽいお客さんが来たので、お願い出来ますか……?」

「はい、いいですよ」

「そのパンケーキはわたしが運んでおきますから、ブレンドを、5番のお客さんです」

「わかりました」

「すみません……」

「謝られることじゃないですってば。それじゃあパンケーキはお願いしますね?」

「はい、お願いします」

自分が持つてるトレイを墨染さんに渡し、こちらをチラ見してきたので、取りあえず目で返事をしておく。

「……それっぽいお客さん?」

「気になるのなら見てきたらどうだ?……ここは問題ないし」

「んー……、ちよつと行つてきます」  
好奇心に負けてフロアを覗きに行く。

「あんたは見に行かなくていいの?」

「その手のお客は、前の店でも腐るほど見てきましたから……」

「ああ、なるほどね。見飽きてると」

「前のは純喫茶つて感じの雰囲気でしたので、それっぽい人が決まった日にやつて来てましたよ」

「それは気が滅入りそうだなあ……」

暫くすると、また考えごとをしている様に高嶺が厨房に帰つて来た。

「どうだった?」

「確かにそれっぽいお客さんが居ましたね明月さんのコーヒーを飲んで絶賛してましたよ」

「流石だな。俺なら速攻でその場を去る自信がある」

「自分も同じです。それにしても凄いですよね」

「それは客が? 淹れた明月さんが?」

「後者です。あんな客を唸らせるくらいって」

「皆日々腕を上げる為に頑張つてるからな。当初はコーヒーの味すら分からなかった明月さんも上手になるさ」

「そうですね……」

「気になるなら後で頼んでみたらどうだ? 飲んでみたいって。高嶺になら喜んで淹れてくれると思うぞ」

「どうですかね? でも気になるんで試しに言ってみます」

「そうそう、その意気で頑張つてくれ」

「2人とも、喋るのも良いけどちゃんと手も動かす様に」

「了解です」

「ふー……今日も無事終わったな」

「だねえ、後は片付けて終わりだね」

「ちやちやっとな片付けて帰りましょうっ」

「皆さん、お疲れ様でした」

今日の営業も終わり、皆で片付けを始める。

「あ、そうだ。明月さん」

「はい、どうされましたか？」

「今日、例のお客さんにコーヒーを淹れたじやない？」

「ええ、そうですね」

「絶賛するほどって言ってたから、高嶺がどんくらい美味しいか気になるってさ。な？」

「高嶺さんがですか？」

「味が気になってたんだ。前に飲ませてもらった時と違うのかって……」

「良いですよ？確かに高嶺さんに飲んでもらったのは……出会ってすぐの頃ですよ？それでしたらあの時とは結構変わってますよ？あれから随分、練習を重ねてきましたから」

うんうん、基本的に努力家だよな。オムライスといいコーヒーといい。

「そうなのか？」

「はい。今では私もコーヒーを飲めるようになって、味だって分かるようになったんですから。と言っても、苦味が強いのはやっぱり苦手ですけど」

ふふーん。と腕を組みながらドヤ顔をしている。

「へー、かなり苦労してそうだな」

「それなりに。ですが、苦労だけではなく味がわかるようになってから、少し楽しみもわかってきましたから」

「何かコツでもあるのか？」

「心を籠めて、丁寧な作業を心掛けることでしょうか？あ、最後に魔法で愛情を注ぐことも忘れずにー」

「萌え萌えキュン♪」

指でハートマークを作り、胸の前でポーズを決める。

「……………」

「……………ぶほっ！」

「あ、あの、無言が一番困るんですけど……？あつつ、澤田さんも笑わないで下さいっ！」

「いや、実際に目の前でやられると結構キツイな」

「キツイとか言わないでくださいっ！そんな反応されると私の方が傷つくんですから！」

なら最初から言わないのが……って思うけど、その場の勢いってあるよね。うんうん。

「さてと。片付けはこんなもんかな」

「ですね。冷蔵庫よし、流し台よし、コンロよし、器具類も大丈夫ですしオールオーケーです」

「それじゃあ、お疲れ様です」

「うん、お疲れ」

「着替えは女性陣から先で良いですよ」

「そう？それじゃあお言葉に甘えようかな」

つと、その前に火打谷さんを捕まえないと。

フロアに出て、奥へ行こうとする火打谷さんを途中で呼び止める。

「火打谷さん、ちよつといい？」

「ん？はい、どうかしましたか？」

「今日、この後暇かな？」

「はい。大丈夫ですけど？」

「それじゃあ、俺と……夜の街へ出かけないか？」

「へっ？ほわあ!!よよ、夜の街っ!!」

「ああ、二人つきりでき……どうかな？」

「なな、何をする気ですかっ！ホ、ホテルに連れ込む気ですか……！」

あわ、あわわっ!!」

「おいおい、それを俺の口から——」

「はいはい、そこら辺にしておく」

更に追撃を仕掛けようとする、後ろから止めが入る。

「む、四季さんか。今良い所なんだが……」

「それ以上は、火打谷さんが限界」

「よ、夜のおさそい……つくく!?!」

「……みたいだな。止めておくよ」

「あまり揶揄って嫌われないように」

「あいよ」

呆れながらも奥の部屋へ消えていく。

「えーつと、すまん、さっきのは軽い冗談だ」

「軽いつ!?先輩にとつては軽めのみ?!」

「あー、まてまて、違う。一昨日の件の続きをしたいだけ」

「一昨日の……?」

「ああ、例の件で」

「……な、なんだあ……良かった……」

「すまん、ちよつとばかし調子に乗った」

「ほんとですよっ!気を付けて下さいっ」

「……善処致します」

「ふー……、一応、分かりました。遅くまでは出来ませんが大丈夫です」

「おっけ。それじゃあ、また後で」

「はいっ」

火打谷さんと話しをつけ、フロアに戻ろうとしたが、フロアから高嶺と明月さんの話声が聞こえてくる。

「あれ?その手動のコーヒーミルは?」

「自分の分を淹れる時は、これで挽いているんです。元々は以前のお店で使っていたんだと思います。が部屋に残っていたので……ふっ、んんっ……んーっ!」

「固い?俺が代ろうか?」

「いえっ!これぐらいいい……んっ!んんあきやつ!!」

明月さんの悲鳴と同時に何かを撒かれる音が聞こえる。

うん。無事中身をぶちまけた様だな。

その後は、何事も無く続くが……。

「お待たせしました。さあ、どうぞ」



「ああ。ありがと……う？」

「コーヒーを淹れ終わり、受け取った高嶺が不思議そうな声を出した。

「にしても……こうして高嶺さんに味を見てもらうのは、お客さんに出すよりも緊張しますね……」

「そ、そうか……」

明らかに落ち着きのない声である。

「高嶺さん？どうかしましたか？」

「あ、いや……何でもありません。じゃあ、いただきます」

「はい、どうぞ」

取りあえずスルーの方針で進んでいく。

「どう、でしょうか……？」

「うん、美味しいよ。いい香りで苦味も嫌な感じではなくて」

「本当ですか？よかったあ……！」

「やっぱり、豆を優しく労わるように。膨らみ具合でお湯の注ぎ具合を調整するのが大事なんですよ」

「そ、そうだな。豆は大事だな。豆が膨らんで、ポチっとしてるが、可愛いんじゃないかな？」

「ふっ……」

おっと、危ない。笑ってしまってた。

「……何を、言ってるんですか？」

「気にしないでくれ。とにかく美味しい」

「豆の味を感じられてます？」

「そうだな。豆の存在感が凄い」

……我慢我慢。

「につひつひ。少しは見直してくれましたあ？もしかして、惚れ直しちゃいましたかあ？」

「……」

「あのー……どうしたんです？さっきから様子が変ですけど……ハッ!?もしかして本当はコーヒー美味しくなかったですか!？」

「いや、違う。決してそういうわけではない。本心から美味しいと

思っては……いる」

「でもー、そのわりには反応が微妙な気がするんですけど……？  
何かあるならハッキリ言っして下さい」

「いやっ、だがこればかりは……っ！」

「私なら平気です。自分の淹れ方が完璧だなんて思っているわけでもないですから。コーヒーの味については、お店の今後にも関係してくるかもしれません。忌憚のない意見をお願いします」

「……正直に言わせてもらおうが……」

「は、はいっ……！」

「コーヒー豆はともかく、胸の豆までアピールする必要はないんじゃないかな!？」

よく言っただっ！それでこそ男だっ、高嶺よ!!

「胸の、豆……っ？」

「………はあああ~~~~~ああツツ!!??」

明月さんの悲鳴がフロア内で盛大に響き渡る。

うんうん、無事このイベントも回収出来たな。胸で豆を温めて……  
パイ・ルアクだっけ？

ギャーギャー言い合う二人を聞いていると、休憩室の扉が開く。

「達也?ごめん、今終わったよ」

「いえいえ、全然待ってませんよ」

「というか、澤田君はどうしてそんなところで待ってたの?」

「っふ……」

ニヒルに笑いながら、無言でフロアを指差す。

「ん?何か騒がしいけど……」

フロアの騒動が気になり、そちらへ向かってく。

「何か騒がしいけど、どうかしたの?」

「せんぱーい、女子の着替え、終わりましたよー」

「昴晴君も早く着替えちゃいなよ」

「あっ」

「……あっ……」

四人の声がハモリ、それに気づいた二人も声を上げる。……多分胸

元をガッツリ開けた状態で。

「何事っ!？」

「おやまあ、随分と大胆な……」

「わっ、わー! わー! こ、昂晴君と栞那さんって……そ、そういう関係だったの!？」

「なに? Let's 筆おろし? 席、外す?」

「しませんよ! 変なこと言わないで下さいっ! これあくまで! 乙女の名誉のためですから!」

「あはははっ!!」

「こんな場所でおっぱいを丸出させる名誉っ! おっ、乙女の世界って怖い……っ!」

「丸出しにはしてませんっ」

「結局のところ、何してたの?」

「コーヒーの味の研究です!」

「胸の谷間で温めた豆を使って?」

「どんな信長と秀吉?」

「……くっ! ふっ、ははは!」

「やばい、まてまて、堪えろ。だが……。これは笑ってしまう。」

「コピ・ルアクって……一杯、数千円とかしてた気が。高いところだと……八千円とかも?」

「そんなにですかっ!？」

「誰のおっぱいで温めた豆にするか。選択が出来るなら指名料だつて取れるね。とはいえ、私のおっぱいで温めるなんてできないんだけどさ。あっはっはっは……はあくあ」

うむ、俺だったら余裕で指名しますがっ? しようと頑張っても出来ないのを、恥ずかしがりながらも頑張る姿とか高額に決まっているじゃないですか!!

「希ちゃん……コピ・ルアクって……なに? 裏メニュー? 八千円で、どんなプレイをするの?」

「いや、普通に表メニューなんだけど……。ジャコウネコの糞から取り出したコーヒー豆で淹れたコーヒーのことだよ」

「スカトロツ!? ひいつ、ケダモノ先輩っ!!」

「あはっははっ!」

「待て、誤解だ! 俺だってスカトロはゴメンだ! そんな趣味、決してないぞー!」

「否定はそこだけでいいの?」

あく……最高です。

「そこで一人で笑ってる澤田君は何してるの?」

「んー? って……四季さんか? ただ楽しませてもらってるだけだが?」

「高嶺君と明月さんで?」

意味深な視線を送ってくる。

「そういうこと」

「なるほど、理解した。だから通路で立ってたのか」

「察しが早くて助かるよ」

「それで、この後は火打谷さんとデート?」

「だな。ちよつと蝶関連で夜の街に繰り出す感じ」

「ここですか? 今日の場所は」

「ああ、ここのあるお店だ」

店から出て、一緒に来たのはショッピングモール。

「確か……この辺に……あった」

たどり着いた先は、火打谷さん行きつけのファンシーショップ。

「ここって……」

「ここに入るけど平気か?」

「え、はいっ。全然余裕です!」

「それじゃあ、入るか」

店内に入り、ぬいぐるみを見てる振りをしながら女性店員を探す。

「……居た」

一人だからか、蝶が集まっているのがわかる。

「火打谷さん、いた。あの人だ」

女性店員注視しながら声をかけるが、返事がない。

「ん？火打谷さん……？」

「はふあく。この子、超かわいいく……あ、手触りもいい……お持ち帰りしたいい」

「……………」

目的そつちのけで堪能していた。

「……………」

「……………はッ!？」

俺の視線に気づき、慌てて手を引つ込める。

「……………楽しむのは目的が終わったあとで、な？」

「いや、そのつ、別に……………!」

「いいからいいから。ささつと先に済ませてしまおう」

「は、はい……………」

うーむ、この様子だと、やはりミカドさんを猫の姿にしない様に助言したのは正解では無いだろうか？

「ほら、あの女性の人だが、見えるか？」

「ん……………ちよつと待って下さいね」

前髪を上げ、左目で女性を見る。

「……………見えますね。あの人の周りにモヤモヤがあります」

「おけおけ、それじゃあ一旦ストップしてくれ」

「わかりました」

髪を下ろし左目を隠す。

「どうしますか？直ぐに回収します？」

「その前に、一応念のために確認しておきたい事があるから、先にそつちをしておくよ」

「確認しておきたいこと……………？」

「ちよつと、ここで待っていてくれ」

「了解です」

その場を離れ、女性店員へ近寄る。

「……………」

お互いにすれ違う瞬間、相手と周囲に気づかれない様に蝶を二頭回

収する。

「……うん、間違いないな」

状況を確認できたので、火打谷さんの方へ戻る。

「先輩？何かしたんですか？」

「蝶を一度回収しておいた。相手がどんな内容で蝶を寄せているのか確認しておきたくてな」

「ああ、なるほど。先輩なら出来ましたね」

「確認した感じだと、回収しちやっても問題無さそうだし、早速してもらってもいい？」

「え？はい、良いですけど……大丈夫ですか？」

「無問題」

「分かりました。それでは行きますね？」

再度前髪を上げ、左目で今度は周囲の蝶を見つめる。すると、周囲の蝶を淡く光を放つ。

「おおお……」

そのままゆらゆらと揺らめき、小さな粒子となって火打谷さんの瞳へ吸い込まれていった。

「……終わりました」

髪を下ろし、静かに呟く。

「了解。それじゃ一旦離れようか」

「はい、了解です」

「はい、イチゴのやつ」

「ありがとうございます。そっちは何にしたんですか？」

「こっちはブルーベリーのつぶつぶしたやつだな」

「おおー！良いですね。そっちも美味しそう」

蝶を回収後、念のための経過観察としてお店が見える場所のベンチでお互いにスムージーを飲む。

「スムージー、ありがとうございます。奢ってもらっちゃって……」

「いいよいいよ。今日は付き合って貰ったんだし。それに、先輩が

後輩へ奢るのは当然の義務。ま、こういう時くらい年上風を吹かさせてくれ」

「あはは、了解です」

「それにしても、火打谷さんの回収の仕方、滅茶苦茶綺麗だったな」「え、そうですね？自分ではよく分からないのですが……」

「幻想的だな。超ファンタスティックッ！って感じだ」

「他だと、どんなのがあるんですか？」

「俺は素手だし、明月さんは鎌でスパツと切る感じ」

「うわあ、死神っぽいですねえ」

「実際そうだしな」

「そういえば、気になっていたんですけど、達也先輩ってどんな経緯で栞那さん達と知り合ったのですか？」

「ん？俺か？」

「はい、普通なら知り合えないと思いますし、私みたいな感じですか？」

「えー、あー……そうだなあ」

馬鹿正直に、夜の森の中、全裸で遭遇した……とは言えないなあ。

「ある日、森の中で偶然出会ったんだ……」

「……くまさんが何かですか？」

「うん、そう思うよね」

想定通りの返事が返ってくる。

「まあ、明月さん達が仕事で立ち寄った先で偶々出会ったんだ。俺が蝶を回収した場面を目撃してしまっただけ」

「なんと……！ショッキングな場面を……」

「超ビビったぞ？人ほどの大きさの鎌を持った女性が居たんだから。あ、蝶だけにな」

「……先輩、それ、クソくだらないです……」

「あーい」

うむ、安易なダジャレだったようだ。次はもう少し捻ろう。

「そのあと、その鎌を持ってこっちに近づいて来て……ってのが最初の出会いだったな」

「トラウマもんでしょ……それ」

ああ、全裸は確かにトラウマだったな。いや、違うか。

その後、飲み物を飲み切り、特に問題は無いと判断出来たので今日は終わりとして火打谷さんを送って行った。

「さてと……帰る前にコンビニ寄るか」

忘れてはならない。今日の分の報酬を……。忘れた暁には絶対噛まれる。

コンビニへ寄り、うみやい棒とその他駄菓子を幾つか見繕って後にする。

「二応、昨日と内容は少し変えてるし……大丈夫だろ」

これで駄目出しされたら……その時はちゃんとした駄菓子屋に行かなければならないな。

どうでも良い事を考えながら歩いていると、スマホに着信が入る。

「着信……？しかも相手は不明……？」

お店のメンバーは当然全員登録しているし……それ以外？  
気になって取りあえず取ってみる。

「はいもしもし」

「おまえ、今日の報酬を忘れてないな……？」

通話口から聞こえたのは、俺に恨みでもあるのか？と勘違いするレベルで力の入った声だった。

「待て待て、ちゃんと買っている。今帰っている途中だ」

「……分かった。待ってる」

そのまま通話が切れる。……間違いなくうみやい棒だな。てか、なんで俺の番号知ってるの？教えてないんだけど……？

急にプライバシー面が不安になってくる。え？誰か教えた？それとも神の力とか？

「いや、普通に考えるならミカドさん辺りが教えたってのが定石か……」

じゃなきや怖すぎるんだけどっ!?

何故の恐怖に苛まれながら部屋へ帰ると、案の定玄関の前で待つて



いた。

「……遅かったな。ルリが待っているのだからもっと早く来い」

「それはすまん。選ぶのに時間がかかってたんだ」

「まあ許してやる。さあ、今日の報酬を寄越すがいい」  
手を伸ばして俺に催促してくる。

「はいよ。これが今日の分」

「うむ、確かに受け取った」

袋の中身を覗き、満足そうに頷く。

「……あ、あとこれ、渡しておく」

「おう、ありがとな」

白い紙。多分報告書だろう物を受け取る。

「じゃあな。明日もしつかりと用意しておくんだぞ」

「ああ、ちゃんと用意しておくよ」

袋を持って、ご満悦の表情でその場を去って行く。……やっぱり  
チヨロい気がする。

部屋に入り、渡された紙の中身を確認する。

『問題なし』

と、一文だけ書かれていた。

……頼む相手、間違ってしまったのではないだろうか……？

眉間を押さえ、下に書かれている文を読んでく。

『前にくれたチヨロ。うまかった。もつと要求する。』

『それからパンダの絵があった肉、あれはうまかった。』

『あと、みよーんと伸びるブドウ味、こんどはこれを要求する。』

「……………」

いや、報告より報酬への文字が多いのはどうなの？しかも商品名分  
からないしっ！俺に解説しろと!?

『姫様がお前に用があるって言ってた。』

「仮にも主様だろうが……。それを最後に書くなよ……」

さつき直接言えば良いのに……。報酬の事ですっぽ抜けていたか？

色々ツツコミどころしかないが……まあ、問題無いのならいいや。一番重要な要素だしな。うんうん。

取りあえず、これらを忘れない様にと上着の胸ポケットへ入れておく。

「……風呂入って寝よ」

思考を放棄して、風呂場へ向かった。

## 第60話：報告……。

「いや、今日も無事終わったねー」

「やっぱり休日と平日じゃお客の数が違いますね」

「午前は4人でも回せるけど流石にピーク時は無理だしなあ……」

「そうそう、お昼直前なんか達也が厨房とフロアを行ったり来たりしてるしね」

「良い運動ってことでプラスに考えていますよ……」

「ははっ、若いし平気でしょ。それじゃあ、先に行かせてもらおうよ」

「どうぞどうぞ」

肩を回しながら出て行く涼音さんを見送りながら、高嶺と一緒にフロアで一息つく。

「そういえば、純粋な質問なんですけど」

「どうした？」

「澤田さんっておいくつなんですか？」

「……もしかして俺、ナンパされてる？」

「違いますっ」

「幾ら恋人を作る必要があるとはいえ……男に走るとは……!」

「だから違いますっ!!てか、この話題前にもしましたよね!!」

「そういえばそうだな」

「さっき涼音さんが若いつて言ってたので気になっただけです」

「年齢か……因みにだが、高嶺から見ても何歳くらいに見える? 程度とか気を遣わなくていいから率直に」

「え、そうですね……自分より一つか二つ位上かと思っていたのですが」

「つまり22から23辺りって予想か」

「自分の個人的な感想ですけどね」

「その割にはいつも敬語寄りで話すよな」

「あ、いえ、初めの時の話し方とか雰囲気をもっと上の印象を感じたのでその名残ですね」

「そうなのか、若く見られてるって素晴らしいな」

「実際の年齢は……？」

「この体での年齢は分からないから何とも言えないが、前の身体の時は27だったな」

「27?!?それって、涼音さんとー」

「おっと、それ以上は口に出すな。近いとかそんな事も考えてはいけない。死にたくないだろ？」

「……そうですね。軽率でした」

女性の年齢は禁句だぞ。

「でも、思っていたより上なんですわね」

「たぶん、この体は若めに作られてるんだと思う」

「そういうもんなんですかね？」

「さあ？前例が無いからさっぱりだ」

「不安とかになったりしません？人間の身体じゃないって」

「特には思わないな。色々と便利だし、似た構成なら明月さんがいるしな」

「明月さんが？」

「彼女も死神で蝶によって構成された体だからな」

「へえー、そうなんですね。でも死神ですしなんか納得です」

「おーい、男どもー。終わったぞー」

高嶺と雑談を楽しんでると、女性陣の着替えが終わり戻ってくる。

「了解です、それじゃあ行きますか」

「だな」

立ち上がり、着替えへ向かう。

「あ、澤田君。ちよつといい？」

「何？俺の着替えでも見たくなかった？」

「はあ？んなわけ無いでしょ、キモイんだけど？」

ありがとうございますっ!!その表情だけで明日も……いや、一生頑張れますっ!」

「あ、いえ、冗談です……はい」

「はあ。今日、この後暇？」

「夜のデートのお誘いなら喜んでお付き合いしますが……？」  
「違うしやっぱいいいよ」

「ああ、待つて下さいっ！冗談！冗談でございますっ」

「それで？暇なの？暇じゃないの？」

「暇です！四季さんの為なら暇じゃなくても時間を作ります」

「いや、そこまでしなくても……」

「そのくらい重要なことなので！」

「はいはい分かった。それじゃあ待つてるから早く着替えてきて」

「了解」

夜のお誘いを受けたので、急いで着替えに向かう。

「なあに？達也とデートでもすんの？」

「いえ、全然そんなんじゃないやありませんから。ただ相談があるだけです」

背後で涼音さんが揶揄うように言った言葉に、半笑いで返事をした四季さんの声がした。泣けるぜ。

「それじゃ、乾杯」

「ああ、乾杯」

以前に誘って貰ったバーに誘われたので、喜んでついて行った。

「ここを選んだってことは、普通のことって認識でいいのか？」

「んー……まあ、そうかな？」

注文した飲み物を飲みながら答える。

「そういえば、高嶺から苦情が来てたぞ」

「苦情？」

「ああ、『四季さんがなんか最近、俺の事をよく見て来てるけどなんかした？』ってさ。見過ぎでは？」

「あー……そんなつもりじゃなかったんだけど」

「いや、見ていてくれて言ってくれた俺が言うのはおかしいけど、もうちよっとバレない様かというと……」

「うん、それは反省する。けど、最近新しいメニューとか、色々考えてくれているしワタシも参考にしないと思って思っちゃって……つい」

「なるほど、なら仕方ないが……相手に気づかれない様にな」

「うん、それは気を付ける」

「高嶺にはやんわりと注意しておいたって言うておくよ」

「ん。ありがとう」

先に高嶺からの要件を終わらせ、飲み物に口を付ける。

「そういえば、明月さんと高嶺君の件あったでしょ、ほら、胸をガツツリ見せてたやつ」

「ああ、あったな。コーヒー豆事件だな」

「あれって、澤田君は知ってたってことで良いの？」

「そりや勿論。じやなきやわざわざ通路で身を潜めていないさ」

カツコイイ雰囲気を出すために、持っているグラスをゆっくりと回す。

「やっぱりそうだったんだ。それもあれ？二人のため？」

「ま、その一環だな。多少は意識もするだろ。知らんけど」

「それじゃあ、その後の火打谷さんの件は？」

「あれはまた別だな」

スマホを取り出し、メモ帳に書き込む。

「こんな感じ」

「……了解」

四季さんが把握したのを見て内容を削除する。

「視えるってことね」

「そゆこと。だから協力してる最中」

「納得した。ありがとう」

聞きたいことを聞いたのか、手に持っている飲み物を飲み干す。

「ん……ん、ふう」

だから！どうしてそんなに表情がエロいんですかっ!?! スマホを……いや、流石に一線を越えるか？

「すみません、マティーニを1つ」

「……良いのか？前に合わなかったって言うてたと思うが」

「ん？ちよつとね、もう一回試してみようかなって」

「まあ、その意気は評価できるが……」

「最近ね、少し考えてることがあって、大学辞めようかなって……」

「お店の為にか？」

「うん。ほら、シフトは午後からだし、午前は少ない人たちで回すでしょう？」

「まあ、そうだな」

「忙しい時の地獄っぷりを知ってるから、不安になって講義とか全然身に入らなくてね。それならいつそ大学辞めてお店に集中しようかなって」

「それは、あくまで一つの選択肢として考えてる感じ？」

「いまのところはね。何かしらの問題が出てくるようならそういった選択もアリかなって思ってるだけ」

「んー……確かにアリかもしれないが、ご両親は反対しそうだな」

「でしょうね。お店を開くって時も反対されたから」

「だろうなあ。そこに娘が大学を辞めるって言えば当然止めるよな。普通は」

「だから半分冗談みたいなもの。気にしないで」

「ま、四季さんが本気でその選択を選ぶって言うなら全力で応援はするけど……大学は卒業していた方が無難だろうな」

「やっぱりそうよね……」

「今は順調だし、大丈夫だけだな」

「お待たせしました」

四季さんが、届いた飲み物を受け取り一口飲む。若干渋そうな表情をしているが、スルーしてあげるのが優しさだろう。

「そうね。今の所お店も順調。これからどうなるかは分からないけど良い感じに進んでる。そうでしょう？」

「どうだろうなー……いやー、ちよつとなあ……」

「どうしてそこで不安を煽るのよ」

むすっとした表情で睨んで来る。

「いや、油断は禁物という格言がありました……」

「分かってる。澤田君の言葉に頼って油断する気はないから安心して」

「それなら安心だな……あつ」

「え、どうしたの？急に」

「そういえば、近々12月に高校生組の期末テスト？だっけか？それがあつたはず」

「あ……そういえばそんな時期かあ」

「墨染さんは大丈夫だと思うけど……」

「火打谷さんがヤバい感じ？」

「ああ、このままだと墜落するレベル」

「それは……お店としても困るなあ」

「だから近い内にテストに備えて勉強会を開いてほしい」

「ワタシが……？」

「と、高嶺で。火打谷さんって四季さんが通ってた巻機だから過去問とかあれば対策も出来るかなつと」

「あー確かに少しは力になれるかも」

「内容は任せるよ。その間多少こつちに負担が出るかもしれないが、まあなんとかなるだろう」

「大丈夫なの……？それ」

「余裕余裕。こつちよりテストで赤点取ってシフトは入れません。の方がダメージとしてデカいからな」

「だからよろしく頼む」

「……わかった。その時はお願い」

「もし火打谷さんが勉強でオーバーヒートしたら教えてくれ。パフェの一つぐらいなら差し入れとして作るよ」

「了解、その時が来たらね」

困った様に苦笑いをして飲み物を飲む。それを見て俺も手元の飲み物を飲んだ。



「それじゃあ、着いたことだし、また明日」

「ええ、送ってくれてありがと。おやすみ」

「おう、良い夢見てくれ」

店から出て、ほろ酔いの四季さんを前回同様に送り終える。

「今日も最高にいい日だった……」

バーでの事を思い出し、余韻に浸りながら夜風を浴びて歩いていると、裏路地から人影が出てくる。

「……どうした。今日の報酬か？」

一応、バーを出た後に四季さんに付き合っ貰い、コンビニで買ってはおいた。

「違う、姫様が呼んでる」

用件を伝え、くるりと身を翻して歩き始める。……ついて来いってことかな？

その後ろを無言で付いていく。

どこへ向かうかと思うと、見慣れたお店へ戻って来た。

「なんだ、もつと違ふところを期待したんだが……」

「貴様のためにここを選んだ。感謝しろ」

「あーはいはいそうですね」

「なんだその返事は。生意気だぞ」

「感謝の言葉もございません……！」

「うむ、それでいい」

これで良いのかよ。

「じゃあ、今日のそれを寄越せ」

手を突きだして俺の手に持っている袋を見る。

「ああ、そうだったな。一応要求していた物を入れておいたから確認してくれ」

「……おおっ……！」

中身を見て、嬉しそうな声を上げる。

「良い働きだ。今後も期待してる」

「そりゃどうも」

満足気にコンビニの袋を持ってそのまま立ち去る。

……あれ、今日の報告は……？え、ええ……？

「遂に仕事を放棄しやがった。あいつ……」

いや、嬉しくて忘れていたとかなら可愛いもんだろ。うん、そう思おう。

「はあ、まあいつか……」

中に入ればもつと詳しい人が居るし、その人に聞けばいいや。

頭を抱えながら店へ入る。

「お、ようやく来たか」

「すまん、待たせたか？」

「気にするな。呼んだのは妾の方じゃ。それに、楽しんでおったからの。ほれ、座るがいい」

テーブルの上へ置かれたコーヒーを指差す。周囲を見るとカウンターには人型の姿をしたミカドさんが立っていた。

「なら良かった……」

そのまま正面の椅子へ座る。

「おぬしも何か飲むか？」

「いや、さつきまで少し飲んでたから大丈夫」

「じゃったな。おなごと二人でバーなど良い御身分じゃな」

「おかげで最高の気分で帰れると思ったけど、酔いが冷めたよ」

「む？何かあったのか？」

「いや、そっちの可愛い案内人の話だ。気にしないでくれ」

「ルリの事か。最近おぬしからお菓子を貰えると喜んでいただぞ。感謝する」

「いや、あれは一応依頼への正当な報酬って形で渡してるんだが……」

「そうか？そうは思っていない様に見えたが……」

「まあいいや。それで、俺を呼んだ理由は？」

これ以上聞くのは駄目な気がするので本題を切り出す。

「そうじゃった。お主のことで話がしたくての」

「俺の？既にミカドさんから聞いているんじゃないのか？」

「勿論聞いておる。だが、話して無いことも多いはずじゃ。最近ま

た色々動き回っている様に見えるしの」

「あー……まあそうだな」

「本人の口からも聞いておきたい面もある。長くなると思うから何か飲み物を頼むことをオススメするが？」

面白がるようにニヤリと笑いながら俺を見る。

「……はあ、分かった。ごめんだけどミカドさん、水もらえる？」

「ああ、すぐに淹れよう」

「水で良いのか？」

「ああ、さつきまでアルコール飲んでたからな。丁度良い」

「そうか」

「それで？俺の何を聞きたいんだ？」

「そうじゃな……色々あるのだが……まずは、お主がここに来る前の前世のことじゃな」

「前世？前の世界ってことか？」

「ああ。どんな場所なのだ？」

「どんな場所って……この世界と特に変わらないぞ？勿論歴史とか色々違うところもあるが……日本という形態としては一緒だな」

「ふむ……それはあれか？パラレルワールドというやつか？」

「さあ？どうだろうな。そう言った世界かもしれないな」

「ふむ、それでは無いのか」

「……どういう意味だ？」

「何、お主を見ていれば分かる。違うと確信を持った目じゃったからろう」

「……良い性格してるな。ほんとに」

「ふふ、誉め言葉として受け取っておこう」

「そうだな。確かにパラレルワールドとかでは無いって確信はしてる。色々証拠があつたしな」

「その根拠はなんじゃ？」

「……それについては黙秘させてもらう」

「ほう、答えられぬと申すか？」

「ああ、そうだな」

「妾が話せと言っておるのか……？」

「……いや、威圧感半端ねえな。つか、神が人間を脅すなよ。」

「たとえ神が脅そうが無駄だな。諦めてくれ」

「……ふむ、ならしやうがない。諦めるとするか」

途端に周囲の圧が消える。……変な汗掻くわ、ボケエ！

「他には？」

「おぬしは魂の記憶を見れると聞いておるが……？」

「ああ、そうだな。触れた蝶の感情や記憶を読み取ることが出来る。」

これに関してちよくちよく使ってるな」

「ふむ……そうか」

「あと他にあるか？」

「……いや、気になったのは以上じゃ。協力感謝する」

「……ん？ 終わりか？」

「なんじゃその予想が外れた様な顔は」

「いや、最低でもあと一つは聞かれると思ったのだが……」

「人の未来と過去が見えるという力か？」

「ああ、そうだな」

「それに関しては聞いても妾ではさっぱりじゃからのう。聞くだけ

無駄じゃ。どのみちそれが分かるのはお主だけだからの」

「そう言われるとそうだが……」

「説明するのも面倒じゃろ？」

「それはある。めちやくちや嫌だ」

「心底嫌そうな顔じゃのう……」

「なら良い。本当はもつと問い詰めようと思ったのだが……」

「おぬしの覚悟を信じることにしよう」

「こちらを見て優しそうに微笑む。……俺の覚悟？」

「そうじゃ、ついでだし連絡先でも交換しておかぬか？」

「連絡先……？」

「そうとも、妾もスマホという物を買ってなつ、何かあった時に便利じゃろ？」

「まあ……それもそうだが……」

「なに、心配無用じゃ。使いかたもしつかりとマスターしておる！自慢げにスマホを使うところを見せつけてくる。……どこぞの死神より優位に立ってるな。この神様。」

「ついでにLINEも交換して……」

「……これは侵略を受けているのか？今、俺は。」

「確かこの機能で……ほれ、そちらもアプリを開くがよい」

「あ、ああ……」

勢いに流されるまま交換する。

「これで即座に連絡が行うことが可能じゃな！」

「そうだな……」

「……てか、竜胆ルリはマジで俺の連絡先を何処で知ったんだ？

「これで、もしお主が夜に寂しくなっても一安心じゃな」

「なんだ、子守り歌でも歌ってくれるのか？」

「お経くらいなら唱えてやろう」

「逆に恐怖で眠れんわっ」

「それは残念じゃ」

俺の反応を見て楽しそうに笑う。

「てか、スマホ持つてるなら千歳家と連絡取れるんじゃないか？」

「む、それもそうじゃな……。まあ今は良い。お主の方が優先だからな」

「さようでございます」

少しは意識を逸らせるかと思ったが……。

「さて、今日のところは以上じゃ。もう帰っても良いぞ」

「だな。明日もあるし今日は大人しく帰るよ」

テーブルの水を飲み干して席を立つ。

「あ、それと、お宅のキツネさんにもう少し依頼をしつかりとこなし  
てくれて伝えてくれ」

「ルリにか？確か、この前の男を監視しているのじゃったか」

「今日なんてお菓子をもらっただけもらって帰って行ったぞ」

「それは……なんじゃ、許せ」

「まあ、特に問題無いからだろうと思ってるけど」

「その認識でよい。妾の力も正常に働いておる」

「……もしかして、必要ない？」

「そうじゃの。妾からしてみれば口実を作ってたただお菓子を与えてるようにしか見えんかったが？」

「……そうか」

「てつきり、ルリをお菓子で買収でもしようと思っているかと思つていたのじゃが……どうやら違つてみたいだの」

「いや……その側面もあつたが……うん、いいや」

こちらへの警戒心を解くための手段という理由もあつたし……実際成功しているし。

「……帰るか」

「気を付けて帰るのじゃぞ」

「ああ、おやすみ」

店を出て、帰路につく。

……うくん、何だろう。このモヤモヤ感は……。腑に落ちないというか納得しないというか……。

「お疲れ様でした」

「なに、感謝を言うのはこちらの方じゃ。店を貸してもらつたのだ。感謝する」

「いえ、大したことじゃありません。……それと、良かったのですか？」

「何がじゃ？」

「本来なら、澤田達也からもっと詳しく聞くおつもりでは……」

「そうじゃな……まあよい。誰にでも譲れない部分がある。無理に追求する必要はないからの。脅しも効かなかつたしな」

「あれには流石に肝が冷えました……。こんな場所でお力を使われるのかと……」

「ちよつとした圧をかけただけじゃ。あまり効いてなかつたのは驚きじゃが」

「耐えていましたね……」

「ああ。素質があるのかもしれないのう……親和性とも言えるか」

「何かお気づきで？」

「ちよつとな。これについてはこちらで調べておくゆえに、そっちは引き続き頼む」

「分かりました。何かあればいつでも来てください」

## 第61話：定期テスト準備

「今日も、後1時間になりましたね」

「んー……今日はもう終わりかなー」

「そうですねえ」

閉店まであと1時間ほどあるが、客の入り具合によってはショーケースの中身が空っぽになることも少なくない。しかもあと30分もすればラストオーダーだし、今ぐらいの時間帯はあまり人は来ないのが普通である。

「片付け、始めますか?」

なんとなく客は来ないだろうと予想している高嶺から提案で出る。

「それは流石に早すぎ。せめてラストオーダーまでは待たないと。ま、そうしたい気持ちは分かるけど。日が落ちて寒くなると寄り道ついでに来る人も少ないからね」

「もう冬ですからねえ……」

「それで、達也。アンタは何してんの?」

「パフェを作ってます」

「パフェ? そんな注文あったっけ?」

「いえ、これは部屋でテスト勉強している子への差し入れ的なものです」

糖分が必要になるだろうし、クリームを入れて……更にイチゴも乗つけて……ふふ。

「そういうえば、クリスマスってどうするんですか?」

「ん? クリスマス?」

盛り付けをしている後ろで話している二人の会話を聞く。

「はっは。なんだあ、その質問。お姉さんの予定が気になるのかにやー?」

「凄く気になりますっ!!」

「……涼音さんって、もう予定埋まったりしますか?」

「予定なんてありやしないよ。悲しい事を言わせないでくれる?」



「なら、涼音さん……」

「なにさ？」

「……涼音さん……」

お、これは椰揄うシーンか。

「え？ ホントになに？ そんな真剣な顔で……」

「クリスマスの日なんですけど……いや、イブかな？」

「いや、ちよつと待ちなつてば……そんな、ほ、本気？」

「当日は……」

「……ゴクンツ」

「……ケーキの販売つてどうするんですか？」

「……、は？」

勘違いをしていた涼音さんから素つ頓狂な声が出る。

「このお店のクリスマスケーキのことです」

「……」

「特別なケーキを売るか、いつも通りのケーキを売るか。前日まで  
の予約販売にするのか。まあ、そこら辺のことを……」

「……つ、……つ!!」

高嶺の冗談に気づいた涼音さんが、羞恥心のあまり暴力に出る。

「あたたつ、あたたつ！ すみません、すみませんつてば」

「こつこの、クソガキアつ！ サイテー！ サイテー！」

うーむ、いつもは椰揄う側の涼音さんがされる側つてもイイね！  
ポイント高いですつ。

「先に涼音さんが椰揄つてきたのでやり返そうと思つてつい。涼音  
さんつて、意外とピユアなんですな。もつと大人なのかと思つてまし  
た」

「……ッ！ 言つてろ、バ……カ！ 死ねっ！ 死に晒せ！ 年下のく  
せに……このつ！ 生意気なつ！」

ああ、暴れられると盛り付けが……。

「もう言いません。今のは俺が悪かったですから！」

「万死に値する！ 絶対許さぬ！ 末代まで崇つてくれるわー！」  
涼音さんの恨みが厨房内で響く。

「人として最低でした、すみません。本当にゴメンナサイ！」

「……なんだか、楽しそうね」

二人のじゃれ合いを聞いて楽しんでいると、四季さんが厨房へ入ってくる。

「高嶺が涼音さんを揶揄って怒られてるだけだな」

「あー、それで涼音さんが高嶺君を……」

「そうゆこと。それで？もしかしてパフエでも所望かい？」

「え、うん。そうだけど……」

「ナイスタイミング。今しがた出来上がったばかりだ」

「……これ、お客さんへのじゃないの？」

「いや、そちら用だな。伝票ないし」

「……ふーん。それじゃあ貰っていいのかな？ありがとね」

「おっけ。ついでに部屋まで運ぼう」

後ろでギヤーギヤー騒いでる二人に任せ、厨房を後にして部屋へ向かう。

「ほええええ……」

中に入ると、完全に脳の回路が焼き切れてショートしている火打谷さんが天を仰いでいた。

「……ほい、パフエ」

「ありがとう。ほら火打谷さん。糖分補給して。脳に栄養を回して頑張って」

餌を与えられる雛のように、四季さんから口へパフエが運ばれていく。

楽しそう。俺もやってみたいな、あれ。

テーブルを見ると、先ほどまで頑張ったであろう痕跡があった。

「……テスト勉強か」

「そ、火打谷さんから教えて欲しいって頼まれてね。それで今は、出された宿題を教えたんだけど……」

「ほえほえ……」

甘いものを摂って、脳が回復したが、まだ人語を話せるまではしてない様だ。

「人に教えるって難しいのよね……」

「まあ、気持ちは分かる。取りあえずは宿題を終わらせないとな」

「はぁ〜い……」

「う〜ん、ダメそうだなこりゃ」

「ダメです……もう無理。わけわかんなくて、思考回路はショート寸前」

いや、既に焼き切れてるようにしか見えないのだが……？

「……因みに、どのくらいなんだ？」

「マジでやばいです。やだよ、怒られたくないよぉ……」

語彙力が下がる位にはピンチと見た。

「今やってる箇所は？」

「今はベクトルね」

「あー……ベクトルかぁ」

名前は覚えてる。使って無いから最早忘れたけど……。

パフェを食べて回復した火打谷さんが問題を解くのを暫く見守る。

「あー……、あつ、そつか。そういうことか！」

何か分かった様でそのまま書いて行く。

「ふっ、謎は全て解けたよ、ワトソン君」

「誰がワトソン君か」

「お、自信あり気だな。して、その答えは……？」

「 $2a + 3!$ 」

「解けてない……」

んー、ハズレッ！

「えええ……うそー……もうダメ、数学オワッター……わけわかんない」

「数学って途中で挫折すると後が地獄になるからなあ……基礎が死ぬと全部死ぬというか」

「先輩い〜！何か助けて下さいい〜！」

「何かってなんだよ……」

「ほらっ、先輩ならどうにかしてカンニング方法とかアタシに伝授したり……！」

「いや、自力で頑張るしか無いぞ」

「ほんとですかあ？あつと驚く様なやり方が実は……？」

「……やるとしたら、蝶で記憶を読んだり？盗み見をしてとかか？

「はいはい、そんな都合の良い方法は無いから、自力で頑張って」

「そんなあ……」

「でも懐かしいな。今も昔も習う箇所はそこまで変わらないんだな」

「そんなおっさんみたいな言い方……」

「懐かしいですか？試しに一問やってみますかっ？」

覗き込んでいる俺にノートを差し出してくる。

「……なるほど、ふむ。」

「良いだろう」

近くにあるメモ用紙をちぎり、特に問題も見ずに答えを書く。大丈夫

夫、回答覚えてる。

「よし。四季さん、答え当たってる？」

火打谷さんに見えない様に紙を差し出す。

「……正解」

「マジっすかっ!?チラツとしか見てませんよね？」

「ふ、これが俺の実力よ。あと、ノリで問題を解かせようとか甘い考

えは通じないからな？」

「あ、あく……バレてましたかあ？」

「バレバレ」

手に持った紙を丸めてゴミ箱に入れる。

「あああ……答えがあ」

「世の中甘くないってことだな」

蓋を閉めて振り返ると、四季さんが疑惑の目で俺を見た。

「……どうかしたのか？」

「……べつに。便利だなあーって思っただけ」

「何が言いたいかさっぱりだな」

「はッ」

俺のスルーに対して、馬鹿にするような表情をして鼻で笑った。

「それじゃあ、お疲れ様でしたー」

「お疲れ様ー」

営業が終わり、店を閉めて皆外へ出る。

「最近マジで寒くなって来たなあ……」

冷えた手をポケットに入れながら隣を歩く四季さんへはなしかける。

「もうそろそろで11月も終わりだし、本格的な寒さがやってくるしね」

「12月はクリスマス、それが終われば正月に2月はバレンタインか……。四季さんは正月に実家に帰る予定とかある？」

「ワタシ？んー……。今の所は特に考えて無いかなあ。家近いし帰ろうと思えばいつでも帰れるしね」

「わざわざ帰る必要は無さそうか」

「そうね……。そっちは正月、部屋に籠るの？」

「……かもな。初詣くらいには出かけるけど」

「へえー意外。一人で行くの？」

「色々失礼な発言に聞こえるのは俺だけか……？」

「気のせいだよ」

「まあ、色々と用事……というか、その辺りは確認したい事がてんこ盛りだな」

「確認したいこと？」

「ま、それも機会があればおいおい話すよ」

まだ、ルートが確立したわけじゃないしな。

「あ、そっち系……」

「そそ、一人で寂しく神社に参拝しに行くのさ。惨めになっ」

「自分で卑下してどうする……澤田君も彼女とか作ってみたらどう？」

「……恋人ねえ」

「なんか、微妙な反応？ほしくないの？」

「いや、んな暇無いし……仮に出来ても色々大変だしさ、ほら？俺の事情が事情だろ？」

「あ……確かにそれはあるかも……。蝶の関連もあるし、何より身体のこととかあるもんね」

「そうそう。そう言った観点から今のところは作らないのが正解かって結論に至りました。あ、別に負け惜しみとかじゃないからなっ？」

「わかってるわかってる」

「あ、コンビニ寄っても大丈夫？合間に何か食べたい」

「了解、手伝って貰うわけだし、ワタシが出そうか？」

「いやいや、提案したのは俺だから自分で払うよ」

「そう？それなら……わかった」

コンビニで買い物をして、俺の部屋へ向かう。

どうして俺の部屋に向かうかって？それはなあ……墨染さんと火打谷さんのテストに向けての資料とか問題をまとめるためだよ!!

じゃなきや、用も無く俺が四季さんと一緒に帰れるわけ無い……いや、同じ職場で働く仲だし、送るとかの口実で一緒に帰ってもおかしくないのでは……？

部屋へ上がり、暖房をつける。

「この待機時間が地獄だよなあ」

「部屋に炬燵とか置いたりする予定はないの？」

「あーいいよな炬燵。ちよつと検討してはいるんだけど」

「分かる。冬の炬燵は最強」

「四季さんは買わないのか？」

「ワタシはちよつとな……。それで、買うご予定は？」

「あれ？これは買うように催促されてるのか？」

「うそうそ、冗談。炬燵を堪能したいって気持ちは無くは無いけどね」

「……もし買ったなら、その時連絡するよ」

「その時はワタシが審査してあげる」

「いや、なんの審査を……」

部屋が暖まって来たので、テーブルに資料を並べる。

「それで、俺は四季さんが書いたのをこっちに書き写せば良いのか？」

「ワタシが要点とかをまとめるからそれを写すのをお願い」

「おっけー。問題集とかテスト方式で作ったりは？」

「それはもう少しあとでいいかな？二人の苦手とかをもう少し把握出来たら作るつもり。そっちは高嶺君にもお願いするけどね」

因みにだが、テスト勉強の依頼があるのはまだ火打谷さんだけである。まあ、どの道明日にでも墨染さんもって話が出るけどな。

「了解。そんじゃ始めますか」

四季さんが纏めてくれた箇所をもう一枚の紙へ書き写していく。ぶつちやけパソコンで出力した方が楽ではあるが……持っていないなあ。

公式や用語。文章をもう一枚の紙を見て書く。……うむ、俺とは違って女の子を感じる文字だな、綺麗に書いてはいるけど個人の特徴が良く見える。

四季さん直筆という謎の達成感を感じながら進めて行く。

……よし、取りあえず1枚目は終わりだな。

2枚を確認しながら抜けや誤字が無いか確かめて行く。

「1枚目が終わったからここに置いておくぞ」

「え？ああ、わかった……ミス無さそう？」

「確認した限りでは問題無さそうだったな」

「それじゃ引き続きお願い」

「お任せあれ」

暫くの間、お互いの筆記音だけが聞こえる。

ピンポン。

「……来たか」

「ん？お客さん？」

「そうだな。可愛いお客さんが来たみたいだ」

近くに置いてある袋を持って玄関へ出る。ドアを開けると、毎度お

なじみの少女が堂々と立っていた。

「今日の分を貰いに来たぞ」

「ああ、毎日ご苦労様。今回の報酬」

「うむ」

俺が渡した中身を見て深く頷く。

「ああ、そうそう。依頼だけどき、あれから問題無さそうだし今日で終わりにしよう。今までありがとうな」

「今日で……終わり……？」

「そうだな。だから報酬もこれが最後だ」

「……そうか」

声のトーンが落ち、耳と尻尾が、シユン……。と垂れる。明らかに落ち込んでいる様子。

「と、言うのは冗談で、今までのとは別の依頼をしたいのだが、良いか？」

「別の……？」

「ああ、観察対象を変えたいから一旦契約を終わらせて、再度結びたい」

「報酬は、どうなる……？」

「そりゃ、今まで通り継続になるな。ちゃんと働いてくれたらの話だが」

「……っ！謀ったな！ルリを騙した」

「いやあく思ったより楽しみにしてくれてるとはなあ……？」

「人間のくせにつ、覚えてろ！姫様に言いつけてやるからな」

「すまんすまん。天罰とか勘弁してくれ」

「ふん、精々楽しみにして待ってるといい」

くるりと振り返り、帰っていく。……尻尾で感情が丸わかりなんだよなあ。

「……つうか、対象も聞かずに……まあ明日で良いか」

相手の事も調べてもらわなきゃいけないし。神様パワーをお借りせんとな。

ドアを閉めて部屋へ戻る。



「もしかして、前と同じ子？」

「そうそう、気分は近所の子供にお菓子をあげてる感じだな」

「完全に子供扱いね……まあ見た目がその通りなんだけどね」

「まあな」

来訪者も去ったことで、再び紙と向き合う。

もうすぐ12月に入ろうとしている。どうなるかは分からないが、上手く行けば野中君の件が発生するはず。そして、そこで高嶺が影響を受け魂が衰弱する。

最終的には逆に相手に影響を与え事なきを得る。しかし、魂の衰弱で体調は崩れる。そこで明月さんが自分の分け与える……。

確実にその道を辿るために色々とサポートしておいた方が良さそうだな……。まずは、スマホを買いに行かせるところからか。

「澤田君？」

「ん？どした？」

「いや、何だか難しそうな顔をしてたから……。どこかおかしい箇所でもあった？」

「あー……。いや、問題ない。少し考え事をしていただけ」

「それはさつき言ってた話と関係してること？」

「……ああ、そうだな。正解を引き当てる為にちよつとやる色が色々とな」

「そう。何かあったらワタシにも相談して？手伝えることがあったらだけど……」

「二応、今の所四季さんにも手伝ってもらおう必要があるのも……。あるっちゃ、ある。まだ先の話になるけど」

「わかった。その時にまた連絡して」

「了解。その前にこいつらを片付けないとな」

「そうね。早い内に終わらせましょう」

気合を入れ直し、目の前の作業を片付けていく。

それから一時間程で一通り完了したので休みを入れる。

「今日のはこれで終わり？」

「かなー？今のところはここのままでのでいけそう」

「おっけ。てか、結局コンビニで買ったのに手を付けなかったなあ」  
「ほんとそれ。思ったより集中していたみたい。てか、澤田君写すの早くない?」

「そうか?」

「そうっ、こつちが追いつかれそうで少し焦ったんだから」

「自分では良く分からんな……前に明月さんにも同じこと言われたし」

「明月さんも?」

「ああ、前にお店で……少しな」

おっと、危ない反射的に口に出して喋ってしまった。

「あ、濁した。そんなに言えない事だったの?」

「いやいや、蝶関連のことをな。個人的な話もあって濁しただけだ、気にしないでくれ」

「ふーん。なんか怪しい……」

ちくしよ、蝶関連なんだから深掘しないでくれ!俺が死ぬからっ!

「ま、別に良いんだけど」

ほ、良かった……。

「それじゃあ、そろそろワタシは帰ろうかな。時間も遅いし」

『『終電……無くなっちゃった』とかなら泊まってくか?』

バーでの出来事を蒸し返す。

「ツ!?……しね」

超弩直球の暴言っ!恥ずかしながらもしっかりと蔑む様な視線っ

!うーん、ビューティフォー!!

「冗談冗談。それじゃあ、送ってくよ」

「わざわざ送ってもらわなくても……家にいるのに面倒でしょ?」

「好きでしてることだからな。俺の安心のためだと思って付き合っ  
て欲しい」

「……わかった。それならお願いする」

「お任せを。しっかりとエスコートを……って帰るだけだし違っ  
か」

「どうでもいいから、早く支度して」

「あ、はい」

## 第62話：食

テスト期間が近づき、高校生組2人はテストを乗り切るまで店のシフトよりも勉強を優先させることに決まった。

勿論、そのことで異論を唱える人達はこのお店にいなかった。だが、抜けた穴は大きい。平日であれば多少は問題無いが、休日の土日となれば話は別だ。

「オーダー入りまーす。パンケーキとオムライス。それにカプレーゼ風。パスタをお願いします」

「はいよー」

「あと、すみません。ドリンクの方を少し手伝ってもらえませんか？」

「こつちもそんなに余裕がある訳じゃないんだけど……放置は出来ないしねえ」

「あ、それなら自分が行きますよ？今オムライスの方が丁度終わったので」

「そう？それじゃあこつちは私と昂晴でやっておくから、ごめんだけどお願い」

「すみません。ありがとうございます」

「人少ないからな。仕方ない」

フロアに出ると、想像以上に賑わっていた。

「それじゃあ、ドリンク系は俺の方で対応するから、明月さんは客捌くのをお願い」

「わかりました。お願いします」

オーダーを確認して用意する。コーヒーが2つと、紅茶ね。こつちは紅茶2つと……。

5人分のドリンクを用意する。注ぐまでの余りに厨房の完成品を運ぶ。

「すまんっ、明月さん。これ6番テーブルのお客様」

こちらへ戻って来た明月さんへトレイを渡す。

「了解です。こちら8番テーブルのオーダーになります」

「了解、もちろよ」

8番……って、結菜ちゃんか。

紙を受け厨房へ向かう。

「すみません、オーダー、オムライス1つとパンケーキ1つ入りま  
す」

「了解ですー！」

「因みに、このオムライスは結菜ちゃんの注文だ。高嶺シェフ、期待  
してるぞ」

「はいっ。任せて下さいー！」

フロアに戻り、コーヒーと紅茶を淹れる。

「2番テーブルと5番テーブルのドリンクおつけーつと」

今度は注文を受けた四季さんがこちらへ来る。

「ごめん、これお願いしてもいい？」

「おつけーもちろ。代わりにこれ2番テーブルへお願い」

「うん、ありがと」

受け取ったオーダーを再度伝えて戻り、5番テーブルへ飲み物を届  
ける。

「お待たせしました。ドリンクになります。アールグレイのお客様  
様」

「あ、私です」

「ダーズリンはあたしですー」

「こちらがアールグレイ、こちらがダーズリンになります。それで  
は、ごゆっくりどうぞ」

注文を届け、戻る。次は……オレンジジュースとダーズリンだな。  
8番のやつだな。

「パンケーキあがったよー！」

「もらいますっ」

上がったパンケーキを受け取りに行く。

「オムライスとパスタはどうですか？」

「パスタはもう上がるっ、オムライスはもうちよっつと」

「了解です。ドリンク淹れているので上がったら運びます！」  
「あいよー」

パンケーキを席まで届け、再びドリンクを淹れる。

「澤田君、ガトーショコラってまだあった？」

「まだあるな。チーズケーキの方も平気だ。今受けたオーダーのフルーツタルトもまだあったぞ」

「わかった、ありがと」

この調子なら追加で作らないといけないのが出てくるなあ……。  
厨房にも行かないと。

「お待たせしました。オレンジジュースとダーズリンになります」

「あつ、魔法使いのおにいちゃん！ありがとうございます！」

「いえいえ、どういたしまして。オムライスも今厨房のお兄ちゃんが作っているからもうちよつとだけ待ってね」

「はい！楽しみです」

「すみません、娘が……」

「気にしないで下さい。作る側も喜んで食べてくれるのは嬉しいですから」

一礼して席を離れる。ついでに帰られた席の皿も回収していく。

「あ、澤田さん、ありがとうございます」

「客入りは捌けそう？」

「この調子でしたら何とかかなると思います」

「もしかしたら涼音さんにケーキ類を追加で作ってもらうかもしれないからその時は一旦戻るわ」

「分かりました」

一言断りを入れて厨房へ。

「へーい、洗い物でーす」

「そこに置いてー」

「色々足りそうですか？」

「今のところは平気。けど、この調子ならまた作らなきゃかもね」

「今日はガトーショコラの売れ行きがなんかすごいですね」

「たまにあるんだよねー、特定のだけ馬鹿みたいに売れる日が

……つと、パスタ上がったよ」

「こつちのパンケーキとオムライスも上がりました」

「了解。運びます」

これは……5番テーブルと2番か。

後は8番の料理と、3、4番テーブルのデザートがもう少しと……7番は出揃ってるな。

「運ぶか」

中々忙しいが、それもお店が良い感じに進んでいる証拠と思いながらトレイを席まで運んだ。

「あー……終わった終わったあ」

ピークを何とか捌き、一息付ける……なんて考えていたが、客足はそこまで衰えずに暫く奔走した。流石に夕方が来ればそれなりに落ち着き、なんとかフィニッシュを迎えた。

「お疲れ様です」

「明月さんもお疲れさま。今日なんかピーク長くなかったか？」

「そうだったんですよえ、ありがたいことに……」

「まあ、良い事には違い無いんだけどなー、如何せんタイミングが……」

「ですが、澤田さんがお二人が戻るって言っても追い返したじゃないですか」

「行けると思ったからな……。少し見栄を張り過ぎたかもしれん」

「男の矜持ってやつですか」

「かもな。そういえば二人はどんな感じ？」

「さきほど、高嶺さんがテストの採点を始めていましたね」

「その辺りか……。少し、様子を見て来て貰ってもいい？墨染さんは疲れとかでケアレスミスがあるから休んだ方が良くってアドバイスをしておいた方がいいのと……。火打谷さんは……。良い感じに点数は上がってきてるはず。元があれだからだけだな」

「さも普通のように仰ってますね……。しかもフロアで堂々と」

「今更今更、フロアには涼音さん以外になら今は平気だし」

「それもそうですね。分かりました。ちよつと様子を見てきます」

「ういす、お願いします」

手を振りながら明月さんを見送る。

「少しいいか？」

今度はミカドさんから声をかけられる。

「ん？どうかした？」

「愛衣のことについてだ。あれからまた見つけたか？」

「いや、遠出で見つけたのはショッピングモールだけだな。あとはお店に来てくれた人の回収とかぐらい。一応自分で見つけたら回収はしてるって言ってたけど」

「そうか。こちらが把握してる内容と同じ様だな」

「今はテスト期間だし。それが終わったら再度練習するなり、一度瞳から回収するなりしておこうか」

「そうだな。今は余計なことはせず勉学に励ませた方が良い」

「了解。見てる感じだと安定してると思うから心配は無いと思う」

「わかった。また何かあれば連絡しよう」

……そういえば火打谷さんの件は進めて無かったな。お店でもちよくちよく回収を任せていたからそのままにしていたわ。

「さてと、帰りの準備でもー」

「澤田君、ちよつといい？」

「あいあい？」

今日は色んな人から来るな。クリスマス前のモチ期か？

「今日って、この後……暇？」

「……え、それって……？」

「ごめんね、また手伝ってもらって……」

四季さんが俺の部屋へ……!!しかし、当然のごとくテスト対策の件である!!



「このくらい大したことじゃないし、四季さんと同じ空間に入れるならむしろ喜んで手伝いますとも！」

「空間で……普通にキモイんだけど」

「ふっ、それは俺みたいなの奴の業界ではご褒美だぜ……？」

「決め顔で言うな、キモさが増す」

「あーい」

「けど、感謝はしてる。ありがとう」

「その労いだけで今日も頑張れるなあ……」

「あと数時間しかないけど？」

「その数時間を頑張るってことに決まってるだろ？」

「単純すぎるでしょ……」

「男とは、そういう生き物だ」

「わかったわかった……はい、これお願い」

四季さんから受け取った問題集の付箋のページを纏めて行く。

「……因みになんだけど、男の人って何されたら喜ぶ？」

「……どうしたんだ、唐突に？」

「いや、ほら、澤田君には色々手伝ったり助けてもらってるから、何かお礼をしたいなーって思ってる」

「なるほど」

「だから、何かお礼に？恩返しになるのか聞いてみた」

「あー……お礼か……」

「ここで、気にしなくて良いと言っても頑なに引き下がらないのは目に見えてるし……何か言った方が良いか？」

「そうだな……飯がまだだし、晩御飯作ってもらおうとか？」

生姜焼きを思い出す。

「いや、そんなことでもいいの……？」

「そんなこと……だどっ!？」

「え、なんでそんなに驚くの？」

「女の子に晩御飯を作ってもらおう……これが、そんなことの訳がないっ!！」

「そんな力説されても……」

「世界に存在する男の夢だっ！人の夢だ！これがどれだけの偉業か……！」

「どうしよう、なんかやばいスイッチでも押したかな？ワタシ……」  
俺の答えに呆れた表情でペンを止める。

「冷蔵庫の中、確認してもいい？」

「ん？良いけど、どうしたんだ？改めて……」

「自分でさっき言った事忘れたの？晩御飯、作って欲しいんでしょ？」

「………、マジでっ!？」

「え、そこで驚く……?」

「はっ、待てよ。これは喜んだ俺をぬか喜びさせるための高等な罠……!？」

「ワタシをなんだと思ってるの。そんなことしない」

「じゃ、じゃあ……本気で、作るのか……?」

「だから最初からそのつもり。嫌なら別のにするけど……」

「いえ！是非ともお願いします。俺は晩御飯を望みますっ」

「必死過ぎでしょ……、まあ、悪い気はしないけど」

立ち上がり、冷蔵庫の中身をする。

「んー……澤田君は今日何か作るつもりだった？」

「今日は特に考えてなかったな。卵と……鶏肉がまだあったし、親子丼とか？あ、でも葉っぱが無かったな」

「葉っぱで……別にカイワレ大根とか三つ葉が無くても良いんじゃないの？」

「それもそうだな」

「台所も好きに使ってもいい？」

「ええ、どうぞどうぞ」

「それじゃあ、作ろうかな」

スマホを開き、作り方を調べ始める。

「それなら、俺は米でも炊こうかな」

「ストップ。それもやるから。澤田君は大人しくしてて」

「ア、ハイ」

立ち上がろうと中腰まで上げた腰を下ろす。

「んー、なるほど。意外といけそう」

スマホを見ながら必要な食材や物を用意していく。

「……………」

これは、夢だろうか。俺の部屋で四季さんがご飯を……原作では生姜焼きであったが、これはこれで……すごくいいっ!!最高ですっ!

「……………ん?どうかしたの?」

「幸せを噛み締めていたんだ……………うう……………」

「はいはい、出来るまで続きをお願いします」

こんな時にテストの問題など作ってる場合じゃねえ!いや、しかし、四季さんからの頼みを断る訳には……………!

「くっ……………!なんて残酷な選択を強いるんだ……………っ!」

「急に苦しみながら何言ってるの……………」

「けど、承知した。引き続きテスト作成に努める」

「うん、お願いします」

茶番を終え、再度紙と向き合う。

しかし、晩御飯を作っている四季さんが気になる……………が、ペンを走らせる。

俺に第三の目があれば……………。悔やまれる。

ご飯が炊き上げるまでの待ち時間があるため、それまでの間テスト対策の準備を進めていた。

「……………あ、炊けたみたいだな」

炊飯器からの通知が鳴ったのを聞いて、蓋を開ける。

「うむ、新鮮な白米だな」

湯気に当てられながら中身をほぐして蓋を閉じる。

「それじゃあ、こっちも温め直そうかな」

それからすぐに丼の茶碗に盛られた親子丼が出来上がる。

「はいどうぞ」

「おおおお……………」

夕食なのでテーブル上の資料などは既に退避させている。

「普通の出来だから、あまり期待しないでね」

「大丈夫。例え四季さんがメシマズキヤラだったとしても食べ切れる自信がある」

「なんの自信だが……」

「俺が、食べても良いのか？」

「どうぞ、その為に作ったんだから」

「ありがとうございますっ！いただきますっ！」

箸を手に取り、親子丼を食べる。

「……どう……？」

「……この世界に生まれ直して良かった」

目を閉じて、天を仰ぐ。

「大げさでしょ」

「いや、大げさじゃない。美味しい。人生で一番美味しく感じたご飯って自信もって言える位には美味しい……！」

「そう……？なら、まあ、よかった。それじゃあ、ワタシもいただきます」

「本気で。世辞でも何でもない。冗談とかふざけているわけじゃないからな。本心から思ってる」

「わかったから。冷めない内に食べて」

「ああ、胸に刻みながらありがたくいただくよ」

四季さんからの手作りの晩御飯……手作りの！親子丼を！食べ終えて、ゆつくりとだがまたテストの準備を進めていく。

「んー、こんなもんかなあ」

「今日は終わりか？」

「そうする。一応出来上がったしね。あとはこれを理解して解ければそれなりの点数は取れると思う」

「了解、んじゃ帰りますか」

「そうする」

上着を着て、四季さんを送るため部屋を出る。

「それにしても、どうして急にご飯をつくるなんて言い出したんだ

？」

送り道の途中に、気になって聞いてみる。

「さつきも言ったでしょ。手伝って貰ったお礼にっ」

「それはそうだが……行動に移すにしては急だなんて思っ」

「そう？」

「ちよつと引つかかっただけだから特に意味がないならスルーしても良いけどな」

「んー……まあ、確かに勢いに任せたとはい、自分でも思う」

「やっぱり？何か焦りでも？」

「そうかも」

「それは……最近高嶺や皆が頑張ってるのを見て、触発されたと思って良いのか？」

「そんな感じ。ワタシもお店の為に頑張らないといけないと思ったと同時に、まずは手伝って貰ったことに対してワタシから何か出来な  
いかなって」

「なるほど。それは良い事だな」

「と言っても、大したことは出来てないけどね」

「チャンスならこれから幾らでもあるだろ」

「あるかなあ……？」

困った様に苦笑いをする。

「次で言えば、クリスマスイベント。お店でも限定のケーキ……  
ブッシュドノエルとか出すかもしれないしな。その時が最初の機会  
だな」

「けど、クリスマスはいつも以上にお客さんは来るし……」

「クリスマスは甘く見ちやいかんよ。向こうから客が来る……なん  
て考えだったら好機を逃すぞ？」

「それは経験則？」

「経験則も含めてだな」

「そうなんだ……それじゃあ色々と考えてみようかな」

「イヴと当日はお店に缶詰め状態だし、今年は寂しいクリスマスに  
なると思うけど……お互い頑張ろうかあ」

「そんな惨めに言わない。お客さんが笑顔になってくれるのを喜ばない」と

「そうだな。俺たちの犠牲の上に笑顔が出来上がるんだよな。その次は同じくバレンタインのイベントを……四季さんは渡す相手とかいる?」

「ワタシ? 特にいないけど?」

「お店のメンバーはどうするんだろう……高嶺に恋人が出来たら本命から貰うだろうし……そうになると義理か。そのお零れをワンチャンもらえるのか?」

「そんな乞食みたいな……てか、高嶺君に彼女が出来るのは確定なの……」

「その前提で考えてる。けど、その分お返しのホワイトデーが何かと……うーむ」

「なに? チョコレートほしいの?」

「そりゃあな。男にとっては年の一度のビックイイベントだ。しかも世間には色んな種類のチョコが出回るし楽しみだ」

「自分で買いに行くんだ……」

「気になれば買うな。無論、人から貰えるなら何でも嬉しいが」

「そっか、それじゃあ用意しようかな」

「……それはとてもありがたいのですが、無理しなくても良いからな?」

「別に、無理してない」

「四季さん、そういうイベントあまり好きそうじゃないし」

「それはそうだけど、たまには良いかなって。気が向いただけ」

「……それなら超楽しみにしておこうかな」

「ハードル上げるの止めてくれる?」

「無理、あと2か月を全裸待機するレベル」

「そのまま凍死すればいいのに……」

「絶対零度……視線ありがとうございます……」

「まあ、まだ先の話だしな」

「そうね、まずはテストを乗り切ってもらわないと」

四季さんが先の話をしているのを見て、無性に嬉しく感じる。ミカドさんから聞いた感じでも以前より蝶も元気になっっているって話だし、この調子で行けば何とかなるかもな。

「何だが嬉しそうだけど、何かあった？」

「いやー、四季さんとこうして一緒に未来のことを話してると思うと自然とな……」

「なにそれ」

「以前の四季さんならこうも楽しそうに話さなかったからさ」

「そうかな……？けど、そうかも」

「無事、四季さんの中で心境の変化があったってことだよな？」

「まあ、色々と？それなりには……」

「やっぱり、高嶺とかの頑張る姿をみてか？んん？」

「それもある。けど、一番は澤田君……かな？」

「お、まさかの一番指名か？こりや嬉しい」

「まさかも何も。あんなに頑張ってる姿を見たり聞かされたりしたら、嫌でも頑張らないとってなるに決まってる……」

少し拗ねた表情で目を逸らす。

「それはそれは……」

「なに、なんか文句でもある？」

「いや、頑張っただけの甲斐があつたなっと思ってただけ。ちゃんと俺も四季さんに与えられるだけの物を持ってたんだなって」

「普通にそうでしょ……その言い方は嫌味にしか聞こえない」

「それは、すまん。けど……うん、素直に嬉しい」

そう言っただけで、これまでの頑張りに意味があつたな……。

「……ねえ、澤田君、一つ質問してもいい？」

「……どうした？」

さっきまでの雰囲気とは違い、不安そうな表情で俺を見る。

「どうして、澤田君は、ワタシに協力しようと思ったの？」

「何か気になる事でも……？」

「色々だね。ワタシに協力しようってなったキツカケって何だろ

うってふと思つてね。勿論、お店を開くためにはワタシが本気で開く覚悟が必要だったから助けてくれたつてのは分かる。未来が視える澤田君なら狙つて動く事も出来るしね」

「けど、お店を開いた後でも、変わらずに助けてくれてる。それなら、最初からお店を開く関係無くなのかなつて？それか、開いた後も何かあるのかなつて最近考えててね」

「うん」

「さつき話しを聞いて思つたの。もしかして、高嶺君だけじゃなくて、ワタシの魂も助けるつもりなんじゃないかつて……」

「……面白い仮説だな」

「ワタシの魂が蝶になつて零れ落ちてるのは当然知つてるよね？それなら、その理由も知つてる。違う？」

「………、続けて」

「ワタシがお店を開こうと考えたのは、閣下達が好き勝手言つて来たときに思つたの。『何も関係のないこの2人なら迷惑かけてもいいんじゃないだろうか』『向こうが言つてきたから自分の責任じゃない』つて……覚えてる？以前、明月さんの部屋で似たような言葉を澤田君の口から言われたこと」

「さあな、どうだったかな」

「ワタシは覚えてる。なんせ、自分が思つてたことをそのまま言われて言いくるめられたから」

「偶然とは恐ろしいな」

「未来や過去が視える。でもそれだけじゃなくて触れた蝶の記憶も見れる。あの裏路地でしていたみたいだね」

「それなら、ワタシの過去や記憶も読んだ。その時に、共感とかしたのかなつて……」

「知つたから、見過ごせず高嶺君だけじゃなくワタシも助けようとした……どう？」

「……単純に、四季さんに一目惚れして、お近づきになりたかつただけだったら？」

「なにそれ……自分で言つてる時点で否定してるようなもんで



しよ」

苦笑しながらこつちを見る。

「まあ……正直それもあるのかなって考えもしたけど、でも、今の澤田君の顔を見ればそうじゃないってわかる」

「……なんだ、顔がキモイとでも言いたいのか？」

「ううん、なんだか……寂しい目をしてる。何かを後悔してるみたいな顔。まるで自分を見てるみたい」

「四季さんと似るとか光栄だな」

「自分で気づいていたかわからないけど、お店とかでもたまにしてる」

「店ではいつも笑顔のつもりだが？」

「なんだろう、ふとした瞬間、思い詰めた様な……顔をする時がある。特にワタシと話した後とかにね？」

「……見てるのは高嶺じゃなかったのか？」

「見た。けど、参考にする人はなにも高嶺君だけじゃないでしょ？一番は澤田君だったし」

「なるほどなあ」

「それでね。一つの仮説を立てたの。聞いてくれる？」

「嫌だと言ったら？」

「その口を針で縫う」

「こつわっ!? 猟奇的!」

「それでね、どうしてワタシを見てそういう顔するのかなーって考えて、思いついたの。ああ、そういえばワタシ、一度目の世界で死んでるなって……」

「……………」

今日の四季さんは痛いところ突いてくるなあ……こういうのは素直に喜べないな。

「そこでさつきと繋がるんだけど、もしかして澤田君って、それを知っていたんじゃないのかなって……」

## 第63話：罪

「そこでさつきと繋がるんだけど、もしかして澤田君って、それを知っていたんじゃないのかなって……」

「何を、かな？」

「……うん、やっぱり知ってるみたいね。ワタシが高嶺君と同じ事故で死んだってこと」

「……」

これは……言い逃れは出来ないかな？

「あ、勘違いしないで。別にそのことについて責めたり文句言う気は全くないから」

「……違うのか？」

「そりゃ、最初はその理由は気になった。けど、澤田君は意味も無くそのままにするのはあり得ないし、何か理由があったからそうした。でしょ？」

「ああ……そうだな」

「なら良い。高嶺君が世界をやり直すつてのもわかっていたからそのままにして今の世界になった。そして、やり直した本人は明月さんや閣下と一緒にお店へやってきた。そして、墨染さんや、お店のりフォーム。涼音さんを紹介したり色々なことをしてくれた」

「つまり、お店を開くためには高嶺君がどうしても必要だったってことでしょ？」

「……ああ」

「それなら、むしろ感謝したいくらい。そのおかげで夢が叶ったんだから……ありがとう」

「……感謝される様なことじゃない」

「澤田君はそう言うと思った」

「それに、まるで自分の夢が終わりみたいない言い方をしてる」

「うん。そのつもり」

「それはどういう意味だ」

「これ以上、ワタシのために頑張らなくていいってこと。あとは高嶺君と明月さんに集中して」

「……別に無理して頑張ってるわけじゃないんだけど？」

「うん、無理してる。これ以上、澤田君に迷惑はかけられない。ワタシのせいで辛い思いはさせたくない」

「四季さんのせいで……？」

「そうでしょ？これまで沢山助けてもらった。けど、それは澤田君の我慢の上に成り立ってる。私を見捨てたって思っただけでその罪滅ぼしのために……」

「……そう見えたのか？」

「見える。今も辛そうな顔してるしね……ごめん、嫌な事を思い出させて」

「いや、これは違う……」

「違うようには見えないけど……？」

「……それで、四季さんはどうするつもりなんだ？」

「どうするって……？これまでと変わらない。これ以上は、変わらない」

そう目を伏せていう顔は、いつか見た諦めた様な寂しい表情を……。

「これ以上を……望まないって言うつもりか？」

「そうね。だって、ワタシが高望みすると、澤田君は喜んで手伝うでしょう？」

「そりや当然の話だな」

「だから望まない……って、本当はこんな話をする気なかったんだけどなあ……なんか場の雰囲気の流れされた」

「四季さん」

「ん？なに？」

「俺も場の雰囲気の流れされて話すけど」

「え、うん……」

「正直に言えば、俺は四季さんが思ってるような良い人じゃない」  
「え、うん。知ってる」

「……………」

「……………」

「しかも！」

「あ、現実逃避した」

「確かに俺は1度目の世界で、2人を見捨てて……いや、見殺しにした。それも高嶺が幸せを掴むためだと考えてた。けど、ちゃんと考えれば、四季さんが死ぬ必要はなかった。世界をやり直すなら、事故に遭うのは高嶺1人で問題無かった。それなのに俺は思考を止めてそのままにした」

「それに対して罪悪感がないとは言えないし、罪滅ぼしの意味もあって協力したのは認める……けど！俺が協力している理由はそれだけじゃない」

「他に……あるの？」

驚いた表情で俺を見る。

「ああ、四季さんに笑顔でいてほしい。笑って人生を過ごして、楽しいって思えるような日々を過ごして欲しいって思ってるからだ」

「え、なに急に？告白？」

「好きに捉えて貰っても構わない。四季さんは自分が変われない。これ以上自分の我儘で周りを巻き込みたくないって思ってるかもしれないけど、そんなことない、全然そんなことはない。人は変えられる。何かの小さなキツカケ、勇気で変われるんだ」

「なに？それは経験則？それとも澤田君の力？」

「残念だが、これは経験則だ。変わった男がここに居るからな」

「昔の俺も似たような感じだった。親の居なかった俺は他とは違うってな。授業参観とか、遠足の弁当。自分の親はくって話をされてもわからなかった。話についていけない。それを言えば皆は気を遣って同情した目で俺を見る……それがわかったら自然と距離を置くように生きて来たよ」

「そのまま高校を卒業して仕事に就いたが、暫くしてクビになっさ、自分なりに頑張って生きていたつもりだったが、そんなことなかったのかってなんかどうでも良くなった」

「何故か叔父は、特に理由を聞かずに無職を続けさせてくれたよ。そして、このままこんな人生が続いてくんだろうなって思いながら過ごしていると、とある人を知ったんだ」

「その人は、自分が小さい頃から体が弱く、何度も入退院を繰り返して、学校にもまともに行けず……そのせいでクラスメイトの輪にも入れず、けれど、せめて自分が楽しみにしてたことを聞きたいと思っても皆にとっては大した事のない日常の「コマ」

「……っ!?!」

「しかも、ご両親にはいつも迷惑をかけてるからワガママを言うわけにも行かない。そんな考えを続けていると、自然と他人と距離を置くようになって、色んなことを諦めて……生きて来た」

「それって……」

「けど、転機が訪れた。死神と名乗る女性と、神の遣いとかぬかす猫だ。そして、次に世界をやり直したとか言う男が店に来て、更にはお店で働く人も集まる。彼女は戸惑いながらも決意をして無事お店をオープンさせることが出来た。『CAFÉ STELLA』って名前のお店を」

「そこからは忙しくも楽しい日々が始まった。眩しいくらいに、毎日がキラキラと輝いて見えた。周りを困らせてばかりの自分が……周りの人を笑顔にしている事を知って、気が付くと、彼女も自然とそれを受け入れていた」

「毎日が楽しくて、諦めかけていた自分にもまた望んで良いと思えるような、そんな明るい人生が、世界があるんだって……」

「澤田君……」

「そんな姿を見て、簡単にあきらめていた自分が嫌になったよ。ああ、俺にも変わることが出来るかもしれないって希望を同時に抱いたよ」

「そこからは前にお店で話した通りだ。そして、何の因果があつたかは分からないけど、この世界に来た。俺が知っているこの場所に……どうして来たかは今でも分からない。けど、もしその意味を自分で創るのなら……」

困惑した表情の四季さんを見つめる。

「四季ナツメ、キミを助きたい。明月さんへの恩返しでもなく、俺の意思で。四季さんのおかげで救われて変わることの出来た男がここにいる。なら、今度は俺が四季さんを助きたい。明るく、楽しそうに笑いながらみんなで働く姿を見たいんだ。そのために俺はこうしている。罪滅ぼしじゃなくて、そうしたいと俺自身が願ってるからだ」

「だから、夢を……望みを諦めないでほしい。それを俺に手伝わせてほしい。その夢を叶える所を見せてほしい」

「……、でも、これ以上は……」

「でもない。諦めるとかそんな後ろ向きな言葉は無しだ」

「なにそれ、ムカつくなあ……」

「前向きになってくれるなら幾らでもムカついてくれ。その度に喜んで罵られてあげよう」

「……迷惑じゃ、ない？」

「まさか、むしろご褒美」

「……良いのかな？ワタシみたいな、ちつぽけな夢でも……」

「俺にとっては世界一だけだな。好きなだけ願ってくれ。その度に好きなだけ付き合わせてもらおうから」

「……ほんとに？色々と面倒なこと言うかもしれないし……」

「それも思い出として楽しかったって懐かしめるようにして行けば無問題。それで？まだ肯定して欲しいところあるか？」

「……手伝って、くれる……？」

「喜んで。それで四季さんの笑顔が見れるなら。それが俺の望みでもあるからな」

笑って手を差し出す。冬の夜風に当てられ、すっかりと寒くなってしまうが……まあいいだろう。

「四季さんが諦めても、俺は諦める気は無いからな。先に諦めることを諦めるのをオススメしておくぞ」

「なにそれ……。脅しにもならないんだけど？」

困ったような、呆れた様な表情で笑う。

「うん、分かった。……それじゃあ、どっちが先に諦めるか楽しみに」

しておこうかな？」

呆れながらも、小さく笑ってこちらに手を差し出す。

「それはそれで未来の楽しみの一つだな」

それに釣られるように笑いお互いに手を――

「――ッ!?!」

握ろうとした瞬間、突然四季さんが苦しそうに胸を押さえ始める。

「ど、どうした!四季さんっ!?!」

苦痛に歪む表情を浮かべ、倒れそうになったのを急いで支える。

「はあっ、はあっ、はあっ……!」

呼吸もままならない様子で、体に力も入っていない。そして、そのまま気を失った。

「四季さんっ!……ッ、救急車を今呼ぶからな!」

ポケットからスマホを取り出し、すぐさま電話を掛けた。

その後、駆けつけた救急車に乗せられすぐさま病院へ運ばれた。途中で離された俺は急いでお店へ電話をした。運よくミカドさんがまだ下に残っていたようで、事情を説明して二人に来てもらい、四季さんの魂の様子を見て貰った。

その結果、魂に何らかの影響が起きているという結論が出た。詳細までは分からないが……。

「……………」

そして、病院に居ても仕方がないので、一度お店へ引き返して今に至る。

「ミカドさん、ナツメさんは……………」

「今の所はまだ無事だ。だが……最悪、このまま行けば目を覚まさない可能性もあるだろう」

「そんな……………!」

「だが、事実だ。原因が分からなければ手の出しようもない」

「さ、澤田さん?」

「すまん、さつきも言ったけど、これについては俺も想定外だった……」

「い、いえ、ですが、あまり自分を責めて思い詰めないで下さいね?」

「……ああ、ありがとう」

「今は病院で治療を受けている。上手く行けばそれで目を覚ますかもしれない。それに、ここに居てもどうにも出来ん。今日は帰るがいい」

「……そうだな。急に呼び出したのにありがとうな」

「変な遠慮は要らん。何かあればすぐに我輩たちを呼べ」

「ああ。おやすみ」

二人に見送られながら店を後にする。

「……どうして」

考えられるのは原作でも起きた事件。けど、あれはもつと後の話だった。しかし現実に起きたのなら、時期では無く魂自体に何か起きたのではと考え見てもらったが、案の定だった。

問題は四季さんの魂に何が起きているかだ。それが問題である。

「……考えろ。原作と共通点が無いか、それとも別の原因かを……」

部屋へ戻り電気もつけずにずっとそのことを考える。

「何かが四季さんの魂に影響を及ぼしたのは事実だ。蝶の羽ばたきも弱まっていた」

安易に考えるなら直前まで居た俺だろう。俺の魂に感化された……?しかし、これまではそう言った場面は見られなかった。

「……くそつ、頼み込むしかないか!」

スマホを取り出し、真夜中だけどそれを無視して電話を掛ける。

「あー、もしもし?なんじゃ、こんな真夜中に……妻の子守歌でも聞きたくなったのか?」

寝起きと思われる声で電話を取った相手に頼みごとをする。

「夜遅くにすまん!至急頼みたい事がある……!」

「……どれ、話してみせよ」

「お店の人で倒れた人が居る。その人の魂を見て欲しい」

「魂をとな……良かろう。準備をするゆえ、メッセージで詳細を送



るがいい」

「ああ、分かった！」

通話を切り、これまでの流れを詳細に書いて送る。数分後、『これから向かう。報告を待つがいい』とスタンプレキで返信が来た。

「……これで、何か分かれば良いが……」

焦る気持ちを落ち着かせながら、待つ。その間も、倒れてしまった原因を考える。

30分が経ったくらいに、玄関のインターホンが鳴る。

「つ!?……もしかして」

急いで玄関のドアを開ける。

「やはり起きておったか」

そこにはいつもの煌びやかな衣装を着た卯花之佐久夜姫が立っていた。

「中に入るぞ」

「ああ」

部屋へ案内する。

「結論から言う。魂が弱っておる」

「つまり、ミカドさんと同じ結論か……」

「これ、早とちりするでない。続きを聞け」

「続き……?」

「ああ、ナツメの魂が弱っているのは元々じゃ。今回の原因は別にある」

「詳しく聞かせてくれ」

「おぬしらが言う魂の分離、いわゆる蝶となって魂が零れ落ちた。それによって彼女の魂は一般の人間より弱い。いわば病弱な体質の人間と同じじゃな。何かしらの干渉などでも体に影響を及ぼしてしまいう位にな」

「じゃが、これまでは問題無く生きて来られた。多少の刺激があっても、その分魂も元に戻ろうと強くなっていたからのう……。しかし、その魂の許容範囲を超えてしまい、それが体にも影響を及ぼした。恐らく、これが今回の原因だ」

「……何をしたら、魂に影響を、及ぼすんだ？」

「魂とは自分の心じゃ。沈んだ気持ちを持てば魂にも影響を及ぼす。勿論逆も然り」

「それは……つまり、マイナスだけじゃなくプラスの考えもってことか？」

「そうじゃな。ナツメの魂の許容よりも強い気持ちを持てば、当然その分魂へ無理を強いる」

「……ああ、なるほど、理解したよ」

つまり、倒れる直前に俺が背中を押した事で希望を持ってしまつて……。

「まてまて、妾の話は終わつたらんぞ？」

「まだあるのか？」

「当たり前じゃろう。原因がわかつてそのまま終わりと行くわけがない、まあ聞け」

「ナツメの魂は今荒れておるが、その内落ち着くを取り戻す。そうすればすぐにでも目を覚ますじゃろう」

「ほんとかつ!？」

「じゃが、問題が解決したわけじゃない。その内、また同じことが起きる確率が高い……いや、起こるだろうな」

「……目を覚まして、魂の問題を解決しない限り、続くのか」

「だろうな。だから何とかして魂を元に戻さねばならない。それが出来れば不安は取り除けるはずじゃ。じゃが、今の所その方法は思いつかん、すまん」

「いや、原因が分かっただけでも助かった。四季さんの魂を安定させれば良いんだな？」

「ああ、そうじゃな」

「分かった。少し考えてみるよ」

「こちらでも考えておく。何か分かればすぐに連絡を入れよう」

「助かる」

「わかったなら今日は寝たらどうじゃ？酷い顔じゃぞ」

「こんな状況で寝れるか……」

「それでもじゃ。せめて横になっておれ。睡眠不足は判断と思考を鈍らせる。寝て一度スッキリさせて方がいい」

「……そうだな。そうしてみるよ」

「それじゃあ、妾は帰るとしよう」

「ああ、ありがとな。夜遅くに」

「気にするな。緊急事態だったのじゃろ」

帰るのを見送り、ベットに体を倒す。

「……四季さんの魂を……」

何となく方法なら思いつく。が、それが上手く行くか保証がない。

「ミカドさん達に相談を……いや、絶対止められるな」

どうにかして出来ないかと考えている内に、自然と眠くなってくる。

「お……おきない、と……」

起きようとするが、抵抗出来ずにそのまま目を閉じてしまった。

「ようこそ、夢の世界へ」

目を開けると、見慣れた景色が広がっていた。

「……ここにきたってことは、俺は寝たのか？」

「寝た、というよりは、私が呼んだって言うのが正しいかしら？」

正面を見ると、いつもと変わらない姿で俺を見ている。

「取り敢えず、座ったら？」

進められるままに席へ座る。どうせ起きようとしても起きれるかどうかはこいつ次第である。それなら付き合う以外選択肢がない。

「急に呼んだかと思えば、何かあるのか？」

「何かあるのはそつちでしょ？大変な事が起きてるみたいだし……」

「まあな……」

「それで？彼女を助ける方法は思いついてるの？」

薄暗く照らされた場所で、静かに俺を見る。

「……あるのはある。だが、確証がない」

「死神のあの子と同じ方法を試そうと……」

「ああ、前にミカドさんの口ぶりから俺にも同じことが出来る様な事を言われた」

「……確かに2度目の世界になった時に言っていたわね」

「やり方は何となくわかる。俺の魂を四季さんへ移す。恐らく可能だと考えている」

「問題は、どれだけで足りるか……でしょ？」

「……そうだな。そこら辺は俺には分からない。明月さんがどんだけの魂を高嶺に譲渡したか……それ次第では足りないかも、しれない」

「ナツメさんの魂と、高嶺くんの魂がどれだけ違うのかにもよるけれど……人の魂を補うのだから、並大抵では無いはずね」

「多分な……俺の魂だけで足りるなら良いけど」

「それじゃ駄目ね」

「何がだ」

「あなたが消える代わりに彼女を助けても意味が無いってことよ」

「……」

「死神のあの子が魂を分けた結果、何が起きたか分からないわけじゃないでしょ？」

「……そうだな」

「あなたがそれだけあの子に思い入れがあるのは嬉しいけど、だからと言って自分を犠牲にしても喜ぶと思う？」

「………思わん」

「最悪、今より悪化するわよ？また自分のせいで誰かを……って」

「それじゃあ、別の方法を考える方が良いのか……」

「まだ分からないわ」

「……何かあるのか？」

「ええ。上手く行けば、あなたも消えずに彼女を救い出す手立てがね……。どう？乗ってみない？」

## 第64話：対峙

次の日、昨日の出来事は直ぐに皆へ連絡が回った。四季さんが抜けた事で墨染さんと火打谷さんも穴を埋めると、出ることになった。

涼音さんや高嶺には朝の時点で色々と聞かれたが、取りあえずは命に別状はないとだけ伝えておいた。

「涼音さん、先に休憩行っても良いですか？」

昼になり、先に休憩を申し出る。

「いいよ、行つといで。てか大丈夫？」

「……はい、問題ないです」

「四季さんが倒れて心配なのは分かるけど、キミまで倒れちゃダメだからね？しっかりと休んで来て」

今日はいつもより口数が少なかったからか、心配そうな表情をしていた。

「大丈夫です。確かに心配ですが……それでお店を蔑ろにするわけにはいきませんから」

「そっか」

厨房を出て、休憩室に入る。

「お見舞い、行くか」

着替えて店を出る。場所は四季さんが入院している病院だ。

中に入り、病室を教えてもらい入る。

「……」

そこには、目を覚ましていない四季さんが寝ていた。

「……まだ、大丈夫」

30分くらいは時間はあると確認して、試しに手を握る。

「……」

明月さんみたいに魂を移そうとして見るが、成功はしない。

「やっぱり、おでこくらいは必要なのかもな……」

寝ている相手に申しわけないと思いつながらも額で額に触れる。これ……。

「……………」

魂が移るように強く想う。蝶を自分の身体から出て行く感覚を思い浮かべる。

すると、お互いの身体が淡く光りはじめる。

「まずは第一段階が成功かあ……………」

すぐに身体を話して安堵する。

落ち着いて周りを見ると、俺のより前に既に誰かが来ている様な痕跡があった。恐らく、ご両親か大家さんとかかかもしれない。

そして、壁に置かれるように、四季さんが持っていたバックがあった。テストの資料用として持っていたやつだ。

「……………」この成果は、無駄にしたら駄目だな」

中身を確認し、バックを手に取る。

「それじゃあ、また来るよ」

置いていたバックを持って、店へ戻る。

「あ、澤田さんっ。どこに行っていたのですか？」

「……………ああ、ちよつと四季さんのお見舞いにな」

「ナツメさんは、まだ目を覚まされてませんでしたか？」

「ああ、まだだったよ。あと、これを持ってきた」

「これは……………」

「直前まで俺の部屋で一緒に作ってたテストの問題集だな。もう少しでテストだし、使わないとな」

「……………そうですね。折角お二人が作ったものですもんね」

「あとで、高嶺と二人にも渡しておくよ」

「分かりました。それと、澤田さん。大丈夫ですか……………」

「大丈夫とは？」

「いえ、お疲れのように見えます。ナツメさんが心配なのは私も一緒です。ですが、無理はしない様をお願いします」

「分かっている。昨日はどうしてもあまり寝れなくてな。そのせいだと思う」

「……………分かりました」

「それじゃあ、そろそろ戻るよ」

若干納得のいかない表情の明月さんがこつちを見ていたが、気にしない振りをして厨房へ戻った。

「ふー……終わった終わったあ」

「お疲れ様です」

「うん、おつかれ。達也も今日はおつかれ」

「はい、お疲れ様です」

無事に今日の仕事も終わり、片付けを始める。

「あ、そうだ。高嶺」

「はい？」

「墨染さんと火打谷さんのテストの問題だけど、休憩室に置いてるから後で受け取ってくれ」

「分かりました。後でもらいますね」

これで取り敢えずはよし。あとは……。

「火打谷さん、ちよつと良いか？」

「ん？何でしょうか？」

「後で用事があるから付き合っつて貰っても良いか？」

「良いですよ？どういった用件で？」

「んー……個人的なのと、後はテスト関連かな？」

「え、もしかしてアタシやばいですか……？」

「いや、今の感じだと大丈夫だと思う。確認しておきたいのがあっただけ」

「あ、そうなんですか。よかったあー」

「そんじや、また後で」

「了解です！」

片付けが終わり、着替えも済まして店を出る。

「場所はお店じゃなくて大丈夫なんですか？」

「店に遅くまで残るのはちよつと罪悪感がな……」

「あ、それ分かります」

「テストの問題とかもあるし、俺の部屋とかでも大丈夫か？」

「はい、良いですよーって、はッ!?もしかして……?家へ連れ込んで……!」

「安心してくれ。そんなことしたらお店に居られなくなる」

「それもそうですねっ。あと、……先輩」

「元気出して下さいね?ナツメ先輩のこと」

「ああ、ありがとな」

部屋に着き、中へ招く。

「へえー……男の人の部屋に初めて入りましたけど、綺麗なんですね」

「一応定期的に掃除して保ってるからな」

「それでそれで?アタシへの用とは?」

「そうだな先にテストの方を……って言っても本題の為の誤魔化しみたいなもんだったけど」

「あ、やっぱりそうでした?」

「という事で、本題へ入ります!」

「了解です!って、用件は一つしかないですけどねー……」

「だな。左目の事だな。ちよつと試しておきたい事があって」

「なんですななんです?」

「最近火打谷さんだけでも任せているから全体を把握できていないけど、一度瞳の蝶を回収しておこうかなって思ってたよ」

「あーなるほど、回収しないと消えちゃいますもんね」

「消えるのはもつと先だけだな。ただ、回収する際に実は問題がありました。だと、大変だろ?」

「確かにそうですね」

「だからもう一回、回収を試しておきたいんだが……大丈夫か?」

「はいっ、アタシは全然大丈夫ですよ?」

「おっけー。それじゃあ早速始めるか今回は目を開けてて見るか?」

「あ、それ良いですね。どんな光景か気になります」

「じゃあ、行くぞー」

手を広げて、火打谷さんの目に当てる。



「……すみません、真っ暗なんでやっぱり閉じますね」

「まあ、そうなるか」

目を閉じたのを確認してから、蝶を回収する。

「……今の所、違和感とか感じない？」

「はい、特には……」

「それじゃあ、このまま続けるぞ」

暫くの間、そのまま待っていると、『あ、もう終わりだな』って感覚を感じて手を離す。

「終わりですか？」

「だな。取りあえず今日はこの辺りにしておこうか」

「了解です」

「蝶はあとでミカドさんに俺から渡しておくよ」

「ふっふっふ、アタシの成果をしつかりと伝えて下さいね？」

その後、少し雑談を交わして、火打谷さんを家まで送って行った。

次の日、今日は幸いにも定休日という事もあり、家に引きこもっていた。

「……決行は夜。人が居なくなってからだな」

病室の人払いは既にお願ひしている。あとは無事に成功する事だが……。

「今日もまだか……」

「そうですねえ……ナツメさんが心配ですが……」

「目が覚めるまで待つしかない。どうするかはそれ次第だ」

「……なんだか歯がゆいですね」

「ああ、そうだな。しかし澤田達也はもつとだろうな」

「その場面に居たんですよね……」

「むしろ、いたからこそ早めの治療が受けれたのは確かだ。それにしても……」

「してもっ？」

「いや、奴にとつても想定外とは言っておったが……それにしては

妙に落ち着いてると感じてな」

「そうですねか？結構落ち込んでいましたよ？」

「それでもだ。何か策でも考えついたのか……？」

「まさか。それならすぐにでも実行しますって……」

「そうだな……」

「失礼しまーす……あ、ミカドさん、栞那さん、居たのですね！」

「愛衣さん、どうしたのですか？今日は定休日ですよ？」

「いやーお恥ずかしながら……テストの為の紙を忘れてしまっって

……あはは」

「そうでしたか」

「いやー、昨日達也先輩から貰ったのばかりに目が行ってたので

……日が暮れてから取りに来ました」

「定期テストの方は大丈夫そうですね？」

「はい！少なくとも赤点は回避して見せます！」

「もつと向上心を持って挑んだ方が良くと我輩は思うが」

「あはは、頑張ります。あ、そうだ。達也先輩からアタシの頑張り、

受け取りましたか？」

「澤田さんから？」

「あれ？休みだし明日なのかな？」

「なんのことだ？」

「いえ、昨日達也先輩の家で左目の蝶を回収してもらったんです」

「愛衣さんの蝶を……？」

「はい。取りあえず実験という事で。後でミカドさんに渡すって

言っていました、まだみたいです」

「そうだな。少なくとも我輩達は受け取っていない」

「そうなんですね。それじゃあ、明日だと思えます。アタシの頑

張った成果を見てくださいね！それじゃあ、失礼しまーす」

「ああ、わかった。気を付けて帰るといい」

「……ミカドさん、今の話、澤田さんから聞いてましたか？」

「どうやら、そつちも聞いてはいないようだな」

「はい、残念ながら……」

「愛衣の瞳については、テストが終わってからと言っていたはず……何か緊急の事でも起きたのか？」

「ですが、どうして蝶を……？」

「……奴が意味も無く回収をするとは思えん。何か理由が……っ!? まさか……？」

「何か気づきました？」

「いや、まさかだとは思うが……栞那、お前のように自分の魂を四季ナツメに与える気かもしれん……」

「ナツメさんに……!? 可能なのですか？」

「恐らくは……お前と似たような構成だ。近い事は出来てもおかしくない」

「それじゃあ、蝶々を回収した理由って……」

「十中八九、何かに使うためだろうな」

「ですが、それは……!」

「ああ、良くて今のお前みたいにギリギリを保てるが……下手すれば蝶に還るだろう」

「……今すぐにでも止めに行きましょう」

「ああ、まずは奴の部屋に行くぞ!」

「さてと、そろそろ良い時間かな？」

日が落ち、夜も深まった時間。目的の為に動き出す。

俺が身を潜めて待っている間、心配なのか青い蝶が外に出て来て俺の周囲を飛んだり、肩に止まったりと好き放題していた。

見つかったら消されるぞ……全く。

既に卯ノ花姫にも連絡済み。あとは病室で四季さんを助ければ晴れて解決になる。

「……」

こういう時、嫌な予感や予想が必ず当たるって言ったのは、どこのだいっただろうか……？

夜の裏路地を歩いていると、正面に人影が見える。

「やっぱり、そうなるのかなあ」

近づくにつれ、シルエツトがハッキリと分かってくる。

マントと人ほどの大きな鎌。見間違えるはずがない。

「澤田さん……一体どちらへ向かうつもりですか……？」

10mも無い位の距離になると正面の相手が俺にそう聞いてくる。周囲に気を配るが、不気味な程人の気配や生活の音、ましてや表通りの車の音すら聞こえない。

結界かなんかでも張ったのだろうか。

「……やっぱり、明月さんだったか……」

死神の礼装を身につけ、身長ほどの大きな鎌を構えてこちらを見る。

「まさかだとは思いますが……ナツメさんの病室でしょうか？」

「……お見舞いに行くことは普通だと思うんだが……？」

「そうですね。普通だと思います。夜遅くでなければ、ですが……」

「いやー……四季さんが心配でしょうがないんだ。居ても立っても居られなくて……！」

「では、どういった理由で、愛衣さんから蝶を回収されたのですか？」

「……本人から聞いた？」

「はい、少し前にお店に忘れ物を取りに来た時に偶然」

「そうなんだ。いや、火打谷さんに回収してもらっているけど、実は目から回収する時に不具合ありました。とかあったらダメだろ？だから早めに大丈夫か確認しておきたかっただけ。変な心配をさせてしまったのなら謝るよ」

「分かりました。では、その蝶々たちを私の方で受け取ります」

「……明日じゃダメ？」

「駄目です。本来早めに神の元へ返すべきなんです。なので、今すぐにごです」

「……そっか、それは面倒だなあ」

「渡せないご理由でも？例えば……蝶を使ってナツメさんに何かするとか」

「……はあ、当然気づくよなあ」

「つまり、やっぱり澤田さんは……!」

「多分、明月さんが考えているのが当たってるよ。明月さんがしたように、俺が四季さんに魂を分け与えて安定させる」

「澤田さんは知ってるはずですつ! それをしてどうなるか……」

「明月さんみたいにギリギリを保てるか、もしくは崩壊して蝶に帰るかの二択だろ?」

「分かっているのならどうして……!」

「それは一番明月さんが理解できるはずだ。どうしても救いたい人がいて、その方法があるのなら、迷わず選ぶと思うけど?」

「……それは……つ」

「明月さんだって、高嶺を助ける為に自分を削った。なら俺も四季さんを救いたい。その重さは違うかもしれないが心の底からそう思ってる」

「……それでしたら、私がします」

「は? 明月さんが?」

「はい」

「いやいや、冗談だろ? 次は無いつて自分が良く分かってるはずだぞ?」

「当然、理解しています。ですが、それなら澤田さんの犠牲を強いることもありません」

「待て待て! 俺が消えるみたいな言い方してるが、成功率の方がずっと高いからな! 明月さんがする必要はない!」

「……」

正面の明月さんは何も喋らずに、ただ俺を見ている。

「……本気か?」

「はい、これ以上、澤田さんに背負わせる訳にはいきません」

「待ってくれ。一度冷静になって話し合おう。お互いに少し熱が入って正常じゃない」

「私は正常です」

「……あー、これ、めちゃくちゃキレてないか?」

「澤田さんが自分を犠牲にする気が無いのでしたら、私も矛を収め  
ましよう」

「……もし仮に、この場合は大人しくなったとして、俺意外にどうやっ  
て四季さんを救う考えなんだ？」

「ですから、それは死神である私の役目です。澤田さんが背負う必  
要はありません」

「つまり……俺が退けば明月さんがその役を担うってことだな？」

「そうですね。それが普通です」

「……それなら、絶対に譲る訳にはいかなかったな」

「……っ!?!どうしてですか!」

「残念だけど、明月さんがその役目を果たすのは今じゃない。もっ  
と後だ」

「どういう意味ですか……?」

「……すまんが、それを今話すことは出来ないんだ」

「……あなたはっ、いつもいつもそうやって、全部を自分一人で背負  
おうとして……!」

俺の言葉に声を荒げ、鎌を構える。

「それなら、私もあなたを止めます」

言葉の選択をミスったな……というか、なんでこうなったんだ。も  
う少しマシなやり方があったはずなのに……。

「どうしても、譲ってくれないのか……?」

多分、自分でも分からないくらいに焦っていたんだろ。そのせいで  
こんな結果を……。

「そのままそっくりお返ししますよ」

「……それじゃあ、仕方ないな」

「……で引くわけにはいかない。」

「ごめんだけど、明月さんには退場してもらおう」

「……明月さんには退場してもらおう」

そう私に告げた澤田さんの雰囲気、ガラリと変わる。

彼の肩には蝶が止まっている。つまり、蝶を引き寄せてしまう程に精神が沈んでしまってる証拠。これ以上この人に重荷を背負わず訳にはいかない……！

どうしましょうか……、澤田さんを抑えるにはこの鎌で少しだけ切るのが一番早いのですが、そのせいで魂にどの様な影響を及ぼすか……大丈夫だとは思いますが……。

「やるしか、無いですね……」

鎌を再び構え、正面に立っている澤田さんを見る。

歩きながら私に近づいてくる。そのまま来れば鎌の範囲内に入る。

「……おっと、ここだな」

後一步、そう思っていると、寸前でその動きを止める。

「ここまでが、明月さんの鎌の射程圏内だな」

「……お見事です。ですが……っ！」

あと一步程度ならこちらから踏み込めば届く。

そう思つて足を出そうとした瞬間、彼の身体から無数の蝶が飛び出す。

「はあっ!?!」

驚きながらも全ての蝶を切る。

「相変わらず意味不明な速度だな!」

彼が手を前に出すと、先ほどより大量の蝶が飛び出す。

「つく……!」

咄嗟に斬るが、一振りでは全てを回収しきれず避ける。

「二振りには限界があるみたいだな……!」

すると、先ほどとは比べ物にならない数の蝶が彼の身体から飛び出す。

「待つてください!澤田さん!何をしてるんですか!」

「そりゃ、明月さんを止めるためだよ!」

「だからと言って、こんな大量の蝶を……!」

おかしい。明らかに異常だ。人にこんな大量の蝶たちが居て正気

を保てるわけがない。

「死にたいのですか！あなたは……！」

「四季さんを助けられるなら本望だな！フハハハハッ！」

「なんですか！その悪役みたいな笑い方は……！」

全力で鎌を振り続けるが、どうやっても処理できる量を越えていた。

「流星の明月さんも、この量は無理みたいだな！」

「と、止めて下さい！これ以上は……！」

幸い、結界のおかげで蝶が外に出て行くところは無いが……いや、それを見越して彼はこの手段を？

「そろそろ終わりにしよう」

そう言うと、先ほどの倍近い蝶が彼の身体から飛び出し、渦を描くように飛び回る。

「……ッ！視界が……！」

もはや、多すぎて前が見えない程の蝶が高速で周囲を舞っている。前に鎌を振るうが、焼け石に水である。

「はい、チェックメイト」

背後から声が聞こえたかと思うと、私の首元に冷たい何かが触れる。

「さ、澤田さん……っ!？」

「これで、明月さんの負けだ」



## 第65話：目覚め

蝶の大群で視界を封じて、何とか明月さんの背後を取って首元へボールペンを押し付ける。

「さて、負けを認めてもらおうと助かるのだが……？」

「わ、わかりました……」

前へ構えている鎌を消して、手を上げる。

「ふう……助かる」

取りあえず、大急ぎで周囲を飛んでいる蝶を集めて回収する。

「つと、これで全部だな」

いやあ……何とかなった。割と負けてもおかしくなかったけど。

こっちは鎌の一撃もらうだけで即アウトだし、明月さんの鎌の振る速度は見えないしで……。

「あ、あの、澤田さん……」

「まて、待ってくれ。その前に、俺の話聞いてほしい」

「は、はいっ」

「四季さんを助ける手段はある。それも俺を犠牲にしない方法だ」

「……ほんとですか？」

「ああ」

「とか言つて、嘘を付いて私たちを欺こうとか……」

「考えてない。ちゃんと理由も話す」

「……分かりました。聞きましょう」

「明月さんとミカドさんの見立てでは、四季さんを救うためには俺の魂だけでは不十分な可能性が高いって認識でオーケー？」

「そうですね。恐らくは……澤田さんの魂ではナツメさんの魂を補えるだけの力は無いと思います」

なるほど、やっぱりそれなりに必要なのか。

「なるほどなるほど。つまりは、俺一人分の魂だけでは無くて、もう少し追加があれば何とかなるってことだよな？」

「え、ええ……理論上は……そうですが」

「あ、俺と明月さんの二人つて訳では無い。実は協力者が居るんだ」

「協力者ですか？」

「そうだ。待ってよ……ほい」

手を広げ、いつもの蝶を出す。

「鎌で切らないでくれよ。ちゃんと意思を持つてるから」

「え、ええ？その蝶がですか……？」

「ああ、つと、勝手に飛ぶな」

その証拠を見せようと、俺の周りをぐるぐる飛び回る。

「あー、もういいから戻ってくれ」

俺の肩に乗った蝶が溶けるように消える。

「と、まあ、こんな感じだ」

「いえ……そう言われましても……私には、澤田さんが一人で動かしている様にな……」

「待って、それだと俺が超絶痛い奴にしか見えないだろうっ!？」

「はい。ですから、そう仰っています」

「うわー、これは中々傷付くわあ」

「そいつの言っている事は本当だ」

後ろからの声に振り返ると、閣下モードのミカドさんが立っていた。

「お、最後まで出てこなかったな」

「周囲の警戒で手が空かなかったからな」

「ミカドさん、本当なのですか？」

「ああ、先ほどの蝶には人としての記憶、魂を持つてる存在だ。最も、そこまでの力は無いがな」

「やっぱりミカドさんには分かるのか」

墨染さんのルートで赤い蝶を見抜いていたから可能だとは思っていたけどな。

「とまあ、ミカドさんのお墨付きを頂きましたと、これで信じてもらえるだろう？」

「ええ、一応は……」

「俺一人では無くて、さっきの蝶の魂も使う。それでなら消費も減るし問題無いはずだ」

「……ですが」

「因みに、ミカドさんの意見は？」

「当然、我輩も反対だ。貴様の負担が大きすぎる。下手すればそのまま消えることになりかねん」

「うーん、やっぱり二人とも反対か。まあ当然と言えば当然か」

「当たり前じゃないですか」

「でも、上の神様には既に了承を得てるんだよね」

「は……？ 貴様もしかして、あの土地神様につ!？」

「あー違う違う。もっと上。その土地神様の直属の上司にだ」

「何を言っているのだ……？ お前は……」

「この地に降りている卯花之佐久夜姫より更に上の神。そのお方からGOサインが出てるわけ」

「本気で言っているのか？ そもそも、人が神と話せるなど……」

「いや、既にいるだろ？ 今は病室で待機してもらってるけど。流星にもっと上の神だと易々と此処に降りて来ることが出来ないから依代とか使つての会話がやっとだけだな」

「……なぜそこまで詳しいのだ」

「既に知ってるからな。可能だつてことは」

「……わかった。本当かどうかは直接聞いて確かめることにする」

「ミカドさん……!？」

「上から許可が下りているのならっ！ 我々にはどの道止める事など出来ん」

「まあまあ、取りあえず病院へ行ってから話そう」

「事実じゃ」

病室で待っていた卯ノ花からそう告げられる。

「こやつは生意気なことに、妾を通して上とアポを取って、直接話を

付けておる」

「そ、そうですか……」

「依代としては妾の付き人のルリを使ってな。全く、どこでそんな事まで知ったのか……」

めんどそうに扇子で肩を叩きながらため息を吐く。

「し、しかし……何があればその様なことに……!」

「さあなそれに関して直接やり取りをしたこやつに聞くがいい。妾はその場から離れておったからの」

その言葉を聞いて、ミカドさんと明月さんが一斉に俺を見る。

「あ……それは企業秘密という事で何とかお願いします」

あのチャライ神と会話まで持つて行ったのは良いが、何を対価にすれば良いか分からず、向こうに決めて貰った。無論俺の頭の中は完全に読まれた。まあそこはいい。仮にも神だ、それに対してあれこれ言わずに楽しそうに笑っていたからな。

対価は……俺の記憶を読むのとか他にも言われたが、些細なことだ。

「あの神がタダで許可するわけが無いからの、色々嫌がらせな事を言われたに違いない」

「どうだろうな。確かに色々死ねたけど……」

「……っ!?!」

すまん、明月さん。そんな驚いた顔でこっちを……ああいや、だからと言って悲しそうな表情で見なくても……!」

まあ、今回のネットクは二人が止めてくることだったからな。流石に上位存在の許可を無視してどうこうすることは出来まい!

「それじゃあ、早速始めるとしよう」

「ああ、そうだな」

「この場は妾が見るゆえ、二人は外で待つてるがいい」

「……分かりました」

「……はい」

出て行く際の寂しそうな目をした明月さんに罪悪感を感じるが……すまん、説教は後で幾らでも聞くから。

「では、始めるがいい。なに、引き際はこちらで見定める、お主は助  
けたいと強く想っているだけでよい。それにこの空間なら多少は妾  
の力が働いておる、滅多な事は起きん」

「分かった。滅茶苦茶心強いよ」

四季さんの横に立ち、自分の額を付ける。

前と同じ要領で……、それを徐々に送り付けて行く感覚を……。

「成功しているようじゃな。この調子で続けよ」

問題ないとの言葉を聞いて、少しずつ強めて行く。

どうか目を覚ましてほしい。四季ナツメの輝かしい未来を俺に見  
せてほしい……！お店で皆と笑いながら過ごす日々をつ！

「……む、少々力が強すぎな気が……」

こんな場所で終わらせてたまるか。この人には、もつと素晴らしい  
人生を歩んで貰わなければいけない！俺がその希望を信じた様に、こ  
の先もそれを見せてくれ！

「まてまて、少しは力を抑えろつ。自滅する気か！」

肩を掴まれ、後ろに引き戻される。

「うおっ!?!つてもう充分なのか?」

「充分すぎる位になっ!全く、勢い余って全部送り込む気か……」

「あ……いや、目を覚まして欲しいってただ必死なだけで……」

「……周囲の力も吸い込もうとしておるし、やりたい放題じゃな」

「周囲の……?」

「気にせんでいい。こちらの話じゃ。どれ、様子を見てみよう」  
確認するように、俺と四季さんを交互に見る。

「うーむ、少々送り過ぎな気もするが……まあ大丈夫じゃろ」

「っ!?それじゃあ、四季さんは……!」

「その内目を覚ます。安心せい」

「マジか……良かったあ……」

安堵するようにその場に座り込む。

「安心したか?」

「そりゃあな……」

「好きなおなごの為に暗躍するお主は見てて楽しかったぞ?」

「暗躍って……しかもその対象に自分も入ってるけど、それについてはいいか？」

「神すらも利用するその度胸に免じて許してやろう」

「それは、なんとも……こ、うえいな……こと、……を」

安心したせいか急激な睡魔に襲われる。しかも、それに抗うことなくそのまま意識を手放してしまった。

「ふふ、今だけでも休むと良い」

意識を手放す直前、優しそうに呟く言葉が聞こえた。

「……眠りに落ちたか、無理もない。さて、ミカド達にも知らせないとな」

地面に座り、壁にもたれ掛かりながら寝ている達也を置いて、廊下へ出る。

「……っ！終わったのですか!?!」

「今しがた、問題無く終わったぞ」

「……っ、良かったあ……ありがとうございます!」

「よい、妾は頼まれただけじゃ。気にするな。それより奥で寝ている阿保をどうにかしてくれんか？」

「奥……?っって、澤田さんっ!?!」

「慌てんでも良い。力を使って疲れて寝てるだけじゃ」

「ああつ、すみません……と、取りあえず、床はよろしくないので……」

達也の介抱は任せてよさそうじゃの。……さて。

「ミカド」

「はい」

「これにて、この一件は終わりじゃ。色々と文句や言いたい事はあるかもしれないが……」

「いえ、助力していただきありがとうございます」

「そこまで大したことはしとらん。精々場の安定を保たせたくらいしかしておらん。大半はあの男が行ったこと……それだけじゃ」

「……そう仰られるのであれば」

「……これからも、あやつを見るように頼む。無論こちらも協力はしよう」

「はっ、お任せください」

……異なる世界から来た人間ならざる存在。ミカドやその店だけでは無く、妻やルリのこと……そして千歳家の事も随分と詳しい所まで知っている様に見える。

今回はそれを使って、ルリを依代にあの上司まで降ろして……一体どんな取引があったやら。

「まあ、退屈はしなさそうじゃの」

「……くん、……さ……だく……」

……ん？誰かの声がある。

「さわ……くん、澤田君っ」

「ん、うん……？」

名前を呼ばれたと思ひ意識を覚まして顔を上げる。

「……あ、やっと、起きた」

「………、四季さん？」

「そう。おはよ、良い夢見れた？」

「現在進行形で良い夢というか……いや、夢じゃないんだが、夢の様な感じというか……起きたんだな」

「うん、少し前にね。澤田君が座って寝てるからビックリした」

「ああ、いや、これは……ていうか！起きたんだな!？」

「だからさつきも言った」

「そっか……そうだったのかあ……いや、喜んでる場合じゃないな」  
四季さんが無事起きたことに今すぐにでも喜びたいけど……。

「まずはナースコールで呼ばないとな……てか、あれ？皆は？」  
「皆って？ワタシが起きた時には澤田君しか居なかったけど？」

「え、ええ……？」

スマホを取り出すと、メッセージが入っていた。

『妾の扇子を貸しておいてやる。これなら人目に付くことはない』

「扇子……？」

足元を見ると、そこにはおいて行つたであろう扇子が置いてあつた。

「澤田君？どうしたの？」

「ああ、いやちよつとな……」

冷静になつてみれば明け方に病室にいる……これはやばい。

「正直、四季さんが起きた事を今すぐにも喜んで泣きたいくらいだけど……！急いでこの場を立ち去らないといけない……！」

「え？……あ、そつか。居るのおかしいもんね」

「ああ。本気で残念だけど、一旦出直すよ……」

「分かった……あ、お店は？どうなってるの？」

「大丈夫、四季さんが居ない間はしつかりとこなしている。テストだつて、頑張つて作ったのをちゃんと渡しているからな」

「そうなんだ、良かったあ……というか、どのくらい経ってるの？」

「2日とかその位だな」

「そんなに……っ」

「ああ、マジで心配した。目の前で倒れた時は気が気じゃなかったよ……つて、これはまたでな？」

「あ、うん。また……」

ナースコールを押して、急いで病院から出て行く。

「良かった……本当によかったあ」

喜びをかみしめながら、扇子を貸してくれたお礼を送っておく。

『こんな明け方に送ってくるでない！後で回収するから持つておれ』とお怒りの返信が来た。……そうだな。今、朝の5時過ぎだしな。

その後は、お店へ戻りミカドさんと明月さんにも伝えた。お二人はそれを聞いて安堵と喜び、一安心……とは行かなかった。

明月さんからのありがたいお怒りの言葉……それが終わると次はミカドさんからの。それが終わったかと思うと次は更に明月さんか



らの愚痴をすつごく言われた。一通り落ち着いてから、俺が持っている蝶を回収して、神の元へ還しに行つた。

「言いたい事はまだあるが……今日も仕事がある。一旦帰ってくるが良い」

時間を見ると、涼音さんと高嶺が来るまで残り40分ほどだった。お説教が超長かった……。

家へ帰り、シャワーを浴びて支度を整え、もう一度お店へ向かった。朝の準備の二人にも同じ様に伝え、そのままお店のグループにメッセージを送つた。皆同じように安堵し喜んでくれた。

「そろそろお昼だね。休憩、先に行つて来て良いよ」

「良いですか？涼音さんから先でも大丈夫ですよ？」

「いいよ、それより早くお見舞いに行つてあげて。我慢してるのバレバレだから」

「……すみません、表に出したつもりは無かったです」

「そこまでじゃないよ。でも、いつもより落ち着きがない様に見えるからね。それなら早く行つて安心させた方が良いでしょう？」

「……ありがとうございますっ！」

「いいよいいよ、行つておいで」

「すみません、時間内には戻りますので！」

涼音さんの許可を得たので急いで準備して病院に向かう。

「はあ、はあ……、ふう……」

病室まで急ぎ、息を整えて中へ入る。

「……あ、澤田君……」

「約束通り、お見舞いに参上しました」

「ごめんね、わざわざお昼に抜け出してまで……」

「好きで来てるだけだから気にしないでくれ」

「……うん」

「それで、あれからどんな感じ？」

「あー……深山先生が来て、色々診察？してた。聞いた感じだと問題は無いって、一週間くらいは様子見る事にはなりそうだけど……」

「そうか……そうなら良かった」

「だから、その間お店とか色々……」

「大丈夫、四季さんがいない間ぐらいこつちで何とかしておくから。しつかり体を休めてくれ」

「……うん、ありがとう」

「……あー、それで、一つ聞きたいんだが良いか？」

「ん？なに？」

「ほんとに身体の調子とか大丈夫か？なんかいつもより違和感があるとか、前と違う点っていうのかな……？」

「身体……？特にそう感じるのは……ないんじゃないかな。つてよく分からないけどね」

「そうか、なら良かった」

魂の譲渡での後遺症とかは無さそうだな。

「何かあるの？」

「いや、念のためだ。特に無さそうなら大丈夫」

「そういえば、テストの方は平気そう？」

「ああ、そっちは高嶺にお願いしてるよ。と言つてもあとは本番形式で解いて採点を繰り返し返すだけだけだな」

「そっか、それなら大丈夫そうかな」

「他に気になる事とかあるか？」

「……うーん、ワタシが倒れてた2日間って何かあった？」

「……これと言って、皆が心配してたとか？」

「澤田君は？」

「そりや当然心配したぞ？」

「それは嬉しいけど、聞きたいのは何してたかってこと」

「……俺か？」

「うん」

「お見舞いとか、お店で働いたりとか、あとは四季さんの魂をミカドさんに見てもらったりとか？」

「ワタシの？」

「倒れたのが魂関連じゃないかって気になってな。まあ、あまりあてにならなかったけどな」

「ふーん、そうなんだ……」

「四季さんはその2日間は？」

「寝ていたに決まってるでしょ、なにそれ嫌味？」

「小粋なジョークだよ」

それなりに元気は戻って来てるし、問題は無さそうかな？

それから、時間になるまでお喋りを続け、お店へ戻った。

「……………」

澤田君が病室を出て、一人になる。

「……………」

彼が居なくなったことに寂しく思うのと、何故か突然恥ずかしくなり顔が赤くなる。

「……………おかしい」

それもこれも、きつと寝ている時に見た夢のせいだ。そうに決まってる。

「……………ワタシを助ける為に……………あんなに」

不思議な夢を見た。

最初は目が覚める前に聞いた声だった。深い暗闇から誰かが必死に呼んでいる様な声だった。次に見たのが……………さ、澤田君がワタシを助ける為に必死に奔走している夢。

「……………おかしな夢」

明月さんと対峙している光景や、誰かと取引？みたいなのをしている夢。そして、病室でワタシを……………。

「……………ッ!？」

自然と手がおでこに触れる。

「ま、まさか、ね……………」

夢だとすればワタシはとんでもない夢を見ていたってことになる。

「さ、澤田君が……………」

まるで彼の気持ちが流れ込んで来るみたいだった。倒れる前のあ

の場所で言われた時よりももっと強烈な感情が……。

「ツ!?……はあ」

お、落ち着こう。あれは夢だ。そうに決まってる。いや、そうだとしても自意識過剰ってレベルじゃないっ!

「……でも」

不思議と嫌じゃない。むしろ、温かくて、心に染み渡るような心地良さまであった。

「……どうしたんだろ、ワタシ」

次にどんな顔して会えばいいのだろうか……。

「……はあ、水飲も」

熱くなった体を冷まそうと、飲み物を手に取った。

## 第66話：美味なる物

それから一週間後に、無事に四季さんは退院することが出来た。退院後にお店に来たが、今日は客として純粹にケーキや紅茶を楽しんでいた。

その様子を見て皆も安心した表情で仕事に取り組んだ。

「お疲れ様」

「そちらもお疲れ。改めて退院おめでとう、元気な姿が見れて安心出来たよ」

「うん、ありがとう。それで、今から行く?」

「勿論、退院祝いで美味しい物でも食べに行こうぜ」

「場所は、駅で良いの?」

「ああ、駅内に鰻があるらしいからな。折角だし高いもんでも食べよう」

「ウナギかく、食べた事なかったなあ」

「白焼きとかもあるけど、濃い物食べたいだろ?」

「ん、味のあるものを求める」

「なら好都合だな」

店を出て駅へ向かう。フードエリア内を歩きながら目的地へ向かう。

「……道中のラーメンの匂いも中々だな」

「わかる。でもウナギには勝てない」

「その内ラーメンとかも食べに来るのもありだな」

「場所は……地下にあるみたいね」

「匂いが籠ってそうだなあ……」

歩いていると、目的の店を見つける。

「待ち時間は……20分そこらか」

「それじゃあ並んで待つとしますか」

普段食べない鰻を食べ終え、食後に……というわけではないが、四季さんの誘いで3度目のバーへやって来た。

「はあく……食べた食べたあ……」

「満足していただけかな？」

「そりやもう、超満足した。……でも良かったの？ワタシの分も出して貰って」

「当然。今日は退院祝いだし、誘ったのは俺だしな」

「ありがと。それならここの会計はワタシが出そうかな？」

「自分が誘ったからか？」

「そう。と言つてもそつちとは金額が違うけどね……」

「こういうのは気持ちが大切なんだよ。それに……金額が届かないとはまだ分からないだろ……？」

「どんだけ飲むつもり？」

「そりや浴びる程にだな！今日はめでたい日だし！」

「ワタシの次はそつちが救急車で運ばれそうね……」

「急性アルコール中毒とか笑えないな」

「ほんとにね」

「……今日、退院してどうだった？」

「どうって？」

「昔と違って嬉しかったか？」

「……そうね、皆が笑って、”おかえり”って言ってくれたのは……思った以上に嬉しかったかも」

「なら良かった」

「ていうか、さも当然みたいに人の過去を話さないでくれますか？」

「すまん、デリカシー無かったな」

「まあ、良いんだけどね。今更だし」

呆れるように笑いながら、手に持つてる飲み物を飲む。

「……無論、ノンアルコール、だよな？」

「大丈夫。ちゃんと今日は飲んでないから」

「そうか、なら良いけど」

「そつちは飲んでるの？」

「ああ、今日の酒は人生で一番美味しい気分だ」  
「ワタシが退院したから？」

「ご名答。これならいくらでも飲めそうだなっ」  
「吐いても介護しないからね」

「その時は道端にでも放置して帰ってくれ」

「流星にそこまではしないけど……」

「……もしかして、俺、お持ち帰りされるのかっ!？」

「立場が逆。するわけ無いでしょ」

「残念だ……」

「そこで残念そうにするのはどうなの……?」

「明日からは大丈夫そうか? 大学とか店とかは」

「多分ね。大学の方は誰からかノート借りてなんとかする。お店の方も出るつもり」

「了解」

それなら問題無さそうだな。

「ねえ、澤田君……」

「どうした？」

「……助けてくれて、ありがとね？」

「……俺がしたのは精々、最初に救急車を呼べたことくらいだな」

「……わかった。そういうことにしといてあげる」

「もしかして、アルコールでも入ってるのか？」

「入ってるわけ無いでしょ」

もしかして、明月さんとかから聞いていたりするのかわかるけど、あまり話さないで欲しいって口止めはしておいたのだが……。

その後は、少し飲んでから店を出て、四季さんを家まで送った。

「……これで、ようやく戻ってきたのかな」

明日からはいつもの日常に戻れることに安心しながら、帰路に着く。

「……あ」

部屋の前に着くと、そこには耳と尻尾を生やした少女が立っていた。

「……忘れていたな？」

「……………」

「ルリへの報酬を……」

そうだった。前に依代として体を貸してもらった際に報酬が……。

「……もしかして、待っててくれたのか？」

「姫様と、一旦帰っていた」

「あ、あく……なるほどあ、それでこの1週間は来なかったのかあ……」

「貴様は、このことは今日まで忘れていたな？」

こちらを向き、威嚇の体勢を取る。

「……す、すまん……。色々優先順位があつて……さ」

「……そうか」

姿勢を低く下げ、こちらを睨む。

「なら、次は忘れないようにしないと」

あ、これ、テレビとかで見たことがある。得物を仕留めにかかるときの姿勢だ……。

そんな呑気なことを考えながら現実逃避した。

そしてその夜、マンションに男の悲鳴が木霊した。

「いらっしやいませ。二名様ですか？こちらの席へどうぞ」

あれから数日経ったが、四季さんの容体は安定している。ミカドさんにも確認してもらったが、問題無いとのこと。

店で楽しそうに働いている姿を見て自分の作業に戻る。

共通ルートのテスト期間も終わり、この辺りから個別へ入る。高嶺が明月さんとの交流を深める最初の一步は、スマホの購入である。

「そういうえば君達2人は、今年のクリスマスシーズンは平気？」

「俺は平気ですよ」

「こっちも特に予定は……。元々お店の為に空けるつもりですし」

「2人揃って、何ともまあ寂しい返事を」

「涼音さんもバリバリに働く予定ですよね」



「そりゃね。一応直前の23日はお店も定休日だけどき。24日と25日は地獄確定だね」

「それなら尚の事入らないといけませんね」

「彼女とかいるならどちらか片方くらいは休みが欲しいかなって思ってたけど、杞憂みたいだね」

「高嶺は、誰か誘おうとか考えてないのか？」

「俺ですか？」

「ほら、気になる子とか。お店にさ」

「だね。彼女はいなくても気になる子とかはいたりするんじゃない？勇気出して誘ってみたら？」

「いや、けど……なあ」

「クリスマスみたい在世の中浮ついた感じになると、女の子でも独り身が応えるからね。意外とOKされることもあるもんだ」

「それって都市伝説みたいなもんじゃないですか？」

「都市伝説って……」

この調子だと、やっぱり確定とかは無さそうだな……。ここは一肌脱ぐようではないか。

その日の営業を終え、片付けとなった時に高嶺を呼ぶ。

「なあ、高嶺さんよ……さっき涼音さんとも話していたけど、本気で気になる子とかいないのか？」

「どうしたんですか？急に……」

周囲に聞こえない様に小声で話す。

「いや、お店のことで忘れてるかもしれないけど、キミの目的だよ」「目的……あつ」

「思い出したか。どうしてこのお店で働くことになったのかを」

「そうでした。すっかり忘れてました」

「だと思った。最初に交わしたように、もし気になる子が居たら相談に乗るし幾らでも協力する。だからいつでも相談待ってる」

「ありがとうございます。頑張ってみます」

「了解」

高嶺を解放し、今度は明月さんへ声をかける。

「明月さんや明月さんや」

「どうされたのですか？おじいちゃんみたいな声を出して……」

「ちよっとお話をね」

「なんでしよう」

「四季さんの件が終わって落ち着いたから、そろそろ高嶺の方に集中しようかなって思ってたさ」

「何か進展が……？」

「直ぐにって訳でもない。けど、本人がそれをさっきまで忘れていたんだよなあ……」

「それは……なんともまあ……」

「だから、明月さんから一言言っただけ。あとは悩みとかあるかとかついでに聞きたいって欲しい」

「私が、ですか？」

「そりゃあな、担当だし、明月さんになら高嶺も打ち明けやすいだろう？」

「……そうですね、分かりました。この後聞いてみます」

「それと、明月さんそろそろスマホとかの連絡手段を持った方がいいぞ」

「……あゝ……やっぱりそうですか？」

「この前、直接連絡出来なくて不憫に思ったし、持った方がいいって俺からのアドバイス。尻込みするのは分かるけどさ」

「私も持った方がよろしいのでしょうか……？」

「ああ、一緒に行って教えたい所だが……すまん、色々動かないといけないのがあってさ。他の人をお願いしてほしい」

「分かりました。私の方は気にしないで下さい」

「この後、高嶺と相談するんだし、そっちも言ってみたらどうだ？スマホを買いたいって」

「……そうですね、私ではさっぱりですし一度聞いてみます」

「明日定休日だしな」

「そうですね」

よし、これでフラグは立った……と思いたい。

満足気に片付けを終わらせ、帰りの支度をしていると、四季さんに声をかけられる。

「澤田君、この後暇？」

「暇だけどー？」

「ちよつと、一緒に帰らない？」

「……了解、丁度俺も四季さんに用があつた所だ」

「そう？なら良かった」

店を出て歩き始める。

「それで、俺へ何か用だった？」

「別に大した用事じゃないんだけど……高嶺君と明月さんとひそひそと話していたから何話していたのかなって」

「なるほどね。丁度俺もその話をしようとしてたところ」

「そうなんだ。長くなりそう？どつか寄る？」

「そうだなあ、俺の部屋で話すか。あまり他の耳に入れたくないし」

「了解。それじゃ行く」

……なんだか若干上機嫌に見えるが、気のせいだろうか？声が1トーン上に思える。

何か良い事でもあつたのだろうと考えながら、自分の部屋に上がる。

「お、お邪魔します……」

「どうぞどうぞ、いつも通り何もない場所だけだな」

暖房を入れ、冷蔵庫から飲み物を入れてテーブルに座る。

「ほい、お茶だけど」

「ありがとう」

「さてと、最初に四季さんが気になつてる部分から解説していこうか」

「うん、お願いします」

「前にも話しているけど、二人をくつつけようと考えている。それで、今回高嶺には明月さんのスマホを買って貰おうかと思って、話してたんだ」

「へえー、遂に明月さんも文明人に……」

「黒電話時代の人だしなあ……ってそれは置いて。明月さんは明日定休日だし早速行ってみたら？とは言ってる。ついでに高嶺が本懐を今日の今日まで忘れていたからその相談にも乗っておいとてくれってな」

「なるほど、その流れでスマホを買いに行こうって話に……」

「その通り。これがさっきの詳細」

「凄い策士……って褒めたい所だけど、澤田君なら当たり前か……」  
「褒めてくれても……良いんだぜ？」

「はいはい、えらいえらい」

ククク、想定通りの言葉だな。むしろ普通に褒められるよりそっちの方が俺にはご褒美だぜ？

「と、言う事でこれで晴れて明月さんも文明人となりました。拍手！ってお話」

「これがワタシの方で、そっちの方は？」

「……割と真面目な話になるから他の人には秘密でな？」

「うん、任せて」

「近いうちに、四季さんや高嶺が通ってる大学で、蝶が集まってる人と高嶺が会うことになる。涼音さんの弟さん経由でな」

「蝶を……」

「確か名前は野中君だったはず。内容は……好きな人がいるけど、自分に自信が持てなくて意気消沈的な悩みだったかな？」

「そんなことでも蝶って集まってくるんだ……」

「いや、これがな、恋とか痴情のもつれが結構蝶を集める要因になりかねないんだよなあ」

「そうなの？」

「ああ、そう言ったことで人を刺したりとかのニュースってよく見るだろ？甘く見ない方がいいな」

「確かに……」

「可能なら、四季さんには大学での事を頼みたい。流石に俺が乗り込むわけにはいかないからな……」

「わかった。何をしたらいいの？」

「まずは大学で蝶が飛んでないか、軽くでいいから気に掛けて置いてほしい。それと、高嶺に野中君のことで相談があったら可能なら同席してほしいかな?」

「ワタシが……?」

「行けるか分からないけどな。男同士の会話だし、女子が居ると話しづらいかもしれないけど、女の立場からもアドバイスが出来るかもって話せばワンチャン……?」

「出来るか分からないけど……努力してみる」

「最悪、後で高嶺から詳細を聞ければ良いだけだし、あまり深追いはしなくても平気」

「うん、了解」

「その事件が無事解決出来たら……続きはその時にでもまた話そうか」

「その……野中君?が相談するのって何時とかは分かったりする?」

「あ……確か高嶺と同じ講義を受けてる日で……室内に蝶が入り込んで……居たはず。多分だけど」

「それなら大分絞り込めそうかな……週一だし」

「俺からの話は以上です。何か質問などはありますか?」

「ん……今の所は大丈夫かな。気になったら後でまた聞くことにする」

「おっけ、そんじやこの話は終わり!」

それから四季さんと何気ない話で盛り上がったが、時間が遅くなりそうだったので、家まで送って帰路についた。

次の日の定休日、俺は先日ネットで購入した高級品を持ってお店まで来ていた。

「さて……ミカドさんいるか?居る閣下?」

ミカドさん呼びながら暗い店内を歩き、休憩室へ入る。

「……居ないか」

外に出て、奥の間借りしてる階段下へ向かう。

「閣下ー？閣下ー？この中にケット・シー界の公爵様はおられませんかー？」

すると、上から降りてくる音が聞こえてきた。

「なんだ、貴様か、珍しいな。こんな時間に……我輩に用か？」

「その通り。色々手土産もあるぞ」

「手土産……？」

休憩室へ戻り、お互いに席に座る。

「それで、何用だ？」

「その前に、はいこれ」

手に持っていた紙袋の中身を出す。

「……これは？」

「閣下へ俺からのプレゼント。日頃お世話になってるからな、そのお礼」

机の上に中身を並べる。

「好みとかよく分からないから色々買ってみた。これが、結構お高い猫缶、こつちがチュール、あとこれが少しお高いカリカリだな」

「これを、我輩に……？」

「ああ、口に合うと嬉しいけどな」

「……おお……！」

目を見開き、嬉しそうに口元が緩んでいる。

「早速どれか食べてみるか？合うかどうか分からないし……」

「そ、そうだなっ、我輩の口に合うか確認は重要だな！」

「そんじゃ、まずはこの猫缶から……」

4つあるうちの1つを開ける。確か4つで3500円位したやつだ。これらの中で一番値が張った。

「ほい、どうぞ」

「うむ、感謝する……」

恐る恐る、開けた猫缶を口にする。

「……ッ!?な、なんだこの旨さは……!!マグロだけではなく違う種

類の魚が……！」

「あーなんか鯛とかも入ってた気がする」

「それだけではない。他にもさきみやカツオだろう……4種類の魚類が絶妙なバランスで作られている……どれかが喧嘩している訳でも無くそれでもってそれぞれの味を出し、調和している……いや、更  
に上へステージを上げている」

「つまり、美味いってことだな」

「ああ！我輩が気に入るほどだ！」

「なら良かった」

急に食レポを言い出すくらいだ。相当気に入ってくれたのだろう。  
……マントとかが破れたりはしなさそうだけど。

「……ふむ、至福の一時であった……感謝する」

「残り三缶あるから、好きな時に食べてくれ……お次は……チュールでも行つとく？」

「チュール？その棒状食べ物か？」

「ああ、ペースト状の食いもんだが……一説によれば、あまりの旨さに理性が飛ぶらしい」

「そ、そこまでか……っ!？」

「この道の話によれば、猫界の薬物とも言われる位に食べた者を虜にするそうだ……」

「な……なんと、その様な危険な食べ物があるのなら、公爵として認せねばならないな……！」

「その通り。秩序を守る立場として見過ごせないよなあ？」

先端の封を切つて差し出す。

「では……ご賞味あれ」

「……いただくこう」

口を近づけ、一口、チュールを食べる。

「ツ!……っ!……!!」

驚いたのも一瞬、喰らい付くようにチュールを食べ始める。

「ーッ!なんだっ!……このっ!やみつきになるよう……ッ!  
食べ物、は！」

そのまま狂ったようにチュールを食べ切る。……ほんとにそんな  
るんだな。

「……はあ、はあ……なんて危険な食料なんだ……」

「どう？ 飛んだ？」

「公爵である我輩でなければ危うかつただろう……今すぐにも全  
てのチュールを規制して回収すべきだ……！」

割と理性無かったと思うが……それに、それって独占なのでは？

「全く、人間とは時折危険な物を生み出すとは聞いていたが……な  
んて業の深い物を……」

「……ああそうだな」

それからしばらくの間、ミカドさんの精神を落ち着かせて再び開始  
した。

「残りはカリカリだけど、どうする？」

「いやっ、もう一杯一杯だ。それは後ほど味わおう」

「了解、そんじやこれらは渡しておく……明月さんには内緒でな？」

「分かっておる。これは個人で楽しむでしょう」

「缶詰を開けて欲しい時は呼んでくれ」

「恩に着る」

そそくさと袋を受け取り、横に置く。

「さて、我輩への土産も貰ったことだし、本題へ入ろう。用件はなん  
だ。わざわざ個別で来たのだ、大事な話なのだろう？」

「流石ミカドさん、察しが良い」

「葉那から貴様が忙しくなるって聞いてすぐにこれだ。嫌でも察す  
る」

「それもそうか」

「それで、葉那にも話せないことか？」

「……そうだな、明月さんだけには話せないことだ」

「聞こう」

「先に言っておくけど、今から話す内容は四季さんにも協力しても  
らうことにもなってる」

「最近二人で帰ることが多かったのはそれでか」



「そんな感じ。んでだ、ミカドさんと明月さんには以前に、高嶺の幸せの為に色々と動いているって話したよな？」

「ああ、そうだな」

「実は隠して言っただけで無かったんだが、俺は高嶺だけの幸せの為に動いていた訳じゃないんだ」

「状況から察するに、葉那のことか？」

「ああ、高嶺だけでは無く、明月さんの幸せを叶えたいって考えている」

「葉那の願いは、高嶺昂晴が無事に幸せになることだ。その何が違うというのだ？」

「そうだな。その通りだ。これまではそうだった」

「……変わるというのか？」

「変わる……というわけではないが、高嶺の幸せの為に明月さんが幸せになってもらうというか……」

「どういう意味だ？」

「すまん、まだハッキリと確定したわけじゃないから詳しくは話せない感じ」

「……不確定な情報でどうなるかわからないということか」

「ほんとすまんっ、ただ、今後そのせいで色々状況が動くって伝えただけ」

「……わかった。前もって話に來ただけでもありがたい」

「ミカドさんには色々心配と迷惑をかけることになるかもしれないが……出来れば許してほしい」

「……一体何をやる気だ？」

「いや、大したことじゃないから。別に俺が何かするわけでもないし」

「可能な限り、事前に連絡をしてもらえると助かるのだが……」

「するする、させていただきますとも」

「それなら良い」

「すみません……かなり負担を強いるかもしれないが……」

ミカドさんへの申し訳なさを感じていると、スマホの通知が鳴る。

「……ん？」

手に取ると、一度ではなく複数回鳴る。

「……あー、焼肉か。もうそんな時間か」

「焼肉？……何かあるのか？」

「ああいや、今日高嶺と明月さんがスマホ買ったじゃん？その帰りに駅前を歩いていたら墨染さんと火打谷さんと偶然会って、初スマホ記念にグループとか作って写真を共有してるところ」

画面を開き、ミカドさんへ見せる。

「なるほど、店の写真か……む、我輩も居るな」

「そうそう、そこに偶々涼音さんが来て、更に四季さんまで合流。それで折角だし皆で焼肉に行こうって話が出るわけ」

「そんな偶然がありえるのか？」

「さあ？生活圏が近いしあり得るんじゃないかな？多分俺にも来ないかって電話でも来るんじゃないかな？」

「……これで来なかったら流石の俺でも人間不信になるぞ。」

少し待つと、スマホに着信が入る。良かった……ハブられてなくて……。ちよつとドキドキしたぞ。

『あ、もしもし、澤田君？』

「はい、澤田ですよ、もしかして皆で焼肉でも行くのか？」

『え、……うん、そうだけど？だから一緒にどう？』

「了解、今お店で閣下とお喋りしてたからすぐに合流可能だ」

『そう、それじゃあ駅前の時計台で待ってる』

「はいよ」

通話を切る。……時計台ってどっちのだ？まあ、行けば分かるか。

「と、いう事で、お食事のお誘いが来たので行ってまいります」

「ああ、楽しんで来るといい」

「こっちは焼肉で楽しむから、ミカドさんもその土産で楽しんでくれ」

「……もしかして、その為に買ったのか？」

「日頃のお礼ってのはほんとか。今日がタイミング的に良かっただけ」

「そうか、では有難くいただきます」  
「是非楽しんでくれ」

「どう？達也は来れそう？」

「はい、今お店にいるそうなので直ぐに合流出来るそうです」

「お店に？定休日なのに？」

「澤田さん、お店に何か用事があったのでしようか？」

「どうだろ、ミカドさんとお喋りしていたとは言っていたけど……」

「休日までお店にとは、社畜魂が染みついているねえ……」

「達也先輩も入れて7人ですね！それじゃあ栞那さん、予約しましょう。予約！」

「あ、はいっ。お願いしますっ」

「四季さんは何か聞いてたりするの？」

「ううん、特に何も……」

「個人的な悩みとか？」

「それよりかは、お店のこの方が可能性として高いかなあ？」

「確かに」

「真面目だねえ。キッチンとフロアの両立可能だし、教えたこともすぐに覚えてミスもしない上に仕事にも熱心とか……どこであんな人材捕まえてきたんだい？」

「あー、どこでしょうねえ……明月さんとミカドさんから紹介されたので」

「御帝さんからかあ、それならなんか納得」

「しかも経験者ですもんね」

「それはデカイ。新しく開いたお店に経験者ってかなり重宝されるし」

「お陰でメニューとかマニュアル作成がスムーズに進められましたよ」

「私も初日の客の予想では助けられたしなあ……」

「先輩方！無事予約が取れましたよ！」

「お、でかした。あとは残りの1人を待つのみだね」

「ご注文がお決まりになりましたら、そちらのボタンを押ししてください。それでは失礼します」

皆と合流し、お店へ入る。

「すまん、高嶺、奥へ詰めてくれ」

「さつてとー。何注文しよつかない？やっぱり、取りあえず生かな」「お止めなさい」

「そんな真剣な顔してなくても、冗談ですよ冗談。ウーロン茶にします」

「あ、わたしもウーロン茶で」

「私も。今日はソフトドリンクにしとくか」

「ワタシは……何か炭酸を……あつ、ラムネ懐かしい」

「俺は……緑茶にしとくかな」

皆が席へ座ってメニューを開き、各々の飲み物を頼む。

「私は……同じく緑茶でお願いします」

「んー……俺はジンジャーエールとかにしておこうかな」

「了解、取りあえず、適当にたのんじやっつていいの？」

「あ、はい。お願いします」

「それじゃあ、タンとハラミと……」

「カルビをお願いします！あと白米もっ」

「愛衣ちゃんって、ガッツリいくよね」

「折角焼肉に来たんだもん。脂の甘みを味わっていかないかね！」

「……そうね。滅多に来ないんだから、ワタシもカルビとご飯食べよ」

「俺も白米食べようかな。あと、焼きしゃぶソースとナムルも」

「お、良いねえナムル」

「ツマミとかに最高ですよねえ……」

「希ちゃん希ちゃん、このカルビと上カルビってやっぱり違う？」

「どうだろ？こつちの方が高いし、やっぱり美味しいんじゃない？」  
「それじゃあ、こつちにしよう！」

「ご飯他に食べる人いますか？」

「私も頼もうかな」

「わかりました」

「葉那さんは、何か食べたいものってありますか？」

「え？そうですねえ……この、いちぼってなんですか？」

「尻の先の方のお肉だね。それなりに、希少な部位だった気がする」

「取り敢えず、頼んでみればいいんじゃない？」

「それでは、このいちぼをよろしくお願いします」

「高嶺は何か頼まないのか？」

「えー、そうですねえ……」

「安心してくれ。俺も半額出そう。女性陣には奢りで野郎二人で割り勘だ」

メニュー表で顔隠しながら、高嶺にこっそり伝える。

「……それは流石に悪いですよ」

「気にするな。本当は年長の俺が払いたいが……ここは間を取って半分ずつと行こう」

「……恩に着ます」

「だから遠慮せず楽しんでくれ。で、何食う？」

「それじゃあ、この壺漬けつてのが気になりますね」

「おっけー」

「お待たせしましたー」

店員から肉が運ばれ、テーブルに次々と並べられていく。

「それじゃあ焼いていきますね」

「じゃんじゃん焼いちやって、まだ次が来るからさ」

「トングを取って墨染さんが肉を焼いてく。」

「くはあく……肉が焼ける音と匂いだけで満たされるう」

「タンと、ハラミと……」

「あ、希ちゃん、このお肉貰っていい？」

「私もいただくね？」

「どうぞどうぞ。ナツメさんと葉那さんもどうぞ食べて下さい」

「ありがと、いただくね」

「ありがとうございます」

「高嶺、あの肉は俺たちの領土だ。奪わせるんじゃないぞ？」

「任せて下さい。死守してみせます」

「あんたたちは何してんのさ……」

「戦争が起きない為に領土を主張しております！少佐！」

「ふむ、ではその領土は没収だ」

「そんなあ……」

「俺たちの……エデンが……ッ!？」

「俺はここに第一次大戦を宣言するぞ！」

「はいはい、こっちの肉を分けてあげるから。大人しく食べて」

「おお……女神よ……」

「これが撃墜王の実力……見事に陥落しちまった……!」

「誰が女神か、あと、その名で呼ぶなっ」

「あつ、このカルビ美味しいですね」

「でしょく？カルビを焼いてご飯に乗せる。このオリジナル焼肉丼

がたまらんですよ〜」

「たしかに。肉汁とタレが白米に染みて……良い感じの味付けにな

りますね」

「これが焼肉の醍醐味。奇跡的組み合わせ、マリアージュ！」

「マリアージュ……あつ、写真写真」

新しく買ったスマホでの写真撮影に夢中のようなだ。

「お肉を焼いただけなのに美味しいんだよねえ……」

「網での焼き具合は家で出すのは難しいですからね。あつと、焦げ

ちやう」

「昂晴君、はい」

「ありがとうございます、希」

「ナツメさんも、どうぞ」

「高嶺二等兵……！貴様、敵から情けをもらうとは……！裏切ったなっ!？」

「情けって……欲しかったらワタシの分食べる？」

「敵国からの情けなど受けんっ、俺は一人でも抗ってみせるぞ……！」

「お好きにどうぞ。それより、墨染さんも肉の世話ばかりやかなくていいから食べて食べて」

「焼き加減とか気になって、勝手に動いちやうんですよ。美味しい一瞬を逃すのは大変ですから。わたしもちゃんと食べてますから気にしないで下さい」

「そう？それなら……。……はあ……。……、言ってみて良かった……。美味い」

「高嶺二等兵、これを貴様にくれてやろう」

「……これは？」

「我が国の秘伝の肉だ。白米と合わせて食ってみろ。……飛ぶぞ？テイクオフだ」

「ありがとうございます……っ!?!……うまつ！」

「旨いよな!このロース最高だろ」

「先輩達なんですか？その食べてるやつ」

「火打谷さんも食べる？」

「良いんですか?!食べたいです」

「その代わり……そちらの国の機密情報が条件だ」

「な、なんと卑劣な……。しかしっ、お肉には……。背に腹は代えられない……！」

「ここらで一人懐柔するのも一興よ……。ほら、食うてみ」

「いただきます!……。うまつ!滅茶苦茶うまい!何ですかこの肉とタレは?!？」

「ククク……。堕ちたな」

「へえーそんなに美味しいの?ワタシも食べてみようかな?」

「おっと、四季さんもこれを食べるかい?それなら……」

「あ、ううん。自分で注文するから平気」

「ガツデムツ!!」

「うん、こつちのお肉も美味しいです」

「葉那さん的には、どこの部位が美味しかったですか?」

「どれも美味しいですけど……しいて上げるなら、タンが好みです」  
分かる。

「どうします?追加で注文とかします?」

「食べたいですけど……食べ切る自信がないので……」

「へーきへーき。若い男の子が居るんだから、いざとなれば全部任せればいいよ」

「おい、高嶺。ご指名だぞ」

「全部?!?てか、おれだけですか!」

「高嶺君食べてなくな〜い?」

「食べてますけど?!」

「陽キャになるためにはノリよく。コールには乗っていく。これ大事」

「そういうのはハラスメント!同調圧力ハラスメント!」

「すみませーん。タンとハラミ、2人前ずつ追加でお願いしまーす」

「おまっ……しかも2人前って!」

この流れは……来るな、あれが。ならば乗るしかねえ!このビッグ  
ウエーブに……!」

両手でメガホンを作り、言い放つ。

「高嶺のおーちよつといいところ、見てみたあい!」

「それ、お肉♪お肉♪お肉♪お肉♪お肉♪お肉♪」

「なんで打ち合わせしたかのように息ピッタリなんだよツ!?!という  
か、我先に裏切りましたねっ!!」

「いやあー、行くしかないかなって思ってたさ。ちゃんと食べるから  
安心してくれ」

「わたしも食べるつもりだから大丈夫」

「あつ。アタシも若干の余裕はありますから。安心して下さい」

「ワタシは割と限界気味かなあ……数枚程度なら何とか」

「この様子なら、2人前ずつが丁度よさそうだね」



追加の肉が来る間に女性陣で写真を撮ってデコったりと楽しみながら無事焼肉会を終えた。

因みに余談だが、ミカドさん宛てに買ったへそくりは、後日明月さんにバレた。コソコソとしているのを怪しんで確認したところを現行犯逮捕とのこと。

その元凶が俺だとバレ明月さんに注意を受けた。運動不足気味のミカドさんにはカロリーが高いとか何とか……。

## 第67話：影響

皆で焼肉を食べた次の日、休憩中に四季さんからメッセージが来る。

『前に話してた野中君の件、今日みたい。』

『そういえば、講義で焼肉のお礼を言ってたな……』

『その場には居合わせることは出来なかったけど、食堂で話してるのは聞いてる途中』

「探偵みたいなことしてんな」

『すまん、盗み聞きをさせるような真似をさせて』

『ワタシが勝手にしてるだけだから気にしないで。彼、相当落ち込んでいるみたい。蝶も集まってる』

「……だろうなあ」

『了解、あとで明月さんとミカドさんも交えて話し合おう』

『わかった。それじゃあそろそろお店に向かうことにする』

『気を付けてな』

「ふーむ……」

なんかこうしてやり取りしてるが……個人でのやり取りとは胸が踊るものだなっ！

「おっと、いかん。二人にも一応連絡入れておかないと……」

休憩室を出て、フロアに居る二人に声をかける。

「すまん、二人とも。少しいいか？」

「どうかしましたか？」

「今日、高嶺が通ってる大学で蝶を引き寄せている人が見つかる。それについて終わった後に話がしたい」

「うむ、承知した」

「分かりました。詳細はその時に聞かせてください」

「分かった。高嶺から話があると思う」

「わからん……理解できん」

その日の夜、俺を含めてた5人で高嶺からの話を聞いたが、ミカドさんからの第一声はそんな言葉だった。

「惹かれるメスがいればアプローチすればいい。他のオスと番いなわけではないのだろう?」

「そりやそうだけど、断られた時を想像すると、やっぱり怖いもんだよ」

「そんなことを言っていてはほかのオスに先を越されるだけではないか。……やはり理解できん」

「まー猫だもんな、閣下は」

「んー……猫と人の違うというよりも、成功経験が無いから自信が持てないってやつじゃない?」

「そういうものか?……ともかく、放っておくと心がどんどん落ちていく可能性もある」

「そうですね。なんとかしないと」

「澤田達也よ、お前はと思う?」

「んー……、話を聞く感じだと、四季さんと同意見かなあ?多分自分に自信が無いから、自分で自分を追い込んで……そんな印象だな」

「相手をこの店に呼べば、なんとかしてもらえるか?」

「それでもいいが……親しい間柄ではないのだろうか?」

「まあ、今日初めて会った程度だな」

「それなら、こちらから向かった方が怪しまれずに済むのではないか?」

「なら……明月さんが大学に?」

「私ですか?あ、いえ、もちろん行くのはいいのですが……部外者ですよ?」

「大学ってそこら辺緩いから。関係者以外立ち入り禁止ってなってるけど、用件があったら入っていいし」

「だな。俺も以前に侵入してるしな」

「そうそう、学食なんて近所の人が利用してるのも普通だしね」

「へー……そういうものなんですか」

「高嶺は明日何限目受けるの？」

「3限と4限ですね。なので途中で抜けることになります」

「それじゃあ、明月さんはそれが終わった後に合流って形で。お店は残りで何とかなるはず。平日だし」

「わかりました。それじゃあ明日、行ってきます」

「よろしく頼む」

よしよし、これで明月さんが大学へ行くコースだな。

「では、今日の所は解散しよう」

お店を閉めて、冬の夜道を帰る。

「それで？明月さんを大学に送るってなったけど、これで解決はするの？」

「ん？ああ、いや……解決はしない」

「え？そうなの？てつきりこれで終わりなのかと……」

「中々手強いからなあ……頑固だし、明日蝶が散ってもまた集まってくる」

「まだ終わりじゃないってことね」

「ああ、恐らく明々後日辺りには動くことになる……」

「明日と明後日は？」

「様子見になるかなあ……」

「それじゃあ、特にすることはなさそう？」

「そうだな。後は明月さんと高嶺に動いてもらうよ」

「そうなんだ……わかった」

その後は特に話題には出さずにお互いの帰路に着いた。

そして次の日、問題が起きた。重大な大問題である。

「それじゃあ、パパって作るから澤田君は寛いで待ってて」

「あ、ああ……よろしくお願いますとも……」

何故か、その日の夜に四季さんの部屋へ招かれ、晩御飯を振る舞ってもらうことになった。

……何故だ？恐らく、今日のお店でもやたら俺へ視線を向けていたことに関係していると思うが……。何かの相談か？それとも高嶺

関係で話が……？いや、こっちに来るまでの道中にそんな話題はなかった。

もしかして、何か頼むことがあって、俺が飯を食べた時点で『……食べた、よね？』と言って強制的に頼み込む作戦？いや普通に頼めば靴ぐらい余裕で舐めますがっ!?

四季さんは前と同じくお礼とは言っていたが……。まるで何かの心理戦をしている気分だ。

台所で支度をしている四季さんを見ながら、晩御飯が出来るまで大人しく待つことにした。

「えっと、生姜焼きだから……」

ワタシは今日、とんでもないことをしてしまったのかもしれない。いつもの自分の部屋。何も変わらない部屋……ただ一つ違うとすれば……。

「……うっ」

澤田君が部屋にいることくらいだろう。いや、自分で招いたんだけど……。

入院中に夢を見てから自分がおかしくなった気がする。今までは特にこんなふうには思わなかったのに、何故か今では自分でも驚くほど……。

これまでなら、ワタシに対してよく冗談を言ってふざけたりしてくるのがウザくも気が許せる相手……程度だったのに、今ではそれすらも心地よく感じてしまっている。たまに見せる真面目な姿にギャツプ的な感じが琴線に触れる時はあったけど……、今ではその姿にドキッとしてしまっている。

しかも、極めつけは、気が付くと目で追ってしまっていることだ……。

「前置きも無く部屋に招いたのはやりすぎだったかも……」

晩御飯の支度をしながら小さく呟く。

今日と明日は特に動きは無いって昨日聞いて、それなら……!と  
思って食材を買った。そして一緒にご飯をと誘った。突然なワタシ  
からの誘いに流石の澤田君も驚いていた。なので咄嗟にお礼と称し  
て部屋へ上げた。

「いや、これはあくまでも前に引き続き、お礼な訳で……別に、他意  
はない……はず」

分かっている。言い訳にすらならないことくらい。それなら澤田君  
の部屋でも良かった。というかそっちの方が近いのだからその方が  
良いに決まっている。

「……そうだ。わざわざ毎回送ってもらうのは申し訳ないから今回  
はワタシの部屋で……それだつ、それで行こう!」

下準備を済ましてある肉をフライパンで火を通す。

今回は親子丼、今回は生姜焼き……勝手にこっちで決めちゃったけ  
ど大丈夫だったかな。ハンバーグとか肉じゃがの方が良かったとか  
……。

食材を買いに行った時、何故か生姜焼きが思いついた。どうしてか  
わからないけど、澤田君が食べたいと思った時には勝手にカゴに入れ  
ていた。

「……はあ、何してんだか。ワタシ……」

これじゃあ勝手に暴走している様にしか見えない。いや、実際そう  
なんだけどさ。

「……味付け、濃い方が良いかな?」

あとは、みそ汁と、ポテトサラダを……。あ、卵焼きも添えないと。  
何事もなく生姜焼きが完成し、テーブルへと運ぶ。

「お待たせ」

「おお、遂にお披露……生姜焼き……?」

テーブルに置かれた生姜焼きを見て、澤田君が驚いた顔をする。

「そうだけど、もしかして嫌いだっただけ……?」

「あ、いやっ!ちよつと驚いただけ。むしろ超絶嬉しい」

「そう?普通の味だからあまり期待しないでね」

「前回で四季さんの料理は美味しいって分かっているからな。当然こ

れも期待してるに決まってる！」

いつも通りこつちをおだてる様な大げさ反応。

「そんじゃあ、いただきますー！」

「召し上がれ」

そして、なんてことない料理を食べて、オーバーリアクションで喜ぶ。……悪い気はしないけどね。

「……なるほど、これが四季さんの生姜焼きの味かあ……」

と思ったが、何故かしみじみと噛み締めていた。

「どう、かな……？」

いつもと違った反応に若干の不安を感じる。

「滅茶苦茶美味い。まずこれは大前提。そして俺は今、猛烈に感動してる……まさか生姜焼きが食べれる日がこようとは……！」

「たかが生姜焼きでそんな大げさな……」

「四季さんにとってはたかが、されど俺にとってはその位の美味しさなんだよ」

食べてみるが、やはり普通だ。生姜焼きに何があつたらそこまでの感動を覚えるのだろう。よく分からないが……。

「そう？美味しいらしいけど」

ここまで喜んでもらえるのなら作った甲斐があつたって思える。

正直かなり嬉しい。

「なにもしてないのに四季さんの手料理が味わえるなんて……俺、明日死ぬのでは……？」

「はいはい、大人しく食べてくれる？」

「ういっす」

何もしてないって……、そんなわけ無いのに。以前に明月さんも愚痴を零していたが、彼は自分が何をしたのか、そのすごさを良く分かっていない。もしくはとぼけている節がある。そもそも未来が見えるなんて超能力みたいな力を持っているのにそれを自慢するわけでもなく、偉そうにするわけでも……いや、たまにしているけど。

それで、得た功績を自分の手柄にせず、最初から変わらざるのほほんとしている。今だってワタシが作った料理を美味しそうに食べてる

し……いや、ほんとに美味しそうに食べてる。

死神やケツト・シーだけではなく、神様とかいう存在とも知り合いで実際に面と向かって対等に話してもいた。閣下が怯えるみたいに下手に出ている相手にもお構いなしだ。どんだけ面の皮が厚いのだろうか……。

夢で見た光景の彼の声は真剣だった。お店に来ていた人よりも偉い人と交渉をして、明月さんとも対峙して……それもこれもワタシの為にと思うと……なんて言うのだろうか、心が暖まる。多分、これが一番しつくりくる。

「凄く、美味しそうに食べてるけど、そんなに美味しかったの？」

「そうだな、これは前回の親子丼を越えたな……！」

嬉しそうにグッドポーズで応える。……やっぱり、今の彼からは想像出来ない。けど、裏路地で見えた時のような一面もあるのは事実だし……、どっちが本当の彼なのだろう。

「……ま、どっちでもいっか」

「いいや、良くない！俺は生姜焼きを推すねっ」

ワタシのつぶやきに勘違いをして反論してくる。

「澤田君的には、今回の方が好みだった？」

「好きかどうかで言えば……今回かもな。味濃い方がどちらかと言えば好みだし。あ、でも、まだ二択しか無いから、評価としては母数が足りてないかもなあ？チラチラ？」

「そんなにアピールしなくても、また次も作ってあげるから」

「マジっすか……!?最高かよ……っ！」

「だから大げさ」

「これでも感情を押し殺して耐えている状態であります」

「なに、開放したら空でも飛ぶ気？」

「テンションのまま外で踊って警察にお世話になる位には……ニユースレベルで」

「うわあ……。もしインタビュー受けたら『いつかやるとは思っていました』って言ってあげる」

「否定も反論も出来ないのが痛い所だな」



「いや、しなさいよ……」

……そつか、また食べたいのかあ。次は何がいいのだろうか。とうか、完全にその気になっちゃってるなあ……今更だけど。

彼がワタシを助けてくれたことを、ちゃんと言葉で伝えたいけど、彼はきつと認めないだろう。それなら、態度や行動で示せば良いだけだ。ここ数ヶ月でそれを学んだ。その気持ちはちゃんと相手に伝えるってことを……。

「ごちそうさま」

「お粗末様、それじゃあ、食器洗ってくる」

「……何から何までほんとありがとうございます」

ワタシが食器を取るのを察して、動かずにお礼を言う。

「ちゃんと最後までがお礼だから。お茶でも飲んで寛いでて」

「いやー、四季さんの部屋で寛げは難易度が高すぎというか……」

食べ終えた食器を流し台に入れ洗う。

「……ちゃんと食べてもらえた、か……」

今回も無事上手く成功したでいいのだろう。

「次は……」

次の機会はいつだろう。明日も様子見とは言っていたけど、連日は流石に変だし……。

「そういえば、そろそろクリスマスの時期かあ……」

前日と当日は忙しいと思うけど、23日は定休日だし時間はある。

「……ほんとに、どうしようもないなあ……」

「それでは、明日の夕方に高嶺さんが通ってる大学の方へ行ってきましたね」

「ああ、大丈夫だとは思いますが、気を付けて行って来い。店の方は気にするな」

「今更なのですが、行くの私で良かったんですかね？」

「安全を取るなら澤田達也に任せるか、一緒に愛衣も連れて行けば間違いは無いだろが……栞那、お前が行くとなった時に特に、止め

ずにもしろ勧めていた様に見えた」

「つまりは……私が行くことに意味があるってことですね」

「かもしれない。もしかすると特に理由はないという可能性もあるが」

「理由が無くても向かうのには変わりありませんし、問題無いですよ」

「……そうだな。奴の方でも動いていることだろう。こちらはこちらの役目を果たせばよい」

「わかりました。最近はずつめさんを特に気に掛けられている様ですし」

「心配なのだろう。既に魂は定着し安定しているのは確かだ。むしろ我輩には逆に見える」

「それは、なつめさんが澤田さんに……?」

「そうだ。最近はずつめさんにも多くなっている。今日も何度も澤田達也を見ていたからな」

「それは……仕方がないと思いますよお?前になつめさんから聞かれましたもん」

「何をだ?」

「『ワタシが倒れている間に何があったの?』『澤田君って何かしていた?』と、質問攻めされましたから……」

「……もしかして、何となく感じているのかもしれないな」

「可能性をあげるとするならば、澤田さんの魂をなつめさんへ移した際に記憶なども移った……とかでしょうか」

「なるほど、ありえなくはないな。それを無意識に理解してしまっているのかもしれないな」

「はい。もしそうであれば、好きにならない方がおかしいですしね……ごひ」

「あのような姿を知ったとなれば当然のことか」

「上手く行くと良いですね、なつめさん」

「何か問題でもあるのか?既に両思いではないか」

「わかってませんね、相手はあの澤田さんですよ?きつと色々歪

んでいます。ナツメさんの好意も歪めに歪めて受け取るに決まっています」

「……四季ナツメも、難儀な相手を好きになったものだな」

「ほんと、そうですね……未だに彼自身謎が多いですし」

「全くだ。次から次へと……」

「それで、ナツメさんの蝶の方は……」

「安心してよい。以前より羽ばたきが大きくなっている。この調子ならそう遠くはない内に戻れるはずだ」

「そうですか。安心しました」

「安心するのにはまだ早い。まだ高嶺昂晴がいるのだからな」

「分かっていますって……高嶺さんが幸せになるようにちゃんと手伝いますよ」

「そうか。ならいい」

「あつ。そういうえば食事がまだでしたよね？直ぐに用意します」

「あ、いやつ、今日は大丈夫だ……」

「どうしました？食欲がないのですか？」

「いや……ちよつとな。取りあえず、食事の用意はしなくても大丈夫だ」

「はあ……わかりました。食べる時にまた言ってください」

「……ああ、承知した」

## 第68話：恋のお悩み

「ふむ……我輩も、勘違いをしていたようだ」

「どういうことだ？」

明月さんが大学で蝶を回収してから次の日、案の定野中君には蝶がまた集まって来ていた様だ。

「恋というのは普通、かなり強い分類の感情になる。そんな強い感情に影響を及ぼせるほど蝶は強い存在ではない」

「つまりは、元から当の本人が諦めようとしていたのだ」

「あ、なるほど、そういうことか」

「だから蝶を回収しようが解決策にはならないってことだな」

「どうしますか？やり方を考え直さないといけませんよね」

「その男が自信を持てるようになればいい。話自体は至極単純なのだが……」

「その……野中君？って人は……こういつちやあれだけど、中身だけではなくて服装とかの見た目も自信なさそうな感じだったりする？」

「そうですねえ……そう感じる雰囲気はありましたね……」

「眼鏡とか古そうなタイプの服とかそういう感じの身のまわりの物を持ってたり？」

「言われてみれば……確かにそうだった。あまりファッションにも気を遣ってるようなタイプではなかったですね」

「なるほど、まずはそういった箇所から変えようってことですね？」

「ああ。自分の見た目を変えるだけでも、印象が変わるし……まずは眼鏡を止めてコンタクトにしたり、髪を切ってさっぱりしたり」

「自己暗示的な効果があるやもしれんな」

「そうですね。外見が大きく変われば本人の自信にも繋がるかもしれません」

「……けどなあ、引き寄せるくらいネガティブな人だし、結構頑固なイメージだから高嶺からのアドバイスを聞くかどうか……」

「俺もそれが不安だなあ……」

「それ以外で上手く行くのがあると良いのですが……」

「んー……詐欺まがいだ騙して無理矢理が大丈夫ならするけど……それはなあ」

「どんな方法をされるおつもりなんでしようね……」

「まあ、最初は高嶺の方で色々試してみてくれ。もうどうしようもないってなったら……俺の方でも頑張ってみるよ」

「何か手段があるのですか？」

「一応。多少強引になるかもしれないけど」

まあ、そんな手段取らなくても解決するけどね。

「わかりました。まずは俺の方で頑張ってみます」

その後、解散となったが、俺はまだ明月さん達と用事があると言つて残った。

「それで、貴様が言う解決策とはなんだ？」

「二番手つ取り早いのは、火打谷さんに蝶を回収してもらつて気分が良くなつた時に無理やり連れ回す。一時的に気持ちが上がれば動く可能性もあるしなあ……多分」

「あとは……相手の蝶に直接接触るとかか？」

「そつちは……あまりオススメ出来るやり方ではないですね」

「こつちは最終手段ということだ」

明月さんが嫌がるしね。

「さつきの方法で上手く行くのか？」

「それは本人の気持ち次第だな。それと……」

「それと……？」

「高嶺が相手側に引つ張られる可能性もあるから気を付けた方が良いと思う」

「それは私も危惧しています。あまり同情的になつてしまいますとどうしてもそちらに引き寄せられてしまいますから」

「ま、昔のなら怪しかったけど、今の高嶺なら大丈夫だと思うけどな。このお店で体験した三ヶ月近くは伊達じゃない」

「……そうですね。それだと嬉しいです」

「最近の奴は前向きに見える。この調子なら悪い結果にはなるまい」

「……そうだな」

「すみません、それじゃあそろそろ一旦抜けます」

「あいよ、楽しんできな」

「いってらー。気を付けてな」

翌日、午後になりフロアのメンバーが揃ったタイミングで高嶺が抜ける。今から野中君との約束との事だ。

「それじゃあ、昴晴が戻ってくるまでは、そっちは任せるけど大丈夫そう？」

「任せて下さい。倍くらいならこなして見せましょう」

「ほほう、言ったな？なら、私のもお願いしようかな？」

「それは、俺のことを認めたと受け取っても良いんですか？」

「ポジティブに受け取ったな……」

「それでしたら喜んで貰いますよ？涼音さんは横で審判でもして貰えれば」

「若いなあ……向上心があって」

涼音さんには負けますけどね！

それから、一時間もせずに高嶺は戻って来た。

「お、意外と早く戻ってきたね。宏人にドタキャンでもされた？」

「いや、案外用件が早く終わったので任せて戻ってきました」

「そう、なら良かった」

「どうだった？相手の方は」

「はい、その……色々あって元気になったので大丈夫だとは思いますが」

「それなら安心だな。明日が楽しみだ」

「そうですね」

仕事が終わわり、明月さん達と状況の共有をして店を出る。

「高嶺君が今日会いに抜けたんだって？それで問題は解決？」

「だな。野中君の方はこれで解決だな。明日にはイメチェンした彼が現れる事でしょう」

「ふーん、なんの心変わりがあったんだろ……」

「さあな、本人に心境の変化があったんだろ」

「その様子だと、知ってるみたいね」

「まあな。けど、話す必要は無いから黙っておくよ」

「そ。なら分かった」

「それで、だ。明日四季さんにお問い合わせがある」

「なに？」

「明日、高嶺の体調を見てほしい」

「明日って……大学で？」

「ああ。もし体調を崩しているようなら即座に帰らせてくれ」

「それはわかったけど……なにかあったの？」

「……ちよつとな。無ければそれはそれで問題だけど」

「……わかった。もしそうだったら連絡する」

「よろしく頼みます」

……何だか、最近四季さんが素直過ぎるような気が……？こつちが濁してもあまり追及して来なくなつたし、信用度が上がったと見て良いのだろうか？

明日の朝時点で体調の変化を見る必要もあるし……、明月さんにも話を通しておこう。

次の日、大学へ行く前の朝の準備で出て来た高嶺は、想定通り体調を崩していた。

「それじゃ、大学の方へ行ってきました」

「はい、いってらしゃい」

「頑張ってるねー」

「無理しないようになー」

明月さんを合わせて3人で高嶺を見送る。

「……………」

送った後、意味深な視線を俺に向けてきたので、少しフロアへ出て話す。

「……高嶺の事だな」

「はい。何だか調子が悪そうでしたので……」

「十中八九、昨日の蝶の影響だな」

「やはり……」

「……大学は休んだほうがいいかもしれないな」

「それほどですか……?」

「ああ。四季さんと涼音さんの弟さんにも連絡を入れておくよ。高嶺の様子を見ていてほしいって」

「ありがとうございます」

「あと、念のため後でお見舞いに行ってきたりしてくれないか? 魂の確認しに……」

「そうですね……、確かに心配です」

「問題が無ければ良いんだが……」

「澤田さんとしては有る可能性の方が高いと……?」

「残念ながらも。けど大事ではないと思う」

「分かりました。お店の方が落ち着き次第行ってきますね」

「よろしく」

……これで、無事お見舞いに行つて高嶺の魂を安定させてくれるはず。

「それじゃあ、一旦休憩室に行つて戻ってくるよ」

「はい、よろしく願います」

笑顔でそう言われると……うーん、罪悪感がこうチクチクと……。

「高嶺君の様子を……」

今朝、澤田君からのメッセージで高嶺君の体調が悪そうだったから後で様子を見て欲しいと改めて来ていたから探しに来たけど……。

「あ。良かった」

「四季さん?」



見るからに体調が悪そうな高嶺君の隣の……友達がこちらに気づく。

「高嶺君の体調が悪そうだから様子を見て欲しいって連絡があったんだけど……本当に悪いわね」

「平熱で咳も頭痛も無いから、そんな大げさにすることじゃないと思うけど……」

「お前、そういうけどさー」

「今日はもう帰った方がいい。バイトの方もワタシから連絡入れておくから。明らかに大げさじゃないって」

「……分かった。無理して倒れたりしたらもっと迷惑かかるしな」

「そうして。お店も平日だしなんとでもなるって。それより自分の体を心配して」

「送ってやろうか?」

「流石に1人で帰れるって。いや、マジで真っ直ぐ戻るから。戻ったらLINEで報告するから」

「……わかった。必ず報告してね?」

「ああ」

高嶺君を途中まで見送り、講義に戻る。

……澤田君が予想していた通り、高嶺君の体調が悪くなったけど、これも彼が言っていた様に明月さんとの仲を深める為に必要なこと……で良いんだよね? どういった経緯でそうなるかは聞かずに受け入れたけど……。

あの時の澤田君は、少し申し訳なさそうに答えていた。多分高嶺君へ対しての罪悪感やそういつたことを感じていたのかもしれない。幾ら必要なことか言っているにしても、それを見過ごすのは心苦しいんだろう。

「……………」

思えば、ここ最近はその言った表情をする機会が増えている様に思える。特に明月さんと話している時に多いような……。

ワタシの時と同じように明月さんに対してもってことは……きつと、そういうことなんだろう。

「……なにか、出来ないかな……？」  
晩御飯を作ってあげた時は凄く喜んでくれていたけど……もつと他の事もした方が喜んでくれるかもしれない。

「……やっぱり」

次の定休日は、世間一般で言うクリスマススイヴイヴ……。

「……くっ！」

向こうは特に予定は無いって言っていたしっ！暇なはず……！きつと誘えば乗ってくれると……思う。

「が、頑張ってみようかな……？」

「ただいま戻りました」

その日の夜、高嶺の所へ行つた明月さんがお店へ戻つて来た。

「昂晴先輩の様子、どうでした？」

「大丈夫そうでしたよ。食欲もありましたし、熱も平熱でした」

「そっか、よかった」

「希さん、鍵ありがとうございます」

「いえいえ。昂晴君が休むぐらい体調を崩すなんて滅多にないから、ビックリしましたよ」

「そうなの？」

「見るからに健康そうでしょ？わりとそのイメージまんまだよ。わたしが覚えている限りでも……軽い風邪以外に体調を崩したことないんじゃないかな？胃腸とかもかなり強いから」

それは魂が強いからとか関係するのだろうか……？いや、体だし関係無いか。

「大丈夫です。明日にはきつといつも通りですよ」

「さあ。安心したところで片付けを続けるぞ」

「はい」

ミカドさんの言葉でみんなが片付けを再開する。

「澤田さん、後でお話が」

「了解」

すれ違い様に明月さんから言葉に返事をして片付けへ戻る。  
片付けが終わり、店を閉めた後に明月さんの間借りした部屋へ入る。

「それで、高嶺昂晴の様子はどうだったのだ？」

「懸念していた通り、魂が衰弱していました」

「処置はしてきたのだな？」

「はい。もちろんです。衰弱した魂が元に戻るよう、ちゃんと力を注いで……力を、注ぎ……」

「……………」

急に明月さんの言葉の覇気が無くなり、遂には無言で何かエロい事を考えている顔になる。

「お注ぎ申しました……ともっ」

「なんだその奇妙な物言いは……っ？」

恥ずかしそうに目を閉じて言う。でも、くつつけたのはおでこである。

「お気になさらず」

「ミカドさん、魂を注ぐにはそれなりの肉体的接触が必要なんだよ」

「まあ、その通りだな」

「そして、明月さんのこの反応からして見て、導かれる答えは一つ！」

「……葉那、お前、高嶺昂晴とセックスでもしたのか？」

「してませんよ！突然何を言ってるんですかっ!？」

「いや、お前の態度が変わったからな。もしやと……」

「何ですか？もしや力を注ぐどころか逆に中に注がれたのでは？なんて考えていたのですか？卑猥ですよ、ミカドさん」

「それはお前のオッサン臭い頭の中だ。色情淫乱死神娘め」

「変な呼び方しないでくれませんか!？」

来たっ！色情淫乱死神娘！

「なるほど、色情淫乱死神娘か。なんか良いフレーズだな」

「澤田さんも気に入らないで下さいっ！」

「すまんすまん。結局どうしたんだ？恥ずかしそうにしてるけど

……」

「いえ、ただ……おでこをくつつけ合ったくらいです」

「うむ。まあ、普通だな」

「最初は親が子供にする様なもんだと思って平気だったのですが……いざ始めると、急激に恥ずかしくなって……ものすつごくドキドキして……」

「恥ずかしそうに語っているが、おでこをくつつけたただけだよな？」

「自分でもわけわからないことを口走って、セックスセックスって叫んでしまう始末でして……」

「それは本当にわけが分からんな」

「場面がカオスだな……」

「……うう……」

考え事を始めた明月さんが一人で悶え始める。

「まあ良い。それで解決したのだな？」

「はい。明日には元気になっていると思いますよ」

「そうだな。明日にはいつも通り元気な顔を見せてくれるはず」

「そうか。なら安心だな」

「あ、けど念の為明日のお店に来たら一度確認してもらってもいいか？」

「え、は、はい。大丈夫ですつ」

「あとは……その次の日とか……？まあなるべく高嶺の様子を気に掛けてほしい」

「そこは変わりませんので大丈夫なのですが……もしかして、何かあるのですか？」

「いや、ほんと念のため。以前の四季さんみたいに見逃したくないからさ」

「あれは……澤田さんのせいでは……」

「分かってる。だからこそ今度はしっかりとしておきたい」

「……分かりました。高嶺さんの方は私にお任せ下さい」

「あまりあの件で気を病むな。貴様の努力でちゃんと解決させたのだ。そのお陰で四季ナツメの魂は安定してる」

「そういえば、協力してくださった蝶の方はどうなったのですか？」  
「分からん。最近では表に出て来てないし……静かにしているのかも  
しれない」

夢でも見えないし、もしかして普通の蝶に戻ったのか？力の使い過  
ぎとかで……。

「まあ。その内また出てくると思うし心配は無いと思う」

「そうですか……。意思を持つなんて、あまり例を見ない蝶ですよ  
ね？」

「そうだな。よほどの強い未練などが無い限りは通常の蝶になるは  
ずだ」

という事は、あの蝶は何かやり残していたことがあったのか……？  
いや、していたのって俺とお茶会したり雑談だが……？

「……そうは見えなかつたけどなあ」

## 第69話：恋のお悩み相談室……？

「昨日はご心配をおかけしました」

「いいよいいよ。それより、今日も平気なの？」

「はい、元通りになったので大丈夫です！」

「ならよし。病み上がりなんだから無茶だけはしないように」

「わかりました」

「それじゃあ、早速取り掛かろうか」

昨日とは違い、すっかりと元気になった高嶺の様子を見ながら朝の支度を進めて行く。

「おはようございます」

「ツツ!」

「おはよー。栞那さん」

明月さんが厨房に挨拶しに入って来たのを見て、高嶺が明らかに動揺する。

「おっ、はつよう、明月さん」

作業してた手が止まり、声も震え言葉に詰まった様子で返事をしてる。

「おっはよつう……ごじやりました……」

うん、二人とも昨日の事を大分引きずっていたご様子で……。

「……コホン、おはようございます。高嶺さん」

「あ、ああ。おはよう」

……今更取り繕ってもなあ。

「おーい、こうせーい？手が止まってるよ？」

「え？ああ、すみません」

「高嶺さん……変な妄想してませんか？」

「ハハツ。馬鹿な」

「なんて胡散臭い」

「いや、だって昨日の今日だぞ。仕方ないだろ？」

「そんなに意識しないで下さいよ。なんか、私まで意識しちゃう

じゃないですか……」

「つて言われてもなあ……言われれば言われるほど、気になつてくるだろ」

「まあ……その気持ちは、わかりますけど……」

「……」

そう言つて互いに顔を赤くして無言になる。

「……ジーン……」

その様子を涼音さんが呆れた表情で見ている。

「あの……何見てるんですか？」

「いや。昨日何かあつたのになつてさ。意識しちゃうとか言つてるし」

「涼音さん……若い男女がお見舞いと称して意識してしまう様な出来事なんて限られてますよ？」

「なるほど。今日は赤飯炊かなくちやいけないね」

「そんなことしてませんよ！私はいくまで普通のお見舞いをつ、普通に行つて来ただけです！」

「え、!?アレが、普通……なのか？俺、あんなの初めて……ポツ／＼」

「怒りますよっ?」

「ははっ、悪い悪い。冗談が過ぎた。いつもされてる側だから、たまにはな」

「もうっ……タチが悪いですよ……」

「……涼音さん。何か甘くないデザートとかありませんか？」

「そうだねえ……、ガトーショコラかなあ？苦みたっぷり」

「それで中和出来れば良いんですが……」

「……ん？あれは高嶺君？」

大学へ着くと、話し合つてる高嶺君を発見する。もう体調は良くなつたのだろうか？

「今日は、頭の調子が悪いのか？」

「あー……違わなくもないかもな。けど、昨日の体調不良とは別件。それは元に戻った」

「ふーん。なら、よかった」

「うわっ!?!びびっくりしたっ……」

話していた二人の会話に急に入ってしまったから驚かせてしまった。

「四季さん？いつからそこに？」

「ついさつきね。体調が戻ったみたいでなにより」

「ご心配をおかけしました」

「それよりも、今日はなに？どうしたの？何か困りごと？」

「困りごとという程でもないんだけど……、あー……なんて言うか」

「なんだよ、ハッキリしないな」

何だか言いにくい話なのだろうか……？

「その……好きな子が、出来た」

「へー！誰？誰？」

遂に高嶺君に好きな人が……!?

「四季さんもこういう事に結構食いつくのな」

「あ、聞きたいけど……もうすぐ講義が……。後でちゃんと話を聞

くから、集合ね？」

「そうだな。昴晴の話を聞くんならもう少し落ち着いた場所と時間が良いよな」

「いや、俺講義が終わったらバイトに戻らないと……」

「その前に少しくらい時間は作れるでしょ？連絡はワタシが入れておくから」

これは重要な話。これなら明月さんや澤田君は特に嫌な顔はせず  
に了承してくれるはず。

それに、他の人のそう言った話を聞いて、何か参考に出来るかもしれない……しね？



「それで、好きな人って？ワタシも知ってる人？」  
講義が終わり、高嶺君を連れて食堂までやって来た。

「まあな」

「ふうん。なるほど。とすると……明月さんでしょ」

「気づいていたのか？」

「まあね」

本人からの言質も取れた。どうやったか分からないけど、澤田君は上手いこと進めたみたい。

「明月さんって、スマホを買いに行った子だよな？まあ、あんだけ可愛ければ……そういう気持ちにもなるよなあ」

「……………、つゝゝゝゝゝつ!!」

わっ、高嶺君が急に悶え始めた……。

「何を急に身悶えてるんだよ」

「相手の事を考えたら、こうなんか……胸がドキドキするんだよ……」

……何だか、理解出来てしまう。

「気持ち悪いな。お前」

「……………」

うっ!?……や、やっぱり気持ち悪いのかな……?いや、人前ではしてないしセーフだよな?

「仕方ないだろ、こんな気持ちになるのは初めてなんだから……」

「高嶺君が乙女に……」

「頬赤らめても可愛くねーぞ」

「自分が一番驚いてるよ。まさかマンガみたいに自分を抑えられなくなるなんて……。それだけ、本気の恋なんだと……思う」

「なんだか、聞いているこっちが恥ずかしくなるようなセリフ……でも共感してしまう自分になんかムカつく。」

「昂晴……。うわっ、なんか恥ずかしい事言い出した!背中痒っ!」

「うるさいっ」

「茶化さない、それだけ本気で好きってことなんでしよう」

「んで?告白すんのか?」

「いや、流石にそれは先走りし過ぎと思うから……」

「けど、何か動いた方がいいんじゃないか？野中君だって頑張ったぞ」

「……それは、けど……今後の店の営業も無関係ではないし……」

「理解は出来るが、そこを気にしちや始まらないだろ。言い訳ばかりしていたら本当にそのままだ。あんだだけ可愛い子だ。その内他の人も言い寄ってくるに決まってる」

「それは……そうなんだが……」

……澤田君も、そうなんだろうか？いやでも、彼……恋人作る気はないって言ってたような……。いや待って、それは確か事情を知っていない人の場合の気が……。

「いきなり告白よりも、まずは二人で出かけるとかしてみたら？」

「それだ！クリスマスにでかければいいじゃん！」

「そうね。流石に24と25は無理だけど、明日ならいいんじゃない？定休日だしね」

「ん、んん……」

「なんだよ？煮え切らないな」

「いや、いきなりそう言われても……プランとか立てる時間がないだろ？」

「クリスマスシーズンだから、イルミネーションを見るだけでもデートっぽくなると思うけど？」

「だな。でも、グダグダにしない様にはある程度考えておくのも大事だな。折角のクリスマスだしさ」

「因みにだけど……四季さんならどうしたい？」

「ワタシ……？」

「そうそう。ここは女性からの意見も聞きたくて」

「……んー、別に特別な事とかは求めて無いかなあ？ゆったりしたり楽しく過ごせればそれで満足……かも？」

「家デートってこと？」

「そんな感じかな」

「宏人は？」

「俺か？ そうだな……しょうがない」

「自分でやろうと思つてたけど、とつておきのプランを伝授してやる」

「おお！ それは助かる」

「やっぱりロマンティックは重要だ。そしてサプライズも大事だ」

「ふんふん」

「そしてクリスマスと言えば……！ そう、クリスマスプレゼント！ アクセサリーを贈るのさー！」

真面目に聞いている高嶺君には悪いけど、嫌な予感しかしてこない……。

「おっと、待て待て慌てるな。分かつてる。普通のプレゼントじゃあ相手の心は動かない。重要なのはそのアクセサリーで自分の気持ちを伝えること」

「具体的には？」

……プレゼントかあ。やっぱり何か渡した方が良いよね？ あくまで日頃のお礼……として。あ、そういうえはまだ向こうの予定とか聞いてなかった……。勝手に問題無いつて思つてたけど、もしかしたら用事があるかもしれないし。

男の人が喜ぶのってなんだろう？ でもなあ……澤田君つて一般的の人の感性とかない様な気がするし……、例え変な物とか上げて喜びそうな気がする……つて流石にこれは失礼か。

今日あたりにでも目星付けておかないとなあ……邪魔にならないかつ普段から使えそうなものが無難かなあ？

「今のサプライズプレゼントつて四季さんのにどうなの？」

「え……？ あ、ごめん。話を聞いてなかった」

「聞く価値すら無いってさ」

「そんなんっ!？」

「ちよつと考え事をしててね。気にせず続けて」

「ならっ、夜景はどうよ、夜景は！」

「イルミネーションを見て歩くのも悪くないけど、オシヤレした女の子の場合、スニーカーを履いてないから足が疲れれると思うんだ」

「それは確かにあるかもね」

「だから高級ホテルの部屋を予約しておくんだ。2人きりの部屋で街の夜景を見下ろしながら彼女をそつと後ろから抱きしめる」

「……なんで付き合う前なのにホテルを予約してるの？」

え、聞いてない話に何か重要なことでもあったの？

「トドメの一言」『この街の夜景に僕らの愛を見せつけてやろうぜ』

「素直に気持ち悪い」

いや、聞かなくて正解だった。

「はいきたこれ！どうっ!？」

「だから気持ち悪いっ！なんでそんな気持ち悪いことを堂々と言えるわけっ!？」

「他の男とは違うオシヤレさんだつてアピールしたいじゃん！」

「オシヤレと奇をてらうは全然ちがう！空回りしてるから！ブレーキ踏んで！大事故起こしてるからっ」

「宏人……お前がモテない理由を垣間見た気がする……」

「なんだとっ!？」

「高嶺君も。もつとまともなアドバイスをしてくれる人を見つけて」

「……そうだな。宏人じゃなくて澤田さんとかに聞いてみるよ」

「ひでえな……。でも、あの人か。確かに色々とアドバイスしてくれそうだな」

「そうね、参考になる意見は出してくれるんじゃない？たまに……結構な割合でふざけたことも言うけどね」

「あく……、確かに。割と冗談いう事多いよな」

「けど、的確というか、核心を突くようなことも言ってくるから。高嶺君にとってプラスになるはず」

「今日辺りにでも話してみるよ」

「……って言ってるけど、人にアドバイスしてるほど余裕はないんだけどね……」。

「お疲れ様です。今、戻りました」

「おつかれー」

「おつかれさん」

「何かあります?」

「パンケーキを2皿分、今から焼くところ」

「高嶺も来たところですし、涼音さん先に休憩に行ってきた方がいいですよ」

「そう?じゃあ……お言葉に甘えさせてもらおうかね。何かあったら呼んで」

「了解です」

涼音さんが厨房を出て行くと、高嶺がこっそりと話しかけてくる。

「澤田さん、今いいですか?」

「……どうした?もしかして恋のお悩みでも聞いて欲しいのか?」

「……四季さんから聞きました?」

「連絡来ててさ。困ってるみたいだから協力してって」

「そうでしたか。一応、その用件です」

「了解。あとで話そうか」

「わかりました」

……高嶺の件でメッセージ来ていたのは確認したけど、それともう一件……四季さんからメッセージがあった。

「……うーむ」

明日のお誘いだ。何かあるのだろうか……わざわざ休日まで消費してなんだろうか?明日は高嶺と明月さんの遊園地デートの日だし特にすること無いから平気だけど。……もしかして、これは俺もデートのお誘いをつ!?

いや、四季さんに限って無いな。こういうた浮かれたイベント好きじゃないし。人が多いタイミミングで誘うわけがないか。

普通に考えれば高嶺が明月さんを好きと公言したことで次の話を聞いておきたいのだろう。今日は高嶺の相談に乗るって知ってるから気を遣って明日にとかそんな感じ。

「……………」

ちょっと期待した自分がいたのは許してほしい。だって！高嶺と明月さんは遊園地デートだよ!?そのことを考えてるときにそんな誘いが来れば……誰だって期待する！しない方がおかしい！

あつ、そろそろクリスマスだし、ついでに明日は何か買いに行こうかね。どうせ24と25は暇ないし丁度良いな。だが……何を買いうか？原作だと高嶺は柑橘系のクリームとか買ってたな。けど同じのものなんか面白くないしなあ……。既存を買うよりかは自分で買ってその反応を楽しみたいってのが俺個人としての矜持。

「……はあ」

仕事が終わわり、着替えようと部屋に入るや高嶺がため息を吐く。

「どうした？まるで、今日明月さんをデートに誘おうとしたけど結局出来なかった自分に嫌気がさした様なため息は？」

「……まるわかりでしたか？」

「まあな。あからさまに明月さんと対面した時だけ言葉が詰まっていた」

「いやー、誘おうとしていたんですが、中々勇気が出なくて……」

「気持ちには分かるけどな。まだ時間はある。まだチャンスはあるって後に送っていたら終わってしまった……って」

「凄いですね。まんまその通りですよ」

「ははっ、想像通り。若干明月さんも不審に……いや、心配そうにしてたな」

「うわあ……申し訳ないことをしたなあ」

「それで？相談ってヤツを聞こうじゃないか」

「大丈夫ですか？」

「ああ、今くらいしかタイミングないしな」

「四季さんから聞いているとは思いますが……明日定休日ですし、どこかへ誘ってみようかなと考えていて」

「問題はどうかやったら相手を退屈させずに喜んでもらえるか……ってとこだなっ」

「はい、どうしたものと。それで何か参考になる話が聞ければいいなと」

「……そうだなあ、俺の想像と、考えになるけど聞く?」

「っ!はいっ、お願いします!」

「高嶺がどういったプランを考えてるか分からないから……俺としては、明月さんなら割と何でも喜んでもらえると思うぞ?」

「……と、言いますと?」

「あの人は最近までスマホすら持っていなかった人だ。仕事で人の関りをまともにもったことすらなかった。そんな人が最近こっやっとお店で働いたり、スマホを買ったり、皆で焼肉を行ったり……。どれも初めての体験だったはず」

「確かに、そう言っていましたね」

「その時の明月さんって、楽しそうにしてただろ?」

「……っ!?!なるほど……」

「だからあまり一般的な考えが当てはまるとは考えにくいんだよなあ……。だから高嶺の方でも考えるのはいいけど、なるべく明月さんの意見とかも取り入れられるような場所を選んだりとかが良いのかなと俺は思った」

「場所だけ決めて、時間には余裕持って行った方が良いかもな。もしかしたら向こうが食べたい物とか行きたい場所かとあるかもだし」

「澤田さんは、どこが良いとありますか?」

「俺?……そうだなあ、娯楽施設……遊園地、とか?遊べるアトラクションとか選択肢多いし」

「……ありがとうございます。参考にします」

「参考になった?」

「はいっ、かなり。一般的なことではなくて、明月さんにとっての喜ぶ方法を考えてみます」

「その意気だ。頑張れよ?」

「……ですが、まずは頑張って誘わないといけませんね」

「そういえばそうだったな」

「どうしよう……」

「ふふん、そこら辺も任せな。シチュエーションは作ってやる」  
「え？どうやってですか？」

「まあ、見てな。あ、高嶺はそのままそこで待機な？」

「え、はい……」

着替えを終え、部屋から出る。フロアには……四季さんだけか。

「明月さん、ちよつといいか……？」

「……？どうかしましたか？」

一応、他の人に聞こえない様に小声で話す。

「気が付いてると思うけど、今日高嶺の様子がおかしかったよな？」

「やっぱりそうでしたか。なんだかいつもと違いましたよね？」

「魂が、とかではないとは思うけど……様子を見て来てくれないか？  
何だか悩みつぽかった」

「分かりました。少し様子を見てきます」

「ああ。よろしく頼む」

心配そうに高嶺の方へ向かう。……よし。

「ナイスフアインプレー」

横を見ると、面白そうなものを見た様な表情で俺を見ていた。

「だろ？これなら流石の高嶺も言わざるを得ない。なんせラスト  
チャンスだからな」

「澤田君もがんばってるねえ……。もつと自分の方にも目を向けた  
方が良いんじゃないの？」

「向こうが無事に終わったらな。それから考えてみるよ」

「それだとクリスマス過ぎてるけど……？」

「特に過ごす相手も居ないしな。って、自分で言ってる悲しくなっ  
てくるから」

「そうなんだあ……？」

「おいまで、人の不幸を聞いて嬉しそうな顔をしないでくれっ」

「べつつにー、そんなこと考えていませんが？」

「俺の事は良いんだよ、向こうが無事に幸せになってくれれば万々  
歳なんだから……」



「そ。幸せにと願うのはあの二人だけ？」

「無論っ、四季さんのものな！そのためなら靴だって舐めて見せようじゃないか」

「それだとワタシが靴を舐めているのを見て喜ぶ人になるでしょうが……馬鹿なの？」

ん〜！良い感じの蔑むような視線。ありがとうございます！

「冗談冗談。何かあったらいつでも言ってくれ。喜んで手伝うからさ」

「……ありがと。じゃあ、さっそくだけど……明日は暇？」

「ん？さっきの件か？そうだなそのくらいなら暇だと思うぞ？」

「それならお店に来てもらってもいい？」

「そのくらいなら全然……あ、そっちが大学終わってすぐは難しい」「大丈夫。ワタシも準備とかあるからそんな直ぐにつてわけじゃないから……」

「了解。それなら連絡してもらえれば直ぐに向かうよ」

「う、うん……りようかい……」

明日は高嶺達のデートでお店を待ち合わせにしていたはず。ついでにブルーマウンテンを飲んでたから少し間を空けていた方が良さだろう。

「そ、それじゃあ、ワタシは先に帰る……」

「おっけー、そんじゃあ、また明日」

「うん、またあしたね……」

「うーむ」

てつきり、この後に二人のことを聞いたりするのかと思っただが……先に帰ったな。

「俺も支度して帰るか……」

店を出て、夜風に当てられながら帰路に着こうとすると、『うおおおおおっ！めっちゃ嬉しい!!』と叫ぶ声が聞こえた。それを聞いて無事成功したと把握しながら家へ向かった。

## 第70話：癒しの場

「……行くか」

次の日の昼前、折角の休日……更にクリスマスのプレゼントを選ぶために外へ出かける。

「まずはてきとうに店を見て回ってみようかな」

渡すと言ってもどれが良いのか分からない。ここは安全策を取って複数個を用意するか、四季さんが確実に喜びそうなのを1つ選ぶか……。

「となると……紅茶とかなら絶対外れないもんなあ」

流石にアイマスクはセットで買えないけど。

「あとは紅茶に合う食べ物……焼き菓子とかだな」

たまには少しお高いブランド物とかに手を出すのも悪くない。

「それらを味わえれば……いや、待てよ」

紅茶とお菓子は良いが、相手を満足させるにはまだ足りないのではないだろうか……？

「五感で楽しませてこそそのプレゼント……か？」

そうなる……資金は足りるが時間が大丈夫か分からないな。

「運ぶ時間と、組み立てる時間も考えて行かないとな」

フラフラと歩いていた道を曲がり、信号を渡って家電などを取り扱ってるお店を目指す。

「……ふふ、楽しくなってきたな」

「……お？メッセージか。これは……、四季さんからだな」

買うものを買って、セッティングを無事にやり切って一息ついていると、良いタイミングで連絡が来た。

「……場所はやっぱりお店か。そろそろ夕方だが何の話だろうか」  
支度を済まして部屋を出る。

「くっつ、本格的に寒くなってきたなあ……」

店までの道を歩いてみると、横道からの冷たい風に体が震える。白い息も出るし手とかも超冷たい。

「俺も手袋とか買おうかなあ……?」

今日、高嶺は観覧車で明月さんから手袋を貰うはず……。羨ましいなこんちくしょう。

まあ、告白前にいなされて肩透かしを食らうけどな!……。後で慰め、では無いがまた話でも聞いてみよつと。

店に着き、裏口から入ろうとするが、鍵が掛かっていた。

「……う・あれ、四季さんが開けて無いのか?」

店に来ているから、こちらの鍵を開けているはずだが……。

「予備は部屋に置いて来てるし……表が空いてるのか?」

仕方なく表に回ってドアを触る。

「あ、こっちは開いてんのか……」

表の方が開いていたため、扉を開けて中へ入る。

「お、おかえりなさいませ、ご主人様つ……!」

「……」

お店に入ると、そこには引きつった笑顔で俺へ”お帰り”と頭を下げる四季さんが居た。

「失礼いたしました」

あまりの状況に一度ドアを閉めて外に出る。

い、今の、四季さんだよな?しかも前のウエイトレス姿で。な、なにをしているのだろうか……?」

……あつ、あれか。高嶺にも相談があると言ってその代わりにとか言ってたあれかっ!なるほどなるほど。もしかしたら俺にも同じ手段を使って来たとかか!

自分の中で納得をして再度お店へ入る。

「おかえりなさいませ、ご主人様つ……!」

「……」

取りあえずもう一回ドアを閉じる。

うむ。紛うことなき四季さんだ。無理して引きつった笑顔を浮かべながらメイド喫茶ごっこをしている。……あと何回か楽しませて

くれるのだろうか？

「もう一回行ってみるか」

面白くなって来たので再度ドアを開けて中へ入る。

「おかえりなさいませつ、ご主人様っ！」

はは、それじゃあドアを閉めてー

「おい」

こちらがドアを閉めようとする、ドスの効いた良い声でそれを阻止してくる。

「途中から楽しんでない？」

「いや、逢魔が時にはちよつと早いなって思ってた、幻覚かと思っただ」

「誰が魔物かっ！……取りあえず、中に入ってくれない？」

「もう少し楽しめそうだったんだけど……」

「ああ？」

「いえ、何でもないです」

ウエイトレス姿のメイドに睨まれながら席へ案内される。

「それでは、こちらのお席へどうぞ」

「ありがとうございます」

折角だし、この流れを楽しまなきゃ損だよな？後でどんなお願いが来るか分からないけどよ！

「メニューはこちらになります。本日はドリンクのみとなっておりますが、如何いたしましたでしょうか？」

「んー……それじゃあ、アールグレイでお願いします」

「畏まりました。少々お待ちください、ご主人様」

こちらに可愛らしく一礼をしてカウンター側へ入る。

……いつもの凛々しい四季さんも良いが、こういった下手くそな媚び売り接客も見ていて悪くないな。表情のことは置いて

お店のメニューを見ながら待っていると、お湯が注がれる音と、暫くして紅茶の香りが鼻に届く。

「お待たせいたしました、ご主人様。アールグレイです」

「……どうも」

なんか、四季さんにご主人様って言われると、笑ってしまいそうだな。我慢しないと……。

「砂糖とミルクは如何なさいますか？ご主人様」

「あ、えつと……それじゃあ、それぞれ一つずつで」

「畏まりました。では、まずはお砂糖から、フリフリ♪」

「……っ、……ふ」

「続いて、ミルクも。シヤカシヤカ♪」

「……シヤカシヤカなんだ」

「それではご主人様。ご主人様と一緒に最後に萌えを注入したいと思えます」

砂糖とミルク淹れ終え、最後の大事な仕事が始まる。

「はい、ご一緒にー！ー萌え萌えキュン♪」

胸の前でハートを作り、それを紅茶へ向けて放つ。それを見て、俺もハートを作り、同じような動作をする。

「萌え、萌え、キューーーーーッ！入れっ！俺の魂い！！第三者目線から見たらかなりきついことしてるけどそれを恥ずかしがりながら耐えて萌え萌えキュン♪としている大学三年生のメイドさんに負けないくらいの萌えを！今ここにー！ー！」

「おい」

「あれ？何かご不満？」

「不満しかない！自分でもわかってることをいちいち口に出すなっ！」

「分かりながらも俺の為に頑張ってる四季さんの努力を無駄にしない為に精一杯付き合ってたつもりなんだが……」

「さっきの言葉で全部だめになってるから！」

「それで？今日は随分と趣旨の違うことをしてたけど……、もしかして何かしたい事でもあったのか？」

「……はあああー……ちよつと待ってくれる？心を落ち着かせる時間がほしい」

「そんな時におすすめなのは、このアールグレイ。安らぐぞ」

「そうね。ワタシも飲もうかな……」

疲れ切った様な声で自分の分の紅茶も淹れにいく。

「……では」

淹れて貰った紅茶を飲む。……美味しいなあ。しかも前より違いが分かるぐらいに美味しくなってる。俺が憧れた紅茶をこうして飲むとか……これだけで心が満たされる。

「な、なんだこれは……!」瞬強い香りを感じさせながら安らぐような口当たり!後から来る渋みが口の中でサツパリとしている……!それで体と心を温めてくれるようなこの安らぎと優しさは……?!?」

「これが萌かつ……?!素晴らしい!確かに萌えを感じる!流石はメイドさんの萌えが注入された紅茶だ!一味違うっ!」

「おい」

隣を見ると、自分の分のカップを手に持ち、絶対零度の眼差しでこちらを見ている四季さんが居た。

「あ、いえ、一応萌えに対する評価を……しておこうかと思いましたが……ね?」

「今のは明らかに死体蹴りでしょうがっ!」

しておかないといけないという、使命を強いられているんだ!

「と、少しは落ち着いたか?」

「多少はね。……未だに恥ずかしいけど」

「困みに言っておくが、個人的にはあんな下手くそ演技では無くていつも通りのキリつとした四季さんの方が刺さります」

「下手くそって……いやまあ、反論が出来ないなあ」

「練習したら様にはなると思うが……」

「しないからっ。する予定もないから」

「それじゃあ、なんでメイドの真似ごとを……?」

「それは……ほら、日頃のお礼をしたくなって考えてたら……」

「日頃の……?前みたいにご飯ご馳走になった時みたいなの?」

「そう。澤田君最近色々頑張ってるし……少しでも癒しがあつた方が良くはなっ」

「なるほどお。それでご主人様と来たわけか……」

メイド喫茶で癒されるのは……まあ、何となく想像しやすいが、それを自分で実行する辺り……。

「分かった。四季さんの気持ちと姿勢はしっかりと伝わった。方向性はあれだけど、その気持ちはしかと受け取った!」

「途中から自分でもおかしいとは思ってた。けど、今更止める訳にもいかないし……」

今更自分の所業を省みたのか、恥ずかしそうに顔を伏せる。

「いや、その気持ちは素直に嬉しかったし、おも……楽しかったぞ?」

「そうよね。さぞ滑稽だったでしょ」

「それは……うん」

「ごめん、嘘は付けない。」

「ああ……っ。忘れてっ! さっきまでのメイドは忘れて今から仕切り直させて!」

「仕切り直すって……まあ、いいけど」

「ごめん、やっぱり嘘つくわ。忘れられん。」

「……ありがと。じゃあワタシ、着替えて来るから少し待ってて」

「あいよー」

少し焦りが見えながらも着替えに奥へ消えて行く。

「……結局、俺を労わろうとしていたで、良いのか……?」

イマイチ良く分からない空気のまま、戻って来た四季さんと一緒に店を出る。

「んでんで、後半戦? はどの様なご用件で?」

「さっきのは失敗したけど……今度は大丈夫……」

何だか自分に言い聞かせるみたいに意気込んでいるなあ……。

「……澤田君って、冬なのに手袋やマフラーってしてないの?」

「ん? ああ……問題無いだろうって少し舐めていたけど、結構寒いし今度買おうかなって考えてる」

「……そう。なら、ちょうど良かった……」

小さくそう呟くと、手に持ってた紙袋を俺に差し出して来る。

「……これは？」

「……少し早いけど、クリスマスでしょ？」

「……つまりは、プレゼント……ということか？」

「正解。持って無さそうだったし、ちょうど良いかなって」

「……えっと、中を見ても？」

渡されてプレゼントを手に持ち、聞いてみる。

「……お好きにどうぞ」

封を開け、中を見ると、そこにはマフラーがあった。

「マフラー……？」

「これから冬でしょ？それに……以前肩の傷の時にダメにしていたのを思い出してね」

「そういうこともあったなあ……」

最新のファッションとかボケていたっけ？

取りあえず開封してマフラーを手に持つ。黄色……ではあるけど、明るめでは無く少し薄く重め……という感じだろうか？

「……あつ」

色の名称や例えを考えていると、一番近い色を見つける。

「……どうか、したの？ワタシの目を見て……？どこかおかしい？」

「いや、何でもない。良い色のマフラーだなんて感動してた」

「ほんと？趣味に合わないとか、ダサくなかった……？」

「いや、全然。何だったらこれに見合うか考えるくらいには良いセンスしてると思う」

「そこまで大した色じゃないでしょ……」

まあ、自分では滅多に気づかないか。

「早速、使ってもよろしくて？」

「逆に使われなかったらショックだなあ……。その為を選んでんだし」

「それもそうだな」

買ったばかりのマフラーを試しに首に巻く。新品の匂いと、首へのチクチクとしたダメージはご愛敬だろう。

「……最高。この世界で生まれ直して本気で良かった……」



「だからそんな大げさな……。でも、喜んでもらったのなら良かった」

「……四季さん」

「ん？」

「俺は四季さんからプレゼントを貰った。それはオーケー？」

「うん……。あ、でも、だからと言ってそっちも無理にしなくても良いから。これはワタシがしたくてしただけ」

「そうか……。そうだな。なら問題無いな。……実は、俺も既に用意はしているんだ」

「……え？ そうなの？」

「ああ。もしかしたら四季さんがこういったイベントを好まないって可能性を考慮して軽くで済ませようかなって考えていた」

「あー……。まあ、確かにあんまりそういうイベントは避けてたかなあ？」

「だから幾つか考えていたけど、先にされたなら特に隠す意味は無いかなと結論づけました」

「なんだか物凄く気を遣われている様な……」

「まあまあ。ということで、俺も四季さんへのプレゼントはあるのです！」

「そうなんだ……。でも手ぶらだし……。もしかして部屋にあるの？」

「そうだな。部屋にあるというか……。部屋自体というか……」

「……？ どういうこと？」

「いや、実際その場で渡したいし……。そっちが良ければ俺の部屋でお茶でも飲まないか？」

「……なにそれ、ナンパでもしてるつもり？」

「いやいやー、さっきお店では俺が癒されたし？ 今度は四季さんが癒される番かなあってさ」

澤田君がワタシへのプレゼントを既に用意していたとか……

ちよつと、いや、かなり嬉しい……かも？ 案外抜け目無いし。

でも、どうしてわざわざ部屋でお茶を……？ 今度はワタシを癒すとか言つてたけど……？ っつて、いやいや、まさか澤田君がコスプレとかしないでしょ!?

それなら渡すついでに何か話すこととか……？

「……ッ!？」

「ん？ どうかした？」

「あ、ううん。気にしないで」

とんでもないことを思い付いて自分で驚く。いやいやいや、まさか……ねえ？ 澤田君に限つてそんな……。今だつて普段と変わらない様子だし……。

チラリと隣を歩く彼を見る。何かを企むかの様な感じで楽しそうな顔をしている。

……なさそうだなあ。うん。

いつも通りの姿を見て安心する……と、同時に少しガツカリとか……いや、別に期待とかしているわけじゃないけど……なんか女として悔しく思う。彼にとつてワタシはあくまで協力したり守る立場なのだろうか……？ でも、入院中に見たあの夢では……。

「んーむ……」

もつと分かりやすい態度とかしてくれたのなら、こつちとしても……つて、もうしてるか。すごく嬉しそうだもんね。

腑に落ちないモヤモヤ感と嬉しいという気持ちかせめぎ合いながら澤田君の部屋につく。

「お邪魔……します」

「どうぞどうぞ。本日初公開の特別仕様になります。是非楽しんで行つて下さいませ。お嬢様」

「特別仕様？」

そういえばさつき、部屋がどうこうつて言つてたし……なんだから。通路を進んで部屋へ入る。

「あつ、炬燵買ったんだ……」

そこには、以前には無かった炬燵が置いてあつた。

「いい機会だったからな。これを機に買ってみたい」

「へえー、いいじゃん」

「だろ？是非とも寛いでくれ」

「それじゃあ、早速……」

スイッチを入れて中に入る。……その内温まるか。

「あ、それと。これは俺からのクリスマスプレゼント」

紙袋を炬燵のテーブルに置く。見た感じだと一つはお菓子のロゴに見える。

「今開けてもいい？」

「ああ。お好きにどうぞ」

紙袋から中身を取り出す。

「これは……紅茶？こっちは、お菓子？」

しかもどつちもそこそこ値段が高いやつだ。

「紅茶を選んでたら、どうせならお菓子もそれなりに合わせないと思つてや」

「嬉しいけど……結構かかったんじゃない？」

「多少はな。でも考えている内に楽しくなって勢いで買ったつてのものもあるのはある。だから気にせず受け取ってくれると嬉しい」

「楽しくなってきたて……、でも、うん。ありがたくもらおうかな？」

「是非ともそうしてくれ。……それと、ここに紅茶を楽しむためのセットがあるけど……飲んでくかい？」

「そんな屋台みたいなの……。それじゃあ、折角だし澤田君に淹れてもらおうかな？」

「毎度アリ。ゆっくり寛いでてくれ」

ワタシから紅茶を受け取り、準備を始める。

それにしても、紅茶と焼き菓子かあ。こう言つちやなんだけど、澤田君にしては無難な物を選んだ気がする。それとも、意外とこう言つたのは苦手だったりするのだろうか？

「ひとつ聞いてもいい？」

「何なりとお申し付けください」

「どうして紅茶とお菓子にしたの？」

「……もしかして、ご不満だった？」

「それは違う。もらったのは素直に嬉しいのはほんと。でも、なんか澤田君にしては無難だなあ……って思っただけ。もつと変なこととかして来てもおかしくないし」

「四季さんの中の俺がどういう人物像なのか理解するには十分すぎる言葉だな。否定はしないけど」

「自分で認めてどうする……」

「まあ、これに関してはずまず外れない物を選んだのは確かだ。ここを外したら目も当てられないしな」

「そうなんだ」

結構気を遣ったのだろうか。

「あと、俺のプレゼントはその紅茶たちだけではないぞ？」

「……？え、まだあるの？」

「さっき言っただろう？今度は四季さんが癒される……いや疲れを癒す番？」

ポットにお湯を注ぎ、蒸らしの待ち時間にこちらを向く。

「紅茶とお菓子だけだとなんか味気ないって思っただけ。どうせならそれを味わう空間も楽しませてあげたいと思っただけさ！」

「……空間を？」

「そう、だからまずは炬燵を買った！寛げる場を！次に紅茶を飲みながらそれに合うだけの菓子を食べる。なんて贅沢……っ！」

「えっ、もしかして……その為に炬燵を買ったの!？」

「いや、元々どこかで買う予定ではあった。……この2つが組み合わせることで人は墮落するだろう」

「……アホなの？」

「ええっ!?!でも、実際に墮落するだろ？気は抜けるし炬燵からは抜け出せない。気持ちは怠惰へと落ち、炬燵の一部と化するだろ？」

「それは……まあ、確かに炬燵の魅力には勝てないけど」

「そこに何もなくても紅茶とお菓子が付いてくる。最高だろ？」

「それは、認めざる得ない……かな」

「なら大人しく癒されてくれ」

……これがクリスマスプレゼント……？いやでも、澤田君なりに考えてくれたし……面白いと言えば面白い……かも？普通に炬燵はありがたいし。でも、そんなノリで買っちゃうものだろうか……？買う予定だったって言うてはいたけど。

もしかして、前にワタシが言ったから……とか？いや、んなわけないか。既に検討していたし。

「お待たせしました」

「ありがとう」

置かれた紅茶を持ち、飲んでみる。

「……美味しい」

「高い葉を使ってるだけはあるそうか？」

「かなり」

けど、それらの味をちゃんと出させる淹れ方をしてるのも凄いと思う。

「んじや、俺も飲んでみよっかな……うむ、美味しいな」

「流石値段だけはある」

「けど、さっきの萌えを注入した紅茶には勝てないかなあ？」

「それを蒸し返すなあっ！」

「いや、紅茶を蒸してたらそっちの記憶も自然と蒸し返してきて……」

「うわーないわー。炬燵の温度上げないと……」

「駄目だったか……」

「折角の紅茶が美味しくなく感じる位にはね」

「マジか。なら口直しにお菓子でもどうぞ」

「そうしようかな」

折角美味しい紅茶を飲んでるのに、こっちも食べないのはもったいないしね。

「結構色んな種類が入ってるんだ」

袋を開けると、クッキーやチョコプレート、フィナンシエ、マドレーヌなどが入っていた。

「結構有名な所だし、味は保証しておこう」

「その心配はしてないから大丈夫だけど……なんか申し訳ない無い感じがあるなあって」

ワタシはマフラー1つに対してこう色々してもらってるのは……。

「四季さんもお店で楽しませてくれたら？」

「……あれはこっちとしてはノーカンにしておきたい気持ちが……ある」

「俺にとつてはあれもプレゼントだと思ってる。なんせ一生経験出来ない様な体験だったからな！」

「だからあれは忘れてって言うてるでしょ……？」

くくっ、ああもうっ。どうしてあんなことしちゃったのだろう……。しかも、結局はいつも通りのの方が好みとか言われるし……。

紛らわせるようにクッキーを1つ開けて食べる。

「……うん、やっぱり美味しい」

「ならよかった」

「はい、澤田君も」

手元に置いてある入れ物をテーブルの中央へ置く。

「……良いのか？」

「当たり前でしょ。目の前に居るのにワタシだけ食べるほど無神経じゃないし……それに、こう言ったのは誰かと一緒に食べた方が美味しく感じるんじゃないの？」

以前にワタシにそう言っていたのを思い出して口にしてみる。

「……ははっ、そうだな。そっちの方が美味しいよな」

ワタシの言葉に驚くような表情をして、嬉しそうに頷く。

「ではお言葉に甘えて頂こうかな？」

入れ物からワタシが食べたのと同じのを取り、食べる。

「うま。滅茶苦茶上品な味がするなあ。よく知らんけど」

「なんだか洗礼された味って感じがするよね」

「有名なだけはあるよな……。紅茶にも合うし。これが……マリ  
アージュ」

「……火打谷さんの真似？」

「お、よくわかったな。この前の焼肉でオリジナル丼食べてた時の台詞」

「あく……確か明月さんがスマホを買った日の」

「そうそう」

「高嶺君、上手く告白出来たかな……？」

「無事遊園地のチケットは渡しているんだよな？」

「うん。言っていた通りプレミアムの方をね。あ、もう2枚はどうする？」

「……一応俺の方で預かっておこうかな？」

「どうしてわざわざ4枚も買ったの？誰かに渡す予定……だったりする？」

前に澤田君の願いで遊園地のチケットを4枚入手したけど……今回高嶺君に渡したのは明月さんの分も合わせて2枚だけ。残りは何に使うんだろうか……？

「あとでちよつとな。明月さんに渡す予定」

「明月さんに？」

「ああ。これに関しては今日次第ってところもあるけど」

「ああ、そういうこと」

多分、二人が付き合ってからもう一度遊びにいくとか、そんな感じなのだろう。

「周りから見ても、良い雰囲気だったしOKしてもらえるんじゃない？」

「ん？……ああ、そういえば言っただけだったな」

「何が？」

「今日の高嶺の告白は失敗に終わるぞ？」

「……は？」

「は？……え？どういうこと？成功しないの!？」

「そうだな」

「ええ……ちよつと待って。今日の告白の為に前から色々と仕組んできたんじゃないの？」

「そうだな。今日高嶺が明月さんに告白をする為に色々としてきたつもり」

「なのに……玉砕？」

「正確には告白前に明月さんから牽制で止められる……が正しいか」

「……え？そつちもよく分かんないんだけど？明月さんって少なくとも高嶺君のこと嫌いとかじゃないと思うし……」

「高嶺は人で、明月さんは死神。これが全てだな」

「……そういうことね。そう言われると、頷くしかないのかな？」

「だから明月さんは高嶺の告白を躲すんだよなあ……」

呆れながら笑ってる彼は、失敗するって分かってても特に焦りも感じていない。ということとは……。

「……既にそれが分かっててそのままにしたの？」

「まあな」

「つまりは、それも澤田君の作戦の一つ……ってこと？」

「ご名答。正解した褒美にお菓子を1つ贈呈しまーす」

テーブルの上にあるお菓子を1つ取ってワタシの前におく。

「どうも。それで？何を考えてるの？」

「そりゃ、どうしたら二人が無事にハッピーエンドに辿り着けるかを考えてるさ」

「はぐらかさないで。ワタシが聞きたいのはその具体案」

「いや、この後は特に何もしないな。あとは高嶺の勇気と諦めの悪い性格を信用しているだけ」

「えつと……高嶺君は、まだ諦めていない……？」

「うむ。高嶺にとつては人生初の告白で、かなり気合を入れたはずだ。そんな告白をする前から察しては逸らされたら肩透かしもいとこだろ？」

「それは……確かにそうかも」

「だからまだ諦めきれないはず。明日にでも新展開が待ってることに期待でもしておこうか」

そう話すと、静かに紅茶を飲む。



「けど、例え付き合えても明月さんが死神であることは変わらないんだけど……？」

たえ両思いだったとしても、大前提として立ち塞がる壁は高い。

「そうだな。それに……」

「それに？」

「いや、これは今話すことじゃなかったな。でも何とかなるだろう」

「その根拠は……？」

「……ふふ。愛の前に、種族や年月の壁などいとも簡単に崩れ去るものさ」

ふっ。つとニヒルに笑う。

「いや、なにキモイことを決め顔で言ってるの……？」

「辛辣う……!?結構いいこと言ったと思っただけどー」

誤魔化す様に答えるつてことは、まだ言えないことなのだろう。

「ひとつだけ確認させて」

「答えられることなら」

「澤田君が考えてる二人のは……いつ終わりそうなの？」

「来年の元旦の日、だな……。その日の初詣に行ったら終わりだ」

「……そういうこと。了解」

以前に一人で初詣に行くとか言っていたのはこのことだったのか。……来年の元旦ね。それなら大して待つことも無さそうだし、今は良いかな。

本当なら今日、少し勇気を出してアプローチでも掛けてみようかと考えていたが、今の話を聞いてその気持ちも無くなる。

今は向こうの事に集中しておきたいはずだし、余計な事で気を回して迷惑をかけたくないし。

それとさつき、『それに……』の後の濁しかたが明らかにわざとらしく見えた。直前の表情も一瞬目を伏せて悲しそうな顔もしていた。そうさせてしまう様な何かをしようとしてる。間違いない。

ワタシが今すべきは、色恋に現を抜かすのではなくて……彼の力になること。少しでもその負担を減らすことだ。

「……ワタシに、何か手伝えることはある？」

「……そうだなあ。もし高嶺が落ち込んで相談でもしてきたら、発破でもかけてほしい。まだチャンスはあるぞってさ」

「ん。了解……もし何かあったらすぐに頼ってもいいから。力になれるか分からないけど、話くらいは聞くから」

「サンキュ。……って、折角の場なのに暗い話はあまり良くないな。紅茶も冷めるし新しく淹れ直そう」

「……それじゃ、お願いしようかな？」

## 第71話：告白

「おはようございます」

「おはよー」

「おはよう」

クリスマスイヴの朝、今日のケーキを作るためか、いつもより涼音さんの気合が入ってる気がする。

「さっ、今日と明日は忙しくなるよ。昨日はちゃんとリフレッシュできた？」

「あー……まあ、それなりに……」

高嶺としては、むしろ悩みが増えただろうな。話を聞きたいが、今は準備を進めなければいけない。

「おはようございます」

と、そのタイミングで明月さんも入ってくる。

「おはよー」

「おはようさん」

「高嶺さんも、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「今日は色々忙しくなりそうですけど、頑張りましたよね。私も練習はしましたけど……もし不手際があった場合は助けってもらえると、ありがたいです」

「分かってる。って言っても、俺も助けてもらおう立場かもしれないけどな……」

「それなら俺も助けてもらおうことにしようかな？」

「アンタらはしっかりと練習したでしょうが」

「ういっす」

「それじゃあ、始めましょうか」

「そう、だな……」

昨日のことが引つかる高嶺にと、それをなるべく表に出さない様に取り繕っている明月さんを交えたケーキ作りが……今、始まる！

「で〜きたあ〜……ふひい〜……」

とは言ったものの、特に何も起こらずにケーキの準備が完了する。

「お疲れ様です」

「はあ〜……手首ぶっ壊れそう……いつもより神経使ったあ〜……」

無事やり切った涼音さんがへなへなと崩れて行く。

「本当にお疲れ様です」

「数はそこまではいえ、やっぱり大変だわあ〜……」

「どうします？取りあえず休憩に入られては？」

「そうですね。開店してからすぐはお店の方も落ち着いていますし、午後からも作るのですたら今の内に休んでいた方が涼音さんのもいいかと思えます」

「そう？なら、お言葉に甘えて……あとは、よろしく……」

初っ端から疲労感がヤバそうな涼音さんを送り出す。

「高嶺さんと澤田さんもお疲れ様でした」

「ああ、おつかれ」

「明月さんもお疲れ。こちらの片付けは俺らに任せて、すまんがフロアの準備を進めてもらっても良いか？」

「分かりました。それではフロアの方へ行ってきますね」

いつも通りの笑顔を浮かべながら厨房を出て行く。……よし、これで場は整ったな。

「さてと、これで話易くなったな？高嶺」

「……何が言いたいのですか？」

「さっきの二人を見るに、フラれた……ではないな。告白していないのか？」

「……そうですね。実は……」

昨日のことを話し始めようとする高嶺。

「あ、すまん。ちよっとお待ち」

その話を一旦止める。

「そこで『どう声をかけて入ろう……？』と迷ってるお方。どうぞ中へ」

「え？ああ、四季さんか……」

厨房の入口から困った様子でこちらを覗く四季さんと呼ぶ。

「ごめん、盗み聞きするつもりとかはなかったの」

「では、3人が揃ったところで、高嶺から改めて聞かせてくれ」

「……昨日、二人で一緒に遊園地に行つたんだ。デート自体は上手く行つたと思うけど……肝心の告白がダメだった」

「ワタシの目から見ても、無謀だとは思わなかったけど……？」

「俺もいい雰囲気だとおもつただけだなあ……、けど、告白が出来なかった」

「何かあつたの？」

「いや、今から言うぞつ、って雰囲気を出したら……牽制された。自分は死神だから……みたいな感じで」

がつくりと肩を落として顔を下げ高嶺。それを聞いて四季さんが俺をチラリと見る。

「あ……そのことを持ち出されると、気軽に口は挟めないなあ」

「なるほど。それを理由にやんわりと断つたつて訳か」

「ですね……でも実際のところ、なんか肩すかしというか……振り上げた拳をどう下ろせば良いのかわからないというか……」

「もやもやしてるつてわけね……」

「そんな感じ。以上、報告終了……で、ここから新規相談案件がある……」

「ほう」

「諦めてないというわけか、聞こうか」

「しつこい男つて女の子としてどう思う？」

「誰かに好きつて言われるのは、悪い気はしないと思う」

「だよなっ!!」

「嫌いな相手に何度も何度も言い寄られるのはウザいけどね」

「でも、高嶺の場合はその通りじゃないしな。可能性は大ありだと俺は思う」

「ありがとうございます。一応最初からその気だったので、安心してました」

「でも、いいんじゃない？高嶺君が諦めの悪い男なのは、明月さんだつて分かつてるだろうし」

「俺ってそんなにしつこいか？」

「そりゃそうでしょ。未練を残したまま死にたくなくて世界を巻き込んでまでやり直す男のくせに」

「ははっ、言ってるな。そんな男がたかが告白を躲されただけで諦めるとは到底思えんなっ」

「……そっか。そうだった……そうだよな」

自分に自信が持てたのか、さつきより良い表情になった。

「そうだな、諦めが悪い男なんだからしようがないよな！」

「けど、ストーカーで逮捕って言うのは御免だからね」

「インタビューで『いやー、いつかはやるとは思っていました……』って答えるか」

「ブレーキ踏むべきって感じた時はどうか俺を止めて下さい」

「俺が責任持って止めてやろう。高嶺の意志は固まったし、あとは明月さんとのセッティングだな」

「そうですね……でも今日は忙しいですし」

「そこは俺に任せてくれ。また前みたいに話し合う場は整えてやろう」

「ほんとですかっ？」

「ああ。最高のな……」

フロアにまで届く愛の告白の場をな……。

あと、隙を見て明月さんに仕込んでおかないとな……『高嶺が疲れてるように思える。後で良いから様子を見てほしい』とでも言えば大丈夫だろう……。二人が奥へ行けばあとはお祭りって戦法よ。

その後、高嶺が暇さえあれば明月さんを目で追っているのを注意したり、クリスマスシーズンの忙しさに翻弄されながらもなんとか1日を終える。

「ご馳走様でした。また寄らせてもらいます」

「ありがとうございます。心よりお待ちしております」

本日最後の客が店を後にし、営業を終える。

「……高嶺」

「はい？」

「奥の部屋へ行って待つててくれ。明月さんを送る」

「え？いえ、でも片付けが……」

「話がついてからでも大丈夫。いいからいいから」

「わ、わかりました……」

ここそと話し、奥へ送り出す。それを見送ってから、表の看板をしまった明月さんに声をかける。

「お疲れさん」

「澤田さんも、お疲れ様です」

「夕方辺りに言ってたけど、高嶺がやつぱり少し疲れて様に見えた。だから休憩室で休んでもらうように今言った」

「っ!?……わかりました。少し様子を見てきます」

「すまんが頼む」

「気にしないで下さい。これも私の役目なのですから」

そう言つて高嶺の様子を見に奥へ消えて行く。

「うむ、これで完璧」

満足そうに頷いていると、四季さんが馬鹿を見るような目で俺を見ているので、取りあえずグッドポーズを送り返す。

「さつてと、片付けでも始めましょうかね」

フロアの掃除や片付けを進めていると、涼音さんが話しかけてくる。

「昂晴は？」

「高嶺でしたら、奥の部屋で明月さんと話してますよ」

「話？なんでわざわざ奥で……告白でもしてるの？」

「さあ？個人的なお話でもしてるんじゃないですかね」

「まあ、それならいいや」

所在が分かったことで納得し戻っていく。

このまま二人のそこへ行かない様に防衛しつつ片付けをして行けば大丈夫だな。

「ちよつといい?」

後ろから四季さんに呼ばれる。

「ん?ここは通さないぞ?どうしても通りたいのなら俺を倒してからにしま」

「いや、通らないから。奥に行つたみたいだけど……大丈夫なの?」

「ふっふっふ、大丈夫だ。高嶺なら上手くやってくれるはずさ」

「ならいいけど……」

「むしろ明月さんが逃げないか若干の不安要素があつて困るんだよね」

「あゝ……また話を逸らされたり?」

「それぞれ。……けど、まあ心配要らないだろ」

「はてさて、どうなることやら……」

「結果を楽しみにして、こっちは片付けを続けよう」

「そうね」

話を終え、持ち場に戻ろうと背を向ける。

「俺は栞那のことが好きだ!」

「……」

無言でお互いに振り返る。周囲を見ると、全員が作業の手を止めて、声のした方向へ視線を向けていた。

「い、いまのって……昂晴君の、だよね?」

「好きですっ!アナタのことが好きですよっ!」

「こ、今度は栞那さん……っ!」

「まさか冗談で言つたつもりが、ほんとに告白とはねえ……」

「え、ええ……昂晴先輩と栞那さんが……!」

「どうやら、上手く行つたみたいね」

「そうだな。致命的な何かを失う羽目になるけど」

一応作業を続けながら通路に意識を向けていると、主役のお二人が戻ってくる。

「あの……すみませんでした。片付けの最中に抜け出してしまうて



……」

「いい、いえ。平気ですよ。片付けくらい、アタシたちだけでも出来ま  
すからっ」

「悪い。決してサボるつもりはなかったんだ……大事な用件があつ  
て」

「いいのいいの。全然いいの。そうだよ、昂晴君にとっては大事  
な用件だよ……」

「~~~~~ツツ!!」

帰って来た高嶺達を見て、墨染さんと火打谷さんが顔を赤らめて目  
を逸らす。

「……なあ、四季さん。あの2人、どうしたんだ？怒ってる……のと  
は、ちよつと違うっぽいけど」

「単純に、どう目を合わせて良いのか分からないんでしょ」

「何故……分からないのですか？」

うむ、本人たちは一切分かっているいな。

「そりゃ、そうでしょう……ねえ？」

面白い様な表情を浮かべ、こちらに同意を求める。

「ああ、そうだな。なんせ……」

「俺は葉那のことが好きだ！」

「ーツツ!!」

俺の台詞に高嶺が目を見開く。

「好きですっ！アナタのことが好きですよっ！」

「んなあっ!?!」

俺の台詞に続いて四季さんも明月さんの台詞を再現する。それを  
聞いて本人が驚く。

「な、な、なんでそれっ……!」

「なんでもなにも……あれだけ大きな声で叫ばれちゃ……ねえ？  
こつちに聞かせたいのかと思つた」

「……、確かに。大きかったな」

冷静になった高嶺が、自分の行動を振り返って納得をしている。

「~~~~ツツ！」

隣の明月さんは未だに立ち直れていないご様子。

「あ、お祝いに特大のケーキでも作ってあげようか？交際記念のチョコプレートもつけてさ」

「お気持ちだけで結構です。あからさまに技術の無駄遣いをした嫌がらせにしか思えないので止めてください」

「あ、あのっ、キスって……どんな感じでした？ど、どんな味でした？」

「いや、まだしてないから」

「ね？ね？いつから？いつから昴晴君ってば、栞那さんのこと好きだったの？」

「いつからかな……いつの間にかにって感じだったけど……」

「細かく説明しなくていいですからっ、そういうの！」

墨染さんと火打谷さんに質問攻めされる高嶺と、それを阻止しようと動く明月さんの図が出来ていた。

「なんにせよ、おめでとう」

「そ、そうですよね。まずはおめでとうございます、ですよ」

「おめでとうございます」

「おめでとう」

「あ、ありがとうございます……ございます……」

皆からの祝福を受けて、恥ずかしそうに顔を伏せる。

「高嶺」

女性陣で話している隙に高嶺を連れ出す。

「上手くやってみたんだな。おめでとう」

「はい、色々協力ありがとうございました」

「したのは精々場を作っただけだ。それを活かして行動したのは高嶺自身だしな。……これで取りあえずは一安心だな」

「ご心配をおかけしました」

その後は少しだけ皆で盛り上がったから、片付けを再開した。

「いやー、無事二人が付き合ってくれたなあ……」

「そうね、お店中に聞こえるぐらいの大告白をね……」  
店を閉め、さあ帰ろうとすると、案の定四季さんに呼び止められたので、一緒に帰り道を歩く。

「でも、これで終わりじゃないんでしょう？澤田君が言った最後は年明けだし……」

「だな。これでようやく最終段階に入れたって感じ」

「今後の続きって、今から話せたりは……出来そう？」

「……そうだな。折角ここまで協力してもらったのに最後は駄目とは行かないもんな」

「もし澤田君が隠しておきたいって言うなら無理には聞かないけど……」

「いや、話すよ。知らないままだと四季さんが困ると思うから。……取りあえず、俺の部屋で大丈夫？」

「うん、了解」

なんか毎度この流れで俺の部屋に来ている様な気が……まあ、他に安心出来る場所が少ないんだけどな。

「今日はおてなしは出来ないけど、どーぞ」

「お邪魔します」

部屋に上がり、暖房と炬燵の電源を入れる。

「ほい、お茶」

冷蔵庫から飲み物を淹れてテーブルに置く。

「ありがとう」

「そんじゃあ、早速話すとしましょうか」

炬燵に入ると、それなりに暖まって来ていた。

「えーっと、今日、無事高嶺と明月さんが交際を開始しました」

「ええ、作戦通りにね」

「実は、明月さんが高嶺との交際を断っていた理由があります」

「死神だからじゃないの？いや、改めて言うくらいだし別の……？」

「ああ。今日が24日だから……6日後の30日だな。この日に明月さんが蝶に還る」

「……え？明月さんが蝶に？どういう意味？」

「順を追って説明するから聞いてほしい」

「う、うん……」

「明月さんが死神で、その身体は蝶で構成させてるのは知ってるよな？」

「知ってる。前にその話を聞いた」

「前提として、死神って言うのは一時的な存在なんだ。神の元へ還した蝶が集まり、新たに生まれ直すまでの準備期間に死神として存在している。そして、その準備期間が終えれば再び、蝶になって還り、生まれ変わって新しい人生を送ることになるんだ」

「……それって、つまり明月さんは……」

「もうその時間が目の前に来ている。それが6日後の12月30日だ」

「た、高嶺君は、知ってるの……？」

「既に承知済みだな。昨日のデートでそれを聞いた。日付までは流石に知らないけどな。それでも諦めきれないって今日また告白した。明月さんからずっと一緒には居られないって言われても……」

「そうなんだ……」

「それで高嶺の説得に負けて、死神としての残りの人生を一緒に過ごすことを明月さんは選択した」

「ねえ……」

「なんだ？」

「澤田君は……このことを最初から、知ってたの？」

「そうだな、最初から知ってた」

「……そ、そう」

「四季さんが疑問に思ってるのは理解できる。『どうしてこんな結果を選択したのか？』ってところか？」

「……うん。別に責めるつもりとか一切ないけど……これだと二人が幸せになるなんて思えない……」

「ごもつとも。今のままだと幸せとは到底呼べないよな。あと一週間もせずに高嶺一人になるんだから」

「……あー、なるほど。明月さんを救う手立てがあるってことね？」  
「その通りだけど、何に納得したんだ？」

本題はこれからののに……。

「明月さんが蝶に還るのが12月30日。だけど澤田君が最後って言ったのは1月1日。2日差があるから、この間に何があるかってのを今から話す……違う？」

「あ、いや、当たってる。丁度それを今から話そうかなと……」

「そうなんだ、それなら安心かな……？」

「まだ内容を話していないぞ？」

「わざわざマイナスな事を前置きとして話したくらいだし、何か策があるんでしょ？じやなきや、高嶺君や明月さんに辛い思いまでさせて進めるはずがない。そうでしょ？」

「あー……うん。おっしゃる通りです」

「それで？何をやるの？」

さつきまでの不安そうな表情とは打って変わって、真剣な表情で俺を見る。

「……まずはこれまでのおさらいと行こうか」

「死神は、肉体的な成長がなく死ぬこともない。人と同じ見た目をしているが、決して人では無い。明月さんが死神のままだと、どうやっても高嶺だけが歳を取り、老いて、それを明月さんが看取ることになってしまう。それは明月さんにとっても辛いことになる。まずはそれを無くしたかった」

「その為には、明月さんが死神という存在から解かれる必要があった。やり方は簡単だ。明月さんが存在を保てなくなるくらいまで自身の魂を弱らせればいいだけ」

「1つ目は、高嶺が世界をやり直したことで、神から目を付けられた。あまりにも強すぎる魂は奇跡すらも可能にする。そこで明月さんが取った手段は、死神の鎌で高嶺の魂をギリギリまで刈り取り、自分の魂を使ってそれを補填する。その地点では明月さんという存在はギリギリの地点で保たれていた」

「2つ目は、少し前にあった高嶺の知り合いの野中君が居ただろ？」

「うん、覚えてる」

「あれを解決した経緯だが、高嶺が野中君の蝶に触れてしまったことで、負の感情が流れ込んできたんだが、逆に高嶺が強く意思を持つことで野中君に高嶺の明るい感情が流れ込み、感化されて前向きになったおかげで解決出来たんだ」

「だからあんなに早く終わったんだ」

「けど、高嶺も無事では無かった。蝶に触れば魂に影響を及ぼす。そしてそれは身体に現れる」

「もしかして……！高嶺君が次の日体調を崩したのって……」

「そう、蝶に触れたことで魂が衰弱してしまったんだ。このままだと命にも危険が及ぶかもしれない……そこで明月さんに高嶺のお見舞いを頼んだ。一緒に魂の状況も見えて欲しいって話をしてな」

「高嶺の魂が衰弱しているのが分かれば明月さんなら必ず自分の魂を譲渡してでも高嶺の魂を安定させるってのは分かっていたしな。そして、それをした明月さんはギリギリで保っていた魂が限界を迎えることになった……」

「と、ここまでが今までのおさらいだけど……疑問や謎は解けた？」

「色々よね……。澤田君が何を隠して、どうしてそんな行動をしていたのかが……。納得出来た」

「……何か聞きたい事とか、言いたい事があれば受け付けるが……？」

「……ううん、大丈夫だから進めて？」

「……了解」

もつとこう……文句とかやり口が最低とか人の心が無いのか！って言われてもおかしく無いと思うんだけど……。別に四季さんのなら喜んで罵られたのに。

「それで、俺はこのまま明月さんが蝶に還るまで待ち、その後……人として新しく生まれ直してもらおうと考えている」

「……それって、可能なの……？あ、でも、最初からって訳ではなくて澤田君みたいにそのままも可能か……」

「こそ、そんな感じ。そして後は高嶺に頑張ってもらおうことになる」

「高嶺君に？」

「ああ。そこら辺はあまり説明する必要が無いから省くけど、高嶺が頑張ることでもまた明月さんに会えるって感じた」

「それは、人に生まれ直した明月さんと……？」

「そう、人としてな……。そこまで来てようやくハッピーエンドつてわけだ」

「……それが間の2日間つてわけかあ」

「この後のことは特に協力してもらおうこととかないし、俺も様子をみるだけ。けど一応話しておかないと困るだろ？」

「そうね。聞かないままだったら問い詰めていたかも……」  
半笑いしながら手元のお茶を飲む。

「それなら話して正解だった」

話が終わり、俺もお茶を飲む。

「澤田君は、いつからこのことを計画していたの？」

「いつから……、9月からだが？」

「最初からつてことかあ……。なるほどね」

「ちゃんと動き始めたのは最近だけだな。それまではお店のことを集中していたし」

「なんて言うか……お疲れ様」

「まだ終わってないけどな。……それに、大したことはしていないからな」

「またそう言う……。労いくらい素直に受け取ったら？」

「ありがとうございます」

「うん、よろしい」

「……ただいま、っと」

澤田君に家まで送ってもらい、何事もなく帰宅する。

「はあああー……」

自分の部屋に無事戻ったことに安堵する。冷静にしているつもり

だけどやっぱり緊張というか……ドキドキする。

「まさか、自分がこんなことになるなんて、半年前じゃ想像もしてなかったなあ……」

お風呂のスイッチを入れて、お湯が貯まるまでの間ベットに座る。「9月の初めに明月さんから紹介されて、一緒にお店を開くことになって……」

あの時は普通の無害そうな人が来たというくらいの認識だった。

「それからコーヒーや紅茶の淹れ方や味を色々試して……」

明月さんと澤田君が買って来た豆で味の違いを……違いを……うん。

「その時だっけ？澤田君の昔話を聞いたのは……」

幼い頃に両親を亡くして、叔父に育ててもらい、紅茶を学ぼうとしたら変な施設へ連れて行かれて……ってあれは本当なのだろうか？

「……でも、あんな姿を見せられた身としては信じられないなあ」明月さんを庇って肩に傷を負い、同じ日の夜に犯人を追いつめてワタシのせいで足に……あの時のワタシは最悪だったなあ……。

「それと火打谷さんのもか」

計3回も巻き込まれて……いや、止める為に自分から行っていたのかもしれないけど。となると、ほんとにワタシの行動は余計だった。

「それから高嶺君が来て、急に状況が動いて……」

それまでの1ヶ月はゆっくりとしていたが、高嶺君が来て、火打谷さんが来て、墨染さんが来て、涼音さんが来て……無事お店が開けた。想定していたよりもたくさんのお客さんが来て今でもありがたいこととに？盛していると言ってもいいくらいには人が来ている。

「そして、その裏で色々動いていたと……」

この3か月を振り返る。すぐに思いつくのはワタシを揶揄ったり満面の笑みで変態発言をしている彼の姿だけ……、知らないところで沢山悩んで沢山決断をして……皆の為に頑張って来てくれた。

「……そもそも、澤田君が言ってる力っていつからなんだろ？」

高嶺君やワタシの、お店の事の未来が視えるのは事実。限定的なも



のとも言ってた。以前の口振りからしてこっちの世界に来る前から知っていたみたいだし……。

「……っ!？」

そこであることに気づく。

「澤田君の身体も……明月さんみたいに蝶で、出来てるよね……?」  
彼も明月さんみたいにワタシに似たようなことをしていた。確かおでこをくつつけて……。

「ま、まさか……っ!？」

嫌なことを思いついてしまい、すぐにスマホを取った。

## 第72話：クリスマススの願い

「……明日も忙しくなるし、早めに寝た方が良いよな」

四季さんを送り、自分の部屋へ帰るために来た道に戻る。

「ん？メッセージ……？」

スマホが通知で震える。中身を確認すると、明月さんからだった。

「んー……お話がありますって感じか」

『今お時間大丈夫でしょうか？』とメッセージが来ている。

『外に居るから平気。何か用件だったらついでにお店に寄るけど

？』つと……」

返信を書いて送る。ポケットにしまおうとすると電話がかかって来た。

「つと……ん？四季さんからか？」

予想外に明月さんからでは無く四季さんからであった。部屋に何か忘れ物でもしたのだろうか？

「はい、もしもし？」

「もしもしっ？」

電話に出ると、何か焦った様な声が向こう側から聞こえる。

「どうした？何かあったのか!？」

「あ、いや……ちよつと聞きたい事があって……電話しただけ。何かあったわけじゃない」

こちらが心配して聞くと、勢いを無くして徐々に声がしぼんでいく。

「聞きたいこと？」

「さつき部屋で話したことに、明月さんは蝶で作られてて生まれ直すって言ってたでしょ？」

「そうだな」

「それって……澤田君も同じ、なの……？」

なんだか……こつちが不安になりそうぐらい不安そうな声なのだ……。

「四季さんが言いたい事は分かった。先に言うと、それは無いな」  
「ほんとっ!？」

「ああ。俺の場合はあくまで似ているだけであって死神ではないからな。逆にどういった存在なんだよって言われると答えられないが……。取りあえず四季さんが心配している様なことは起きないから安心してくれ」

「……ほんと? 気を遣ったり、隠そうとか考えてない?」

「ほんとほんと。ここで変な心配させるつもりは無いし、本当はそうだとしたら明月さんの事とかを話して無いしな。バレる可能性があるし」

「……わかった。大丈夫で安心した……」

「変な心配させてすまない」

「ううん、こつちが勝手にそう思っただけ。ごめんね?」

「あんな話を聞かされちゃ心配になるのは誰だって同じだからな。気になったのはそれだけ?」

「うん、それだけ」

「了解。そんじやまた明日」

「うん。おやすみ」

「良い夢を」

通話を切る。

「……まあ、そう思うのもおかしくないよな」

実際、そうなる可能性も考えてあの時は行動していたわけだし。けど、実際無事に生きてる。

「……」

その理由は何となく……というか答えは分かっている。俺の中に居たあの少女……。蝶が代わりになったのだろう。あの日から姿を見せず、夢にすら出て来ていない。

「……結局、彼女の未練は何だったのだろうか……」

蝶となって現世を彷徨っていたのなら、何か未練があったりしていたはずだが……。そう言った話は一切聞かなかったな。

「俺とお茶飲んだり雑談しかしてないしなあ」

今更ながら何もしてやれなかったと少し悔やんでしまう。居るのを特に疑問に思わずに当たり前と考えてしまっていた。いや、途中から詮索するのを諦めた部分もあるが……。

「何かしらで報いるべきなんだが……」

そもそも素性を知らない、名前や歳すら。

「真っ先に解決すべき問題だったかもしれないのにな……って、そうだ。明月さんの返信！」

途中だったことを思い出してスマホを開く。

『もし澤田さんが平気なら、直接お話がしたいです』

……ふむ、これは中々重要そうな空気だな。

「そんじや向かいますか」

進路を変更し、夜のステラへ向かった。

「すみません。夜遅くに……」

「いいよいよよ、帰る途中だったしな」

「どこかお出掛けされていたのですか？」

「いや、四季さんを家まで送って来ただけ」

「ほう、ナツメさんをですか……。おやあ、もしかして、何かあったのですかあ？」

面白い物を見つけた様に俺を見てくる。

「いやー、残念ながら今日の高嶺と明月さんの様なことはなかったなあ。残念だけどっ！」

「あ、あれは……昂晴さんが……っ！」

「おいおい、既に名前呼びかよ」

「はっ!? うゝゝゝ」

自分の発言に気づき顔を赤くする。

「まあ、恋人なんだし普通だろ。特別感あって良いよね!名前呼びっ!いやー憧れるわあ……クリスマススイヴに働いてるお店でお互いに大声で愛の告白とか、一生もんだよ」

「んぐぐ……」

羞恥心のあまり顔が歪み始めて来ている。

「とまあ、揶揄うのはこの辺にしといて……どういった用件？何となく予想は出来るけど」

「……はい。今後の事や、色々と確認をしておきたくて……」

「俺に答えられることなら何でも。今日はいつも以上に聞きたい事が聞けるかもな」

「ありがとうございます。……ご存じの通り、今日昴晴さんとお付き合いですることになりました」

「ああ、昨日フラれても落ち込まなかった高嶺の勝利だな」

「……そう、ですね。あんなに言われちゃったら、流石に嫌とは言えませんよ……にひ」

その時を思い出したのか、随分と嬉しそうな表情を浮かべる。

「ですが……ワタシはもうすぐいなくなってしまうです」

「……ああ」

「やっぱり、知っていたんですね」

「そうだな。知ってる」

「どこから……何を……色々聞きたいことはありますが……一つだけ」

「昴晴さんは、幸せ……なれますか？」

明月さんが俺を見る。その目には不安や心配が見える。

「それは、高嶺が明月さんと付き合ってしまったが故に、これから起こる結末のことを気にしてるのか？」

「……はい。私ではどうしても昴晴さんを残してしまいます。そのせいで今後の幸せに影響を及ぼしてしまわないかと……」

「初めての恋人だしなあ。高嶺にとっては忘れられない思い出だし」

「それだけがどうしても心残りで……」

「……ここで俺が、”大丈夫。高嶺なら幸せになれるから心配しなくていい”って気軽に言えれば良いんだけど……残念だがそれは保証出来ないんだ」

「……いえ、私こそ変なことを聞いてしまつてすみません」

「何度か話しているけど、未来つてのは簡単に変わる。それを変えるのはあくまで本人の意志と一歩踏み出す勇氣だ。それだけで未来とか幾らでも枝分かれしてしまう」

「俺が視ていた可能性は色々あった。高嶺がお店で働こうと踏み出した事で変わった未来。四季さんがお店を開こうと決意しこの店を一転して無事に開けた未来。高嶺が、明月さんの残り時間が少なくても、好きな人との色褪せる事のない一生の思い出を作りたいと決めた未来。明月さんが死神で、例え消える運命であつても高嶺との思い出を作ろうと前に進んだ未来……」

「全部本人が頑張つて動いた結果で、俺は何もしていない。焚き付けたり場を作つたりはしたけどな」

「……澤田さんは、これまでに沢山のことをしてくださっています」  
「まあ、俺なりに出来ることをしたつもりではある。高嶺が……幸せになつてほしいという明月さんをお願いを叶えるためにな」  
他にも色々を含めてだけど。

「残念だけど、確約は出来ない。出来るのはこれまで通り、手を貸してあげることもくらいなんだ」

「ここで明月さんを安心させては駄目だ。未練を残して逝つて貰わないといけない。」

「だからさ、明月さんが高嶺を幸せにしてほしい。残り少ない日を、これまで以上に」

「……はい。そうですね。そのつもりです」

「……恨んだりはないのか？」

「え？何がですか？」

「いや、本人が選んだとは言つたが、それを誘導して動いたのは俺だぞ？その結果明月さんが蝶へなり、高嶺が一人になつてしまうことになる」

この先の展開を知っているから動けただけで、知らない明月さんか  
らすれば怒つても良い所だ。というかわれると思つてたが……。

「まさか、怒るわけじゃないじゃないですか……」

「そう、か？」

「澤田さんなりに悩んでこの未来を選択したくらい分かっていますよ。昴晴さんが一番幸せになれると思ったからこそ選ばれたはずですから」

「だが、明月さんではなくて、別の人を選んでいれば違ったかもしれないんだぞ？」

「それは、そうかもしれませんが……正直、私には違う未来は見えないのでどの様な将来か分かりません……ですが、少なくとも感謝しています」

「好きな人ができ、その人とお付き合いが出来て……。昴晴さんが私以外の人との未来のことをって考えると、少し妬いてしまいました……」

「そんな事を考えるようになったのも、昴晴さんのことが好きになって、お付き合いが出来たからです」

「……そうっすか」

「なので感謝はあっても恨んだりなどするわけがありません」

「それよりも、私がいなくなった後の昴晴さんとナツメさん。皆さんの事をよろしくお願いします」

そう言って俺に頭を下げてくる。

……いやもう、ほんとなあ。心広すぎではありませんか？文句の一つぐらいあってもおかしくないんだが……。人格者過ぎるでしょうが。

「……分かった。出来る限り協力するよ」

「……因みなのですが、確認しておきたい事がありました……」

「どうした？」

「澤田さんの予想だと、私が蝶へ還るのはいつになりそうですか……？」

「最後は12月の30日、お店の最終営業日の次の日だな」

「なるほど、こちらの予想と合っていましたか。良かったです」

「一週間も無いけどな」

「付き合って一週間で別れるだなんて、昴晴さんも難儀な選択をし

たもんですね……」

「それくらい明月さんの事が好きだったってことだな。愛されてんなあ」

「そうですね、にひひ」

少し恥ずかしそうに笑う。

「ところでえ……ナツメさんとは、どこまで話が進んだのですかあ？」

「四季さんと……？」

進んだ……？話がつて、……ああ、そういうこと。やっぱり気づくか。

「そうですよ、最近お二人で一緒に帰ってるじゃないですか！それにつ、澤田さんマフラーされてますよね？」

「ん？そうだな」

「一昨日は持ってなかった。つまり、昨日の定休日にナツメさんからの……!?!」

「おつ、ビンゴ。昨日四季さんからクリスマスプレゼントとしてもらったやつ」

「ほうほう、澤田さんからは何か渡されたのですか？」

「紅茶とお菓子とか。後は俺の部屋で新しく炬燵を買ったからそこで一緒に楽しんだ感じだな」

「なんと……！そこまで既に……?!やはり策士ですね、にひ」

「まあ、色々話すには俺の部屋が安全って言うのもあるからな」

「なるほどなるほど、そう言ってナツメさんをご自分のお部屋に……それで、どこまで進んだのですか？」

「あー……進んだと言っても、内容は明月さんとあまり変わらないぞ？」

四季さんには明月さんの事とかも色々話してはいるが、これを言うわけには行かないしな。

「ほんとですかあ……？澤田さんのことですし、他にも色々と仕組んだり……？」

「それは……多少はあるが、企業秘密だ」



「秘密ならしやうがないですね」

「ああ、毎度のことすまんが、こつちにも色々都合があつてさ」

「いえいえ、お気になさらず。二人だけの秘密……。あ、分かつてますよ。他の人には言いふらしたりはしませんので！」

「大丈夫。そこは心配してないから」

「はい。当然の事です。……ですが、意外とすんなり行きましたね……澤田さんなら、もっと紆余曲折あると思つたのですが……ナツメさんからだつたのでしょうか？」

「どうかしたのか？」

急に一人で何かブツブツと言っているが……。

「ああ、いえつ。何でもないのでお気になさらず」

「そうか？」

「つと、すみません。もう遅い時間ですし、今日は解散としましょうか」

「だな。明日も地獄が待ってるのは確定だし」

「そうですねえ……今日と同じか、もしくはそれ以上か……」

「客が来て、喜んでもらえるなら万々歳。俺も喜んで働かせてもらうよ」

「私も頑張りますので、無事明日を乗り切りましょう」

「ああ、それじゃあゆつくりと休んでくれ」

「澤田さんもおやすみなさい。今日はありがとうございました」

「こつちこそ。おやすみ」

明月さんと挨拶を済ませ、店を出て家へと帰った。

「おはようございます」

昨日とは違い、今日は元気そうな声で高嶺が朝の厨房に入ってくる。

「おはよう」

「おはようさん」

「おはようございます」

因みに既に厨房には明月さんが手伝ってくれている。

「お、おう。おはよう、明月さん……」

「……明月、さん？」

「っ……」

高嶺の苗字呼びにジロつと視線を向ける。

「日和ってます？」

「日和ったわけじゃないっ！……っ、お、おはよう。栞那」

「はい。おはようございます、昴晴さん」

それを聞いてお互いに恥ずかしそうに笑う。

「涼音さん。俺、追加で甘い物仕入れた記憶が無いのですが……どうしてこうも飽和してるのですか？」

「私も同じ気持ちだよ。クリスマスケーキだけで充分なのにさ……」

「2人とも、そんな嫌味な言い方をしなくても」

「いやー急に厨房でイチャイチャされたら言いたくもなりますよね」

「こつちに見せつけてるかのようなやり取りをされたら誰だっって言いたくもなるよ」

「別にいちやっついてたわけじゃあ……。今のは、栞那が俺を揶揄うから」

「あ、ずるい！私のせいにするなんて」

「日和ったとか言ったのは栞那だろ？」

「実際に日和ってたじゃないですか」

「アレは呼びなれて無かっただけで、日和ったとか逃げたとかそういう事では無くてー」

「おい」

注意を受けた先からいちやつき始めた2人に涼音さんが割り込む。

「……、仕事しないとな」

「じゃあ、段取りは昨日と一緒で」

「はい」

涼音さんからの指示で各々動き始める。が、高嶺と明月さんが軽く

見つめ合い……。

「……ひひひ」

明月さんが恥ずかしそうに笑う。それを見て高嶺も苦笑いをする。  
……うーん、砂糖吐きそう。

そして、無事予約分のケーキを作り終えてクリスマス当日の営業を始めた。

「……くはあく……やっぱり忙しいなあ」

ピークを越え、ある程度落ち着いて来たので休憩に入る事にした。  
「まあ、それもあと数時間の辛抱か……」

奥の休憩室をノックする。

「はい、大丈夫ですよー」

中から火打谷さんの声が返って来たのでそのまま中へ入る。

「先輩も休憩ですか？」

「そんなとこ。おつかれさん」

「お疲れ様です。いやあく……やっぱり超忙しいっすねえ」

「イベントだしな。狂ったようにケーキが売れる売れる」

「何回ブツシュドノエルって言った分からなくらい口に出しましたよ……」

「通常のケーキもいつもの倍くらいの速度で消えて行くしな」

「クリスマス様々ですねっ」

「世のカップルや家族の為に俺たちが……犠牲に……っ！」

「悲しいですねえー……」

「覚悟の上だ。後悔は無い」

「……本音は？」

「想定以上に忙しくて死にそう」

「あははっ、ですよね〜」

「そうだ、最近はどう？回収捗ってる？」

「ん〜……まあ、そこそこですかね？前よりお店に来るお客さんの数が増えているのでその分増えた……？とかそんなぐらいですね」

「おっけ。近い内また回収しておこうか」

「ですね。その時はよろしくお願いします」

「取りあえずは今日を乗り切ろう。そしたら涼音さんからケーキが出るかもしれないな」

「ほんとですかっ?」

「今のところ、そういう話で進めている。折角のクリスマスだしな……。ミカドさんと四季さんにも話は付けるつもりだ」

「やったあー!それならバリバリ頑張っつて働くんて!期待しても良いですか?」

「ああ、売れ残りじゃなくてちゃんと作った物をな」

「涼音さんのケーキをまた食べれる……。しかもクリスマスケーキ……。!」

「家とかではしてないのか?」

「一応買ってきて皆で食べると思いますよ?けど、お店の人らでするのはまた違うじゃないですか!」

「確かに。おつかれさん会みたいなき感じで特別感はあるな」

「ですよね!あつ、アタシそろそろ休憩終わりなので先に行きますね?」

「ああ。俺も小腹満たしてから行くよ」

「ケーキの件、忘れないでくださいよお?」

「ちゃんと言うから安心してくれ」

「分かりました!では、お先にっ」

「おう、いつてら」

ケーキを食べれるからか、元気一杯に部屋を出て行く。若いなあ……。高校生だしそんなもんか。

「終わったあゝ……。!」

「クリスマスシーズンって本当に大変なんだね」

「目が回ったよ」

「なんとか無事に乗り切れたね」

「うん。ケーキも沢山売れて、お客さんも喜んでくれたみたいで本当に良かった」

「お疲れ様〜」

「希ちゃんもお疲れ様〜」

最後のお客さんを捌き終え、お互いに乗り切った事を労わる高校生組。

「あつ、達也先輩。例の件、忘れてないですよね……？」

「勿論。あれを見るが良い」

「はーい、ちよつとそこどいてねー」

「ま、まさか……！これは……っ」

「そうだ。報酬の品さ。涼音シェフ特製のな……！」

「今日はクリスマスでしょ。皆頑張ったし今日くらいは良いってさ」

「そうね。折角だしワタシたちもクリスマスの気分くらいは味わわないとね」

「その為にこれを作ったのさ」

「でも……お店の物を勝手に使って大丈夫なんですか？」

墨染さんが心配そうにミカドさんを見る。

「既に了承済みだ。たまにはこういう事があっても良いだろう」

「やったね！希ちゃんっ」

「うん、ありがとうございます！」

「私は帳簿を付けてくる。あまり騒ぎ過ぎないようにな。遅くなる」とご家族も心配するだろうから」

「御帝さんは参加しないんですか？」

「甘いものは苦手だ。私のことは気にせず楽しんでくれていい」

「そうですね……分かりました。それじゃあ、楽しませてもらいますね？…ありがとうございます」

「そう言つて奥へ消えて行く。……流石に猫にケーキは駄目だよな。まあ、今日くらいお高めの猫缶とか食べても許してくれるだろ。」

「つて言つても、片付けもあるからそんなに長くは出来ないけどね」

「それに、クリスマスを2人で過ごしたい勢もいるだろうしね〜」

「そうそう」

誰の事……という必要すらないな。四季さんと涼音さんが揶揄う

ように2人を見る。

「大丈夫、そこら辺はちゃんと確保しているから」

「昂晴君、意外と抜け目ないな」

「そこら辺は、あまり気にしないでいいですから。今は、みんなでケーキを食べましょう」

「そう？じゃあ、お言葉に甘えて……」

「ではでは、ナツメ先輩。開催の言葉をお願いします」

「え、ワタシ……!?え、えーつと……」

火打谷さんからの唐突な開始の振りに悩んでいる様子。

「みんなのおかげさまで無事ここまで来ました。今年も残り僅かだけど、頑張って行きましょう。メリークリスマスッ」

「メリークリスマス！」

クリスマスパーティーとは行かないが、皆で涼音さんのケーキを食べながらこれまでの出来事などを話しながらケーキを頂いた。

若干忘年会気分も混じっていたことはご愛嬌ということで楽しんでから片付けをし、店を閉めて各々帰った。

## 第73話：バタフライエフェクト

「おはようございます。今日は朝から来てもらってありがとうございます」

「いいよいよ。昼からは高嶺と大事なデートがあるからな」

今日は、今年のお店の営業が終わってから次の日。とうとう運命の日がやってきた。クリスマスイベントが終わり今年も残り少ないなど考えていたが、あつという間に過ぎていた。一応今日と明日の為に邪魔が入らない様に話している。

「ナツメさんも、今日はわざわざありがとうございます」

「ううん、一応澤田君から軽くは聞いてる。今日が最後だつて……」

「そうでしたか。それなら説明する手間は要らなさそうですね」

静かな店内で3人の声だけが小さく響く。

「そういえば、チケットは持つてるよな？」

「はい。以前に頂いた物をしつかりと」

「一応プレミアムなやつだから、乗り物の待ち時間を短縮出来るぞ」

「こんな物まで用意して……ありがとうございます」

「明月さんの新たな門出への饞別つてことで」

「あまり良いことつて言いつらいけどね……」

「今日俺たちを呼んだのは、最後の挨拶……で良いのか？」

「はい。それと、明日からの事をよろしくお願いいたします。と

……」

「大丈夫、既に明月さんが抜けた後のことはちゃんと考えてるから。人員の目処も立ってる」

「そうなんですか？ミカドさんは仰っていませんでしたか……？」

「俺が予定として考えてるだけ。フロアだし女性で……今度の人は死神では無くてちゃんとした人間の予定だ」

「なんと、既にそこまで」

「死神の仕事も俺と火打谷さんで可能な限り手伝うつて言ってるしな」

まあ、俺に至ってはあのチャライ口調の上位神と色々約束を交わしているんだが。

「何から何まで……本当にありがとうございます」

「明月さんが今日の遊園地を心置きなく楽しめる為に頑張りました。なあ？・四季さん」

「ワタシはそんなにかなあ……？・澤田君の手伝いを少ししただけだし」

「因みに、何かやり残した事とかあるか？」

「いえ、私の方は既に終わらせているので心配ありません」

「そうか……」

「……これまで、色々なことを協力していただいてありがとうございますました」

「こちらこそ、あの森で出会ってから色々と助けてもらった。その恩返し……も含めて協力しただけ。俺の方こそありがとう」

「ワタシも、明月さんと閣下に協力してもらったからお店が開く事が出来た。ほんとにありがとう」

「死神のお仕事ですからね。当然のことをしたまですよ」

「明月さんは……蝶に還ったら、生まれ変わる……って認識でいいの？」

「はい。新たに生まれ直すことになります」

「それって、赤ちゃんから……？」

「そうなりますね。生まれ直すということはまた新しく一から人生を始めるということですから」

「そう……わかった」

「そうになると、もしかしたら10年後とかに明月さんの生まれ変わりがこのお店に来るかもしれないな」

「……そうですね、可能性はありますね」

「こう、懐かしい匂いに誘われて……みたいな展開がっ!?!って感じだし」

「それまで頑張ってお店を維持しないといけないのかあ……大変かも」



「もしかしたら超人気店になって2号店とか3号店をオープンさせてるかもな。そこから全国展開とかして。そしたらお店に来る可能性が高くなるだろう?」

「このお店に過剰なポテンシャルを感じてない……?」

「どうなるか分からないだろ?」

「そりゃ、そうだけど」

「だから、明月さんもその時はお店のドアを開けて中に入って来てくれよう?」

「仕方ないですね……。しっかりとエスコートしてくださいよ?」

「ああ、高嶺にさせてあげるから安心してくれ」

「……なんだか、澤田さんにそう言われると、期待しちゃうじゃないですかあ……」

「ははっ、それもそうだな」

「そうですね。澤田さんの奇跡ならもしかして……? って考えてしますのでこういうお話は無しでお願いします」

「俺はあくまで可能性の話を言っただけなのになあ……」

「だからこそ、です」

「澤田君はそうやって相手の反応を楽しんでる時があるから」

「あれ? 四季さんまで……!?!」

「これまでの行いですね」

「そうね」

「まあ、その通りだから否定できないんだけどさ……」

「そこは否定してくださいよ……」

「……さてと、用件も済んだし、そろそろお暇しようかな?」

「もう帰られるのですか? 昴晴さんとの時間までまだ余裕はありますか……」

「まあな。ミカドさんと話しておきたい事とかもあるし」

「分かりました。最後に改めてありがとうございます」

「……最後に、ねえ。」

「ごちらこそありがとな。次会う時は死神としてじゃなくて、人として生まれ変わった時だな。楽しみにしてるよ」

「……っ、ほんとに。そう言ってる……本気で期待しちゃいますよ……？」

「良いぞ？期待してもらって。明るい人生が待ってるって思った方が良いだろう？」

「……そうですね。そうでした」

「と、いうことで……また会おう、明月さん」

「はい、またです」

「ワタシも。またお店で会いましょう」

「はい。ナツメさんもまた会いましょう」

明月さんに見送られて店を出る。

「さてと……帰りますかあ」

「なんだかあつさりと終わったけど……良かったの？あれで」

「湿っぽい嫌だしな。それに、ちゃんと次があるしな」

「まあ……それもそうなのかな……？」

「この後のご予定は？」

「んー……特にないかな。折角外に出たんだしついでに買い物とか済ませようとか、そんぐらい。そっちは？」

「帰って寝るくらいだなあ……あとはタイミング見てミカドさんと話すくらい」

「墮落的だなあ……ってワタシも似たようなもんだけど」

「なんなら俺たちも今から遊園地に行くか？」

「人のデートの後を尾けるなんて趣味悪い」

「いやいや、純粹に一緒に楽しむだけだぞ。別に高嶺達の事を見るとかそんなんじゃない」

「見る必要が無いしな。」

「それでも遠慮したいかな……。遊園地に行くのって気力要るでしょ？今からそんな気分になれない」

「あ、それ分かるわ。結構気合入れるから前もって言わないと行く気起きないのな」

「そうそれ。当日に言われてテンション上げて気軽に行けるものじゃない」

あるあるだな。

「四季さんって休日とか何してるの？」

「ワタシ？そうだなあ……基本的にダラダラしたり、お店のこと勉強したり？たまに気になった映画とか見たりしてるかな」

「如何にも休日って過ごし方だな」

「そんなもんでしょ。澤田君は？」

「俺は……スマホで動画見て時間潰したり？運動とかも多少はしてたりするかな？家で出来る範囲だけ……」

「へえー……ダイエツトでもしてるの？」

「いや、体型維持というか……筋肉と感覚を落とさない為？」

「あつ、そつか……。それって前の世界でそうだったから？」

「だなあ……、ここでは必要に駆られることはないけど、なんか習慣になってる感じ」

「そうなんだ。他に家では何かしてるの？」

「その日以降のお店関連を考えた？」

「やっぱりそれもなんだ」

「まあ、これに関しては毎日だから休み関係ないな。後はたまに蝶関連でミカドさんや明月さんの手伝いをしてたな」

「蝶を回収してたってこと？」

「だな。と言ってもメインは明月さんで、俺はサポートしてたくらいだけだな」

「ふーん、色々としてたんだ」

「四季さんはどんな映画を？良く見るジャンルとか」

「特に偏っては無いけど、最近見たのはSF系かな。主人公の男が自分の友人を幸せにするために過去に戻って未来を変えるんだけど、そのせいで戻った現在は自分が知ってる現在じゃなくなってたってあらずじ」

「バタフライエフェクトってやつか」

「そうそう、それ。自分が過去を変えたせいで違う未来になるってお話」

蝶の羽ばたきが遠い場所では竜巻を起こすほどの風になると

かなんとか。元の世界でもそう言ったゲームとアニメがあったな。大学生で厨二病のマッドサイエンティストのやつ。

「その結末は？」

「なんか終わり方が3つあるみたいで、ワタシが見たのは最終的に最初の状態に戻して終わりって感じだった」

「3つ？」

「そう、ワタシが見たサイトとDVDとでは違う終わり方になるとかなんとか……」

「へえ、何それ。凝ってるな……題材に合ったやり方だな」

「分かる。凄いよね。まあ、1つ見て満足しちゃったけど……」

「ひとつで満足しちゃったかあ……、面白そうなもんだけどな」

「そう？なんなら……今度一緒に見る？」

「その映画を？でも見る気起きないだろ？」

「自分だけだとね。でも澤田君が見るって言うなら見ようかなって」

「それなら是非ともお願いします」

「タイミングは……少なくとも来年の全部終わった後にしとこつか。その方が気兼ねなく楽しめるでしょ？」

「そうだな。その方が助かる」

「それじゃ、その時にまた予定決めよ」

「了解」

まさかただの雑談が映画鑑賞に繋がるとは……神様ありがとうございます  
ございますっ!!

「つと、着いたな。そんじゃあ、また」

「うん、送ってくれてありがとう。何かあったら遠慮しないで連絡して」

「その時は頼らせていただきます」

「ん、それじゃあまたね」

四季さんが部屋に入るのを確認して帰路に着く。

「正直、後はすること特に無いからなあ……」

卯ノ花やルリ、その上司との話は付けてる。火打谷さんにも今日と

明日は蝶が居ても回収しないように言っている。ミカドさんにもぼんやりと説明はしてるけど……念のため明月さんと高嶺が遊園地に行った頃にもう一度会っておいた方が良くもしいかな。

「今日は何を食おうかな……」

その日の夜、夕食を作る気が起きなかったので外食することにした。何となく……とまでは行かないけど、もしかしたらワンチャン高嶺と遭遇出来たり……とか考えていた。

「お店に一度立ち寄るから駅前を歩いてたらあるかもな」

家から出てお店から駅へ向かうルートを歩く。店を過ぎると、正面から一人の男がこちらに向かって来るのが見える。

「……まさか本当にタイミングが合うとは」

距離が近づくと、こちらに気が付いたので声をかける。

「こんな場所で偶然だな……高嶺」

「澤田さん……こんばんわ」

「ああ、こんばんわだな。……高嶺一人っていうことは、そういうことなんだな」

「……はい、栞那は蝶に還りました」

「そっか。無事次に行ったんだな……」

「これまでありがとうございました。栞那とのことでの協力や、あとお店の事とかも……」

「いいや、したくてしたけだし気にしないでくれ。それより、寄り道しているってことはミカドさんに用があるんじゃないのか？」

「そうですね、栞那が戻ったってことを……一応報告しておかないといけないかなって」

「そうだな。大事なことだな……」

「それじゃあ、行つてきます」

「ああ、また来年だな」

「はい、また年が明けてお店で……」

お店へ向かう夜道を歩いていく高嶺の背中を見送る。……今の高嶺を見ていると、明月さんも随分と無茶な約束を高嶺と交わしたもんだな。”ずつと笑顔で笑って下さい”とか……。しかも高嶺もそれを守ろうとか……。

「高嶺がずつと笑顔で幸せでいるための必須条件なのになあ……」

明月さんが死神のままで消えず継続させる方法ならあるのはある。だけどそれだと意味が無いから一度蝶へ還って人間として生まれ変わってもらおう。高嶺と人生を歩むためにはこれは外せないとは分かっているんだけど……。高嶺の顔を見ると罪悪感が……。こう、物凄

い。

「……適当に買って帰るか」

外食する気分が無くなつたためコンビニ方面へ向かう。いや、完全に自業自得なんだけどさ。

次の日、俺はとある蝶を探してお店に来ていた。

「お邪魔しまーす……って誰も居ないな」

店内に入りそのまま奥の二階へ上がる。

「……ミカドさんも居ないと」

明月さん達が間借りしてる部屋へ上がり周囲を見渡す。

「うーむ、ここに居るかと思っただけど……。もう既に高嶺の所に向かっているのかな？」

これなら高嶺周辺を探した方が安全か？

お店を出て神社に向かって歩き出す。そういえば、神社に行くのって初めてだな。

用が無かったので特に行ってなかったが……。墨染さんの実家で神社で年末に奉納式があつて、それに確か朝武さんっていう人が……。あれ？朝武？んん？どこかで聞いた事があるような……。？

「……いや、細かい事は気にしないでおこう」

既に神様とやらで一杯一杯だ。これ以上他作品の乗り込みとかは良くない。うん。

赤い蝶とかが出ませんようにと考えながら神社に着く。年末近いという事もありそこそこ人が多い。

「この中に居るわけないか……」

少しブラつとして出店を見ていると、見知った顔を見つける。

「……む、お前は」

出店のたこ焼きを頬張ってる少女をと目が合った。

「……これは意外、こんな所に出現するんだな」

「ルリがいたら変なのか？」

「いや、そういうわけではない。ここらの出店を食べに来たのか？」

「そうだ。こういう時にしか味わえないからな。やらないぞ？」

「要らん、食べたかったら自分で食べるよ。腹が空いたらだけど……」

「ルリのおすすめはあそこの焼きそばだな。ソースとの味が美味かったぞ」

「へえ……確かにいい匂いだな。何箇所か食べてるのか？」

「これで5件目だ。後はデザートにあの小さいカステラを食べるつもりだ」

「ああ……あれね。はいはい、ベビーカステラね。あそこのチョコバナナも甘いものだぞ？」

「っ!? あんなどころに潜んでいたとは……!」

「どつちにするんだ？」

「どつちも……だけど、お腹の余裕が……」

耳と尻尾があれば間違いなく垂れてるだろうなって分かる位には落ち込んでいる。

「……なら俺がカステラの方を買おうじゃないか。気になっていたし。だからそつちはチョコバナナを買って食べると良い。少し位分けてあげよう」

「……っ！ いいのか!？」

「これならどつちも味わえるだろ？」

「……達也、お前良い奴だな。褒めてやる」

「そりやどうも……」

そんな目をキラキラさせて言っても威厳も何もないな。

たこ焼きを食べ終わるのを見てベビーカステラを買う。……これ

が売ってるってことは腰をやらなかったんだな。この人。

四季さんのルートのことを思い出しながら美味しそうに買ったチョコバナナを食べているルリの方へ向かう。

「ほい、ベビーカステラ。どうぞお納め下さい」

「うむ、苦しゆうないぞ」

片膝を付いて紙袋を差し出す。端から見れば姪と戯れてるように見えるのだろうか？横を通った婦人が微笑ましく俺を見てた。

「どう？美味いか？」

「……もう一つ」

「幾らでも食べてくれ」

追加を要求したってことは美味しかったのだろう。俺も一つ摘まんで食べる。

「うん、普通に美味しいな」

想定内の美味しさだ。普段から涼音さんのを知っていると物足りないが……。

「このチョコバナナも美味しい。今日は良い日だ」

「そうかそうか、良かったな」

美味しそうに食べてるのを見ると、こちらに近づいてくる人物が視界に入る。

「戻るのが遅いと思って見に来れば……お主といたのか」

「よっ。さつき偶々そこで会ってな。食べ歩きしてたんだ」

「その様じやのう」

「そつちも食べるか？そこで買ったベビーカステラだけど」

「ほう……ふむ。では折角だし頂くとしよう」

袋から取ったベビーカステラを一つ食べる。

「……食べやすいな。甘すぎず薄くも無い。程よいバランスじや」

「一口で個数があるのも食べ歩くのに向いてるよなく。好きなだけ食べてくれ」

「そうか？ならもう一つ……」

「……ていうか、ここに居て大丈夫なのか？」

「ん？どういう意味じや？」



「いや、ここって神社だろ？仮にも神が他の神の敷地内に入るのって良くなかったと思うんだが……？」

「なんじゃ、こちらのことに詳しいのだな。それについては心配は要らぬ、既に許可は取っておる」

「そうなんか。なら大丈夫か」

「それに、仮に迷惑をかけたとしても怒られるのは妾ではなく上のあやつだからの。たまにはこうやってこちらからも嫌がらせをしておいた方がいいじゃろう」

「うわあー……良い性格してんなあ……」

「ルリが来たいと言っておったからの。ちゃんと事前に話は付けておる」

「地上を満喫してんなあ」

「上からはお主のことを見守るだけで過度の干渉はするなど言われたからの。暇じゃから色々と楽しませてもらっておる。いわば長期休暇みたいなものじゃ」

「神もたまには休まないとな」

「その通り。ぬしらの店にも週一くらいで行っておるぞ」

「マジか。常連さんかよ」

「デザートが美味くてのう……あとは最近はおムライスを食べたぞ？口コミでも評判だったから気になって食べたが評判通りの美味しさじゃな。他の種類も増えて楽しみじゃ」

「口コミって……。なんかシニールだな。」

「あんがと。シエフにそう伝えておくよ。神様も認めたってな」

「来年も楽しみにしておるぞ」

「ああ、ご来店をお待ちしておりますー」

店員としての言葉を吐こうとした時、視界の隙で高嶺が歩いているのが目に入る。

「どうしたのじゃ？急に黙りおって……」

「いや、来年も是非とも来てくれ。店員一同楽しみに待ってる。それと、急用が出来たからすまんが帰る」

「そうか、妾達のごことは気にせんでいい。そつちを優先するがよい」

「ありがとう。……それと、これあげるから2人で食べてくれ」  
手に持っていたベビーカステラを渡す。

「良いのか？買った物じゃろ？」

「充分堪能出来たしな。俺からの貢ぎ物だ」

「随分とてきとうな貢ぎ物じゃのう……もう少し敬つてもよいのではないか？」

「それなら来年にでもお店で何か奢るよ。そんじや、良い年を」

高嶺の姿を見失わない様にその場を離れて歩き出す。

確かこのまま家に戻つて、メシ食べて寝て……夢を見て起きたら蝶を見つけて……だったか。念には念を入れて無事蝶が高嶺に行くのを確認しておかないとな。

そのまま少し離れた位置から後ろを追つてマンションに入つて行くのを確認する。

「問題は明月さんの蝶がどこに居るかだけ……待つてたら来るでいいのかね……」

これで、来ませんでしたっ！とかなつたら流石に笑えない。全部パーである。

「……もう少し探すかあ」

マンションから離れてお店と駅前を歩き回る。

「あれ？達也先輩？」

「ん？……つて火打谷さんか、買い物の帰り？」

「はい。もしかして、先輩も買い物ですか？」

「いや、俺はちよつと探し物を……。今日と昨日は蝶の回収つてしないんだよな？」

「え、はい。言われた通りしてないですよ？」

「おつけー。あと、蝶が飛んでたりとかは？」

「いえ、見てないですね。何か探してるんですか？」

「少しな。回収されたら不味い蝶がいて探してたんだ」

「あー、だからアタシにそう言つてたんですねっ」

「そう言うこと。もし見かけたら連絡してほしい」

「分かりました。お任せくださいっ！」

ビシツと敬礼をこちらにしてくる。

「ありがとな。それじゃあよいお年を。また来年」

「はいっ、先輩もよいお年をー」

手を振って別れる。……うーん、もう一度お店に行ってみるか。

最後にもう一度お店に向かう。

「……おっ、蝶だ……」

お店の前に着くと、ひらひらと飛びながら店内へ消えてく蝶を見かける。多分間違いない。

その後を追ってそのまま屋根裏部屋へ辿り着く。

「……やっぱり、明月さんか」

部屋に入ると、スマホの上に止まる蝶を見つける。机の上に置いてあるスマホは明月さんの物で当たってるだろう。

「となると、これから高嶺の所にか」

スマホの上で羽を動かしてる蝶に手を差し出す。

「行こうか明月さん。高嶺の場所までエスコートするよ」

俺の言葉に反応したのか、周囲を飛び回る。どこかに止まってもらおうと腕を上げると、意図を察したのか俺の腕に止まる。

「……ッ!?!」

と、その瞬間。蝶からの感情と記憶を受け取って咄嗟に腕を離す。

「……危なあ……。すまんがやっぱり飛んで付いて来てくれ」

焦りを落ち着かせながら店を出ると、問題無く俺の後を付いて来てくれる。

……さっきのは危なかったなあ。明月さんから高嶺へ対する感情が流れて来てしまっていた。無意識だとは思いが……、高嶺のことを心配しまくってるし、好きすぎるだろこの人……。危うく俺まで高嶺のこと好きになったらどう責任取るつもりだこんにやろ。

使っていて初めて弊害的な物を感じて焦った。強すぎる感情や願いだっただからか、俺にまで浸食……とまでは行かないが感化させてくるみたいな感覚。確かにこれは危ないな。

ミカドさんや明月さんの忠告を思い出しながら高嶺の部屋の前に着く。

「……………んー……………、中で物音は無いな。動く気配も無いし……………寝てるのかな？」

中の様子を確認して飛んでる蝶を見て呼びかける。

「着いたぞ。明月さんの運命の人の部屋だ。行つてくると良い」  
そう言うと一度俺の周りを飛んで中へ入っていく。

「……………これで後は高嶺がミカドさんの方へ行つて終わりだな。まあ一応部屋から出る所までは見ておくか」

時刻は既に夕方を迎えている。何時頃になるかはわからないけど、ミカドさんが缶詰を開けようとしていた辺り夕食だったんだろう。

高嶺のマンションとお店への道とは逆側で入口が見えるようにコックリートの段差に座る。

「お店まで見に行きたいけど、近くに居ることで巻き込まれて一緒に過去に飛ぶのは嫌だしなあ……………」

確かあの日の俺は店の前で3人の確認をしていたはず。それがそう影響するか分からない以上行かない方が賢明だろう。

スマホで時間を潰しながら待っていると、マンションの入り口から全力で走りだす高嶺を確認する。その背中にはしっかりと明月さんの蝶も付いて行っている。

その背中を見えなくなるまで見送ってからその場を離れる。

「ん……………つ、よしよし、明月さんもちゃんと付いて行つてるし成功だな」

背伸びをして家へ帰る。これで無事明月さんが戻ってくる。しかも即同棲だし、揶揄ってあげないとな。

「全部知ったあとで色々と怒られそうだけど……………まあ、甘んじて受け入れるか」

その程度可愛いもんだし、半分くらいは照れ隠しとかだろう。明日の神社辺りで良いだろう。そこらへんで合流すれば皆もいるし。

「つと、一応遠回りして帰ろう」

どのくらいが範囲内か分からないしな。

夜が明けて朝日が昇り、人の動きも活発になり始めた時間帯に起きて朝食を食べる。

「うーんやはり日本の朝はソーセージに目玉焼きと味噌汁が正義だな。あと白米」

これに納豆と海苔もあれば朝の定食だ。いや、サラダが足りないか？

「……ん？」

スマホからメッセージの通知が届く。朝の今に珍しいな。画面を見てみると、四季さんからだった。

『今日の初詣だけど何時頃に行く？』か、……って付いてくるのか？別にわざわざ合わせなくても良いのだが……四季さんも結果が気になるのだろう。

「そっちに合わせるよ……と、正直タイミングはいつでも良いしな」返事を送ると、すぐに帰ってくる。

『それじゃあお昼前にでもどう？』

「お、いいね。ついでに屋台とかのご飯も食べてみるか」

メッセージに返信をして朝食を続ける。新年1日目から最高の日になりそうだなあ……。初夢は見えてないけど。

「お店へのお守りとか買っておいの方が良いのかな？こういう時つて……」

確かあそこの神社って元は安産祈願とかだった様な気がするが……まあいいだろ。娘に巫女のコスプレさせて収益化してるくらいだし細かいことは気にしなくても。

朝食を食べ終え、少しゆっくりしてから支度を整え部屋を出る。

「あああー……やっぱ外は寒いなあ」

マフラーを巻いてるが手の方は寒い。そういう時『それじゃあ……手、繋ぐっか……？』みたいな展開が良くあるが……はあ。やめよ、考えるのは。

くだらない事を考えながら神社に向かっていると、少し離れた場所でありえないものを見る。

「……は？た、高嶺……？」

そこには、2人では無く1人で歩いている高嶺がいた。  
しかも……一頭の蝶を連れて……。。

## 第74話：元に戻すために

「……………」

日が落ち始め、空が茜色に染まって来た中、部屋で一人ベットに腰を掛けて必死に考えていた。

1人で初詣に来ていた高嶺を呼び止めて事情を聞いた。昨日はミカドさんと話した後は特に何も起きずにそのまま解散したとのこと。つまり、昨日の夜に蝶は集まらなかったという事だ。まずはその原因から考えた。

「……原因とか、そんなもん決まってるよな」

蝶が集まらなかった。つまりは周囲に蝶が飛んでいなかった……数が減っていたことが理由だろう。そして、その原因を作ったのは俺が蝶の回収をしていたこと。火打谷さんに蝶の回収を手伝ってもらっていたこと。原作と違うイレギュラーと言えばそれだろう。

「つまり……俺のせいってことか」

蝶の回収をし過ぎれば昨日集まる予定の蝶が居なくなる。ちゃんと考えれば思いつくことのはず……けど、回収するのが正しいと勝手に思ってしまった。まずこれが間違いだった。

「このままじゃ明月さんが戻ってこない……」

どうすれば良い？解決するなら本来通りに大量の蝶を集めてそれを高嶺に当てる事だが……肝心の蝶がない。火打谷さんの瞳に残っていれば問題無かったのだが、既に回収済みでいたとしても少量だろう……。恐らくだが、かなりの量が必要になるはずだ。人を形成するほどの量が……。

「俺だけでも……足りないだろうな」

人として安定した存在を作る必要がある。俺だけでは不十分だろう……。

考えるが、確な解決案が出てこない。時間だけが過ぎて焦りが出始める。

「……くそっ！猶予がいつまでか分からないのに……！」

焦りに任せてイラついても妙案が思いつくわけがない。落ち着かないと……。

「……どこかで蝶を手に入れられる場所があれば」

すぐに思いつくなら病院や火葬場など人が亡くなったりマイナスになりやすい場所が集まりやすいだろう。そこで俺の身体に一時的に保管して……いや、時間がかかりすぎるな。

「他に蝶が……っ!?いや、待てよ……?」

蝶が居る場所なら……もしかしたらあるかもしれない。人に近いレベルで構成された場所が。

「俺が生まれた森なら……もしかすると……」

俺があそこで構成させたという事は、それなりに蝶が居たという事だ。俺が生まれた後も数頭は飛んでいたし……もしかしたら何かしらの理由であそこに集まっていたのかもかもしれない。

「……一度確認しておくか……?」

もしかするとの的外れかもしれない。だが、ここで座つていても碌な考えは出てこない。それなら行動しておいた方が良いだろう。

「今から行けば……最悪最終までには戻って来れるか」

時間を無駄にしない為にもすぐに行動に移る。

と、その時、玄関のチャイムが鳴った。

「メッセージの返信も無し、か……」

お昼前に澤田君と初詣で集まると約束をしていたが、直前で急用が入ったとキャンセルとなった。

それは別にいい。用事があるのなら仕方がないと納得が出来た。けど……その後に神社に訪れた高嶺君を見て、彼が何故急用が出来たか理解した。

「やっぱり……何か問題が起きてる……」

高嶺君の様子と話を軽く聞いてから解散し、彼にメッセージを送ったが今まで既読も付いていない。



「電話を……いやでも、忙しかったり取り込み中だったらどうしよう……」

悩んだ結果、直接部屋まで来ていた。電話ではぐらかされる可能性もあるかもしれない……それに、直接会って話した方が良い。そんな気がする。

「……よし」

意を決してインターホンを押す。

すると、中から歩く音が聞こえた。どうやら部屋にいるみたい。

「はい、つて四季さんか……」

「今、話せる？」

「今から行かないといけない場所があるんだ。これから向かおうと思ってるんだけど……一緒に、行くか……？」

「勿論行く」

言えば私が一緒に行くと言い出すのが分かかっていて、少し困った様に聞いてくる。

「……ですよねー。ごめんだけど、移動しながら話すよ」

「了解、因みに何処へ行くの？」

「まずは駅で電車に乗って……俺が最初に生まれた場所にだな」  
玄関から出て靴を履き直しながら話し始める。

「閣下達と会ったって言ってた場所？」

「そう、確認したい事がある」

マンションを出て駅へ向かい、電車に乗る。

「それで？どうしてそんな場所に……？」

「蝶を回収しに行く」

「蝶を……？」

「どうしてわざわざ……？」

「昨日の夜、高嶺が明月さんの蝶を連れてミカドさんと会いにお店に行ったんだ。明月さんの魂が高嶺に触れた事で夢で記憶を見てしまった。そこには高嶺を救う為に命を懸けていた明月さんがいた。そのことをミカドさんに確認していった時に高嶺の感情に引き寄せられた大量の蝶たちが居たはずだった。そこで高嶺はその蝶たちを

使って再び奇跡を起こす予定だった……」

「高嶺君が……。でも、違ったのでしょ……。？」

「ああ。実際には蝶は集まらず、何事も無く解散したらしい……」

「どうしてその蝶は……。集まらなかったの？」

「それは……。俺のせいだな」

「澤田くん……。の？」

「現時点で一番可能性が高いのは……。だけどな。俺が最初に想定……。というか、視ていた未来より蝶を多く回収してしまっていたんだ。そのせいで蝶が集まらなかったと考えてる」

「た、偶々じゃないの？」

「そうかもしれない……。けど、どの道蝶が居ないことで高嶺は奇跡を起こせずに今日を迎えてしまったのは事実だ」

「だから……。蝶を集めようってこと？」

「その通り。正直いるかどうかは博打に近いし、これが駄目ならまた次を考えないと行けないから不安要素しかない」

「少しでも可能性があるならってことね」

「そういうことだ。だから無意味に終わるかもしれないから付いて来てもらわなくても……。って思ったけど、どのみち来てたよな？」

「正解。内容は特に関係なく一緒に行ってた」

「ですよね。というわけで、俺がこれから向かうのはその森の中だ」

「もし蝶がいたら、それを回収して高嶺君に使う……。で良いの？」

「そうだな。その蝶を使ってもらいもう一度奇跡を起こしてもらおう」

「でも……。大丈夫なの？前に一度やり直して目を付けられてるって言って無かった？」

「そこは大丈夫。抜け道的なのがあるから心配はしなくてもいい」

「あるんだ……」

「そこはまあ、色々とな。あまり気にしないでくれ」

「ん、わかった」

電車に揺られながら夜の街を抜けて、徐々に街の明かりが減っていく。森の中というぐらいだし田舎方面なのだろう。

「近くの駅に着いてから歩きそう?」

「森の入口が15分くらいだったかなあ……。あっ、あと結構道がガタガタして歩きづらいから、ヒールだと気を付けた方が良くもな」

「そっか……。夜道だしスマホのライトとかで照らしながら歩かないと……」

暫くして目的地に着き、電車から降りる。

「うわあ……。結構街並みが変わるんだ」

「割と田舎側だしな。確か方角は……。こっちか」

周囲を見渡してから森までの道を歩き出す。

「懐かしいなあ……。つてまだ3か月しか経って無いけど」

「街灯とか明かりは少ないけど……。人通りが無いってわけじゃないけど、よく服も着ないで歩いて通報されなかったものね」

「いや、最初は全裸だったのは否定しないけど! 応急処置として明月さんのマント借りて宿まで避難したからっ! その後はミカドさんに服とか買ってきてもらったし!」

「そうなんだ、残念……」

「俺を露出狂に仕立て上げたいのか……」

「事実だしね」

「……。一部事実には訂正を願う」

「一部は正しいってことは……。部分的に露出狂?」

「更に変態が増したような気がするな……」

下らないことを喋りながら歩いていると、家などの生活圏から少し離れた場所に辿り着く。

「……。ねえ、澤田君。あれって……」

目の前の森の上空に青く光る何かが飛んでいる。

「恐らく蝶だろうな。しかも結構飛んで……」

「ここから分かるぐらいの明るさがある。一匹や二匹じゃないと思う……」。

「それじゃあ、行くかー」

薄暗い森に入るとすると、隣で歩いてる澤田君が後ろを振り返る。

「えっ?どうしたの?」

「いや、何でもない。ちよつと気になるのがあっただけ」

「……もしかして、ワタシを怖がらせようとしてる?」

正直今からこの森に入るってなると……嫌と言いたい。

「すまんすまん。そんなつもりじゃない」

「……スマホのライト点けとこつと」

スマホを取り出して明かりを確保する。

「俺も……んじゃ行きますか」

塗装や整備もされていない場所を歩いて行く。

石や木の根っこが……歩くの難しい。

「やっぱり歩きづらいか?」

「ごめん、少し歩くのが遅くなると思う」

「いいよいいよ、安全第一で。それにもし転んだりしたら大変だし

な。あ、俺の腕でも掴むか?」

面白い事を思いついたかのようにこつちを見る。

「……危ないし、そうしようかな」

「どうぞどうぞ。ご自由にお使いくださいな」

差し出された腕を掴む。……なんだか物凄く恥ずかしい。

「ペースが早かったり足が痛んだりしたら言ってくれ」

「うん、多分大丈夫だと思うけど……」

歩くのを再開しようとする、彼が反対側の手で近くの木の枝を折

り、正面を斬るように振りながら進む。

「何してるの?」

「クモの巣避け。今正面に巣があったからな」

「……帰りたいなって来たかも」

さつきから周囲で虫の鳴き声が聞こえるし、明かりに集まってきたりもする。

「残念だったな。自然とはこういう場所だ」

「危ない生き物とか……居ないよね?」

恐る恐る聞いてみる。

「どうだろうな。毒を持つのは……多分大丈夫だと思う。熊もやイノシシも居ないらしいから死にはしないと思う」

「今更だけど、何も考えずに来てしまった……」

人の生活圏から離れた場所に来ているのだから、野生の生き物が居てもおかしくない。

「もし遭遇しても、叫んだり走って逃げないようにかな？間違いないで襲われるから」

「う、うん……出会わない事を祈っておこうかな……？」

照明一つもない真っ暗な森。周りを見ても目の前の茂みすらちやんと見えない……。

「……っ」

本能的な恐怖で彼の腕を掴んでる手に力が入る。

「……普段体験しないことに怖がるのは無理はないけど、怖がり過ぎないように？何なら腕を掴むじゃなくて腕を組もうか？ん？」

こつちが怖くなったのを察してか、冗談を言ってくる。

「……澤田君は怖くないの？」

「んー……慣れたな。叔父との訓練の時はここより自然って感じの場所で生活してたこともあるし……何なら一人で二日程度過ごした事もあるぞ？」

「それは、ワタシの気を紛らわせるための冗談？」

「さあ？どうだろうなあ……？」

怪しく笑いながら前を向く。どうやら冗談じゃないみたい。特に怖がらずに普通に歩いているし……。

……掴んでる彼の腕を見る。ど、どうしようか？冗談で言ってるのは分かるけど、折角の機会をふいにするのは……。

「……お言葉に甘えて、そうしようかな。こ、転ばない様にするためにもね」

掴んでる腕に近寄って、彼の腕を自分の腕で組む。

「うおっ!?!……すまん、マジでそこまで怖かったのか？」

驚いた様にこつちを見る。

「まあ……それなりには、怖かったり……？でも、こつちの方が掴むより安全じゃ……ない？」

「……ま、まあそれは確かにそうなんだが……。いや、ご自由について言ったのは俺だしな……うん」

驚きと困惑した顔で正面を向いて歩き出す。

……ちよ、ちよつと流石にこれは大胆過ぎた……。かな？付き合っても居ないのに腕を組むとか……。！で、でもっ、夜の道でワタシはヒールだし慣れてないしで危ないのは確か。だからより安全の為に当然の処置を……。けど、流石の澤田君も戸惑っていた。意外と可愛らしい反応がなんだか面白い。

またとないチャンスだし……。これくらいは……。良いよね？でも、澤田君は明月さんに帰って来て貰う為に真剣なのに、ワタシは浮かれて良いのだろうか……？

うう……。そう考えると何だか罪悪感が……。けれど、怖いのも嘘じゃない。こうやってると……。すぐ落ち着く。不思議とこうやって触れてるだけで安心出来てしまう。

……。これ、かなりべた惚れってことなのかな……。？触れてるだけで安心し切っちゃうとか……。完全にそうだよねっ!!

「……っく〜！」

きつと冬だから余計に体温を感じて心が安心してるだけ……。つて変な言い訳は無理かあ。うん、そうなる位には好きなんだろう。そこは素直に認めよう……。

けど、それを伝えるのは全部終わってから。それまでは我慢しないと……。だからー

もう少しだけ、今の状態を楽しんでおこう。

……。どうも、こちら澤田達也です。現在蝶の調査の為に森へ来ています。あ、ダジャレとかではないぞ？するならもつと高度な事を言うからな？

と、んなことはどうでも良いんだよ。問題は俺が今味わってる状況

だっ！

隣には四季さんが居る。これはまだいい、おかしなことではない……問題は、その彼女と腕を組んでるといふシチュエーションだ。

さつき冗談で言ったが、本気で組んできた。これには流石の俺も想定外の外、怖がつてるのは何となくわかる。初めて夜にこんな場所に来れば大抵の人間は怖がる。俺はって？慣れたよ、夜の森程度は。訓練中に何度も行ったしな……怖かったのはその最中暗闇から俺の食料を奪いに来たり襲撃を仕掛けて来た教官の方が何倍も恐ろしかった。

なんせ食料を奪われればその日は飯抜きである。その為必死で抵抗した。幾つかに分けて隠したりもした。最悪夜の森を徘徊もした。

そんな生活に比べれば……ただ歩くだけの森のどこを怖がれと言うのだ……。

いや、俺の話はどうでも良い。つまりだ、四季さんが想定以上に怖がつていて、俺と腕を組むほどだとは思わなかったって話だ。あとそっちの方が安全なのもある。うむ。

しかもだ。整備もされていない道だ。当然段差や地面の歪みもある。歩いていると重心が傾いたりこちらに寄りかかってきたりもある。

何が言いたいかという……、そう！俺の腕に四季さんの胸の感触があるのだ！いや、コートがあるからそこまででは無いが、それでもハッキリとわかる。

童貞臭漂う発言かもしれないが……確かに前世では多少なりと仕事の為に女性との人並の交友関係はあったが……。だがこれはそんなちやっちいものじゃない！

それにこの体では童貞なのでこの発言は間違っていないな。うん。うん。

かなりの役得であるが……。気になるのはさつきから一言も言葉を発しない隣のお方のことである。ずっと下を向いてるし……。危ないのは分かるがそこまで注視する？

……いや、これはあれか？恥ずかしくて下を向いてるのか？したは

良いけど思った以上に恥ずかしくて……でも今更放す訳にも行かないし……みたいなの？

「……四季さん、下ばっかり見てるけど、大丈夫？」  
試しに聞いてみる。

「えっ、あ、うん。……平気だから、気にしないで」  
うむ、大当たりの様だ。

まあ、俺もそれなりに……いや、かなりドキドキしている。平常心を保つようにはしているが、四季さんと腕を組んでいるのだ。するなというのが無理な話だ。男なら絶対する。

うん、折角の機会だ。舞い降りたこのチャンスを堪能させてもらうことにしよう。

そんなこんなで目的の場所へ近づくと、夜の森にも関わらず青い光がここからでも視認出来た。

「……どうやら、アタリを引いた様だな」

「そうみたい……。澤田君が言ってる場所はこの先？」

「恐らく……。もう少し進むと開けた場所に出るはず」

そのまま光の方へと歩みを進め、開けた場所へと出る。

「……なにこれ、凄い……」

隣の四季さんが驚くのも無理は無い。実際俺も驚いている。その場所には、無数の蝶が飛んでいた。あるでそこに花畑があるのかと思っ  
てしまう程の量だ。

「これは……想定以上に居るな……」

地面付近だけではなく木々やその上の空にまで飛んでいるのがわかる。

「どうしてこんなに大量の蝶が……」

「分からない……が、好都合だ。頂いていこう」

中心地と思われる場所に辿り着く。そこは俺が倒れていたであろう付近であり、明月さんが蝶を回収していた地点でもある。

「こんな数の蝶、回収出来るの？」

「多分な」

近くで飛んでる蝶を回収しながら辺りを歩く。適当に歩いて手を



振り回すだけでも回収が出来そうなくらいには数がいた。

「上で飛んでるのはどうするの?」

「それなんだよなあ……念じたら寄って来てくれないものか」  
手を上に上げて、来いと念じてみる。

「……やっぱりダメか」

人の感情に引き寄せられる……だっけ?

試しに自分の過去を思い出して見る。

親が死んで叔父に養ってもらい、なんとか就職は出来たがクビになつて無職に……かなり自堕落な生活を過ごして……それで叔父へ連行されてあんなことを……。やばい、死にたくなってきた……。

嫌な記憶を思い出して割とガチめに落ち込むと、空を飛んでいた蝶たちが高度を落として周囲を飛び始める。

「……なるほど、こんな感じなのか」

良く分からないが上手く行ったのでサクツ回収する。

「急に寄って来たんだけど……何かした?」

「ちよつとコツを掴んだ感じだな」

「それって、あまり良くないことなんじゃ……。寄ってくるってことは、そう言う事でしょ?」

「かもな。人の感情に寄って来るからそれを利用してみたけど……あまりしたくはないな」

「なら上は止めて周辺を飛んでるのに留めた方がいい。どうしても足りないのならその時に考えることにしよう?。あまり無茶はしない方向で」

「了解であります」

光りながら飛んでいるので、見つけるのが簡単だった。

「澤田君、あっちにも」

「あれでこの辺のは最後か?」

見える範囲の蝶は全て回収しきった。想像以上に数が居て時間がかかったが……多分、こんだけいけば問題はないと思いたい。

「どう? 体の方は平気?」

「特に異常は無さそうだな」

「本当に？隠してないよね？」

こちらを疑うような目で見上げてくる。信用されてないなあ……仕方ないけど。

「ここで変な嘘は流石につかないから。本当に大丈夫だ」

「ん、ならいい」

「そんじゃあ、帰るか」

「思ったより時間かかっちゃったなあ」

「今は……23時前か。何とか電車は間に合いそうだな」

「なら早く出ないとね」

「おっけー」

蝶を回収してきた道に戻る。来る時と同じように四季さんと腕を組んで戻る。……何も言うまい。

暫く歩いて森から出ると、俺を見ている気配を再び感じた。入口で待っていたみたいだな。

「はあー……やつと出たあ」

「お疲れさん。ここからは安全だな」

「そうね……。ちよつと残念な気もするけど……」

小声で残念そう言う呟いているが……肝試し気分かな？

数少ない街灯の明かりを指して進み、何とか駅まで到着する。

「……おい、嘘だろ」

「ねえ、澤田君……。電車って、いつ来るの？」

引きつった表情でお互いに顔を合わせる。

「電車の表示、出てないな……」

そこには、『本日の運転は終了しました』と電光掲示板に流れている文字があった。

「いやー……こんな時間から泊まれる宿で助かった……」

「まさか電車が終わっていたなんてね……」

お互いにそれぞれのベットに腰を下ろして一息つく。

「しかも結構良い感じの場所だし……悪くないかも」

「蝶の回収に時間がかかったのもあるけど、ちゃんと調べておくべきだった。すまん」

「ううん、それ関してはしようがない。ワタシも電車があるものだと思ってたから」

「取りあえず蝶の回収は出来た。あとは明日の夜にでも高嶺を連れてミカドさんの所に行くことにするよ」

「わかった。それなら明日は大丈夫そう？」

「ああ、ありがとな。付き合ってもらって」

「ワタシが好きで付いて来ただけ。気にしないで」

「いや、一人だけ色々と考えてしまっていたかもしれないから。四季さんが居て助かったよ」

「そう？それなら良かった」

これは割とマジで思う。1人だったらマイナス方面に考えてしまっていたし。けど……まあ、やる事は決まっていて、今変更する気はない。目の前の彼女には申し訳ないけどな。

「今日はもう遅いが……何か食べるか？」

駅からここに来るまで運よくコンビニがあったためそこでご飯と飲み物だけは買っておいた。

「んー……お茶とおにぎり貰おうかな？」

「了解、ほい。昆布だけど」

「他は何があるの？」

「他は……鮭とツナマヨ……小松菜とかだな」

「そっちは何か食べる？」

「俺は……ツナマヨにしようかな」

「じゃあ鮭もらっつていい？」

「どうぞどうぞ」

食事を済まして一息つく。

「一応風呂もあるから、入るなら先にどうぞ」

「ありがと。……お言葉に甘えて先に貰おうかな」

譲ろうとした時にある事を思い出す。

「すまん、違うな。……『先にシャワー浴びてこいよ』だったな。こ

こは

「……………、はああああ〜……………」

キョトンとこっちを見たかと思うと、呆れたように目を閉じて思いつきりため息を吐かれた。

「滅茶苦茶デカいため息吐かれたんだが……………」

「したくもなる。……………なんだが馬鹿みたい」

「ちよつとしたジョークだよジョーク」

「寒気がするけどね」

「それなら今から暖まるんだし好都合だな！」

「誰のせいでそうなってるんだが……………。それじゃあ、入って来るけど覗かないでね」

「物理的に無理じゃね？確かに部屋に備えられてるとはいえ鍵掛かっているし……………」

「じゃあドア越して聞き耳立てない様に」

「そんな変態行為は……………したくはないなあ……………」

「そこは”しない”って言う場面でしょ」

「男の本能に抗う事が出来ない可能性を考慮しての発言ですので……………」

「遂に本性を現したか……………おまわりさーん」

「待て待て、この人が勘違いしたらどうするっ！」

「勘違い？」

「行動に移してないから未遂ですらないんだぞ!?流石にしないから安心してくれ！」

「未遂で済めば良いんだけどねえ……………」

こちらを揶揄うように笑いながら脱衣所へ消えてく。

「うーむ、やはり部屋は別にしておいた方が良かったか？」

急いで入ったので空いてればいい精神で入ったが……………今からでも変えるべきか？四季さんは特に気にしないとは言っていたが……………俺としてもありがたい。風呂上がりで宿の浴衣という構図だ。最高ではないか。

少しソワソワするような気分を味わいながらスマホで動画を見て

いると、部屋の入口で人の気配がした。

「……………」

更に控えめにノックが入る。……誰だ？

少し怪しく思いながらも部屋のドアを開けると、そこには竜胆ルリがこちらを見上げていた。

「来ているのは分かってたが……何かあったのか？」

もしかしてお菓子でも要求してくるつもりだろうか？だが、残念ながら今は持って無い。

俺の目を見ながら笑顔を浮かべて話しかけてくる。

「やあやあ、中々ユニークなことになってるようだね？」

笑いかけながら、普段聞かないしゃべり方で俺に話しかけて来た。

## 第75話：心残り

「その喋り方……ってことはそつちか」

ねつとりめの話し方で誰なのかすぐに理解する。中へ声が届かない様に外に出て扉を閉める。

「んんー、ごめんねえ？彼女さんと折角イチャイチャ出来る時に来ちゃってさ」

「残念ながら彼女じゃないな。それで？わざわざ来た用件は？」

「キミなら何となく察してるとは思うけど……例のあの子の件だよ。色々と動いてるみたいだね」

「……不都合か？」

「いやあ、別に止めるつもりはないから安心していいよ？」

……と言ってるが、安心は出来ないなあ。

「本来あるべきだったことが起きなかった。その元凶が解決させる……何も問題はないよな？」

「うん、無いね。こちらとしてもそれに関しては反対しないよ。特殊な例とは言え良い事なのは間違い無いからね」

「それなら、約束の件か？」

「そう、それもだよ。僕と交わした約束、覚えてる？」

「そりゃな。明月さんが人間として生きる為に起こす事象を見逃す代わりに死神の仕事を担うこと。それと、俺が生涯を終えた後はそちらに協力する。だろ？」

「うんうんそうだね。前者は元々してるし事情も詳しいから気にしてない。後者はキミの死後、その素質を見込んで働いてもらおうと思ってるよ」

「俺の素質ねえ……そんなに良いのか？」

「うーん、位としては中の下だね、もしくは下の上。ぶっちゃけあのお店で働いてる神社の子、あの子の方が素質として上だね」

墨染さんか。まあ本物だしそれもそうか。

「けど、キミの場合は色々都合が良いのだよねえ。こちらの事を

ある程度知っていて能力もある」

「最近はこちらも良い人材が中々見つからなくて人手不足なんだよお。だから君みたいな素質ある人材は欲しいんだよね」

「まあ、それなら好きにしてくれ」

「そうしたい事なんだけど……キミがしようとしてることを考えると、少し不都合があってねえ？」

「……やっぱり頭の中が読まれるって嫌な力だなあ。

「あるべき元の世界に戻す。おかしいことじゃないだろう？」

「言いたい事は分かるよお。でもそれをする為に自分を消すのはどうなのかなあ……？」

「今回の騒動に限らず、俺が視て来た世界で起きていなかった出来事の元凶は俺だと考えているんだが？」

「それに関してはYESと答えよう。これまでの騒動の殆どはキミがこの世界に来たことで生まれた事だと僕も考えてるよ」

「……詳しく知ってるのみたいな言い方だな」

「気になっちゃう？ そうだよねえ。自分が関与してるとなったら聞きたくもなるよねっ。でも、知ったら更に後悔することになるかもしれないよ？ それでも聞かいかい？」

「聞くに決まってるだろ。それでも知るべきだ」

「律儀だねえ……、良いよ。特別に僕の見解を聞かせてあげよう」

目の前の神が楽しそうに笑いながら解説を始める。

「と言っても僕も確信を得たのはキミらが森で蝶を見つけたからなんだけどね」

「森で……？」

「不思議に思わなかった？ どうしてあんな場所に蝶が集まっていたことか」

そりや当然に気になった。が、それより回収することを優先した。

「あそこには人の死の怨念が溜まっていたんだよ」

「怨念……？」

「そう、怨念。と言っても実際にあの場所で人が死んでいたわけじゃないけどね。……キミにも分かりやすく言えば……、そうだね、

キミが元々居た世界とこちらの世界を繋ぐ門みたいなものがあることにはあったのさ」

「……門が？」

「キミがあそこで生まれたのもそれが原因だろうね。これも推測になるのだけど、恐らく門の向こう側……キミが居た世界で大量に人が死んでるね。それもかなり惨たらしい殺され方で」

「はあ？」

「これに関しては僕も断言はできない、でも蝶が大量に居たってことはそう言うことだろ？」

「まあ……それは分かるが……。いや、つてことはさつき居た蝶は……」

「うん、そうだね。キミが生まれた後も次々と殺されているね。キミが居た世界って世紀末なの？それとも世界大戦でも始まった？」

「いや、ここと大して変わらない日本だったが……」

「まあ、それについては後にしようか。まず、キミがあそこで生まれた原因がこれね。まずこれが大前提」

「あ、ああ……」

「そんな魂で作られた君はその類の感情を受け付けなかった。ま、これに関しては他にも理由があるんだけどね」

「……だから明月さんやミカドさんがおかしく思っていたのか？」

「そして、蝶は感情に引き寄せられる。キミを創る負の感情に蝶は引き寄せられたのさ」

「つまりは、俺が街に蝶を呼び寄せたってことなのか？」

「そう、大正解。駅で出会ったナイフを持っていた男が居たでしょ？彼は元からだったけど、背中を押したのはキミに引き寄せられた蝶だね」

「……本当なんだな？」

「本気も本気。流石の僕もそんな存在を見てどうするか悩んだよ。下手に刺激すれば魂の暴走もあり得るからね。取りあえずは観察対象として様子を見て、もしものことがあれば消して貰おうと考えてたくらいだ」



「その為の卯花之佐久夜姫か」

「せいにかあゝい。あの子なら君の魂ごと消滅させるくらい簡単だったからね。まあ、マルチタスクが目的なのもあつたけど」

「けど、俺は問題無かつたと……」

「そうなんだよねえ、そんな存在なら負の感情に染まりやすい……けど、それを防いでくれた存在が君の中に居たのさ」

俺の中につてことは……あの蝶のことか？

「そう、あの人に感謝しなよ？君が最初から染まらずに今も無事に生きてるのは彼女の存在が大きかつたんだから。キミの魂に宿り魂を掃除……言わばろ過装置的な役割だつたのさ。……この言い方当たつてる？」

「大丈夫、当たつてる」

「それなら良かった。今部屋でお風呂に入つてる彼女が倒れたのも君が彼女に魂の許容量を超えさせたせいで起きた事故、今回の死神の子が助けられなかつたのも元を辿ればキミが原因だよ」

「分かつてる。俺が蝶を回収してしまつていたからだろ？」

「勿論それもあるね。あの森で生まれたキミが蝶を引き寄せていた。そのせいで蝶が集まらなかつたつて理由もあるのさ。これについては管理不足のこちらの不手際もある。それについては謝るよ」

「普通にあることなのか？それは」

「僕が知つてている限りでは初めてだね。だからこそ発見出来ていなかったつてのものもある」

「ならしょうがないな。予測出来ない事態だしな」

「キミがこの地で生まれてしまったのもそのせいだから、こちらの責任でもあるのさ。だから可能な限りキミに協力をしてあげた。せめてもの罪滅ぼしとして」

「大体の背景は分かつた」

「そう？なら良かった」

「となると、世界を元の状態に戻せば解決するつてことだな？」

「やっぱりそういう結論に至つちやうかあゝ……残念」

「俺が今からしようとしてることはどうせそつちには筒抜けだろ

？」

「そうだね。キミが自分の魂を使って過去に戻り、キミが知っている世界へ戻そうとしていることはね」

「もしも、俺が消えることで約束が反故されるのか？」

「されることはないね。蝶へ還った君の魂をこちらで回収すれば解決出来るのだから」

「なら、なんの原因が……？」

「蝶へ還るとなるとその時点で君の人生が終わる。僕としてはこちらに来るよりも現世で働いて欲しいのさ。こちらに移って再び地上へ降り立つのも簡単じゃないし、時間がかかるからねえ……このまま徐々にこちらの事もさせて行く方が使い勝手が良いんだよ」

「それと、個人的に君のことを気に入ってるからね。だから多少ながら残念に思ってるよ。今からでも取り消さない？」

「すまんが、変えるつもりはないな」

「そっかあ……ほんとに残念だよ。キミの様な人材はあまり居ないからねえ……でも、神としての立場から言わせてもらおうとありがたいのも事実なんだよねえ」

「世界を元に戻す。元々イレギュラー的な存在が居たせいでおかしなことが起きてたしな」

「そう言われるとその通りとしか言えないところ辛いよねえ……ほんと。だから僕はキミをとめることはしない」

「……確認なんだが、神は世界が巻き戻った後の記憶ってどうなってるんだ？」

「うん？ああ、そう言うこと。安心しなよ、これでも僕はかなり上の神だからねえ。その位の事象なら観測は可能さ」

流石は神ということか。

「ただ、保険として君にこれを渡しておこうか」

手を翳すと、掌に白く光る玉の様なもの浮かび上がる。

「これを……キミのに細工して……」

ふわふわと浮かび上がったと思うと一際輝いて散った。

「……今のは？」

「ちよつとした細工さ。これでキミが過去に飛んだ後にその時間の僕に記憶が継承されるようになっただけ」

「……ああ、なるほど。森の門を何とかしとかないといけないしな」  
「そうそう、キミが消えても元凶の門が開いたままだと良くないからねえ。ついでだし過去の僕にお願いしておいたのさ」

「……感謝する」

「キミも元を辿れば被害者だからね。せめてこの位の望みは叶えてあげるよ」

「……これなら大丈夫か。」

「これで、キミが知っている本来の世界に戻るはずさ」

「そっか……なら安心だな」

「僕が来たのはキミが知りたがっていた今の話と、過去へ飛んだ時点でその元凶を無くすためも2つだね。すつきりしたかい？」

「ああ、かなり。憂いが無くなった感じだ」

「それはなによりだよ。それじゃあ、僕はそろそろ帰るとしよう」

「ああ、ありがとな。教えてくれて」

「なに、そっちの方が僕としても面白そうだったからねえ……」

不敵な笑みを浮かべながら去って行く。相変わらず性格の悪そうな感じだが、今回はかなり助かった。

「むこうもそれなりに責任を感じている……ということか？」

少し腑に落ちないと思いつつも入口のドアノブを回す。

そろそろ四季さんは上がっているだろうか？

部屋から物音が聞こえなかったので出てないだろうと思いつつ中へ入る。

「……………」

するとそこには、真剣な表情でこちらを見ている四季さんがいた。

「……あ、あれ？既にお風呂あがっていた？」

浴衣姿がとても素敵ですね。と言いたいがそんな雰囲気じゃない。

「うん。それよりも……さっきの話はほんとなの？」

「さっきの話って……？」

これはまずい。絶対聞かれていた……。そうならない様に警戒し

ていたのに気づかなかった。

「お風呂出て、部屋に澤田君が居ないと思ったら入口の外から誰かと話してる声が聞こえた。確認しようにも何故かドアノブが回らないし開かないしで外に出られなかったから仕方なく内容だけは聞くことにしたんだけど……」

……クソが。やっぱり性格悪い奴だ。わざと四季さんが外へ出られない様にして、こちらからも中を把握出来ないようにしていたな。どおりで風呂出た音すらしなかったわけだ。

『僕としても面白そう』という言葉の意味に気づく。嫌がらせの達人だな。

「……因みにだけど、どのあたりから聞いてた？」

「……澤田君が、どうしてこの世界で生まれたかって辺りから。さっきの森に門があるとか……」

うん、重要な箇所ほとんどだな。

「そ、そっかあ……」

「それで、今の話は本当の事なの？」

「……可能性が高いってだけだ。あくまで本当の可能性が高いだけだ」

「ワタシが聞きたいのはそつちじゃない。澤田君がこれからしようとしていることに関して聞いているの」

……あーあ、やっぱりそこだよなあ。若干怒っている様に見えるし……そりゃ黙っていたからそうなるか。

「過去に戻るって話か？」

「そう、澤田君が自分を犠牲にして何かをしようとしていること。何をやる気なの……？説明して」

……観念するか？いや、絶対止められるな。ここは何とか乗り切るしかない。

「……分かった。説明するよ」

部屋へ戻り、ベットに腰を下ろす。

「今回蝶を回収した理由だけど、高嶺が奇跡を使うためなのは言っただが、その奇跡の内容が過去へ戻る奇跡なんだ」

「過去に……？」

「ああ。現在から高嶺が世界をやり直した9/28、あの日に戻る」  
「どうしてその日に……？」

「そこは俺も分からんが……、高嶺が戻りたいと願った日が最初の日だったってことくらいしか」

あの日が高嶺の魂に入り込める日だったのはあるけど。

「そこでまあ、色々とあるんだけど、現在へ戻って来た時に明月さんが人として生まれ変わってるんだよ」

「その色々を詳しく教えて」

「……言うのが割と恥ずかしんだが……聞く？」

誤魔化す様に言うと、やっぱり追及してきた。

「聞かせて」

「明月さんが人間になる要因が、蝶を使った高嶺との肉体的接触があつたためなんだ。そのおかげで蝶が明月さんの魂の核を元に人間として構成されとこで見事生まれ変わる。その肉体的接触が……まあ、手を握るとか軽くじゃなくてそれなりに……だな？」

「あ、うん。わ、わかった……」

容易に想像出来たのか顔を赤くして目を逸らす。

「だからそのためにもなるべく蝶を大量に回収しておきたかった」

「それがどうして自分を犠牲にするのに繋がるの？」

「それについては理由がある。向こうを欺くための……」

「欺く……？」

「さっきの神は俺がどうして生まれたかの原因を知っていたが、俺が蝶を回収していたことはどうやら把握していなかったみたいだ」

「……どういうこと？」

「向こうは俺が自分の魂を使つても高嶺を過去に送ろうとしてい  
るって言っていた。俺も最初はそうするつもりではあつた。けど、森  
で蝶を回収したことでその必要が無くなった。それなのにそう発言  
しているなら俺が蝶を回収したってことは知っていないはずだ」

「……けど、それについては澤田君も肯定していたでしょ？どうし  
て向こうに合わせて嘘を付いたの？」

「蝶を使って奇跡を起こすって普通は駄目だろ？高嶺の時もそうだが……元は人の魂だからな。ミカドさんもそうだけど、100%止められるぞ？」

「……確かにそうかも」

「蝶を回収してそれを使うのは駄目だが、本来起こるはずの事をダメにした原因である俺の魂を使って解決するのはギリギリOKそうだが……」

「でも実際は蝶を使うんでしょ？その……バレない？」

「そこは何とかする。最悪バレても何とかかなりそうだしな」

「そうなの？」

「本来なら高嶺が引き寄せた蝶を使って起こすことなんだ。そしてその後は特にお咎め無しだ。寧ろ死神が人として生まれたという良い事しかない」

「あつ、そっか、元々高嶺君がしていたことだから、澤田君も同じことをしているだけ……」

「心配させるようなことをしたのは謝る。まさか聞いているとは思っていなかったからさ」

「ワタシ、ドアとか叩いたんだけど……？」

「やっぱりそうか……多分だけど、話していた神の嫌がらせだろうな。力を使って出られない様にしてたはず」

「そんなことする？確かにドアノブが回らなかつたりドアが開かないとか変な現象だったけど……」

「俺も外から中の物音が一切聞こえてなかったんだ。あの性悪神なら絶対する」

「そ、そうなんだ……」

「と、まあ……そういうことで誤解させてしまっただけなんだ」

「……そう、一応理解は出来た」

「なら良かった。そんじや俺も風呂入ろうかな……」

「……ねえ、澤田君」

話が終わったと思つてベットから立ち上がったが、呼び止められる。

「どこか気になったか？」

「澤田君が持つてる蝶を使ったとして、本当に足りるの？無事って保証はあるの……？」

「……大丈夫。って言いたい所だけど、それについては俺も分からない」

「ツ!?なら……!」

「けど、俺がもし限界を迎えて消えても消えなくてもどの道結果は変わらないんだよ」

「えっ?どういうこと……？」

「……これについては話さない方が良いと思ってたが……全部話すよ」

真剣な表情で四季さんと向き合う。

「……過去に戻ってもう一度やり直す。そうすると当然今とは違う未来になる。これは分かるよな？」

「うん、別の未来になるってことでしょ？」

「そう。以前四季さんが見た様な映画が分かりやすいけど、過去を変える未来は変化する。なら、今この瞬間俺たちが生きている世界はどうなると思う……？」

「……別の未来が出来ただけで変わらないってのは楽観視過ぎる？」

「そうだな……。少し前にさっきの神様に確認したんだよ。仮にごそつと変えた場合元々あった世界はどうなるのかって」

「どうなる……の？」

「どうやらそこで終わりらしい。消えてなくなるんだとき。過去を変えずに戻れば元の世界へ戻れるんだけど、過去を変えたなら戻るのは違う未来らしい」

「つまり……ワタシたちがいるこの世界は……」

「……無かったことになって、また9/28から新しく始まることになる」

「……そ、そう……なんだ……」

「けど、未来はそこまで変わらないと思う。元々お店は開かれるは

ずだしその未来を元々俺は知っていたからな」

「そ、それじゃあ……また一からつてことになるの?」

「ああ。だけど安心してほしい。お店に高嶺を誘う事さえ出来れば必ずお店は開かれる。これだけは保証する」

「……ごめん、少し頭の中を整理させてほしい。澤田君が言っている事は分かっているけど、追いついていないだけだから……」

「……分かった。ひとまず俺も風呂入って来るよ」

「うん……その間に整理しとくから……」

その場を離れて風呂場へ行く。

……多分、これで何とか誤魔化しただろう。多少雑でしつかりと考えればおかしな点があると分かるが……全部話したと思いきや最後に爆弾を投下させたことで混乱して細かい箇所を忘れたはずだ。全部話したという雰囲気を出していたし、細かく説明もしていた。

「……ごめんな」

自分でもクソ野郎とは思うが、バレる訳にはいかないからな。服を脱いで浴場へ入る。

「澤田君……、最後に一つ確認させて」

髪を洗っていると、入口のドア越しから話掛けられる。

「どうしたー?」

「過去に戻って変えたら、本当に今は無くなる?」

「……ああ、本当だ。違う未来になるからこれまでの事は無くなる」

「……そう、わかった。ありがとう」

寂しそうに呟いて部屋へ戻って行く。

「受け入れた……のか?」

明月さんを助ける為と原因を取り除くためにと分かって自分を納得させたのか。

……今更ながら無理がある言い訳を並べたもんだと思う。冷静に考えればおかしいな。そこを突っ込まれた時の言い訳も考えておかないとな。

明月さん……そして四季さんを助ける為にしていることだと自分に言い聞かせながら髪を流し始めた。



「よし、出るか」

風呂に入り、浴衣の着こなしにおかしい箇所が無い事を確認して風呂場を出る。

「……ん？寝ているのか？」

部屋に入ると電気が消えていた。ベットを見ると、ふくらみがあるので寝るつもりと思われる。

「俺も寝るか……」

水を飲んでベットに入る。

「おやすみ」

起きているか分からないが取りあえず言っただけ目を閉じる。

明日……明日で全部解決出来る。それでいい。あとは高嶺が店で働けば大丈夫だ。

寂しい気持ちもあるが、自分がすべきことだと決めて背を向けて寝る体勢に入る。

すると、隣のベットで動く気配がした。どうやら寝てはいなかった様子だ。

「澤田君……」

ベットから起き上がり、こちら向いて声をかけてくる。

「……どうかしたのか？気になる事でも……？」

振り向いて目を開けると、俺を見下ろす様な形でこちらを見てくる四季さんが居た。……なんだか妙に色っぽい。いや、エロい！浴衣パワ―って凄い!!

「澤田君の話を聞いて……色々考えたんだけど……、どう説得しても澤田君が納得して止まってくれとは思えなくて……」

「……そうだな。四季さんには申し訳ないけど、必ず決行する気でいる」

「……だよ。そんな風に見えるから、説得するのは諦める。だから……」

「だから……？」

「せめて、明日までに後悔を残して終わりたくないって思ったの……」

「……何か俺に手伝えることがあるか？」  
せめて、そのくらいはしてあげたい。

「う、うん……むしろ、澤田君にしか、で、出来ない事なんだけどね……？」

「分かった。なんでも言ってくれ。前にも言った通り、最後まで四季さんの頼みなら何でも協力しよう」

体を起こして正面で向き合う。

「……ほ、ほんとに？」

「勿論」

「聞いた後で……やっぱり無理とか、出来ないって言わない？」

「言わないから安心して言ってみてくれ」

「わ……わかった。えっと……」

急にモジモジして顔を逸らす。……どんだけ恥ずかしい事を頼むつもりだ……？

「今から……明日の終わりまで……ワ、ワタシと……付き合ってほしい……恋人として……」

「………、えっ!?!」

恥ずかしそうにこちらを見てとんでもない事を口に出して来た。

「ちよ、ストップ……ッ!。……か、確認だけど……四季さんが俺に付き合ってほしいって言ってるで良いのか……？」

「う、うん……言った」

「……それは、どういった意図があつてだ？」

「ッ!?!男の人に付き合ってって言う意図なんて一つしかないでしよっ!」

「……あ、ああ。確かにそうだな……」

えっと、これは、つまり……四季さんが俺の事を好きで、付き合いたいと……言うことだよな?間違ってるやないよな?

「……ダメ？」

「いや、ちよつと状況が……。頭が混乱してる……」

どうしてこの瞬間だ？てか、何時から好きだったんだ？さっきの台詞的に後悔して終わりたくないってことだから……。

「頼み、聞くんではよ？何でも協力するって言った……」

「そ、それはそうだが……」

「言った後で無しとは言わないじゃ……ないの？」

「無理とかそういうことは無いが……」

「それなら良いでしょ？それとも……澤田君はワタシの事が……嫌いだった？」

か細く呟くその言葉を聞いて、反射的に返事をする。

「嫌いなわけがないっ!!寧ろその逆だ」

「それなら、ワタシのこと……好き？」

不安そうにこちらを見つめてくる。……何だか色々考えるのがダメな気がしてきた。

「……そりゃ、当然好きに決まってる。世界一な」

「なら、両想いってことで……問題、無いよね……？」

「……けど、良いのか？どの道明日には……」

「そうだけど……このまま何もせずに終わるが嫌だなんて……どうせ全部無くなるんだったら、好きな事して終わりたい」

「その結果が……俺と……？」

「……うん。もしかして、嬉しくなかった？」

「いや、滅茶苦茶嬉しい。今すぐ叫びながら踊り出したい気分だ」

「そう。なら良かった」

心底安心するように微笑む。……なんて表情だ。俺を殺す気か。

「明月さんの事で色々と考えてるのは分かるんだけど、後は明日の夜に高嶺君の所に行くだけだよね？」

「そう、なるな……」

「それなら、良いかなって思ってた……ごめん、迷惑かけることになるけど……」

「迷惑じゃない。想定してなかったから驚いてたのはあるけど……」

「負担になったりしない……？」

「しないしない。明日は夜まで予定は無かったし、やる事はもう全部終わってるからな」

「……ありがとう」

「いや……こちらこそ？まさかこんな場面で四季さんに告白されるとは思ってなかったから……」

「ワタシも、全部終わってから言おうって考えてた。けど、明日で終わるって聞いて……急がなきゃってなった」

「あー……それについては、申し訳ないとしか言えないなあ……」

「じ、自分でもっ、急に变なこと言ったのは自覚してる！けどこのままじゃ嫌だったのっ」

「そ、そうか……」

目の前で恥じらってるのが物凄く可愛いです。無くても可愛いけど！

と、取りあえず協力と言って付き合う……で良いのか？それとも気持ちを伝えたかったのか？

……どつちにしろ罪悪感が半端ない。目の前の彼女を無い事に新しく始めるのだから……。

「ワ、ワタシは澤田君の事が好きで、澤田君もワタシの事が好き。告白はOKで、ふ、二人は今付き合った……で、当たってるよね？」

「な、何も間違っただけです……」

改めてそう言われると……こう、複雑な気持ちである。

「そ、それなら……っー」

ズイツとこちらに近寄り、俺の肩を押して後ろのベットに押し倒して来る。

「し、四季さんっ!? なな、何を……!？」

「こ、恋人なら……こういった事も、あるんじゃないの？」

「それはまた……随分飛躍したお考えをお持ちで……」

……なにこのシチュエーション。俺今押し倒されているんですが？え、なんでえ……？

「それともっ……澤田君は、ワタシとするのは……いや？」

シユル……と浴衣の帯を解いてこちらを見る。

「な、何とも……大胆なお誘いを……」

浴衣が開いており、部屋は暗いが肌はハッキリと見える。そこそこ夜目が利くので……。

「こうでもしないと……、はぐらかすでしょ……?」

ベットに倒れてる俺に、覆い被さる様な形でベットに膝を乗せてくる。

「四季さんって、結構肉食系だった……?」

「う、うるさいっ。抑えきれなかったのっ、文句ある?」

「いや、無いです……」

「それで、澤田君はいや?ワタシがこれからしようとしていることに反対……?」

「……本当に良いのか?」

「……うん。ワタシがそれを望んでるの。澤田君とそういう事をしたいって」

「そ、そうですか……ありがとうございます」

「こ、ここまで来たんだからっ、そっちに拒否権はないから!それに……なんでも協力、するんでしょ……?」

「……分かったっ!俺も男だ。二言は無い!それに……四季さんの気持ちは心の底から嬉しい。頑張ってくれた四季さんの気持ちにも応えたい」

「それじゃあ、いい……?」

「ああ」

正直、裏切るような形で終わらすのに応えても良いのか迷いもあった。けど、それでもその気持ちを受け入れたいと思った。

「は、初めてだから、よ、よく分からないけど……が、頑張るからおかしかったら言っしてほしい」

「残念ながら、俺も初めてだから詳しくは無いけどな……」

「それなら……少し安心かも……」

至近距離まで顔を近づけ、目を閉じる。

「……ここまで来たら、最後までいくしかないよな……!」

少しやけくそな気持ちが混じりながら、それに応える為に四季さん

の後ろに手を回してこちらに引き寄せた。

第76話：もう一度……。

「……………」

目を覚ます。時間は朝の7時頃。体を起こして状況を確認したが、どうやら夢では無かった様だ。

「……………お互い、裸だしな」

横でまだ寝てる四季さんを起こさない様に気を付けながら浴衣を着てベットから出る。

「なんか飲むか」

宿の部屋に付属で置かれているお茶を淹れてゆっくりと飲む。……こういうのが最高の朝と言うのだろうか。

心地よさそうに寝息を立てている四季さんを見ながら昨晚の事を思い出す。

「まさか、俺が襲われる側になるとはな……」

悪い気はしなかった。むしろ清々しい気持ちだ。だが、こうして幸せそうに寝ている彼女を置いて過去に戻ってリセットすることを考えると……。

「……………って、今更言っても遅いか」

それでもと決めたのだから今更揺らいでいては駄目だろう。

淹れたお茶を飲んでみると、ベットで寝てた四季さんが目を覚ます。

「……………っん、んん……………」

「起きたか？おはよう」

「ん？澤田君……………？おはよ……………」

寝ぼけながらこちらを見て、ハツとする。

「ツ！？」

自分の状況が分かって布団で体を隠す。

「……………ッ!?」

「随分と驚いた顔をしてるけど……………夢だと思ったのか？」

「う、ううん……………。現実だと分かってるけど……………。その、恥ずかしい

から……」

「まあ、だよなあ……。何か飲むか？つて言ってもお茶しかないけど」

「あ、うん……。お願い」

「オツケー」

「あ、あと……。後ろ向いててくれる？ふ、服着るから……。！」

「見られたくないと？」

俺の問いに顔を赤らめて頷く。

「昨日、自分から見せて来て全部さらけ出したのにい〜？」

「それでもっ！恥ずかしいのは変わらないからっ！あっち向いてて」

「わかったわかった」

こつちを睨むように怒りながら枕を手に持ったので、すぐに背を向けてお茶を飲む。

後ろで人の動く音と、下着を着ている気配を感じる。

……。いやいや、むしろこつちの方がエロいのでは？

気持ちを落ち着かせる為に取りあえずお茶を口に付ける。……

ふう、エロい。じゃない、美味しい。

「ごめん、もう大丈夫」

「それじゃあ、お茶淹れるからゆつくりしといてくれ」

「……。ありがとう」

ポットの水を温め直してお茶を淹れる。

「ほい、玉露です」

「へえ……。そんな良いのを使ってるんだ」

「嘘です。知りません」

「なんでそんな下らない嘘を付くのかなあ……」

「コミュニケーションだよ、コミュニケーション」

「はいはい、ありがとね」

俺も新しくお茶を淹れて二人で飲む。

「はあ……。美味しい」

「朝からこんな宿でゆつたりとお茶を飲むって風情があつて良いよ



な」

「ね。良い御身分って感じ」

「一応朝食はあるけど……食べるか？」

「んー、もう少ししてから食べようかなあ。あ、今日って何時に出な  
きやダメ？」

「確かチエックアウトが10時だからまだまだ大丈夫だな」

「それなら折角だしゆっくりしたいと思ってるけど……どう？」

「賛成。滅多に味わえないしな。時間に余裕あるし異議なーし」

「ん。ありがと」

お茶を飲んだ四季さんが一旦ベットに戻りスマホを見る。

「誰かから連絡とかあったりする？」

「ん？特に来てないかなあー……」

そのままベットに横になってゴロゴロし始める。

「宿にあるベットってどうしてこんなに寝心地が良いんだろ……」

「客が寝るから良いベットでも使ってるんだろうな」

「やっぱりそうなのかな」

ゴロゴロしながらこちらをチラチラと見ている。

「スマホ見ながら俺へ視線を向けている気がするが……気のせいか  
？」

「……だって、澤田君が……普段通りに見えるから」

「……昨日あんなことしたのにおどおどしてないってか？」

「うん、こっちは今も物凄く恥ずかしい」

「……もしかして、だからベットに逃げたのか？」

「……ベットで寝転んだのはそれが理由？」

「っ……う、うん。さっき思い出したら、近くに居ると頭が沸騰して

どうにかなると思った……」

「あー……なるほど。そういうわけか」

「何に納得してるの？」

「いやー相変わらず可愛いなって再確認しただけだな」

「揶揄うなあっ！」

揶揄ってないんだけどな……。いや、反応を見て楽しんでるから揶

揃ってるのも当たってはいるか。

「……なんだかワタシだけ恥ずかしがってて、澤田君は違うように見えるから、ワタシの体を見て興奮してないのかなって……」

「はあ？何を言ってるんだ。昨日滅茶苦茶興奮しまくったぞ！」

「それはその場の雰囲気とか……あと電気消してたから。一晚経って見たらそうでもなかった……とか？」

「いやいや、電気消えてても四季さんの体はちゃんと見えてたからな？鮮明に記憶に残っておりますからっ」

「……え？み、見えてたの……？真っ暗だったのに……？」

「そりゃ、まあ。多少は夜目が利く体だからな」

「……ッ!!はあっ!!な、なんで言わないのっ！」

「ええ……見せて来たのは四季さんじゃん……」

「く、暗いから大丈夫だと思っただのにつ！くくっ！最悪……」

「綺麗だったし、最高に興奮しましたが何か？」

「ッ!？」

恥ずかしさのボルテージが限界を超えたのか、手元の枕を俺へ投げつけてくる。

「ごはっ!？」

それをテーブルのお茶に当たらない様に気を付けながら顔面で受ける。

「変態っ！すけべっ！むっつり！」

「……ブ、ブーメランでは……？」

「暴力とはいけないなあ……。俺はただ、四季さんが不安がってたから安心させる為に言っただけなのに……」

「……セクハラで訴える」

拗ねるようにこちらを睨む。うん、朝から最高のご褒美だな。

「んで、俺からの感想を聞いて安心したか？」

「……安心は、した……かな？ガツカリされて無くて良かった」

「それは何より」

「け、けど……！ま、満足はっ、してないから！」

「満足と来たか……」

「だから……！こっちにきて」

自分の隣を叩きながら催促してくる。

……うん、ここは大人しく従うか。いや、従うのは自分の欲望に……だな。

立ち上がって四季さんの隣に腰を下ろす。

「それで？何をして満足する気？」

「分かかって来てたくせに……」

そのまま俺の肩を掴んで昨日のようにベッドに押し倒して来る。

「……凄い既視感を覚えるな」

「なんか、その余裕そうな言い方が気に入らないから……分からせてあげる」

「……なるほど、澄ました顔をしてる俺が気に入らないからセックスで分からせると？」

「そ、そう！だから、覚悟すること……！」

滅茶苦茶顔を赤くしてるし、無理して言ってるなあ……。

「……そうか。なら、俺が頑張らないと、なっ！」

俺に覆い被さってる四季さんを掴んで逆に組み伏せる。

「きやあっ!?な、ななっ!」

予想外の事態に驚いている。

「なんでっ！澤田君がっ……!?!」

「四季さんの目的は俺が四季さんに対して興奮してるかどうかだろ？それなら俺が頑張れば証明出来ると考えてな……」

「そ、それはっ、ワタシがいまからしようと……!!」

「いやいや、俺も男だからな。やられっぱなしはプライドが許さないのだよ」

「っ……くそお、抜け出せない……!」

「ふはは、逃れられると思うなよ！」

「うう……」

無理だと分かると、こちらをチラリと見て顔を逸らす。

「……覚悟は出来たか？」

「す、好きにすればっ！どのみち、抵抗出来ないんだし……」

やけくそ気味で叫び、顔を逸らしたまま目を閉じる四季さんを見て苦笑する。

「じゃあ、頑張って証明させてもらおうぞ」

「……うん、させてみて」

「それじゃあ、出ようか」

「うん、忘れ物は……って特にないか」

四季さんが満足してくれた後、交互にシャワーを浴びて、朝食を食べべて宿を出る。

「体の調子はいかがですか……？」

「……休んだから少しマシになったかな……うん」

「少し調子に乗りました。反省しています」

「確かに少しは加減して欲しかったけど、謝られることじゃないから……」

「……悪くは無かったと？」

「……まあ、それなりに……？気持ち良かったし……」

照れるように顔を逸らして髪を弄る。すげべな人だな。

「この後のご予定は？」

電車に乗り、揺られながら隣の四季さんに話しかける。

「取りあえず一回家に帰りたいかな……、そっちは？」

「俺もそうかなあ……というか今日は夜までずっと部屋で籠ってると思う」

「そっか……分かった」

「後で高嶺の方にも連絡しておかないとな……」

多分家に居る確率が高いとは思うので今日の夜に予定を空けて貰わないとな。

「お昼過ぎぐらいに部屋に行ってもいい？」

「別に構わないが……？」

「最後にまたご飯作ってあげる。英気を養ってもらおう為にね」

「なるほど、そりやありがたい」

「……気を遣わせてしまってるなあ。無理して笑ってるしね。」

「何かリクエストとかある？」

「リクエストかあ……。正直四季さんの手料理なら何でも大喜びなんだが」

「”何でも”が一番困るんだけど……」

「だよな。そんじゃあ……。ハンバーグ？いや、唐揚げも捨てがたいな」

「どっちにするの？一応どっちも作れはするけど……？」

「ハンバーグでっ！お願いします」

「ん、了解。材料買ってそっちに行く」

「首を長くしてお待ちしております」

「大層なものじゃないから期待しないで……」

「いや、絶対するねっ！手料理だぞ？」

食べ物の話などで雑談をし、最寄りの駅に着いたので降りる。

「それじゃあ、一応家まで送るよ」

「大丈夫？疲れてたりしない……？」

「余裕余裕。俺より四季さんの方が心配だな」

「ワタシも平気だけど……。でも、お願いしようかな」

「ご利用ありがとうございます」

そのまま四季さんを家まで送る。

「それじゃあ、少し休んで食材買ったら行くから」

「ああ、無理せずにな？楽しみにしてる」

部屋に入ったのを確認して自分も家へ向けて歩き出す。

「……高嶺に連絡しておくか」

『今日、夜に時間空けられるか？大事な話がある』つと……。

連絡を送り、家へ帰る。部屋に着いてスマホを確認すると、高嶺からの返信が来ていた。

『特に用事は無いので問題無いです』か。うむ、それじゃあ……」

『人にあまり聞かれたくない話だから出来れば高嶺の部屋で話したいが大丈夫か？』

『大丈夫ですが、どういった内容ですか？』

『ざっくり言うと、明月さんの話。ミカドさんにも聞かれたくないから今日の夜にお邪魔させてほしい』

『分かりました。何時ごろ来ますか？』

『日が沈んでからだだが……向かう前にまた連絡するよ』

『了解です。その時に連絡して下さい』

話が終わったので『オツケー』とスタンプで返事をしてテーブルにスマホを置いてベッドに寝転がる。

「さてと……あとは高嶺と一緒に過去に飛んで元通りにすれば万事解決と、なるか」

目を閉じて森で生まれてからの3か月間を振り返る。

この世界に来て最初は滅茶苦茶驚いた。まさかゲームの世界に転移……いや転生かこの場合。そしてヒロインと主人公のお店で働いて、何とか原作通りに進めようと色々手を打ったが……。

ハプニングや思い通りに行かない事も多々あった。だが、それらの元を辿れば大体俺が悪いという結果があった。

「これは、あれか……。余計なことしかしてないってオチか」

自分で起こした事件を自分で解決して、マッチポンプとはこのことか。

「ほんと、何の為にこの世界に来たんだろうなあ……」

あの神様が言うには、俺が居た元の世界で大量の死人が出ている。みたいなことを言っていたが……一体何があったのだろうか？少なくとも俺が死ぬ直前までは普通の世界だったし。

向こうの世界のどこと繋がっているのかも重要か。人が多く死ぬ場所だったら何とか納得も出来なくはないが……。

「今更考えても意味ないな」

どの道、門は閉じて蝶の流出は塞がれる。俺も消える。

現在はちようどお昼時、残りは半日も無い。

「最後に、四季さんの手料理を楽しむとかは、許されても……良いよな？」

文字通り……最後の晚餐だしな！

「ご馳走様でしたっ！」

「お粗末様。美味しかった？」

「そりやもう、最高の高だった！最後食べるには勿体ない位にはな！」  
昼過ぎに四季さんが部屋に来て、夕食までの間に映画を見た。前に一緒に見ようと話していたやつだ。それを見てから次の2作目を見た。

1作目の終わり方とは違って、今回は主人公が何度も足掻く様子を見事に思った友人が主人公に探りを入れた事でこれまでとは違った未来になっていったとのこと。

その結末は友人が主人公を生かす為に自ら犠牲になって終わり……。という何とも心残りがある終わり方だった。

お互いにモヤモヤしながらもご飯の準備して食べた。

「最後まで大げさな感想どうも」

「正当な評価だがなっ！」

「悪い気はしないけどね……」

少し呆れるような照れてる様な顔をして俺の隣に座る。

「……そろそろ時間？」

「……そうだな。もう少ししたら、行くつもり」

「そっか……うん。分かった」

寂しそうに目を伏せる。

「……明月さんと高嶺君を助ける為だもんね」

「そうだな」

「最後に一つお願い……というか確認したいんだけど、良い？」

「確認？」

「……えっと、目を閉じてくれる？」

「あ、ああ……」

言われた通りに目を閉じる。

このパターンは、キスか？最後に……。

視界が見えないのでいつ来るのか待っていると、俺のおでこに四季

さんのおでこだろう。こつん。と当たる。

「……はい？おでこ？」

不思議に思い目を開けると、そこには体を淡く光らせた四季さんが居た。

「っ!?待てっ!ストップッ!」

四季さんの肩を掴んで離す。

「あっ……、なんで目を開けるのかなあ……」

「いやいやいや、何をしようとしてるんだよ!」

「いやほら……、少しでもあつた方が良かったって……。無くなるのなら、澤田君の力になった方が成功率上がると考えた結果なんだけど」

「言いたい事は分かるけど……、下手したらまた倒れるぞ!」

「今倒れて無いから問題無し。大丈夫でしょ」

「んな、てきとうな……。ていうか、なんで四季さんがそれを……!」

「……こつちに来る前に性格の悪い神様が来てね。力になりたいのなら協力してあげるって」

「あんの神は……なんつーことを……っ」

マジで性格悪いな。愉快犯か？

「それより、時間は大丈夫なの？」

「……ああ、そうだな。いや、ほんとに体は平気か？」

「大丈夫って、終わるのに心配症だなあ……」

「あろうがなからうが関係無いだろ？四季さんが倒れたらこの後の事に望めないって」

「………。ほんとに、最後まで……はあ」

一瞬驚いた表情をして、嬉しそうに微笑む。

「ほら、早く出る支度して。高嶺君待ってるから」

「あ、ああ。分かった……」

何故か急かさされながらも支度を済ませる。

「忘れ物ない？」

「大丈夫。そもそも必要無いしな」



靴を履き終えて返事をする。

「ほんとに？忘れてるとかない？」

「……四季さんは何か心当たりが？」

振り返ると、何かを期待するような目でこちらを見ているのに気づき聞いてみる。

「……ある。最後に大事な忘れ物」

……なるほど。

「そうだったな。うつかりしてた」

四季さんへ一歩近づき、俺が目を合わせると目を閉じてくる。やっぱりそうだったか。

「……んう……んっ、ん……っ」

これは……いつてらっしやいのキスと言うことなのだろうか……？

「ん……んんっ……ふはっ……はああ……」

キスを終えて顔を離すと、恥ずかしそうでもあるが……寂しそうな表情をしていた。

「い、行って……らっしやい」

「……行ってくるよ」

「必ず明月さんを助けて来てね？」

「任せてくれ。必ず助ける」

「うん、任せる。……それじゃあ、またね？」

前に明月さんに言った様に最後に挨拶としてだろう。

「ああ。また、過去で会おう」

玄関のドアを開け、外に出る。その世界の四季さんを見ることが出来るのはこれが最後……。

「……」

意思を固め、最後に四季さんを見て笑う。

「行ってくる！」

「……ッ!?うん！」

向こうもそれに応えようと返事をする。それを見てドアノブから手を放す。

ゆつくりとドアが閉まる。

「……、よしっ。行くぞ……気合を入れろ……！」

自分の頬を叩きながら背を向けて高嶺の部屋へと歩き出した。

「……………」

澤田君を送り出した玄関が閉まり、少しの間動かずに立ち尽くしていた。

「……行っちゃった、かあ……。はあああ……！」

顔に出ない様に精一杯押し殺していた感情をため息として吐き出す。

「この世界のワタシはこれで終わり……か」

部屋に戻り、ベットに倒れるように寝転ぶ。

「……でも、澤田君なら上手いことやってくれるし心配は無い、かな？」

寝ているベットから彼の匂いがする。

「上手くいってくれるといいな……」

明月さんを助ける為に彼は自分の命も捨てるつもりだった。正直、それに多少は妬いたりもしたが……止める事も出来ないし、恐らくその資格もないのだろう。なぜなら既に、ワタシはそれを受けた側なのだから……。

「あれを知っちゃったら、止めることは流石に……出来ないなあ」

今回もワタシの時と同じ……ううん、きっとそれ以上に責任を感じているだろう。

「また最初からかあ……」

高嶺君と初めて会った日だから、その時のワタシは……怪我させたことの罪悪感でウジウジしている段階だっけ？

「……………」

当時のワタシが今のワタシを見てどう思うだろう？あんなに他人と距離を置こうとしたりしていた自分が、こんなに変わったと聞いても鼻で笑いそうな気がする。

「変わった……ううん、変えられた。が正しいか……」  
毎回ワタシを揶揄いながらも、大事な場面では親身になって最初に手伝ってくれて、ここ一番という時に背中を押してくれた。

「そんなことされたら……誰だつて心も動かされるに決まつてる」  
敷き布団を捲り、体に被せる。

「最後まで……良いよね？」

世界が終わる時くらい、好きな人の匂いに包まれても……許されるよね？

「……それにしても、ワタシも難儀な人を好きになつてしまったなあ」

ワタシがアプローチをするまでこちらへの好意を隠して接していた人だ。今回は最後だからと多少強引に迫ったけど、次はどうなるかわからない。次のワタシに託すしかない。

「……つて、好きになることは確定してる言い方になつてるし……まあ、間違つては、ないけど」

例え過去に戻つてまた知り合いから始まつても、最終的にまた彼の事を好きになる。……意外と自分はチョロイのかもしれない。

「願わくば……」

誰かが彼の魅力に気づいて迫ることが無く、ワタシだけを見てくれますように……。

ささやかな最後の願いを胸に秘めて、目を閉じた。

「……だな。高嶺の部屋は……」

目的の部屋に着き、インターホンを押す。

「はい……」

中からこちらへ向かつて来る足音が聞こえ、玄関が開く。

「やあ、来ました」

「澤田さん。どうぞ、上がってください」

「ありがとうございます。お邪魔しまーす……」

部屋に入り、高嶺を見る。昨日と変わらず覇気の無い雰囲気纏つ

ていた。

「何か飲みますか？お茶くらいしか出せませんが……」

「それでお願ひ」

「分かりました」

高嶺がお茶を淹れてる間に部屋を見渡す。

うん、イメージと同じ部屋だな。違うのはベットの所に止まってる蝶がいるというくらいだろう。

「お待たせしました」

コップに入ったお茶がテーブルに置かれる。

「お、ありがとう」

「それで、俺に話とは……？それに栞那についてとの事でしたが……」

俺の正面のテーブルに座った高嶺がこちらを見る。

「ああ、明月さんの話だ。……重要な話しだから心して聞いてほしい」

「……一体。……分かりました」

真剣な表情に切り替えて話始める。

「……明月さんに再び会いたくないか？」

ゆっくりと、しかしはつきりとそう問いかける。

「……そりゃ、当然に決まってるじゃないですか……」

「そうだよな。すまん。聞き方が悪かった」

「……明月さんに再び会える手段があると言ったら、どうする？」

「ツ!?!あ、あるんですかっ！」

俺の言葉を聞いて目を開き、前のめりになる。

「ある。だが、それをするには高嶺の協力が必要だ」

「俺に出来る事ならなんでもします！」

「本気か？これはある意味神へ反抗だ。なんせ、2度目の奇跡を使う事になる」

「2度目の……！」

「それでも明月さんに会いたいか？その覚悟はあるか？」

「……あります。栞那にもう一度会いたい。ですが、どうやって

「……？」

「それをこれから話す。聞き逃さない様にな……」  
ささあ、始まるぞ。

高嶺と作戦を話し、俺たちはお店までやって来ていた。

「……ミカドさんも居なきやダメなんですよね？」

「ああ。高嶺の肩に居る明月さんの魂の残滓と、ミカドさん。後は高嶺と俺が同じ空間にいないといけない」

「どうやって呼びましょうか……？」

「大丈夫。簡単な方法があるから……」

「……？」

不思議そうにこちらを見た高嶺。

「んじゃ、ミカドさんが来たらあとは話した通りで行くぞ？」

「はい。お願いします」

お店の前に立ち、森で回収した蝶の一部を解き放つ。

「……これが、さつき言ってた蝶達ですか」

「そうだな。蝶に敏感なミカドさんならすぐに飛んでー」と言った時に、お店からミカドさんが飛び出して来た。

「ー！ー！澤田達也？それに高嶺昂晴……？この蝶は貴様らが原因か？」

「ミカドさん、こんばんわ。すまんこんな時間に……」

「挨拶より先に、この蝶はなんだ？」

「ちよつと、昨日……回収しててさ。その蝶なんだよね」

「蝶を……？いや、今はそれよりも回収することが優先だ」

ミカドさんが動くこうとした時に更に蝶を排出する。

「貴様っ！何をしているんだ！」

「何をって、体に溜め込んでいる蝶を解放しているだけだが？」

「何故それをしているのだ！」

「……高嶺を明月さんにもう一度会わせるためって言ったら？」

「っ！……貴様、まさか……高嶺昂晴に奇跡を起こさせる気かっ！」

「ご名答。まさにその通りだ」

森で回収した蝶達を全て開放する。

「馬鹿な真似はよせ！高嶺昂晴もだつ！感情を抑えろ！ここで奇跡を起こせば……全てが無駄に終わるのだぞ!？」

「俺は……栞那に会いたいよ」

「分かっているのか……!?次は無いのだぞツ！」

「高嶺、大丈夫だ。俺を信じて望め。もう一度あの日を……!？」

「澤田達也……!一体何をやる気だ……?」

「俺の罪の清算……って言うのは聞こえは良いけど、高嶺と明月さんを救う。ただそれだけ」

無数の蝶が高嶺の周囲へ集まって舞う。

……まだ奇跡が起こらないということとは、足りてないのか。

回収した蝶だけでは足りてない様なので俺自身の魂を削る勢いで蝶を吐き出す。

「さてっ！よせ……!それ以上は貴様の体が持たんぞっ！」

体を見ると、淡く光り……蝶となつて漏れていく。

「ははは！それで高嶺が奇跡を起こせるのなら本望だな！」

更に大量の蝶が高嶺へ集まる。

「さあ、願え！望め！高嶺昂晴っ！お前のその強い意志が奇跡を起こすのだからなっ!!」

周囲の蝶が高嶺に引き寄せられるに消える。

「くっ……!間に合わないか……っ!？」

高嶺が顔を上げる。

「俺は……栞那に、もう一度……会いたいんだ……っ！」

その瞬間、周囲が光へ包まれた。

## 第77話：再び始める物語

「……………」は……………」

目を開けると、ココアを片手に持ちながらベンチで座っていた。

「なるほど……………ね、ここか」

お店の前のベンチで座りながらココアを飲んでいる。状況から見て3人の帰りを待っていた時だろう。

「つまり、無事成功したってことだな」

問題無く過去へ戻れたことに安堵しながら、高嶺達が来る前にお店に入ろうと立ち上がる。

「……………」

足に若干の違和感を感じたが、その原因がすぐにわかる。

「そういうえば、まだ完治はしてなかったっけ？」

怪我していた足を軽く地面に叩くように確認し、お店へ入る。

「懐かしく感じるな……………」

改装前の店内を見渡して目を細める。

「……………って思い出に耽ってる暇は無いな」

過去に飛んだ実感を味わうのは良いが、彼らを待つておかないと……………」

お店の電気を点け、カウンター席に座りながらココアを口へ傾ける。……………よし、こんな感じで行こう。

最後に何を話そうか迷う。ネタバレとかも良いが……………未来へ帰った後に2人が俺の為に変な気を遣うとかも避けたい。

「……………時間は、多くないしなあ」

最後に四季さんにもしなければならぬ事もある。それまで延ばさないとな。

あれこれと考えている内に、お店のドアが開き3人が入って来る。

「ようやく来たか。ようこそ過去へ……………」

体を向けて歓迎のポーズを取る。

「澤田さんっ!?!」

「澤田達也……！これが貴様の狙いか……!？」

俺を見て驚く明月さんと、俺を見て警戒するミカドさん……と、高嶺の3人。

「無事3人とも飛んでくれた様で一安心だよ」

「これは……澤田さんが仕組んだんですか？」

「仕組んだ……まあ、そう思っても良いよ。今回の犯人は全部俺つてことで……。高嶺に話を持ち掛けたからな」

「一体、何のために……このような事を……!」

「そりゃ、高嶺がもう一度明月さんに会いたいわって願ったからに決まってるだろ？な？高嶺っ」

「……はい。栞那に会いたいわって……そう願った……」

「昂晴さん……」

「だから、せめてもう一度ぐらいは話す機会を作ってあげた。それだけ」

「その為に……奇跡を起こしたのか？」

「起こしたのは高嶺だけだな。俺は焚き付けただけ。それより、明月さんと言葉を交わさなくて良いのか？言うほど時間は残されてないぞ?」

高嶺に向かってジエスチャーを送る。それを見て明月さんと向き合う。

「栞那……なんだよな？俺の知ってる栞那、だよな?」

未だに信じられないみたいで確認するように話しかける。

「はい。一緒に観覧車に乗って、好きだと告白されて、キスも……して、笑ってるって約束をしたのに、その約束を破られてしまった、明月栞那です」

「そこまで言わなくてもいいだろ……はは」

うんうん。こっちは大丈夫そうだな。

2人きりにさせた方が良いと思いきミカドさんを手招きで呼ぶ。

「お前は……高嶺昂晴に機会を与えたかったのか？」

「碌に話も出来ずに観覧車でバイバイとかあんまりだろ？せめて別れのお話はさせておきたいと思ってさ」



「その結果が高嶺昂晴を苦しめるかもしれないぞ?」

「どのみち、明月さんの蝶が高嶺に付いている時点で幸せは無理でしょ。明月さんは高嶺が心配、けど高嶺は蝶がいることで明月さんの事を忘れられない。NOT WIN—WINだろ?」

「……なるほど、そういう事か」

「2人が幸せになるための最善策を取っているってことでここは許してもらえないでしょうか?」

「もしや貴様、以前のように既に上の許可を取っているのか?」

「ありや、バレたか。一応今回の奇跡に対してお咎めは無いって話を付けてるから安心して良いぞ?」

「……全く。貴様という奴は……」

呆れるような目でこちらを見てため息を吐く。男からされても嬉しくないなあ……。

そんなミカドさんを見て、高嶺と明月さんの方へ意識を戻す。

「もし躓いて、自分を信じられなくなった時には、私を思い出して下さい。べた惚れの女がいたことを。1人の女を幸せにしたことを……」

「そして、約束した通り笑って下さい。いずれまた出会った時にちゃんと笑顔を見せてください」

精一杯の笑顔で高嶺に語り掛ける明月さん。

「……、また、会えるとか、そういう事じゃないんだよ、全然違う……」

「未来で他の誰かに幸せにしてほしいわけじゃない……。2人で一緒に、俺が!お前と!幸せに、過ごしたかったんだ……!」

「娘として再会するとか!世界のどこかで幸せになるとかっ!違うだろう?そんなの全然違う!」

「俺はっ!俺は……っ!もつと、恋人でいたかった……」

「もつと、思い出を作りたかった……」

「もつと……もつと……もつと、もつとっ、もつともつともつともつとっ!」

「もつと……、一緒に……いたかった……それだけなんだ」

胸の内の悲痛な苦しみを吐き出すように明月さんへ伝える。

「……葉那は、大人だな……」

「昂晴さんが子供みたいですから、私まで子供みたいに駄々をこねたら、收拾がつきません。……でも、私も必死に大人ぶってるだけです」

「私は見てきましたから。幸せになろうと頑張り続けたその姿を……。死神としての仕事の意味と価値を、昂晴さんの姿から教えてもらいました。その諦めない姿に、私は救われたんです」

「だからこそ、昂晴さんには幸せになつて欲しいと、心から思います。その為なら、大人ぶるくらい何でもありません」

「なので、改めて約束してもらえますか？ちゃんと、笑顔でいるつて。幸せになるつて……」

「……………」

明月さんのお願いに、俯いたまま返事をしない。うん、ここで良いか。

困った様な表情をしている明月さんへ合図を送る。

『高嶺にキスをしてやれ』

ジェスチャーでそれを伝えると、意図が分かった明月さんが苦笑いをする。

「最後までいい、サービスしてやったらどうだ？明月さん？」

「……そうですね。ほんと、しょうがない人ですから……にひひ」  
楽しそうに笑い、高嶺を見る。

「……昂晴さん。顔、上げてください」

高嶺の頬を両手で優しく包み、ゆつくりと顔を上げさせる。そして、不思議そうに顔を上げた高嶺にそのままキスをお見舞いした。

「っ!?っ……………」

突然のことに驚いたが、次第にそれを受け入れお互いに目を閉じる。

これで条件は満たされたな。

キスが終わり、恥ずかしそうに顔を離す明月さんと高嶺。

「さてとっ！すまんがお喋りはそこまでだ。そろそろ過去の自分ら

が居た位置へ戻らないといけない」

大声で空気をぶった斬って席を立つ。

「あ、あの……まだ昴晴さんからの返事が……」

「どの道今は無理に決まってるだろう？けど、前向きになれたはずだ。あとは時間が解決してくれる」

二人の前に立って高嶺を見る。

「すまんが、高嶺は付いて来てくれ。奥の部屋で明月さんのマントを被って寝ていないとおかしいからな」

「……あつ、だからあの時寝ていたのか……」

「ということ、明月さんのマントをもらってもいいか？」

「はい。大丈夫です。……どうぞ」

「あんがと」

マントを受け取って奥の部屋へ向かう。

「直ぐに戻って来るから2人はその場で待機でよろしくっ」

ビシツとポーズを決めて高嶺と一緒に部屋に入る。

「……さて、寝ていたのはこの辺りか？」

「ですね。確かこの辺りで起きて……」

「おけおけ、いつ意識が途切れても良い様に被っておくか」

明月さんのマントをそのまま高嶺に被せる。

「どうだ？好きな人の匂いに包まれて」

「……胸が締め付けられますね」

「ははっ、だろうなあ」

高嶺の返事に笑って返す。

「……なあ、高嶺。明月さんと一緒に、幸せになりたいよな？」

「当たり前じゃないですか……」

「だよなだよな。一緒に人として生きて、同じ場所で住んで、同じ時を過ごして……そうして少しずつ思い出を共有していききたいよな……」

「……はい、栞那と一緒に……！そうしたかった……っ！」

「喜べ。その思い、ようやく叶うぞ」

「……え？どういことですか？」

「答えを知りたければ未来へ帰ることだな。そこに高嶺昂晴の願いがある」

「そ、それって……!?!」

俺を見ようと体を起こすが、力が入らない様に再び倒れる。

「安心して寝て良いぞ。起きたら全て元通りになってるのだから……」

顔から落ちたマントを持ち上げ、顔を被せる。

少しすると、横になっている高嶺から寝息が聞こえるのを確認して立ち上がる。

「……次は、明月さんか」

部屋を出て、フロアに戻る。

「高嶺昂晴は……帰ったのか?」

「ああ、今帰ったよ」

「澤田さん、ありがとうございます」

「もう一度高嶺に会わせてくれて……か?」

「はい。最後に昂晴さんとお話出来る機会を私にくれて……」

「言っただろ?」また会おう”って」

「もしかして……最初から?」

「さあ、どうだろうな。ただ言えるのは、ようやく俺の計画が終わるってことぐらいだ」

「結局、貴様は何を考えていたんだ?」

「高嶺の幸せ……と、明月さんの幸せだな」

「私の……ですか?」

「そうだな。俺は高嶺だけじゃなくて、明月さんにも同じように幸せになつてほしかった」

「それは……恩返しとして、ですか?」

「それもあるのはある。けど、これまで死神として生き、高嶺の為に自分を犠牲にしてまで頑張つて来たのを見ると……こう、報いてほしいなあってさ」

「澤田さん……」

「だから2人には悪いけど色々黙って動いていた場面もあった。」

それについては先に謝っておきます」

「既に過ぎたことだ。気にするな」

「そうですね。私として結果的に昴晴さんが幸せになってくれるのでしたら平気です」

「明月さん的にはそうかもな」

「それで、貴様の狙いは上手く行けたのか？」

「ああ。なんとかかな……。結果は、まあ……。未来に戻った時にでも確認してくれ」

「……そうだな」

「……それじゃあ、俺も外で座ってるよ。元々の定位置はベンチだしな」

「澤田さん。改めて、ありがとうございます。それと、昴晴さんの事を……お願いします」

席を立ち、入口へ向かおうとすると、明月さんからの別れの挨拶が来た。

「……高嶺を幸せにつて話だったよな？」

「はい。出来れば……ですが」

「残念だけど俺には高嶺を幸せにすることは出来ないからなあ……。その役目は、明月さんに引き継ぐよ」

「えっ？どういう意味ですか……？」

「さあな。未来に帰ってから確認してくれ」

不思議そうにこつちを見る2人にひらひらと手を振りながら背を向けて店を出る。

「はああ……あとは四季さんが来れば……」

ベンチに座っていると、すぐにこちらへ来る人物を見つける。

「澤田君？えっと……なにしてるの？一人でお店の外で座って……」

「お、……ああ、四季さんか。やっと来てくれたか」

「ワタシを待ってたの？何か用事があったら連絡してくれれば良かったのに……」

「あー、いやいや。勝手に待ってただけだから気にしないでくれ」

「それで？用事って……？」

「ちよつと蝶関連で確認しておきたい事があってさ。四季さんの魂のことで……」

「ワタシの？何かあったの……？」

「もしかするとつてだけの確認をミカドさんからお願いされててさ。今確認しても良いか？」

「別にいいけど……どうするの？」

「あー……ちよつと、その、言い辛いんだが……おでことおでこをくつつけて確認するんだ……」

「……はあ？」

きつつい視線が……っ、ありがとうございます！

「わかる。わかるよその気持ち。やっぱりそうなるよねえ……」

「どうしておでこを合わせないといけないの？」

「ミカドさんの話によれば、肉体的接触が必要らしい。今二人とも忙しいと言つて居ないから俺にその役が……うん、ほんとすまん」

「別に澤田君が悪いつてわけじゃないけど……他じゃダメなの？」

「ああ……手を繋ぐ程度じゃ駄目っぽい。最低ラインがこれだったんだ……。他に抱き合うとかキスとか言つてたけど……流石に嫌だろ？」

「当たり前でしょうが……」

「だから限界ギリギリがおでこらしい……すぐに終わらせるから協力してほしい……」

「二応、考えた結果なのよね？」

「可能な限り考えた結果です。多分10秒もかからないと思う」

「……はあ、納得できないけど、分かった」

「すまん。本当にすまん……」

「分かったから、早く済ましてくれる？恥ずかしいんだから……」

「ああ……」

目を閉じて前髪を掻き上げてこちらを向く。……無事に丸め込めたか。

「そんじゃ、行くぞ……？」

「ん、わかった……っ」

自分のおでこを四季さんのおでこにくっつける。

「……よし、終わった」

用が済んだので顔を離す。

「終わった？」

「ああ、協力ありがとな」

「どうだったの？魂を見たんでしょ？」

「少し弱ってたって感じ。少し治療したけど体調とか変じやないか？」

「んー……特に平気かなあ……？」

「了解。それじゃあこれで終わりだな」

安心するようにベンチに座る。

「中に入らないの？」

「もうちよつとここで涼んだら入るよ。お先にどうぞ」

「そ、じゃあ先に入ってるから」

四季さんが中へ入って行くのを確認して体の力を抜く。手や体を見ると、既に淡く光っていた。

「やれることはやったし……あとは高嶺に任せるか」

後悔や心残りはある。けど、消える最後に四季さんと会う事が出来たので全部チャラで良いと思えた。

「これでー」

ー彼女の幸せに繋がるのなら。

そう眩こうとしたが、その言葉が口から出ることなく。その存在の維持が叶わなくなった。

この日、1人の男が蝶に還った。

「……ここは？」

「戻ったのだ。現在にな……」

「ミカド……。そうか、戻った、のか……」

「少しは落ち着いたか？」

「一応、な。何とか……」

「そうか。……それにしても、妙だな」

「何が？」

「蝶の気配が完全に消えている。あれほど出されたはずの蝶の気配が一切……それに、澤田達也の姿が見えん」

「確かに……でも、蝶は俺が取り込んだんじゃないのか？」

「お前の魂の気配は強くなっていない」

「……、良く分かんが……いいんじゃないか？自然と解決したってことだろ？」

「良いわけがあるか。……だが、ここに居ても仕方ない。とにかく中に入れ。コーヒーでも淹れてやろう」

「そういうの、厳密には横領になるんじゃないか？」

「我輩が奢ってやろう」

「珍しいこともあるもんだな」

「今日くらいはな」

お店に入り、高嶺が店内を見る。

「改装後で助かったかも……」

「何がだ？」

「何でもない」

「そうか……ーむっ!？」

「なんだよ。そっちこそ、どうかしたのか？」

「人の気配がする。侵入者だ」

「澤田さんじゃないのか？」

「いや、我輩の知らぬ気配……だと思っただが、妙だな……」

「なにが？」

「いや、我輩にもよく分かんのだが……取りあえず、害意は感じられん。泥棒とかではなさそうだが」

「……取りあえず、確認しよう」

「そうだな」

「場所は？」



「こつちだ……付いてこい」

「こつちつて……葉那が間借りしていた部屋じゃないか。何も無い部屋で一体何を……?」

「ーッツ!?!」

「気づかれたか!」

「誰かいるのか!そこで、何をしてる!?!」

「えっ!?!いや、何をってーッというか、今は来ないで下さい!!」

「……は?」

「い、今の声って……」

「馬鹿な。そんなことが……!?!」

「けどっ、聞き間違える訳がないっ!」

「階段を上がり、名前を呼ぶ。」

「葉那っ!?!」

「だっ、ダメって言ったのに!なんで突撃してくるんですかっ!?!」

そこには、生まれたままの姿で立っている、明月葉那が居た。

「考えてみたのだが……原因は、高嶺昂晴しか考えれん。お前が先ほど過去に飛ぶ際、蝶と共に過去に渡り、葉那の魂に触れた」

「それが切っ掛けで高嶺昂晴を通じて葉那へ渡り、新たな存在として生まれ変わったのだろう。大量の蝶を持っていた状態で肉体的接触をしたからこそ起こったと我輩は考えている」

「っ、つまり……!澤田さんが私から昂晴さんにキスを要求したのは……!?!」

「十中八九、それが狙いだったのだろうな」

「ま、まってくれ!澤田さんは、最初から葉那がこうして戻ってくるのを狙っていたのか……?」

「そうだ。しかも、今の葉那は死神ではなく、人間だ」

「そういえば……さつき葉那の気配を”人間”って言ってたな……」

「そう……なんです、か？ 私はもう……死神では……ないんですか？」

「ああ。普通の人間だ。気配が全く違う。人間として、生まれ変わったのだ」

「そんなことが……あり得るのか……？」

「あつたのだから仕方あるまい」

「私は、本当に私……なんですか？ こんな特殊なこと……私、聞いたことがありますけど……」

「我輩もだ。普通なら赤子としてこの世に生まれるのだが……、前例として似たようなケースが既に起きているからな」

「あつ、澤田さん、ですよね……？」

「……全ては奴の思惑通り、だったという事か……」

「私は昂晴さんと、このまま一緒にいられるんですか？」

「問題無い。神からの裁定の心配もな。既に澤田達也が話を付けていると聞いた。あやつはこうなると知っていたから前もって話を終わらせていたのだろう……」

「で、では……私は……！」

「このまま人の世界で生きることになるだろうな。人間として。人としての時間で」

「ッ!?俺が寝る前に澤田さんが言ってたことって……!？」

「何かあつたのですか？」

「俺が奥の部屋で戻る前に澤田さんが言ってたんだ。葉那と同じ時間を過ごしたいっていう俺の願いがようやく叶うぞって……その答えは未来に戻れば分かるって……！」

「そ、そういえば私にも言っていましたね……。昂晴さんを幸せにする役目を私に引き継ぐと。その際に同じ様に未来に帰れば分かる……」

「これが奴の狙いだったということか。高嶺昂晴の幸せの為に葉那を幸せにする。まさしくその通りだな」

「……ツツ、あ、あれ？なんででしょう？嬉しいのに……こんなに嬉しいこと、ないのに……なんだか、涙が……ぐずつ、ぐずつ……私……本当に、嬉しくて……」

「栞那……」

「もう、我慢しなくても……良いんですよね？私の気持ち……もう、出してもいいんですよね？」

「我慢なんてしなくても、大人ぶらなくてもいい。ちゃんと聞くから。栞那の気持ちを……。今度は俺が大人になる、全部受け止めるから」

「うっ……うっ……、うあああああ……!!」

「本当は嫌でした！私だって一緒に居たかった！好きだからっ！大好きだからっ！ずっとずっと一緒にいたい！に決まってるじゃないですか！」

「でもあそこで私が悲しんだら、泣いちゃったら、きつと昂晴さんを苦しめることになるって思ったから……！だから辛くても堪えて、ずっと、ずっと、我慢して……我慢して……！」

「ごめんな。俺が頼りないせいで、栞那に負担をかけたみたいで……」

「謝らないで下さいい〜！」

「なら……ありがとな。今までずっと、俺のことを守ってくれて……。これからは俺が頑張るよ。栞那のことを守れるように、ちゃんと頑張るから」

「だから、これから先もずっと……一緒にいてくれ」

「いますっ、ずっと一緒にっ！もう離れたりしませんっ〜！」

「俺も離れたりしないからな」

「はい、はい……嬉しいです。本当に嬉しい……！」

「俺だって嬉しい。好きだぞ、栞那」

「私だって好きです！大好きですううう〜!!」

「明けまして、おめでとうございます」

「ああ。明けましておめでとう」

次の日、昴晴さんが間借りしている部屋まで来たので新年の挨拶をしました。昨日はあの後、私が泣き止むまで昴晴さんがしっかりと抱きしめ続けてくれました。

落ち着いた後に澤田さんの事を尋ねたのですが、2人とも見ていないとのこと。連絡のメッセージを送ってみたのですが、未だに既読が付いていないようでした。どうしてお一人で帰られたのでしょうか……？私と昴晴さんの再会の邪魔にならない様にと退散を……？

ありえますね。彼なら粋な計らいとか言って颯爽と帰りそうですね……。色々と感謝を言いたいのですが……。

「2人とも揃ってるな。話がある」

「どうしたんだ？」

「これからの事についてだ」

「これからの……ですか？」

これからと言うと、私と昴晴さんの2人の。と言うとこなのでしょうか？

「ああ。高嶺昴晴のおかげで栞那は死神ではなく人になったのだ。それならこれまでと同じ生き方は出来ないであろう？」

「それも、そうですね……」

言われてみれば、そうですね……。これからは人として生きていく事になるのですから、色々と違って来るでしょうし……。

「そこで、1つ我輩から提案がー」

「はい、その話ストップ。僕から話させてもらっても良いかな？」

「ッ!？」

階段の方から声が聞こえ、全員でそちらを見る。

「あ、あなたは……!？」

「ちよつとお邪魔するよー？君たちに話しておかないといけないからさ」

そこには、白い恰好で耳と尻尾を生やした少女が……つて、以前に澤田さんが仰っていたお方ですよね……？なんだか口調が……。

「あなたは……!？」

ミカドさんが焦るようにそちらを見る。

「そうだよ？君たちにも分かりやすく言えば、彼と交渉をした卯花之佐久夜姫の上司つてところかな？」

「えっ!？」

という事は……、とても偉い神様となりますよね……？

「そうなんだよ、僕はとつてもえらくい神なのさ。ここに直接来れないからこうやって依代を使って降りて来てるのさ」

「……ど、どの様なご用件で……？」

ミカドさんがその場に跪いて尋ねる。

「彼……澤田達也との取り決めを果たしに来ただけ」

「澤田達也の……ですか？」

「ああそうだよ？彼から僕へのお願いがあつてね。まずはそこのお二人さん」

「は、はいっ？」

「お、俺ですか？」

「そうそう。YOUらだよ。その女の子が人へ生まれ直したからね。今後はその彼の家で一緒に住むこと。まずはこれが1つね」

「え、ええッ!？」

昂晴さんと家で……！一緒にい!？」

「ま、待ってくれ！突然何を……!？」

「うーん、僕はあくまで彼のお願いを言ってるだけだし、説明はめん

どくさいから後で適当に説明しといて〜」

「はっ、お任せ下さい。」

「彼とそっちの考えは同じだったみたいだし、問題無いでしょ。それからもう1つは、過去に戻ったあの日……9/28時点で世界から澤田達也という存在の記憶を消すこと……だったんだけど、キミらはこっちに戻ってきたせいでその対象から外れちゃってたんだよねえ……これは僕も予想外だね」

「え……？澤田さんの……記憶を？」

目の前の神様の発言に全員が困惑する。

「澤田達也の……記憶を消す……？」

「ああ、それもそうか。キミらは今の世界じゃなくて彼が居た世界から来たんだったね。そりゃ混乱するのも無理はない。うんうん」

澤田さんが、居た世界……？今の世界……？それだと、まるで澤田さんが——。

「説明するのも面倒だし……実際にこの世界のキミらの記憶を送った方が早いよね」

パチン、と指を鳴らすと、白い球体が浮かび上がって私たちへ向かって来る。

「変に怖がらなくて大丈夫。ただの記憶なんだからさ……」

面白そうにこちらを見て笑う。

「は、はあ……——ッ!?!」

白い球体が体へ吸い込まれたかと思った瞬間、脳へこれまでの3か月間の記憶が蘇る。

「こ、これは……!?!」

「お店での、記憶……？」

「だが、この記憶は……!?!」

お店での記憶を思い出した。それだけ、それだけだけど、決定的な違いがあった。

「こ、この記憶は……本当なのですか……？」

「そうだよ。この世界でのキミらが昨日まで過ごした記憶さ」

そう、そこには……澤田さんに関する記憶が一切存在していなかつ

た。澤田達也と言う名前すら憶えていなかった。

「ど、どうして……私は、澤田さんの事を……!?!」

「自分を責めても意味ないよ。さっき言った様に、キミらが過去から現在に戻ったあの時に記憶から消えてるからね」

「どうして澤田さんの事を消したのですか!?!」

隣の昴晴さんが問いかける。どうやら、ミカドさんと昴晴さんも私と同じ様ですね。

「しようがないなあ……特別に1から説明してあげるから大人しく聞いて貰える?」

「……は、はい」

「彼はキミらを救う為に過去に飛んだ。ここまではキミらも理解出来ていると思う。だけど、彼の目的は残念だけどそれだけじゃなかったんだよねぇ」

「それに追加で、四季ナツメ。彼女の事も同時に救おうとしていた。更に更に、彼は自分がこの世界での異分子……本来あるべきだった運命を歪ませていた存在と分かってしまったんだよ」

「澤田さんが……?」

ナツメさんもでしたか……。いえ、これについては理解できます。彼なら救えるものを全て救えるように動く人ですから……。ですが、その後の言葉……運命を歪ませていた?

「そうだねえ……。彼から聞いてたりしてたんじゃない?」自分が知っている未来とは違う出来事が起きている”とかさ。予想外のハプニングが起きてしまった……とかとかさ!」

……確かにそう言ったことを以前に聞いていますが……。

「例を挙げるなら、先ほどの彼女……四季ナツメが突然倒れた。これは彼にとつて想定外。更に言えば、元死神のキミが戻って来るのは本来昨日じゃなくて、一昨日だった……とかね」

「私が……戻ってくるのが……?」

「ああそうとも。彼の計画では一昨日の大みそかにキミが昨日みたいに人として戻ってくるはずだった。だがしかし!彼が自分の失態のせいでその計画が狂ってしまった……。まあ、彼の頑張りで何とか

成功させたみたいだけどね」

「僕が調べてみると、前の世界で起きた想定外のハプニングは根っこを辿ればそのほとんどの原因が澤田達也という存在のせいで起きている事が分かった」

「彼も薄々気づいていたみたいだったけどね。そこで彼はある行動に出る。”自分という存在が消えれば、元の世界に戻るのでは……?”とねっ」

「……ッ!?!」

という事は、澤田さんは自ら……!?!

「そう。消えることを選んだのさ。その際に自分という存在の記憶を消して欲しいと頼まれて消してあげたよ。しっかりとね……。まあ、ちよつとしたイレギュラー達が居ただけど」

その存在が、私たちと言うことですか……。

「私たちの記憶も……消されるのでしょうか?」

「ん? いやいや、消す気は無いね」

「……へ? そうなのですか?」

「うん。だって頼まれたのはあの日、あの瞬間の一回のみだったからね。それ以外のことは頼まれてないし」

「よ、よろしいのですか……? 澤田達也の記憶を残しておいて……」

「ああうん。問題無いね。僕としては……そっちの方が面白い方向に動きそうだからさ」

何やら面白そうにこちらを見てくる。

「まあ、そう言う事だから。仲良く一緒に暮らしてねってお話」

「ま、待って下さい……! ほ……本当に澤田さんは……!?!」

隣の昴晴さんが今の話が信じられないと問い詰める。

「本当も何も、キミらの中にある記憶がそれを物語ってるだろ?」

「ですが……! こんなの……」

「何かっ! 澤田さんを助けられる方法などは……!」

とても信じられるわけが無い。ですが、私の中にある記憶が……澤田さんの事を知ってる記憶と知らない記憶の両方存在している。今いるこの世界が後者だとすれば……本当に澤田さんは……。



「彼はキミたちを救う代償に自らの命を絶った。そのことをまずは受け入れなよ」

「こ、この世界では……澤田さんのことを誰も……知らない……」

「前の世界のように一緒に働いた記憶は一切存在していない。澤田達也がこのお店に居た。そんな現実には存在しないんだ」

「そんな……、そんなのって……」

誰よりも一番に苦しみながらも皆の為に頑張った彼が……この世界では無かったことに……？

「キミらの言いたい事はよく分かるよ。あんなに頑張った人間の終わり方がこれなのか!? って言いたいよね? うんうん、すごく理解できる。僕も似たような考えだからね」

「でも、これでも僕は神だからね。特定の人物を贖する事は出来ないんだよ……彼の事は気に入っていたから僕としても本当に残念だよ……」

「何か……何か方法は……無いんですか?」

「んん、ごめんねえ? 僕にはどうしようもないんだよ……」

「い、いえ……こちらこそすみませんでした」

「高嶺昂晴。神とは平等であらねばならん。個人を好き勝手に助けたとなれば問題なのだ……」

「……そ、そうか」

つまり……澤田さんを助けることは……。

「助けることは出来ないね。僕には……だけど」

「それは……一体どういう意味なのですか?」

「何、今から下のフロアに行けば分かるさ。キミたちを待つてる人が居る」

「我輩たちを……」

「ククツ……そうさ。その人物なら、助けになってくれると思うよ? 早く行ってあげな。僕が来てからずっと下で待っているから。ふふ」

笑いを我慢するように話していますが……。どなたかがフロアに……?」

「ミカドさん、昂晴さん。見に行ってみましょう」

「ああ、行こう」

「協力者が……？一体……」

澤田さんの存在が消えたこの世界に協力して下さる方が……？

疑問に思いながらも階段を下りてフロアに出る。

「……え？」

フロアに居たのは、1人の女性。

「ああ、やつと来た。3人ちゃんと揃ってる……。さてと、それじゃ

あ早速で悪いけど、これからの事について話し合いを始めましょう？」

「彼……澤田君を救う物語を」

そこには、真剣な表情で私たちを見つめる。ナツメさんが居た。

—新訳—第30話：始まりの日

「こんばんわー」

外のベンチで座って居る澤田君を横目にお店に入る。

「ナツメさん、服の方はどうですか？」

「うん。ちゃんと仕上げてもらった。着替えてみるからおかしくな  
いか確認してもらいたいんだけど……、明月さんと閣下は居たの？」  
さつき澤田君に用事でいないって言われたのに2人がお店にいた。  
え、騙された……？

「はい。いましたよ？」

「あれ……？用事があつて席を外してるって聞いてたんだけどなあ  
……」

「どなたからですか？」

「……ええつと、あれ？誰からだっけ……。……うーん？ごめん、勘  
違いだったかも」

「そうですね？まあ、確かに少し前まで用事があつたと言えはあり  
ましたが……」

「そうなの？まあいいや。それじゃあ着替えてくる」

「はい。わかりました」

何だかど忘れした様な気分でロッカールームに入る。

「……うん、見た感じは大丈夫そう」

ワタシの背丈に合わせたウエイトレス服を出して着替えを始めよ  
うとする。

「あれって……」

部屋の入口に、青い蝶が飛んでいるのが見える。

「多分、閣下達が言ってる蝶よね……？」

フワフワと彷徨うようにワタシの周りを飛び回っている。

「どこかから迷い込んだのかな？」

不思議に思いながらも見ていると、蝶がワタシの肩に止まって消え  
る。

「あれ、消えた……？」

どこへ行ったのだろうかと思っただが、気にしても仕方ないので着替えの続きを始めようとした。

「……………ん？」

服に手をかけたその時、謎の違和感を感じて手を止める。

「……………なんだろう、これ？」

突然の違和感に周囲を見渡すと、部屋の隅で何かにマントが被されていた。多分だけど明月さんのだろう。

「人……？」

どうしてかそのマントが気になってしまう。試しに近づくと、人だと分かった。

「……………え、覗き？いや、それはおかしいか」

地面に寝転がりながら覗きとか聞いた事がない。それに……寝ている様な気がする。

衝動に駆られてそのマントを捲る。

「男の……人？」

そこには目を閉じて寝ているであろう男の人がいた。多分ワタシと同じ年ぐらいと思う。

「明月さんの知り合い……？」

考えられるのは誰かをここまで運んで寝かせている……とかだと思おう。マントが明月さんのだもんね。

「それならさっき一言ワタシに言えばいいのに……」

下手したら着替えの途中で起き上がって見られたりしたかもしれない。まあ、そんな偶然は流石に無いけどね。

「……………起こした方が、良いよね？」

この人が誰なのか？どうしてここで寝ているのか……。気になる。でも……。

「なんだろう……この感じ……どこかで……」

目の前の彼をどこかで見たような……？ううん、会った様な気がする。大学の人だろうか？

「うーん……ま、いっか」

思い出せないので、目を覚ます様に声をかけた。

「おーい」

その場でしゃがんで肩を揺らす。

「……ん、んん？……？」

眠りから目を覚まして目を開けると、ワタシを見て固まる。

「……え、えつと、おはようございませ……？」

「おはよう、よく眠れた？」

「そ、そうですね……。寝起きに美少女を見たので困惑しているけど……」

「どうしてここで寝ていたの？」

「寝ていた……？あつ、確か……外を歩いていたら突然意識を失って……気づいたらここに……」

「……そう。嘘は付いてないみたいね。となると……明月さんの知り合いか」

「明月さん……？」

「意識を失う直前に、誰かと会ったりしてた？」

「し……信じてもらえるか分からないけど、黒い猫に話掛けられたり……ツ!?そ、そういえば……!か、鎌で斬られたりした……」

「その人って、このマントを着けていたとか……覚えてる？」

「……一瞬しか見て無いから憶えてないけど、こんな感じだったと思う……。てか、信じるのか？今の話……」

「該当する人を知ってるからね。やっぱり2人の関係者だったか……」

「もしかして、何か知ってー」

その時、入口のドアが開く。

「あ、ここで寝てもらってたんですね。よかった、ちゃんと起きてくれました」

「これ、明月さんの仕業？」

入ってきた明月さんを見ながら、目の前の人を指差す。

「仕業だなんて人聞きの悪い。そりや確かに、休憩室に人を休ませているという説明を忘れていましたけど……あつ、マント。そっか、

ここに置いてましたか」

「それで、説明してくれる？」

「はい。ですが、本題に入る前に確認させて下さい。どこか痛かったり、気分が悪かったり、何か不調はありませんか？」

「いや、特には……」

「よかった。心配する必要は無いとは分かっていましたでしたが、人を斬るのは初めての事でしたから……。ちゃんと目覚めて不調もないのでしたら、安心して良さそうですね」

明月さんの言葉を聞く感じ、本当に彼を鎌で斬ったみたい。

「……あつ、そうか！あの時俺を見下ろしていた、鎌を持っていた女の子か！」

「はい。私は明月葉那と言います。突然失礼いたしました。呑気に構えてられない事情がありました」

「……認めるのか？俺を殺そうとしたって」

笑顔で自己紹介をしてくる明月さんを見て警戒心を出している。それもそうか……。

「誤解されても仕方ないとは思いますが、そんなつもりはありません。あの鎌で斬っても、人は死んだりしませんよ」

「だが、俺を斬ったことは間違いないんだな？」

「はい、そこに関しては……。ちゃんと全てを説明しますが、少し長い話になりそうですから。場所を変えませんか？」

そう言って寝ていた彼を連れてフロアに出る。

「ワタシもココにいていいの？」

「問題ありません。ナツメさんにも関係してくることもかもしれませんから」

「ここ、店だったのか？カフェ？」

「はい、そうですよ」

「まだ営業は始めてないけどね」

「四季さんは、この店の関係者なのか？」

「そうだけど……。え？なんでワタシの名前を知ってるの？前に会ったことある？やだ……。ストーカー？」

「違うから。変な免罪を被せないでくれ。俺も一星大学の3年だよ。学科も学部も違うけど名前は高嶺昂晴だ」

「高嶺君……ね。大学で会ったっけ？」

「どこかで講義が一緒だったりはするけど……どちらかという噂の方で知ってるって感じだな」

「噂……、なるほど。そういう噂ね」

同じ大学だったのか……。それならさつきどこかで見た気がしたのも納得出来た。

「さてと。では本題なんですが……」

カラン、とベルが鳴ってお店のドアが閉まる。

あの後、明月さんから高嶺君へ事情を説明し、一緒に働こうと誘った。急な話で戸惑いながらも返事は明日へ保留となった。

……事情が事情だし、近くへ置いた方が何かと便利なのだろう。そこは理解出来るから特に反対はない……。はず。寧ろ……。

「……なんだろう？このもやつとした気分……」

逆に何故か焦り……とはまでは行かないけど、変な感じがしている。

「閣下から話を聞いたからかなあ……？」

高嶺君が帰った後に閣下から話があった。どうやら、高嶺君が事故で死んだときにワタシもその場に居て巻き込まれたらしい。覚えては無いけどね。

その際に魂の一部が零れ落ちて蝶になってしまつて不安定とか何とか……。

けど、その話を聞いて……” そうなんだ” ぐらいの感想しかなかった。何となく理解が出来たからだろうか？零れても仕方が無いなつて……。

「でも、納得出来てるなら……、このもやもやした感じはなんだろう……」

今日はなんだがすつきりしない気分が続いてる。……違和感つて

言うのだろうか？

「ま、いつか。考えても仕方ないしね。早く帰って寝よ」

そういう日もある。そう思ってた家へ帰る。

「ただいまーっと」

いつも通りお風呂のスイッチを入れて、貯まるまでの間ベットに座る。

「それにしても……自分の為に世界をやり直すなんてねえ……」

今日閣下達から聞かされた話を思い出す。自分の未練の為に死んだことを無くしてもう一度今日をやり直した張本人……らしいけど。普通の大学生って感じだった。

「いや、少しズレてた感じはする……」

陽キャのイメージが語尾にウェイを付けるような人だしね。

「それにしても、変な事に巻き込まれちゃったなあ……。いや、巻き込んだのかなあ……？」

ワタシの夢を叶えたいって話を聞いて2人は協力してくれるけど、高嶺君まで誘うなんてね。

「……ん？」

3人……？

「閣下と……明月さんに、高嶺君……うん。3人」

3人……という人数に違和感を感じながらも、考えても3人しかない……。

「……なんか、なんだろう……？」

『お風呂が沸きました』

変な違和感を感じていたが、その時に通知が来る。

「……お風呂入ろ」

次の日、大学が終わりお店へ来ていた。昨日試着しようとしていたのを結局着れてないし、今日は高嶺君がお店で働くか返事をする日だし……。

「……………」



ウエイトレス姿に着替え、フロアで昨日見た夢の事を思い出す。

「それにしても……変な夢だったなあ」

詳細までは覚えてないけど、ワタシが笑顔でお店で働いており、お客さんも沢山いて、明るい感じの雰囲気だった。とても充実した気分だった……気がする。

「願望が……出ちゃったのかな？」

昨日高嶺君がお店で働くかもって考えたから、もしかしたらお店を開いた時のことが夢で出て来たのかもしれない……。

「それでも都合良すぎでしょ……」

なんせ、今は大家さんに許可を貰える兆しすらない。一応もう少し待っては貰えるけど……それまでになんとかしないとね。

「失礼します」

考え事をしてしていると、入口から人が入ってくる。

「うん？ああ、どうも」

どうやら、来たのは高嶺君みたい。

「……へえ……」

「……なに？」

入ってくるなりワタシの恰好をジロジロと見始める。

「似合ってるな、と思って」

「この服？それはどうも。ありがとう」

……似合ってるって、高嶺君ってコスプレ好きなのかな？ジロジロと見てるし。

「なんで微妙そうな顔？」

「いや、高嶺君ってコスプレ好きなのかなあ、と思って」

「別に好きとか特別な思い入れがあるとかそんなのじゃないから。ただ、珍しいとは思うけどさ」

「ならいいけど……」

とか言う割には相変わらずこっちを見てる。

「そんなに見ないでくれます？恥ずかしくなるから」

「カフェのユニフォーム？」

「そうだけど……変？」

「いや、いいんじゃないかな？」

「そういえば、結局高嶺君の方は決心はついたの？働くかどうか」

「一応、返事は決めてるよ」

「そう。……その表情を見る感じだと、働くみたいね」

「……顔に出てたか？」

「なんて言うか、前向きな表情に見えたから。目に後ろめたさとかが見えないなって……」

「……人のこと良く見てるんだな」

「……そう？うーん、どうだろ……。あまり意識してなかったけど……なんとなくそう思っただけ。そっちが分かりやすいだけかも」

「マジか……気を付けよ」

そんなことを話していると、奥から明月さんと閣下が現れる。

「高嶺さんっ、よく来てくれました！」

「良く来たな、高嶺昂晴」

人の姿をしている閣下を見て不思議そうにしている。

「……誰だ？初対面の相手をいきなり呼び捨てとか」

「バカにしているのか？それとも、昨日の今日でもう忘れたのか？

人の体をさんざん弄んでおいて……お前という男は……」

「……ちよっおまっなにをっ!？」

「高嶺君って……そっちの人だったの？」

閣下の言葉に戸惑いを見せる高嶺君を揶揄う。

「まさか高嶺さん……童貞ではなくて、処女を捧げたかった……とか？」

「そんなことは考えた事もない」

「冗談ですよ、すみません。ちゃんと分かっていますから……」

「高嶺さんは攻め専門ですよね？」

「役割の話をしてんじやねーよっ!」

「なんだ、そっかあ、違うんだ……」

「え？なんで残念そう？」

「ウソ、冗談」

場が面白くなって来たけど、これだと話が進まないのここで終わ

り。

「そんな慌てなくても大丈夫です、ふざけてみただけですってば」  
「その姿で会うのは初めてだからわからないだろうけどね。それ、  
閣下だから」

「閣下？閣下ってアレか？ケット・シーか？」

「だからソレとかアレとか無礼な呼び方をするな」  
すると人から閣下の姿に戻る。

「どうだ？これならわかるだろう？」

「まさか変身も出来るとはな……」

「とりあえず座って下さい。何か飲みますか？」

「いや、俺は客として来たわけじゃないんだ」

「分かってます。昨日の件で、来てくれたんですよね？」

「決めたよ。だから、まずはその返事をしようと思う」

高嶺君の言葉に明月さんが真剣な表情をする。

「……分かりました。聞かせてもらえますか？」

「俺は……、ここで働く。あ、いや。一緒に働かせて下さい」

「ありがとうございます！よろしくお願いします」

「これから、よろしく」

「助かる。よろしく頼む」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「よかった……引き受けてもらえて、ホツとしましたあ」

高嶺君が働くとなつて、明月さんが安心するように胸を撫で降ろす。

「俺の命にも関係してることだからな」

「無事働くことになったとして……、それでは、まずは契約を結んで  
もらおうか」

「死神との契約……ゴクツ」

「……違反したら、それでも俺は死んだりするの？」

何を想像したのか緊張した表情で2人を見る。

「いえ、労働に関する契約です。契約書はこちらに」

「ちゃんとハンコは持ってきたのだろうな！」

「いざという時、労基がうるさいですからね」

「……労基の指導、受けるのか？死神なのに？」

「死神だからこそ、無駄な騒ぎは避けたいのだ。この店だって必要な許可は得ている。もちろん、正規の手続きでな」

「……思ったよりちゃんとしてるんだな」

何となく言いたい気持ちには分かる。非現実的な存在が現代社会の仕組みに従ってるの……少し変な感じ。

「ところでだが、まだオーブンしてないで聞いたけど、何か問題でもあるのか？見た感じだと結構準備は揃ってると思うんだが……？」

「それは……高嶺君、コーヒーって普段から飲む？」

「飲むぞ。頻繁って程ではないけど」

「それはよかったです。なら、コーヒーの味を確認してみてくださいませんか？実は、コーヒーの味がわかる人がいなくて……」

「……あれ？」

「なんだって？」

「あつ。勘違いしないで下さい。適当に淹れてるわけじゃないですよ？淹れ方はちゃんと勉強しました。……ですが、正直苦いとは思えないんですね……。普段からコーヒーは全然飲まないの」

明月さんの発言を聞いて、何か変な違和感を覚える。いやでも……ワタシ達は飲めないし。

「四季さんは？」

「……ん？え？ワタシ？……ワタシもコーヒーはちよつと……。頑張れば、飲めなくはないんだけど……」

「あー、そっか。四季さんは砂糖とミルクたっぷりじゃないと飲めない人だった」

「……なんで、知ってるの？」

「大学のコンビニでコーヒー買つてるところをたまたま見たから。ブラックで一口飲んだ後は大量の砂糖とミルクを入れてただろ？アレって味の確認をしようとしてたんだな」

「……そういうこと。でも結局、全然わからなかったけど……」

「以前に明月さんと色々試してみたんだけどどれも苦くて……それ

なら色んな人が飲んでるコンビニなら飲めるかなって」

結果は惨敗だったけど……。

「それでは、すぐに準備をしますね」

高嶺君がカウンター席に座り、明月さんが中へ入ってコーヒーの準備を進めて行く。

……なんだか無駄の無い動き。しつかりと練習したんだろう。それか、閣下から教わったのだろうか？

「はい、どうぞ」

明月さんのコーヒーの淹れ方を見てみると、準備が終わりカップを高嶺君に出していた。

「ありがとうございます」

それを受け取って、一口飲む。

「……………」

その様子を不安そうに明月さんが見ている。

「……………どう、でしょうか？」

「いや、普通に美味しいんだが？」

「本当ですか？ 気を遣ったりせず、率直な感想を教えてくださいんですが……………」

「正直な感想だ。ちゃんと美味しい。……………ただ、しいて言うなら……………、特別な味って訳ではない……………とか？」

「そうですか……………」

「すまん。言い方が悪かった。お店の商品として出されても不満とか無いと思う。俺としては十分な味だ」

「でも、よくある味ってことなんですよね？」

「……………まあ、そうなるのか……………？」

「美味しく淹れる為には、もっと研究しないとダメですか……………」

「……………因みに、オープン出来ない問題って言うのは、コーヒーの味がわからないってことだけなのか？」

「それはー」

高嶺君に現状の説明をしようとすると、入口のドアが開く。

「お邪魔させてもらいますね」

———大家さんっ!?

丁度話そうとしていた人がお店へ来て驚きながらも姿勢を直し、頭を下げて挨拶をした。

「それじゃあ、また様子を見に来るから」

「はい。お待ちしております」

……今回も許可は貰えなかった。けど、うん……。何となくそんなんじゃないかとは予想してた。

「……はあ……」

期限までそんなに猶予は無い。けど、まともに進歩してる気がしないなあ。

少しお落ち込みながらも顔を上げると、視線の先で蝶が飛んでいた。

「葉那」

「はい」

その蝶を明月さんが鎌で回収する。

「とまあ……、こういうこと」

不思議そうにこちらを見ている高嶺君へ声をかける。

「いやスマン。わからん」

「今のはこの大家さん。お店をオープンさせるためには、あの人の許可が必要になるの。大家さんを接客して、納得してもらえたらその許可が下りる約束なんだけど……」

「かなり難しそうな雰囲気だな」

「もう何度も足を運んでもらってるんだけどね……。満足してもらえない。だから、コーヒーの味がわかる人に協力して欲しかったの。味を良くする為に……」

「さつき言ってた月末っていうのは……?」

「一時的に借りていられる期限。本当は夏までの約束を、何とか10月まで引き延ばしてもらったんだけど……」

「まだできてない、と……?」

「そう。……ワタシ、奥で休憩してきてもいい?」

「あ、はい。分かりました。こちらはお任せください」

「ありがとう。それじゃあ、よろしく」

高嶺君の相手を明月さんに任せて奥の部屋へ入り椅子に座る。

「……………」

さつき、大家さんにコーヒーを飲んでもらった時、不思議と今回も駄目だろうとわかってしまった。

「……………諦めているのかな？」

期限まで時間が少ないのに全く変化が無い。コーヒーの味を良くするために高嶺君にお願いしているけど……………なんだか、それだけじゃ不十分な気がしている。

「……………そもそも、味がどうとかって言われたっけ……………」

思い返してみれば、大家さんはコーヒーや紅茶、オムライスの味に對して意見は言ってなかった気がする。

「……………問題は違うところ？」

商品の味が良ければ認めてもらえる。そう思っていたけど、そもそももの考えが間違い……………？

「いや、でも……………味は大事だし」

お店が開けても、美味しく無ければ人は来ないし……………、うーん……………。

「お店を開くために……………かぁ」

ヒントがあるけど掴めていない。

『……………その夢を、俺に手伝わせてほしい』

「……………っ？なんだろう？今の……………？」

よくわからないけど、誰かの台詞を思い出す。

「……………テレビ番組？動画の……………？」

誰の言葉だったのか思い出せずに悩む。

「……………って、そんなこと思い出してる場合じゃない」

今考えるのは、お店を開くために必要なことだ。

そう思っただけを切り替えたが、不思議と落ち込んでいた気持ちは消えていた。

「はっ、どっど」



「ありがとう。いただくよ」

1人でうんうんと考えていると、明月さんがワタシを呼びに来た。どうやらコーヒーとオムライスを食べたので最後にワタシの紅茶の味も確認しておきたいとのこと。

「……どう？」

「うん。オムライスの時も思ったけど、十分に美味しいと思う」

「そう、よかった」

「……大家さんってグルメだったりするのかわ？」

「そう言うのは聞いた事無いけど……」

「そっか。これで満足してもらえないのか……美味しいのに。前回もこの味だったんだよね？」

「そこまで変化は無いはず」

もう一つのカップに淹れて念のため味を確かめる。

「……うん。こんなもん」

「そうか……、なら味が変とかでは無いんだな」

「……要因は他にあったり？」

さつき思い付いたのを試しに聞いてみる。

「分からない。けど、それも考えていた方が良いかもしれない」

「ごめんね、一日目からこんなことになって」

「いや、他人事じゃないからな。それに、放っておけるほど心が廃れていないしな」

「……そう。ありがとう」

ありがたさと申し訳なさを誤魔化す様に紅茶を飲む。

「……う？」

さつきと同じ紅茶の味……。だけど……もつと美味しいのをどこかで……」

「四季さん？」

「ん？なに？」

「いや、飲んだ紅茶を不思議そうに見てたらさ。なんかあったのかなって」

「ううん、気にしないで。紅茶をもつと美味しく出来ないかなって

考えてただけだから」

「今でも十分美味しいと思うけど？」

「だからと言って止めるのは違うでしょ？」

「それもそうだな」

「ワタシも色々と考えてみるから、出来れば高嶺君の方でも何か思いついたら言ってみてね」

「ああ。俺の方でも考えておくよ」

「ありがとう。今後とも、よろしくね」

「こちらこそよろしく」

その後、どちらも味見をしたというので今日は解散となり、家へ帰った。

「……………んっ、んん……………、あれ？ここは……………？」

目を覚ますと、そこにはいつもの部屋では無く、不思議な空間が広がっていた。

「……………夢、なのかな……………？」

周囲を見ると、視界に広がるのは夜空の様な暗い空間。だけど、ワタシの場所だけは薄らと青く照らされており、足元はお店の床と同じ木の板で作られていた。

「どこ、なのだろう……………？」

夢だとは分かった。けど、ここまでハッキリと意識があるのが不思議だった。

……………夢って、もつとこう……………曖昧で自由が利かないものじゃないの

かな……？

よく分からない場所つてのは確かに夢っぽいけど……。

「……あつ、あそこに明かりが……」

少し離れた場所のここと同じ様に照らされている場所があった。

「とりあえず、行ってみようかな？」

どんな夢なのかは分からないけど、その内目を覚ますだろうと思いきのまま進む。

足を踏み出すと、その分だけ前方に光が射し、足場が作られていく。床は相変わらずお店と同じだった。

「……なんだか、パズルみたい」

暗闇に道を造ろうと少しずつ集まり、足場として成っていく光景はバラバラのパズルが組み合わさっていくようだった。

「……着いたけど、特に何があるわけじゃないか」

夢なのだ。そこら辺は適当だろう……。

振り返り、元の道を帰ろうと一歩踏み出す。

「あら。折角ここまで来てくれたのに、もう戻っちゃうの？」

「っ!？」

突然背後から声をかけられ振り返る。すると、そこにはさっきまで無かったお店のテーブルと椅子が置かれており、1人の女性が座っていた。

「……え？だ、だれ……？」

テーブルには紅茶のティーセットが並べられていて、高校生……？ぐらいの女の子がカップを持ち上げて紅茶を飲んでいた。

「私？……そうねえ。あの子の夢の住人……ってところかしら？」

「……う？あの子？住人……？」

自分の夢に突然知らない人が出てくる。そんなことがあるのだろうか……？どこかで会った、とか？

「……そう警戒しなくて良いわよ。とりあえず、座って紅茶でもどうかしら？」

正面の席を勧められたけど……、なにこれ？どんな場面？……ほんとは変な夢だ。

どうせその内目を覚ますだろうと考え、半ば諦めて席へ座る。

「私が紅茶を淹れるわ。と言つても、味は私のじゃないけどね……」  
カップへ紅茶が注がれる。容器を満たしたカップから湯気が立ち昇る。

「さあ、飲んでみて?きつと気に入ってくれると思うわ」

「えっと、い、いただきます」

言われるがまま一口飲む。

「……美味しい。ん?……あれ?この味って、どこかで……?」

凄く美味しい。……それに、何だか懐かしいような……。

「気に入ってもらえたようね。良かった、安心したわ」

ワタシが満足してもらえたのを嬉しそうに微笑む。

「それじゃあ、あなたが目を覚ますまで私とお喋りしましょう?」

「えっと、あなたは……?」

「さつきも言つたけれど、あの子の夢の住人よ?いえ、今はあなたの夢の住人ね」

「あの子……?どういう事でしょうか?」

さつきから謎ばかり増えて行く。自分の夢なのに融通が利かないというか……思い通りにならない感じが……なんとも夢らしいというか……。

「澤田達也。この名前に見覚えは……ない?」

「さわだ……、たつや?いえ、特には……」

唐突に知らない名前が出てくる。男の人だろうか……?

「ふふ、やっぱりそうなのね。予想通りだわ」

「誰ですか?その人は……?」

「……人を助ける為に自分を犠牲にしたアホな子よ」

「アホな子って……」

自分の夢に呆れる。……何だか虚しい気持ち。

「まあ、いいわ。それについては徐々に思い出してもらいませよ。

今は……あなたの夢の、あのお店をオープンさせる方が優先ね」

「ああ……そういう夢かあ」

何となく今の状況が理解出来た。今日お店を開くために色々と考

えていたのが夢として出て来たってことね。

「あの高嶺って男の子がお店に来てくれたことで無事スタートラインに立つことが出来たわ」

ワタシにお構いなしで話し始める。高嶺君がスタートライン？確かに何か変わるかもって少しは期待してるのは本当だけど……。

「でも、今のままじゃとてもオープン出来ないわ。残念だけど」

「……っ!？」

ハッキリとそう口に出す。……ワタシは本心ではそう思ってるってことなんだろう。

「今の状態ではね。だから色々変えて行く必要があるわ。お店もあなた自身も……」

「……ワタシ、自身も？」

「ええ。ご両親の夢を実現する為、あなた自身の夢を叶える為に頑張ってるのは分かるわ。思い描いているお店を開きたいってことは」  
自分の心の中を見られている様で気持ちが若干沈む。この感じ、前にもあったような気が……。

「やっぱり、お店を開くために変わらなきゃ……ダメなのね」

自分の夢で指摘されるのは変な気分だけど、薄々ワタシも心のどこかで分かっていたってこと。

「……どうすれば、良いと思う？」

自問自答とも思える質問を正面へ投げかける。

「……そうねえ、変われる切っ掛けはあの男の子が運んで来てくれるわ。そのチャンスを掴み取れるかは……あなた次第よ」

「あの男の子……？」

状況的に、高嶺君のことだろうか？

「高嶺……、昂晴くんね」

「高嶺君が……？切っ掛けを？」

「ふふ、そうよ。これまで進まなかった日常が慌ただしくなるわ。遅れを取らないように頑張らなさい」

楽しそうにこちらを見て笑う。

……楽しそうな笑顔。

その瞬間、脳裏に一瞬誰かの笑う顔がチラつく。

「……ん？」

ノイズみたいに荒くぼやけていてハッキリと分からなかったけど……。男の、人？

「……」

なんだろう。この感じ……。何か、忘れている様な感じ。思い出そうとしても思い出せないモヤモヤ。最近よくあるけど……。

「……今日は、ここまでにしましょう。急ぐ必要は無いわ」

楽しそうにこちらを見ていた彼女が、真面目な顔をして立ち上がる。

「またここで会いましょう。あの子の頑張りが、あなたにどんな結果をもたらしたのか……楽しみにこの場所で待ってるわ」

こちらに背を向けて歩き出す。すると、周囲の暗い空間に徐々に光が射し始める。

目を覚ますってことなんだろうか。

「……結局、最後までよく分からない夢だなあ」

知らない見た目の人と紅茶を飲み、自分の悩みの相談だなんて……。

呆れるようにため息を吐いていると、光が急速に強まり目が明けられない程眩しく輝いた。

「……、ふあっ……なに？この変な夢」

目が覚めてベットから体を起こす。最初に頭に思い浮かんだのは夢の内容。

「……んっ……、結局、誰だったんだろう……」

眠たい目を擦りながらスマホで時間を確認する。アラームが鳴る数分前だった。

「あー……、もう起きないと」

どうせすぐに起きることになるからと起き上がり、お店へ向かう為に身なりを整える。

「……なんか、夢なのにハッキリと覚えてるなあ」

いつもなら時間が経てば薄れて行くけど、余程内容が衝撃的だったのか、今日見た夢の内容をハッキリと覚えていた。

「……お店と、ワタシ自身……かあ」

夢は記憶の整理とか言われてるし、ワタシ自身がそう考えているってことで間違い無いのだろう。

そんなことを考えているとお店へ着き、ウエイトレス服に着替える。

「……………」

変な夢を見たからだろうか……？妙に胸がざわつてる気がする。

「うーん、最近何だか変だなあ……………」

今日のは昨日のと違ってモヤモヤした感じでは無くて不安…………？  
みたいなもの。虫の知らせとかだろうか？

「ん……………」

カラン。

そんな事を考えていると、入口から誰かが入って来る。

「あ、高嶺君。おはよう」

「おはよう」

「…………ほほ…………。なるほどなー。そういうことだったか」

知らない人の声が高嶺君の後ろから聞こえる。

「なにが？」

「俺に頼みごとなんて珍しいと思ったら、なんだそういう理由だったか」

見た目からして高嶺君のお父さん…………ぐらいだろうか？

「こんな可愛い子がいたら、やる気も出るっつもんだな。お前だつて男だもんな」

「…………高嶺君、その人は？」

「いきなりゴメン。紹介する、俺の親父だ」

「初めまして、高嶺昂晴の父。高嶺和史です」

「はあ…………四季ナツメです。初めまして」

案の定、高嶺君のお父さんだったみたい。

「どうして急に高嶺君のお父さんが……？」

「実は、親父は自分の絵を買ってくれた店について、口を出すこともあつて……コンサルみたいなのもしてるんだ。だから、この店についても、相談に乗ってもらえないか頼んでみたんだ」

「そうなんだ……」

「昴晴はこう言ってるが、そんな大層なものじゃない。絵と雰囲気に合わせてために、インテリアなんかにも、ほんの少し口を出すことがあるっただけだ」

「だからここのお店も見てもらおうと思つてさ」

「……わかった。とりあえず明月さん達も呼んで来る」

奥に居る2人を呼ぶためにフロアを離れる。

……夢で言つてみたいに、お店が変わる為の切っ掛けが……来たのだろうか？

「夢で言われたことが起きるとか……正夢つてやつなのかなあ」

それか、予知夢つてやつ？

「……あれ？」

予知夢……？デジャブ……、未来視……？

不意に引つかかった言葉に思わず足を止める。

「未来視……？」

この感じ、どこかで……。

「あれ、ナツメさん？どうかされたのですか？」

声が出た方向を見ると、閣下と明月さんが出て来ていた。

「明月さん。ちょうど良かった」

「何やら話し声が聞こえたが、誰かいるのか？」

「うん。高嶺君のお父さんが来てる」

「高嶺さんの……？」

「そう。お店の事で色々意見してくれるのかなんとか……。詳しくは向こうで直接聞いて欲しい」

「分かりました。それじゃあ行きましようか」

「そうだな」

コンサルとかもしてる絵描きの人か……。今のお店ってどんな



秀困気なんだろう。

どの様な評価を言われるか不安を感じながら、2人を連れてフロアへと戻った。

―新訳―第32話：記憶の残滓―四季ナツメ―

高嶺君がお店に入り、一緒に働くことになってから慌ただしい日が過ぎた。

お店の事を指摘され、新しく人を募集して火打谷さん、墨染さんが来てくれて、お店もこれまでとは違い明るい雰囲気へ一新し、涼音さんが参加して……、今日無事にお店を開く事が出来た。

「いやーナツメさん、ほんとありがとね。数を増やして正解だったよ」

「いえ、思っていた以上に噂が広がっていて、人が来ると思っていたので……」

「よくそうだと分かったね。どっかでそういう話でも聞いたの？」

「えっと……割と勘、みたいなもので……。偶々ですから深くは気にしないで下さい」

「そう？でも、明日からはこっちでもちやんと考えて作るようになるから、また相談させて」

「はい、お願いします」

初日を無事乗り切った事を皆で祝いながらお店を閉める。

「それじゃあ、また明日です。お疲れ様です！」

「お疲れー。昴晴は私と一緒によね？」

「そうですね」

「そんじゃ、行きますか」

「はい、お供します」

「明日も早いから寝坊しない様を起こしに行つてあげる」

高嶺君と涼音さんが帰って行くのを見送って一人家へ向かう。

「……はああ、ようやくお店を開くことが出来たあ」

何事も無くお店をオープンさせたことに胸をなでおろす。

「色々とおったけど、なんとかスタートラインに立てたかなあ……？」

これで終わりとは行かない。寧ろこれからだ。

「これまでが上手く行き過ぎた感はあるし……」

お店を開く為に必要な事は沢山あった。けど、皆の協力があつてスムーズに進めることが出来た。

「それに……」

直感……つて言えば良いのだろうか？ふと、頭に考えが閃くようなことがある。

「もしかして、本番に強いタイプだったのかな……？」

壁……とまでは言わないけど、何か問題が出て来た時に案が頭に思い浮かぶことが多々ある。

「……ま、運が良いだけかあ」

最近では割とその勘を信じて口に出している。今日の涼音さんの作る数も、もつと人が来ると思ったからお願ひしていた。

「どんだけ自信があつたんだが……」

当たったからいいものを、外していたら初日から目も当てられなかった。

「けど、なーんか妙に確信的な自信があるんだなあ……」

自分でも良く分かっていないけどね。

自分の行動に苦笑しながら歩いていると、家へ帰るつもりが、違うルートを辿って歩いていった。

「うわあ……、気を抜きすぎでしょ」

無意識にいつもとは別の道を歩いてるとか……ボケたのかな？

「……たまにはいつか」

今日くらい、今の高揚感を冷ます為に歩くのも良いかもしれないとそのまま適当にフラリと歩く。

「……、前に通った感じがするなー……」

夜道でハッキリとは覚えてはいないけど、以前にもここを通った気がする。

「……ん？」

ふと、足を止めて横のマンションを見上げる。

「……う？なんだろう、この感じ……」

最近よくあるこの感覚……。

「え、もしかして……」

勘……がつて言ってるけど、どうして今ここで？

「……いい機会だし、確かめるのもあり、かも？」

お店のが偶々なのか、それとも……。

こんなお店とも関係無い建物で何故そう感じたのか……。

「……なにしてるんだろ」

エレベーターに乗り、何階に向かうのかすら分からず適当に目に付いた6階を押す。そのまま上へ上がりながら我に返る。

そのままエレベーターから出て曲がり、ある部屋の前に立つ。

「……いやいやいや、ほんと何してるんだ、ワタシは……」

今更ながら自分がしようとしていることに驚く。

なにせ、そのまま部屋のピンポンを押そうとしていたのだ。

「流石にそれは無いでしょ……」

知らない人の部屋を訪ねるとか完全に不審者である。

「……でも、どうしてだろう」

妙に目の前の部屋が気になってしょうがない。

「あー……なんか、疲れてるのかな？」

知らない建物で知らない部屋のはず……。けれど、どうしても扉の向こうの人に興味が出ている。

そう考えていると、勢いのままピンポンを押す。

「……」

好奇心で押してしまった……。やばい……。けど、今更立ち去るのも変だし……。

ほんと何をしてしまったのだろう……。これで人が出てきたらなんて言い訳をすれば……。

やってしまったという後悔と緊張しながら出てくるのを待つが、中から人の気配すらしない。

「……よかったあ」

少し待っても出てくる気配がしないので、そのままそそくさと立ち去って家へ帰る。

「ただいま……」

お風呂を貯めるためにスイッチを押し、ベットへ座る。

……はあ、今日の自分は特に変だ。

ここ最近よく思う。何か忘れてるような……足りない感じ。お店を開く事が出来たのに、大事な何かが一つ……。

「やつぱり、あの日……からだよね?」

高嶺君が世界をやり直したあの日。あの時からそう考えたり感じることが多くなった。……魂が零れ落ちたからだろうか?でも、何となくそれは違うような気がする。

時たま頭をよぎる人……。きつと、この人が関係してる。ワタシが勘と言ってるのもその人と何か関係があるに違いない。

「……誰かを、忘れてるのかな?」

多分、男の人……だと思う。ワタシや高嶺君と同じ位の年齢で……いつもふざけた感じの人。

「なんでかなあ……」

不思議とそういう人だと考えてしまう。

「……うん。きつとそう、そんな人」

けど、ワタシの知り合いにそんな人は居ない。勿論過去にも。

「何を探してるんだか……」

さっきのマンシヨンでの謎の行動も、その謎の人物が居るかもしれない……とか思ってるの行動だろう。

「んー……でも、この感覚は間違いないしなあ」

何か満たされていない感覚。お店を開きたいという欲や夢だと思っていたけど、全然満たされた感じは無い。

「……これが何なのか、気になる」

ほんと自分でもよく分からない。けど、それがあるのは事実。衝動とでも言えば良いのだろうか?本能とでも呼べば良いのだろうか?記憶から消えないし、抑えようにも抑えきれない感覚……。

「閣下や明月さんとかに聞いたら、何か知ってるのかな?」

特にこれと言って考えはないけど、あの2人なら何か思い当たったりするのかもしれない。

「うん、試しに聞いてみよう」

そう決めると、丁度いいタイミングでお風呂が貯まった報せが届いた。

「んっ……、ん？……あれ？……ここは……」

目を覚ます……ではなく、夢で起きる……が正しいのだろうか？。この場所と風景……以前に来たことがある。

「こんばんわ。お久しぶりね」

立ち上がって周囲の景色を見てみると、後ろから声をかけられ振り返る。

「……またこの夢？」

前に似たような夢を見た。やけにハッキリとした夢だったのを覚えてる。

確か……前は、高嶺君が来てお店の事で見たんだった？。

「今日も紅茶があるけど……付き合ってくれないかしら？」

2人分の紅茶を淹れてカップを置く。

「……折角だし、飲んでおこうかな？」

その内目を覚ますし、この紅茶……美味しかったしね。

席に座り、出された紅茶に口を付ける。

……やっぱり美味しい。

「無事、お店を開く事が出来たみたいね。安心したわ」

「そうね、ようやく念願の第一歩って感じかな？」

「自分の夢が叶えられて嬉しいかしら？」

「それなりに。ちゃんと人が来なくなるようにして行かないといけないけどね……」

「その辺りは、頑張つて。としか言えないわね」

自分の夢の人間なのに返事ができとうだなあ……。

「今日はお店の事じゃなくて、あなたの疑問について話そうかと思  
うわ」

「ワタシの……？」

「ええ。ここ最近、思い出せない何かがあるのでしょうか？」

「まあね。自分でもおかしいとは思ってるけど……、誰かを忘れる。そんな気がしてるっていうか……」

「それは、あなたと同じくらいの男の子じゃないかしら？」

「んー……多分、そうだと思う。確信は無いけどね」

「……あと一歩って感じかしら」

「何が？」

「改めて聞くけど、澤田達也。この名前を聞いて何か思い出せない？」

「澤田、達也……？確か、前にもその名前を……。もしかして、何か関係が？」

「ええ。大ありよ」

「ワタシにはその名前の知り合いは居ないはず。誰なの？その男の人は……」

「……そうね。ここまで来たのだし、見せるのも良いかもしれないわね」

「見せる？何を？」

「私について来なさい」

カップを置き、席を立つ。それにつられるように立ち上がり後に続く。

夜道のような暗さだが、相変わらずワタシが居る場所は照らされている。歩き出すと、何も無かった場所に道が出来上がる。

「そうねえ、どの記憶があなたにとって効果的かしら？最初から衝撃的なのは控えるとして……」

「……記憶？」

「そうよ。都合よく前の世界のあなたから魂は貰ってるし、感情や記憶程度なら呼び出せると思うわ」

「……自分の夢ながら、何を言ってるのかよく分からない。」

「あっ、これなんて良いわね。ちょうど今日のあなたには分かりやすいかしら」

手を前に翳すと、光が集まって一つの映像の様なものが見えてく

る。

誰かの視点なのだろう。徐々に鮮明になつてくその映像を見て驚く。

「これ、ワタシの部屋……？」

視界に移つてるのは自分の部屋だった。

いや、夢だし、そういつた記憶が出て来てもおかしくは……。

そう思つて見ていたが、所々におかしな点が見えた。

「……え？これ、いつなの……？」

鏡に映つた自分の服装は、厚着をしていた。多分冬辺りだろうか？

それに、何だか楽しそうな顔をしていた。頻りに服装や髪、顔におかしい箇所は無いかと念入りに確認をしてる。

……まるで、これからデートにでも行くみたい。

少し緊張してる感じと、恥ずかしそうにしている自分がそこには居た。

問題ないと分かつて部屋から出る。どこへ向かうのか見ていると、見覚えのある道を歩いていた。

「この道つて……今日通つた……」

特に迷うような足取りは無く、そのまま目的地まで辿り着く。場所は勿論……今日立ち寄つたマンションだった。

「な、なにこれ……」

そんな記憶、知らないはず……。けど、この記憶は……。

エレベーターに乗り、6階のボタンを押す。今日と全く同じ道のと辿つて、部屋の前へ立つ。

深呼吸をしてから入口のピンポンを押す。少ししてドアが開き、中の人が出てくる。

「あつ……」

出て来た人は、ワタシを見て嬉しそうに笑つてから中へ招いていた。

「この人が……」

ワタシを見る笑顔を見てこれまで不鮮明だった記憶のもやが消える。



「……この人だったんだ」

映像が消え、集まっていた光が散る。

「どうかしら？何か思い出せた？」

「……謎が、1つ解けた」

「そう。それは良かったわ」

「それより、今のって……ワタシよね？」

「ええ、あなたよ」

「でも、さっきの映像は、今よりもっと後……冬ぐらいにみえた」

「……あなたは思い出さないといけない事がまだまだ沢山あるわ。

さっきのはその第一歩よ」

「思い出さないと……いけないこと？」

「忘れてしまった何かがある。大切な何か……それを思い出さないといけないわ。私がそれを手助けしてあげる」

「何が、起きてるの……？何なの、この夢……？」

自分の知らない記憶があつて、それを無理矢理見せられてるような……。

「……でも」

それを聞いて、抜けていた何かが1つ、戻ってきたような気がする。

「確認させて。ワタシが会いに行った人は……誰なの？」

「その答えはもう出てると思うけれど？」

「……そっか、さっきの人が……」

澤田達也。その人だったってわけね。

「どうして、ワタシはこのことを忘れてるの？この人はワタシにとつてどんな人だったの？」

どう見てもただの知り合いには見えなかった。それに、ワタシの行動からして……かなり相手に好意を持つてるはず。

「急がないで。ちゃんとこれからそれらを1つずつ紐解いて行くわよ」

「……そう」

謎が1つ解けると、多くの謎が見えるようになった感じだ。

「それじゃあ、今日はこれまでのおさらいをしましょうか？その方が良いかもしれないわ」

あの日から、毎日同じ夢を見ている。内容はワタシの体験？と言えば良いのだろうか？記憶の閲覧会の様なものだ。

……これを夢として片付けるのには無理がある。多分だけど、閣下や明月さん達に関係がする何かだと思う。

これまで見ていた記憶はどれも身に覚えがない事ばかりであった。高嶺君が来るまでの一ヶ月間。それからお店を開くまでの日々。

その記憶の断片の中には、澤田達也という人物がいた。一緒にお店で働いている風景があった。

「……ワタシは、一体何を忘れているの……？」

何かがおかしい。嘘の映像を見せられている……、その可能性も考えたが、ワタシの勘が違うと告げていた。間違いなくこの日々を知っている。

「……質問、してもいい？」

「ええ、答えられる範囲なら何なりと」

「ワタシがこうなったのは、高嶺君が世界をやり直した9/28、この日で間違いない？」

「そうよ。その日に忘れてしまってるわ」

「ってことは……高嶺君が世界をやり直したことが切っ掛けで？」

「それは違うわ。彼が世界をやり直した事と、あなたがあの子を忘れたことは無関係よ」

「そう……」

「答えられずでごめんなさい。けれど、こればかりはあなた自身で思い出して貰わないと納得出来ないと思うわ」

「ううん。自力でなんとかして見せるから……」

あと一歩、何か思い出とか切っ掛けがあれば……。

次の日、夢から覚めて体を起こす。

「……って、今日は定休日だった」

今日はお店も休みで、大学の方もタイミング良く受ける講義が無い。

「どうしよつか……」

特にすることも無いが、最近見ている夢の事で割と頭が一杯の為若干寝不足気味ではあった。

「澤田……達也……」

一度、軽く閣下や明月さん、高嶺君にも聞いてみたけど知らないという返事が来た。もし彼がほんとに居たのなら、ワタシだけでは無くて3人も忘れているってことになる。

「……何に巻き込まれているのだろうか」

どうして彼は、居なくなってしまったのだろうか？

「……ん？居ない？」

ちよつと、待って。冷静に考えてみれば……あの部屋にいるのではないだろうか？どうして勝手に消えてしまったって考えていたのだろうか？

「あれ……？でも、もう会えないって……」

何故か、この世界では彼には会えないという固定概念的な考えがある。

「……一度、確かめてみないと」

すぐに着替えて部屋を出る。

「……ここだよね」

夢で見た道と同じ道のりを辿ってマンションへ着く。そのままエレベーターに乗り、6階へ向かう。

「居るの……かな？」

不安と緊張を感じながらピンポンを押す。

「……やっぱり、出てない」

試しにノックをしてみるが、人の動く気配はしない。

「やっぱり、居ないのかな？」

念のためにとドアを開けようと取っ手を下げると、ガチャ。と音が

鳴る。

「鍵が、掛かってない……う？」

不用心だなと思ひ、そのまま開けようとして踏みとどまる。

「……………」

このまま、開けても良いのだろうか？勝手に人の部屋に入るのは……。

「……………うん、行こう」

後で沢山謝ろう。そう決めて入口のドアを開く。

「お邪魔しまーす」

ドアを閉めてから、靴を脱いで上がる。……本当大丈夫かな？ただの不法侵入だよな？これ。

電気も何も点いてない通路を渡り、奥の部屋へと進む。

「……………は」

部屋に入る。そこには、引越したばかりだったのだろうか。あまり物が置かれて無かった。

「……………この部屋、知ってる」

知らないはずの部屋。でも、ワタシの何かが知ってるって言っている。

「ワタシは……………ここを、知ってる……………」

特にこれと言って何も無い部屋だが、懐かしい気持ちと同時に、寂しい気持ちに包まれる。

部屋や台所などを見て回り、ふと、不思議な感覚が襲う。

「この家電……………どこかで……………」

気になってスマホの通販で調べる。すると、一ヶ月程前に全く同じ家電を購入していた。

「ワタシが買ってる……………？」

1つだったら偶然と言えるかもしれない。けど、全て同じ物とかありえるだろうか？

「ほんとに何かを忘れてる。そうに違いない……………」

どの家電も新品に近い。恐らくだけど……………彼の代わりにワタシが購入したのだろう。どうしてそうしたかは分からないけど、そのくら

いの間柄ということだ。

「証拠……だよな？消えない事実だよな、これ？」

これまでは探しても見つからない、掴もうにも掴めない霧の中を彷徨っていたけど……。確かな繋がりを見つけた。

「つまり、本当にここに住んでいた……」

しかし、その姿は見えない。

室内を観察したり、申し訳ないと思いつながらも冷蔵庫を覗いて見ると、賞味期限切れの食材があった。

「……日持ちする日数から考えて、先月から放置されてる」

他にも水場なども使われた痕跡は無かった。少なくともここ最近に使われていないはず。

「となると、暫くはこの部屋で生活をしてはないってことか」

そうになると、色々と話が繋がってしまう。

「消えてるってことで、間違いない……。のよね？」

最後に部屋に戻り、寝ている場所であろうベッドに腰を下ろして手で触る。

「……冷たい」

それも当然か……。

「どこに、行ったんだろう……？」

誰からも忘れられる様な現象……多分高嶺君と同じ様な奇跡があったと思う。もしかしてと思ってLIEINも確認してみたけど履歴は無かった。

「どうして、そんなことをしたんだろう……？」

何をする為に、自分の存在を他の人から忘れさせたんだろう。どういった目的があって……。

「うう……。気になってしょうがない……。っ！」

モヤモヤとした感じにムカついて、つい体をベッドに投げ出して寝転がる。

「……って、流石にこれは失礼になるよね」

勝手に人様のベッドで寝転がるのか……。

「……ん？」

不意に嗅いだ匂いに起こそうとした体を止める。

「……え、なにこれ……？なんだろう……」

不思議に思いながら布団の匂いを嗅ぐ。

「……すう……ってーこれ完全に変態でしょ!？」

自分の行動を省みて咄嗟に体を起こす。

「マズイ……完全にアウトだこれ……」

人の布団の匂いが気になって嗅ぐとか……!

「~~~~ツ!!!」

恥ずかしくなつて手で顔を覆う。

「……はあああ……」

冷静になれワタシ。きつと頭がおかしくなっている。そうに違いない。

「どうして急に匂いなんか……」

布団の匂いってことは、間違いなく彼の……澤田達也って人の匂いってことだ。その匂いが気になるって……!

「……でも、何だか……」

不思議と嫌じゃなくて、むしろ……。

「……安心した?」

そう。安心したんだ。心地よくなったと言っても良い。心が温まると言えば正しいのだろうか?

「それって、ワタシが……彼の事を……?」

頭に思い浮かんだ可能性をつい口に出してしまう。

「……っ!?いやいやいや、ワタシは一体何を言ってる……」

アホな事を口にしてしまった。ワタシが誰かを好きになるとか……ないない。

「あー……でもなあ、前に見せてもらったのでは……」

そう。以前夢で見たワタシがこの部屋を訪ねようとしていた時、部屋で支度をしていたワタシは……なんて言うか、これから好きな人に会いに行く。そんな様な感じだった。

「……まさか……ほんとに?」

そ、それなら……辻褄が……合ったり?恋人みたいな関係なら、匂

いが落ち着くとか……あつてもおかしくは……なかつたり？

「……いや変態かつ」

匂いフェチとか笑えない。

「けど……そう考えると……」

考えれば考えるほどそうだと思ってしまう。ワタシが彼の事を好きだと……。ドキドキしてしまっていると。

「うわあ……。本気？マジで？」

信じられない様に自分の気持ちを確認する。

「なんか……発作でも起きたのかな？」

布団の匂いを嗅いでしまつてから夢で見た彼の顔が離れない。考えるだけで心が高鳴つてるのが分かる。

「あ、危ない成分でも入ってる……とか？」

馬鹿なことを考えながら、確認と言いつつ訳をしながらもう一度布団の匂いを嗅ぐ。

「……ううう！！」

かつつんぜんに変態の所業だ。自分が自分を抑えられない。

「でも……凄く安心する……」

これは……間違いない。忘れてしまう前のワタシは、きつと彼の事が好きだったんだろう。こんなことをしてしまうくらいには……。

「……尚更、分からなくなるなあ」

夢で見た感じ、彼もワタシの事をそれなりに好意的に接してくれていたはず。それなのに、居なくなつたとか……。

「なに、か……問題が起き、た……？」

最近、寝不足でだったのもあるが、安心して油断していたのだろう。急激な睡魔に襲われる。

駄目だと分かりながらも、そのまま瞼が閉じて行く。

「……………」

遂に睡魔に負け、そのまま意識を手放してしまった。

不思議な夢を見た。

『遠慮や俺を気にする必要は一切ない。四季さんが望むことがあるなら言ってくれ。それに全力で叶える為に協力は惜しまない』

誰かに、そんな提案をされた。

『お店を開くためには、今の時代に合わせて変わる必要がある。その為に自分も変わらなければならぬ。頭でわかっているとしてもそれを行動に移すことは結構勇気がいる事だから。素直に凄いと改めて思っただけ』

誰かに、褒められた気がする。

『四季ナツメ、キミを助きたい。明月さんへの恩返しでもなく、俺の意思で。四季さんのおかげで救われて変わることの出来た男がここにいる。なら、今度は俺が四季さんを助きたい。明るく、楽しそうに笑いながらみんなで働く姿を見たいんだ。そのために俺はこうしている。罪滅ぼしじゃなくて、そうしたいと俺自身が願ってるからだ』  
誰かに、願われたことがあった。

『俺にとっては世界一だけどな。好きナだけ願ってくれ。その度に好きナだけ付き合わせてもらおうから』

彼に、頼ってもいいと、夢を諦めないで欲しいと言われた。

『喜んで。それで四季さんの笑顔が見れるなら。それが俺の望みでもあるからな』

彼に、そうやって笑って手を差し伸べられた。

不思議な夢を見た。

『澤田達也。自分の言っている事が分かっているのか？今回の事故で死んだのは高嶺昂晴だけでは無いんだぞ？』

『知っている。……四季さんもだろ？最悪な事に事故のせいで魂の一部が零れてしまって更に危うい状態になってしまった事も全部知っている。そうなるかと知っていて……見捨てた』

『貴様がそうした理由はなんだ？救えたかもしれない魂だったのだぞ』

『……高嶺昂晴が、幸せを目指す為に必要になる鍵の1つだからだ』  
『仮にだが、もし必要にならなかった時はどうするのだ？四季ナツメの魂の一部が零れ落ちた意味が無いとなったら彼女はとうなる』



『その時は――俺が何とかする』  
そんな、不思議な夢を見た。

『四季さん……?』

そこには血だらけで、明らかに無事ではない体で道路を這いながら、誰かの髪を掬っていた。

『ごめん四季さん……。だが……』

その人の感情が流れてくる。相手に対しての後悔と、揺るがない強い誓い。

『今度は必ず。君を幸せにして見せる。他の誰かでは無く俺が……』

『君を――必ず救って見せる』

血だらけで、動かないワタシへ向かって、そう誓っていた。

目が覚める。どうやら、ベッドで寝てしまっていたらしい。

「……んっ……」

寝ぼけた頭のまま、目を擦る。

「あれ……?」

次第に頭がクリアになっていく。頬が濡れている……泣いていたのだろうか?

さっきまで見ていた夢を思い出して、ふと口から言葉が零れ出る。

「……澤田君?」

—新訳—第33話：記憶の残滓—澤田達也—

不思議な夢を見て目を覚ますと、忘れていたこれまでの事を思い出していた。

「これって……、澤田君のことを思い出した……ってことだよな？」  
前の世界での記憶。彼が居て一緒にお店で働いていた世界の記憶。

「澤田君が明月さんを助ける為に高嶺君と閣下と過去に飛んで……  
それから……」

今の世界のワタシの記憶と、前のワタシの記憶を擦り合わせれば  
……。

「あの日、お店に入る前に話した澤田君は未来の……」

前の世界では確か、一緒にお店に入ったはず……。だけど、今回は  
後で入るって言っただけのままその場に残った。

「それに……、ワタシに魂を、渡した？」

目を閉じさせて魂を確認すると言っただけをくつつけていた。  
あれは恐らく確認とかでは無くて……。

「その直後にワタシや皆の記憶から消えている……？」

その直後にお店の中で明月さんとの会話が明らかにおかしい。

「何が起きたの……？あの瞬間に……」

それから今の今まで彼の事を忘れていた。何かが起きたに違いない。  
い。

「そのせいで、澤田君が消えた……？」

一番に考えられるのは、彼が言っただけの神様からの罰が下った……と  
か？それとも……。

「想定外の何が……あったの？」

彼のことを思い出しても、あるのは自分の記憶だけ。

「……」一回、確認しておく必要があるかも」

まずは、澤田君がワタシに魂を分けたのが本当なのか、閣下に確認  
してみないと……。

聞いていた話だと、明月さんを助けるはずだったのに、ワタシにも

何かをしていた。咄嗟の思い付きなのか、それとも最初からの計画なのか……。

「澤田君なら……やりそうだなあ」

何となく、彼ならそうしてもおかしくない。

「……なんだか、変な感じ」

前の世界のワタシの記憶と、今の世界のワタシの記憶の両方がある。この世界に居ない澤田君に対して困惑しているワタシと、今までの謎が一気に解けて来て安心していている自分がいる。

「焦りに任せても良い考えは思いつかない。落ち着くことが大切……だっけ？」

妙な落ち着きのままその場を立ち上がる。

「お店に行けば、会えるかな？」

最低でも明月さんが居るだろうと思い、名残惜しく感じながらも部屋を出ようとする。

ピンポーン。

「え……？」

すると、部屋を訪ねて来たことを知らせる音が鳴り響く。

「……誰？」

ここを訪ねる人が居るなんておかしい。普通居るはずがないけど……。管理会社の人、なのかな？

おそるおそる近寄り、玄関の覗き穴から外を確認する。

「……この子って」

外を見ると、白い服と髪をしている少女が立っていた。

……確か、澤田君の部屋に何度か尋ねて来ていた子、だったよね？ どうしてここに？

「そこに居るのは分かってるからさ、大人しく開けてくれないかな？」一応礼儀として鳴らしているんだけどね」

「ツッ！」

覗き穴越しで目が合う。……どうやら、バレていたみたい。ってそれもそうか。タイミングが良すぎるし……。

観念して素直にドアを開ける。

「やあやあ、この世界ではお互いに初めまして。で良いのかな？」  
「……………、実際は2度目。なんだけどね」

「ふうん……………。つてことは、本当に記憶を取り戻したんだ……………凄いな」

「……………もしかして」

「あ、うん。そうだよ。僕は前の世界で最後にキミの部屋を訪れた偉い神様だよ」

「やっぱり……………」

喋り方が見た目と全然合っていない。依代として体を借りている状態……………だったよね。

「玄関で立って話すのもなんだし、上がらせてもらっても良いかな？」

「……………わかった」

多分だけど、碌な内容じゃないと簡単に想像できる。

「長話になるかもしれないから、座らせてもらうよ」

そのまま部屋に入り、腰を下ろしたのでワタシもベットに座る。

「話って……………何？」

「うーん、そうだねえ……………。まずは、キミが記憶を取り戻した事から話しておこうか」

今の言い方的に、目の前の人が関わってるのだろうか。

「彼の記憶が消えた理由だけだね。あれは僕がしたこと。まあ、これに関しては何となく予想が付くとは思うけど」

「どうして、消したの……………」

「本人がそうしたいと僕にお願いしてきたからさ」

「……………え？澤田君、自身が？」

「そう。彼自身が……………ね」

「なんで……………」

「なんでってそりゃあ……………おっと、これは僕の口から言うのは止めておこうかな？どうやら、僕が予想していたよりまだ取り戻せてないみたいだしね」

「取り戻せてない……………？何を……………」

「キミの中に眠る記憶を、だよ。まだ切っ掛けしか思い出せてないみたいだしね。これに関しては、彼女がコントロールしてるのかな」

「彼女……？」

「キミが最近夢で会う女性のことさ」

「えっ……、知ってるの？」

「そりゃあ、僕はえらあくい神様だからね。それなりのことは知ってるのさ」

「誰なの？その人は……どうして夢で？」

「さあね。直接本人の口から聞くのをオススメするよ？」

「……」

目の前の神様は、ワタシが知りたい事を知っているが、あえてそれを伏せている。何か理由が……？それとも反応を見て楽しんでいる？

「失礼だなあ……。ちゃんと理由があって伏せてるに決まってるじゃないか。僕が君の反応を見て楽しんでるだなんて、そんな訳ないない」

「……やっぱり、考えが読まれてる。」

「あれ？驚かないんだね」

「何となく、そうじゃないかなって思ってたから……」

「……へえ。キミがこれを知るのは初めてのはずだけど……、思っている以上に無意識下で共有してるのかもしれないね。凄く面白い現象だ」

急に眼を細め、真面目な声で呟く。

「……う？どういうこと」

「キミの中に眠る澤田達也の記憶と自分の記憶が混ざってるってことさ」

「ワタシの中に……澤田君の記憶が……？」

「そうだね。これに関しては彼も望んでいたわけじゃないけど……、こればかりは仕方ないことだし」

何かを納得するように1人で頷いている。

「思い出さないといけない記憶が……ワタシにはある」

そうじゃないかと思つてた。まだ、真実に辿り着けていない。

「そうだよおっ？最も、それを知ればキミは絶望するかもしれない。知らない方が幸せだった……。なんて答えかもしれない。それでもその答えを知りたいかい？」

揶揄う様な、試すような眼差しでワタシを見る。

「……例え、あなたの言う事が本当だったとしても、ワタシはそれを知るべきだと思う。ううん、知らないままじゃダメ。ワタシ自身がそう望んでる」

「……同じ目をするんだね。それが彼の影響なのか、はたまたキミ自身の変化なのか……」

興味深そうにこちらを見てくる。

「多分、澤田君の影響……かな？」

「ふむ……、なるほどなるほど。彼の言葉に……。ね。前者とも後者とも受け取れる答えだね」

ワタシの言葉を聞いて、一人で頷く。

「どうやら、あまり心配することは無さそうみたいだし、僕はこのまま帰ることにしよう」

「……え？帰る、の？」

あれ？てつきり澤田君のことを思い出したことに対して何かするのかとばかり……。

「今のキミに何かする気は無いし、記憶も消すつもりも無い。僕が頼まれたのはあくまであの日の一回だけだしね」

「そうなの……？また消されるのとはばかり……」

「しないよ、そんな面倒な事。それに……。こつちの方が良い方向に動きそうだし、このまま見守ることにするよ」

面白い物を見るようにこちらを見て笑いながら、立ち上がる。

「それじゃあ、楽しみにして見てるよ。彼の影響を受けたキミが、この世界でどう生きて行くのかを……。ね。出来れば、良い未来になる事を願ってるよ」

最後に笑って玄関から出て行く。

「……結局、何が目的だったのかな？」

緊張の糸が切れ、体から力が抜ける。

様子を見に来た……とか、そんな所だろうか？ワタシが思い出した事でどう変化したのか……とか？

「って考えてもわかる訳ないか」

向こうとは違って、人の考えを読める訳じゃないし。

「……今は、まだ思い出せてない記憶を、思い出すことが先決……かな」

この世界に澤田君が居ないのは、彼自身が望んで、あの神様をお願いをしていたつてのが本当なら、前の世界でワタシにまた会おうつて嘘を付いていたことになる。

「多分、ワタシが止めると踏んで、嘘を付いていた……」

何か理由があるはず。それを知らなければならぬ。

「記憶を思い出すには、あの人がコントロールをしている……だったっけ？」

夢で会う謎の女性。最初は夢だからとあまり考えてはなかったけど……。

「うーん、なんだか……どんどん謎が増えていつてるような……」

近づいてるのか遠ざかっているのか……。

「今度夢で会った時に、しっかりと聞いておかないと……」

あの人は、澤田君の事を知っている。ワタシがそれを思い出すのを待っている。

「あら、いらっしやい」

その日の夜、望んだ通りに同じ夢を見た。最近はずっとそうだったので大丈夫だろうとは思っていたけどね。

「こんばんわ。今日もお邪魔させてもらうね」

「ええ、ご自由にどうぞ。何か飲む？と言っても紅茶とコーヒーしか出せないけどね」

「……実質、選択肢は一つしか無いのだけどね」

「それもそうだったわね」

「こっちの意図を理解して紅茶を淹れ始める。」

「はいどうぞ。それで、今日は何を知りたいのかしら?」

「……彼の事、澤田君の事を知りたい」

「ふふ、ちゃんとあの子の事を思い出したようね。安心したわ」

「今日、とある人に会って、ワタシの中にある記憶を知るにはあなたに聞くのが良いって説明されたの」

「ああ、あの神様ね」

「……どうやら、どっちも認識しているみたい。」

「そうね。あなたに見せて来た記憶も、私の方で好きにしていたからね。無事あなたが思い出したことで、ようやく次に移れるわ」

手元の紅茶を一口飲んでワタシを見る。

「覚悟はしてきたのかしら?あの子が忘れさせた……、という事はそれに値するだけの記憶があるわよ?勿論、あなたにとって」

「……うん、ちゃんと覚悟はしてきた、つもりではいる……。澤田君が何を思っただけ消したのかは分からない。だけど、ワタシはそれを知りたい」

「二応、このままあの子の事を忘れて、お店で働き続ける……。その選択肢もあるのだけれども?」

「それだけは絶対に嫌」

「ふふ、愛されてるわねえ……」

「えっ、いやっ!別にそういう意味で言ったわけじゃ……!」

「あら?違うのかしら?てつきりあの子の事が好きで、知りたいからの行動だと思っただけ?」

「……違わないけど」

「素直じゃないわねえ」

「恥ずかしくなり目を逸らす。」

「そ、それより!前の続きをつ。澤田君の事を思い出したら話すつて条件だったでしょ?」

「はいはい、ちゃんと覚えてるわよ」

ワタシの反応を楽しそうに見ながら立ち上がる。



「それじゃあ着いて来なさい。そして、しっかりと見届けなさい。あの子が、この世界で生きていた証を……ね」

以前と同じように後を追う。歩き出した道に新しく道が出来ていく。すると、左側に光が集まり始める。

『俺の名前は澤田達也。明月さん達とは昨日知り合ったばかりなんだ。まあ死神関連で関わる事になったんだが、どうやら俺に起きている事象は初めてのケースみたいで、調査するなら近くに置いていた方が良いつてことになった』

『お店については、俺自身が過去に実際喫茶店で働いていたこともあったから、協力できると考えて申し受けた感じになる。これから宜しくお願いします』

そこには、改装する前のお店で、ワタシに向かって自己紹介をしている澤田君がいた。

「これがあなた達2人の顔合わせね」

「……うん。確か、明月さんと話してた時にお店に入って来たのが初めてだった」

そのまま視界は変わり、ホテルの一室だろうか？肉まんを食べていた。

『今日はもう終わりだと思っていたが、まさか四季ナツメと出くわすとは……、明月葉那はこれの為に俺をもう一度店に呼んだのか。嵌められた気分だ。でも、今後関わって行くことになるからそれ込みで考えていかないと……』

多分、考えごとしているのだろうか？

『それにしても、改めて思うと明月葉那も四季ナツメもやっぱり超絶美少女だったな。他のヒロインも変わらずとなれば、それらと交友関係を持っていく高嶺昂晴はギルティというわけになるな、主人公だから仕方ないけど……』

そのままベットに寝転がり始める。

『四季ナツメかあ……まさか出会う事になるなんて……。彼女の紅茶を飲んでみたい。今でもある程度は美味しいだろう。自分の目標としている人の腕を味わえる機会が訪れるとか最高過ぎる……』

『また、明日から頑張ろう。高嶺昂晴がハッピーエンドを迎えられるように』

そして、そのまま目を閉じて眠りについた。

「今のは……澤田君の記憶？」

「ええ、そうね。あなたと最初に会った日の出来事よ」

そっか……。ということは、あの日の時点で既に高嶺君をどうするかを考え始めていたんだ。それに……。ワタシの紅茶を飲んでみた  
いって……。

集まった光が散り、再び歩き出す。少し歩くと、反対側に光が集まり始める。

『この店、CAFÉ STELLAで働くことで何が高嶺さんのプラスになるかという……。』

そこには、手を大きく広げながら高嶺君に話しかけている澤田君が居た。場所は、お店の部屋だろうか。

『まず、可愛い女の子と一緒に働ける』

『……え？』

『考えてもみてくれ、今この店には君の大学で有名なあの孤高の墜王、四季ナツメが居る。彼女と同じ店……。同じ空間を共に過ごすチャンスが到来だ。四季さんだけではない。もう一人の金髪の女性、死神こと明月栞那。彼女とも一緒だ。しかも明月さんは高嶺さんの現状を一番に心配している。常に君の事を気に掛けていると言って過言ではない。そんな女性達と同じ店で働けば必然と会話をする機会も増える。友好を築けるわけだ』

『同じ職場で働いていれば仕事終わりにどこかに食べに行くかもしれない。オシャレなバーに飲みに行くかもしれない。夜だし家まで送る事になるかもしれない……。その流れで家で少しお茶をするかもしれない。他愛もない会話から一緒に買い物に出かける機会があるかもしれない。二人で遊園地などの娯楽施設に遊びに行くかもしれない……。』

『そんな夢の可能性が出てくる』

『……』

力強く、高嶺君へ伝える。彼は一体何を言ってるのだろうか……？  
『は、はあ……』

正面の高嶺君も同じ反応をしている。さっきの台詞的に、お店に勧誘している場面なのは分かるけど……。

『そして、最後に3つ目』

『可愛い女性と同じ屋根の下で働くという事はつまり……、ハプニングは付き物、という事だ』

「……あの時、奥でこんなことを話していたのかあ」  
物凄く、くつだらな内容だった。

『やる。ここで働く。あ、いや。一緒に働かせて下さい』

『ようこそ、CAFÉ STELLAへ。私たちは君を歓迎しよう』  
そう言ってお互いに力強く握手を交わしていた。そして、光が散つていった。

「今が高嶺君を納得させた内容だったのか……」

理解は出来ないけど、結果を見れば無事成功していた。

「あの子なりに確実に引き込みたかったのよ、きつと」

そう言つて前に進む。

「今度は……」

また光が集まると、1つの光景が映し出される。

『……よし、今の所はまだ順調だな。一応原作通りに進んではいるし問題は無いはず』

そこは、澤田君の部屋だろう。ベッドに座りながら、一冊の大学ノートを見ていた。

『今は、この辺りだから……次は涼音さんをお店に誘う辺りだな』

ノートには、何かのフローチャートだろうか？丁寧に書き込まれており、その横には詳細らしき何かが沢山書かれていた。

『この調子で、まずはお店を開かないとな……』

そう言つてノートを閉じて、ベッド横の棚の後ろにバレない様に隠していた。

「何？今のノート……」

何かを確認する為に見ていた。しつかりとは見れなかったけど、何

かしらの進行状況のすり合わせのようだった。

疑問に思っていると、次の映像が流れ始める。

『無事、お店を開くところまでは持つてこれたな。このままお店を維持して、何とか高嶺を明月さんルートに持つていかないとな……』  
『四季さんの方も現時点では問題は無さそうだし……。そつちの方も考えておかないといけないな。どうにかこの調子で前向きに生きて行って欲しいものだが……』

光が消え、次が現れる。

『まさか、四季さんにバーに誘われるとはな……。しかも高嶺じゃなくて俺が。これは……。少し予想外だったな。いや、滅茶苦茶嬉しいのは確かだけど、原作との差異が起きないか心配つてのもある。誘った基準でもあったのか……？』

これは……。確かワタシが澤田君を飲み誘った日の事だろう。彼の想定では、ワタシは高嶺君を誘っていたの？単純にお世話になっていたからそのお礼も込めて誘ったのだけ……。』

『……卯花之佐久夜姫、竜胆ルリ。天神乱漫からのキャラかあ……。このまま何事も無く過ぎて欲しいけど、そう都合よくは行かないだろうな』

『お店の害にならなければ良いのだが……』

これは、あの神様ときつねの少女の事だと思う。このことについても澤田君は想定外つて話だったよね。

その言葉には、何かを守ろうとする意志が込められていた。

次の映像には、地面に倒れながら苦しむ男を見下ろす様に立っている澤田君だった。

『……ほんと、折角良い感じで進んでいるのに、お前みたいなやつが一番めんどくさい……』

『がっ、あが……っ！』

『しかも、中途半端に追い払うと、逆恨みで誰かを狙う……。狙われたのが俺で本当に安心したよ』

『て、てめえ……。このっ！』

睨むように見て来た男に拳を振り下ろす。

『ごっほ!?!』

『……二度とそう思えない様にしないとな』  
立ち上がり、手を広げる。

『負の感情ね』

深く、暗い感情が流れ込む。すると、掌に一匹の蝶が現れる。

『この蝶をこいつにぶつければ、多少なりと壊れるだろう。廃人……とまでは行かないが、こちらを可能な限り恐怖してもらえれば関わって来ないだろう』

澤田君の考えが聞こえてくる。

『試すのにはもってこいかもしれないな』

そのまま、蝶を男に向かって放った。

「ダ、ダメッ!」

言っても意味が無いのは分かっているけど、咄嗟に止めようと声が出る。

飛んでいく蝶が男に触れる直前で白く輝く何かに飲み込まれる。

『やめておけ、このど阿呆が』

そこを見ると、煌びやかな巫女服?の様な衣装を着ている神様が居た。どうやら、寸前で阻止してくれたみたい。

『すまんが、勝手に止めさせて貰った。このままじゃと、そこに居る男がかわいそうじゃからのう』

『……つまりは、効果があるということなんだな?』

『そうじゃな。お主……分かっていて行うつもりだったろ』

『まあな。こういう輩は、加減をすると幾らでも突つかかってくるからな。経験のあるあんたになら分かると思うが?』

『……じゃな。そちらの言い分も理解できる。だが、それをお主がする必要はない』

『……どうする気だ?』

『なに、妾の力で記憶を消すのじゃ。ついでに店には近づかない様に暗示……おまじないもかけておこう』

『……それで店の安全は保たれるのか?』

『保証しよう。神である妾がな』

『……分かった。それなら任せるよ』

言質を取ったことで矛を収める。

そのままその景色が消え、次が現れる。

『どうするつもりなの？なにか手伝えることとかある？』

『そうだな、四季さんには高嶺の動向を見守ってほしいかな？』

『高嶺君の……？』

『そそ、高嶺が何をしたとか、どんな行動を起こしたとか気にしても  
らえると助かる』

『そんなことでもいいの？』

『勿論、俺もあっちこっちと気になれるだけの余裕があるかわから  
ないし、見逃すかもしれないから、手伝って貰えると助かる』

『ん、りようかい。気にかけておく』

『よろしく』

『これで四季さんは高嶺のこれからの行動に注視するはず。新しい  
メニューを作ったり、お店の為にと頑張る姿を見て自分も……、と  
なってくれると助かるのだが……』

「ワタシに高嶺君の動向を任せられた理由は、そう言う事だったのね  
……」

場面は変わり、澤田君の部屋で、卯花さん？と一緒に居た。

『ああ、ナツメの魂が弱っているのは元々じゃ。今回の原因は別に  
ある』

『詳しく聞かせてくれ』

『おぬしらが言う魂の分離、いわゆる蝶となって魂が零れ落ちた。  
それによって彼女の魂は一般の人間より弱い。いわば病弱な体質の  
人間と同じじゃな。何かしらの干渉などでも体に影響を及ぼしてし  
まう位にな』

『じゃが、これまでは問題無く生きて来られた。多少の刺激があつ  
ても、その分魂も元に戻ろうと強くなっていたからのう……。しか  
し、その魂の許容範囲を超えてしまい、それが体にも影響を及ぼした。  
恐らく、これが今回の原因だ』

『……何をしたら、魂に影響を、及ぼすんだ？』

『魂とは自分の心じゃ。沈んだ気持ちを持てば魂にも影響を及ぼす。勿論逆も然り』

『それは……つまり、マイナスだけじゃなくプラスの考えもつて何か?』

『そうじゃな。ナツメの魂の許容よりも強い気持ちを持てば、当然その分魂へ無理を強いる』

『……ああ、なるほど、理解したよ』

『つまり、倒れる直前に俺が背中を押した事で希望を持ってしまつて……。俺のせいで……』

次に移った光景は、澤田君が言っていた竜胆ルリちゃん?と向き合つて話していた。

『なるほど、キミの言いたい事はよくわかったよ。彼女を救う為に許可が欲しいと?』

『ああ。不干渉だとありがたい』

『なるほどねえ。ふむふむ、良いよ。その代わりと言つては何だけど、僕からキミへ条件がある』

『俺に出来る事なら、何でも受け入れる』

『おや、内容も聞かずに良いのかい?とんでもないことを提案するかもしれないよ?』

『俺だけで済むなら安いもんだ。それで四季さんが助かる可能性が上がるならな』

光が散る。

『……それなら、絶対に譲る訳にはいなくなつたな』

『……っ?!?どうしてですか!』

これは、明月さんと対峙していたときの……。

『残念だけど、明月さんがその役目を果たすのは今じゃない。もつと後だ』

『どういう意味ですか……?』

『……すまんが、それを今話すことは出来ないんだ』

『……あなたはっ、いつもいつもそうやって、全部を自分一人で背負おうとして……!』

普段からは想像出来ない様子で、声を荒げて鎌を澤田君に向ける。

『それなら、私もあなたを止めます』

『どうしても、譲ってくれないのか……?』

『そのままそっくりお返ししますよ』

『……それじゃあ、仕方ないな』

『ごめんだけど、明月さんには退場してもらおう』

『ここで明月さんに使わせる訳にはいかない。それは高嶺の為に使うものだ。それに……助けるなら俺自身が四季さんを助けたい』

譲れない何かを思い、明月さんと敵対した。

『前と同じ要領で……、それを徐々に送り付けて行く感覚を……』

病院の一室で、寝ているワタシに顔を近づけて、おでこをくつつける。

『どうか目を覚ましてほしい。四季ナツメの輝かしい未来を俺に見せてほしい……!お店で皆と笑いながら過ごす日々をつ!』

『こんな場所で終わらせてたまるか。この人には、もっと素晴らしい人生を歩んで貰わなければいけない!俺がその希望を信じた様に、この先もそれを見せてくれ!』

強く、眩い感情が流れ込んでくる。

「澤田君……」

病院で見た夢は、やっぱり本当だったんだ……。

光が集まる。

『……ごめん、少し頭の中を整理させてほしい。澤田君が言っている事は分かっているけど、追いついていないだけだから……』

『……分かった。ひとまず俺も風呂入って来るよ』

『うん……その間に整理しとくから……』

今度は宿での場面だった。

『これで多少は誤魔化せたはず。最後に爆弾を投下したことで混乱もしていたから細かい箇所を忘れただろうし』

『……ごめんな』

『自分でもクソ野郎とは思うが、バレる訳にはいかないからな』

『これは、明月さん……そして四季さんを助ける為に必要なことだ』



と割り切らないとな』

場面が変わり、部屋が朝の陽ざしに照らされ、ベッドで寝ているワタシを見ていた。

『幸せそうに寝ているなあ。こうやって好きな人の寝顔を眺めながら朝を迎えるって、最高だな』

『だが、こうして幸せそうに寝ている彼女を置いて過去に戻ってリセットすることを考えると……って、今更言っても遅いか』

『それでも。と決めたのだから今更揺らいでいては駄目だろう』

「……あの日の朝、そんな事を……っ」

泣きたくなる気持ちをぐっと抑える。涙で見えなくさせてはいけない。ちゃんと見ないと……っ！

『終わった？』

『ああ、協力ありがとな』

『どうだったの？魂を見たんでしょ？』

『少し弱ってたって感じ。少し治療したけど体調とか変じやないか？』

『んー……特に平気かなあ……？』

『了解。それじゃあこれで終わりだな』

「あつ、この場面は……」

最後に、ワタシが澤田君に会ったシーン……。

『中に入らないの？』

『もうちよつとここで涼んだら入るよ。お先にどうぞ』

『そ、じゃあ先に入ってるから』

特に気にすることなくお店へ入って行くワタシ。知りたいのはこの後。

『やれることはやったし……あとは高嶺に任せるか』

澤田君が自分の体に視線を向けると、体が淡く光っていた。

『なるほど、消え方は明月さんと似た感じなのか……』

何かを納得するように苦笑する。

『後悔や心残りはある。けど、消える最後に四季さんと会う事が出来たので全部チャラで良いと思えた』

『これで――彼女の幸せに繋がるのなら』

最後にそう思つて、その体は蝶へ還つていった。

「……………」

その姿を見て、唯々立ち尽くす。

「…………ざつくりとだけど、これがあの子のこの世界で生き抜いた証  
扱ね」

隣を見ると、少し寂しそうに笑っていた。

「澤田君は……最後にワタシのために…………」

「そうね。あなたを助けたい。そう想つての行動よ」

「なんで…………どうしてそんなに…………、こんなにワタシのために…………」

「そんなの、あなたの事が好きで好きでしようがないからに決まっ  
てるでしょ。大切な人を助けたい。ただそれだけよ」

「っ……………」

遂に堪え切れずに泣いてしまった。

「…………さつきまでののは、ほんの一部分。それなりに大事な部分を見  
せただけ」

「ま、まだ…………澤田君には何か、あるの…………？」

「…………ええ、あるわ。沢山ね。どうしてこの世界にやって来たのか、  
どうしてあなたたちの事を知っていたのか、どうして、あなたの事を  
最初から見ていたのか…………」

「それらを知りたいのなら、泣かないで顔を上げなさい」

「…………」

涙が出てくる目を擦りながら顔を上げる。すると、正面に木製の扉  
が現れる。

「…………これは」

「あの子の全てを知る勇氣があるなら、その扉を開けて前に進みな  
さい」

半歩横に逸れて、ワタシに道を譲る。

「この先に、澤田君の記憶が…………あるの？」

「そうよ、あなたが知りたがっていた事が、きつとあるわ。そして、  
あの子を救う手立ても…………きつとね」

「……それなら、開ける」

「一応、知れば後には引き返せないわよ?」

「引き返すことも、セーブも出来なくなる?」

「ふふ、そうね。そうなるわ」

「それなら、尚更答えはイエス」

「そう……。それなら何も言う事は無いわ。あなたがそれを望むなら、好きに進むなさい」

「うん、そうする」

真つ直ぐ前を見据え、扉に向かって階段を上がる。

「……この奥に」

ドアノブを回して扉を開ける。中から目が開けられない程の眩しい光が射しこむ。

「う……」

手で光を遮りながら、一步前へ踏む出す。

そして、そのまま光の中へ足を踏み込んだ。

「……行った、わね」

閉まった扉を見つめながら、小さく呟く。

「その一步が、運命を変える……ねえ」

先程の会話を思い出しながら少し笑ってしまう。

「彼には勿体ないくらいの良い子に出会えたじゃない」

「……、ナツメちゃん」

「あの子を……、達也をよろしく頼むわね」

そう言って、くるりと身を翻して姿を消した。

—新訳—第34話：Realize

「ありがとうございましたー」

今日の最後のお客さんが帰ったことで、本日の営業は終了となった。

「いやー、今日もお客さん沢山来ましたねっ」

「だよ、やっぱり涼音さんのスウィーツ目当てが多い感じだよ」  
無事に今日を終えたことに、火打谷さんと墨染さんが喜んでる。

「それでは、表の看板を片付けて来ますね」

「うん、お願い」

あれから時間が過ぎ、お店の方は問題無く営業出来ている。澤田君の記憶と、部屋にあったノートに頼りながら進めている。

先日も、結菜ちゃんのお父さんの誕生日会が予定通り開かれ、無事成功した。

「それじゃあ、片付けを始めるとしよう」

「はい」

涼音さんの開始の声に賛同し、皆で片付けや掃除を進めて行く。  
明月さんと高嶺君のコーヒー豆事件も終わった事だし、後は、新メニューとテスト勉強とかだっけ。

他にもすることはあるけど、お店関連ではこれくらいだと思う。

「……はあ」

こんなことを毎日考えながら働いていた澤田君を考えると……、どこで気を休ませていたんだろ？

改めて負担を強いていたんだと思って、ため息を吐いてしまう。

「ナツメさん？どうかされたのですか？ため息などされて」

「ん？ううん、大したことじゃ無いから気にしないで。ちよつと考え事をしてただけだから」

「考え事、ですか……？」

「うん、お店の新メニューをどうしようかかって」

「ああ、高嶺さんと話されていた件ですね」

「そ。何となく構想は出来ているんだけどね……」

本当の事を話すわけにはいかないので、取り敢えずそれっぽい話題で誤魔化す。

「どんなのをお考えで？」

「新メニューと言っても、新しい何かを出すんじゃないやなくて、既存のメニューに手を加えて派生させようかな。とか？手間とコスト面を考えるとそつちがお店としても良いかなって」

「確かに……。私は良いお考えだと思いますよ」

「ありがとう。後で高嶺君と話し合ってみる」

「何か手伝えることはありますか？」

「今の所は平気。もしあったら連絡させて」

「了解です。頑張ってくださいね」

嬉しそうな笑顔を浮かべて作業に戻る。

言った手前、ちゃんと話し合いの場を持たないといけないよね……。

澤田君は、問題無く物語を進める為に自分で話題を出したりと会話を誘導していた。ワタシもなるべくそうしようと思っているけど、彼のように上手くはない。

「まさか、ふざけたり、てきとうな会話もちゃんと練られていたとは……」

ほうきの持ち手の先端に手を被せて顎を乗せる。

何だかくやしい気分。まんまと嵌められたって感じ。いや、こんな感じで先が分かるなら納得しか出来ないけどね。

片付けが終わり、順番で着替えへ向かい、帰ろうとフロアに戻って来た高嶺君に声をかける。

「高嶺君、ちよつといい？」

「ん？どうした？」

「この後時間ある？」

「大丈夫だけど……」

「良かった。それなら少し付き合ってくれない？」

「え、そ、それって……?」

「あ、ううん。デートとかじゃないから」

「ですよー……」

ワンチャンの期待を込めて確認をしてきた高嶺君に先んじて封じる。

……記憶の中の行動に近い事をしてみたけど、予想通りの反応が返ってきたなあ……。

確かに、澤田君がワタシを揶揄う気持ちが少しわかってしまう。

「場所はお店でも良い?」

「いいけど……あ、もしかして新メニューの件か?」

「正解。少し話しておきたいから」

「オツケー」

そのまま帰らず、お互いにフロアの席に座る。

「実は、俺も案……までは行かないけど、思いついてはいる」

「新メニューを?」

「ああ」

「もしかして、胸でコーヒー豆でも温めるの?」

「しないからなっ!? そんな変態じみたことっ!」

「からのおく?」

「変わらないからなっ!? てか、蒸し返すの止めてもらっていいですかっ!」

「なーんだ、残念」

「そこで残念がるのはどうかと思うのだが……?」

「ウソ。冗談だから気にしないで。それで? 高嶺君の考えは?」

「あ、いや……これと言えとかじゃなくてふんわりとぐらいだから軽く聞いてほしい」

「大丈夫。あくまで案だから、自由に言っても文句は言わない」

「前に涼音さんにも相談したんだが、新メニューと言っても新しい料理を作るんじゃないかって、もっと、こう……お手軽に作れるやつの方が……とか?」

「なるほど、確かにそっちの方がお店的にもありがたいしね。作る

側の高嶺君にとってもあまり内容が違ったりすると大変だしね」

「そうそう」

「つて、なると……既存のメニューに一手間加えてみたり……とかは？」

「ああ、そういう手か。確かにアリだな」

「それならこれまでのやり方とは大きく変わらないし、作るのにもコスト掛からないしね」

「もしかして、四季さんの案って……？」

「そ。高嶺君と似た感じの路線を考えてた」

「同じ考えなら……少しは自信が持てる、かな？」

「悪くはないとはワタシは思うけど……？」

「なら、そういった方向で考えてみようかな」

その後、メニューについて少しだけ話し込んでから解散となった。

「んー……、これで高嶺君の方は大丈夫かなあ？」

11月になってから、少しずつ本格的な寒さが出て来ている。

「約1か月後……かあ」

それまでにしつかりと高嶺君を誘導しておかないとね。それが澤田君が望んでいることだったし。

「それが無事に終われば、今度は……」

2人が無事結ばれば、次は澤田君。

「待ってて。今度はワタシが助ける番だから……絶対に」

「ナツメ先輩ナツメ先輩っ！」

フロアで作業をしていると、嬉しそうに駆け寄ってくる火打谷さんが目に入る。

「おはよう。どうしたの？」

「おはようございますーテスト結果っ！出ました！」

今にも飛び跳ねそうな表情で結果を話そうとしている。ま、その笑顔を見ればどつちに転んだかは明らかかなんだけど。

「いい結果だったみたいね」

「はいっ！全体的に60点を超えていて！数学は82点でしたっ！」

「良かった。ちゃんと勉強した成果が出たみたいね」

「先輩達のおかげです！ありがとうございます！」

「墨染さんの方も問題は無さそう？」

「大丈夫ですよ。希ちゃんも全体的に点数が上がったって喜んでましたー」

「そう。ならこれで一安心かな」

「これでようやくアルバイトに励めます」

「でも、今回のようにするんじゃないかと、日頃から勉強しておいた方がいいと思う」

「あはは……やっぱりそうですよねえ……」

「うん。けど、今回はちゃんと頑張った結果だから。お疲れ様」

「はい！ありがとうございます！それじゃあ、バリバリ働きますねっ」

いつも通りの明るい笑顔で返事をして、フロアの作業に入る。

と、なると……そろそろ高嶺君の方にシフトしても良いかな？最初は……明月さんのスマホを買いに行く場面からなるから……。

試しに高嶺君に……いや、先に明月さんにスマホを持った方が良かったって話しておいた方が良いのかな？

今後の流れを考えながら、今日の仕事をこなしていった。

「それじゃあ、お先ー」

「お疲れ様でしたー」

仕事が終わわり、ワタシ達の着替えが終わってから高嶺君が奥へ入って行くのを見て後を追う。

「んー……」

どんな流れで進めるのが良いのかと考えながら入口のドアをノックする。

「高嶺君、今大丈夫？」

「ん？ああ、平気だけど？」



許可が出たので中へ入る。

「どうした？」

「えっと、……高嶺君の事で、ちよつと気になることがあって」

「俺の事で……？」

「火打谷さんと墨染さんのテストも終わって一安心したけど、高嶺君の方の問題はどうなってるのかなって……」

「俺の方の、問題……？」

「ほら、高嶺君がこのお店で働くことになったのって、未練があったからでしょ？」

「あ、……そういえば。すっかり忘れてた……」

今思い出したかのような驚きの表情をしていた。

「やっぱり。一生懸命お店の為に働いてくれるのは助かるけど、自分の事もちゃんと考えてかないと」

「ごめん、すっかり失念してた」

「そろそろクリスマスが近いけど、誰か誘おうとか考えてたりしてるの？」

「いや、今のところそんな予定は無いな」

「気になる人とかは？彼女が欲しいと思ってるんじゃないの？」

「欲しいと思ってるけど……ぶっちゃけ、お店の事で精一杯って感じだった」

「今からでも良いから考えてみたら？クリスマスまでまだ時間はあるし」

「因みに、四季さんの方は……予定とか埋まっていたりは？」

「ワタシ……？2日ともお店だけ？」

「そっちは俺と違ってお誘いとかあってもおかしくないと思うんだけど」

「あー……、迷惑なことに何回かあったりしたなあ」

「やっぱり？」

「イヴの日に遊びに出掛けない？とか、食事だけでも。とか……」

「四季さんモテるからなあ……」

「こっちにその気が一ミリも無いからキツパリ断ってるけどね」

「そっちは、気になる人とか居ないのか？」

「……特には」

頭の中に澤田君の事が過ぎる。

「え……？今の間……、もしかして、いるのか……？」

ちっ、一瞬返事に迷いが出てしまった……。

「……何？仮に居たりしたら何か問題？」

多分、今のワタシの顔は赤くなってるんだろかなあ。

「あ、いや、別におかしいとか言ってるわけじゃなくて……その、意外だったからさ」

『孤高の撃墜王』とか呼ばれてるに、気になる人が居たってことに？」

「いや、まあ……、そうだな。……大学の人とか？」

「……ううん。大学の人じゃない。それに、高嶺君が知らない人だから」

「そうなのか」

「そ。というよりか、今はワタシの事じゃなくて、高嶺君の事でしょう？」

「ごめんごめん。四季さんにいるって知って驚きだったから……」

「それで？気になる子とか思い浮かんだりした？」

「うーん、気になる子、なあ……」

この様子だと、居ない……で良いのかな？やっぱり、澤田君が言っていたイベント？をしていかないと親密度って上がらないのかな？

「もし居るなら相談とか出来る限り協力もするから、頑張ってみて」

「そうだなあ……。ま、その時が来たらお願いするよ」

「てきとうだなあ……」

とまあ、今は本来の目的を思い出して貰って気に掛ける。これだけでも十分かな？後は明月さんの方に話をすれば行けるでしょ。

次の日の営業終了後、一緒にフロア掃除している明月さんに声をかける。

「明月さん、ちよつといい?」

「はい?なんでしよう」

「高嶺君のことでちよつと話があつて……」

「高嶺さんの?」

「うん。ほら、高嶺君つてこのお店で働いた最初の理由つて……ど、

……恋人を作つたりするためでしょ?」

「そうですね。童貞であることに未練を残されていたからですね」

……人が濁したのに、どうして堂々と言つちやうのかなあ。

「昨日までそのことをすっかり忘れていたらしいけどね……」

「それはなんとも、まあ……」

「試しに聞いてみたら何だか悩んでる様子だったし、明月さんから

聞いてもらえろ?」

「私からですか?」

「だって、担当でしょ?」

何の、とは口には出さないけど。

「そうですね。分かりました。一度お話を聞いてみます」

「あと、そろそろスマホ持った方が良いと思う」

「あゝ……すまほ、ですか……」

「閣下の写真を撮つたり、それをSNSに乗せたりするのを明月さ

んの方でも出来るようになった方が良いと思うけど?」

「それはそうなんですけどお……。使いこなせる自信が無くて

……」

「使つてみれば案外簡単だから心配しなくても平気。高嶺君の話を

聞くついでに、明月さんからもスマホの事を聞いてみたら?」

「んー……、そうですね。いつまでもナツメさんや愛衣さんに任

せつきりも良くないですし、一度聞いてみます」

「明日丁度定休日だし、一緒に買いに出掛けるとかしてみたら?高

嶺君なら快く引き受けるはずだから」

「ですね。と、なると……この後、高嶺さんのお話しを聞いてみま

す」

「うん、よろしく」

明月さんの方とも話をつけたので掃除を再開する。

これでは明月さんの方からスマホを買いたいって提案が出るはず。大丈夫、澤田君の時も同じやり方で実際買いに行ってるんだから。

そうになると、明日は焼肉かあ……。久々だし、ちよつと楽しみ。

明日の焼肉を楽しみに待つと共に、本来なら居たはずの1人が居ない事に寂しく思い、少し胸が締め付けられた。

お店を閉め、それぞれが帰路へ着いた。

「……………」

そのまま帰ろうかと考えたが、何だか寂しい気分…………。

「さっきの焼肉のことを考えちゃったからかな」

今後の事の確認もするために、進路を変更する。

「お邪魔しますつと」

自分の部屋へ帰らず、誰も居ない無人の部屋へ入る。

「二週間振り」

誰も居ない静かな部屋でベッドに寝転がる。

「さてと……………」

ベット横の棚に隠されている一冊の大学ノートを取り出す。

「えつと…………、今は、澤田君が書いてるので言う……………」

明月さんと高嶺君がスマホを買いに行った事で、始めに書かれていた共通ルートが終わり、明月さんの個別ルートに入った…………で良いんだよね？

「野中君の件が終われば明月さんのことを好きになるから…………そこからは流れに任せれば上手く行けるはず」

経過を何回か確認しておく必要があると思うけど、あまり余計なお節介はしない様にしておかないとね。

「それにしても…………凄いい書き込みようだなあ」

ノートを捲る。そこには共通ルートと書かれたページとは別に、個別ルートと書かれた欄があった。しかも、名前はお店で働いているメンバー。

「火打谷さん、墨染さん、涼音さんに、しかもワタシまで……………」

明月さんは勿論の事、それ以外の全員の名前と、似たようなフローチャートが書かれており、所々に重要と思われる書き込みと注意点が事細かく書かれていた。

「これを見る限り、共通ルートであるこの、選択肢で誰と恋愛に発展するのか決まる……って感じだし」

まるで、シミュレーションゲームの様だ。

「それに……」

最初のページの一番上には『喫茶ステラと死神の蝶』とタイトルが大きめに書かれている。

「うーん、澤田君の記憶では何だか、テレビ画面を見ている様なイメージだし……、未来を視るってこんな感じのイメージのかなあ？」

アニメ風に映ったお店と、そこに現れるワタシ達が話しているのを覗いて視ている……とでも言えば良いのだろうか？

それとも、まだ完全に澤田君の記憶をワタシ自身が思い出せていないのか。

「まあ、でも、今の時点でも十分過ぎるし、問題はないか」

気になれば、本人に直接聞けば良いんだから。

「んー……、少し、薄まってきたなあ」

ベットに敷かれている布団などに対してふと思う。

「掃除したり、ワタシが来ているのが原因だけだね……」

こうして、彼の事を考えながら横になっていると、安らぐと同時に、早く会いたい気持ちが強くなる。

「はあああー……」

完全に変態行為だとは自覚してはいるけど、途中から気にすること止めた。我慢は身体に毒。そうに決まってる。

「あの神様にも話はしてるし、森への確認も行ったから、蝶に関しては問題無しと」

以前に一度、澤田君を助ける為に少なくとも明月さんと同じ様な蝶が必要だと考え、森へ行った。けど、近づこうにも一定以上に進むことが出来なかった。おそらく、結界と思われるのが張ってあった。

実際に話を聞けば、蝶が外に出ない様に塞いでるとのこと。普通なら方向感覚を狂わせて入口へ戻す様な仕掛けらしいけど……。

その後、その蝶を使って澤田君を助けたいとお願いしてみると、意外とすんなり了承を貰えた。どうやら、向こう側も澤田君に戻って来て貰った方が都合が良いとか何とか。

一先ず、そちらは確約出来たので、先に高嶺君と明月さんの方を終わらせることにした。

「後、1か月かあ……」

こんなにも長く感じる日々は初めてかもしれない。勿論お店の事で忙しく、気が付けばあつという間に過ぎていた……なんて感覚もあるけど、ふと彼のことを思い出すと、その日までの残り時間がとても長く感じてしまう。

「早く、会いたいなあ……」

もはや、そう思ってしまうこの気持ちを、自分で止めることは出来なくなっていた。

「それで、好きな人って？ワタシも知ってる人？」

この日、丁度朝に高嶺君から、『好きな人が出来た。』と、ぽろっと溢したので、講義が終わった後に食堂で集まった。

「まあな」

「ふうん。なるほど。となると……明月さんか」

「気付いてたのか？」

「まあ、消去法で考えた結果かな」

「明月さんって、スマホを一緒に買いに行った子だよな？まあ、あれだけ可愛ければ……そういう気持ちにもなるよなあ」

「……………、…………ツツ！」

明月さんのことを思い出したのか、高嶺君が悶え始める。

「何を急に悶えてるんだよ」

「相手のことを考えたらなんかこう……胸がドキドキするんだよお」

「乙女か」

おっと、つい勢いでツツコんでしまった。

「気持ち悪いな、お前……」

高嶺君の隣に座ってる汐山君がドン引きしている。

「仕方ないだろ、こんな気持ちになるのは初めてなんだから……」

「だから乙女か」

「頬赤らめても可愛くねーぞ」

「自分が一番驚いてるよ。まさか漫画みたいに自分が抑えられなくなるなんて……。それだけ、本気の恋なんだと、思う……」

……その気持ちに、共感してしまう自分がいる。

「昂晴……。うわっ、なんか恥ずかしい事を言い出した！背中痒っ!？」

「うるさいっ」

「茶化さない。それだけ本人は本気ってことなんでしょ？それで？告白とかするの？」

「いや……、流石にそれは先走りし過ぎだと思うから」

「けどよ、何かしら動いた方がいいんじゃないのか？野中君も頑張ったんだぞ？」

「それは……そうだけど、今後のお店の営業にも無関係では無いし……」

「理解は出来るが、そこを気にしちや始まらんぞ？」

「そうだけど……」

「いきなり告白するよりも、まずは明月さんと二人で出掛けるとかしてみたらい？」

「それだ！クリスマスに出掛ければいいじゃん！」

「クリスマスは、限定商品のブッシュドノエルを販売するからなあ……」

「なら、明日は？明日は定休日だしお店を気にする必要ないじゃない？」

「ん、んんー……でもなあ」

「なんだよ？煮え切らないな」

「いや。いきなりそう言われても……プランとか立てる時間がないだろ？」

「クリスマスシーズンだから、イルミネーションを見るだけでもデートっぽくはなると思うけど」

「でもグダグダしない様に決めるべきことは決めておいた方が良さな。因みになんだが、四季さんは予定とかは入ってたりしてる？もしくは、どんなクリスマスを過ごしたい？女の子代表としてさ」

「ワタシ？うーん、ワタシも高嶺君と同じでお店に居るし……。それに人が多いからあまり出歩きたくないかなあ……？」

「あれ？予定とか入って無いの？ほら、彼氏さんとさ」

「彼氏？」

何の話だろうか？



「いや、先週から噂になっててさ。四季さんに恋人が居るって……なあ？」

「確かに少し噂になっている……かな？食堂で聞いたって」

「えっと……、どういった内容で……？」

「四季さんに、クリスマスのお誘いや付き合って欲しいって話をしたときに『どっちも先約があるから無理』って断られたって……」

「……あつ、ああー……あの時かあ」

思い出した。あのチャライ陽キャ男の時か……。

「……本当だったのか」

高嶺君は妙に納得した様な表情をしてるけど、その隣は驚愕の表情を浮かべている。

「あー……、なんて言うか、まだ正式では無いと言うか……。 (仮)みたいなの……？」

「なるほど、四季さんの方で審査中ということなのか……」

「どちらかと言うと、ワタシの方じゃなくて、向こうの返事待ち……になるのかなあ？」

「マジか……。一体どんな男なんだ……！四季さんの方を待たせるとか……!?!」

「それは……って、今はワタシの話じゃなくて高嶺君の話でしょ」

「昂晴のことよりも、そっちの方が気になる。どうやって四季さんを射止めたのか……」

「それはまた機会があれば話すから。今は話を戻す」

危ない危ない。つい勢いで惚気そうになってしまった……気を付けないと。

「そんじや、また何かあったらいつでも言えよ」

「ああ、ありがとな」

食堂での話し合いが終わり、高嶺君と一緒にお店へ向かう。

「それで、今の所何か思いついた？」

悩み気味な隣の高嶺君へ声をかける。

「いやー、今の所はまだハッキリとは……」

「そんな高嶺君へ、良い物を授けましょう」

「良い物……?」

「はい、これ」

バックからチケットを2枚取り出す。

「それって……近くの遊園地のチケット……、しかもプレミアム?」

「そ。これを高嶺君にあげるから、明月さんを誘ってみて」

「いや、それは四季さんのだろ? 流石にそれは……」

「気にしないで。特に使う予定は無いから」

「例の恋人と……って、もしかして……その予定が無くなったのか?」

「あー……まあ、そんな感じ?」

全然違うけど、そういつた方が都合が良いか。

「使おうかと思っただけど、必要無くなったから高嶺君にあげる」

「……良いのか?」

「このままだと持て余しそうだし、勿体ないからね。はい」

「……ありがとう。四季さん」

ワタシが渡したチケットを大事そうに受け取る。

「因みに、幾ら?」

「別に売りつけるつもりは無いけど……」

「いや、流石にその分のお金はちゃんと払わせて欲しい。と言っ  
ても、今は手持ちが心許ないから後にしてもらえると助かるのだけ  
ど……」

「それなら、高嶺君が大丈夫な時にでも渡して? 何時でも良いから」

「分かった。お金を下ろしたらすぐに連絡するよ」

「ん。お願い」

「……興味本位なんだが、四季さんが言ってた人ってどこで知り  
合ったんだ?」

「ん? どうしたの? 急に」

「いや、四季さんってあまり他の人と話したり遊んだりしてるイ  
メージが無いから気になってさ」

「どこで……そうだなあ……。カフェで？」

「ナンパされたつてことか？」

「ナンパじゃないけど……。まあ、色々とあって？」

「どこに惚れたんだ？何か切っ掛けでも？」

「それを聞いてどうするの……？」

「いや、男として少し参考に聞いておきたいなつて……」

「んー……。そうだなあ。どこなんだろ？普段は人を揶揄つて反応を楽しむけど、いざとなつたら頼りになるとこ……。とか？ああ見えて人の事しつかり見てたりするし……」

「やっぱり頼りになるのは、重要なのか」

「どうだろ？人によると思う。元々喫茶店で働いてたから色々と相談にも乗つてくれたりしてたしね」

「結構な経験者だったのか？」

「まあ、それなりに……。？あとは……。ワタシの事を助けたりしてくれたことに……。思い知らされた、みたいなの？」

「なんだが、紆余曲折あつたみたいだな」

「色々だね」

「それなら是非ともお礼をしておきたいな。お店の事でお世話になつたんだから」

「……うん、そうね。遠くない内に高嶺君にも紹介してあげる」

「それは楽しみだな」

「ま、高嶺君はそれよりも、そのチケットの件で明月さんをどう誘うかの方が先だけどね」

「そうなんだよなあ……。それが問題なんだよなあ」

「自力で頑張つてみて。どうしようも無かつたら助けてあげるから」

「その時はよろしくお願いします……」

「いやー、それにしても驚きましたねー……」

お店の片付けが終わり、明月さんを除いた女子メンバーで先に着替

えさせてもらった。

「ほんとだよねー。まさか昴君と栞那さんがあんな大声で……」  
横に居る火打谷さんと墨染さんが苦笑いしながら話し合う。内容は……先ほどフロアまで聞こえて来た二人の告白の件以外ありえないか。

「昴君があんな大声で叫ぶとはねえ……」

「こつちが気まずいですよねー……」

ワタシ達に堂々と知られてしまい、顔向けが出来ないとか何とかで今は高嶺君と一緒にフロアで待っている。

「でも、何となくお似合いというか、そうなってもおかしくない雰囲気はあった気がする」

「そう？ワタシは驚いたなあ……。昴君が栞那さんの事好きだったってのもそうだけど、あんな告白するとか」

「それだけ、本気だったってことでしょ。いいねえ、若いってのは……」

皆で話してるが、後に高嶺君も居るので程々にしておく。

「あ、そういえばナツメ先輩。少し前から気になっていたんですが……」

着替えが終わり、部屋から出ようとするのと火打谷さんから話かけられる。

「ん？どうしたの」

「昴君先輩の隣のロッカーって、誰か使用されてるんですか？人数に対して使用されてるの1個多くないですか？」

「……ああ、そのこと？」

「はい。特に意味は無いですけど不思議だなあって思ってた」

「ちよつとね。予定があるからキープしてるだけ」

「予定……？誰か新しい人でも来るんですか？」

「うん。あくまで予定だから気にしないで」

「へえー、そうなんですかつ。男性ですか？女性ですか？」

「一応、男性かな？と言つても、まだ確定じゃ無いから他言はしないでね」

「了解です！決まったら教えて下さいね？」

「ん。その時は連絡する」

「はいっ。それじゃあ、お疲れ様です」

「お疲れさま」

火打谷さんがお店から出て行くのを見送る。これでお店には高嶺君と明月さんだけになる。一応閣下も居るけど。

「……あれ？四季さん、まだ帰って無かったのか？」

少し待っていると、奥から高嶺君がやってくる。

「まあね。高嶺君を待ってた」

「俺を？」

「そ。無事明月さんと付き合えた事を祝っておこうかなって」

「あ、ああ。それか。無事成功出来たよ。ありがと、色々協力してくれて」

「ううん、好きでした事だから気にしなくていい。……これでようやく高嶺君もリア充になったウエイね？」

「なっ!?ち、違うんだ、それは……」

「ごめんごめん。陽キヤになったウエイ、こっちだった」

「いやっ、そう言う意味じゃ無いからなっ!？」

ナイスツツコミ。

「頼むから、それを持ち出すのは止めて下さい。黒歴史なんだよ……」

「分かった。今度は明月さんが居る時に言ってみるね」

「更に事態が悪化してるんですけど!？」

「だって、ほら。最初の時かなり爆笑してたじゃない？」

「それは、確かにそうだったが……」

「高嶺君は明月さんの笑ってる顔が見たいんじゃないの？」

「そういつた経緯での笑顔は勘弁願いたいなあ……」

「好きな人の笑顔なんだから、そこで受け入れられるかどうかで、男の度量が試されるかも」

「そんなことで俺の器を試したくないな」

「それは残念」

「つてか、本題は何なんだ？」

「本題？ううん、特には。一応本人の口から聞いておこうかなって思っただけ。後はついでに面白そうだから揶揄ったくらい」

「さようで。心配どうも」

「それじゃ、ワタシは先に帰ろっかな。高嶺君は、明月さんと今後の2人の事で話し合ったりするんでしょ？」

「まあな。この後時間作ってはいる」

「それなら、また明日。遅くならないようにね」

「ああ、お疲れ様」

「お疲れさま」

高嶺君と挨拶を済ませてお店を出る。

「ううう……寒いなあ……」

室内と外の温度差を感じ、手の平を擦り、口から息を吹きかける。

「はあく……つて、対した効果は無いけど」

無事に高嶺君の告白が成功した事に安心を覚えながら家へ向かう。

「今日が24日だから……、あと6日しかないのかあ」

改めて考えると、近い内に自分の隣から居なくなってしまうと分かっていくのに、それでも明月さんに告白を通した高嶺君は凄いと思うし、素直に尊敬出来る。普通、後の事を考えれば傷口が浅い内に身を引くと思うけど……。

「そういった所も含めて、諦めが悪いってことなのかもしれない」  
ワタシはどうだろ……？

以前の自分だったら、間違いなく引き下がると思う。けど、今は……多分だけど、高嶺君と同じ行動を取ってもおかしくは無い……かもしれない。それだけ、自分の中から出てくるこの気持ちを身体が制御出来る自信が無い。

「澤田君も、そんな状況でもワタシの事を受け入れてくれたし……」  
実際、次の日には永遠に別れるとなっても、ワタシの為に恋人になつて、体の関係まで……つて、あれはワタシが無理やり迫ったんだった。

いや、冷静になって考えたらほんとあの時の自分はどうかしてい

た。別に後悔とかがあったわけじゃないけど、いきなり過ぎでしょ。そりゃ澤田君も戸惑うわけだ。告白してそれを受け入れてもらって、即襲い掛かるって……とんでもないことをやってしまった。

「うわぁ……。言い訳出来ない位にすけべえだ……」

で、でも、記憶の中の澤田君は喜んでくれていたしっ？結果オーライで良いよね？罪悪感マシマシだったけど……。

「それに……気持ち、良かったし……。って、何を思い出してるのか」

あの宿での出来事を思い出してしまい、体温が上がる。

「……凄かったなあ」

あんな……わけなかんなくなつて、足腰に力が入らなくなるくらい良すぎるだなんて……。

「って、今はそれよりも今後の事を考えないとね」

ようやく最終局面に入ったのだから。

冬の夜道を、小さく微笑みながら家へ向かった。

—新訳—第36話：Pre-establi shed  
harmony

「さてと、無事ここまでキミの思惑通りに進める事が出来たね。よく出来たと褒めてあげよう」

澤田君の部屋でワタシの正面に座りながら、笑顔でこちらに称賛を送ってくる。それを見て隣の卯ノ花さんが深いため息を吐く。

「別に大したことじゃない。ワタシは彼のして来たことをなぞっただけだから」

「そうかもしれない。でも、それを成したのは間違いなくキミだからね。そこは勘違いしないように」

「……そうね」

記憶を持っていても、それを選んでここまで動いたのはワタシの意志。それについては確かに間違っではない。

「それで、このまま順調に過ごせばあの子は蝶に還って彼が奇跡を起こすことになるけど……、間違っただけを選ばないようにね？」

「大丈夫。過去に戻るのは高嶺君達3人だけ。ワタシはちゃんとここに残るつもり」

「それは僥倖。変な心配してごめんね？」

まあ、本音を言えば付いて行きたい気持ちがないわけではないけど……。

「折角ここまで無事に来たんだから、変な行動を取る気は無いから安心して」

「そっかそっか。なら僕からはこれ以上いう事は無いかな？キミの健闘を願ってるよ」

用件が済んだのか、テーブルに手を付いて立ち上がる。

「帰るのか？」

「そうだね。後はこの子に任せるよ」

「そうか。ならばさっさと出るとしよう。すまんの、急に押しかけ



て来て」

「ううん。そっちには色々と助けて貰ってるから」

「それじゃあ、僕らは帰るよ。今度会う時はあの子が人間に成った時かな?」

「そう……かも?」

「じゃあね」

こちらにひらひらと手を振りながら部屋を出て行き、その後を卯ノ花さんが続いて出て行った。

「……ふう」

未だに少し緊張してしまうけど、今回も何も起きずに終わった。ていうか、ワタシの様子を見て帰って行くのが大抵ではあるけど……。

「遂に、明日……かあ」

高嶺君と明月さんが付き合って、5日程過ぎた。今年最後の営業を終えて明日、高嶺君は明月さんと遊園地へ行くことになっている。

「何となく、明日が最後って察している雰囲気……だったし」

明月さんとの別れがそう遠く無いことは彼も感じているだろう。お店が終わった後に、明月さんからワタシに明日の午前に話したいとメッセージが来ていた。十中八九、お別れの挨拶だろう。

「全部、高嶺君の幸せに為に……か」

「……で、わざわざ何度もナツメの様子を見に来てる理由は何なのだ?そろそろ答えても良からう」

「ん?んん、これと言って深い意味は無いよ?ただ彼女の魂の状態を見ておきたかっただけさ」

「魂の?」

「そ。とても珍しい……と言っても良いくらいの現象だからね。血の繋がりも無い赤の他人同士、しかも男女での魂の共存。いや、結合、融合と言っても良い。非常に興味が惹かれるよ」

「そうかの?それを言ったら昂晴とやらにも同じ事が起きてるのではないのか?」

「あれとは全然違うね。あれは魂を分けた事で起きた一時的な現象、副産物みたいなものだよ。単なる夢だからね」

「でも、彼と彼女のは違う。異なる魂が混じってる。言わば1人の人間の体に2人分の人間が入ってるようなものだよ。けど、それが不思議とお互いを受け入れている。単純に魂の一部が零れた事による出来事なのか、はたまた別の要因なのか気にならない?」

「そう言われると、確かに気にはなる」

「もしかすると、愛の力って奴なのかもしれないしね」

「クサイ台詞じゃのう……」

「一概に馬鹿には出来ないからね。強い感情はそれだけ人を変えるのさ。キミも誰かを好きになれば分かることさ」

「妾が?面白い冗談じゃの」

「ははっ、そうかももしれないね。今更キミに神様を辞めてもらうのは僕としても勘弁してほしいし」

「……?妾が恋愛をするのと、神を辞めるのに何の関係があるのだ?」

「さあね。ありもしない可能性だし、気にしなくて良いよ」

「そうか?」

「それにしても、彼女が彼の存在した証拠を見つけたのはちよつと想定外だったな」

「白々しい。ナツメがあやつの部屋に入れるように鍵を開けたのを貴様じゃろう」

「確かにそれは僕。けど、あくまで切っ掛けを作る為に用意していただけさ。なのに……まさか彼の電化製品を彼女経由で買っていたとはねえ。澤田達也としての情報や痕跡は完全に消したと考えていたから少し失敗したって思ってるだけさ」

「結果的にナツメは思い出したのじゃから、失敗したとは思わないが……?」

「まあ、そうだけどさ。あくまで僕の矜持的な話さ。一応これでも偉い神だからね。お願いされた事を完璧に遂行し切れなかった。あくまで個人的な感想なのさ」

翌日、連絡を貰っていた通りにお店に行って明月さんと話をした。と言っても自分が居なくなる事と、その後の事についての話だったので前の世界とあまり違いは無かった。

「明月さん、最後に一つ聞いても良い？」

話したい事を終えて少し雑談をした後に、最後に一つ聞いてみた。

「はい？なんででしょうか」

「明月さんは、高嶺君と出会って、一緒に働いて、恋人関係になる事が出来て、幸せだった？」

「……そうですね。幸せでした。死神の仕事をしていて、今回の様に深く関わるという事はありませんでしたし……、沢山の事を体験することが出来ました。昴晴さんとお付き合いするのは意外も意外でしたけど……にひひ」

目を閉じて、これまでのことを振り返りながら少し恥ずかしそうに笑った。

「ナツメさんの夢を手伝う事から始まって、昴晴さんが来て、愛衣さんと希さんが来て、涼音さんが来て、皆でお店をオープンさせてお客さんを笑顔にさせる事が出来て……凄く楽しかったです」

「……うん、ワタシも楽しかった」

「最初は後ろ向きなナツメさんも、今ではきちんと前向きになって笑えるようになりましたしね」

「まあ、そうね。数ヶ月前のワタシとは大違いなのは自覚してる」

「お店の為にと様々な提案をされたり、もっと良くして行きたいって気持ちに凄く伝わっていましたよ」

「自分で言いだした夢だしね。それに、お店の事を完璧にこなして、問題無いってところを見せたかったから……」

「どなたかを招待されるのですか？」

「ちよっとね、今のお店を見せたい人が居るってだけだから。気にしないで」

「……分かりました」

今の言葉を聞いて、誰を想定したのだろうか？ 順当に行くのならワタシの両親とかだろうか？

「それじゃあ、ワタシはそろそろ帰ろうかな？ 高嶺君とのデート、楽しんで来て」

「はい。ありがとうございます」

「うん、湿っぽいのもなんだし……それじゃあね」

「はい。お元気で」

手を振りながらワタシを見送る明月さんに背を向けてお店を出る。

「……無理に笑っちゃって」

澤田君の記憶があるからか、明月さんの笑顔を見て違和感しか感じなかった。大人ぶってるってことなのだろう。最後まで笑顔でいるって約束を守らせる為に……。

「後は、3人が帰って来てからかな？」

過去に帰り、奥の休憩室で2人がキスをして……。最初のあの日に高嶺君が明月さんのマントを被って寝ていた原因がそれだと分かったと同時に、明月さんの言動も理解出来た。確かに高嶺君を回収しに行こうとしたらお店に居て、マントが無くなってるって混乱するよね。

澤田君は、2人が確実に接触する為に一緒に過去に飛んで、自分の目の前でキスをさせていたけど、この世界ではその必要は無いから過去に行くのは3人で変わらない。

……もし、ワタシも一緒に飛べば、あの日のベンチに座ってる澤田君に会えるのでは？とも考えた。

あの日に消えようとしている彼を止めれば、また一緒にお店で働いていけるんじゃないかって……。けど、彼が居ること自体が負を呼ぶ可能性がある以上、また前の世界の様な事が起きるかもしれない。だから澤田君は消えることを選んだんだから。

「……そこが、唯一の問題点……なんだよね」

一応、策はあるのはあると言ってるけど……本当に上手く行くかは分からないしぶっつけ本番。

「それでも、やるしかないよね」

弱気でいたら成功する物もしなくなるし、必ず成功させる。その位の気持ちで行かないと。

「……よし、頑張ろ」

気合を入れ直してから、帰路へ着いた。

次の日、男性物の服やら一式を買いにショッピングモールへ来た帰りに高嶺君と遭遇をしたけど、案の定表情だけでは無く、纏う雰囲気までもが沈んでいた。

「高嶺君は……何か買い物に？」

「ああ、コーヒー豆を買おうかと思つてさ。お店のだとミカドに横領扱いされるからな」

「コーヒーか……。未だに良さが分からないなあ。やっぱりどう考えても人間にコーヒーの苦みなんて必要ない味なはずなのに」

澤田君の記憶で味わっていたのを見てから、一度手を出して見たけどどうやっても美味しいとは思えなかった。

「コーヒーだけじゃなくて、ピーマンもだろ？」

「うるさいなー。分かってますよー、苦手だつてことくらい」

人の記憶や体験を持つても、そう簡単に克服が出来るなんてことはないのだろう。

「ちなみに四季さんは、どの豆を買えば良いと思う？」

「飲めないワタシにそれを聞きます？」

「ほら、話の流れ的にさ」

「そうね……。やっぱり、高嶺君が今まで一番美味しいと感じた豆を買うとかが良いんじゃない？」

ブルーマウンテン、とかね。

「そうだな……。やっぱりブルマン、かな？」

「ああ。あの高いやつ」

「やっぱり味が違うんだよ」

それはきつと、値段以外にも美味しく感じた要素があると思うけどね。

「なら、それにしたら？ちよつとお高いとは思うけど、たまには良いと思うし」

「……そうだな。これぐらいの贅沢、たまにはいいよな」

「そうそう。ならワタシもたまには、ちよつとお高い紅茶の茶葉でも買ってみようかな？」

確か……駅近くにあったお店だったっけ？あと焼き菓子も。炬燵は……流石に止めておこう。

「それじゃあ、俺はそろそろ行くよ。また来年からよろしく」

「そうね。来年もよろしくね」

そのままコーヒーのお店へと向かう高嶺君を見送る。

『良いお年を』とか言った方が良いかと思っただけど、今の彼のそう言うのは流石に憚れると思つて止めて置いた。

「つと、まだ買う物があるから急がないと……」

服は一通り買ったけど、最後にもう一つだけ買っておかないといけない物がある。

「色は……同じので良いかな？良いセンスって思つてくれてたみたいだし」

それに、あの時は気づかなかつただけど……、ワタシの瞳の色と同じだつて気に入ってくれたから。

必要な物を買ひ揃えてから一旦自分の部屋へ戻り、荷物を置いて一休憩をしつつ日も暮れ始めて来たので高嶺君のマンションへ向かった。

澤田君が見張っていた時と同じ場所に腰を下ろす。コンクリートのひんやりとした感触に一瞬体を強張らせた。

「んー……、暫くはここで待機かな」

スマホを取り出して時間を確認する。記憶にある時間まで20分程余りはあるけど、遅くなつて危なくなるよりは良い。

無事に部屋から出てくるかの心配で少し緊張しつつも大丈夫と自分に言い聞かせて待っていると、マンションの入り口からお店の方へ

走って行く人が見えた。

「あつ……高嶺君」

顔は見えなかったけど、走っている直ぐ後ろに飛んでいる蝶が見えた。高嶺君で間違い無いだろう。

「まあ、こんなタイミングで蝶を連れてお店の方へ行く人なんて1人しかいないよね」

問題無く物事が進んだ事に安堵しながら立ち上がって歩き出す。

「……？」

お店とは逆の方角へ歩いていると、前方に見覚えのある人が立っていた。

「上手くいけたかの？」

卯ノ花さん……。わざわざ見に来たのだろうか？

「今の所は何とか行けた……かな？この後がどうなるか見届けられないのが心配なのはあるけどね」

「そこは仕方あるまい。戻って来たら妾がこっそり確認しといてやろう」

「ありがとうございます。それならワタシは明日に備えて大人しく帰ろうかな」

「うむ。お主にとっての本当の勝負は明日以降になる。今日はゆつくりと休んでおくと良い。そうじゃな……今日中にこちらから接触が無ければ問題無いと思ってくれてよい」

「わざわざそれを伝えるに……？」

「それもあるが、その……なんじゃ。先に謝っておこうかと思つてな……」

ワタシに若干の申し訳なさを感じるような苦笑いを浮かべる。

「え、何かあったの……？」

「あつたというか、これからあると言うか……」

「これから……？何があるの？」

「あー……、そのじゃな、上役のあやつが迷惑を掛けると思うからの。心構えくらいはさせておこうかなとな」

なんだか言い辛そうだけど、なんだろ。そんなに大変な事なの？

「妾の口からは言えんが、面倒事が来ると思っておいてくれ」

「え、あ、うん。よく分からないけど、分かった」

口止めされてたり……してるのだろうか？まあ、あの上の神様のことだし色々面倒事を仕掛けて来たりしても不思議じゃない……かも？

「それじゃあ、妾も行くでしょう。またの」

「う、うん」

こちらを一瞥してからくるりと身を返して去って行った。

「……………」

このまますんなり行かないと暗に言っていたのだろう。

でも、彼に会う為に乗り越えなければいけない壁があるのなら、どんな手を使っても越えて見せる。

「二体、どんな面倒事が起こるんだろ……」

街灯に照らされてる夜道を歩きながら、何が来るのかを想像しながら帰路へ着いた。

次の日、アラームの音に目を覚まされながらも、ゆっくりと体を起こす。

「っん……、ふぁ……」

腕を大きく伸ばしながらあくびをしてスマホを手取る。

「うん。特に問題は無さそう」

昨日は遅くまで起きていたから少し寝不足なのはあるけど、体調面は大丈夫そう。

「卯ノ花さんも来なかったし、2人の方は問題は無いってことで良いのかな」

一応、直接確かめる為にこの後お店に寄ることにしているけどね。ベットから起き上がり、身支度を済ませ朝食を食べてから家を出る。

「行ってきます」

誰かに対して言ったわけでは無いけど、玄関を出る前にそう呟い



た。

言うならば、これからの自分に向けての決意に近いものかもしれない。

室内との温度差に体を小さくさせながらお店へ着くと、入口近くに白い服装をしている少女が居た。

こちらに気づくと、怪しそうなニコニコとした笑顔を浮かべて声を掛けて来た。

「やあやあ、グッドモーニング。今日も良い朝だねえ」

その声を聞いて今が誰なのかすぐに分かった。

「おやあ？何だかしかめっ面に見えるけど、何か嫌な事でもあったのかい？」

「今の所は特に無い……かな？昨日は特に何事も無く終えたの？」

高嶺君達が戻って来たであろう場所へ視線を移す。

「心配しなくても大丈夫。キミの望んだ通りに進んだと見て良いよ」

「そう。良かった」

大丈夫だとは思っていたけど、その言葉を聞いて安堵した。

「ま、僕がちよつと手は加えたけどね」

何だか、嫌な言葉が聞こえた気がした。

「手を加えた……？」

「そうそう。キミへのちよつとした褒美とでも言えば良いのかな？」

彼ら3人が味方になる事が出来るおまじないさ」

ワタシへの褒美？高嶺君達が協力してくれるようになってことなのだろうか？

「彼らには澤田達也が居た前の世界の記憶を持って貰っているってことさ」

「澤田君が居た世界の……記憶？えっ、どういうこと？」

「単純な話さ。今このお店に居る3人は、彼が居た世界の3人ってこと。だから澤田達也という存在を知っている」

……何をしたのかよく分からないけど、内容だけを信じれば今お店に居る高嶺君達は澤田君の事を覚えているってことなのだろう。

「ま、信じるかどうかはキミに任せるよ。僕はこれから彼らに話があるから上がらせてもらおうよ」

そう言うと、お店の入口のドアを開けて中へ入る。それに続いて中へ入る。何を話すの难道？

というか、神様つて基本不干渉つて覚えてるけど、こんなに関わつて来て良いの难道か？ほんと今更だけど。

「それじゃあ、先に行かせてもらおうよ。僕の用が済んだらここに向かわせるから大人しく座っておいてね」

「……分かった」

ワタシが椅子に座るのを見てそのまま奥へと向かって行った。

「んー……」

さつき言つてた話……どうして3人にも前の世界の記憶を持たせたの难道？ワタシへの褒美つて言つてたけど……。

卯ノ花さんが忠告してくれた面倒事への前置き？いやでも、ワタシ的には助かる事になりそうだしなあ……。もっと変な事が起こると思つてたけど。

「何かの実験的な……？」

前にワタシへ手を貸すのはちよつとしたお試的な意味があるつて言つてたし、そういう何かをしていたとか？

「それとも……」

ほんとに特に意味は無く、唯々ご褒美だった……。うーん、ちよつと考えにくいなあ。

澤田君の記憶にあるあの偉い神様は中々良い性格をしているつてことだし、何か理由があるはず。

「とまあ、考えても仕方ないかな」

それより今は、この後の事だ。3人が澤田君の事を覚えてるのなら少し予定を変えても良いかもしれない。

高嶺君と明月さんが戻つて来たのを確認次第、あの森へ神様と卯ノ花さん含めた3人で向かつて、結界の中に入れて貰い澤田君を呼び起こす。その予定だったけど、高嶺君達も一緒の方が良いと思う。きつと2人も一緒に行くつて言うと思うし……。

色々説明は必要になると思う。それを知った明月さんは感謝とは別に怒るだろうなあ。うん、澤田君には明月さんからの説教を沢山受けて貰おう。

「ふふっ……」

正座しながらシユンとして怒られる彼を想像してしまった。

それなら、第一声は3人の反応を確かめる言葉を使わないとね。澤田君の名前は勿論だけど、今の状況を把握出来るかどうかとも確かめておきたいし……。

「……ちよつとカツコつけすぎてるかも」

頭の中に思いついた言葉に対して多少の羞恥心を覚える。

「でもまあ……そのくらいの台詞の方が雰囲気が出ると……思うし」

あの神様がどんな話をしてるのか知らないけど、多分ワタシが澤田君の記憶を持つてるとは思って無いだろうし……サプライズみたいな感じが出て良いかも。

雰囲気を出すための言葉は大事。ワタシの記憶の澤田君もそう言ってる。うん。

責任の半分をここには居ない彼に押し付けながらも最初の言葉を決める。

少しドキドキしながら待っていると、奥からこちらに向かって来る足音が聞こえて来た。

「……え？」

フロアに出て来た明月さんが、ワタシを見て驚き様な表情と声を上げる。

「ああ、やつと来た。3人ちゃんと揃ってる……。さてと、それじゃあ早速で悪いけど、これからの事について話し合いを始めましょう？」

驚いたままワタシを見ているの対して真っ直ぐ視線をぶつける。

「彼……澤田君を救う物語を」

「と、ここまでがあの日から今日までの出来事ってことなんだけど……」

フロアの席に4人で座り、ワタシの方から3人に今日までのこと話した。

「えっと、その……お話は分かりましたが、少し頭の整理が追いついていないと思いますか……」

次から次へと話が出て来た為、正面に座ってる明月さんが困った様に笑う。その隣に座ってる高嶺君も同じ様な表情をしていた。

「二応、ワタシ達も両方の記憶を持つてはいますが、これは……流石に情報過多かと」

「澤田達也の記憶を持っており、更に魂が混ざり合ってるなど……」「つまりは、四季さんは澤田さんがしていた事をしてきたって解釈で良いのか?」

「うん。そう思って貰って大丈夫。澤田君が前の世界でしてきたのを代わり……とは言えないけど、ワタシがしてきた」

「そうか……。確かに四季さんから俺に話しかけて来た時が多々あったな」

自分の記憶を照らし合わせるのか、高嶺君が考えるように顎に指を当てながら目を閉じた。

「個人的に聞きたい事やツツコミたい事が山ほどありますが……一旦それは置いておきます。ナツメさん、先に確認したいのですが、今の話から……澤田さんを連れ戻す手立てがある。で良いのでしょうか?」

「二応ね。そこにいる神様の手を借りる必要があるけどね」

カウンター席からワタシ達の話面白そうに聞いている神様に視線を向ける……が、只々ニヤニヤとこちらを見ているだけだった。

「その、具体的にはどの様な……?」

「明月さんと閣下が初めて澤田君と会った森って覚えてる?」

「え？あ、ええ……勿論覚えてますが」

「その場所に大量の蝶達が居るから、明月さんにした方法と同じやり方でもう一度澤田君を連れ戻すつもり」

「私と同じ方法で……。なるほど、澤田さんがどちらからあの数の蝶を集められたのか不思議でしたが、その場所からでしたか……」

「そう。今は蝶が外に漏れ出ない様に結界を張ってもらってるからどこかに行く心配は無いと思う」

「結界が……？」

「そ、今の状態では中に入れそうに無いから近くまで行ってから解いてもらう予定」

「……分かりました。既に方法は考えられてるのでしたらこちらとしても安心しました」

「一応聞いておくけど……3人も一緒に来るで良い？」

「当然だな。ここまで聞いて大人しく待っている訳にかん」

「そうですね。あまり力になれるとは思いませんがナツメさん1人だけ行かせる選択肢はありませんし……良いですよね？」

「ああ、俺も栞那と同意見だ。せめて迎えに行くくらいはしておきたいもんな」

「うん、分かった。それじゃあ明月さん達も一緒でことさ」

話が一段落し、カウンターでこちらを見ている神様に視線を向ける。

「ん？もう話は終わりで良いのかい？」

「ええ、情報の共有は済んだから大丈夫」

「そっかそっか。それじゃあ僕から情報の修正をしておこうかな？」

「修正……？」

「そう。間違つて認識している考えを正そうってことさ」

面白そうな物でも見つけた様な表情でこちらを見ているけど……嫌な予感しかしない。

「二つ、僕は確かにキミに協力すると言ったね。こちらとしても彼に戻って来て貰った方が都合が良い。だからほんの少し手を貸した

……これは認めよう。けど、結界を解く事は許可出来ないね」  
「……え？」

「うーん、やっぱりそう思っていたみたいだねえ。話を聞いているとまるで僕がああ場所に掛けてある結界を解いてくれる。そんな風に言っている様に聞こえたからさ。確認して見て正解だったよお」

「そ、そうじゃないってこと？」

「当たり前じゃないか。そもそも、僕が一言でも言ったんかい？『時が来たらああ場所の結界を解いてあげる』だなんて話を」

「そんなの言っただにー」

いや、言っていない。確かに言っていない。あくまで澤田君が戻ってくるためにワタシに手を貸すとしたか……。

「っ、けどっ！澤田君を助ける為に手を貸すって話だったはず。なら、結界を解くのに手も貸す位しても……」

「勘違いしてもらっても困るけど、本来僕のような存在が手を貸してあげること自体が間違ってるんだよ。今までが特例も良いと……」

「だけどー……ここまで来てー」

「これまではキミの魂の負担具合と、経過観察という口実があったから何度も来れたのさ。けど、これ以上僕が出てくる必要も無さそうだからね」

「んん、キミには申し訳ないと思うけど、これは神として仕方ない事なんだ。だから僕がこれ以上何かしてあげるつもりも無いから、残りは自分達だけで頑張ってねえ」

「ちよ、ちよつと……！」

こちらの制止を聞かずヒラヒラと手を振りながらお店を出て行った。

呆然としているワタシに明月さんが声をかける。

「ナ、ナツメさん……」

「どうするのだ。神が力を貸してくれないとなると結界の方の解決が……」

「ミカドの方から手を貸してくれってお願いとか出来ないのか？」

「無茶を言うな。それに、さっきも言っていたが……本来人に力を

貸すなど異例中の異例なのだ」

「ちよつと待つて、他に何かないか考えるから……」

澤田君の言っていた通り、最後の最後で嫌がらせを仕掛けてくる性格みたい。けど、ここまで来て諦める訳にはいかない。

それにしても、どうしてこのタイミングで結界の事を話したんだろう。ワタシに告げるタイミングは前にもあつたはず……。

「何か、意味が……？」

額に手を当てて考える。

このタイミングに意味が……？ 今日になつて何か変わった？ となると……お店に入る前に自分が少し手を加えたつて話と何か関係があるの？

明月さん達に記憶が戻った事が神様が手伝わなくなった原因？

『これ以上僕が出てくる必要も無さそうだからね』

自分が居なくても解決が可能……？ つて意味を含んでいると見て良いんだろうか。

考えなくちゃ。向こうも澤田君が助からないのは嫌なはず。それでも手を貸さないととなると、現状の手で何とか出来るつて事だと仮定して……。

澤田君の記憶でも、あの神様は人を揶揄うのは好きでもちやんとヒントや手を貸してくれていた。なら何か解決する道があるはず。

問題はあの森の結界をどうにかしないといけない……。どうにかして結界を無効化して……。

「……あつ、もしかして」

「ナツメさん？ 何か思いついたのですか？」

「え、あ、うん。ちょうど明月さんに確認しておきたい事があるの」

「私にですか？ 为什么呢？」

「明月さんつて結界張れたりしたよね？ ほら、澤田君と戦つた時みたいに」

「え？ あ、ああ……あの時ですか。すみません、今は死神では無くて人なので……」

「人の状態でもあの鎌が扱えるから、もしかしたらつて思つたけど

無理そう?」

「え?どういう意味ですか?死神じゃなくても使えるのですか?」  
答えを知っていると思われる閣下に視線が集まる。

「可能だな。あれは人が死神かではなく、使い手が重要だからな。  
今の栞那にも問題無く扱える」

「そ、そうだったのですか……」

「二応、疑問に思っている結界の方も使う事は可能だ。多少我輩も  
サポートはするけどな」

「蝶をその場に留める事は可能ってことで良いの?」

「問題ない。行使可能だ」

「それならまだ可能性はあるかも……」

「嫌な予感しかないのだが……何をする気だ?」

「ううん、まだ確証は無いから実際に現場に向かいたいんだけど  
……閣下や明月さんなら辿り着けると思うし」

「人払いの件か。確かに吾輩や栞那なら効果は無いだろうな」

「やっぱり。ならその先も大丈夫かも」

支度を済ませ、駅から電車に乗って目的の森までやって来た。

「ここから少し歩くことになるけど、大丈夫?」

「我輩たちの事は気にするな。高嶺昂晴も栞那もこの位平気だろう  
?」

「俺は特に何とも……」

「私の方もお気になさらず」

「ん、了解。それじゃあ途中までワタシが前を歩くね」

3人を引き連れて森の中へと歩みを進める。暫く歩くと、不意に変  
な感覚に包まれる。

「……多分、この先に結界があると思う」

「良く気付いたな。本来人には感知出来ぬと思うのだが……」

「それはきつと、ワタシじゃなくて彼の魂があるからだと思う」

「澤田達也の魂か……。それなら納得だな」



「では、ここからは私が先頭を歩きます。はぐれない様にしっかりと後を付いて来て下さいね?」

宙から鎌を出現させた明月さんと入れ替わり、距離を空けないように後ろを追っていく。

「なあ、四季さん」

隣を歩く高嶺君が声をかけてくる。

「ん?なに?」

「四季さんが前に言ってた、その内俺に会わせる人……あれって澤田さんの事だったのか?」

「……うん、澤田君のことだった」

「なるほどな……、なんか色々と納得出来た」

何か合致したのか。納得するようにうんうんと頷いている。

「それなら、尚更絶対に助けないといけないな」

「ええ、必ず」

「皆さん、着きました。恐らくここが結界との境界です」

前へ視線を向ける明月さんにつられて前を見るが、これと言って特に見えない。

「それで、ナツメさん……案と言うのは?」

「私はこの先に行きたいけど、この結界が邪魔してる。だから、一度この結界を壊して中に入ったら明月さんにもう一度張り直して貰うって考えただけ……可能?」

「ええっ!?!結界を……?」

「無理そうかな?」

「張るのなら平気ですが、神様が張られている物を私が壊すだなんて……。そもそも私で可能かどうか……」

「取り敢えず、一度試してみてくれない?きつと大丈夫だから」

「えっと……、はい、わかりました。見るだけ見てみますね」

不安そうな表情で恐る恐る前へ手を伸ばす。

「えー……つと、あれ?この結界……」

「どう?行けそう?」

「あつ、はい。なんか行けそうですね。というよりか……かなり弱

い結界を張っている様です。これなら私でも大丈夫ですが……」

「良かった。これで駄目だったらあの神様に文句言わないといけないとこだった」

今頃ワタシ達が自分の思惑通りに事を進めてるのを見て愉快そうに笑ってるんだろなあ……。

「それに、この規模でしたら予め私の上から覆えば蝶達も逃げ出す心配も無さそうです」

「……うむ、わざわざ神がこの程度の結界で維持しているのは確かに不自然だな。それに、これからそれを破壊しようとしているのに止めに入ってくる気配もない。本当に織り込み済みという事なのか？」

「ミカドさん、どうしましょうか……？」

「どの道、ここまで来て引き返す選択肢などありえんからな。何かあれば責任は我輩が取ろう。葉那、始めてくれ」

「……分かりました。では、行きますね？」

すると、明月さんが静かに声を発する。

聞いた事のない言語……結界の為の呪文みたいなものだろうか？

「……はい、これで大丈夫です。……大丈夫ですよ？」

「そう心配そうにこっちを見るでない。大丈夫だ」

「だって、本当に行けるか不安でしたし……。でも、何事も無く出来て安心しました」

「では、次に移るぞ？」

「……はい。結界の破壊、ですね」

今度は手を前に突き出し、ゆっくりと息を吸う。

「……ッ！」

力を込めるように息を吐いて目を開く。すると、周囲を覆っていた何かが無くなった気がした。

「これで一応は無くなりましたが……、本当に良かったのでしょうか？」

「ふむ、何かが起こるのなら今の時点で動きがあると考えられるが……特に無さそうだな」

「それなら良いのですが……。ナツメさん、取りあえず結界の方は

問題無く済みました」

「うん。ありがとね。これでようやく……あの場所に行ける」  
意を決して前を歩く。少し歩くと周囲に蝶が飛んでいるのが見え始める。

「こんなに多くの蝶達がここから発生していたのですね……」

先に進むたびに増えて行く蝶を見て明月さんが驚きの声をあげる。

「多分、目的地は目の前だと思う」

木々を抜け、少し開けた場所に出る。するとそこには、前の世界で見た時以上の蝶達が飛んでいた。

「これらが全て、澤田達也が原因だと言うのか……？」

「どうでしょうか……。ですが、ここに蝶を発生させる何かがあるのは間違いないですね」

「ワタシが知っている話だと、元々澤田君が居た世界とこちらの世界を繋ぐ門？みたいなのがあって、それを通してこちらに流れて来てしまってるらしいけど……」

「奴が居た世界からだ……!?!」

「これだけの蝶が流れてきているとなると……、澤田さんが居られた世界で一体何が起きていますか……？」

「それについては結局分からず仕舞いみたい。良くない事が起きてるのは確かだけど……」

それよりも今は……。

「ようやく……ようやくここまで来れた。後は、彼を呼び戻すだけ……」

あの日、澤田君が生まれた場所まで向かい、手を前へ出す。

「それじゃあ、残りはお願いね」

呼びかけるように声を出すと、手の平から1頭の蝶が出てくる。

その蝶がその場をひらひらと飛ぶと、周囲に居る蝶達が集まり始める。

「蝶達が……集まってる……？」

「四季ナツメから出て来た蝶に呼び寄せられているのか？」

その光景に驚きを隠せない様子。意志を持つ蝶に呼び寄せられる

……だっけ？

すると、ワタシ達の周りを飛んでいた全ての蝶が、一斉に目の前の蝶へ向かって集まり出した。

—新訳—第38話：過去を旅する者へ

「……んん、っ、んあ……」

耳から入って来るアラームの音に目を覚ます。

「あー……、朝か」

体を起こして目覚ましのアラームを止める。

「つと、起きて朝食に向かわないとな」

ベットから出て体を伸ばし、カーテンを開ける。夏が終わり、秋へ近づいている為日に日に太陽の位置が変わってるように思える。

「あら、おはよう」

「おつ、起きて来たか。朝食はもう出来てるぞ」

「おはよー」

二階の部屋から降りてリビングへ出ると、3人分の朝食がテーブルに並べられており、父が新聞を読みながら既に座っており、キッチンの方で母がまだ何か準備をしていた。

「もうちよつと待ってね、こっちももう少しで終わるから」

「その位全然待つから急がなくても大丈夫」

「達也、そのリモコンを取ってくれ」

「これ？はい」

「サンキュ。朝の占いがそろそろ始まるからな」

「いや、いい歳したおっさんが朝の占いを信じるとかどうなの？」

「甘いな。いつまでも少年の心を持つことは大事だぞ？若さの秘訣だ」

「いやー、それは幼稚って言うのが正しいかと思うのだが……？」

「この人は昔からそういうのを樂しめる人間だから諦めなさい」

父親の嫌な一面に呆れていると、用が済んだのかテーブルの席に3人が揃った。

「おつし、んじやいただきます！」

「いただきますーす」

「はい、召し上がれ」

今日の朝食のメニューは白米に味噌汁、目玉焼きとベーコン、サラダも付いていた。

「二応トーストも作れるからそっちが良かった言ってるね？」  
家族で食卓を囲み、朝食を食べ始める。

「どうかしら、今日の朝食は？」

食べ進めている俺に味の評価を聞いてくる。

「いつも通りの美味しさと安定した朝食だと思う」

「そう、なら良かった」

俺が食べてる姿を嬉しそうに見ている。

「いやいや、俺の食べてる姿を見るより、そっちも食べないのか？」

「あら、そうだったわね」

「俺も当然、美味しいと思ってるからなっ！」

「はいはい、いつも美味しそうに食べてくれてありがとね」

「あれ、若干俺には冷たくないか？」

「気のせいでしょ。ねー？達也？」

「……ノーコメントで」

「おいっ息子！同じ男だろ!?父の味方をしてくれないのかっ」

「相変わらず馬鹿ね、達也は私の味方に決まってるでしょ？」

「あー……俺は平等な人間だから」

「このヘタレめ」

父親からの訴えをスルーして飯を食べ進めた。

「それじゃあ、私はもう出るから最後に出る人はカギ閉めお願いね？」

「了解、いつてらっしやい」

病院勤めの為か、俺たちより一歩早めに家を出て行く。

「達也ー、そっちは何時からだ？」

「んー？今日は昼から入ってるから俺が一番最後だと思う」

「おっけー。俺ももう少ししたら出るから後はよろしく頼む」

「あいよ」

スマホを弄りながらきてきとうに返事をする。昼まで何して時間を潰そうか……。

部屋に戻り動画サイトを見てみると、玄関の方で扉が開く音がした。多分仕事に行っただろう。

「どうせ時間があるなら、何かゲームでもしようかね……」

パソコンを起動し、ゲームサイトや購入済みの作品を見て回る。

「んー……買ってるのは大体夏で終わらせているしなあ。新しく何か買うか？」

机に肘を付き、顎を寄せながら怠惰的に閲覧していく。すると、手元に置いてあるスマホから着信が鳴る。

「んあ？誰だ……？」

手に取って画面を見ると、そこには働き先である喫茶店の先輩からの電話であった。

「はいー、澤田ですがどうかしましたか？」

「あつ、達也くん？ごめんね！急に電話してっ」

「いえ、出勤まで暇だったので大丈夫ですよ？」

「ほんと？申し訳ないんだけど、今から出る事って可能？」

「今からですか？まあ平気ですが何かあったんですか？」

「ちよつとマスターの方が急用で外す時間が出来ちゃってさー、私だけだと不安だし手伝ってほしくて……」

「ああー……そういうことですか。全然良いですよ。それならこれから準備して向かいますね」

「ごめんっ！ほつんと助かるっ！後でなんか奢るからね！」

「別に美咲さんが謝ることじゃありませんし、突発的に起こるのは仕方ないですよ」

申し訳なきように謝っている電話の相手は山吹美咲さんやまぶき みさき。お店で共に働いている先輩である。

「それじゃあ、すぐに向かいますのでまた後で」

「うん、ありがとね。急なお願い聞いてくれて……また後で！」

電話を切って立ち上がる。

……ま、特にすることも無かったし、仕事に精でも出しますか。

服を着替え身支度を整えて家を出る。

「そろそろ服装を変えるのも考えないといけないかもな」

夏が終わり、日によって少し肌寒く感じてくる季節になって来ている。半袖だけでは心もとないかもしれない。

電車に乗り数駅隣で降りて働いている店に向かう。

「早く来たつもりだけど、大丈夫かね」

駅から徒歩10分程の場所に看板を見つめる。叔父がやってる純喫茶『Mistletoe』だ。

俺が高校の時からバイトで入っていたが、特に辞める理由も無いのでそのまま続けている。

従業員用の入口から中へ入ると、丁度叔父……この店のマスターと出くわす。

「おはようございます」

「達也か、すまん。出てくるのを頼んで」

「特に用とかも無かったんで良いですけど、何かあったんですか？」

「ちよつと急な予定が入ってな。夕方には戻るつもりだからそれまで山吹君と2人で頼みたい」

「分かりました。俺は明日休みだし多少残っても大丈夫なんで安心して下さい」

「すまん。話は全部彼女に話してるから何かあれば聞いてくれ」

「了解です」

お店を出て行く叔父を見送って休憩室に入る。

「おお、来たね！救世主っ！待ってました！」

中から元気よく出迎えてくれたのがさつき電話を掛けて来た美咲さん。

「澤田達也、召喚に応じ、参上いたしました。何なりとご命令を」

「よつ、ナイスサーヴァントツ！性格的にアサシンかな！」

なんだか失礼な事を言われた気がしたが、ここは深く突っ込まないでおこう。

「それで、何か俺にして欲しい事とかあるんですか？」

「基本的にいつもと変わらないかな？珈琲とかの飲み物は私で淹れ



るから、料理面を担当してほしい。まあ、ピーク時の保険って感じではない！」

「お任せを。と言っても、普段常連さんしか来ないし、滅多に忙しくはならないと思いますけどね」

「はは……まあね。マスターのお店はそういうコンセプトだし、店名からして心を休める場所にしたいんだと思う」

この店のマスター、門叶とかない莊周そうしゅうである叔父の店にはあまり多くの客は来ない。普段来る常連と、ちよくちよく見かける新規の人くらいである。たまに大丈夫かと心配する時もあるが、特に問題無く回せているらしい。

「私がこのお店を選んだのも、あまり忙しくなさそうって理由が大きいんだけどね」

「午前中に2人、昼に1人から2人、その後疎らって感じでもんね……」

「常連さんと、たまに突如現れる新規さんって感じだよなーって、そろそろ1人目が来る時間だし、私は先に出てくるから着替えちゃって」

「また前みたいに覗かないで下さいよ?」

「いやー、だってさあ? 20代前半の若い男の子の体をタダで見れる機会ってそうそうないしさー、良い刺激になると思って……ね?」

「なんの刺激か知らないですけど、覗きは軽犯罪ですよ。プライバシーの侵害です」

「いいじゃんよー、減るもんじゃないしさ。それにおなごに見られてそつちも興奮するでしょ?」

「してるのは美咲さんだけかと……」

「ま。それは否定しないけどねーんじゃお先っ」

都合が悪くなったからか、手を上げて去って行った。

「……着替えるか」

「結果論だけどさー……、わざわざ来てもらう必要なかったよねえ」

「ですねー……、半分は備品の確認や掃除でしたし……」

「なんかごめんね？無駄足になっちゃって」

「別気にしてませんよ。家に居ても特にすることありませんでしたし」

「若いのに枯れてるのう……キミぐらいの歳ならやりたい事幾らでもあるでしょ」

「そっちだって大して変わらないでしょう」

「数歳、されど数歳……。女の数年は残酷よ……」

何だか遠い目をして明後日の方向を見つめる。しらんがな。

「そんじゃ休日の日は何してんのさ。明日休みじゃん？」

「休日の日、ですか……？特にこれと言っては……ゲームとか？」

「ネットゲ？」

「ですね。オンラインだったりソロでしたりとバラバラですが」

「そこで出会いとかが起きたり……？」

「はい？どうしたんですか急に……」

「いやほら、オンラインゲームしてたら女の子と知り合ったりとかさ。無いの？」

「ありませんねえ。出会い厨とかでもありませんし」

「ええーそんなんじやどこで異性と出会うのさっ！現在の君の異性の知り合いだなんて私と君の母君しか居ないでしょ!？」

「いやいやいや、自分の母親を異性に入れるのは頭おかしいでしょ……。それに女性の知り合いなら美咲さん以外にもー」

特に考えずに喋っていたが、自分の言葉に違和感を覚える。

異性の……知り合い……？

「おおっ？なんだあ、実は居たの？無害そうな顔してやることやってるじゃないか！達也くんも隅に置けないなあ」

「え、ええ……まあそれなりに……」

誰の事だ？人と会うなんてこの店以外無いはず……。ゲームでか？

「あ、お客さん来たね」

入口のベルの音が鳴り、来店のお知らせが店内に響く。

「あ……そうですね」  
変な感覚だが、今は客の対応が優先なので気持ちを切り替えて仕事に取り掛かった。

昼が過ぎ、おやつ時間に差し掛かろうとした時、マスターが帰って来たので一旦俺と美咲さんが休憩に入った。

「おつかれさん」

「おつかれさまです」

「ほい、これまかない」

「ありがとうございます」

まかないを受け取り、席に座って食べ始める。

「さつきカウンターで話してた続きなんだけどー」

「ん？なんですか」

「達也君は彼女とか作らないの？」

「何ですか、その親がしてくるみたいなの質問は……」

「いやね？さつき知り合いの女性が居るって言ってたからさ。気になっちゃって」

「あー……あれですか。なんか勘違いだったかもしれないです」

「キミ……勘違いとかそんな虚しいこと言わない。それとも照れ隠しとか？」

「どうなんでしょう？居たような……勘違いだった様な……」

「なんだかモヤモヤした気分である。」

「なんて悲しきモンスターなんだ……お姉さん泣きたくなって来た」

「誰がモンスターですか」

「そんな悲しき達也君にワタシから叡智を授けようではないか」

「叡智……？」

「そうとも。叡智の結晶さ。いつか知り合いが出来た時にきつと役に立つ……はずっ！」

鞆から黒の包装がされた四角い何かを渡される。

「これは……何かのゲームですか？」

「まあ、そんなところ。シミュレーション的な奴さ。明日は休みだろ？家に帰ったらやってみて」

「ありがとうございます。わざわざ」

「今朝のお礼みたいなものだから気にしないで良いよ。それより、終わったら感想教えてね？楽しみにしてる」

「はあ、分かりました……」

なんのゲームだろう。国作りとか村を発展させていく系のゲームかもしれないな。

「そんじや、これを食べたら残りも頑張ろー！」

「ですねー」

「ただいまー」

何事も無く終わり、家へと帰ってくる。

「おう、おかえり」

「あれ、母さんは？」

「今日はちよっと遅くなるらしい。だから今日の夕飯は俺の特製だ」

「因みに内容は？」

「チャーハンだ。冷蔵庫の中身を好きに使ってみた」

「後で怒られないと良いけどなあ」

「大丈夫だ！なんやかんやで許してくれるさ」

「謎の余裕はどこから……」

手を洗い、荷物を部屋に置いて戻ってくると、丁度テーブルに夕食が並び始めていた。

「何か手伝う事とかある？」

「いや、後はこれを盛る位だし特に無いな」

「了解、飲み物くらいは淹れとくよ」

冷蔵庫から麦茶を取り出してコップに淹れる。

「おおっ、ありがとな」

「この位大したことじゃないって」

2人分のコップをテーブルに置いて席に座る。

「男飯ですまんが、それではいただきます」

「いただきます」

スプーンを手に取り一口食べる。

「どうだ？親父の味は？」

「んー……なんか懐かしい味？久々に父親が作るチャーハンを食べたって感じ。普通に美味しいけどさ」

「そうかそうか、なら安心だな」

俺の回答を聞いて、腕を組んで満足そうに頷いている。

「ま、たまにしか作ってやれなかったし、こんなもんだなっ」

「たまに懐かしんで食べたくなるような感じかな？ほら、たまに無性にラーメンとかジャンクフードが食べたくなるあの感じ」

「それはあまり嬉しくない例えだな……」

「がつくりとしながらも夕食を食べ進めていく。」

「そうだ達也」

「ん？何？」

テレビを見ながらチャーハンを口に運んでいると、声をかけられる。

「お前、彼女とか居ないのか？」

「……………」

口に入れようとしていたスプーンの手が止まる。

「なんだその呆れた様な顔は？」

「……いや、今日職場でも同じことを聞かれたからさ、またかつて思っただけ」

「そうなのか？今は母さんも居なくて父と息子の2人だし、こういう話で盛り上がりたいたいと考えたんだが……」

「ノリが中学生の修学旅行なんだが……」

「まあ、それは置いといて……どうなんだ？気になってる子とか、お付き合いしてる人とか居たりするのかわ？」

「残念だけど、気配すらしてないから。そもそも知り合いに居ない

し……」

「莊周のお店で一緒に働いている美咲ちゃんとかはどうだ？文学系女子って感じの子」

「美咲さん？いやあ……そんな気は特に無いけど」

「お前が人と出会うタイミングとか働いてる喫茶店ぐらいだろ？少ないチャンスを生かさないとあつという間に時間は過ぎてくぞぞ？」

「んなこと言われてもなあ……」

俺に恋人とか、夢のまた夢だろうし……。

「なら、どんな子がタイプとかはどうだ？」

「グイグイ来るなあ……圧が強い」

「一人息子が女つ気も無いとなれば親として心配するもんよ。澤田家の存続が掛かってるんだ」

「まあ……それはそうだが」

「んでだ、どんな子がタイプだ？」

「タイプ……タイプねえ」

しつこい父親をあしらおうと思いついた事を口に出す。

「そうだなあ……黒髪ロングとか？」

「性格より先に見た目を言う辺り、我が息子ながら中々歪んでるな」

「……確かに」

「黒髪でロングか……大和撫子みたいなお淑やかな子か？」

「いや、どちらかというところ系？」

「なるほど、クーデレ……という奴か？」

「ま、そんな感じかな」

……俺は親と何を話しているのだろうか？

「まっ、好みも良いが、いざという時はしつかりと自分から動かないと駄目だからな？」

「あー……ソウデスネ」

「てきとうだなおい。俺の時は母さんを射止める為にな……」

「ストッププツ!!親の馴れ初めとか一番聞きたくない話だからな？親族の恋愛とか聞きたくないからなっ!!」

「そうか？それは残念」

その後は何事も無く夕食を食べ終えて部屋へと戻った。

「……そういえば、美咲さんから借りたゲームがあつたな」

中身はまだ確認していないが、人に勧めてくるくらいだ。期待して良いかもしれない。

「取り敢えず封を開けるか」

なるべく破らない様に丁寧に開け、中身を確認する。

「……これは」

出て来た中身のパッケージにはなんとも可愛らしい女の子たちが写っているゲームだった。

「まさか……」

裏返して内容を見て行くと、CG絵と思われるのと、端っこに小さく『R-18』の注意書きが記載されていた。

「シミュレーションゲームって、エロゲじゃねーかつ!!」

シミュレーションと言っても恋愛シミュレーションで、作るのは国や村じゃなくて子供だった。

「なんつーものを人に勧めてんだあの人は……」

しかもプレイ後の感想まで求めている始末。

「けどまあ、可愛いのは認めるけど……」

パッケージに居るヒロインと思われる4人は間違いなく可愛い。

「見た感じ、死神が出てくる話か？」

身長程の大きな鎌を持つてる子とタイトルからしてそうだろう。となると、喫茶ステラと書いてるし、喫茶店が舞台なのか？トレイ持つてる子やウエイトレスの服と思われる服装の子も居るし……。

「一体俺に何を求めてこれを渡したんだ……？」

もしかすると、ゲーム内に出てくるっぽい喫茶店の事を体験して勉強しろとかか？いや、遠回り過ぎでしょ。

「あー……感想求められてるし、一応やってみようかな？」

まさか職場の先輩からエロゲを勧められるとは思わなんだ……しかも女性から。

「取り敢えず、インストールをしておくか」

ディスクを取り出して淹れる。

「喫茶ステラと死神の蝶ね……」

中央に飛んでいる青い蝶の事だろう。多分だが、この蝶が死神に関わる何かで、主人公はそれをきっかけに死神のつぼいこの子と、喫茶店の子らと関わっていく……。そんな感じのストーリーに違いない。そういうのに詳しいんだ俺は。

「青い蝶となると、人の魂とか、生まれ変わりを示唆する何かだし大きく外れてないはず」

海外のどっかでは神の化身とか見た事あるし、きつとそう。

「今の内、飲み物とか取ってこよ」

一度始めると長丁場になるかもしれないし、水分くらいは手元に置いておこうか。

冷蔵庫から飲み物を取って戻り、パソコンの前に座った。

「そんじゃ、始まるとしましよるか」

特に内容を知らない作品だけど、何故かやる気があることに不思議に思いながらもゲームを起動した。



—新訳—第39話：胡蝶の夢

「……なんだ？このゲームは」

昨日の夜に始めたゲームだったが、気が付けばカーテンから朝日が射し始めていた。

始めは自分が想定した通りの展開が進んでいたことに苦笑しながらも物語を進めていたが、ふとした時に違和感を感じた。

「どうして俺はこのゲームの結末を知ってるんだ……？」

いや、結末だけとかそんな軟な話じゃない。共通ルートから個別へ入った後、それらの会話や流れまでもが簡単に読めていた。

「既にプレイ済み……とかか？」

今はまだルートとしては3人しかしていない。一番に気になってる黒髪の同じ大学の四季ナツメと、このゲームのヒロインのセンターであろう明月葉那の2人はまだ未プレイだ。

「なんなんだ？この変な違和感は……？」

何かがおかしい。知っていないはずなのに、俺はこの2人の迎える結末が分かっている。理解してしまっている。

正直、不気味でしかない。正体の見えない何かが居るかのような……。そんな掴めない不気味さが。

「……残りの2人をやれば、判るのか？この正体が」

一睡もしていないが、不思議と眠気も空腹も来ていない。今日が休みで本当に良かった。

「先に、どっちからしようか……？」

ゲームの会話をスキップしながら最初の選択肢にやって来た。オムライスか、紅茶か……。

「先にオムライスにしよう。作品の根底に関わってそうだしな」

上の選択肢の『オムライスの味を』を選択して、他のも全て狙った選択肢を押して行った。

内容はやはり想定通りに進んで行った。最初は2人で携帯電話を買いに行き、操作の慣れないヒロインとメッセージのやり取り。その

後一つの事件を解決し、ヒロインに惹かれて行く。

そして、人と死神であるが為の別れ。だが、主人公がまたも奇跡を起こして無事再会。その後は幸せそうな日々を過ごし、無事エンディングを迎えた。

「……ふう」

物語を終え、椅子の背もたれに体を預けてため息を付いた。

「未来予知でも持ってるのかね……」

肩の疲れをほぐす様に両腕を上へ伸ばす。

「でも、なんか少し予想と違った所もあつたな……」

いや、違つたと言つて良いのか分からないが、展開に少し違和感を感じた程度の小さな感覚。

「つて、もうこんな時間か」

時計を見れば、いつもなら起きて朝飯を食べて終える辺りだ。

「一旦休憩するか」

席を立って一度リビングへ向かう。

「つて、誰も居ねえな」

てつきりどちらかは居るかと思つてたけど……今日はどっちも早出か？てか、昨日遅くなるつて言つた母が返つて来たの気づいてなかつたな……。少しゲームに熱中し過ぎたな。

確認だけはしておこうと2人の寝室をノックする。

「流石に行つてるよな？」

念のためドアを開けて中を覗く。想像通りもぬけの殻だった。

「ですよねー……」

無駄足を踏んだと思ひながらドアを閉めようとした時、1枚の写真立てが目に入った。

「これは……2人の若い時のか？」

そこに入ってる写真にはまだ2人が20代とかだろう。仲睦まじく一緒に写つていた。

「……？」

その写真の父では無く、母の方の顔を見て首を傾げる。

「なんかこの時の母さんの顔、どつかで見た事があるような……？」

そんな訳がない。気のせいだろうかとは思うが……不思議とこの顔を見てるとどこかで話した事があるような気がした。

「んなわけがない。似てる人を店とかで見たんだろ」  
そう決めて、部屋を出る。

「さてと、取りあえず飯でも食べておくか」

昨日のチャーハンは全部食べてしまっていたので、適当にパンを焼いて冷蔵庫の中にあつたサラダと一緒に食べる。

「……ふあ」

食べ終えて食器を洗っていると流石に寝ていなかったからか、眠気がやって来る。

「腹も膨れたせいで眠くなって来たな」

洗った食器を乾燥機へ入れて部屋に戻りベッドにダイブする。

「あー……まだ一人残ってるけど、起きたらまたやるか。楽しみは最後にとっておいた方が……良い、しな」

横になり目を閉じる。体から力を抜くと、自然と眠気が襲って来たのでそれに身を委ねる。

なんか、良い夢でも見れそう……。

これは夢だろう。何となくそう理解した。

夢の中の俺は、喫茶店で働いていた。

叔父のやっている店じゃない。起きている時にしていたゲームの世界での店だった。

そこにはヒロインたちが居て、主人公である高嶺昂晴やミカドさんが居た。

そして、何故かその輪の中には俺も居た。皆と楽しそうに店で働いていた。それを俺は輪の外から見ている。

キッチンで高嶺と涼音さんと一緒に料理を作り、たまにフロアに出てドリンクを淹れたり接客をしたり……。

明らかに現実と夢がごちゃごちゃになっているはずなのに、不思議と俺がそこに居るのに違和感を感じなかった。

それよりか、そうであったかのような感覚に包まれていた。声も音も聞こえないけど、そう思えた。

場面が急に切り替わった。夢だし良くあることだろう。

次に出て来たのは、またしても同じく店の光景だった。けど、さつきと違う点は俺がその中には居なかった。

そりやそうかと納得した。幾ら夢でもあり得ないと……。

その夢を見ていると、自然と1人のヒロインを目で追っていた。

四季ナツメ。

ゲームでまだ攻略していないヒロイン。

どんな展開なのだろうかと彼女を見ていると、ゲームで印象づいていた様な人と距離を置こうとする人では無く、むしろ積極的に前に出ている。

そして彼女は、常に誰かを探している様な雰囲気があった。

何かを追うように動き、それが正解への道であるかのように次へと進んでいく。

ある日、彼女は電車に乗っていた。

遠出だろうか？そう思いながら見ていると、電車から降りる。

そこは、住んでいた所のような場所ではなく、割と田舎よりの場所だった。

駅から離れて歩いて行くと、次第に人工物より自然が多い方向へ進む。

どこに向かっているんだ……？

正面には人の文化など感じられない様な自然があった。その入口に辿り着いた彼女は、そのまま森へと入って行く。

特に迷うことない足取りで木々を抜け行ったが、ふと歩みを止める。

暫くその付近と見ていたが、諦めたかのように寂しい表情を浮かべて踵を返して行った。

「……、……」

その時に誰かに話しかけるように小さく言葉を呟いた。

その口の動きを見た瞬間、夢が終わりを告げた。

「……………」

目を覚まして、暫く呆然としていた。

時間にして数時間。今は昼が過ぎた頃だろう。

「澤田君……う？」

夢の中の彼女が最後に呟いた言葉……。気のせいではなければそう動いていた。その前は多分『またね』とかだろう。

「幾ら何でも、なあ？」

妄想にしては酷過ぎる夢。けど……だけど、なんとか、俺は夢のあの場所を知ってるような気がした。

「てか、駅名まで割としつかりめに……」

気になって携帯で調べてみる。が、降りたあの田舎の駅名は無かった。

「当たり前だよなあ」

頭を掻きながらベットから起き上がる。

「飯でも買いに行くか……」

少し寝起きの頭で着替えながら外に出る。

「……てか、家にあるもので作ればよかったじゃん」

家から少し離れた地点で衝撃の事実が気が付く。寝ぼけ過ぎていたのかもしれない。

「まあ、折角だしコンビニでも寄ってなんか買っとくか」

わざわざ外に出たことだし、アイスでも買いに行こうと駅正面のコンビニに向かう。

「……………」

駅前に着くと、さっきの夢を思い出す。

「……ちよつとだけ、気になったから」

駅内の線路図を見る。

「えーつと……」

自分の駅から1つずつ確認していく。

「つて、無いか」

乗りの駅はあったが、降りの名前は無かった。

「……行つて、見るか……？」

何故か、その場所が気になつてしようがない。特にゲームとかしても聖地巡礼などしたことなかつたけど……。

衝動のままに切符を買つて電車に乗り込む。

電車に揺られること30分。目的の駅に着き降りる。

「……なんか、めちやくちやデジヤブ感」

駅から出ると、見覚えがあるような光景がそこにはあった。

「確か喫茶店は……」

信号を渡り、道を進んで一本裏路地に入る。

「この辺りに、なるのかな？」

ゲームと同じ場所に着いたが、当然そこに喫茶店は無く別の建物があつた。

「帰るか」

それを見て何だか馬鹿らしくなり駅へ戻つて電車に再び乗る。

「まあ、ちよつとした散歩がてらの気分転換と思えば良いか」

座席に座りながら力を抜く。

あと30分もあるし少し休むか。

コンビニに行くだけだったのが少し遠出してしまったので軽く疲れがあつた。

「寝過ぎすのだけはしない様に気を付けないとな……」

「……んっ？」

耳に入つて来る聞き覚えのある駅名を聞いて目が覚める。

ヤバい、うたた寝をしていたっ!?

慌てて席を立つて電車を降りる。

「あぶねえ……、もう少しで乗り過ぎすところだった……」

なんとか降りれたことに安堵して顔を上げる。

「……は……ん……は……」

駅内から外を見ると、自分が住んでいた様な場所では無く田舎の景

色が広がっていた。

「ま、まさか……だよな？」

おそるおそる駅名の書かれた看板を見ると、そこに書かれていたのは探しても見つからなかった名前が書かれていた。

「めちやくちや乗り過ごしていたのかよ……」

次の電車の時間を見とくところ、20分後には来るらしい。

「聞き覚えがあると思ってたけど、気になって頭に残っていたパターンか……」

偶然の産物ではあるが、気になっていた場所でたまたま降りてしまった。奇跡的確率だろう。

「まー……折角来たんだし、これも運命と思って行ってみるか」

改札を通り駅から外に出る。

「うわあ……見た通りだな」

目に飛び込んできた景色は、夢で見たのと同じ物だった。

「なんか、ここまで来ると……流石に、あれ……だよな？」

夢で見たから……とかで片付けられるような案件ではない。

「……やっぱり、俺はここを知ってるってことだよな」

昨日の夜から今に至るまでにふと感じる違和感……。その正体がこの先にある。そんな謎の確信。

「確かに行かないとな」

夢と同じ道を辿り、森へ辿り着く。

「この先に……」

ここを入れればもう後戻りは出来ない。そんな不気味な感覚に襲われる。

「でも、知らないといけない……何故か気になって仕方がない」

心の底から湧き出る様な感情に押されるがまま歩みを進めて行く。直感を頼って暫く歩くと、少し開けた場所に辿り着く。

「ここは……？」

周囲を見ていると、少し奥に青い蝶が飛んでいた。

「蝶？」

その場をひらひらと飛んでいる蝶だが、近づいても特に逃げず相変

わらずその場を舞っている。

「青い蝶……まるでー」

まるでゲームに出て来た魂の残滓みたいだ。

そう眩こうと口を動かすと、その場で飛んでいた蝶が俺に向かって飛んできた。

「うおっ!」

咄嗟に身を引くが、避けきれず蝶と接触してしまった。

が、その瞬間。蝶が溶けるように姿を消したと同時に頭の中に大量の記憶が流れ込んできた。

「っ!?っ……!」

突然の出来事に目を瞑りその場にしゃがみ込む。

少しの間固まっていると、ようやく混乱が収まった。

「……ははっ、そういうことだったのか……」

それと同時に、全てを理解した。

「そりゃそうだよな。既にプレイ済みだし、実際にそこで生きて来たんだから……」

これまでの違和感、疑問が解けて清々しい気分だ。

「ここから、始まったもんな……」

ゆっくりと立ち上がって状況を整理する。

「となると……ここはなんだ?夢の中?それとも死後の世界か?」

死んだはずの両親、そして喫茶店。しかも俺は高校を卒業してすぐに喫茶店で就職をしてるとか……。

「なんか、ちぐはぐした感じだな」

まるで誰かの想像を形にして創られた世界の様な……。

「どうすれば解けるか考えないといけないけど……、その前に帰るか」

ここに居ても問題は解決出来ないなのでその場を去る。

電車に乗り、元居た駅で降りて家へ戻る。

「ただいまーっ」と

家の中からは人の気配はしない。時間的にまだ仕事から帰って来ていないのだろう。



そのまま階段を上がって部屋へと帰る。

「さてと」

まずは、今の状況を整理しよう。

親子3人で過ごしていて、俺は叔父の喫茶店で過ごしていると……。両親は共に働いている。

ここまでは何となく俺の中にある記憶でも再現可能。

「2人とも俺の子供の時からあまり顔変わってないし……」

となると俺の夢か何かか？でも普通こういうのって自覚したら目覚めるパターンだし、夢じゃないのか？

「それか他の人のか、もしくはあの神が面白い事をしているか」

あの性格の悪い神ならやりかねん。俺を試そうとかそんな感じで。

「うーむ」

それだったのなら、まだクリア条件を満たしていないとかなんだらうか。

「おーい、聞こえてるなら出て来てくれないかー？」

試しに呼び出してみるが、効果なし。

「駄目か」

改めて考えよう。まず、どうして俺1人ではなく両親や知り合いも含めての夢か、この辺りも重要な気がする。

前の世界で俺1人か、皆が居る世界での生活のどつちかなら現実的だが……俺の想定外の世界だし、やっぱり他人の？それか俺の心の底にある願いだったり……？

暫く考えていたが進展は無く、玄関のドアが開く音を聞いて意識を戻す。どうやら父親が帰ってきたらしい。

迎える為に一階に降りる。

「おかえりー」

「おう、ただいま」

仕事から帰って来たであろう親の顔をまじまじと見る。

「ん？どうした、俺の顔をじろじろと見て？」

「あ、いや、なんでもない」

「そうか？つと、母さん今日も遅くなるってさ。もしかすると帰る

の明日になるかもしれないらしい」

「まじか。そりゃ残念」

「だから昨日に続いて今日も男飯になりそうだなっ」

「特に気にしてないから平気だけど」

少し疲れたように靴下や服を洗濯かごに入れる姿を見て、ふと頭に思い浮かんだ事を口に出す。

「今日の夕食、俺が作ろうか?」

そんな言葉が出た。

「おっ?どうした急に」

「仕事で疲れてるだろうし、たまには親孝行でもしておこうかと思っつゃい」

「ははっ、なんだ?良い事でもあったのか?休みだったからか?」

「何となくそう思っただけ。だからてきとうに寛いでいてくれ」

「そうかそうか。それなら、一緒に夕食を作ろうじゃないか!」

「は?一緒に……?」

「息子と一緒に料理をする……親として成長を確認できる貴重なタイミングだろ?」

「いや……分かんけど」

「お前も親になれば分かるさ。ちよつと待ってくれ、すぐに戻る」

「あ、ああ……」

そういつて部屋へと入って行く。んー……やっぱり俺の願望が作った夢の路線は無いような気がするなあ。完全に想定外だったし。

「いやー美味しかったな!」

「それ言うとお画自賛になるけど……まあ、うん」

父親と共同で作った夕食は、それなりに楽しかった。役割を分担してわいわいとしてた気がする。

「子供との共同作業だったが、男同士なのが聊か残念だったなっ」

「……言ってる」

どうせなら彼女とかと一緒にいちやいちながらしたかったの

も確かだ。

それを考えて少しククリと胸が痛む。

「おいおい、確かに言ったのは俺だが、何もそこまで暗い顔しなくても良いだろう?」

「ああ、いや、ちよつと別の事考えていただけだから」

「あれか?俺とじゃなくて可愛い彼女とかとしたかった……!とかか?」

「……………」

「凶星か。それを言うなら俺も母さんと一緒にいちやいちやしながら作りたかったよ」

「両親のいちやつきを見せられながら飯を待つ息子の気持ちを考え  
てくれ……………」

「そういえばな、母さんは昔は料理が下手だったんだ」

「えっ、そう?割と何でも卒なくこなしそうなイメージだったけど……………」

「頭とか運動神経は良かったけどな、どうしてか料理はへたくそ  
だったんだ」

「へえー。超意外」

「それが今やこの家を支えるメインウエポンだ」

「努力家でもあったんだなあ」

「それもある。けど、負けず嫌いだったんだよ」

「というと?」

「母さんと違って俺は昔からしてたからそれなり料理は出来てた。  
それが悔しいとか言ってきたけど何度も挑戦してた」

「……………もしかして、これから惚気でも始まるのか?」

「おっ、気づいたか?」

「……………まあ、いいや。それで?」

「おお?話を切られると思ったが、珍しいな」

「話したそうだから、気が済むまで聞いておくよ」

それに、俺も気になるしな。

「さんきゅ。ま、何度もしてるうちに俺が作ってる味とか覚えて来

てそれを昇華させてさ、あつという間に胃袋を掴まれていたって感じ」

「見事に落されてたってわけかあ」

「愛情に勝るスパイスはなしってな！というか、その前から俺はゾッコンだったけどなっ！はっはっは！」

「はいはい、ご馳走様」

「お前も母さんみたいな良い女を捕まえろよな？」

「可能だったらな。……2人って何時出会ったんだ？」

「なんだなんだ？両親の馴れ初めとか聞きたくないんじゃないんじやなかったのか？」

「さっきの話を聞いたら気になってさ。折角だし聞いておこうかなって」

「そうだなあ……、初めては中学の時だな」

意外と早く巡り合えてたんだな。

「と言っても、その頃はお互いに顔合わせるのも滅多に無かったし、仲良くなかったからな」

「まじで？」

「ああ。マジでだ」

「でもまあ……確かに2人の性格を考えたら、そっちが突っかかるのを母さんが煙たがっていたとかなら想像出来る」

「うっぐ……」

「凶星だったのか……」

「まんまその通りだな。それで高校はお互い別々で、再び会ったのは大学だな」

「運命的な再会を？」

「いや、俺が母さんが目指していた大学を狙って受けた」

「父親がまさかのストーカーだった……」

「違うからなっ！母さんとの条件だったんだっ！」

「条件……？」

「ああ、中学の時に惚れた俺は告白をしたんだ。そこで『本気なら私と同じ学校に通えるだけの頭を持つてくること』ってさ」

「ああ……背景を何となく察した」

「分かりやすいだろ？後は俺が高校で猛勉強して無事合格したってわけよ」

「なるほど、掴み取った勝利だったのか」

「凄いだろ？」

「そこは素直に男として認めざる得ない。息子としても誇らしい父を持ちました」

称賛の拍手を送る。

「母さん程のいい女を手に入れる為に当然の努力だなっ」

懐かしそうに語る父も、なんだか自慢げである。

「その後無事お付き合ひして……あっ、何度目かのデートで初めて撮った写真があるぞ？見るか？」

「あー……それじゃあ、見ておこうかな？」

楽しそうに話してるのに水を差すのは嫌だし、流れに従っておく。

「確か部屋にあったし、持ってきてよう」

立ち上がって自分たちの部屋に入って行く。

と思ったが写真立てを手にとってすぐに出て来た。

「まだ2人とも大学生の時の写真だなこれは。若いだろ？」

出された写真を見る。

「ああたしかー！っ!」

見せられた写真は2人が仲良さそうに写っている1枚の写真……。今日これを見るのは2度目だった。

確かに2人とも今よりも若い……それより驚いたのは隣に写ってる母さんの顔だった。

「……………」

俺はこの顔と同じ人物を知っている。いや、会っている。

「真剣そうに見てるが、そんなに驚いたのか？」

「まあ……それなりに中々衝撃的な感じだった？」

「まあ、息子のお前からしたらそうかもな」

隣の父は若い頃の写真を見て懐かしそうに目を細めている。

「つと、つい話し込んでしまったな。まだやる事残っているのに」

「皿くらいなら俺が洗っておくから、先に風呂行ってきたら？」  
「ん？そうか？……なら今日くらい息子の優しさに甘えておこうか」

「そうそう。次何時になるか分からないからな」

「冷たいこと言うなよ……せめて週一くらい労ってくれても良いじゃないか？」

「そうしたいのは山々だけど……色々と難しそうだしなあ」

「色々ってなんだ色々って。ま、今日みたいのを次も期待して待つてるさ」

「ああ、またその時が来たら精一杯するよ。色々と雑談交えながら……」

「言ったな？楽しみにしてるぞ」

そう言つて風呂場へ向かつて行くのを見て皿洗いを始める。

……なんとなく、この夢の終わりが解った気がしてきた。

となれば終わらせる必要があるのだろう。相手はそれを望んでい  
る。そう導こうとしている。

それなら俺も、そうあるべきなのだろう。

排水溝へ流れて行く水を見ながら、静かにそう決意した。

—新訳—第40話：郷愁別離

朝のアラームを聞いて目を覚ます。

「起きるか」

寝起きの頭を起こしつつベットから立ち上がる。

「んんーっ。旅立ちには良い朝かもな」

今日でここもおさらばになるだろう。ぬるま湯の様なこの夢をもう少し味わって居ても良いと思えるが、向こうから終わりに向かわせたのなら足踏みをしてる暇はあまりなさそうな気がする。

「最後の朝食でも食べに行くか」

階段から降りてリビングへ顔を出す。

「おっ、起きて来たか」

そこには昨日と同じく父の姿だけがあった。

「おはよ。結局母さんは向こうで泊まった感じ？」

「みたいだな。忙しそうだ」

「ならしゃーないなあ」

一緒に朝食の準備を済ませて食べ始める。

「達也、何か面白いニュースでもやってないか？」

新聞を読み終えた父がテレビへ視線を向ける。

「特に変わらないラインナップだけだな。平和そのものだよ」

「それは良い事だ」

その後も何気ない雑談を交えて朝食を終える。

「皿は俺が洗っておくから、そっちは家出る準備でもしておいてくれ」

「……どうやら、昨日の優しさがまだ続いているみたいだな。関心感心」

満足そうに俺を見てリビングを後にする。

「まあ、最後ぐらいは……な」

たかが皿洗い。だけど、思い出としては悪くないだろ。

2人分の食器を洗い終えて部屋に戻る。

「俺も出る準備しないとな」

最後を迎える前に、寄っておきたい場所がある。

「まだ美咲さんに、ゲームの感想言っただけだな」

夢が続くのなら、今日は出勤とかだったのだろう。

「一応時間は守っておかないとな……」

着替えを済ませて一階に降りる。

「……あれ？まだ出てなかったのか？」

そこには既に仕事に行っただけだと思っていた父がまだ残っていた。

「まあ、ちよつとした忘れもんをしてな」

「良いのか？遅刻とか平気なの？」

「それよりも大事なことだからな！たまにはいいだろう」

いや、ダメでしょ……。

「それより、そつちも出掛けるのか？」

「まあ、普通に喫茶店に行くつもりだけど？」

「今日は朝からだだったのかつ、なら早く行かないとな」

「そつちもな」

「今日は俺が達也を見送ってやろう！いつも見送られる側だったからな」

「いやいや、忘れ物は……？」

「細かい事は気にすんなって！いいからいから」

肩を組まされて無理矢理玄関まで引っ張られていく。

「あー……分かった分かった」

玄関に着き靴を履く。

「……それじゃあ、行ってくるよ」

「ああ、気を付けて行けよ？」

元気そうにこちらを見る父を見て不思議と込み上げてくるものがあつた。

「うん……。しつかりと頑張つて来る」

「ははっ、その心配はしていないな！んじゃ、行ってこい！」

「……ああっ、行ってきます！」

満面の笑みで俺を見る父に向かつてこちら最大級の笑顔で返し



て玄関を出た。

「……行くか」

寂しさが残る中、静かな朝の街を歩き出した。

「……行つたか」

「そうか、そうだよな……」

「お前は前に進むことを選んだんだな。流石は俺の息子だ」  
やり切った様な表情で目を閉じて頷く。

「俺の役目もここまでだな」

1人になったリビングを見渡す。

「ありもしない夢だったが、悪くない夢だったな……」

「後はあいつが何とかしてくれるだろう。俺なんかよりもずっと頭  
が良いからな」

周囲の景色が薄れていく中、満足そうに上を見上げながら蝶へと  
還つて行つた。

「おはようございます」

店に着きそのまま中へ入る。

「おっ、おはようさん！」

「達也か、いつもより早いな」

店内にはカウンター側に2人が居た。

「ちよつとしたいことが出来たから、話しておきたいと思つてさ」

「ふむ、したい事か……。店を辞めるのか？」

「あー……まあ、そういうことになるのかな？」

「えっ!? 達也くん店辞めるのっ! なんで! もしかしてマスターから  
パワハラでもあつたの?」

「そんなことするわけないだろうが。ややこしくなるからお前は奥  
に下がっておけ」

「ぶーぶー。でも真面目そうな話だしそうしようかな」

受け入れた美咲さんが大人しく奥へ下がって行く。

「さて、一応話を聞いておこうか」

「ああ、詳しくは話せないけど、やる事が出来てさ。店に来られそうに無いからその挨拶をしておきたくて……」

「……嘘じゃないみたいだな」

「流石に世話になった人に嘘は付きたくはないな……」

「腐った根性をしてなくて安心した。そうだな……お前にやりたい事が出来たと言うのならこつちとしては喜んで背中を押させてもらおう」

「割とあっさりしてるな」

「何、目を見れば判る。一昨日までのつまらん目をしてない。何かしらの決意が見られる」

「……流石、って言うておくよ」

「何をしようとしてるのか分からんが、お前がそれをすべきだと思うのならやってみると良い。もしそれで疲れて休みたくなった時はここに羽休めしに來い。コーヒーの一杯くらいは出してやろう」

「羽休めって……」

俺の中の記憶はあんた含めてトラウマしかないんだが？

「それじゃあ、奥に居る山吹君にも挨拶は済ませておくといい」

「そうしとく」

カウンターから出て、奥に向かおうとする。

「……小さい時から色々、世話になりました」

聞こえない様に小さく呟いて奥の休憩室に入る。

「あーっ、やっと来た。ねえ、お店辞めるの？」

「えっと、そうですね。少しやりたい事が出来てしまつて……」

「うーん……そっかあ、本人にしたい事が出来ちゃったのなら止める訳にも行かないし、しょうがないか……」

「美咲さんにも色々とお世話になりました」

「あはは、気にしないで。私も達也くん結構助けてもらったしね！お互い様だよ。あっ、それよりい……」

「ん？どうしました？」

「一昨日私が渡したゲーム、もうした？」

「あゝ……あれですね」

「その様子だと、中身は見た様だね」

「まさか職場の人からエロゲを勧められるとは思いませんでしたよ」

「いやー、達也くんなら喜んでくれると思ってさ」

「まあ、色々とありがたかったですけどね」

「それで？もう何人が攻略したの？」

「1人残して攻略済みですね」

「めっちゃやり込んでんじやんつ、結構気に入ったの？」

「ええ、感謝したいくらいには」

「そう言われると勧めたこっちとしても鼻が高いね」

「つて、挨拶しに来たのにゲームの話で盛り上がってしまったますね」

「だねえ……ま、しんみりしてるよりかはましでしょ」

「そうですねえ……」

「あまり長く引き留めるのも悪いし、そろそろ行く？」

「そうします」

「お店辞めても私のこと忘れないでよー？」

「大丈夫ですつて、ちゃんと覚えてますから」

「なら良かった。そんじやあ、またねっ」

「はい、美咲さんも元気で」

「挨拶を済ませて店から出る。」

「……残りは」

後は最後の1人。

駅へ向かって電車に乗るが、俺以外に乗客はおらず他の人とすれ違  
いすらしていない。

「もう、変に取り繕う必要が無くなったとかか？」

無人の電車に暫く乗っていると、聞き覚えのある駅名が聞こえて来  
たので立ち上がって降りる。

「……昨日ここに来たのは必然だったって訳か」

特に意識せず電車に乗っていたが、自然とここに着いた。俺が来るのを待つてるといふことなんだろう。

そのまま駅から森へ向かう。

「この先に、居るんだろうな」

中に入る前に一度後ろを振り返ると、先ほどまでであった景色が薄れていった。

「引き返させないって感じだな」

当然する気も無いけどな。

覚悟を決めて前へ進んでいく。

昨日と同じ様子に開けた場所に出る。すると、その中心で初めて夢の中で会った時と同じ姿でこちらに背を向けていた。

「……お別れは、済んだみたいね」

「……そうだな。ありがたいことに」

「そう。満足は出来たかしら?」

「残念ながら、まだ最後の1人が残ってる」

「あら、誰のことかしら?」

「その相手は目の前に居るよ。母さん」

確信した声で呼ぶ。

「……ふふ、あーあ。折角このまま終わらせてあげようとしてたのに……しようがない子ね」

「ここまで来てそれは無いでしょ」

「それもそうね」

くるりとこちらに向いた瞬間、周囲の景色が移り変わっていく。

「私とあなたなら、こっちの方がしっくり来るかしら?」

「まあ……そうかも」

そこにはいつもの夢の中の景色が広がっていた。

「それじゃあ、なんだか聞きたい事があるみたいだし座りましょうか」

何も無い空間からいつものセットが出てくる。

いつも通りに座り、紅茶を一口飲む。

「それで?何から聞きたいのかしら?」

「今までの夢は、母さんの夢だったのか？」

「私の夢……そうねえ、私の夢でもあったけど、あの人の夢でもあったかしら」

「あの人？」

「お父さんよ。家で一緒に過ごしてたじゃない」

「……あれって、創った存在とかじゃなかったのか？」

「幾つかは私の記憶を参照にしたけど、大まかな部分は本人のよ？」

「まじで？」

「ええ、マジよ」

「つまり、あれは本人でもあったのか……てか、どっちもこっちの世界に来てたのか」

「驚きの事実である。」

「あら、何度か見てるはずよ。ほら、私の肩とかに止まっていたじゃない」

「ん？あ、ああ……確かにそんな蝶が……って、あれが父親の魂だったのか」

「って、蝶の姿で誰とか分かる訳がない。」

「だからあなたがあの家で話したことは作られた嘘じゃないわ」

「そうか……」

「あの喫茶店のは流石にあなたからの記憶を使ったけどね」

「2人が知ってたらおかしいもんな……」

「つまり、色んな記憶を拾って創っていたって感じだったのか。」

「わざわざ俺に思い出させるように仕向けたのは？」

「あなたならその内気づいてたことだし、さっさと思い出させてどっちを選ぶか見てみたかったのよ」

「どっちを選ぶか……」

「ええ、結果は今を見れば分かるけどね」

「あの写真立ての中身を見せたのも計算だったのか？」

「残念ながら、あれはあの人が勝手に動いただけ。そこに関しては私は介入していないわ」

「そのおかげで早くここに辿り着いたんだけどな」

「あの人なりにあなたの背中を押そうとしたのでしょようね」  
一旦会話が途切れたので飲み物を飲む。

「それで、答えに辿り着いた俺は……どうなるんだ？」

「どうもしないわ。所詮夢だもの。時が来れば目を覚ますだけよ」

「目を覚ます……？」

「あなたは一個勘違いをしているみたいだから正しておくわ」

「勘違い？」

「どうやら、ここが終われば自分は死ぬ。そんな事を考えてるよ  
ね」

「違うのか？ 実際俺は蝶に還ったわけだし」

「違うわよ。ただ蝶に還っただけじゃない。死んでいないわ」

「それを死んだって……ああ、そうか。確かに明月さんもそうだったな」

「だからまだ死んで無いわ。仮死状態の様なものね」

「でも、結局終わるんじゃないか？ 明月さんみたいに生まれ直す訳でもないし」

「あら？ またあの世界で生きたくないのかしら？」

「まー……、またみんなと一緒にお店で働きたい気持ちはあるっちゃある。けど、俺が居ると迷惑しか掛けないからなあ……」

「その原因が無くなれば、また一緒に生きてても良いとおもうのかしら？」

「それもまた夢みたいな話だな」

それなら、またお店を開いてワイワイするのも悪くはないけど。

「ふふ、そう。それなら安心したわ」

「何が？」

「親として、最後の勤めを無事果たせそうと思っただけよ」

「ん？ 勤め……？」

何をする気なのだろうか？ と聞こうとした時、夜空の景色に薄く小さな光が射しこむ。

「……もうそんなに時間は残されていないみたいね」

「なんの光なんだ……？ これは？」

「外からあなたを起こそうとしてるのよ。もう少し位待って来て  
も良いのにな」

「俺を……起こす？」

「そう、今の外の状況を知りたいかしら？」  
嬉しそうに俺を見る。

「……ああ、知りたい」

「今、外ではあなたを呼び戻そうとしているわ。方法としては死神  
のあの子にした手段と同じ方法だね」

「それって……」

俺を生まれ直そうとしてるってことか？

「安心しなさい。あなたが懸念してる点はほとんどクリア済みよ」

「外では既に年を越して新年で、死神の子も人として無事戻って来  
てるわ」

つまりは、明月さんルートを進んでるという事か。

「それなら、なんで俺のことを……」

「そんなの、あなたのことを覚えている人が居た以外ありえないで  
しょ？」

「……マジか」

「きつと、その子が再びあなたに会いたって願ってるのよ。まあ、  
帰って来て欲しいと願ってるのは1人だけじゃないみたいだけどね」

「俺に、会いたいと……？」

「何となく、誰が覚えていたのか察せたでしょ？」

「……四季さんか？」

「ふふ、正解ね」

「俺が消えた後でも、四季さんは俺の事を覚えていて、行動に移した  
……」

「そうみたいね。しっかりと、することをしてから」  
前の世界の記憶を保持してるってことなのか？

「色々とこんがらがってきた……」

「そこは、起きてから彼女に詳しく聞くといいわ」

「いや待て、それでも起きた後が問題になる。また蝶を引つ張って

くるのは勘弁したい」

「そこも大丈夫よ。悪いのは全部私が持つて行つてあげるから」

「……どういう意味？」

「ほら、小さい頃よくやったじゃない？『痛い痛いの飛んでけー』つて」

「いやいや、急に表現を可愛らしくして誤魔化さなくても良いから」  
「可愛くない返し方ねえ……」

そうこうしてるうちに、天上から漏れ出る光が少しずつ増えて来て  
いる。

「……あまり長く持ちそうにないわね」

お互いに上を見上げる。

「きつと、色々と聞きたい事や気になる事もあると思うけど、あまり  
時間が無いみたい」

残念そうにため息を吐いてこちらを見る。

「とにかく、あなたが心配しているような事は起きないから安心し  
なさい。変に心配なんかせずまたあの子に、あのお店のみんなに会つ  
て来なさい。これは母からの命令よ」

人差し指をこちらに突き出して来る。

「急な親権の振りかざしで驚きを隠せないのだが……」

「最後までいい子供に親として振る舞いたいから黙つて聞きなさい」

「それに……あなたには碌に残すことは出来なかったからね」

そう言つて、申し訳なきように目を逸らす。

「……そんなことは無い。夢の中や色んな場面で助けてもらった」

「そのくらい、親として当然のこと。本来これまですべきことを  
今になってしただけだから」

「それでも、俺にとつては嬉しかった。自分一人だけの秘密を共有  
し、話せる相手が居たんだから。それにその相手が親だったと知つ  
た。俺はこの世界で一人じゃないつて気づけて良かった」

「いつも、俺のことを見ていてくれたと今更ながら理解出来たよ」  
夢で毎回俺の日々の暮らしを楽しそうに聞いていたのは当然のこ  
とだった。



「私としてもあなたの成長を知ることが出来て、嬉しかったわ。この世界に来てから前向きに生きている姿を見ることができた」

「やりたい事を見つけて、それに向かって努力して、好きな人が居て、守りたい人が出来て……」

「その為に自分を犠牲にしたのはちよつとマイナスだけどね」

「元を辿れば俺のせいだったからなあ……」

「けど、その悪いのもここでお終い。あとは明るい未来が待ってるわ。悪い物は全部、私たちが持っていくからね」

「……生まれかわるのは、俺だけってことなのか？」

「何を今更。当たり前のことじゃない。それに……私はあの人を置いてく気は無いわ。最後まで私に付き合ってくれたもの。それなら私も最後まで寄りそうつもりよ」

「そっか……」

「しよぼくれた顔しないでもつと笑いなさい。最後まで母に笑顔を見せても良いんじゃない？」

「今の状況で笑えは難易度が高いと思うのだが……」

「情けない子ねえ……お父さんは最後まで笑ってたでしょ？息子なんだから根性見せなさい」

「根性って……」

けど、最後まで願いを聞きたいと思い、可能な限り笑ってみる。

「んー……35点つてとこかしら。あなたはお父さんと同じで笑顔が素敵なんだから。もっと明るくなること。これ宿題ね？」

「割と手厳しい点数だな……」

「自他ともに厳しいのが売りですから」

お互いに小さく笑う。

時間が経つにつれ、次第に上から差し込む光が増して来る。

「もう、せつかちなんだから。もうちよつと親子の会話を楽しませても良いじゃない」

「……もう時間は無いのか？」

「そうね、そろそろお別れの時間よ」

「……」

「だから、寂しそうな顔をしない。新たな門出よ？嬉しそうにしないさ」

「無茶なことを言う……」

「時には無茶無謀も必要よ？まあいいわ……それより、もつと顔を見せなさい」

俺の頬に手を添えて正面を向かせる。顔を見ると、そこには愛おしいのを見るように優しく微笑んでいた。

「全く、恥ずかしいとか申し訳ないとか感じてまともにこっちを見ないんだから……」

「……ごめん」

「謝ってほしいわけじゃないわ。それに、謝るのはこっちの方」  
そう言つて俺の顔をゆつくりと見る。

「……ふふ、目元はあの人似かしら？それ以外は割と私寄りかもしれないわね。でも、笑った時の顔はやっぱりあの人似ね」

「そんなものなのか？」

「ええ、世界一顔を見ている私が太鼓判を押してあげるわ」

「そりゃ信頼出来そう」

「けど、その記録もその内あの子に塗り替えられるのは嬉しくもあつて少し寂しくもあるわね……」

「……」

「つて、私がしんみりしちゃったわね。ごめんなさい」

恥ずかしそうに苦笑して俺の肩を掴む。

「それじゃあ、私とはここでお別れ。あなたは先に進みなさい」

ぐるりと後ろを向かされる。するとそこには、大きな門があつた。

「それを越えればみんなの元へ戻れるわ。もう時間もないから早く行きなさい」

そのままグイグイと背中を押される。

「……」

返す言葉が思い浮かばず、言われるがまま門に手を付けて押す。ゆつくりと扉が開き、中から眩い光が射し込んで来る。

「ほら、この先にあなたの未来が待つてるわ」

「……だけど俺」

「良いのよ。これはあなたの父と母がそうしたいのだから。大切な子の幸せを願ってのことよ」

「……ありがとう」

結局、思いついたのは感謝の言葉ぐら이었다。

「こちらこそありがと。息子の成長を見届けられて嬉しかったわ。あなたの子に……ナツメちゃんによろしくね」

「はは……頑張ってみるよ」

今のこの世界で状況は分からないけど、そう悪くないと願いたい。

「気を付けなさいね。ちゃんと健康には気を遣いなさい。あと、女の子を揶揄うのは程々にしておくように」

「それは……善処します」

「それじゃ、行ってらっしゃい」

優しく、背中を押される。

「……いつてー」

一歩前に踏み出し、その場に立ち止まって振り返る。

「まだ何かあるのかしら?」

「ああ、最後は笑顔でって言われてたから」

真っ直ぐとその目を見てから伝える。

「母さん、行ってきますっ!」

今で出来る最高の笑顔を浮かべる。

「……ふふっ。ええ、いつてらっしゃい」

驚くようにそれを見て、嬉しそうに笑った。

再び門へ向き直り、歩き出す。

もう振り返ることはない。最後は笑顔で別れるのだから。

歩みを止めず、眩しく輝く光の中へ足を踏み入れた。

「ふふ、最後に根性見せたじゃない。流石はあの人の息子ね」

既に夜の様な薄暗さは無く、世界のほぼ全てに光が射しこみ、ひび

割れるようにそれらは広がっていた。

「やっぱり、笑った顔は父親譲りね……」

嬉しそうに笑い、光に包まれていく世界でゆっくりと空を見上げる。

「孫の顔が見れないのは、ちよつと残念かしら」

困ったような笑顔を浮かべ、白い光の中……蝶へと還っていった。

そして、主が居なくなった世界が、遂に終わりを迎えた。

—新訳— Prologue 1

「——」

何か、声が聞こえる。

「——っ！」

誰かが呼んでいる……。

どこか聞きなれたような気もするが、久しぶりに聞くような懐かしい声にも思える。

起きないと……。

その声の正体を俺は知っている。俺の為にここまで頑張って来てくれた大切な人の声。

その呼び声に応えるように、ゆっくりとその重たい瞼を開ける。

「……ん、んんっう」

眩しい日差しに目を細めながら俺を見下ろす様に見つめている人物と目が合う。

「おはよう」

「……おはよう、ございます」

その人物は俺を見て微笑む。

「いい夢見れた？」

「そう、だな。中々衝撃的な夢を見れた気がする。それに、目覚めが天国かと勘違いしてしまっただくらいだ」

「寝起きにそれだけの冗談を言う辺り、本物みたいね」

「……んんは」

後頭部に素敵な感触を感じながら顔を起こす。どうやら膝枕をされていたらしい。

「蝶が沢山居た森。澤田君が生まれた場所って言った方がわかりやすいわ？」

「ああ、そこか……って！俺裸じゃんっ!?!」

自分の姿が目に入ったが、布切れ一枚すら着ておらず、上からコートが掛けられてるくらいだった。

「そりゃ生まれたばかりだもんね。寒いでしょう？はい、着る服」  
面白そうに頭上で笑う四季さんが紙袋を渡して来た。

「あ、ありがとう」

随分と用意が良いらしい。ありがたく受け取る。

「それじゃあ、ワタシは後ろに居る明月さん達に報告してくるから、  
着替えたらかこち来て？」

「他にも来てくれたのか……」

大人しく服を取り出して着て行く。しっかりと靴まで用意されていた。

「これは……？って、マフラーまであるのか。しかもこのマフラー……」

クリスマスの時に四季さんが俺にプレゼントとしてくれたのと同じやつだった。

「めちやくちや胸熱するやつじゃんか……」

感謝を込めながら最後にマフラーを首に巻いて準備を終える。

「着替え終わったけど……？」

恐る恐る四季さんが消えた方向に進むと、明月さんの他に高嶺とミカドさんも居た。

「澤田さん……。無事帰って来れたんですね」

「……ふむ、どうやら貴様も人の様だな」

ジーっと俺を見てミカドさんが安堵する。

「今度は正真正銘の人間として生まれたのか……」

「澤田さんも葉那と同じく生まれ変わったってことですね」

「どうやらそうみたいだな」

多分、あの蝶……母さんが色々とまた助けてくれたんだろう。

「澤田君には話したい事や聞きたい事が色々あるけど……一先ずはお店に戻らないとね」

そうやって俺の手を取って先導する。

「そうですね。ここまでなんですし、じっくりと時間を取れる場所が良いですし……」

「ああ。全くその通りだ。ここではゆっくりと出来ないからな」

俺たちの後を続くように他の3人も歩き始める。高嶺の隣には寄り添うように明月さんが付いていた。

それを見て本当に無事にここまで来たんだと実感して安堵する。

「どうしたの？明月さん達を見て嬉しそうにしてるけど？」

「いや、戻って来たんだなって思ってた。それに、今日に至るまで四季さんが色々と頑張ってくれたみたいだと理解してき」

「まあ？ワタシなりに出来ることはしてきたつもり。それなりに頑張った……かな？」

「そうか……、ありがとな」

「ううん。ワタシただ澤田君がしてきたのを真似ただけだから」

「それでもここまで来たのは紛れもなく四季さんが頑張って来た証拠だな」

「そう？そう言うなら……そうかも」

少し嬉しそうに笑う。その笑顔を見て安堵する。

「今度は安心したみたいな顔して……」

「そりや無事に帰って来て皆に会えたからな。安心もするさ」

「ま、それもそっか。でも……、安心するには、まだ早いかな？」

「……え？」

四季さんの突然の言葉に場の流れが変わった気がした。それに合わせて握られていた手の力が増した。

「さっきも言ったけど、澤田君にはワタシも明月さんも聞きたい事や言いたい事が沢山あるから……ねえ？」

先程まで優しそうに笑っていた表情とは変わり、絶対零度の眼差しで俺を見ていた。

「あ、ああ、ああ……」

「お店に戻るまでに、言い訳を考えておいてね？」

「ア、ハイ……」

これはまずい。非常にマズイ。

折檻コースだと悟り、希望を込めて後ろの明月さんを見る。

「私も、ナツメさんと同意見だという事をお忘れなく」

その僅かな希望も、ジトリとこちらを見ていた。しかも手には何故

か鎌を手にしていた。超怖い。

こうして、無事ハッピーエンドからのエンディングを迎えるなんて事も無く、哀れにも店へと連行されて行った。

その後、店に着いた俺はお店の休憩室で取り敢えず正座をさせられた。

まずは事情聴取を受け、俺が居なくなつた後の出来事を事細かく聞かされた。その時の心情もたっぷり含めて……。

時間にして一時間半。体感は半日程の説教を受けた後、取りあえず解放という流れになった。

「あ、ああ……あ」

最初は四季さんから話しており、我慢していた明月さんが四季さんの話を聞いて行く内に次第にヒートアップしていき、気が付けば主導権が変わっていた。

「やっぱり怒らせたらダメな人ナンバーワンだな……」

その光景を見ていた高嶺は気まずそうに目を逸らしていた。

「少しは反省した？」

「はい……これ以上は無いつて位には……」

まだ少し力のこもった声で、隣に座って居る四季さんから話掛けられる。

「皆、澤田君には物凄く感謝してる。けど、それとこれは話が別だから」

「はい……仰る通りです」

精神がゴリゴリと削られたためパイプ椅子にグツタリと体を預ける。

「まあ、それなりにちゃんと反省はしてるみたいだし。今日はこの辺りにしとこっかな？」

今日はっ!?いま、今日はって言った？

「と、というか……他の3人は?もう帰つたのか?」



「そうね。今日は澤田君も疲れてだろうし解散することにした」

「そりやありがたい。今日はもう色々と限界かもしれん」

「なら、澤田君の部屋に帰ろっか」

「俺の部屋……？」

あれから3か月は経ってるんだが……？

「大丈夫。ちゃんと契約し続けているから安心して？」

「まじか。なんか申し訳ない」

3か月も家賃を払うのも安くは無かっただろうに。

「ワタシが好きでしていたことだから気にしないで。帰って来た時に戻る場所が無かったら困るでしょ？」

「それは確かに。またホテル生活になるのかとばかり……」

「取り敢えず部屋に行こ？」

「分かった。それと、ありがとう」

「ん、どういたしまして」

店を出る前に明月さんとミカドさんに一言告げて店を出る。

「一応確認しておくんだけど……今日って何月何日？」

「うん？1月1日だけど？」

「そうか……。取りあえず、明けましておめでとう？」

「ん。おめでとう」

9月末かと思えば次の日は年を越していたとか、数日は感覚が狂いそうだな。

気になった何気ない事を話しながらも、住んでいた部屋に着く。

特に迷う様子も無く四季さんがポケットから鍵を取り出し、開けて中へ入る。それに続いて俺も部屋へと入る。

「それじゃあ……まずは、おかえり」

安堵するように『おかえり』と俺に告げる四季さんを見て、その言葉の意味を理解した。

「ああ……ただいま。3か月振り遅くなったけど……」

「ほんとね。でもちゃんと帰って来てくれたから許してあげる」

「寛大な心遣いに感謝します」

ほんわかとした空気が流れつつも部屋に辿り着く。

「……綺麗にしてくれてたんだな」

「まあね。ちよくちよくワタシも使ってたから」

秘密の話とかでだろう。人が居ない方が気が楽だしな。

「割と掃除もされてるし……ん？」

部屋を見渡していると、ベッドの枕元に置かれていた一冊のノートが目についた。

「……おいおいおい。まま、まさか……？」

嘘だろ？流石にこれは嘘だろ？いやいやいや、嘘だと言ってくれ。

表紙は同じでもきつと違うノートだという謎の希望を抱いて手に取る。

「……………」

パラっと中身を捲ったが、残酷な現実を直視しただけだった。

「急に固まってどうしたの……って、ああ、そのノート？」

しかも既に四季さんもご存じの……様子で……。

「あ、え、えと……、既に中身をご存じで？」

「うん？読んだけど？澤田君の前の記憶と一緒にそこに書かれてる事も参考にしてたからね」

あば、あばばばばっ！

ノートの持つ手が震え始め、嫌な汗が噴き出る。

「あつ、そういえばそれに関しても色々と気になってた」

「きき、気になったっ？」

「うん。『喫茶ステラと死神の蝶』って何？」

告げられたその一言は、俺の人生を終わらせるには充分過ぎる一言だった。

……どうやら、お店に引き続き2度目の正座が必要になりそうだ。

「あ、ああ……えっと、俺が勝手にイメージしたタイトルを……その、だな。名付けたと言いますか……」

「澤田君が？」

「そ、そうっ。自分の中で整理する時にイメージしやすい様に！」

「へえー……、そうなんだあ……」

猜疑心マックスの瞳で俺を見る。

「な、何か疑問でも？」

「ううん。それじゃあ、次」

ま、まだあるのか……。

「なんかワタシが持つてる記憶では、澤田君が視てる未来視？のイメージが何だかゲーム？アニメ？みたいにテレビ画面を見る感じだったんだけど……」

「ひっ!？」

「あれってどういう事なの？それにまるでシミュレーションゲームみたいだったし……」

「お、俺も詳しくは分からないかなあ……？自分以外に同じ人は見た事ないからそんなもんじゃないかと思うんだけど……？」

「そう？それにしてはなんか変な感じだったけど。そのノートにも書かれてる選択肢の場面とか特に」

「……………」

今すぐこの場から逃げ出したい気分であります。

「んー……、なんか隠し事してない？」

「か、隠し事とかっ、俺が四季さんにするわけないだろ？」

「何を隠してるの？」

「根拠の無い発言は控えた方が良いと思うけど……？」

「ううん、澤田君の魂と記憶を少し持つてるから分からないけど、表情で何となく考えてる事が解る気がする」

「まじで？」

「ん。マジ」

「因みに、その四季さんリーダーではどんな事が……？」

「動揺？バレたくない事を必死に隠そうと取り繕ってる感じがひしひしと伝わってくる」

「きつと故障してるだな。そのリーダーは」

「寧ろ確信に変わった気がする。話して？何をそんなに必死に隠そうとしてるの？」

真剣な表情でこちらに詰めてくる。

「い、いや……人には誰しも話せない秘密が1つや2つ……」

「怪しい。そんなに話せないこと？」

「かなり前にも言ったけど、これだけは言えない企業秘密だからな……」

「ふーん……。でも、そこまで言うなら深くは追及しないでおこうかな」

「どうやら、疑いながらも引き下がってくれたようだ。」

「バ、バレてないよな？」

「ま、それは置いといて、取りあえず今後の話をしましょ」

「ああつ、今後のね！大事だよなつ」

よし、話題が逸れてくれたっ！

「今は正月休みだけど、その休みが明けたら澤田君には前みたいに  
お店で働いて貰おうかと考えているんだけど……どう？」

「それは俺としてはありがたい提案だが……行けるのか？」

「そこら辺は平気。手続きは閣下にお問い合わせするから。ロッカーの方  
も確保済み」

「何から何まで用意周到だな」

「でも、今日以外のメンバーとはまた一からだから……そこが問題  
かな」

「その辺りは大丈夫だろ。精々涼音さんにこき使われる程度だし」

「そう？仕事内容も大丈夫だし……あつ、服は用意しておかないと  
ね」

「高嶺用の予備とかあればそれで行けると思う」

「なら心配要らなそうかな？直ぐに決める必要があるのはこのくら  
い……かな」

「了解、休み明けを楽しみにしとくよ」

「そ、それじゃあ、難しい話は終わりとして……」

先に済ませておく用事が終わると、急に恥ずかしそうに俺を見る。  
「え、えつと……」

何となく、これから話そうとしている内容が想像出来る。2人に  
とつても大事な話だろう。

「そのー」

ピンポン。

話を切り出そうとした瞬間、それを断ち切るように玄関のチャイムが鳴る。

「………来客か？」

「………」

四季さんを見ると、相手に心当たりがあるのか少し残念そうな顔をしていた。

「取り敢えず、俺が出るよ」

「うん、お願い……」

立ち上がって玄関の覗き穴から外を見る。

「あー………、なるほどね」

そこに居たのは、竜胆ルリだった。だが、ニコニコとした表情で覗き穴越しの俺と目を合わせて来た。

「確かにこれは納得の人物だ」

と言ってもスルーは出来ない為玄関を開けて招く。

「やあやあ、この世界では初めましてかな？」

「そうなるのかな？」

「どうやら彼女が上手くやってくれたみたいで僕としても一安心だよ」

「そりや良かった。それで、どういった用件で？」

「ちよーつとね、キミと奥で座ってる彼女の魂を一応確認だけ済ませておこうかと思ってるね。お邪魔しても良いかい？」

「それなら全然大丈夫だが……」

そのまま部屋まで連れて行く。

「ふむふむ、どうやらほんとに僕がお邪魔だったみたいだね」

顎に手を当てながら面白そうに四季さんを見る。当の本人は少し機嫌ナナメに見える。

「やあ、無事彼を連れ戻すのを成功したみたいだね」

「おかげさまで。この通り」

「悲しいことに、僕の印象が少し悪くなってるようで残念だよ……」

「感謝はしてるけど……遠回りさせられたからね」

「僕としては悪いとは思って無いからサクッと本題に入ろうかなー」

「本題……?」

「そうそう、今日キミ達にわざわざこの僕が直接来てあげた大事な用件さ。と言つても2人の状況を見るだけだから安心していいよ」

「俺もそこが気になってはいる。本当に俺の魂は大丈夫なのか?」

「そこに関しては問題無いから安心して大丈夫。もし問題があったのなら即座に消してたからねっ」

普通に笑顔で脅して来るなよ……。

「ま、僕ぐらいになれば何となく想像出来ちやてるんだけどね。念のためつてやつさ」

そう言いながら俺と四季さんを交互に見る。

「ふむふむ、概ね予想通りに落ち着いたと思つてもいいみたい。これなら特に問題は無さそうかな?」

「どんな感じで落ち着いているんだ?」

「そうだね。知つていた方が混乱せずに済むかもしれないね。それに、そっちの方が面白そうだしねえ」

なんだろう、急に聞きたくなくなってきた……。

「まず、彼女の魂だけど、零れた部分をキミが蝶に還つた時に取り入れた一部で補っていたけど、それが無事に安定していたんだ」

「俺の魂が……」

「そう。まあ、今日で少し元に還したから以前までとは言わないけど少し不安定になってはいるね。でもその内ミカドが持っている本来の蝶が戻ってくると思うからそこまで心配しなくても良いかな?」

「なら、大丈夫か……?」

「そしてキミの方も似たようになってるね。本来ある自分の魂と、少しだけ彼女の魂が混じり合ってる」

「お互いがお互いの魂を持つてることなのか……?」

「そう考えて貰つて良いかな。しかもどちらも不思議とそれを受け入れている。1人だけじゃなくて2人も……。これは非常に興味深いねえ……」

「いやあー、愛の力って偉大だねっ！相思相愛！ラブラブって感じだよ」

急に茶化して来るなあ、この神は。でも、隣の四季さんが恥ずかしそうに顔を伏せてるのでよくやったっ！

「僕の予想が正しければ、副産物で面白い現象が起きてるはずだけど……試してみる？」

「副産物……？現象って……どんなのだ？」

「心配はいらないさ。危険な事が一切ないのはこの僕が保証しよう」

「……」

胡散臭さが半端じゃない。

「疑われてる様で心が痛いよ。それで、その現象の内容なんだけど……」

「ああ」

「簡単に言うと、テレパシーみたいなものかな」

「テレパシー……？」

「もつと解りやすく言えば、念話って言うのかな？」

「あの、頭の中で会話するやつ？」

「そうそれ、キミ達2人は恐らくそれが可能だね」

不思議そうに四季さんと顔を見合わせる。

「百聞は一見に如かず。さっそく試してみようか」

「今から僕がキミにてきとうな数字を言う。それを君は心の中で彼女に伝えようとすれば良い」

「……分かった。試してみるのが早いもんな」

んな異世界ファンタジーご用達のスキルがあるとは思えないんだが……。

「それじゃあ、行くよっ」

四季さんから見えない位置で指を3つ立てる。

3だな。

「それじゃあ、今の数字を心の中で強く念じるようにして。そつちの彼女さんもそれを知りたいと念じるように」

「ああ、分かった……」

「え、ええ……」

今度は四季さんと向き合う。

「んじや、行くぞ?」

「う、うん……」

目を閉じて心の中で念じる。

さんっ! さー! さんさんさんさんさん! ……3ですよっ!?! サン  
シャイン! 数字の3です! ……さんさんさん晴れですよ! ……?

「……えっ?」

「分かったのか……?」

「ううん……数字なんだよね?」

「ああ、数字だが」

「なんか……太陽とか晴れとか……うるさい感じのイメージが  
……」

「ぶほっ!」

四季さんの発言に思わず吹いてしまった。

「な、なにか変だった……?」

「い、いや……何でもない……」

「どうやら無事仮説は正しかった様だねえ」

「ああ、本当のようだな……」

「えっ? 正解は? 数字じゃないのっ!」

1人だけ置いてけぼりの四季さんが慌てて問い詰めて来る。

「四季さん、太陽は英語で?」

「え? 英語? そりや、”sun” だけど……あつ、そういうこと?」

「正解。答えは数字の3ってわけ」

「つまりは……澤田君が悪ふざけをしたと?」

「大正解っ!」

「……くだらないことしないでくれる?」

「場を和ませようと……な?」

「全く持って理解出来ないんだけど?」

「神様、どうやら仮説は正しく無かったようだ」



「おやあ？おかしいな？神であるこの僕が間違っていたと……？どうやらこれは、神罰が必要みたいだね」

「おいまして、本物に言われたら冗談に聞こえないからな？」

「今後、こんなくだらない事を言わない程度にはして貰った方がいいんじゃない？」

横を見ると、揶揄う様な表情で俺を見て笑ってる。

「無慈悲な……っ!!」

「そうだねえ、僕はとても優しい神だ。罰は少しくらいで許してあげようじゃないか」

「いやほんとにするのか」

「僕のプライドが傷付いたからね。仮説を証明する為に1つアドバイスをあげようじゃないか」

「アドバイス？」

視線の先は俺では無く四季さん。

「そう。今のキミにとってもありがたいアドバイスさ  
チラツと俺を見てニヤリと口を歪ます。

「今のキミらはお互いの心の内を読もうとすればそれが可能になってしまった。それはつまり、相手の恥ずかしい秘密も例外じゃない」

「そうそう。どうやらキミの彼氏さんには人には言えない秘密があるみたいだねえ……？」

悪魔の様な爆弾を投下してきた。

「それじゃあ僕はここらで退散しようじゃないか！あまり長居するのも2人の邪魔になるし」

こ、こいつ……っ！本当に神か？悪魔の間違いだらっ！

「悪魔だなんて酷い言い方だ。僕はただ2人がもつと親密になって欲しくて言っただけなんだけどなあ？」

苦悶の表情で睨む俺を見て満足したのか、颯爽と去って行った。

そして部屋には、再び四季さんと2人きりになった。

「……………」

「……………」

お互いに無言である。

「……澤田君」

「はい……………」

「さつき言ってた話だけど」

「はい」

「ダメ？」

「……………」

駄目だ、今隣を見てはいけない。もう声だけで陥落してしまいそう  
だ。そんな中顔まで見るとなったら心が揺らぎそう。

「ねえ、どうしてこっちを見ないの？」

「今四季さんの顔を見るのは、非常に危険だと俺の中で警報が鳴り  
やまないんだ」

「ちえ…………そう簡単には墜ちないか」

くそっ！やはり狙ったのかっ!?妙に声が甘えてると思ったんだよ  
ちくしょうっ！

「でも、さつき神様が言ってたのは本当だったから、その内露見しそ  
うな気もするし…………気長に待ってようかな？」

……確かに、それは全然あり得る。

「痛いところ狙ってくるなあ…………」

「だって、そこまで秘密にしてるなら尚の事気になるでしょ？」

「気持ち分かる」

「今のままだと澤田君が隠そうとして疲れたり、ワタシに気を遣っ  
たりするくらいなら…………ここで吐いちゃった方が楽じゃない？」

「まあ…………一理ある」

「…………もしかして、重い話だったりするの？」

「い、いや、そっち系の話では無いから安心してくれ」

「だよね。どっちかって言うと…………恥ずかしい系のはずだし」

「くっ……………!」

ヤバいぞ、どんどん追い詰められてる気がしてならない。

「あっ、今焦った？」

「……そんな事はないな」  
すぐに心を落ち着かせる。

「あ、無くなった」

「というか、平然と人の考えを読もうとしてるよな？」

「ごめん、何だか楽しくてつい……」

「早速使いこなし始めてるなあ」

「超能力みたいで、ちよつとわくわくしてるのかも？」

「ならしゃーないな」

男として気持ちは分かる。

「でも、なんかまだイマイチな気がする……。例えるなら、電波が悪い感じ？」

「熟練度が低いとか？」

「なのかな？」

「あとは……直接体に触れたり？」

「直接？」

「そそ、よくある話だし」

「なるほど、直接かあ……試す価値はあるかも」  
考えるように呟くと、手を差し出して来る。

「お試しに……はい」

「……了解」

どの程度か知るためにも検証は必要だしな。  
出された手の平に自分の手を置く。

ふむ、試しに何か考えてみるか……。

ちくわ。

ちくわ大明神。

あと四季さんの手柔らかいです。

「……なんでちくわ？」

「何となく？」

どうやら交信は成功の様だな。

「それより、どう？電波の状況は？」

「あー……なんだろう？確かに直接触れてる方が解りやすい……か

も」

ほほう、じゃあ、ちくわのイメージを……。

「だからなんでちくわなのっ!？」

「何となく?」

「あー、なんか頭にちくわのイメージが来て不気味かも……」

「以心伝心とはまさにこの事だな」

「残念ながらね……」

逆に、四季さんは何を考えてるのだろうか?

やはり気になってしまうのでこちらも意識を集中してみる。

『んんんー……なんでここでちくわなの?もつと考えることがある  
でしょ……』

ぐもつともで。

『それにしても、こうやってお互いに手を重ねて無言で居るって  
……なんかドキドキしてきたかも』

『うう……なんかワタシだけこんなこと考えてるのかな……?さつき  
きのちくわ以降何も聞こえないし……』

『なんか壁?みたいに見られないようしてるのかな?考えを読まれない  
様に心を静める的な……』

『そ、それなら今ワタシの方を読まれたりしたら……って、さつきから  
澤田君無言だけど……ん?無言?』

「ツ!!」

突然四季さんが素早い動きで手を引く。あ、バレたか。

「……み、見た?聞いた?」

「何をだ?」

「そっちも、ワタシの心を読もうとしたでしょ!？」

「まあ、フェアじゃないと思って軽くは……」

「つゝゝゝ!ど、どこまで見たのっ!？」

「何処までって、恥ずかしがることはないんじゃないか?俺も四季  
さんと手を重ねてドキドキしてたし」

「あ、ああ……っ」

みるみる顔が赤くなる。

「大丈夫。滅茶苦茶可愛かったから！」

「勝手に見るなあ!!」

それは理不尽では？

「てか！そっちは全然読めなかったんですけど!?何？ちくわって！」

「へえ。となると、冷静さを保てば聞こえないのかもな」

あれか？強い感情が表に出てくる的なパターンなのかもな。

「……ずるい」

「へ？」

「ワタシだけ一方的に知られるのは不平等」

「そう言われてもなあ……」

「冷静さを、無くさせれば良いんでしょ？」

「な、何をする気だ？」

標的を捕えた様な表情でこちらを見る。それを見て本能的に後ろに下がってしまう。

「このままだと、負けたみたいでなんか悔しい」

拗ねたように言うと、立ち上がって俺の後ろに回る。

「………、ふー………」

背後で一度深呼吸をし、そのまま背中から手を回す様に抱き着いて来た。

「あ、あの……？しし四季さん？」

「何？」

「これはちと、強引では……？」

「これ位が必要と判断しただけ」

「い、いやあ……これは流石に……」

「ふふ、流石の澤田君でも動揺する？」

「男なら誰でもすると思います……」

「……どうやらそうみたいね」

「読まれました？」

「ううん、読まなくても声だけで充分伝わって来たから」

「際ですか……」

なんだこの状況は……。

「はあ……落ち着くう」

後ろの四季さんはまるで温泉に浸かった様な声を出す。くそエロいなっ！

「別に、エロくないと思うけど?」

「おっと」

これは簡単に心を読まれているなあ。気を付けないと。

「どう?ドキドキしてる?」

「そりゃあ……かなりしてますとも」

「そ。ワタシも同じ」

そう言って俺の背中に耳を当てる。

「んー……あつ、ほんとだ。鼓動が早い」

「この状況で緊張してなかったら別の問題があると思う」

「別の?」

女に興味が無い的な奴だな。

「あー、そっち系の人ね」

うん、さらっと読んでますね。

「というか、四季さん?いつまでこのままで……」

「ん?もしかして嫌だった?」

「んな事は無いんだが、証明には充分かなと思ってます。いや、全然

俺としては良いんだが」

「んー……ならもう少しこうしてようかな?」

「……仰せのままに」

役得と言うか、ありがたいし……。

「そういえば、そっちは今後どうしていくつもり?」

「と、言いますと?」

「ほら、ワタシや明月さんの件は無事に終わったでしょ?他にも何かやる事あるのかなあって気になって」

「今後ねえ……。この瞬間は特に考えてはいないな。数日はゆっくりするつもりだったけど」

まずお店の状況をしっかり見ておかないとな。ここだと、俺は一番

の下っ端になる訳だし。

「四季さんの魂が安定するまではゆったりするのも悪くないかな」

「ワタシの魂？」

「まだミカドさんの所に居るんだろ？」

「そうみたい。ま、その内戻って来るらしいからそんなに心配はしてないかな？」

戻って来る条件ってあったっけ？前向きになれば……とかだったけど、まだクリアしないといけないイベントとかが？

「何？まだする事があるの？」

「あー……、どうだろ？一応しておいた方が良いのかなって気になっただけ」

後、そうなると汐山弟にも恋人が出来るし……結構手伝って貰ったからそのくらいの恩返しもしておきたいな。

それなら、病院に行って……てか、この世界だと俺と深山先生と面識無いな。結菜ちゃん経由で話せば大丈夫か？ケーキとかの差し入れ持つてけば登山家の子とも接点出来る可能性はあるし……。

「……なんか、一気に色んな考えが来てごちゃごちゃしてる」

「すまん。ちよつと考え事してた」

「まだしておきたい事が色々あるってのは、何となく解った」

「その時が来たら詳しく話すよ」

「よろしく」

サプライズ……とかも良いかもしれないけど、四季さんそういうの好きじゃないだろうし。ここは素直に教えるのが吉だろう。

—新訳—第41話：幸福と降伏

「……………」

さて、話はてきとうに一区切りついたわけだが、ここは俺から先に言い出すのが良いのだろうか？

さつきは来客で中断されたが、ふやむやにするのは良くないよな。……よし。

「ふうー……………」

話を始めるまでに深呼吸をして気合を入れる。

「四季さん、ちよつと良いか？」

「ん？どうしたの？」

背中に居る四季さんを一旦剥がして正面で向き合う。

「大事な話があるんだ。俺と、四季さんにとっての……………」

「え？大事な……………」

「そう。さつきは来客が来たせいで話が途中で折れたと思うけど、俺から先に言っておきたいんだが……………良いか？」

「あつ……………」

俺がこれから何を言い出すのか察したのか、驚いた様に目を開き、次第にもじもじと恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「う、うん……………。そっちから、先にどうぞ……………」

聞き入れる覚悟が出来たのか、目を閉じて口を堅く閉じる。

「…………俺、四季さんの事が好きだ」

自分が思っていたよりも、すんなりとその言葉が口から出る。

「ツー！」

それを聞いて正面の四季さんが体を強張らせる。

「3度目の人生が来てようやく伝える事が出来るこの想いを、四季さんに受け止めてほしい」

「好きな人と、寄り添って生きて行きたい」

「俺と、付き合ってくれ」

なるべく簡潔にまとめようとしたが、割と心臓がやばい。そのせい



でろくに頭が回っていない。

「……………」

俺の告白を聞いて、ゆっくりと顔をあげる。

「長かった……………」

ポツリと言葉を零す。

「今日までの3か月、すっごく長かった。会えない間に何度も好きな人の声を聞きたいって思った」

「また会いたい、話したいって何度も……。次会う時は、ちゃんとワタシから好きって言って、恋人にしてもらうって決めてた」

「けど、先に言われちゃったなあ……………」

「すまん。男の俺から言うべきかと思っただけ……………」

「ううん。嬉しかった。両想いって分かってるから、返事なんて決まってるって考えてたけど……………想像していた以上に嬉しくて、凄くドキドキしてる」

「もつと沢山、言いたいことはあるけど……………うん。ワタシも澤田君の事が好き。だから、返事は付き合う」

「ごめん、随分と長く待たせた」

「謝らなくていい。今日の為に頑張ったんだから、お礼の方が嬉しい」

「……………ありがとな。もう一度会いに来てくれて。俺を連れ戻してくれて」

「うん。けど、好きな人に会いたって思うのは当たり前のこと。それよりも……………隣、行っても良い？」

頬を赤く染め、恥ずかしそうに上目遣いでこちらを見てくる。

「あ、ああ……………全然良いが……………」

その破壊力に思考が停止しかける。

「ありがと」

もそもそと隣へ寄って来て、そのまま肩に頭を乗せてくる。

「なんか、やっとここまで来たって感じがして……………今、凄く安心した」

「俺が居ない間の話がまだまだあるみたいだな」

「当然でしょ？お店でも話したけど、あんなの簡単に話したただけからね？」

あれでっ!?結構詰め込まれてたと思っただが……?

「全然足りない。だから今日はとことん付き合って貰うからね？」

「お手柔らかにお願いします……」

「そこは澤田君の態度次第かなあ？」

「何なりとお申し付けくださいませ」

「それじゃあ……、ワタシが今して欲しい事を当てたら、考えてあげても……良いかな？」

四季さんがして欲しい事？

心を読めと言ってるのかと思っただけ四季さんの方を見る。すると、そこには何かを期待するようにこちらを見つめている。

……なるほど、これは凄く解りやすい。心を読むまでもなかった。いつかの忘れ物をしていた時と同じ目をしていた。

「四季さん……」

こちら目も合わせて顔に手を添えると、ゆつくりとその目を閉じた。

「んっ……んんっ……」

そして、そのまま唇にキスをする。

「んむ……ん……ん……」

至近距離だからか、不思議な程いい匂いがする。さつきもくつついていた時にしていたが、それを遥かに上回る。

「ん、んちゅ……んんっ」

「……ん、ぷはっ、はあ、はあ……」

どのくらい続けるのか分からず、取り敢えず一旦離れる。

「……情状酌量の余地はありそうか？」

「んー……、残念だけど、まだ足りない……」

「なら、もっとしないとイケないな」

「うん、その通り」

再度、四季さんの顔に手を添え、唇を重ねる。

「んっ……」

四季さんが嬉しそうな声を漏らす。今の声ヤバいな……。

「んんっ、んっつ……んんっ……すき、ん……んっ」

「俺も好きだ」

好きと言って来てくれた四季さんに返事をして再開する。

「っんん、ん……うれしい……んんっ」

そのまま暫く、お互いが満足するまでキスを繰り返す。

「……………」

「……………」

そしてそれを終えて、少し気まずい空気が流れる。

「ね、ねえ……澤田君」

「な、なんだ？」

「今日、ここに泊まっても良いかな……？」

「……それってさ」

「うん。澤田君が考えてる通りで当たってる」

「良いのか？」

「ワタシがそう望んでるの。好きな人として欲しいって……そっちは、したくないの……？」

そりゃ、滅茶苦茶したいに決まってますともっ！今の興奮でさいならとかお預けもいとこだ。

「そう。なら良かった……」

「さらっと、心を読んで来ますなあ……」

「ごめんごめん、なんかこっちの方が気持ちをハッキリと聞けるからっ……」

「まあ、嫌じゃないから良いんだけどさ……」

「それに、澤田君はワタシが望んだことなら何でも手伝ってくれるんでしょ？」

あの日の事か。

「その言い方だと、ちょっと語弊があるな」

「語弊……？」

「今からすることは、四季さんだけじゃなくて俺も望んでるってこと。俺も四季さんと先に進みたいと思ってる」

「……口に出さないと思ったら、急に言い出すんだから……」  
クリティカルヒットだったのか、もじもじと顔を伏せて声が小さく  
なっていく。

今、四季さんの心はどんな感じなんだろうか？

「……四季さん、今、読んでも良い？」

「ツ!?だ、だめっ！絶対駄目だからっ!!今は駄目っ！」

想像通りの反応が返ってきた。

「いや、俺ばかり見られるのは不平等だしさ、たまにはこっちも見て  
みたいなあつて……」

「待って、今はほんとに駄目だからっ！」

恥ずかしそうにこちらに手をブンブンと振る。それを見て、手をワ  
キワキさせながら近寄る。

「ちよ、ちよっど?」

正直、読まなくても今の反応だけで充分ご馳走様って感じである。  
恥ずかしそうにいやいやとしている四季さんがくっこそ可愛いのであ  
る。

「うう……、そう来るなら……っ」

きゅつと目と口を閉じて何かを念じるように体を固める。

「……?」

なんか防御の態勢に入ったが……?

気になって試しに心の中を覗いて見る。

『無っ！何も考えてないっ！心を落ち着かせないと……！読まれな  
い様に……っ。何も考えてない……!』

……ははーん、なるほどね。そうやって妨害すると……確かに効果  
あるかも。

「四季さん……好きだよ」

顔を耳に近づけて囁くように呟く。

「ツ!?!」

「大好き。愛してる……」

「ツ……!?!」

俺にもいくらかダメージは入るが……どれどれ?

『み、耳元で……っ!?ずるい……!!で、でも、結構良いかも……?全身が痺れるみたいな感じ……頭がふわふわするう……はっ!!』

『だ、駄目っ。しっかりと気を持たないと……!さつきも急にワタシが嬉しくなるようなセリフを沢山言っ来て……。そんなこと言われたら我慢とか出来なくなっちゃうでしょっ!!』

あー……なるほど、なるほどねえ。これは想像以上にダイレクトに感情が伝わってくるな……。

言葉じゃなくて相手の感情を読んでるからか?取りあえず、四季さんが言っただ意味が理解出来た。これは危険だ。

なんせ相手の感情がこっちにまで来るんだから、当然それに感化される。

「あー……四季さん?」

「っ!……な、なに?」

「するなら夜に……っって考えていたんだが、その、今からしたいって言ったらどうする?」

「い、今から……?」

「ああ……」

「我慢、出来そうにない……?」

「残念ながら」

「そ、そう……。よ、夜まで我慢させるのは可哀そうだし、澤田君がそこまで言うなら……い、今からでも……っ」

「ありがとう……。それじゃあ、ちよつとそこのコンビニまで行ってくるよ」

「コンビニ?どうして?」

「いや、前の世界とは違っ流石に避妊はしておかないといけないだろう?部屋に置いて無いし買ってこないと……」

「あつ、そういうことね。それなら心配要らない」

「……?どういう意味だ?もしかして四季さんが既に準備済み?」

「違う。その、ゴム……しなくても、ちゃんと対策はしてるって……こと」

「……別の方法を?」

「……う、うん。今日澤田君とするって決めてたから……」  
事前に準備は済ませていたってことだったのか……。

「それじゃあ、今から……良いか？」

「そ、その前につ、先にシャワー浴びて来てもいい？」

「全然大丈夫。それくらい余裕で待てるから行って来てくれ」

「ありがと……じゃあ、少し席外すね？」

そう言つて立ち上がり風呂場へ向かつて行つた。

……なんか、俺の部屋だと思ふのだが使い慣れてる感があるな。  
まあ、当然か。

別の事を考えながら気を紛らわせる。

「……ふう、落ち着こう。気持ち静め……はしないが冷静に……」  
前の世界とは状況も違う。お互いに隔てる物が無いのだ。素直に  
求める……本来はそうあるべきだったんだろう。

「まさか、復活初日でこんなことになるとはな……」

しかも、四季さんに至つては最初から今日する気でいたらしい。気  
合の入りが違う。

「滅茶苦茶嬉しいのは嬉しい……、まさか本当に四季さんとこんな  
関係になるとか、この世界に来た時は考えもしなかったが……」  
風呂場からシャワーの音が聞こえ始める。

「いや、いやいや……。これはマズイ。色々と期待で心臓が持ちそ  
うにないぞ……」

とにかく気を……。

「あつ、そういえばこいつどうしようか……」

目に付いたのは追及された一冊のノート。

「……話すべきか、このまま貫き通すべきか」

だが、流石に正直に話すのは気が引けるぞ？なんて言えば良い？  
ゲームの世界。しかもエロゲなど真面目な顔で言えるか？いや無理。  
別の意味でドキドキが止まらなくなる。

このまま未来予知路線でやんわりと話すのが吉かもしれない。

「でもなあ……」

その内誤魔化しが効かなくなるのは目に見えてるし……。

俺が居た前の世界ではこの世界はゲーム上の存在だった。その世界に迷い込んだからこれまでの出来事を事前に知っていたって流れで……。

……最悪、エロゲって事を隠せば、いけるか？ 仮にバレても一番危険がバレなければセーフ？

「ここは敢えて俺から言い出すことで、信用してもらおう路線で……」どこか落ち着いた時に真剣な空気で切り出そう。そうすればそれが真実として受け取ってもらえる。よし、これならいけそう。

「遅くても明日には話す方向で行こう。相手に変に感づかれるより話した方が都合が良いはず」

方針を決めて自分を納得させる。

気が付くと、シャワーの流れる音が止んでおり、人の動く気配がしている。となると、そろそろ四季さんが出てくることになる。

「……これは、なんて言うか……」

これからの事を考えると、本当に色々とヤバいな。

そうこうしている内に、遂に四季さんが部屋に戻って来る。よく分からない気を遣い、入口に背を向けておく。

「お、おかえり……」

「ただ、いま……」

これからどんな流れで進めようかと考えていると、部屋の電気が消される。

「電気、消しても大丈夫でしょ……？」

「どうぞどうぞ」

「消したけど、まだちょっと明るい……かな」

まあ、完全に夜って訳では無いからな。夕暮れが過ぎて日が沈みかけてる程度だし。

「でも、結局そつちには見えるしあんまり意味は無いかも……」

それは……そう。でも雰囲気としては大事だと思います。はい。後ろから動く気配を感じ、そのままベットへとたどり着く。

ギシリ……と軋む音が部屋に響く。

「えっと……、もう、こつち見ても大丈夫だから」

恥ずかしそうに呟く四季さんの声を聞いてゆっくりと顔を上げる。立ち上がって視線を向けると、そこには下着姿でこちらを見つめている姿が目に入った。

「……………」

ドクン、と心臓が跳ねたのが自分でもわかった。

淡い紫色の下着だけを身に纏い、恥ずかしそうに身を寄せながらもベツトに横たわっている四季さんが居た。

「な、何か言って貰わないと……………」、困るんだけど……………」

「す、すまん……………」あまりにも魅力的な姿に思考が止まつてた……………」

「そ、そう……………」

「ああ……………」というか、今の俺の思考を読んだら一発だと思うんだが……………」

「い、いま心を見たらっ、頭がどうにかなる自信しか無いから……………」  
今でも限界なのに……………」

確かに……………。自分だけでもこういうのに、相手までのとなった時には……………。うん、キヤパ超えるな。

ベツトに乗り上がる。

改めて四季さんの姿を見る。……………下着姿って滅茶苦茶エロいな。個人的には着衣状態からのチラ見とか結構クると思ってたけど、好きな人のなら何でもエロく見えるって本当だったんだな……………。

肌とか裸姿とか宿屋で見ているが、それでも今が一番興奮していると思う。いや、ほんとエロいなっ!!

「ガン見し過ぎ……………。目が血走ってない?」

「こんな姿を見せられて、見るなって言うのは無理があるのだが……………」

「恥ずかしんだからあまり見ないで……………」

「ごめん、それは無理な願い。」

でも、いつまでもそのままって訳にも行かないし、次に進まないとな。

「四季さん、それじゃあそろそろ……………」

「う、うん……………」お願い」



まるで初めての様に恥じらう。いや、この世界では初めてだから正しいんだけどね。

「なんか、記憶では既に経験済みだけど、それでも凄く恥ずかしい……」

「分かる。今ちようどそのこと考えてた」

「そうなんだ……ふっ、ちよつと嬉しいかも」

相手の心を読まなくても同じ事を考えていたことに嬉しそうに微笑む。

……あー……、頑張つて冷静になろうとしているのにさー、そんな可愛く笑つて来るとか卑怯だろうが……。

「……ねえ、澤田君」

「ん？どうした？」

少し困つた様な表情でこちらを見る。

「そうやって無理に、冷静さを保とうとして我慢しないでいいから……」

「……いや、初めてだしさ、それなりに……な？」

「気持ちは嬉しいけど、変に気を遣われると、こう……なんか嫌。もやつとする」

「また、なんとも難題な問題を……」

「だから、したい様にして？ううん、してほしい」

「……分かった。善処する」

俺の事を想つての言い回し方……それなら、俺も変に抑えるのは失礼つて物かもしれない。

「じゃ、じゃあ……進めるぞ？」

「うん……きて？」

期待するような瞳で俺を見る。

静かな部屋に聞こえる2人の息遣いを耳で感じ取りながら、ゆつくりとその肌の手を伸ばした。

「……………」

「……………」

夜も遅くなり、互いに色々と落ち着いてきたタイミングで、無言で顔を合わせる。

「ねえ……………澤田君」

「……………ああ、言いたい事は俺も多分同じだ」

現在、どちらとも完全に考えを読むのをシャットアウトしている。その原因は——。

「し、暫くはするの、止めといた方が良いかも……………」

「少なくとも、この力を完全に制御出来るようになるまでは、なるべく控えた方が良いかも……………」

顔を合わせた四季さんはぐったりした姿勢で苦笑いをしている。俺も似たような表情だろう。

「まさか、俺もガバガバになってしまおうとは……………」

冷静に考えればそうなって当然だった。

体で接触した方が読みやすく、感情の高ぶりで伝わる強さとかが変動するなら、一番その条件が揃うのは……………」

「なんか、もう……………頭とか訳わかんなくなつて大変だった……………」

「本当にな……………」

トリップ状態なのだろうか？お互いの思考が混じるが、相手を求めているのはどちらも同じ。さらに快感と来て何が何だか分からん感じだったなあ……………」

「まさに止まることの知らない獣つて感じだったな」

「……………言葉で言われると尚更恥ずかしいから」

「身体とか、色々大丈夫か？」

「あ……………ちよつとは頭は戻つて来たかも？身体の方は……………もう暫くはダメかも。力入らない」

「……………ほんとすまん。そのまま安静にしててくれ」

「気にしないで。好きって気持ちしが伝わって凄く嬉しかったし……………」

その、気持ち良かったから……………」

「供給過多だったと思うけどなあ……………」

「それはほんとにそう。だから、次はもつと気を付けないとね……」  
さらっと次の約束も取り付けているが……、多分まだ頭の中がふわふわした感じなのだろう。

「この後の予定とかあったりする？」

「この後？んー……特に考えて無かったなあ。泊まるってことだけは確定させてたくらい」

「お腹とかは？空いて無いか？」

「あー……疲労で麻痺してるかもしれないけど、多分空いてると、思う」

「んじゃ、もう少しして何か買ってこようか？」

「あつ、待つて。食材なら買ってあるから」

「まじか」

「また澤田君にご飯食べさせたかったからね。因みにですが、メニューは何でしょうか？」

挑戦的な笑みでこちらを見てくる。

内容か……。

「……前はハンバーグだったから、今回は唐揚げか？」

「うん、正解。ちゃんと覚えていて安心した」

「もしかして既に下準備は終えてたり……？」

「当然。後は粉でまぶして揚げるだけだからそんなに時間はかからないと思う」

「……でも、動けるか？」

「それが一番の問題なんだけどね……」

ここで、『俺が代わりにしようか？』って言うのは野暮だろう。折角用意してくれているんだから。

「それなら、四季さんが回復するまでこのまま横になっておこうかな」

「ありがと。てつきり、そっちが代わりにするとか言うかと思った」  
「考えはしたけどな。でも今日の為に考えてくれたのを取るのとは違うなって思ったからお任せします」

「ん、任せられました。と言っても普通の唐揚げなんだけどね……」

「最初に口にするのが四季さんの手料理っただけで人生最高の日だからなあ」

「んな、大げさな……っって言いたい所だけど、本気で考えてそう」「本気だしな」

「ご期待に沿えるように作ってあげる」

「楽しみにしてる」

……さてさて、良い感じの雰囲気になった所で、そろそろ切り出すのも悪くないか？

「ところで四季さんや」

「ん？どうしたの？」

「少し真面目なお話をしても？」

「え、うん。良いけど……急に何？」

「いや、どこで話そうか迷ったけど、早めにしておいた方が良かったと思ってさ……俺が秘密にしている内容についてのことです」

「っっていうと……、夕方の件？」

「そそ、それ。四季さんには話しておこうかなって思ってたさ」

「それは……嬉しいけど。どうしてまた話す気になったの？」

「ぶっちゃけ、話して信じて貰えるかと……あまり話したくなかったからとかあったけど、その内露見しちゃうしな」

「ワタシはああ言ったけど、無理に話さなくても大丈夫。それでも続ける？」

「そうだな。四季さんには言っておきたい。その方が今後役に立つかもしれないしな」

「ここまでは順調だ。このまま乗り切って見せよう。」

「……分かった。それじゃあ、聞かせて？」

「まずは……そうだな。これまで事あるごとに話してた未来視って言ってたことなんだけど……」

「うん、沢山助けて貰ったあれだよな」

「実は、未来視とかではないんだ」

「違うの？」

「見方によればそうとも言えるけど……俺としてはそんな便利な力

とは思ってなくてな」

「それも何度も言ってたよね？頼り過ぎるなーって」

「実際は、視てるわけではなくて知ってただけなんだよ」

「知ってた……？」

「なんて言えば良いのか……、超能力とかそんなのじゃなくて、ただただお店や皆に起こる事を知っていただけと言いますか……」

「……それを、前の世界で知ってたの？」

「そういう事になるな」

「えっと、なんで知ってたの？って聞いてもいい？」

「当然の疑問だしな。ここからが本題なんだけど……」

「う、うん……」

俺の真剣そうな声を聞いて四季さんも息をのむ。

「俺が居た世界ではな、四季さん達が居るこの世界……正確にはあのお店でのこれまでの出来事が、その……ゲームとしてあったんだ……」

「ゲ、ゲーム……？」

「そう、あのゲーム。娯楽のな」

「え、えっと、澤田君が元々居た世界では……この世界がゲームとしてあったの？」

「ざっくり言えば……そうなる」

「突然のことで驚いたけど……、で、でも、なんか納得する部分も割と多いかも……」

「意外と、すんなり受け止めてるな……」

「だって、ワタシの中にある記憶では、確かにゲームみたいだなんて思ってたし、本人の口から言われれば嫌でも納得もする」

「問い詰めて来た時も聞いてたしなあ……」

「すつごく焦ってたしね」

「そりゃ焦りますとも……」

「それで？そのワタシ達が出てくるゲーム？をしたことがあったから起こる出来事を知っていたってことで良いの？」

「そうなります。だから、既に知っている事しか知らなかったんだ」

「……なるほどね。となると、前の世界での出来事って色々想定外の連発だったんだ」

「ほんとそれ」

「それでも上手くあそこまで持つて行ったんだからよく出来た方なんじゃないの？」

「そう言ってもらえると助かります……」

「あのノートに書かれてた内容は、ゲームで起きた出来事だったで良いんだよね？」

「そうなるな。100%書き込めてるかは怪しいけど」

「……ふーん。ってことは、あの内容は高嶺君がしていた感じかあ」

「……やっぱり気づくよなあ」

「今までの流れを考えれば流石にね。澤田君が高嶺君に色々として来たのはそういう意味も含んでいたってことね」

「その通りでございます」

「……だから、誰よりも不可思議な存在……ね」

「ん？」

「覚えてる？前に明月さんのベットでワタシが寝る時に話した内容のこと」

「……ああ、あの件の翌日のことだよな？」

「うん。距離を置こうとしたワタシに対して、我儘や夢を叶えるのに協力するって最初に言ってくれた話」

「あつたな……そんなことも」

「確か変な遠慮させないように色々と言った気がするが……」

「あれは、本当なら自分が存在しない世界にいることに対して言っていたんだなあって、今更ながら思ってたね」

「まあ、そうだなあ」

「その通りなんだけど、指摘されると少し恥ずかしいと言いますか……。カッコつけて言った感じだし。」

「……今も、そんな風に考えてたり、する？」

「……正直、少しはな。前の世界は俺が存在したことで色々面倒事を持ち込んでしまったわけだし、この世界でもそうならない保証

があるわけじゃない」

「そう……」

「……でも」

「でも？」

「少なくともこの世界では、死ぬその瞬間までは精一杯生きて行くつもりだ。望んだ世界で、好きな人と笑いながら……一緒にな」

「……へえ、一体誰となんだろうね」

「揶揄うように笑いながらこちらを見る。言わせたいって感じが出て超可愛いのですが?!」

「そりゃ、今一緒に横になりながらお喋りしている素敵なお友達とな。四季さん以外居ないだろう？」

「寧ろ、ここで他の名前とか出してたら冗談でも刺してたかも」間違った選択肢でバットエンド行きだよ。

「でも、少なくとも前向きに考えててちよつと安心した」

「以前のままならそう考えてたけど、約束したしな」

「約束？誰と？」

「母親とな」

「えっ？どういうこと？澤田君のお母さん？会ったの？どこで？」

「四季さんに起こされるまでの夢の中でちよつとな。まあ、こつちも色々とおつた感じだ」

「そうなんだ……。後で詳しく聞いても良い？」

「勿論。四季さんにも知る権利はあるしな。というか聞いて欲しいくらいだ」

「多分驚きそうだしな。」

と、話は結構逸れてしまってるが……まあいいか。四季さんの方は割とすんなり受け入れてくれてるし、このまま流しても……。

「そうだ。ワタシからも聞きたい事があったんだけど……良い？」

「俺に答えられる範囲なら何でもどうぞ」

「ん。ありがと。それじゃあ遠慮なく」

目を閉じて一度頷いてからこちらを見る。

「恋愛シミュレーションゲームって、何の事を指してるの？」

—新訳—第42話：〇〇二ウム？

「恋愛シミュレーションゲームって、何の事を指してるの？」  
その言葉を聞いて、一瞬頭の中が真っ白になった。

「……恋愛、シミュレーション、ゲーム……？」  
聞き間違いかと思い、試しに聞き返す。

「うん、何に対して言ってたんだろうって気になって」

「……え、えつとお、どこでそんな単語を？」

「澤田君の頭の中から。その、さつき……していた時に……イメー  
ジが、その……」

若干恥じらいと共に真実が明かされる。

「……」

だよねっ！俺しかいないよねっ！！くそがあ！！確かに制御出来てな  
かったし四季さんとシてたから勝手にそう考えるのも仕方ないかも  
しれないけどさあ！！

「そ、それに……なんか、ワタシが裸とか、ウェイトレス姿とか……」  
「……」

「べ、別にそういうのが好きとか、して欲しいって思う事に対して嫌  
とかは思ったりはしてないから。してないけど……さつきの話を聞  
いて、澤田君からのイメージがその……ゲームでのワタシ？みたいな  
イメージだったし、もしかしてそういうゲームだったのかなって思っ  
て……」

「すううー……さーて、ちよつとコンビニでも行こうかなあ？」  
言い逃れが出来そうにも無いので戦略的撤退をーー。

「逃げない」

ベットから抜け出そうと体を起こした俺の手が握られた。

「……どうやら凶星みたいね」

「四季さんが何の話をしているのか俺にはさっぱりだなあ？」

「すけべえなゲームだったと……？」

「いやいや、んなわけ……。健全なゲームですとも……」



背中に嫌な汗が流れる。

「その、エロゲ？って言うの？そういうゲームって」

「ま、またもそんな単語を一体何処で……」

「さっきと同じだけど？」

「……」

あばばばb。

「否定しないって事は、認めるってことで良いの？」

「チガイマスヨ」

「なんで急にカタコトに……」

「オレ、シラナイ。シラナイ」

「その言い方が認めてる様なものなんだけどね……」

「……」

ああ……終わった。少し前の俺の心を隔離したい。高嶺の奇跡貸してくれないかなあ……？

遠い目をしながら上を見上げる。後ろでこっちを見ているであろう四季さんの視線が恐ろしい。

「……はあ。別に責めたり軽蔑したりしないから。こっちを向いて」

「……はい」

逃げ場は無いし、後は好きにしてくれ。

「凄く落ち込んでるように見えるけど、そんなに知られたくなかったの？」

「そりゃあ……まあ」

「それもそっか。男の子なら普通は知られたくないか」

「はい」

「それで？認めるの？」

「……認めます」

「ふーん。ワタシは澤田君がしたそのゲームとか詳しくないからよくわかんないけど、恋愛？をするゲームなの？」

「そんな感じですよ。主人公がその、女の子とそれぞれの物語を紡いでいく感じのやつですよ」

「へえー……それがワタシ達ごとにあるってこと？」

「そうですね、はい」

「それで、それを高嶺君が？」

「……はい」

「そうなんだ。だから澤田君は高嶺君と明月さんを選んだってわけ？」

「明月さんにも幸せになって欲しかったので……選びました」

「ふーん……ま、別に怒ってたりしてないから、変に畏まらないで」

「そ、そうか……？」

「別に、澤田君がどんなゲームをしていたとか勝手だしね。それに、そのおかげで助けられた訳だし……責めるのはおかしいでしょ？」

「そ、そうとも取れるか……？」

「ここはゲームじゃなくて現実だし、ワタシは自分の意志で澤田君を選んだから別にそこまで気にしてないかな？」

「まじか……」

「それに、澤田君もワタシを選んでくれたわけでしょ？皆の中から」

「それはもうその通りです」

「お店に居る皆ってほら、可愛いでしょ？それでもワタシを好きでいてくれて、一緒に居ることを選んでくれたんだから……それだけで充分」

嬉しそうに笑う。反則級の笑顔だぞっ！

「そりゃ……確かにそれぞれ魅力はあるのはあるが、それでも一番……というか、俺の中でぶつちぎって好きだったのが四季さんだったからなあ」

「それは流石に言い過ぎでしょ」

「これでも控えめな位だ」

「因みにだけど、ワタシのどんなところに惚れたの？」

「一杯あり過ぎて言い表せられないが……ギャップとか？あと蔑む様な声とか視線？恥ずかしそうに睨む顔とか、声もそうだし甘える所とかも……」

色々と思いついて考えが纏まらないな。

「ストップ、タイム。もう良いから」

「ありや、そうか？」

「澤田君らしい回答ありがと。あとこれ以上は恥ずかしくて死にそう……」

「あつ、あと割と黒髪とかも好きだし。しかも黒髪ロング。四季さんの髪って綺麗だしさ」

「もう充分って言ったでしょっ!? 追撃止めっ!」

あとすけべえなところろ? 探求心あるし……。

「ああ、でも……」

「で、でも?」

「本物はゲームで見えていた以上に魅力的だったって事は確実に言える。想像の7億倍は可愛い」

「くっくっ! だからっ! もう分かったからっ!」

首元まで真っ赤にした顔で叫ぶ。うん。やっぱり超可愛いです。ご馳走様です。

「ああもうっ! 恥ずかしくてどうにかなりそうでしょ!!」

ボスンツ。っと枕に顔を埋めて手をバンバンと叩く。

「聞きたい事は聞けた?」

「オーバーキルってくらいにはね……。軽く言われる程度を期待してたのに……」

籠った声で呟く。いやいや、軽くとか何を仰っていますか。魅力の塊さんよ。

「……ふうー……顔が熱い……」

少し落ち着いた様で枕から顔を上げる。

「とにかく、さっきも言ったけど、別に怒ったりはしないから安心して?」

「感謝いたします」

「あ、でも……今後はそういうゲームは禁止だからね?」

「ア、ハイ」

それもそうですよね。

「ワタシが居るのに、そんなゲームするとか……普通に妬く。嫉妬

しまくる」

「大丈夫。しません」

「ん、信用する」

「信用されますとも」

「もししたら、両目潰すから」

「……仰せのままに」

自分への誓いとして指切りをしておく。

「よし、それじゃあそろそろ起きようかな……？」

「多少は回復したか？」

「動ける程度にはね、あ、先に軽く汗流しても良い？」

「どうぞどうぞ。後で俺もそうしようかな」

隣で体を起こした四季さんが恥ずかしそうに布団で肌を隠す。

「ちよ、ちよつと、あまりじろじろと見ない」

「恥じらう姿が可愛いくてつい……」

「当然でしょっ、裸を見られたからと言ってても、普通に恥ずかしいんだから」

「すまんすまん」

ベットから出る四季さんから視線を外す。

「電気付いてないけど、この距離なら大丈夫かな……」

電気を点けずにそのまま部屋から出ようとする四季さんの足が止まる。

「ん？どうかしたのか？」

「ねえ、澤田君……」

ゆっくりこちらを向く。

「ん？何？」

「さっきの話を続きなんだけどね……」

「うむ」

「その、エッチなゲームなんでしょ？ワタシの裸とかの絵があった位なんだし……」

「そ、そうなるな……」

待て、何だかマズイ流れに感じる。

「ノートにも書かれてみたいにワタシ以外にもお店で働いてる人達全員なんでしょ？」

「……………」

「それってつまり……、他の子の裸や、他にも色んな場面を……見たってこと……？」

「……さあてと、四季さんがシャワー浴びてる間にコンビニでも行っってこようかなあ？」

「おい」

とぼけるように顔を逸らすと、聞き馴染みのある声で呼ばれる。ああ……きつと相手を射抜くような視線なんだろうなあ。

「良いから答えて」

「……………」

「無言は肯定と取る。で良いんだっけ？」

「その通りでございます」

取りあえず反省の意を込めてその場で土下座しておく。

「はあ……ほんとってことね……」

「誠に申し訳ございません」

「別に謝る必要は無いから。言っても仕方のない事だし……まあ？かなりもやっとしてるけど」

正面の四季さんの纏う雰囲気や和らいだ気がした。

「責めはしない。それは自分で言った事だしね。だから、ワタシがシャワーから上がるまでに全部頭から忘れること？良い？」

「分かりましたっ！」

「ワタシも戻ってくるまでに気にしない様にするから。それじゃあ行っってくる」

「了解です」

風呂場へ入っって行ったのを確認して全身から力を抜く。

な、なんかなくなった……でいいのか？兎にも角にも、危機は乗り越えれた？暫くはチクチクと言われることは覚悟しておこう。後、そのフオローもしておこう。

最大の壁を生きて乗り越えれたことに安堵する。後は時間が解決

してくれるはず……っ！きつと！

「またもや変な汗を掻いてしまったことに苦笑いしながら、四季さんが出てくるまで大人しく待機した。」

「次の日、今後の予定を考えるのも含めて四季さんと一緒に高嶺家へやってきた。」

「二応、四季さんが前もって連絡は入れてるけど……念のためにしつかりとインターホンは鳴らさないといけないよな。うんうん」

「何を一人で納得してるの？」

「いや、保険は大事かなって」

「流石に朝からバナナとミルク事件や妖怪乳しゃぶり中とかでは無いと思うけどなっ！」

「ボタンを押すと、すぐに玄関のドアが開く。」

「おはようございます。どうぞ中へ入って下さい」

「明月さんに向かい入れてもらい中へ入る。」

「お邪魔します」

「炬燵でゆつたりとしている高嶺を確認しながらてきとうに座らせてもらう。」

「朝からすまん。折角同棲したばかりなのに」

「いえ、大丈夫ですよ。気にしないで下さい」

「そうですね。あ、飲み物はお茶で良いですか？」

「大丈夫。ありがと」

「ワタシも平気」

「2人分の飲み物をテーブルに置いて自然と高嶺の近くに座る。」

「それで。お話とは？」

「明月さんが席に着いたので話を始める。」

「ええっと、まずは……ミカドさんには朝一で報告済みなんだが、年明けから俺もお店で働かせて貰おうかと考えててさ」

「澤田君が無事戻って来たのは良いけど、これからの生活とか考えてそっちの方が収まりが良いかなって思ってるね」

「まあ、それもそうですね。私は寧ろ大歓迎です」

「俺も賛成です。即戦力が増えて助かりますし」

「ありがと。手続きとか用意するのは全部閣下が年明けまでに準備するって言ってたからそこは問題ないはず」

「となると、年明けの初日に澤田さんをお店で……？」

「そうなるかな？一応今日中には事前にはグループの方で連絡は入れておくつもり」

四季さんと明月さんが話している間に部屋の様子を確認する。多分、今日ぐらいにでも買物とかをしに行くつもりなんだろう。

「私達以外の方とはまた最初からですが、その辺りは大丈夫そうですか？」

周囲に視線を向けてると、明月さんが俺に問いかけてくる。

「ま、なるようになると思う。それにお店の皆は良い人しか居ないからな。そこは特に心配してない」

「まあ……澤田さんですし、その辺りは杞憂でしたね」

「もつと褒めても良いんだぞ？」

「調子に乗らない」

「ういっす」

と、もう一つの事も話しておかないとな。

「あと、もう一つあってさ」

「はい？なんででしょう？」

「こつちもミカドさんには話してるんだが、俺と四季さんが……超能力者になったんだ……!!」

驚愕の表情を浮かべて大げさなりアクションをとる。

「……は、い？」

俺の言葉に正面の2人は困惑した顔でこちらを見る。そして隣の四季さんは呆れるようにため息を吐く。

「とまあ、冗談として……いや、嘘では無いんだけどな」

「えっと、何があったのですか？」

「先にネタバレを言うと、俺と四季さんがお互いの考えを読めるようになった……念話？テレパシー的な力を得たんだ。相互にだけで

他人には出来ないけど」

「あー……えつと……それは……？」

「……確かに、超能力と言えばそうかもなあ」

「ちよつと、変な言い方するから2人が困ってるでしょ？」

「いや、どう言っても結果は同じだと思うぞ？ 反応に困るって」

「それはそうかも……閣下も最初はそうだった」

「あの……今の話だけを聞くに、お二人だけの間で……その、お互いの考えてる事が分かるようになった……という事でしょうか？」

「そんな感じ」

「昨日の今日で何が起きたのですか……？」

困惑気味の2人に昨日神から聞いた内容を話す。

「……なるほど、お互いの魂があるから……。そんな現象聞いたこと無いですが……というかそもそも魂が共存してる時点で初耳ですけど」

「澤田さんの今考えてることって四季さんに読まれるって認識で良いのか……？」

「逆に言えばワタシのも、なるけどね」

「その割には普通ですね」

「読めるのにも色々と条件があつてさ。今はお互いに分からない様にしてる感じ。まだ扱い切れてないし」

俺の言葉を聞いて、昨日の事を思い出したのか隣の四季さんが若干赤くなる。

「なるほど。確かに慣れるまで振り回されそうです」

「2人は俺の事情とか色々知ってるし、一応話だけは通しておきたかった。何かあつた時に相談相手とかも必要だしさ」

「分かりました。私としては特に問題はないです。昴晴さんの方は何かありますか？」

「いや、俺も栞那と同じで特には」

「ありがとう。取りあえず今話したい事はこれ位だな」

「それにしても……また厄介な物を手に入れてしまいたね？ 今度はナツメさんもですが……」



「あー……まあ、そうだな」

「これまでののは変わらず使えるのですか？一応新しく人として生まれただけですが」

「どうだろうな？視る方は変わって無いが……もう一つの方は試してみないと分からん」

「私としては無くなっていた方が良いのですが……」

「俺もそう思う」

そのせいで明月さんには色々心配かけたしなあ。

申し訳なさと懐かしさで遠い目をしてしまう。

「つと、長居しても悪いしそろそろ帰るよ」

「そうね。2人も色々やることがありそうだし」

外出する感じの服装だし、そういうことなんだろう。

見送られながら部屋を出る。

「それで？安心は出来た？」

マンションから出た辺りで四季さんが声をかけてくる。

「だな。あそこまで行けば後は家族の問題だし、俺が介入するのは無さそうかな」

後は父親と対話が出来れば、無事高嶺の心のトゲも無くなるだろう。

「この後はどうするの？何か予定とか」

「特に考えてはないなあ……」

現状の把握は何となく出来たし……。

「どこかぶらりと行くか？」

「てきとうだなあ……それで？どこ行く？」

「そうだな……初詣とか？」

丁度正月だし、それに……。

「無難だけど採用」

「それに、前の世界では行く約束してたのに行けなかったしな」

「……確かに。言われてみればそうだった」

「ということ、エスコートはお任せを」

一歩前に出て、優雅そうに振る舞いながら四季さんに手を差し出

す。

「……ふつ、何それ？カッコつけてるつもりなの？」

「四季さんと手を繋ぎながら行きたいと思っただが、正直に言うのが恥ずかしいのでそれを誤魔化す為の道化的な？」

「本音を言ったら意味が無いでしょうが……。でも、そこまで言うなら喜んでエスコートされようかな」

笑いつつも嬉しそうに俺の手の上に自分のを乗せて握って来る。

「んじゃ、行きましようか」

「んー……寒いからそっちのポケットに手入れても良い？」

「それもそうだな」

確かに手を繋げたのは良いが、普通に空気が冷たい。自分のコートのポケットが大きくて助かる。

「まさか澤田君の方から手を繋ぎたいって言って来るなんてね。ちよつと意外」

「折角の2人での散歩だしな。自分から言いたかったってのがある」

あとは、色々と前の事を思い出して恋しくなった的な感じ。

「……デート、とかじゃなくて、散歩？」

「そこは、ほら、デートならちゃんと正式にお誘いしたいという気持ちだね？ありますのだよ」

「変なこだわり」

「恋人になった最初のデートはやっぱりちゃんとしたいので、広い心で見えてくれると助かります」

「ん、わかった。ワタシもその時を楽しみにしてる」

2人で他愛も無い話をしながら目的地に向かう。

「そういえば念のため確認なんだが……」

「ん？何？」

「神社での年末の奉納祭？って無事行われてたとか分かる？後、墨染さんのお父さんが怪我したとか聞いてたりする？」

「ううん、特にそう言った話は聞いてなかったけど……？」

「それなら良いか」

やっぱり個別ルートに入るから起こり得るイベントなんだろうか？

「何かあるの？」

「起きたら色々と厄介な出来事が神社関係……墨染さん関連であるからさ。一応聞いただけ」

「ふーん、墨染さんのパターンだとそう言うのがあるんだ」

「そんな感じ」

ちよつと気になったんだが、四季さんってノートを見ていたが、明月さんと自分以外の個別ルートの内容ってあまり把握してないのか？

まあ、知りたいのはその2つだし、他のは流し見くらいで詳しくは無いかもしれないな。

「ま、特に起きて無ければ大丈夫そうだし」

聞いている感じだと明月さんルートの世界で進んでる気がするし。

そう思いながら歩いてると、目的地の神社が見えて来た。

「意外とまだ屋台とかやってるんだな」

「今日まで開いてるみたい」

「帰りに何か買つてく？」

「気になるのがあればね」

「了解」

言つて気づいたが、今の俺1円すら持つて無いわ。なのに偉そうに提案してしまった。

「……死活問題だな」

思わぬ危機に気づき立ち止まる。

「え？どうしたの？」

「いや、当然の事なんだが……俺、1銭も金を持って無いなつて思つてさ」

「ん？あー……そう言うことね」

「待てよ。ミカドさんから貰つたやつがまだ残つてたな……」

「けど、この瞬間は無一文でしょ？」

「その通りですね。はい」

「大丈夫。この場はワタシが出すから気にしないで？」

「……お世話になります」

「それより早く進も？」

「そだな」

再び歩き出し、賽銭箱に着く。

「はい。5円……いや、やっぱりこっち」

一度5円玉を取り出したが、すぐに引っ込めて10円を渡して来た。

「ありがと。5円で大丈夫だったのに」

「だって、これ以上の縁は不要でしょ？」

口をとがらせるようにしてこちらを見る。

「なにそれ、可愛すぎるんですけど？」

「いいからっ、さっさとそれを投げ込むっ」

「あい」

いやもうね、こういったちよくちよく見せる独占欲的な？最高ですね!!

賽銭箱にお金を放り投げ、手を合わせる。

願い事……神様と言っても此処に居るのはあの赤い蝶だし……本物の神を知ってる手前変な感じだなあ。

取りあえず健康と平凡な日々を送れますようにとお願いしておく。目を開けて隣を見ると、既に終わっていた四季さんが俺を見ていた。

「折角だし、おみくじして行く？」

「賛成」

道を逸れて、隣の売店に向かう。

「はい、100円。自分で好きなの選んで」

「あざます」

彼女から100円を受け取る構図……シユールだなあ。

100円だけを手に持ちながらおみくじを買いに向かう。三か所に分かれて売られてるが、内容は特に変わらないだろう。てきとうに並んで1つ購入する。

元居た場所に戻り周囲を見ると、売り子をしている墨染さんと話してる四季さんが目に入った。

なるほど。だから別行動をしたのか。

「ごめん、お待たせ」

少しして戻って来た四季さんと一緒に中身を開封する。

「末吉か……そつちはどうだった？」

「こつちは吉。悪くはないかな？」

そのまま運勢の方も見ていく。

願望は、叶う……と。健康も良し。就職は近くにあり。

一番重要な恋愛も楽しいと来てるし大丈夫そうだな。

他のも見ると、自分のを確認し終わったのか俺のを覗いて来た。

「そつちも変なの無さそうね」

「四季さんの良い感じ？」

「そこそこな感じかな……む、縁談が『周囲に良い縁あり』って」

俺の運勢の縁談の項目を見て、眉をひそめる。

「四季さんのことじゃないのか？」

「……そう思っとく」

「そつちのも見ても良いか？」

「はい、どうぞ」

紙を受け取って中身を見る。

ふむふむ、商談もチャンスありと……。学問も安心して良いと。恋愛も幸福あり。

愛も幸福あり。

願望は……叶う、と。

「確かに良い感じだな」

吉なだけはある。

「澤田君のは何個か不吉なものもあるけどね」

末吉ですしおすし。

「待ち人も『来る、つれがある』だって。誰が来るんだろうね？」

「出来ればこれ以上厄介事は御免なんだが……」

俺のいやいや顔を見て、困った様に笑う。

「さっさと縛って運勢上げてもらおうかあ」

最後に引いたおみくじを縛り付けて来た道に戻った。

「ただいまーっと」

神社でおみくじをした後、屋台で美味しそうな物を幾つか買って部屋に戻って来た。

「てきとうに広げて貰える？ワタシ飲み物淹れてるから」  
「ういっす」

袋からたこ焼きやら焼きそばやらポテトを取り出して開ける。

「匂いが凄いな」

後で換気しないと匂いが付きそうだ。

「はい、お茶」

「さんきゅ」

用意も出来たのでお互いに食べ始める。

「あつあつでは無いけどそれなりに美味しい」

「味が濃いしな。調味料の力は偉大だな」

そのまま暫くの間食べ続けて腹を満たす。

「ご馳走様」

「ふー、満足。お腹一杯」

容器を片付けて一息つく。

「例えば四季さん、グループで連絡って入れた？」

「そういえばまだだった」

「グループに何か連絡とか来てたりする？」

「んー……特には来てないけど？何かあるの？」

「いや、確か今日あたりにお店の事で話が出てた気がしてな。年末出来なかつた掃除を明日しないかって」

「まだ来てないかな？ワタシからしようか？」

「どうだったかな？最初は涼音さんから話があって、掃除しようと言いだしたのは四季さんだったはず」

「ならもう少し置いておこうかな？」

「夜までに無かつたら、さっきの話ついでに一報しておこうか」

「了解。その、お店の掃除って何か起こるの？」

「特にこれと言っては無かったはず。掃除終わったら皆で新年会？  
開いて鍋を突いてた」

「鍋を？」

「こそ。高嶺と明月さんが買い出しで鍋ごと買って来てたぞ」

「鍋から準備したのか……思い切りがいいなあ」

その後は皆が帰って店で……って、これは言う必要は無いな。うん。

「それが終われば晴れてお店再開だな」

「そっちにしたら最初の一日がスタートって感じだけどね」

「前の世界とやり方が違ってたりするのってあたりする？」

「うーん……多分、無いと思う。少なくともワタシの記憶ではほとんど同じのはず」

「なら大丈夫か。一週間もあれば慣れるか」

「皆には即戦力だから期待して良いって伝えとくから」

「上げるな上げるな。変に期待されても困る」

「厨房もフロアもこなせる超エリートって」

「上げられた状態でのスタートって……中々厄介だろ」

「でも、実際可能でしょ？」

「出来るか出来ないか言われれば、可能だけどさ。なんか違うじやん？」

「違う？」

「そこは、ほら？前情報一切無くて特に期待されてないけど、いざ始まると滅茶苦茶有能で『こいつ、何者っ!？』みたいな目で見られるのが良いじゃん？」

「……………」

『何言ってるんだこいつ』と言わんばかりの表情でこちらを見る。うん、予想通りの反応ですな！

「そしたら紹介した四季さんの株も上がる訳よ。その方が周りの好感度とかも上がりやすいし」

逆に有能とか言われてたら、なんかミスした時に簡単に評価は下が

るしな。いや、店の皆がそんな訳はないけどさ。

「その道のプロって煽りに煽りまくるから」

「オーマイガーツ」

「あと、これは提案なんだけどね？そろそろお互いに名前で、呼び合わない…………？」

「急な提案だな…………？」

「付き合ってるんだから、別に…………おかしくは無いでしょ？」

「おかしくは無いな。寧ろ正常である。」

「気になるのは、なんでこのタイミングで？まあ良いけど。」

「まあ…………確かに、恋人なのに苗字呼びだったし、切り替えるのもあり寄りのあり」

「でしょ？それじゃ、これからはお互い名前で呼び合うってことで」

「了解」

名前呼びか…………今の内に練習しておくのが良いかもな。

「…………ところで、ナツメはどうして急に名前で呼ぼうと言い出したんだ？」

苗字呼びから名前だから多少の恥ずかしさはあるが、満足感の方が割と強い。

「えっ、あ、あ…………特に、理由とか、無いけど？」

すぐに名前で呼ばれたことに驚く。そして誤魔化す様に目を逸らす。

「そうか？それなら良いけど、割と急だったから何か理由があったのかなって思ってたさ」

「てか、あるだろうな。このパターンは…………。さっきの流れ的にお店が関係してる。」

「深い意味は無い。無いけど…………ただ…………」

「ただ？」

「名前で呼んでたら、大丈夫かなって…………考えただけ」

大丈夫？何が大丈夫なんだ？

「大丈夫、と…………」

…………これは、あれか？周囲に付き合ってるのを周知させるための手



段としてか？そんで、そうしていれば俺のお店での立ち位置が確立出来るとか？

「なんか、変な気遣いをして貰ったようで……」

「違う、ワタシが心配なだけだから……」

「俺ならそんなぐらい上手くやれると思うが？」

「別に信頼してないわけじゃ無いの。ただワタシが不安なだけだから……」

不安？お店の人間関係で不安要素ってあったか？

「だってさ……お店には可愛くて魅力的な女の子も多いし、さわ……た、達也は皆の事を色々と知ってる感じだし」

「……ん？」

「それに対してワタシは結構面倒な性格だし……何かを機について別の子に情が移ってフラフラっで行かれたら……生きて行けない」

……ああ、そういうこと。心配ってそっちのか。

「無いと思うんだけどなあ……」

「分かっている。頭では分かっているの。でも、もし他の子が困ってたりしたら……絶対助けるでしょ？」

「そりゃ、そうだけど」

「それが駄目とかでは無いの。達也なら必ず手を差し伸べるってのも、よく理解してるつもり」

「だから、名前呼びと……」

「それなら少しは不安が減るかなって思ってた……」

頬を赤らめながら上目遣いで恐る恐るこちらを覗く。何この可愛い生き物、据え膳ですか？

「……魂レベルで繋がってるからなあ。ナツメのことが好きだし可能性は皆無だと思っただけ？」

「うん。そこは信じてる。ちよつと考えただけだから……。高嶺君が色んな可能性があったみたいなのに、達也にもあったのかなって……」

「俺がナツメでは無くて他の子を選んだりする世界が？」

「そう。たまたま出会ったのが先だったから……とか。ほら、前の世界で火打谷さんの問題にも関わってたでしょ？」

「ああ、あれか」

瞳のことだな。

「あのまま進んでたらワタシじゃなくて火打谷さんを選んでいたとかあったのかなって」

「ほうほう」

言いたい事は分かる。もしかすると、有り得た可能性でもある。

「ごめん、一度考えたらどんどん膨らんで来て……」

「いや、不安になるのは理解できる。知ってるからこそ思いついてしまう考えだもんな」

「うん……、だって、好きだから。滅茶苦茶好き。だからその分余計に考える」

「……そういう不安な時の解決策を、とある人が言ってたんだが、聞くか？」

「……どうするの？」

「相手の喜びそうな事をして、夢中にさせれば良いってさ」

「相手の喜び……こと？」

「そそ。男なんて単純だぞ？すけばえなことでもすれば一発だ」  
爽やかな笑顔で回答する。

「……」

それを聞いて『この流れで言う事か!』と口を開けて停止している。

「な、なんでここで、それを……？」

「極意だからな。ま、一緒に居るだけでも充分に幸せだけだな」

「大層に言ってるけど、エロいことをシたいだけなんじゃ……？」

「そりゃ、シたいって思うのもあるのはある。だけど……」

立ち上がってナツメの後ろに回って抱きしめる。

「俺たちと言う限定的な範囲ならこれだけお互いの気持ちを確かめれるからな」

「それは……そうだけど……」

「それとも、そっちは嫌か？」

「それ、分かってて聞いてるでしょ？」

「何を言ってるのかさっぱりだ」

「全く……。ワタシも同じ、好きに決まってるでしょ？」

安心するような声を出したと思つたら、体から力を抜いて体重を預けて来た。

「達也は……。何したら喜んでくれる？」

「そうだなあ……。キスとか？」

「……。それ以外で」

「まさか断られるとは……。ちよつと想定外なんだが」

「今キスしたら……。色々止められない気がする。だから……。しな  
い」

「……………」

恥ずかしそうにもじもじとしている。これ、誘ってるのか？俺に無理やり唇を奪えと言ってるのか？

「ほ、他は……………」

「そ、それじゃあ、もう暫くこのままで」

「ん。それぐらいなら幾らでも」

はあ、全く。俺じゃなきや理性崩壊してたぞ……。ほんとにすべえなやつだ。今でも割とギリギリなのに。

うーむ、それにしても……。めちゃんこ良い匂いだな。これは女子だからか？それとも好きな人だからか？

それにすつごく柔らかい。それはもう国宝級ですよ奥さん。世界の宝ですよ。

体の数パーセントしか触って無いのに、これほどとは……。これより柔らかい場所があるとか……。卑怯だと思いませんか？!

気を紛らわせる為に頭の中で口論を広げていると、こてん、と頭をこちらに預けて来て顔を上げる。

「なーんか、変なこと考えてない……………」

訝し気な視線を俺に向けてくる。

「変な事とは失礼な。至極真つ当な考えですとも」

「ぜーったい、うそ。エッチなこと考えてる」

「そのどろろが変な事なんだ？当然の思考回路だと思っぞ」

「いや、そこまで堂々と開き直られても……………」

「俺、自分の心に嘘は付きたくないんだ……!!」

「それ、ここで言うセリフじゃないからね？」

「あるえ？決めれたと思っただが……」

「全然決めれてない。カツコよくもなんともないから」

「ここだと思っただけどなあ」

「もつと相応しい場面があるでしょうが……」

「例えば？」

「んー……そうだなあ。好きな人に告白する前とか？」

「ああ、確かにある。めっちゃ想像出来た」

「でしょ？だから不合格」

「もつと精進致します」

「ん、よろしい」

エロい事も良いが、こうやって何気ない会話も結構好きですとも。下らない雑談でも良し。

「今日は流石に帰るか？」

「そのつもり。明日お店に行くんだし、支度しておかないとね」

「となると、明日は1人寂しく生きて行くか」

「何なら一日早く挨拶済ませる？」

「いや、流石に初日にするよ。昨日の今日で行くより一日時間空けた方が良さそうだしな」

「りようかい。なら明日はボツチで楽しんでね」

「何とかなるだろ、知らんけど」

「だからと言ってフラフラと変な所に行かない様に」

「変なところで……」

「あと、ナンパされても付いて行かないこと」

「される可能性の方が圧倒的に低いと思うんだが……」

「そんなことない。ワタシだったら声掛けて持ち帰る」

「知り合いだからノーカンで」

「何かあったら連絡するようにね？」

「その時は頼らせてもらいますとも」

若干の嫉妬や不安が混ざりつつも心配してる恋人の頭を撫でなが

ら、うんうんと頷いておいた。

—新訳—第43話：レジューム

「これからよろしくお願いします」

新年の休みが終わり、今年最初の開店日。その朝の開店時間前で、皆に俺の紹介と挨拶を済ませておく。

「最初の担当はキッチンを集中してもらおうか。慣れてきたら他の事も覚えて行くように」

ミカドさんの指示で始めはキッチンとなる。

「了解。それじゃあ涼音さん、よろしくお願いします」

「おっけー。四季さんから話は聞いているからね。容赦なくしごいて良いってね」

嬉しそうに話す涼音さんの台詞を聞いて、思わずナツメを見る。

そこには、面白い物を見るようにこちらを見ている人がいた。

は、謀ったな……!!なんてことを……っ！

「頑張っつて」

「嵌められた……」

俺らのやり取りを高嶺と明月さんが苦笑いして見ていた。

「そんじゃ、早速向かおうか」

「了解です」

連れられながらキッチンへ向かう。

「二応、朝の準備はもう終わってるから、後は開店の時間まで待つだけだし……それまで色々聞いておきたいんだけど……良い？」

「はい。なんでも聞いて下さい」

「経験者って聞いているけど、ある程度動けるって考えても大丈夫？」

「どの程度か気になりますが、割と平気ですよ。過去に二回ほど喫茶店で働いてたのである程度は平気です」

その内、一回はここだけだな。

「澤田さんならある程度問題無いと思いますよ」

「そういえば昴晴は知り合いなんだっけ？」

「ですね。葉那とミカドさんも少し前から知り合ってます」

「まあ、四季さんが勧めて来るぐらいだし、安心して良いか  
うんうんと頷く。

「それなら、取り敢えず今日は流れを覚えてもらうのと、お店のメ  
ニューを記憶してもらおうかな?」

「あつ、一応お店のメニューなら全部暗記していますよ」

「え、そなの?」

「働く前にメニューを見せてもらってたので一通りは全部」

「……本気で?」

「はい。なので今日は流れを見せて貰っても良いですか?」

涼音さんが『大丈夫なの?』という視線を高嶺に投げる。

「多分大丈夫だと思いますよ? 澤田さんですし」

「あー……それなら、そうしてもらおうかな」

「はい、よろしくお願いします」

「基本的には昴晴に付いてくれる? こっちでも見て欲しいのがあれ  
ばその時に呼ぶから」

「了解です。その時はおねがいます」

流石に初日から参加するのはよろしく無いので今日は見学だけに  
抑えると話して決めた。

世間は休みが多いし、今日の客足はそこまで無いから問題ないだろ  
う。多分店内より持ち帰りの割合が多そうだしな。

「では、高嶺先輩。ご指導の方宜しくお願い致しますっ」

「ご指導って……良い性格してますね、はは……」

「昴晴ー、情けない姿見せない様に頑張れよー? 彼の今後は君に掛  
かってるっ」

「涼音さんも変なプレッシャーをかけないでくださいよ!」

「冗談冗談。そんじゃ、よろしく」

午前中は基本的に調理工程の説明と、フロアからの伝票の受け取り  
やらこちらからの渡す際の話の聞いた。

時折涼音さんが作るケーキの説明も隣で観察させてもらった。相

変わらずその姿は真剣そのものだった。

午後が過ぎ、客の数が減って来た辺りに高嶺からの提案で、完成品をフロアへ渡す作業から始めることにした。

と言っても、出来上がったのを伝票と共にフロアの人に渡すだけだったので特に必要の無い作業なんだが……まあ、入りとしては良いかもしれない。

それから少しずつ高嶺が作る料理の食材の前準備や、皿を並べたり、帰って来た食器を洗ったりなどをして徐々に仕事を増やしていった。

「なんか、パンケーキとパスタ系はちよくちよく出るけど、今日はオムライス系がそんなに無いな」

「ですね。ケーキは相変わらず一番売れますけど」

「どうー？ 多少は場の空気には慣れたりした？」

隙間時間で話していると、涼音さんの方も特に無かったのか声をかけてくる。

「そうですね。高嶺師匠の厳しいパワハラにも馴染んできました」

「ちよっ!?!何をっ!」

「昂晴……あんた、初日の新人をいじめるって、どんな性格してんのか」

「いや、俺がそんなことするわけないでしょう!?!」

「安心しな。後で私の方からしつかりと言っておくから」

「頼りになりますっ!」

「頼らないでくださいっ!」

「冗談。それにしても、あまり緊張とかもしてなさそうだし、ほんとに問題なさそうだね」

「多少は場数を踏んでいましたから。それに、このお店は良い人しか居ないでそこも安心できる要素ですねえ」

「そんな初日で判断するものじゃないでしょ……」

「いえ、やっぱり最初が重要ですよ。あと、人を見る目がそれなりにありますので……」

「ふーん。そういうもの? でも、そう言ってもらえるとこっちとし



ても嬉しいかな」

「可能な限り早く参戦出来るように頑張りますので、遠慮なく鍛えてください」

「ほほう、それはそれは良い事を聞いた」

俺の発言を聞いた涼音さんが楽しそうにこちらを見る。

うん。予想通りの反応ですな。

さつきみたいにこちらから望めば言ってくれると思ったが。

「やる気があるのは良い事だ。それなら明日から望み通りしごいてあげようじゃないか」

「何から行きますか?」

「一応、四季さんと御帝さんに確認はするけど、取り敢えず明日から……昂晴と同じ時間で出てみる?」

「準備するところですね」

「そうそう。いずれしてもらおう事だし、それなら早い内から慣れて貰った方が良いでしょう?」

「確かに、それもそうですね。その方が1日の流れとしても把握しやすいし……了解です」

「へえ……特に嫌がるようにもないと」

「経験済みですから」

「これは……使い易そうな良い人間が来たみたいだね」

良い獲物を見つけたかのような目線を投げてくる。

「昂晴はそれで良い?負担が少し増えるけど、私の方でも面倒は見られるからさ」

「俺としてもありがたいので全然オーケーです」

「よし、それなら後で確認しておくでしょう」

「自分の方からも言っておくので、その時はお願いします」

「うむ、よかろう。しつかりと鍛えてやる」

とまあ、こんな感じで初日は何事も無く終えることが出来た。

その日の営業が終わり、店を閉めて片付けをして順番で着替えている。

「初日はどうでしたか?」

着替えてるときに高嶺からの質問が飛んでくる。

「まあ、想像通り？そんなに変わって無くて一安心ってところ」

「澤田さんにとっては正直暇でしたもんね」

「それは仕方ない。完成品を渡す作業とか完全にフロアの人とのコミュニケーション目的だったしな」

「手持ち無沙汰だと思っただけで必要そうな事をお願いしてみたんですが、余計でしたか？」

「いや、滅茶苦茶ナイス案だった。涼音さんとは話す機会が多くて墨染さんと火打谷さんとの会話がどうしても少ないからなあ。フロアに出れるのはまだ先になりそうだったから、俺としては高嶺の案はありがたかった」

「それなら良かったです」

「やっぱり、店を開くまでのあの準備期間に居ないのはかなり大きいと実感した」

自分たちで最初から進めて行ったんだから自然と一体感や仲間意識が出る。その時に居なかったから仕方がないんだけどさ。

「ま、上手いこと頑張るさ」

「分かりました。何かあったら言って下さい。今度はこっちが協力しますので」

「ははっ、ありがとな」

「いえいえ、して貰った事を返してるだけなので。これ位では全然足りませんが……」

「俺にとってはその気持ちだけでも超ありがたいので気にしないでくれ。お互い様ってことで」

「……ですね」

「あつ、早速で悪いが、連絡先を交換しても良いか？」

「そういえば、ここではしてませんか」

「あと、もしかしたら手伝って欲しいのが出て来るかも。ついでに高嶺の友達の汐山弟の手を借りることになる可能性が……」

「えっ、宏人のですか？」

「そぞ。その時が来たらまた連絡するよ」

「了解です」

高嶺との秘密の話を終えてフロアへ戻る。そこにはナツメと明月さんが居た。

「ただいま戻りました。マイレディ」

思い付きのままに目の前で跪く。

「戻って来て早々、何をしてんのだか……」

「これは……中々ぶっ飛んでますね……」

「……俺も真似した方が良いのか？」

「いえ、私が反応に困りますのでしなくて結構です……」

「それなら帰るか」

「ですね」

「ワタシもこのまま一人で帰ろっかな……？」

「置き去りは流石に泣くぞっ」

「なら馬鹿なことしてないで早く立つ」

「サー」

「なんか、すっかりナツメさんの尻に敷かれてますね」

「好きな人の尻に敷かれるなら……それはご褒美だな」

「また下らないこと言って……」

呆れるようにため息を吐くナツメと、明月さんの隣で妙に納得して表情の高嶺。

「昴晴さん？何領いてるのですか……？」

「いや、一理あるなと思ってさ」

「一理じゃない百理……いや万里だろっ！」

「どうしましょうナツメさん。お二人は納得のご様子ですが？」

「そういう生き物だって割り切った方が楽かな？」

「それもそうですね」

話も完結？した事で店を出てナツメと帰り道を歩く。

「二日目だったけど、どう？問題なさそ？」

「今の所は順調かな？涼音さんの方は問題無くやっていけそう」

「問題はフロア？」

「高校生組の2人かなあ？絡む機会が少ないから仕方ないけど」

「それは、確かに。と言ってもすぐにフロアに出て来て貰うわけにもいかないし」

「だから気長にやってくよ。今日の成果はフロアへ料理を渡す際の会話程度だな」

「事務的な会話しかない」

「初日だし、これからこれから」

「そうね。手伝えることがあればいつでも言っただけ協力する」

「あんがと。それなら、少ししてから何かイベントとかしても良いかもな」

「イベント？」

「そそ、皆で遊びに行ったりご飯食べに行ったり」

「あー……それはありかも」

「娯楽施設なら……カラオケとかか？」

「手頃だとそれじゃない？」

「だよな。あとボーリングとかも面白そうだし」

「チームに分けて対決とか？」

「そんな感じ。7人だから割れないけど」

「7人？閣下は呼ばないの？」

「猫にボーリングの球を投げさせるのは虐待だろ……」

「……そうだった」

それに、多分ミカドさんなら断るだろう。

「春には、桜の花見とかも行きたいな」

「気が早すぎ。まだ今年が始まったばかりでしょ」

「そのくらい楽しみが多いってことだな」

「それは……楽しそうで何より？」

「しかも」

「しかも？」

「好きな人とかこうやって話しながら過ごしていくって考えたら、最高にハッピーだと思っただけ」

「……急に何を、言い出すのかと思っただけ……」

「いや、最高に幸せだろ？」

「そりや……幸せに決まってるでしょ……ばか」

「んんんっ!!? 何今のっ?! 語尾に小さく『ばか』って言ったよな? はぁー!! 可愛すぎるんですけどお!

「ちよつと、心が満たされ過ぎて死にそ」

「え? どうしたの急に?」

「いや、お隣の可愛い可愛い彼女さんの事が好きすぎて辛いだけだから……気にしないでくれ」

「ま、またそうやって揶揄ってっ!」

その反応も最高ですっ! 弄ればその分良い反応で返ってくるので、達也は幸せ者です……。

「すまんすまん。でも、ほんとうのことだからしょうがないよな?」

「全然しようがないからっ」

今すぐにも抱きしめて撫でまわしたい衝動に駆られるが、全力でそれを抑える。流石に公共の場でするのは憚れる。

「そうやって怒りつつも嬉しそうな表情を隠しきれてない感じも最高に素敵。もはや天才的」

「ッ!」

凶星だったのだろう、更に顔が赤くなる。

「う、うるさいっ」

限界を超えたのか、拗ねるように顔を逸らす。

「ごめんごめん、流石に揶揄い過ぎた」

「……気持ちが悪くもってない」

っーん、と擬音が出る感じでそっぽを向いておられる。

「やり過ぎたと反省しております」

反省しつつ、こちらを向きながら揺れている黒髪を撫でる。

「お触り禁止。反省の色が見えるまで許すつもりないから」

優しく、ぺしつと俺の手を弾く。なので今度は頭を撫でる。

「ちよ、だから触るの禁止だって……っ!」

「この通り。深く反省しております」

「……頭撫でながら言っても、全く説得力が無いんだけど?」

今度は手を弾かず、恥ずかしそうに照れながらもジト目でこちらを

見る。

「反省の意を込めて精一杯の愛情表現をさせてもらっています」  
「ここで”よーしよしよしよし!”とかしたら、流石に本気で怒られそ  
うなので控える。」

「……全然足りない。これっぽっちも感じない」

「まじですか。ナデナデでは満足してただけなかったか……」  
と言われても止めはしないのだが。

「そんぐらいじゃ、荒れたワタシの心は落ち着かない……からっ」  
こちらにぶつけるように体を寄せてくる。

「んー……それじゃあ、これは？」

ポケットの中に入ってるナツメの手を握る。

「残念、落第点」

「左様で……。と言ってもこれ以上は公共の場だしなあ」

「……なら、猶予をあげる」

挑発的な眼差しで俺を見る。

「猶予？」

「そ。期限は……私の部屋に着いた瞬間までにしようかな？」

「それは……かなりギリギリだな」

「これで、もし落ちたら……暫くの間、そっちからワタシに触るの禁  
止ね？」

「再試とかは？」

「ノー。一発勝負」

「燃える展開だな」

「そのくらいでないと反省しないでしょっ」

むしろ真逆の効果だと思うんだが……まあ、言わないでおこう。

しかも俺からだけお触り禁止とか……中々解っていますな、このお  
方は。というか仮に落ちても俺に美味しい展開しかない。

だが、負けるつもりは毛頭ない。可愛い彼女のご希望に応えようで  
はないか。

……最後まで進まない様に、理性だけは固く建築しておこ。鉄筋コ  
ンクリート程度には。

「それじゃあ、待たせるのも悪いし……早く送り届けたいとな」

「そのまま狼にならないようにね」

「かなーり、前向きに善処します……」

「ふふっ、期待してる」

どっちの期待なんでしょうねえっ!!

天に向かって叫びたい気持ちを堪えつつ目的地へ向かった。

結論を述べると、今後もお触りは可能となった。

後、ダイナマイト並みの破壊力だったが、俺の理性の崩壊は何とか守られた……。基礎工事が良かったのかもしれない。

—新訳—第44話：幸せのpromenade

働き始めての最初の定休日。

この日、俺は1人で外を出歩いていた。目的地はとある病院。と言っても近場の病院など1つしかない。美和総合病院だ。

「うーむ、ちゃんと骨折して入院していると良いんだが……」

自分の発言に苦笑いしながら入口から受付へ向かう。

「すみません、今大丈夫ですか？」

「はい、どうされましたか？」

「こちらに染井志律華さんって方は入院されてるでしょうか？足を怪我したと聞いて……」

「分かりました、確認するので少々お待ちください」

うむ、問題無く対応してもらえたな。

最初の関門は越えれたことに安堵していると、後ろから声を掛けられる。

「今、アタシの名前が聞こえたと思うんだけど……お兄さん、アタシに何か用？」

女性の声が聞こえ振り返る。そこには、松葉杖で体を支えながらも立ってる女性が居た。

「……染井さん？」

「そうだけど、どっかで会ったっけ？」

「あー……ちよつと知り合いの知り合い的な感じで……話したい事があるのだけど、今って大丈夫です？」

「んーなんだろう？まあそう言う事なら分かった。病室まで来て貰っても良いかな？」

「全然大丈夫です」

受付の人に一言伝えてから彼女の病室まで向かう。

「よつと……それで、おにいさんは？」

病室のベットに腰を掛けたので話を始める。

「突然の訪問で申し訳ない。名前は澤田達也って言います」



「澤田さん？んー……ごめんね、やっぱり聞き覚えが無いなあ。どこで知り合ったっけ？」

「あー……いえ、多分初対面ですよ」

「え？初対面……？」

「今から順を追って説明させていただきますとも」

「う、うん」

「えつと、まず……染井さんって、四季ナツメって女の子の名前を憶えてる？」

「えつ、ナツメちゃん？うん、知ってるよ。と言っても小さい頃の話だけだね」

「良かった。その彼女の知り合いなんだ」

「へえー、ナツメちゃんの……。もしかして、彼氏さん？」

「……世間一般で言えばそうなりますね」

「へー！ナツメちゃん彼氏居るんだっ！いいなー！」

「その話はまた後として、本題に入っても……？」

「あ、うん。なんだっけ？」

「幼い頃の、夢の話なんだが……」

最初の協力者確保する為に、作戦を開始した。

これで、上手く進めることで出来ればしっかりと報告はしておかないとな。

蔑んだ目で見てもらう為に秘密つてのも悪くは無いが、今のナツメなら変に尻込みすることもないだろう。

「それじゃあ、そんな感じでお願い」

「分かりました。宏人の方にもそう伝えておきます」

高嶺の部屋で例の件を進める。隣に明月さんが居るけど……まあ気にしない。

「協力してもらえるか分からないけど、もし駄目そうならまた連絡してくれ」

「協力してくれると思いますよ？なんせ、上手く行けば彼女が出来るかもしれないって言われれば喜んで協力するはずです」

「二応、相手の染井さんにも同じ餌を出してるから行けると思う」

「餌って……。まあ、成功したら後は宏人をお願いして進捗だけ連絡しますよ」

「協力してもらってありがとな」

「このくらいお安い御用です」

「今度はどんなことをする気ですか？」

一通りの話が終わると、明月さんが問いかけてくる。

「まるで俺がいつも悪い事をするみたいない言い方だなあ……」

「ご自身の胸に手を当てて聞いてみてください」

「残念、この世界の俺は人間としてまだ生後1か月未満だからなっ！悪事は働いて無いぞ」

「なんともまあ、屁理屈を……」

「俺はただナツメの笑顔を見たいってのと過去の清算をしたいってだけだからな」

「それで、昔のご友人を……？」

「ああ、あの頃一緒に夢を描いた時の仲間と再会する……これが中々大事なことでさ」

あと1つ両親とのもあるが、それはまた後で考えよう。

「澤田さん……」

「それと、ナツメの夢を実現させる為にお店関連で色々協力してもらおう事があるから、その時はよろしくお願いします」

「ナツメさんの夢、ですか？」

「そう、夢。小さい頃に描いた夢を……な」

あれをしない事には本当の意味で夢を叶えたとは言えないだろう。

「何をするか分かりませんが、こちらとしてはいつも通り協力は惜しみませんので、何時でも言っておきたい」

「俺の方も遠慮せず言っておきたい」

「2人ともありがとう。と言ってもそんなに気負いしなくても良いからな？」

「いえ、澤田さんには前の世界で助けて頂いているのですから。ね？ 昴晴さん？」

「ああ、栞那を救って貰った恩があります」

「あー……あれかあ。結局この世界ではナツメが全部こなしだし、無駄になった感があるんだよなあ……」

それに、元を辿れば俺が原因と言うね。

「ですが、そのナツメさんがここまでしたのは澤田さんの記憶があつたからですよ？」

「うん、まあ、そういう見方も出来るが……うーん」

個人的にはやはり罪悪感是否めない。

まあ、今の2人は既に父親との話も決着済みだからこそ、こうやってナツメの事を相談しに来ているわけだが……。

「澤田さん」

「ん？」

「安心してください。私も昴晴さんも間違いなく幸せです。幸せにして貰ってますし、これから更に幸せになります」

微笑むような笑顔で、優しく語り掛けてくる。

「ですので、これからはご自身の幸せの為に生きて下さい。愛する人と……ナツメさんと過ごす日々の為に」

「……ああ、分かっているよ。四季ナツメを愛し、愛される者としてこの世界で生きて行くつもりだ。心配しなくても大丈夫」

「……そうですね。今のご様子を見れば杞憂でしたね、にひひ」

いつかの病院の前で言われた言葉を思い出した。この世界に来た理由とか、もはやどうでも良い。

「だろ？好きな人と好きに生きてくよ」

「なら安心ですね。あ、だからと言って怪しいことをするのは程々にして下さいよ。」

「相変わらず信用度が低いなあ……」

「それについては過去の自分を恨んで下さい」

「ふむ、四季ナツメの夢を叶える為にか……」

「ああ、だから協力してほしい」

「わかった。そういう事ならば、是非もない」

「一応計画は俺の方である程度固めてはいるから、問題は無いと思う」

「後は本人次第と？」

「今日辺りにでも話すつもりだ」

「なら、本人の了承をもらってからまた来ると良い」

「動き始めるのはもっと後になるとは思うけど、先に話だけでもしておきたい」

「確かに準備期間があるのならこちらとしてもありがたい」

「助かる」

「魂が安定してるとは言え、いい方向に持って行くのだろうか？」

「だな。他にもするのはあるけど、そっちの方も同時進行中だ」

「他に協力することはあるか？」

「大丈夫かな？ミカドさんにはさっきのお店関係で色々してもらった感じがなりそう」

「そうか。なら心配は要らなさそうだな」

「そうだ、またその内お高い缶詰とか買ってこようか？お礼としてさ」

「前の世界では栞那に没収されたからな……」

「今度はまた別のを買ってこるから楽しみにしておいてくれ」

「ほう、ならば楽しみに待っていていよう」

なるべく健康的なのを選ぶのと……数も少なめなら大丈夫だよな？

また明月さんに怒られない様に注意点を考えながら苦笑いをする。

「1つ、聞いても良いか？」

「ん？どした？」

「澤田達也。貴様今、幸せか？」

「ははっ、当然。毎日が幸せに決まってる」

「そうか。それと結局、貴様の奇跡については謎のままだったな」  
「……そこでその話題を出しますか？いやまあ、ミカドさんからして見ればずっと疑問だったかもしれないけどさあ。」

「それについては……今後とも企業秘密ってことで何卒」

「ふん、相変わらずの返事だな。まあよい、貴様が幸せならばな」

「なんか……申し訳ない」

いやほんと。

「それで？今日は一人で何処行つてたの？」

目的を終え、スマホでメッセージを送ってからナツメの部屋にやってきた。

「色々と？あちこちと巡つてた感じ」

「ふーん、例えば？」

2人で座椅子に座りながら、肩に頭を乗せつつ俺を見上げる。

「まずは美和総合病院だろ？それから高嶺の部屋と、後はミカドさんの所にだな……」

「んんー？全く接点が思い浮かばないんだけど……？」

「二つ一つ説明しよう。まず病院でなんだが……」

「うん」

「女性と会つて来た」

「………、は？」

さつきまでの少し甘えるような声とは裏腹に、激辛な声が出る。

「ちよつと待って。え？女の人と？病院で？なにそれ？」

体を起こして俺を見る。

「いやー、良い反応してくださいませね。でもこのままだと不穏な展開になりそうなので先に進めないよ。」

「ストップ、最後まで聞いてくれ。ちゃんと事情がある」

「……わかった。聞くだけ聞いてあげる」

「ナツメは、染井志律華って女の子覚えてるか？」

「えっ!？」

俺の言葉に驚く。

「ほら、小さい頃に入院してた子」

「う、うん……覚えてるけど?どうしてその名前が?」

「話せば長くなるんだが……」

取りあえず、今日の出来事と夢の事について説明をする。

「ワタシの為に……?」

「そそ、お店を開けたのも夢の一つと言えるけど、まだ達成出来てない夢があるからさ」

「その為に、今日あちこち行つてたの……?」

「黙つて動いた事については謝る。染井さんが本当に居るのかすら判明してなかったから、下手に言うのとも思つてさ」

「あ、ううん。そこについては特に怒つたりはしてないから」

「なら良かった。それで、改めて提案なんだが……」

未だに少し内容が飲み込めていないナツメに向かって言う。

「もう一度、あの絵の夢を実現させてみないか?」

「ワタシの、夢を……」

「ああ。一応色々と考えては居るんだ。後はナツメと相談して決めたい」

「う、うん。それは嬉しいけど……どうしてそれを?」

「言つただろ?手伝うつて。それに、ナツメの笑顔が見たいからな」

「……うん」

「どう?あとは本人の了承次第だけ」

「……正直、ワタシ自身半分くらい諦めてた。それに、今でも十分に幸せなのにこれ以上高望みしちやいけないって考えも……ちよつとある」

「残念だけど、俺は最初から諦めてないぞ?」

『ワタシが諦めても』……だっけ?」

「そうそれ」

あの時は勢いそのまま言った台詞だったが……。

「ふふっ、そうだった……。それならワタシも負ける訳にはいかな

い……かも」

目を閉じて思い出す様に笑い、目を開けて俺を見る。

「ワタシの、ちっぽけな……小さな夢だけど、手伝ってくれる？」

あの夜と同じ様な台詞だけど、目の前にいるナツメの顔はあの時とは違って明るく、希望に満ちてる。

「喜んで。それでナツメの笑顔が見れるなら。それが俺の望みでもあるからな」

お互いに目を合わせてあの夜の言葉を繰り返す。

「……ふ、ふふ、変なの」

「笑うなって、そこそこ恥ずかしいんだぞ」

「ごめんごめん、なんか面白くって」

楽しそうに笑う。

「それじゃ、どっちが先に諦めるか勝負ね」

そう言って手を差し出す。

「……………」

「ん？どうしたの？」

「……いや、デジャヴというか、軽くトラウマシーンなので」

無いと分かっているが、手を握ろうとした時に……とか考えてしまった。

「それもそっか……、それじゃあー」

ずいっ、っと顔を近づけてくる。

「今度は、こっちで……ね？」

手を握るのでは無くて、誓いのキス的な感じだろう。

「……それはナイス提案」

「でしょ？」

目の前のナツメの頬に手を添える。

「ナツメ、愛してるよ……」

「ワタシも愛してる。色々面倒な事とか言うかもしれないけど……今後ともよろしくね」

「そこも含めて好きな所だからな。それで笑ってくれるなら全部良し」

「もう……ばか」

恥ずかしそうに微笑んだナツメが、目を閉じる。

「誉め言葉だな」

それに合わせて、俺も目を閉じた。



—新訳—第45話：Epilogue

「皆で写真を撮りましょうよっ！」

この日、火打谷さんのそんな一声で朝から写真を撮ることとなった。

「ほら、新年が始まって達也さんも来たことですし、その紹介も兼ねてSNSに上げましょう！」

その提案を全員が賛成し、フロアで並び始める。

「男2人は後ろで、それ以外は前で大丈夫じゃない？」

「そうですね。昂晴さんと澤田さんは後ろでお願いします」

「ほら、ナツメ先輩は真ん中ですよっ」

「ワ、ワタシが真ん中？」

「当然です。お店の重要なポジションですから！ね？希ちゃん」

「そうですね。その方が分かりやすいと思います」

「……そうかなあ？」

少し納得いかない様子だが、言われるがままに真ん中に立つ。

「そんじゃ、男の俺たちは後ろに並ぶか」

「ですね」

前方でわいわいしてる女性陣を見ながら後ろに回る。

正面は左から涼音さん、明月さん、ナツメ、墨染さん、火打谷さんの順だ。端っこの火打谷さんはカメラのタイマーを設定する為に一旦離れているが……。

その後ろに高嶺、俺という感じで並んでいる。まあ、オープニングの一コマ的な風景だな。

「……そうだ」

不意に思い出したので、少し離れてる場所からこちらを見守っているミカドさん（猫Ver）を手招きで呼ぶ。

「達也？何してるの？」

「いや、ミカドさんがタイミング悪く居ないからさ。代わりにこのお店の看板猫の閣下と一緒に撮ろうかと思ってさ」

「なるほど」

因みにミカドさんは事前に用事で席を外してることになっている。よく分からんが人型で映るのが嫌なのか？

「あつ、確かに閣下もよく上げてますもんね！」

スマホを持ってている火打谷さんの目が輝いた気がした。

「と、いう事で……、カモン」

俺に呼ばれたミカドさんは一瞬間そんな顔をしたが、しゅしゅと此方に来る。

「んー……映りやすいように俺の肩にでも乗る？」

足元では見えないので姿勢を下げて肩を差し出す。

「……にやー」

『……仕方ないか』と言ってるのか分からないが、背中に飛び乗り、そのまま肩まで登る。

「んん、ちよつと待ってよ……」

ミカドさんが乗りやすいように首や姿勢の位置調整をする。

「よし、こつちは何時でもおつけー」

結局、俺の右肩に座る様な位置で落ち着いた。

「おおっー！映えますねそれ！良い感じですよっ」

「やっぱり閣下っってお利口さんですね〜」

良い1枚なのか、火打谷さんと墨染さんが盛り上がっている。

「それじゃあ、タイマーを10秒で設定しますんで！」

スマホを設置し、画面をタッチする。

「愛衣ちゃん、はやくはやくっ」

「うんっ」

火打谷さんが並んだのを見て、それぞれがレンズに向かってポーズを取る。

記憶の中にある光景と全く同じの皆を見て、自然と笑ってしまっ  
た。

「ふう……ようやく辿り着いたな」

「そうね……」

森の中、一際開けたとある場所。

今日、俺とナツメは例の森へ来ていた。

「ま、ちよつと時間が空いてしまったけどな」

俺が目覚めた場所に着き、足元に少し束ねた花を置く。

「随分と綺麗な青の花だけど、何か意味があるの？」

「ん？これか？……少しは？これ、胡蝶蘭って花なんだ」

「胡蝶蘭？」

「そ、胡蝶蘭。蝶が舞う様な見た目からその名前が入ってるらしい」

「言われてみれば、確かもそう見えるかも……」

「だろ？蝶だった両親にはピツタリ」

「そ、そう？」

「そう。これなら仲間が増えたと思うはずだ」

冗談を言うように笑う。

「まあ……達也がそれで良いならいいんじゃない？」

「それに、青色の胡蝶蘭の花言葉も丁度良かったからさ」

「へえー、どんな花言葉なの？」

『『愛と尊敬』って意味があるらしいぞ？』

「それは……確かにピツタリ」

「そうだろそうだろう？」

特に手などは合わせずに立ち上がる。

「そんじゃあ、変だけど報告も済ませておくか……」

「うん」

「あー……今2人がどこに居るか分からないけど、最後に会ったここから報告させてもらおう。まだ目覚めて1か月も経ってないけどな」

冬の冷たい空気が通り過ぎる。隣のナツメは目を閉じ、静かに俺の報告に耳を傾けていた。

「ここで新しく人間として生まれてから、また皆が居るあの喫茶店で働いてるよ。あの中で俺が一番新人だし、未だに打ち解けられてない子も居るけど、そこそこ楽しくさせて貰ってる」

ふふっ、つとナツメが小さく笑う。

「あと、好きな人……恋人が出来たんだ。既に知ってるかもしれないけど、お店で働いてる黒髪の四季ナツメって女の子。今、その子と一緒に来てる」

「あの時、夢の中で俺を助けてくれた2人のおかげで、今もこうしてナツメと一緒に歩んで行ける。本当にありがとう」

「正直、小さい時の記憶しか無いからさ、2人の顔や声なんかあまり記憶に残って無くて、薄れてたんだ……」

「子供ながらに親が居ない現実を受け止めようと頑張ったりもした。それでもやっぱり寂しくて泣いた日もあった」

「そんな俺を叔父は色々と見てくれてたよ」

「でも、大人になって……、この世界に来て再び2人に会う事が出来た。顔が見れた、声が聞けた。そして、背中を押して貰った……」

「まあ……その、なんだ。色々と言いたい事もあるけど……纏めると、俺は今幸せに生きていますって事だな」

「ちゃんと、母さんが言ってたように明るく、笑って行くよ。これからも……」

「だから、俺のことはもう大丈夫だから、2人も存分にイチヤイチャでも転生でもして新しい人生を謳歌してくれ」

「……取りあえずは、こんなところかな?」

「言いたい事は、言えた?」

「今日の所はな」

「それじゃ、ワタシからも良い?」

「どうぞどうぞ」

「……お久しぶりです。澤田達也さんとお付き合っている、四季ナツメです」

「と言っても、お母様の方は夢の中で何度もお話していたんですけどね……。まさか達也さんの母親だったとは思いませんでした」

「だよな。教えた時の慌てっぷりはめっちゃ可愛かった」

「……お二人のおかげで、今、彼と共に生きています。ここに来るまで、沢山助けて貰ったことについては幾ら感謝しても足りないぐらいです」

「ありがとうございます。あの日、ワタシの元に来てくれて……再び大切な人と会わせてくれて……」

「その恩返し……と言うのは恩着せがましいとは思いますが、息子さん……達也さんを幸せにしてみせます」

「ちよいちよい、ナツメさんー？それは聞き捨てならないなあ？」

「ちよつと、今ワタシが話してる番でしょ？」

「いや、ナツメを俺が幸せにする。これは譲れないね」

「ワタシだけ幸せになっても意味が無いでしょ？」

「ちつちつち、それはノンノン」

「え……急に何？ちよつとウザい……」

「ナツメが幸せなら俺も幸せ。つまり2人とも幸せってわけ。オーケー？」

「また訳のわから……いや、分かってしまう自分が居る……」

「ほほう、これまた珍しい返し方だな」

「いつもなら『また訳の分からない事を……』って呆れ顔のはずだが。

「もしかしたら、達也に毒されたかもね」

「毒されたとはまたこれ辛辣な……せめて染まったとかオブラート

にな……」

「でも、意外と悪く無いと思ってる自分も居るんだよねえ……」

うーん、つと首を捻りながら苦笑する。

「それも毒された影響か？」

「……そうかも？」

肯定すんのかいつ。

「ま、そこに関してはしゃーない。魂が繋がってるとお互いの思考とかがクリアに伝わるしな」

「だよね……」

今となつてはお互いに割と使いこなせる程度には制御可能だ。練習としてお店で活用したりして熟練度を上げた。

その成果もあり、伝達の距離とイメージの伝わり方の強弱も幅が広がった。これならもう大丈夫だろう。

「つて、そつちに構つてたから報告の方が……」

「まあまあ、今日だけじゃなくてまた定期的に来るんだし、その時に  
沢山言えば大丈夫大丈夫」

「ご両親への挨拶なんだし、適当じゃダメでしょ？」

「と、言われてもなあ……」

そこに居るかすら分からんし……。

「でも、ワタシも一応は言いたかった事は言えたかな？」

「満足？」

「んー……、少しスッキリした感じ？」

「なら大丈夫だな」

こういうのは、死んだ人間ではなくて、生きている人間の為に行う  
やつだからな。

「よし、それじゃあ、また来るよ」

「遅くならない様に、また来ますね」

最後に別れの言葉を告げて、振り返る。

「んじゃ、またでこぼこした道を歩いて帰りますかー」

「ん、エスコートはよろしく」

”危険だから”と、いつかの口実を思い出しながら腕を組んで、来  
た道を歩き始める。

「折角だし、どこかで食べてー」

『どこかで食べて行く？』そう提案しようとした時、1頭の青い蝶が  
正面を横切る。

「……………」

一瞬、魂の残滓を疑ったが、よく見れば違った。

「ねえ、あれって……」

「いや、蝶じゃないみたいだな」

「あ、そうなんだ……」

その蝶は、俺たちの横を通り過ぎて森の中へ消えていく。

「……………」

「……………今、何考えた？」

少し寂しそうな表情のナツメが俺を見る。

「いや、よくある話だと、今横切った蝶が、死んだ両親の生まれか

わった姿的な暗示の展開かと思っただけどき……」

「思っただけど？」

「流石に2度も蝶に生まれ変わりたくないだろうし、ありえないなって思っただけ」

「……なーんか、心配して損しちゃった」

「捻くれた考えなもので」

「ほんとね。でも、そっちの方が達也らしいって納得した」

「あれ？おかしいな。慰めの流れかと思ったら普通に貶されたんだが……？」

「こつちの方が、嬉しいんでしょ？」

「……………」

「これは……俺の癖が見抜かれてますねえ。」

「正解みたいね」

「……勘の良いガキは嫌いだよ」

「へえ……、ふーん……そう返すんだ？ワタシの事嫌いなんだあ？」  
「揶揄うようにこちらを見る。」

「嘘です、好きです。愛してますとも。」

「ツ！ちよつ……！いきなりはズルいでしようがっ！」

俺の彼女、四季ナツメが世界一！誰よりも可愛いと断言できます！  
！そうに決まってるっ。

「くくくッ！分かったっ、分かったから！」

「ギブアップとばかりの俺の腕を叩く。」

「……はあ、心臓に悪すぎでしょ……。冗談みたいな言い方なのに  
本音なのが、尚更質が悪いし……」

「伝わったか？」

「嫌と言う程……ねっ！」

「仕返しと言わんばかりに俺の腕の関節を決めてくる。」

「あれ？ちよつとっ！ナツメさんっ？普通に決まってるんですが  
……!?ギブギブッ！」

「ふん、さっきのお返し」

「気が済んだのか、腕を離して普通に組んで来る。」

「てか、どこでそんな技を……?」

「どこって、達也の記憶からだけ……?」  
マジかい。

「この前考え読んだ時に、なんか覚えた」

「ええ……まあ、良いか」

どっかのタイミングで覗かれたのだろう。

「あれ?怒った?」

「まさか。寧ろ良い情報を知れたと思う」

「そう?どの辺が?」

「もしかしたら、ナツメを強化出来るかもしれない……とか?」

「え?なにそれ。ワタシを?」

俺の技術を何か覚えれば、自衛とか出来たり?いや、そんな場面が無いのが一番だが……。

「……いや、やっぱり無しで」

それより、俺が覚えた経緯を見られたくない。流石にあの地獄の日々をナツメにも送るとかありえん。

「何、今の間?気になるでしょ?」

「世の中には、知らなくて良い事もあるんだ……」

「うわあ……何その遠い目」

「そんなことより、帰りに何か食べて行かないか?」

「ん……それなりにお腹空いてるし、賛成」

「よし来た。あの宿の近くに美味しそうな和食屋っぽいのと定食屋があったから、一先ずそこを見てみないか?」

「ん。了解。何かあるか楽しみ」

ぎゅっ、と組んでいる腕を更に強く抱きしめてくる。

「俺も来る時に気になってたし、割と腹も空いてるから期待大だなっ」

お昼の内容を楽しみにしながら、森の出口へ向かって進んでいく。

——この森から始まった、不思議な世界、不思議な物語。異なる世界からやって来た1人の人間。

1人で突き進んだ物語だったが、今はもう、1人じゃない。



最愛の人と一緒に、笑い合って歩んでいるその後ろ姿が、そこにはあった。

……あーあー、どう？僕の声が聞こえてるかい？……うんうん、どうやらしっかりと意識はあるみたいで安心したよ。

ん？僕かい？僕はえらあい神様さ。そう、キミ達の子供に手を貸した、あのありがたい神さ。

ーさで、僕がキミ達2人に声を掛けたのには幾つか理由があるけど……そうだね、まずは労いの言葉でも送ろうかな？

これまでの頑張り、実に見事だったよ。お陰で僕が直接手を出すことなく彼を連れ戻すことが出来た。感謝するよ。

それと、彼と同じ様にこの世界に来てしまったところについての、せめてもの罪滅ぼしとして、何か一つくらいお願いを聞いても良いかなって思ってさ。

あ、かと言つてあまり欲深い事は無理だから、そこは受け入れてほしい。

……ふむふむ、確認するけど、そんな願いで良いのかい？もつと自分達の為に使つても罰は当たらないと思うんだけどなあ……。

……どうやら、2人とも意志は固いみたいだね。うん、それならその願い、この僕が責任もって叶えてあげようじゃないか。

え？いやいや、お礼なんて要らないよ。元はと言えばこちらの管理が甘かったせいでもあるからね。

まあ確かに、そのおかげで大事な息子さんが前向きに生きることが出来たと言えは聞こえは良いけどね。

それじゃあ、僕はそろそろ行くよ。こう見えても僕は忙しいからね。

キミ達ももうすぐ次がやって来る頃かな？ま、来世を楽しんで来て。それじゃあね。

「ふう、取りあえずは、これで僕の方も一段落かなあ？」

疲れた様な仕草で腕を伸ばす。

「まだ問題は残っておる。それを解決しないことには完全に安心は出来ん」

煌びやかな巫女の衣装を纏った卯花之佐久夜姫が呆れたように後ろから声をかける。

「冗談だつて、ちゃんと分かつてるよ。それで？どうだった？」

「相変わらずじゃな。魂が門から出て来ておる」

「だよねえ……。ちよつと困つたなあ。また彼らの様な人が流れてくるのは手間だから、すぐにでも塞ぎたいけど……」

「何を言つておる。可能じゃろうが」

「まあね。だが……原因を見つけずに塞ぐのは、今後の為にも勿体ないのさ」

「今回の様な件が、何度も起こるとは思えないのじゃが？」

「そう言われるとそうなんだよねえ……」

うーむ、と首を傾げて少し悩む。

「今話しても仕方ないし、取りあえず塞いでおこうか。もし何か分かれば、その時に改めて調べれば良いだけだしね」

「それが一番安全じゃな」

「それと、変に藪を突いて問題が起こるのも嫌だしね」

「達也たちもたまつたもんじゃないだろうな……」

「そうと決まれば早速閉じに行こうかな？後回しにすると面倒だ

し」

「ルリを使うのか？」

「それが手っ取り早いからね」

「分かった。なら、現地へ向かわせよう」

「よろしく」

閑話： 謡われる黒歴史は……

「ほれほれ、今日の主役は誕生日席に座りな」

「ありがとうございます」

「2人は私と一緒に奥の席に座って座って」

「はい」

「了解です」

「では私達は反対側に座りましょうか」

「そうだな」

長方形席の一番奥に座り、左側に涼音さん、墨染さん、火打谷さん。右側にナツメ、明月さん、高嶺。

そして、正面にはテレビのモニター。

その下にはマイクが2本とデンモクが2つ。

「では！早速曲を入れて行きましょうっ」

火打谷さんがマイクをデンモクを取ってテーブルに置く。

そう、俺達は本日……カラオケに来ていた。

「俺の歓迎会で……カラオケ？」

仕事を終えてナツメと一緒に帰っていると、とある提案をされる。

「そ、今日火打谷さんと明月さんが話しててね。明月さんがカラオケに行った事が無いから火打谷さんから一緒に行こうって話が出たの」

「なるほど、それで良いタイミングだから俺のやつと一緒にやると……」

「前に話してたでしょ？交流を深めたいって」

「だな、それでみんなでカラオケか」

「正確な日付はまだ決めてないけど、多分次の定休日とかになると思う」

「まあ、俺としてはありがたい事だし賛成ってことで」

「そう言うと思って、オツケーって返事してる」

「お仕事が早いことで……」

隣で歩いているナツメが少し得意げな表情でこちらを見る。

「一応涼音さんにも軽く言っただけど大丈夫そうだったし、問題は無いと思う」

「俺から何かすることは？」

「無いから気にしないで。達也の歓迎会なんだから」

「それもそうだな。なら俺は楽しみに待っておくよ」

「そうしておいて」

とまあ、それから次の店の定休日に皆でカラオケに来たと言うわけだ。そしてその後はどこかの店でご飯を食べるとか何とか……。

「~~~~~♪」

ここまでの経緯を思い返している内にトップバターの花打谷さんの曲が終わる。

彼女らしい元気一杯な曲であった。

「あ、これ追加で頼んで貰って良い？後、おつまみでポテトとかお願い」

左隣の涼音さんは昼間だがアルコールに手を出していた。……らしいと言えはらしいが。

どうでも良いが、晩酌と言う言葉は聞くが昼からはなんて言うんだろうか？昼酌？それなら朝酌と言う言葉もあるのだろうか？

そんな事を考えながら目の前のドリンクを飲む。

「達也は何か歌わないの？」

「入れないといけないよな？」

「そりゃね。皆少なくとも一曲は歌うって言ったでしょ？」

折角来たのだ。何も歌わないのは勿体ないし他の皆が気を遣うかもしれない。

「はい、デモンク」

「サンキュ」

ナツメから渡され取りあえず予約待ちを確認する。

「……………」

三曲は既に予約が入っている。多分、墨染さんと高嶺とナツメ辺りか？明月さんは今もデンモクの操作を高嶺に教わりながら四苦八苦している。

……ゲームやアニメの曲は控えるとして、ボカロの曲とかも……止めとくか。ここはメジャーな奴で手を打っておこう。

よくある話らしいが、会社や学校のメンバーで行った時に、引かれないために無難な曲を選ぶと言っていたが……まさか自分がそうなるとは。

「何歌う気？」

デンモクを見ながら考えていると、隣からナツメが覗き込んで来る。

「……………考え中」

「……………なるほど、無難な曲を」  
そうなりますね。

取りあえず、紅白などでも流れた事がある曲を検索する。

「ん？無いのか？」

検索をかけたがヒットせず。

「文字は間違つて無いな」

歌手で調べる……が、それでもヒットせず。

「まじか、珍しいな」

仕方なく他の曲で検索をする。

「……………これも無しか」

しかし、同じくヒットせず。

「んな事があるのか？」

試しに他の曲と歌手などを検討してみるが、全て無し。同じ名前の曲名はあったが違った。

「……………もしかして」

嫌な予感がする。

「いや、まだ可能性は……………」

アニメやゲームなどの曲を調べるが、それらも無し。

「しかも、ボカロがそもそも存在してない……」

驚くことに、ボーカロイドと言うジャンルが無い。

「つまりは……」

別世界なので、前の世界の曲などは一切あてにならないと……？

「おいおい、詰んだわこれ」

どうする？

一瞬迷った結果、一先ずナツメに相談する。

『緊急事態だ』

口には出さず、脳内で話しかける。

『なに？どうしたの？』

『この世界に……俺の知っている曲が無い』

『……本気？』

少し驚いた表情でこちらを見る。

『ああ、幾つか調べてみたけど一つも見当たらなかった』

『それは、ちよつと考えてなかった……』

『俺も予想外』

似た世界だし、知ってるのがあると勝手に思い込んでいた。

『どうするつもり？』

『どうしたものか……』

歌わないって選択肢は無いし、今から覚えるのは……少し現実的では無いな。

『明月さんと高嶺君は事情が分かるから納得してくれるけど……』

『他の3人が、なあ……』

こっただけ生きて来て歌える曲が一つも無いってのは普通有り得ない。歌いたくない言い訳として受け取られるだろう。だが、それを言ってしまうとなんでカラオケでオツケーしたのかと思われる。

そうなると気分が下がってしまう……！それだけは避けねばならない。

『どうにか切り抜けないといけないな……』

『ほんとに一曲も無いの？』

『もしかしたらまだあるかもしれないし、もう少し探してみる』

『時間が必要なら言つて？2人にも協力してもらおうから』

『頼む』

……さてさてと、どうしたものか。

「達也ー？さつきから見たままで入れてないようだけどー？」

デンモクとを睨みながら考えていると、涼音さんが声を掛けてくる。

「ちよーつと、良い感じのが見当たらず……。涼音さんは何か歌わないのですか？」

「私はもう少し酔って来たら歌う事にしてる。素面じゃ歌えたもんじゃないからね」

……恥ずかしいから酒の酔いで誤魔化す作戦か？

「なるほどです、ならまだ先になりそうですね」

「そう言う事。だからあんたが先でお願い」

「頑張ります」

涼音さんによる時間稼ぎは失敗と……。

うーむ、何か無いか……。

いや、待てよ。

一つ思い付き、検索をする。

「おつ、あつた」

これが無いなら諦めていたが、案の定存在していた。

『見つかった？』

『ああ、流石にこれは無いとおかしいからな』

『へー、なんて曲？』

『誰でも知ってる名曲だ』

『名曲？』

『日本国歌だ』

『あー……まあ……確かに、誰でも知ってる曲ではあるけど……』

『見た感じちゃんと俺がいた世界と同じ歌詞だし、問題無さそうだ』

『ほんと？歌詞だけ一緒に全然違ふとかあつたりしない？』

『念のため確認しておくか』



脳内で俺の知ってる国歌を流す。

『どう?』

『大丈夫、一緒』

『なら安心だな』

これなら歌える。それに、ネタとしても割と悪くない。カラオケで国歌とかボケ狙いが大半だしな。

歌う曲も決まったので一安心する。

カラオケの方に意識を戻すと、高嶺の曲が丁度終わった辺りだった。

「あ、次ワタシのか」

……ナツメの歌か。キャラソンの『Sweetest Bitterness』なら知ってるが……あとは別ゲーのキャラソン、ってこれは違うか。

ナツメの歌声を聞きながらふと気になった事をデนมोकで調べる。

「なるほどなあ……」

見事に検索にヒットする。

どうやら、ゆずソフトの曲なら存在するらしい。

「二応、理にかなっている……で良いのか?」

その世界なんだし、あつてもおかしくは……無いよな?

俺が居た世界ではカラオケに無かった曲たちが並んでいる。しかもOPやEDだけではなくキャラソンまで完備だ。

……後でこっそり一人で歌いに来よう。

意外な事実を知り、満足感を得ながらデนมोकを戻す。

いや待てよ、1人も良いがナツメと来てご本人にキャラソンを歌って貰うのかとどうだ?生歌だぞ?

……今日の俺は天才かもしれないな。問題はナツメに曲を覚えてもらう事になってしまいが……。

恋人の歌声を聞きながらそんな事を考える。

ナツメの曲が終わり、いよいよ俺の番が来た。

『熱唱を期待してるから』

面白い物でも見るかのような視線を投げられながらも席を立ち、モ

ニター前に立つ。一応今日開いて貰ったことに対して一言位言っておかないとな。

曲を一時停止で止め、マイクを持つ。

「えー、本日は私の歓迎会を開いて頂きありがとうございます」

「よっ！天皇陛下！」

俺が歌う曲を見てか、火打谷さんが声を上げる。

「堅苦しいぞー！早く歌えーっ」

若干出来上がった涼音さんから催促が飛んでくる。

「では、私も一曲歌うという事で……聞いて下さい。日本国歌で『君が代』」

取りあえず、恥ずかしがらずに堂々と歌う。ネタに振っていると  
思って貰う為に極力身振りも含めて1分ちよつとの国家を歌い切る。  
今まで生きてきたが、君が代の歌詞を初めてちゃんと見たかもしれない……。

「ご清聴、ありがとうございます」

歌い終わり、優雅に一礼を決める。

「歌うのが短いぞー！もっと歌えー！」

「アンコールをおねがいしまーすっ」

揶揄うように声を上げる涼音さんと、それに乗って火打谷さんが他を要求してくる。隣の墨染さんもそれなりに楽しそうにこつちを見ている。

「アンコールか……参ったな」

と言っても、他知らないんだよ……。

「いや、ほら、次が控えてるし……」

まだ歌っていない明月さんを見る。

「こちらはまだ決まっていないので、時間は大丈夫ですよ？にひひ」  
いや、そこは助けてくれよ。

隣の高嶺を見ると、少し困った様に首を振る。

唯一の味方のナツメへ視線を向けるが、愉快な見世物を見るような  
笑みを向けてくるだけだった。

……唯一の味方だと思ってた人が、一番楽しんでるパターンだわこ

れ。

と言っても歌えるものは無いので諦めて終了しようとした時、視界の端に映った高嶺を見て手が止まる。

……いや、まて。まだ歌える曲はあったな。

置こうとしたマイクを再び戻す。

「2人からの熱いアンコールに応えて、1曲だけ歌おうかと思いません」

「いけいけー!」

「流石っ! 国歌を歌うだけがありますね!」

「ですが、この曲はカラオケに無かったので、アカペラと言いますか……ただただ私が歌うだけになってしまいましたが、ご了承ください」  
頭の中の記憶を掘り起こしながら次の曲を思い出す。

チラッとナツメを見ると、『何をする気?』と言いたそうな目をしていたので笑って返す。

「それでは聞いて下さい。作詞作曲は不明で……『Stay with you』」

「星空を見上げると思い出すよ、君のこと♪」

「ぶぶっ!?!」

その瞬間、飲み物に口を付けていた高嶺が盛大に吹いた。

「きゃあっ!」

当然、隣の明月さんが驚き、墨染さんも驚いた表情で俺を見る。

「やささ、澤田さんっ!」

驚愕の表情で立ち上がる高嶺。

「それまで考えたことなかった。未来が見えなくて、俯き続けるだけの毎日♪」

「ぎやああああああっ!?!」

俺のソロライブは、観客の発狂により中止となり、その次の『I belong to you』の方をお披露目することは無かった。  
ま、続きの歌詞を知らないんだけどね。